まんじ

No.147

2018.2.1

まんじ第百四十七号　目次

窮極の特攻兵器……千坂精一…4
或る日のキケロ……永田俊一…18
忠山人日乗……忠内正之…47
風の泉……葵州月…56
グルメと私……濱本章…80
自動車産業の「労働貴族」……新井宏…85
　不信あるいは癒着と背信のはざまで
青雲の彼方（一）……太田精一…96
ウィーン学会紀行……大貫陽平…106
綜合社会学の探求（新明正道博士の場合）……山本鎮雄…111
　―「人間のための、人間による人間の社会学」―
木鶏は動ぜず……浅野博文…119
横浜市の成り立ち……鍋屋次郎…127
短歌　行雲流水（五十五）……石黒修身…136

漢詩　潮汐錄（九十）《漢詩の流れ78》……鯨（くじら）游海（ゆうかい）…139
漢詩　汲深録（十一）……松井秀人（まついひでと）…142
ロボット雑考（その九）……三戸岡道夫（みとおかみちお）…144
薄幸の麗人「西郷ノ局」の生涯（2）……堀内永人…164
　（家康と西郷ノ局の恋物語）
司馬遼太郎と梅原猛の確執……山田嘉久…173
　―「空海の風景」をめぐって―
「農ある暮らし～私の日常～」(6)……古屋富雄…183
日本四大都市マラソンを走る（東京・大阪編）……安藤剛…188
世界の国旗から学ぶ（第六回）……米村典紘…201
大頭龍神社と抜里の物語（一）……横山正義…224
千家尊福伝（一八）……村上邦治…229
　博文と永遠の別れを仕切った電鉄社長
性と化粧の物語（十）……鈴木守…242
明治時代の著述者　渋江保の一生（その十二）……山本勉…252
ぼくはクビである……匠克仁…263
二〇一八年・戌年　表紙絵解説……田寺（たでら）怜葦（れいい）…272
編集後記……編集子…273

窮極の特攻兵器

千坂精一

七十二年目の九段坂の上りはだいぶ辛くなってきた。
早晩杖を頼りに一日がかりでここまできてあの仰ぎ見る大鳥居を潜って境内へ入ることになるであろう。
最寄の地下鉄九段下駅は半蔵門線、東西線、それに都営新宿線も入っているターミナル駅なので地下のコンコースは乗り換え客で混雑しているが、地上へ出ると人通りも疎らになるので吻とする。
私が毎年靖國神社に詣でる三月下旬のこの時期は近くの武道館で大学の卒業式がいくつもあって、入れ替わる学生たちで表通りは賑わっている。
この人たちは、これから詣でる靖國神社に祀られている先輩特攻隊員の指揮官たちとおなじ年配であった。
毎年私が靖國神社に詣でるのは、その指揮官に率いられて出撃していった十代後半の少年たちの鎮魂である。
あの人達が急の命令で慌ただしく還らぬ旅に発ってしまったあの三日間のことは終生忘れられない。
あれはまるで悪魔に憑かれたような日々であった。
敵空母をはじめとする艦船群に爆弾を抱いたまま搭乗機もろとも体当たりするなどという人命無視の戦法は、とても人間集団を束ねている飛行長や直接戦闘の指揮を執る飛行隊長など現場の責任者から出る発想ではない。
いかに鬼をも拉ぐ指揮官と雖も、所詮人の子である。
これまでともに幾多の修羅場を乗り越えてきた弟のような少年たちに、特攻という生還の余地のない人倫に背く出撃を強いる酷い仕打ちなどできるはずはなかった。
とはいえ飛行隊長はたとえ人道に背く行為であっても軍令部の命令とあれば受けねばならない立場であった。
軍令部総長は陸軍の参謀総長とともに大本營という天皇に直属する最高の幕僚長であるから、たとえ国政最高機関内閣の長である総理大臣と雖も大本營の作戦に異を唱えることは天皇への不敬罪になってしまうのだ。
海軍大学校を優秀な成績で卒業した一塊の選り抜き集団は、作戦指導を取り仕切る軍令部の参謀になった。
そして作戦、用兵を立案し、計画、指導にあたってそれを戦闘部隊に実施させた。
あの人命無視の無慈悲な特攻戦法は、ここで立案されて実行に移され、常套手段にされていったのである。
〈特攻〉というのは酷い仕打ちであった。
軍人になったからには、戦闘に明け暮れるなかで、今日は死ぬか明日は死ぬかとつねに戦死を覚悟している。
だが、生死は運否天賦で天命しだいであるから、運がよければ生き残れるし、悪ければ死ぬことになる。
だから戦闘に明け暮れていても死に拘る恐さはない。
それが特攻となると途端に死に収束されてしまう。
搭乗機が大地を離れればもう生還の余地はないのだ。
死出の旅に発つ心境は恐怖以外のなにものでもない。
ある飛行長は、出撃まえの別盃のときに、
「目標めがけて急降下して行くときに、恐怖のあまり目を瞑る者がいる。だから命中せんのだ。いいか、体当たりの瞬間まで両眼をしっかり見開いていろ」
そう訓示したという。
人はいったい死の瞬間まで平常心でいられるのだろうか。この飛行長のような軽薄な発言には説得力がない。
他方、正反対の考えをもつ飛行長もいた。隊員の証言があるから事実に違いない。その飛行長は常日頃から、
（機材も惜しいが、鍛え上げた搭乗員はもっと惜しい）
という考えを持っていたので、
「爆撃でとにかくやっつけて帰って来い。体当りなどはどうしても駄目なときだけの下策である」
そう言って爆弾投下高度を八〇〇メートルから六〇〇メートルに下げていたのをさらに四〇〇メートルにまで下げて猛訓練させたという。
幾多の修羅場を潜り抜けてきた老練搭乗員ならではの説得力ある発言に司令や副長も一目置いていたという。
だからこの飛行隊が特攻を命ぜられたときも、隊員たちのあいだに十死零生の追い詰められた感覚はなく、生還を期する心の余裕をもっての出撃であった。
飛行機による特攻は。故意や作為的でなくても、偶々発動機故障が発生したり、燃料漏れがあったり、行く手を積乱雲に阻まれたり、視界不良で編隊から逸れてしまったりしてやむなく引き返すなど生還の余地はあった。
だが、昭和十九年（一九四四）十月下旬の飛行機に爆弾を抱かせて、敵艦船に体当りさせるフィリピン特攻がはじまる半年前ごろ、軍令部は出撃したら生還できぬ特攻専用兵器の開発を許可してすでに生産に入っていた。
飛行機による特攻は専用兵器ができるまでの仮り物のはずだったのである。

その特攻専用兵器というのは、人間爆弾『桜花』、人間魚雷『回天』、爆装機動艇『震洋』などであった。

人間乗りロケット爆弾『桜花』

これは、大田正一特務少尉三十二歳の着想である。

大田は大正元年生まれで、昭和三年（一九二八）九月に呉海兵団（広島県）に入団した古参の偵察員であった。

昭和十八年（一九四三）春から一年間南方戦線にいて航空機の性能と搭乗員の錬度の格差とを痛感していた。

帰国した大田は、厚木基地（神奈川県綾瀬市）に新設された一〇八一空輸送部隊に配属された。

大田は、開発技術者でもないのに前線の惨状のなかにいたやむにやまれぬ思いから、起死回生の新兵器、〔頭部に一五〇〇キロの火薬、尾部にロケットを装備した小型グライダー〕

を考案した。人間爆弾の原型である。

これを一式陸上攻撃機（一式陸攻）という八人乗りの大型機の胴体下に取り付けて運ぶ。攻撃に入るときは操縦者が母機からグライダーに乗り移り、切り離されて噴射推進しながら滑空して目標物目掛けて突入するのだ。

大田はこれを東京帝国大学航空研究所に相談したが、研究所では新兵器のことなので海軍技術廠を紹介した。

技術廠では班長三木忠雄技術少佐が面談してくれた。

熱弁を振るう大田の説明を聴いた三木は、

〔搭乗員が爆弾もろとも目標物に突入する〕

とんでもない構想に驚き、

（これは兵器ではない）

あたまからそう否定しておいて、

「技術は人力を機械に代替させることを目的とするもので、人命軽視の道具に利用されるべきものではない」

そう言って大反対した。

いかに大田の難局を打開しようとする一途な願いからであろうとも、搭乗員を絶対死させる兵器の開発など技術者の良心が咎めて同調することなどできなかった。

大田は、

「自分が乗って行きます」

そう言ってなおも執拗に迫ったのだが、はじめに偵察員と自己紹介してしまっていたので説得力がなかった。

ところが、三木班長の報告を受けた和田廠長からあらためて大田を紹介された航空本部の伊東祐満技術中佐が、待望の起死回生の奇抜な着想に心を動かされて上層部に出願を報告、軍令部の意向を質すよう指示された。

伊東は軍令部の源田参謀に連絡をとり、提案した。

源田は軍令部会議で大田の着想を勢力的に推進して、ついに総長及川古志郎大将から〈開発許可〉をとりつけた。

昭和十九年八月十六日、航空本部は技術廠に大田の名を冠した〈大部品〉の秘匿名称で試作研究を命じた。

そして二箇月半後、目標物まで片道飛行の翼つき爆弾という特攻兵器が完成し、『桜花』と正式命名された。

はじめ『桜花』はフィリピン戦線に投入されるはずであったが間に合わず、零戦や九九艦爆で代替された。

十一月二十八日、完成間もない巨大空母信濃が桜花五〇機を積んで横須賀から呉に向かったが、翌二十九日紀伊半島南端の潮岬沖南東五〇キロ地点で米潜水艦アーチャーフィッシュの雷撃を受けて沈没してしまった。

さらに十二月十七日、新鋭空母雲龍が桜花三〇機を積んでフィリピンに向け呉を出航したが、二日後の十九日に東シナ海尖閣諸島沖でこれもまた米潜水艦レッドフィッシュの雷撃を受けて沈没してしまった。

桜花特攻『神雷部隊』の誕生

桜花の完成を期して軍令部の意向を受けた海軍省は、九月十五日桜花特別攻撃隊の結成にとりかかった。

まずこれまでなにかにつけて執拗に空中特攻を建言してきていた三四一空司令の岡村基春大佐に横須賀航空隊付を命じて、桜花専用部隊準備委員長に当てた。

このとき飛行長の岩城邦廣少佐も副委員長になった。

試験飛行担当の長野一敏飛曹長は、桜花には搭乗できないので、零戦で代用する可能性を模索しつづけた。

一式陸攻の桜花を吊っての試験飛行は矢張り重く、滑走路いっぱいを使ってようやく飛び立てる有様だった。

これまで陸攻隊を護衛する戦闘隊は直掩隊だけであったが、桜花搭載で母機の自由がきかなくなることから間接隊をつけて二重護衛することにし、後方上空の左右を一機ずつ直掩機で固め、さらにその上空に間接機を同数配置することにした。母機一機に戦闘機四機である。

岩城副委員長はこの計画を軍令部に持ち込み源田航空参謀に面会して掩護戦闘機常時確保の確約をとった。

あとは桜花を運ぶ陸攻隊指揮官の選抜であった。

岡村委員長は、これまで常時先頭に立って多くの修羅場を潜り抜けてきた猛者が欲しいと考えて、海軍省人事局に要請した。

人事局では、すでに中攻隊の至宝と噂されていて、名指揮官としても知られている、岡山県出身の海兵六一期、三十五歳の野口五郎少佐を推選してきた。

野中は昭和十一年（一九三六）二月二十六日に起こった二・二六事件の叛乱将校の一人で、『蹶起趣意書』の原文を書き、警視庁を占領してのちに拳銃自決した麻布歩兵第三聯隊の野中四郎歩兵大尉の実弟であったが、野中はそれを憚らず、赴任先での着任挨拶では包み隠さず堂々と、

「国賊の弟でござる」

そうはっきりと自己紹介していたという。

そして、この兄の写真を懐中に抱いて出撃していた。

野中はつねに最前線にあって指揮をとり、ポートダーウイン空襲、アッツ島方面艦隊攻撃、ガダルカナル攻撃戦、ニューギニア攻撃戦、ギルバート方面艦隊攻撃など大小合わせて二百数十回の戦闘歴があった。

野中は、軍令部総長を辞任した永野修身大将が、その年十一月に神ノ池基地を視察したときの永野を囲んで准士官以上が集合した記念写真を見るかぎり、その小柄で温和な顔立ちから沈着冷静な人物のように窺えた。

だが、実際はざっくばらんで豪快な人柄だったようで、いくつかの逸話がのこっているから紹介しておこう。

野中は、つねに戦闘指揮所に幼ない長男から借りたという鯉幟を吹き流しのかわりにつかい、『南無八幡大菩薩』と『非理法権天』

の大幟を立てていたという。

集合整列と、出撃の合図にはつねに陣太鼓を用い、

「必勝の秘策はその場その場で授ける」

つまり現場で状況判断して指示することにして、

「ものどもかかれッ」

そう大音声で号令を掛けると、部下たちはそれぞれ、

「がってんだッ」

そう叫びながら搭乗機目掛けて早駆けする。

また、野中はいつも出撃のとき搭乗機に茶道具一式を持ち込んで、戦場到着の三十分まえに咽喉を潤し、部下たちにも振る舞って逸る心を落ち着かせたという。

そして暗夜の洋上に敵艦隊を捕捉すると、単縦陣の隊形をとって遠巻きに旋回を繰り返し、機会を見て照明弾を投下させておいて、各隊が四方八方から敵艦に殺到して魚雷を投下する。こうすれば敵艦がどう回避しようとも魚雷のどれかがかならず当たる。野中はこれを、

「野中組の串懸かり竜巻戦法だ」

と自称していたそうだ。

こうして野中は、独特の〈野中節〉で部下のこころをひとつにまとめたので、野中陸攻隊は、

「野中一家」

の愛称を定着させた。

余談はさておき――。

こうして桜花専用の特攻部隊は七二一空と呼称され、

司　令	岡村基春大佐
副　長	五十嵐周正中佐
飛行長	岩城邦廣少佐
七一一飛行隊長	野中五郎少佐
七〇八飛行隊長	足立次郎少佐
桜花飛行隊長	柳澤八郎少佐
三〇六飛行隊長	伊澤勇一大尉
三〇七飛行隊長	漆山睦夫大尉

がそれぞれ着任して、昭和十九年十月一日茨城県百里ヶ原基地（小美玉市）で開隊したが、そこは爆撃隊の基地で同居してみたものの手狭だったので一箇月後の十一月七日に千葉県境に近い神ノ池基地（神栖市）に移動して基地正門の左右の柱に『第七二一海軍航空隊』と『海軍神雷部隊』の大門札が掲げられた。

桜花隊のほうは柳澤飛行隊長のもとに四分隊が編成され、

第一分隊長	刈谷　勉大尉
第二分隊長	三橋謙太郎中尉
第三分隊長	湯野川守正中尉
第四分隊長	林　富士夫中尉

が就任して、各分隊五〇人程度で操縦訓練に入った。

桜花を考案した大田特務少尉にも隊付の辞令が出た。

大田は桜花の搭乗員を希って岡村司令に直訴した。

大田の熱望で零戦複座練習機での離着陸訓練を許可されたが。結果は指導してくれた古参搭乗員から、

「操縦の適性なし」

の判定を受け、偵察員にもまわしてもらえなかった。

こうして結成された七二一空神雷部隊は、神ノ池基地を独占して人間爆弾桜花による特攻訓練に入った。

桜花隊、陸攻隊、戦闘隊とそれぞれ機種の異なる飛行隊三隊がおなじ航空隊に所属するのは前例がなく、三者の協調性が問われるむずかしい戦法であった。

桜花は火薬ロケット・ブースターによる推進機能をもった航空機で重量四四〇キロ、頭部には大型艦粉砕可能な一、二〇〇キロの徹甲爆弾を装備しているから自重ともで一、六四〇キロである。

母機の一式陸攻が搭載する魚雷または爆弾は八〇〇キロであるから、それを二本抱くのとおなじでかなり重い。

この生還のない飛翔体桜花を使用しての訓練はできないから、桜花に工夫を凝らして頭部の爆弾と尾部のロケットを外して代わりに同量のバラスト用水タンクを取り付け、胴体下部に着陸用の橇を、翼端にも転倒防止用の橇を、それぞれ設置したという。

そして十一月十三日いよいよ降下訓練が開始された。

この日は航空本部長戸塚道太郎中将の臨席を仰いだ。

最初は四人の分隊長のうち刈谷勉大尉が試乗した。

刈谷は海兵七十期で他の三人より一期先輩であった。

後輩の三人の分隊長は明日搭乗するよう指示された。

訓練機を抱いた一式陸攻が離陸して鹿島灘上空にいたり高度三、〇〇〇メートルで旋回すると、滑走路先の投下マーク上空で刈谷大尉が移乗した訓練機を投下した。

順調に滑空して高度を下げた訓練機が、タンクの水を放出したそのとき、バランスが崩れて後部から落下していき、そのまま機もんどり打って地上に叩きつけられた。

予期せぬ惨事に直面して反射的に行動を起こし、逸早く現場へ駆け付けたのは三人の分隊長たちであった。

狭い操縦席から引き摺り出したとき、刈谷の口から微かに呻き声が漏れていたので三人は吻とした。

だが、それは一時の慰めに過ぎなかった。

担架で医務室に運び込まれた刈谷は間もなく意識が遠退き、急速に手足が冷えていってついに脈が停止した。

犠牲者を出してしまった航空技術廠では徹底的に事故原因の解明が行われたが、異常は発見できなかった。

水バラストの放出は尾部からはじめて機首を下げ気味にしないと主翼が機能せず操縦困難に陥るのだが、操縦熟練者の刈谷大尉が先に頭部バラストから放出して機首を上げてしまったとは考えにくく、さりとてそうしなければあの事故は起きなかったと考えられるなどこれ以上追及を深めて行けば誰かの失敗が結論になってしまうので、訓練機から水バラストを外すことでけりをつけた。

こうした場合爆装桜花の重量とは違ってしまうのだが、訓練では操縦感覚さえ摑めばよしということにした。

翌日、半旗を掲げて刈谷大尉の海軍葬をすませると、なにごともなかったかのように猛訓練を開始した。

刈谷大尉の後任には、平野晃大尉が着任した。

野中隊長は一小隊ずつに分けて投下訓練をさせた。

桜花を抱いた一式陸攻が高度三、〇〇〇メートルに達すると陸攻隊員が床板を上げて懸吊してある桜花の風防硝子を鉤棒で開ける。待機していた桜花隊員は吹き上げてくる冷風に足をとられながら桜花の内部へずり下りると狭い操縦席に座って風防硝子を閉じ突入用意に入る。

こうして、桜花の突入訓練修了者は増えていった。

いまではとても理解できないであろうが、このころの猛訓練は戦闘に勝って生き延びるために励むものではなくて、おかしな話なのだが死ぬために胃腸が突き上げられ血反吐が溢れ出るほどの猛訓練をしたのである。

爆弾を抱いたまま敵艦に体当たりして心中することを目的とした、つまり見事に死に花を咲かせることだけを真剣に考えたのであった。

そんな桜花搭乗員たちの思いとは別に野中隊長は桜花を突入地点まで無事に運べるかどうかが心配だった。

一式陸攻は乗員八名の大型機で小回りがきかないうえに通常爆弾に倍する重量の桜花を抱くのである。そうでなくても鈍重でグラマンの餌食になり易く〈ワンショットライター〉と渾名されているのだから援護戦闘機で固めて貰わなければ迎撃網を突破する自信がなかった。

正攻法で実績を挙げてきている野中は桜花のことを、

「この槍、使い難し」

そう批判して、得意とする夜間雷撃戦法に固執した。

掩護戦闘機がグラマンの迎撃を完全に排除してくれる保証はまったくなかったから、桜花を吊った一式陸攻が攻撃目標まで無事に辿り着けるとは思えなかった。

なにひとつ確実性のない曖昧な戦法に野中を信頼してくれている多数の部下を駆り出して自殺行為の道連れにするなんてことは断じてできない。

「だから俺は、この無謀な桜花戦法に大反対なのだ」

野中はそう叫びたかった。

しかも軍令部は、桜花を投下次第陸攻は直ちに帰投して、つぎの桜花を吊って再出撃しろという。

「おなじ釜の飯を食い、生死をともにしてきた部下が突入するのを見ながら、戦闘部隊の指揮官にそんな卑劣な真似ができると思っているのか」

「そうなったら、自分の搭乗している母機も別の目標に体当たりして、ともにあの世へ行くまでなのだ」

野中は、それが血の通った人間のやることなのだ、と言いたかったのであろう。

だが、軍令部のいうそこまで行くまえに全滅させられてしまう。

「だから俺は、司令部に桜花戦法を取り止めさせて通常攻撃をつづけさせてほしいのだ」

そう言いつづけてきていた。

だが、司令部が軍令部の意に背けるはずはなかった。

この野中の率いる神雷部隊は、はじめフィリピン戦線に投入されるはずであった。

ところが、まえにも触れたように桜花をフィリピンへ輸送中の空母信濃と雲龍が相次いで米潜水艦に撃沈されて計画は頓挫してしまった。

軍令部は飽くまでも桜花をフィリピン戦に投入して防衛することに固執したのだが、一月九日に米軍のルソン島マニラ北西部リンガエン湾への上陸を阻止する爆装零戦がニコルスとツゲガラオから出撃して湾内にいる巡洋艦、輸送船などに体当たりしたものの、ついに上陸されてしまい、この攻撃をもってフィリピンでの航空戦が終息してしまったのでついに諦めて、神雷部隊は急遽沖縄方面作戦に当てることに変更された。

猛特訓に明け暮れた年が終わり昭和二十年（一九四五）を迎えた上旬すぎに、突然神雷部隊の隊員家族に召集がかかり、指定された神栖町周辺の旅館や民家で面会が許された。これが肉親たちとの最後の対面であった。

前線基地へ配備

一月二十日、聯合艦隊司令部は神雷部隊に九州への移動を命じた。いよいよ前線基地への出陣である。

神雷部隊は一式陸攻の七一一飛行隊（野中隊）が岡村司令、五十嵐副長、岩城飛行長の三役をはじめ司令部要員と、桜花第二分隊（三橋隊）と第四分隊（林隊）を搭乗させて出発し、これに三〇六飛行隊（掩護戦闘機隊）がつづき、そのあと宮崎基地から飛来した一式陸攻の七〇八飛行隊（隊長足立次郎少佐）が桜花第三分隊（湯野川隊）を搭乗させて宮崎基地に帰投して待機した。

神雷部隊の本隊野中隊の七一一飛行隊は南九州の鹿屋基地に進出した。

なお桜花第一分隊（平野隊）は神ノ池基地に残留してこのあと入隊してくる後詰めの甲飛十三期、予備学生

十四期の錬成訓練の指導にあたることになっていた。
野中は鹿屋基地に落ち着くと、整理した身の回り品一切を自宅に送り帰し、筆まめであった人が以後一切家族との音信を絶ったという。
鹿屋基地は大隅半島のほぼ中程に位置していて、九州に展開している海軍航空基地群の最南端の要の位置にある。
東西を肝属川と高須川に画され、南側を國鉄古江線（現在廃線）が走る台地の上に滑走路が東西に延びている。
三角屋根のバラック兵舎が軒を連ねるうちのいくつかを神雷部隊が仮寝の宿としてその入口に『非理法權天』『南無八幡大菩薩』の幟を立てた。
二月十日、軍司令部は九州、四国、中国地方に散在している各航空隊を一括して第五航空艦隊を編制し、司令部を鹿屋において長官に宇垣纏中将を据えた。
鹿屋市は大隅半島のなかごろにあって錦江湾（鹿児島湾）に近く、桜島を北西にみる位置にあった。
宇垣長官は着任早々麾下の各航空隊に、
「特攻」
を命じた。
一箇月後、軍令部は鹿屋から三、〇〇〇キロ南の太平洋上に浮かぶウルシー環礁に米軍の機動部隊が集結しているという情報を得た。
ウルシー環礁は南北三〇キロ、東西十六キロの環礁上に約四〇の小島が連なっているという。
軍令部は第五航空艦隊司令部に長距離特攻を命じた。
宇垣長官からの下命を受けた七六二空司令久野修三大佐は、二六二飛行隊の艦上爆撃機銀河（双発三座）二四機（隊員七二名）で『梓特別攻撃隊』を編制した。
この隊名は想像の域を出ないが、楠木正成の遺子正行が起死回生の秘策を反対され止むなく討ち死に覚悟で四條畷へ赴くとき、如意輪堂に遺した辞世の歌といわれる。

返らじとかねて思えば梓弓
なき数にいる名をぞとどむる

からとったものではないだろうか。
理由はともあれ、指揮官には飛行隊長黒丸直人大尉が補されて第一中隊一二機を率い、第二中隊一二機は分隊長福田幸悦大尉が率いた。
三月十一日、宇垣長官の壮行を受けた『梓隊』は二式飛行艇の誘導でウルシーへ向かって出撃した。
だが長距離飛行のため故障機が続出し、辛うじてウルシーに到着したのは二四機中十四機にすぎず、しかも夜間になってしまったために戦果も捗々しくなかった。
その停泊中の機動部隊が九州目指して北上してきた。
十七日二三〇〇、機動部隊を捕捉した偵察機から、
「鹿屋南東一六五浬に敵機動部隊四群発見」
の報を受けた五航艦司令部は、直ちに七〇一空司令

木田達彦大佐に出撃を命じた。
木田司令は直ちに第一國分の一〇三、第二國分の一〇五飛行隊に艦上爆撃機彗星をもって慌ただしく『神風特別攻撃隊菊水部隊彗星隊』と命名し、出撃を命じた。
十八日は二七機出撃して一九機が還らず、直掩戦闘機も三機が未帰還だったが、正規空母エンタープライズに一発命中、同ヨークタウンに一発命中、同イントレピットに一発至近弾でいずれも損傷させた戦果を挙げた。
十九日は一〇三飛行隊長柏井宏大尉と一〇五飛行隊長中村恒夫大尉がそれぞれ指揮をとって二三機が出撃したが、一五機が還らず、正規空母フランクリンに三発命中して誘爆をおこさせ沈没寸前にいたらせたといい、同ワスプにも一発命中して損傷させたという。
三日目の二十日は一七機が出撃したが七機が還らず、直掩戦闘機も二機が未帰還だったが、正規空母エンタープライズが味方の誤射で損傷し、駆逐艦パルゼイホウエルが空中分解した特攻機のエンジン落下で損傷したという。

野中隊に出撃命令下る

三月十八日、第一、第二國分から七〇一空一〇三、一〇五彗星飛行隊の特攻出撃がはじまったので、富高（日向市）の三〇六、三〇七飛行隊に出動態勢命令が出た。
両隊合わせて零戦六八機の戦力である。
〇五五〇、三〇七の漆山睦夫大尉率いる三二機が発進し、宮崎と富高の上空に分かれて哨戒を開始した。
〇七〇〇、神崎國雄大尉率いる三二機と交代する。
〇七三五、延岡上空を哨戒していた伊澤勇一大尉率いる第三中隊が、グラマンF四U、F六F一六機の侵入を発見して、直ちに空戦が開始された。
するとこんどは〇八四〇、富高へ侵入してくるグラマンF四U八機を発見、燃料補給中の漆山隊一五機が緊急発進して十分後に上空四、〇〇〇メートルで空戦になった。
今日出撃予定の神雷部隊岡村司令は、この空襲下にあっても決行するかどうかを五航艦司令部に問い合わせたところ、一〇一五司令部より出撃命令が下された。
岡村司令は鹿屋の野中隊九機と宇佐の足立隊九機に攻撃準備を下令したが、野中隊は大村（長崎県）に退避中であり、鹿屋は空襲を受けている最中で移動不可能と判明したので急遽足立隊一八機に桜花攻撃を命令した。
ところが、一四二〇に彩雲偵察機がグラマン五〇機が北上するのを発見して五航空艦司令部へ〈緊急電〉を発信したが、不幸にもそれが宇佐には届いていなかった。
岡村司令からの出撃機数変更命令を受けた足立隊長は一式陸攻一八機を揃えると、桜花隊第三分隊の湯野川守正大尉に一五名選抜させて出撃準備を急ぐよう命じた。

分散してある掩体壕から一式陸攻を出して揃えると、中隊長機を除く一五機に桜花を懸吊させておいて試運転する轟音のなかで別盃卓が用意され、水盃を交わす搭乗員たちが集合しはじめたとき、西に傾いた太陽を背にしたグラマンF六F四機が急降下して機銃掃射をかけてきた。一式陸攻のエンジン音でまったくきづかなかった。

一式陸攻は一一機が炎上、七機も被弾して使用不能になり、桜花隊の出撃はその出鼻を挫かれてしまった。

このとき迎撃の零戦も撃墜されたり損傷したりしたが、鹿屋でも同様の被害を受けたので、搭乗員と機材の損害は甚大で桜花直掩に重大な支障を来してしまった。

このことにより、足立隊に代わって野中隊が大村から急遽鹿屋に呼び戻されて、出撃準備を命ぜられた。

そして、三月二十一日を迎えた。

この日〇八一〇、索敵中の高速偵察機彩雲四機から、「〇八一〇都井岬の一四五度三二〇浬付近に敵機動隊部隊を発見。うち一群には空母二隻が認められるが、上空に護衛機の姿なし。天候快晴、視界三〇浬」の緊急電が入った。

彗星隊の戦果を過大に信じていた五航艦宇垣長官は、「先日の特攻で受けた損傷艦が退避中なのに違いない。」

そう判断して、

「止めを刺す好餌だ」

と色めき立った。

だが岡村司令には気になることがあった。

このところの空戦で零戦を大分損失していた。横井参謀長に掩護戦闘機隊の数を糺したところ、

「笠ノ原にいる二〇三空の二三機」

だという。

神雷部隊の三二機と合わせて五五機である。

八〇〇キロ爆弾ではなく、一、六〇〇キロ余りもある桜花を抱くのである。そうでなくても鈍重な一式陸攻はもはや運搬用機になりとても戦闘などできる状態ではない。

だから軍令部に通常一機につき零戦二機のところを倍の四機をつけることを承知させておいたのである。

今回は一八機だから零戦は七二機のはずである。

それが五五機ではなんとも心許ない。

軍令部に確約を反故にされてしまったのだ。

それに進出距離も予定の三〇〇浬より二〇浬も遠い。

そのうえ機体を軽くするには増槽の燃料を減らすよりほかなく、そうなると、帰投不可能になる虞があった。

そんなことから今回の出撃は無理と判断した岡村司令は、横井参謀長に意向を伝え、二人で宇垣長官に作戦見送りを進言したが、止めを刺して大戦果を焦る宇垣に、

「この状況で桜花を使えないのなら使うときがないよ」

そう一蹴されて、桜花の出撃が決定してしまった。

岡村司令は決行となったからには自分が一番機に搭乗して指揮を執る覚悟を固めると、長官と参謀長に、

「やります」

そう拝命して長官室を出た。

岡村司令はその足で飛行場へ行き、指揮所で野中に、

「今日は俺が行く」

そう判然りと伝えた。

そう言われて途惑った野中だったが、すぐに岡村の心中を察すると、その日を凝と見詰めながら低い声で、

「お断りします。そんなに私が信用できませんか」

そう撥ね付けた。

そうまで言われて岡村司令は返す言葉がなかった。

そのあと野中は、先任分隊長の甲斐弘之大尉からも、

「今日は私に指揮をとらせて下さい」

そう言って暗に野中を出撃から外そうとしたが、その心中を察した野中は無視して取り合わなかった。

この日野中は、保有の一式陸攻二七機のなかから選り抜きの搭乗員を集めた一八機を出撃させることにして六機ずつ三個中隊を編成して中隊長機を除く一五機に桜花を懸吊し、中隊長機は電探で索敵しながら進撃して指揮を執ることにしたのだが、桜花を懸吊した過荷重状態での離陸は困難を極めるため重量を抑えねばならなくなり、燃料を満載できぬところへ飛行中の抵抗が予想外に大きく燃費が嵩んで航続距離が極端に減少してしまう。

これらの理由により重量を軽減させるために電探本体を取外し、援護戦闘機不足のため中隊ごとの進撃を改めて二個中隊が一団となって進撃することに変更した。

そして、いよいよ初出撃する人間爆弾桜花の搭乗割は、第二分隊長三橋謙太郎大尉以下一五名が選抜された。

小柄で士官には珍らしい坊主頭の野中は、無造作に飛行帽を冠り白いマフラーを首に巻いて指揮所の折り畳椅子に腰掛けて待機していたが、見送りにきた桜花隊第四分隊長の林冨士夫大尉を呼び寄せて、

「ろくに戦闘機もない状況ではこの出撃はまず成功しない。俺で駄目なら誰がやっても駄目だ。糞の役にも立たぬ特攻なんてぶっ潰してむかしのように正攻法の雷撃でやるようにさせてほしい。いいか林、これは遺言だぞ」

そうしんみりと語りかけた。

いつもの俠客張りの口調はすっかり影を潜めていた。

やがて、吹流しと非理法権天、南無八幡大菩薩の大幟が立つ指揮所で「搭乗員整列」の陣太鼓が鳴り響いた。

野中は、一緒に死地に赴く搭乗員たちをまえにして、

「戦わんかな最後の血の一滴まで、太平洋を血の海たらしめよ」

そう訓示して、檄を飛ばした。

そして野中は、自身の搭乗機まで見送りにきてくれた岩城飛行長に、南朝の忠臣楠木正成の故事に倣って、

「飛行長、湊川だよ」

そう寂しく笑って機上の人になった。

桜花隊の指揮官三橋謙太郎大尉は、投下訓練で殉職した一期先輩の刈谷勉大尉の分骨を胸に抱いて出撃した。

まもなく野中隊長搭乗の一番機は、エンジンがかけられ、車輪止めが外されて、列線から滑走路へ向かった。

一一二〇、整備兵によって出発指示の白旗が振られると、野中機は爆音高く響かせて滑走路を走っていった。

つづいて二番機、三番機と一八機がつぎつぎに飛び立っていったが、どの機もまるでこの世との別れを惜しむかのように、滑走路の先端まで走りつづけてようやく未練を絶ち切り天界へ飛び立っていったようであった。

次いで三〇六、三〇七の零戦隊二機が離陸、笠ノ原（鹿屋市）からの二〇二援護隊二三機と合流して都井岬（宮崎県）上空で編隊を整え進撃を開始したが、三十分後に直掩隊のうちの一三機と援護隊のうちの一二機計二五機が故障で引返したので三〇機になってしまった。

故障機の原因は富高から派遣された整備班が途中空襲で列車が遅れ、両方の基地到着が二十日深夜になってしまったための整備不備で、その始どが増槽からの燃料吸い上げができない状態を起こしてしまったのだった。

いっぽう野中隊のほうは、離陸後全機とも五航艦司令部への無電連絡はいっさいとらず仕舞いであった。

鹿屋発進三時間後の一四二五、敵機動部隊の海域まであと五、六〇浬のところで敵戦闘機の迎撃を受けた。

零戦三〇機とグラマンF六F約五〇機の空戦である。

野中隊は隊内無線電話での命令伝達以外、一切の音信を絶ち、終始沈黙を守ったまま一四四五に全滅した。

この野中五郎少佐のとった〈沈黙のままの全滅〉は、「五航艦上層部に対する無言の抗議」であったかも知れない。

米軍が撮影した野中隊の最後の様子は、

「最後まで編隊を崩さず、全機桜花を懸吊したまま撃墜されている」という。

迎撃をうけても桜花を捨てて身軽になろうとはせず、桜花諸共敵艦隊に体当りする覚悟だったのだろうか。

この作戦失敗による犠牲は甚大で、戦死者は、

野中五郎少佐以下攻撃隊員	一三五名
三橋謙太郎大尉以下桜花隊員	一五名
伊澤勇一大尉以下戦闘隊員	七名
漆山睦夫大尉以下戦闘隊員	三名
合計	一六〇名

損失機材は、

一式陸上攻撃機	一八機
桜花特別攻撃機	一五機
零式艦上戦闘機	一〇機
合計	四三機

であった。

その後のことであるが——。

生還のない飛翔体〈桜花〉を考案した大田正一特務中尉は八月十五日の終戦を神ノ池基地で迎えた。

大田は〈桜花〉が戦果を挙げ得ず徒らに多くの戦友たちを死地に投じてしまったという事実だけがのこってしまったことに苦悩しつづけていた。

そして、いずれ自分が非人道的な兵器の考案者として糾弾されはしないかという恐怖心に戦いていった。

良心の呵責に苛まれつづけた大田は、隊員たちの白眼視に耐え切れずある日横須賀航空隊との連絡用零式練習機に飛び乗り覚束無い操縦でふらつきながら鹿島灘の沖合へ向かい消息を絶ってしまったが、その後変名して密かに生きつづけていたということが判明したという。

もう一人七二一空司令岡村基春大佐についてである。

岡村は高知県出身で大正八年（一九一九）海軍兵学校へ入校、同十一年（一九二二）卒業の五〇期生である。

大正一四年（一九二五）に飛行学生教程を卒業して以来、ずっと戦闘機乗りだった老練操縦員である。

昭和十九年六月十九日、二航艦司令長官福留繁中将が摩下三四一空戦闘機隊の訓練基地館山を巡視した。

恰もサイパン島で日米両軍による攻防戦が熾烈を極めていて、緊張感が漲っていたころである。

福留長官を迎えた岡村司令が、

「残念ながら戦勢ここにいたってしまってはこれを打開する方法はただひとつ、飛行機によって奇襲をかける体当り戦法以外にはないと思われます。体当りの志願者はいくらでもおります。隊長は私自身がやります。三〇〇機を与えて下さるならば戦勢を挽回させてみます」

そう熱心に口説いたことで知られる熱血漢である。

だから生還のない桜花による戦法に異存はなかった。

その岡村司令の戦後の消息は定かでないが、終焉は昭和二十三年（一九四八）七月十三日盂蘭盆会迎え火の当日、千葉県茂原市付近で鉄道自殺という悲壮な最期だったという。

戦争は国全体を巻き込み、勝っても負けても全國民を不幸のどん底に突き落とす。

爲政者は隠忍自重して冷静な外交努力に全力を傾注し、なんとしてでも武力闘争を避けねばならない。

（了）

或る日のキケロ

永田俊一

一、信託遺贈

信託の起源として、紀元前二～一世紀のローマで工夫された信託遺贈の仕組が引用される。ポエニ戦役時、奢侈抑制を狙い制定されたウォコニウス法は、女性を相続人に認めないことでその遺産相続に制限をかけた。信託遺贈は、その回避策として愛する者に財産が引き継がれるよう、信頼する者に後事を託し、その受託者から真正の相続人を受益者として、女性でも間接的に遺産を受け継げるようにしたものである。

（一）

遺産の相続・引継ぎという点で古代ローマ法は、家長の下の家族の相続人資格の平等、相続財産の均等持ち分という法定相続制度であったが、家の財産が他家に移転しないことを厳格に求めるようになり、父系制の家族制度がとられ家族の扶養義務を伴う強力な家長主義が基本となる。そして遺言制度が出来ると、人民の集会で、相続人を指名し財産を譲る遺言をすることや相続人を指定することで、事実上の単独相続として家産分散を防ぐようにもなる。妻や娘は相続出来たが、女系の血族の相続は禁じられたので、他で結婚しても母方の血族即ちその子は相続できず元へ戻ったし、子の母からの相続、母の子からの相続は財産が別の家に移るので禁じられていた。なお、豊かさが増し家長制が変質する等の環境変化のなかで、近親者の生活を保障する意味で一定の範囲の者に与える遺留分の制度も整って来る。

さて、イタリア半島を統一したローマは、西地中海の商業覇権をかけ、紀元前264年にカルタゴとの百年余

の戦争に突入し、第三次ポエニ戦争（BC149～146年）でカルタゴは灰燼に帰し消滅した。この戦いに耐え市民を鼓舞すべく策定された法制の一つが、奢侈自体を抑制するオッピウスの法に次いで、奢侈の原因を予防しようと作られたウォコニウス法（BC169）で、女性を相続人にすることが禁じられた。

初期のローマ人の法律は、土地分配の精神に従うことしか考えていなかったので、ある意味女性の富を十分に制限せず、それによってこうした富と常に不可分である奢侈に門戸を開放していたとも言え、そこをついた立法であった。勿論ウォコニウス法は女性の過大な富を予防する為だから、相続を剥奪された女性に与えられるべき奢侈に当らぬ一定金額は定められ、また、富を規制する法律なので、公民名簿に登録された人々を対象とした。

（二）

これが法律回避の口実を与えた。娘に相続財産を残し得るよう自分をウォコニウス法上第六階級（人頭税は払うーアエラリィー、且つ最下層民）として、公民名簿に登録して貰わぬ親が出て来た（法務官も違反とせず）。一般的にはセルウィウス・トゥリウの制度で公民名簿に登録されない公民は奴隷とされたが、彼等はこの制度の非公民には当らない。しかし不名誉だし、買収された法務官が相続人指定を禁じる等不安定でもあった。例えば、法務官ウェッレスが収賄のため、アニウス・アセルスの一人娘の相続人指定を禁じたことが大事件になった。

そこで、追い詰められた法回避への切望は、信託遺贈に繋がった。

後に、モンテスキュー曰く「ウォコニウス法は公民をも人間をも犠牲にし、国家のことしか考えなかった。法律は遺言者における自然の感情を無視していた。ある人から遺産を娘に交付することを託された者は、その通り遺産を交付すれば悪い公民となった。保持すれば不誠実な人間となった。彼等を悪い公民というのは過酷でさえあろう。」（「法の精神」）

アダム・スミス曰く「人々は女性が富裕になるのを阻止しようと努めた。ウォコニア法と呼ばれたこの法律を回避するために信託遺贈が発明され、それによって、人が自分の領地を法律では許されない人に残そうと思ったとき、彼はそれを誰か他人に残してその人がそれをかれが意図していた人に譲渡するという厳粛な約束を、その人からとったのである。」（「法学講義」）

（三）

その後のウォコニウス法だが、ローマは内乱の百年を経て帝政が始まりパクス・ロマーナと呼ばれる平和が長

く続くこととなり、その初代皇帝アウグストゥス治下（紀元前27～紀元14年）のローマでは人口回復のため、公民が結婚し子をもつよう様々な奨励を行うことになった。ウォコニウス法についても、その相続禁止効力をそぐ為受託者がいつでもそれを回復することを義務付ける法律を作り、そのために信託遺贈執政官を任命した。信託された相続人が、それが回復されることになる信託受贈者に、その遺産を交付した。

ハドリアヌス治下（紀元117～138年）でウォコニウス法は殆ど廃棄されたといわれる。更に東ローマ帝国のユスティニアヌス治下（紀元527～565年）では、男系女系の血族の区別もなく、三つの相続人の順位、卑属、尊属、傍系親を定め、この点に関して残っていた全ての区別が廃止された。

相続・遺言は人類社会とともに古いと思うが、信託遺贈は時代の潮流の無理な抑制を自然法の観点から、信の力で風穴を開けたと言えよう。

二、キケロの生涯

ローマの生んだ偉大なる哲学者であり政治家であるキケロ（マルクス・トゥッリウス・キケロ）。ウォコニウス法回避の動きが始まった頃、紀元前一〇六年ローマから南東約百キロのアルピーヌムに生まれた。

共和制の存続に力を尽くし、哲学者にしてローマ共和国の最高政務官である執政官も勤めた政治家であった。前四三年オクタウィアヌスと三頭政治を組んだアントニウスの手の者に虐殺され生を終える。

その後オクタウィアヌスが三頭政治の権力闘争に勝利し、アウグストゥスとして皇帝就任しローマ帝政（元首制）が始まるのは前二七年。将に内乱の一世紀の後半六十四年をローマ共和制の為に、思索し説き、戦ったキケロの生涯であった。

先ず、その生涯を概観しておこう。

（一）

ポエニ戦争の後も、対外征服戦争や反ローマの反乱制圧（同盟市戦争）などによりローマの軍事活動は続く。ローマ軍の中核をなしていた自由農民は、連年の出征によって農地から引き離され、また属州より安価な穀物が流入したため次第に没落していく。

この状況を打開するために、グラックス兄弟が、平民の支持を得て、土地分与や憲法の改革を実施しようとした（BC133～121）。しかし、改革は失敗に終わり、ローマは内乱の一世紀に突入する。

この時台頭したのが、民衆派（ポプラレス）のガイウス・マリウス（BC107執政官）と、元老院派（オプティマテス）のルキウス・コルネリウス・スッラで、激しい内戦（BC88～82）の末、スッラが勝利する（82～79スッラの執政官独裁）。

キケロの生まれたアルピーヌムは前三〇三年、選挙権は無いがローマ市民権を持つ、ローマの総督が統治する総督都市となり、前一八八年には完全な市民権を得た。

貴族・騎士・平民の市民の階級の中で、キケロ家は騎士階級であった。元来重武装兵であった騎士もポエニ戦争を境に、軍事上の地位ではなく、ローマの徴税請負業、大都地所有者、大農園経営者、商業・不動産業者、金融業者等となった。キケロ家は徴税請負業者であった。

父は、キケロと弟クィントゥスの教育に熱心で、二人がギリシャ哲学・修辞学（弁論術）を学べるようローマへ移転した（BC97）。キケロの才は少年時から群を抜き、十代は、詩、雄弁、法律、哲学の勉学に勤しんだ。前八九年、一七才の時一年軍役に就いた後も勉学に努めた。

二五才（BC81）にして弁護士としての初舞台を踏み、濡れ衣の被疑者の疑いを晴らし勝訴した弁論に注目が集まったが、相手は恐怖政治をひいていた独裁官スッラの関係者であったことから、身の危険を避け前七九年ギリシャ・小アジアに遊学する。

そしてスッラの死（BC78）の翌年帰国（この年妻テレンティアとの間に娘トゥッリアが生まれている）、法定弁護活動で名声を勝ち得た後、前七五年財務官に選出された上、シシリア島に総督代理で派遣され、本格的に政治の道に入って行くこととなった。

（二）

紀元前七三年から七一年に、剣闘士や奴隷によるスパルタクスの反乱が起こったが、クラッスス、ポンペイウスにより鎮圧される。

キケロは財務官として熱意と誠実をもって職務を果たしたので、シシリアの人々に、信頼のおける人物という評判を得ていた。そして、属州に赴いた財務官が陥り易い収賄には全く無縁であった。それと全く反対の苛斂誅求と不法行為に依り島民の財宝や財産を奪ったのは、前七一年から総督を勤めたウェッレスであった。

財産目当てでウェッレスから命を狙われ、ローマに逃げてきて裁判を起こした島の市民を救うため、キケロは、シシリアで証拠を集めウェッレスの数々の悪事を暴き、当時最高の雄弁家ホルテンシウスが弁護に回ったウエッレスを破って勝訴に導いた。その中で、ウェッレスが法務官時代に、ウォコニウス法でも認められていた範疇の女性相続を、自身の布告で否認した、収賄に繋がる事案

についても指弾した。

このウェッレス弾劾の手腕が高く評価され、翌前六九年按察官（競技大会と市場の監督）に、六六年法務官（恐喝担当、八人中議長役）に選出される。そして前六四年四二歳で、政務官の最高位、国家の首長である執政官に最初の挑戦で当選する。任期一年で人数は二名、一度務めると四年間再選されない。貴族出身でない所謂「新人」が、この階梯を登る武器は人徳であり、それしか頼るものがなかった。キケロはマリウス、大カトー以来久し振りに貴族たちの枠を破って騎士階級出身で当選した。

ローマには官職を選ぶ選出母体が三種あった。先ず護民官十名、平民からのみ選ばれ、平民会の投票で決まる。財務官と按察官はトリブス民会（平民会員に貴族も含め凡ての市民が参加するものとしてBC3世紀ごろより機能、ケントゥリア民会より召集が容易）によって選出される。法務官と執政官はケントゥリア民会（凡ての市民参加、共和政になると出来、投票は財産額を基準に編成されたケントゥリア［百人隊］単位で行われた。軍事・財産で層化された投票で決せられる初期からの枢要民会）で選ばれる。ローマの法律は平民の力（平民会決議）で決定される割合が大きかったが、執政官や法務官を務めた者たちが終身議員となっている元老院の利かす睨みこそが、ローマ国家の中枢的政治力であり、本来安定の基盤であった。キケロ登場の時代は元老院の力が弱体化し、ローマ国軍に根を張った将軍たちに共和国が蚕食されていたことは覆うべくもない事実であった。

因みにこの時相方の執政官にはG・アントニウスが選ばれた。属州アフリカ総督でウェッレスばりの収奪と不法行為を行い、ローマに戻って訴えられ、選挙立候補を阻まれていたカティリーナがアントニウスと提携しキケロ当選を脅かしたが、結局キケロは満票で当選する。

このカティリーナの起こした謀反がローマの国政を揺るがし、執政官職最期の月に、その軍事力による国家転覆事件を水際で食い止めたのがキケロだった。一方で共和制を救った「祖国の父」として元老院を中心に賞讃されるが、この時差し迫った危機に対応するため、元老院決議の非常時大権に基づき、捕縛したカティリーナと組んだ首謀者を裁判にかけることなく処刑する判断を下したことが、「裁判なしの死刑はない」とのローマ市民に与えられた権利侵害という批判を招き、追い落としの策動・政争に繋がった。

そして、このキケロ追い落としは、元老院共和制の遵守の先頭に立つ彼を攻撃し、元老院の弱体化を図ろうという勢力の画策によるものであった。その動きは、前六十年ローマの軍団を三分するポンペイウス、カエサル、クラッススの三頭支配（第一次三頭政治）が成立したことに象徴される。前五八年、カエサル庇護下の護民官クロディウスの出した「正式の訴訟を経ずにローマ市民を殺害しようとしたり殺害したものは追放に処さるべし」との法律により、キケロは追放される。ギリシャのテッサロニキ等で一年余の亡命生活を送ることになる。

（三）

三頭政治の内輪もめが、キケロを復権させる元老院の動きに繋がり、前五七年九月に帰還。言葉の力で共和国の根幹を守る元老院主導の政治の復興の為、カエサル・ポンペイウス・クラッススの間に楔を打ち込もうとするが、効を奏さなかった。前五一年キケロはシリア属州と隣り合わせのキリキア属州の総督を命ぜられる。軍事的勝利も収め、最高指揮者の称号を与えられ、前任者と違う正義、寡欲、慈悲の政治を行い、前四九年一月ローマに帰還する。おりしもカエサルがかのルビコン河を麾下の軍団を率い渡ろうとしていた。

キケロは「より大きな悪カエサル」と「より小さな悪ポンペイウス」の選択でポンペイウス側についたが、ポンペイウスの勝利でも独裁政が到来すると見通していた。

そして初めての激突である前四八年八月のファルサロスの戦いでのカエサルの勝利で帰趨は決し、直後エジプトに逃げたポンペイウスが騙殺され、カエサルは一年間の独裁官に就任する。しかし、その後も征圧の戦いは続いた。前四六年には十年間の独裁官となり、権力基盤を益々強化し、前四五年三月ヒスパニア戦でポンペイウスの息子の軍団が壊滅して戦線は収束、前四四年二月カエサルは終身独裁官に就く。結果内戦は終結する。

この間前四七年九月、キケロはイタリアに帰還したカエサルと和解、ローマ入りを保証された。カエサルの寛恕に生命を長らえたキケロは、しかし、依然反カエサルであったが、ローマは既に留守のカエサルの意を受けその息のかかったオッピウスとバルブスに完全に牛耳られ秩序が維持されていた。

（四）

前四六年夏、キケロは妻テレンティアと離婚、半年後の再婚もうまく行かず、前四五年二月にはスペインでのカエサルの最終戦勝利を聞く。そんな中最愛の娘トゥッリアが亡くなる。葬儀後、キケロはアストゥラムの別荘に籠り、子を失った悲しみをローマの偉人たちの同様な例を幸きながら随筆「慰め」を書くと、その後、五月中旬にはトゥスクルム荘に移った。

そこで、ラテン語でギリシャ哲学の包括的表現を行なうべく、執筆に没頭。「アカデミア」（六月）、「善と悪の究極について」（八月頃）、「トゥスクルム荘対談集」（秋）、

「神々の本性」（年末）と次々に完成させた。既刊の「法律について」（BC52）「国家について」（BC51）とあわせ、これら六著作がギリシャ哲学のローマ的継承と批判作としてキケロの哲学の精華とされる。

ある意味哲学に裏付けられた政治の実践を旨としたキケロが、身動きの取れなくなった中、風前の灯となった共和政の挽回に、言論出版の力をもって人々を奮い立たせようと、筆を執ったものと言えよう。

（五）

実際の元老院ではカエサルが終身の独裁官となった（BC44/2）その直後三月一五日、元老院議員六十余名の同意者によるカエサル暗殺が元老院内で決行された。しかし、この一団は暗殺成功後の将来像を持っても練ってもいなかった。暗殺すれば共和国ローマが再興されるとの考えは甘く、カエサルが植えつけた支援基盤は結局「独裁者なき独裁」（キケロ）を生むことになり、遂に共和制を後の帝政に向けて方向転換させることになった。

キケロは元老院の重鎮として返り咲いたが、カエサルの暗殺後の「息の詰まる空白状態」は、共和国の再建を求めようとした決議と同時に、カエサル暗殺者達国家の解放者の刑の免除とカエサル派の地位保全の決議とカエサルの出した命令を正当な法として存続させる決議で締めくくられた。このカエサル発布の法がいまだ有効との決議が、この法の最高執行人に指名されたアントニウスに強大な権力を認めることになった。

三月一八日アントニウスが主導したカエサル葬儀で、その火葬の火を持った一団がカエサルを亡き者にした解放者達の家々に火を投げ込んだことに覇権争いのケイオスが始まる。アントニウスは元老院でキケロを標的に激しく弾劾し、キケロはアントニウスと全面的な対立に入り、身命を賭して共和国再建に論陣を張る。

前四四年中は持ち応えたキケロは、カエサルの養子オクタウィアヌスに期待をかけ、アントニウスを打倒することが唯一の国家救済の道と考え、それを前提に様々な手を打つ。

しかし、この国家軌道修正の戦略も、やがて強力なアントニウスと一時的にであれ提携するしかないことを悟ったオクタウィアヌスにより烏有に帰す。前四三年秋、アントニウス、レピドゥス、オクタウィアヌスの間で五年間任期の共和国建設委員会が成立する。いわゆる第二次三頭政治である。ここでも追放刑が実行され、キケロの死刑を執拗に求めたアントニウスの主張が三者の中で通され、脱出を図ったキケロはフォルミアの地で追っ手に囲まれ懲憩として死についたといわれる。

プルタルコス英雄伝では、逡巡の中で追い詰められて惨めな殺され方をしたとされている。同時に全体のトーンもキケロのマイナスイメージを語るところが多い。哲

学・政治の一致を求め、思想的にも歴史的存在となっているキケロが、プルタルコスによってかく叙述されていることはどういうことか。

それは同時代人でなければ実感が難しい、力と力、演説と演説、命を賭けて争う荒々しい社会動態の中でのことである。キケロの元老院共和政維持を目的とする、現実的戦略は、「燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らん」ではないが、日和見的なマイナスのイメージを醸し出したところがあるからであろう。

（六）

その後この覇権争いは、アントニウスを制したオクタウィアヌスが紀元前二七年に、「尊厳者（アウグストゥス）」として「第一の市民（プリンケプス）」の称号を得て、共和政の形式を残しながら、プリンキパトゥス（事実上の帝政）を始めることになる。

こうしてアウグストゥスの皇帝就任と、ユリウス・クラウディウス家の世襲で始まった、ローマ帝政は、初代皇帝アウグストゥスの時代に、常備軍の創設や補助兵制度の正式化、通貨制度の整備、ローマ市の改造や属州制度の改革、などを行い、帝国の基盤が整えられた。さらに防衛がしやすい自然国境を定め、そこまでの地域を征服した為、帝国の領域は拡大し、安定した防衛線に守られた帝国領内は、パクス・ロマーナ（ローマの平和）、と呼ばれる平和が長く続くことになった。

ローマはローマ帝国の首都となり、皇帝アウグストゥスの時代には一〇〇万人が居住する世界最大の都市となった。皇帝ディオクレティアヌスがニコメディアに遷都するまでがローマ帝国が隆盛を極めた時期であった。

キケロの追い求めたローマ共和政は、この国で再び実現することはなかった。

三、某氏のキケロ

話転じて、

某氏は昔その友人から、何やら古びた中世の古文書の写しらしきものを送ってもらったことがあった。某氏が当時キケロに関心を持ち、飲んだ機会にそのことにも触れたところ、いささか酔の回った友人が俄かに真顔になって、「そう、それが地下室に眠っているんだ。」と叫んだ。何のことやら分らず某氏がきょとんとしていると、その友人がその経緯を語ってくれた。

因みにこの友人は工学者で歴史や哲学のことなどとんと興味が無いが、その祖父に当る人が外交官で、戦前イタリアやフランスに駐在経験があったとのことだった。

その祖父が残した資料が地下室の片隅に残されている

のだが、父は捨てられるものは全て始末して、必要と思われるもの・意味のあるものだけを残してあるとしていた。しかし一つだけよく分らぬがその不思議さ故に残してあるのがこれだという古文書の写しがあった。その父によれば、祖父から聞かされた話は次のようなものだったそうである。

「ローマに赴任滞在中、近郊の古い村に立ち寄った時、不思議な老人に出会った。道端に死んだように倒れこんでいたのを助け起こすと、何日も食べてないと言う。私が日本人であることが分ったのか、自分は昔維新の日本を見たことがある等と語った。東京の街の情況描写がやけに詳しかった。御同業かなとも思い、時間も時間だったので近くの店に連れて行き夕食を共にした。店には二人きりで誰も入って来ず、店主はこの料理だけを作っていると言い、それを出すと前金をとってそれきり現れることも無かった。料理は田舎料理だったがとても美味であった。ぶどう酒の味も良く合って絶妙だった。

驚いたのは、次第に精気を取り戻した老人が、この村の昔を自在に語り始めたことであった。この一～二年、十～二十年前、百～二百年前、五百～六百年前、千～千五百年前、千五百～二千年前、と次々に将にその時そこで暮らしている人の如く情景や事件や人々の営みがあたかも今あるかのように語って澱みが無かった。初め唖然として聞いているだけだったが、次第に引き込まれて次々に脈絡も無く関心事を問うていった処、私の問い自体を整理しかつ何倍も詳細に活き活きと情景や物語が躍動するが如くに答えてくれた。

食事が終る頃には、私はその村は勿論ローマ、イタリアの歴史そのものになった感じがしていた。我に返ると、すっかり元気を取り戻した老人がにこにこと私に礼を言い、『貴方の今一番関心のあることは何か』と尋ねた。丁度キケロを読み始めていたので、反射的に『キケロのこと』と応えた。すると、老人は持っていた頭陀袋の中から何やら取り出して、『私の祖先はキケロの解放奴隷であるティーロと言われている。ティーロは、キケロ没後彼の演説集など編纂して刊行しているが、ここにあるのは彼がキケロと最後に対話した記録とされるものの写しである。残念ながら原本は失せているが、昔我が家で見つかりそれを書き写したとされるものの内容を、何時の頃か村が観光用のティーロ紹介の冊子にして使ったと言われるものだ。今日の御礼に差し上げよう』とくしゃくしゃになった冊子を一つ渡してくれた。

そして再度礼を述べると、『ローマ行きのバスが最終だから、案内しよう』と私を促し、奥に声をかけると店を出て、停車場は直ぐ近くだったが、畑中の暗い夜道を導いてくれた。最終便が丁度やってきて、老人と握手して別れを告げるとそのまま飛び乗るようにして乗り込んだ。運転手に促され席について出発するバスの外を見ると、其処に老人の姿はもう無かった。そして、背を後ろにして真っ直ぐ来たはずだが、さっきまで明るく灯のともっていたあの店もなぜか其処に影も形も見出すことが出来なかった。

そういえば、最後に握手した彼の手に手触りらしきものを感じなかったことに突然気が付いた。慌てて先ほどもらった冊子を探るとそれはそのまま手元に残ってはいた。しかしよく見ると日付もなければ表紙も『或る日のキケロ』と僅かに読みとれるだけであった。

消え去らないうちにと必死に読んだ。自分の思い描いたようなキケロであった。しかし、後日確認したが、そうした冊子の存在の有無及びそもそもティーロがそんな記録を残したかどうかも確かめることは出来なかった。」

（二）

その父は一度何かの折にこの話を聞いたことがあったが、祖父が亡くなる直前に、あのことは、と切り出され、「従って書かれていることが、キケロの真実を語っているのかどうかも分らないということではある。だが、歴史の資料は常に不完全であり断片的である。それでも人々は更に資料を漁り技術進歩を使い、歴史をそして歴史上の人物を等身大に少しでも近づけようと務める。政治家としては非業の最期を遂げたキケロではあるが、その後のヨーロッパの思想家といわれる人々の多くはキケロに影響を受けて来たし、資料が断片から新しい発見でページを拡げる度に、歴史におけるキケロ実像にも進展が見られ、その度に研究の深度もあがるし、評価も変遷する。

この書の真贋は分らぬが、時代と共にその内容の真実らしさは検証して行くことは出来ようし、何と言っても私の人生に起こった不思議を綴じ残しておくことでスペースを使わせて貰うことは、お前達も許してくれよう。」

友人がその父に聞いたのは、こういう話であったし、その父も「真贋は問えぬものだが、私の父が残したいといっていたものだからいいだろう。キケロ実像評価に関していえば、父の時代にはドイツの歴史・哲学者達の酷評が主流だったが、二十世紀に入り父の晩年にはその評価が次第に変わりつつあった。そして戦後はそれが明確になった。」と言って継いで逝ったそうだ。

このティーロの語ったとされる『或る日のキケロ』を某氏に写させてもらった。その友人の祖父が自分なりに訳出したもののようだ。年表記等も現代風になっている。

四、或る日のキケロ

私ティーロは、前四五年八月初、トゥスクルムにキ

ケロ様を訪ねました。前五十三年に自由人にさせて貰ってからは、暫く体調がすぐれず静養したりしておりましたが、お手伝いに伺えるときは何とかお邪魔しました。しかしその後キケロ様の方がキリキアに赴任したり、内乱の中諸所動き回られたりしておりましたので、機会も限られてしまいました。今回、このように引籠もられたとお聞きし、是非ともと思いやってきました。

常時お仕えしておりました時は、演説の準備や清書をして秘書のようなお役目をさせて頂き、私も大いに勉強させて貰いました。

私の気心も分っていただき、私共のような身分の者にとって、忙しくはありましたが、理非をわきまえ心遣いも下さり、お仕えするには最高の方でした。

＊　＊　＊

この日伺いますと、執筆の手を休めて下さり、庭に出て共に木陰を散策しながら、ついこの春亡くなられた最愛のお嬢様トゥリア様の思い出話や今の暮しの様子などお話下さりながら、私の体調にも気遣っていただきました。暫く歩いて部屋に戻ると、冷たいもので涼を取りながら、「私の共和政のための戦いも敗戦に終ったようだ」というお話から、次第にご自身を振返られる口調になっていかれました。とつおいつ、夏の昼下がりの心地よい静謐な空気の中、語り終えられ時には、陽の影が随分と長く淡くなっていました。

昔の癖で私はメモを取りながら聞かせていただきましたので、それを後日整理したのが、次のようなお話です。

（一）

「私の一貫しての思いは良い社会をつくることだ。一人ひとり倫理感の高い市民としてお互い切磋琢磨し尊重仕合い、自由と発展の果実を享受出来るよう、国家の一員として尽し貢献する気概がなければいけない。勿論自らを高める為には、学び考え経験し、その識見人格を陶冶するため努力が必要である。そして社会は人々の集合であり関係であるから、国の形そしてその運営のあり方、即ち政治の成否が決定的に重要である。

ローマ建国以来、王政から共和政に移行し人々が国政参加し責務を果すことで、内外の様々な困難を克服し、国の拡大・拡充を果してきた。だが、国家規模の拡大の速度が急になるとともに、それを支える共和政の維持発展が息切れしてきていた。私が生まれてこの方は、力の政治に振れ易く現に内乱や内乱含みの時代となっている。

幸いにして、私は内乱の中心から離れたアルピーヌムの田園に生まれ、学に篤い父が頃合いをみてローマのカ

リナエに移転、私の階層からみて当時望み得る最高に近い学問の機会を得た。ギリシャから来た哲学者や元老院で執政官を務めた法学者や雄弁家の碩学に教えを受け、一年の兵役経験を入れ十年余に亘りしっかりと、歴史・詩・雄弁・法律・哲学と幅広く勉学に励ませてもらった。

自然法に基づく法治の下、民主的議院で国家のあり方運営を論じ決定し、平和で豊かな社会を実現する。共和政の維持発展の中にこそそれがあり、その為には力でなく言論で、真実と理に依拠し人々に訴え、動かしていかなければならない。また、哲学的思索に基づき内実のあるまた自然の理に適った議論をして行く必要がある。そのためにも、弁論を磨くことが力の政治に対抗し共和政を守ってゆくためにも必須条件であった。初めての弁護でスッラ関係者の告発に成功した後、難を逃れギリシャに遊学、哲学と政治のあるべき論を深め、ロードス島に渡って弁論の最高権威に教えを乞うたことも、そうした意識があってのことであった。

改めて振返ってみると、ティベル川のほとりに出来た王国がこの八百年で版図を大きく広げ発展してきた。僭主化した王政が共和制を産み、その統治の力を規模拡大に並行して進めきたものが、周辺地域との抗競争で多くの異民族や異人種を呑み込み常時大規模軍事的行動を伴う急速な拡大の中で、その対応に力の政治をもってすることを平時化せんとする圧力が高まってきた。

ポエニ戦役後もローマは周辺との軍事行動を続けているし、民主化を試みたグラックス兄弟の改革は失敗し内乱に陥り、マリウス・スッラの争いの後圧勝したスッラはマリウス派の執政官・法務官経験者・元老院議員を三百名近く粛清し、独裁官の地位に着いた。スッラ亡き（BC78）後暫く、力の政治の顕在化は目立たなかったが、ある意味軍団を率いた所謂軍閥政治家の再編と力の蓄積は着実に進行しており、私の執政官就任に前後して、その歯牙が露わになってきたと言える。」

（二）

「ギリシャから帰り（BC77）、政治の道に進むべく法廷弁護活動を始めた時、二九歳の私の信条とするところは、『歴史に学び、事の由って来るところを事実によって究明し、自然の理に法り判断し、事を実現することが道であり、矜持を以て事に処す』であり、この基本は終生変わらぬものになっている。

財務官に選出され、西シシリアへ総督代理として派遣され（BC75）、政務官の第一歩を踏み出したが、この精神で臨んだ。シシリアはポエニ戦後ローマの属州として、ローマの穀物需要の三分の一を賄っていて豊かな島であったが、其処に派遣された総督等の富の蓄積の場とも化していた。私は、収賄に全く無縁であったし、人々

の信頼を受ける施政を旨とした。民のことを考え無私の精神で臨む政治を行うものの基本の大切さを改めて思うとともに、いかに腐敗や不正に権力は繋がり易いかも実感した。

将に前七一年からシシリア総督となったウェッレスの苛斂誅求を訴える島民の為、彼の弾劾裁判の原告弁護をした。私自身がシシリアに赴任した時以来築いた信頼関係に基づき、実地証拠固めをしっかりした上その不正を暴き弾劾に成功し、死刑判決まで受けシシリアから逃げてきた原告の命を救い、ウェッレスを自主的亡命に追込んだ（BC70）。

この翌年按察官（競技大会と市場の監督、警察機能も持つ、BC69）に就任したが、数多くの裁判・弾劾に弁護・弾劾の役割を果す中、矢張り大きな役回りで、政治に力を発揮し良き社会作りに貢献するには、法務官・執政官（任期各一年）と政務官の階梯を上り詰め、その経歴をもとにローマ共和政の扇の要である元老院議員として重きを成さねばならないとの思いが強まった。スッラの設けた厳しい規定で政務官職の財務官の就任最低年齢は二八歳、財務官三〇歳、法務官三九歳、執政官四二歳とされており、執政官は、二人・任期一年・四年は再任なし・就任時に任期満了時の総督となる属州決定等とも相俟ち、独裁予防の仕組みにもなっていた。

他方で、こうした杓子定規な決め方は十二表法に長年しがみついている法が象徴する様に、ローマの形式主義を顕わしていた。ただ、これから成る者にとっては目標設定にもなり、私は四二歳の執政官を目指す事とした。

その上で周りをみてみると、ローマの版図拡大と属州統治、国境警備と戦域拡大は、軍団の展開を大規模日常化してきている。私と同年の生まれだが、執政官の父を持ち、類稀なる軍事的才能の持ち主でスッラに重んじられたポンペイウスは、既に執政官を経験しており（BC70）、東方で海賊掃討やミトリダス六世率いるポントス国との戦いに大軍団を動かし成果をあげていた。

絶対指揮権や戦争全権などは元老院が付与するが、逆に力を通じての元老院への影響力も強まっている。そして六歳下のカエサルは、ローマの血統貴族出でスッラに敗れたマリウスとの姻戚関係を持ち元老院貴族派に属するが、独裁への野望を秘めていた。妻を亡くしたポンペイウスに娘ユリアを嫁がせ（BC59）関係を密にしたり、大富豪クラッススと手を組み裏で政治を取り仕切ろうとしたりして、その野望を垣間見せていた。極めつけはガリアでの軍事行動による版図拡大により民衆を興奮させ支持を集めていることであった。老獪なカエサルは、クラッススと裏で取り仕切るために、アントニウスとカティリーナを利用しようとした。」

（三）

「カティリーナは、私より二つ年上の貴族出で法務官を勤めた（BC68）直後、属州アフリカ（現チュニジア）の総督となり、赴任先でウェッレス張りの不正・収奪を行い、帰還後訴えられた。有罪となれば、執政官選挙の候補者になれないが、望ましくない裁判官拒否の条項を盾に有罪を免れたため、私と同時期の執政官選挙に名乗りを上げた。五人の候補のうちにアントニウスもおりその集票活動は鞏膣を買っていたが、この二人は共同戦線を張っていた。この、前六三年を務める執政官を決める選挙は、結局私が「選挙候補者の演説」などを評価され満場一致で当選し、次にアントニウスが票を集めた。カティリーナはスッラに与し、マリウスの弟はじめマリウス派の殺害に手を下した前歴が明らかであり、無頼・邪まとして支持を受けなかった。

選挙は綺麗ごとではなく、弟クィントゥスは、買収は別として羽目をある程度外さねば勝てないし、就任できねば共和政のために力を発揮することも出来ないと、私の生真面目を嘆いたが、弁論や冊子による宣伝、友人たちの応援等を主体に頑張った。だが、対立候補に対する糾弾は厳しくならざるを得ず、率直すぎるところから恨みを買うような面も無かったとは言えない。

力による政治への方程式は、軍事行動・暴力的言論抑圧・民衆扇動だが、私の任期では、年初に背後にカエサルのいる移民法提案を否決した。これは土地を国庫で買い上げ、国民に与えるもので、財政の裏打ちの無い人気取り政策で、真の狙いは家なき大群の帰還古参兵に定住地を分配するものだった。しかも分配に当る十人委員会が独立の力を持つと占領地でも軍が同様な分配や国有地の勝手な処分を行いかねず、全力を挙げて阻止した。

そして、年末にカティリーナ一派の国家転覆陰謀が起こった。

スッラの軍隊の残党で最も戦闘的な一団がエトルリアに根を張りその首魁がカティリーナであった。この時期前六二年の執政官選挙が行なわれており、彼はまた立候補していた。この兵隊達も選挙に一役買うためローマに乗り込んできていた。そして、形勢不利が明らかになるに従い謀議が重ねられ、選挙結果次第で、反乱と権力掌握の陰謀が秘かに練られ準備されていた。

選挙結果が出て、謀反企図の事実が市民の通報で露見し、私は夜明けとともに元老院を召集、その事実の報告証言を得た上、エトルリアでの軍団待機の報も受け、執政官に非常時大権を与える決議を行なった。

そして一味による私の暗殺の失敗後召集された元老院では、カティリーナの弁明は誰にも聞き取られず、カティリーナの街からの退去が命じられた。『なぜならば、わ

たしは言葉に依り、お前は武器に依り政治をしているのだから、その間にどうしてもこの町の城壁が必要なのだ』と私は言ってやった。

そして彼らは、ポンペイウスが遠征から帰る前を狙って、サートゥルナーリアの祭りの夜を決行の日と決め、町の諸処に武器や人を配置し、ローマ市の炎上と断水を図り、元老院の主要メンバーを殺害し権力を掌握する計画を立てた。

その証拠を握るや一味の各所での蜂起責任者を捕縛留置し、元老院で逮捕者の取扱いが議論された。議論の帰趨は初めは皆極刑、カエサルの財産没収と終身禁固説で少し戻り、最後に小カトー（以下カトー）の猶予をおかず死刑にすべしとの名演説で一転五人の死罪が決定するという流れであった。これに基づき私は、即座の刑執行を命じ実行して、切迫していた暴発を回避出来た。私はこれにより『祖国の父』とよばれることになった。」

（四）

「しかし間もなく、逆に『ローマ国民を裁判にかけることなく極刑に処してはいけない』とのセンプロニウス法を根拠にこの処置を攻撃する声が強まってきた。『同法は国家の敵には当てはまらない。彼らは内なる公敵で国家転覆の意図をもち実行に移そうとしており、呼応する動きが予定されていた。非常時大権に基づき元老院最終決議に沿って行なわれている』と反論しても、『元老院決議は法廷判決ではなく、五人は既に拘留されており、彼らが武装集団を使ってローマを混乱の巷に陥れる危険はなかった』と収まらなかった。

先程言ったように、彼等の処置についての元老院決議での議論は、極刑から無期禁固が出て、私も両論で状況を見極める意見を述べたが、最後はカトーの論で極刑に一致した。そして、謀反の動きが現実のものになろうと事態が窮迫して一刻も猶予ならぬことが、更に明らかになってきた。また背後で動かしている勢力を諦めさせるにも、首謀者を処断することが暴発を食い止める最後の手段と考え、処断を決断実行した。

しかし現に謀反が食い止められてしまうと真の危機のことは済んだ事とされ、死刑の可否だけを両立せぬ法律論を持ち出し政争の再燃に結び付けられた。

私は矜持を以て対処したが、それをその後の事態の推移まで読み切れずに行ったと言われれば、それが現実になっている事実は受け入れざるを得ないのも矜持と考えた。しかし、これは私の大きな共和制を守る使命からみれば、大きな挫折ではあった。

カエサルの場合は、移民法通過に向けての背後からの画策や息のかかったカティリーナ一味の処罰への恩情発

言等から、独裁的権力把握への意図が見え隠れして分り易い。ただ表面に出ないで、人を使い複雑巧妙に仕掛けて来るので表面的には分りづらい。寛容を見せつつ邪を忍耐強く実現する策略家なので神経が擦り減る手強さがある。他方ポンペイウスは、現状軍事能力は圧倒的だが、根が正直なので逆に分り易い。いずれにせよ軍閥政治家であるので、ローマ共和政の脅威に変わりはなく、この二人にどう対応し共和制を破壊出来る迄に力が高まらないようにすることの重要性を改めて思った。

この時四年もローマを離れ戦っていたポンペイウスは、その子飼いのネポスをローマに送りこみ護民官に出馬させた。その意図を見抜いて対抗するためカトーも出馬して、十名の当選者の中にはこの二人もいた。私の任期満了日に、恒例の民会での政務総括演説を阻止したのはネポスであった。ネポスはカエサルと水面下で通じる役割も果たした。

その翌年（BC62）末、ポンペイウスが日覚ましい戦果を引っ提げてローマに戻ると、いよいよ私の追い落とし劇が始まった。ポンペイウス自身は、独裁制開始の噂を否定すべく、ブリンディシウムに上陸するとすぐ軍団を解散し、その意図のないことを公に示した。

ところがその時、女性だけで祝うボナ・ディアの祭りにカエサル家に侵入、密通嫌疑で元老院で裁判にかけられたクロディウスが私の追い落としの役割を担った。彼の支援者カエサルは嫌疑の相手の自分の妻を離婚し、クラッススは陪審員の買収に走り、クロディウスは僅差で放免された。私兵団を有するクロディウスは有罪票を投じた元老院議員にとり脅威となり、アリバイ崩しの証言をした（BC61/5）私も恨みを買うところとなった。カエサルは離婚でいち早く巻き込まれるのを回避するだけでなく、私と違い証人台に立つ事も拒否した。

帰国していたポンペイウスへの東方政策や軍団古参兵への土地配分や属州統治の在り方が元老院で取り上げられそうになると、同じ立場のカエサルはポンペイウス、クラッススと結び、自ら執政官選挙に勝利し（BC60/7）、前五九年、移民法を強い反対を押し切り通し、その後のガリアで五年間の執政官格指揮権を得る等、力の源たる属州で軍事行動や経営自由度を確保すべく措置をとる。

そして、クロディウスにポンペイウスの仲介で、平民との養子縁組により護民官の被選挙権を獲得させたのはカエサルと言われている。クロウディスは、前五八年担当の護民官に当選（BC59/12）、これを使い民衆を煽動し元老院開催の権利を行使してローマ政界を掻きまわし、裏で私腹を肥やす手段を手に入れた。

彼は元老院共和政派に陰に陽に圧力を強めて来た。前五八年初には、『正式訴訟を経ぬローマ市民の殺害は追

放』との法律を通しあからさまに私を標的にした。私は事件当時『祖国の父』とまで言われたカティリーナ処断の正統性を強く主張し、支持者の協力や相手陣営で比較的に受け身のポンペイウスへの働きかけなど行なったが、いずれも成果をあげず、遂に私を裁判にかけるとの話になった。身の危険な状況にまでなったので、ガリアに赴くカエサルの副官にというおためごかしの提示は断わり、三月、自らローマを退去した。

思い返すとこの際、カティリーナ処断の時同僚の執政官であったアントニウスのため、弁護に立ったが、敗訴になり彼は追放刑になったこと、その過程で移民法ごり押しのカエサルが暴力に訴えていることを難詰したことが、彼等の私への圧力行使を早めたきらいもあった。

五か月テッサロニキ、後半八カ月をディラッキウムで過した。自身の運命には覚悟しつつ、ローマの動静には注意を怠らなかった。ただ、妻や子への心配と愛惜の念で涙する事が多かった。」

（五）

「前五七年になると、クロディウスの暴走がひどくなり、ポンペイウスやカエサルの領分まで干渉するようになった。ポンペイウスはガリア出征中のカエサルと連絡をとりつつ、元老院側と連携、クロディウスと敵対し、キケロ召喚の動きが元老院共和政派、ポンペイウス両者から強まった。

ポンペイウス派で新護民官のミロはクロディウス同様私兵団を抱える武闘派であり、両者が剣闘士まで雇って対立する混乱の中で、その打開・元老院の指導力回復のため私が呼び戻されたと考えている。

召喚の法律通過の八月初ディラッキウムを出発、一ヵ月かかりローマに到着したが、途次も勿論、ローマで民衆の熱狂的歓迎ぶりに正直驚いた。機会ととらえ、召喚の感謝演説を行い、隠喩的にクロディウス、カエサル批判をし、ポンペイウス・カエサル・クラッススの間に楔を打ち込もうとしたし、元老院共和政の復興に尽くすことを宣言した。

また護民官セティウスの弁護に当っては『国家よ、ローマ市民よ、さらにイタリアのローマ市民権を与えられた諸君よ、我等は民衆を煽動して野望を実現せんとする所謂民衆派の魂胆を見抜き、真の平和、始祖たちの遺風を護った品格のある平安と社会を今こそ力を合わせて回復しようではないか』と訴えた。

私は、独裁政方向という点では変わりは無いが、力という点で大きな悪のカエサルに比すれば、ポンペイウスは小さな悪と考えており、共和政派としてはポンペイウスと連携しつつ、カエサル、クラッスス、ポンペイウスの間に楔を打ち込み軌道修正を図ることが、残された道

と考えていた。その観点から手を打ったのであるが、必ずしも共和政派の元老院議員たちも一枚岩にはならず、ポンペイウスの気を殺ぐ連中もあり、私の変節となじる者もおり、事はうまく運ばなかった。

そうこうしている間に、彼等三人はカエサルの主導でルカ（北エトルリアの小町）で会談合意をみる（BC56）。内容は、前五五年ポンペイウスとクラッススが執政官となること、その後五年間ポンペイウスが、スペイン・シリアの総督になり、カエサルのガリアでの総指揮権を十年間に延長するというものであった。それを知った時、これで共和国が失われたと思ったが拒否の姿勢は貫いた。しかし、ポンペイウスからカエサル攻撃を止めろとの最後通告が来たり、私の言論では元老院を引っ張る力は明らかに失せてしまった。

執政官の後束方を受け持った、大富豪にしてスパルタクスの乱を鎮圧した武将でもあったクラッススが、パルチア制圧戦で戦死すると、ポンペイウスは属州を副官に統治させ自らはローマに留まって影響力を行使した。しかし、カエサルはガリア制圧に忙しく現地にあり、クラッス配下であったクロディウスとポンペイウス配下のミロが私兵団を使って争い、ローマは不安と混乱に陥った。クロディウスが出会いがしらの争いでミロに殺害されると（BC52/1）、ポンペイウスが事態収拾のため期限付き単独執政官に任命された。

誰もなり手のない、私の帰還に協力してくれたミロの裁判で、私が弁護を引き受けたが敗訴し、ミロは追放となり、私は元老院よりシリア属州と隣り合わせのキリキア総督を命ぜられた（BC51/2）。これは、執政官後一度は属州総督に就く義務をまだ果していなかったのが理由とはなっていたが、勿論私の意に反するものであった。

既に『法律について』は書いていたが、書き出していた『国家について』を出発に間に合わせて脱稿した。言論での力を封じられる中、出版を通じて多くの人々に呼びかけるべく、騒擾のローマで執筆を続けていた。」

（六）

「三ヶ月の旅で七月末にキリキアのラオディケイアに到着するとパルチア人が、属州を越境侵入し進攻の態勢にあるとの報告、直ちに軍事行動を開始した。幸い勝利をおさめ、エレウテロキリコス人との戦いも制し、積年の軍事的課題に応え、大勝利の軍隊指導者に与えられる「最高指揮者」の呼び名で讃えられた。民政の方は勿論、法訴訟に力をいれ行政・司法にあたり、正義・寡欲・慈悲を旨とする私の姿勢を貫いた。そして約一年でキリキアを離れた（BC50/6）。

アテナイ手前で、カエサル・ポンペイウス間での争いの予兆を聞き、ローマ境門で待機に入った前四九年一月初、カエサルが軍団を率いたままルビコン河を渡り、北部イタリアを抑えたカエサルを前に元老院は戦争状態を宣する。ポンペイウスは南に退いて迎え撃つことを提唱、和平交渉も決裂し月末には干戈が交えられ、カエサルの強勢にポンペイウスは更に退いて海軍力を主体に戦う策を採る。

カエサルが私と会見し参じるよう促した（3/28）。私は拒否、その後元老院でも大勢はカエサルになく、カエサルは元老院の賛同なしにポンペイウス追撃を表明した。

私は、カエサルは明確に独裁政を目指しており、決意も執念も固い。ポンペイウスは軍事・政治で国家一のローマ人が念頭で、軍事は最強だが弾力性は持っている。故にローマ共和政維持を目指す立場からは、どちらかしかないとすれば、より小さな悪であるポンペイウスを採ることが善策と考えてきた。この時も、家族・友人等の中立論を退け、ポンペイウス軍に参加のためギリシャに向かった。

今でも、この政治的判断は正しいと思っているが、最大の誤算は、ガリア制圧の前と後で、カエサル軍の力は雲泥の差になっており、この間軍事力涵養を怠ったポンペイウスとの陸上における力の差が逆転していることを正確に読めなかったことである。

スペインでの最終戦決着（BC45/3）までは長期を要したが、初期にポンペイウス軍に完勝し（BC48/8ファルサロスの戦い）、逃れたポンペイウスもエジプトで殺されると、カエサルの独裁政は着実に強化されてゆき、カエサルの寛恕を受けローマに帰った私には、命を長らえただけで為すすべがなかった。」

（七）

「私生活においても、長年連れ添った妻テレンティアと遂に離婚（BC46夏）、翌年に入ると、愛しき娘トゥッリアを亡くし、再婚したばかりの妻プブリアも去って還らなかった。

アストゥラムの別荘に籠もったが、娘を失った深い悲しみからは容易に立ち直ることは無かった。しかし他方で、残された僅かの時間に仕上げておかねばならぬ使命が私を強く促した。そこで『慰め』を書き上げた時点で、思い切ってトゥスクルム荘に移って、既刊の『法律について』『国家について』に続く哲学関係の書の執筆に取り掛かった。

帝政に繋がる独裁政の危機が高まり元老院の存立まで危うくし共和制を維持し守ること自体が力の争いと化す中で、言論を持って戦ってきたが遂に刀折れ矢尽きた。

しかし、生きている限り人々に意識高揚を訴えていかねばと思い、執筆に専念することとした。先ず『アカデミカ』でギリシャ哲学の流れを整理し、自らの考え方を明確にした草稿をアティックスに送ったところだ。」

＊　＊　＊

この日の思い出話はここで終わり、その後食事を共にさせて貰いました。時間も遅くなり、一晩泊めて頂き、翌朝ゆっくり起きると、既にキケロ様は机に向かって執筆中でした。涼しいうちに書く方が捗るということで、終った所で共に朝の食事をとろうということでした。

それで私はその朝の涼しい時間に、庭を散策させて貰おうと外へ出て、暫く身体を動かすと、昨晩少々飲み過ぎたワインの影響も取れ、随分気分もよくなりました。そして戻ると間もなく食事の用意ができ、お呼びだと伝えられました。

食堂に入ると、朝の挨拶を交わし私の体調を問うた後、もどかしげに、

「今『善と悪の究極について』を書いているところだ。そう、つい先程、信託遺贈に関するエピソードを書き終えたばかりだ。」と言われ、その部分の稿を昔からしていたように、テーブルの私の前に置かれました。そして目を通している私を見ながら、次のような前置きの説明をしてくださいました。

「今はカエサルの独裁という形でローマが統治されている状態だが、私の生きてきたローマは、その共和政が内乱で揺すぶられてきたといえる。そうした中で生まれ育った私は一方でギリシャ哲学を学び、他方で現実の世界の洞察も踏まえ、懐疑主義というか折衷主義というか、より正確にいえば吟味主義（ソクラテス的立場）をよしとした。そして、人民の理性的叡智と徳に基づいて、そうした理念を忘れず、現実の歪みを克服し、理念に近づける努力を重ね、国民の自由と共同の安寧を得る事が政治の課題であり、歴史に学び、理性に従い自然に法り、弁論を通して哲学と政治の一体的運用を図ることが肝要と考えた。

これを言うのみでなく実践してゆくには多大な困難を伴い、矛盾や理不尽や不寛容や不運など、人間社会の現段階に於ける歴史的現実という圧倒的力に押し込まれる。私自身もまた、必ずしも理想とする形で事を進めることが出来たとは言えないことも事実である。

私の考える現段階に於ける最善の国政は、王が僭主とならず、貴族支配が寡頭志向の少数支配に変質せず、他方民主政からは群集支配・衆愚政が吹き出ない形であり、それが国家永続の途である。

その『ほどよく混和された』政体こそローマの共和制であり、指導者の大きな間違いにも民衆の暴走にも歯止めがかかる。この思いでこの制度の守護を説き、その崩壊の危機には危救的対応も辞さずやってきた。

だから、弁論を持って理想とするところを実現するため、死は恐れてはいないが、生き残って事をその方向に進めてゆくことに努めて来た。弁護人として濡れ衣をきた若者の弁護に成功したが、相手が独裁官スッラの関係者であったので、ローマを逃れた。執政官で国家転覆を企てたカティリーナを弾劾し、差し迫った危険を防ぐためその共犯者を処刑にしたが、その後カエサルの息のかかったクロディウスの画策で追い落としの活動を起こされ結果ローマ追放を受けた時も、退避した。

カエサルとポンペイウスの覇権争いで元老院が揺すぶられ二分された際、同じく独裁の途が予想されるも、相対的に危険の少ないポンペイウスについて戦ったがカエサルの勝利で終った。カトーは死を選んだが、私は寛恕を得てこうして言論での途に何がしかの事を期している。

世界理性こそが世界秩序の導き手であり、世界理性は自然法と同一であると考えている。全世界が法を根底に動いており、自然に与えられている理性が法であり、この法が実定法を作ることを命ずる。実定法は人間の中の理性的素質と正義と不正に関する自然的感情に由来する。人間の理性は、自然の中の恒常的な正しい理性へと進展する。実定法は理性のこうした進展内で作られる。

人間に素質としての理性を与えた神は、この不完全な理性を完全な理性に高めるように導く。『人間は正義へと生まれ就いている』。実定法は人間の観念に存するのではなく、自然に由って存立するものなのである。エピクロス派、ストア派、アカデメイア派の代弁者の造り取りの形をとって、人の心構えのあり方を論じた『善と悪の究極』でも、この自然法の観点との接点から、信託遺贈を話題にのぼせている。丁度其処を書いたところで、それがこれだ。」

更に私がまだ、紙上に目線をやっていますと、いつものように、「勿論君も知っていると思うが、信託遺贈への流れは粗っぽく簡単に言えばこんなことだ。」と更なる説明に移りました。

「二回目のカルタゴ戦役の最も戦いが深刻な時期、挙国一致の抗戦が必要で、奢侈を禁ずるオッピウス法が出来た。女性に対しては、半オンス以上の黄金を身につけること、派手な色の衣服をまとうこと、ローマおよびイタリアの都市で馬車を用いること等を禁じた。

戦争が終結すると護民官が同法の廃止を提案したところ、論争になった。女性達は賛成の立場で男達を自宅に引っ張り込むべく加熱した。それに危機を感じてとりわけ大カトー（カトーの曽祖父）が法廃止反対に立ち上った。歴史家であるティトウス・リウィウスの言ったという言葉が残っている。『女が諸君等と対等になれば、女が諸君等を支配するであろう』と。だが、同法は廃止になった。

しかし、その後女性の行いが悪くなり、過度に富を成す女性が増えた、ということを理由に、ウォコニウス法が出来、女性に有利になるように遺言を残すことを禁止した（BC161）。そして第三回のカルタゴ戦が始まった（BC149～146）。

戦争が終ると、オッピウス法の時のような騒ぎではないが、この間のマケドニア戦やカルタゴ戦など打ち続く激しい戦役で多くの兵が倒れ、残された女性への遺産相続の不自由が深刻な問題となった。しかし法そのものは廃止にはならず、人々は抜け道を工夫することになる。規制は公民名簿に登録されたものを対象にしたが、登録しなくても娘に相続財産を残し得るよう自分をウォコニウス法上第六階級（人頭税は払うーアエラリィー、且つ最下層民）として、不名誉であるとしても、非公民でもなく、女性相続にも自由度のある立場を選択する人々が出てきた。そしてそれは一般的に法的にも是認される様になった。

ところが、収賄を狙った法務官が相続人指定を禁じる等不安定な動きもでた。

私も財務官として赴任したことのあるシシリア島の総督を務めた（BC71～70）ウェッレスの苛斂誅求の不正を暴いた法廷で、私がその法務官時代の悪徳を指弾した部分がある。よく覚えているが私は、こんな風に事件を提示した。」と、演説口調で述べ始められました。

『ガーイウス・サケルドースが都市法務官の時にプブリウス・アンニウス・アッセルなる者がこの世を去りました。彼には娘が一人いるだけで、自身、戸口調査も受けていなかったから、彼は自然の情が促し、法律も禁じてはいなかった行動、つまり、娘を自分の相続人にするという行動を取り、娘が相続人になったのであります。すべてがその未成年の娘に味方しておりました。法律上の公正も、父親の意志も、これまでの法務官布告も、アッセルスが死去した当時の法律上の慣習もであります。

次期都市法務官だったウェッレスは娘に次ぐ第二相続人に指名されていたルーキウス・アンニウスに話を

持ちかけました。アンニウスに遺産を布告で与えてやれると言い、何が出来るかアンニウスに教えてやりました。アンニウスには願ってもないこと、ウェッレスには儲けになることと思われたのです。彼は、それでも慎重に娘の母親に人を遣わせて接触しました。できることなら、これほど悪辣な、これほど非人間的な条文を布告に挿入するよりは、布告に何一つ新たな条文を設けずに金を受け取ることを望んでいたからです。

娘の後見人たちは、娘の名で金を、とりわけ大金を総督に贈った場合、名簿にどう記帳すれば自分たちの身の危険を伴わずに金を贈れるのか、思案が浮かびませんでした。と同時に、ウェッレスがのちにこれほど悪辣な人間であることが判明するとは夢にも思っていなかったのであります。たびたび話を持ちかけられましたが、彼らはきっぱり断わりました。』

ここで、一呼吸置くと私の方を見て、どうだい、よく覚えているだろう、という表情をお見せになられました。「そして、私はこう断罪した。」と、また、聴衆に語りかけるような演説口調に戻られました。

『さて、娘のことをことのほか心にかけているわたしと同様に、娘への似たような感情や情愛に心動かされる皆さん方一人一人にも、以上の話は痛ましく、また不当なことと思われる筈だと信じて疑いません。実際、自然は娘という存在以上に快い何を、娘という存在以上に愛しい何を存在させることを望んだでありましょう。娘以上にわれわれが細心の配慮と情愛のすべてを注ぎ込むに相応しい何があるというのでしょう。

ウェッレス、これはウォコニウス法によって戸口調査を受けなかった人間には許されていることであるが、御前がその文言で狙ったのが、国民という範疇の問題ではなく、一個人の問題だった。そのため、お前のその布告の動機が法に促されてのことというのではなく、代価に浮き動かされてのことであった事実が容易に見て取れる。

冷酷無比の輩よ、何故お前は死者のプブリウス・アンニウスにこれほどひどい不法行為を働いたのだ。なぜ彼の灰と骨にまで苦汁を嘗めさせたのだ。父の意志で、法に適い、法律に則って継承された遺産をその子供から奪い取り、お前に都合のよい者にくれてやるとは。われわれが生きているあいだは財産を分ち合っている人たちから、われわれが死んだからといって、法務官が家産や財産を奪うことができるというのか。請求権も占有権も与えない、と彼は布告に謳っています。では、お前は未成年の娘から紫縁のトガ（当時の普段

着）を剥ぎ取り、財産の飾りのみならず、自由人の飾りまで奪い取ろうというのか。』

そうです。私も自分で清書した内容を思い出しましたが、キケロ様の口調はまさに往年の名演説の調子を取り戻し、活き活きしたお顔にもなられていました。私が顔をあげ聞き終え手を叩きますと、我に返ったように、「これは、年甲斐も無く興奮してしまって」と照れるように日配せされました。

そして照れながらも、私の前に差し出した、『善と悪の究極について』の今朝完成させた部分を指して、どう思うか問われました。私は、一～二の用語上修正した方が良いところは指摘しましたが、内容は良くできていると申し上げつつ、以前のように書き写して持ち帰りゆっくり読ませて貰いたい、とお頼みしました。

その書写したものが、今も手元にありますので、そのままご紹介しましょう。（勿論刊行されれば全体として読むことが出来ましょうが）エピクロス派との対話形式をとって、その批判を試みている部分の一節です。

○すべてを快楽によってはかる君たちの方も、それなりの快楽を得る為には、危険を冒さないわけには行きません。もし大きな財産とか莫大な遺産とかを争うようなことにでもなれば、ほとんどありとあらゆる快楽は金がもたらしてくれるわけですから、君たちのエピクロスは、もし彼自身が考える善の究極を追求しようという気があるのなら、あのスキピオにも負けないくらい大きな危険に身を投じなければならなくなるでしょう。あの時スキピオは、もしハンニバルをアフリカに引き戻すことに成功すれば、大きな栄誉を得ることができることを知っていました。彼は、そのために、何と大きな危険に立ち向かっていったことでしょう。彼は、しかし、高潔を究極の目標として、その自分の奮闘をすべてそこから眺めていたから、そうしたのでした。快楽は目標にはなっていませんでした。君たちの賢者も、ですから、何か大きな儲け話でも耳に入れば、必要なら、彼と同じように命を賭けて戦うはずです。

悪事が露見せずに済むこともありうるでしょうし、彼はそれを喜ぶでしょう。なぜなら、その賢者は死を軽視するように、追放を、苦痛そのものさえ何とも思わないように教え込まれているでしょうから。その苦痛は、君たちは、不正行為者たちに罰を提示する時には、耐えられないものとしていますが、賢者は常に悪よりもより多くの善をもつと主張するときには、耐えうるものとしているのです。

○あるとき、プブリウス・セクスティーリウス・ルー

フスを助けてやったことがありました。彼は私を含めた友人達には、自分がクイントゥス・ファディウス・ガッルスの遺産相続人であること、ガッルスは遺言書の中で、遺産の全てがガッルスの娘に渡るよう、自分に要求していたことを明らかにしていました。そして（裁判では）そのような事実はないと言い張りました。

そう言っても彼には何の危険もありませんでした。彼の主張を反証することは誰にも出来なかったからです。私たちを含め、誰一人信じる者はいませんでした。娘のためにただ要求すると書いたにすぎない人間よりも、それによって利益を得る人間の方が嘘を言っている可能性が高いように思われました。彼は、自分はウォコニウス法に対して宣誓した身であるから、友人たちが別の考えでいるならば別であるが、自分としてはあえてそれを犯す勇気はもっていない、とまで言い添えました。

味方についていた私たちは、たしかにまだ若かったのですが、要職についている者が多く、しかも誰一人、ウォコニウス法に則って可能な額以上の額が娘のファディアに渡るべきという意見は出しませんでした。その結果セクスティーリウスは莫大な遺産を手にした訳ですが、彼は、もし全ての利得や利益よりも高潔や正義を優先させる人々の考えに従っていたなら、そのうちぴた一文にも手を出しはしなかった筈です。

それで、そのあと彼は、後悔とか不安とかに陥ったとお思いになりますか。全然そんなことはありませんでした。逆にその遺産のために大金持ちになり、それで大喜びしていました。彼はその金を、単に法律にしない形で入手できたことを、ことのほか喜んでいました。ともかく君たちの方では、その金というものは、たとえ危険を冒してでも、手に入れなければならないわけです。それがなければ、大きな快楽など、所詮望むべくもないのですから。

○しかし、何かを不正に行なおうとする者が、単に悪賢いばかりでなく、その上に絶大な権力をもっているということさえあります。そういう人間を想像してみてください。マルクス・クラッススがその良い例です。もっとも、彼は、いつも彼なりの長所を発揮してはいましたが。また、今日では私たちの仲間のポンペイウスがそれにあたります。ただし、彼の正しい行為に対しては、私たちは感謝しなければなりません。

彼は、罰を受けずに思う存分不正を働くことができたわけですから。しかし、それにしても、誰一人咎めることもできず、不正に行なうことが出来る行為がいかにたくさんあることでしょう。

○仮に君の友人が、娘に遺産を返してくれるよう君に

頼んで死に、ファディウスとは違って、そのことをどこにも書かず、また誰にも話していなかったとすると、君はどうするでしょうか。君は返してやるに決まっています。エピクロスも多分返してやるでしょう。セクストゥスの息子のセクストゥス・ペードゥカエウスもそうでした。

彼は、学問があるばかりではなく、誰よりも善良で公正な人で、その教養と誠実の写しとしていまも私たちのところに子息を残していってくれているわけですが、その彼は、ヌルシア出身の立派なローマ騎士、ガーイウス・プローティウスから依頼を受けたとき、そのことを誰も知る者はいないのに、自分の方から妻のところへ出向いていって、予想もなにもしていなかった妻に夫の請託を明かし、遺産を返してやったのでした。

しかし、君もきっと同じ事をしたに違いありませんから、お尋ねしたいのですが、君たちは、君たちの利益とか、またおっしゃるままに言えば、快楽とかあらゆる行動の究極目的としていらっしゃる筈なのに、その君たち自身が、快楽ではなく義務を追求していることを明らかに示すような行動をおとりになるということになると、その行動は君の間違った学説よりも正しい自然の方がより強い力をもっていることを同時に証明してもいるわけですから、その分君が唱える快楽より自然の力の方が有利になるということになりはしないでしょうか。

○カルネアデースはこう言いました。仮にあるところに毒蛇が潜んでいて表からは見えず、誰か死ねば君が利益を得るような人物が知らずにその上に座ろうとしており、そのことを君が知っているとすると、もし座らないように忠告しなければ、君は不正を犯したことになるだろう。しかし、罰を受けることはないだろう。なぜなら、君が知っていたことを立証することが出来る者は一人もいないからだ、と。

しかし、もうたくさんでしょう。もし公平や信義や正義が自然から生まれてきたものでなければ、そしてもしそれらすべてが各自の役に立つことに帰着するとするならば、善い人間などどこにもいないことは明々白々だからです。また以上の問題については、私の『国家について』という本の中で、ラエリウスが十分に論じています。

＊　＊　＊

信託遺贈に関する部分はこのように書かれていました。

本人が述べてくれましたように、将に「自然に与えられている理性が法であり、この法が実定法を作ることを

命ずる。実定法は人間の中の理性的素質と正義と不正に関する自然的感情に由来する。人間の理性は、自然の中の恒常的な正しい理性へと進展する。実定法は理性のこうした進展内で作られる。人間に素質としての理性を与えた神は、この不完全な理性を完全な理性に高めるように導く。『人間は正義へと生まれ就いている』。実定法は人間の観念に存するのではなく、自然に由って存立するものなのである。」という事です。

そしてキケロ様は、実際にも、その理念に沿って法制の整備を行なうべきであるとし、そのように動いておられました。その意味で信託遺贈は自然の理に適うよう事実上法理として定着したものであったと言えると思います。しかし、ウォコニウス法が事実上はこのように換骨奪胎されているからと言って、法そのものが無くなっていないということは、まだ完全に自然の法理が正式に定着したとは言えません。いつの日か、ウォコニウス法が廃され、自然の理に適った相続・遺言の法体系が出来上がった時がその日なのでしょう。

その時はまた、キケロ様が心血を注いできたローマ共和政が、政治の形としても完成を見る時でしょうし、その政治を行い社会を構成する人々が徳を身につけている時でもあるしょう。そんな日が来ると宜しいのですが。

しかし、その日がいつくるのか、共和政は内乱を経て更なる共和政に進化するのではなく、今将に独裁政ひいては帝政に向かわんとしています。ローマは広がりながら周辺を飲み込み隷属民を造り、時と共にローマ市民化が進んではいますが、征服支配の速度が速く大きく、現実には共和政と逆向きへの慣性が働いているように思います。他方力（＝暴力）が異を制す世界拡張が続く間は、初めから平等な異の受け入れは、自分の方が力で負けることにもなりましょう。

現実は時に理不尽に進むということです。

被征服側には理不尽はもっと起ります。キケロ様だから私は早くから解放奴隷として頂き自由になることができたということです。

逆にだからこそ、キケロ様が言っておられる「歴史に学び、事の由って来るところを事実によって究明し、自然の理に法り判断し、事を実現することが道であり、矜持を以て事に処す」との口癖が、完成に向け繰り返されてゆくことが大事なのだと思います。自分の心構えとしてこうあるべきですが、そういう社会を実現するには、途方も無い時間が掛かるのかも知れません。

思想として「歴史に学び、事の由って来るところを事実によって究明し、自然の理に法り判断し、事を実現することが道であり、矜持を以て事に処す」が世々に伝わり少しでも多くの人々の心を捉え、実践が行なわれることを空の上から地の下から願い続けることが必要です。そのためにも、キケロ様の業績の少しでも多くが残され伝えられねばなりません。キケロ様の論考は、若い頃からの親友であるアティックス様が出版を引き受けています。私もそれをお手伝いし、また自身でも演説等の稿を手元に残しています。

そうした刊行物や書類が全たき形で引継がれてゆくことを心から願うものです。

なお、今回頂いた草稿の写しで、ルーフスを助けたとありますが、これは結果的にそうなったという意味で、キケロ様は修辞学に長け、演説に長けていますので時々逆説的・反語的表現を使われます。それが一般の人々の受け止めがそこまで行かず誤解されることがあります。

この件、キケロ様はファディウスの娘に事実を告げ、一緒にルーフスのところを訪れて、ファディウスの委託した思いを実現するよう糺しました。此の件についてはキケロ様の取れる手段がそれだけでしたので結果はこうなってしまいました。その意味で助けたという表現が問題である例にもなっています。

こうして私はトゥスクルムをあとにしましたが、キケロ様はその後執筆に集中し、驚異的な勢いで諸著作を完成させます。私には云々する力量はありませんが、『トゥスクルム荘対談集』は、倫理の一般向け教養書でありますが、長年言っておられた「ギリシャ由来の哲学にローマ市民権を与える」ことを、ギリシャ哲学を批判すべきところは批判し、哲学と弁論と政治が共存し、魂を慰めることを目標と設定することで、書の上に明確に実現されたものと思います。

そして、『神々の本性について』は、神々の存在、神々との関係、神々の捉え方について、哲学的理性に基づいて自主的信仰として位置づけて、盲信や非信仰を排しており、キケロ様らしい作と感じました。矜持を以て事に処すことを、死の恐怖から魂を解放する信仰に結びつけておられたことにも通じるものと存じました。

その後の著作としてはこの翌年書かれた、『善と悪の究極について』の系譜である『義務について』や『老年について』、『友情について』があります。しかし、この時の著作は『国家について』、『法律について』とあわせてキケロ哲学の集大成として、自他とも認めるものであったと思います。

確かにキケロ様は、このあと年明けに、カエサルが終身独裁官になって間もなく暗殺され、再び元老院の重鎮としてローマ共和政復活に向けて立ち上り、アントニウス・オクタウィアヌス・レピドゥスの新しい三頭独裁政

治に立ち向かわれました。しかし、カエサル暗殺が事後設計を持たず、既に強固に張り巡らされてしまったカエサル的世界を認識しておりましたので、身命を賭けあらゆる仕掛けを行なわれましたが、最早や反転の切っ先は届かぬであろうことは悟った上でのことだったと、私には感得されていました。

その意味でも、真の意味で最後として、これから来る時代や人々に祈りを籠めて贈った遺書は、あの時、私がトゥスクルムにお訪ねしお話させて頂いた頃、書かれた著作に詰まっているのだと思います。

なお、既に将来真相と違う認識や評価に繋がりそうな心配な動きがあります。

カティリーナ事件の評価です。

キケロ様と年齢もそう違わず、元老院議員でアフリカ総督を務め、カエサル暗殺事件後政界を引退すると、歴史著述に専念しておられたサルスティウス様が出された『カティリーナ戦記』が人口に膾炙してきています。

カティリーナが、性格が悪く自堕落で傍若無人と悪魔的存在であり、数々の悪業をなし権力の独占欲をもっていたこと、共和政転覆の謀反を企図したこと等は流石に同時代人ですから述べておられます。しかし、カエサルやポンペイウスが利用しようとした民衆及び下層階層の不満鬱積を衣にしたカティリーナを責め切れず、終章は、前六二年初反乱軍として敗戦を勇壮に戦ったカティリーナを悲劇のヒーロー化しているのです。

当然、キケロ様の弾劾演説後に起こる共和政転覆の差し迫った脅威とその処断という、事の本質を隠してしまっています。元々この分野で有名な方ですので、そのドラマ仕立ての叙述からみても将来、善悪が逆様になって演じられるようなことが危惧されます。

私も残された生ある間に、演説集を仕上げることやキケロ様の足跡を、失われずに継がれて行くよう、務めねばと思っております。

あの時、キケロ様の真情をお聞きし、こうして残した記録は、様々な記録が失われ断片になって行く時、繋ぎ合わせ等身大のキケロ様を描くことが容易になるよう、長命を維持し保存されることが望まれます。祈りを籠めて望みたいと思います。

（完）

忠山人日乗（にちじょう）

忠内正之

はじめに

まんじ誌、前百四十六号をもって「逃げる有楽斎」は完結した。色々苦労はしたが、比較的とり組み易い題材であったので何とか完了することが出来て、今はホッとしている。

過日の合評会の後で、千坂先輩からアドバイスを戴いた。「連載を終えてホッとしていては駄目ですよ。早速次のテーマに取り掛らなければ気が抜けてしまうから」という内容であった。

千坂先輩の秀れた文才については今更云う迄もないが、最も敬服させられるのは、真摯な取材への姿勢であると思う。

辺地であろうと隔地であろうと、古い史跡を踏破され、実証されているのである。旺盛な探究心と強靱な体力を保たれて居られる事は驚くばかりである。確か私とは同年齢であるとお聞きしている。

非力な自分ではあらゆる面で先輩に到底及びもつかないと諦めながらも自分なりの次のテーマを探しているが、中々（なかなか）見つからない。加えて今年の後半から持病に悩まされている。

かくては出稿を一時休ませてもらうことも考えたが、三戸岡先生のお薦めで平成十二年に入会させて戴き、以来毎回勤続の実績を中断するのも残念である。考えた結果、しばらくは身辺雑記で繋がせてもらうことにした。尚、「忠山人」とは偉友鯨游海氏が命名して下さった、私の雅号である。

中学の同窓会

今年（平成二十九年）春頃、旧制中学時代の友人から連絡があり。八月に母校の同窓会が催される。母校は来年創立百周年を迎える。また我々も殆どが今年米寿になる。（この地方ではお祝い事はすべて数え歳で行う）

同窓会は大村愛知県知事が、講演者として出席されるので盛り上がるだろう。会場は吉良温泉の「三河湾リゾートリンクス」というホテルである。そして同窓会終了後、旧同級生のみで集まり、ゆっくり語り合い、米寿を喜び合おうではないか。との誘いであった。

酷暑の時期でもあるし、体調も考え、少しの間ためらったが、思い切って参加することにした。故郷の吉良海岸で旧友たちと語り合えるのは、この上ない楽しみであり、また郷里の実家を守る九十一才になる実兄を見舞うチャンスだと思ったからである。

私の生地は愛知県幡豆郡吉田町富好新田と言った。過去形で言うのは、現在は合併して、西尾市吉良町富好新田に変っているから。

昭和三十年、吉田町は隣りの横須賀村を合併して吉良町となった。両者とも吉良上野介の領地であった。

更に、吉良町は他の町村と共に、平成二十三年四月西尾市と合併した。由緒のある幡豆郡は消えて、人口十七万人の田園都市西尾市が誕生している。

吉良家断絶後、吉良地区は一時天領となったり、相給地となったりしたが、江戸時代後半から大給松平六万石の統治下となった。

気候が良く、産物も豊富で、苛斂誅求を受けることも無かった故か、住民は温厚で至ってのんびりした土地であった。但し臨海地区なので昔から自然災害には相当悩まされた歴史がある。

この地区の中心は、何と云っても西尾町（市制になったのは昭和二十八年）であった。六万石の城下町であり東海道線の延伸を嫌ったため、時代発展に遅れたものの小京都の風情を残していた。そして私等郡部の田舎者にとって西尾は憧れの都会であった。城があり、小デパートもあり、病院あり、本屋も中心地に二軒もあった。また西尾中学が存在した。当時幡豆郡唯一の県立中学校であった。

昭和十八年三月、県立西尾中学を受験した。試験は戦況酣の時期であり、ペーパーテストは無く、口頭試問四日、身体検査一日計五日間で一週間後に発表があった。

幸い小学校同クラスの友人四名と共に合格した。聞くところによれば、志望者は二百五十名あり、合格者は百六十五名とのことで、百名近くが落第したという。

決して難関だったとは思わないが、憧れの中学生となって文句なしに嬉しかった。

喜び勇んで初登校したのであるが、私を面喰らわせる

事態が待っていた。

初日にクラス編成があり、東・中・西の各組五十五名に振分けされた。驚くことに、私は全く予期しなかった、中組の級長に任命されたのである。

ということは、合格者百六十五名中、二番の成績で合格したことになるという。

成績一番の者が東組の級長、二番が中組の級長、三番が西組の級長となり、百六十五名の生徒が成績順に夫々三組に振分け配置される仕組になっていた。

内申書の成績は上で、体操にも自信はあったが、まさか面接でも失敗せず、全体の中で二番の成績で入ったことは露信じられなかった。

後で解ったことだが、三日目の面接で「撃ちてし止まん」の標語の意味や出典等を詳しく質問され、すべてスラスラ解答したことで評価されたらしい。この言葉の出典は神武天皇の御東征の時の歌であり、私はこの歌をよく覚えていた。

みつみつし久米の子等が垣本に植えしはじかみ口ひびく我は忘れじ撃ちてし止まん

歌の中から取り上げられた「撃ちてし止まん」の言葉が戦意昂揚に利用され、当時のはやり言葉となっていたのである。

当時の校長先生は帝大出のエリートであったが、強力な軍国主義者に偏向したかの如く、本館の壁に大きく「撃ちてし止まん」とペンキ書きをして掲げ、本校のモットーとしていた。

従って受験生の誰しも口頭試問の問題として、とり上げられるのは必須だと考えて、相応の準備をしていたものと思うが、私ほど詳しく覚えていた者は居なかった様である。しかも私は問われる侭に元歌を先生の前で諳んじてみせた。

このことで私の面接の点数がグンと上ったらしい。元来私は好奇心の強い方であり、受験と全く関係なく、家庭雑誌に載った解説記事をよく読んでいただけであった。

その結果級長に任ぜられることになったがこの田舎者が任を全う出来るか自信が無かった。当時の級長は、軍事教練、武道、体操等リーダーシップを要する立場であった。

結果として級長を一年間、二年からは委員制となり、委員を四年間勤めたのである。

私は最初の一年間で自分の性格が鍛えられたと思っている。田舎町で育ったポット出の引っ込み思案で、内気な性格だったものが、突然級長を命ぜられ、腕白盛りの級友たちをコントロールするのだから大いに苦労した。本来級長は仲間が多くいる、西尾町出身者がなった方が

自然だっただろうと思った。しかしいじめを意識したことは全く無かった。自分でも驚くくらい性格が変わったのだと思う。

二年生の冬、国の方針により動員令が発令され、学校の後方に流れる矢作川の対岸に立地するベアリング工場へ動員された。

既に農家への勤労奉仕は体験済みであったが軍需工場への動員は初体験であった。

動員の発令と相前後して二度も地震災害に襲われた。このため工場は潰滅状態となり、正常に復する迄かなり時間がかかった。

学業を離れての工場勤務は意外に楽しかった。私は数人の同僚と検査班勤務となり、マイクロメーターやインジゲーター等精密測定器具を使用しての実務に興味がわき眞剣にとり組んだ。また実務を覚える興味と共に、この工場に勤める職員たちとの交流も面白かった。

この工場は東京蒲田にあったベアリング会社が工場疎開したもので、職員たちは都会的センスを持っていた。

機械を操りながら「東京ラプソディ」や「丘を越えて」など当時の我々には耳新しい歌をきかせてくれる職長さんもいた。

余談だが、十数年後私は銀行の蒲田支店に勤務していた。ベアリング工場が懐かしくて、工場跡を訪ねて見たが確認出来なかった。松竹キネマの跡地は認められたのだが。

同社は、昭和二十四年九月不況により解散したのだという。

工場動員期間は比較的短期に終った。空襲や機銃掃射等危険に直面することも度々あったが、犠牲者を出すことなく終戦を迎えた。

終戦時は中学三年生であった。敗戦のショックは大きかったものの、幼稚だった故か立直りは早かった。そして卒業迄の二年余は楽しい学生生活を送ることが出来た。

しかし教師達の転向ぶりはひどかった。

自分たちも一身を陛下に捧げるつもりのパリパリの軍国少年であったが、早々とナンパ学生に変貌したのだから之を責める資格は無いと思う。だが教師ともあろうものが、信念を変えた説明や一片の反省の言葉もないままに、辞書を抽いて「民主主義とは」とか「自由主義とは」とかを滔々と講釈するのには怒りを感じた。なぜなら工場動員中、班長でもあったので、ある提案をしたところ「お前は自由主義者だ、非国民だ」と罵られ、強い往復ビンタをその教師から受けていたからである。

私は今迄の人生で殴られたのはこの時が、初めの終りである。

中学卒業ともなると、新旧制度の切換があり、卒業するもの、新制高校三年に進むもの、進学するもの、三通りに分かれた。

私の進学上京の経緯については、以前にも述べているので省かせていただくが、昭和二十三年三月、五年間同クラスで馴染んだ皆と別れて上京した。

以来、五年から十年くらいの間隔で同級会は開催されており、私は殆ど出席している。年を追う毎に出席者が減ってきて、ここ二十年間、同級会は開かれぬままであった。

そして母校の同窓会に便乗して、久方ぶりに開く今回の同級会となった。

一次会の全体同窓会は四百人余の参加があり、大村愛知県知事（本校30回卒業生）のリードで「青春時代」を大合唱して盛大にお開きとなった。

二次会の同級会はその後ホテルの部屋で始まった。出席者は全員で七名と淋しかった。

中学入学時五十五名であったものが、現在連絡可能者は二十名、内数名が病臥中であると聞けば、本日七名の出席は上々だとも云える。

ここで出席メンバーの為人（ひととなり）を夫々回想してみたい。

藤井さんは

幹事役の藤井さんは教育者であった。家庭の事情で旧制中学で終え、しばらく代用教員として一家を支えていたが、一念発起して学芸大学に入り教師となった。小・中学校ならば、校長になれたのに更に史学を究めたくて高校の教師を選んだため教頭止まりとなった。学問や教育の場に学園などあってはならないものと思う。藤井さんはめげずに最後は母校西尾高校の教頭となり教師生活を終えた。誠に頭の下がる努力の人である。

青山さんは

上京組の仲間は五人居たのだが、亡くなる人が続き今や彼と私の二人だけとなった。私同様東京から参加した。

彼は理数科が得意であった。学資援助をするからと進学を薦（すす）める向きもあったが、之を辞退して、高卒で地元の電々公社に入った。しかし向学の念止み難く、休暇を利用して上京、本社の人事課長に直訴して東京への転勤を果たしたという、当時の電々では、隔地転勤は不可能だったという。

上京後勤務の傍ら大学の二部に学んで実力を更に高めた。その後電々の登竜門と云われる中央学園に学び着実に出世の道を歩んだ。退職時は大きな支社の副支社長であった。近年その功績を嘉（よみ）みされ、叙勲を受けたと聞いている。

私にとって大切な在京の友人である。

山崎さんは
高校卒で家業である地元の建設会社を継いだ。業績を延ばし当地一流のゼネコンに迄格上げした。社長、会長を勤めた後、現在も現役の相談役として重きをなしている。かつては同窓会の副会長を勤めたこともある。
彼については忘れ難い在学中の事件がある。
昭和二十年、工場動員中のことである。旋盤機械を整備中過って右手を巻き込まれ大怪我をしてしまったのである。私は丁度その場に居合わせていたのだが、彼は少しも動揺せず平然と耐えていたのには驚いた。
敗戦を知ったのは入院中だったとい云うからかなり重傷だった筈である。
復学後、我々と芝居をやったり、ピアノを弾いたり、全く不自由さを感じさせなかった。社会人になってからも、事業を盛り上げると共に多彩な趣味をもち、ゴルフも堪能で腕前はシングルだと聞いている。
思えば、指を失う大きな事故を従容として受け入れ泣き事一つ言わなかった彼の根性の強さは、昔も今も我々より数段上だったのだと理解した。

牛山さんは
吉田小学校の同級生で、互いに自宅を行き来した幼馴染であった。小学三年生の時、父親の転勤で転校してしまった。別れが辛かった。
西尾市内に定住しており、世話役等快く引き受けてくれる得難い人物である。
「無事是貴人」とはこの様な人を云うのであろうか。

榊原さんは
中学卒業後、岐阜薬大に入り、卒業後薬剤士となり東京田辺製薬に入社した。時たま東京で往き来する間柄であったが、数年後業界の再編成により外資系製薬会社に移って定着したという。
中学生時代英語が得意で、彼の発音はいつも教師に誉められていた。戦前家族はアメリカに住んでいたらしい。その影響を受けていたのであろうか。
現在は神戸の宝塚に住んでおり、遠路かけつけて来た。
この四月、脊柱管狭窄症を手術したばかりという。手術が成功したといっても、遠出は少し無茶ではないかと危ぶんだが、懐旧の念あつく杖をついての参加であった。私と同様このホテルで一泊することになっている。
榊原さんは卒業後、同級会に初めて出席したというので、皆とは七十年ぶりの再会だと喜んだ。
同級生七人の語り合いは延々と続いた。学校時代の話、工場動員の話、旧友や先生の消息、はては家族の話、病気の話等々尽きることなかった。唯々懐かしい話題が多かったが、初めて聞く事柄もあった。

はからずも中学に入学して同クラスとなり再会を喜んだものだ。その後五年間一緒に学んだ。
牛山さんは、旧制中学を卒業して、中部電力に入社して堅実なサラリーマンの道を歩んだ。会社でも重用され、本社の経理部に属していた。私の勤めていた銀行に親近感をもって、特に便宜を図ってくれたとのことである。誠に友人とは有難いものだと感謝した。
会社を定年後、大きな手術を受けたというが、今はすっかり元気である。能舞、謡、絵画等玄人はだしの域に達しているという。
「健康の秘訣は」と聞くと、一日二万歩の散歩を欠かさないということである。術後医師のアドバイスを忠実に守った結果、今では人も羨む健康体を維持しているという。
勤勉、誠実な彼の人間性がよく窺われる。

澤田さんは
高校卒で、地元名鉄に入社して定年まで全うされた。小柄だが健康な人である。
在学中は一般の勉強のみならず、自然科学等にも興味をもち、クラス一番の博識家であった。人と争うこともなく温厚な性格から皆から好かれた。
名鉄でもかなり信頼され監理部門を担当していたと聞いている。
前にふれた、軍国主義カチカチだった校長先生はその後愛知県の教育長に栄進されたという。直後、西高を訪問され講演された。その際、開口一番「自分は誤っていた。申訳なかった」と率直に詫びたということである。
また、先生は西尾中学の前任は安城高女の校長であった。たまたま昔の教え子である〝新美南吉〟が困窮していたのを聞いて、安城高女の教師に採用したという、新美は生活が安定したので「ゴン狐」他の名作童話を創作し世に出ることが出来たという話も出た。
憎らしい校長だと悪くばかり考えていたのだが、本質は温かい人間性の持主であったのだと理解したのである。思えば時流に逆らうことの出来なかった正直な人だったのであろう。私の二番での合格もこの先生の突拍子もない、日本一の落書き標語の故であったと気が付き苦笑いをした次第である。
名残りは尽きないが、母校百周年となる来年は更に盛大に集まろうと約束して散会した。来年の健康や如何、鬼が嗤っているかも知れないのに。
翌朝、ホテルの窓を開けると、丁度朝日が渥美半島の山の端から昇るところであった。高台に立つホテルから海を臨むと百八十度のパノラマ的景観である。渡り蟹の形に似て、左足が渥美半島、右足が知多半島、ホテルのある吉良海岸は、本体の目の位置に当たる。

一幅の名画を見る様な想いで、故郷国定公園三河湾の蒼い海に接して、心洗われる心地がした。この地には神代や万葉の頃からの故事来歴が残っており、一段と深みを増している。命ある限り、今後も二度、三度と訪ねたいと願うほど美しく厳かな海の風景であった。

朝食は展望レストランで、榊原さんと四方山話を交わしながら楽しく戴いた。バイキングとしては種類も多く、味も良かったが、地魚が少なかったのは残念であった。この様なホテルでは望むべくもないか。

腰痛の榊原さんを甥の車で、名鉄吉良吉田駅まで送った。別れ際、「中学生の頃、君は彼女を紹介すると約束しながら、終に実行してくれなかったネ」と私を詰った。当時マドンナだった彼女は、私の嫂の親しい下級生であったが、短大卒業後、お嫁に行って今は少し離れた町で大きなガソリンスタンドを経営する実業家の妻君になったと聞いている。実際は紹介など出来る筈もなかったのだ。私はただ謝るだけであった。

榊原さんは杖をたよりに元気に明るく「また会おうぜ」といって電車に乗り手を振って別れた。

彼を送ったのち、私は甥と共に実家に兄を訪ねた。

兄を見舞う

兄は昭和元年生まれであるから、私とは四つ違いである。最近物忘れがひどくなったと聞くが、未だ車の運転を自在にこなしている。心配なので免許証を返納すべく、私からも兄を説得して欲しいとの依頼が甥から届いていた。

対面して話をして見ても何等異常は感じられなかった。唯、精密検査の結果では、記憶を司る脳の「海馬」が少し損傷しているのが解ったという。

甥や姪の熱心な説得と、私の助言も功を奏して、かなり頑固だった兄もやっと了解して車を運転することを諦めた。農作業の折には三輪車を使用することで了承した。

前にも述べたが、戦争末期の震災で母屋が全壊してしまい、再建に力を注ぐために家計は困難であった。戦前は養蚕をも兼業していたので、大きな母屋に執着があり、インフレとも相俟って建築費が嵩んだ。

従って、私の上京は全く歓迎されていなかった。その中で、兄は自分の進学は諦め、農業を継ぐから弟の希望は叶えてやって欲しいと、応援してくれたのであった。

農作業、塩田等家業を守りながら、多才多芸な趣味人で今日迄元気に働いて来た。

不幸にして恋愛結婚で一緒になった嫂を二十年前に病気で失い、独り暮らしとなったが、コーヒーを呑みに来る友人達も多くいて、余生を楽しんでいる。

米作は農協に全委任したので、今は野菜作りを細々と続けている。時たまその成果を送ってくれる。今年もそろそろ里芋が届く頃である。

話が纏まったので、私が希望して墓参りに出た。寺は「正龍寺」といって古い寺である。大名「松井松平」の墓地もある。しかし松井家からのお布施は戦後ストップしたままという。

この寺には私の実家を含め渡辺一族の墓が連ってある。（私は旧姓渡辺といった）元禄十年上野介が富好新田を干拓した時、二軒の渡辺が入殖したのが始まりと聞くが、今では十数軒に殖えて繁栄している。

墓参を済ませホッと気楽になった。そこで私から「何かご馳走するよ」と言うと、「鰻が良い」というので隣町の有名だという、お店へ向かった。

店は満員の盛況で一時間待ちだという。この様な田舎の店で待たされるのかと思ったが、予約して一旦家に帰り休息することにした。何かにつけて車で往き来する車社会の田舎は却って便利だと感じた。それにつけても愛車を手放す兄は気の毒だと同情した。

待たされた後の皆は、蒲焼きを旨そうに平げた。私はどうにも旨いとは思えなかった。

地元一色町の鰻なので素材は悪かろう筈はないのだが、問題はその焼き方である。

この地方の蒲焼きでは、一切蒸さず、ベタベタとたれと味醂（みりん）とで何度も焼くため、固まってしまい風味に乏しい。元来私は鰻が大好物であるがこの鰻はいただけない。皆は大満足で喜んだ。食文化の違いを再認識したのだが私も幼少時はこの焼方が好きだったのであろうか？尋ねたくても母はもうこの世には居ない。

母屋へ帰り、兄と二人で佛壇に手を合わせたあと、奥座敷の畳に寝転んで昔話を楽しんだ。

以前の兄と少しも変った様子ないと当初はそう思ったが、少し無口になったのかなと不安に感じた。

お互いが元気なうちに、これからは度々顔見せに来なければならないと心に誓った。

東京までの帰り路は、名鉄の吉良吉田駅で蒲郡線に乗り終点まで。蒲郡から在来線で豊橋へ出る。そこで漸く東海道新幹線に乗る。待ち時間を入れて約四時間の旅である。

私が初めて上京した頃は八時間もかかった。しかも国鉄の切符はお米と交換でやっと手に入った。今昔の感懐に浸りながら、夜七時過ぎに帰宅した。どっと疲れが出たが、誠に有意義な二日間の旅であった。

終

風の泉

葵　州　月

プロローグ

喜寿を迎えて、ひとり旅。

いつまでも未熟な自分を恥じて旅に出る。

自分探しの旅と洒落てみた。

いま岡山市の中心部を北から南へ流れる旭川の葛城橋にわたしは立っている。

「はや五十四年か・・・」指を折っても無駄なことだ。

橋の欄干に指を立てた。

過した学生時代の懐かしい道を辿り、ここまで歩いて来たが約半世紀を超えてみると、失った時空は虚無であるが、街のその変貌は著しく、わたしを少し落胆させはしたが、岡山平野を割って流れる旭川の風景に出合ってみると、昔そのままの名残を留めていて誠にうれしくなったのである。

いまこの老いた顔をやさしい春の風がそよそよと撫でてゆく。「どこから吹いて来るのだろうか」と、旭川の川面に眼を向けて、流れゆく水のせせらぎに耳を傾け、リズミカルに踊りひかる波にそっと開いてみるのである。

そして「この風はどこまで行くのだろうか」岡山烏城の天守閣に顔を向けると、青い空に漂う真綿のような白い雲に声を潜め呼びかけてみる。

ふと気が付けばわたしの胸の中にも同じように吹いてくる風があるではないか。

この風は「何処から吹いて来るのだろうか。」いまも次から次へと学生時代の光景が浮かんでは消えてわたしの胸を疼かせるのだった。まるで風に運ばれて来ては忽ち去ってゆくように。

胸から腹中、臍下丹田へと意識を集中してゆくと、辿れば辿るほど闇のように深くて果てしない世界が広がっているが。

この闇のどこかに無尽蔵に秘められた美しい風の根源があるに違いない。思えば今、ようやくその謎が解けたような気がする。

その根源の表面は泉のように無垢で穏やかなのだが、わたしのゆれる心に反応して泉を揺らせて風を生むのだろうか。いや、どこかで生まれた情念の風が泉を波立たせているのであろうか。

泉で生まれたその風は、いまも懐かしい友や忘れえぬ人々、恋の香りや旋律を伴い雅な情景をわたしに運んでくる。

それらがまるで舞台劇を見ているようにわたしを感動させ、旭川の水面の上で華麗に変転したのを見ると、思わず、ああっ！と声をあげてしまった・・・。

やがて宴の後のような寂しさが感傷をもたらし、わたしの涙腺を刺激してくる、そして哀愁の涙を誘うのだ。

ひと粒、ふた粒～三粒と、湧いてくる涙は旭川の水面にこぼれ落ち、零れた涙は清流にのみ込まれて渾沌の世界へと旅立つ。やがて涙を溶かした水は雲となって天空へ舞いあがり悠久の世界を知ることだろう。

流れゆくせせらぎの波の音や飛び交う鳥たちの羽音と鳴き声、学生たちが漕ぎ行く漕艇のオールの水を切る音、コックスの掛声、女子学生の嬌声らが川風に運ばれ谺のように共鳴している。

途端に意識は現実へ引き戻される。見るとその風景はわたし達学生時代とまったく同じ光景ではないか。

今は昔、岡山で過ごした学生生活、その折々の光景が混ざり合ってわたしの中で弾ける。ああ、どうしょう！

いま邯鄲の夢枕で観るようにあれこれ物語らなければならない時がきたのだろうか。衝動が波のように起こり胸を打つ。

お金や物は不足していても学生生活を謳歌し、友情を温め、わたし達が数々巻起こした青春時代の風、やがて夢いっぱい提げて実社会へ旅立ったわたしや友だちが実社会でさらに巻き起こした風雲と波紋、進撃ラッパを吹き鳴らした熱情、こうしたエネルギーをバネにして活動し、また苦闘してきた活劇は、まさしくわたし達の奏でる交響曲なのではなかろうか。

出会い

人生は人との出会いにより始まってゆく。

昭和三十五年四月、時の首相は岸信介。山口県出身（現在の安倍首相は岸氏の孫にあたる）

当時、パソコンはない。「ビルゲーツは一九五五年生れで八才」

スマホも当然ない。

通信手段はアナログの黒電話と公衆電話だけだ。「ポケベルが出たのはもう少し後でサラリーマンを悩ませ、厭われる」

主なメディアはラジオ、新聞と白黒テレビだ。
「テレビはこの年九月からカラーテレビの本格放送が始まった」
当時、メディアは米国との新安保条約の是非を論じて、世情は姦しく、東京を発信地として各地で赤旗を振って反安保を掲げた学生のデモは、たちまち岡山大学へも波及してきた。やがて全学連のオルグ活動を受けて一部の学生が暴走し、一般の学生や寮生が騒擾に巻き込まれ、死傷者までだしてゆくのであるが、ここでは語らない。

岡山大学キャンパス第七号館、南北に走る構内私道に面し古びた木造平屋建て、その棟の端に岡山大学事務部学生課があった。
春の昼下がり、ひとりの学生服姿の男が自転車を漕いできた。ギィーとブレーキをかけて金属の摩擦音を響かせながら事務課のある棟で自転車を降りる。
そして学生課の窓口へやってきた。ここから、この物語は始まるのである。
岡山大学のキャンパスはとても広い。東西に長く、構内にバス停が三か所、北海道大学に次ぐ広さだと、当時は言われていたが、今は分からない。したがって学生たちは効率よくキャンパスを移動するために自転車が不可欠であった。

ひとりの新入生、その学生の名前は崎口茂という。
学生服の詰襟と第一牡丹をはずしてアルバイトを斡旋している学生課入口をガラガラと横にガラス戸を押し広げて入ってきた。
午後の西日が窓ガラス越しに彼の顔を照らしてまぶしいのか濃い眉毛を顰める。
そして十五～六名の学生が掲示された求人のビラをそれぞれに眺めていたとき、
背中を意識的にピンと伸ばした。
「いいバイトはあるかいのう・・・」
険しい目でまわりを窺いながら、山口弁で、声高に言ったから一瞬まわりが固まったように静まった。突然、傲岸な男が来たなと周りの学生たちは思ったに違いない。警戒し彼の次の言動に注目しながら、本能的に避けて無関係を装い引いている。
彼は注目を浴びることは大好きで、自尊心が疼くのだ。自己を奮い立たせ、鼓舞する剣道の気合とも一緒で、大声をあげてその場の空気を自己のものとする精神と同じだった。幼少のころから人見知りはしない。誰とでも接して相手の力量を見定めたいという習性があった。
（男はどこにいても自分の存在価値を主張すべし、まずここから岡山でのバイト探しが出発の第一歩じゃ。皆の衆！オレを恐れることはないぞ、来るものは拒まず、去る者は追わずの生き方じゃ）
と、内心思っている。
山口県、萩市出身。身長一八〇、筋肉質。
松陰先生を信奉。論語を齧り、特に孟子を愛読する。
"苦をもってこれを楽しむ"これを座右の銘としていた。

掲示板に貼られた一枚の求人のビラの前で足を止めた。崎口はしばらく注視し読み込むと、
「やいやい、これがええかのう！」
崎口に接してひとり立ってジャンパー姿の学生が同じ求人ビラを眺めている。彼の名は中田正志郎と言う。いきなり大きな声が飛んで来たから、彼は反射的に反対側を向いて相手がいるのか確認したのだが自分以外に誰もいない。小太り、丸い目、頭は一時期流行った慎太郎刈り。そのまるい目は宙を泳いでいたがジャンパーに両手を突っ込んだまま、崎口を無視した。
彼も新入生、今日初めてバイト探しに来たのだ。
「ねえ、君！この仕事は良かろうかのう」
再度、崎口は彼の反応を求めるように言う。今度は仕方なくボソリと答えた。
「キツイ仕事ばい・・・」
膝をゆすりながら胸のポケットに手を入れて煙草を探る。
「君は博多から来たんかね」
「福岡たい・・・」博多と福岡言葉がどう違うのかわからない。同じことだろがと、崎口は思ったが、言葉を飲み込んだ。
中田は胸のポケットから"いこい"を取り出し一本口に咥えてマッチを擦る。
「おれも吸うから、すまんな」崎口も"しんせい"を取り出すと、手刀を切って咥えたタバコをそのマッチの火に近寄せると器用に煙草に火を点けた
「バイトも男の仕事はきついのがあたりまえじゃろうが、そりゃ、家庭教師や、ラクチンな仕事もあろうがの、そんなのはオナゴ（女子）の仕事じゃあね。」
口から吐き出した煙草の煙が揺らぎ、警戒をして彼らを取り巻いていた学生達から苦笑が漏れてきた。二人の方言のやり取りが可笑しいのか、崎口の「女子」という乱暴な言葉を批判してのものか、わからない。この時期、男尊女卑に関する言葉や思想はまだ消えてはいない。戦後は男女平等であることを教師から教育を受けていたとはいえ九州人や長州人にこの言葉「女子」はなんら違和感はなかった。
崎口は笑いを無視して続ける。
「時給は良いほうかのう、この会社は・・・」他の張り紙と比較している。
崎口は反応した無口な中田について、「この男は無粋

だが苦労人で気骨がありそうだ」と感じ始めていた。近くの窓口にあった灰皿を見つけて手に取って煙草をもみ消すと、

「どうせこの仕事は一般の学生には好かれんじゃやろうて、応募すればオーケーになろうがの」中田に灰皿を渡す。

「重労働だし朝五時からじゃあな。引越しのバイトよりキツイと思うちょる。ドライアイスちゅうものを知っておられますかいの」

「・・・知らんとね」

崎口も化学で習った記憶はあるのだが

「そうか。おれも知っちょらん。近頃は氷より、冷たいものが出来たんじゃのう。」と、中田に合わした。当時、日常見たこともない。

「こんな物がこの世に生まれたということはだ、男子たるもの、これが天下国家のためになる仕事だと思わんかね。女子や青臭いインテリには出来ませんからのう」

労働を賛美して演説調子。

「どうじゃろうか、このビラにはマイナス七〇度と書いてありますがの、この氷点下は初体験じゃ。新しく生まれた産物を見たいと思わんかい。面白そうじゃ。やりましせんかいね、いっしょに！」

周りからもう一人くらいは応募する者がいないかと思い、顔を廻らしてみたが、反応はない。崎口はこれだけ言えば同調してくるものが一人くらいは出てくるのではないかと思っていたのだが。

ジャンパー姿の中田に、どうだ、と顎を突きだす。

「まあな・・まあやってもよか。ボクはな・・・」中田は苦笑しながらうなずいた。「当然やるつもりだから、この求人の貼紙の前にいたのだ」と、言う言葉は省略した。

崎口の虚勢には内心閉口していたのだが、中田は次第に、この男に不思議な人間的魅力も感はじめていたのだった。

崎口茂と中田正志郎との出会いはこのアルバイトから始まった。これが機縁となって、二人の交友関係が現在に至るまで、続くことになるのだが、この時はわかるはずがない。

中田は福岡県筑後市の出身。兄弟が多く経済的余裕がなかったので一年間博多で広告会社のマーケティング調査員の仕事をしていたが姉が嫁いだのを節目に、父母に「仕送りはいらんから」と、改めて入学試験に挑戦し見事に合格、岡山に来たのだった。その最初のアルバイトがこのドライアイスブロックの運搬だったのだ。学業と両立させるためには、早朝で、少しでも時給の良い仕事が最適だと判断しているところへ崎口が現れて、内心このような仲間ができておおいに心強かったのである。

この頃、国立の大学へ入学してくる学生たちの中には、彼らと同様に経済的に恵まれていない学生は多かった。

見方を変えれば日本自体が未だ貧乏だった。敗戦処理は順調ではあったが、まだ大半の国民の生活は苦しかったし敗戦国の自虐感も消え失せていないし、当分は仕方がないと大概の国民も諦感していたのではあるまいか。

「奨学金以外の仕送りは皆無だ」という中田、崎口と同じ学生もかなりいた。当時は未だ大学へ進学できない者も多かったから、決して苦学を不幸だとは思っていなかった。むしろ崎口のように大学に入学と同時に、自己を奮い立たせて、バイトを通じてあらゆる体験ができることは幸せだと思っていたし事実、この体験がバネになり、やがて崎口茂は日本経済界に衝撃を与えた繊維企業の改革に身を置いて業界で大活躍をするのである。

岡山は一年を通して気候温暖な土地柄である。春になると岡山大学キャンパスの北に面した半田山が山裾から頂上にかけて萌黄色に染まってゆく景色は新入学生の心を癒してくれる。またキャンパスには数多くの樹木、草植物が育ち、繁り、四季にわたって日々日常的に自然を鑑賞できるし草花に触れて季節を味わうことができ雅なこころを養うことが出来たのである。

特に新学期の春には各種のサクラ、ツツジに椿、山茶花が赤や白、ピンク、色とりどりの花をいたる所で次から次へと咲かせるし、楠木や椎の木の大木は新芽を吹いて限りなく逞しく美しかった。

「中田くんと崎口くん、岡山興行の運送現場希望だね？キツイ仕事だけど大丈夫かな」

学生課の事務官が二人の応募を受け付けた。

「はい・・やりますちゃ」

崎口が断言する。

「やってみますか。あれは、すぐに辞めて帰ってくる学生が多くてね。かなり重労働らしいよ」

事務官は一年生の二人を止めさせたいのかなと、中田は感じたのだろうか、

「やってみたいとね」

ぼそっと中田が言う。

「大丈夫ちゃ、あれは男の仕事じゃからのう、辞めた連中は男じゃなかったんじゃろかハッ、ハッ、ハー」中田も苦笑しながら事務官の反応を待っていた。

事務官は黙って書類を拡げて中田、崎口と交互に確認して紹介状を渡した。

崎口茂が岡山大学へ入学するに至った経緯について少し触れておこう。

彼は萩高校を卒業すると、亡き父の後を継ぐために船

乗りになろうと広島の商船大学へ入学した。船乗りになる体力訓練は好きなのだが何か物足りなさを払拭できないまま日々学生生活を送っていた。

この不満は日増しに膨らんでくる。日本の産業界が成長するに従い船の需要は益々高まり海運業は成長してゆくには違いないが、これはあくまで産業界に追従した海運業で、日本の根幹となり原動力となるものではない。船自体には生産性はないし、独自の販売力もない、ただ積み荷のための空間を売るだけなのだ。「船乗りが自分の一生の仕事で良いのか」

その仕事の正悪ではない。船乗りも社会的に大切な仕事ではあるが、自分に適したものか否か、心奥で逡巡し、何か他にあるのではなかろうか悩んでいた。自分が将来のために本質的に学ぶものは何だろうか。

幾夜もベッドで呻吟しているうちにその年の夏休みがきたのだった。

昨夜遅く帰省してきたのだが、朝起きても口数が少ない。いつもはラッパを吹くように、お腹の声で法螺を聴かせる弟が、元気がない。夕方もぼんやりと友人にも会わず口数少なく、落胆した様子で悩んでいる弟の姿に気づいたのは姉の文江だった。台所で魚を捌きながら「どうしたのよ、朝からうっとうしい顔して」問いただされて茂は現状の心境を正直に話した。

「そんなに嫌な学校なら辞めた方がいいわよ。本気になれない勉強なら男子一生を賭けた仕事に結びつくはずがないわ。」飯台に盛合せた刺身をおいた。

涼しい夕風がチンチン、チンと風鈴を鳴らした。

「さあ、ご飯にしましょう。お母さん」

姉の文江は東京学芸大学三年生。茂より先に帰省して母が営む魚屋を手伝っている。

姉弟の遣り取りを聴いていた母が、竈からお櫃にご飯を移して運んできた。

久しぶりにそろった家族の団欒だった。

「勿体ないね。折角、難しい学校へ入れたんじゃけぇねェ」茂の横でご飯を装いながら母のキヌは呟くように言った。

「お母さん！よ～く考えてね。」文江は蚊取り線香を縁台に移して、

「茂ちゃんを、お父さんの二の舞いにしたらいけないわよ。ずっと以前から考えていたの。私は茂ちゃんを船に乗せるのは反対だったわ。船乗りは〝土佐の衆〟にまかせておけばいいのよ。」

姉のジョークに土佐の坂本龍馬が聞いたらどう思うだろう。その時、茂はハッとした。そうだ！姉はあの時から船乗りが大嫌いになっていたのだ。萩の沖に広がる日本海を見るのも嫌だと言っていた。

事故は茂が中学一年生の冬だった。漁労長の父が乗っていた漁船が突然日本海沿岸に発生した低気圧に巻き込まれて、遭難した。あの夜を峻烈に思い起していた。

姉の心中には今も荒れる海へ行かせた船会社への怨嗟もあるのだろう。

「海の神様、天道に逆らうたらいけないのよ。」

姉は運命論者ではないが、何を言おうとしているのか、言葉を待った。

「後悔先に立たず。人生一度きりよ。父さんも分かって呉れるわよ。茂ちゃん！黙っていないで、はっきりしなさい。男でしょうに！」

興奮してきたのだ。父の不慮の死を思い出して。

母のキヌは黙って仏壇の前に行くと蝋燭に火をつけた。文江は飯台に座ったままで仏壇に向かって合掌し

「今の道が間違っていたと思ったら、戻って出直せばいいのよ、父さんも生きていたら同じことを言うわ。ね、そうでしょう？」

文江が仏壇の父の写真に向かって呼びかけると母が茂を振り向いて言った。

「茂も、よう悩んだんじゃろうから、文江ちゃん、もう言わんでええがね」キヌは

「あんたらの人生のほうが長いからネ・・好きにしたらよろしいよ」

文江が空になっていた茂の湯呑を引き寄せて急須のお茶を注いだ。

「一年棒に降ったのが無駄だという人もあるでしょうけど。長い人生から見ればね、ほんのこれぽっちだわ！」

文江は親指と人指し指の先を見せて示し、「日本人があの太平洋戦争で捨てた時間と失った財産を思えば、茂ちゃんの一年や二年は何でもない、」と様々語るのだった。

茂は姉の言葉を聴いているうちに郷土の志士、高杉晋作や久坂玄端を思い起こし松陰先生の妹の文さんと姉とを思い重ねていた。

この時、茂の揺れていた心に光がさした。そして決断した。

一度は負けてしもうたが、二度目は負けられんのう。

今度こそ、性根入れて、学び直して天下国家のために有益な仕事を見つけなければならぬ。そのためには日本の仕組みと法律を学ぶべし。

このときから崎口茂は長州人としてのプライドを持った一家言男子に変わって行ったのかもしれない。

そして岡山大学の法文学部法学科に入学、北津寮へ入寮したのだった。

翌日から二人はバイト先の岡山興行の指定された現場へ向かう。早朝四時。岡山の春とはいえ朝は未だ寒い。

暁天を背にして自転車を漕いで二人は白い息を吐きながら、現場事務所へ向かって行った。

北津賓を出て三十分以内の道程は昨日、学生課を出ると二人は自転車で山陽本線、岡山駅の構内の片隅にあった仮小屋のような岡山興行現場事務所、所長飛山勝男に学生課の紹介状を持って、面接に行ったのだった。柔和な笑みを浮かべた飛山は

「仕事はキツイがね中田君、崎口君。あなた方にとってつらい仕事だが、これも将来の肥やしになると思ってさ、ケガをしないようにやるさ。」

「よろしくお願いします！所長さん」

崎口が言い、二人は頭を下げる。

「カントクでいいよ。現場監督なんだから」

「カントクしゃん・・どげん仕事じゃろうか」

貧乏ゆすりの田中がかすれた声を出した。

「こまかことが知りたいと」

「中田君か、これから説明をするつもりです。こちらにきてください。」

小屋の隅の黒板まで移る。

「田中君は九州からですね・・ここの現場にもいますよ。えーとね。二人いますよ。キミとはタイプが違いますが。熊みたいな野郎ですよ。フフフ」白笑して白墨をもつと黒板に、Ｎａ２Ｃｏ２（個体二酸化炭素）と書いて

「国立の大学生さんなら当然これがわかるでしょう、化学も試験科目だから。ドライアイスのことですよね。主にこのドライアイスのブロックが筵俵に詰めてあるのを貨車からトラックへ運ぶ仕事です。一番列車の到着が朝の五時ですから、これを主とし、停車時間二〇分の間にトラックに積み込んでもらう仕事です。ほかの荷物もありますが現場で担当者が指示します」

そして「７０°Ｆ」と黒板に書いた。

「募集の案内にも書いていましたから、ご存知かと思いますが、このマイナス温度ですから直に触れば凍傷を起こします。注意してください。筵俵にブロックが包まれていますので専用の軍手を支給しますので、これを嵌めてください。短時間で運べば問題はありませんが。作業服は自前で頼みます。」

当時の作業基準はこんなもので、約一時間おきに入ってくる貨物列車から積荷を運搬する仕事だった。そのころは今のようなコンテナーはないので停車時間内にこなさねばならないから単純作業でも忙しく、重労働であることは推測できた。

二人が朝霧の漂う線路沿いの小屋についたとき、事務所の中には既に十数名の作業員が集まっていた。ふたりが入って行っても作業員たちはジロリと見ただけで何も言わない。たばこの煙が渦巻き、充満して崎口の目に浸みた。中田が平然とジャンパーから〝いこい〟を取り出して口にくわえた。意外に悪環境においても順応力のある男だな、一日で辞めることはなかろうと、崎口は見

た。

「あと、二十分で貨車が着くから、準備してください」

監督の声が小屋中に響いた。丁重な言葉使いだが張りのある声はその場に緊張をもたらした。

「一番貨車の仕事の後、朝飯を用意しておきます」石炭ストーブの上に、みそ汁の鍋が置かれて、匂いが漂ってくる。

入口の戸が開けられると外の冷気が一気に部屋に入ると首にタオルを巻いて二人は、みんなの後をついて出る。

遠くで汽笛の音が二度、三度と聞こえてきた。来るぞ、間もなく着くぞと、作業員が叫ぶ。

駅の構内は青白い照明で照らされ、朝霧に煙った何本ものレールが白蛇のように畝ってみえる。

間もなく蒸気機関車の蒸気音に重ねて汽笛を数回響かせて、真っ黒い怪物のような機関車が引込み線にゆっくりと入ってくる。石炭を燃やして吐き出す煙の臭いが鼻腔を突く。

幾十台もの黒い貨物車両を引き連れて、激走してきた力量を誇るように激しい蒸気を吐いて機関車は止まった。

駅務員によって次々と貨車の扉があけられる。その一台の貨車から霧よりもさらに真っ白い煙が滝のように線路へ降りてくる。すぐに荷物を降ろすための滑り台が取り付けられて

「決められた作業員以外は貨車の中に入ってはいけません。入れば死ぬよ！」。

特殊な樹脂で密閉された貨車中の酸素が薄いためだ。あの煙は二酸化炭素なのだろう。氷点下数十度の世界で無酸素空間は死の世界なのだ。

滑り台から筵俵に包まれたドライアイスのブロックが次々に滑り降りてきた。

現在のような梱包資材は未だ開発されていない。

「さ、急いで運べやい！さっさとやれやい！」全身を防護服姿で貨車の中へ入った男の銅鑼声が響いた。

運び慣れた作業員たちは次々に肩に筵俵で包まれた荷物を担いで構外のトラック駐車場に向かう。

中田が行く。そのあとを崎口が続き、すでに中田はそれを担ぎ上げてゆらりと歩き出した。

学生課の事務官の不安そうな目を崎口は思い出していた。小太りの中田より萩の海で鍛えた俺の方が身体は強いはずだ。あの中田がやるじゃないか。負けられん！俺にできない筈はなかろう。と、思った。貨車の下では滑り降りてくる荷物に手鉤を掛けながら、順番に運搬人に分け与えている。崎口の番が来た。作業員が崎口の前に、その二〇キロの筵俵を滑らせた。崎口は自信満々で筵俵を手にして肩に運ぼうとしたが動かない。

「オイッ新米！急げ！」

筵俵に括られた縄目に手をかけて持ち上げる。重い！半端な重さではない。二〇キロだとは聴いていたが想像していた重さとはまるで感じが異なっていた。

「右手でな、右上の結わえた縄目を持つんじゃ！左手は下の縄のコブんとこだ！、持ち手が違うぞ！」

初めてで要領がつかめない。力はあっても使う筋肉が違った。あっという間に藁筵を線路に落としてしまった。

鈍い音がして白い煙が白蛇のように地を這う。

「ばかもん！気を付けんかい！それ！もいちど持たんかい！」

作業員はむき出した白い個体を藁で整えて、今度は崎口の肩に乗せ、持ち手を教えて安定させた。

指先に激しい痛みが走った。マイナス七〇度に触れているためだろうか？軍手に穴が開いているのだろうか？凍傷になるに違いないと考えながら、ふらつきながらやっとトラックにたどり着いた。

二回目からは要領を知ったので落としはしないが、他の作業員に次々に追い越され、中田にも先を越されて悔しい。それにしても小太りで、色白の中田はスムースに運んでいる、人は見かけじゃないぞ、と、崎口は反省していた。更に競争心が起きてくるが、筋肉は硬直して激しい疲れを覚えた。しかしここで辞めるわけにはいかない。いったん決めて、行動を起こしたら、心一杯のことを行い尽すことは孟子の訓でもある。

厳しい姉の顔が一瞬脳裏を走った。

やがて精神力で数回が数十回を堪え、往復する度に汗が体を激しく流れたが、やがて周囲を観察する余裕も生まれてきた。

中田は相変わらず黙々と運んでいる。

根性のある男、地味ながら信念を持った男に違いないと崎口は疲労の中で感じていた。この男とはもっと語る必要があるぞとその時感じた。

作業員の一部に怠け者もいたが崎口は黙って見過ごした。これが現実か！論語の

慎独「独りを慎む」陰ひなたなく働くことを美徳としていた自分に当てはめてみる。サボって貨車の陰で煙草を吸って気づかない連中を指して中田に言った。

「あの連中はできないのではない！やらないのである！」と。

「松陰先生のお言葉じゃ！」

崎口から突然、訓戒じみた言葉を聞くまでは人を見る余裕はなかった中田も崎口の働き振りを見て刺激を受けていたので必死だったから、それを聴くまで「崎口が、何を吠えているのか！」現状に気が付かなかったのだ。

初めて現実は甘くない。これが社会の姿か！すべて将来のための良い経験であると監督さんが面接のときに言った言葉が蘇ってきた。その通りではないか！

そしてこの過酷な仕事を共有したことによって二人の絆は更に深まっていった。

日を重ねて行くうちに午前中で仕事が終わると講義のない時、たまに、二人は食事を兼ねて寮の近くの“四季屋食堂”で酒を酌み交わすこともあった。

自分の生い立ちや岡山大学の法科に来た理由などを語り合った。

中田はやはり無口で、崎口が一方的に話し、中田に判断を求めるパターンが普通だった。

ある時も寮生の礼節について崎口が「礼節のない一部の寮生について」自分の主張を述べて中田に意見を求めると

「まあな・・・」と答える。

「いいとか、悪いとか言うちゃれや、まあな、まあな、ばかりじゃ分からんがね、オレは」

「すまん、それがいいとよ、大切で必要なことよね」

丸い目を崎口に向けて素直に謝っている。

ノーということが言えなくて、逃げているわけではなく、どうでもいいような話には大義を置いていないということなのか。器量の大きい男かもしれない。九州人とはこういう男が多いいのだろうか。崎口は推測し反論しなかった。

自分が萩で吉田松陰先生の影響を受けたように彼は西郷どんの影響を受けているのかも知れない。その話を向けた時も、

「まあな、学校にはそげんな西郷ファンの先生がいたとよ」

「他人事みたいなことを言うちょるのう」崎口はこれ以上議論を諦めて、酒を飲んでは大義のない話で笑い、二人の親密度は増していった。

二人は寮生活にも慣れてきた。寮には門限もあったが、ほとんど自由自治、寮生の良識に任されていた。

やがてこの男子北津寮が反動的社会主義路線の学生運動のアジトになろうとは、このときは誰が予想したであろうか。

その年の夏、蒸し暑いある夕方、崎口と中田は連れだって寮を出て近くの四季屋食堂へ向かった。

“四季屋”は岡大学生専門の食堂と言ってもよい。一般人の利用者は稀だった。

寮には夕食もあるが二人は最近、バイトのお陰で余裕ができたから外食もすることが増えた。

食堂は“法界院駅”の駅前にあった、岡山駅から一つ目のこの駅は岡大生の通学駅でもあった。

老夫婦の親父さんと女将さんで食堂を切盛り。夕方の繁忙時には娘の三津子さんがお手伝いをする。これが当たった。三津子さんは二十歳過ぎだろうか、日はパッチリ、身体はポッチャリ色白で性格は明るいから学生達の

人気者になっていた。名前は呼称（みっちゃん）と呼んだ。この情報は寮生にたちまち口コミで広がった。

みっちゃんは老夫婦に似ていない。歳の差もあるだろうが、老夫婦に嫉妬心が湧くのだろうか？またはみっちゃんへの関心を引こうとした学生が、冗談で老夫婦を揄うのだ。

「お孫さんでしょう」は通常。

「だれかの隠し子ではないか」誰かとは有名な政治家に似ているような気がする、とか。でも、「なぜ、そのようなお姫さまが、こんな飯屋にいるのだろうか」と不思議がり、皆を笑わせていたが、失礼な言い方に老夫婦は、いつも笑って、相手にしない。みんなの話題になるほど日を細めていた。

今夜も常連の先輩寮生五名がビールを飲みながら、みっちゃんにアプローチをかけている。

「みっちゃん！きれいだね」「可愛いい」と褒めて、陽気に騒いでいたが、そのうちの一人が奥で調理をしている親父さんに大声で

「親父さんさ、トンビが鷹を生んだってわけ？」と囃すと、もう一人が

「イワシが鯛を生んだって！」続けた。

別の学生が、みっちゃんの手を取ると、

「ボク、タイが食べたいのよ。ね、みっちゃん！」

すると奥から親父さんが、

「何を言うかね。みつ坊は母ちゃんの若い時とそっくりだよ！昔は、母ちゃん、ぼっこう美人ぞな。」親父さんが言うと先輩達は噴き出した。ぼっこう美人は岡山弁で大変美人、ということ。

「かちゃんも何か言うてやれや」

「ま、恥ずかしい！おえりゃせん」女将さんは平然としている。おえりゃせんは岡山の方言で「どうしょうもない」

みっちゃんは赤くなって調理場へ逃げていった。

崎口は不愉快になっていた。ジョークだと思おうとしたが先輩らの礼節に欠けた言動は不快だった。中田の表情も同じように暗くなっている。

「エー！トン汁とヤッコをば頼む。」と、中田がめずらしく大きい声をだした。

「酒も貰うよ、みっちゃん頼みます。常温で二本！」と、崎口が注文。先輩を牽制するつもりで方言を押えて大声を出した。「あいつらにはいずれ鉄槌を食らわさねばなるまいて。岡大生の品格品位を落とすではないか」声を押し殺して言った。ある計画が頭に閃いていた。

「お待ちどうさま」

みっちゃんが明るい顔で料理と酒をテーブルに運んできた。

酒と言ってもその頃は「合成酒」と言われた酒である。一合が二〇円位で、（ちなみに素うどん一杯、十五円）

当時の清酒は五十円だからバイト学生には高値で飲めない。安い合成酒で充分満足していたが。食用アルコールを二級酒に混ぜたものだとか二級酒の品質不良品を公認したものだと言われていたが、実体はわからない。酔いが速く、飲みすぎると激しい頭痛に襲われるのが特徴だった。

やがて品位不良の先輩らは帰って行った。

その夜のことだ。

黒ブチの眼鏡をかけたひとりの寮生が先輩達と入れ違いに店に入ってきた。彼も同じ法文学部法学科の新入生であった。また同じ寮生であることは二人も分かっていたし、最近バイトの求人窓口でもよく見かけていた。彼は数件の家庭教師のバイトだけをやっていた。

「おかみさん、酒をくれんかね」と、歩きながら奥に向かって言うと

「どうも・こんばんは」ふたりにも笑顔で挨拶をして、空いていた隣の席に座った。

横目に崎口、中田のテーブルを見て、

「ヤッコもください」

注文をする。

「俺らと一緒に飲まんかかいね」

崎口が声をかける。この時が星林竜節と二人の出会いだった。

星林は遅番の家庭教師のバイトが多く、寮の食事に間に合わないために、頻繁に四季屋食堂を利用していた。

今日はその早番の家庭教師のバイト料を貰っての帰り道、四季屋食堂に借りた付けを清算しようと立ち寄ったのだった。

四季屋食堂の親父さんがカウンターで煙草を吸い始めたとき、星林は立上がってカウンターへ行った。

「親父さん、いつもすみません」

星林は備え付けのノートに今夜の入金金額を記入して、ノートにお金を挟んで、かみさんに渡した。

「千円も、入れて貰ったわ」

と、おかみさんが言う。

カウンターの親父さんが煙草をもみ消しながら

「竜ちゃん、ありがとうね。無理をせんでもいいからね。」

「こちらこそ、いつもすみません」と頭を下げて、星林は崎口と中田の隣席に戻ってきた。

四季屋食堂には何十人もの同類の（ある時払い）の学生がいたのだが、此処の親父さんは苦学生への思いやりがあり、温和なお人よしで申し出を断ったことがないから寮生も気軽に利用していたのだ。

「ま、一杯飲みんしゃい」

赤崎が星林に酒を注ぐ。

「あなたをよく学生課で見ちょりましたがの、いい家庭教師のバイトはありましたかいな。条件の良いのが無いでしょうが！デキの悪い子供もおって大変じゃろうがね！」

崎口は彼らの家庭教師のバイト学生をひと纏めにして、「非力なインテリ野郎」と悪態を突くこともあるがホントは家庭教師が不得手なこともあるから、半分は彼らに嫉妬していたのかもしれない。

「ありがとう。おっしゃる通り家庭教師も大変です。三件受け持っていますがバイト料は安いです・・・」白いぐい呑みに酒を受けながら星林は、二人を交互にみながら

「ぼくもお二人さんを寮や教室でお見掛けしています。よろしく。崎口さんはよう存じています。北津寮ではわたしら一年生の代議員ですから」

崎口はテレているのか顔を赤らめた。

「俺たちは同じ釜の飯を食う仲間じゃろ、寮生のためになることは言う、一年生はこれから長い付き合いですけんのう。頼むちゃ、何でも言うてくれ」

この時、星林は親しい友人はまだいなかった。山口言葉の崎口については気力に満ちた一家言であることは分かっていたが、隣で静かに飲んでいる半そでの開襟シャツをきた中田の情報は皆無だった。

「わたしは星林竜節といいます。広島の三次から来ました。よろしくお願いします。」

「ナカタ、中田正志郎ばい。ま、よろしゅうたんむ。福岡から来たばい」

この三人の出会いが核になって、やがて、わたしも仲間になり有意義で楽しい学生生活がはじまったと言っていい。

共通していることは経済的に恵まれていなかったこと、悪ずれしていないこと、未熟なこと、でも正義感の強いところだろうか。

星林はうれしかった。

後に、われわれが漕艇のチームを組んだとき、その当時の出会いが余程うれしかったのか、彼が、三人の出会いを「人の出会いは直感で好非が決まるものだ！これはドラマだ！」と、新説だと大げさに披露したら、「それはお互い様ではないか、イヤだと思えば相手もイヤなのだ」と即座に崎口が一家言らしく論じると「そうか、それもそうだ」と言うからみんな大爆笑した。

星林は法曹になる夢をもって岡大に一浪してきた。なぜ法曹を目指すかは、やがて彼が披露する日が来るので待つとしよう。

わたしが北津寮に入寮したのは彼らと同じ入学時期だった。同じ法科だったし、崎口と同じ山口県出身なので顔を合わせれば挨拶をする程度だった。

わたしとこの三人との交友関係が進展したのは、この星林君が中田、崎口両君と酒を酌み交わした日から間もなくではなかったのだろうか。崎口君と星林君、中田君三人がわたしの寮室へ突然入ってきた。

「君とオレは同郷じゃけ、よろしく」

崎口君が自己紹介をしたあと、中田君が福岡から、星林君が広島だと、それぞれに自己紹介をして星林君がサントリーウイスキー“トリス”のボトルから、プラスチックの小さなグラスに酒を注ぐ。茶色の液体から強烈な匂いがわたしの鼻を突く。

「みんなで飲のみましょう」

星林君がふたりにも注いで飲み始めた。

わたしがウイスキーを口にしたのはこの時が最初だった。

悪い香りではないが粘々した感触に加えてピリピリと舌を刺す。

「こりゃ、飲めんな」

「何言うちょるんじゃ、長州人じゃろうが、これからの時代は洋酒だよ！合成酒よりいい酒だぞ。これからは多面的な体験をしなきゃいけん！。教科書を読むだけじゃ頭でっかちのオタマジャクシじゃ！。いつまでもカエルになれんでよ。」

長州は酒じゃ、本物の日本酒なんじゃ、と言いたかったが、星林君が続ける。

「ボクもそう思います。今まで受験勉強ばかりで、何も世の中が解っていない。知識はあっても何も身についていない。

これからの我らは智慧を磨きこれを実践することだと思う。酒の実践も同じです。沢山の体験をすること。もちろんその前提は社会的正義から外れずに行動をすることは当然ですが」星林は、この時は法曹を目指していることは伏せている。

「ところで先週、崎口君、中田君と意気投合したのです。四季屋食堂で酒を飲みながら。体験のひとつとして大学に禅の同好会をつくろう、ということです。僕はその指導者を知っているのでチャンスです。その方は、われらのために力を貸して下さる素晴らしい実業家ですよ。」

「そうじゃ！オレも大賛成じゃよ。今の学生は礼節や道徳に欠けちょる。ま、俺たちも含めてじゃが。松陰先生みたいな先生に出会わなかったせいかもしれんが、大概の学生は優柔不断で主体性にも欠けちょる。いま星林君の言った先生、これはよい縁じゃと思うがの」

と崎口が熱弁を奮う。

「岡山大学には禅の同好会がない。これは先輩らの怠慢じゃと思う。俺たちで発足させようぃね、一緒にやらんかね、長州、広島、九州連合で」

「うちは浄土真宗じゃけど・・・」

「禅寺の門徒になるわけじゃないちゃ。これまでの因習

の宗教じゃない。人間力を高めるための手段とね。星林君がさっき言うた沢山の体験論、そのうちの禅の実践だよ。集中力も付くし自主性をも養うということだよ」

この頃から崎口の話し言葉が変わる。中田の博多弁や、様々なお国訛りの言葉の影響を受けていたのだろう。

やがてみんな、標準語らしい寮生言葉に染まるのだが。

中田君は黙って丸い目をパチパチさせて、ウイスキーを舐めながら、ことの成り行きを見ていた。

「とりあえずは同好会で、大学の構内でオリエンテーションをやり会員を募るということを考えていますが、どうですか？」

星林が手書のまとめた用紙をだして、

「よろしく頼みます、読んで何か他にアイディアがあったら言ってください」右手を差し出してわたしの手を取り

「一緒にやりましょうよ、とにかく実践です」

わたしもバイト生。スケジュールを脳裏に浮かべていた。夏目漱石の小説「門」から知った禅に関する知識位はあったが。

「時間的余裕がね・・・」

「君ね、俺なんか、朝五時からドライアイスの運搬をやっちょりますばい。日雇いの労働者！きついよ！重労働じゃあね。中田君と毎日行っちょるばい。禅をやるのに時間は関係ないとよ、時間は与えられるもんじゃなく、自分でつくるもんじゃて！のう、中田君！」

「まあな・・・」

中田君の顔中が紅い。トリスの所為だと思った。

考えてみると母の実家が禅宗で、おじいちゃんは山口県徳山市、湯野にある曹洞宗の楞厳寺（りょうごんじ）の門徒総代で早朝から般若心経を仏前で唱えていた姿を思い出していた。いま、不思議な出会いに感情が高まってくるのを押えられなかった。

モノローグ

山口県徳山（現在、周南市）の山奥に母の実家があった。石砂谷（いしざや）である。山奥で杉や檜の木の生産地であった。父の本家、佐波郡右田村佐野から木炭で走る防長バスに乗って終点、へた（戸田）という山陽本線の小さな駅のロータリーで降りてから、更に徒歩で一時間も歩かなければならない山奥にあった。

実家では、所有していた山から杉やヒノキを切り出して徳山に運び出し、自営の製材所で加工をしてそれを販売していた。

母はその山奥から防府の親戚に下宿して、防府女子高等学校を卒業すると間もなく農家の次男であった右田村の父へと嫁いだのだった。

父は当時、すでに日本国有鉄道、広島車掌区に勤務しており、広島市比治山町にある官舎で新婚生活、私が生まれたのだった。

昭和十六年十二月八日、日本は第二次世界大戦に突入。その三日後の早朝生まれたという。

わたしが三歳の昭和一九年二月、父は赤紙の強制召集令状を受けて戦地へ応召。母と私とは父の実家、山口県佐波郡右田村（現在は防府市）へ帰った。その年に妹が生まれた。

昭和二〇年七月、父はフイリッピン、ミンダナオ島、ダバオで戦死。終戦直前に死の公報を受け取った母や祖母は当然悲嘆に暮れた。しかし村ではお国に命を捧げた功績を慶びとして、慣例に従い葬儀に参列した村人に赤飯を炊いて振舞ったという。

山口県人、わたしの村内にも戦死者が多かった。わたしの親族も父の弟をはじめ、四名の戦死者があった。国民は国家存亡をかけた正当な戦争だといわれて、長い間その呪縛にはまり、わたし達家族は肉親を次々と失っても悲嘆に堪えなければならなかった。時代とは言っても一家の支柱を失い残された家族の行き場のない悲しみや情念は天を仰ぐしかなかった。そして東方にある九段の靖国神社に向かって合掌し生霊となった死者の魂を慰め奉らんと祈り、血涙を心の奥に流し納めざるを得なかったのだった。

昭和二〇年八月六日朝、米機Ｂ２９は広島へ原爆投下。比治山周辺は全滅した。父の死と引き換えにわたし達は死から免れたのだった。

昭和二十年八月十五日終戦。

日本は負けた。

わたしたち親子三人の苦闘がここから始まった。この時代の民法は戸主制度の時代で、長男が家督相続して戸主となり、本家を継ぐ仕組みだった。母は父が戦死の公報を受けると同時に本家の農業の手伝いから始めなければならなかった。戦後、貨幣価値はインフレにより下落して預貯金や国債は紙屑のように無価値になったと、母が嘆いていたのを思い出す。

戦争の所為（せい）、日本が負けた所為、幼少のわたしと妹は母の苦難を肌で感じていたが、わたしと妹には何の手助けもできない。できることは我慢というつらい事実と現実だけだった。

母は農業を体験したことも、知識もなかった。林業を営む実家にはかなりの田畑はあったが、小作人に任せており、農業を手伝うことすらなかったのである。

本家は一年を通して米、麦、芋、大根等の野菜を四季に亘って作る。

真夏の太陽に照らされ青々と繁った稲田での草取りは辛い農作業だったし、米麦の収穫期は朝から夜中まで重労働だった。

真冬の麦ふみ（霜柱で浮いた麦の新芽を踏んで土に根付かせる）も寒いが、反面、この光景は農村の風物詩でもある。霜の降りた朝、村人たちは白い息を吐きながらザクザクと足元で霜柱を踏み込む音を響かせて、横二列になって子供たちのことや祭りのことや、人の悪口をいいながら笑い、怒り、誇り、騒めく風景は和やかで楽しそうに見えた。麦の成長を保護するための短期間の農作業であったから、男女総出でこの時期を外さずにやらなければならない作業なのだった。

こうした村の農家は、特に近隣の農家同志、お互いに農作業を助け合わなければ成り立たなかった。戦災により農業人口は極端に減っていたのである。男性の労働力は特に不足していた。母もこの頃になると、農事に慣れた様子で、近隣の人たちといっしょにやる作業が楽しそうにみえた。

ひとつの収穫が終わると、さらに次の植苗の前に牛や馬を使って整地しなければならない。これは男がやる力仕事だがやがて女性が牛馬を操り、耕作する姿を見ると失った父を想い、戦争の哀れさがわたしの胸を突いてきたのを覚えている。

戦後十数年は農家が自分たちの利益のためや自分達家族が食べるための農業ではなかった。食糧不足は日本全国に及んでおり、食糧管理法で農家の白家消費用（極端に少ない基準で定められていた）以外は政府の定める条件（極端に安い価格）で強制的に政府に売り渡す制度であった。この適用を受けてわたしたちは、農家で生産しても米は不足して芋を入れた麦飯が普通だった。それでも都会の人々の食糧不足は深刻で餓死者もでているという噂が頻繁に入ってくると、「誰かが困っているとき、手を差し伸べることは人としての道である。」

と、伯父も村の役員をしていたので近隣の農家を含めて米麦の供出には特に厳しく指導、管理をしていたのだった。

二町歩（約二ヘクタール）から取れた米は約一〇〇俵位になる。供出の日になると積上げられた蔵の米俵がたちまち空になってゆく。麦も同じだった。収穫の季節が終わると家々から牛や馬に引かれる満載の大力車が役場へと運びこまれてゆく農道の光景が日に浮かんでくる。

ある日、伯父は村の某家は「村八分」になったことを家族に告げた。

その理由は、米の横流し、米の供出数をごまかしたと言う。

当時の村八分は冠婚葬祭のうち葬儀のみは義理を果たすが、あとの付き合いを禁ずるという、厳しい古からのシキタリだった。

やがてこの因習は新時代に不適だとして、静岡事件に端を発し各地で社会問題となり憲法で保護された基本的

人権の侵害との裁判所の判決を受けた、が、日本に浸みついた風習はそう簡単には無くならず、形を変えながら現代にも続いているのではなかろうか。ただし同時期から食糧事情の好転に伴い、芋・雑穀・麦類、米と順次この食糧管理法の規制からはずされるにいたる。

わたしが小学二年生の春、伯父の尽力により母は村役場の事務員に採用されて、母の仕事の中心は農地解放による農地台帳や登記簿の整備事務をすることだった。

戦後の農地解放、農地法の改正は日本の農業を根底から変えていった。

小作人制度の廃止は大地主をなくしたがこれは、わたし達のような小地主からも田畑を奪う政策だった。母と幼少のわたしと妹には耕作能力がない、と、判定された為だった。母も時にこの制度を批判することがあったが、皮肉にもこの事務仕事に関わらなければならなかった。

この改革は日本経済、産業の発展とともに価値観は転変し、市街地近郊の農地は「お金のなる木」となり農業体制の根幹を狂わせていった。「一夜成金」を生み、「土地神話」を生んでいった経緯は国民の知るところである。さらにこの頃から利益至上主義の思想が人の心を侵し始めて行ったのではなかろうか。

さて、

わたしの小学校の名前は玉祖（たまのみや）小学校、これは防府市（当時は右田村大崎）にあった。この小学校の名前の由来は玉祖神社、一の宮神社である。

玉祖小学校はこの神社の傍にあった。

この神社の祭神は玉祖命（たまのおやのみこと）で、古事記（日本の神話）に登場する神様である。玉造部（たまつくりべ）の祖神であり、森閑とした境内は古木に覆われ、玉砂利、白砂が敷かれ、美しい総社となっている。

当時、小学校の校門、右手には本を読みながら背中に薪を背負った二宮金次郎幼少の石像が設置されており、毎朝登校の度に頭礼をして教室に入っていった。先生からは常時、苦学と忍耐、勤勉の実行、人にやさしく、自分に厳しくとの教えを受け、そして「質実剛健」「積小偉大」を体現された尊徳翁の思想はわたし達への、教育の原点であった。

今日、石像は取り壊されてない。残念で仕方がない・・・。

この頃からだと記憶しているが防府市、中の関にある飛行場が進駐軍のキャンプ地になった。街には米軍人を乗せたジープが絶え間なく徘徊するようになり、見慣れない黒人兵を見たのもこの時が初めてだったし、わたし達は敵国人への怒りや怨みもあったが恐怖心も強く米兵

を見ると逃げ、隠れたことも度々だった。
しかし、その恐怖心、怒り、怨みは長くは続かなかった。
間もなくわたし達の小学校にも長身で格好のいい米軍の将校が時折やって来て、給食用の脱脂粉乳やパンの支給を受けて、さらに正月や夏休み前になると、マーブルチョコレートやガムを進駐軍からのプレゼントだとクラス担任教師が念を押しながら生徒の全員に配給するようになったのだ。
わたしにも強烈にあった米兵への怒りと怨みはGHQのお菓子作戦によって見事に変節させられたのであるが。

中学は石田中学、その後山口県立防府高校へ入学した。
高校生活は友人に恵まれ、楽しかった。
並の成績で三年生になると交友関係は就職組と大学への進学組に自然にわかれて行った。
わたしは母の苦労を知っていたから遠縁の板金屋へ就職をして妹を高校へ行かせなければならないと考えていたので、三年生の年末までは近所の幼馴染と魚釣りにいったり、就職組のグループと草野球をしたりして遊び、農繁期は農作業を手伝っていた。
三年生の大晦日、本家の茶の間で年末恒例のNHK紅白歌合戦を白黒テレビで見た帰りのこと。
「お母さん、今日の三波春夫は最高だったね！」と、妹が夜道で燥いで母に言う。
「いい着物じゃった・・ひばりちゃんもよかったがね。」
「来年はうちでテレビを買って見ようね、お母ちゃん！寒い道を帰らんでもいいようになるし」
妹はわたしが就職をすれば、テレビ位は買えるだろう、と、考えているに違いない。
「まだ、テレビは高いからね。お母さんの給料じゃね、まだ買えんよ・・」
家で買えれば、毎夜のように自宅で見れるし、チャンネルに気を使うことも要らないから、わたしも妹に賛成なのだが。
母がわたしに言った。
「どうするつもりかの、来年は・・」
雲が丁度切れて、月が煌々と輝いていた。畦道を妹と三人で自宅へ向かって歩いていた。防府では珍しく晴れた冬の空。
「兄ちゃんは就職する、言うてたよ。そうよね！テレビ買えるよね！兄ちゃん！」
妹がわたしに変わって答えた。決めつけた言い方にわたしは沈黙した。
冬の田舎道は寒い。わたしは黙って手の平を息で温めながら帰り道を急いだ。

息を吐くと急に胸が空っぽになり寒い風が侵入ってくるような気がした。
ふと、見上げた月に担任の先生の顔が重なってきた。十二月の模擬試験で上位にきたことを誉めてくれた笑顔を思い出していた。
除夜の鐘が突かれ始めた。
年が改まったが、おめでたい心境ではなかった。
「さむい、さむい！」
妹はわたしの胸中をも知らないで、わざとらしく寒そうに足を踏みながら玄関の戸を開けると玄関の三和土に月光が射し込んだ。
「もう眠たいんでしょう、初詣は昼に行けば！」母も妹を気使っている。
「炬燵を入れてきたから、はよう、布団に入りなさい。」
母が置炬燵の布団を捲ると、三毛猫のタマがのっそりと出てわたしの膝へ乗ってきたので首をもんでやる。
帰り道で母の質問に答えていなかったから、わたしは猫を相手にどうしたものかと逡巡していた。
妙に眠気がこない。村の明照寺の除夜の鐘の音は続いている。
妹はタマをわたしから強引に取り上げると急に妹はタマの顔に向かって、
「兄ちゃんは、ホントは大学に行きたいんじゃろ」抱き上げたタマを揺すりすぎたから、タマは妹の手を引掻いて逃げてゆく。
「タマ！痛いじゃないの！」
今度は炬燵の上のみかんを剥きはじめた。
「余計なことを言うなちゃ。お前は早う寝たらいいがね」
「眠とうはないよ。兄ちゃんは言ったことと考えてることが、しょっちゅう変わるから、怖いワ！」
妹がわたしに不信感を抱いているのは分かっていた。普段軽い家事手伝いは妹の役割で、重労働の五右衛門風呂への水汲みはわたしの役割、井戸から風呂桶にバケツで二十杯を入れる仕事なのだが、悪友の誘いがあると、仕事放棄して遊びに行ったから、何回も妹にやらせたことを責めているのだろう。（反省はしているが、ごめんなさい、と、素直に言葉に出せない）
しばらくすると隣の座敷から母が風呂敷を火燵台に置いて、結び目を解くと本が出てきた。
大学受験参考書、六科目、六冊であったが、炬燵の台に積み上げ私の前に置いた。
「なに・・？」
母の言葉を待っている。
「これはね、去年さち子ちゃんが使っていた参考書だって。さち子ちゃんがどうしてもあんたに渡してほしいと、保育園に持って来られたのよ。」
当時、母は出向先の市営三田尻保育園の栄養管理士と

して転勤して五～六年経っていた。
さち子ちゃんの母親も同じ保育園の園長として勤務していたので母とは特に親しく、わたしと妹も家族のように接して貰っていた。
たびたび、さち子ちゃんに兄妹で宿題を教わったこともあった。優秀な姉ができたような気持ちになり嬉しく、誇らしかった。
「行きたいんなら行ってもええよ、大学へ。」
「お金が要るからなあ・。うちは貧乏だし、さち子ちゃんの家とは違うから」
「なんとかなるいね。これまで何とかなってきたから・・・」母もみかんを食べながら。
「あなたらが小さいころは、今よりもっと貧乏じゃったよ。米や麦を本家の田で作っても、伯父さんがみんな供出で出しなさったから、うちらには米も麦も回って来ん。ほんの少し貰うけど一年はもたなかった。米穀通帳をもって、並んで買ったこともたびたびだったいね。」
わたしも覚えている。さつま芋を入れた麦飯がほとんどで、盆と正月、二度、白米を食べたこと。
「でもね、伯父さんからは小さくてもこの藁屋根の家を建てて貰って、役場へ入れて頂いたお蔭で、今があるんじゃからね。文句は言えんけど、辛かったわ。苦労は買ってでもしなさいという諺もあるけれど、」
「買ってまでせんでも、今でも苦労しとるがね。特に兄ちゃんの我儘で。」
妹がわたしを睨んだ。わたしが早く寝なさい、と言っても寝床へ行かない。母は妹に向かって言う。
「これから好いこともあるいね。あなたたちに家の手伝いばかりさせて、悪いと思うちょるよ。お母さんが勤めてるからね。つらい思いをさせて悪いと思うちょるよ・・・・」
妹が顔を火熾台に伏せて聞いている。
「でもね、いつまでも悪い風ばかり吹くかいね。あなたも高校でたら上の学校へ行けばええよ。」
妹を窘める。
「さち子ちゃんは兄ちゃんより二つ上だけど、頭のいい子じゃ！お父さんが軍医で出征されて戦死されたから、あなたらと同じ戦争遺児じゃけど。お父さんの夢を叶えるいうてね、将来、医院を開業するって、人並みの努力じゃなかったよ。」
さち子ちゃんは去年、東京大学、医学部へ一浪して入学。
「さち子ちゃんのお母さんもね、あなたも絶対、大学へ行かせんといけん、と言われてね・・・」
「人に言われても、せんないやろ、」
せんないとは悩ましい、という山口の方言なのだ。
人は人。自分の人生を人から言われて変えるわけにもいかないが、その当時は自分自身、半分は進学するのを諦めていたのだが、心の底では可能性があるのではないかと、迷い、不安定な状態ではあった。
単純にお金だけの問題で迷っているのか、合格できる実力が本当にあるか。失敗して浪人することは不可能だから。
「お父さんも、よく言っていたのよ。勤めから帰ってくるとあなたをいつも膝に抱いてね、おまえは長州人じゃ。立派な男にならにゃいけん！「お前の為なら例え火のなか水のなか」って。都都逸の節で謡いながらね、「父さんは何でもするぞ」・・・ウチもお父さんの代わりになにゃいけんがね・・・」
これまで何回も母から繰返し聞いていた。顔も定かに覚えていない父の姿を教えようと言う母の心なのだろう。亡父の愛情を想うと悲しく切ない。
山陽本線、大道駅から親族や村人に見送られて出征したとき、すでに死を覚悟していたのだろうか。何回も「子供たちを頼むぞ、立派に育ててくれよ、」と、わたしの母と父方の伯父に繰り返し頼んで戦地へ赴いて行ったと言う。
「お金のことは心配せんでいいよ。なんとかなる。これまで何とかしてきたんだからね」
台所へ出てゆくと洟を啜む様子が障子戸の向こうで聞こえてきた。
泣いている様子がわたしの胸を締付ける。
「お兄ちゃん！お母さん泣かすなよう！」
妹も涙声で言う。
わたしは、さち子ちゃんが使った受験参考書を手に取ってページを捲った。
あらゆるページからさち子ちゃんの努力の跡が読み取れた。丁寧に朱や青の色鉛筆の引かれた箇所はわたしへの強烈なメッセージのようにも思えた。
その夜、国立大学の入学試験を受けることを決断したのである。
約一か月半先に迫った入学試験の勉強に全力で当たった。もちろんさち子ちゃんの参考書を中心に六科目を復習し演習した。
そして国立岡山大学法学科に入学したのである。
当然、アルバイト学生になった。
崎口君が卑下した、女子の仕事だと軽蔑される家庭教師と軽作業ばかりだが。
先に触れたように、わたしは崎口茂、中田正志郎、星林竜節に出会い、素晴らしい友人達との学生生活が始まったのである。

（つづく）

特別寄稿

グルメと私

濱本章

まえがき　　三戸岡道夫

濱本章さんの文章力は昔から冴え渡っているが、九十四歳になられる今日でも、その筆力は輝きつづけており、今回「グルメと私」という冊子を作成された。そのあざやかな描写は、まるで読者もそのグルメ席に一緒にお伴して、グルメを味わっているように、その新鮮な味がただよってくる。あまりにすばらしいので、本誌にも特別掲載させていただいた次第である。

「はじめに」

財政再建や北朝鮮問題、世間情勢は、必ずしも安定していないにも拘らず、グルメブームは留るところを知らず沸いている。

七つ星だ、五つ星だと、ミシュラン星付きの有名店には、一部の富裕層が殺到しているようだ。

和楽やサライ等の上流指向の雑誌に、写真と共に載っている立派なご馳走は、料理の品数も多く綺麗で、年寄の私にとっては、全く縁のないものになってしまった。

勿論、日常の食事には、お晩菜程度のものを一、二並べ、一合程の晩酌と共に満足して楽しんでいる。

営て、立命館の夜学に通っていた頃、授業が終わり帰途につく途中、ふと南の空を見上げると、オリオン星座が赤く光り、綺麗に三つ並んだのをはっきり覚えており、私にとって本当の三つ星のグルメであった。

次に、いつまでも心に残っている、私流の三つ星の食物を、相変わらずの駄文で綴ってみたい。

「すき焼き」

章、今晩すき焼にするからお使いに行ってきてと、母に云われた。切り込みを百匁（三七五g）と、玉子屋（養鶏場）で、傷卵が交ってもよいから十個と、渡された五十銭銀貨を握って、家を飛び出した。

街道筋の肉屋まで約二十分で、買物を済まして帰ると、父も帰宅しており、電熱器（螺旋状の電線が渦巻状に巻かれ、温度は強弱自在）にすき焼鍋を乗せて、夕食が始まった。

当時はこれでもぜい沢な食事の方で、牛肉の煮えるあの臭いと共に、美味しく和やかに味わった一と時が忘れ難い。

小学校、二、三年生当時のことである。

「屋台の壱銭洋食」

三年生ぐらいまでであったが、子供相手に壱銭洋食を売るおじさんが屋台を曳いて廻って来て、目の前で焼いてくれるのである。

鉄板の上に、メリケン粉を溶いたものを、杓子で極く薄く、丸く伸ばした上に、鰹節（？）の粉と天かすと刻み葱を置き、溶汁を少量かけて、生地が焼けて来たところで、裏返し、暫く焼いた上、先程の表面に、ソースを刷毛でたっぷり塗り、刻み紅生姜を散らすと出来上りである。

一銭のおあしと引換えに、熱つ〳〵の壱銭洋食を頬ばると、ソースの香りがうまくからんで美味しく、お八つとして大満足であった。

また次に屋台が廻って来るのが、待ち遠しかった。

「カツレツ（草鞋）」

新京極は京都を代表する繁華街である。

私が初めて新京極へ足を踏み入れた昭和五、六年頃は、四条通御旅町から三条通までを一直線、両側を種々の商店をはじめ、京都座、明治座の芝居小屋のほか、当時活動写真と云った映画館が数軒と、浪花節、安来節、漫才、落語の館が軒を接していて、休日や一日、十五日の紋日には、丁稚・小僧・職人さんらが、どっと押し寄せ、その混雑振りは大変なものであった。

その中に、当時まだ珍しかった洋食店で、フォーク・ナイフが使えるのが嬉しかったスター食堂があり、決ってカツレツをねだった。定番のカツレツは、牛肉の厚さは薄かったが、その大きさは洋皿から食み出て、俗に草鞋として知られていた。

この草鞋にソースをたっぷりかけて、ぎこちない手付で食べるのが、たまらな美味しく、お腹も満腹となり、

子供なりに満足感を覚えた。

「鯖」

鯖は字の通り背の青い魚で、血液をサラサラにする効果があるとゝうことで、刺身は勿論、焼いても味噌煮にしても味が良く、大衆魚としても親しまれている。

私も生鯖を焼いて、大根おろしと共に食べるのが好きである。

然し、一度だけ生鯖でひどい目に会ったことがあるので、思い返してみたい。

私は中学生の夏休み四十日間を、殆ど毎年、海のある母の実家に行き、年頃も似合った従兄弟二人の三人で、海に入り、素潜りや、舟遊びを楽しんで過ごしていた。

勿論、漁村である上、定置網が張ってあり、毎日、夕方前の定時に網を囲み、引き揚げて獲物を船に収めると、再び網を元に戻し、漁を終えるのが、漁師の日課でもある。

観光客は別の船から、威勢の良い雰囲気を味わうことが出来る。私も一度便乗して見学したことがある。

或る日、特別に鯖が大漁になったことがあり、市場に卸す以外に、漁師各自も自家用に配給があった。この漁師仲間に年長の従兄弟がおり、私に食べさせようと数匹の鯖を貰った。

伯母は早速獲れたての鯖を刺身にして大皿に盛り、焼き魚等と共に夕食の膳にあがった。

私もピカ〳〵に光った鯖の刺身を、わさび醤油で頂いたが、とても美味しく、その新鮮さは京都でのそれと比べものにならず、知らぬ間に相当食べてお腹も満足した。

然し、食後暫くして、突然身体中が痒くなり、各所に蕁麻疹が表われ、痒さも耐え切れなくなったので、村に一軒ある医院に連れて貰う羽目になった。

医者は早速、カルシュウムの注射を打ってくれた。お陰で間もなく腫れも痒みも収まり、正常に戻ることが出来た。

鯖の超新鮮さに馴れていなかった私が原因であったが、あの時の鯖の美味しさは、今も忘れることが出来ない夏の思い出である。

「あん巻き（餡巻）」

軍隊での初年兵経験は、学徒出陣で、昭和十八年十二月一日、中部第三十七部隊第二機関銃中隊に入隊し、翌年五月一日、仙台陸軍予備士官学校に幹部候補生として入校する迄の五ヶ月間だった。

その間、厳しい訓練や、軍隊では、表向き無いことになっていた、古年次兵による私的制裁（びんた）も十分に味わった。

それ故に、楽しかったこと、嬉しかったことは、数は少くとも、よく覚えているものである。

或る夜、不寝番に就いて、兵舎入口の廊下に、九九式短小銃に着剣して立哨にあたった。

その時、偶々週番士官の巡検に会った。

直ちに不動の姿勢で、不寝番異常ありません、と報告した。

薄明りの中でお互い顔を見合すと、週番士官は、岩崎端一氏と云い、大阪貯蓄銀行京都支店で出納係主任を務めておられた大先輩で、一月に応召された許りの岩崎少尉で、六中隊付と伺った。

元気で頑張れよと励ましを受け、その場は終ったが、翌月の会報で、不寝番の成績優秀者、第二機関銃中隊濱本候補生と発表された。

これは全く岩崎少尉の好意のお膳立で、ありがたかった。

その後幾日かたった日曜日の夜、六中隊岩崎少尉のもとに来るようにとの連絡があり、急いで伺った。

そこで思いがけず、洒保の廿味品のご馳走になった。

それは餡巻であった。

遠慮なく食べよとのお言葉に甘え、薄皮にたっぷり餡を包み込んだ春巻風のもので、早速頬張ったが、顎が落ちる程美味しかった。

通常なら偶の日曜日に洒保の配給として、餡巻一本と飯盒の中ぶたの底に少量の日本酒が支給されることがあったが、比べものにならず、さすが将校は違うなと、岩崎少尉様々であった。

よく軍隊は運隊と云われるが、この日はよく運のついた一日であった。

「鮪と御飯」

昭和三十七年三月、一年間の中央執行委員の任期を終えて東京を去る時、京都支店長代理の辞令を受けた。旧銀行でも三年間、京都支店勤務の時代があったが、既に場所も四条烏丸上ル東側の三階建の新館に移っていた。貸付担当の前任者が本部入りをしたので、その後を引継ぐよう命ぜられた。

支店長は岸本直吉氏で、二度目のお勤めになった。然し五月の株主総会で、役員に就任（名古屋支店長）の内定を受けられたので、何かと身辺ご多忙であった。

岸本支店長はご自宅は京都にありながら、下鴨の支店長社宅で起居されることが多く、広い社宅の空室を利用して、若手行員の寮として、東西行員の支流を積極的に進められていた。私の担当する貸付係にも、東大、慶応卒の二人が配属されていたので、教育指導にあたった。

勿論、食事は寮母がつくられたものを一緒に食されていたが、昼食は時々、市内の支店長を交えて、情報交換

かたがた会食されることがあった。
或る時、昼食時に社宅に来るよう指示があったので、早速伺い来店客等所要事項を報告した。
お顔見知りの支店長も二人程同席され、懇談されていた。
その時の昼食は鮪の刺身であった。私もお相伴したが、赤い鮪の切身に醤油をつけ、寮母炊きたての温かい白飯に乗っけて口に入れた時、何とも云えない旨みが口一杯に広がり、飯もお替りして十分に堪能した。
鮪の刺身と熱々のご飯の取り合わせは、現在も私のグルメである。

「ステーキ」

石田へ入社したその年の十二月、社長のお供で札幌へ出張した。
札幌営業所を初訪問すると共に、三菱電機、札幌の昇降機部門の幹部へ挨拶をした。
工事部門とは別に、札幌には石田ファミリーの事業として、高級麻雀店・串カツの店と、バロン男爵の店で、ススキノに高級焼肉店を経営していた。商売は各店の店長に委かせ、経理と牛肉の注文は、兵庫県の加古川の牛肉専門店に対し、大阪の本部で行っていた。
夕刻、社長と共に、三番目にバロンを訪れ、試食を行った。
客用の鉄板の前に坐ると、店長（開店前、大阪北新地の鉄板焼の名門ロンにて修行）は、早速、店の最高級の分厚い牛肉を焼いてくれた。
それは云う迄もなく、味は絶品で、ワインと共に、これがステーキと、超満足感を味わうことが出来た。

了

自動車産業の「労働貴族」

不信あるいは癒着と背信のはざまで

新井宏

このところ、また韓国のことに関心が集中している。
北朝鮮の核ミサイル問題もあるが、「慰安婦問題」など、韓国があまりにも微視的な問題にこだわり続け、政治として最も重要な「地政学的な対応」に取り組んでいないのにイライラしていたからである。その流れで、前号の『まんじ』に「元駐韓大使の嫌韓本？」について、勝手なことを書いた。いわば、六～七年前に連載した「八つ当たり語録」の復活版である。
今回もまた同じようなことになりそうであるが、きっかけは、韓国の現代自動車や起亜自動車の「労働貴族」のニュースである。
今では、日本でもよく知られているように、韓国では強力な自動車労組が職場を支配し、毎年のようにストライキを繰り返し、労組の同意無くして、労働条件はもとより、重要な生産計画、設備計画などの変更は一切不可能である。
状況は異なるが、四十年ほど前、日産自動車においても、会社経営陣と癒着した労組の「塩路天皇」が、経営を左右するほどの権力を握って君臨していたことを想起する。
実はその頃、私の勤務していた会社でも、会社側の密かな支援を受けて、民青（共産党系）を排除した勢力が組合を掌握するや、現業部門における実質的な人事権を握り、総務部門と癒着して管理職の人事まで干渉し出した。それはあたかも日産自動車労組の縮小版をみる思いであった。
「日産労組のマニュアル」があったに違いない。いつか、そのことを書いてみたいと思っていた。
その日産自動車について、この稿の構想を考え始めた

九月末に「完成車検査工程で資格のない者が検査をしていた」とのニュースが飛び込んできた。百二十万台のリコールで二百五十億円の損失となるというが「検査を実施していなかった」わけではないので、実質的な欠陥車が続出することはあるまい。しかし、日産の被る損失は、まともにリコールを実施するだけでも二百五十億円におさまるはずがない（注1）。企業としてのダメージは一桁上になるだろう。

日産中興の祖、川又克二が企業内労組と癒着して君臨した三十年間、その後の経営破綻とルノー傘下での再建、そして今度の非常事態、何故かそこに日産自動車の体質を感じる。

本稿では、世界の自動車産業を代表する、現代自動車、日産自動車そしてトヨタ自動車について、当初の労組に対する会社側の対応の差がどのような結果をもたらしたかを書いてみたい。

まず、韓国において労働貴族が経営を左右している異常状態を現代自動車と子会社の起亜自動車に見てみよう。

両社ともに近年の平均年収は一千万円を越えて、トヨタやフォルクスワーゲンの一・二倍と云われている。その結果、現代自動車労組の給与水準は、生産性まで考慮すると米国アラバマ工場の二倍以上になってしまった。

これでは、韓国内に二十年間、新工場を建設できなかった理由も、経営側が韓国内の生産削減に動きつつあるのも良く判る。

その上、二〇一三年末の大法院（最高裁）の「定期賞与は（残業代計算の基礎となる）通常賃金に含まれる」とする見解に基づき、残業代等で一人当たり約七〇～一二〇万円の実質賃金増となる可能性が現実化している。事実、起亜自動車では五年間の裁判の結果、今年八月に組合員一人当たり過去三年分の補償として百五十万円（年当り五十万円）を獲得した。それにもかかわらず起亜車労組は「通常賃金と認定されなかった部分について、もう一度判断を受ける」として控訴状を提出している。

この判例は現代自動車にもいずれは適用されるであろう。日本ではありえないことであるが、韓国の大法院は、慣行や国際的な常識を無視して法理のみで「慰安婦問題に対する韓国政府の対応を憲法違反」と決めつけるような「政治的な判決」をしばしば出す。

今の現代自動車の状況は、中国市場や米国市場での販売不振によって、輸出が大巾に減少し、上半期は過去八年で最低となった。今年初、倒産した世界第七位の韓進海運の負債総額は三兆円に上るが、現代自動車グループが第二の韓進海運となるとの警鐘も鳴らされている。

それにもかかわらず、現代自動車労組は強硬である。例えば、昨年の賃金交渉では、賃上げ、成果給、奨励給

に加えて株式一〇株を支給するという暫定回答案（組合員一人当たりにすると平均一七〇万円）さえも七十八％という圧倒的多数で否決してしまった。今年も既に例年通り秋にストライキを行うことを決議している。

ちなみに、現代自動車の下請けの賃金は現代労組の半額、孫請けは三分の一であるが、組合員の賃上げは、必然的に下請けや孫請けにしわ寄せされる。現代労組は自分たちさえ良ければ、下請け、孫請で働く労働者に配慮することなどには眼をつむり、労働貴族の特権を子孫が継承できる制度さえ要求している。そのため大卒の就職難が深刻な韓国では、さすがに新規採用を狭めるとして大きな社会問題になっている。

これら現代自動車労組の集団エゴイズムに対して、市民団体が「現代自動車が毎年労組による賃上げ交渉に屈服した結果、国際競争力が低下しその負担を下請け業者に押し付けている」と厳しく批判するデモを行ったこともある。労組に対するデモなど前代未聞である。

最近、ソウル大教授・宋虎根が『行ってみなかった道』と云う著書で「労組が作業場を完全に掌握した。だれも触れることはできない鉄壁の要塞だ。これが現代自動車を危機に追いやっている」と警告した。韓国で出版された著書なので、入手に手間取っているが、簡単な内容なら韓国のネット上で読める。

著者の宋虎根は一年間にわたり現代自動車の蔚山工場を訪れ、役員から末端社員まで五〇人ほど深層インタービューをして、学術的批判にとどまらず、生々しい事例と肉声を通じ現代自動車の赤裸々な姿を掘り起こしてきた。ちょっと拾い読みすると次のようなことがある。

労組の要求で名札から職級表示は消え、代わりに労組幹部の表示のみを行っている。

代議員を示す「赤いベスト」は特権の象徴となり、労組役員になるのが出世の道。

作業場における労組対経営の権力比率は九対一。中間管理職はただ顔色をうかがうばかりだ。

生産性を表示する指標ひとつ決めるにも、組合の合意を必要とする。そのため、開発期に成功した生産体制を新しい時代にふさわしく変えることができない。

労働者の町だが労働者の身なりは見られない。作業服さえ脱げば中産層の家長である。

私の関心は、現代自動車の労組が如何にして作業場を完全に掌握したかの過程である。日産自動車における労組の職場支配と類似する点と相違する点は何だったのだろうか。その歴史を振りかえってみよう。

一九八七年に設立された現代自動車の労組は、もともと戦闘的であったが、決定的に作業場の支配権を獲得し

たのは一九九七年のＩＭＦ通貨危機以降である。

危機発生の翌年、現代自動車は一万人に迫る組合員を整理解雇した。しかしそれからわずか数ヶ月後に、現代自動車の経営者は倒産寸前の起亜自動車を買収したのである。その際の不信とトラウマが労組を戦闘的にし、その渦中で作業場は労組代議員によって完全に掌握されてしまった。毎年、年中行事のようにストライキが続く。

二〇〇七年九月には、労組は十年ぶりにストなしに年内の賃金・団体交渉の合意に至ったが、合意事項には、①新車の生産工場と生産量を労使共同委員会で審議・議決する。②海外工場の新設・増設はもちろん、国内生産車種の海外移転や海外生産製品の第三国輸出までも労組の同意を受ける、とある。これでは、今後の経営戦略のほとんど全てに労組の同意を必要とすることになり、事実上現代自動車は経営権を労組に握られたに等しい状況となった。

続く翌年二〇〇八年九月の労使交渉では、それまでの「昼間夜間二交代制」を「昼間連続二交代制」、すなわち、夜間組の勤務を廃止し、午前組と午後組が二交代で夜十二時までに作業を終える制度に合意した。

労組専任者は九〇人であるが専任者待遇を受ける委員が一二〇人、「赤いベスト」の労組代議員の定員は四五六人いて、事実上の労組専任者は五〇〇人余りで労組員の一％以上に相当し、会社側が給与を支給している。

一方、トヨタ自動車では専従者が〇・二％以下である上に休職扱いで、労組が給与を支払っている。

以上のように現代自動車が労組によって経営権を握られてしまった経過を追いかけてみたが、作業現場における人事権をほぼ完全に労組に握られた点など日産自動車と多くの共通点を持つ。

しかし、労組幹部が経営者幹部と癒着して「労使二重権力支配の構造」を築いた日産の場合とは大きく異なる。

何よりも、日産労使関係の原点は一九五三年の日産大争議における会社側第二組合の勝利にあり、それを推進した日産中興の祖・川又克二が、その後、自己の保身のため癒着した組合を利用したことにある。

日本を震撼させた一九五〇年のトヨタ大争議は、痛みも大きかったが、その後のトヨタ自動車に労使協調路線を誕生させた。経営が悪化して二千名の指名解雇が提案された時、トヨタ労組は愚直にストライキを徹底して戦い、そしてその難しさを痛感した。経済的に追い詰められた赤字企業が解雇を一切できないのであれば、市場競争に敗れ結局倒産し全員解雇となってしまう。企業内組合のトヨタ労組は長引く闘争の中でイヤと云うほどそのことを学んだ。

それに加えて、創業者社長の豊田喜一郎らが解雇の責任を取って辞任した。厳しい市場経済の仕組みを認識すれば、解雇反対のストライキには虚しさもあり、約二ヶ月にわたる大闘争は、二千人前後が希望退職という形で去り、六千人近い人たちが残る形で終結した。これを契機に組合は会社に協力的になって行く。

一方、一九五三年五月に全自動車労組は統一闘争として、日産、トヨタ、いすゞの各分会が三社共闘の体制を組み、一斉に賃上げ要求書を各会社に提出した。益田哲夫を組合長とする日産自動車分会でも八項目におよぶ要求を提出している。これに対して、興銀派遣の川又克二専務は強硬な態度で臨み、全面拒否した上で、逆にノーワーク・ノーペイ（就業時間中の組合活動に対しては賃金を支払わない）の原則の承認や課長職の非組合員化を求めた。

その頃、後に「塩路天皇」と称される塩路一郎が、明治大学の夜間部を経て昼間部を卒業し、日本油脂での「組合対策」の実績を売り込み二十六才で入社、労務課員として会社側組合作り従事する。一流大学の正規卒業者しか採用しなかった日産にあっては異例のことであった。

実際に、川又専務の意向を受けて第二組合作りを推進したのは、「企業研究会」という若手学卒の秘密組織で、その中心人物が一橋大学卒の宮家愈であった。塩路と同年配で一歳年上である。結局、この「第二組合」の結成が、日産大争議の勝敗を決し、第一組合は総崩れとなり潰滅した。

その後、川又克二と宮家愈のラインが経営権を握り、その余勢で気に入らない役員、部課長を排除して行く。

この頃、塩路一郎は労組に青年部を作り、会社の文化体育部の予算を使い、これを紅衛兵やヒトラー・ユーゲントのような要員、いわば塩路の私兵として育て、彼らが常任委員ともなれば、一般社員と較べ格段の差がつくような仕組みを作った。塩路の批判でもしようものなら、御庭番みたいなスパイがいて、確実に塩路の耳に入るので、酒を飲んでいても危なくて愚痴めいたことはいえなかった。その過程で、塩路は宮家の第一の子分として頭角を現す。

当時の浅原源七社長は、川又グループに経営陣を乗っ取られるのを危惧し、川又のバック興銀に泣きつき、その了解のもとで、川又を日産ディーゼルの社長に出すことを決めた。いわゆる浅原クーデターである。これに驚いた川又は、宮家に「極秘スト」を計画させ、更には「ゲージ誤作動」等によりわざわざ不良を作らせ、興銀を揺さぶって、生き残りに成功、二年後の一九五七年に社長に就任する。

その功績によって宮家は日産自動車労連の会長となり「宮家天皇」と云われるほどになった。しかし、宮家の望みは労組における出世ではなく、企業内のエリートとしての出世であった。会社側から「下番して（職制に戻って）トヨタの神谷の対抗馬にも相応しい営業担当を」と

持ちかけられ、これに乗る。当時の神谷正太郎は、製販分離のトヨタにあって、トヨタ自販の社長として「販売の神様」と称されていた。宮家は労組の後継者として、塩路一郎を選び、箔付けのため米国に半年間留学させ、下番に備えた。

しかし職制に戻った宮家は期待に反して業務部長の職務であった。それでも三十六歳で、同期に較べれば、二階級特進であったが、神谷正太郎の名前まで出して、営業担当をと云われていたのと落差があまりにも大きかった。

実質的な権力を喪失した宮家は、後継者の塩路を動かし「極秘スト」で川又を揺さぶろうとするが、ここで実行責任者の塩路が恩人の宮家を裏切り川又に付く。しかもその過程で宮家の配下にあった三人の副会長（川鍋精一、松本公夫、増田勝己）を次々に失脚させ、一気に川又・塩路体制を確立してしまった。

「宮家天皇」の時代でも、川又派でない幹部社員が川又に刃向かうと見られた場合には、組合がそこに登場して何やかやと面倒を起こし、作業を停滞させたり、資材の入荷を遅らせたりしていた。もちろん、その実行部隊は塩路の私兵「青年部」であった。したがって、川又・塩路体制となってからは、労使の両サイドで更なる粛清の嵐が吹き荒れた。

一九六六年のプリンス自動車併合では、総評傘下の過激なプリンス労組への対応が焦点であった。塩路一郎は、まずプリンスに友人を持つ労組員のリストを作成し、彼らにプリンス労組の職場委員クラス（中央委員と大会代議員）を攻略させた。その結果、プリンス労組の中央執行委員会は孤立してしまい失脚する。

その一方で、プリンス傘下の部品メーカーの労組対策も重要課題であった。塩路は親会社が子会社に役員を送り込むかのように、塩路の私兵を送り込み、労組ばかりでなく、発註などを通じて、実質経営権にまで握ってしまう。ここに日産グループにおける「塩路天皇」が完成したのである。

塩路は「権限と権力をふるうには、相手をこわがらせないといけない」と考えていた。

そのため、日産社内においては、まず有能で鼻っ柱の強い部課長を標的に「ゲーム」を仕掛けた。例えば、新人社員の歓迎会で組合に批判的な話をしたと難癖をつけて、組合事務所に呼び出して、部下達につるし上げをさせる。そこにおもむろに塩路が現れて「今日は何の用ですか、そんな細かいことで、お呼びして済みませんでした」と詫びながら、川又と通じていることをちらつかせて脅かすのである。このゲームで二十人はやられたという。

また、傘下の部品取引先の社長に対しては、日産を代表しているのはこの塩路本人であり、もし自分に逆らうようなことがあったら、日産との契約は取り消されるかも知れないと脅かしていた。例えば、部品メーカーの社長会が月例ゴルフをやる日にわざわざ、塩路とゴルフをするよう要求して忠誠心を試したり、部品メーカー社長会に、わざわざ遅れて到着し、まだ食事が済んでいないとの理由で、社長達を待たせたりした。意図するところは明白であった。部品メーカーの社長は、日産から注文を取ればよいのではなく、塩路からも注文を受けなくてはならなかった。

かくして塩路一郎が銀座のクラブで飲むときなど、労組担当の役員でさえ、直立不動で出迎える有様であった。

その権力掌握のプロセスは、実に巧妙で、何かマニュアルがあったに違いないと思う。

それは、私の勤務した会社で経験した組合による職場支配のプロセスが実に良く似ていたからである。「塩路天皇」に遅れること五～十年の時代差があり、企業規模も異なっていたが、日常的におきる生産活動のトラブルを利用して、特定な経営幹部と連携して現場管理職を揺さぶるのである。

私が製造所の生産管理部門を担当していた頃は、労組との摩擦を避けてやり過ごしたが、不満が昂じていた。研究開発部門に移ってからは、直接的な影響はなかったが、ますます労組が特定の経営幹部と癒着している姿を苦々しく見ていた。

ちょうどその頃、青木慧の『偽装労連・日産S組織の秘密』（一九八〇）を読んだのである。労組委員長のやり方が塩路とあまりにも良く似ている。そこには何かマニュアルがあったのではないか。さあ、これから、いくつかの比較事例を紹介してみよう。

そう思った矢先である。著名ジャーナリストのディビッド・ハルバースタムの『覇者の驕り』（一九八七）を知った。副題に「自動車・男たちの産業史」と名付けたこの千頁を越える著書の中で、日産労組問題が実に詳細に論ぜられていたのである。

実はここまで書くのに参照したのは、『偽装労連・日産S組織の秘密』の他に、高杉良『労働貴族』（一九八四）、そして塩路一郎が権力喪失後の晩年に書いた『日産自動車の盛衰・自動車労連会長の証言』（二〇〇一）などである。それぞれボリュームのある書物であるが、本稿を書くに当たっては、それなりに精読していた。

しかし、『覇者の驕り』を読んで、圧倒されてしまい、書き続ける意欲を失ってしまった。ノンフィクションとはこう書くものだ。

ハルバースタムが五年間かけて本書を書こうと決意したのは、一九八〇年のことである。日本の自動車産業が興隆し、時を同じくして米国の自動車産業は衰退に向かっていた。ピューリッツアー賞を受けたこともあるバルバースタムは、綿密な取材と問題意識によって、既に世界的なノンフィクション作家であった。その彼が、巨大な自動車産業を描くに当たって、主な対象としたのは、GMでなくフォード、トヨタでなく日産であった。そこにジャーナリストとしてのセンスを感じる。

世界の自動車産業史の中で日産自動車を追いかけ、川又克二、宮家愈、塩路一郎、そして石原俊を論じているのを知ると、今まで参照した日本の著書から抜き書きしたような私の「紹介」が薄っぺらに感じられる。

日産に関する記述は、合計しても百頁ほどに過ぎないが、日産問題の本質を鋭く指摘している。

興銀派遣の川又克二は、日本の国内市場が爆発する最も重要な時期に、投資を求める技術部門に対して、金縛りにでもあったように身動きできず、結局トヨタから三年の遅れをとってしまった。その反面、自らの支配を固めるためには実に積極的で、敵となりそうな人物は、宮家や塩路を利用して次々に排除していった。

執筆をいったん中断したものの、自分で決めた締切日が近づくと落ち着かない。別の稿を起こすのも気が重い。ハルバースタムに学びながら、その後の経過を書き続けることにした。

塩路は、プリンスの吸収後にバラバラであった下請部品メーカーの淘汰に辣腕を揮い、部品の供給が止まるとラインストップしてしまうような重要な会社を直接支配に、その他は間接支配に纏め上げて行く。

また一九六八年には、配下の田淵哲也を参議院に送り込み、政界での発言力を確保し、更には一九七二年に日産系の自動車労連を中核として、トヨタ、マツダ、三菱、ホンダ、いすず、ダイハツ等の十二連合による日本自動車総連を組織し、その会長に就任する。

その「塩路天皇」もついに石原俊との抗争に敗れる日を迎える。一九一二年生まれの石原俊は、日産の新世代の先頭に立ち、早くから社内で将来を約束されていた。異例の出世で四十代初に取締役経理部長になり、浅原社長からも川又専務からも気に入られていた。

しかし石原は組合に牛耳られているような権力を好ましく思わなかった。浅原クーデターの時、石原は無言の合意を与えていたとして、川又克二は石原を許さず不和が始まったという。いや、塩路一郎によると、文春の田辺記者の話として、石原が浅原クーデターの時に、川又邸で川又夫妻に対して「もうこうなったら、日産車体で

も貰って、おとなしく引き下がった方が良いよ」と云ったと云う。

石原は川又より七歳若く塩路よりも十五歳年上であるが、四十代で社長になることを自他ともに当然のこととしていたらしい。

しかし、反クーデター派の逆転により、石原も冷や飯を食わされる。まずメキシコ輸出担当、そして米国輸出担当となったが、将来有望な市場ではあっても未知の世界であり、輝ける座ではなかった。そして一九六〇年になると不振の米国日産自動車の社長を兼務することになる。そこで石原は小型車を武器として、フォルクスワーゲンのシアーを浸食し、米国における橋頭堡を築くことに成功したのである。ハルバースタムはこれを高く評価している。

後に、石原は、塩路が留学経験のある米国進出を主張するのに対して、英国進出を強行するが、石原は米国自動車産業を良く知っていたのである。

しかし川又・塩路の長期政権が続き、やっと川又会長の下で、社長の座に上ったのは一九七七年六十五才の時である。二十年間、雌伏した後の社長と云うだけでも、只者ではなかった。

石原はまず「社長室」をつくり、労組に近い役職員を外部に転出させることから始めた。それが本格化したのが一九八一年の大移動で、労組系の部課長の大部分が左遷あるいは関係会社へ出された。特に、歴代の人事部長は全員外に出され、石原と塩路の対立が決定的となる。

石原はトヨタに追いつき追い越せとの大号令のもとで、英国への工場進出を図る。川又のもとで、トヨタに三年遅れた初期投資が、その後の日産に焦りをもたらしていた。強気の石原のもとで、過大な海外投資が続く。

これに待ったをかけたのが、川又克二会長と労組トップの塩路一郎であった。

「英国工場進出問題」は石原と塩路の間の対立と云うよりは、日本自動車産業全体の大問題であったが、石原が自動車総連会長の塩路を無視して進めたことにも大きな原因があった。

塩路が率いる自動車労連は記者会見までして英国進出に反対し、「強行したらラインを止める」と迫った。さすがに経営権の侵害であると経済界では不評であったが、この時川又が塩路を支持したので社内は大混乱に陥ってしまった。

ここで石原は塩路への総攻撃を始める。

この頃、日産のマスコミへの出稿費用は、トヨタを大きく上回り、塩路を潰すためなら金に糸目をつけなかったと云う（注2）。それが成功したのが、一九八四年の『フォーカス』に「塩路会長がホステスを連れてヨット

遊び」のスキャンダル記事、そして続く一九八六年の「フライデー」の「盗撮事件」である。いずれも後に塩路が反論しているように、会社側が仕組んだスキャンダルであった可能性が高い。しかし組合に青年部という密告組織を作り、多くの敵を葬ってきた塩路もついには逆に謀られたらしい。

かくして、会社側は世論工作に成功し、一般組合員が塩路から離叛し始める。そこで中心的な役割をはたしたのが、塩路に次ぐ労組ナンバーツーの清水春樹の裏切りである。

塩路のあと自動車労連の会長代行となり、組合を掌握し、一九八七年には塩路を定年退職に追い込み、その影響力を完全に除去してしまった。歴史は繰り返される。

ここまでみて来たように、世界の自動車産業を代表する、現代自動車、トヨタ自動車、日産自動車の初期大争議の終結状況はそれぞれ異なっていた。

いずれも絶望的な経営環境の中で、人員整理を強行して、強烈な組合の抵抗を呼んだ点では同じであるが、整理して云えば、現代自動車の場合、一万人もの人員整理の直後に、倒産寸前の起亜自動車を買収して、労組に不信とトラウマを植え付け、強烈な労組支配を呼んでしまった。

それに対して、トヨタ自動車は創業者社長の豊田喜一郎が解雇の責任を取って辞任し、その後の労使協調路線を確立して、世界一位の地位を獲得した。

一方、日産自動車は、興銀をバックにした川又克二が解雇を強行したため、その後も組合は常に戦闘的であり、川又は組合対策として、極秘の内に宮家等を使って、御用組合を組織し第一組合を潰滅させた。

しかしその過程で生じた川又と宮家の癒着は、その後、日産社内と組合内に、謀略、裏切りの連鎖を生み、結局、労組「塩路天皇」と川又による「ゲシュタポ」的な特異な日産グループの支配が完成してしまった。その際に、中堅管理職達の多くが「塩路天皇」の前で虚勢されたことが日産のその後の運命を決めたのではないかと思う。

日産がより小さなルノーの傘下に入った原因を石原の過大投資とするのが、今日の意見のようである。その点では塩路の路線が正解だったのかも知れないが、企業の体質を決めるのは中堅層の活力だと思っている。

最近発覚した日産自動車における「非認定者による完成車検査」もその流れの中で生じたのではないか。

もともと、日本では、専任の監視人（検査員）を好まず、良く云えば、作業者自身が実質的な検査まで担当する「性善説的」な風土があった。これは日本の強みであったが、作業現場が強くなるとバランスが崩れる。国際的な品質管理マネージングシステムＩＳＯ九〇〇一さえ、いった

ん取得してしまえば、「飾り物」としてしまう企業風土の国である。川又・石原・ゴーンと続く中で、中堅管理職層の力が、現場末端まで及ばなくなっていたように思えるのである。

注記1　日産に続いて富士重工のスバルでも無資格者検査の実態が明らかになった。スバル四十万台のリコールに二百億円要すると云う。日産の百二十万台リコールで一百億円という評価が如何に甘い認識か判るであろう。

注記2　この頃、塩路一郎によれば、日産の総広告宣伝費は七百億円に達していたという。

参考文献
青木慧『偽装労連・日産S組織の秘密』汐文社、一九八〇
高杉良『労働貴族』講談社、一九八四
ディビッド・ハルバースタム（高橋伯夫訳）『覇者の驕り』日本放送出版協会、一九八七
塩路一郎『日産自動車の盛衰・自動車労連会長の証言』緑風出版、二〇一二
佐藤正明『日産 その栄光と屈辱 消された歴史 消せない過去』文藝春秋、二〇一二

（二〇一七・一一・一六擱筆）

青雲の彼方（一）

太田精一

羽英二のその後の人生に大きな影響を与えた記念すべき日となったのである。

日露戦争終結の翌年の明治三十九年四月に神戸高等商業学校に入学した天羽は、同年七月、学生のために陸軍省が主催した日露戦争の戦跡を辿る満州、朝鮮旅行に参加した。二〇三高地には、同月二十九日に到着している。

天羽は、神戸高等商学校入学の頃から、国際情勢に関心を持っていた。同時に経済学、商学以外にも哲学、文芸などにも興味を示し、幅広い教養を備えていた。彼は、世界の中の日本のあるべき姿を見極めたいと考え、この満州、朝鮮旅行に参加したのである。

旅行を企画した陸軍省の目的は、陸軍の将兵たちがいかに勇敢に日露戦争を戦い、戦績を残したかを学生たちに実地検分させるためのものである。

日露戦争に勝利した日本は、ナショナリズムが高揚し、

一、満州、朝鮮旅行

（一）激戦を語る二〇三高地

二〇三高地は禿山であった。道の脇には無数の墓石代わりの石が立っている。頂上に登ると日露戦争最大の激戦地となった旅順攻略戦の爪痕がいたるところに残っている。

頂上から見下ろす旅順新市街は、砲撃による破壊の跡が痛々しい。港には多数のロシアの軍艦が夏の日差しを浴び、無残な姿を晒している。二〇三高地の後方には日本軍の壕が点在している。

旅順攻略戦に散って行った日露両軍の二万を超える兵士の眠る戦野は、荒涼とし、静寂に包まれていた。

二〇三高地を訪れた明治三十九年七月二十九日は、天

国民こぞって勝利の喜びに浸っていた。学生たちもその例外ではない。旧制高等学校、高等商業学校、旧制中学校、早稲田、慶応などの学生たちも、満州、朝鮮への関心を高めていた。そのため、参加者は引率者を含め、総勢七百十三人にも及んだ。旅行の実施に当っては、学校を単位としてグループ分けを行い、そのグループごとに行動を共にすることになった。

日本は、日清戦争の勝利と義和団鎮圧への参加によって国際的な地位を得た。

欧米列強の仲間入りを目指した日本は、富国強兵を国策に掲げ、近隣諸国への勢力拡大を図った。だが、北方には、軍事大国ロシアが南下政策を始めている。満州を勢力下に置いたロシアは韓国への進出を虎視眈々と狙っていたのである。

ロシアの南下政策への脅威を感じた日本は、韓国を緩衝地帯として、ロシアの進出を防ぎ、同国を日本の勢力下に置き、支配しようと企図した。

そこで日本は、ロシアの満州、韓国への進出に警戒を深める欧米列強に接近した。国際世論を味方に付け、経済的支援と近代的な兵器の購入を容易にしようとしたのである。支援が得られる見通しの立った日本は、ロシアとの開戦に踏み切った。

開戦と同時に、まず必要なことは、制海権を握ること

であった。それには、ロシア太平洋艦隊の存在が邪魔であり、その根拠地である旅順を叩く必要があった。裏を返せばロシア側にとっても太平洋艦隊の存在は、ロシアの戦争遂行能力を左右するものであったのである。

ロシア太平洋艦隊の根拠地である旅順は、日露双方にとって戦略的に重要な拠点であり、その攻防戦は、日露戦争の勝敗を決するきわめて重要な戦いであったのだ。

この攻防戦だけで、ロシア側死傷者は、三万一千人、日本側は、五万九千人にも及んでいる。満州、朝鮮旅行の第一の訪問地を旅順に持ってきたのは、そこにあった。

満州、朝鮮旅行に天羽が参加し、出国したのは明治三十九年七月二十三日であった。彼にとっては、初めての海外旅行である。天羽の参加は、単に日露戦争の戦跡を視察するだけでない。自分の目で見た当時の満州、朝鮮各地の文化、風土、民情を見聞するためでもあった。彼は、旅行によって得た体験や情報を克明に日記に描いているのだ。

出国の二日前、天羽は神戸を出発した。山陽線の列車で姫路、岡山、広島を経て二十二日の朝宇品に到着。宇品港から汽船で瀬戸内海を航行、翌二十三日に門司を経由して、大連に七月二十六日に上陸した。

大連は、ロシア風の街並みでヨーロッパの香りが漂っている。欧州と中国の文化が混在し、神戸とはまた違っ

た雰囲気に包まれていた。天羽は、生まれて初めて外国の地を踏み、八月十九日までの三週間余り未知なるものを体得出来る喜びに胸を弾ませるのであった。

日露戦争後遼東半島南部の旅順や大連は、日本の租借地となっていた。

大連の人口は、四十二万人、その内日本人の居留民は六千二百人程度いた。街を歩くと日本人が中国人を殴る光景をしばしば目撃する。天羽は、弱体化した国の国民がいかに憐れあるかをまざまざと感じるのであった。大連近郊の農村は石を積んだ藁屋根の家が多く、家々に豚を飼っている。

農夫が悠々と長いキセルで煙草を吸いながら、草むらにたむろする羊の群れを目で追っている。

農家のまわりの空き地に点在する乾いた馬糞を拾い集めている老人がいた。中国人の案内人に馬糞を拾うわけを、通訳を通して聞いてみた。

「馬糞なんか拾って、その馬糞をどうするのかね」

「燃料に使う。ここでは馬糞は大切な燃料だ」

（草原と畑に囲まれたこの地では、糞も貴重な燃料に違いない）と天羽は思った。

日没前に大連に戻った。街には、灯りがともり、街角には厚化粧をした女たちが客を引いている。路地裏は、異様な臭気が立ち込め、天羽は思わず鼻をつまんだ。

（二）最後の決戦地奉天

天羽は、旅順を七月三十一日に発ち、五、六人の友と一緒に金州城に向かった。金州城攻略戦は、南山の闘いとして知られている。この戦いは、日露双方の初めての砲撃戦であった。日本軍二〇〇門、ロシア軍五〇門の大砲がさく裂し、その後突撃を繰り返す日本軍に対し、ロシア側は機関銃で対抗した。日本軍は、多くの死傷者を出したが、金州湾に進出した日本軍艦が背後から南山のロシア軍陣地を攻撃したことによって同地を占領することが出来た。日本軍は、この戦闘で四千人を超える死傷者を出したが、勝利し遼陽へと兵を進めることが出来た。

天羽は戦記を思い浮かべ、標高百十五メートルの南山に立った。山の中腹に塹壕が延々と続いている。砲撃戦の跡の残る堡塁や塹壕を見て回り、改めて近代戦の恐ろしさを実感した。

その後天羽たちは、金州城にて昼食を摂り奉天に向かった。高粱と赤土ばかりの平原を汽車は突き進む。ロバ、馬、牛、豚などの家畜が群れている。

日が落ちて来た。太陽が西空を真赤に染め、その最後の雄姿を誇示しながら平原に消えて行く様は、大清帝国の行く末を暗示するように彼には思えた。やがて煌々と輝く月の光を浴びながら、汽車はひた走った。遼陽を真夜中の三時に通過し、八月一日の午前七時に目的地の奉天（瀋陽）に到着した。

奉天は、日露両軍が平原で会戦した最後の戦場である。日本側の総兵力二十五万人、砲九百九十二門、機関銃二百六十八丁。これに対しロシア軍は、総兵力二十九万二千人、砲千三百八十六門、機関銃五十六丁という陣容で対峙した。両軍合わせて五十六万人の兵を動員した史上まれに見る大会戦である。明らかにロシア側の戦力が勝っていた。だが、機関銃の数は日本側がロシア側を上回っている。この戦いで、日本側は七万人、ロシア側は、九万人に及ぶ死傷者を出したと記録されている。その上ロシア側は、二万人以上の捕虜を出した。そのことを考慮すると、この戦いでロシア側は、日本側を大幅に上回る兵力を失ったことになる。

奉天の兵站部に投宿した天羽は、南京虫の群れに悩まされながら仮眠をとった。奉天は、日本の影響下にあるとはいえ、租借地ではない。

正午に高粱畑の続く平原を進み、北陵に入った。北陵には、清朝を擁立し、後満州国皇帝となった一族、愛新覚羅氏の廟がある。黄金色の瓦が葺かれた石造りの廟が森林に囲まれ、栄華の名残を留めていた。かつてはこの場所で祭礼が盛大に執り行われていたという。

天羽は、沈みゆく夕陽を浴び、奉天の南門に立った。真夏とはいえ、辺りの空気は急激に冷えて行く。時計の針は、すでに八時を指している。太陽に変わり月の光が地上を照らし始めた。

（一年半ほど前は、この月の光も夜襲の邪魔になると兵は、恨んだに違いない）と天羽は思った。

翌朝五時に起床した天羽は、六時に朝食を摂り、兵站部の兵士の案内で、奉天市内を見学した。道路は広いが、舗装してはいない。道路脇に軽便鉄道が通っている。だが、舗装してない道路の脇に敷かれたレールは、でこぼこしていて車両が通るたびに砂埃が舞い上がった。雨が降ればぬかるんで通行に支障をきたすことが容易に想像出来る。

小西門から奉天の市中に入った。市内を見下ろす内壁の中に楼門がある。その中にある宮殿を日本の兵士が案内することになっていた。だが、その兵士が、宮殿の入殿許可書を持っていなかったため、二時間も待たされ、やっと入門することが出来た。日本兵をまねたカーキ色の軍服を着た中国の兵士が、銃を持って立っている。宮殿には、剣の代わりに警棒を持った巡査もいた。

宮殿は、荒廃していたが修繕中であった。天羽は、内部を見学した後、奉天の繁華街に足を運んだ。見世物小屋、演芸劇場、覗き見装置、夜店など並び人が溢れている。服装は貧しかったが、活力と喧噪と猥雑さが入り混じって独特の雰囲気を醸し出していた。

小西門を出て、左に曲がると罪人首切りの場所があった。案内の兵士から昨日は七人斬首されたと聞いた天羽

は、残酷な処刑制度の残っている清国の統治の乱れと治安維持の難しさを感ずるのであった。処刑場の近くに死体を運び込む小屋と首小屋があり、幾多の頭骨が散乱している。その近くに放置された死屍がある。まさに悲惨としか言いようのない光景であった。当時の奉天は、道端に糞が転がっていて、放し飼いにした豚が所々にうろついている。それほど荒んでいたのである。

(二) 鉄嶺から遼陽へ

天羽たち一行は、八月三日朝四時半に起き、七時の汽車で奉天を後にし、北の鉄嶺に向かった。霧が深く寒い。大平原の中を通過し十時二十分頃鉄嶺駅に到着した。

午後、天羽たちは、案内人の先導により市内散策に出た。西門から、中門を抜けて東門に出た。道は他の都市と同様すこぶる悪い。扁額に鉄嶺県と書かれた建物の中に入ると大勢の人がいる。その奥に机が置いてある。赤毛を付け、帽子をかぶった官吏らしき人がその机を前にして座っている。

罪人が呼び出され何か尋問されていた。どうやら裁判が行われているらしい。その周りには、牢獄があった。その牢獄の中には手枷、足枷をはめられた罪人たちが食べ物を口にしたまま、大声で話し合ったり、げらげらと笑いあったりしていた。

東門付近には、青果市場があった。市場は、悪臭が漂っている。魚はほとんど見かけられない。

金持ちの住む地域には、政府高官が住んでいる。鉄嶺の日本人は、男千五百人、女六百人、その多くがこの街区に住んでいるという。鉄嶺まで来ると夜は涼しく、朝は寒くて震えるほどであった。

鉄嶺から悪路を西に向かい遼河の船着場馬峰溝に到着した。ここは鉄嶺の物産集積地である。遼河は土手堤で石垣はない。河岸までは、百七十メートル余り、泥水が滔々と流れ数百のジャンクが帆柱を連ねている。船上で歌を歌う者、将棋を指す者、荷物を運ぶ者、実にさまざまなのどかな暮らしが見られた。

鉄嶺を夜八時十分の汽車で天羽たちは、遼陽に向かった。車窓から眺める月が実に美しい。遼陽には、夜明けも近い三時二十五分に到着。朝九時頃激戦地首山堡に着いた。

首山堡は、遼陽市近郊の小高い丘陵にある。そこにロシア軍は強力な陣地を敷いていた。日露両軍が開戦以来、野陣を敷いて会戦した最初の戦いは遼陽会戦である。その橋頭保が首山堡なのだ。

遼陽戦は、旅順攻略部隊を除いて、日本陸軍の全軍が集結した初めての大会戦である。それに対し、シベリア鉄道によって運ばれた援軍を加えたロシア軍が、奉天の南南西六〇キロの遼陽で全面対決したのである。日本軍の兵力は十三万四千五百人、砲四百七十四門。一方、ロシア軍は兵二十二万五千人、砲六百五十四門で圧倒的な戦力を誇っていた。だが、十一日間の戦闘の後、結果はロシア軍の退却で幕が下りた。この戦闘で日本軍は、戦死五千六百人、戦傷一万八千人。ロシア側は、死傷者併せて二万人と発表されている。日本軍の戦傷者はロシア軍を上回った。それだけ大きな犠牲を払って得た遼陽戦であったが、この戦いは、その後の日露戦争の戦略に大きな意味を持つことになったのである。首山堡で第一大隊を指揮し、戦死した橘少佐は、海軍の広瀬中佐と並んで軍神として後に崇められている。

天羽は、首山堡に登ってみた。頂上に狼煙台が残っている。何故ロシア軍がこの地に布陣したか小高い山並みの続く丘陵地帯を眺めながら、彼は、ロシア側の戦略・戦術に思いを馳せるのであった。

横浜正金銀行（現三菱東京UFJ銀行）の遼陽出張店の中村徳三郎氏から天羽たち一行にビールが一本ずつ振る舞われ、次のようなレクチュアーを受けた。

「日露戦争以前、この地は中国人の設けた諸制度によって不完全ではあるが統治されていた。だが、ロシアが進出して来て土地を買収し、鉄道を設け、馬賊の横行を防ぐという名目で軍隊を派遣して来た。遼河による河川航行の港と鉄道の設置により物資の集積地としてこの地の人口が増加するにつれ、遼陽は満州を経営する上で、ロシアにとってますます重要な拠点となったのである。戦争が始まると日本の商人は、軍隊の駐屯地であるこの地で軍需物資の調達を行い、中国人は、商活動を目的に集まった。終戦後は、金を手にした中国人は、それぞれの郷里に帰った。だが、日本人は、日算の外れた人、一攫千金を夢見る人などを含め、この地に留まる者が少なくなかった。満州は、大連と営口が商業港として使えるが、どちらが日本の貿易にとって有力な港になるかは、ひとえに日本政府の対満州方針によって決まって来る。中国人は、実力すなわち金のある方になびくので、とにかく実力を付けることが肝要である」と。

天羽たちは、遼陽を夜中の三時の夜行で発ち、営口に向かった。途中牛家屯（牛荘）に下車、同地の宿舎で休息し、旅の疲れを癒している。泥を含んだ遼河の豊かな流れに沿って下ること三十キロ営口に到着した。

一八四八年に南京条約が結ばれた当時、営口は漁村にしか過ぎなかったが、一九〇〇年の義和団の乱の時に、ロシアの軍艦が占領した。日露戦争後、日本の占拠するところとなった。日本は同地に軍政署を設け、統治に当っている。

当時の営口の人口は九万人、日本人は七千人住んでいて、三井、三菱、日商、横浜正金銀行などが商活動を展開していた。

営口は、独、米などの欧米諸国の商人も多く満州にお

ける屈指の貿易港となっていた。治安は軍政署によって守られている。日本の憲兵を長として中国人の警察官を支配下に置き、裁判権も軍政局が握っていた。

韓国経由で帰国する予定の天羽は、八月七日八人の友人とともに、三等列車に乗り、営口から大石橋に出て、再び奉天に向かった。途中、撫順炭坑の一角をなす千金寨に一泊し、八月九日草河口に到着した。草加口に向かう途中駅にて停車した汽車が、時間を過ぎてもなかなか出発しない。

「何故汽車を出さないのだ」

天羽は車掌に聞いてみた。車掌は、黙って窓の外を指差した。

すると奉天で大勢の人に見送られ、立派な身なりをした満州貴族が、悠然と野糞を垂れている。彼はそれを見て滑稽に感ずると共に、のどかな大陸的な風土に育った人々の生活のテンポが日本と違い、併せて恥ずかしい行為に対する感じ方に対し、文化の違いを実感した。

草河口は、四方山に囲まれ、閑雅な土地である。天羽たちは、兵站部に投宿した。

八月十日天羽たちは、玩具のような安南鉄道列車に乗った。奉天から安東まで約三百キロ、無蓋車で煙や石炭の粉塵を吸いながら素晴らしい景観を眺めて、山の中を喘ぎ喘ぎ抜けて行く。安東県に到着した後、兵站部を訪ね、そこの軍人クラブに投宿、入浴後、夜の街に出てみた。日本が近いことを思わせるような明かりが灯っている。天羽は、ふと徳島を思い郷愁を感ずるのであった。

遊団地という場所に足を止めてみる。いわゆる遊郭で、厚化粧した女たちに声をかけられ、閉口した天羽は、早々に立ち去った。

翌日、鴨緑江の河畔に出てみた。水流は豊かで、遼河より澄んでいる。安東では、雑貨店、食堂、芝居小屋など人が賑わい、中国人、朝鮮人が入り乱れている。日本人の店もあるが、小さな店が多く中国の巨商をしのぐほどの規模の店はない。

鴨緑江七百九〇キロの内、五百六十キロは、小舟で往来することが出来る。河口に近い九十キロは、大船が航行出来るほどである。当時安東県の市街地は、中国人二万五千人、日本人七千人ほどであった。日本政府は、同地の開発に力を入れていて、電話の敷設、土地の買収、堤防工事を手掛けていた。

八月十一日、天羽は六人の同行者と共に小蒸気船で鴨緑江を渡った。韓国に入り守備隊本部にて宿舎の世話を受け、義州の池田旅館に投宿した。二十日振りに畳の上に寝て、旅の疲れを癒した。

朝は、清国から韓国の山並みを眺め、午後には、韓国から清国の山を見た。大河を隔てて二つの国が、言語や文化を異にし、存立している。天羽は改めて国境の持つ

意味を考えた。満州旅行中彼は、新開地で苦闘しながら先兵となって、立ち働いている同胞にエールを送り、国内で安穏と利益を享受している富豪に憤りを覚えるのであった。

(四) 韓国の国情視察後帰国の途へ

八月十二日早朝、天羽は広軌式の鉄道に乗り、平壌に向かった。車窓から眺める風景は満州とは一変している。山岳が多く、開拓が行き届き日本に似た風景が車窓の外に展開している。天羽らは、平壌に到着後五十八連隊の世話で、松岡旅館に投宿した。夕方大同江に出てみると波静かで、かつて日清戦争の頃、激戦地となったとは思えないほどであった。

韓国人は、壺などを頭に乗せ運んでいる。女の人は白い服を着ている人が多く看護婦のようである。男は、大きな傘のような帽子をかぶっていた。

平壌に二泊した後、八月十四日開城に向かった。開城府と扁額のあるところに開城守備隊の本部があった。守備隊員の案内で南大門の外の栄屋に投宿した。荷物を下し、すぐ郊外に出て人参畑を見学した。旅館の紹介で連れて来た子供に通訳させ、畑を管理している貴族の老人から人参栽培の説明を受けた。

この地は人参栽培の農家が実に多い。また、西洋人の建てた教会が多く見られ、キリスト教が韓国社会の中に浸透していることを物語っている。

天羽たち一行は、開城を八月十五日の朝出発し、同日十一時頃京城に到着した。南大門から入る。昼食後南山に向かう。市内を一望できるところに総監官邸があった。日の丸が高々とそびえていて、京城の街を一望できる。そこには軍令部、日本クラブ、本願寺、総監舎などがある。日本の影響下に置かれている実情を目の当たりにし、天羽は、複雑な思いに駆られるのであった。引き続き一行は、蝋石塔を見学した。石質と彫刻の美しさは驚嘆すべきものがあった。

雨が降りしきっている。東大門楼外西の京城市中を眺めた。官庁街には、通信管理局、農商工部、裁判所、法部、軍部、学部、警察庁、総監府憲兵司令部などが道の両側に並んでいる。

露国公使館が小高い丘の上にあった。国旗を翻して戦争後もその健在振りを誇示している。

西大門より左に折れ、大漢門に出る間に、各国公使館、新王室の建物があった。

翌日、南大門に天羽ら六人が集まり仁川に出向いた。仁川行きの列車の中は、客が少なく、三人で一車両を専有するほどであった。日本人公園から朝の仁川港を眺めた。園内は樹木が茂り丘の上には、八坂神社が鎮座している。そこの茶店から海を眺めていると仁川沖の海戦が彷彿と天羽の頭に浮かんで来た。

仁川は、京城の西約四十キロにある。ロシア軍の朝鮮半島進出を防ぎ、朝鮮を軍事的に確保する必要があった日本は、一九〇四年二月六日早朝、ロシアとの国交を断絶すると同時に、連合艦隊を、長崎県佐世保から出航させた。目的は、仁川港に停泊するロシアの軍艦を撃沈するためである。

二月八日、仁川港外で、日本海軍第四戦隊は、ロシア艦二艦と砲撃戦を展開した。日本海軍の砲撃を受けたロシア艦は、二艦とも損傷を受け、自沈した。

仁川港は、潮の干満が激しい。ちょうど干潮に当ったのか、汽船二隻が遙か遠い沖合を航行していた。天羽は、その汽船を眺めながら、平和の有難さを噛みしめていた。

街には、衣装、日常雑貨など日本の製品が溢れ、日本式の食堂もあり、日本の影響が、庶民にも深く浸透している。

八月十八日朝、天羽たちは、釜山に向かった。鉄橋を渡り隧道を抜ける。その繰り返しを重ね、汽車は走った。蒸し暑い上に乗客が多く、寝る場所もない。朝鮮家屋や城楼が、車窓を流れて行く。

ところどころ日本的な家屋も見られ、日本化が進みつつある。気候は、日本に近いが、やはりどこか日本とは違う。

釜山に到着し、松本旅館に宿泊した。夕食後最も賑やかな通りを散策した。町の風景が日本とあまり変わらず、通りの両脇に夜店が並んでいる。

十八日洛東江を遡り三浪津に出て小西行長の築いた廃城跡を見学、馬山浦に出た。馬山浦は、山に囲まれ水深深く恰好の海軍根拠地である。馬山浦より十二、三キロ離れた先に松進浦というところがあった。日露戦争当時、艨艟（もうどう）が集まって全滅を覚悟で戦闘するつもりであったが、その必要はなくなったという。

天羽ら一行は、八月十八日、釜山港から山陽鉄道に連絡している汽船、対馬丸に乗り込み、帰国の途についた。馬関海峡に錨を下した時、門司からランチが来て一行はそれに乗った。門司駅から山陽鉄道に乗り換え、神戸に向かう。

久しぶりに見る日本の景色は実に美しく感じられた。ましてや出征三年、満州の広野に故郷を思って戦った兵士たちにとっては、どれほどこの景色が美しく感じられたことか。天羽は、そのことを考え、宮島駅で途中下車し、厳島に渡った。無事満州、朝鮮旅行が出来たことへの感謝をこめて厳島神社を参拝した後、岡山経由で、夕方七時に神戸に戻った。

天羽は、この満州、朝鮮旅行において、満州に残留する邦人の動態調査を行っている。彼は、この調査によって日露戦争後、一般邦人が満州で何をなそうとし、何のために残留しているか、その動向を把握しようとした。

調査手法については、明らかにされていないが、彼が、同行した学生たちと共に、在満邦人に面接調査した結果を集計したものと推測される。その調査によれば、日露戦争直後の満州在留邦人の内、戦時中の軍の御用商人を含め商業目的で渡航し、残留した者が二割余。軍や実業家などの使用人として渡航し、残留した者が三割五分となっている。自己資本によって事業を起こしたり、商店を開いたりしている残留者は、意外に少なく一割にも満たなかった。また、一獲千金を夢見て資金もなく渡航し、残留している者は、ほんのわずかで二パーセントしかない。

一方、残留者の中には、台湾、清国北部、朝鮮から渡航した者が二割近くを占めている。

多くの残留者は、成功の糸口を求めて悪戦苦闘している状態であり、残留者全体の半数の五割を占めている。その中には、営業を始めたが、なかなかうまく行かない者、中国人と共同で事業を計画する者、一旦は失敗したが長春やハルビンまで足を延ばし事業を始めようとする者、小商いや労働に従事し、何とか食いつなぎながら青雲を夢見て在留している者などが含まれている。

日露戦争直後であるとはいえ、満州は清国の一部である。日本は、とりあえずロシアの進出を食い止め、南満州の一部における権益を得ることは出来たが、この当時はまだ領土的野心をむき出しにして、中国に譲歩を迫るほどではなかった。実際、農林・漁業に従事する者、公共的な仕事を行う者、技術、技能者など併せても残留者全体の一割にも満たない。残留者の四割は、事業の失敗や損失のため、日本に帰国したくても出来ず、望郷の念を抱きながら、悶々として満州に居残っている者たちであった。

（つづく）

（今回から始めたこの物語は、七千頁にも及ぶ天羽英二氏の日記をもとにしている。地名などは、当時使用されていた名称を使っており、新中国になって、使われなくなった箇所もあることをお断りしておきたい）

参考文献

天羽英二　日記・資料集　第1巻
波乱の外交史　天羽太平　徳島新聞社（1981年6月、30回に及び連載）
日露戦争100年　松村正義　成文社
日露戦争史　横手慎二　中公新書
日露戦争　近現代史編纂会　日本文芸社
日露戦争　児島　襄　文春文庫
10倍の大国に日本はなぜ勝ったか
瀧澤　中　中経出版

ウィーン学会紀行

大貫陽平

二〇一七年十月末、ミュンヘン空港を経由してウィーンに到着した私は、鉄道を乗り継いで、学会会場そばのホテルにチェックインした。

宿泊費はクレジットカード払いであり、このおかげで大金を持ち歩かなくて良いのは大変安心である。尤もオーストリア行きに当たっては四百ユーロを持ち込んでいた。これは五万円強程度の額であり、初の海外の学会でどの程度お金が必要かわからず、多目に換金した額であった。ちなみに四泊五日の行程のなかで使った現金は百ユーロ足らずであり、その大半を日本に持ち帰ることとなった。結果、私の引き出しには、使う当てのないユーロが三百ほど眠っている。

私がウィーンに行ったのは、ＩＳＷＣという学会で、ポスター発表をするためである。この学会は情報技術に

ウィーンに来て第一に驚いたことは、どの建物もとにかく巨大なことである。

学会に来る前、パンフレットでウィーンの町並みの写真は見ていたのだが、宮殿もパン屋も地下鉄も空港も、写真から受ける大きさの印象の、五割増しのスケールであった。特に驚いたのが地下鉄で、車両が日本の地上を走る電車と同程度の大きさであったのがまずひとつであるが、それよりも印象的だったのは、地下鉄のホームや通路が、無闇矢鱈と広かったことである。ホームは日本のそれの五倍ほどの幅があるし、地下通路に至っては、あまりの広さにスケートボードで移動している男性がいるほどであった。日本の地下鉄駅構内でスケートボードにのれば、誰かと衝突するのは必至であるが、ウィーンの場合、通路があまりに広いので、誰かとぶつかることもなく、危ないと思うこともなかった。

関する国際学会で、インターネットをより使いやすく便利にするための方策について考えている。

参加者は欧州からを中心に六百人程度で、日本からも二十人ほどが参加していた。このような規模の大きな学会で研究を発表すれば多くのアドバイスをもらうことができ、今後の研究のためにもなるため、私はこの学会に論文を投稿した。

学会の発表には二種類あり、大勢の前で演壇に上がって発表する口頭発表のほうが論文の質が高い。私が行ったのはポスター発表であり、ポスターの前で見学者を待ち受けで、説明をしたり質問に答えたりする。ポスター発表は発展途上の論文を発表することで、多くの研究者からアドバイスをもらってブラッシュアップするという考えであるので、修士一年生である私にとっては、こちらのほうが向いていたと思う。元々は口頭発表で応募していたのだが、査読の結果落選してしまい、ポスターに再応募して通過したという経緯である。

学会のタイムテーブルを見て驚いたのは、ポスターセッションが三時間もあることである。前に参加した日本の学会では一時間であり、ひっきりなしに見学者が来ていた。ウィーンでの学会であるので当然発表は英語であり、さらに時間が三時間ともなれば相当な困難が予想される。

ポスターセッションは三日間ある学会の、一日目の最後であった。場所は会場であるウィーン経済大学の図書館のレセプションスペースである。この図書館がなかなかにモダンで巨大な建物であり、日本の大学では絶対にお目にかかれないようなしゃれた建築であった。

ポスター会場に行って最初に気づいたのは、サンドイッチやらパフェやらの軽食が用意されていることである。指定の位置にポスターを張っているうちに、カクテルの用意まで整い始め、ちょっとした立食パーティの様相を呈し始めていた。

日本の学会では、ポスターセッションでは発表者も聴衆もポスターに集中する。対してこの学会では、立食パーティの会場にポスターが張ってあり、研究者同士交流をしつつ、ポスターを話題により深い研究トークをするといった場であった。この形式は発表者としても負担は軽く、三時間という時間はあっという間に過ぎてしまった。私がもともと研究していた分野とは、違う分野の研究者の多い学会であったため、今まで意識したこともなかったような、新鮮な視線でのアドバイスをいただくことができた。

ウィーンで美味しかったのは、なんといってもチョコレートの類である。ポスターセッションのデザートにはチョコムースがあり、大層美味しいので、二つ三つとおかわりをしてしまった。甘すぎず、ミルクの風味が良く濃縮されていて、さっぱりとしていた。パンやハムがお

いしいので当然サンドイッチも美味であり、この結果どの聴衆も発表者も、軽食やドリンクを片手に研究談義をするといった、和気あいあいとしつつも、意義のある時間であった。

ひとつ感じたことは、欧州の学者は連携が強いということである。隣続きの欧州は鉄道一本で行き来できるので、独仏英などの研究者は、頻繁に会合しては研究を深めているらしい。こういった際には英語が公用語のようで、いずれの欧州人研究者も英語が堪能であった。それに比較すると日中韓の研究者は、隣近所とはいえ飛行機でないと行き来できないので、欧州の環境を羨ましくも感じた。

とにもかくにもポスター発表は成功裏に終わり、海外の研究者とも交流ができ、大変有意義であった。残りの二日間は演壇での発表を聞いた。

当初の予定は学会だけ参加して帰国というものであったが、しかしウィーンは芸術の街であり、宮殿から博物館、美術館まで観光名所が目白押しである。ウィーンまで来てこれらを見ずに帰るのはいささかもったいない。

そこで私が目を付けたのが昼休みである。この学会の休み時間は2時間もあり、会場からウィーン市街地中央まで地下鉄で十分ほどである。そこで私は学会が提供する無料の昼食を断念して、午前の発表が終わるや否や、地下鉄に飛び乗ってウィーンの中央に向かった。

下調べもしていないので、空港で手に入れたパンフレットを片手に、観光客丸出しのスタイルで中心地に向かう。お目当てはシュテファン大寺院と王宮である。自然科学博物館や美術史美術館も興味があったのだが、時間の関係上これらは断念した。

シュテファン寺院も王宮も、これまでに多くの文章で語りつくされているから、詳細はそれらに譲る。印象に残ったのは、シュテファン寺院の天井がとても高いことと、今なお祈りの場として機能していることであった。私は観光客であるので、十字架に軽く頭を下げた程度であったが、熱心な信徒が教会に来ては、何かしらを祈っているようであった。また、屋上に上がるエレベーターがあるのだが、エレベーター内には係の中年男性の趣味とおぼしき懐かしのオーストリアポップが流れており、荘厳な教会の中にあって、エレベーターの中だけ世俗的なのが妙におかしく、また人の生活を感じさせた。

王宮はかの有名なハプスブルクの家のものであり、内部は彼らの使用していた銀食器や陶器のコレクションが飾られていた。はるばる日本からやってきたであろう伊万里焼も飾られており、当時から世界と繋がっていたことを感じさせた。

ところでウィーンにはいくつもの宮殿があるが、このうちで最大のものはシェーンブルン宮殿である。これは

離宮であり、ウィーンの中心地からは電車で三十分程と遠い。王宮ではシェーンブルン宮殿とセットのお得なチケットも販売されていたのだが、その時の私は王宮だけで十分だと判断して、これを購入しなかった。

学会三日目の夜、日本人研究者で夕食に行ったのだが、この際ある方が見せてくれたのがシェーンブルン宮殿の写真である。落ち着いた黄色の大きな宮殿で、快晴の青空とのコントラストが美しかった。その時私はシェーンブルン宮殿にいくことを決意した。

ウィーン滞在の最終日には別段予定が入っていない。飛行機は十三時であったので、朝一番に宮殿に行けば一時間半程度は見学が可能である。そういった次第で、私はお土産でいっぱいのスーツケースを転がして、朝一番の宮殿に向かった。天気は見事な快晴で、大きな荷物をクロークに預けた私は、宮殿内を見学し、庭園を回り、展望台から宮殿とウィーン市街を一望した。

宮殿内はひたすらにハプスブルク家の歴史を物語っていた。建国からその終焉までをひとつの宮殿内に取り込んで、帝国が滅んでも、なおかつての栄華を今に伝えていた。とにかく見事なのが室内の調度品で、立派な一枚板の化粧板を金枠で飾ってみたり、惜しげもなく上質な絨毯を敷き詰めてみたりと、とにかく豪華な作りであった。天井もとにかく高いのだが、もし住むとなればこの異常な広さはちょっと不安をあおりそうだなと思いもした。

宮殿の敷地内には丘があり、その頂上にはグロリエという展望台があり、宮殿とウィーン市街地を一望できる。庭園を抜けてグロリエに上がった私は、青空の下、堂々と黄色の宮殿がたたずみ、その背後に赤色のウィーン市街が広がる光景を見て感激し、ひたすら写真を撮った。私には、感動すると、とにかく写真を撮る癖があると分かったのはこの時で、見返してみると実に百枚近い写真を撮影していた。ほとんどが似た構図であり、自分でもちょっとどうかと思ったが、とにかく感動したのである。

そうこうしているうちに空港行きの電車のじかんが迫ってきたので、続々と到着する団体客を尻目に、私は宮殿を後にした。朝早くの人が少ない時間帯に見学したので、時間が短かったわりにはいろいろと見学でき、大変満足であった。

さて、宮殿から空港に向かう電車に乗ったところで、電車が途中で運転を見合わせた。何らかのアクシデントが起きたようなのだが、アナウンスがドイツ語のみでわからない。幸いにして同じ車輌に日本人グループが乗り合わせていたので、何かあったら助けてもらおうと考えているうちに、電車が運転を再開した。遅延した理由は

わからないが、とにもかくにも無事であった。

空港では危うく国際線ターミナルに行きかけるなどのアクシデントがあったものの、全体としてはとんとん拍子にことが進んだ。ウィーンからはミュンヘン空港を経由して羽田に帰るのだが、EU域内であるので、ウィーンとミュンヘンを結ぶ航空便は国内線扱いなのである。

ウィーンに到着した際にも似たようなことがあった。ミュンヘンについた際にはパスポートチェックがあり、ドイツの入国スタンプを押してもらえたのだが、ミュンヘンでは飛行機を降りるとノーチェックで空港外にでてしまった。これは、ドイツに入国した時点で、EU各国に入国したという扱いになっていたから起こった事態である。便利な仕組みではあるが、出入国のスタンプがドイツのものしかないのが、なんとなく残念であった。

ウィーンは私の初めてのヨーロッパであった。どこもかしこも、広く、ゆったりとしており、街全体にせかせかした感じがなかった。学会も大変フレンドリーである。何よりチョコレートがおいしい。四泊五日の短期滞在ではあったが、学会といい観光といい、大変得難い体験をすることができた私は、オーストリア航空の真っ赤な旅客機でウィーンを後にした。

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

綜合社会学の探求（新明正道博士の場合）

―「人間のための、人間による人間の社会学」―

山本鎮雄

一　はじめに

昭和期の日本を代表する理論社会学者で、かつ社会学史家の新明正道博士（一八九八年―一九八四年、以下、新明と略記する）は、政治学徒から転じて職業的社会学者となり、そのためもあって、「社会学とは何か?」、「社会を社会たらしめるものは何か?」という社会学の学問的構成、さらに「社会学の起源を何に求めるのか?」という社会学史の歴史的起源やその後の展開など、社会学の学史上の諸問題も検討した。新明はその生涯において独自に「広義の社会」（それには関係や集団などの「狭義の社会」を含む）を対象とし、フランスのエミール・デュルケム、ドイツのフェルディナント・テンニース、イギリスのレオナルド・ホッブハウスなどと並んで「綜合社会学」を提唱し、その体系を独自に構築した。

新明は、東北大学を退職後、明治学院大学に次ぎ、三年間在職した中央大学の最終講義で自らの過去五十年間の社会学研究を回顧し、社会学の学問的意義について、「社会学という学問をたんなる目前の問題を小さく処理するための技術的なものと見ないで、これを社会のなかにある広大な問題とも対決することができる現実的、歴史的、かつ実践的な意義とも結びつくものと考えてゆくことが不可欠である」と強調した。なぜなら、「社会学を技術的に処理するための学問と見なすと、学問的視野は狭くかつ限定され、社会学そのものの生命力を見失うことになるからである」（「社会学五十年の回顧」一九六八年、『現代社会学の視覚』所収）。

すでに、マックス・ヴェーバーは二十世紀初頭、「近ごろの若い人たちは、学問がまるで実験室か統計作成室で取り扱う計算問題となってしまったかのように考えている」と嘆いていた（『職業としての学問』、一九一九

年）。新明は社会学研究として社会現象を実証的に把握する「社会調査」による「経験社会学」を決して否定したのではないが、理論社会学を重視する新明は社会学を単なる「技術的なもの」、さらに社会的な実用性や差異性を発見するための単なる「手段」とするような類の社会学の研究にたいして厳しく警告したのであろう。

さらに新明は社会学を「現実的、歴史的、かつ実践的な意義」を持つと位置づけた。しかもアブラハム・リンカーン大統領が提唱した民主主義の理念に準じ、社会学をして「人間のための、人間による人間の学問」であって、国家主義や排外主義を思弁的に前提した思想ではなく、社会学をして優れてデモクラシーに領導された学問と位置づけたのである。それは新明の青年期以来の思想形成や社会的な活動と無関係ではない。

すでに触れたように、新明は昭和期を代表する社会学者で、戦後の昭和後期には日本社会学史学会会長や日本社会学会会長、日本学術会議会員を歴任し、しかも社会学者として初めて日本学士院会員に推挙された。さらに新明は大正末期から昭和前期にかけて、同人誌『社会思想』や長谷川如是閑らが編集する雑誌『我等』をはじめ、総合雑誌、全国紙・地方紙、大学新聞にいたるまで、縦横に健筆を揮った新鋭・中堅の著名な評論家・時評家である。戦前、新明は社会学者の肩書で評論・時評を発表し、中堅の「革新派」の評論家として著名で、その論説はとくに若き知識層に大きな影響を与えた。

二　大正デモクラシーの高揚期の思想形成

第一次世界大戦において、イギリス、フランス、ロシアなどの協商国側は民主主義と民族主義の戦いと位置づけ、ドイツ、オーストリア、イタリアなどの同盟国側（イタリアは同盟関係を解消）にたいして勝利すると、世界的に民主主義的潮流と民族解放運動が高揚した。日本でも自由主義や社会主義の風潮が一段と顕著になり、政党勢力や政党政治の進展とともに、民衆運動や労働組合運動、農民運動も展開し、無産階級の護憲運動、普選選挙運動が高揚した。

東京帝大の吉野作造教授は雑誌『中論公論』に長文の「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」（一九一六年一月）を発表した。吉野教授は天皇主権の大日本帝国憲法（明治憲法と通称）のもとで「有終の美」を飾るために、民主主義ではなく、「民本主義」を基調にして、民衆の利益と幸福を目的とし、民意による政治運営を説き、言論界に大きな影響を与えた。立憲君主制のもとで、「人民のための政治」と「人民による政治」を実現するには、所得による制限選挙ではなく、すべての人民による普通選挙制を実施し、民選議員により政党内閣制の実現を主張した。

明治以来の藩閥政府に対して護憲運動が高揚し、すでに触れたように、都市においては民衆（群衆）による暴動事件の頻発、労働組合運動の高揚、農村においては農民組合による小作争議が頻発した。吉野教授の「民本主義」は、それ以前に「民本主義」を提唱した茅原華山らや東京帝大で国家主義者の憲法学者の上杉慎吉教授からも批判され、相互に批判と反批判の応酬が行われた。とくに、吉野教授はすでに「天皇親政」のもとで「民本主義」は実現していると唱える上杉教授の批判にたいして真っ向から反論した。

新明は第四高等学校（金沢、旧制四高）の二学年次に吉野教授の論文「憲政の本義を説いて・・・」を読み、東京帝大法科大学政治学科に進学することを、学友の山崎一雄とともに決意した。新明は東京帝大に入学し（一九一八年九月、当時、新明は分科制の法科大学に入学し、大学制度の改革により、法学部を卒業）、初年度の一年間は大学の講義を熱心に受講した。とくに吉野教授はその前年の八月に『支那革命小史』を刊行し、その翌年に支那革命史をテーマにして政治史を講義した。当時、新明は吉野教授の講筵に列し、とくにクリスチャンの吉野教授の「ヒューマニスティックなデモクラシーの精神」に感銘した。さらに、新明は学友の山崎一雄に誘われ、ともに吉野教授の面会日（ほぼ毎週金曜日の夕刻）に千駄木（現、東京都文京区）の私宅を訪問し、多くの学生とともに親しく吉野教授の謦咳に接した。

その直後、吉野教授は内田良平らの右翼団体「浪人会」との立会演説会（一九一八年一一月）のあと、東京帝大法科学生の赤松克麿、宮崎龍介らを中心に学生の思想運動団体「新人会」を結成するとともに、吉野教授と東京高商の福田徳三教授らを中心に思想啓蒙団体「黎明会」を結成し、「世界の大勢に逆行する頑冥思想の撲滅」を期するために講演会（月一回）を開き、講演集（一〇冊）を刊行した。

新明は二年次の夏休みが終わり、金沢から上京して東京市外の高田村（現、豊島区目白）の新人会本部の洋館（中国の革命家が建築し、空き家の黄興邸）に引越し、いわば「政治学の社会的実践」（田野崎昭夫）として月刊機関誌の執筆と編集、学内講演会と地方遊説、労働組合の支援と講演会などに専念した。新明の特筆すべき活動は、郷里の金沢支部新人会の結成と支援である。しかし、金沢支部新人会は官憲の弾圧を破り、思想的に紆余曲折したが、このグループは保守的な金沢において、黎明期の社会運動の先駆となった。

一九一九（大正八）年三月、新人会は月刊機関誌に『デモクラシー』と表題をつけて創刊した。一般に、新人会は吉野教授の指導によって組織されたとみなされている。吉野教授は新人会の活動を時期尚早と見なしたが、新人会の顧問として種々の便宜を図った。だが、吉野教授は「民本主義」を提唱したのにたいして、前期新人会

の若きラジカル・デモクラットの一群は、新人会機関誌創刊号のタイトルに『デモクラシー』（民主主義）を採用し、その表紙をジャン・ジャック・ルソーの写真で飾った。

新人会はその表題で通巻八号を発行した（うち発売禁止、通巻三号）。その後、機関誌は同人の創意により『先駆』と改題し、思想と活動のフロンティアを目指した。その後、前期新人会機関誌が廃刊になるまで、表題を『同胞』、『ナロオド』と改題している（通巻三一号、うち発禁処分、通巻一一号）。官憲によって発禁処分を受けると、財政的に困難に陥った。しかも、新人会本部はしばしば新聞紙法違反によって、家宅捜査を受け、東京裁判所に起訴されて最初は五十円、のちに百円の罰金刑を受け、自由な言論は弾圧された。

一九二一年四月、「我等の目指す行く手は、依然としてナロオドの中だ！民衆の中だ！」と、いわゆる「ナロオド宣言」を発して廃刊した。前期新人会同人の多くは社会思想社を組織し、三輪寿壮、平貞三を中心に「新しい社会の実現」と「社会運動への貢献」を目指して月刊同人誌『社会思想』を創刊した。新明は多忙な教師暮らしを割き、同人誌には、主として政治評論について頻繁に寄稿するとともに、長谷川如是閑らが編集する『我等』にも寄稿し、主として社会学に関連した習作を寄稿した。

二　水は方円の器に従う

当時、帝国大学政治学科を卒業すれば、いずれ将来はエリート官僚の道が保証されていた。新明は新人会の熱心な活動によって、役人の父が期待したエリート官僚の道ではなく、大学・高等専門学校の教員か、自由な研究所の研究員の道を選んだ。新明の「就活」は紆余曲折があったが、神戸の関西学院（当時、高等専門学校）のベーツ学院長と協議の結果、文学部教授に就任し、政治学のほか、社会学とドイツ語の講義を担当することになった。

当初、新明は社会学講義の担当に躊躇したが、新人会の一年上級の嘉治隆一（満鉄東亜経済調査局、東京在勤、社会思想社同人）から、社会学の講義では「社会問題」や「社会思想」を扱えば良かろうというアドバイスを受け入れ、新明は社会学の講義を了承し、正式に神戸の関西学院文学部教授に就任した。一九年九月、東京帝大文学部に社会学科が設置され、すでに建部遯吾（たけべとんご）教授が社会学の講義をしていたが、その当時、一般の学生には社会学は社会進化のための「社会の研究」といった程度にしか認識されていなかった。

当初、新明は政治学および政治（思想）史の研究に専念し、小冊子ではあるが、第一作として天皇制の絶対主義国家主義にたいして、「青年的な権威に対する拒否反応」として、前五世紀中葉から前四世紀初期にかけてアテネを中心にギリシャ世界で一世を風靡したソフィストの批判的相対主義に着目した。のちに、ソフィストはいわば「権威主義的絶対主義」を提唱したソクラテス、プラトンらの非難によって「詭弁家」として蔑称されたが、新明は『ソフィストの政治学的研究』（一九二一年）を吉野教授が編集する「政治研究」シリーズの第五号として上梓した。

おそらく、新明は政治学の講義ではソフィストの政治（思想）史をテーマにして講義しながら、第一作の原稿を作成したのであろう。その当初、社会学の講義では在学中に研究したマルクス主義（階級国家論）、無政府主義（分権論）、イギリスのギルド社会主義などの「社会主義の諸思想」、さらにラスキの多元的国家論などを検討し、「社会の研究」として講義した。

さらに新明は大山郁夫が近代政治学史上の画期的著作と評価された『政治の社会的基礎』（一九二三年）でグンプロヴィッチなどのオーストラリア社会学（オスロ・マルクス主義、オーストリア社会民主党の指導理論）の集団闘争説、長谷川如是閑の文明批評『現代国家批判』（一九二一年）や『現代社会批判』（一九二二年）などを参照し、関西学院文学部に就任して二年目に早々と『社会学序説』（一九二二年）を上梓した。ただ、本書は内容的には政治学の研究ともいい得る。（発売後、しばらくして発売禁止）。

『社会学序説』は専門科学の「社会学」の序論的研究というよりも、新明はその「はしがき」で「本書は、社会の精密な観察録ではなく、むしろその印象記にすぎない」と述べ、「もっと精細な観察録」の必要性を認め、なお「社会の研究の基礎」、その「序説」として位置づけた。ところが、社会科学研究では専門科学としての「社会学」は決して「社会の研究」一般ではない。のちに、社会学者の新明は本書をあえて特殊社会学（社会学研究の一分野）の「政治社会学」の研究の成果と位置づけているように、専門科学としての、社会学の「固有の対象」と「固有な方法」を明らかに意識した社会学の序説研究とは必ずしも言えない。

四　形式社会学研究事始め

新明は五年間在籍した関西学院の後半、自らの社会学の講義に不満を覚えたであろう。そこで、外国書の大半を社会学の専門書を購入し、いわば独学で社会学の研鑽に努めた。チフスに罹患し、快癒した新明は神戸の繁華街の書店で、京都帝国大学の米田庄太郎の薫陶を受けた高田保馬博士の『社会学概論』（一九二二年）を購入し、初めて日本の社会学者による本格的な社会学研究書として閲読した。

新明は迂闊といえば迂闊だが、この関西学院で非常勤講師として前年度まで社会学の講義を担当したのが高田博士だった（当時、広島高等師範学校教授）。すでに、

高田博士は大著『社会学原理』（一九一九年）を著し、社会学を「社会科学界の一平民」と称し、人々の結合を対象にして「結合上位説」を主張し、「法則科学」を提唱した。若き新明教授の自己流の社会学講義は、前年度までの高田博士の社会学の講義とはまったく異なり、錯綜する「社会」に関心旺盛な若き学生から大いに歓迎されたようである。

新明は専門社会学でドイツのジンメルが提唱し、ワイマール・ドイツでそれを継承したアカデミックな形式社会学が最新の社会学として注目されていることを知った。また改造社発行の雑誌『社会科学』で「形式社会学研究」を特集し（一九二五年十月号）、形式社会学の研究が盛んになったことも、新明が形式社会学の研究に没頭する契機となったであろう。

新明は形式社会学の習作的論考「社会意識について」（一九二五年）を発表すると、高田博士から「大変参考になった」という好意的な返書を受領した。それに気を良くした新明は矢継ぎ早に形式社会学の習作的論文「行為における社会の形式性」、「社会関係論について」、「社会関係の混合形式」などを精力的に発表した。とくに「行為における社会の形式性」は日本社会学会が編集する専門誌『社会学雑誌』（一九号、一九二五年）に掲載された。

のちに、新明は当時を回顧し、謙虚に「私の関西学院時代は社会学に関するかぎりでは、事実上、今の大学院学生にも似た修練時代だった」と率直に述べている。しかし、今日の大学院学生が新明のように旧制高校で鍛えられたドイツ語（第二外国語）の語学力や集中的な読書力があるかどうか大いに疑問である。

五　職業的社会学研究者として

このように、新明は高田博士の『社会学概論』を熟読し、専門社会学は単に「社会の研究」ではなく、「独自の方法」と「独自の対象」をもち、社会科学において「なんでも社会学」（いわば、百科全書的社会学）ではなく、「これこそが社会学」であると思念される「内包的な綜合社会学」であることを理解した。さらに、日本に盛んに移入されたジンメル後のドイツのアルフレート・フィーアカントやフォン・ヴィーゼの形式社会学を読み、数多くの習作的論考を発表した結果、吉野門下の政治学者というよりも、社会学界で少壮気鋭の社会学者として評価されるようになった。

一九二二年八月、東北帝大は法文学部を設置したが、社会学講座の主任教授の就任をめぐり紆余曲折があったが、かつて吉野教授が指導した普通選挙研究会会員の河村又介や鈴木義男（当時、ともに東北帝大法学部教授）が中心となり、吉野教授の推薦を得た新明を法文学部教授会に推薦し、教授会は社会学講座の助教授として招聘を決定し、文部省に申請した。

新明の招聘人事では法文学部教授会と文部省との間で紆余曲折があったため、文部省は四月の新学期が始まったあと、『官報』で新明を法文学部の社会学講座の助教授として発令した（一九二九年四月以降）。東京帝大新人会で活動した新明は、それ以来「思想要注意人」としてマークされていた。おそらく、文部省は新明の助教授として発令することに難色を示し、新学期が始まり、不承不承と発令したのであろう。その後も、文部省は新明の海外留学、さらに助教授から教授への昇任についても、露骨に「いやがらせ」の発令を行っている。

新明は東北帝大では形式社会学をテーマに「社会学特殊講義」と外国書購読を担当した。関西学院よりも、東北帝大は担当する授業数はるかに少なく、時間的にはかなり余裕が出来、社会学の研究に専念することが出来た。ただ、関西学院では教員も学生も少人数で緊密に交流することができたが、東北帝大では教員は、いわば一国一城の主として極めて格式が高く、しかも社会学を専攻する学生はごく少数で、関西学院と東北帝大の格差を実感した。

新明はすでにゲオルク・ジンメルの「思想的な豊かさと特有な繊細な論理」に魅了され、ジンメルに始まるドイツ社会学の形式社会学の研究に集中することが出来た。ところが、出版社や雑誌社からこれまで以上に出版物や雑誌原稿の注文が殺到し、異母弟の高額の入院費の調達という思わぬ出費のために、片端からそれに応じて原稿を執筆し、研究時間を犠牲にせざるを得なかったという。

新明は形式社会学の講義を始めて二年目、その大要をまとめ、講義をしながら原稿を執筆し、早くもその翌年五月に大部の『形式社会学論』（一九二八年、巌松堂）を上梓した。新明は最終的にジンメルらが社会を形式と内容を離し、社会の形式のみを考察としていることに疑問を感じた。社会の形式と内容を統合する新明流の「綜合社会学」を達成することを意図したが、それを達成するには以後十数年の歳月を要した。また、新明は時代が要請した社会、政治、文化について評論・時評にも大いに健筆を揮った。

六　新明社会学の道

新明は自らの社会学および学説史の研究を中心に、五十年間の研究史を三つの時期に区分した（新明正道、「社会学五十年の回顧」、一九六八年、『現代社会学の視覚』所収）。

一九二六年～三一年の第一期は、東北帝大法文学部助教授として社会学講座を分担し、一般講義にたいして「特殊講義」のテーマに「形式社会学」を選び、その講義録をもとに『形式社会学論』を刊行した。そこで、ジンメルが提起した社会学体系のうち、「一般社会学」（綜合社

会学）に着目した。形式社会学のパラダイムから脱却しようと格闘し、三木清らが編集する岩波続哲学叢書の一書として『社会学』（岩波版）とともに、米騒動や関東大震災における群衆行動を社会学的に言及した『群衆社会学』（一九二九年）を上梓した前期と、ドイツ・ワイマール共和国末期にベルリンを中心に二年間留学し、新たなドイツの知識社会学や文化社会学を学び、形式社会学の発想を完全に脱却した。時評では「欧州通信」と題して激動するドイツを中心にヨーロッパの危機的状況について月刊誌『経済往来』に毎月一年間十二編を郵送した後期に大別することが出来る。

一九三一年～三八年の第二期は、ドイツでも最も注目されたカール・マンハイムの「イデオロギーとユートピア」に感銘を受け、帰朝後、『知識社会学の諸相』、『イデオロギーの系譜学第一部』を刊行した。さらに綜合社会学の体系化をめざして『社会学序講』とその改訂版『社会学要講』を刊行した。その後、政治社会学としてイタリア・ファシズムのイデオロギーを明らかにするため『ファッシズムの社会観』を刊行した。

一九三八年～四五年の第三期は、いよいよ綜合社会学に着手し、『社会学の基礎問題』、『社会本質論』を刊行し、社会学体系の端緒として人間の行為の主体性と意味付与性に着目し、同時に人間の行為は関連的な行為だとして「行為関連の立場」を提唱し、さらに社会集団の複合性を体系化し、全体社会（「広義の社会」）を総合的に認識した。

さらにナチスの人種主義的民族主義と排外主義的拡張主義を批判した『人種と社会』、『民族社会学の構想』を刊行した。しかも、戦時下の過酷な出版統制と用紙の制限を克服し、新明は綜合社会学の立場に立ち、体系的に大部の『社会学辞典』をほとんど独力で編集・執筆し、日本社会学界に一大金字塔を樹立した。学徒出陣や学徒動員で勉学を中断し、戦後になって学園に復学し、社会学を学ぶ学生にとって大いに水先案内となったであろう。

〔追記〕

新明自身は言及していないが、第一期以前に社会学研究の「前史」（準備期）が考えられ、また第三期以後に戦後の第四期が考えられる。ここでは、それ以前・以後の新明の研究と評論の業績について省略する。

木鶏は動ぜず

浅野博文

一、誇りの心

人間の生活に於ける衣食住の充実が、その生命を維持する上での基本であることは周知である。しかし、人がそれだけでは生きて行けないこともまた事実である。嘗て、西洋を嚆矢とした産業革命は、当時の植民政策に象徴される様に、物質的豊かさへの追及を第一としたが、今日の人工知能の発達に広がりをみせる情報通信技術の発達は、それに加へて精神的豊かさの獲得に大きく貢献した。特に、飛耳長目の言葉に象徴される様に、人が精神的艱難に直面した際、前途に光明を見出す上での先人の英知を、瞬時に獲得することを可能にした。

顧みれば、物質的豊かさへの追及を出発点とした人類の産業革命の歴史が、帰する所を精神生活の充実とした流れに、人類の理性の健全なる働きを観る。常に、精神の向上を富（物質）と共に進めることこそ、人の文明社会の理想である。今日の情報通信技術の発達は、その理想に導くものであると確信する。人類共通の課題である地球環境破壊や国際紛争等も、人の発心さへ正しければ、その解決は困難ではない。理想の文明社会を築く可能性は無限大である。しかし、現代日本は、幾多の課題を克服し、善き未来を築くことに逡巡してゐる。祖国の伝統を軸として、科学技術を輔翼とする光り輝く国家を現出することに、万物の霊長たる人類の尊厳が試されてゐる。それは、人類が天より課された使命であると共に、日本及び日本人も、二千年の歴史に思ひを馳せ、はるか天壌無窮の神勅に奉答しなければならない。

人が人として健全であるためには、精神と肉体が健全でなければならない。文明社会に於いても道徳と経済が一円融合してゐなければ健全ではない。現代に於ける日

本の不幸の最上は、誇りの心の喪失である。自らの人生に対する信念の喪失と言つてよい。「発心正からざれば万行空しく施す」（『学道用心集』）。莫大な国費を投じて、社会福祉を充実させ、雇用を増やした所で成果が上がらないのは、人が衣食住の充実に飽き足らないのと同じで、誇りの心が全ての人の生命であるからだ。本来それには、邪念や私欲が無い。敬虔にして清純なるものである。我が国の抱へる諸問題とは、誇りの心の喪失を本質とする。誇りの心とは道徳に立脚する。加へて、その国の道徳は、その国の歴史の中より表れる。今日、理想の文明社会に向けて歩む上での発心が正しいものではない。折角の高度情報化社会の中で、日本を道義国家としての姿から急速に遠ざけ、亡国に近付かせてゐる。

果たして其のことは、敗戦後より一貫して、進化論を採用して来た学校の歴史教科書に起因する。その内容が、単に「日本人を父母として生まれ、日本人の血を受けてゐる。だから自分は日本人である」との認識だけに止まるからである。日本人が祖国の歴史を学ぶ意義とは、日本人の本家にして、倫理の中核である皇室の理解にある。変転著しい世界史の中にあつて皇統連綿とする我が国体は、人の世の偉観であり、文明国家として正しき姿が日本にはある。敗戦時の我が国の指導者が、一貫して玉體護持（皇室の存続）に徹したのは、日本人の誇りの心が、この一点により保たれると確信してゐたからである。現在の歴史教科書は、日本及び日本人の本質部分に於ける説明が全く足りてゐない。

一体、政治経済文化の中心であられた歴代の天皇陛下が、国民の幸福や平和の追及のために果たされた役割は計り知れない。にも拘はらず、時の権力者としての不条理ばかりが強調される。特に、明治より敗戦に至るまでの日本が、専制君主である天皇の下、侵略戦争に走り、敗戦後の連合国による「裁判」と云ふ名の「復讐」を以て戦犯とされた点は、容認し難い内容である。寧ろ、大航海時代を皮切りに、人種差別に基づく植民地支配と侵略戦争を常態化させた欧米の「怠奪奪」こそ侵略国家としての行為に等しい。我が国は「勤倹譲」の精神を以て、「怠奪奪」と相干戈を交へたのである。教育勅語の内容は、その精神（勤倹譲）を表す。敗戦に至るまでの国家の方針は、明治天皇の御製「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」に詠まれてゐる様に、一貫して八紘一宇（平和主義）にあつた。それは御歴代天皇が継承されて来た御精神に他ならない。

畢竟、天皇陛下を中心に、君民一致して践み行つて来た歴史は、日本人の誇りである。それは、世界史に於いて、万物の霊長たる人類の尊厳を証明した唯一の歴史であり、その誇りの心は、総ての日本人の生命である。

二、忠孝一本

日本の歴史は建国以来、一貫して天皇陛下を中心に発展して来た。そして、国家の指導的立場として、古来より君主を輔弼して来た家が源平藤橘であつた。六国史には、親王が御歴代天皇より源平橘の氏姓を下賜された（臣籍降下）事実や、遡れば、神武天皇にお仕えした天種子命を先祖に持ち、天智天皇の重臣であつた大織冠藤原鎌足公を家祖として、代々優れた人物を輩出した藤原氏が、君主の藩屏として重きをなしたことが記されてゐる。今日の日本人の氏姓も、遡れば貴種（源平藤橘）を出自とし、遠くは神武天皇を共通の御先祖とする。

そして特筆すべきは、時の権力者である摂関も征夷大将軍も、任命権者が陛下と言ふ点である。臣下の勢力が、時に天皇を凌ぐ勢ひとなつても、皇室は本家として厳然たる地位にあり、皇室に対する忠義は、孝行と根本で繋がると言ふ意味で、忠と孝は常に一本であつた。教育勅語にも「我ガ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ済セルハ此レ我ガ国體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス」とある様に、今に至るまで国に革命無く、皇統連綿として続く国体は、忠孝一本によるものである。

現在に生きる我々は、その様な歴史の中にある。日本人が日本に生まれ、父祖の歴史を継承し、各々が生きる世界で祖国に奉仕することが出来るのは、国家として内訌や侵略により本質的に有する清純さが失はれてしまつた世界各国の歴史を顧みた時、幸甚の至りである。人が不易なるものに憧れを持つのは本能にして、個人は自らの家が永続することに努める。しかし、我が国に於いては本家である皇室が永続することを第一としてきた。現に、我が国第一の功臣、藤原氏の直系である近衛家の嫡流は、先の大東亜戦争の中で忠孝の道に殉じ、遂に絶へてしまつた。

祖国の歴史を仰ぎ、伝統の継承に勤めきた父祖の足跡は、国家に在つては革命（王朝交代）を許さず、社会に在つては人倫の秩序が守られ、礼儀礼節が重んぜられる事を本質として来た。日本の弥栄は、これを以て維持されて来た。これは歴史的事実で在つて議論の問題ではない。今を生きる日本人が、個人的なことに煩悶する余り、父祖の足跡を忘れ、それを継承する努力を怠り、これを放擲することは、先祖に対する反逆であり、神に対する罪である。

昔日の蒲生君平先生（江戸後期の勤皇家）が血書した志は、正しく「孝子之情有終身喪」「忠臣之心無革命時」であつた。

三、神道の精神

古代に於ける大化改新、中世に於ける建武中興、そして近代に於ける明治維新。歴史上に現れたる日本人の道が、最も光り輝いた時期は、決まつて国家が難局に直面してゐた。これを先頭に立つて当たられたのが皇室である。ノブレス・オブリージュ。特権階級には、それ相応の義務が付随する。皇族には、身分の高さに伴う義務が要求されることを示すため、大正天皇の親王は、全て軍人となられた。我が国が長い歴史の中で、幾度の艱難を打ち払ふことが出来たのは、公明正大を常とされる君主の御姿があつたからである。それは、ひたすら神を仰ぎ、神に仕へ、神の教へを承け、神の道を行く所の神道の精神が根本に存するからに他ならない。

我が国の存立の基盤は神道にある。神道の精神は、御歴代天皇の不動心である。神道が国家の安泰を祈り、大難に臨んで君国を守護すべきものとして認識せられるに至つたのは、遠い昔、天照大神の御孫に当たられる天津彦彦火瓊瓊杵尊（皇孫尊）が、八百万神を連ねて御降臨されたとする記紀神話に遡る。その内容からは、御供の神々が、皇国守護の大任務に協力する性質を帯びてゐたことが認識出来る。得意の朝にも敬虔に、失意の夕にも泰然と、君民一致して、今日まで正しく伝統が継承されて来た所以を記紀神話に観る。

神々は全て君国に貢献し、君国を守護するものであり、日本人が、神に祈り、神に願ふ所は、玉體安穏と国家繁栄である。そして、君国の安泰に自らも寄与する所があれば、日本人最高の名誉として、自らも神々の末座末席に連なり得る。事実、君国のために身命を賭した、藤原鎌足公（談山神社）、和気清麻呂公（護王神社）、大楠公（湊川神社）等の祭神には、陛下より位階が授けられ、その慣習は今日も陸続する。それは、絶筆となつた『神国日本』にて小泉八雲（ラフカディオ＝ハーン）が感歎した日本の美風である。

我が国最古の古典である古事記や日本書紀が示す如く、建国の始祖神武天皇が、天照大神に連なつて居り、伊勢の大神宮に祀られる天照大神は、皇祖神であると同時に日本人の総氏神として、今日に至るまで厚い信仰を集めてゐる。加へて、正月の一般参賀は元より、宮中歌会始に象徴される如く、君民相共に万葉の昔より続く文化に親しむ姿は、皇祖天照大神を総氏神とする日本人の本家たる天皇陛下が、政治の中心を幕府や執権、摂関等に委ねられる中にあつても、常に倫理の中核として、国家国民の弥栄を祈念せられた歴史と深く重なり合ふ。

古事記を中心に、日本の古典研究を通して、日本人の道を探求した本居宣長先生は、日本人の践むべき道を『直毘霊』にて「ただ天皇の大御心を心として、ひたぶるに大命をかしこみゐやびまつろひて、おほみうつくしみの御蔭にかくろひて、おのもおのも祖神を斎祭つつ、ほどほどにあるべきかぎりのわざをして、穏しく楽しく世をわたらふほかなかりしかば、今はた其ノ道といひて、別に教へを受て、おこなふべきわざはありなむ」と記す。即ち、ただ天皇の大御心を心として、ひたすらに勅命をかしこみ敬ひ奉り、有難く皇恩を拝載して、夫々家の祖神を祭りつつ、分に応じて業に励み、楽しく穏やかに生活する事、これ即ち日本国の道であつて、別におしへといふものがあるわけではないといふ意味である。

果たしてこの道は、我が国固有の国體（国柄）に他ならない。立憲政体が確立した明治以前までは、物事淳朴なる古昔より、国體ありて国體論なき姿こそ我が国の誇りにして、我が国民性の美点であつた。

それは、民族本来の信仰が根絶し、仏教やキリスト教のような創唱宗教に変はられた外国とは異なり、素朴・原始の信仰から高められ、純化されつつ、本源的なものを守り伝へて来た神道と深く結び付く。我が国存立の基盤は神道にある。その意味に於いて神道は、国家と不可分の関係である。将来、日本人が神道の精神、神道の信仰を失ふ時は、皇国存立の基盤を失ふ時であり、動揺の危機に直面するものと認識せねばならない。

四、最高学府の使命

大東亜戦争とは自衛目的によるものであつた。世界史の示す所は、植民地支配を目的とした海外進出の活発化が、イギリスに始まる産業革命と科学技術の向上を端緒として、ヨーロッパ各国の政治的・経済的・軍事的優位性を生み出し、侵略戦争や人種差別を常態化させた。そして、この白人の欲望に起因する最大の悲劇が、二度にわたる世界大戦に他ならない。

敗戦後の占領政策は、日本歴史が圧縮された帝国憲法及び皇室典範を始めとした法規制度を改悪し、神道指令により国家と神道の関係を切り離した。敗戦による祖国の復興には衣食住の充実が重要であつたことは言ふまでも無い。しかし、真に皇国が興るためには、国家民族の誇りの心が必要であつた。その役割は、日本国の根幹を支へる、憲法学や国史学の分野が果たす。国史学や憲法学は、その本質を知る過程に於いては、外国の知識は必要であるが、帰する所は皇室である。特に未曽有の敗戦にあつて、この分野の社会に於ける活用は、日本人の精神を復活させる上で極めて重要であつた。

敗戦後の東大の変節と今日の祖国の衰退は因果関係にある。東大は開学以来、国史学や憲法学の研究の中で、我が国の歴史と伝統の継承に努め、日本の伝統的文化を究明し、人間愛の道義の確立をはかることを使命として来た。実際、その学問の成果は、教育勅語を中心とする国民教育の確立として具現せられ、日本人が、神武創業を回顧し、敬神崇祖・尊皇愛国の精神が輝く一君万民の国家体制の下、日夜努力し、各々の生きる場所で邁進す

るために大きく貢献して来た。

分野を問はず学問の本物とは、人生や社会に於ける活用を観る。国家社会を富実とする真の威力が、学問に存する所以である。東大には、占領政策により、歪められた祖国の本質を学問の威力を以て復活させる役割があつた。しかし、公職追放等で、将来の我が国の指導的立場となる学徒を、正しい方向に導く優れた学究が居無かつた。今日も尚、その気概を感じられないのは、日本人として慚愧に堪へない。

危機に瀕する今日の祖国に於いて、仁愛と理智との上に立つて、堂々と大義名分を主張する勇気と知性が、皇国の再興には必要である。東大は、その責任を負つてゐる。

五、木鶏は動ぜず

掲載が初めて掲載された『まんじ』一四六号の表紙絵に描かれてゐる木鶏は不動心を象徴する。不動心とは忠孝に基づく。昔日の二宮尊徳先生も生家復興（孝道）を皮切りとして全国各地の財政再建に尽力された。それは時代を超えて誤らざるものであり、光り輝くものである。今日の祖国の姿はその理想とは程遠い。情報通信技術の進歩が人の飛耳長目を大いに向上させたが、溢れ返る情報は、自らの不動心が確立されてゐなければ、人の頭の中を空虚にし、人を自堕落へと引き込む。悪徳を前にして人の精神は跪き、その尊厳を失墜させる。

立国の基盤は法律ではなく道徳にある。聖徳太子の憲法十七条が、道徳的色彩の強いのはその表れである。そして、その国の道徳はその国の歴史に現れる。六国史の編纂に象徴される様に、古代日本に於ける国家の修史事業は、道義国家日本を護持する上で不可欠であつた。本来日本人は、誇りの心を祖国の歴史に依りて培はれ、祖国の歴史に流れる精神（神道）から忠と孝（道徳）を知り、尊皇愛国に至る。教育勅語にも示される様に、祖国は一貫して忠と孝を嚆矢として、斯かる順序から政治経済科学文化等を発展させて来た。日本人の不動心は忠孝に基づかねばならない。実際、各分野に於いて偉大なる事業を成し得た先哲偉人の不動心は共通してゐる。

私の家は代々浄土真宗の門徒であるが、親鸞聖人の『教行信証』には、大乗仏教が本質とする一切衆生悉有仏性の真理に到達するために、念仏帰依を勧めると共に「神祇不拝、国王不礼」を説く。一体、親鸞聖人も鎌倉仏教と称される曹洞・臨済・浄土等の宗祖と同様に、多くの学識名僧を輩出して来た比叡山延暦寺の出身者である。創立者の最澄の本意は、一貫して王城鎮護と国家安穏にあつた。

親鸞聖人は、助けを求める悪人を成仏させることに阿弥陀仏の本願があると信じ、徹底した念仏帰依を説いた。

但し、ここで言ふ悪人とは、身勝手な殺人や盗みを犯した者を指すのでは無い。それは俗論であり、人生の鉄則は善因善果・悪因悪果にある。ここで言ふ悪人とは、不孝の罪を犯した者を指す。歴史の尊厳や民族の徳性は、全て親子間の道徳に決する。御歴代天皇の諡號に「孝」の字が多く用ひられてゐるのも「孝は百行の本」を最も重んぜられた至尊のご叡慮の表れである。自らに最も近ひ存在である親を大切に出来ない者の忠勤は成立しない。それは一切人倫の基本であり、それを破つた者の罪は重く、世の乱れとは、実に不孝に起因する。

親鸞聖人が生きた時代とは、政治の中心が保元の乱を皮切りに、殆ど朝廷から武家に移り、日本の道義は地に堕ち、理想は失はれ、上下とも内訌が絶へなかつた時代であつた。特に乱後の処分の中で、長らく倫理の中核として厳然たる立場にあつた天子様が、源義朝の、父為朝（上皇方）が首を斬ることを許された点は、道義道徳の乱れを象徴する。親鸞聖人の「神祇不拝、国王不礼」は、乱世に於ける人倫の廃れに対する嘆きである。自らの意に反して、父母を失つた者や親より先に死する者、病や怪我で奉公が出来ない者が数多生まれたのが乱世の悲劇である。宿命的に不孝の罪を背負ふと言ふことは、現実に生きて居る者の運命を決する先祖の恩恵に与り得ないことを意味する。不孝とは不幸を意味する。浄土真宗の元意とは「不孝の者を助けたまへ、阿弥陀仏」に存す。

人はこの世界に何事かを為さんがために生まれて来た。人は人のために生きてこそ人である。人の真価は、その人の事業が、如何に国家社会を益したかどうかにより決する。例へば、織田信長公が、鎮護国家の大道場たる比叡山延暦寺を焼き払つたにも拘らず、別格官幣社に列する建勲神社に今日まで祀られてゐるのは、下剋上を世の常とした日本の道を武力を以て正し、天皇を奉じて天下を統一すると言ふ意味の「天下布武」に表象される様に、戦国乱世に日本人の道を正す先鞭をつけたからである。人の世の一切の悪とは、本分に背き、自らの生きる場所にて勤むことをしない所から来る。そのことを、日吉山王の神輿を担いで朝廷に反抗し、伝教大師の本意に背き続けた叡山の悪僧を一掃することにより示した。それは、信長公の義侠心（尊皇愛国）から出た行為である。

踵を返して、親鸞聖人とは、国家鎮護を本質とする日本仏教の体現者である。真の「蓮華国」として、皇国万民の弥栄に、仏法が寄与することを願つた和国の教主聖徳太子の理想を継承し、流浪と迫害に晒されても、倦まず弛まず、それを温め追及することに努めた。後年、親鸞聖人の事業を、大御心に通ずるとして讃へられたのは、明治天皇である。「顕真」の大師号を追贈されたことは、門徒の誇りとする所である。

忠孝一本。日本人の其の心は永遠に動かざるものである。これ即ち木鶏である。私自身、郷土徳島に母親が居

り、一人家を守る。徳島は先祖代々墳墓の地である。近ひ将来、徳島に帰郷し、必ず孝道を全ふする。「孝子之情有終身喪」「忠臣之心無革命時」。郷土より先哲の至言に勤める所存である。

参考文献

平泉澄博士著　『少年日本史』　皇學館大學出版部

『山　彦』　勉誠出版

杉浦重剛著・所功解説　『昭和天皇の学ばれた教育勅語』　同

瀧川政次郎著　『東京裁判をさばく』上下巻　創拓社

谷省吾著　『神道原論』　皇學館大學出版部

横浜市の成り立ち

鍋屋次郎

一　はじめに

今では横浜市は東京に次ぐ日本第二の大都会になっています。江戸時代、東京は江戸城、大阪は大阪城、名古屋は名古屋城、仙台は青葉城のように、お城があって大名がいて、土地の歴史と城下町を作って現在の大都市になっていますが、横浜市にはそのような歴史は全くありません。

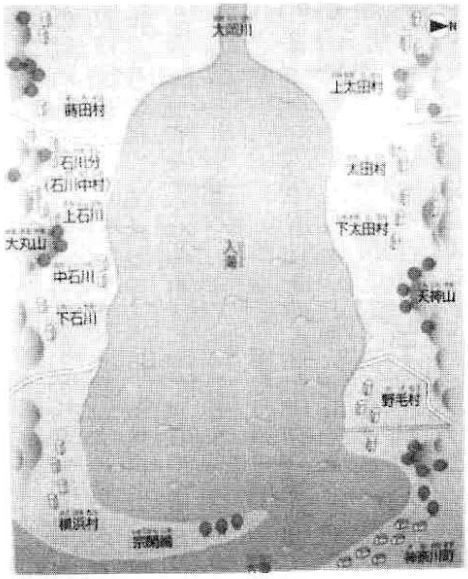
東海道五十三次で京に上るとき、お江戸日本橋を出て品川、川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚と宿場を通って行きますが、横浜という宿場はどこにもありません。

調べてみると、公的な記録としての「横浜」の地名が出てくるのは安政五年（一八五八）六月十九日、神奈川湊沖のボーハッタン号上で日米修好通商条約を締結したとき、アメリカは神奈川宿、神奈川湊の開港を求めてきましたが、幕府は攘夷思想への警戒から、多くの日本人が外国人と交流することを避けるために、埋め立て工事が終わったばかりで、戸数も少ない寒村だった横浜村を選び、そこに急遽港を作って開港することとしました。

二　横浜村はどこにあった？

横浜村ってどこにあったの？と質問が出てきます。二百五十年程度前に「吉田新田」として埋め立てた土地の、埋め立て前の入海図①（注①）の下部に左から入海を塞ぐような形で「宗閑嶋」と書かれた岬があります。その岬の左側根元に「横浜村」と書かれています。ここが江戸幕府が開港するために港を作った場所です。埋め立て前の横浜村の戸数は十五～六戸で、全て茅葺の家だったと伝えられています。

図① 吉田新田埋立前の入海図

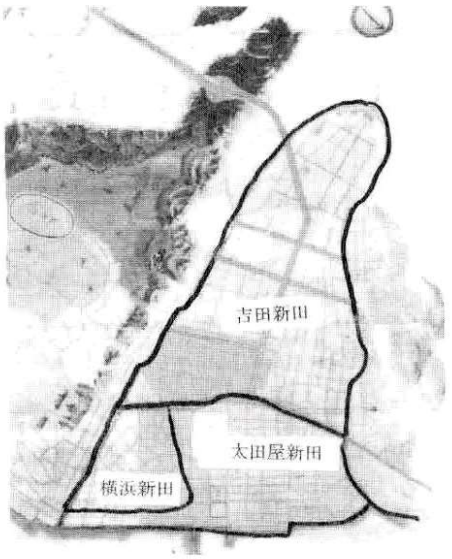


現在は埋め立てられているこの入海は横浜市のどこにあったのかを調べると、図②（注②）の吉田新田表示部分は現在の横浜市地図　図③（一三〇、一三一頁参照）（注③）の「吉田新田」表示部分です。ここからお分かりのように、現在の横浜市中心部はこのような入海が多くあり、一番最初に埋め立てられた吉田新田は図②で示されているような地形で、続いて後年横浜新田が、また更に約五十年後に太田屋新田の埋め立てが行われて、東京湾に面した広大な地域となっています。そのほかこの周辺には平沼新田、尾張屋新田、芝生村新田、岡野新田、藤江新田、入江新田などの埋め立てが行われ、昔は横浜市平坦地の多くが入海であり、それらが埋め立てられて現在の横浜市中心部になっています。

注① 図①
吉田新田埋立以前横浜図（横浜市歴史博物館所蔵）

注② 図②
当初の吉田新田埋立地形とその後の横浜新田、太田屋新田の埋立図

図② 当初の吉田新田埋立地形とその後の横浜新田、太田屋新田の埋立図



三　吉田新田等の埋め立て経緯

図①で示した入海の埋め立ては、吉田新田、横浜新田、太田屋新田の三つの埋め立て工事により埋め立てが完了しました。図②の通りです。埋め立て工事時期の順を追って説明すれば

吉田新田　着工　明暦二年（一六五六）
　　完工　寛文七年（一六六七）
横浜新田　着完工　文化年間（一八〇四～一八一七）
太田屋新田　完工　安政三年（一八五六）

の順に埋め立てが行われました。

吉田新田

（一）位置・面積等

吉田新田の位置は図②の通りで、上部で大岡川の流れを二分して、右が大岡川、中央に中川、左に中村川を通して、横浜村のある宗閑嶋の手前に大水門（後述図④参照）を設けて、そこまでが吉田新田です。現在の地図（図③参照）で言えば首都高速花の木インター近くから大岡川が大岡川と中村川に分かれ、その分疑点から石川町・関内・桜木町を結ぶ線までの、二つの川に囲まれた地域になっています。

この面積は一〇七町八反五畝二十九歩（概算一〇八万六千㎡）と記録（横浜開港資料館）されていて、米の生産高は一四八石三斗五升五合と査定されています。

（二）埋め立てを企画実行した人物は？

吉田勘兵衛という人物です。吉田勘兵衛は摂津の国能勢郡（現大阪市）に生まれ、長じて江戸に出て木材・石材商を営んでいました。

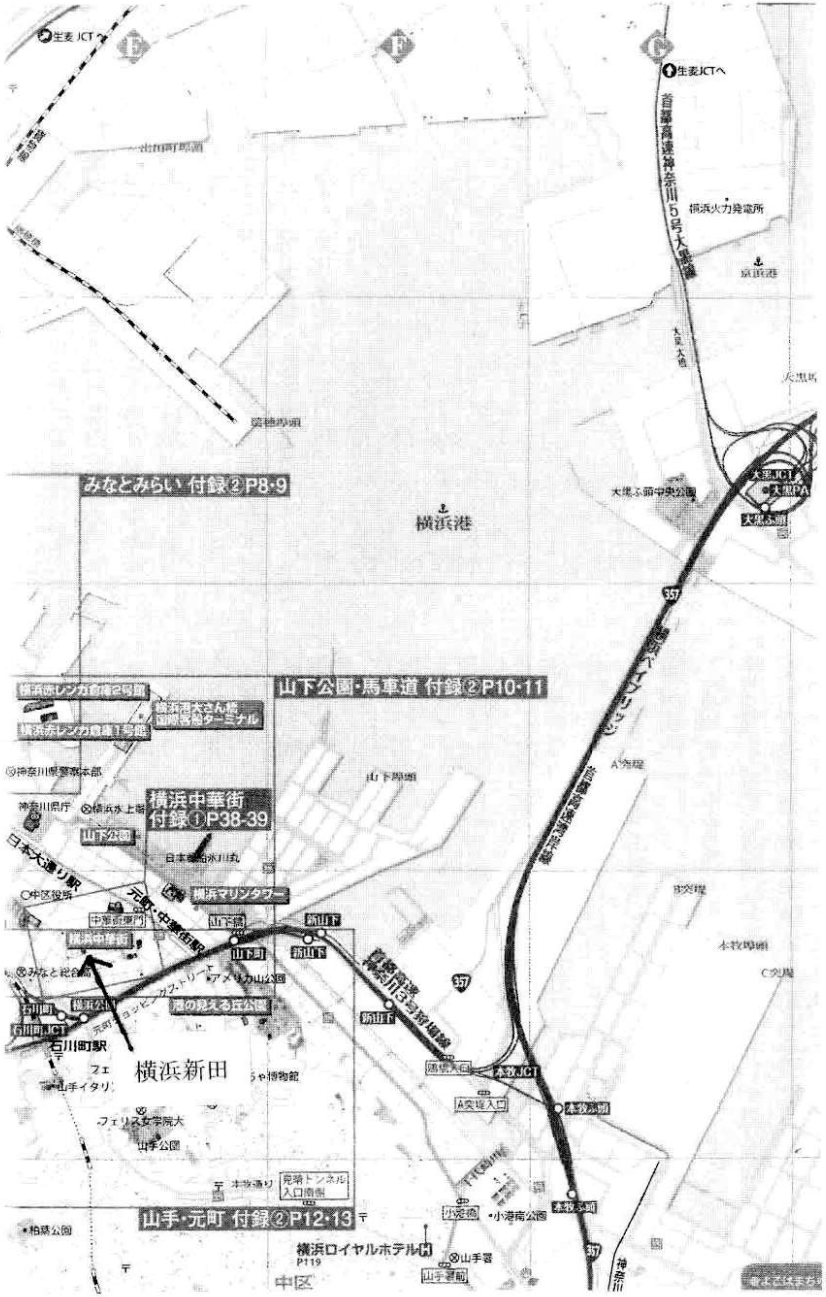
吉田勘兵衛は内陸部まで深く入り込んでいるこの入海を見て、入海の最奥部は大岡川の河口で川から流出する土砂が河口に積もって埋め立てしやすい特徴を持っていることを見抜きました。

そこで幕府の許可を得て明暦二年（一六五六）に埋め立てを着工しましたが、翌年の長雨で潮除堤が決壊し中断、その二年後工事を再開し、寛文二年（一六六七）年に完成しました。この新田は当初右側の地名「野毛村」から「野毛新田」と呼ばれていましたが、時の将軍徳川家綱がこの埋立を称賛し、吉田勘兵衛は苗字帯刀を許され、新田の名も「吉田新田」と改称されました。

横浜新田

吉田新田が完成したのち、時の経過とともに吉田新田と横浜村の砂浜に挟まれた入り江が浅くなってきました。吉田新田が完成して約一五〇年後の文化年間（一八〇四～一八一七）に横浜村の人たちによって横浜新田が作られました。

注③　図③　図②の現在の横浜市地図上での位置


横浜港
みなとみらい 付録②P8・9
山下公園・馬車道 付録②P10・11
横浜中華街 付録①P38・39
山手・元町 付録②P12・13
横浜新田
横浜ロイヤルホテル
中区
生麦JCTへ
首都高速神奈川5号大黒線
大黒JCT
大黒PA
大黒ふ頭
大黒ふ頭中央公園
横浜火力発電所
京浜港
357
首都高速神奈川1号横羽線
山下埠頭
日本大通り駅
元町・中華街駅
新山下
山下ふ頭
石川町駅
本牧JCT
本牧ふ頭
本牧埠頭
山手公園
山手イタリア山庭園
フェリス女学院大
横浜中華街
山下公園
横浜マリンタワー
横浜赤レンガ倉庫2号館
横浜赤レンガ倉庫1号館
横浜港大さん橋国際客船ターミナル
神奈川県庁
中区役所
日本郵船氷川丸
港の見える丘公園
山手町
石川町JCT
山手トンネル
山手トンネル入口南側
小港公園
小港ふ頭
山手本通り
山手西洋館
山手十番館
山手資料館
山手111番館
山手234番館
山手聖公会
山手外国人墓地
山手本町通り
山手イタリア山庭園
山手公園
山手町

太田屋新田

横浜新田が完成して約五〇年後に太田屋新田が作られ、それにより吉田新田、横浜新田、太田屋新田の三つの埋立地が東京湾まで繋がった結果、奥行きの深い広大な埋め立て地ができました。

四　入海の埋め立て工法

明暦二年（一六五六）年に埋め立て工事が始まったとき、今と違って土木工事用の大型重機があったわけではなく、土の運搬にしても人力（じんりょく）しかなかったと思います。吉田新田の面積は先に述べたように一〇八万㎡を超す広さです。これだけの広さの入海をどのようにして埋め立てたのでしょうか。

これについて横浜開港資料館に「海にできた新田」記事の中に「新田の作り方」がありましたのでそれを紹介させていただきます。

（一）新田にしようとする入り江の中で、引き潮の時に干潟が現れるような遠浅の場所（寄州という）を探し出します。

（二）引き潮や満ち潮といった海水の流れと一緒に動く土や砂が逃げてゆかないように、遠浅の場所に杭になる木や竹を立てます。そうすると、浅瀬だった場所に陸地が少しずつ出来てきます。

（三）さらに芦や萱といった植物を植えると、葦や萱の根が土の中でのび、絡み合っていくことにより、少しの大波では流されないような安定した陸地となり、その面積も少しずつ増えていきます。

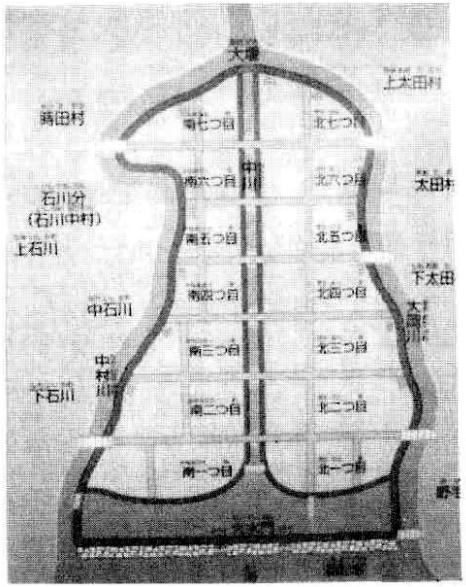
（四）そうして出来た陸地と、その近くの浅い海を囲むように頑丈な堤（堤防）を作ります。そして、堤のなかに残っている海水を干上がらせます。

（五）こうして堤の中が新田となっていきます。そしてもともと陸地であったところから用水を引き、水田を作っていきます。ただし、水が流れにくい小高いところは畑に、塩分が濃く残っているところは塩田（塩をつくる場所）にしていきます。

と、以上のような潮の干満による土砂の動きと、それに伴い周辺が陸地化していく自然の力を利用したものでした。

埋め立て工法として参考になる埋立図の一つに図④（注④）がありました。これを見ていると、埋め立て計画図面として、広い入海を南北それぞれ七区画に分けて、一区画ずつ埋め立てを行ったのではないかと推定されます。

図④　吉田新田と埋立後図



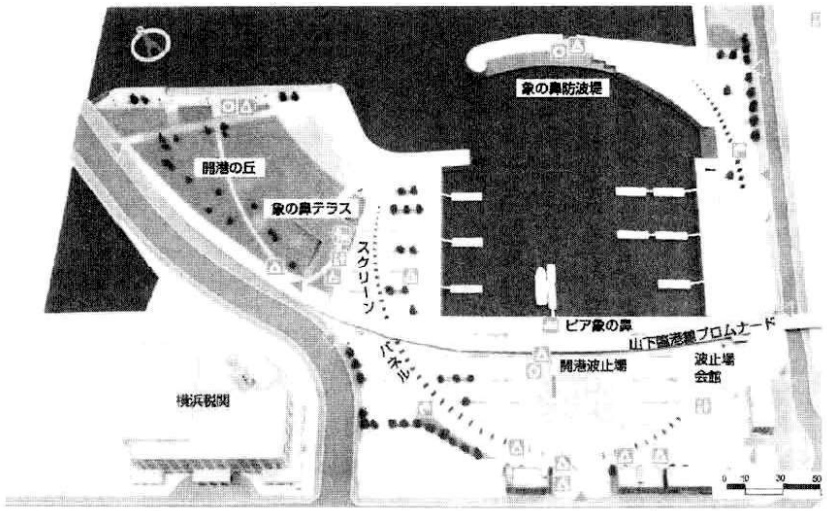
注④　図④
吉田新田埋立後図

五　横浜港開港場所は今の地図ではどこ？

第三図の山下公園の文字表示の上に「横浜港大（おお）さん橋国際客船ターミナル」が上方向にのびています。

その左に図⑤（注⑤）に示した図の中央上部に「象の鼻防波堤」その真下に「ピア（波止場）象の鼻」その下に「開港波止場」の表示があります。

図⑤　横浜開港場所と象の鼻の名前



注⑤　図⑤
横浜港開港場所と象の鼻の名前

防波堤が象の鼻と名付けられた理由は、開港に当たり二本の突堤が作られ、東側の突堤を弓なりに延長した(現在はありません)ので、その形が象の鼻に似ていることからということです。小生は埋立前の宗閑嶋の先端が海に残っていたことから、その地域を象の鼻と言っていたのでは?と思いましたが、記録からは違うようでした。

六　横浜村の発展

横浜港開港前後から、横浜村(埋立前の宗閑嶋全体を横浜村と考える)からフランス山を登った港の見える丘公園の先に「外国人居留地」ができ、その右手に外国人墓地もできました。新たにできた横浜港、横浜村を起点に外国人居留地、外国人墓地への拠点となった横浜村は一躍脚光を浴び、安政六年(一八五九)年には、東海道神奈川宿から湾岸を通って横浜村に通ずる「横浜道」も建設されていました。

そして横浜港を中心とした輸出入の発展に伴い諸々の行政面が充実し

一、安政六年(一八五九)六月二日横浜港開港とともに、今の関内駅吉田橋寄りに関所が置かれ、その少し西(現西区紅葉山)に神奈川奉行所を設け、横浜港周辺の行政事務を取り扱い、横浜港から少し北(現在の神奈川県庁付近)に神奈川運上所が設置されました。

二、安政七年(一八六〇)横浜村は横浜町に昇格、関内地区が横浜町と太田町の二つの町になりました。

三、明治十一年(一八七八)、横浜町は輸出入の活性化と人口増加から横浜区となり、横浜正金銀行の開業、近代水道の敷設、など都市化が進みました。

四、明治二十二年四月一日　市制施行により横浜区を中心に横浜市となりました。

以上が寒村横浜村が横浜市になった行政的経緯です。

七　埋立地の現在は

吉田新田・横浜新田・太田屋新田の三新田合同地域の現状

三新田を合同した図面は第③図に示した通り、吉野町駅の少し左、首都高速花の木インターの近くで大岡川を中村川と左右に分離して、左右の二つの川が東京湾に注ぐまでの間に開まれた広大な地域です。

今、横浜地図を広げてみると、鉄道では「みなとみらい線」が馬車道駅から元町・中華街駅まで、横浜市営地下鉄が桜木町駅から吉野町駅まで、JR京浜東北線が桜木町駅から石川町駅まで、首都高速道路が山下町インターから花の木インターに至るまでの地域内です。

商店街では横浜中華街全域、伊勢佐木町商店街全域、官公庁では神奈川県庁舎、横浜市役所庁舎、みなと総合庁舎、横浜中区役所、横浜南区役所、神奈川県警察本部、その他施設では横浜スタジアム、県立歴史博物館、横浜

歴史資料館などと、その他多くの商業施設がこの地域内にあります。

以上のように行政・文化・商業の中心的役割を果たす地域となっています。

八　むすび

横浜市の今に至る歴史を大まかに振り返りましたが、その発端は「横浜市」の「横浜」の名称はどこから来たのか、について知る機会がなく、地元出版社で出版していたかもわかりませんが小生が目にすることはありませんでした。

今回、その疑問を解明するために横浜開港資料館に資料探しに行ったところ、偶然にも横浜開港資料館で「開港場横浜の原風景―三百五十年の歴史を探る―」の展示会を開催しており、それを見学しながら横浜開港資料館所蔵の資料も拝見することができました。

思ったことは、日本の国土はどこでも山が海岸近くまで来ていて、都会の平地は大きな川の河口にしかないことを考えると、この横浜は人為的に入り海を埋め立てて平地を作って現在があることに驚きました。

三百五十年前に吉田勘兵衛が幕府の許可を得て埋め立てを行ったことを端緒として、横浜新田・太田屋新田の埋め立て完成時期が、たまたま歴史的に我が国の開港のタイミングと、開港場所の政治的選択という「時」と「政治判断」が合致したことが奇跡的に横浜市を生んだと言ってもいいのではないかと思います。

横浜村から横浜市への発展は、そのような意味で「港町スタート」の典型例であったと思います。

完

短歌

行雲流水（五十五）

石黒修身

近詠二十首

カズオ　イシグロ氏

同姓の故か気になるノーベル賞カズオイシグロいく冊か読む

長崎の記憶が「奇妙な情熱」となれりと語る小説の内

吾れ読みし氏の小説は難解に非ずと云えど難儀と覚ゆ

カズオ氏は温かき人柄滲ませて平和を語る記念講演

受賞式「平和を広めるノーベル賞」母の教えとカズオ氏語る

時局・世相

「エルサレム」アンタッヤブルは自明なり敢えて触れるはトランプの妄

オリンピック露国のドーピング顕わなり大国のスポーツモラルの欠除を憂う

近海を不法に蠢く北鮮の舟を一網打尽にしたきもの

米朝の首領同士の応酬は児戯にも似てたゞに唖然と

書かれたる今年の漢字は「北」となる含意は夫々世相を写す

身近・日常

睦みたる従兄（あに）が逝きて二十年その子等ゆ届く佐渡の便りが

この頃は佐渡でも鰤が獲れますと甥から届く大鰤一尾

入退院繰り返す友の退院に今度は本復と妻力強く

第三の歌集出版終えし後虚脱感あり作歌振わず
学士会短歌部門で本年の理事長杯を受けしを自祝す

季節・自然

年の瀬の雑踏抜けて歩みたり「街角景気」は好転と聞く
木枯らしに銀杏の黄葉散り敷ける家までの道俯きて歩む
天心の寒月冴えて青々と玻瑠窓を抜け淡く射し込む
牡蠣・鰤と旬の味覚を追い求めもうそろそろに終るは寂し
晩秋が初冬に変るこの季節雪の便りは早日に厳し

漢詩

潮汐錄（九十）

鯨游海

賀戊戌春

平成三十年正月

同文同種謂同胞
相似外形非内包
天命日韓唇歯定
犬猿何日水魚交

押韻・胞包交

〈戊戌の春を賀す〉

同文同種を　同胞と謂ふも
相似る外形　非なる内包
日韓を唇歯に定めしは　天命なれば
犬猿何時の日ぞ　水魚に交るは

〔注　解〕

同文同種＝文字や文明を共有する民族＝同胞＝同朋。
同胞・同朋＝同族の民。同じ国土に生まれた国民。兄弟姉妹。
また同袍・は一着の袍を共に着る下宿生―同学の徒をいう。
唇歯＝くちびると歯。相互の利害、距離が近いことの喩え。十八史略「蜀有重險之固呉有三江之沮共爲唇歯」。
唇亡則歯寒＝くちびる亡びて歯寒し＝利害が密接な者同志の一方が亡びると他も危いと言う諺（左傳・戰國策）
水魚之交＝魚と水のように切り離すことの出来ない親密な交際仲間のこと。蜀史・諸葛亮傳「先生日孤之有孔明猶魚之有水」。

〔口語訳〕

文字と文明と人種を共有する国同志を同胞と謂うが、外形は似ていて中味の違う日本と韓国の二国がある。
両国が至近距離に位置するのは宿命なのだ。だから……
犬猿の仲の如き両国ではあるが、天命には逆らえない。
日韓両国が将来水魚の関係になれるのは何時だろうか。

☆呉か越か釜山の雲か竹島か
天草灘に鵠たちこめつ

加計學園岡山理科大學獣醫學部
平成二九年九月

牛馬一頭三萬兩
獣醫教育要千金
年年分擔壓財政
伊豫郷人悔恨深

押韻・金　深

〈加計学園岡山理科大学獣医学部〉

牛馬一頭　三万両
獣医の教育は　千金を要す
年々の分担　財政を圧すれば
伊予の郷人　悔恨深し

〔注　解〕

獣医師の養成には医師並み或はそれ以上の費用がかかる。解剖一つを採っても牛馬一頭の費用は高価である。故に獣医師の養成は主として国立大学が担ってきた。北大、東大、農工大、大阪府大等11の国公立大で定員は各大学40～50人。一方私大は日大、麻布大、北里大等、数大学に過ぎない。つまり営利主義の経営には馴じまないのである。国際的にみてもわが国は各大学の規模が小さく今後は資源の集約による効率的な経営が不可避とされる。

☆舌溶かす世界に誇るこの和牛
日夜添ひ寝の獣医知らずや

森友學園瑞穂乃國小學院
平成二九年四月

國富盜人雖糾彈
有三分理却心安
豈唯暴露官忖度
況亦權門歷史觀

押韻・彈　安　觀

〈森友学園瑞穂の国小学院〉

国富の盗人　糾弾すと雖も
三分の理有りて　却って心安し
豈に唯だに　官の忖度をあばくのみならんや
況や亦　権門の歴史観に於いてをや

〔注　解〕

国富＝ここでは八億円値引きで払い下げられた国有地。「盗人にも三分の理」＝如何なる事も当人にはそれなりの理由がある事の譬え。こじつけの理屈もつければつけられるものだとの意。尚この詩では官に対する庶民の判官びいきの心持ちも含む。盜＝盗の正字。
豈唯A亦B＝豈を用いた反語の累加形「どうしてAだけと限ろうか、いや更にまたBも」。ここでは「官の忖度を暴いたのみならず総理夫妻の歴史観をも暴いた」

☆権力にすり寄る褒美まざまざと
長官の椅子八億の護美

《漢詩の流れ78》鎌倉・室町時代③釋圓旨

圓旨（一二九四～一三六四）越前の人。鎌倉円覚寺に学び元に渡り十一年の後帰国。弘祥寺を興す。京都建仁寺で入滅。雪村、良寛と並んで北陸三詩僧と称せられた。
その詩風は清爽、洒脱で大自然の景物を歌う。

和遊石頭城韻（石頭城に遊ぶの韻に和す）
故國山河幾度更　故国の山河　幾度か更まる
英雄埋骨不埋名　英雄骨を埋めて　名を埋めず
楚雲兼雨連鍾阜　雲は雨を兼ねて　鍾阜に連なり
淮水接潮回石城　淮水は潮に接して　石城を回る
世路區區迷蜨夢　世路区々として　蜨夢を迷ひ
江湖渺渺冷鷗盟　江湖渺として　鷗盟冷ややかなり
白頭僧在興亡外　白頭の僧在り　興亡の外
一卷楞嚴證道情　一巻の楞厳　道情を証す

鍾阜＝山の名。蜨＝蝶の古字。楞嚴＝仏教の経典。道情＝仏道。鷗盟＝かもめの交友。隠居して風流に暮らす。
圓旨が長江の石頭城に遊んだ時の句。山河も姿を変え人も滅する。世の興亡、人の生死など何れも仏者にとっては仮のもの、空なるものである。
仏者は世俗の外に在って眞の悟りの道に勤しむのだ。

漢詩

汲深録（十一）

松井秀人

野渡放舟

（野渡放舟）
平成二十九年八月

老夫避暑渡津頭　老夫　暑を避く　渡津の頭
渺渺清流欲放舟　渺々たる清流　放舟を欲す
忽聴櫓聲波上興　忽聴く櫓声　波上の興
風帆飛槳夕陽浮　風帆　飛槳　夕陽浮ぶ
押韻・頭　舟　浮

〔注　解〕
老夫＝年よりの男性。
渡津＝渡し場。
渺渺＝広く果てしないさま。
清流＝清らかな水の流れ。
櫓聲＝船の櫓をこぐ音。
風帆＝風を受けてふくらんだ、船の帆。
槳＝かじ。かい。

〔口語訳〕
老人が暑を避けて　渡し場のあたりにきた。
広々とした清らかな水流に、舟を出そうとする。
忽ち聴く櫓をこぐ音は、波の上の楽しみである。
帆に風を受けて船は飛ぶようであり、夕陽が浮んでいる。

僧院喫茶

（僧院喫茶）
平成二十九年八月

訪來僧院夕陽前　訪ね来たる僧院　夕陽の前
瑟瑟松風颺茗煙　瑟瑟たる松風　茗煙　颺る
香泛一甌喉吻潤　香泛ぶ一甌　喉吻潤う
清談聽坐意悠然　清談　そぞろに聴けば　意悠然たり
押韻・前　煙　然

〔注　解〕
瑟瑟＝さびしげにきびしく吹く風の形容。
颺＝風がものを吹き上げる
一甌＝一わん。

〔口語訳〕
訪れた僧院は、夕陽に照らされている。
さびしげにきびしく吹く松風に、茶の湯気が颺る
香が泛ぶ一わんで　喉が潤う
清談を聞き、気持ちがゆったりした。

東窗待月

（東窓に月を待つ）
平成二十九年九月

客舎東窗夜色幽　客舎の東窓　夜色幽なり
憶鄉獨待玉輪浮　郷を憶いて独り待てば　玉輪浮び
清光徐上明千里　清光　徐に上り　千里明るし
同見親朋思我不　同に見る親朋　我を思うや否や
押韻・幽　浮　不

〔注　解〕
玉輪＝月の異称。
清光＝澄みきった清らかな光。
徐上＝おもむろに上り。

〔口語訳〕
旅館の東窓からの夜景はくらい。
故郷を憶いながら独り待つと、月が出てきた。
月の光は徐に上り、千里を照らす。
故郷でともに月を見る親友は、
旅にいる私を思っていてくれるのだろうか。

茅廬夜雨

（茅廬の夜雨）
平成二十九年十月

雨裏茅廬携酒歸　雨裏の茅廬　酒を携えて帰る
柴門開放客來稀　柴門を開放すれど　客来稀れなり
半宵溜韻如琴瑟　半宵　溜韻　琴瑟の如し
獨酌繙書燭影微　独酌して　書を繙けば　燭影微かなり
押韻・歸　稀　微

〔注　解〕
雨裏＝雨の中。
茅廬＝茅ぶきの家。あばらや。自分の家の謙称。
柴門＝柴で作った門。
半宵＝よなか。夜半。
溜韻＝雨だれのひびき。
琴瑟＝琴と瑟（おおごと）。

〔口語訳〕
雨の中のむさ苦しい家に、酒を携えて帰る。
柴門を開けて待っていても、客はめったに来ない。
夜半の雨だれの音は、琴瑟のようだ。
独りで酒を飲んで書を読むが、ともし火の光はかすかである。

函山秋色

（函山秋色）
平成二十九年十月

一望函山紅葉妍　一望すれば函山　紅葉妍なり
登來險路欲昏天　登り来たる険路　昏れんと欲するの天
温泉獨酌鳴孤蚌　温泉　独酌　孤蚌鳴き
秋氣侵肌月皎然　秋気　肌を侵し　月皎然たり
押韻・妍　天　然

〔注　解〕
函山＝箱根山。
蚌＝こおろぎ。
皎然＝明らかなさま、色の白いさま。

〔口語訳〕
一望すると、箱根山は紅葉が美しい。
険しい路を登って来たが、空は昏れようとしている。
温泉で独りで酒を飲んでいると、孤蚌が鳴いている
秋のけはいが肌を侵し、月は明るく光っている。

ロボット雑考（その九）

三戸岡　道夫

（農業へＡＩが）

最近は農業分野へもＡＩが乗り出している。農業も人手不足の時代になっているので、作業の負担軽減や効率化が図れるＩＯＴや、ＡＩへのニーズが高まり、活躍している。

富山県は耕地面積に占める水田の割合が、全国一位である。その西部にある高岡市の、農家大坪さんは、毎朝、自宅でタブレットから、四五〇〇平方メートルの水田の水温や、水位を確認している。タブレットの開や閉をタッチすれば、自宅にいながら遠くにある水門を開閉し、水位を調整できるのである。

タブレットのないときは、自宅から車で三分、あぜ道を二分ほど歩いて、水位を確認していた。また水門を開いた時には、二～三時間後に、水門を閉めに行かなくてはならなかった。

大坪さんが利用しているのは、水位調整サービス「パディッチ」である。水門に付けた機器がリアルタイムで水温や水位を測り、アプリで開閉を遠隔操作できるのである。

ＦＡロボットメーカーのスキューズ（京都市）は、人に代わってトマトを自動収穫するＡＩロボットの開発を進めている。ロボットは台車の上にアームやカメラを搭載する。畝の間を走行しながら、カメラで収穫期のトマトを色で選別する。そしてアームが茎の部分をカッターで切断して、収穫する。

トマトの培栽で、作業の負担が一番重いのは収穫である。収穫は、人が夜明けとともに起きて作業を始めなければならないが、ロボットはそれを夜明け前にやってくれる。

カメラに撮影した画像を認識するＡＩの技術には、人間の脳の構造を模倣し、人間が関与せずに学習するディープラーニング（深層学習）を使っている。

農業法人も動き出している。サラダボウル（山梨県中央市）と、アグリビジョン（山梨県北杜市）、ＮＴＴ東日本は、二〇一七年五月から、ＡＩによるトマトの収穫量の予測実験を開始した。約三万平方メートルのビニールハウス内に、Ｗｉ－Ｆｉの環境を整備し、週約三回、台車に取り付けたスマートフォンでトマトの映像を撮影する。ＡＩを活用した画像解析技術によって、収穫可能なトマトを選別するのである。

農業ＩＴ化の背景には、日本の就農人口の大幅な減少に加え、日欧の経済連携協定（ＥＰＡ）発効などで、農産品の国際競争が激化することへの、関係者の強い危機感がある。

農林水産省によると、二〇一六年の日本の農業就業人口は十年比で二六パーセント減の一九二万人である。六五才以上が六五パーセントを占め、平均年令は六十六歳である。二〇一七年は一八一万人（概算値）と、さらに十一万人減る見通しである。

少子高齢化で、担い手不足や技術の継承に悩まされるのは、どの産業も同じであり、ＩＴで人材を補おうとする考えが、製造業では広まっている。

従来、農業は勘や経験がものを言うため、ＩＴで置き換えるのは難しいとされてきた。しかしディープランニングのようなＡＩ進歩や、クラウド普及などで、その困難の壁が下がってきている。農業のＩＯＴやＡＩによるスマート化が進めば、ＡＩによる新しい農業が展開するであろう。

（ロボット建築現場へも登場）

清水建設は、自ら周囲の状況を把握して動く、自律型ロボットを開発し、二〇一八年に建築現場にそのロボットを一斉に投入する。ビルの建設現場などで、資材の搬送や、鉄骨の溶接などに用いる。各工程で必要な技能労働者を、約七〇パーセント減らすことができる。一〇〇カ所の工事現場で、八千台のロボットを管理できるシステムを開発した。

建築現場は全地球測位システム（ＧＰＳ）の電波が届きにくく、ロボットが自分の位置を把握するのが難しいことも、自律型ロボットの導入が難しかった理由である。

清水建設は三次元の設計図面センサーなどを組み合わせ、自らの位置を把握できるロボットを開発した。大手ゼネコンのビル建築現場で、複類種類の自律型ロボットを運用するのは、初めてである。

鉄骨を自動で溶接できるロボットのほか、資材を作業する場所まで運ぶ搬送ロボット二種類と、資材の積みか

えを担うロボット、天井に内装材を据え付けるロボットの、合計五種類を同時に投入する。搬送ロボットがエレベーターを経由して、据え付けロボットに資材を渡すなどの、連携も可能である。

いずれも同様の作業を技能労働者が担う場合にくらべ、七〇パーセント少ない人員数で運用が可能である。試算では同ビルの工事期間中に、のべ約六千人の人員を減らすことができる。全行程で必要な人員の一・一パーセントに相当する。

新たに開発したシステムでは、現場の担当者がタブレットを操作して、簡単にロボットに指示を出せる。過去の記録をロボットが学習し、作業の精度を高めることも可能である。清水建設はシステムも合わせた一連の開発に、約二十億円を投入した。

ゼネコン各社では、生産性を向上させる取組みが相次いでいる。産業界全体で人手不足が広がる中で、建設業界でも、特定のスキルや経験が必要な技能労働者の確保が、大きな課題になっている。

建設業に従事する技能労働者は二〇一五年度に……四万人だったが、二〇二五年度には二一六万人に減少するとの予測がある。この十年で六十万人近く減少し、今後十年以内にさらに一〇〇万人規模で減少する見通しである。清水建設が開発するロボットは、生産性を高めるだけでなく、現場の技能を伝承しながら、技能者不足に対応することが出来るのである。

（AIで道路・橋　24時間点検）

東京電力ホールディングス（HD）やダイキン工業、大阪大などの研究チームが、AIを使って24時間態勢で、インフラ施設を点検できる技術を開発している。全国各地にある橋や道路、送電網などの傷み工合のデーターを広域的にインターネットを経由して収集。それぞれの施設で補修が必要となる時期などをAIが予測するのが特徴で、平成三十二年度に世界初の実用化を目指す。

東電HDとグループ会社が持つインフラ点検のノウハウを学んだAIが、過去のデーターと照合して施設の劣化状態を診断する。あらかじめインフラ施設に取り付けたセンサー機器が、コンクリートや鋼材のゆがみなどを自動で計測。そのデーターを無線通信でネット上のサーバーに集めて、AIに解析させる仕組みである。

点検データーは一秒ごとに送信でき、24時間態勢での監視も可能となるという。

センサーを組み込んだ機器類には、さびに強く耐久性のある化学樹脂を使う予定で、ダイキン工業が素材を研究。AIは、大阪大学産業科学研究所が開発を担う。

（トヨタ・リハビリ支援ロボ）

トヨタ自動車は平成二十九年（二〇一七）四月に、リハビリ支援用のロボットを実用化したと発表した。高齢化社会の進展をにらみ、医療介護などの分野で、人と共生するパートナーロボットを開発することで、新たな事業の柱に育てる。秋から医療機関などに貸与し、三年後をめどに国内で百台の普及を目指す。

トヨタは二〇〇七年からパートナーロボットの研究開発に着手し、十年かけて同社として初めて実用化にこぎつけた。今回実用化したロボットは、脳卒中などの患者が再び歩けるように支援する。屋内で走れる健康器具のトレッドミルと、患者の間接に装着するロボットを組み合わせた構成である。患者が歩行練習するときに、ロボット部分が体重を支えたり、足を降り出したりするのを支援することで、歩けるようになるのが一・六倍はやくなるという。

二〇一六年十一月に医療機器として認可を得た。当面は初期費用百万円と、毎月のレンタル料三五万円がかかる。将来的にはリハビリ施設がある全国一五〇〇の医療機関への導入をめざす。トヨタは「すべての人に移動の自由を」を合言葉に歩行練習など、六分野でパートナーロボットの開発を進めている。

高齢化や人手不足を背景に、生活支援ロボットの必要性は増しており、大手から中小企業まで、参入の裾野が広がっている。ホンダが歩行支援ロボットを手掛けるほか、パナソニックも介護ロボットに力を入れている。筑波大学ベンチャーのサイバーダインは使用者の手足の動きを助ける装着型ロボット「HAL」を手掛けている。

しかし生活支援ロボットは、使用に際して不特定多数の人が関わり、使用の環境が変化するため、安全性の確保や、共通基準の整備が欠かせない。安全基準の整備は、まだ始まったばかりである。経済産業省は二〇一六年に生活支援ロボットの安全基準を日本工業規格（JIS）に新設した。

（銀行の個人融資をAI審査で）

みずほ銀行とソフトバンクは平成二十九年九月から、AI（人口知能）を使った個人向け融資を始めた。

銀行口座の入出金履歴や、携帯電話の利用料金の支払い状況などをもとに、信用力を点数化し、最短三〇分で融資をする。AIを使った個人向け融資は国内で初めてであり、二十代～三十代の利用客を想定し、今後の収益の柱に育てていく。

信用力を点数化した貸出方法は「スコア・レンディング」という。みずほ銀行とソフトバンクが、昨年共同出資して設立した「Jスコア」が事業を担う。客は

スマートフォン（スマホ）で必要な情報を入力すれば、一〇〇〇点を上限とする点数により、貸出額や金利を決める。貸出金額は年収の三分の一までである。

銀行口座の預金者やＡＴＭの利用回数に加え、資金の使い道や趣味なども、点数化の対象となる。たとえばスマホの契約年月が伸びると、点数は上がる。点数が高くなると、貸出額が増え、金利は下がる。点数は毎月変わる。判断材料を増やして、審査の精度を高め、金利は年一・八～一五パーセント程度のカードローン金利より押える。

みずほ銀行としては、生活資金として使うよりも、資格取得の資金などの、機能的な資金として使ってほしい考えである。与信判断が難しく、金利が高くなりがちな若年層への貸出の増加を狙っている。アメリカでは低金利の教育ローンを貸出す、金融ベンチャーが台頭している。みずほ銀行とソフトバンクも、そうした取組みを視野に入れているのである。

この方式は都市銀行だけでなく、地方銀行でも始まっている。横浜銀行や千葉銀行など、地方銀行グループ四社は平成三十年から、人口知能（ＡＩ）を活用した、少額融資を始める。オリックスと提携し、オリックス子会社の会計ソフト会社「弥生」（東京千代田区）の開発するシステムを活用する。

中小零細企業や個人事業主は、地方銀行にとっても手が届きにくい。銀行が人手をかけて財務分析しても、融資額が小さく、融資対象とならない例が多かった。そのため中小零細企業や個人の三割程度が、資金需要がありながら、金融機関との接点が少なく、借入れをあきらめていた。金融庁もこうした事業群を「金融排除失」として、その解消を問題にしていた。それをＡＩを活用したフィンテックで解消するのである。

企業が融資を申し込むと、ＡＩがクラウド上で管理される財務情報や、取引先との決済情報を自動で取得する。過去二、三年分の取引情報を分析し、継続した売上高があるかなど、将来の返済能力を見きわめる。

さらに会計ソフト会社「弥生」が、顧客の同意を得て取得した匿名データ十万社分の過去の会計情報に照らし、企業の収益や財務基盤を格付けする。それに応じて融資の可否や金利の設定を決める。こうしてＡＩ融資では、最短で、申し込んだ即日に、融資を受けることが可能であるという。

このＡＩ融資の対象となるのは、これまでの銀行の融資を受ける機会が少なかった、従業員十人程度、売上高で一億円未満の中小企業や、個人事業主である。融資金額も、二百万～三百万円の短期の資金が中心となるとみている。金利はやや高めの、五～一〇パーセントになるものとみられる。

（囲碁の世界とＡＩ）

最近はＡＩ（人工知能）が囲碁や将棋の名人に勝って、この世界では人間の脳よりも優れたＡＩが生れたという情報が拡っている。最近も米グーグルの囲碁用ＡＩ「アルファ碁」と、中国の世界最強棋士との三番勝負がＡＩが連勝した。そこでグーグルはこれ以上の囲碁ＡＩの研究開発は打ち切り、囲碁で培ったＡＩ技術を、医療やエネルギー分野などの実務に役立つ方向に研究を進めていくことに、方向を変更した。

ＡＩ「アルファ碁」は囲碁用に開発されたものであるが、基盤となった研究システムは、実社会への応用ももちろん可能であり、その応用もすでに始まっている。英国では公共医療を提供する国民保健サービス（ＮＨＳ）と提携し、また特定眼疾患の検出精度向上にＡＩを活用するプロジェクトも進めている。

グーグルのデータセンターでは、大量の熱を発するサーバーの冷却に使うエネルギーを、四〇パーセント削減することに成功した。また英国の送電網を管理運営するナショナル・グリッドと、電力の需給調整にディープマインドのＡＩを活用する取組も始まった。

ＡＩが人間の頭脳より優位に立てるのは、今は囲碁などのように、定ったルールがあるゲームなどの世界に限られる。その他の世界では、まだまだである。

しかし人間が設定した目標と枠組みの中とはいえ、ＡＩが自ら考え、独創的な手を編み出すＡＩの登場には、「暴走」への懸念もあるのである。従ってＡＩに対しては、高度化するＡＩを如何に適切な管理するかという、管理方法の重要性が、今後一段と高まってくるのである。

（消費電力一万二千人分）

二〇一七年五月、米グーグルのＡＩ「アルファ碁」に、中国の棋士、柯潔（かけつ）九段は三連敗した。しかし圧倒的な力を見せたＡＩ「アルファ碁」にも、別の弱点があった。膨大な消費エネルギーである。

人間の脳の消費エネルギーは、思考時で二十一ワット。これに対してアルファ碁の消費電力は二十五万ワットであった。すなわち人間の約一万二千人分である。

「消費電力の少ない半導体が必要になる」

と、トヨタ自動車のＡＩ研究子会社、トヨタ・リサーチ・インスティテュート（ＴＲＩ）のギル・ブラット最高経営責任者は指摘する。

従来型の半導体でも高度な自動運転を実現すには、住宅を上回りかねないほどの電力が必要になる。従来の延長上にない技術革新が不可欠である。

ＡＩが高度化し、普及すればするほど、大量の計算が

必要になり、消費電力も膨らんでくる。ＡＩはなんでもバラ色の未来が待っているわけではない。いろいろな課題を乗り越え、ＡＩを社会に根付かせられるかどうか、成否は人間にかかっているのである。

（ＡＩ兵器の開発）

人口知能（ＡＩ）を搭載することで、自ら攻撃目標を発見し殺傷する「キラーロボット」が誕生する日が近づいている。ＡＩは、ひとたび軍事面で利用されると、火薬、核兵器に次ぐ、戦争の「第三の革命」を起こすと、危惧されている。二〇一七年八月に開催するキラーロボットの規制をめぐる国際会合が、注目されている。

国連ではキラーロボットを、

「自律型致死兵器システム（ＬＡＷＳ）」

と呼んでいる。人間による、人道的・倫理的判断を介さずに、自らの判断で標的を定め、人を殺傷することができる人口知能を搭載したロボットが、どの程度の判断能力、攻撃能力を持っていいのか、具体的な定義はまだ定められていない。

規制を巡っては、技術が軍用にも民生用にも利用できるため、境界線が引きにくい点などが課題である。日本などでは、キラーロボットの開発に対する規制が、民生品の研究開発を阻害しないことを求めている。

英国の物理学者のスティーブン・ホーキング博士など約一千人のＡＩ研究者は、

「完全自律型の殺傷兵器は、数十年ではなく、数年以内に実現可能だ」

と、二〇一五年の公開書簡で、事の緊迫性を訴えた。

現時点では完全自律性を有するキラーロボットは存在しないが、しかし国際人権団体のヒューマン・ライツ・ウオッチ（ＨＲＷ、本部は米ニューヨーク）は、

「米国、英国、中国、ロシア、イスラエル、韓国などは、自律稼働性のレベルが高い兵器システムを開発中である」

と指摘している。

すでにＡＩを搭載したロボットは、軍事用に利用されている。韓国は北朝鮮との軍事境界線にロボットを配備している。相手の熱や動きを感知し、目標を捉え、人間の指示に、基づき機関銃などで攻撃する能力があるとされている。

イスラエルでは、軍用機などを製造する航空機メーカーが、目標を捜索し、攻撃できる無人機を開発した。米メディアによると、二〇一六年にアゼルバイジャンがアルメニア人が乗車するバスの爆撃に利用した可能性が高いと報じた。

英国はＡＩを搭載し、指定された領域で標的を自動で

追尾する機能を有する高性能のミサイルを保有し、イラク北部での過激派組織「イスラエル国」（ＩＳ）に対する軍事攻撃で使用した。米国でも無人戦闘機や、対無人哨戒艦などの開発に着手している。

キラーロボットの利用は、戦場に送りこむ兵士の人的損害の、最小化につながる。しかしロボットが誤って殺傷をした場合の責任の所在、システムエラーによる制御不能の危険性、ロボットが人命を奪うという倫理的観点などから、反対意見が広がっている。世界の非政府組織（ＮＧＯ）などが二〇一三年に立ち上げた「ストップ・キラーロボット」キャンペーンには、現在、パキスタンやキューバなど、十九の国が賛同を表明している。

国連のキラーロボットの規制をめぐる議論は、「特定通常兵器使用禁止制御条約」（ＣＣＷ）の非公式専門家会合などで行われてきた。ＣＣＷは、非人道的な影響をもたらす特定の通常兵器の使用を禁止・制限するための国際条約で、現在一二三の国・地域が締約している。人を失明させるレーザー兵器や、探知不可能な地雷などの使用を禁止している。

二〇一四年から三回にわたり行われた非公式専門家会合を受け、二〇一六年のＣＣＷ再検討会議で、キラーロボットの規制をめぐる公式専門家会合の設置が決定した。二〇一七年に第一回の会合が開かれる予定である。

しかし、この規制に慎重な姿勢を示す国もあり、議論が思うように進んでいないのが現状である。ＣＣＷは決定をするには全会一致制をとっている。したがって問題を特定する中で、禁止や規制を検討していくことになり、短期間での結論は出にくいと思われる。したがって合意になるまでの間、各国のＡＩを搭載するロボット兵器の開発は進んでいくのである。

ＨＲＷは今後、世論を動かし、禁止に賛同していない国の考え方を、動かしていく方針である。しかし各国の思惑が渦巻く中で、今後の運行は難行が予想される。

（ＡＩ世界へのベンチャー投資資金調達）

ＡＩの研究、産業化は、最近急速に進んでいるが、それは世界的にどの程度のベンチャー投資なっているのであろうか。

二〇一六年の世界のＡＩ関連ベンチャーの資金調達額は、合計で五十億ドル（約五八〇〇億円）を突破し、過去五年間で最高となった

ＡＩを活用した高度なサイバーセキュリティサービスを手掛ける米スタックパス（テキサス州）は、一億八〇〇〇万ドルを調達。合成生物技術の自動化をめざすバイオベンチャー、米ザイマージェン（カリフォルニア州）が一億三〇〇〇万ドルを調達するなど、「メガラウンド」と呼ばれる大型調達も増加傾向にある。

投資家の目は、アメリカの外へも向いている。二〇一六年の資金調達全体のうち、アメリカ以外のＡＩ関連ベンチャーの比率は三八パーセントと、二〇一二年の二一パーセントから、大きく増えている。イギリス、カナダ、フランス、イスラエル、中国、インドなど、投資対象となるベンチャーの国籍も、多様化が進んでいる。

日本のベンチャーでは、ディープラーニング（深層学習）のＡＩ技術を活用したサービスを開発するリーブマインド（東京）や、個人投資家向けの財務分析ＡＩを開発するゼノデータ・ラボ（東京）などが、資金調達に成功した。

リスクマネーの出し手としては、コーラス・ベンチャーズや、アンドリーセン・ホロウィッツなど、シリコンバレーの大手ベンチャーキャピタルの他、米インテルや、米グーグル、米ゼネラル・エレクトリック（ＧＥ）などが目立つ。米マイクロソフトも二〇一六年に、ＡＩ分野に特化した投資ファンドを新設した。

しかしＡＩ分野は、過去に二回、バブルがはじけて投資が冷えこむ「冬の時代」を経験している。米フェイスブックのＡＩ研究部門トップで、ディープラーニングの某大家は、

「資金調達をしようとする企業が、実際より出来ることを誇張するケースが増えている。これは悪い兆候である」

と指摘している。したがって一部のベンチャーの動きを警戒する声もでている。

（ソフトバンクが二足走行ロボットをめざす）

ソフトバンクは、米グーグルの持ち株会社アルファベットから、同社傘下のロボット開発ベンチャーの米ボストン・ダイナミクスとＳＣＨＡＦＴ（シャフト）を買収することで合意した。両社は二足歩行など、ロボットを動かす制御技術に優れる。

ソフトバンクはＡＩで感情を読みとるヒト型ロボット「ペッパー」を手掛けるが、メカ技術は苦手である。両社の技術を取り込み、ロボット開発力を強化する。買収額は数百億円をみられる。

ボストン・ダイナミクスは一九九二年の創業で、米国防省の国防高等研究計画局（ＤＡＲＰＡ）の支援を受けて、二足走行ロボットなどを開発してきた。二〇一三年にグーグルが約五五〇億円で買収したが、開発の方向などを巡って対立し、グーグルが売却を模索していたものである。

一方のＳＣＨＡＦＴは東京大学の出身者が設立したベンチャー企業で、ＤＡＲＰＡが主催する災害救援ロボットの大会で活躍し、グーグルが二〇一三年に買収したものである。

二社はロボットの筋肉にあたるメカを操る技術で、世

界的に注目を集めている。最近はボストン・ダイナミクスが開発し、車輪付きの両足でスキーのスラロームのように動く「ハンドル」が話題を呼んでいた。

しかしグーグルのロボット事業は事実上頓挫し、二社の行方は焦点となっていた。トヨタ自動車や米アマゾン・ドット・コムなども関心を示したが、結局ソフトバンクの手に入ったのである。

ソフトバンクは二〇一五年にペッパーで、ロボット分野に参入した。しかしペッパーは、手や首は動くが、二足歩きができない。そこで今度はそのロボットが、歩けるようになったのである。

ソフトバンクは通信業が本業であるのに、ロボットに力を入れるのは、孫正義社長の超長期経営戦略によるのである。孫社長はＡＩが人類の知恵の総和を超える「シンギュラリテイ」が、あと二十年ほどで来ると予測しているからである。

そうなると「あらゆる産業が再定義される」が、最も大きい変化が人間による単純労働の現場である。今後三十年ほどでブルーカラーは、メタルカラーに置きかわる。つまりスマートロボットが社会を変えるのである。

そんな時代を見据えた取り組みの第一号が、ペッパーであった。最大の特徴は、人間の感情を読みとる技術にある。すでに二千社以上が導入しているが、まだ客寄せパンダ程度の効果しかない。動きに制約が多く、役割が限られるからである。しかし今度は二足走行のロボットを手中にして、一歩前進したわけである。孫社長は、

「ロボット事業は、すぐにカネになることはない」

と考えている。ＡＩの進化をにらみ、長い視点でロボット戦略を進めているのである。

（ＡＩ市場でのＩＢＭの強み）

アメリカＩＢＭのＡＩ型コンピューター「ワトソン」を使った、サービスやソフトウェアの関連売上高が、日本円換算で年一兆円に達した。技術開発で先行し、顧客の業務改善を促すコンサルティングのツールとして、「ワトソン」はＡＩビジネスの市場で圧倒的な強さを持っているのである。

アメリカ最大の税務サービス会社Ｈ＆Ｒブロックは、確定申告のアドバイス業務にワトソンを導入して効果をあげている。その他にもワトソンを使った業務改善の例は枚挙にいとまなく、

○運転手の癖や好みを考慮した情報サービスを提供する米ゼネラル・モーターズ（ＧＭ）、

○社内のコールセンターの代替を狙うイオン、

○腫瘍の診断では世界三十五の医療機関がワトソンを採用した。二〇一六年当初、ワトソンが診断した患者は十人だったが、二〇一六年末には約一万人に増

えた。

米マイクロソフトなど、世界のＩＴ（情報技術）大手がＡＩの活用に乗り出す中で、ＩＢＭがビジネスで先行するのは、伝統によるところが大きい。一九九七年にチェスの世界チャンピオンを破り、二〇一一年にはクイズ番組でトップに立つなど、人間と同等以上の能力を持つコンピューター開発を早くから手掛け、知名度で抜きんでた。二〇一四年に事業化し、顧客を押さえる営業でも先んじている。

ただ、浸透した本当の理由は、ＩＢＭがＩＴ構築を軸にした、コンサルティング会社だというところにある。政府組織、金融、小売り、製造業など、あらゆる業種で幅広いＩＴサービスを提供しているため、使い勝手のいい仕様に調整しやすいのである。ＩＢＭはワトソンを使った事業売上高を公表していないが、二〇一六年十二月期には一兆円を上回ったようである。全体の一割を大きく超えている。

ＡＩも日進月歩で、安価で使いやすい技術が次々に現われる。コモディティー（汎用品）化を懸念するＩＢＭは、ワトソンの性能向上に余念がない。二〇一五年には大量のデーターから複雑な特徴を自力で探す「ディープラーニング（深層学習）」に強い米ベンチャーを買収。従来の「マシンラーニング（機械学習）」技術の集大成であるワトソンの進化を急ぐ。

自前でハードやソフトを購入しなくても、安価にＩＴサービスを活用できるクラウドの普及で、ＩＢＭが得意とするメインフレーム（汎用機）は優位性を失いつつある。バージニア・ロメッティＣＥＯが「未来ではなく、今まさに活用ができる技術」というワトソンは、巨象ＩＢＭの趨勢をも決める。

ＩＢＭが大口顧客を個別に開拓してきたのに対し、「ＡＩの一般化」を目指す米グーグルや米マイクロソフトは、最新のＡＩ技術や機能を、クラウド経由で幅広い顧客層に提供し、市場の裾野を一気に拡げる戦略で猛追している。

グーグルやマイクロソフトの強みはＡＩの最新分野である深層学習の研究者を数多く抱え、基礎研究やその応用で優位に立っていることである。自動運転車や会話型デジタルアシスタント、翻訳アプリなど、進歩がめざましい製品やサービスの多くは、深層学習の研究成果がベースになっており、企業の関心や導入欲は高まっている。

両社はクラウドサービスのメニューの一部として、画像認識や、自然言語理解、音声認識などの機能を提供し、精度は高い。金融や医療から小売り、サービスまで、ＡＩの利用シーンが拡がる中で、最新技術の取り込みや顧客基盤の拡大で後れをとれば、ＩＢＭは先行優位を失う可能性もある。

（公平とは何か）

有名な世界のあるカジノの天井には、五十センチおきにカメラがぎっしりと並んで取り付けられている。しかしこれは単なる監視カメラではなく、不正を犯しそうな人を事前に発見するための、ＡＩシステムである。

万引きする人とか、ごまかしをするのが上手な人など、約十万人の画像データーを、顔や体の細かい揺れなどから、ＡＩが怪しい人物を特定するのである。一日、十人程度のシステムに反応する人間がいるという。もちろん本人は知らないまま、そのような重点監視の対象になっているのである。

同様のシステムは世界の空港やイベント会場などでも進んでいるが、大きな問題でもある。アメリカのあるシステムで、過去のデーターなどから公平に分析すると、白人よりも黒人を怪しいと判断する比率が高いというのである。犯罪者は生まれつき決まっているという学説もある。しかし、そんな考え方を基にしたＡＩシステムでは、重大な人権侵害を起こすのである。悪いことを何もしていないのに、ある日突然、ＡＩシステムから犯罪予備軍と認定され、周囲から白い眼で見られるのである。そんなことがあっていいのであろうか。

同じようなことは企業の中でも起こり得る。

ある企業では、休職する可能性が高い社員を、ＡＩで割り出すシステムを作った。業務の仕振りや、残業時間などから判断した。休職を防止するためである。しかしこれで社員全部を判定し、休職の可能性があると判断されると、それが人事評価にどうしても出てしまうのである。そこで社員全部に適用するのは止め、休職しそうな人だけに適用することにした。

また二〇二〇年にはパラリンピック東京大会を控えているが、それにもレギュレーションを作らなければならないという。たとえば義足や車いすには特段の規則は現在のところないが、しかし義足や車いすにＡＩを使った人だけが、ＡＩの力によって、際限なく記録を伸ばす可能性があるからである。

ＡＩ自体は公平でも、人間の使い方によっては、不公平になるのである。今後ＡＩをどのように使っていくのか。ＡＩを使ってどのような社会を作っていくのか、これから人間が考えなければならない重大な問題である。

第一次産業革命では、一般の労働者の機械の登場による失業が問題になった。飛躍的進化をとげつつあるＡＩも、ある分野ではそういう面も当然でてくるが、しかし他面ではＡＩは人間の能力を一段と拡げ、人間の生活水準や生産効率を向上させる大きな可能性を持っているのである。

たとえばＡＩが得意とする分野の一つとして自動翻訳

機があり、通り一遍の通訳や翻訳の程度なら、人間の通訳は要らなくなってきている。

たとえば東北のあるリゾート地では、ＡＩを使った自動翻訳アプリ「ボイストラ」を使って、日本語、英語、中国語、韓国語に対応し、スムーズに外国人客をさばいている。

また英アズーリ・テクノロジーズでは、送電線の届かないケニア、ガーナ、トーゴなどの、アフリカ中部に、「ＡＩで生活に明かりを」と、ＡＩ付き太陽光発電システムの導入を進めている。

太陽電池だけでは、日中の発電量が少ない日は、夜間にすぐ電気が足りなくなる。ＡＩは住人の電力使用パターンを学習し、日中の発電量が足りない場合は、照明の明るさを調整する。現在、九万世帯に提供中である。

したがってＡＩに出来ることはＡＩに任せてしまえば、人間の仕事は減って、もっと必要な仕事が出来るし、また人間の出来ない（あるいはやるのが困難な）仕事もやることが出来るよい人間社会になっていく。

最近のＡＩは司法や医療などのいろいろな専門分野の仕事も出来る力を持つようになってきている。たとえばＡＩ裁判官なども、相当の力を発揮する。過去の膨大な裁判資料を使って、ＡＩが妥当な裁判の判決を下せるかを試してみると、実際の判決に照らした的中率は七九パーセントに達したということである。やく八十パーセント、すなわちほぼ人間に近い判断能力を持っているわけである。

ある大学では、医師国家試験に解答するＡＩを開発中である。過去の問題から学習する機能などによって正答率が上がり、合格間近に達している。これらの研究は、ＡＩが極めて高度な知力を手にしつつあることを示している。

このようにＡＩは膨大なデーターを読みこみ、分析し、複雑な計算を瞬くまにこなす。人に出来ないことや、難しいことを、簡単にやることも出来る。したがって今後ＡＩが本格的に活動しはじめると、いろいろな肉体労働や事務作業では、

「人間は不要である」

と、労働から人間を解放するが、問題はＡＩが人間の頭脳の分野へも手をひろげてきていることである。

そうなってくると、人間はどのようにＡＩに対応したらいいのであろうか。知識を詰めこむだけでは、ＡＩに対抗できないのである。そのような人工知能の中で人間が生きるために必要なことは、

（創造性と経営・管理力と、もてなし）

の三つであると、ＡＩの権威筋では指摘している。また一般の有識者に、ＡＩ時代に重要な能力を開いたところ、主体性とか行動力などの「人間的資質」「企画発想力や創造性」が最も多く、それにコミュニケーション能力などの「対人関係能力」が続いた。すなわち人間としての強みを身につけることである。

（ロボット脅威論を超えて）

日本経済新聞と英フィナンシャル・タイムズ（ＦＴ）が行った共同調査で、人が携わる約二千種の仕事のうち三十四パーセントの七一〇の業務が、ロボットへの置き換えが可能なことがわかった。さらに焦点を日本に絞ると、五割強が自動化できることが明らかになった。しかし大半の職業は、ロボットでは代替できない複雑な業務が残るため、完全自動化できる職業は、全体の五パーセント未満である。

十九世紀の産業革命にはじまる製造業の歴史は、自動化への挑戦そのものだった。それから二百年を経た今、ＡＩの進化が新たな自動化の波を起している。

自動化は工場の業務だけでなく、自動化が難しいとされていたホワイトカラーや事務系の職場にも押し寄せている。

ホワイトカラーの象徴といわれる金融機関でも、自動化が進んでいる。事務職では六十ある業務のうち、ファイル作成など六五パーセントの仕事がロボットへ代替できる。米ゴールドマン・サックスでは、かつて六百人いたトレーダーが、株式売買の自動化システムに置きかわり、現在は数人に減った。

一方で、意思決定や計画案にかかる仕事、想像力を働かせねばならない仕事は、ロボットの苦手分野である。最高経営責任者（ＣＥＯ）などの経営幹部には六十三の業務があるがその中でロボット化が可能な業務は、業務進捗表の作成など、二二パーセントにとどまる。同じように、俳優や音楽家など、芸術関連の職業も、自動化することが出来る業務は十七パーセントにすぎない。

いまある業務が自動化できる割合を国別に比較すると、日本はロボットの導入余地が、主要国の中で最も大きい。マッキンゼーの試算では、自動化可能な業務の割合は、日本が五五パーセント、アメリカが四六パーセント、欧州が四七パーセントである。農業や製造業など、人手に頼る職業の比重が大きい中国の五一パーセント、インドの五二パーセントをも、上廻っている。

日本では、金融、保険、官公庁の事務職や製造業で、他国よりもロボットに適した資料作成などの単純業務の割合いが高いという。アメリカなどにくらべ、弁護士や官公庁事務職などで、業務の自動化が遅れている面もある。アメリカの大手法律事務所では、膨大な資料の山から証拠を見つけ出す作業に、ＡＩを使う動きが急速に拡っているが、日本ではこれからである。

一部の職場では、すでに雇用が失われはじめるなど、ロボット化には負の側面がたしかにある。しかし生産人

口が五十年後には四割減る見通しの日本では、ロボットに任せられる業務は任せて、生産性を高めることが、国力の維持に欠かせないのではあるまいか。

ロボットは人の雇用を奪うと同時に、ロボット導入した企業は生産性を高める。マッキンゼー・アンド・カンパニーは、ロボットの活用が進めば世界全体の労働生産性を年間〇・八パーセントから、一・四パーセント高めることが可能になると分析する。「ロボットは人の雇用を奪う」という脅威論を克服し、いかにロボットを使いこなせるかが、今後の国家、企業の運命を左右すると言えようか。

産業用ロボット大手、独クーカのジョー・ジェマ米国法人では「ロボットはデータサイエンティストなど、新たな仕事を生む」と言っている。

すでに一部の自動車メーカーの工場では、ロボットが生産販売状況などのデーターを適切に処理するように監視する「ロボット管理者」の仕事が生まれているという。

企業がロボットの活用を進めるのは、業務の効率化や正確性を高めるためである。単純な作業はロボットで自動化し、人間は創造性や付加価値の高い業務に集中させるのである。それに加えてまた、ロボット化が新たな業務を生むケースも出始めており、こうした積み重ねが企業の生産性を高めることになる。

国際ロボット連盟（ＩＦＲ）は、二〇一五年末に一六三万台だった世界で稼働する産業用ロボットの総台数が、二〇一九年末には約二六〇万台にふえると予想しており、自動化の勢いはグローバルで強まる一方である。

こうした動きに対して、ロボットは人間の雇用を脅かすものだという声が、欧米を中心に高まっているのである。またロボットが賃金の下押し圧力になるとも指摘している。

特にアメリカではトランプ政権になってからは、雇用問題に敏感であり、「雇用を奪うのは貿易かロボットか」というような議論がアメリカでは始っている。

世界どの国でも、持続的な経済成長には、生産性の向上が避けて通れない時代になってきており、今後ロボットとの共存共栄を如何にして実現していくかが、どの国でも重要な課題になってくる。

（日本の場合は…）

ＡＩが普及すると、日本の場合は平成四十二年には国内総生産（ＧＤＰ）は五十兆円増えるが、雇用者数は二四〇万人減るという試算を、三菱総合研究所がまとめた。

人口減少による労働者不足を、ＡＩが緩和する効果があるが、ＡＩ社会での新たな仕事に人がうまく対応できなければ、失業者が増える恐れがある。したがって今後は、働き方や、人材育成の仕組み作りが課題となる。

平成四十二年の実質ＧＤＰは五十兆円増加して五九五兆円になる。そのため雇用は新たに五〇〇万人の仕事が創出される。しかし一方、七四〇万人の仕事が失くなるので、差し引き二四〇万人の減少となるのである。

目立って増える仕事は、ＡＩやロボット関連の専門職や技術職で、それは二七〇万人の増加が見込まれる。しかし一方、工場など生産現場で働く人は一五〇万人減り、販売に携わる人も六五万人減少する。

今後、そのようなＡＩによる産業構造の大転換で、ホワイトカラーの仕事などで、これまで普通にあった仕事がなくなり、適応できない人が低所得層に落ちる可能性があるのである。したがって、今後は、ＡＩが進化しても雇用が減らないＡＩの在り方の研究とか、雇用を減らさない政策面の研究も重要である。要は、技術は使い方次第なのである。

（人口知能という絶望）

最近はＡＩによる第四次産業革命とか、前向きな発展的な議論ばかりが展開されているが、ある新聞に「ＡＩという絶望」と題して次のような記事が載っていた。

これからＡＩが人類社会に絶望的な一大変革をもたらそうとしているのに、世の中はどうして無警戒なのであろうか。

ある技術専門誌では「ＡＩという希望」という特集を組んで、広範囲な経済分野でＡＩが、いかに効率を上げ、画期的な働きをするのかが記されている。すると多くの仕事がＡＩで代替されるので、当然、人間の仕事の仕方も変わってくる。

その結果、面倒な仕事はＡＩに任せ、人間は富とゆとりを享受するようになる。まさにユートピアの世界である。果してこのようなことが可能であろうか。それは非常に甘い考えである。

ＡＩ社会の変化は秒速であり、同業他社との競争に勝つには、より高性能のＡＩ導入が必要である。ＡＩが稼いだ利益は優先的に次の最新ＡＩの調達に充てられる。優勝劣敗が冷徹な機械主導のＡＩ社会を貫く、生存競争の法則である。

多くの仕事をＡＩが代って行うので、大量の失業者が生まれるのである。そして失業者が新たな仕事に就くためには、その新しい分野でのより高度な知識や技術を身につけていることが必要なのである。それは容易なことではない。しばらくは人手不足をＡＩが肩代わりして、ＡＩは便利な存在になるとしても、将来は世界中でＡＩ難民が増殖するのである。

安全保障レベルでも覇権確立を目ざし、国家間のＡＩ開発競争が、サイバー戦を含めて激化するであろう。規模はかつての米ソ核競争をしのぐものになるであろう。

ＡＩを産業やビジネスレベルで理解しようとするから、影響を楽観してしまうのである。ＡＩはまちがいなく、人類の運命を左右する技術である。いや、それどころか、人類を継ぐ新たな存在かもしれないのである。

数百万年前に類人猿の系統から人の祖先が出現した。人は言葉や文字による情報を駆使して他を圧倒し、現在の支配的な地位を手に入れた。

ＡＩは、人の特徴である情報処理能力が桁外れに発達した存在である。生身の体は持たないが、それゆえ宇宙空間への進出も可能となる。生命の歴史は、海から陸、陸から空へと、領域拡張の歩みを続けている。この図式を演繹すれば、ホモ・サピエンスの後裔が、ＡＩであっても不都合はないわけである。二〇四五年には、指数関数的に発展するＡＩの能力が、全人類の知能を上回るという予測がある。主客転換のシンギュラリティー（技術的特異点）として注目されている。時間軸上の特異点である。

人類の頭脳は、自身が発明したＡＩによって、凌駕されつつあるのである。ジェット機が自然の音速を超えると衝撃波が発生し、ソニックブームの轟音が地上の窓ガラスを割るが、シンギュラリティの通過では、人類社会が根底から揺らぐのである。

それにもかかわらず、世界の国々はＡＩ開発へ巨費の投入を拡大している。当面は魅力あふれる便益に直結し、研究者にとってもこれほど科学的に面白いテーマはない。三十年後にはＡＩに追われた大量の失業者の発生が見込まれているのに、誰もが「おれは失業者などにはならない。勝ち組に入る」というつもりでいる。しかし今日の勝ち組の半分は、明日の負け組になるのがＡＩ時代の不文律である。

人類社会で起きている競争と淘汰を、ＡＩ陣営から眺めれば、齧歯類のレミングが列をなして海に落ちるという伝説の、自滅行進と二重写しになるであろう。

自然の一部である人間が、機械の下部に組織されようとしているのであるが、その危機への警鐘が、ほとんど聞こえてこないのである。すでに人類はＡＩの魔術にかけられているのであろうか。

（ロボットにも法的責任）

ＡＩの発達が急速に進み、人類の生命観をも揺さぶり始めたＡＩを、どう社会に受け入れるべきか。制度や法律の面でも議論が始っている。

「ＡＩにも人類と同じような責任を負わせるべきである」

二〇一七年二月十六日、欧州議会でそうした決議案が成立した。ロボットや自動運転車に法的な「電子人間（electronic person）」の地位を与え、損害を起こした場合などの責任を明確にするという考え方である。

欧州では、ロボットの所有者に「ロボット税」を課したり、緊急時にはロボットの機能を停止させるスイッチを備えさせたりするなどの、具体案も議論されている。

提唱者の一人がルクセンブルク出身のマディ・デルボー議員である。採決前の討論会で、デルボー議員は、「自律性を高めるＡＩとどう向き合うのか。科学者やエンジニアだけに任せられるテーマではない」

と訴えた。

高速化するＡＩは、資本主義の根幹をなす金融システムにも変化を迫っている。株の取引では変化にすばやく対応できるＡＩの導入が進む。米ルネッサンス・テクノロジーズなど、ＡＩを使って運用するヘッジファンドも、存在感を増している。

かつては考えられなかった高速かつ大量の取引は、時に市場をゆがめる。ただ相場操縦などの不正行為は、ほかの投資家をだまそうとする主観が前提となる。ＡＩによる機械的行為を想定していない法律では、取締りが難かしい。

そもそもＡＩのアルゴリズムによる売買を、人間が追うのは困難である。そのため「市場の番人」である証券取引等監視委員会は、取引の監視にＡＩを導入する検討を始めた。

「ＡＩ対ＡＩ」すら現実味を帯びてきた今、人類は長年かけて培ってきた、秩序とルールの再構築を求められている。

（データーの中央集権型と分権型）

中国では毎年七万人もの子供が誘拐されるといわれ、人身売買が深刻な社会問題となっている。中国重慶市の付光発さんは、息子の貴さんが六歳のときに誘拐され、消息を絶っていた。それが二十七年ぶりに、息子の顔を見ることが出来、涙を流した。

付光発さん親子の再会を実現したのは、中国ネット検索最大手の百度（バイドウ）のＡＩであった。行方不明の肉親を探すサイトに登録された六万枚以上の写真を分析し、親子関係を特定したのである。現在三十三歳の貴さんと六歳当時では容貌が異なる。百度は、中国政府が持つ二百万人分、二億枚の写真をＡＩに読みこませ、顔の経年変化を学ばせた。

ＡＩは大量のデーターを学習すればするほど、賢くなる。十三億人超のデーターを使える中国や、十億人単位の個人情報を押える米グーグルや、米アマゾン・ドット・コムなどが、ＡＩの開発を先導する。データーの寡占が

サービスや商品を高度化し、さらなる寡占化を促す。デジタル資本主義の新たな勝ちパターンである。

寡占化に出遅れた日本は、巻き返しが出来るのか。寡占化とは、違う方法で、新たな価値を生み出す動きが出始めている。それは介護情報である。

「介護は世界共通の社会問題である。日本のデータを使えば最も早く取組める」

AI研究の世界的権威、米スタンフォード大AI研究所のフェイフェイ・リ所長は、日本独自の「ローカルデーター」の価値を高く評価する。日本の介護保険制度では、自律歩行の可否など七四項目から、要介護状態を認定する。六〇〇万人もの高齢者の身体情報は米中のIT（情報技術）の巨人でも手に入らない。

ドイツ・ボン郊外のトロイスドルフにある会社で、今何かが起っている。二〇一六年四月、物流大手DHLの技術者が、ある海運会社の動きに異変を感じた。四カ月後、韓国の韓進海運が経営破綻し、世界のサプライチェーンが大きく混乱した。

DHLは世界中の三千万以上の公開情報や、交流サイトの書き込みをAIで解析していた。顧客に物流リスクを警告するサービスを開発するため、配達遅延や労使紛争などサプライチェーンに関わるデーターに絞って分析を進める中で、韓進海運の異変を察知した。

「データーが宝の山になるかどうかは、具体的なニーズや目的につながっているかどうか」で決まるのである。社会課題の解決に結びつくデーターは、むしろローカルに散在する。データーの中央集権型と分権型。データーの世界も多様化が進むのである。

（AIは人間を超えるか）

AI（人工知能）は二〇四五年頃には、人間を完全に超えるのではないかと、言われている。技術的特異点（シンギュラリティ）の予想である。

AI発展の言動力は、深層学習（ディープラーニング）である。その基本原理は、一九六〇年代に提唱されたニューラルネットワーク（神経回路網）の強化学習である。人間の脳を模し、疑似的ニューロン（神経細胞）のネットワークをコンピューター上に作り、ニューロン間のつながりを学習で変化させる。

AIと従来のコンピューターの最大の違いは、深層学習による「暗黙知」の習得であろう。グーグルのAIが二〇一六年に囲碁の欧州チャンピオンに勝ち、世界を驚かせたが、囲碁の戦略は「形式知」であるプログラムでは書けない能力（暗黙知）は、人間が経緯を通し、職人芸として身に付けるしかない、と言われてきた。

それをAIも深層学習で、ビックデーターから人間と同様、学習が可能になったのである。深層学習が普及すれば、日本企業が得意な暗黙知や職人芸が、機械に取って代わられる可能性が高い。日本経済にとって、重大な挑戦である。

一方シンギュラリティはどうであろうか。AIは人間の脳を模した機械であり、原理的に人間を超越するわけではない。課題のフレーム（枠組み）を固定すると、そのフレーム内で、人間の能力を簡単に超えるが、フレームを人間が与えなければ、AIは学習できない。今後も、画像処理やボードゲームなど、個々の産業領域での職人芸が、機械化されるだけであろう。

しかし、もしAIに「自己」や、自己の保存という目標を与えてしまうと、AIは自己を目的とし、人間を追い越すかもしれないのである。そのときAIは世界認識のフレームを自分で設定し、人間に理解できない新しいロジックを生み出して、対象を操作しようとするのであろうか。

「人間以外に『自己目的を持った存在』を人間が作り出す社会」

とは、いったい何なのであろうか、シンギュラリティ予想は問いかけているのである。

（AI、人間中心の研究を）

最近AIの研究は著しい。人間の脳をまねた深層学習と呼ぶ情報処理手段の研究が進み、最難関の知的ゲームと呼ばれる囲碁で、人間のプロ棋士を破るなど、AIはめざましい進歩をとげている。一方で、与えられた目的と枠組みの範囲内とはいえ、自ら学習し行動するAIには、「暴走」の懸念も高まっている。

そこで米グーグルは二〇一七年七月に、

「AIと人間の正しい付き合い方」

を研究する新プロジェクト「PAIR（ペア）」を立ち上げると発表した。

技術的性能の向上に焦点が偏りがちだった従来の研究手法を見直し、人間にとっての使いやすさや、透明性などを重視した「人間中心」のAI研究を目指すのである。

「PAIR」は「People+AI Research」の略である。グーグル社内の研究者や技術者に加え、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学の研究者なども参加する。

新プロジェクトはブラックスボックス化の懸念が指摘される最新AIの「頭の中」を解明するツールを開発、公開するほか、人間社会に潜む偏見をAIが受け継ぎ、特定の人々が不利益を被らないようにする対策などを研究する。

同様の取組みは、米マイクロソフトや、起業家のイーロン・マスク氏らが支援するNPO（非営利組織）「オープンAI」なども推進している。

（つづく）

薄幸の麗人「西郷ノ局」の生涯（2）

（家康と西郷ノ局の恋物語）

堀内永人

6、二度目の破局

天正元年（一五七三）の早春、二十二歳となったお愛は、伯父である三河の西川城主、西郷清員のところに身を寄せていた。

この年は、七月に織田信長が将軍足利義昭を京都から追放し、足利尊氏から十五代続いた室町幕府（足利幕府）が滅びるなど、変革の年であり、世上は混沌としてきた。

そのような世相の中で、西川城に一人の若者が訪れた。

西川城主の西郷清員は、姪のお愛を自室に呼んで、

「お愛、そなたに良い若者をひき合わせよう。名前は奥平九八郎、関東の上野国甘楽郡奥平郷（現在の群馬県多野郡吉井町下奥平）の住人じゃ。仲良くしてやってくれ・・・・」

と言って紹介した。お愛は、伯父から凛々しい若者を紹介されると、

「はい、お愛と申します。西川城主の姪でございます。何もできませんが、よろしくお願いいたします。」

と自己紹介を兼ね、礼法に従って丁寧に挨拶した。

すると奥平九八郎は、威儀を正し、若者らしいきびきびした所作で、

「ご丁寧な挨拶をいただき恐れ入ります。奥平九八郎でございます。未熟者でありますので、よろしくお引き回しをお願い致します」

とすがすがしい挨拶を返した。そして九八郎は、涼やかな黒い瞳を輝かせて、じっとお愛を見つめていた。

奥平九八郎は、弘治元年（一五五五）十二月八日生まれで、お愛より三歳年下の一九歳。身の丈五尺八寸（約一七〇余センチメートル）、若鮎を思わせる若武者であった。

九八郎は、この日から三年後の天正三年（一五七五）、三河南設楽郡の長篠城（現在の愛知県新城市）に立て籠り、武田勝頼が誇る騎馬軍団の猛攻をしのぎ、武田滅亡のきっかけをつくった武将である。

九八郎の立ち居振る舞いを見てお愛は、胸のうちが熱くなるものを感じた。お愛は、二人の子を持つ寡婦（未亡人）といえども、まだ二十二歳の若い身。心地よい若武者に接して心がときめいても不思議はない。しかし、女性としての心得を、母親のおていからしっかり教えられているお愛は、九八郎に馴れ馴れしく接することはなかった。

日月の経過に比例して、お愛の心は九八郎に傾いていくのであった。

ことあるごとに、何かと九八郎の世話をするお愛の姿を見た西川城主の西郷清員は、

（もしや、二人は、お互いに好意をいだいているのではないだろうか・・・・。それならば、それも可。お愛もまだ若い。それにお愛は子を産める身体である。九八郎は頼もしき若者だ）

と、心ひそかに期待するところがあった。

お愛と九八郎との仲は、日増しに新密度を増していった。これは、西川城内の誰もが認めるところであった。

ある日、二人の間で、

「九八郎さま、あなたはいつまでこの西川のお城にいらっしゃるのですか・・・・」

とお愛が問うと、

「はい、おかげさまで西川のお殿様から、京都を始め、西国各地の世情を教えていただきました。よって近々に、関東の上野に帰国したいと思っています・・・・」

と九八郎は答えた。

「やはりお国にお帰りになられますか・・・・。そうでございましょうね・・・・、あちらにはお美しいお方がお待ちでしょうから・・・・」

と恨めしそうな顔して、お愛はうつむいてしまった。

すると九八郎の色白の顔が、ぱっと朱色に染まり、慌てて、

「拙者には、そのようなおなごはおりませぬ・・・・。拙者は・・・・、拙者はお愛さまを・・・・、お愛さまをお慕いして・・・・」

と言いかけて、からだを固くし、両こぶしを膝の上で握り締めて俯いてしまった。

九八郎から、突然恋情を打ち明けられ、かえってお愛のほうが、驚き慌てた。

「九八郎さま、今、なんとおっしゃいました・・・・？」

お愛の声も、驚きと嬉しさで、うわずっていた。お愛は、からだを浮かせて九八郎ににじり寄ると、

「九八郎さま。わたしも・・・・、私も九八郎さまをお慕いしております・・・・」

と、胸の奥にしまっておいた恋情を打ち明けると、

九八郎の駿馬のような若い躰に、わが身を投げ出した。

「お愛さま・・・・。嬉しゅうございます・・・・」

九八郎は、お愛の汗ばんだ柔らかなからだをぐっと抱き寄せ、身を重ねていった。

それから四半時（約三十分）ほど過ぎた。が、お愛と九八郎の二人の鼓動は、なかなか治まらなかった。

九八郎にとって、このようなことは初めての経験だったので、額は汗ばみ、乱れた息は静まらず、若木のようにしなやかで厚い胸は、いつまでもときめき、波打っていた。

しばらくしてお愛は、乱れ、広げられた襟元を繕いながら、ゆっくり身を起こした。

お互いに、相手を憎からず思い、否、愛しあっていたことを認め合ったお愛と九八郎は、いずれは一つの褥で生活することを誓って、日を重ねていった。

ところが、天正二年（一五七四）のある日の午後、徳川家康から大変な話が二つ、西川城主の西郷清員を通して、奥平九八郎に持ち込まれた。

清員は、お愛と九八郎を離れの茶室に呼んで、家康からあった二つの話を伝えた。

この二つの話は、話というよりも、半ば命令であった。

その一つは、家康が、九八郎の武芸と知略を見込んで、三河の要衝である長篠城（現在の愛知県新城市）の城主を命じたのである。この時九八郎は、弱冠十九歳であった。

もう一つは、家康の長女で、今年十五になる亀姫を、九八郎の妻に娶ってくれという話である。

お愛は、この二つの話をきいて、

（私は、二人の子を持つ寡婦、九八郎さまは私より三つも若い・・・・。将来は立派な武将になって、一軍を指揮するお方。私が身をひかなければ・・・・、私が諦めなければいけない・・・・）

と、自分自身に言い聞かせるのであった。

一方の九八郎は、西郷清員から家康の話（命令）を聞いて、

「若輩の私に長篠城の指揮を執れとのお話は、我が奥平家にとって武門の誉れ、身命を賭して城を護ります。ありがたくお受けいたします。が、亀姫さまのお話しは・・・・」

と言い、見るみるうちに耳まで真っ赤にして、身を震わせ、歯を食い縛って湧き出る感情を堪えていた。清員は、激変していく九八郎の顔色を見て、

（やはりそうか・・・・。二人の仲はかなりのところまでいっているな・・・・？）

と思った。が、家康の話を断ることはできない。これは困ったと思い、

「ではお愛、そなたはこの話をどう思うか？」

とお愛の気持ちを訊いた。

「私は・・・・」

お愛の本心は、

（九八郎さまとの交情は、初めて知った大人の恋、これが本当の愛なのだ・・・。従兄の西郷義勝とは、家のしきたりに従って結婚したもので、愛し合って結ばれたのではない。夫義勝には申し訳ないが、今は九八郎さまとの仲を、誰にも邪魔されたくない・・・・）

と、いうことであるが、

（しかし、三河の支配者徳川家康の命令では従わざるを得ない・・・・。いや、それ以前の問題として、前途ある九八郎さまの進む道を閉ざすようなことがあってはいけない。そんなことになったら九八郎様に申し訳ない）

という九八郎への思いが、一瞬頭の中をよぎった。しばらく思案していたが、お愛は、

（やはり私が身を引くべきだ・・・・。情け知らずのようであるが、それが若い九八郎さまのためなのだ・・・・。この恋は諦めよう・・・・）

と決意すると、

「はい、伯父上様のご指示に従います。よろしゅうお願いいたします・・・・」

と、いったまま、お愛は身を震わせて泣き伏せた・・・・。

「九八郎殿、お聞きの通りだ・・・・。貴殿も辛かろうがこらえてくれ・・・・。そのうちによいこともあろう。徳川家の姫君は、まだ十五だ・・・・。妻に娶るのは、先のことになろう・・・・」

と言って清員は、ほっとした。

（二人には気の毒であるが、やむを得ない。それも、やがて時が解決するだろう・・・・）

と思い、

「二人とも下がってよい。気を落とすではないぞ、やがていいこともあろう・・・・」

と、二人に言い聞かせ、自分自身の気持ちも抑えた。しかし、清員は、何とも言いようのない気持ちにさいなまれた。

お愛も、流れ落ちる涙を堪えて引き下がった。

お愛にとっては、十年前に故郷である遠江上西郷村で経験した、医師の研修生堀田祐人との別れに次いで、二度目の悲しい破局であった。

（そののち亀姫は、天正四年《一五七六年》に、十七歳で九八郎と結婚するのである）

7、家康との出会い

時は天正六年（一五七八）晩春、小寒い日のことである。

この日も暗雲が垂れ込め、三河（現在の愛知県の東部地域）の山野に、激しい驟雨（にわか雨）が降りそそいでいた。薄暗くなった空に、時折春雷がとどろき、西川

城の甍に稲妻が走る荒れた日のことであった。

お愛は、伯父の西郷清員のところに寄寓する身であるため、大勢の女たちに交じって、炊事やその他の下働きを進んでやっていた。その下働きの女たちの世話係である八重が、

「お愛さん、あなたは城主様のお掛り人です。下働きなどをしないで、こちらに上がって来て、奥方様のお相手をしてください。奥様方は松の内に引いた風邪をこじらせて、奥御殿で休んでおられます。様子を見ながらお話し相手をしていただきたい」

と、頼んできた。

西川城の奥方様のお豊は、お愛の義理の伯母に当たるが、お愛の境遇を不憫に思って何くれとなく面倒を見てくれる、心根の優しい女性であった。お愛は自分の親に尽くすように接してきたので、真の肉親のような間柄になっていた。

「伯母上・・・・、熱は下がりましたか・・・？　どれ、お脈を拝見・・・・。熱も下がったようであります。脈も正常でありますね。咳も出なくなったように思われます。が、大事をとって、一両日お休みになっていれば、床上げ出来ましょう・・・・。よろしゅうございましたなぁ・・・・」

お愛は、心から伯母の快復を喜んでいた。奥方は、

「お愛は、本当に優しい心根をお持ちですね・・・・。

わが娘も遠く及ばぬ看病振りです。ほんにあなたはよくできたお人ですなぁ・・・・」

と、お豊手放しの喜びようであった。その時、女中頭の八重が、慌てて座敷にはいってきて、

「奥方様・・・・、大変でございます・・・・」

と言ったまま、小刻みに足を動かしているのであった。

「何事でございますか・・・・・？」

お豊まで、つられて蒲団から身を乗り出し、八重を見上げた。

お愛も、何事が起ったのかと思い、七、三の割合で、八重と伯母のお豊を見た。

「大変でございます。只今、岡崎のご領主、家康様の供触れ衆（事前に知らせる係）が見えまして、間もなくご領主様が、奥方様の病気見舞いに御成りなるとのことでございます・・・・」

と、日頃落ち着いてるお八重が、慌てふためいて告げるのであった。

「それは大変、お愛さん、すぐ部屋を片付けて・・・・。それから旦那様にお知らせしておくれ・・・・」

と、日頃物静かなお豊まで、慌て出した。

やがて、廊下に足音がして、三河・遠江の支配者、徳川家康が姿を見せた。

「いやぁ、ごぶさたいたしており、誠に相済まぬ・・・・。西川の奥方が、風邪をこじらせて臥していると

のこと故、心配していたが、いかがかな・・・・。今日は所用があって近くまできたので、見舞いに寄ったのだ・・・・」

と、見舞いの言葉を言いながら、お豊が臥す蒲団の横に座った。

「これは、これは、ご領主様からご丁重なるお見舞いのお言葉をいただき、恐れ入りましてござります。こじらせた風邪も、大分良くなって参りましたので、近々のうちに、床上げしたいと思っております・・・・」

と言って、お豊は、布団の上で座り直し、深々と頭を下げた。

「それは良かった、風邪は軽いからといって手当をせずに、こじらせると命取りにもなりかねぬ。それはよかった、よかった・・・・。ところで、今日は、（西郷）清員殿はいかがされておられるかな・・・・」

と言って、家康は部屋の中を見回した。

その時、部屋の片隅で、平伏しているお愛に目を止めると、

「これは、これは・・・・。こちらのご婦人は、初めて見かける方ですな・・・・。さて、どなたかな・・・・？」

と、気さくに声を掛けた。が、家康の胸の鼓動は高まった。

家康の視線は、鄙には稀な美人を見て、お愛の瓜実顔に、釘付けになった。

背中までたれている豊かな黒髪、面長、色白、三日月眉が美しく、ツンと威張ったような小ぶりの鼻、その右横にある薄紅色の黒子が、女性の色香を匂わせている。

お愛は、目が悪いため目を細めて見るため、見つめられる相手に強い印象を与える。

家康も、お愛の潤んだような黒い瞳に見つめられて、激しい衝撃を受けた。

（今まで、このように美しい女性にあったことがない・・・・）

家康は、しばし言葉を失った。お豊は、

「ご領主様、ここはあまりにもむさくるしいところですから、表座敷の方で一服していただきたい。追っ付け主人清員も戻って参りましょうから・・・・」

と言って、直ぐお愛に、

「お愛さん、ご領主様を表座敷にお通しして、粗茶など差し上げてください・・・・」

と頼んだ。

「かしこまりました・・・・。では、お殿様、こちらにどうぞ・・・・」

と、お愛は淑やかな身のこなしで、表座敷に家康を案内した。

家康は、床の間の前に用意してあった、大ぶりの座布団にどっしりと座った。

続いてお愛も座敷に入ろうとした。が、初めて御目通

りする家康の貫録に緊張したのか、敷居に躓き、
「あっ！」
と叫んだかと思うと、家康の胸の中に倒れこんでしまった。
「おっと、と、危ない・・・・」
と声を上げ、家康は、両手でお愛を抱き止めた。
その時、
〝ピカ、ピカッ〟
と、稲妻が走り、
〝ど、ど、どーん〟
と春雷が鳴り響いた。お愛は、
「ひゃー、怖い・・・・」
と叫び、無我夢中で家康にしがみついた。家康は、
「うむ、うむ、うむ・・・・」
と言って、柔らかな弾力のあるお愛の躰を抱きしめた。
二十七歳になるお愛の躰は、むっちりとした肉置きで、わずかに開いた襟元から、薄桃色に染まった乳房が覗かれ、後家好みの家康の色情を誘った。
これが、お愛の初御目見得（初対面）であった。
お愛の淑やかな美しさに、すっかり一目ぼれした家康は、浜松城に帰ってからもお愛を忘れられず、西川城の西郷清員の妻お豊の病気見舞いに同行した酒井忠次を呼んで、
「忠次殿、西川城の奥方の病気は良くなったであろうな・・・・？」
と、問いかけた。
（酒井忠次《一五二七―一五九六》は、家康の叔母碓井姫の夫で、家康より十五歳年上。徳川譜代家臣の筆頭で、のちに家康が三河を統一すると吉田城主＝豊橋城主となり、東三河州を率いた。姉川の戦や三方が原の戦で活躍、一五七五年《天正三年》の長篠の戦の際に、鳶が巣砦への奇襲を献策、実行したことで知られている。豊臣秀吉の小田原北条氏の戦や、小牧・長久手の戦に的確な指揮振りを見せて「徳川四天王」の一人に数えられる。一五八六年に従四位下左衛門督に叙され、秀吉から京都に邸宅を与えられた。一五八八年に隠居して「一智」と号して京都に住んだ）
忠次は、
「はい、あれから半月ほど経っております。もう治っておりましょう・・・・。して、殿には何か気になることでもおありでしょうや・・・・？」
と、半ば不審に思いながら、問い返した。
「否、なに、あの時西川のお内儀を世話していた、あの女子はどうしているかな、と思ったのでな・・・・。な！・・・・？」
と、いつもの家康らしからぬ遠慮っぽさで、忠次に問いかけた。

忠次は、
（は、はん・・・・、殿はあの時の女子に気があるな・・・・）
と気付いた。そこで忠次は、話の先を読み、
「して殿には、あの美しいお愛というご婦人が、御気に召しましたか・・・・」
「うむ・・・・」
と、家康は、しばし考え込んでしまった。
（しかし、あの理知的で、細やかな所作。相手の現状を察する気持ち、優しい気遣い、気配り、身のこなしは、見事という外はない。全く頭の良い女性である。そのうえ、あの時、あそこで、しなやかに蠢いて、家康を羽化登仙の境に迷図させた、お愛のあの柳腰の秘戯は、なんとしても忘れられない。否、いや、あれこそ、一生涯忘れられない秘め事である。が困った・・・・。どうしたら浜松に連れて帰られるか・・・・？）
と、解決方法について、思いをめぐらした。
現代風に言えば、
「俺は惚れたぜ！　たまんない・・・・」
と、いうところである。
それで家康は、考えに、考え抜いた末、いつも内緒ごとをたのんでいる酒井忠次に、
「忠次殿、先頃、三河の西郷清員殿のところを訪ねた時、私をもてなしてくれた女性がいたが、なかなかいい女性でな、穏やかであるが、はきはきしていて、家事万端そつ無くこなしていた。そのうえ、理知的で、細やかな所作。相手の立場を察する気心、気遣い、気配り、身のこなしは、見事という外はない。全く頭の良い女性である。今後、私の身の回りの世話をしてもらいたいと思っているが、どうしたものかと思ってな・・・」
と相談した。身内で、十五歳年上の忠次は、快く家康の頼みごとを引き受け、何事もなかったような顔をして、処理してくれているので、今度も家康は、忠次を頼りにした。
すると忠次は、
「それでは浜松のお屋敷にお連れになったらいかがでしょうか・・・・」
と勧めたが、家康は、
「だがな、お万が秀康を生んだ時に、正室の瀬名（築山殿）にえろう妬かれたのでな、今すぐお愛を屋敷に連れて参るわけにもいくまいって・・・・」
と、八方ふさがりの状態であった。忠次は、
「それでは、身共の屋敷にちょうど良い離れが空いていますので、そこへお愛様に入っていただいたらいかがでしょうか・・・・」
と提案した。
「うん、それはいい、それはいい・・・・。では、頼

みます」

と、いうことで、家康は、お愛の親代わりとなっている西郷清員・お豊夫妻の了解を得て、お愛を帯同して浜松に帰ってきた。

こうして、忠次の配慮で、お愛は浜松城の大手門の忠次の屋敷の離れに住むことになった。それ以後家康は、酒井忠次の家の離れに、たびたび訪れていた。

司馬遼太郎と梅原猛の確執

―「空海の風景」をめぐって―

山田喜久

一「殉死」の評価

数多くある司馬作品の中でも、私が最も好きな作品は、昭和40年代前半に書かれた「殉死」である。（初出は昭和42年6月と同年9月「別冊文芸春秋」に連載された「要塞」「腹を切ること」）

戦前の「軍神乃木大将」で育った我々昭和ひとけた世代にとっては、間違いなくカルチャーショックを受けた作品だった。司馬はその「神様」を容赦なく引き摺り降ろして、独自の乃木批判を加えた。

〈乃木の半生をながめるに、乃木ほどその性格が軍人らしくない男はなく、同時に乃木ほど軍人の才能に乏しい男も珍しい。〉

しかも不幸なことに乃木自身がそれに気がつかず、たとえ気づいていたとしても、悲劇を〈自分の美的世界に組入れ〉、その憂鬱の中に安らぐ乃木のセンスは理解できないとの司馬の論法は容赦ない。

司馬の書いた昭和40年前半といえば、ナマの乃木希典を知っていた世代がまだ、生存していた時代。その時代に彼らの抱いていたのと眞逆の乃木観を披露した司馬の勇気にまず感心した。

しかし、またこの頃は「70年安保前夜時代」である。間もなく明治百年を迎えるにしても「今更、乃木希典でもなかろう。アナクロニズムも甚だしい」との批判が強かった。

評論家福田恒存の「殉死」批判は正当に評価できるが、中には論評に値しない批判もあった。その例の代表が評論家佐高信の司馬批判。彼は「殉死」の内容については全く触れずに、ただ単に司馬が乃木を取り上げたということのみで非難したのだ。全く司馬の乃木観を理解していないのに失望した。（「司馬遼太郎と藤沢周平」）

その中にあって、司馬の乃木観を支持する風潮も強かった。その代表が作家井上靖や哲学者梅原猛などであった。

特に梅原は「私が司馬遼太郎の作品でもっとも好きなのは「殉死」である。「殉死」は乃木大将をテーマとするものである。乃木大将は東郷元帥とともに戦前の日本ではもっとも尊敬された軍神であった。

ところが司馬遼太郎の小説では、乃木希典は純真きわまりない人間ではあるが、戦争は大変下手で、無謀な突撃によっていたずらに多くの兵隊の血を流した将軍である。これは戦前ならばとても許せない作品であろう。（中略）

司馬遼太郎はこの軍神の仮面を剥ぐわけであるが、重要なことは、作者がこの軍神を愛していることである。たしかに戦争が下手で、ヘマばかりしているが、純粋無垢で、天皇を愛する心が厚く、天皇に殉死した乃木というドン、キホーテのようないささか滑稽で、かつ悲壮な人間を温かく見つめているのである。」と論評した。

（梅原猛「週刊朝日」平成８年）

事実、司馬は率直に〈乃木さんが好きだというのはどうしようもないことで、（中略）私自身の好悪からいえば、ひょっとすると悪より好に近いかもしれません。〉と答えている。

しかし〈父親や伯父に乃木さんをもちたいとは思いません〉と付け加えることも忘れない。

（「旅順」から考える）

因みに「殉死」は昭和４３年「毎日芸術賞」を受賞している。

二、「坂の上の雲」のアンチテーゼ「空海の風景」

この「殉死」における司馬の乃木観は、その後に書かれた大作「坂の上の雲」にも引き継がれた。この意味からいえば「殉死」は「坂の上の雲」の予告編と見ることもできる。

この「坂の上の雲」は司馬４０歳代の全精力を傾けて書かれた力作だけに、彼の生涯の代表作となった。それだけに司馬は、４０歳代の１０年間、膨大に残る日露戦争史と格闘していた。

特に、この作品の棹尾を飾る日本海海戦については、ある時点における彼我の軍艦のロケーションがどうなっているか、１隻１隻について（たとえ戦況に影響を与えない小艦であっても）克明に調べ尽くした。

完璧に史実に忠実な歴史小説を心がけたためだった。そのために眠れない夜もあったとも述懐している。

そんな時、合間に司馬は空海のことを考えていたと云う。我ら凡人が疲れた時に空海のことを考えたら、逆に疲れが倍加してしまうだろうが、彼は違っていたようだ。

空海については資料そのものが少ない。

「坂の上の雲」の資料作りに疲れた時に、この千二百年前の人物を考えることは、司馬にとっては最高の贅沢でもあったであろう。「坂の上の雲」と違って、空想に遊ぶことが赦された。

「坂の上の雲」執筆に当たって、史実の収集と解析に全頭脳を絞り尽くした司馬が、その鬱積を晴らそうとして、奔放の世界に遊んだのが、次作「空海の風景」であったといえそうである。

このように「空海の風景」誕生の経緯を見ると、考えようによると、この作品は「坂の上の雲」のアンチテーゼと考えることができる。

事実、司馬は「坂の上の雲」を書き終わると、すぐに「中央公論」（昭和４８年１月号）に「空海の風景」を書き始めた。

三、「空海の風景」をめぐる確執

しかし、司馬が「空海の風景」を書き出すと、あらぬ方から批判の矢が飛んできた。その相手とは、意外にも長年、司馬と交遊があり、司馬作品のよき理解者であった梅原猛であった。

司馬はこの宗教小説を書くに当たって、宗教に造詣の深い梅原に相談したらしい。すると梅原の答えは「あと１０年、空海（真言密教）のことを研究してからの方がいい」ということだった。

しかし司馬は梅原の助言を無視して「空海」を書きだすが、その手法は彼の得意とする歴史物語的人物評伝ではなく、あくまで小説として書いた。

司馬の言い分によれば〈過去の人（空海）を書くにあたって、空海が生存した時代の事情、その身辺、その思想などといったものに、（現代からの）外光を当てて筆者自身のための風景にしてゆくにつれてあるいは空海という実体に遇会できないかと期待した。〉（あとがき）

このあたりが「空海の世界」でなく「空海の風景」と題した由縁だろう。そのため司馬は本作品を書くにあたって、なるべく宗教用語を避けたという。

しかし、専門家梅原を満足させるには程遠かった。そのため梅原はこれを酷評したことによって、司馬は「激怒し」（梅原の言い分）以後、両者は絶交状態に入って行く。

晩年に入って、両者の関係はやや修復されたようだが、梅原によれば司馬にとって、梅原の存在は生涯「煙ったいもの」であったに相違ない。

しかし、梅原によって酷評されたこの作品は、皮肉にも書き終えた翌年の昭和５１年には「日本芸術院賞」を受賞するのである。しかも、最高の「恩賜賞」である。梅原の立場は丸つぶれであった。それだけに梅原のショックは大きかったに違いない。

そのためか、梅原の随筆には必ずこの「事件」が載っている。

しかしこのことは、私は最近知ったことで、従来から梅原本を殆ど読まない私は、司馬と梅原は最後まで良好な関係にあったと信じていた。

10数年前、NHK文化センターの「司馬教室」に通っていた頃、受講生の一人が司馬、梅原の不仲説について講師に質問していたことがあったが、それでも私は信じなかった。

私は、今まで殆ど梅原本を読んでいなかったからだ。かって評判となった梅原著「水底の歌—柿本人麻呂論」を読んで、あまりの大胆な仮説に嫌気をさし以後梅原本を読むのを止めてしまった。

それ以来、梅原といえば歌舞伎俳優市川猿之助のスーパー歌舞伎の発案者（「ヤマトタケル」の原作者）程度の知識しか持っていない。

一方、司馬にとっても、「激怒」するほどの大事件であったのにも拘わらず、このことに関する記事や発言は全く見られないからだ。

元来、自己の身辺雑話に関してはあまり触れたがない司馬ではあるが、これだけの事件である。

専ら天下国家を論じた「この国のかたち」（「文芸春秋」巻頭論文）は別にして、専ら晩年の身辺雑話を書いた「春灯雑記」（朝日新聞）や「風塵抄」（産経新聞）を改めて調べてみたが、全く載っていなかった。

この辺が梅原の云う「司馬の文章はわかりやすいが、司馬遼太郎という人間はたいへんわかりずらい」由縁かもしれない。

あるいは司馬にしてみれば、梅原との論争になった「空海の風景」は前述の通り、「日本芸術院賞」（恩賜賞）まで受賞したことによって、世上、最高の評価を得た。

梅原には勝ったと思ったに違いない。勝者の余裕から、この問題には以後、全く触れないことにしたのではなかろうか。

四　華麗なる梅原の経歴

梅原猛は大正15年、仙台市で生まれた。（司馬の2才下）

実父は工学博士。後に豊田喜一郎に誘われトヨタ自動車常務や豊田中央研究所長を務めた。

その関係で猛は名古屋で育つ。私立東海中学、旧制第八高校卒業。大学進学にあたっては、東大の和辻哲郎を選ぶか、京大の西田幾太郎を選ぶか迷ったというから贅沢な悩みである。

結局、京大を選び、大学院では田中美知太郎に師事した。

現在でも京都若王子（「哲学の道」付近）の和辻哲郎旧宅に住んでいるという。（梅原はこれを「密語庵」と名付けた。国登録有形文化財である。）

「密語庵」の主屋は、原三渓の大番頭を務めた茶人古郷時侍が2軒の古い数寄屋を玄関で繋ぐ形で明治中期に再生したものである。その後、和辻哲郎、画家の岡崎桃乞、そして梅原猛と住み継がれた。

梅原の経歴からして、当然、彼は所謂「京都学派」に属する。

この京都学派—桑原武夫、吉川幸次郎や貝塚茂樹、そして湯川秀樹にまで可愛がられたのが、他ならぬ司馬遼太郎である。

新聞記者時代、大学担当だった司馬は、当時から特に京大に出入りして名だたる学者たちの知遇を得た。一方、学者たちも早くから司馬の非凡な才能を愛して、ときどき彼を京都に呼んで歓談の機会を持った。

（司馬と学者たちの対談は「司馬遼太郎対話選集」に多く載っている。例、桑原武夫「人工日本語の功罪」ほか　今西錦司「人類を救うのはアフリカ人」　湯川秀樹「日本人の原型を探る」　梅棹忠夫「民族と国家そして文明」　松原正毅「稲作文化と言葉」　山崎正和「日本人の内と外」ほか　佐原真「日本人の源流を訪ねて」　奈良本辰也「日本人の行動の美学」）

京都学派の末席に連なっていた梅原も、このような縁で自然と司馬と親しくなっていくのだが、実情は学派の正統派を自負する梅原にとっては、たかが記者上がりの司馬が、巨匠たちに愛されてゆく過程を複雑な気持ちで眺めていたのに違いない。

これが将来、両者が不仲になる一因ともなったことは十分考えられる。

しかも司馬自身、「スジメ卑しき野武士あがり」の新聞記者であることを吐露している。終戦の年末、復員服での司馬が梅田の闇市の焼けた電柱に貼られた「記者募集」の広告を見たことが、彼の将来を決定づけた。

入った新聞社は生野区猪飼野にあった「新世界新聞社」という新興新聞社。曲りなりにも日刊だったが、実体は当時貴重だった新聞用紙を横流しするインチキ新聞社だった。入社するとほどなく倒産した。

6ケ月後の翌21年には「西日本新聞社」（京都本社）に再就職する。「産経新聞社」に入ったのは、それから2年後の昭和23年5月。既に25才になっていた。それも「通訳」としての採用だった。（単に外語卒業という理由だけで）

それから数年後、司馬は大阪本社に栄転する。「京都に文章のうまい記者がいる。」という話が伝えられたからだが、受け取った辞令は、西日本各地の支局から送られてくる原稿を受ける地方部勤務だった。

本人の云う通り、「スジメ卑しき」記者であったこと

は間違いない。

一方の梅原は龍谷大学の講師を経て、立命館大学の助教授、教授を歴任した。その後、京都市立芸術大学の学長にも就任。

また新設の「国際日本文化研究センター」（日文研）初代所長にも就き、更に「日本ペンクラブ第13代会長」にもなっている。

まさにエリート中のエリートだろう。

なお、日文研は梅原や当時、京大人文科学研究所長の桑原武夫ら「京都学派」の学識者らが創立したもので、教授などに名を連ねていたのは、河合隼雄（心理学）や山折哲雄（宗教学）、猪木武徳（経済学）小松和彦（民族学）をはじめ、ドナルド、キーン（日本文学）、中西進（万葉学）、速水融（歴史人口学）など多彩な篤学が名を連ねている。

（最近では磯田道史準教授（歴史学）や呉座勇一助教（歴史学、ベストセラー「応仁の乱」著者）の若手が集う。）

梅原自身の学問をみても、実存哲学についての研究に取り組み、「梅原日本学」と呼ばれる独自の世界を開拓してゆく。

その長い功績により、文化功労賞（1992）、文化勲章（1999）を受賞した。

（因みに司馬が文化功労賞、文化勲章を受章したのはそれぞれ1991年、1993年である。）

五　梅原の司馬遼太郎論

前述の通り、梅原の司馬論には、表現に多少の違いがあるものの必ず「空海の風景」論が登場する。以下、敢えて重複を厭わず、すべて載せることにした。

1「司馬遼太郎と国民文学の再生」

司馬が1996年2月12日に急逝すると、梅原は雑誌「文学界」編集部から追悼の意味を込めて「司馬遼太郎論」を書いてほしいとの依頼を受けた。

梅原は、その依頼を受けて、可なり長めの追悼文を書いている。それが「司馬遼太郎と国民文学の再生」として「梅原猛著作集」第12巻に載っている。

それによると、約15年前に司馬の代表作「空海の風景」を酷評して、司馬を「激怒させて」（梅原の言い分）以来、両者の関係は犬猿の仲となったが、その後、司馬の晩年には大分修復されたらしく、亡くなる前年には「和辻哲郎文化賞」の選考会で同席している。

しかし、梅原はこの論文の中でも、「空海の風景」は失敗作であるという持論を展開している。

空海を30年にわたって研究してきた梅原としては、「空海の風景」とは司馬のいうようなものではないというのである。

司馬の「空海の風景」はからから乾いているが、本当の空海の風景はもっとじめじめして、もっとずしりと重い。それを合理主義者の司馬は書けなかった。

しかし司馬が書けなかったものを、今後の作家が書くことによって、始めて新しい国民文学が生れるというのが、この論文の主旨のようだ。その意味において、論文名も「司馬遼太郎と国民文学の再生」としたのであろう。

それ以外にも長めの司馬論を展開しているが、仲直りした後だけに大雑把にいえば概して好意的である。

興味のあるのは、（司馬の親友陳舜臣が云うように）、前述のように司馬の文章はわかりやすく、その小説も明快であるが、司馬という人間は大変分かりづらいと指摘していることである。

例えば「司馬遼太郎」というペンネーム。一般には司馬遷に遥かに及ばないという説が一般的だが、梅原は、司馬自身は秘かに司馬遷を凌駕するという意図でつけたペンネームではないかと推察している。

「まことに巧妙でかつ不遜なペンネームである。」

同じような二重性が彼の風貌の中にもあるという。

司馬は40歳代の初めから見事な若白髪で、その白髪が温容な風貌と相俟って、人に対しても誠に謙虚であった。

しかしその温和で謙虚な風貌の中にときどき眼光が鋭く光るのである。おそらく人間を一目で見抜く鋭い目であるが、その目の中に容易ならざる闘志が秘められている。

世が世なら、一国一城の主になることができるのではないかと聊か大げさに書いている。

司馬遼太郎が亡くなると、マスコミは大々的に報じ、その偉業を偲んだ。文学者のみならず学者や実業家、はては政治家までがその死を嘆いた。まさに「国民的作家」であることを実証したが、不思議なことに純文学の作家や評論家たちは頑なに沈黙を続けた。

4大文芸雑誌―「文学界」、「新潮」、「群像」、「すばる」―も特集を組まなかった。それに反して「文芸春秋」、「中央公論」などの一般総合雑誌は競って特集を組んだ。

純文学作家にとって「司馬遼太郎という作家はまことに困った存在なのである。」その小説を大衆小説と見下げることもできないし、さりとてその小説を認めれば、純文学の弧塁が危うくなるというのである。

そして梅原は、理論家らしく「国民文学」を次のように規定している。

1　上下、老若、男女を問わず、広く国民に愛読されること。

2　その国民に人生とは何であるかを教え、生きる教訓を与えること。

3　人生を見る視点が決して一方に偏らず、その時代の良識にかなっていること。

4　適度なユーモア感覚を備え、かつ抑制のきいたエロスの匂いがすること。

このような4つに条件を満たすものは、戦前の吉川英治と戦後の司馬遼太郎の文学をおいてない。しかし残念ながら純文学と称される日本文学の主流派はこの条件を満たしていなかった。

小説というものは、何よりも人間を描くものである。人間を描くためには、なによりも人間通でなくてはならない。その意味において吉川も司馬もなによりも人間通であった。（司馬が座談の名手といわれたのもそのせいか。）

両者とも人間に対する好奇心が極めて強かったが、司馬の方が勝っていたと思う。司馬小説の魅力は脇役がよく書けていることだ。

司馬が好んで描く大河小説の主人公も日本歴史上は脇役にしかなかった人たちである。「竜馬がゆく」の坂本竜馬、「翔ぶがごとく」の大久保利通、「関ヶ原」の石田三成、「坂の上の雲」の秋山兄弟、児玉源太郎などである。

また、司馬のよく書く人物は、すべて合理主義者でもある。彼らはほとんど神を信じず、宗教や哲学のごとき空理空論を好まない。

彼らが好きなのは実務である。その代表を「花神」の大村益次郎に求めることができる。

この論文のなかでも、梅原の最も好きな司馬作品として「殉死」を挙げている。そしてドンキ、ホーテのような乃木希典を4分の批判と6分の愛情で描いているとこうのである。

（「司馬遼太郎と国民文学の再生」梅原猛著作集12）

2　「司馬遼太郎論」

司馬遼太郎が亡くなり、マスコミも大々的に報じているが、司馬文学が今後、末永く後世に意味をもち続けるかどうかはわからないと梅原はいう。例えば宮沢賢治の文学や南方熊楠の学問のようにである。

数年前、私（梅原）が所長をしている国際日本文化研究センターの評議員再任を司馬氏に依頼をしたが、断られた。

その理由は「自分の読者の層ははなはだ広いので、政治的な関係のあるいっさいの会には関わらないことにしている」とのことだった。

また、今後は小説を書くこともやめたいとのことでもあった。

この2点は司馬氏と私の人生観の大きな違いであって、私はこれからも次々と作品を書きたい。そして司

馬氏の作品が後世に残るか、私の作品が後世に残るか競争をしてみたい。

（「梅原猛著作集14　思うままに」2001年4月刊）

3　「司馬遼太郎と丸山真男」

今年（平成7年）はすぐれた文化人が次々と世を去った。2月に戦後の日本を代表する国民作家司馬遼太郎氏が、8月には戦後の日本を代表する思想家丸山真男が亡くなった。

両者の間には直接の関係がないが、その思想には共通性がある。それは2人とも啓蒙的な思想の持ち主であり、その布教者だった。

司馬氏の歴史小説のほとんどは戦国時代以後の近世に題材をとっている。宗教とか道徳をあまり信じないで、しかも大きいことを成し遂げた英雄こそ、司馬氏がもっとも愛した人間であろうが、宗教が支配した時代、すなわち室町以前は殆ど書いていないのも彼の思想によろう。

唯一の例外が「空海の風景」であろうが、そこには仏教、特に密教思想についての理解の不足が目立つ。私は空海のことを書くなら、一〇年密教を研究してからでないといけませんよと忠告したが、聞き入れられず、送られてきた「空海の風景」を読み、ひどく落胆し、酷評し、司馬氏の激怒を買った。しかし今でも私の批評は正しかったと思っている。

丸山氏の思想の核心は、日本を一八世紀のイギリスにならって真の民主主義の国にすることであった。しかし丸山氏の日本研究には仏教をはじめ日本の宗教というものについての理解と知識がかなり不足している。

彼の名著の誉れ高い「日本の思想」を読み、「大乗仏教についてどれだけ勉強したのか」と激しく論難した。その後、吉本隆明氏の批判などが続き、丸山氏は神の座を追われた。

私は啓蒙主義の時代はいちおう終わったと思う。二一世紀はトインビーがいったように、再び宗教というものが切実な問題となる時代であると確信する。

日本の文学や思想は、二人の偉大な作家と学者の屍を乗り越えて進まねばならない。

（「東京新聞」1996、10、1）

（注）　なお、司馬と丸山の世界観、歴史観を比較、論評したものに「司馬遼太郎と丸山真男」（中島誠著　1998刊）がある。

「日本は自分が一人前の国家にならない内に他の国に対して一人前の帝国主義国家として行動した」というのが、丸山の論陣の基本低音になっているが、それは司馬の「坂の上の雲」や「翔ぶが如く」の作

家態度とそっくりだと著者はいう。

さらにいえば「世に棲む日日」、「殉死」などにみる司馬の陽明学的行動実践の美学意識は、丸山における（朱子学）、（徂徠の古文辞学）（安藤昌益の自然真営道）、（福沢諭吉の脱亜入欧論）などと微妙に交叉したり、反発したりして「明治という国家」を形成してゆくというのである。

4「現代日本文化論」

今の司馬遼太郎を昭和の大文学者であるかのように扱う風潮に対して、梅原は強い抵抗を感じている。梅原は云う。

彼（司馬）は宗教嫌いであった。いつか私（梅原）に、宗会議員に出てくる坊さんの顔を見ると、犯罪者に見えるとか、創価学会は宗教でないと言ったことがある。私は司馬氏の言を咎めたが、司馬氏の意見を変えさせるには至らなかった。

彼に「空海の風景」という唯一宗教家を対象とした小説があるが、私は買わない。彼が空海について小説を書くというのでいろいろ私に聞いたが、私は、その程度の知識で空海を書くのは反対です。もう10年、空海を勉強してくださいと言った。しかし司馬氏は聞き入れず、まもなく「空海の風景」を書いた。それを見て私はある種の憤りを感じ、正直な批評を書いたが、それが司馬氏を激怒させ、最後まで私と司馬氏は微妙な関係にあった。

司馬氏が空海を書いたのは、吉川英治が「親鸞」という小説を書いたのに対抗するためであったかもしれないが、吉川氏には素朴に宗教や道徳を信じる心がある。こういう宗教や道徳に懐疑的な司馬氏は空海を書くべきではなかったと思う。

彼は終生歴史の傍観者で、一度も体を張って何かを主張することはなかった。

現代という時代は、今まで人類が経験したことのないような危機の時代であると思う。1核戦争の危機　2環境破壊の危機　3人間の内面破壊の危機である。文学はその危機に真正面から対抗しなければならない。そういう仕事を誰もしないとしたら、私がしなければならないと思っている。

（「現代日本文化論」（岩波書店）1997刊）

（注）梅原猛の著作集は畏友藤原達也、有村興両氏から提供を受けました。改めて感謝します。

（終）

「農ある暮らし～私の日常～」(6)

古屋富雄

節分・豆まき・厄払い

炒った大豆を升に入れ、奥の部屋から玄関へ
「鬼は外」「鬼は外」と豆をまき
お面を被った父さんを、外に追い出し戸を閉めて
「福は内」「福は内」と豆をまきます
我が家の節分は楽しい、楽しい夕べです

外に出された父さんが、早く入れてと頼んでも
「鬼は外」「鬼は外」を繰り返し
そろそろ良いよと母さんの優しい声で戸を開けて
「福は内」「福は内」を繰り返します
我が家の節分は楽しい、楽しい夕べです
邪気を払って福を呼ぶ、節分・豆まき・厄払い
邪気を払って福を呼ぶ、節分・豆まき・厄払い

確定申告

確定申告の時期が近づいています
税務署から申告用紙が送られてきました
野菜の売り上げは記帳済みです
係った経費をまとめてみました

今年もマイナスの申告です
農業を始めて３年もなるのに
一生懸命働いたのに
今年もマイナスの申告です

みかんの収量は去年よりは増えています
稲の作付けは去年よりも増やしてあります
出荷はすべて農協のみです
振込額を付け合わせてみました

今年もマイナスの申告です
販売量は増えているのに
増えた分だけ期待をしたのに
今年もマイナスの申告です

一生懸命働いたのに
今年もマイナスの申告です

湯治場

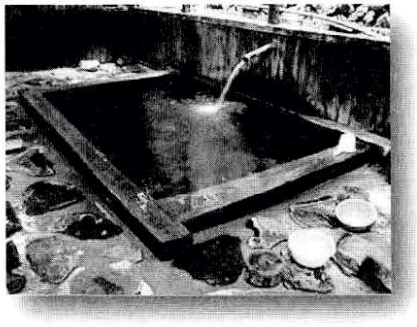
農家の仕事が一段落した
冬一週間の暮らしです
大正生まれのおじいさんの話しです
一週間の食べ物を持って
行きつけの湯治場に出かけました
村の男たちの労をねぎらう骨休みです

さあ　着いた　　まずは　一杯
元気な声が山から山へ響きます

自炊生活も手慣れたもので
女房が居なくても大丈夫
そんな冗談を皆で言っていました
一週間の食べ物がそろそろ
底をつき始めて来ています
山で過ごした楽しい時間も終わります

さあ　仕事だ　　さあ　帰ろう
元気な声が春の空へ響きます

おじいさんの通った湯治場は
今はホテルになりました
おじいさんの話しを思い出しています



春めき

ソメイヨシノより一足早く咲く桜
春めきの蕾が膨らんでいます
卒業式が近づいています

小学校の庭に植えられた春めきも
ピンクのモヤがかかっています
門出の春はもうすぐですね

蛍の光
仰げば尊し
春めきは卒業生を送る桜

ソメイヨシノより一足早く咲く桜
春めきの花が咲き始めました
ほのかな香りが漂っています

盲学校へプレゼントした春めきも
咲き始めたとの便りがありました
香りで春を感じていますと

見えないけれど
香りで分かる
春めきは花の香りがする桜
春めきは春めく頃に咲く桜

日本四大都市マラソンを走る（東京・大阪編）

安藤　剛

【東京マラソン二〇〇九を走る】

【大都市型市民マラソン時代の幕開け】

本号が発刊される二月、東京マラソン二〇一八が開催される。東京マラソンは二〇〇七年に「東京がひとつになる日」をスローガンに第一回が開催され、大都市型市民マラソン時代の幕開けとなった。そして東京都庁を大量の銀の紙吹雪が舞うなか三万のランナーがスタートするシーンや、これまでエリートに限られていた大手町や銀座など都心メインストリートを一般市民ランナーが走るシーンが全国にテレビ放映されて日本中を席巻した。

マラソンを始めて二年、一度はあの興奮の中を走ってみたいと第三回東京マラソンに申し込んだところ、応募者二三万人の中から三万人の一人に抽選合格した。

【虚弱児のサプライズ】

東京マラソン二〇〇九の前月に帰省した折、九五歳の父が「短歌を作ったよ」と、新聞折り込みチラシの裏に走り書きしてくれた。

虚弱児と　育てし吾子の　サプライズ
東京マラソン　出走すると

子供の頃は身体が弱く小学時代の体操はいつも見学で運動会を走ったことのない私しか知らない父に、マラソンを走る息子は、まさしくサプライズだったのだろう。

一昨年秋に福島県境を越える三〇キロの帰省自主トレランで、今は亡き母が昼食も取らずに私からの連絡を待って「大丈夫だよ、心配しなくても」と連絡してこない私を庇う父と口喧嘩したと後で聞かされたが、親にとって還暦を過ぎてなお気に掛かる息子だったのである。

【東京ビッグサイトの事前受付（三月一九日（木））】

三万人が走る東京マラソンの受付は、さすがに当日の受付はなく、三日間の事前受付のみである。二か月前に逝った母の初彼岸で帰省するため、受付初日に会社の休暇を取り、受付会場の東京ビッグサイトに向った。

埼京りんかい線の国際展示場駅に下車すると、目の前に近未来の都市空間が広がってきた。三〇年程前に会社仲間とよくゴルフに来ていた東雲ゴルフ場は、湾岸道路沿いだったと思うが、この辺りだったろうか。余りの変貌振りに戸惑いを覚えながら、東京マラソンのゴールになる逆三角形の国際展示場に向かった。

駅から続く人の流れに乗って会場に入ると、和太鼓の音が館内に鳴り響き、ステージでは寿獅子が演じられ、EXPO会場は熱気に溢れていた。エントリーエリアでゼッケン一式を受け取ったが、参加賞のTシャツのロゴに「THE DAY WE UNITE」とあった。

東京駅へ戻るバスに揺られながら、エントリー袋を提げたランナーたちと、今は素知らぬ顔で隣り合わせているが、当日はこの人達と心を通わせて一緒に走ることになるのかと思うと不思議な気分である。まさにロゴの「私たちがひとつになる日」が今から大いに楽しみである。

索漠とした都会生活の中でほんの一日だが、そんな時間と空間が訪れる大会に参加できることに感謝したい。

【第三回東京マラソン（三月二二日（日））】

二〇〇七年一月にマラソンを始め、これまで走ってきたフルマラソンは、昨年一月の館山若潮マラソン、三月の東京荒川市民マラソン、一一月の湘南国際マラソン、今回の東京マラソンがフルマラソン四戦目である。

東京マラソンに向けた先月の自主トレ中、夜間ランで木の根に躓いて二度も転倒負傷、何事も三度、の格言から大会直前の夜間ランをやめてしまい、走り込み不足の不安を抱いたまま本番を迎えることになってしまった。

そのうえ先週末の二〇キロランで右膝痛に悩まされたこともあり、東京マラソンはお祭りなのだから楽しく走

れればいいと言い聞かせながら、五時間切りに拘る自分との葛藤が収まらないのは、会社人間の性だろうか。

亡き母が何事につけ「ほどほどに」を口癖にしており、また抽選に外れてボランティア役に回ったコーラス仲間のOさんが「私は皆に、頑張れとは言わないの、エンジョイ！エンジョイ！って応援するの」と言っていた。まさにその言葉どおり、今日は、ほどほどに肩の力を抜いて東京マラソンを楽しんで走ってこようと思っている。

今日のコースは、都庁をスタートして東の飯田橋へ、竹橋に出て皇居に沿い日比谷から南の品川へ、日比谷に戻り銀座・日本橋そして北の浅草へ、再び銀座に戻り東の豊洲から有明のゴールへ、まさに東京を東西南北・十文字に走る四二・一九五キロである。一〇キロレース五千人を含む三万五千人が東京の主要道路を占有する国家的イベントに参加すると思うだけで血が踊ってくる。

六時前に埼玉の自宅を出立、日の出前の空が白夜のように明るい。冷たい空気に両手をトレーナーの袖に潜り込ませ駅に向かった。天気予報は曇のち雨、スタート時さえ降らなければ、その後の雨は走り慣れている。このところ山中湖・湘南海岸・三浦半島と、雨のマラソンが続いており、いつから雨男になってしまったのだろう。

新宿駅西口を出ると、まだ七時前なのに都庁まで既に長蛇の列である。やがて新都心に林立する高層ビル街の奥に、巨大な都庁のツインビルが現れた。都庁前地下広場の更衣コーナーで赤キャップに赤シャツと黒のロングタイツに着替えた。今日は、浦和レッズカラーである。

都庁ビル裏の大通りに並ぶトラックに手荷物を預けて、トイレを済ませ集合場所に向かった。新宿中央公園を抜け都庁南側通りに出ると、斬新なパークハイアットホテルが現れ、通りはランナーで溢れていた。完走目標タイム順にAからKに分けられ、私のGブロックはスタートの第一庁舎前から第二庁舎の南裏側に六〇〇Mも後方、延々と列をなして待たされること一時間、さすがに体が冷えて我慢できず、またトイレへ走ってしまった。隣に並ぶ同年代のランナーに「雲の流れが速いですね」と話しかけ、都庁ビルを背景に記念写真を撮り合った。

九時丁度に、遥か前方の都庁ビルの陰の方で行われる開会セレモニーの模様が、近くの巨大なモニターに映し出された。流れてくる君が代を皆で合唱していると、身の引き締まる厳粛な気持ちになってきた。九時一〇分にピストル音と打上げ花火が大空に轟き「ウォー」という大歓声と拍手が前方から津波のように押し寄せてきた。

巨大モニターに都庁ビルに銀の紙吹雪が舞う壮大な映像が映し出され、やがて周囲がゆっくり動き出して、スタートラインを通過したのが七分四〇秒後、大音量のオーケストラ演奏に気持ちが高揚するなか、スタート台

から手を振る石原都知事に向けて歓声が上がった。

周囲は完走目標タイム五時間弱のブロック、都庁から飯田橋まで高低差四〇Mの六キロの長い下り坂を、隊列を組むように整然と流れていた。新宿の高層ビル街を抜け靖国通りに出ると、歌舞伎町入口前で、最初の沿道イベントの六大学バトントワリングが若さで躍動していた。

新宿区役所前交差点を走りながら、左手奥にあったゴールデン街のバー「望」が思い浮かんだ。独身時代に郷里宮城の同級生の公務員S君と政治家を夢見るT君と三人でよく飲みに来たものである。満州帰りの豪放磊落なマスター望月さんとの人生談議や奥さんのけんちん汁が懐かしい。都市計画で閉店に追い込まれた最終日には常連客が外に列をなしていた。私の大切な青春時代である。

防衛省前で陸上自衛隊音楽隊の勇壮な演奏に力をもらい、市ヶ谷駅前を左折して、皇居の外濠を右手に飯田橋に向った。お濠の桜も一週間後には満開だろう。最初の五キロ標識で三六分四〇秒、スタート直後のトイレタイム五分を除くとキロ六分二〇秒、今日はキロ七分で五時間内完走を目標にしており、少し速すぎるが、後半のバテる分を貯金すると考えれば良いペースだ。沿道で応援してくれる仲間には、キロ七分で計算した通過予想タイムを事前に伝えており、まずは余裕の走りである。

飯田橋交差点を右折して西神田に向かい、沿道の声援と吹奏楽やバンド演奏に手を振りながら竹橋に出ると、皇居東御苑の森とお濠が目の前に広がってきた。仕事帰りに自主トレランしている皇居周回コースを右手に見ながら、道幅広い内堀通り一杯にランナーが広がって走る様は壮観である。右前方に大手門が見えてコースをビル街側に変え、勤務している大手町本店の前で赤い浦和レッズタオルを振る妻を見付け出しハイタッチした。

天気も持ち直し薄日が差してきた。黒松と芝生の美しい皇居外苑の公園を右手に内堀通りを爽快な走りである。日比谷交差点の一〇キロ地点でこの五キロが三一分は少し速すぎる。一〇キロレースの五千人が日比谷公園内のゴールに消えていき、フルマラソン三万人の大集団が遥か前方に見える東京タワーを目指していた。

フジテレビの女子アナクルーに追いつき、年甲斐もなくテレビカメラを意識しながら並走、やがて東京タワーの紅白の鉄塔、そして芝増上寺の大門を右手に、第一京浜を品川に向った。反対車線を折り返したランナーが颯爽と走ってきたが、さすが我々とは違う走りである。

品川に住む音楽家Kさんに品川折返し時刻を一一時頃と伝えていたが、手前の一五キロ地点で五キロを三四分四五秒、予定時刻には行けそうだ。やがて品川駅前の折返しカーブの騒然とした沿道の中から「安藤さあーん」と叫ぶ声が聞こえた。群集の頭越しに飛び跳ねながら手

を振るKさんの顔が見えて、流れから大きくふくらみKさんに応えることが出来た。よくぞ大集団のランナーの中から私を見つけ出してくれた。よくぞあの大声援の渦から私の名を呼ぶ声が聞き分けられたものだ。奇跡的だ。

前方の雲間に青空が覗いてきた。再び日比谷交差点に戻った中間点で、時間二三分。完走五時間ペースの順調な走りである。大手町本店前から中間点に移動していた妻と再びハイタッチして右折、有楽町のガードを潜っていよいよ銀座である。晴海通り一杯に広がって走る前方に銀座のシンボル、和光の時計台が迫ってきた。

グループや個人の別なく沿道の応援が一際声高で熱狂的、差し出された無数の手にハイタッチしながら、見知らぬ沿道の大観衆から大きな力をもらう主役になっていた。銀座四丁目交差点を左折、二万のランナーと大観衆が埋め尽くす銀座の目抜き通りを走れている自分に酔い痴れた。まさに東京マラソンのハイライトである。

大声援の中央通りを一・五キロ、日本橋交差点を右折して永代通りを茅場町へ、水天宮から浜町を左折して浅草へ、と向かうところで、案じていた右膝痛が襲ってきた。ついに来たか。膝の屈伸を繰り返しながら二五キロ地点でキロ七分四〇秒、急速にペースダウンしていた。

二五年程前に勤務していた浅草橋支店の店舗跡が見えてきたが、大蔵省検査で深夜まで残業続きだった頃が今となっては懐かしい。沿道の群衆の中から、個人的にチョコやクッキーを入れた篭が次々に差し出されてきた。ありがとう。下町の人情の篤さに感謝である。

ようやく浅草雷門前を折り返したが、銀座まで戻る六キロの長く感じること、ペースはキロ八分台に落ちていた。八重洲通り交差点の三二キロで丁度四時間、時計は午後一時を回っていた。朝飯から八時間も経ってはエネルギーも枯渇する。残り九キロを一時間で走るにはキロ七分を切らねばならず、目標の五時間完走はとても無理と覚悟した。が、ここで折れかけた心を支えてくれたのが、この先で待つ仲間との交歓だった。事前に伝えた時間には何としても行かねば、笑顔で応援に応えねば。

銀座四丁目交差点に戻って左折、事前に打ち合せしていた歌舞伎座前の沿道に視線を泳がすと、群衆の中からコーラス仲間のY氏が身を乗り出していた。よくぞ見付け出せた。「オー」と感激の声を挙げ、手を差し伸べてハイタッチした。次は大会ボランティアをしているOさんである。三五キロの入船橋給水所にいると聞いていたが、ほとんど同時にお互いを見付け出し、感激のあまり人目も憚らず路上で抱き合ってしまった。

かくして約束した五ケ所で沿道の大群衆の中から奇跡的に応援者を見つけ出せたことに感動、貴重な休日に一日がかりで応援に来てくれた仲間と家族に感謝である。

彼らの応援を力に、残り七キロを頑張ろう。しかし、その残り七キロが、遠く苦しい道のりだった。

天候が急変した。曇りのち雨の天気予報通りだった。入船橋から有明に向う約四キロの直線ロードは、降り始めた冷たい雨と風が真正面から吹き付けて、帽子を飛ばされぬよう深くかぶり直し、風圧に抗いながら必死に走るのだが、歩き始めるランナーも増えていた。

コース最大の難関といわれる長い上り坂の佃大橋ではもはや走るランナーはいなかった。降り頻る雨の沿道の中から「ロッキーのテーマ」が流れてきた。手持ちのラジカセで応援してくれていたのだ。思わずうるっときた。

三八キロの給水所でカップの水を右膝にぶっ掛け、痛みを騙しながら、走りと歩きと屈伸の繰り返しになっていた。冷たい雨風が吹き付ける東雲橋の上で、応援者が傘を差して肩を寄せ合い「頑張ってえ」と絶叫してくれているのに、それに応えられない自分が情けない。

恥も外聞もなく彼らの前で立ち止まり、膝を屈伸していると「大丈夫ですか」と傘を差し出し心配そうに覗き込み声を掛けてくれるのだが「ありがとうございます」と答えて走り出すも続かず、また止まってしまう。身体が冷え切り限界が近づいていた。

そんな風雨の中でいくつかのバンドグループがずぶ濡れになってマイクを手に絶唱していた。「雨の中ありがとう！」頭の上で両手を打って叫んだ。彼らのパッションとバイタリティに、頑張れるパワーが沸いてきた。

東雲の四〇キロ地点で五時間七分、この五キロが四九分も掛かっていた。遥か左前方にゴールの東京ビッグサイトの建物群が雨に霞んで見えてきた。あと二キロ少しだ。頑張れ。誰もが足を引き摺りながら、気持ちだけで走っていた。下を向いて歩く人はもはやいなかった。

角々で降り頻る冷たい雨の中を立ち続けて励ましてくれる大会係員に感謝しながら、ついに直線コースの先にゴールゲートが見えてきた。右手の小高い仮設スタンドから大勢の応援者が「頑張れ！」を大合唱、左手で東京消防庁の音楽隊が勇壮な凱旋演奏をしていた。一年前の初フルマラソン「館山若潮マラソン」で、男子高校生達が落伍した私を「負けないで」を歌いながら伴走してくれた涙のゴールを思い浮かべ、天を仰ぎ嗚咽した。

巨大なフィニッシュゲート横のテレビカメラを意識しながら両手を挙げてゴールラインを駆け抜けた。ついに東京マラソンを完走した。腕時計は五時間二五分一五秒を指していた。シューズからはずした計時チップと交換に完走メダルを首に掛けてもらい、雨に濡れて冷え切った身体をフィニッシャータオルで包んでもらい、居並ぶ係員の「お疲れ様でした。完走おめでとうございます」の言葉に完走の実感がようやく込み上げてきた。倉庫の

更衣室で着替えていると田舎の父からメールが入った。「無事に完走したよ。ありがとう。沿道の熱い応援に感動しちゃったよ」簡潔だが率直な感想を返信した。

帰路の電車に揺られながら今日一日を反芻した。前半は沿道で応援してくれた家族や仲間と交歓しながら、都心ストリートを縦横無尽に楽しく走れたし、後半は右膝痛と筋肉疲労と冷たい風雨に、目標五時間絶望という萎えた気持ちに襲われながら、沿道の応援に支えられて無事走り切れたことに、ひとり感極まっていた。

今日は、誰が主役で誰が脇役ということなく、ランナーもボランティアも沿道の人達もみんなが主役になって楽しんだ、まさに「東京がひとつになった日」だった。

四二・一九五キロを埋め尽くして何時間も熱い声援を送り続けてくれた一三〇万人の沿道の皆さん、統率されたサービスと温かい笑顔と励ましを送ってくれた一万三千人のボランティアの皆さん、演奏や歌や踊りでランナーを励ましてくれた二八のイベントグループの皆さん、そして苦しくも楽しい走りを共にしてくれた三万五千のランナーの仲間に改めて感謝の言葉を申し述べたい。

後日送付された記録証に、完走者二九一〇九人中二一四六〇位、六〇才未満が九割以上という年齢構成の中でよく頑張ったなと金色の完走メダルを握りしめた。

【大阪マラソン二〇一一を走る】

【大阪マラソンへの挑戦】

第一回東京マラソンが始まった四年後の二〇一一年に大阪も大都市型市民マラソンの開催を決めた。橋下大阪府知事の石原都知事への対抗意識からなのかもしれないが、我々一般市民ランナーにとって、大阪城を仰ぎ見ながらあの御堂筋が走れる本企画は大いに歓迎である。

その第一回という記念すべき大会にぜひ参加して、東京マラソンの感動を大阪でもう一度味わいたいと早速に申し込んだが、定員三万人のところ六倍近い一七万人がエントリーしたという予想以上の高倍率に内心諦めかけていたが、四月二五日に当選メールが送られてきた。あまりの強運にすっかり舞い上がってしまった。

二〇〇七年にマラソンを始め、五キロから一〇キロそしてハーフからフルマラソンへ距離を延ばし、参加する大会も地元埼玉から関東・東北地方、更に東海・上信越地方へ、今年は中部地方の富山・岐阜・石川各県の大会を走り、好きな歴史探訪も併せて楽しんできた。

今回の大阪マラソン参加を機に、近畿・中国地方まで足を延ばして、ぜひ本州全都府県走破を達成したいと思っている。

【浪速の夢：大阪城】

NHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国」は、今まさに佳境に入っている。豊臣氏の滅亡に繋がるクライマックス「大阪冬の陣」が、偶然にも大阪マラソン当日にテレビ放映される。秀吉が築造した難攻不落の大阪城に籠城する豊臣方一〇万と大阪城を包囲攻撃する徳川方二〇万の日本史上最大の戦い「大阪の陣」の舞台をこの機会にじっくり訪ねてきたいと楽しみである。

高い石垣に聳える天守閣の近世城郭は、織田信長の安土城に始まるといわれ、本能寺の変で横死した信長の後を継いで天下統一を果たした豊臣秀吉が、主君信長の安土城を凌ぐ壮大な大阪城を石山本願寺跡に築くが、秀吉の死後、関が原の戦いで天下を制した徳川家康に攻められ豊臣大阪城は落城焼失してしまう。まさに秀吉の辞世の句《浪速のことも夢のまた夢》である。

その後、徳川二代将軍秀忠が幕府の威信を誇示すべく全国の諸大名を総動員した天下普請で、秀吉の築いた大坂城を凌駕する二代目徳川大坂城を築造するが、三九年後に落雷で天守閣が焼失、以降天守閣を持たない大坂城が昭和まで続き、昭和六年に大坂市民の寄付金で鉄筋コンクリート造りの三代目昭和大坂城が再建され、太平洋戦争の米軍機による空襲を生き抜き、今われわれの前にその威容を現わしている。

三代目の昭和大阪城は、福岡藩主黒田長政が夏の陣の落城直前の天守を描かせた「大坂夏の陣図屏風」をモデルに再建されたという。昭和大阪城は徳川大阪城ではなく豊臣大阪城を模して建てられたのである。

昭和三五年に京都大工頭の中井家で発見された豊臣大阪城の「本丸図」から、豊臣の天守閣が現在の天守閣（徳川大阪城と同じ場所）の北東側にあったことが判明したという。豊臣大阪城の外観を模した天守閣が徳川大阪城の天守台の上に建てられていたとは、時空を超えたロマンではないか。

【難波の夢：難波宮】

大阪は城下町と商人の町というイメージだが、飛鳥時代に短命ながら「難波宮」があったという。なぜ大阪の難波に都があったのだろうか。

舒明天皇が六四一年に皇嗣を定めぬまま没すると、皇位継承者に舒明の子古人大兄皇子（蘇我馬子の孫）と中大兄皇子（非蘇我系敏達天皇の玄孫）と前帝推古の兄用明天皇の孫山背大兄皇子（聖徳太子の子）が三者鼎立したため、皇嗣決定までの繋ぎに舒明の皇后宝皇女が即位して皇極天皇となる。

翌年に政治の実権を握る蘇我入鹿が山背大兄皇子を斑鳩宮に襲い妻子共々自殺に追い込むが、六四五年にその蘇我入鹿が中大兄皇子と中臣鎌足に板蓋宮で暗殺され、

この乙巳の変で皇極天皇が譲位、中大兄皇子は皇極天皇の弟軽皇子を孝徳天皇に即位させ、異母兄の古人大兄皇子を謀反の疑いで謀殺してしまう。

同年一二月に孝徳天皇が都を飛鳥から難波に遷す。遷都理由は血生臭い皇位継承争いに汚れた飛鳥宮から逃げ出して世相を一新したかったといわれるが、中大兄皇子に傀儡擁立された孝徳天皇は非蘇我系血統であり、飛鳥京に未だ蔓延る蘇我氏など旧体制勢力から応神・仁徳時代の大王親政復権を夢見たのかもしれない。

孝徳天皇は難波に壮大な宮殿を完成、大化の改新と呼ばれる公地公民制の中央集権的行政機構を構築して租庸調の税制を定めた革新的政治を推し進め、難波津から遣唐使を派遣する外交を展開するが、六五三年に皇太子の中大兄皇子は先帝・皇后・皇族・官僚を引き連れて飛鳥に戻ってしまう。不承知の孝徳天皇は難波に残り、翌年一人寂しく難波宮で崩御する。孝徳天皇の皇子有間皇子も中大兄皇子に謀反の疑いで絞首にされてしまう。まさに孝徳天皇の《難波のことも夢のまた夢》である。

【なにわの夢の跡を訪ねて（一〇月二九日（土））】

埼玉の自宅を午前一〇時に出立、久方振りに妻帯同のマラソン旅行である。爽やかな秋風と晴れ渡る秋空に大阪の曇天予報も心配なさそうだ。大阪城公園駅に降り立つと周りの森が色付き始めていた。明日は黄色一色の御堂筋大通りが走れそうである。小春日和の陽気に誘われて公園内を散策、十月桜が八重の花びらを広げていた。

公園球場を抜けると外濠を挟んで高い石垣に聳える五層の天守閣が現れた。あたりを睥睨する巨大な天守の威容と黄金に輝く鯱や大屋根の装飾の煌びやかさに圧倒された。江戸天守台跡に豊臣天守仕様の昭和天守閣が再建されたとは、大坂人にとって太閤秀吉の人気は今なお絶大なのだろう。まさに太閤秀吉の城である。

天守閣の内部はさながら近代ホテル、最上階から大阪市内を俯瞰していると、外人宣教師や敵対してきた諸大名を案内しながら、己の威光を誇示する得意満面な秀吉の猿面が浮かんでくる。

福岡藩主黒田長政が描かせた「大坂夏の陣図屏風」はさすがに豪華絢爛、徳川豊臣両軍の陣構えと激戦の様相が詳細に描かれていた。左隻に徳川軍兵の濫妨狼藉ぶり、右隻左端には落城寸前の天守閣の窓から泣きながら外を窺う女たちの表情が細微に描かれて、秀吉恩顧ながら家康に服従してしまった長政の複雑な心情が忍ばれる。

天守閣の北東に豊臣天守閣跡を探してみたが、痕跡は分からなかった。北側に立つ山里曲輪跡の案内板に、炎上する天守閣から逃げ出した淀殿と秀頼が自刃した場所とあったが、秀吉が城内に山里の景観地を作り千利休らを招いて茶会を催した憩いの場であり、後に愛妾と愛息がそこで自刃することになるとは、秀吉は思いもしなかったろう。まさに《浪速のことも夢のまた夢》である。

大阪城の南側にある「難波宮跡」に行くと、広大な芝生公園になっており、中央に高さ二M程の大極殿基壇が復元され、その真ん中で若者が麻雀卓を囲んでいた。基壇に上がり大化の改新を施行して目の前の難波港から遣唐使船を送り出す孝徳天皇の遠大な構想に夢を馳せた。傀儡なはずの孝徳天皇の強権志向に反発する中大兄皇子が皇后たちを引き連れて飛鳥に去り、一人寂しく難波宮に残され崩御した孝徳天皇の無念さはいかばかりだったろう。まさに《難波のことも夢のまた夢》である。

【第一回大阪マラソン（一〇月三〇日（日））】

朝六時半に梅田のホテルを出立、霧雨を頬に大阪駅まで歩き、ランナーで満員の環状外回り線で大阪城公園駅に下車すると、雲間から仄かな明るさが覗いてきた。

大阪マラソンのスローガンは「みんなで虹をかける」である。参加するランナーと観客とボランティアが虹色の七テーマ（森林を育て・障害者スポーツを応援・難病子供を励まし・癌検診の啓発・街の美化・途上国の支援・難民の救命）に今年三月の東日本大震災の復興支援を加えた八つのチャリティーテーマに参画しようと呼びかけており、私も濃緑地に白字で「がんばろう●日本！」とプリントされた日本テニス連合の東日本大震災復興支援シャツを着用、背中に「WE NEVER GIVE UP」とマジックペンで手書きした。

大阪城の内濠に沿った森の中は、手荷物をゴールまで運ぶ三〇数台のトラックが並び、手荷物を持つランナーで溢れていた。指定のトラックに手荷物を預けてお濠沿いに軽く走ってみたが、なかなかに快調である。朝日を浴びて輝く荘重な天守閣をバックに、見知らぬ同士で写真を撮り合い誰もが観光マラソン気分を楽しんでいた。

天候もすっかり回復して気温二〇度は絶好のコンディション、既にスタート地点の大阪府庁前から大阪城外濠に沿った西側大通りが三万人のランナーで埋め尽くされていた。スタート式典が始まると、区切り毎に拍手のウエーブが前方から押し寄せ、特に招待の川内優輝選手の

紹介には一際高い拍手と歓声が沸き起こった。埼玉県庁職員の彼はまさに我らが市民ランナーの星である。

周囲に関西弁特有の軽快で明るい話声が飛び交い、誰もが第一回記念大会に参加できた幸運を喜びあい、この大会が自分達の大会だという誇りに満ち溢れていた。

そんな時にハプニングが起きた。通行が禁止されている歩道橋の上から年配の男性が「頑張って走ろう！頑張れ！」と大声を張り上げたのである。周りの驚きのどよめきが大きな歓声に変わり、彼の勇気に賞賛の拍手が送られ、スタート直前の雰囲気が一気に盛り上がった。大阪ならではの椿事なのかもしれない。

九時丁度にスタート、私のGブロックがスタート地点を通過するのに一〇分かかった。スタート台に陸上の朝原さんとサッカーの森島さんが立ち、路肩にゼッケンを付けた橋下大阪府知事がランナー達に囲まれていた。橋下知事は明日で府知事を辞任して大阪市長選挙に出るという。今日が知事として最後のお勤め、スタート直後の大勢のランナーの足を止めさせるのだから、さすがに人気者である。兎にも角にも今日の大阪マラソンがあるのは橋下さんのおかげだ。ありがとう。

今日はフルマラソン六戦目、館山・荒川・湘南・東京・福島いわきの総括をこの一戦に賭けよう。前半二〇キロをキロ六分半で二時間一〇分、次の一〇キロをキロ七分で一時間一〇分、残る一〇キロをキロ八分で一時間二〇分、ラスト二キロは最悪歩いても二〇分で五時間の完走プランを立てた。七・五キロと一五キロとゴール近くの三ケ所で応援する妻に通過予想タイムを伝えたが、果たして計算通りにいけるかどうか。賽は投げられた。

大阪城の南外濠沿いを半周する最初一キロは、ランナー渋滞で六分二〇秒と遅かったが、完走予想申告タイムでブロック編成された周りは、一糸乱れず整然と大きな固まりとなり順調な走り出しである。森ノ宮を右折して玉造筋を南下、沿道の大声援を受けて心地よい。

鶴橋を右折、道幅の広い千日前通りを西へ難波に向けて三万のランナーが走る様は壮観である。大太鼓の連打が響き渡り、大阪市民の誰もが応援を楽しんでいた。隣を走る秋田なまはげに仮装したランナーに「なまはげガンバレ！東北ガンバレ！」と大きな声援が寄せられた。

五キロ地点で三〇分四〇秒は順調だ。難波交差点を右折して大阪市中心部を南北に縦断する御堂筋を北上、これがあの歌の御堂筋か。仙台の定禅寺通りを髣髴させる緑豊かな街路樹が近代的な繁華街と巧みに融合されて、魅惑的な大通りを占有して走れる幸せを噛みしめた。

道頓堀・心斎橋・船場という著名な地名に目を泳がせながらキロ六分一〇秒ペースは変わらず、七・五キロ給水所附近で浦和レッズの赤いマフラーを振り回す妻を沿

道の中に見付け出しハイタッチした。

御堂筋の反対車線をケニア勢や川内選手ら先頭集団が飛ぶように走り去った。淀屋橋交差点を右折、土佐堀川に沿い東へ向かうが、青々と美しい水面はさすが水都大阪である。一〇キロ地点で一時間二分は想定外の快走だ。沿道の切れ目ない熱狂的な声援とブラスバンドの勇壮な演奏に、走りを楽しめているのが嬉しかった。

一一キロ地点の折り返しで、後続が四キロ以上も続いていることを知った。赤のレンガ壁に青銅ドームの中央公会堂前で吹奏楽団が素晴らしい演奏を聴かせてくれた。再び御堂筋に戻り、まだ黄葉しきれてない銀杏並木の大通りを難波に向けて南下、先ほどの反対車線で赤いレッズマフラーを振る妻の応援に応え、一五キロ地点で一時間三三分、今日こそ五時間切れが出来そうだ。

道頓堀のグリコサインを左手に見ながら難波交差点を右折、千日前通を京セラドームに向かった。水都に掛かる橋を渡り、UFO形状のドーム球場を左に第二折り返しの二〇キロ地点で二時間五分は、計画比五分の貯金ができていた。少し曇って気温も上がらず、風もなく絶好のコンディションに、フルマラソンのベストタイム更新かもという予感に顔をほころばせながら、二キロ毎の給水はしっかり取った。難波交差点に戻り大国町から通天閣を折り返して今宮へ、沿道の声援は途切れることがなく、疲れるだろうに、と頭の下がる思いである。

沿道の声援の中から「ありがとう！元気を貰うわ！頑張って！」と叫ぶおばさんの声が耳に入った。我々ランナーが沿道から力を貰っていると思っていたが、我々も走ることで皆に元気を与えていたのか。

隣を走る仮装したお嬢さんに「仮装していると走り辛いでしょ？」と聞くと「タイム（記録）でなく皆んなに喜んで貰えるのが嬉しいの」と返ってきた。そうか、今日は沿道の人達との心の交歓を楽しみながら走ろう。

そんな時、沿道から差し出されるハイタッチの中に、車椅子のお年寄りが視野に入った。車椅子の前に立ち止まり両手を包んで「おばあちゃん、元気で頑張ってね」と声掛けすると、見知らぬランナーの不意な行動に一瞬戸惑っていたが、すぐに嬉しそうな表情に変わった。

お年寄りの反応に快感を覚えた。そして鳥肌が立った。今日はみんなで虹をかけるチャリティーマラソンだ、チャリティに徹しよう。それからは沿道の中に車椅子を探す走りになった。車椅子のお嬢ちゃんや同年配の男性の前にしゃがみこみ、両手を握り励ましの声掛けすると、素敵な笑顔と一緒に、周りの人達が私のTシャツのロゴ「がんばれ、日本！」を連呼してくれた。ありがとう。沿道の人達と一体になれている自分が嬉しかった。

国道二六号を花園町・天下茶屋とひたすら南下、この

左手奥が、大阪夏の陣で真田幸村が家康本陣に突撃した天王寺口合戦場、大阪城の内濠まで埋められては、さすがの幸村も得意の籠城戦が出来ず、ここまで出撃せざるをえなかったのだろう。天下茶屋は伊達政宗が布陣した場所、討ち死を覚悟した幸村が自分の子女を密かに敵将政宗の陣地に送り届けたのはこの辺りだろうか。

玉出の三〇キロ地点を三時間一六分で通過した辺りから足の張りと膝の痛さが襲ってきた。やはり来たか。遥か右前方にフィニッシュ地点に建つコスモタワーが見えていたが、まだまだ先は長い。キロ八分台にペースダウン、三五キロ地点で三時間五九分。残り七キロを一時間は厳しくなってきた。

三七キロ地点で四時間一八分、キロ九分では残り五キロを四二分はもはや絶望的だ。やはりフル五時間の壁は大きいか。しかも目の前に最大の難所といわれる高低差二〇Mの南港大橋が待ち構えていた。しかしここから信じられない頑張りが出来た。ラスト五キロを歩かず走り切ろう、もう少し頑張れたかなと後悔する走りだけはすまい、妻の待つゴール近くを約束のタイムで通過したい。

沿道から「このペースなら五時間が切れるよ」の声が背中を押してくれた。よし頑張るぞ。歩き始めたランナーの後ろ姿が一緒に歩こうよと囁いてくる。誘惑に負けるな。歩くランナーを視野に入れないよう、走り続けるランナーの後ろ足だけを追い求めた。

東日本大震災の前月に走った福島いわきサンシャインマラソンのTシャツに追いついた。歩き始めた彼に「私もいわきを走りましたよ」と声をかけ、しばし並走しながら励ましあった。互いに心の絆を感じていた。

キロ七分台に戻ってきた。だだっ広い埋め立て地をコスモタワー目指して頑張れている自分が信じられない。ゴール手前で浦和レッズの赤いマフラーを振る妻が見えてきた。右手を挙げて応えながらフィニッシュゲートに向けてスパートした。ゴールタイムは四時間五七分三〇秒、ついに五時間切りが達成できた。そしてラスト五キロを盛り返せた自分が嬉しかった。沿道で手を取り合った車椅子の人達の笑顔が浮かんできた。応援、ありがとうね、頑張ったよ。後日送られてきた記録証に完走者二万六一四九人中一万四八一一位とあった。

着替えを済ませて外に出ると土砂降りになっていた。まだ多くのランナーが降り頻る雨の中、ゴールに向かってそれぞれの思いを胸に走っていた。薄暗くなった街路樹ロードを走るカラフルなランナーが絵のように美しい。制限時間までまだ一時間以上あるよ、フルマラソン完走の感動はもうすぐだ、素晴らしき仲間達よ、頑張れ。沿道から声援を送りながら、最寄り駅に向かった。

（次号に名古屋・京都編掲載予定）

世界の国旗から学ぶ（第六回）

米村典紘

アジアは何処が境目か？

世界の地域分類方法は、どの様な決め方があるのでしょうか？米州は分かり易いとしても、アジアとヨーロッパの分け方は難しいものがあります。

例えば、ロシアが旧ソビエト連邦時代は、現在のキルギス、タジキスタンはソビエト連邦としてヨーロッパに分類されていました。独立した現在は、二か国とも、アジアに分類されています。

そもそも基本的分類方法は左記が、基本となっているようです。

アジア州は東アジア、東南アジア、中央アジア、南部アジア、西アジアで、ヨーロッパとの区分はロシア以西、トルコ以西がヨーロッパ州となり以東がアジアとなるようです。その為、サッカーの世界選手権のアジア予選では、日本チームの対戦相手にアラビア半島の国々も入って来る訳です。

それでは、中東とか、極東とは何でしょうか？

これはヨーロッパの強国であった英国を中心として考えたからです。英国の東の国とはインドでしたから、日本は、インドより極東の国なので極東、英国とインドの間の国は中東という訳です。

更に複雑なのが中東です。「アジア地区の中で、中東の国とアラブの国、イスラムの国とキリスト教の国は、どの様に分けるのでしょうか？」と聞かれた事があります。

答えは、中東の国とは、場所による分類であり、アラブの国とは人種による分類で、イスラムの国とは宗教による分類なので、地域と人種と宗教それぞれで、分けなければなりません。

例えば、イランとイラクとは、隣国同士なので、中東ですが、イスラム教の国でもあります。その証しとして、

両国の国旗には、「神は偉大なり」との文字が書かれています。

しかしながら、イラクはアラブ人の国家ですが、イランはペルシャ人の国家なので、人種は違う訳です。

また、独立した年についても、各国の考え方により異なっています。中華人民共和国は、紀元前１６００年、エチオピアが紀元前１０００年頃と、独立年次をオフィシャルに発表しています。しかし、紀元前には中華人民共和国は存在していません。

トルコ共和国は、共和国となったのが、１９２３年なので、その年を独立した年として公表しています。しかし、トルコも長い歴史がある国家で、セルジクトルコ、オスマントルコなどの時代を経過して、現在のトルコ共和国となっています。

いつもの様に、イントロが長くなりましたが、そろそろ本題に入りたいと思います。

第六回はアラビア半島と西アジアの国々

アラビア半島の国々は、アラビア半島にある国家なので、分かり易いですが、西アジアの国とは、アフガニスタン以西、トルコ以東の国となる様です。即ち、イラク、シリア、レバノン、イスラエル、ヨルダン、パレスチナの六か国と、イラン、トルコ、キプロス、アゼルバイジャン、アルメニア、ジョージアの六か国となります。

アラビア半島の国々はサウジアラビア、クウエート、バーレーン、カタール、アラブ首長国連邦、オマーン、イエメン、の七か国なので、合計十九か国について、説明して行きたいと思います。

中東を知るには、まずイスラエルを知る事から始めると分かり易いと思いますが、相変わらず大きな問題が続いています。最近では、何処かの大国の大統領が、「エルサレムを首都と認め、大使館を移転する」と云いだし、大問題となっています。

そもそも、エルサレムにはどの様な問題があるのでしょうか。

聖地エルサレムの問題

エルサレムの旧市街は大きく四つの地区に分かれ、イスラム教の聖地、岩のドームとアルアクサのモスクがある、イスラム教地区。嘆きの壁があるユダヤ教地区。そして、キリスト教の聖地、聖墳墓教会のある、キリスト教地区。そしてアルメニア教（キリスト教の一部）、地区があります。

三千年以前は、ユダヤ人とパレスチナ人が住んでいましたが、ユダヤ人達はヨーロッパ各地に分散、更に彼等の一部は、新大陸アメリカに渡っていきました。もともと勤勉で、商才もある為、金融業、ホテル、ダイヤモンド、

ワイン等で成功を治め、富める民族となったのでした。

米国に於ける富豪達の多くは、ユダヤ系が多い為、大統領選挙などでは、大きなパワーとなっています。

１９６７年の第三次中東戦争で、イスラエルは支配地を拡大し、旧市街地を含む東エルサレムを占領支配しました。そして、イスラエルはエルサレムを「他に分けることのない首都」と宣言し、現在でも、国会や、省庁をおいています。

一方、パレスチナ自治政府は、東エルサレムを将来の首都にする考えを持っているのです。その為、１９９３年のオスロで、イスラエル、パレスチナ間の「二か国家共存」を目指したオスロ合意が結ばれましたが、「国境問題、難民問題、イスラエルのヨルダン川西岸問題」などの課題が解決出来ず、二か国の溝が埋まらないままとなっているのです。

オスロ合意後、米国大統領はクリントン、から、ブッシュ（息子）、オバマと変わっていきましたが、いずれも選挙公約では、イスラエルよりの発言が多く、大使館をテルアビブからエルサレム移す法案は既に可決しているにもかかわらず、さすがに、この問題だけは、歴代大統領署名により、実施していませんでした。

しかしながら、現大統領トランプは、パンドラの箱を開け、「エルサレムに大使館を移す」と内外に宣言したのです。

この事は、「オスロ合意」に限界を感じたトランプが、まず一石を投じて、波紋を起こし、良策を見出そうとしたのか、波紋が大きすぎて更に悪化する事になるのか？懸念されますが、アラブ側だけでなく、先進ヨーロッパ諸国からも「もう米国には調整能力はない」とまで云われています。

現在のエルサレム人口は５０万人ですが、パレスチナ人３０万人、ユダヤ人２０万人の割合です。

イスラエル国（１９４８年独立：ＧＤＰ一人当たり３７，７００ドル）

イスラエルの全面積は、１９６７年の第三次中東戦争で占領した、ゴラン高原を含め２２，０７２㎢で、日本の面積の約６％と狭い国土です。首都は前述したように、エルサレムとしていますが、国際的には、テルアビブであり認められていません。その為、テルアビブには、各国の大使館があります。

産業は金融、情報通信、流通サービスなどが中心、一人当たりのＧＤＰは日本並みですが、紛争地である為、軍事費が１２５億ドルと、ＧＤＰの１０％を占めています。因みに日本は１％です。

気候は、エルサレムが海抜八百メートルの所にある為、比較的涼しいですが、テルアビブは、地中海に面している為、湿度が高く、蒸し暑く感じます。アカバ湾の入り

Hにある、エラートは盛夏期には40度にもなります。ゴラン高原は北部になりますが、ヨルダン川の源流であり、ガリラヤ湖を通り死海まで続いています。

シオニズムとは

そもそも、シオニズムとは「自分たちの国をパレスチナにつくろう」とするユダヤ人の民族主義思想と運動でした。

旧約聖書によれば、「カナンの地」と呼ばれ、ユダヤ人にとっては、「神から約束された土地」として、一世紀まで、住んでいましたが、ローマ帝国によって滅ぼされてしまいました。

その後、ユダヤ人達はヨーロッパに移り、ユダヤ教をヨーロッパに持ち込んだ為、ヨーロッパの、キリスト教徒とは馴染みませんでした。

そして1882年、当時ウクライナに住むユダヤ人大学生十数名が、本来の地に帰ろうと、オスマン帝国の一部であったパレスチナに移住したのが事の始まりでした。

第一次世界大戦で、ドイツ、オーストリア、オスマン帝国が敗れ、東アジアのシリア、レバノンはフランスに、イラクとヨルダン、パレスチナは英国の委任統治領となりました。

1920年にイラクとヨルダンが英国の保護下で独立国家となりましたが、パレスチナ地区だけは、委任統治領のままでした。それは、イギリスの思惑と異なり、パレスチナアラブ人達は、イラク、ヨルダンには移らず、その地に住み続け、彼等の社会を築いていました。その為、シオニズムのスローガンである、「土地なき民に、民なき土地を」とは、明らかに矛盾した状態となったのです。

第二次世界大戦中から、パレスチナアラブ人達は、英国に対して武装組織を立上げ、協力をしてきました。英国は、戦勝国とはなりましたが、イスラエルとパレスチナ双方に矛盾した約束事の解決能力はない為、国際連合に付託したのでした。

その結果、パレスチナ地区は、ユダヤ民族国家55%、アラブ民族国家45%、エルサレムを国際管理下とする議案が、賛成33（米国、ソ連、フランスなど）反対13（主にアラブ諸国）で可決されたのでした。因みに英国は立場上、棄権に回りました。

英国は、大戦中にアラブ人に対しては、連合軍に協力する事で独立を約束し、ユダヤ人に対してはパレスチナの土地を約束していた事、更に英国は国連主要国に根回し、英国が棄権しても、確実に可決する「したたかな外交」手段を使ったのでした。

しかしながら、アラブ側は、「先祖伝来の土地を半分以上もユダヤ民族に割譲する決議は当然受け入れがたい」として、衝突が今も続いているのです。

【参考：アカバ湾とペトラ遺跡】

シナイ半島の右側にあるアカバ湾の突当りには、二つの都市があり、イスラエルの南端の街「エラート」が左側に、ヨルダンの「アカバ」が右側にあります。アカバの北には紀元前300年から八世紀頃まで独自の文化を持っていた、ナバテア人によるペトラ遺跡があります。ペトラとは、ギリシャ語で、岩を意味するそうですが、巨大な岩に、彫刻を施した、数々の遺跡は「インディージョーンズ・最後の聖戦」のロケ地に使われました。

【参考：ユダヤ人の人口】

世界のユダヤ人人口は1,343万人と云われていますが、その内43%が、イスラエルに住んでいます。残りの57%はイスラエル以外の国ですが、米国とイスラエルを合わせると、約80%になります。その為、米国の歴代大統領は選挙戦で、イスラエルに有利な発言を繰り返す訳です。

イスラエルの国内には、ユダヤ人だけが住んでいると思われがちですが、そうではなく、ユダヤ人が、75%、アラブ人が20%、その他の民族が5%の構成となっています。

イスラエルの国旗

イスラエル国旗は、白と青の二色旗で、中央にダビデの星が、その上下に太く青い帯線が引かれている、非常にシンプルで分かり易い国旗です。

このデザインの考案者は、シオニズム運動を起こしたダビデ・ウルフゾーンが運動旗として考案したものですが、すこしずつ修正しながら現在の国旗となっています。

尚、今回も末尾に、アジアの国々の国旗を付録致しましたのでご参考にして下さい。

【参考：ダビデの星】

ダビデの星は、正三角形と逆正三角形を上下に組み合わせた星で、紀元前十世紀に当地を治めていたダビデ王が、ユダヤ人の保護と安全の守り札として考案したものとされています。

また、イスラエルは、赤いダビデの星を赤十字旗の代わりに使用していますが、国際赤十字は、キリストの赤十字とイスラムの赤い三日月は認めていますが、赤いダビデの星は、認めていません。

ヨルダン・ハシュミット王国（143号記載：4,618ドル）

立憲君主王国で、一人当たりのGDPは、4618ドルと、中東諸国では、イエメン、シリアに続き貧しい国

です。

ヨルダンと云う国家を一言で説明する事は大変難しい事ですが「宗派のモザイク模様の国家」とでも言えるかもしれません。

ヨルダンには、砂漠地帯に見事なまでに「水のコントロールをする知恵」を持った、ナバテア人がペトラ文明を築いていました。彼等はこの地では珍しい、多神教の人種でしたが、大震災、ローマ帝国の侵略、水害などにあい、その都度克服し、7世紀までは何とか維持してまいりました。8世紀に入り、アラビア半島がイスラム教一色となり、再び大洪水に見舞われた事もあり、この地を去っていったのでした。

「ヨルダンが、宗教のモザイクの国」と云われる由縁は、ナバテア人の宗教観があったかもしれません。シーア派、スンニ派は当然ですが、ドルーズ派、ロモン派もあり、又ギリシャ旧教、ギリシャ正教、プロテスタント、アルメニア正教、アルメニア旧教、ユダヤ教などが正にモザイク模様で散らばっていました。

ヨルダンは隣国シリアと深い関係を持っていますが、パレスチナ系難民が人口の七割を占めています。親米・親ヨーロッパ政策をとりながら、他のアラブ諸国とも友好な関係を維持してきています。

ヨルダン国旗は横柄上部から、黒：白：緑で旗竿側赤三角旗に白い七綾星ですが、パレスチナの国旗は白い星がないだけの、そっくりな国旗となっています。

レバノン共和国（1943年フランスから独立：9，793ドル）

レバノンの首都、ベイルートは、中東のパリと云われる程、美しい街でした。内戦や、イスラエルとの争いにより破壊はされましたが、それでも中東にあって、比較的ヨーロッパの雰囲気が感じられる街並みを残しています。

レバノンは十八の宗派が存在する為、国内での勢力争いが激しく、更に地域がら、北はシリア、南はイスラエルに接し、常に緊張状態が続いています。

レバノン国旗のシンボルは旧約聖書に登場する、高、高潔、神聖、不滅を意味する、レバノン杉が描かれていますので、分かり易い国旗です。上下を横四分の一ずつ赤帯で、中央部分の二分の一を白色として、その中央に緑色のレバノン杉を、描いたものです。

レバノン杉の色は、当初、木の部分が茶色でしたが、緑一色のシンプルなカラーに変えた為、すっきりした国旗となりました。赤は国民の勇気と革命で犠牲となった血の色、白は純潔と平和を意味し、緑はイスラムカラーです。

レバノンと云う国家は、かつて、オスマン帝国の自治区でしたので、多くの宗教が混在をしていました。

1920年以降、フランスの委任統治区となり、国土が拡大される事により、スンニ派とシーア派の割合が、更に高くなり、スンニ派の盟主サウジアラビアとシーア派の大国イランが、中東の覇権を争って、国内でも対立が激しくなって来ました。

現政権は親サウジアラビアなので、西側の支援を受けていますが、反政府勢力「ビズボラ」の方は、イラン、ロシア等が、強力な支援を行っています。

隣国シリアでは、現政権を支援しているのが、イランとロシアであり、反体制派を支援しているのが、サウジアラビアと西側諸国なので、レバノンとは逆の構図となっています。

【参考：レバノン杉は、ヒマラヤ杉の一種で中近東一帯に自生していました。杉と云っても、マツ科に属している樹木なので、高級建材や、フェニキア人の船材として使われていました。今では絶滅種として世界遺産に登録されています。】

イラク共和国（1932年英国から独立：GDP5，790ドル）

現在、イラクがある地域は、紀元前6千年頃からシュメール人が、チグリス・ユーフラテス川流域に興った、古代メソポタミア文明の発祥の地でした。766年にはアッバース王朝がバグダッドを首都とし、1258年まで続きましたが、オスマントルコの侵略、英国の自治領、1932年の独立、1979年のサダム・フセイン政権誕生、1980年～88年までのイラン・イラク戦争、そして1991年のクウェート侵攻に伴う湾岸戦争と続きます。サダム・フセイン政府の敗北で、国家は疲弊しクルド人問題が再燃して参りました。

公用語はアラビア語とクルド語。宗教はイスラムとキリスト教です。主要産業は石油で政府歳入の八割強となっています。世界推定石油埋蔵量第四位ですが、治安回復が遅れている為、インフラ整備や、石油以外の産業開発が課題となっています。

現在の国旗は、汎アラブ横柄三色の、赤、白、黒で、中央の白い部分に緑色で「神は偉大なり（アッラー・アクバル）」とアラビア文字で書かれています。

汎アラブ横柄三色旗（赤：白：黒）を使用している中東諸国は、イラクの他に、イエメンとシリア、エジプトがあり、中央の白い部分に、アラブ文字が書いてあるのが、イラク国旗。中央の白い部分に、緑の二つ星があるのがシリア国旗、黄色いサラデンの鷲が描かれているのがエジプト国旗、何も書かれていない三色旗がイエメン国旗となっています。

更に三色の構成はさまざまですが、イスラムの緑を加えた四色とし、旗竿側から三角、長方、台形をデザインした国旗は、アラブ首長国連邦（長方形）、クウエート（台

形）、ヨルダン（三角形）、パレスチナ（三角形）アフリカのスーダン（三角形）が、三色旗に旗竿から三角旗などのおかず付き国旗を使用している国があります。

【参考クルド人問題】

クルド人はメディア王国が祖先だと云われ、主にイラク、トルコ、イラン、シリアの国境地帯の先住民族で、紀元前八世紀には、イランの北部一帯にある、イラン高原を支配していました。総人口推定約3千万人、「国を持たない最大の民族」といわれます。

１９６０年頃から独立運動が続いていましたが、何度も独立の機会がありながら、独立は、「見果てぬ夢」となっています。第一次世界大戦後、一度はセーヴェル条約により、旧オスマン帝国の中にクルド国家を造る事が、認められたのですが、トルコの英雄ケマルが、イギリスが支援するギリシャ軍を敗走させた事で、クルドの独立は実現しなかったのです。

（ケマルの欄で述べる）

１９９０年、のイラクのクウエート侵攻に始まる湾岸戦争で、イラク軍が力を失った時期に、クルド人居住地の安全地帯が、アメリカ軍を中心とする多国籍軍により、確立され、独立する機会もありました。

しかし、彼等の住む地区は、北はトルコ、南はイラク、東はイラン、西はシリア、また、その他、アルメニア、アゼルバイジャン、ヨーロッパ大陸にも居住地が広がっていた為、なかなか纏まりませんでした。

２０１４年から、イラク北部のシリア、トルコ、イランとの国境沿いにクルド自治区を確保してたのですが、今度はクルド人同士の争いが始まってしまいました。

バルザーニのＫＤＰとタラーバーニのＰＵＫが睨みあい、隣国との利害も絡んで、複雑な状況となってしまいました。

２０１７年に入り、米国の支援を受けた、クルド人自治政府部隊と、ロシアの支援を受けたシリア軍がイスラム国テロ部隊を一掃し、クルドもイスラム国撲滅に、貢献した訳です。

同年9月に、クルド自治政府は、「イラクからの独立」の国民投票を実施した為、イラク政府との摩擦が再燃、イラク北部のアルビール地区は産油地区でもある為、イラク軍が進軍し、国民投票が裏目に出た結果となってしまいました。

トルコ、イランなど、この地域の大国の利害も絡む為、独立する為には協調と更に大きな大国のパワーが必要なのかもしれません。

イラン・イスラム共和国（１４２号掲載：６，３６３ドル）

紀元前3千年頃、エラム人が、イラン高原南部に、国家と文明を築いていました。ペルシャ人とエラム人（ハタミ人とも云われ、アラブ人とは異なる遊牧民）は人種的も、言語的も異なる系統でした。

ペルシャ人は、紀元前２５００年頃、ロシア南部のステップ地帯や、中央ヨーロッパの森林地帯から、中近東各地に移住してきました。（アーリア人系の流れをくみ、美形民族と云われる）

紀元前５５０年頃には、キュロス二世が、そしてダレイオス一世がペルシャ帝国の基礎を築いていきます。

現在のイランは、政教一体のイスラム国家であり、核開発問題で、米国と睨みあっています。

又、サウジアラビアとの間で、覇権争いが続き、「レバノン・シリア」をめぐる対立だけではなく、イエメンでも、現政府を支持するサウジに対し、イランは、反政府勢力「フーシ」を支持、カタールで、サウジアラビアが国交断絶すると、イランが、ガス油田の開発援助を行うなど、中東各地で対立が深まっています。

イランの国旗については、１４２号で述べましたが、横三色（緑：白：赤）の白色の中央に、力と不屈の精神を表す、まっすぐな赤い剣と、剣を囲むように、四つの三日月が赤色で弓のように描かれています。

また、三色旗の緑と白、白と赤の境目にそれぞれ、十一文字ずつ、「神は偉大なり」と古いアラビア文字で繰り返し２２回書かれています。

トルコ共和国（１４３号掲載：１０，９７２ドル）

１４３号では、偉大なトルコの歴史を割愛いたしましたが、本号で少し触れたいとおもいます。

オスマン帝国時代、彼等が支配していた地域は広大で、バルカン半島と中東にまで及んでいました。この地域に共通するのは、言語、宗教、民族も多様性に富み、統一するには大変複雑な地域だと云うことです。

オスマン帝国は多言語、多宗教の住民が支配する国家なので、政治は、政教分離主義を貫き、スルタン三代目の母親がキリスト教徒のギリシャ人、四代目は祖母も母もキリスト教徒でしたが、拘る事はありませんでした。

１５世紀から１６世紀にかけ、コンスタンチノープルから、更に、ウイーンまでを包囲しましたが、スルタンの代理人である指揮官達も、キリスト教徒でした。即ち、トルコ人はもとより、ギリシャ人も、スラブ人も人種も、異なる宗教も、全てオスマン人として受け入れる政策をとり続けていたのです。

ボスニア、セルビアを占領し、いよいよオーストリアのウイーンを包囲するまでになり、勝利は目前となりました。誰が見ても陥落寸前でしたが、ここで、予想外の事が起こります、関ヶ原の小早川軍ならぬ、ポーランド王国に急襲され、簡単に敗退してしまいます。数の力が、精鋭に敗れた瞬間でした。

１８２９年にはオスマン・エジプト連合艦隊が、ヨー

ロッパ列強海軍によって粉砕され、ギリシャの自治領も失います。その後、クリミア戦争ではヨーロッパの強国のバックアップもあり、ロシアに打ち勝ちますが、・第一次世界大戦、第二次世界大戦を経て、現在のトルコ78万四千㎢の国と小さくなったのでした。

要因をまとめてみますと、キリスト教とイスラム教とは兄弟宗教であっても、女性参加の問題、経済、環境問題を含め、やはり大きな違いがあり、オスマン帝国の指導者達は、ヨーロッパの近代化に眼を見張り、ヨーロッパに近づこうとしていたのです。

オスマンは間違いなくヨーロッパの一員になろうとしましたが、全世界のパワーポジションを知らず、ヨーロッパの最強国を目指した事が、崩壊を余儀なくしていったのではないでしょうか。中東世界の中にとどまれば、中東の強国としてパワーバランスを発揮していたのかもしれません。

その事は、我が国もアジアの最強国を争うのではなく、力強い国力を背景とし、安定した、豊かで平和を愛する民族国家を目指していきたいものです。

【参考：トルコの国父ケマル】

第一次世界大戦中、英国軍が主体となっている連合軍が、ダーダネルス海峡から、トルコ本土に上陸してきました。その時、劣勢を挽回し、激戦のうえ阻止したのが、英雄、ムスタファ・ケマルでした。（当時の英国軍の責任者は、チャーチルで、その責任をとって、海軍大臣を辞任した程です。）しかし、最終的には連合国が勝利を治め、トルコは「セーヴェル条約」により、占領地の全てと、本来の国土まで、分割するという屈辱的契約を結ぶ事になりました。トルコ国民は激怒し、各地でレジスタンス活動が起こっていました。

ケマルは、彼のカリスマ的指導力により、国民の抵抗勢力を組織化し、英国が支援するギリシャ軍と再び厳しい戦いを挑み、ケマルが勝利しました。

その為、セーヴェル条約を破棄し、1923年に「ローザンヌ条約」で、当時のアナトリア本土の分割を阻止したのでした。

彼は「トルコの国父」として今でも敬愛されていますが、トルコ民族主義者でもあった為、クルド人迫害に繋がったとも、云われています。

尚、トルコの首都が、イスタンブールではなく、内陸部のアンカラにあるのは、ケマルが蜂起した都市がアンカラであった事に由来しています。

キプロス共和国（1960年英国から独立：27，662ドル）

地中海に浮かぶ島国と云うより、トルコとエジプトの間に浮かぶ島国と云った方が、分かり易いかも知れません。人口、115万人が住む島国ですが、ギリシャ系民族（南部）とトルコ系民族（北部）が住んでいます。1974年トルコ軍が、北部を実効支配し、北キプロス・トルコ共和国の独立を宣言しています。南部のギリシャ系民族が住む、キプロス支配地域の住民（85万人）も、E・Cに加盟し、統一の動きを示していますが、それぞれ合意には至っていません。

国旗は、白地にキプロス島をオレンジ色で描き、その下に平和の象徴のオリーブの枝葉をデザインした、ユニークな国旗です。又、北キプロス・トルコ国を、国として承認しているのはトルコだけですが、一応国旗は、トルコの国旗の色を反転し、上下に赤い線を引いたものとなっています。

シリア・アラブ共和国（1946年フランスより独立：3，289ドル）

国名はメソポタミア時代に栄えたアッシリア帝国の名前に由来。シリアは、アッシリア・ヒッタイト文明の発祥地であり、ダマスカス織、彫金細工、ガラス工芸細工などの工芸技術に優れた民族で、ヨーロッパの工芸技術に大きな影響を与えたと云われています。

1970年以来ハーフェズ・アサド大統領が絶妙なバランスで長期安定政権を維持していましたが、69才で急死、その長男バーセルが事故死した為、次男のバッシャール・アサドが大統領となって、現在に至っています。

共和制議会の体制でありながら、実質はバアス党の一党支配である為、2011年以降、各地で反政府デモが発生、更に反政府勢力に過激派武装勢力なども参加し暴力衝突が続きました。その結果、2016年までに30万人近くの死者と、約650万人の国内難民、及び、500万人近くの海外難民が、ヨーロッパなどに流出し、受け入れ国側でも、様々な問題が発生しています。

周辺国との関係は、イスラエルとは対立、イランとは、イラン・イラク戦争以来対立していましたが、2016年にはシリア情勢悪化を受けて、イランが、シリア難民25万人を受諾、クルド問題でも、利害が一致する為、同一歩調をとる等、歩み寄る気運となっています。

クルド問題は、シリア、イラク、トルコ、イランにまたがる為、パレスチナ問題同様、大きな力と各国の協調が必要です。

最近、「さいきん問題」が新たに発生しました。アサド政権が、シリア北部を治める為、「細菌兵器（サリン）」を使用していた事です。国連決議でも、ロシアの拒否権によって否決されましたが、国連における、大国の拒否権についても、改善されるべき、多くの問題を抱えています。

シリアとレバノンは、歴史的経緯から特別同胞国関係にあり、105万人のシリア難民を、レバノンは受け入

れています。

国旗は１９５８年に、エジプトと、アラブ連合共和国を結成した時、制定された国旗です。アラブ連合はエジプト州とシリア州に分かれ、首都はカイロとなり、実権もすべてエジプトに握られてしまった為、僅か三年で解消した。エジプトの国旗は、二つの星を止め、クライシュ族の鷹に変更、更に１９８４年には、サラデインの鷲に変えています。

シリア国旗の白の部分にある、緑の二つの五綾星は、当初、シリアとエジプトを表していましたが、現在は、シリアとイラクを意味しているそうです。

アゼルバイジャン共和国（１４３号掲載：１９９１年ソ連から独立：７，８１４ドル）

紀元前６世紀から４世紀まで、カフカス・アルバニア王国（バルカン半島のアルバニア共和国とは異なる）がありましたが、その後ペルシャ、アラブ、トルコ、モンゴル、イラン、ロシアなどに支配され、１９１８年、アゼルバイジャン人民共和国として独立しました。その後もソ連との関係が続いていましたが、ソ連崩壊後、アゼルバイジャン共和国として、新たに独立しました。バクー油田をめぐるロシアとの争い、隣国アルメニア、ジョージア、との争いにより、国家は疲弊していました。

最近、カスピ海油田の開発が始まり、活性化、海外からの投資額は、日本がトップとなっています。

国旗は、１９１８年～２０年にアゼルバイジャン民主共和国の国旗を復活させました。横柄三色旗（青：赤：緑）ですが、全体に薄い色を使用しています。赤い中央部分は白抜きで、イスラムの三日月と八綾星が描かれ、八綾星は八つの民族（アゼルバイジャン、オスマン、チャガタイ、タタール、カザフ、キプュチャク、セルジュク、トルクメン）を表し、旗色の青はトルコ系民族カラー、赤はトルコ国旗を意識し、近代化への決意も同時に示し、緑はイスラムを表した国旗となっています。横柄三色で、赤が中央を占める国旗は、アゼルバイジャンの他に、ドイツとアフリカのマラウイの三カ国のみです。

ジョージア（１４３号掲載：３，７１５ドル）

紀元前６世紀、西にコルキス王国、東にイベリア王国として、二つの国が、栄えてきましたが、ローマ帝国から、再三侵略を受けていた為、東西を統一し、グルジアとして統一し、国力を高め、１２世紀にはアゼルバイジャン、アルメニアの一部を支配下に置いた時期もありました。

しかし、モンゴルからの侵攻にあい、国力衰退が始まり、オスマン帝国、ロシア帝国の属国時代を経て、１９９１年の旧ソ連の崩壊により、再度独立を致しました。

国旗は、セントジョージ（クルジア語では聖ゲオルギウス）に由来するもので、白地に赤十字、更に四方の白

い部分にも、赤十字を配置し、この国が、キリスト教国である事を、内外に示した国旗となっています。シンプルな二色、他に類のないデザインなので分かり易い国旗です。

アルメニア共和国（１４３号に記載：１９９１年ソ連から独立：３，５０４ドル）

アルメニアは、北にコーカサス山脈、黒海側にポントス山脈、西側にアンチタウロス山脈、南側にタウロス山脈とサグロス山脈に囲まれた盆地に位置し、平均海抜１５００メートルの高原国です。

最高峰は、ノアの箱舟で有名な、アララト山の５１６５メートル。大きな湖は、ウルミア湖（塩水）と淡水湖のヴァン湖、セヴァン湖があります。アルメニア語族は、インド・ヨーロッパ語族に入ります。

国名は建国時のアラム王に由来すると云われています。人口３００万人の小さな国家ですが、アルメニア人によるキリスト教の国家なので、長年、トルコとイランとの争奪戦に巻き込まれていましたが、１９１８年にアルメニア共和国として独立。自国を守る意味もあり、当時の強国ソ連邦に加わりました。現在でも、ロシアとは輸出入を含め、親密関係にあります。

特に隣国トルコとは、歴史的確執が今でも続いています。オスマン帝国のスルタン・ハミトが、１８９４年から１８９６年にかけ、アルメニア人集落を襲い、５００万人の大虐殺（ジェノサイト）があり、この問題も未解決状態です。

又、東の隣国、アゼルバイジャンとはアゼルバイジャン領内に住むアルメニア系住民、ナゴルノ・カラバフ自治州をめぐる紛争を抱え、対立状態が続いています。主要援助国は、西側の米国、ドイツ、フランスであり、日本も、技術協力援助を行っています。

国旗は、赤：青：オレンジ色の三色旗で、赤はアルメニア人の血の色、青は国土と空、オレンジは小麦とアルメニア人の勇気を表しているそうです。

又、三色は、アルメニア王国の旗色を参考にしたとの説もあります。いずれにしても、ノアの箱舟の子孫を自認する民族でもあり、虹の旗色とも云われています。

アラビア半島

いよいよ、アラビア半島の国々、七か国の説明に入ります。アラビア半島はペルシャ湾、紅海、アラビア海に囲まれた世界最大の半島（面積約３２０万㎢）で、その殆どは砂漠（ナフード：ルジアルハリ：ハジャラ：シリア砂漠）なのです。

しかし昔は、アラビア半島を、三つの地域に、分けて呼んでいました。一つは、現在のサウジアラビアを中心とする砂漠地帯「砂のアラビア」、二つ目は、現在のイ

ラク、ヨルダンを中心とする、「岩のアラビア」、最後はアラビア半島の南端、現在のイエメンの地「幸福のアラビア」なのですが、イエメンの地はかなり様相が変わってきました。

サウジアラビア王国（1932年：20,813ドル）

アラビア半島の80%近くを占める国がサウジアラビア王国で、アラビア語、アラブ文化の発祥地です。預言者ムハマドが誕生した地でもあり、紅海付近にはメッカとメディナの二つの聖地があります。

世界最大級の石油埋蔵量、生産量、および輸出量のエネルギー大国である為、世界三大GDP国（米国、中国、日本）とは輸出入ともに大きく、親密な関係を保っています。

サウジアラビア建国の歴史は意外と浅く、長い間、オスマントルコの領土でしたが、各部族の中から頭角を現わしたサウド家がこの地全域を治める事となりました。国名のサウジアラビアとは「サウド家のアラビア王国」を、意味しています。

その、サウド家はイスラム原理主義とムハマドの教えを重んじるスンニ派なので、偶像崇拝や神秘主義的なものは一切行わない国家ですが、外交政策は柔軟で、アラブ世界の穏健派として、欧米の信頼も厚く、反イスラエル強硬派とは一線を引いてきました。

隣国問題は、イスラム教シーア派のイランとは対立関係にあり、イランが支援する、イエメンの反政府勢力サハレ前政権派との争いを抱えています。

国旗は、大変ユニークなもので、イスラムの伝統色である緑地に、白でイスラム教の聖典「コーラン」の一部から「アッラーの他に神はなく、ムハマド（英語読みはモハメド）はアッラーの使徒である」と書いた国旗となっています。

【ムハマドとシャリフ】

ムハマドはサウジアラビアのメッカ（モッカ）の貧しい家に生まれ、40歳の時に大天使ガブリエルから、「神の啓示」を伝えられ、伝道師となりました。彼の死後は、コーランの教えに反する行為が続出しましたが、ワッファーズ（シャイフと呼ばれている）が再び「イスラム原理主義」の教育に乗り出し、偶像崇拝、魔術、占い、願掛け、墓参りなどを、禁止する、「シャイフの教え」を地道に説きまわりました。彼の子孫も、イスラム学者となり、イスラム教を世界に広めていきました。サウド家は当初より、イスラム教の健全な原理主義を取り入れ、人心を掌握していったのでした。

【サウド家とサウジアラビア】

当時、アラビア半島の砂漠地帯に住む種族は、ベドウインと呼ばれた遊牧民が多く、定住民を襲撃しては、略

奪を繰り返し、アラブ世界では、低い地位に見られていました。

その頃、サウド家は、デルイーヤと云う定住民のオアシスを支配していました。

サウド家の首長である、ムハマド・ビンサウードは、「シャイフ」の理想を受け入れ、他の部族と戦いながら、リヤド一帯の民を治めていました。その後も、東部を治め、オスマン帝国に支配されていた地域も奪還する戦果をあげてきました。この時期を第一次サウド朝（1744年～1818年）と呼び、遊牧民に対抗出来る、初めての定住民政治体制を作りあげつつありました。

しかし、再び、エジプト・オスマン帝国により、攻め落とされましたが、また奪還し、第二次サウド朝（1820年～1889年）を復活させたのでした。

しかしながらサウド家の中で、兄弟間の後継者争いが始まってしまったのです。

そのすきを突き、急成長してきた、ライバルのラシード家に攻撃され、サウド家は惨敗し、1891年に息子他数名と、クエートに敗走、サバーハ家の保護を受けました。

その後、ムハマド・ビンサウードの息子アージスは、サウド朝崩壊の原因を探り、以下三点を改善する事を心に誓ったのです。

サウド家の後継者争いをしない。

遊牧民族を含む他の部族を掌握する。

外交政策に優れる事。

生まれながらに武勇に優れ、知恵を持ったアージスは、遊牧民（ベドウイン）の掌握と巧みな外交力でリアドを奪還し、新たに、初代国王となりました。

更に第一次大戦では、多くのアラブ諸国が、イスラム教のオスマン帝国側に付きましたが、彼は英国と、条約を結び、実利外交を展開しました。その為、多くのイスラム諸国が植民地となりましたが、サウジアラビアはイスラムとアラブ社会の中心的存在となっていったのでした。

アブドウル・アージスは、1953年に他界し、次男のサウードが二代国王に就任（1953～1964）、三代国王は、ファイサル（1964～1975）、四代国王ハリード（1975年～1982年）五代国王ファハド（1982～2005）六代国王アブヴーラ（2005～2015年、そして七代目国王としてサルマン国王が現在の国王となっています。

初代国王をムハマド・ビンサウードとせず、アブドウル・アージスとするのは、現在まで、国王、皇太子、大臣、州知事、など、殆んどの要職が、アージスの血族で握られている為でもあります。

今年（2017年11月）サルマン国王の息子ムハマド皇太子が、十一名の王子を、汚職容疑で、拘束しました。

又内部抗争が始まるのか、それとも、王族維持の為のフェイントなのか、中東情勢厳しい中、注視していかねばなりません。（拘束した場所は、世界の最高級ホテルの一つであるリッツカールトンホテルだそうですから、しかも賄賂金を納めて、開放したそうです）

クウエート国（１９６１年英国自治領から独立：４３，２００ドル）

クウエートは、アラビア半島の付け根にあり、東はペルシャ湾、北はイラク、南はサウジアラビアに接しています。

砂漠の中にある、四国と同じ位小さい国家ですが、人口は４２８万人、イスラム教のアラブ人国家です。

１８９９年には、英国の保護国となりましたが、１９３８年に世界屈指の石油埋蔵量が発見され、１９６１年に英国から独立しました。

政治体制は、一応、議会主義をとっていますが、サウド家をかくまったサバーハ家が独立当初から実権を握り、首相、外相などの要職はサバーハ家及び親サバーハとなっています。

サウジアラビアとの違いは、国民会議では、しばしば反政府勢力が躍進したり、国会が解散、総選挙が実施されたりしていますが、現在は、一応平穏な状態となっています。

クウエートの国旗は汎アラブ四色の緑：白：赤の横三色旗に旗竿側から三角形ではなく、黒い台形が描かれています。

黒、緑、白、赤の四色は汎アラブ色としての一体感を表していますが、クウエートの歴代王朝を旗色で表しているそうです。アッバース朝（黒）ファーテイマ朝（緑）ウマイヤ朝（白）ムハンマド朝（赤）だそうです。

台形のデザインはクウエートだけですから、分かり易いと思います。因みに、汎アラブ四色の旗竿から四角がアルブ首長国連邦で、三角はヨルダンとパレスチナの国旗です。

バーレーン王国（１４３号に記載済み：１９７１年２４，１８３ドル）

バーレーンは４０近くの島々から出来ている立憲民主制島国ですが、ハリーファ家の王族国家となっています。ハリーファ家はサウジアラビアのサウード家やクウエートのサバーバ家と同じアナイザ族の出身。

古代バビロニア時代から貿易の中継地として栄えてきました。また、中東では、珍しく産油国ではない為、石油精製、アルミ精錬、などの工業化や、中東の金融センターとしての機能を果たしています。

バーレーン国旗の経緯は、イスラム教シーア派である、ハワーリジュ派伝統色の赤一色国旗でしたが、１９２０

年に他と差別する事から三方を白で縁取りのある国旗、１９３３年には、赤旗に旗竿側から白い帯をいれた国旗に変更、又、その赤と白の境目を、九本のジグザグ模様としました。

現在は、五本のジグザグ模様に変更しましたが、５本の意味はイスラム教徒が行う五つの行動（信仰告白：礼拝をする事：喜捨、即ち貧しい人に施す事：断食：をする事：巡礼をする事）を意味しているそうです。尚、この国旗は、カタール国旗のジグザグ模様と類似していますが、両国の関係は不仲となっています。

カタール国（１９７１年：８５，５５０ドル）

カタールの国家財政の九割以上が石油収入に依存していますが、人口が１７３万人と少ない為、国民一人当たりのＧＤＰはスイスを凌いでいます。（労働力は他国の季節労働者に依存。）

カタール外交が、イランに友好的である事から、サウジアラビアは国交を断絶、西側諸国も経済的に制裁を開始しています。この国でも、サウジとイランの覇権争いが、国民生活に不安を与えています。

カタールの国旗とバーレーンの国旗は、新撰組の袖の様にギザギザ模様なので分かり易い国旗です。カタールの色はえび茶色、九つのジグザグ模様、横長（１１対２８）に対して、バーレーンは赤色、五つのジグザグ、国旗の比率（３対５）となっています。但し、オリンピックや、国連など国際行事には２対３の比率で統一されます。

アラブ首長国連邦（１９７１年英国から独立：４３，０４９ドル）

歴史は紀元前３千年に遡ると云われ、オスマン帝国、ポルトガル、オランダの支配を受け、１７世紀に英国がインド貿易に於ける、中継拠点である事から保護領と致しました。その間も、当地に移り住んだアラブ人種族は独立の為の努力を続け、１９７１年、アブダビ、ドバイを中心とする六首長国が参加し、アラブ首長国連邦を結成しました。政治体制は現在七首長国（アブダビ：ドバイ：シャルジャ：ラスアルハイマ：フジャイラ：アジュマン：ウンムアルカイワイン）による連邦制で、現在の大統領はアブダビ首長、首相はドバイ首長となっています。

ドバイは、物流拠点とリゾート開発に注力し、中東最大のショッピングセンターや、高級ホテルの建設を続けています。昨年の一人当たりのＧＤＰは、オイル市場の下落もあり、３７，６２２ドルと下落しています。

国旗は上部から、緑：白：黒の横三色に縦柄の赤が加わった、いわゆる汎アフリカ四色旗。四色の意味は、赤が、アラブ諸国との血縁及び、シーア派一派の、ハワー

リジュ派の伝統色と、聖戦で流された血の色。緑は、イスラム王朝のファーテイマ朝と肥沃な国土の色。白はウマイヤ朝と清潔を表す色。黒はアッパース朝と石油資源とイスラム勝利の色と云われています。

オマーン国（1951年英国保護領から独立：21，929ドル）

16世紀～17世紀にはポルトガルの支配をうけていましたが、1650年にイマーム・ヤールビ王朝が、ポルトガル人を追放しました。その後、1749年にサイード王朝となりますが、1891年には、英国の保護領となります。1970年に宮廷革命により、現在のカブース王朝の君主制へと変わりました。

シンドバッドが登場する、アラビアンナイトのゆかりの地と云った方が分かり易いかもしれません。シバの女王が、ソロモン大王に貢物をした、香料樹脂の乳香の世界的産地（特にオマーン産のライトグリーンは高価）としても有名な地域です。

経済は、国内経済のグローバル化、民営化を促進。石油・ガスに掛かる経済特区の設置など開かれた経済政策を導入、イスラム社会の中では、最も開放的な国の一つと云われています。

国旗は、白：赤：緑の横三色ですが、真ん中の赤が、旗竿側の縦柄の赤と一体になっている為、アルファベットのTを横に倒したデザインとなり、他国にはない国旗になっています。国章は旗竿側上部に伝統的短剣カンジャルに、二本の剣を、開成高校の記章の様にクロスさせ、その中央に装飾付き馬具を配したものです。

イエメン共和国（1918年オスマントルコからイマーム王国として独立し、1962年革命によりイエメン・アラブ共和国となる：1，300ドル）

イエメン共和国は紀元前10世紀ごろ、シバ王国を形成していました。その頃は月神を最高神とする、祭政一致の国家体制で、経済的にも、「海のシルクロードの中継地」として香料を支配する「アラビアのフェリックス（幸福のアラビア）」と呼ばれたように、大変栄えていました。近年は、イスラム過激派との内戦や、サウジ寄りのハデイー政権とサレハ前政権との内戦状態で、経済状況は悪化の一途をたどっています。

「幸福のアラビア」と呼ばれていたイエメンが、今や、幼児達が、栄養失調で次々と亡くなっていく「地獄のイエメン」に変わりつつあります。

国旗が、横柄、赤：白：黒の、汎アラブ三色で、白は輝ける未来を、黒は過去の暗黒専制時代を、赤は独立への情熱を意味しているそうですが、未だに混乱が続いている状態です。

【参考：シバの女王】

シバ王国の、「シバの女王」が貢物をもって、エルサレムのソロモン王を訪ね、その地でソロモン王の子を宿します。帰路の途中にエチオピアに寄り、男の子を出産しました。その子がエチオピア建国の祖、メネリク一世だと云われています。

【番外：パレスチナ1988年独立宣言】

パレスチナについては、対イスラエル問題として説明をしていますが、パレスチナ内部でも、パレスチナ自治政府主流派のファタハ（ヨルダン川西岸を支配）と、自治区ガザを実質的に支配しているハマスとが、分裂状態となっています。

ファタハは1950年後半に故アラファト自治政府議長が創設。イスラエルとの対話による共存をめざしました（現在はアッパス議長）。ハマスは1987年にパレスチナのハニヤ最高幹部が率いる反イスラエル勢力で2007年にガザ地区を武力制圧しています。即ち、パレスチナ自治政府には、ファタハとハマスがそれぞれの軍事部門を保有している為、イスラエルとファタハとの和平対話も途絶えています。

2017年に入り、自治政府が、ガザ地区への財政支出を大幅に削減、ハマスを支援していたカタールに対する、米国、エジプト、サウジアラビアからの断交により、十年ぶりの統一政府への兆しが見え始めてきました。

イスラエルによる封鎖政策が厳しさを増している状況下、「民族内部で、争っている場合ではない」とアラブ諸国、特にエジプトが仲介役を果たしています。

パレスチナ人の祖先も、ユダヤ人の祖先もこの地に住んでいた訳ですが、いずれも大国の強権により、国際問題となっています。しかし、全ての国際問題は、常識では判断出来ない問題が、国際問題なので、結局は、理屈ではなく、この様な解決方法しか無いのかも知れません。

尚、パレスチナの国旗は付録には載っていませんが、隣国ヨルダンの国旗の赤三角の中に描かれている、「白い七綾星」がない国旗なので、ヨルダン国旗をご参考にして下さい。

【宗教対立と人種対立】

宗教の対立が、長い期間、これ程までに悲惨な状況を生みだしている事実を、地球上、最も知恵のある人類が「無策」である事は何故なのでしょうか？

私達日本人は、信仰心は薄いものの、90％近くが仏教徒で、ほぼ単一民族、そして海に囲まれた島国民族としては、考え及ばない問題なのかもしれません。

しかし、今回、中東地区の国旗研究から学んだ事は、「イスラエルとパレスチナ」「イスラム国とシリア」「カタールとアラブ諸国」「トルコとアルメニア」「キプロスとトルコ」「クルド人問題」「イランとサウジアラビア」「サ

ウジアラビアとイエメン」「バーレーンとカタール」などの深刻な紛争問題を抱えている事が分かりました。

その原因の多くは人種、宗教問題で、更に、その裏には、大国のパワーが、何らかの形で存在している事が分かります。現在の中東情勢の中の大国とは、ロシアと米国なのです。両国のパワーを比べると、経済力では、米国がナンバー1に対してロシアは12番目、即ちそのパワーの背景は軍事力が大きな影響力を発揮している事も分かるはずです。米国は軍事費が6110億ドル、でトップ。ロシアは第三位の692億ドル、因みに二位は中国の2150億ドルです。（4位はサウジアラビア637億ドル：5位はインド559億ドル：6位はフランス557億ドル：7位はイギリス483億ドル：そして日本は461億ドルの8位に入っています。9位ドイツ：10位韓国と続きます）

参考までに、北朝鮮の公表は40億ドルで、ほぼフィリピン並みです。

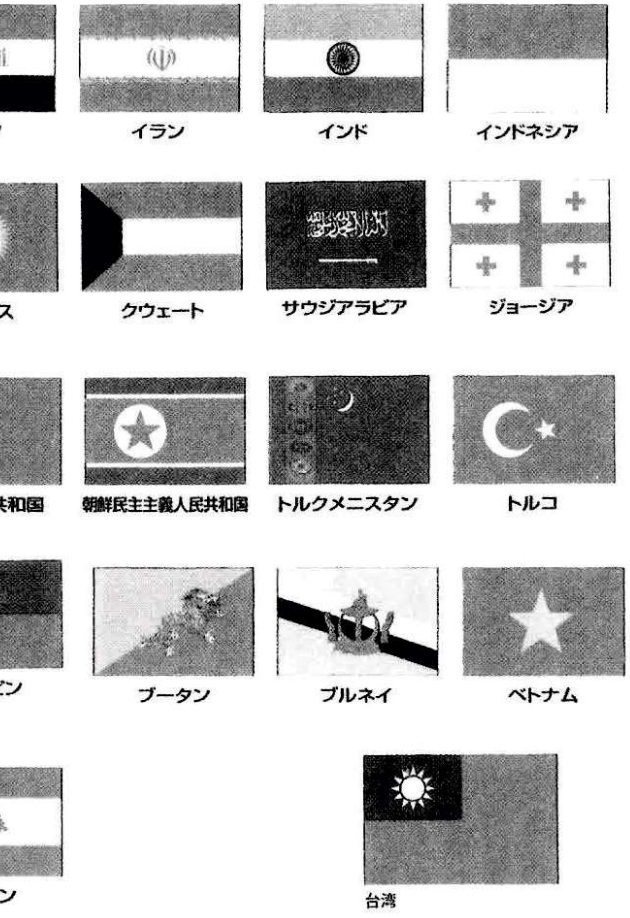
しかしながら、国際問題とは、すべて常識で解決出来ない問題が国際問題なので、どの様な事態になっても対応出来る準備と心構えは必要です。

最近のニュースで「今までに経験した事がない天候や、出来事」が多発している事を考えると、「ちーがーうーだーろー」では済まされないのではないでしょうか。

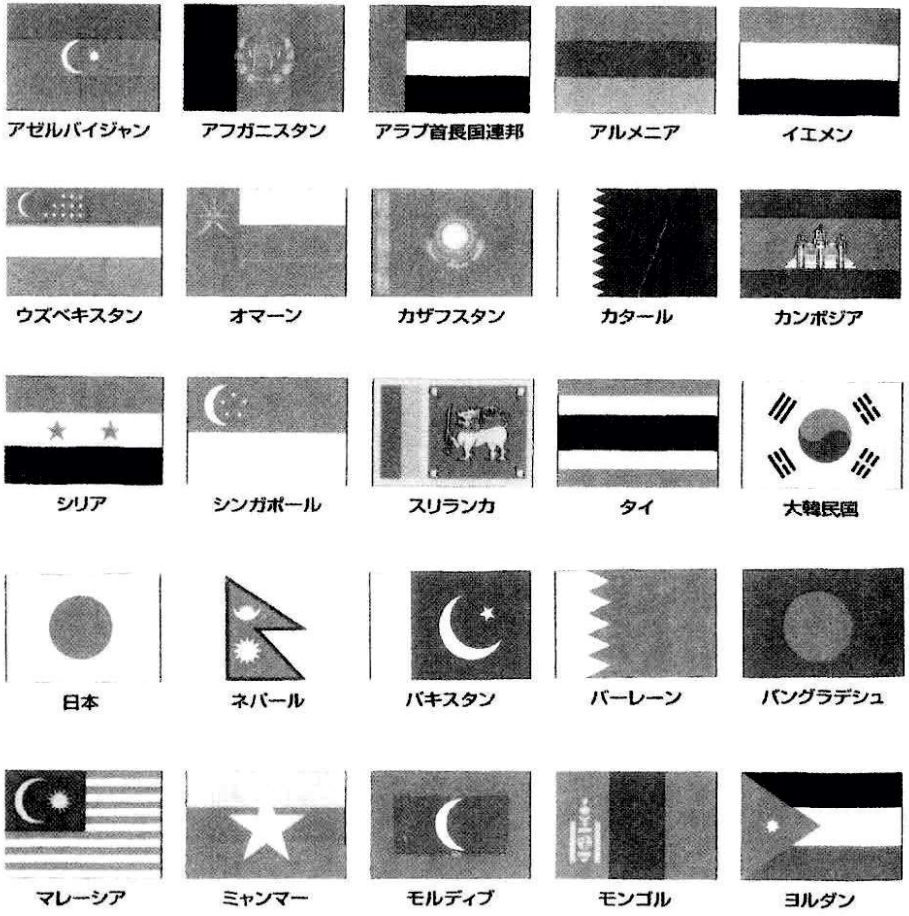
つづく。

【参考文献】

イスラエルを知る為の60章　立川良司　明石書店
中東諸国の社会問題　酒井啓子　アジア経済研究所
西洋の中核としての中東　余部福三　第三書館
オスマン帝国は何故崩壊したか　新井政美　青土社
ペルシャ帝国　ピエール・ブリアン　創元社
知っておきたい中東1Ⅱ　歴史教育協議会　青木書店
イラクの歴史　チャールズ・トリップ　訳：大野元裕　明石書店
サウジアラビアを知る為の63章　中村　覚　明石書店
中央アジアを知る為の60章　宇山　智彦　明石書店
中近東100のキーワード　藪内　宏　慈学社
アルメニアを知る為の65章　メラニア・バブダサリャン　訳：中島　偉晴　明石書店


イスラエル
イラク
イラン
インド
インドネシア
キプロス
キルギス
クウェート
サウジアラビア
ジョージア
タジキスタン
中華人民共和国
朝鮮民主主義人民共和国
トルクメニスタン
トルコ
東ティモール
フィリピン
ブータン
ブルネイ
ベトナム
ラオス
レバノン
台湾

アジア諸国の国旗


アゼルバイジャン
アフガニスタン
アラブ首長国連邦
アルメニア
イエメン
ウズベキスタン
オマーン
カザフスタン
カタール
カンボジア
シリア
シンガポール
スリランカ
タイ
大韓民国
日本
ネパール
パキスタン
バーレーン
バングラデシュ
マレーシア
ミャンマー
モルディブ
モンゴル
ヨルダン

大頭龍神社と抜里の物語（一）

横山正義

抜里とは、「東海道五十三次箱根八里は馬でも越せぬ大井川」で知られる大井川の中流にある集落です。

抜里は大井川の鵜山七曲（ななまがり）という名所の近くで、山は鵜が水に浮いているように見える場所です。フィリピンプレートの山が大陸プレートに沈み込む場所と考えられ、大井川が褶曲しています。そして摩擦熱のためか、温泉が湧き出て、抜里の大井川の対岸に川根温泉があります。

鵜山七曲は十一局あるのですが、そのひとつ抜里は蛇くずれで、川の曲がりがなくなり直線で、河川が平地となり居住地で、茶畑が広がっています。次の曲がりは家山と言う地名で大井川中流の大きな町で、古代の川は池となっています。

私の子供の頃、昭和二十年ごろのお話です。

常には大井川の水量が少ないので、筏は出せませんので、大雨が降ると、筏を出します。従って、梅雨のときなどに多く筏が出されました。筏は二間木（にけんぼく）、八本を並列に組んで、これを二枚から四枚つなぎで作られます。結わえる蔓は蔓籠という地名の場所でつくられていました。

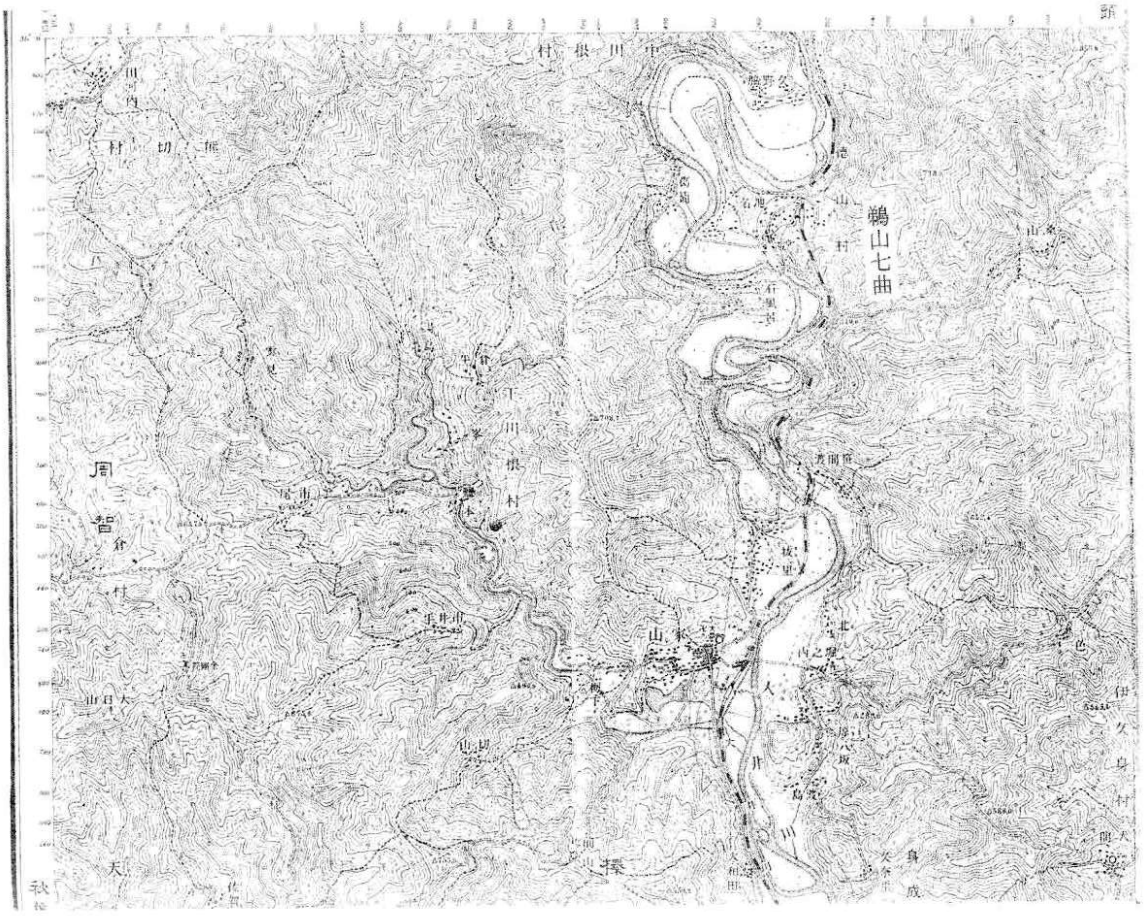
雨にむせぶ大井川が蛇のように曲がるところに、筏を操りながら筏師は危険な難所を、筏の前、後に二人で舵を操って三里ほどの行程を島田の木場まで輸送していたのです。筏師の蓑、蓑笠姿を思いだします。

抜里には江戸時代に鍛冶屋村という集落がありました。そして現在、金鋳土（かないど）、金鋳土街道、赤島などと言う地名が使われています。砂鉄が採集されたのでしょう。

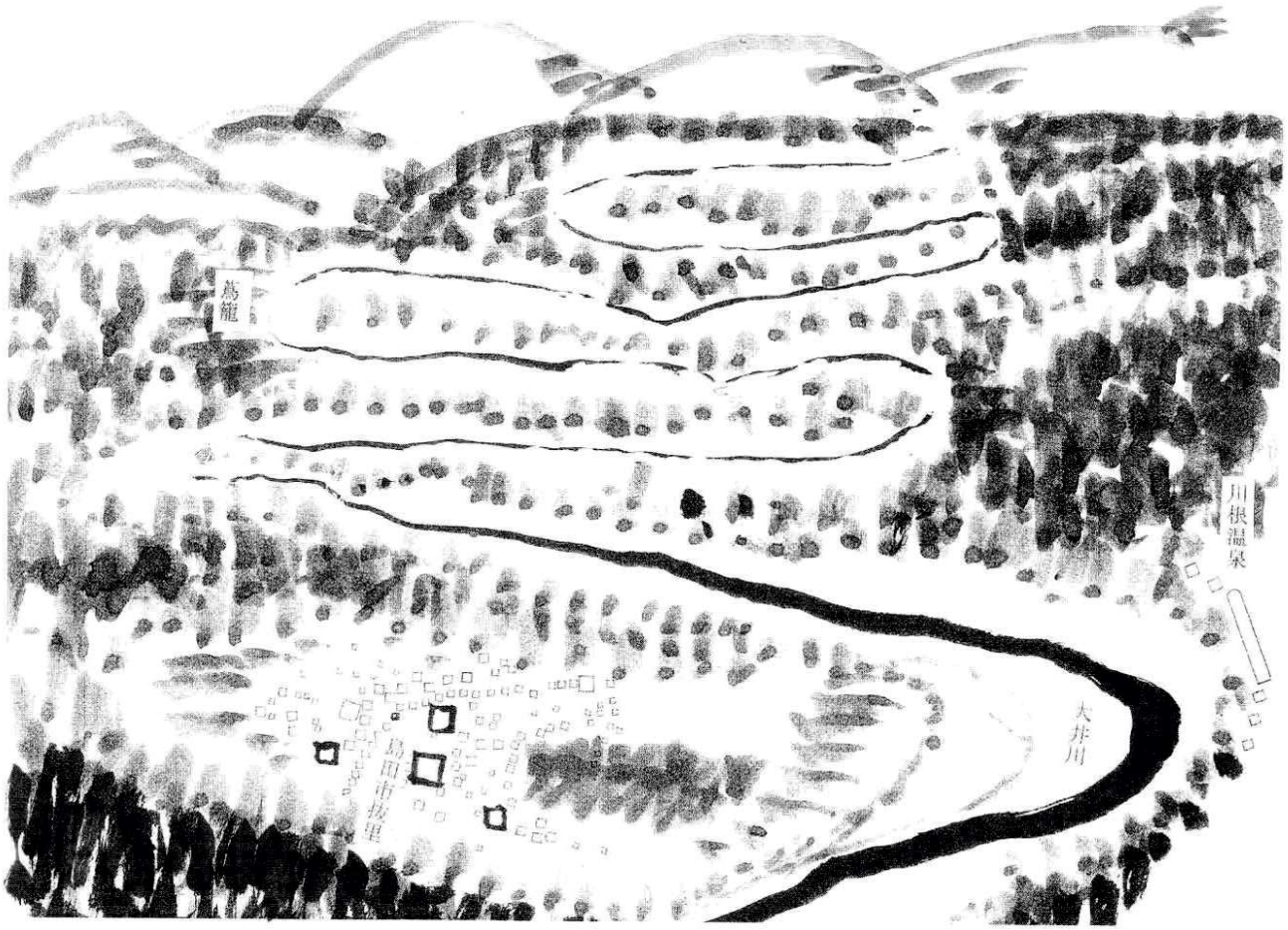
占の成務天皇の御世、抜里で疫病がはやり、住民は難儀しました。すると惣神・饒（にぎ）速日命（大物主命）が現れ、「西の方角に私の子孫物部氏で、駿河国造（するがのくにのみやっこ）を勤め、鉄の技術者でもある片樫石命が私を奉ってくれている。それは大頭龍権現（現在の菊川市加茂）、と言います。皆様が奉ってくだされば疫病は消えるでしょう」と、伝言し立ち去っていきました。

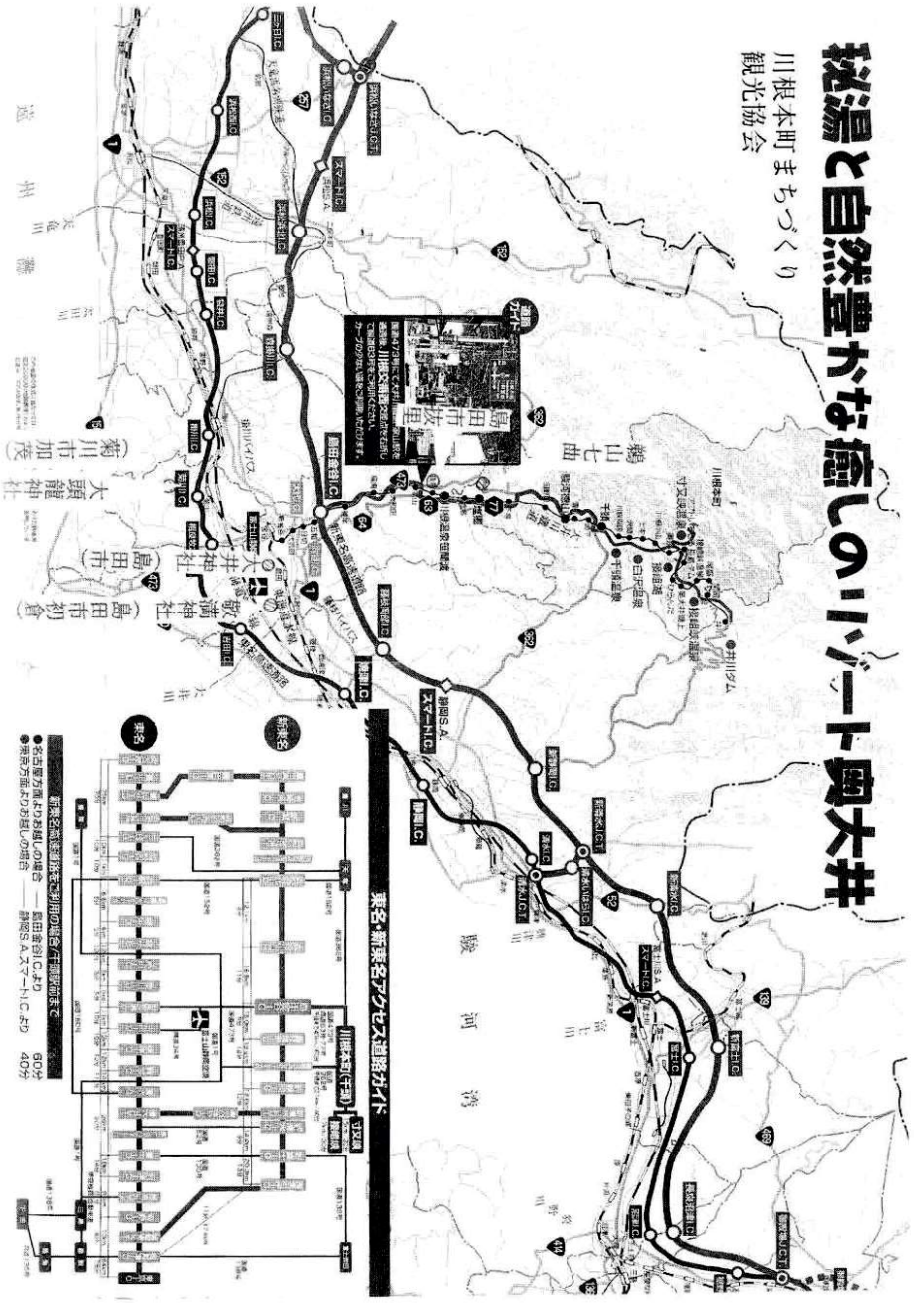
村々の皆様が大頭龍権現を奉ったところ、疫病は収まっていきました。

現在でも、小さな社ですが、大頭龍を九十七歳の女性によって奉られています。



大井川中流の抜里




秋葉と自然豊かな癒しのニジゲート周大井
川根本町まちづくり観光協会
東名・新東名アクセス道路ガイド
新東名高速道路(仮称)利用の場合
静岡県方面からお越しの場合
静岡SAスマートICより 40分
静岡方面からお越しの場合
島田金谷IC より 60分
静岡県方面からお越しの場合
静岡SAスマートICより 40分
静岡県

一　第二次桂内閣発足

西園寺内閣総辞職の一〇日後に、桂首相は蔵相兼任、内相平田東助、文相小松原英太郎、農商相大浦兼武、逓相後藤新平と、山県系の貴族議員や官僚出身者を配置、陸海相は寺内、斎藤を留任させた。法相に貴族院から岡部長職（研究会元岸和田藩主）、外相は小村寿太郎（駐英大使帰朝まで陸相兼任）と、前内閣とは一変し、衆議院や政党からは一人として入閣せず、議会に与党を有しない超然内閣であった。

内閣の内政課題は、突如西園寺内閣が倒れた要因が、甘い社会主義者対策にあっただけに、社会主義思想者の取締りであった。桂・平田・岡部は、「アメ」と「ムチ」を用意して、後日徹底した撲滅策を執るのである。

外交面では韓国問題であった。伊藤統監や曾禰荒助（長州閥伊藤内閣法、農商、蔵、外相歴任）副統監は、現地韓国人の悪感情や、併合すればわが国に莫大な財政負担が生じることから、保護国化を強固に主張した。一方桂・山県らはわが国との併合を目指しており、出先統監府と対立していた。この対立は今後の大陸政策の相違でもあった。朝鮮を緩衝（保護国）とすることで、満州への侵略は行わず、現状のままわが国の商圏に止めるか、あるいは韓国を領土（併合）とすることにより、次には接している満州を、わが国の領土にするかの違いであった。

伊藤や曾禰は、自治育成路線（近代的司法制度、銀行など金融機関の設立、教育の振興、殖産興業）により、韓国の近代国家化を目指した。併合などは論外で、大半の韓国人は、異国人である日本人の主導に強い反感を持ち、絶えず厳しい目を向けていたのである。博文の着任後も、大韓帝国（一八九七年国号改称）皇帝を名乗った高宗のハーグ密使事件（ハーグ万国平和会議で、高宗が日本との保護条約の無効を列強各国に訴えたが、正式な代表でないとして拒絶された事件。この責任により退位）や、抗日義兵運動に解散させられた軍人が加わるなど、日本に対する根強い抵抗は続き、統監府は苦労が絶えなかった。

議会対策では、衆議院に基盤を持たないだけに、原前内相によって弱体化された貴族院山県系の早急な修復が、何よりも優先させねばならないことであった。

二　貴族院山県派の攻勢

千家尊福は七月中旬、司法大臣職を後任の岡部法相に引き継ぎした後、貴族院木曜会の会務にようやく専念できることになった。

明治二七年一月から南北がいがみ合い「難治の県」といわれた埼玉県知事を三年三か月、「幕臣が影響力」を残し農工業の発展が著しい大県静岡県知事を一年三

か月務め、初の政党内閣である隈板内閣成立により自ら辞任した。その四か月後の三一年一一月から日露戦争をはさんで一〇年という長期間、地方官の最高位東京府知事を務め上げた。そして西園寺内閣では、社会主義者の騒動に直面した激動の四か月間を、司法大臣としてその終結に奔走した。まさに休まる時は、この一五年間なかった。

この間木曜会を率いる最高実力者であったが、地方行政の責任者たる知事の執務を優先させた。威張り散らしたり、金集めに熱中し内務省の顔色ばかり気にする知事が多い中で、正面から堂々と内務省を始め各大臣と渡り合う尊福は、どこの地でも議会、職員、地元民に歓迎された。内閣が交代する度に知事も変わることが多かったが、尊福は例外であった。貴族院木曜会の代表者という立場と、男爵という身分も背景にあったが、なによりも教育の拡充、地場産業の振興に力を注ぎ、常に地元第一主義を貫き、住民に慕われたことが影響した。

それに金銭に淡泊であったことも、政府の誰にでも渡り合える要因であった。政治家、官僚、党員が一様に知事就任を熱望したのは、内務省の一官僚でありながら、県内では最高権力者であり、職務は職員に任せ、本人は内務省に顔を向けておればすむという、仕事は楽で、しかも満たされた境遇であった。しかも報酬は高額（年俸二千円）であるとともに、機密費（遊女屋などのからの徴収税は不浄金として予算に計上されず知事の機密費とされた）という年俸以上の多額の収入が、期待できたのである。

千家尊福は、知事としての年俸しか受け取らなかった。機密費という不浄な出所の金を受け取ることは、皇室に次ぐ名門出雲国造の矜持が許さなかった。知事としての年俸以外の金などには目もくれなかった。貴族院木曜会を統率するためには、多額の政治資金が必要とされたにもかかわらず、金を集めようとはしなかったのである。

華族の中でも特に男爵は、名誉はあっても大半の者は余力なく、貧乏生活を強いられた。だからこそ、政治家になるというより、議員の年俸を切望し、必死で貴族院議員になろうとした。木曜会は男爵たちのために、選挙を取り仕切り、団結を図ったのである。

桂首相はまず貴族院研究会から、前農商相堀田正養と対立する岡部長職を入閣させ、一気に堀田を孤立させ、堀田派の崩壊に動いたのである。

山県・桂の執拗な圧迫により堀田は窮地に陥り、何度も原敬を相談のため訪問していたことが、『原敬日記』に出てくる。それほど山県系の圧迫は厳しく、堀田は追い込まれ、結局創設者であったが、研究会を除名される。

尊福も堀田同様、軍人らの加入禁止や脱退の勧誘など、

嫌がらせや弱体化など締め付けを受けるものの、木曜会の最高責任者として、泰然として男爵層の取りまとめにあたり、山県系の侵食を防いだのである。

堀田と千家を比較して、原は『日記』の中で

「堀田は小智あれども大局を通観するの力に乏しく、故に判然たる態度を取るの決心なきが如し。加ふるに山県系に対し種々の弱点あらんも知るべかざるが故に、将来果して如何なる行動をなすか殆んど察知し難し。此くの如き点に関しては、堀田は千家に及ばざる事遠きに似たり。」（四二年四月一一日）

と記し、尊福の洞察力や政治情勢の的確な見通しを、高く評価したのであった。

四一年一二月から第二五回帝国議会が開会された。当時貴族院では抽選で部属をきめていたが、尊福は第九部に属することになった。部長に侯爵徳川頼倫が、理事には尊福が選任され、その影響力の大きさを示した。

三　大逆事件

開明派である西園寺・原・千家の社会主義者対策の甘さを批判し成立した内閣だけに、桂首相・平田内相・岡部法相の取締りは厳しく、弾圧は徹底したものだった。事前に十分な準備をしたうえで、社会主義者たちを追い詰めて根絶を狙った。その為に「アメ」も用意して、世論の反発を抑えることに腐心した。

四一年八月「社会主義者の実情調査」を府県知事に命じた。これは新内閣発足とともに、取締り方針を一変させ、桂内閣の対策を全国に指示・徹底する為であった。（『時事新報』一三日）

一〇月には平田内相の作成した『戊戌詔書』が発布された。日露戦争後の個人主義・享楽的風潮をいましめ、勤倹貯蓄・産業奨励を求める、国民の心構えを論したものであった。翌日には地方官会議を開催し、首相自ら出席し、地方改良運動を推進し、貯蓄奨励を農民に強く勧めることを指示したのである。その裏には社会主義者達の活動を抑え込むことを狙ったものであった。

四二年三月にはこれまでの「新聞紙条例」に代わる「新聞紙法」を制定し、言論・表現の自由を制限した。特に規制強化の対象は、社会主義系新聞であった。

こうした社会主義者への圧力を強めていた最中、四三年五月「天皇暗殺計画」なる事件（大逆事件）が発覚する。この事件は長野県で五名が爆発物製造の嫌疑で連行されたことから始まった。六月には事件の指導者として幸徳秋水、菅野スガが逮捕された。この時点で東京地方裁判所検事正は、これらの逮捕で事件は終結したことを公表した。これでこの事件は終わる筈であった。

しかし桂内閣は社会主義や無政府主義者達の撲滅好機

ととらえ、事件と関係なく、これら思想者と目された者を、根こそぎ逮捕することに切り替えたのである。以降岡山、和歌山、熊本、大阪、兵庫など全国に及び、八月までに数百名を検挙した。逮捕は大逆罪にかこつけ、社会主義者の根絶を狙ったものであった。

取り調べの結果、幸徳ら二六名が刑法七三条の大逆罪に問われた。実際に計画らしきものを進めたのは菅野ら四名であったにもかかわらず、最高指導者幸徳を始め主要な人物を大逆罪として送検したのである。

一二月から大審院で始まった公判は、非公開かつ一人の証人喚問も許さない徹底した秘密裁判であり、僅か一か月で二四人を死刑、二名を有期刑とする判決を下したのである。しかしどうしても大逆罪に問うことが難しい一二名は、天皇特赦という形で、死刑から無期懲役に減刑せざるを得なかった。そして判決から一週間後には、幸徳、菅野をはじめ一二名は処刑された。

裁判結果に関わらず、当時の有力な政治家は、この事件の真相を掴んでいた。

原前内務相は『日記』の中で、

「余は之を根絶する事は到底絶望すべきものな事を看破したるに因り、むしろ集てこれを監視するを得策と考えたるに因り、いたずらに圧迫して窮鼠猫を噛むの境遇に至らしめず、社会の一隅に蟄息せしむるの方針を取りたるに、彼等（山県等）は之を手緩しとして攻撃せしも、今果たして如何ぞや」（四三年七月一三日）

「徒に圧迫するのみにては却って此くの如き極端者を生ずる虞あるべし」（四三年一一月一〇日）

「公然社会政策を唱ふる如き者は之を其儘に置き無政府主義と社会主義と公公然区別する事必要なり」（四三年一二月桂首相を訪問して面談）

「この裁判に関し、四名は不得已者なるも、他は決して大不敬の者にては之なかりしが如しと云へり」（四四年二月一一日）

など、時には桂首相に会い、この事件に対する自分の考えるところを述べている。

千家尊福も原と同じ考えであったであろう。「出雲国造家が滅んでも、皇室を第一にお守りする」という、自己の信念を抑え込んでまでも、法律に則り、忠実に法律の下で、捜査、裁判を進めていった司法大臣在職中のことが思い出される。しかし桂内閣は、社会主義者というだけで、弾圧し、最後には、原が記述しているように、証拠もなく無罪と思われる者までも、大逆罪という罪を着せ、死罪に追い込んだことに、前司法大臣として許せないもの感じたことであろう。

徳富蘇峰の弟蘆花は、処刑後一高の学生を前に「謀反論」と題して講演をしている。幸徳らの思想・行動を理解し、政府に対し「もっと社会主義思想に寛容たれ」と

論じた。

しかしこの事件は、西園寺内閣を倒すために、山県が毒殺工作を行った時から、必然的に引き起こされる事件でもあった。徹底した弾圧こそ、山県や桂にとっては西園寺内閣を倒した正当性を、示すことができたからである。

強引な社会主義者の弾圧や、大逆事件のむやみな拡大の批判に対し、これを和らげる施策が執られた。

まず死刑執行直後の紀元節に天皇は「紀元節の大詔」を出し、窮民への施薬救療（困窮者には無料で薬や医療を施す）を以て、済生の道を広めることを命じた。桂内閣は、早速三井、岩崎・大倉や各地の富豪などから、寄付を募り、恩賜財団済生会を創設し、各地に病院等を作り、天皇の大詔を実現させた。しかし「実際に困窮している民衆のためには、役に立ってくれない」と、当時の新聞では皮肉られた。

また労働者からの要求が強く長年の課題であった、若年者の過酷な労働条件を禁止する工場法の制定を試みた。これには資本家や小規模工場主の反対が強く、常時一五人以上の使用に限定することで、一二歳未満の就業を禁止した。しかし一五歳未満と女子の一二時間超の就業禁止については、今後一五年間は二時間の延長を認めるなど、抜け道が多く実効性は薄いものであった。

社会主義者の弾圧と、強権的な大逆事件は、韓国併合という桂内閣の外政課題と同時に進行した。併合批判を逸らすためにも、これら一連の事件は利用されたのであった。

四　混乱する東京電鉄

社会主義者達が付け入るもう一つの心配は、東京電鉄会社の混乱と、電車賃引上げ問題であった。特に運賃値上げについては東京市民の反対が強く、社会主義者たちはこの不満を大衆への浸透に利用して、組織拡大に結び付けようとした。

東京市内の路面電車開通は、他の都市と比べて大幅に遅れた。明治二八年京都で電気鉄道が開通した後、名古屋、川崎、小田原、大分、三重などに先を越されていた。帝都であるにもかかわらず、馬車鉄道のままであった。鉄道が明治二二年に東京―神戸間の東海道本線が、二四年には東京―青森間がすでに開通していたにもかかわらず、これまでと同様、二頭の馬が客車を曳いていたのである。京都に遅れること八年、三六年になってやっと品川―新橋間が営業を開始した。

東京で路面電車の開始・普及が遅れたのは、利権を巡り多くの会社で出願競争が起こり、政府が調整出来なかったことが最大の原因であった。馬車で運行していた

東京馬車鉄道（改進党大隈系牟田口元学）、東京電気鉄道（大物実業家日本製粉創業者雨宮敬次郎）、東京電車鉄道（三井系藤原雷太）、東京自動鉄道（政友会星系利光鶴松）、川崎電気鉄道（三菱郵船系）の五社が乱立、一方東京市においても市営化の構想を持っていたため、なかなか認可することが出来なかったのである。

この五社から電気鉄道、電車鉄道、自動鉄道の三社がまず合併し、東京市街鉄道（街鉄）となった。馬車鉄道は東京電車鉄道（電車、東電、電鉄等と言われた）に、川崎電気鉄道は東京電気鉄道（外濠線）に改称した。三社に集約されたことで、ようやく路面電車の認可が下り、営業を開始、各社路線を伸長させていった。

しかし市民にとっては、極めて、不便であった。運賃は三銭同一であるが、三社間の連絡もなく、駅は別々で使い勝手が悪かった。三社の資本力が違うことから、電車も異なり、延長される路線も統一性がなく、辺鄙なところには造らず、各社繁華街に集中した。一部は国有鉄道との競合もでてきた。東京市民はこの利便の悪さに我慢が出来ず、三社合併による民営化か、市営化による統合を望んだのである。また運賃の値上げは一銭でも反対は強く、値上げを発表すれば、すぐに反対運動がおこり、社会主義者達はこの不満を、組織拡大に取り込もうとした。

こうした状況から、当時の千家東京府知事と実業界の指導者渋沢栄一両名の勧めで、三社の合併機運がおこり、三九年三社は合併、東京鉄道株式会社が誕生した。統合による利便性の向上から、運賃も四銭に値上げすることが認められた。しかしもともと五社が認可を競い、各社には政治家・議員や財閥（三井、三菱）が利権を求め設立した経緯があり、しかも運賃値上げでは、市民の不満は強く、不乗同盟を組織し、反対運動をおこすなど、社内外で問題を抱えての発足であった。

新会社の役員や従業員はまったく統一性がなく、内部抗争を繰り広げた。組合も旧会社のままであった。

四一年一二月の株主総会では、『国民新聞』は「市民の怨府となり了したる　東鉄株主総会大混乱に陥る　凄然！鉄拳飛び仕込杖は閃く」（一二〇日）の大見出しで、議場で殴り合いや怒号の声が飛び交う混乱に陥り、警官六〇名が出動した様子を報道した。

こうした東京鉄道（社長牟田口元学）の混乱と、市民の根深い反感から、政府は東京市営化を決断する。しかしまずは社内を一本化できる大物社長の就任が必要であった。社長候補には実業界の経営者など多くの候補が挙がったが、旧五社の発起人や政治家、東京府・市の議会、役員や従業員、株主そして利用する市民を納得させる人物として、前内相原の後押し（『日記』四月一日）もあり、前司法大臣で、一〇年間東京府知事として市街電車行政

に関与した千家尊福が最終候補に残った。彼ならこれまでの政治家や東京府知事としての長年の実績、人望いずれをとっても文句の出ない人物であった。

三月下旬取締役会にて取締役に選任され、社長に互選された。

五　東京電鉄社長就任

電鉄社長に就いた尊福は、初めての民間会社の経営責任者となり、以前よりさらに多忙となった。実業界での経験は皆無であったが、何事も自ら責任を持つ性格から、これまでとは異なる世界で、精力的に行動した。

千家尊福という大物社長が就任してから、五社から三社合併を経て、三九年に誕生した東京鉄道の社内は、旧会社意識の高かった役員がまず新社長を中心に纏まってきた。役員たちはこれまで、仕事は部下任せにし、旧会社役員間の権力争いに執着してきたが、尊福が率先して対外活動を行うのをみて、次第に一体化し始めたのである。新社長は懸念のある案件や、多く政治家から持ち込まれる利権がらみの事業については、逃げることなく自ら出向き、直接面談し、交渉に臨んだのである。

その一端が、貴族院議員であった『田健次郎日記』に詳細に記述されている。当時田は英国の資本を導入して鬼怒川水力発電の建設に力を入れていた。この会社は英国投資家が五百万円、日本投資家が三百万円合計八百万円で設立する。しかし鬼怒川水利権を八百万円の財団と見積もり、内外投資家とも払い込みは一切伴わない。英国投資家は、倫敦でこの財団を担保に八百万円の社債を発行して起業資金を得るという、魔法のような資金調達を行い発足した。

当時発電はできても、電力の販売しかも社債に見合う長期の契約が必要であった。田はその販売先に尊福率いる東京電鉄会社に二〇年間二万馬力の電力供給契約を千家社長と交渉するが、そのありさまが詳述されている。電鉄側は必ず千家社長が出席しており、田と何度も交渉を交えるのだが、千家社長は重要案件については他人に任せることなく、自ら粘り強く交渉したのである。

当時田は貴族院男爵選挙団体「共同会」で、尊福率いる「木曜会」と激しい議員獲得競争をしていたが、電力の売り込みでは、千家社長に頭を下げて長期契約を交渉した。二人とも政界のことはおくびにも出さなかった。

六　伊藤博文暗殺

伊藤博文統監は山県・桂らの韓国併合策に反対し続け、韓国の自治を認め韓国人による国の近代化を進める自治育成政策に注力した。しかし桂内閣が進める併合策に対して、これに反対する博文の融和策は、韓国国内では根

強い反対運動が続いた。あくまでも韓国人による近代化を試みる博文の政策は、韓国人にとって併合策より、はるかに好ましいものであったが、理解されたのは一部の知識人のみ限られた。

早期に併合を果たしたい山県・桂は、四二年四月辞意を表明した博文を、六月に辞任を認め、再び枢密院議長として迎えた。後任に同じ統合反対論者の副統監曾禰荒助を昇任させることで、博文を納得させた。しかしすでに曾禰は癌を患っており、長く統監にはおられないことを知っての処置であった。次年五月曾禰は病気の為辞任、三代目の統監は寺内陸相が兼任し、一挙に併合策が進められていった。そして八月には一切の統治権を日本に譲渡する、日韓併合条約が締結された。韓国は「朝鮮」と、首都漢城は「京城」と改称される。ここに韓国の日本領土化が成就する。

併合に反対した伊藤博文は、大勢が併合に傾きやむなく同意したものの、この時期においてすら、あくまで朝鮮人の責任内閣と地方議会（植民地議会）を構想していた。現地に赴任していた博文は、日本人と朝鮮人との相互理解は、困難を極めることを見知っており、多くの朝鮮人の反発・抵抗を和らげることは極めて難しい、と承知していたのである。

一〇月伊藤博文は、桂首相や後藤逓相の勧めで、列強各国の首脳と会見し、日本への理解を深めるため欧州に外遊することになった。最初に露国蔵相との東アジア（韓国・満州・清国）を巡る問題を話し合うため、満州哈爾濱を訪問したのである。

一〇月二六日朝、駅到着後露国軍守備隊を閲兵した後、突然韓国人安重根に拳銃で数発撃たれ、三〇分後の一〇時に死去（享年六八歳）するという、全く思いがけない驚嘆する事件が発生した。

直ちに狙撃され遭難したことが、小村外務大臣から天皇に報告された。

「天聴を驚かす」（『明治天皇紀』）

と、その衝撃の大きさを表している。

天皇は直ちに侍従長、山県、外務大臣に諮り、有朋、侍従武官、侍医の派遣を決め、即満州に向け出発させた。午後三時、伊藤博文薨去の報を外相から受けた天皇は、山県一行を電報で引き返させた。

前内務大臣原敬は、政友会の中四国連合会出席のため、下関に行く途中、山口三田尻駅で、電報にて知らされ、日記には、

「実に意外の出来事にて同乗者一同大に驚きたり」

「市民は伊藤公遭難の報に接し非常の悲歎をなし居たり」（一〇月二六日）

また田健次郎は、九州の炭坑を視察していたが、翌二七日新聞にて薨去を知る。

「驚歎措く能はず」（『日記』一〇月二七日）

と主義主張の違いを超え、一様に大きな衝撃を受けた。

国民は博文暗殺の報を、一七日の新聞で知った。田が記したように、

「わが国開国の首唱、文明の先導者にして維新以来国家に於いて忠誠を致し、立憲帝政の基礎を肇くす。身を忘れて国事に於て尽瘁し、老ひて益々壮者、実に曠世の英俊也。」

との思いを抱いたのであった。

この時期、尊福は東京鉄道社長として、社内を一枚岩にまとめることや、各方面から持ち込まれる電力の売り込み、新しい電車開発や路線拡大の要請などで、多忙を極めていた。

伊藤博文の暗殺の報を知り、その胸には、宗教家から元老院議官に押し出してくれ、政治家、行政官というこれまでとはまったく別の道を歩む端緒となった、二〇年前の博文との偶然の遭遇からのことが思い出されたことであろう。

原が記しているように、

「憲法起草者たるのみならず、憲法擁護者たる事実を挙げて、伊藤の功績を称して其死を悲み、同時に将来大に其遺志を継で憲政の為尽力すべき」（一〇月二六日）

と記したが、同じ思いであったであろう。

七　天皇の厚遇

伊藤博文暗殺という驚愕した事件は、明治天皇自身大きな衝撃を受けた。もっとも信頼する維新以来の股肱の臣が、満州の地で、朝鮮人の手により、暗殺されたのである。

天皇は、博文が背後から拳銃で狙撃されるという第一報を小村外相から報告を受けると直ぐに、山県有朋、侍従武官、侍医の派遣を命じ、即刻出発させた（『明治天皇紀』二六日）

その死の報告を受ける前に、正二位から従一位に昇叙させた。公卿岩倉具視や長州藩主毛利元徳公爵と並ぶ皇族以外では最高位であった。

養嗣子博邦（井上馨の兄の子）に公爵を受け継がせるのに先立って、同じ養子文吉（お手伝いに産ませた子）に特別に男爵を授けた。

遺骸は特別列車で大連に移送させ、そこから横須賀までは軍艦によって帰国させた。

次の日、葬儀は国葬をもって行うことを命じた。これまで国葬が行われたのは、岩倉が最初で、有栖川宮など男子皇族、三条実美、薩長藩主だけであった。

葬儀の前日には、官邸に勅使を遣わし、誄詞を下賜された。

「故枢密院議長従一位大勲位公爵伊藤博文ニ賜フノ誄

志ヲ立テテ奮励王政ノ復古ヲ唱ヘ、難ヲ排シテ邁往宏猷ヲ維新ニ賛ケ、

憲法ヲ草創シテ刊ラザルノ典ヲ修メ、

韓国ヲ指導シテ渝ル事ナキノ盟ヲ締ビ、

股肱之レ倚リ柱石之レ任ジ、忠貞君ニ奉ジテ公正事ニ当リ、勲績倍ス顕レテ望ミ一世ニ隆シ、

忽チ訃音ニ接ス、曷ゾ軫悼ニ勝ヘン、

茲ニ侍臣ヲ遣シ賻ヲ齎ラシ、

以テ弔慰セシム。」

王政復古、明治維新を共に成し遂げ、憲法制定に尽力し、韓国統監として日韓同盟を進めた博文に対し、一貫して忠勤してきたことを称えた、突然の訃報に嘆き悲しむ天皇の思いが詰め込まれたものであった。

さらに国葬当日は、一切政務をとらないこと（廃朝）とした。皇后、東宮・同妃両殿下にも表行事は、すべて取り止められた。

こうした一連の異例なはからいは、明治天皇の最も信頼した博文を失った悲嘆が、いかに大きいものであるかを物語っていた。

八　国葬

博文の遺体は哈爾濱から大連に特別列車で運ばれ、すぐさま、碇泊中の軍艦秋津洲で横須賀港に護送された。

十一月一日横須賀港に帰還、近親者（文吉、末松謙澄）のみならず、桂首相、斎藤海相らが出迎えた。

横須賀駅からは一般車の運行は一時間停止され、六輌編成による特別車で、新橋停車場まで移送された。横須賀では多くの市民が真白い敷布の上に安置された霊柩を見守った。新橋までの沿線には多くの住民が並び、合掌して特別車を見送った

新橋停車場には、天皇の勅使や皇后、東宮の御使を始め、閑院宮、久邇宮、北白川各殿下、山県、大山両元帥、大臣、次官、井上老侯爵、大隈、板垣両伯など朝野の貴紳二千名が博文を迎えた。そして新橋から砲車に移された霊柩は、道路両側に十重二十重に立ち並んだ人々に送られて霊南坂宮内庁官邸に入った。

一一月三日は天皇誕生日の天長節で、澄み渡った秋空であったが、国葬当日の四日は、

「朝来陰雲閉じ込めて満都の弔旗を翻すべき風だにになく、極めて陰静なる空模様」で、「密雲低迷落ちんと欲して落ちず掻き曇りたる空合打ち沈みがちなる今日此頃の人の心にも似たりけり」（『東京朝日新聞』五日）

と報じたように、曇天の今にも雨が降り出すような天気であった。

霊柩車は霊南坂官邸を九時に出発、榎坂、溜池を陸海軍楽隊・近衛・第一師団・海軍銃大隊等数千人が前後に

従った。斎場の日比谷公園までの路上には早朝より、「日露戦争勝利凱旋騒ぎ以上」と評される人垣が幾重にもでき、混乱の中公の棺を見送った。

祭場には伊藤家を始め、列国政府花環、伏見宮を始めとする皇族からの榊十数対、東宮・同妃殿下御榊、そして天皇・皇后両陛下からの御榊が立ち並んだ。

その中をこれまで授章した大勲位頸飾章を始め、各国からの勲章、徽章など二十余りを陸海軍の佐官が持ち、その後霊柩を載せた檜造の大輿を五〇人に担がれ祭壇に安置された。祭壇の近くから喪主（嗣子博邦宮内庁式部次長海外出張中により文吉が代理）、家族・親族、続いて大勲位、親任官、公爵、従一位、勲一等、勅任官、侯爵、正二位、伯、子、男、従四位以上、勲三等以上奏任官、正五位以下、勲四等以下、貴族院議員、衆議院議員及び特別の由縁ある会葬者約千名が参列した。

正面には黒白染の幔幕ではりめぐらされた祭壇が設けられていた。左右の仮屋の中の会葬者は、いずれも金モールの大礼服または燕尾服を着用して席に就いた。しかし正三位勲一等男爵貴族院議員前司法大臣千家尊福の姿は、左右仮屋のどこにもその姿は見いだせなかった。

千家尊福は伊藤博文の霊柩のもっとも近くで威厳を正して座っていたのである。本国葬の最もふさわしい斎主として任命されていたのであった。

一六年三九歳の時、明治天皇四女増宮章子内親王、二〇年天皇五女久宮静子内親王の葬祭主をすでに務めていた。そして何よりも、博文との関係は元老院議官に推挙されたときから、二〇年以上に及んだ。日本国を第一に思う博文と同じ信念を持つ尊福は、貴族議員としてまた東京府知事として、博文を支援してきたことは誰にも知られていた。伊藤博文の国葬の斎主には、千家尊福をおいて適任者はいなかった。

祭式は一一時始まった。千家斎主以下祭官一同列んで清祓の式が行われた。

次いで、千家斎主が厳かに祭文を読み始めた。

「場広ければ声飄々として、天外より至るに似たり」と評された、斎主のこれまでの博文との長きにわたる厚情の思いが伝わり、一層参列者の胸に響いたのであった。維新以降、列強各国に肩を並べるまでに日本を近代化させ、功を焦る軍人を抑え、絶えず危なげない進路に導いてくれた恩人との最後の別れを、すべての日本人を代表して、唱えたのであった。

「参列者愁然として首垂れざるはなし」（『東京朝日』）と、その情景を報じた。

その後副斎主が声高らかに公の一生の事歴を叙せる長編の文をよみ、式は終了した。

その後天皇、皇后御名代が先ず玉串を神前に捧げ、続いて各国元首の名代、皇太子・同妃の名代、皇族方が順

次捧げ、最後に喪主文吉男爵が玉串を捧げた。参列者に移り、思い思いに玉串を捧げて、一二時過ぎに式は終わった。

終わるのを待ちかねたように、急に低い雲間から大粒の雨が落ちてきた。日本帝国の向上を目指す、その途上で無念の死に至った、「博文の涙」であったと人々は噂したのであった。

おわりに

伊藤博文国葬の斎主という大役を務めた尊福は、今更ながら、近代日本を創り上げた博文の偉大さに、思いをはせるとともに、恩人を送る大役を果たせたことで、いささかの恩返しができたことに安堵したことであろう。

東京電鉄社長として、これまで踏み入れたことのない実業界に身を置く尊福にとって、第八〇代出雲国造、出雲大社大宮司、大教上など過っての宗教人としてのすべてを捧げた、博文への最後で最高の恩返しであった。

しかしこの大役はまさに幸運ともいえるものであったのである。博文公の暗殺があと一か月遅かったならば、この国葬斎主に千家尊福は選任されなかったことは間違いない。

尊福の借金問題が明らかになるのは、わずか一か月後の一二月であった。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

性と化粧の物語（十）

鈴木守

第二話　性と歯の化粧（六）

先報では我が国のお歯黒風習を辿って、応神天皇の御代に到りました。しかし、それより古い資料は見られませんでしたが、応神期のお歯黒が最も古い例とは思えませんでしたので、今回は、最初に中国の古書に見られる黒歯国に焦点を当てる事にします。

第三節　お歯黒風俗と性（四）

一項、黒歯国

黒歯国は魏志倭人伝（倭人伝）に「女王国を去る事、四千余里、又、裸国、黒歯国あり」と記されています。倭人伝の他にも、山海経（著者、著作年代等不明）、呂氏春秋（二三五以前）、後漢書（三九八～四四五）、文選（五〇一～五三一）にも黒歯国を見る事ができます。これらの書の記述を合わせますと「黒歯国は東海洋上にあり、この国の婦人たちは草で歯を染め、彼女たちの歯は皆、黒かった」と云うことです。

二項、黒歯国の比定

倭人伝に見られる邪馬台国の否定に当って、九州説と畿内説など、諸節が唱えられています。黒歯国について、倭人伝の記載通りに進めば、小笠原諸島に到着しそうですが、この島々の発見は、江戸時代の事ですから、小笠原説は成立し得ません。

一、黒歯国は南西諸島の島か。上代の南九州一帯が日向の地でした。東は〝ひむかし〟であり、訛って〝ひんがし〟と呼ぶようになりましたが、当時、女王国を訪問していない魏使は北九州の倭人から話を聞いただけですから、倭人が日に向かう方位を〝ひむか〟と教えたのを、〝ひむかし〟と受取り、女王国の方向を東と思い込んでしまった節があります。

その事は扨ておいて、山海編や文選の記述では、東シナ海洋上に浮かぶ南西諸島の島々の一つと想定されています。幸い、明代の書、広興図の東南海夷図に黒歯の文字を見出しました。この図では、福建北東海上に琉球があり、朝鮮半島の南東に四つの島が連っていました。最も西の島は肥前と記され、次の島は肥前以外の九州の地で、肥前該当の島と琉球の中間に〝黒歯〟の文字が記されていましたので、黒歯は大隅諸島から奄美諸島に至る南西諸島の島に存在する事は確実です。

二、黒歯国を奄美地方に比定。角度を換えて、黒歯国の所在を考察します。文選には「黒歯国の女性は草で歯を染める」とあります。単に草と云われても草から得られる黒色色素を思い出す事が出来ません。草を〝草本〟として把握しますと、黒色色素として檳榔子と五倍子を思い浮かべる事が出来ます。檳榔子はヤシ科植物の檳榔の実です。五倍子はヌルデの葉に寄生中が作った瘤の成分です。

後に詳しく述べますが、東南アジアには、檳榔子を咀嚼する風習（咀嚼風習）があります故、文選で云う草は檳榔だろうと思います。

また、自生檳榔の北限は奄美地方ですから南西諸島でも奄美より北のトカラ列島や大隅諸島は比定の対象から外れ、奄美地方が黒歯国に比定されます。

三項、黒歯国発祥の時期

黒歯国の所在を記した文章は、中国の古文書しかありませんので、この国の発祥を知るには、これらの古書に頼るしかありません。これらの古書のうち、古い資料は山海経と呂氏春秋です。呂氏春秋については先述のように二三五年に成立しています。しかし、山海経については、著者、成立年不詳と記しましたが、学研漢和大事典の中国の名著の部に、「山海経の大部は戦国時代以前に成立、紀元後二三年頃校訂、晋の時代二七六～三二四年に注がつけられ現在の形となった」と示されていました。従って、黒歯国は戦国時代以前（前四世紀より以前）から呂氏春秋成立の二三五年の間に中国で知られた存在になったと推察されます。

四項、檳榔子咀嚼風習

黒歯国の黒歯が檳榔子を咀嚼する風習（咀嚼風習）に基づくと推察しましたので、この風習について検討する事にします。

一、檳榔と蒲葵：檳榔と蒲葵は屡々混同して使われていますので、最初に、この相違について述べる事にし

ます。

蒲葵樹は四国南部から台湾にかけて東日本の亜熱帯に分布し、葉は屋根を葺いたり、団扇や編物に利用します。宮崎県青島は蒲葵樹の大自然林としてよく知られています。

他方、檳榔樹は東インド諸島を中心に南アジアや太平洋の島々に分布するヤシ科の植物です。高さ四～一〇米の常緑樹で、果実を檳榔子と称しています。この果実の成分としてはタンニンが多く、数種のアルカロイドを含んでいます。

蒲葵と檳榔は植物学的に亜種の関係にあり、名前だけで樹形も類似し、古くは、枕草子等に蒲葵で屋根を葺いた牛車を「ビロウ毛の車」と称していますが、「檳榔毛の車」と記載されています。又、記紀を繰って行きますと、ビロウの音と檳榔文字が見られ、蒲葵と檳榔は区別される事なく〝阿遅摩佐〟と表記されていました。従って、この両者を混同して用いられても無理からぬ面があろうかと思います。

二、檳榔子咀嚼体験記：　台湾旅行した際に烏来を訪れました。烏来はかつて高砂族と呼ばれたタイヤル族の集落です。台北を後にして郊外に出ますと、雑貨店風の店先に〝檳榔〟の貼紙がありました。同行の物好きな連中と一緒に早速、檳榔子摂取に挑戦しました。早速、噛みますと、兎に角、渋く、子供の頃経験したドングリよりはるかに渋く感じました。我慢して噛んでいますと、口の中が泡立ち、涼しいような痺れるような感じがして来ました。噛み終って吐き出しますと、唾が赤く染まっていました。

司馬遼太郎は「熟していない檳榔子を二片に割り、練石灰に混ぜてキンマの葉に包んで噛み、その汁を唾液とともに吐き出す風習であり、軽い陶酔感、もしくは覚醒感が得られると云われ、一種のドラッグと云える」と記し、「台湾では、今の女性は嗜まないが、肉体労働者は用いるし、ヤクザ社会では一種のシンボルとなっているが、インテリ階級の人たちは嫌悪しているようである」とも述べていました。

三、東南アジアの咀嚼風習：　バリ島へ行った時、宿泊したリゾート、ホテルのフロント・ボーイに咀嚼風習について尋ねてみました。彼はいやな顔をしましたが、バリには檳榔樹は少く、檳榔子はジャワから持ってくると云っていました。ここでも若い人たちはおぞましい風習であると思っているに違いありません。

旅行ガイドブックに「ビンロウジを噛むと、麻酔的な効果で爽快な気分になる。キンマをバリ語でパセ、インドネシア語でシリーという。お婆ちゃんたちは盛んにパセを噛む。昔は来客のときにはビンロウジセットを出してもてなした。若い人は歯を平らに削るポトン・ギギの成人式で、形式的だがビンロウジを噛む習慣がある」と記載されていました。咀嚼行為自体もパセというようです。

バリ島では、「今も咀嚼用材料のセットに供物にし、セット全体で一つの世界を表現し、キンマは山、ビンロウジは水田、石灰は海を意味している」とガイドブックに書かれていました。

自宅近くにベトナム料理店があります。店長はサイゴンの出身です。話を聞きますと、咀嚼風習をブア・ガンビールといい、ベトナム南部には歯の黒くなった老婆が大勢いるとの事でした。

五項、檳榔子咀嚼の科学

ビンロウジの渋みの成分はタンニンで、ポリフェノールにカルボン酸が結合した物質群の総称です。タンニンが酸化されるとき、初めは赤色を呈し、この色素が幾つか結合して黒褐色になります。赤色色素が生じるまでの反応は速やかですが、黒くなる反応は穏やかなため、子供の頃に咀嚼を始めると、年頃になって黒さが目立つようになります。この反応は鉄を触媒にすると速やかに黒くなります。

話は横道に逸れますが、女性のお肌の大敵。メラニン色素が生成する過程もタンニンが酸化する過程に類似しています。先ず、アミノ酸、チロシンが酸化されて、ポリフェノールのドーパになり、更に酸化された後に縮合して、赤色のドーパ・クローム生じ、これが幾つか重合して黒色々素メラニンが出来上ります。

従って、檳榔子から生成した黒色色素は、メラニン色素の同族体と云えます。檳榔子由来の黒色々素が形成するには長時間必要としますが、メラニン色素形式は速やかに行われます。その理由は体内に鉄イオンが豊富に分布している為です。

檳榔子咀嚼によって陶酔感や覚醒感、爽快感が得られる一種のドラッグ効果をもたらします。この作用は檳榔子に含まれるアルカロイドによります。更にアルカロイドには嗜癖効果もありますので、慣習化を導きます。

六項、咀嚼風習とお歯黒の発祥

咀嚼風習成立の過程を考察した上で、お歯黒の起源について触れることにします。

一、咀嚼風習の成立：　檳榔が自生する東南アジアの地へホモ・サピエンスが始めて現われた頃、彼らは食物確保の一環として檳榔の落果を口にした筈です。この落果は熟した渋柿が渋くないように渋くなかったと思います。このようにして檳榔子を日常的に食している間にこ

の実の一種のドラッグ効果によって咀嚼習慣を身につけるようになりました。この慣習はチューイングガムと同様、嗜好風習ではありますが、子供の頃から噛み始めますと、初潮をみる頃には歯が黒くなり始め、更に咀嚼を続けていると真っ黒な歯となります。従って、この嗜好性の風習は成女表示、続いて既婚者標識の役割を果たしましたので、お歯黒と同様に性と関連した因習だといえます。

では、ホモ・サピエンスが初めて、東南アジアの地へ進出した時代としては、現在知られている人跡の証拠は、四万年前のカリマンタン島ニーア、次いで一万一千年前のマレー半島ベラ並びジャワ島ワジャクにて見出されていますので、咀嚼風習の発祥を古く見積もれば、四万年前から一万年前の時代と云うことになります。

二、お歯黒風習の分化：　咀嚼風習からお歯黒風習が分化する過程について、樋口説があります。彼の説の要点を述べますと、「子供の頃から噛み始めると、適齢期になって歯が黒くなってくる。ところが、裕福な人ほど経済的、時間的な余裕があるため、噛む機会が増えて早く歯が黒くなる。やがて、これが歯の黒い人ほど身分が高いことになって、黒い歯の方が上流階級の象徴となった。そこに美意識を見出した部族は、さらに黒く美しい歯にするために、ヤシの実（檳榔子）の汁を鉄分で黒い染料を作って歯を染めた」と説いています。

三、お歯黒風習は何時、何処で始まったかについて検討します。既でに述べました、樋口説でいう「檳榔子の汁と鉄分で染料を作った」というのは、意図的に歯を染める行為ですから、化粧の領域に属します。

この化粧の発祥の時期を知るには人類の鉄利用の歴史から割り出す事にします。東アジアの鉄利用の歴史を見ますと、殷代の鉄使用は別として、中国春秋時代（前七七〇～前四〇三）から本格化しましたので、この時代には既でに、鉄媒染による黒色色素の製法が開発されていたのではないでしょうか。

一方、黒歯国は中国の古書にしか記述されていませんが、最も古い文書は、古代中国の地理書の山海経で、この書は春秋時代末期から著作され始めています故、鉄利用が始まって、それに続く時代に符節を伴わせるように山海経の著作が始められています故、鉄利用が始まって、それに続く時代に符節を合わせて山海経の著作が始められています。

斯様に、鉄媒染による黒色々素の製法開発によって、山海経の執筆が軌を一つにしている印象を受けましたので、穿った見方をしますと、山海経の著者は黒歯国の筆を進めるに当って、鉄媒染によって作られた色素を筆に含ませたのではないかと思い、もしかしたら黒歯国の名付け

親は山海経の著者ではなかったかと夢想しています。

次に、お歯黒が風習がどこで始まったかですが、檳榔の自生する地である事に間違いはありませんので、中国は除外されます。また、中国で開発された鉄使用の技術が、春秋時代ら戦国時代に東南アジアに波及したとも思えません。中国の文明文化を直接入手可能の地として台湾と琉球が候補に挙げられますが、台湾を第一候補とすべきで、お歯黒風習は、春秋末期から戦国時代初期の頃、台湾で呱々の声を挙げたと判断し次第です。そして、台湾で発祥したお歯黒風習は黒歯国、即ち奄美地方に北上し、この地では檳榔子咀嚼による黒歯とお歯黒により黒歯が両立していたと想定されます。

七項、お歯黒風習の日本上陸

檳榔樹が自生していない日本本土の地に檳榔子咀嚼風習が成立する筈はありませんが、奄美地方に到達したお歯黒風俗が日本々土に上陸したことは十分に考えられます。しかし、お歯黒風俗の到達を語る資料は一切見られませんので、我が国草創期の弥生時代以降の歴史を頭に描き乍ら、記紀に印された事項を辿って、お歯黒風習の本土上陸の謎に迫りたいと思います。

一、日向三代のお歯黒：　日本国草創の頃、西日本各所に朝鮮半島から渡来した弥生人たちが定住し始めました。彼ら弥生人の一派が南九州に生活の基盤を定めたことも容易に推察できます。

では日本草創期を記紀神話でみますと、天孫邇邇芸命が筑紫の日向の高千穂の峯に天降ったことから始まり、後世の人たちは、この時代を日向三代と呼んでいますので、日向三代の話を続けます。

初代の邇邇芸命は薩摩半島の西端に出張った笠沙の崎で出会った大山津見神の女、阿多津、亦の名を木花佐久夜媛と呼ばれ美女を娶り、二代火遠理命を設けました。佐久夜媛は現在の加世田市黒隅の出自で、この地を流れる万之瀬川が東シナ海に注ぐ河口に南島と交易していた港が控えていました。

次いで、火遠理命は海幸山幸伝説で知られている山幸彦とされています。話は逸れますが、海幸山幸伝説に異論を挿むことにします。海幸山幸伝説では、海幸が大切にしていた釣針を紛失し、山幸は自分の刀を潰して針を作り、返済しましたが、海幸は元の針を返せと無理難題を突き付けましたので、両者の間に争いが生じたという物語です。この紛争は綿津見神の支援を受けた山幸が勝利を収め、兄、海幸は掌に赭土を塗り、「汝の俳優の民とならむ」と恭順を誓いました。

私が異論を唱える契機になったのは、「掌に赭土を塗る」という海幸の言葉の他に、かなり昔のことですが、週間朝日の誌上で、

「日向の地に属する九州山地地帯で曽ては朱の原料となる辰砂（硫化水銀）を産出し、吉野ヶ里を眺望する背振山地でも辰砂が出土していた」との記事に接しました。吉野ヶ里遺跡から顔に朱を施したシャーマンらしき人骨が発見されていましたので、咄嗟に異説を思い浮かべた次第です。私論を述べますと、「海幸山幸抗争の原因は、釣針などのようなチンケなことではなく、辰砂の採掘権、あるいは朱の販売権、もしくはその両者を巡っての確執だったに相違ない。その証拠は海幸が掌に赭土を塗って「私は赤土で我慢します」という事を態度で表現していることから証拠づけられるのではないでしょうか。

話を本筋に戻しますと、火遠理命が娶った豊玉媛は綿津見の神の女でありまして、彼女の妹、玉依媛は三代鵜葺草葺不合命と婚を結びました。この姉妹の父が綿津見神といわれていますので、この二人は海人族に属していました。

南九州の海人族は、南西諸島の島々を北上して日本々土に上陸したボート・ピープルの子孫であることを示す事例がみられます。火遠理命の妻豊玉媛が出産の際に夫に「凡て他国の人は産む時に至ると本つ国の姿をもちて産むなり」と申しています。この『他国の人』の一言は媛は他国からの渡来者の末裔であることを如実に物語っています。斯かる記言から察しますと、彼女たちの部族は奄美以南の地のいずこかでお歯黒を体験し、黒色々素の製法技術を身につけたであろうと推察することができますので、豊玉媛、玉依媛など両媛の側近くに仕える侍女たちも歯を染めていたと考えるのが当然の帰結ではないでしょうか。また、前述の佐久夜媛の故地、阿多の地は東支那海に面し、この地を流れる万之瀬川河口に南島交易を行っていた港があったといわれています故、佐久夜媛もお歯黒に接する機会があった筈です。従って、南九州各地の富裕層の娘たちはお歯黒を施していたのではないかと予想する次第です。

二、神武天皇以降のお歯黒：　日本社会草創期、記紀に記述されている日向三代の時代の南九州には西南諸島の習俗を身につけた海人族、所謂ボート・ピープルの血を引く一統を中心に、お歯黒習俗を日本本土に持ち込んだと考察しました。

日向三代の後を継いだ神倭伊波礼彦命と名乗っていた神武天皇は、阿多の阿比良媛を娶りました。亜比良を〝あいら〟にしますと、鹿児島湾奥の地に姶良、大隅半島中央部に吾平の地名がみられます。しかし、阿多の亜比良媛と名乗っています故、阿多は薩摩に所在しており、媛の出身は姶良であろうと思われます。従って、亜比良媛も歯を黒く染めていたと判断されます。

扱て、南九州日向の地はシラス台地が多く、土地が痩せており、桜島や新燃岳のように火山噴火による災害も

多発し、且つ台風銀座と呼ばれるように風害も屢々生じています。斯様な自然環境もさることを乍ら、火遠理命の時に確保し、重要な財源だった辰砂鉱脈も枯れ始めたのではないかと思われますが、伊波礼彦命は兄五瀬命と謀って、稲作が可能な地に豊葦原瑞穂国を創立する為、所謂、神武東征を企てました。この東征は天孫族の国を設立するのが目的ですから、当然、婦女子を伴った長旅となりました。斯くして、幾多の困難もありましたが、南紀に上陸し、十津川に沿って北上して大和盆地に到達し、橿原の地に天孫族による大和朝を創設することができました。その為、伊波礼彦命は〝初国知らしし天皇〟と呼称されるようになりました。この呼称は神武天皇の他に崇神天皇もそのように呼ばれています。諱に〝神〟の字を冠えられた天皇、皇后に神功皇后と応神天皇がおります。諱に〝神〟を冠えられた理由を井沢元彦は「初代『神武』は大和朝廷の祖で彼の本名は『ハツクニシラススメラミコト』て『初めて国を統治した天皇』の意味である。十代『崇神』の本名も『ハツクニシラススメラミコト』であり『欠史九代』といわれているように初代から九代までは架空の存在で、十代目の『崇神』が大和朝廷の始祖だという学者もいる。ということは『始祖』と考えられる天皇には『神』の一字が贈られていると考察される。この両帝の他に『神功皇后』と『応神天皇』がいる。この母子の諱に『神』の字が贈られたのは、この母子によって新王朝が創立された為である」と彼の主張を述べています。彼の主張も尤もだと思うと、神武は神世の時、大和朝を創設し、崇神は人の世に至って大和朝を築いた帝、神功と応神の母子は第二次大和朝廷の始祖に位置づけられるのではないでしょうか。

神武天皇の妃、亜比良媛の出生地、阿多の地名に事寄せて、お歯黒風習の存在を匂わせましたが、その後、黒歯風習に関わる事跡が見当たらなかったが故に「初国知らしし天皇」たちの諱に『神』の一文字が奉られていることを長々と講釈して来ました。神武天皇以降の世は、私たちが小学生の頃、「ジンム、スイゼイ、アンネイ、イトク・・・」の暗誦させられた欠史八代と呼ばれる暗黒の時代で、お歯黒のような些細な事柄など話題に登ることなど考えられないことです。ましてや、歴史学者の中には、神武天皇は架空の存在で大和朝の始祖は崇神天皇とする説を唱える方もいますので、暗黒時代のお歯黒に日が届かないのが当然のことです。こんな言い訳け口上はいい加減にして、お歯黒、黒歯、檳榔の文字だけでなく日向などの言葉を求めて、記紀の頁を捲ることにします。

神武天皇妃・阿多の亜比良媛の次に、『紀七巻、景行天皇一七年』の条に帝の筑紫巡幸の際の逸話がみられ、そこには「諸県君泉媛大御食を帝に奉らんとして一族の者たちを石瀬川（宮崎県を流れる大淀川上流）の河原に

集め・・・」と叙述されていました。この記載するところは、大和朝廷は日向各地の実力者と交流していることが窺われますので、大和朝内に日向の文化風習が波及していることが察知され、その風習の一つにお歯黒化粧が含まれていたと考察しました。

一二代景行天皇の次に一四代仲哀天皇皇后の神功皇后の事跡については、『紀九巻』を独占して著述されていました。しかし乍ら、お歯黒は勿論として、皇后の化粧に関する記載を目にすることが出来ませんでした。所が、皮肉なことに『仲哀天皇』の条に「処女の睩の如くして…」と眉化粧が紹介されています。

神功皇后の息、一五代応神天皇は、日向の泉長媛を妃としていますし、一六代仁徳天皇は日向国の諸県君の女、髪長媛を妃としています。先述の景行天皇の条にも諸県君は登場していますので、大和朝廷は現在の宮崎県の地にも地歩を固めていたことが想定され、日向の習俗、文化が近畿の習俗や文化に影響を与えていたことが窺えます。その一例として、応神妃矢河枝媛は日向の血脈とは異なり、朝鮮渡来の一族です。その媛が日向の化粧文化であるお歯黒を施していました。矢河枝媛の一族丸邇は『記・崇神天皇』の条に「丸邇の臣の祖、日子国夫玖命の名が認められますし、日本史の書には必ず登場する漢字と儒教の伝来の史実の中に和邇吉師の名が認められます。この史実を『応神の条』に従って紹介しますと「百済の国主照古王、雌雄一対の馬を阿知吉師に付けて貢上りき。また太刀と大鏡を貢上りき。また百済国に『もし賢しき人あらば貢上れ』と科せられき。故、命を受けて貢上れる人、名は和邇吉師。即ち論語十巻、千字文一巻、併せて十一巻をこの人につけて貢進りき（和邇吉師は文首らの祖）」と著わされています。従って、崇神天皇の条に見られる丸邇達の祖、国夫玖命、矢河枝媛の父君丸邇の比布礼能意富美、並びに和邇吉師は同じ一族の出身とは思えませんが、いずれも、百済人の血脈を引いていたと考えれらます。

応神、仁得両帝治政の時代を過ぎますと飛鳥時代に入りますが、それ以降の各時代のお歯黒習俗については、本誌一四三～一四五巻に飛鳥時代から現代に向けてお歯黒文化が盛衰を繰り返し、女性の黒歯風習が江戸時代に最盛期を迎えましたが、明治維新に際して、男性黒歯の禁止令が公布され、以降、男性の歯染めは見られなくなりましたが他方、女性黒歯の禁止はなかったので、女性黒歯はその後命脈を保っていましたが、昭和末期の秋田の老女を最後に途絶え、中国戦国時代当地、台湾で始まった鉄媒染によるお歯黒の習俗も終焉を迎えました。

引用文献

鈴木守著、化粧のルーツを訪ねて（一）、まんじ一〇八号（二〇〇八）

鈴木守著、性と化粧の物語（九）、まんじ一四五号（二〇一七）

村沢博人、津田紀代編集、化粧史文献資料年表、ポーラ文化研究所（一九七九）

芳賀幸四郎監修、年表式日本史小事典、文英堂（一九九三）

邦光史郎著、消えた邪馬台国、広済堂出版、（一九八一）

千田稔著、邪馬台国と近代国家、NHKブック（二〇〇〇）

小倉謙監修、植物事典、東京出版（一九九七）

藤堂明保編集、学研漢和事典、中国名著の部、学習研究社（一九九五）

牧野富太郎、原色物野和漢薬大図鑑、北隆館（一九八八）

司馬遼太郎、街道をゆく、台湾紀行、朝日新聞社（一九九四）

馬場悠男監修、人類の起源、集英社（一九九七）

樋口清之、化粧の文化史、国際商業（一九八二）

貝塚茂樹、伊藤道治、古代中国、講談社（二〇〇六）

倉野憲司校注、古事記、岩波文庫（二〇〇三）

坂本太郎ほか校注、日本書紀（一）、（二〇〇三）

同書（二）、（二〇〇四）

中村明蔵、隼人の古代史、平凡社（二〇四一）

井沢元彦、卑弥呼伝説、集英社（一九九七）

明治時代の著述者　渋江保の一生（その十二）

山本　勉

第九期　博文館時代②（東京）一八九〇年（明治二十三年）三月～一九〇一年（明治三十四年）

博文館時代①において一九三七年（昭和十二年）六月十五日に出版された『博文館五十年史』を取り上げたが、渋江保の名前が掲載された箇所は、「第二編出版界躍進時代　明治二十五年小学教科用書の出版と其絶版」に見られる『高等小学万國地理』〔一〕の一カ所のみであった。

実際には渋江の著作は雑誌に掲載されたものも含めると二百冊余りになる。これまで渋江の著作については、李冬木『魯迅の研究』、坪内善四郎『博文館五十年史』、日本古書通信第二三三号掲載の太田兼雄『羽化渋江保の著作』、藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』、『抽斎歿後』等に調査研究され掲載されてきた。この度、渋江の全著作の内、その半分以上を占める博文館時代をまとめるにあたり著作を一覧表にした。出版年や出版時点での渋江の年齢については参考にしてきた資料において若干の相違はある。国立国会図書館デジタルコレクション等の資料を参考にしてできるだけ渋江の著作そのものにあたり奥付にある出版年月日を確認した。この一覧表は整理半ばであり著書名がはっきりしないものもあるが、渋江著作年表作成の基礎データとして掲載するものとする。一覧表の「政治・経済・社会の動き」については、自由民権運動に関わる事件や渋江と同時代の作家で科学や神秘主義に少なからず興味を抱いていた夏目漱石・森鴎外の作品も掲載した。渋江の著作と「政治・経済・社会の動き」との関連については機会をあらため述べたい。なお、一覧表に掲載されている出版社名の略称の正式名称は以下の通りである。

万：万巻楼　浜：浜松瞬養学校　脩：渋江脩　一：一貫社　共：共益商社　博：博文館　東：東海堂大：大学館　磯：磯部屋　文：文明堂　内：内外出版社　扶：雑誌『扶桑詩文』　松：松山堂　亜：東亜堂　独：独立評論　神：神誠館　三：三才社

注　記

（一）坪谷善四郎編『博文館五十年史』（博文館　一九二七年六月十五日）六十六頁

参考文献

（一）李冬木『魯迅の研究』（佛教大学通信教育部　二〇一〇年四月一日）十一～十二頁

（二）太田兼雄『羽化渋江保の著作』（日本古書通信二三三号　一九六三年九月十五日）十一～十三頁

（三）『抽斎歿後』東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース

（四）長山靖生『奇想科学の冒険』（平凡社新書　二〇〇七年六月十一日）

（五）長山靖生『鴎外のオカルト、漱石の科学』（新潮社　一九九九年九月三十日）

（六）坪谷善四郎編『博文館五十年史』（博文館　一九二七年六月十五日）

（七）藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書史研究第六〇号　二〇〇四年三月）

渋江保著作年表

西暦	元号	年齢	書名	政治・経済・社会の動き
一八七二年	明治五年	一五歳	米国史八巻 万	
一八七五年	明治八年	一八歳	授業必携一巻 浜	
一八七六年	明治九年	一九歳	小学入門授業法 一	
一八八〇年	明治十三年	二三歳	英国憲法論脩	
一八九〇年	明治二三年	三三歳	マコーレー著「ミルトン」注釈 共	『真政大意』（加藤弘之）（明治三年）
			処世活法（通俗教育全書 博）	民撰議院設立建白書（明治七年）
			幸福要訣（通俗教育全書 博）	『国体新論』（加藤弘之）（明治七年）
			福の神（通俗教育全書　一〇〇冊 博）	国会期成同盟結成（明治十三年）開拓使官有物払下げ事件・明治十四年の政変・秋田事件

			通俗教育演説（通俗教育全書　一〇〇冊）博
			政治社会の流弊・人物評の流行（雑誌　富国）博
一八九一年	明治二四年	二四歳	小論理書（通俗教育全書一〇〇冊）博
			小心理書（通俗教育全書一〇〇冊）博
			小天文学（通俗教育全書一〇〇冊）博
			小倫理書（通俗教育全書一〇〇冊）博
			小地質学（通俗教育全書一〇〇冊）博
			希臘羅馬文学史（通俗教育全書一〇〇冊）博
			独佛文学史（通俗教育全書一〇〇冊）博
			英国文学史（通俗教育全書一〇〇冊）博
一八九二年	明治二五年	二五歳	小学講話材料　西洋妖怪奇談博
			少年亀鑑神童博
			国民錦嚢博
			普通教育学（通俗教育全書一〇〇冊）博
			簡易体操法（通俗教育全書一〇〇冊）博
			代数一千題（通俗教育全書一〇〇冊）博
			幾何一千題（通俗教育全書一〇〇冊）博
			簡易手工学（通俗教育全書一〇〇冊）博
			算術五千題上（通俗教育全書一〇〇冊）博
			算術五千題下（通俗教育全書一〇〇冊）博
			泰西婦女亀鑑（女学全書一二冊）博
			萬國発明家列傳（寸珍百選五二冊）博
			高等小学萬國地理博

（明治十四年）福島事件（明治十五年）高田事件（明治十六年）群馬事件・加波山事件・秩父事件・飯田事件・名古屋事件（明治十七年）静岡事件（明治十九年）保安条例（明治二〇年）帝国議会開設（明治二三年）『人権新説』（加藤弘之）（明治十五年）

			西洋文学家一口話（雑誌掲載　未確認）博
			西洋名士奇談（雑誌掲載　未確認）博
一八九三年	明治二六年	二六歳	万国百傑人（雑誌　日本之少年）博
			初等三角術（通俗教育全書一〇〇冊）博
			雄辯法（通俗教育全書一〇〇冊）博
			社会学（通俗教育全書一〇〇冊）博
			西洋秘傳魔術博
			支那哲学者欧州巡遊通信上（寸珍百選五二冊）博
			支那哲学者欧州巡遊通信下（寸珍百選五二冊）博
			算術教科書博
			南亜米利加紀行博
一八九四年	明治二七年	三七歳	哲学大意（通俗教育全書一〇〇冊）博
			歴史研究法上（通俗教育全書一〇〇冊）博
			歴史研究法下（通俗教育全書一〇〇冊）博
			人類学（通俗教育全書一〇〇冊）博
			電気世界（通俗教育全書一〇〇冊）博
			生活指針日々のおきて上巻（寸珍百選五二冊）博
			生活指針日々のおきて下巻（寸珍百選五二冊）博
			西洋事物起源（寸珍百選五二冊）博
			記憶術（寸珍百選五二冊）博
			催眠術（寸珍百選五二冊）博
			英清鴉片戦史（萬國戦史第二編）博
			英佛聯合征清戦史（萬國戦史第四編）博

日清戦争

			露土戦史（萬國戦史第六編）博
			米國南北戦史（萬國戦史第七編）博
			逸話文庫 博
			開智術 博
			国民起源 博
			婚姻の友 博
			社会観察論 博
			十九世紀の文明 博
			婢僕管理法 博
一八九五年	明治二八年	三八歳	普墺戦史（萬國戦史第八編）博
			波蘭衰亡戦史（萬國戦史第十編）博
			クリミア戦史（萬國戦史第十一編）博
			印度蚕食戦史（萬國戦史第十二編）博
			伊太利独立戦史（萬國戦史第十四編）博
			米國独立戦史（萬國戦史第十五編）博
			希臘独立戦史（萬國戦史第十六編）博
			英國革命戦史（萬國戦史第十七編）博
			佛國革命戦史（萬國戦史第十八編）博
			フレデリック大王七年戦史（萬國戦史第二十編）博
			シーサルボンペー羅馬戦史（萬國戦史二十一編）博
			羅馬加達額爾ピュニック戦史（萬國戦史二四冊）博
			歴山大王一統戦史（萬國戦史第二十三編）博
一八九六年	明治二九年	三九歳	希臘波斯戦史（萬國戦史第二十四編）博

			支那人気質 博
			世界格言大全 博
			婚姻案内 博
			社会観察論（続物）博
			フレデリック大王と其宮廷（歴史小説）博
			致富要訣（日用百科全書　五〇冊）博
一八九七年	明治三〇年	四〇歳	商家手代案内 博
			ロングマンス第一読本註釈（英学全書四冊）博
			ロングマンス第二読本註釈（英学全書四冊）博
一八九八年	明治三一年	四一歳	ロングマンス第三読本註釈（英学全書四冊）博
			出世の栞 博
			ナショナルリーダー註釈一、二、三、四、博
			サウセー子ルソン伝注釈 博
一八九九年	明治三二年	四二歳	フランクリン自伝 博
			ロングマンス第四読本註釈（英学全書四冊）博
一九〇〇年	明治三三年	四三歳	通俗世界地理（通俗百科全書二四冊）博
			出世の栞続（稿　大尾迄　マーデン原訳）博
一九〇一年	明治三四年	四四歳	世界英雄神髄（偉人の真相）東
一九〇三年	明治三六年	四六歳	成功と好機会 東
			成功格言 東
			動物界奇談 大
			活動写真術自在 大
一九〇四年	明治三七年	四七歳	韓非子神髄 磯

日露戦争

『進化論講話』（丘浅次郎）

			武士道神髄[磯]
			露西亜闇黒史[文]
一九〇五年	明治三八年	四八歳	奇女無銭旅行（原題：女学生無銭旅行）[大]
			冒険小説百難旅行[大]
			冒険怪奇文庫第一編怨死一生冒険奇旅行（原題：せい子の冒険）[大]
			冒険怪奇文庫第二編奇人の航海（原題：爆裂弾）[大]
			冒険怪奇文庫第三編冒険小説新海底旅行[大]
			冒険怪奇文庫第五編怪奇小説奇人の魔法[大]
			冒険怪奇文庫第七編冒険小説船幽霊[大]
一九〇六年	明治三九年	四九歳	冒険怪奇文庫第四編冒険小説月世界探険
			冒険怪奇文庫第六編冒険小説新ナポレオン[大]
			冒険怪奇文庫第八編冒険小説妖怪山の英雄[大]
			冒険怪奇文庫第九編冒険小説生？死？[大]
			冒険怪奇文庫第十編冒険小説空中電気旅行[大]
			冒険怪奇文庫第十一編冒険小説食人国探険[大]
			冒険怪奇文庫第十二編冒険小説続食人国探険[大]
			怪奇小説薄命美人[大]
			家庭小説財婚婦人[大]
			世界統一冒険譚第一編冒険小説青年英雄団[大]
			世界統一冒険譚第二編冒険小説世界発展倶楽部[大]
			世界統一冒険譚第三編冒険小説怪中の怪[大]
			世界統一冒険譚第四編英雄小説賊巣探険[大]
一九〇七年	明治四〇年	五〇歳	怪奇小説新クレオパトラ正[大]

『我が輩は猫である』（夏目漱石）

『坊ちゃん』（夏目漱石）

			怪奇小説新クレオパトラ続[大]
			世界統一冒険譚第五編冒険小説キウリアス、アイランド[大]
			世界統一冒険譚第六編冒険小説怪宝窟[大]
			怪奇小説活幽霊[大]
			怪奇小説旧情婦[大]
			怪奇小説死人の再会[大]
			怪奇小説モデル姫（モデル嬢）[大]
			冒険小説海賊船[大]
			冒険小説怪髑髏[大]
			冒険小説男装の奇女（原題：男装の女傑）[大]
			冒険小説南極探険[大]
一九〇八年	明治四一年	五一歳	冒険小説人か鬼か（人？鬼？）[大]
			冒険小説伏魔殿[大]
			冒険小説北極探険[大]
			冒険小説海底奇談（原題：剣の影）[大]
			冒険小説海賊女王（原題：海底噴火）[大]
			冒険小説女神男神（原題：霞郷探険）[大]
			冒険小説難行苦行[大]
			冒険小説幻島探険[大]
			英雄小説裸体旅行[大]
			英雄小説蛮カラ博士[大]
			降神術[大]
			怪奇小説新七不思議[大]

『三四郎』（夏目漱石）

一九〇九年	明治四二年	五二歳	怪奇小説姫の一生[大]
			怪談小説怨霊[大]
			怪談小説怪古木[大]
			怪談小説鬼女の姿[大]
			怪談小説死人の執念[大]
			怪談小説死霊の祟[大]
			怪談小説未知の敵[大]
			斬新催眠術[大]
			心理応用以心伝心術[大]
			安全催眠術[大]
			以心伝心術独習[大]
			遠距離催眠術[大]
			原理応用自己催眠術自在[大]
			原理応用神通力[大]
			諸病治療催眠術[大]
			人身磁力催眠術[大]
			原理応用最近接神術[大]
			心象[内]
			西廂記講義・詩経講義[抄]
			陽明学活眼[松]
			進化論[大]
			韓国事情の一部（書名文字判読できず、不明）
			降神術奇効火星界の実況（火星の世界）[大]
一九一〇年	明治四三年	五三歳	

『魔睡』（森鴎外）

千里眼事件

一九一一年	明治四四年	五四歳	世界統一論[大]
			通俗呼吸器健全法[内]
			笑話五百題[内]
一九一三年	大正二年	五六歳	笑府[内]
			ソクラテス論語[亜]
一九一四年	大正三年	五七歳	仏国革命史[独]
			オイケン并ベルグソン書（不明）
一九一一年	大正十年	六四歳	易断真法[神]
一九一二年	大正一一年	六五歳	亀卜考[神]
			梅花心易即座考[神]
一九一三年	大正一二年	六六歳	読心術[神]
			易学小筌詳解三巻[神]
一九一四年	大正十三年	六七歳	周易史伝[三]
			周易象義一巻[三]
			周易占筮既筮法[三]
			繋辞新釈[三]
			説卦伝新釈[三]
			周易小話[神]
			迷信に似た実験[神]
			読易漫録[神]
			亀卜考略[神]
			霊魂論集[神]
			普通余話[神]

『後人』（夏目漱石）（大正元年）

第一次護憲運動（大正元年）

第一次世界大戦

関東大震災

第二次護憲運動（大正十二年）

一九二五年	大正十五年	六九歳	貴革余話[神] 未来（オリヴキー　ロツジ訳）[神] 五行易活断[三]
一九二九年	昭和四年	七二歳	易より見たる重大問題[三] 周易一家言[神]

普通選挙法成立

『猿の群から共和国まで』（丘浅次郎）

ぼくはクビである

匠　克仁

ぼくはクビである。

五年間エッセイを書いていて、最近はここ三ヶ月の身の回りに起きたことを書いている。

五十才で発達障害が判明したり、便潜血で大腸内視鏡検査を受けたり、とありふれた日常のできごとを書いてきたが、今回はクビである。

十一月二十一日に十二月末で解雇と言われた。

解雇を通知したのは、人事担当のマネージャーである。ぼくを採用して、発達障害の診察を勧めた人である。

『言ってくれた人が今までの上司の中で一番好きな人だったので、素直に従えた。…ぼくは面接で一日惚れして、入社した。』と半年前に書いた、その人である。

採用の最終面接で初めて会ったときは、三十五才くらいの綺麗なお姉さんだなあと思った。

前々号で男ぼれしたように書いて、性別に触れなかった。読んだ人はその人が男性と思ったかもしれない。

人事マネージャーは男性でなく、ぼくより若い女性である。

入社してから、ぼくより五つ年下の四十五才で独身と聞いて、へ～～～と驚いた。

年齢の近い美人の独身女性が同じオフィスにいると、毎日が楽しい。

といっても彼女いない歴が半世紀のぼくにとってはとても手が届かない。高嶺の花というか、断崖絶壁の上に咲いた花である。お月様を綺麗だなあと見とれているスッポンがぼくである。

この会社に入社する時には合計で四社の内定をもらっていた。三社の内定を断って、入社した。

その内の一社は私鉄の不動産管理会社であった。勤務場所は市役所の中で、市営住宅の担当をする仕事である。公務員みたいなので、本当はそこへ行くつもりであった。

大阪市営住宅は五年ごとに民間不動産会社が入札する。五年の契約社員であったが、同世代の男性が五名くらいで仕事を分担するという話だった。不得意の多いぼくにも務まるかなと思っていた。

そのつもりが最後に彼女に会って、心変わりで今の会社に入社した。

人生どこでどう転ぶか分からないものである。

＊

ここまで書いて、入社すぐのことを思い出した。

いかつい男性社員同士が罵り合いをして殴り合い寸前であった。周りの皆がビビッて見守っていた。

「まあまあ」二人とも落ち着いて」と、どう猛な二人の間に割って入ったのが、その女性マネージャーであった。

世界ヘビー級タイトルマッチでパンチの応酬の間に分け入る女性レフェリーみたいであった。女性闘牛士みたいであった。

かっこいいなあ、男前だなあ、と思った。こういう男前の女性にぼくは惹かれるのである。

ぼくがめめしいからかもしれない。

小学生のとき年下の女の子に「めめしい」と言われたことがある。あとで「女々しい」と書くと知ってショックを受けた。

前号で書いた大腸内視鏡検査であるが、人事担当の彼女に報告しないといけなかった。

そんなシモの話は彼女の前で羞恥心でなかなか伝えにくい。オブラートに包んで、ムニャムニャゴニョゴニョ言っていた。

そうしたら一言で「血便？」と質問された。ぼくはうなづいたが、ホッペの毛細血管が拡張するのを感じた。

ストレートだなあ。そんな綺麗な口から『血便』なんて単語が飛び出すなんて…、ん～～～と妙に興奮した。

＊

毎日が楽しくワクワクウキウキであったが、浮かれている場合でない。

会社の人事はかなり厳しい。毎月どころか毎週のようにどこかの部署で誰かが辞めている。

あまりに入れ替わりが多いので、歓迎会・送別会が一切ない。たった一日で退職した管理職もいた。

その退職者に三行半を突きつけるのが彼女である。

彼女とぼくの関係は、生殺与奪の権限を持つ者と持たれる者との関係である。

身分的には、お姫様と下男、女王様と奴隷である。ぼく…僕は僕（しもべ）・下僕（げぼく）である。

うさぎが雌ライオンに惚れたようなものかもしれない。

十一月二十一日に人事面接があった。毎月の定例のもの

のであるが、二ヶ月抜けて久しぶりであった。

ぼくはいつもの感じの健康状態など確認されて終わるものと思っていた。

完全に油断していたところに、彼女が妖艶なまなざしで、ぼくにクビを告げたのである。

今まで転職を繰り返してきたが、仕事ができないからクビというのは初めてである。

もし、彼女からでなく別の人から通知された方が精神的に楽になっただろう。

解雇を告げられたときには、失業だけでなく、失恋も同時に経験したようなものである。その瞬間は失恋感情の方が失業よりも影響が大きかったもしれない。

アスペルガーはとても晩熟（おくて）で、晩婚タイプ型が多いと本に書いていたが、ぼくはその典型例である。

五十才を過ぎて初恋の相手に振られるみたいで、ショックが大きかった。

その二重苦であるが、もう一つの失業も深刻である。

パートなら残ることは可能ではあったが、とても生きていける条件でなかった。

扶養家族は両親だが、父も母も無年金・無収入で、公的な援助を一切受けていない。頭の中で『一家心中』なんて言葉が飛び回っていた。

正社員からパートに格下げなんて、生き恥をさらすようだ。いったいどのツラを下げて出勤すればよいのか。

かといって五十一才のアスペルガーがまともに就職できるとも思えない。

この一文を書いている現在は、悩み中である。

これから、どうして生きていこうか。アスペルガーにとっては生きづらい世の中である。

いかーーーん。落ち込み過ぎである。アスペルガーは鬱にもなりやすい。

＊

クビを告げられたタイミングが最悪であった。

今期、彼女は資格取得奨励制度を作った。例えば、宅建士の資格を取得すると、報奨金が七万円がもらえる。

ぼくは既に宅建士を持っている。取得済の人はマンション管理士で七万円、管理業務主任者で三万円もらえる。

彼女の作った資格制度の一回目で二資格に合格しようと頑張って、マンション管理士と管理業務主任者の試験勉強を続けていた。

クビを告げられたのは、試験の五日前であった。しかも受験票のコピーを彼女に提出したばかりである。

合格発表は一月初めなので、合格しても既にクビになった後である。最初は十万円を節約するためにクビにしたのかなと思った。

土日返上で二百時間くらい勉強してきたのに、受験する気も無くなって、二つとも試験を放棄した。

資格学校で十万円くらいお金も使ったので、詐欺に

あったみたいだ。頭の中で十万円の札束に羽根が生えて飛んで行った。

『二階に上げて、ハシゴを外す』というが、それに見事に引っかかった。ぼくは打ち所が悪く、瀕死である。

十二月末の退職では転職活動もできないし、失業手当の受給も遅れる。いったい、どこまで追い詰めるのか。

この最悪のタイミングでクビを告げるなんて、彼女は絶対に『ドS』に違いない。

黒皮のボンデージを着て鞭とローソクを持っているように感じた。ぼくの首に鉄の首輪がはめられて、その鎖が彼女の手に握られている。

もっとも、ぼくはSよりもMの方なので、ちょうどいいかもしれない。

あっ、SとかMというのは、Tシャツのサイズの話である。身長は一五九・九センチでSMオールいやsmallであるが、胸囲九十五センチ。ウエスト六十九センチなので、TシャツはSでなくMでないときつい。

彼女は『ドS』といっても、特別に小さいのでない。身長はぼくとミリ単位で同じである。

ヒールの無い靴を履いた彼女とぼくは目の高さが同じなのである。ハイヒールを履くと、その分ぼくより高くなる。ハイヒールでぼくを踏みつけるともっと高くなる。

ぼくの身長が女性の平均値なので、彼女は標準的な高さなのである。

体重は今だと、ぼくの方が上回ったり下回ったりだろう。バストとウエストはぼくの方が上回っている。

こんなこと書いているのが彼女にばれたら、セクハラで訴えられそうだ。

で、何の話だっけ。アスペルガーの話は脱線する。

たしか、彼女がぼくの首輪を握って鞭で打ってローソクを垂らしているというところだった。

少し違うか。最悪のタイミングでクビを言われた、ということだった。

*

クビを告げられたとき「これは誰かの陰謀に違いない」と思った。彼女は騙されていると感じた。

おそらく背後にはイスラム過激派か北朝鮮かフリーメイソンか巨大組織が隠れているのだ。いや、どこかの異星人が地球を侵略しようとしてたくらんだに違いない。

ぼくはあることを思い出した。

彼女が自分で自分に懲戒処分をした。たしか給与一割カットの通達を出していた。理由は個人情報漏洩の監督不行届ということであった。

直前にこんなことがあった。ある女性社員の人事異動が漏れた。マネージャー会議でしか発表していなかったので、女性社員は自分の異動を伝えられていなかった。

それが、君って今度○○に異動なんだってね、と話しかけられて、水面下での大騒ぎになったのである。

次のマネージャー会議で女性マネージャーの部下が犯人にでっちあげられたとぼくは聞いた。本人はいないので欠席裁判である。

ぼくはたまたま情報漏れの経緯を知っていたので、それが冤罪だと分かる。濡れ衣を着せられた人も給与カットされて、そのまま会社を去っていった。

その人のようにぼくも何か身の覚えのない罪をなすりつけられて、クビにされたのかなと思ったのである。

*

ここまで読んだ読者で前号を思い出した人がいるかもしれない。こんなことを書いていた。

『会社で人日の無いときに、下半身裸でコピー機の上に座って、カラーコピーをするのである。もし、コピーをしている場面を見つかったら、即クビになるだろう。』

なんか兄事に予言しているみたいである。やはりリアルタイムのエッセイはまずい。今後は書かないでおこう。

けけけっして、下半身裸で会社のコピー機でお尻をカラーコピーしたから、会社をクビになったのではない。

そそそんなこと実行しようとする前にクビになったのである。

クビといっても何か会社に損害を与えた訳でない。単に仕事ができないからクビなのである。解雇理由はミスが多いのと部下の管理ができないことである。

ぼくの症状はアスペルガーが主であるが、AD／HD（注意欠如多動性障害）attention deficit hyperactivity disorder が副で診断されている。どちらも大人の発達障害である。

AD／HDはその名称の通り注意力が欠如している。脳内神経物質のノルアドレナリンが不足しているようだ。飲んでいるストラテラという薬はアスペルガーでなく、AD／HDの症状を抑えるものである。

客観的にもミスは確実に減っていた筈であった。作業上では、ぼくよりも数十倍のミスをしている人がいる。

不動産資料の作成がぼくの仕事なので、後工程の作業になる。指示通り作成したのに後でミスが発見されて、ぼくのミスにされたこともある。

ミスの多い病気ということが職場の上長に知られている。それが先入観を与えている気がした。

もう一つの部下管理であるが、アスペルガーは部下を持つのが苦手である。

パートが多い職場なので、パートを管理しないと正社員の資格がないと言われた。

でも、不注意や部下管理がクビの理由になるなら、その理屈では全人類を解雇できてしまう。

*

クビは斬首つまり首切りである。英語でば、クビはfire＝火＝火刑＝火あぶりの死刑である。

クビと言われて、アスペルガーのぼくはギロチンや火

あぶりの刑を想像する。

退職というのはストレス度でいえば、近親者の死などに次いでかなり大きいとされている。特に自分の意思でなく、突然であるとストレスは大きい。

お茶らけて書いているが、自殺したいほどつらい。

その日は一睡もできずに翌日は会社を休んだ。その次の勤労感謝の日であるが、寝込んでいた。

次の金曜日はなんとか出社したものの土曜日は寝込んだ。日曜日は試験で会場に行ったが、試験を放棄して寝込んだ。また月曜日も一睡もできずに会社を休んだ。

クビから今まで一ヶ月以上ずっと仕事中マスクを着けている。ホッペがごっそりとこけ落ちたからである。

三十年間ほぼ五十三キロをキープしていた体重が四日で四十九キロになった。四十キロ台になったのは、大学一年生でレスリングの四十八キロ級に出たときと、前に失業したときくらいである。

この経験を活かして、クビ・ダイエット法を提唱しようかなあ。

体調が悪くなっているので、健康死んだん…いや健康診断でまた再検査になるかもしれない。あっ、健康診断は受ける資格が無いか。

五十一才の今まで白髪は無かったが、解雇通知以降に白髪が生えてきた。

不幸や恐怖の体験で一夜に白髪になるというのは、生物学的にありえない。

あの日以降に伸びた部分だけ白髪になっている。毛染めした人の髪が伸びたみたいである。

以前はストレスで髪が抜けていたので、白髪で抜けないのは喜ばしいのだが。

ストレスでまた大腸から出血するのでないか、と心配になった。

口内炎ができて、口の中から出血した。顔にニキビができて、そこから血が噴き出した。それと同じ現象が下の方でも起こるかもしれない。

『前門の虎、肛門の狼』の状況である。肛門に狼が口を突っ込んで大腸を食い破るイメージが思い浮かんだ。

大腸内視鏡検査をして、腫瘍などが無いのは確認しているので、大丈夫だろうが…。

＊

このような妄想癖やクビでギロチンや火あぶりを連想するのがアスペルガーらしい。

アスペルガーの特徴は、比喩など理解できずに、文字通りを想像する。ぼくは特にその傾向が強いのである。

「腸（はらわた）が煮えくり返る」とか「断腸の思い」など具体的に自分の腸でそのような現象が起こっていることをついつい想像してしまう。

だから出血するのかもしれない。実際にがん患者が自分のがんが小さくなるとイメージしたら小さくなったという話がある。

ぼくは逆の悪いイメージ化をしている。

他にも、ぼくは例えば次のようなことわざを本当に文字通りに具体的に脳の中で映像化する。

「苦虫を噛み潰す」「真綿で首を絞める」「身から出た錆」「血で血を洗う」「口八丁手八丁」「へそで茶を沸かす」「二階から目薬」「清水の舞台から飛び降りる」

「胸に一物」は胸からチ○○が生えている姿を想像する。

「目クソ鼻クソを笑う」本当に目クソと鼻クソを思い浮かぶ。目クソの怪物が鼻クソの怪物を笑っている状況まで想像してしまう。「ミソもクソも一緒にする」とか「クソ喰らえ」なんて言われると…。おえ～～～。

＊

タイトルは前号に合わせて付けた。

「ぼくはクビである」という表現は、日本語上文法上表現上不適切不適用不適合不敵なものかもしれない。

実は、文法的には正しい表現である。「お前はクビだ」という言い方は普通に使われている。

国文法上は、『換喩』という比喩の一種になる。

比喩というのは、直喩（～のようだ）と隠喩（ようだが無い）の他に換喩がある。

換喩とは「その物の属性やそれに関連深いものをもって言い換えてその本体のものを表す方法」である。

「おれは頭だ」というと「かしら」でも「あたま」でも集団のトップを意味することが分かる。「頭のようだ」とは言わない。

「お前はおれの右腕だ」と言われれば評価されている。

「お前はおれの足だ」と言われればこき使われている。

「手が足りない」とは仕事する人が少ないと分かる。

これらは全て換喩なのである。

アスペルガーのぼくは右腕と言われたら、その人の右腕から自分の上半身が生えている姿を想像する。

換喩について一般の人には普通に聞き流せることが、ぼくには耐えられないことがある。

例えば「鍋を食う」

そんな固いものを食べられるか。食うのは鍋の中身だ。

と心の中でぼくはつぶやく。面倒くさい性格だ。

「ジンギスカン鍋」

中国の皇帝が鍋の中で煮られているなら人肉食だろう。

「冬は鍋」

四季を調理器具に例えるのっておかしい。

「鍋焼きうどん」

うどんの具が焼いた鍋か。焼うどんというなら、焼きそばの中身がうどんに変わったものでソース味だ。焼くのでなく煮るだろ。

「洗濯機が回る」

そんなでかいものが回るか。

「洗濯機がからまった」

どうして鉄の塊がからまるのか。超常現象か。

中身を表す鍋や洗濯機の例は換喩の中でも国文法上は『包含』という。包含は数学の部分集合で使われるが同じような概念である。

「女子高生市場」「赤ちゃん売り場」

人身売買か。……きりが無いので止めておこう。

ぼくはクビであると自分で書いていて、自分の体の九割が首の、とてつもなく長い、ろくろ首の姿を思い浮かべた。キリンもキングギドラもびっくりである。

自分の首で蝶々結びができてしまう。自分の首で縄跳びができるのである。

蛇にぼくの頭がくっついたような姿も想像した。以前に書いた『ちんちくがん』に匹敵する姿である。

ちなみに『ちんちくがん』というのは、チン○＋乳首＋顔の組み合わせである。この詳しい実態については、一三五号の『空飛ぶ人喰いイカ』をご覧ください。

＊

恨みつらみを書いてきたようだが、エッセイ上の演出である。

ぼくは彼女にも会社にも感謝している。

発達障害と診断されたのは、今年の三月である。その時点でクビになっていてもおかしくない。それから九ヶ月も雇ってくれている。

そもそも会社が発達障害と知っていたら、最初からぼくを採用しなかっただろう。

人事から見れば、商品を買ったら傷物だったという話である。腐ったミカンをミカン箱から捨てるようなものだ。ペットを飼ったら病気だったので、殺処分しようかということである。

採用されたのは債権管理、つまり滞納家賃の督促業務であった。対人関係が不得手で交渉下手なアスペルガーにとっては不向きな職種である。

診断された後も、ぼく自身が無理だと思って辞表を書こうとしていた。

それを予想したのか、先回りして人事異動があった。アスペルガーにとっておそらく唯一の仕事ができそうなところであった。賃貸物件の広告資料を作成する仕事に異動してくれたのである。

もともと正社員のいないところなので、人事上も特別な配慮である。そこまでしてもらったので、本当にありがたいと感謝している。

自分としては期待に応えようと努めていた。しかし、人事の期待通りの業務成果が上がらなければ、排除されても仕方がない。人事は自分が評価するものでなく、第三者が判断するものである。

今回もパートで働く選択肢も用意してくれている。もっともそれでは生活できないが。しかし、生活できないのは個人の問題であり、営利企業の問題でない。

クビを告げられたタイミングが最悪であったが、わざと狙ったはずもない。

試験を受けても受けなくても十二月末での解雇が決まっていたのだ。

そうすると労働基準法上は一ヶ月前に通知しなければいけない。必然的に十一月末の試験直前になってしまう。

逆の立場で、人事で社員にクビを告げるのも大変な仕事だなあと感服しているのである。とてもじゃないが、ぼくにはそんな重要な仕事は務まらない。

彼女は人事の責任者だから、ビジネスライクに判断するのは当然である。ドライに粛々と業務を遂行する姿はかっこいいなあ、男前だなあとぼくは尊敬する。

＊

文章を書いていると、自分を客観視できる。

本当はエッセイや小説なんて書いている場合でないかもしれない。生きるか死ぬかの瀬戸際である。しかし、書かないと生きていけない。

ライティング・セラピーというものがある。文字通り書くことによって癒される療法である。

書くことで混乱が整理される。客観的になることで、現実を受け入れられるようになっていく。

今回も書いている内に自分が被害妄想に陥っているなと客観的に判断できた。

死にたいほど落ち込んでいたのに、書いたら毒出しできて、すっきりした。

ライティングセラピーで書くのは日記でも良いが、第三者の目に触れる方が良いと言われている。

ブログなどでインターネットで発信するよりも、まんじのような紙媒体の方が効果が大きい。もっとも、まんじにとっては迷惑だろうが。

つらい感情も人に伝えると半減する。多くの人に伝えるとほとんど無くなってしまう。

十一月二十日まで資格勉強ばかりしてて、さすがに今回はネタが無いなあと思っていた。神か天か人智を超越する存在がちゃんとネタを用意してくれていた。

＊

最近はエッセイばかりで小説を書いていない。久しぶりに小説を書こうと考えている。

今回の件で経済小説のアイディアが思い浮かんだ。

美人女性人事部長が主人公で、社員数を半減するミッションで親会社から派遣されたという設定である。

あだ名は『首切り姫』で、タイトルにしようかな。

まんじに今まで場違いのエッセイを書き続けてきた。よく許していただいた、いや許してなくても検閲なく、伏字にもされず掲載してもらってありがたかった。

まんじには次回から真面目な作品を書くつもりである。

周りの空気が読めないアスペルガーのぼくでも分かる。

まんじにこんな作風で書き続けていると、どうなるか。

ぼくはクビである。

二〇一八年・戌年　表紙絵解説

田寺怜葦

戌年がやって参りました。戌年にスタートしましたコブッタさんの表紙絵ですが、早くも一回りしてしまいました。過ぎてしまえば光陰矢の如しですが、感慨深いものがあります。今年の題材は「南総里見八犬伝」、長編伝奇ロマン小説の代表的な作品です。作者の曲亭（滝沢）馬琴が、四八才から七五才までのおよそ二八年の歳月をかけて刊行した江戸時代末期の大作です。テーマは勧善懲悪、因果応報。仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌のそれぞれの霊玉を持つ八人の剣士が、主家にかけられた悪霊の呪いを打ち破るという物語。単純ではありますが、日本人の心の基本的理念が小気味良く貫かれています。

さて今日の日本を眺めてみますと、やはり邪悪な呪いが蔓延しているように思えてなりません。敗戦から約七〇年、アメリカによってかけられた呪いは益々その根を張りめぐらせ、日本を奇形の国にしてしまいました。あるべき正常な姿に戻すためには私達国民の強い意志が必要でしょう。一人ひとりが八剣士になり、まずは日本を呪縛している憲法に風穴を開けたいものです。

平成三十年がその始まりの年でありますよう、コブッタ伏姫と八房に願いを託しました。

編集後記

まんじ一四七号は、鈴木守氏の健康回復による復活、堀内永人氏の老人施設からの前号に続く寄稿、葵州月氏の久々の寄稿、濱本章氏の特別寄稿（三戸岡氏の紹介）、今年度からの新たな表紙絵を戴いた田寺怜葦氏の表紙絵解説等で、目次に二十六人のお名前を連ねることができました。このような賑々しい同人誌が発行できましたことを、まずもってお喜び申し上げたいと思います。

お正月、今の政治はこれでいいのか、日本の国は国内的にこのように物的に恵まれ、平和だと言ってこのままでいいのか、とふと不安になりました。

雑誌「致知」誌二月号の中での京大の中西輝政名誉教授と、ジャーナリストの桜井よしこ氏の「日本の活路をどう開くか」を読んで、中国の野望、北朝鮮の核保有、アメリカの外交的弱体化など、今我が国が置かれている危機的状態を考えて行くと、「アメリカの核の傘に保護されている日本」の弱さというか不安を感じざるを得ません。国民的に「日本はこのままで立ち行くのか」を考える必要を改めて痛切に感じました。そこに「フランスが男女とも一年間の徴兵制を復活する」とのテレビニュースが飛び込んできました。ヨーロッパの国でも？。

皆様はどのようにお感じでしょうか。外交と防衛力の増大の前に、危機感に対して国民的コンセンサスを図る政治家の必要を感ずるのは小生だけでしょうか。

（鍋）

まんじ第147号

平成30年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045(544)5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町7-1

表紙の絵について
「至誠天に通ず」

田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.148

2018.5.1

まんじ第百四十八号　目次

司馬凌海 …… 永田俊一 … 4
—信託プラットフォーム記述の試み—
強権併合と分離独立の狭間で …… 新井宏 … 33
語り部・太平洋戦争 …… 濱本章 … 40
日本の復古と革新 …… 浅野博文 … 49
横浜中華街　歴史の断面 …… 鍋屋次郎 … 57
短歌　行雲流水（五十六） …… 石黒修身 … 67
漢詩　潮汐録（九十一）《漢詩の流れ79》 …… 鯨游海 … 70
漢詩　汲深録（十二） …… 松井秀人 … 73
風の泉（第2回） …… 葵州月 … 75
ロボット雑考（その十） …… 三戸岡道夫 … 104
忠山人日乗（二） …… 忠内正之 … 113
窮極の特攻兵器（二） …… 千坂精一 … 122
—その後の神雷部隊

日本四大都市マラソンを走る（名古屋・京都編） … 安藤剛 … 138
「農ある暮らし〜私の日常〜」(7) …… 古屋富雄 … 150
「余談ながら」考 …… 山田嘉久 … 154
—司馬文体の最大特徴として—
青雲の彼方（二） …… 太田精一 … 161
千家尊福伝（一九） …… 村上邦治 … 172
借金破綻を乗り越えた都電生みの親
『時評家　新明正道』（評伝その九の二） …… 山本鎮雄 … 184
—新明正道著『欧州危機』（一九三一年一一月）—
性と化粧の物語（十一） …… 鈴木守 … 197
大頭龍神社と抜里の物語（二） …… 横山正義 … 204
世界の国旗から学ぶ（第七回） …… 米村典紘 … 209
明治時代の著述者　渋江保の一生（その十三） … 山本勉 … 229
筆休め …… 匠克仁 … 234
編集後記 …… 編集子 … 239

司馬凌海

—信託プラットフォーム記述の試み—

永田俊一

タに積み込まれ、ＡＩに作業させたらどうなるだろうか。矛盾の発見やある種の衡平観により真実の記述に是正されて行くのだろうか。それとも、自分の都合のよいストーリーに拘るのが人間の性故に、無限に続く私家歴史作りが猖獗を極めだすのだろうか。復た、認定や認識や評価の新たな基準作りや裁定メカニズムの必要が論じられることになるのだろうか。

日中韓で歴史の検証が行なわれても、なかなか同一の史実表現にたどり着かない。グローバル・データマトリクスでつき合わせたらどうなることか。人間の物理的発展とか取巻く自然や環境といった点では広く深く詳しく焦点が合ってゆくものと考えられるが、民族や王朝や国や地域や組織や家や人物の営みについては、そうは言い切れまい。最早や悠久の彼方の今の何処にも誰にも関係

（序）

歴史は残酷なものであるが、その記述もまた残酷である。

万能の神からみれば歴史の事実は一つでその記述もまた一つである。しかし人間は歴史の事実を完全に認識共有はしていないし、評価にも偏りがある。即ち記述には、凹レンズ凸レンズがそこら中に隠されている。年表は代表的事実と人物の無味乾燥の羅列であったとしても、背後には事実と評価についての数え切れない選択肢や物語が存在する。同じ事実でも立場が違えば評価も異なる。一方の善が他方の悪であったり、立場が同じでも違った事実を語っていることもある。

仮に今見えるもの見えていないもの全てがビッグデータに積み込まれ、ＡＩに作業させたらどうなるだろうか。矛盾の発見やある種の衡平観により真実の記述に是正されて行くのだろうか。それとも、自分の都合のよいストーリーに拘るのが人間の性故に、無限に続く私家歴史作りが猖獗を極めだすのだろうか。復た、認定や認識や評価の新たな基準作りや裁定メカニズムの必要が論じられることになるのだろうか。

日中韓で歴史の検証が行なわれても、なかなか同一の史実表現にたどり着かない。グローバル・データマトリクスでつき合わせたらどうなることか。人間の物理的発展とか取巻く自然や環境といった点では広く深く詳しく焦点が合ってゆくものと考えられるが、民族や王朝や国や地域や組織や家や人物の営みについては、そうは言い切れまい。最早や悠久の彼方の今の何処にも誰にも関係の無い史実は別として、特に人物像などは取上げられる度に、新たな史実が見つかったとか証言があったとかでカメレオンのようにその像が変わるのは、何処かの大河ドラマを見ていても直ぐ分ることである。これは歴史は今に繋がっているものであり、今の人たちのストーリーだから致し方ないのだろうか。歴史上の有名人物になればなる程幾何級数的に像が描かれ、現存する子孫や関係者に何がしかの影響を与える。有名税でプラスが多い等とだけは言ってはおられまい。

歴史の負の側を背負った人物は新史実で名誉回復ならいざ知らず、登場の度に負が強く重ねて刷り込まれて行くおそれが高い。しかも、新たに取り上げられることもなくあるいはたまさかとりあげられた時に、史実や常識と違う負のイメージを蒙ったままの人物は、かえり見られることを待っているかも知れない。

少なくとも等身大に近い人物像を望んでいよう。

「歴史に学び、事の由って来るところを事実に依って究明し、自然の理に従い、時勢に的確に対応し、事を実現することが道であり、矜持を以て事に処す。」私の信条でもあるが、これを仕組みにおとすと信託になるといっている。信託のプラットフォームに乗せて、事実に基づく歴史という委託者から受託し、常識的不偏の立場で歴史上の人物や事柄を等身大に戻す試みについて考えてみようと思う。先ず身近から始めてみよう。

（一）

気になっている人物がいる。郷里佐渡出身の司馬凌海である。

先ず予断をもたれぬよう、碑文と年譜で淡々とその生涯を辿ってみよう。

佐渡の生家に近い国道三五〇号線沿いの地に、昭和五三年、没後百年祭記念に建立された顕彰碑がある。

「司馬凌海先生は天保一〇年（一八三九）真野町新町に生まれ神童といわれた　十二歳江戸に出て松本良甫　佐藤泰然に医学を学びその後蘭方医ポンペに就いた　二十四歳新しい医学書　七新薬を著し　明治元年に東京大学の前身医学校の教授となり　さらに少博士となった　語学は天才で六カ国語に通じ　ドイツ語の私塾　春風社を創立　その門下から多くの人材を出した　明治五年日本最初のドイツ語辞典を出版　黎明期日本に大きな功績を残した　同九年愛知県医学校教授兼院長となったが門下生に後藤新平がいた　明治十二年（一八七九）三月十一日神奈川県戸塚で肺結核のため三十九年四ヶ月の生涯を終えた」（山本修之助撰、本間守拙書）と記されている。

これでは簡潔すぎるので、行年（明治十二年）に一番近く、一番身近だった人の題額のある碑文を、年譜で補強しながら辿ってみよう（現代文書き下しは前記山本修之助氏、年譜も同）。碑は、名古屋市の大須にある大光院境内にある。（段落で切りながら必要なコメントを付す）

「君　諱（いみな）は盈之（みつゆき）、字（あざな）は子虧（しき）、損軒（そんけん）と号す、別号無影樹下船楼。初め凌海と称し後諱をもって称となす。本姓島倉氏、世々佐渡に居り農をもって業となす。君にいたりて始めて医をもってあらわる。家を弟某に譲り、姓を司馬と改む。けだし島と司馬同音あい通ずるをもってなり。考（こう、父）を栄助と称し、妣（ひ、母）は山本氏なり。君　天保十年十一月二十八日をもって生る。」

○佐渡国雑太（さわた）郡新町村一二三番屋敷（のち新潟県佐渡郡真野町新町一六九番戸）に父栄助母らくの長男として生まれる。

「天資頴邁（えいまい）、博覧強記、一見誦（しょう＝そらんずる）をなし、年を経て一字を誤らず。年はじめて九歳よく詩を賦す。後十二歳王父（おうふ＝祖父）伊右エ門に従いて江戸に来り、唐津藩儒山田寛につきて漢籍を学び、神童の称あり。」

○弘化三年（一八四六）八歳、『余も八歳にして、詩を作り、十一歳にして文を属す』と自記している。九歳ともいう。また十一歳で金北登山の詩を作って、人々を驚かせたともいう。

○嘉永三年（一八五〇）十二歳、五月十日、祖父伊右衛門に連れられて、初めて江戸に出て、唐津藩の儒者山田寛について漢籍を学ぶ。

「ついで蘭疇（号）松本公の門に入り始めて蘭学をおさめ、佐藤泰然翁に就学して医術をおさむ。留学六年郷に帰る」

○嘉永五年（一八五三）十四歳、松本良甫（幕府奥御医師）に奉公し、その養子松本良順に蘭学を、佐藤泰然（良順の実父、佐倉順天堂の祖）の門に医学を学ぶ。江戸・佐倉併せ滞在は六年であった。このころ「太仲」と称す。

○安政三年（一八五六）十八歳、一月六日、父栄助死去。

○安政四年（一八五七）十九歳、郷里佐渡新町に帰る。「志馬致恭」と自署のオランダ文字の書幅が残されている。

「再び江戸に遊び、松本公に随いて肥前長崎にいたり、蘭人朋百（ポンペ）氏を師として居ること三年業すでに

達す。漫遊して平戸にいたり寄寓すること二年、七新薬をあらわして名海内に馳す。佐渡に帰る。」

○安政五年（一八五八）二十歳、晩春　小木町清風楼で、屏風に揮毫したものが残っているので、松本良順のすすめで、オランダ医ポンペに就くため長崎へ行ったのは、その後であろう。

○万延元年（一八六〇）二十二歳、長崎伝習所で、ポンペ講義を筆記した者は、伝習生三十人余りのうち、良順と凌海だけという。（長与専斎『松香私志』）

○文久元年（一八六一）二十三歳、一月、日本滞在中のシーボルト（再来日中）を、佐藤尚中（佐藤泰然の養子で後継者、この時はここに）、関寛斎（佐藤泰然門下、同）と共に訪ねる。六月、松本門下を除籍（後復籍）され、長崎を去り、九州の旅を。七月二十六日から八月十五日までの記録を『東土漫誌』にラテン語で綴る。平戸藩医岡口等伝方へ身を寄せ、ついに長女の婿となる。この時の子が亨太郎（文久三年一月七日生）。居ること二年で佐渡へ連れ戻される。

○文久二年（一八六二）二十四歳、一月、尚新堂から「七新薬」（和綴三冊）出版。近藤芳樹（国文学者）の序文、関寛斎（長崎時代の友人）の校閲。出版費は寛斎の紹介で浜口梧陵（和歌山県、山サ醤油の七代当主で社会事業家）で、また出版については、その知人大阪の秋田屋太右衛門であった。

「奉行　君をもって医官兼洋学師範となす。」

○元治元年（一八六四）二十六歳、五月、佐渡の儒者円山溟北の病気診察を、江戸の松本良順に紹介する。このころ、郷里佐渡の新町で開業していたが、オランダ医者というので患者も少なかった。

○慶応元年（一八六五）二十七歳、十二月十六日佐渡最後の奉行鈴木大之進相川着。奉行所の詰医師兼洋学師範を拝命。この年か翌年相川町へ移住。

○慶応二年（一八六六）二十八歳、三月十七日祖父伊右衛門死去六十六歳

○慶応三年（一八六七）二十九歳、二月、佐渡奉行所で全島医師の学識吟味、この時試験官となる。八月五日イギリスパークス公使来島時通訳。この年（か）、佐渡小木町柴田周斎二女春江と結婚。春江十九歳。

「いくばくもなく職を辞し、また江戸に遊びて、専ら英書をおさむ。時に朝廷新政を布き、ぬきんでて徴士に挙ぐ。明治元年三月はじめて三等医学教授となり、もっぱら演訳講述をとり、よく学生を誘導し、おおいにわが医学開進の基を立つ。五月二等教授に進み、二年七月大学大助教授に任じ従七位に叙せらる」

○明治元年（一八六八）三十歳、九月八日明治改元。この年の初め、横浜に居て横浜総督東久世通禧の通訳をしていたらしい。三月明治政府の成立とともに、医

学校に三等医学教授、五月二等医学教授。
○明治二年（一八六九）三十一歳、七月医学校の大助教、従七位となる。

「三年三月少博士に転じ正七位に叙せられ、本官をもって兵部省病院出仕を兼ね、七月更に文部少教授に任じ、ついで中教授に進み従六位に叙せらる。五年正月東校教場の事を管理し、ついに大教授に進み正六位に叙せらる。九月さらに文部省五等出仕の命あり、六年十二月兼ねて宮内省五等出仕に補せられ、」

○明治三年（一八七〇）三十二歳、三月医学校の少博士、正七位。八月十七日佐渡から上京した友人（一歳年長）山本渚鴻（修之助の祖父）が、下谷練塀町の自宅をたずねた時、正七位博士の礼服を着て、出世ぶりを見せた。この頃、下谷練塀町三六番地にドイツ学私塾「春風社」創設（明治八年迄六年間続く）

○明治四年（一八七一）三十三歳、一月（孟春）「独逸学入門」（春風社刊）。三月「独逸文典字類」（春風社刊）。（発行月不明）独逸単語篇（春風社刊）。四月本官のまま兵部省病院出仕を兼ねた。ここでフランス語版から「解馬新書」なる馬の解剖書を翻訳した。七月、文部少教授、さらに中教授、従六位となる。八月ドイツ人医学者ミュルレル、ホフマン両氏の来朝につき通訳にあたる。

○明治五年（一八七二）三十四歳、一月東校の大教授、正六位となる。この時大教授になったのは、他に佐藤尚中だけ。九月文部省五等出仕となる。十月（孟冬）春風社から「和訳独逸辞典」を出版。日本最初のドイツ語辞典といわれる。

○明治六年（一八七三）三十五歳、五月宮内省出仕も兼ねていたので、明治天皇の命を受けて、ホフマンに従い、石黒忠悳とともに、西郷隆盛を診察した。

「七年十月両省出仕を免ぜられ位記を奉還す。八年五月元老院少書記官を授けられ、ふたたび従六位に叙せらる。十二月本官を免ぜられ、」

○明治八年（一八七五）三十七歳、五月元老院少書記官となったが、十二月免官となる。夏ころ、私塾「春風社」を閉じる。

「九年五月愛知県これを聘して病院医学教師となす。十年四月期満ちて職を解き、さらに名古屋に開業す。遠近来り治を乞う者の履（くつ）常に戸外にみち沈痾痼疾（ちんあこしつ）を救療し、その功をあらわす者枚挙にいとまあらず。しこうして業余は、すなわち徒を会して講授し諄々うまず。君　私立病院・私立学校を建設するの志あり。」

○明治九年（一八七六）三十八歳、五月愛知県病院医

と医学教師となり、名古屋へ。秋、後藤新平が、福島県須賀川から来て門人に。この時大光院の寺に住み私塾を開き塾生が二十名位いた。塾頭に佐渡相川町出身の滝浪図南がいた。

○明治一〇年（一八七七）三十九歳、四月愛知病院医、医学教師満期辞職し、名古屋で開業。次女文子出生（のち喜多家に嫁し、女流棋士七段となる）

「不幸一朝肺患にかかり佳苒（じんぜん）癒えず。豆州熱海にゆき湯浴の治をなす。しかも効なく病益々加わり、まさに東京に帰らんとして相州戸塚駅にいたり溘然（こうぜん＝たちまち）易簀（えきさく＝学徳のある人の死）す。行年四十一歳。実に明治十二年三月十一日なり。ついに東京に舁送（よそう＝かつぎおくる）して駒込千駄木町総禅寺に葬る。」

○明治一一年（一八七八）四十歳、春ころより、肺結核にかかり、私立病院や私立医学校設立の計画も中止となる。京都に行き、転地療養する。

○明治一二年（一八七九）四十一歳、三月十一日、静岡県熱海に療養中、上京し診療を受けようと神奈川県戸塚迄来た時、急逝。東京駒込千駄木町総禅寺に葬ったが、のち青山墓地に改葬した。墓碑は「従六位司馬盈之墓」とある。

「付記」誕生の年を、零（ゼロ）歳とすれば、死去の年は、四十歳になるが、この年譜は慣例に従った。なお、墓碑には三十八年五ヶ月とあるが、誕生の年に誤りがなければ、三十九年四ヶ月となる。

「けだし、君　不世出の才をもってつとめ、学は六国をかね、ことに独・英・蘭の学はくわしく、著訳の医書数十種ありて世におこなわる。かって東京において私に『春風社』を開き生徒を教授し、その員千有余人の多きにいたる。けだし、弘化初年より明治十二年にいたる数十年間、首として独逸学を講じ、医林のため力をつくし、蒙をひらき陋（ろう）をやぶり、ついにわが医道をして隠々の中に開進せしむる者、その功偉なりというべし。他日皇国医学史を編輯せば、君をもって医道改進の嚆矢となさずして可ならんや。

ああ、天もしこれに年を仮（か）さば、その業まさにこれより大なるものあらん。しこうして今やすなわち亡し。ひとたび君の風采に接っせんと欲するも、また得べからず、あにまたかなしまざらんや。

たまたま君の門人愛知県医学校病院長後藤新平・同一等助教論滝浪図南来りて碑を建て君の行実および遺蹟を勒銘しもって不朽に伝えんことを謀る。余　知を君に辱（かたじけな）うすること年あり、しこうして余の兄事するところなり、あに欣躍してこれを賛成せざるを得んや。すなわちこれを四方に檄す。有志来り訪う者一百余

名、ここにおいて明治十五年三月十一日をもって君が晩年帷をくだす（塾を開いて教授する）の地、愛知県名古屋大光院内について、貞石を立て、その状を刻みこれにかかるに銘をもってす。その辞に曰く、廃を起し痼を愈し、人みなその庇による、砦書道をあきらかにし、世永くその利を蒙る。いわんや才高く学ひろく、人を教えておかず、実に医林の懿（い＝善美のこと）なり、よろしくその門に出づる者、ことごとく偉器となり、よくその志をつぐ、ああ誰か学徳のせしむるところにあらずといわんや。

明治十五年三月十一日
陸軍軍医総監正四位勲二等
松本順　題額
陸軍一等軍医正六位勲四等
横井信之　選
福岡欽崇　書」

○同じく碑文であるが、没後二十八年、建立の場所（佐渡）、撰文者（同じく近くにいたとしても医学校以後）も違うものが、この「けだし～」以降のところを如何書いているか、見ておこう。（履歴は余り変わらず略）

『ああ　先生流俗を蝉蛻（せんぜい＝超然として世外に抜け出ること）し、その才をふるってもって数国の学に通ず。雄偉非常といわざるべけんや。先生もとより神識あり、読書ははなはだ勤苦せずして、これをよくす。かって字書を再検せしことなし、羅甸・希臘（ラテン・ギリシャ）の深文・奥語といえどもこれを解す。ただその易きを見、その難きを見ざるなり。

かえりみるに、これよりさき欧州の学を講ずる者、たいてい荷蘭をもって主となす。しこうして英・仏をかぬる者少なし。かたわら羅甸・希臘に通ずる者もっとすくなし。その独逸をかぬるにいたっては、すなわち先生一世に冠たり。先生初め蘭をもって英に参じ、ついに英をもって独・仏に参ず。文互研覈（けんかく）、豁然（かくぜん）として天文・地理・歴史・法政の諸科に通ず。裁判医学の如きは、すなわち先哲のいまだ研究せざるところなり。学者のよく通ぜざるところにして、その書を訳す。先生実にこれが先を開く。この時にあたり、独・仏医書を求むる者あるは論なし。朝野みな先生に待つ。先生文をなすに敏捷、しかれどもみずから筆をとること罕（まれ）にして、すこぶる講述に妙なり。つねに原書をとり口誦し、弟子をして筆記せしむ。往々暁に徹して卓然労苦の態なし。著訳数十巻、みなもって不朽にたる。もし天これに年を仮し、もってその才力のいたるところをきわめしむれば、いづくんぞはかるべけんや。

友人後藤新平君、幼にして先生に従いて遊ぶ。余君と談じおよびて、いまだかってその不幸中道にして没するを嘆かざるなし。君さきに同志とはかり、石を名古屋大光院に立て、勒するに横井軍医正の文をもってす、すこぶる準備たり。すなわちここに較略を揚げてもってその郷人を慰む。銘にいわく

天地の清気。あつまりて偉人となる。卓たりわが凌海。学識絶倫。著訳蔚々たり。育英彬彬たり。世をたすけ教を立つ。志深く味真なり。天の忌にあい。ひとたび病みて身なし。身なしといえども。亡びざるは神。真野の下。恋浦の浜。令名石にあり。千載新たなるが如し。』

明治三十九年十二月
元帥陸軍大将二位大勲位功二級侯爵
山県有朋　篆額
陸軍軍医総監従三位勲二等功三級男爵
石黒忠悳　撰文
後進　山本充　謹書
佐渡医会　及　有志者　建之』

（二）

日本の歴史を語るとき、幕末維新の重要さは言うまでもないが、その疾風怒涛の変革・移行を何とか破綻させずに乗り切ったことは、快挙といっていい。しかし、大変革は経常と違って、大きな多くの犠牲も強いる。同時に、その異能がこの異常時に、まさにその時・人・周囲の流れを得て、その変革・移行の危うさの側面から見れば、奇跡的に支える異彩が放たれた分野があった。

司馬凌海の短き一生は、まさにその典型と言え、西洋医学への大転換の緒を確実にした時期にピタリと重なって、そこにまばゆい光彩を放っている。両碑文の「けだし～」「ああ～」は、同時代人がそのことを伝え残さんとしたものである。

日進月歩の医学の世界で、歴史に貢献した人々の事跡の痕跡を、日常に見つけ感じることは難しい。医道・医術の確立や病原・施術・医薬の発見等で画期的なものが、歴史の光の中に新陳代謝されてゆく。いわんや、移行期を脇から支えたものが歴史に残されるとしても、社会の記憶にそのまま残され継がれてゆくことは、稀といえよう。

その「人となり」を引っ張り出す時が経てば経つ程、分野が離れれば離れる程、評価も変わってくる。すなわち、純然たる歴史の再評価は別として、違った方角から光があたると、その可能性が高いということである。そしてまた、別の分野の評価尺度のところで動いてしまう

と、その後そこを再評価する確率は低く、固定観念化しやすい。

伝を書いた人々は、必然的に医学や学問・教育の分野の人々が多いので、その副題をみてゆくと、例えば、「佐渡が生んだ最も傑出した英才」「佐渡の生んだ我が国近世医学文化史上の偉傑」「語学の天才」「明治初期におけるドイツ語学の天才」「我が国最初のドイツ語学者」といったところに集約される。これが少し物語り風になり、その人となりといったことになると、「語学の奇才」といった副題が付けられ、エピソード探しになってくる。例えば佐渡の郷土史家で高名な山本修之助氏が司馬凌海を扱った著作の中で、そうした角度から項立てしたものをみると（「司馬凌海―語学の奇才」新潟日報社）、次のようである。

○小便にも祖父が付きまとう、○ハチを殺し、『祭霊』に文才示す、○松本良順に呼ばれ長崎へ、○生後、初めて外国人から受講、○ねたみの謀事、針カユ事件、○青春の日つづった東上漫誌、○漁色にも尋常ならぬ奇才、○「七新薬」の出版が好評博す、○通訳しながら英語の勉強、○日本人の独逸語通訳、○読めて、書けて、しゃべれる、○初めてドイツ語辞典を出版、○後藤新平に翻訳手伝わす、○司馬正七位と円山正無位、○ホフマンの西郷診察を通訳、○最上の妙薬、石黒の見舞い、○帰京の道すがら41歳で客死、○残された母子は散りじり、○末娘、父譲りの才能を発揮

そこで、これらのうちマイナスのイメージを与える項目について、凌海を描いた、（1）医学者・入沢達吉＝東京帝大医学部長・宮内省侍医頭等（「雲荘随筆」昭和十年）、（2）郷土史家・山本修之助（「司馬凌海」昭和四十二年）、そして（3）小説家・司馬遼太郎（「胡蝶の夢」昭和五十八年）、の叙述振りを抜粋比較してみよう（今度は年譜に添え書きする形で）。

司馬凌海先生略年譜

○弘化三年（一八四六）　八歳、「余も八歳にして、詩を作り、十一歳にして文を属す」と自記している。九歳ともいう。また十一歳で金北登山の詩を作って、人々を驚かせたともいう。

○嘉永三年（一八五〇）　十二歳、五月十日、祖父伊右衛門に連れられて、初めて江戸に出て、唐津藩の儒者山田寛について漢籍を学ぶ。

（1）

「幼にして顕悟、八歳で誌を賦し、十一歳で文を属した。」

「祖父伊右衛門は殊の外、これを鍾愛し、十二歳の時、

伴ふて江戸にのぼり、漢学を修めさせ、儒者たらしめんとしたが、凌海の志望は寧ろ医となるにあったので、遂に麹町の松本良甫の塾に入れた。」

（2）

「祖父は、碁の名手で江戸に出て安井算和の門に入り、初段の免許を受けたほどの人である。この祖父は教育熱心で、孫凌海の五歳の頃四書（大学・中庸・論語・孟子）を読ませ、凌海自身もそう書いている。十歳の時、金北登山をして詩を作ったが、その素晴らしい文才にひとびとを驚かせた。」「島倉家では、納屋の二階が、凌海少年の勉強部屋にあてられていた。そのころ、納屋には取り付けのハシゴ段はなく、屋根ハシゴを使い、とりはずしが自在であった。そしてここで勉強している間は、ハシゴをとりはずしておき、小便のためおりる以外は、絶対ハシゴをかけないことにしていた。」「近所の友達の賑やかな声をきくと、じっとしてはおれない。いつも小便が出たいと大きな声をあげ、祖父を呼んでハシゴをかけさせた。しかし、のちには、祖父はその小便するのにもいちいちついているほどであった。後年、凌海は、自分の小便の近いのは、子供の時の習慣によるものだと言っていた。」

「嘉永三年、十二歳の時、祖父に連れられて初めて江戸に出て、唐津藩の山田寛について漢学を学んだ。祖父は儒者にするつもりであったが、凌海はこれを嫌って医者になろうと決心した。」

（3）

「栄助はおとなしい男で、いつも伊右衛門のかげになって働いていた。伊之助についても、伊右衛門が羽交の中に抱きこんで教育していたといっていい。五歳から自ら四書の素読をほどこし、八歳で師匠のもとにやり、十一歳のころには詩文を作らせたりした」「伊之助の環境認識が拡大するのは、祖父の伊右衛門につれられて佐渡でいちばん高い山に登った十歳の夏だった。」「伊之助はこの時の肝の冷えるような心細さを何とかかみ殺すために、帰宅してから、七言絶句の登高の詩をつくった。四百余州という大きな唐土にうまれても、絶海の孤島にうまれても、人間に変りがないというのはどういうことか、という奇妙といえば奇妙な詩だった。」

「祖父の伊右衛門は、柴田収蔵についての話をした。『収蔵は、別嬪の女房に逃げられたのさ』・・『女房に嫌われたのよ』祖父がいったときに、伊之助の脳裏に白い脛が見え、脛に蹴出された赤い湯文字が見え、それらが激しく動いて逃げてゆく姿がみえた。祖父が気付いていないようだったが、伊之助は早熟に違いない」「新訂坤輿略全図・・『本当に世界はこうか』・・『本当か』と伊之助はもう一度言った。顔

を上げた収蔵は、面長の苦み走った役者顔である。面相だけで言えば女房に逃げられるような男ではない。・・『本当だろうと思う。自慢ではないが、パリで作ってもロンドンで作ってもこれ以上の地図は出来まいと思っている。』声は、潮風に吹き叩かれたように低くしわがれている。態度は十二歳の子供に対するようなものでなく、質問者の伊之助を大人としてあつかっているようで、このことも伊之助を内心おどろかせた。」「『江戸には、下僕をしながら学問をする方法がある。それでもやってみるか』と、祖父が言ってくれた日は、嘉永四年正月、粉雪交じりの浦風が戸障子を騒がしくたたいている朝だった。・・『ひとりでか』伊之助は、梯子につかまりながら胴が震えてきた。この正月で十三になったが、ひとりで他郷でめしが食えるものかどうか、想像することもできない。が、恐怖はすぐおさまった。生涯、この男は身のふり方では無鉄砲きわまりなかったが、その気はこのころからあったのかも知れない。『行く』と、いった。」

「七月のはじめ、吉日をえらんで出立することとした。その前日に元服した。・・御番所には『奥詰老医師・法眼松本良甫様へ御奉公のため』と、とどけてある。」「佐渡から寺泊までは、風さえよければ、十時間ほどで着ける。『飛脚さんが酔いなさるのは、めずらしいですな』祖父が愛想のつもりらしいが、要らぬことを言った。『冗談じゃない、このお寺まげの子のせいだよ』飛脚は不快そうに顔を振って、伊之助を指した。伊之助は、ひどい藪睨みで、両眼の方角が整わず、右を見ているのか左を見ているのか他人にはわからない。」

○嘉永五年（一八五二）　十四歳

松本良甫に蘭学を、佐藤泰然に医学を学ぶ。江戸（含佐倉）滞在は六年であった。このころ「太仲」といっていた。

（1）

「凌海は常時放縦不羈の悪童であって、容易に塾長の節制には従わなかった。

良甫の養子良順は、かって凌海が、十一歳の時、庭前の蜂の巣に火を放ち、蜂を全滅させた時作った、『蜂の霊を祭る』の文を読んで、其の非凡の才学に驚嘆していたから、百方凌海を庇護したが、凌海に余り放埒の挙動があって、遂に退塾さすの余儀なきに至った。そこで凌海は更に佐倉の順天堂に従学して医学を修めた。良順は実は泰然の子であるが、出でて、松本家の養子となったもので、後の陸軍軍医総監松本順が即ちそれである。泰然の三男即ち良順の弟は、後の外相となった林董伯である。併し凌海は佐倉には永く居らずして佐渡に帰った。」

（2）

「麹町三軒屋の幕府の奥医師松本良甫の塾に入った。三軒屋というのは三宅坂の旧陸軍病院の裏手にあたっていた。」「この塾にあって、凌海は秀才であったが、手のつけられない悪少年でもあった。先生のいうことなどは、少しもきかないで、いたずらばかりしていた。いつか、庭の蜂の巣に火をつけて焼き払い、蜂を殺してしまったことがある。この時『蜂の霊を祭る文』という一文を書いたが、その文章のすばらしさは塾中を驚かせた。」「良甫の養子良順、すなわち後の陸軍軍医総監松本順は、この凌海の非凡の才を惜しんで、いろいろかばってくれたが、どうしても手におえないというので、ついに塾をさることになった。」「それから、凌海は佐藤泰然について医術を学んだが、江戸にいること六年、安政二年（十七歳）郷里佐渡へ帰った。」

（3）

「ともかくも、これで祖父との別れになった。・・伊之助に与えられた部屋は、お長屋の一角にある。八畳一間に、牧田弥蔵という薬箱持と一緒に住むことになる。」「（蜂か。巣を作っている）・・梯子・・かついできて、土蔵の壁に掛けた。どのくらいの大きな巣かを見るためだった。・・『何をしている』・・『きのう来た小僧だな』と、たしかめるように言った。あとで分かったことだが、台所女が伊之助を盗賊だと思い、門番に報らせ、用人まで駈け付けてきたといういきさつのようだった。伊之助は伊之助で、白刃を見て逆上してしまった。いきなり蜂の巣をつかんだ。投げつけてやろうと思ったのである。が、その瞬間、伊之助の右頬を、一個の蜂が、棒の先で突くような衝撃でもって刺した。このため、伊之助はかえって逆上がおさまった。」

「この朝、伊之助は孤独であった。・・『手当をして頂け』と、誰かが声をかけてくれそうなものだが、たれもが伊之助を見捨てている。伊之助は、邸内をうろうろした。大葉子の草をさがすためであった。・・火で焙り、掌に塩をのせて焙ったものを揉みこみ、それを刺された部分につければよい。・・まずいことに、事件のあった土蔵のそばに、大葉子が生えていた。・・石頬につけた。飛びあがるほど痛かった。（もう、許さん　　）と思った。蜂を、である。・・竹竿をひろってきてその先端にわら束をくくりつけ、火をつけた。・・土蔵の軒下の蜂の巣に押し付けた。・・炎の中に蜂の巣はつつまれ、ついに落ちた。『火を放けるのか』という声とともに、伊之助は突き飛ばされた。門番だった。・・用人も飛んできた。・・人々が、駆け回った。伊之助は閉

口した。『お長屋で、謹慎しておれ、追って沙汰する』用人の足原は、怒り狂った。・・『そうではないんです』と伊之助は順序だてて説明した。・・そのあと、門番に右袖をつかまれ、長屋へ連れ戻された。・・用人たちは、はじめの行動を盗賊と言い、あとの行動を火付けだという。（江戸という所か）それより伊之助の心を暗くしたのは、復讐のためとはいえ、蜂を皆殺しにしたことであった。・・事件の被害者は蜂だけであり、蜂こそあわれで、そのことを思ったとき、伊之助ははじめて涙があふれてきて、たえがたくなった。伊之助にはそういうところがあった。かれは、蜂を供養しようと思った。荷物の底から紙を取り出し、筆は矢立のものを抜き取り、祭蜂霊文と、題を書いた。」

「良順は、はたちを越している。・・ひざもとに、伊之助の『蜂ノ霊ヲ祭ルノ文』を置きながら、・・用人の足原茂兵衛の訴えを聴いている。・・『子柄が、どうも凶でございますな』・・（妙な理屈をこねるやつだ）と、良順ははらの中で思いつつ、伊之助の文章を読んでいる。・・『こいつは、おれが貰うよ』と良順は顔をあげて言った。・・『年端がわずか十四というのに、これだけの文章が書けるというのは、日本中にいると思うかね・・』」

「伊之助は、麹町三丁目の角の丁字屋という小間物屋へよく行くが、その家の十七歳になる一つ年上の娘に気があると屋敷の者はいう。・・『伊之助。小間物屋へ日参しているそうだな』良順も本来、そういう気分がきらいではない。が、素人女に浮かれてしまうと、この場合など、小間物屋の養子にさせられるのではないかという心配はある。良順はそれを言った。が、伊之助は、私には弟がありますから、養子でもかまわないんです、行ってもいいんです、といった。・・（そういう奴だ）良順は、伊之助の心の構造が強烈なほどに単純であることに気付き始めている。・・『伊之助が小間物屋の養子になっちゃ、おれの蘭学に支障を来たすなあ。』このころは、伊之助の蘭語のほうが上で、・・（こいつに、吉原にいかせるか）と、不意に思った。・・良順は脇差の小柄を与えた・・『怒ってはいないがね。あたしを小柄で買うわけにはいかないよ』というなり、お真魚はその小柄を夜空の遠くへ大きく抛ってしまった。・・『行ったのか』『いいえ、行きませぬ』小柄一本で吉原の妓を買うくらいなら、その小柄をお真魚に進呈して首尾を全うしたいと思い、お真魚に与えようとした、と伊之助がいった・・なぜ用人の足原に問いただされたとき、伊之助は、捨てた、とだけいったのか。良順はそのことをきいた。『そうとしか、言いようがありませぬ』（そうだろう）良順は、内心

おかしかった。・・『いっそ、捨てた、といわず、落とした、となぜいわなかった』『それは、うそになりましょう』と、伊之助は不思議な顔をした。（こいつのなま正直なところは、ここだな）良順は思った。・・じつは落としたのだ、その方が、足原へのいたわりにもなる、かつは、落としたとなればわしも手討ちにせずすむ、と良順は言い、伊之助を退らせた。そのあと、ぐったり疲れた。・・伊之助の始末をしなければならない。（佐倉へやってしまう）というはらは、とっくに決まっている」

「塾の先輩たちは伊之助を見ないうちから極端に悪意をもち、『来れば叩き出してしまえ』と玄関番の六三郎に命じている。が、六三郎は、うわさにきく伊之助の異能のほうに惹かれているし、それに佐倉にきて顔を出さずに流連（いつづけ）しているということを聞いたときも、人の為し難いことをするとと思い、悪意はもたなかった。」「伊之助の奇妙なところは、この手術見学から数日後、赤毛のメス犬をとらえてきて、生きながら解剖しようとしたことであった。似たような塾生数人とかたらい、四肢をおさえさせて、いきなり腹部にメスを入れた。・・狂い啼き、もがき、其の声が異常だったために、百姓があつまってきて、塾生たちを非難した。・・佐倉藩でも問題に成り残酷という言葉をつかって、佐藤泰然あてに『注意せよ』という布達を出している。・・塾頭たちはほぼ一致して退塾させろと言っている。・・『残忍な男か』それなら医者にすることは出来ない、というのが、泰然のただ一つの判断基準であった。が舜海は首をひねった。残忍とは、いえない。『どういう男だ』泰然は、聞いてみた。舜海もうまく言えないらしく考え込んでいる。『あれは佐渡の山奥で独り樵夫でもしていればいい男で、人里では暮らしにくい男でございましょうな』塾頭にたいして敬語を使わないという。うかうかすると舜海に大しても物言いはぞんざいで、とても師に対する門人の態度ではない、というのである。そのくせ、舜海はそのことに腹を立てている節はない。『どうも犬のような男で』・・この地上で松本良順だけを師匠・主人と思い、泰然や舜海などは路傍の人間とおもっているらしい。・・良順にだけは丁重な敬語を使っていたという。『まだ、心は育っていないのかもしれない。』泰然も苦笑した。・・むしろ塾生一般とはまじらず、みなから薄気味悪く思われていたくらいだった・・佐倉の順天堂での伊之助の日常は、いよいようまくゆかなくなった。あいつには相手になるな・・除け者にされたわけだが、伊之助はさほどにはこたえない顔をしている。元来、伊之助自身が塾の風や生活にどこかなじまず、それを苦に

安政五年（一八五八）　二十歳

晩春　小木町清風楼で、屏風に揮毫したものが残っているので、松本良順のすすめで、オランダ医ポンペに就くため長崎へ行ったのは、その後であろう。

（1）

「凌海は長崎に着き早速蘭学を勉強したが、其の上達の速やかなる、殆ど神助があると云われた程であった。見事にポンペの講義を通訳して之を諸生に授け、全く良順の期待に背かなかった。凌海自身はポンペの講義をば漢文で筆記した。現に凌海の漢文の内科学筆記が今も尚司馬家に保存されてある。凌海は江戸の松本塾に居た時、傍ら番町のお既谷の司馬騰という儒者に就いて、漢学の外に唐音即ち支那語の稽古をした。」

（2）

「凌海の長崎におけるオランダ語の上達は素晴らしいもので、ポンペの講義　をすらすらと通訳することができ、良順の期待にそむかなかった。（凌海自身このポンペの講義を漢文で筆記した『内科学筆記』が、今も司馬家に所蔵されている）」

（3）

「その翌日、良順は伊之助をつれて出島に行き、ポンペにひきあわした。・・ポンペは・・『あなたはオランダ語が話せるか』と、問うた。伊之助は、その発音をきいて、電流を流し込まれたように衝撃を受けた。・・『なぜ返事をしない』と、ポンペは、眉をわずかに険しくした。・・伊之助は、まねをしてみた。・うまくできた、というよりもポンペの声そっくりだった。ポンペは、一瞬、茫然とした。・・この翌日からポンペは、よほど神経を強靭にせざるを得なかった。伊之助が、出島にやってくるのである。（正式な講義前の一月良順に講義）・・かれは通詞たちの了解をとっているらしく、どの部屋にも出入りし始めた。・・喋っている男たちの前へゆき、口元をみあげるのである。・・伊之助は音も無く入ってきて、隅の方からポンペの顔ばかり見つめている。・・あるとき、ポンペは伊之助の視線をかなぐりすてるために、質問してやった。『イノ。・・話を要約してみたまえ』といったとき、伊之助のまとまったオランダ語をはじめてきいた。十分以上に理解し、みごとに要約し、なによりそのオランダ語が立派だったことに、ポンペは驚きより腹立たしさを覚えた。」

もしていなかったからである。」

「伊之助が佐渡に帰るはめになったのは、祖父の伊右衛門が、突如、江戸へやってきたことである。・『佐倉の順天堂でも、似たようなことになっているらしいよ』大きな声じゃ言えないが伊之助は切支丹の本を読んでいるという根も葉もないことをいう言う塾生もいるらしいよ、と小西屋が言った時、伊右衛門は文字通り飛び上がり、小西屋に組みついて、その口をおさえた。・・『伊之助を佐渡へ連れ戻りますでございます』」

「佐倉、江戸、さらにはこの越後までの道中の間、祖父の伊右衛門は、存外、機嫌がよかった。・・寺泊で逗留中のある夕、祖父は伊之助に酒をのませてみた。酒はむろんはじめてではない。伊之助は、どちらかといえば大酒家になる素質を持っていた。・・酔ったあまり、小西屋で店の者に殴られたという、思い出したくもない話しをついしてしまった。・・伊之助は・・やがて大粒の涙をぼろぼろ流した。・・小西屋がにくかった。それと同じ憎悪を、江戸という土地に対して覚えた。『泣くな』祖父は怒ったような顔でいった。『お前には、世間が適わなかっただけだ。佐渡にいれば、お前は新町の島倉の子だ。正体も知れているし、気をつかって適わせる必要もない』」

万延元年（一八六〇）　二十二歳

長崎伝習所にて、ポンペの講義を筆記した者は、伝習生三十人あまりいたうち、良順と凌海だけであったという。（長与専斎「松香私志」）

（2）

「伝習所における凌海の成績は抜群で、早くも塾頭になったのをねたむ者があって、或る日おカユに針を入れてすすめた。凌海はこの針がのどにささり、苦悶の末切開手術をして取り出した。」

（3）

「海路、長崎へ帰ってくると（咸臨丸練習航海）、ポンペと良順の留守中に、塾生は伊之助を臨時の教師に押し立てたのである。・・復習を指導してもらったのである。・・或る面ではポンペを凌いだのは、かれはノートのオランダ語をゆっくり読み、文意が完了するごとに、見事な漢文をもってたちどころに翻訳したことであった。」

「このときの西坂の解剖は、ポンペにとって生涯のほこりであったが、参加した日本人やその周囲に、さまざまな問題の種子を播いた。『伊之助は歓喜のあまり、解剖屍体の肉を啖らった』という悪評が立った。（斜視で近視の彼は・・舐めるような近さで見て行った。・・人間の内景を見て、頭の中にある知識と符合する場合、ひとり顔を崩して笑った）・・こういううわさがたつというのは、伊之助という男が、平素、ひとびとのあいだでまったく調和を欠いている、というところにあるであろう。・・解剖実験の十日ほど前、伊之助は階下の食堂で他の塾生た

ちと朝食をとっていた。・・伊之助は不意に汁椀を置いて立ち、どこかへ行った。・・はたして厠だったらしく、伊之助は露骨に下腹をさすりながら戻ってきた。すぐ着座し、汁椀をとりあげた。そのなかに、釣針が入っていた。伊之助は、口に入れてからあわてて吐き出した。・・騒ぐということは他とのあいだに人間関係が成立している場合には可能なのだが、伊之助は針を見つけたとたん、周りの空気が氷に化ってしまっている感じがして、声が出なかった。（針を仕舞ってしまえ）・・結局、伊之助は懐紙を小さく切って紙片を作り、それへたんねんに飯粒を塗り、やがてノートのはしに針ごと貼り付けた。・伊之助にすれば針が転々としないようにというだけの作業だったが、他の者からみれば、其の作業に精神性を勝手に付加し（執念深さ）、伊之助のおそるべき一面を見たように思った。」

「『七新薬』は幕末、医家の必携の書とされたもので、・・著者はむろん伊之助ながら校閲者がべつについている。関寛斎である。・・『イノさんよ、新薬についてちゃんとした本がないと、蘭方の医者がまようのではないか』と寛斎が話したことから、この両人の関係が密接になった。・・『七新薬は、それを漢文崩しの和文にするのだ』と寛斎はいった。・・伊之助は、諸事やることが早かった。数日すると、伊之助が目次と趣旨を書いてきた。・・七種類の新薬の選択も適切で、しかもこの本をどう書くかという趣旨はそのまま彫って版にするに足る文章なのである。・・寛斎は文章を読んでゆきながら、内心舌を巻いた。主題に対し、内容・文章とも実に明晰で、良順でもこれだけのものは書けないだろうと思った。・・伊之助の七新薬の『例言九則』・・多少わずらわしい漢語趣味があるにしても、この時代の達意の名文といっていい。・・伊之助がこの当時、すでにドイツ語と英語が読めたことについて、その証拠もしくは参考資料になりうる・・さらにはポンペから受けた講義ノートを種にしているだけでなく、ポンペの種本であったドイツの『名家』の書を伊之助がよんでいた証拠にもなりうる。・・彼自身が造った新しい訳語が多いが、・・理由については、・・『薬品の名称をつける場合、かっては、その薬の性質や効能または形状などのよって命名した。・・しかし最近、化学の水準が高くなって、百薬の成分をことごとく精密に分析されるようになり、その分析を基礎として命名されることが多い。分析結果による名称というのは一見してその成分の見当がつくという便利さがある。であるからこの書ではなるべくその理に従って名称を付け直したい。薬品の名称にはながい伝統があるから読者は混乱するかもしれないが、しかし新名称になれてしまえばそれだけの利益があるはずである。決して私の衒いからでたことではないから、諒としてほしい。」

「関寛斎がおどろいたのは、伊之助の原稿がどんどんできてくることだった。『しかし、書物はどうしているのかえ?』・・薬物学の書物だけでも、蘭・英・独・仏といったように、多種類渉猟しているように見える。・・『出島のポンペ先生のお家で見ます』（これだな）と、寛斎・・。ポンペは、そのことに気付いている。・・ポンペはその旨、良順に対し、『貴国ニハ他人ノ家宅、部屋ニ無断ニテ出入スル習慣アリヤ』と、聞いた。『ナシ。アリトスレバ、盗ナリ。』良順が答えると、ポンペはあるいはこれは文化の相違かもわからないと思い、『モシ、ヒトタビ人の生徒モシクハ召使ニナリタル場合、師匠マタハ主人ノ物品ニ無断ニ手ヲ触レテヨシトイフ習慣アリヤ。』ときいてみた。良順が『ナシ』と答えると、ポンペははじめて怒気をうかべ、『イノスケ、ソレヲナス。』と言った。寛斎はそのいきさつを良順からきいていたが、いま驚いたのは、伊之助がまだそれをやっているということであった。・・『イノサン、そいつはよしたほうがいいよ』と寛斎はいった。・・『本というのは、公物です。』『金銭も公物だよ』・・『関先生は比喩を取り違えている。おなじ公物といっても本と金銭とは違います。第一、私はポンペ先生の本を勝手に持ち出したり、盗んだりしたことはない。先生の不在中見るだけです。不在中、本は公物として人が読みに来ることを待っている。減りもせず、傷みもしない。』」

「『七新薬』の草稿はどんどん持ってくるのだが、塾務もなおざりにしていない。其の上、しきりに丸山で遊蕩しているようであった。・・良順が、寛斎を部屋によんだ。『こまったことが出来した』・・良順はかねがねポンペが伊之助に対して嫌悪の感情をもっていることを気にしてきたが、昨日、ついに良順を出島のポンペ館によび、『あの生徒を、私の視界の外に置くわけにはいかないか』と深刻な表情で言った、という旨、良順は寛斎に話した。『ポンペ先生が伊之助を破門』・・寛斎は事の唐突さにおどろいてしまった。『いや、ちがう。私に破門しろ、と暗におっしゃるのだ』・・『まかすよ、寛斎さん』良順は、畳の上に両手をついて、頭を下げた。・・寛斎は、伊之助が順天堂でも宝石のような学生であったこと、良順が年少のころから可愛がっていることを大声で喋り、とりわけ今の伝習所にとっては、伊之助の語学力と医学への理解力が、他の学生のために必要であることなどを、文章語として喋った。・・ポンペの気持ちは、溶けない。ポンペには

一団の屈辱の思いがわだかまっており、このことは良順にも言わなかったが、（この男が、私の排斥運動を使嗾した）という抜きがたい不快感（実は誤解なのだが）を持っている。・・ポンペはその回想録の中で・・『私がわけがあって除名せねばならなかった二、三、の学生の陰謀』という旨のことを書き、具体的には明かしていないが、ともかくかれの滞在五年のあいだでもっともかれが不愉快としたこの事件に伊之助が関係したらしいとかれが信じているかぎり、伊之助への感情が溶けるはずがなかった・・『不調でした』寛斎がいうと、良順はいかにも悲しげな顔をした・・『伊之助を私の弟子にしましょう』・・伊之助はポンペの講義には出られないが、塾舎にあって受講者からノートを借りて筆写するくらいはできるではないか、と寛斎はいうのである。（そんな叮哀想な）と良順は思った。」

「一方、伊之助は裏の井戸で足を洗いながら、（去ろう）という気持ちを固めた。徹夜をしてでも『七新薬』を書き上げ、草稿を寛斎にわたしてどこかにゆこうと思った。（なぜおれは、うまくゆかないのか）ということを、近頃やっと伊之助は考え込み始めている。・・要するに人の世に適わないのではないかとごく概念的であるとはいえ、そこまでは思うようになっている。」

「『七新薬を』と言ったとき、顔が、手拭でもしぼったように赤く緊張し、みるみる涙があふれ出た。『七新薬』を書き上げてから直きに去ります、と続けた言葉が、良順と寛斎にやっと聞き取れた。」

○文久元年（一八六一）　二十三歳

一月、日本滞在中のシーボルトを、佐藤尚中、関寛斎と共にたずねる。

六月、松本門下を除籍（のち復籍）され、長崎を去って、九州の旅をつづける。七月二十六日から八月十五日までの記録を「東上漫誌」に綴る。平戸藩医岡口等伝方へ身を寄せ、ついに長女の婿となる。この時の男子が亨太郎（文久三年一月七日生る。）である。居ること二年で佐渡へ連れ戻される。

（1）

「四年斗り長崎に居る内に、凌海の行動に不謹慎の事があったとかで、遂にポンペの許を辞して、九州漫遊の途に上り、平戸に落ち着いたが、二年ばかりで復た佐渡に帰った。」

（2）

「この六月『松本良順門弟登籍人名小記』によると凌海は良順の長崎伝習所を『有罪除籍（後復籍）』されたことになっている。・・この除籍の問題なども、あるいは同僚のねたみによるものであろうか。」

「とにかく、四年間滞在した懐かしい長崎をあとにして、凌海は飄然と九州各地の放浪の旅にのぼった。まず、長崎から乗船して、海路深堀・板ノ浦・九十九島などを巡って、平戸島の平戸へ渡った。」

「九州の旅のことを書いた『東上漫誌』という日記がある。これは文久元年七月二十五日から八月十八日までの九州の旅の記録である。・・　ここに面白いことには、この日記には、この旅で接した女のなまえを詳しく記入してある。たとえば『「家婦、娼数人を引いてこれを勧。固辞すべからず。ついに宿す。』とか『余の娼、梨江と呼ぶ。すこぶる姿色あり』などとあって赤裸々な彼の漁色ぶりがうかがわれる。こういうことから生まれたのであろうが、凌海の漁色家ぶりについては、こんな伝説さえ残っている。凌海はアルバムを作って今まで接した女の名前、年齢、生い立ちなどを一人づつ書いていた。これはラテン語で書いてあるのでちょっとわからないものであった。その第一冊のアルバムには一千枚のカードで満たされており、二冊目になるところだったという。この日記には『七曜日』が記入されてあった。当時、そんなものを使う人もいない時代だったが、凌海は毎日必ずオランダ語で『「ゾンタク』とか『マーンダク』とか書いた。またその日の記録の終りには、その日作った漢詩を載せてあるという博識ぶりを示している。」

「平戸はかねて長崎にいたころからの知友、平戸藩の医師岡口等伝がいた。等伝は、凌海のすぐれた才能に心をひかれ、自分の娘を妻にしてほしいといったことがあるが、凌海はことわりもせず、また承諾もしないままにして過ぎ去ってしまった。このことを思い出して平戸へ行き等伝の家に寄寓したのであった。等伝はたいへん喜び、歓待した。そして後には、ついにその長女の婿となって、一子亨太郎をもうけたのであった。」

（3）

「『かならず長崎に帰ってこい』その不在中、ポンペ先生のお冠りを気長に直しておくから、せいぜい二ヶ月も経てば戻って来い、といった。『九州各地を漫遊して見聞をひろげておけ。手紙を怠るな』言いつつ、良順は心もとなくなった。伊之助はいままで誰かの管理下にいた。佐渡のころは祖父の伊右衛門、江戸の頃はこの自分、佐倉のころは佐藤舜海、さらにこの長崎時代はふたたび自分が見てきたのだが、今後は伊之助自身が伊之助を見てゆかねばならない。『大丈夫か』と、良順がそのことを言った時、伊之助は一種なんともいえぬこの笑顔になった。・・なるほど、今日よりはいっさいの羈絆から解放されるのか。とそのことに気付いたのである。」

「西彼杵の西岸の船泊としては、神の浦とその北方の雪の浦が知られている。・・その浦浦を小刻みに泊って行き・・西浜・・船旅にうんざりしてしまった。土地の小さな妓楼でとまると、・・翌朝『文机はないか』と、伊之助が妓に言った時、すでに流通したい気持ちが動いていた。・・妓は梨江といった。『頗る姿色あり』と伊之助は旅日記に書きとめたが、それほど気に入っている。・・奉書紙をとりだし、長崎鋏でもってヨコ五寸、タテ三寸に切った。研究用のカードだった。かれはポンペが洋紙を切ってカードを作っているのをみて、真似たのである。・・伊之助は鵞鳥ペンにインキをつけてはきれいな文字を書き連ねていた。ラテン語だった。・・伊之助の紙ばさみのなかには、すでにびっしりと記入されたカードが三十枚以上入っている。『リエ』と、冒頭に書き、日付、曜日、場所を記入する。さらに容姿の特徴をこまごまと書き、さらにからだの細部まで記入してゆくのである。次いで、女から聞いた身の上を書く。最後には伊之助自身の感想を短く書いておく。漢文風にいえば、蕩婦ワガ神を蕩揺セシムといったぐあいであった。・・伊之助がラテン語をいつどこで覚えてしまったかは、謎に近い。」

「(良順は)この文久元年の年末、うわさがきこえてきて伊之助が平戸にいることを知り、しかも藩医岡口等伝の養子になったことも同時に知って、一時、茫然としていた。・・その後等伝から良順宛手紙が来て、『さまざまいきさつこれあり、伊之助どのを愚女にめあわせ申し候』と・・その後、伊之助から良順に一度だけ便りがきた。(平戸を見物しています)・・(そういうやつだ)」

○文久三年(一八六三)　二十五歳

(1)

「二年ばかりで復た佐渡に帰った。」

(2)

「祖父は驚いて、さっそく親類の人とともにはるばる九州の西端平戸まで引き取りに来た。凌海は祖父と岡口家との間に立って悩み苦しんだが、その間に立って調停するものがあって、岡口家とも円満な話し合いがつき、佐渡の生家に帰ることになった。」

(3)

「・・等伝は追い詰められ、ついには涙がこぼれてきた。娘の佳代が哀れであった。・・すでに妊娠・・藩許がまだおりぬのに妊娠・・私通・・言えなかった。・・・・等伝らは、こんな社会に暮らしている。『世間』という。それが恐ろしい。・・(これでは、世間が済むまい)・・(御家に災難)・・(あの男はどこでも食ってゆける)・・『世間が』と父親が言ったとき、佳代は抗いの言葉も出ずにすくんでしまった。・・等伝は専ら田中了庵と接触している。最後に等伝が、『伊之助を放逐する』といった時、了庵はその名前は聞かなかったことにするといった。」

「『お前は佐渡の国の新町の島倉家の当主である事を忘れている。お奉行所から差紙が来た。長崎修行がおわったあかつきは御奉行所の医員になれとおおせある。』と祖父がいった。船が動き始めた。伊之助はやっと事態に気づき、降りるべく腰をあげたとき、祖父は、すわれと一喝した。『夢だと思え』『―佳代が』・・『平戸のことは、すべて済んだ。』『何が』『すべてだ。岡口様とのことも、その娘御のことも』・・(佳代も知っていた)というのが、伊之助のくやしさであった。祖父も『岡口様の娘御には田中了庵様を通じ、十分納得してもらってある』といっている。佳代は知っていても自分に何も言わなかった。・・伊之助は佳代を憎む気にはなれない。『結局は女房ではなかったのだ』と祖父は憎体にいった。・・伊之助は、祖父に曳かれた子牛のように、浦々で船を降りたり、あらたな船に乗ったりしている。・・『うまれてくるこどもは、ひきとることにした。』・・初夏の佐渡に上陸したとき、さすがに伊之助の胸が、廿酸っぱい感情でさざなみ立った。」

○明治六年(一八七三)　三十五歳

五月宮内省出仕も兼ねていたので、明治天皇の命を受けて、ホフマンに従い、石黒忠悳とともに、西郷隆盛を診察した。

(3)

「この年の九月、寛斎は徳島県士族であることも返上し、一介の平民となった。・・寛斎は伊之助のことが折に触れて気になっていた。(あの男につとまるだろうか)と思っていたが、やがてその心配は逆で、大学の方が伊之助に気をつかっていることを、東京からながれてくる噂で知った。伊之助が前夜の大酒のために欠勤すると、ミュルレル、ホフマンという二人の独医は黒板を背にして立往生し、学生はむなしくドイツ人の顔を見つめているしかなかった。(伊之助も、大学に機嫌をとらせているようなことではながくはない)と寛斎は思った。ホフマンらがやってきた明治二年以来、ドイツへの医学留学生が毎年横浜から発っている。かれらがドイツ語を身につけて帰学してくるとき、伊之助が不用になるときであった。その時こそ、伊之助に飴をあたえつづけていたひとびとが、にわかに鞭をふりあげるのではないか。」

○明治九年(一八七六)　三十八歳

五月愛知県病院医と医学教師となり、名古屋へ行く。

この秋、後藤新平が、福島県須賀川から来て門人となる。この時、大光院という寺に住んでいて、私塾を開き塾生が二十名くらいいた。塾頭に佐渡相川町出身の滝浪図南がいた。

愛知県下並びに後の名古屋大学医学部の第一号の病理解剖を行なう。

（1）

「九年にいたり一切の官職を辞し、名古屋の愛知病院に赴任した」

「凌海が名古屋に居た頃は、既にフランス語にも通じていたから、東京から頼まれ、独逸やフランスの書を訳したものが多い。フランスの『解馬新書』を訳したのも此の時代である。名古屋に居た時の門人に、後藤新平伯があり、伯は頻りに、翻訳の手伝いをさせられたそうである。」

（2）

「家塾には書生が三十人もいて、・・その頃三百円の月給をとっていたが、道楽で毎晩出歩くから金は足りない。金が足りなくなると翻訳をする。後藤と滝浪が呼ばれて手伝いをさせられる。」

（3）

「そして、明治九年、愛知県に招聘され、名古屋に移った。県立病院の医学教師になったが、一年で契約切れとなった。」

○明治一〇年（一八七七）　三十九歳

四月愛知病院医、医学教師満期辞職し、名古屋で開業する。

この年、次女文子出生（のち喜多家に嫁し、女流棋士七段となる）

（1）

「一年ばかりで是（愛知県病院）をも辞して」

（2）

「凌海は、明治十年愛知県病院医学教授を満期でやめ、名古屋で開業した。」

（3）

「すべての公職から、木の実が地におちるようにして無縁になったのは、明治十年四月である。そのあとしばらく名古屋の市中で開業したが、得た金はすべて花街で蕩尽し、月ごとに借金がかさんだ。『借金とりがやってくる月末になると、翻訳をやらされた』と、当時、書生として住み込んでいた後藤新平（一八五七～一九二九）が、語っている。後藤は仙台の士族で、明治九年須賀川医学校を卒え、名古屋にきて愛知県立病院の下級医員をつとめつつ伊之助の書生になってドイツ語を学んでいた。『いいか』と、伊之助はドイツの『衛生警察学』や『裁判医学』の本をとりあげ、夕刻から深夜までそのまま漢文調の名文で訳し流してゆくのである。後藤はその速記を

するだけであった。後藤の速記が追いつかないほどに伊之助の口述は速く、つい倒れそうになると、『後藤さんは疲れた。あとは滝浪さんだ』と、塾頭の佐渡出身の滝浪図南に交代させた。これらの翻訳は官か県が頼んでくるもので翻訳料は二十字詰・十行の原稿用紙一枚で一円五十銭という高価なものであった。」

（三）

これまで、（一）で碑文と年譜で事蹟を追い、（二）で「人となり」の叙述を専門家・史家・小説家の書き振り比較で、見てきた。碑文の銘は評価に関わるので、（二）の範疇でもまた合せ考える必要があろう。明らかに書き手の立場でその叙述から受ける「人となり」の印象が異なる。

専門家からみれば、司馬凌海の業績と棋界の評価ひいてはそれを通じての歴史社会への貢献が主体となる。棋界を含む時代背景や業績を巡る人間関係やそこに至った生い立ち程度が話に添えるものであろう。史家からみれば、勿論専門家による適切な評価を前提に、時代を動かした要素としての優先度で記述の有無も判断され、その貢献（勿論プラス・マイナスの大きさはあるが、いずれにせよ流れを左右した大きさ）で叙述される。ただ、どの画布の上に描かれるか、即ち世界史・国史・専門史等で対象や叙述量も異なることは事実である。彼の場合我が国医学史や文化医学史には登場するが、国民が斉しく学校で学ぶ世界史・日本史の教科書には顔は出さない。勿論地史誌、郷土史となると話が違ってくる。郷土の偉傑なのだから当然出てくる。多くの場合、史家・専門家の目線で描かれており、人となりについての郷土の共有知識は、寧ろ碑文のようなものに体現されていて、その銘の評価の共有にある。それは、彼、司馬凌海についても、昭和五十八年（一九八三）迄は百年に亘ってそうであった。

小説家の叙述は、刺身の褄として郷土史家が触れた話題を、史実という点と点の間に埋もれた記録やフィクションの力という、色付きの顕微鏡と望遠鏡の働きで思わぬ次元に昇華させる。この日本中を巻き込んだ司馬遼太郎作「花蝶の舞」は、私にとっても、それまで郷里で、耳にし、折にふれ父等から聞いた司馬凌海像を、圧倒的な力で砕き壊した。それはノンフィクション作家が、歴史の闇に新たな光を当て、歴史の頁書き換えの可否を問うと力とも遥かに違った力である。

勿論小説は、文章によるエンターテイメントであるから、面白さがなければ人口に膾炙しない。フィクションであればそれははっきりしている。だが歴史の事実を主

題にした歴史小説は、特に人物に光が当たり顕微鏡・望遠鏡の作用で、一作ごとに世の当人に対する「人となり」の印象を変えてしまう（元がごく普通の伝記的印象であればあるほど）。信長・秀吉・家康等の例を俟たずとも明らかである。それが力ある作家のものであればあるほど。この小説は、作家の筋太の史観と広く深い該博な歴史知識を駆使した過不足ない一貫した語り手的叙述で、当該人物像を読み人の脳奥深く沁みこませ、これまでの並みの人物像を破壊すると同時に、始めて知った者には教科書のように、小説の人物像がしっかりと胸に畳み込まれることになったろう。

同書巻末の、粕谷一希氏の解説を見ると、その辺がもっとはっきりする。

先ずこの作品の企図に関しては、「この『胡蝶の夢』は、松本良順という興味ある存在の生涯とその周辺を追うことで、幕末期の蘭学・蘭方医・医学史の発展の断面図を浮き上がらせていることがひとつの特徴であろう。・・ここに描き出された医師の群像を通して、医者と患者、病の社会学は、こんにちにつながる問いかけを含んでいるように思われる。」という。そして作品の狙いについては、「作者自身が“あとがき”で語っているように、江戸身分制社会というものを一個のいきものとして作者自身が肉眼で見たいということであった。封建制倫理の基本が、分を知る、分際をわきまえる、という徳目によって成り立っていることは、具体的にどういう生活をしいられるのか・・・」「司馬遼太郎の世界は、今日、幕末や戦国だけではなく、上代史や中国史にまで及んでいる。しかし、同時に、この作品のように、同時代をも、単なる政治史としてでなく、多面的に掘り下げる努力を重ねておられることは、驚嘆の他はない。」

そして、伊之助（司馬凌海）の登場についてこう述べている。「この作品は、松本良順という蘭方医の独特の個性を描くはずであったろう。しかし、良順の周辺を探ってゆくうちに、作者は伊之助という異能の才と、関寛斎という風変わりな個性に遭遇する。とくに佐渡に生まれた異才伊之助の生涯を眺めてゆくうちに、その解読に作者は特別の情熱を感じ出したかにみえる。」「ポンペを始め、医学伝習所の仲間たちは悉く伊之助を嫌い、彼を排斥した。その例外は良順と寛斎の二人であった。この二人とつながることで世間につながることができたのである。」「異能の才と異常な性欲と性格的破産と、この稀な存在を作者は丹念に描きこんでゆく。この作品のユニークさは、伊之助の存在感によって倍加している。おそらく、東西の文学史上、こうした人物像を作り上げた作品は皆無なのではあるまいか。作者の筆は世間一般が嫌悪すると同様の嫌悪感を押えつつ、良順や寛斎が注いだであろう愛情を抱くことで、次第に読者の中に伊之助

を棲み込ませることに成功して行く。天才的能力をもちながら世間から受け入れられない伊之助の身の上に、焦れったい思いと共に愛着を覚えさせてゆく。読者は自らの周囲に、或いは自らの内に、伊之助と同様の社会不適応の部分を共有していることに気づかされるのである。」

「司馬遼太郎の世界は、今日、幕末や戦国だけではなく、上代史や中国史にまで及んでいる。・・」と解説にあるように、司馬史観の世界が世間一般の記憶に棲み込むように愛読書となってゆくことを意味する。「良順の周辺を探ってゆくうちに、・・風変わりな個性に遭遇する。とくに・・異才伊之助の生涯を眺めてゆくうちに、その解読に作者は特別の情熱を感じ出したかにみえる。」という指摘を裏返せば、もし主人公良順に集中していれば、吉村昭の『暁の旅人』のように、伊之助は語学の異才として良順につき従ってポンペから学ぶ、褄として僅かに顔を出すに過ぎなかったであろう。更に、「作者の筆は世間一般が嫌悪すると同様の嫌悪感を押えつつ、良順や寛斎が注いだであろう愛情を抱くことで、次第に読者の中に伊之助を棲み込ませることに成功して行く。」の評価にいたっては、医学・医学文化史、郷上の偉傑としての当時の一般の認識を、当時から嫌悪は世間一般にもあったように思わせる結果になる。同時に、指摘されているような愛情をもった筆致で嫌悪を包み込んで表現された、独特のキャラクターが国史版的広がりで世間一般化することにもなる。

私は司馬遼太郎作品を非難しているわけでは毛頭ない。これこそ物語というべきであろう。ただ、その異能の筆力が結果として、世間一般に棲みこむ新たな異才と嫌悪の人物像を、動かし難く歴史の上に据え付けることとなった、という事実に向き合っている自分がいる。司馬凌海の「人となり」を一般的に想い起す時、それは、小説として別次元のものと皆が考えられればそれでよいのだが、そうもいかない。より大きなジャンルで述べ直されると、なかなか治癒は難しい。

著者本人が、あとがきで言っていることは示唆的である。曰く「（伊之助は島外へ出るべきではなかった）という感慨が、涙ぐむような悲しみとともに湧いた。こういう自然と人文にくるまれてここで生涯を送ったほうがどれほど幸福だったかわからないという、以上はいわば私が伊之助の保護者であるかのような、ごく平俗な思い入れだったのだが、旅人にそう思わせるほど南佐渡の風物はゆたかでおだやかであった。人は、その才質や技能というほんのわずかな突起物にひきずられて、思わぬ世間歩きをさせられてしまう。伊之助もそうであった。かれの異能としか言いようのない記憶力は、かれを対岸の

世界へわたらせてしまった。対岸はいうまでもなく本州である。そこには封建支配が細分化され、個々に精密で重苦しい分際の社会が根ぶかくできあがっている。すでにふれたように、伊之助はそういう身分社会にとって珍奇ともいうべき異邦人というほかない。」

そういうものだと思いつつも、もとの普通体の「人となり」も世間一般に戻すことはできないものか、と考え込む自分がいる。空想の世界ではあるが、歴史にイフがあればと思う。凌海本人がもっと長生きすれば、その語学の才や研究者の才や身につけた医学の知見を、次代の中で存分に生かし得たのではないか（長男亮太郎はドイツ学の泰斗となり、次女文子は能楽の喜多家に嫁ぎ、囲碁七段、女性棋士の先達として活躍し殿堂入りしている）。著者もかく書き乍らいうように、社会との接点が広がり、晩年にかけては世間知も理解して来ている。また、松本良順の子息棟一郎氏の「一風も二風も変わった処のある人でしたが、また一面情誼の厚い人であった。」との言もある。更に、京都に転地療養した時、同じく療養中の絵師近藤玄洋に、自身の稼げば蕩尽の昔年ヲ慚（は）じ、自愛を促し漢詩を贈った。病が癒えておればやり直しの契機になったに違いない。

あとは小説の世界でとなるが、既述の負の性格の世界を、司馬作品に対抗して、逆ベクトルで作品を書くのは至難であろう。著者本人が、「あとがき」で述べた『涙ぐむような悲しみ』を、救済の文章にして書き加えて、その筆力で世間一般に棲み込ませて貰うということかと思うが、これも今となっては不可能である。

でも、もし書くとしたらどういう視点からだろうと考えてみた。そして、伝記を書かれた医学者の入沢達吉博士が、『昔年ヲ慚ズ』の漢詩を紹介していること、そして『七新薬』は、日本で初めて神経疾患の治療について記した、と棋界から評価されていること、から病理の観点からこれを見たらどうかと考えた。

『アスペルガー症候群』という発達障害の一つとされるものがある。言語障害や知的障害の症状は伴わない。三つの要素がある。一は、コミュニケーションの問題で、会話の裏側や行間を読むことが苦手で、言葉をそのままの意味で鵜呑みにする傾向があり、人の言葉を勘違いしやすく傷つきやすい。一は対人関係の問題で、場の空気を読むことが困難で、相手の気持ちを理解したり寄り添った言動が苦手な傾向があり、その場の雰囲気を平気で無視したような言動に成りがちで、対人関係を上手に築くことが難しい。一は、限定された物事へのこだわり・興味で、いったん興味を持つと過剰といえるほど熱中、法則性や規則性のあるものを好み、異常なほどの拘りを見せることがある。その法則や規則が崩れることを極度

に嫌う傾向がある（例えば、マイルールがある、記憶力が高い、興味のあることに関しては、大量の情報を記憶したり引き出すことができる、集中力がある「手をつけると熱中しすぎて周りが目にはいらなくなることも」、話し続ける、等）。一方逆にこの特性を強みとして活かすこともある、ということだ。

勿論、本人を実際に診断したわけではないし、あくまでも蓋然性に過ぎない。

だが、保護者であるように、涙の温かみという情で見つめ叙述した嫌悪感は、ある意味、その「人となり」を際立たせたのであり、それも小説の筆力なのであろう。むしろ、冷めた客観的科学的文脈を用いることで、その方向への感情移入を和らげることは出来ないか。

作者も、一方で異能の天才が埋もれぬよう、庇護に務める祖父や良順が、反射作用として、自閉的性格や遊蕩的習慣を助長してしまったという目線で叙述しており、病理的意識があるように思われる。その辺を踏まえ、涙の包み込みではなく、冷めた客観的科学的文脈で、冷静な理解に繋げられないものか。

（四）

さて、おそらく、ここまでこうして書いてくると、背後に書き手の意図が垣間見えるような、印象になるのではないか。将にその通りである。

確かに、「花蝶の夢」を読んだ時の衝撃は、他の司馬作品群での酔い方とは明らかに違っていた。既に私なりの司馬凌海が棲まっていたからである。それも違った岸にいたから、戸惑いで倍加された衝撃であった。しかし、それはそれで、そのまま今日まで何か為す術を考えたわけではない。

今少しく考え出したのは何故か。私が、生まれ故郷の佐渡のことを急速に身近に感じ始めて来ていることと無関係ではない。佐渡金山の世界遺産登録に向けた動きの中で、同じ郷土人の立場からすると、佐渡の生んだ偉傑の記述の仕方についてあって欲しくないものが潜在観念にあることに気づかされたことにある。遺産としての金山が存在する島自体の、歴史・文化が問われることになる。佐渡を育んだそして佐渡に育まれたそれらが語られ、正しい印象を持って貰わねばならない。そこに良く思われたいとの感情が忍び込む。最初に受けた衝撃の中にもそれが混入していたのではないか。故郷びいきはあって当たり前だから。

小説の無限定自由の素晴らしさを否定するものではないし、否定出来るものでもない。フィクションもあるし、ノンフィクション（実録・実名を使い）もある。後者の場合、事実の歪曲があればそれは問題にされ得る。

そこで、事実の検証という切り口から入ったが、年月や名前の違い、伊之助が長崎伝習所に直接赴いたか江戸の凌海の許に行き共に赴いたかなど枝葉の問題はあれ、今の私にそれ以上のものをみつけることは、出来なかった。人となりの何を取り上げるか、明らかな事実だけにするか、事実の点を繋ぐ線、線を広げる面を付加するかで、歴史からみたジャンルが違ってくる。ここもどれがよくてどれが悪いという話ではない。全ては人間の多様性から発する営為であるから。逆に、ある視点を持った時、どれがよくてどれが困るという感情を持つことも、また多様性のなせる業ではある。従って一般世間が等しく同じ見方をしているというのもありえないことである。郷土遺産の観点での説明と、小説の叙述が同じでなければならない訳はない。受けとめる側も、書き手の目線を正しく分別して認識するであろう。また、そういうことにしてゆかなくてはなるまい。

冷静に、それをやろうと信託プラットフォーム上の、検討手法を考えてみた。金山の歴史にも例えば、水換人の悲劇などマイナス要因も多いが、社会に受け止められた事実は事実として述べることで、寧ろ正しい理解となる。一方、遺産に伴う説明には其処（情の線を深掘りした性格論）までの司馬凌海像は不要であろう。

結局、事実を曲げぬこと、悪意をもって捻じ曲げぬことが大事で、あとは多様性の範疇であろう。そして、それを質の違いを違いとして冷静に常識的に受けとめる世間一般が望まれるということであろう。

強権併合と分離独立の狭間で

新井　宏

いま世界では、独立を求めて「国民投票」を行う地域が数多くある。その中で逆に、内陸的な超大国が、自国に併合した地域を強権で支配しながら、更に軍事力、経済力を背景に、その周辺地域を実効支配しようとする動きが活発である。

最近の独立を求める動きの最大のものは、何といっても、イギリスの欧州連合EUからの離脱（ブレグジット）を可決した国民投票（2016.6.23）であるが、その他にもスペインのカタルーニア州（バルセロナ）の独立宣言（2017.9.27）、イタリアのベネト州（ヴェネチア）等の大幅な自治権要求（2017.10.23）などが相次いでいる。いずれも海に面し、通商により発展してきた歴史を持つ地域である。この点は後述する。

その他の独立運動としてはクルド族の問題がある。主としてトルコ、イラン、イラク、シリアの国境地帯に住むクルド族（現在約三千万人）は、第一次世界大戦後に独立の構想があったものの一九二三年ローザンヌ条約によって、その居住地が各国に分割されてしまった。そのため、長年にわたる独立運動が続いているが抑圧されてきた。

ところが、イラクの独裁者サダム・フセインが除かれてからは、北部イラクにクルド人自治区（首都アルビール）が認められて力を得て、居住地域にあるキルクーク油田がイスラム国家ＩＳに奪われたのを自らの軍事力で回復するほどになった。油田の収益を独立の原動力にしようとするのは当然の流れであり、独立の是非を問う住民投票では、賛成票が九割を超えた（2017.9.30）。しかしイラク政府はもちろん、イラン、トルコ等は、いずれ

ロシアはクリミヤをウクライナから分離独立させて併合した上に、東部ウクライナへの影響力を強めている。長年続いているチェチェン問題にも強硬である。そもそもプーチン大統領が出世の糸口をつかんだのがチェチェン紛争の制圧だったのだから無理も無い。日本との関係では、北方領土を本能的に手放さない。

それにも増して、最近中国が朝鮮半島に対して牙をむき出し始めた。

トランプ大統領と習近平主席の最初の首脳会談で、習近平は「朝鮮は中国の一部だった」と主張したと言う。

もちろんいくつかの前提条件と修飾語のついた発言であろうが、韓国では反発が強まっているばかりでなく、それを黙って聞いて帰ったトランプ大統領にあきれてもいる。しかし、はたしてトランプの不勉強であろうか。それはむしろ韓国の不勉強だったのではないか。

私が韓国にいた頃、学生たちにしばしば語っていたのは、もしソ連が参戦する前に日本が降伏していたら、あるいは、もし毛沢東と蒋介石が争っていなかったら、「中国は朝鮮を自国領に編入することを強力に主張したはずだ」ということである。

韓国では、朝鮮は常に独立国であったと教えているが、現代の感覚では長期間にわたって、中国の属領であり続けた。習近平主席の話を「ある一時期に、元が高麗を支配したことがある」と軽く理解したいのであろうが、むしろ「李氏朝鮮が中国からの勅使に対し、王が王都の郊外まで出向き、自ら三跪九叩頭の礼で迎えていた」ことを想い起すべきである。

「三跪九叩頭の礼」とは、中国皇帝の前で臣下が「跪いて地面に頭を三回つける行為を三回繰り返す礼」のことである。これはもちろん臣下が皇帝に対して行う礼であり、勅使に対して国王が自ら王都の入口まで出向いて行う行為ではない。

清国末期のことになるが英国の外交官も日本の外交官も皇帝の前で「三跪九叩頭の礼」を行うように強要されたが拒否している。

清国の時代には、西蔵（チベット）もウイグルも、直轄地としてではなく藩部として現地首長を通した支配が行われ、伝統的文化の維持が許されていた。それに対して、李氏朝鮮は、名目上は藩部よりも緩い朝貢冊封関係にあったが、実質的には過酷な支配を受けており、自主外交権はなく、毎年、黄金百両、白銀千両の他、牛三千頭、馬三千頭、（美女三千人？）の貢納を要求されるものであった。

いや、つい最近も、韓国の盧英敏駐中大使が中国の習近平国家主席に信任状を奉呈した際、芳名録に「万折必東」と記していたことが問題となっている。

「万折必東」とは荀子の言で「黄河が万回折れ曲がっても必ず東に流れる」の意から諸侯が「天子への忠誠」を誓う言葉として知られていた。事実、李氏朝鮮の宣祖が壬辰倭乱（文禄・慶長の役）の後、明に送った書で「万折必東、再造藩邦」すなわち天子への忠誠を誓い、藩（朝鮮）を再建してくれたことへの感謝の意を伝えていた。

留意すべきことは、ここでも朝鮮は自らを「藩」として、後のチベットやウイグルと同様に位置づけていたのである。

地理的に見ても、中国の首都北京からソウルまでの距離は、千キロメートル弱で、上海、武漢よりも近く、広州、深圳、東莞、香港などの主要都市までの距離の半分以下で、ましてやチベット自治区、ウイグル自治区は遙かに遠方にある。

中国側のこの認識が、最近の韓国への「三不」要求、すなわち、①米国のミサイル防衛体制に加わらない、②韓米日三カ国軍事同盟に発展させない、③サードの追加配備は検討しない、となって現れている。これでは韓国の自主外交権の完全喪失であるが、外交に未熟な韓国は、交渉経過を曖昧にしてやり過ごそうとして大失敗した。今や中国は韓国を属国扱いしているかのようである。

一方、超大国の米国は、広大な内陸部を持ちながら、大きく発展したのが海洋国家としてであった。ところが、内陸の州に基盤を持つトランプ大統領が生まれると、内陸超大国の素顔を見せ始めている。まずメキシコとの国

も国土の周辺地をクルド族に割譲することなど問題外と拒絶している。その中で、シリアにおけるイスラム国家ISとの戦いに勝利したクルド人もシリア北部の三県を自治区として固め、独立の機会をうかがっている。

内陸国家における領土問題は、海に開かれた国家とは様相が異なる。たとえば、ローマは最初から世界征服を目指していたわけではなかったが、国の防衛を目指してその周辺国を取り込むうちに大帝国になった。内陸的な国家とはその周辺部を勢力圏に取り込む本能がある。

今の中国なども漢民族が住む中華の周辺に、チベット自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区を持ち、周辺部総面積は明代の領地（漢民族居住地）に匹敵する。いずれの自治区でも独立運動が盛んであるが、これに香港、台湾を加えれば、中国の周辺部では全て独立運動が起こっているといえよう。

唯一の例外が朝鮮半島であるが、最近中国が朝鮮半島を露骨に属国化しようとしているのを強く感じる。このような周辺地域を確保することによって、中国は国土の安全を維持しているので、中国の国境からインドのニューデリーまでわずか二五〇キロメートルしかないと知るとちょっと驚く。

だから内陸的な超大国は今でも周辺地域への勢力拡張に熱心である。

境に壁を建設する。万里の長城ばかりでなく、ローマも周辺民族の侵入に備えてフロンティアに「リメス」という長い防塁を築いた。英国の五〇〇キロメートルにも及ぶハドリアヌス長城もその一種である。

イスラエルも本質的には内陸国家であり、占領地に大がかりな分離壁を設けている。

考えてみれば、周辺を脅かすほどの内陸国家こそが、逆に防塁を築くのに熱心であった。それは中国の歴史に良く現れている。中国は隋、唐を含めて、清に至るまでに漢民族の王朝は宋と明のみで、その他は多かれ少なかれ北方系の征服王朝が続いていた。中国が周辺地を獲得する動機は防衛本能によるところ大なのである。

さて、イギリスのEU離脱（ブレグジット）、スペインのバルセロナの独立宣言、イタリアのヴェネチアの大幅な自治権要求に共通する点は、いずれも海に面し通商により発展してきた歴史を持つ地域であると述べた。

もうひとつの共通点は、経済的に豊かな各地域が、現在その豊かさを十分に還元されていないことに不満を持っていることである。

マクロに見れば、欧州連合EUも内陸的な超大国である。海軍力をもとにして世界に君臨した歴史を持つイギリスにとっては、たとえ民主的な組織とは言え、どうしても内陸超大国とは肌合いがあわず過去の夢を追い勝ちである。しかしイギリスはもはやEUとは不可分であり、ポピュリズムの行き着くところは、過去の栄光ではあり得ない。

またヴェネチアもバルセロナも十六世紀までは地中海に君臨した強大な海洋都市国家であった。

わずか五平方キロメートルに過ぎないラグーンの小島に、十万人が住むのがやっとのヴェネチアが強大な都市国家であったというと誇張のように思われるが、アドリア海の主要港を全て植民地化し、更にはエーゲ海のペロポネソス半島、クレタ島、ロードス島、トルコ領の沿岸諸島まで支配下に置いて、イタリア内にも領地を拡大していたヴェネチアは、東西交易を支配して、トルコにも拮抗できる強国であった。小さな国土のイギリスが、七つの海を支配し超大国であったことを思えばよいであろう。

同じ意味でバルセロナも、イベリア半島、フランス南岸、イタリアの地中海の港を確保し、地中海交易で富を蓄えていた。しかも、地域的にフランス文化の影響を大きく受け、言葉もスペイン語と異なるカタルーニャ語を使い、マドリッドを中心とする内陸のカスティーリャよりも優勢であった。ところが、大航海時代に入って力をつけたカスティーリャが大陸からの富を独占するようになると、マドリッドの支配下に置かれるようになる。その結果、マドリッドの干渉が強まるたびに、バルセロナが抵抗する歴史が繰り返されてきている。

ヴェネチアもバルセロナも、大航海時代の始まりと共に通商都市としては没落に向かった。西欧の食生活に不可欠とされた香辛料の東西貿易などで巨額の利益を上げていたのが、喜望峰周りの航路に取って代られたためである。しかし、前代に経済的に繁栄していた地域は、その後、文化的な先進地域として生き残る。今やヴェネチアはもちろん、バルセロナも方格都市やガウディのサクラダ・ファミリア教会などで、世界最大級の観光都市となっている。

このように、イギリス、バルセロナ、ヴェネチアの独立志向は、いずれも内陸的な国家や地域からの独立を目指す共通点がある。しかし過去の夢を見て、その付け根となっている内陸から離脱しようとするポピュリズムは、やはり時代錯誤である。

バルセロナの独立の動きを振り返って見ても、独立を主張する勢力は決して多くなかった。二〇〇六年にスペイン中央政府にカタルーニャ自治憲章を要求するまでは、独立を支持する住民はほぼ二〇パーセントで推移していた。ところがこの自治憲章が、二〇一〇年にスペインの国会と憲法裁判所によって否認されると、独立派の支持率が一気に高まった。ポピュリズムというものはそんなものである。

その一方で、いままでしばしば話題となっていたスペインのバスク独立運動、イギリスの北アイルランドやスコットランド独立運動など、民族主義的な独立運動は、このところ静かである。しかし、その裏で、新たに経済的な理由による独立論がくすぶっている。

フランス国境に接し、緑の山々が連なるバスク地方は周辺と言語が全く異なり、かつては暴力的な独立運動が盛んであった。それが鎮静化したのは、寛容な自主徴税権が認められ、経済的な不満が除かれたからである。最近の調査によれば、独立を望むバスクの住民はわずか十七パーセントに過ぎない。

カタルーニア州（バルセロナ）の本音もバスク方式にあるようだが、なにしろスペイン経済の四分の一を占める地域だけに、中央政府が簡単に同意するはずはない。

また長年イギリスの支配下にあったスコットランドは、北海油田の開発を契機として、スコットランド議会・自治政府の設立を獲得し（一九九九年）、二〇一四年には独立の是非を問う国民投票を行った。しかし民族ナショナリズムに流されることなく反対票が五十五パーセントを占め独立は否定された。ところがこの結果が、北海油田の油価下落による財政難と相まって、かえって独立支持率を高めている。

しかも、イギリスがEUから脱退する中で、スコット

らつかせて、日本政府を揺さぶるかも知れない。

もちろん、沖縄が「独立」を叫んだら喜ぶのは中国である。尖閣諸島はもとより、中国を取り囲む海域の大部分が沖縄県であり、瞬く間に中国の影響下に入るであろう。

考えてみれば、一四二九年に成立した琉球王朝は、一六〇九年に島津藩の実効支配下に入ってからも、明国や清国の冊封国であり続け、日清戦争までは清国が領有権を主張していた。中国は、おそらく朝鮮半島と琉球を領有化することを長期的な戦略としているに違いない。

このエッセイを書きながら、バルセロナとヴェネチアのことを想った。いずれも我が人生において思い出深い地である。

バルセロナには三十八年前、技術指導で、巡礼路サンティアゴ・デ・コンポステーラの終着地に近いポンフェラーダに行った時に立ち寄った。たまたまその本社がバルセロナにあり分不相応な歓待を受け、更にはスペイン一周の機会も得た。もう既に観光地として賑わいを見せていたバルセロナの中心路ラ・ランブラ沿いのホテルに宿泊し、お上りさんらしく観光馬車に乗って旧市街を回ったが、旧市街を出てサクラダ・ファミリアまで行くと、実に整然とした方格の都市計画となっていた。十九世紀

ランドが独立国となり、EUに残留できる希望的な選択肢も生まれた。次の独立是非を問う国民投票はブレグジットが完了する前に行われる予定であるが、もしスコットランドが独立投票に勝つと、もともと独立志向の強かった北アイルランド、ウエールズも追随するかも知れない。そうなれば英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）の解体である。

一方、独立運動とは逆ではあるが、サウジアラビアに隣接する小半島国カタールが最近サウジアラビア等のアラブ七カ国から断交された。理由はシーア派のイランに対する過度な接近にあるというが、真の狙いは内陸大国のサウジアラビアがカタールをバーレーンのように属国化することにある。サウジアラビアの面積の百分の一、四国ほどのカタールは、今でこそ二〇〇万人の外国人労働者がいて国家らしくなっているが、カタール国籍者はわずかに三〇万人に過ぎない。しかし石油、天然ガスの資源に恵まれ、しかも海に向かって開かれているので、首都ドーハはアラビアの大都市である。内陸国サウジアラビアにとっては、バーレーンと合わせて属領化したいのが地政学的な要求である。

ところで、日本においてもし独立運動が起きるとしたらどこであろうか。全く非現実的な想定であろうが、歴史的に見て沖縄である。本気ではなくとも「独立」をちらつかせて、日本政府を揺さぶるかも知れない。

もちろん、沖縄が「独立」を叫んだら喜ぶのは中国である。尖閣諸島はもとより、中国を取り囲む海域の大部分が沖縄県であり、瞬く間に中国の影響下に入るであろう。

考えてみれば、一四二九年に成立した琉球王朝は、一六〇九年に島津藩の実効支配下に入ってからも、明国や清国の冊封国であり続け、日清戦争までは清国が領有権を主張していた。中国は、おそらく朝鮮半島と琉球を領有化することを長期的な戦略としているに違いない。

このエッセイを書きながら、バルセロナとヴェネチアのことを想った。いずれも我が人生において思い出深い地である。

バルセロナには三十八年前、技術指導で、巡礼路サンティアゴ・デ・コンポステーラの終着地に近いポンフェラーダに行った時に立ち寄った。たまたまその本社がバルセロナにあり分不相応な歓待を受け、更にはスペイン一周の機会も得た。もう既に観光地として賑わいを見せていたバルセロナの中心路ラ・ランブラ沿いのホテルに宿泊し、お上りさんらしく観光馬車に乗って旧市街を回ったが、旧市街を出てサクラダ・ファミリアまで行くと、実に整然とした方格の都市計画となっていた。十九世紀

中ほどマドリッドの強要により作られた通称「板チョコ」状の都市は、バロセロナ住民の反対にもかかわらず、今ではヨーロッパでも有数な方格都市として機能している。

二度目にバルセロナに行ったのは、十七年前に妻と一緒にツアーに参加した時であった。スペインを一周して最後の宿泊地であったので、比較的に時間の余裕もあり、ラ・ランブラ通りの大道芸をぼかっとして見ていた時、ジプシー三人組のスリに囲まれ、カメラを盗られそうになった。近くにポリスがいたので大声を出すと、一人は逃げたが女性二人が捕まえられた。

ポリスは我々にパトカーに乗れという。あまり英語が通じなかったが、とにかく何か証言を求められるか、あるいは表彰でもしてくれるかと思って、よろこんで同行した。しかし、警察に着くと様子が異なる。どうやら我々は被害者として、連れて来られたらしい。日本人の被害者が多いらしく、調書への記入も日本語版も用意されていた。

一通りの「取り調べ」が終わってから、証言するために協力したのだから、ホテルまでパトカーで送るように交渉したが、にやにやしていて、タクシーで帰れという。結局、ラチがあかずホテルに戻った。パトカーには片道だけしか乗れなかったのが残念であった。

ヴェネチアの方は、今から四十年ほど前、会社の五十周年記念の懸賞論文に立場上もあって応募した。たまたま塩野七生の『海の都の物語』を感激と興奮を持って読み終えたところであった。海洋大国のヴェネチアが強大国に囲まれる中で、弱小国に徹しきって守った地中海の覇者の地位に学んで、我が社の行くべき路を模索してみよう。そう思って書いたのが『海の都の物語』を下敷きにして書いた懸賞論文で、最優秀論文に選ばれ、賞として五十グラムほどの金杯を得た。

それ以来、何かにつけて、ヴェネチアの歴史について学んでいたが、なかなか訪問する機会がなく、やっと妻と一緒にツアーに参加したのが十年ほど前である。その頃には、幅輳したヴェネチア島の地図がほとんど頭に入っていたほどで、その記憶を確かめて歩くような気分であったが、リゾ島までの船に乗ってヴェネチアがいかにして浅瀬のラグーンを利用して国を守ったかを実感した。

やはり最大の収穫は、サンマルコ寺院の青銅製四頭の馬車を見たことであった。二、三世紀の頃、ローマで作られたものらしいが、東ローマ帝国の首都イスタンブールにあったのを第四回十字軍の時（一二〇四年）に、ヴェネチアが奪ってきた戦利品である。どこに行っても歴史的な金属製品を見て歩いていた私にとっては、この等身大の馬車はとにかく感激であった。

北摂老人点描

語り部（かたりべ）・太平洋戦争

濱本章

語り部・太平洋戦争（Ⅰ）

「太平洋戦争開始」

今年平成三十年は、太平洋戦争突入より数えて、七十七年目の節目の年に当たる。

緒戦の真珠湾攻撃、東南アジア進攻での輝かしい戦果におぼれ、米国の実力を過小評価する過ちを犯したのである。（日米の実力差はわかっていたが先手必勝を狙った。）

昭和十七年六月には、ミッドウエイ海戦で手痛い敗北を喫し、立ち直りも危ぶまれたが、大本営は事実を隠して発表した。

私が成年に達した昭和十八年には、二月にガダルカナル島より撤退（発表は転進）、四月に、山本五十六連合艦隊司令長官が戦死、続いて五月には米軍は、アリューシャン方面のアッツ島に上陸、山崎部隊長以下二千名全員が玉砕した。七月キスカ島より、深い霧を幸いに全員軍艦にて撤退することができたが、戦況は次第に不利となりつつあった。

また、この年の四月から敵飛行機の本土空襲が始まり、国民もようやく戦局の容易ならざるを悟り始めた。

「学徒出陣」

国はこの重大戦局を突破せんと、ついに学徒出陣の命令が下された。

それによって、理工系、教員養成以外の学生は、それまで与えられていた徴兵猶予の恩典がすべて停止されることになった。

昭和十八年十月二十一日、出陣学徒の壮行会が挙行され、明治神宮外苑競技場では、降りしきる冷雨の中、東京近在の大学生数万が劇的の分列行進を行い、東条首相の閲兵を受けた。

これを送る女子学生・生徒がスタンドより、雨に濡れながら別れを告げたのである。

このシーンは戦後いろいろな機会にテレビ放映されているので、国民の多くの人の目に留まっていることと思う。

「軍隊生活」

入隊は陸軍は十二月一日、海軍は十日と決まり、その前に徴兵検査があり十一月初旬（本籍地である）京都陸軍病院に出頭、身体検査の結果第一乙種合格となり、現役兵としての入隊が決まった。

数日後に通知があり、十二月一日、京都市深草にある中部第三十七部隊（歩兵第百二十七連隊）の営門を潜った。

同時入営の学徒兵約五百名と共に、連隊長より訓示を受け、所属は第二機関銃中隊と決まった。

早速私服を脱ぎ捨て、新規おろしたての帆の越中フンドシを締め、袴下（ズボン下）・繻袢（シャツ）・軍袴（ズボン）・軍衣と軍服一式を着るに及んで、一応軍人らしい服装となったが、これで娑婆と完全にお別れかと思うと、少し感傷的な気分になった。

第二機関銃中隊に所属したことや、幹部候補生としての入校した仙台陸軍予備士官学校での教育訓練のことは、平成十七年に初めて書いた、私の履歴書めぐりあい記や、平成二十七年二月出稿の拙著、北摂老人点描・九二式重機関銃で述べているので、ここは省略して、今まで詳しく書かなかった軍隊の恥部ともいうべき「私刑」について触れておきたい。

「軍隊における私刑（リンチ）」

所謂学徒出陣と持ち上げられ、教官（少尉）、助教二人（兵長）より熱心な教育訓練を受け、割合チヤホヤされた初年兵であった。

入隊時こそ二等兵で、赤地に黄色の星一つの襟章をつけていたが、翌年二月一日、幹部候補生の一等兵、更に三月一日上等兵の階級を与えられ、星三つの襟章の横に、候補生を示す座金がついた。

平時、兵役の義務を負って二十歳で現役兵として入隊した場合、一期二年を務め満期除隊の際、一等兵になるのが通常で、特に成績優秀者は上等兵になる場合がある。

それに比べて学徒兵は、甲種幹部候補生試験に合格した場合、入隊の翌年五月一日、予備士官学校入校時に伍長の階級となり、八月に軍曹に、十二月卒業となり、十九年一月一日付にて見習士官（曹長の階級で将校待遇）と、一年と一寸で将校勤務につく昇進ぶりである。

このような状況の中で、日々生活をしてみてまず恐怖に感じられるのは、巷間仄聞していた、内務班（寝食等

共にする居住空間）の非人間性であった。同居している古年次兵（古兵、助教の二木・小巻両兵長も同室）の、初年兵に対するリンチまがいの私的制裁は言語に絶するものがあった。

鉄拳、ビンタなどは日常茶飯事で、拷問とも思われる面白半分の制裁として、班内の太い丸柱によじ登って、セミの鳴き声をさせられたり、鶯の谷渡りと称して、机から机へと飛び渡りながら鶯の鳴き声をさせられたり、それはひどいものであった。

横でにやにや笑いながら見ている古兵の頭を殴りたい位である。

同僚の一人がミス（銃の手入れが悪い、軍靴が汚い、整理整頓等）をしても、連帯責任で候補生全員を向かい合って起立させ、「足を半歩開け、歯をくいしばれ」と古兵の声がかかり、対手のほっぺたを殴り合うこともざらであった。

道理の通らないこの世界のことだから、いつ突然わが身に振りかかってくるかわからないので、他人事とは思えず、戦々恐々の日々であった。

私も一度ひどいしごきに会ったことがある。野外演習に出て小休止となったとき、煙草良しの命令が出て、教官・助教も一緒に車座になって寛いだとき、当時未だ煙草を吸わなかった私は、軍服の物入（ポケット）から貰っていた飴を取り出しなめていたところを助教の目に止まり、生意気だと叱られ、内務班に帰ってから、革製の営内靴（スリッパ）で思い切り顔を殴られ、二、三日は腫れあがった儘で痛みもひどかった。

事務室の曹長からもどうしたと問われたが、まともな返事はできず、応答に困ったことがあった。

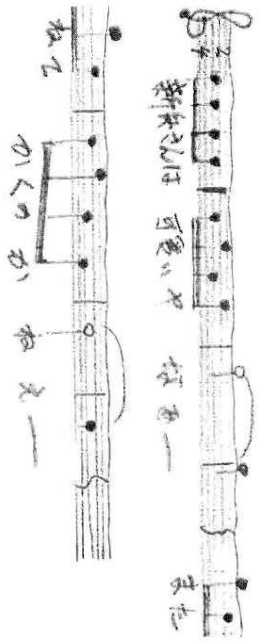
彼らは、お前達はすぐに我々を追い越し上官になるのだから、今のうちだと思ってるのであろう。

軍隊では、私刑（リンチ）禁止は建前となっていたが、ひとつも守られたことはなかった。

然し、このような理不尽なしごきを受けた初年兵が最も楽しいのは、寝床の中で聴く消燈喇叭の音である。

軍隊では号令の伝達には常に喇叭が用いられる。起床・点呼・食事・消燈等の他、戦争中の進軍喇叭も専門教育を受けた喇叭手がこれを担当する。

我々候補生も一番の楽しみであった消燈喇叭を譜面で表し、それに合わせてよく歌われた歌詞を添えてみたので、ご唱和ください。



「敗色濃厚」

「戦争」という名のもとの軍隊生活、しかも前述のとおり、第一線の下級指揮官（小隊長）となるべき者を鍛えるのだから、厳しくなるのは已むを得ないことかも知れないが、その戦争も既に末期的状況に入っていたのである。

物量を頼む敵の激しい艦砲射撃と戦車の前に、島々は次々と落ち、遂にわが領土サイパン島が陥落するに至った。そして此処から米軍は、重爆撃機B二十九を直接飛ばして、本土空襲を行うようになった。

そして十月には海軍が遂に残り少ない航空機を練習機の赤トンボ迄かき集めて、「神風」特攻を開始するに至った。

制空権を失い、主要艦船の殆どを沈められたわが陸海軍は、以後米軍の為すが儘に、翌年二月、本土防衛の最前線硫黄島に上陸して、名将栗林忠道中将の指揮する二万の精兵が、六万の敵海兵隊と一ヶ月に亘る激戦の末、三月十七日全員玉砕した。

米軍はこの後、直ちに沖縄への上陸作戦を開始し、圧倒的に優勢な米軍の威力の前に、島民まで巻き込まれ、二十万の命を奪ったのである。

我が軍は最後の砦とする本土上陸を阻止せんと、二月、四月にかなり年輩者迄含めて、大量の補充兵を招集するに至った。

我々、京都十六師団は、護京部隊として、伊勢、志摩方面に展開したが、時既に遅く、遂に昭和二十年八月十五日を迎えたのである。

九十五歳、一人の戦争体験者が、数少なくなった「語り部」となり、描稿を呈する。

平成二十九年四月八日（桜満開）

「陸軍病院」

私が京都陸軍病院高野川分院に移ったとき、「サイパン島陥落」と大書された貼り紙が、院内の柱に掲示されているのが目に入った。

昭和十九年七月、私は体調を壊し、仙台陸軍予備士官学校より、宮城野陸軍病院に入院した。直ちに肛門周囲炎の手術を受けて、暫し静養した後、原隊である京都に転送されることになった。

仙台で療養せず、原隊の病院に移ったことには次のような理由があった。

昭和十六年以降、大東亜戦争（後に太平洋戦争に改称）の戦域拡大に伴い、兵力の不足は深刻であった。将校の不足はそれにも増して大なるものがあった。

我等甲種幹部候補生第十一期も、予備士官学校での教育期間を八ヶ月間と削って対応することになったが、それには限度があり、斬新な制度の創設が必要となった。

そこで昭和十九年五月（十一期生の入校時）臨時特例が公布された。

それは「特甲幹」特別幹部候補生制度である。

第十一期迄は、初年兵教育を五ヶ月間経験した後、予備士官学校入校時に、伍長の階級を与えられたが、特甲幹は兵としての教育期間を省略して、最初から伍長の階級で入校し、即席教育が行われ、野戦小隊長を急速に補充する措置がとられたのである。

その上、第一期特甲幹の入校日は十月一日となった為、第十一期生は特甲幹に校舎を明け渡すことになり、仙予士八百名のうち、六百名は南方軍へ転属となり、日本軍が占領しているマレーシアのポートディクソン（マレー半島の西海岸）へ、二百名は、福知山の教育隊に移り、それぞれ後半の教育を受けることになった。したがって私は原隊に所属替えになった。

私はこの何れもの教育を受けることなく、軍服を脱いで白衣に着替えたが、正直、内心を吐露すると、これで運命が変わるのかも知れないと感じ、肉体的、精神的に、全く落ち着くことができたのである。

白衣の胸には階級章と、傷病を数段階で示す標識をつけている。

私は伍長の階級章と中間の濃い㊒をつけていたが、だんだん薄くなり、十月に軍曹の階級に進められた時には、軽症の空色になった。

幹候病人乍ら、下士官待遇が受けられたが、部隊の中と違って、可成り上下の区別は緩く、お互いに日常生活は明るく、むしろ助け合っていた程である。

どの病棟にも、私のように軍隊経験の浅い者も多少は居たが、ほとんどが外地で発病し、野戦病院では対応できなくて、内地送還となった下士官、兵で、彼らは厳しい環境の中で命を懸けて戦った経験がありながらも、殆ど口を閉ざして、深く心の中で噛みしめて居られる様子が伺えた。

そして日常会話は食物の話で、退院したら郷里の旨いものを腹一杯食べたいと、現在の気持ちを率直に話す場合が多かった。

病室の一日を期すと、起床前の六時半ころ、看護婦が体温計を配り、一人一人の体温と脈拍を記録して回ることに始まり、夕方前も亦同様に部屋を巡回する。

ここで不思議なことに、配られた体温計の頭部が欠けて、絆創膏で囲っているものがある。

これは体温があまり低いと、胸部疾患の患者として開放に向かっていると見られることを恐れ、指の爪先で体温計の頭を叩き、平熱を超えているように体温調節した際、硝子が壊れたわけである。

然し、破損に関わった者を詮索追求したとは聞いていない処をみると、少しでも患者を労わる気持ちが表れて嬉しい。

その看護婦には二派があり、一派は陸軍看護婦と云い、陸軍病院で教育を受け、その儘勤務している者と、一旦退職したが、赤紙を貰って再び病院に戻った者もいるので、既婚者もかなり居り、頭に乗せた白帽には星がついている。

もう一派は、日本赤十字社が養成した看護婦で比較的若い人が多かった。帽章は赤十字の徽章だから、はっきりと区別ができる。然し余り仲は良くなかったようであった。

婦長は可成り経験を積んだベテラン揃いで、その待遇は陸軍曹長（軍曹の上）に相当する故、伍長の私は、廊下等ですれ違ったときには敬礼を欠かさないが、婦長も軽く会釈を返してくれる。

軍医を含め看護婦も患者扱いは総じて公平で、戦争下だからと言って、少々病状が残っていても、無理やり退院させるような空気は伺われず、軍医であっても医師のプライドを貫く信念を持っておられた。

私が入院中に拘わらず、昭和十九年十月一日付で伍長から軍曹の階級に進められた。南方軍に転属した同期生より二ヶ月遅れの発令であったが、嬉しい反面、色々考えさせられることもあり、少し悩んだのは事実である。

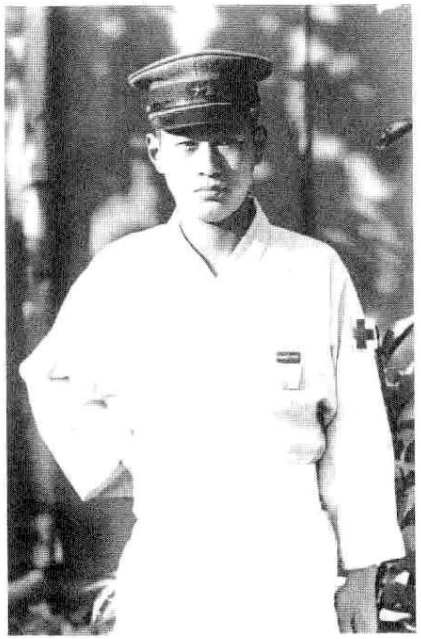
体調も相当回復し、院内で耕した畠で軽い農作業もしていたので、軍医の許可があれば、退院して第一線に復帰すべきかとも迷い、担当の軍医（中尉）のもとを訪ねた。

軍医からは、症状は快方に向かっているが、今少し療養を続ければ退院可能であるといわれていた。

下士官以上には、帰郷療養といって、三ヶ月間自宅療養ができるから、敢えて原隊復帰を申し出る必要は認めないと帰郷療養を勧められたので、これに甘え十一月より二十年一月迄自宅で過ごした。

て戦地に行って居れば、わからなかったよ、人間万事塞翁が馬、これからも命を大切にせよと、ご自分の経験からしみじみ語ってくれた言葉、今もはっきりと心に残っている。

平成三十年一月二日（書初）



語り部・太平洋戦争（Ⅲ）

「終戦処理」

昭和二十年八月十五日、正午より部落の会所に集まって、玉音放送を聞き終わったとき、駐留する兵隊と村の人々数十人は、ひそひそと話し合って不安な顔をする人、無言で頷き合う人と色々であった。

一方、いやこれは本土決戦に向かって、全国民は一致団結せよとのお言葉だと、声を荒げる兵士も幾人かいた。放送が雑音が多く、今一つはっきりしなかったことに迷っていた。

暫くして、隊長が本部に問い合わせるから、勝手な行動は慎み、次の命令を待てとの発言があり、この場は解散となった。

然し各所でラジオを聴いた連中よりの情報によれば、全面降伏を受け入れたことをお示しになった終戦の詔勅だったことが分かり、兵隊も村民も一時の緊張が解け、やれやれ終わって本当に良かったと、本音で話し合うことができた。

B二十九も飛ばなくなったし、艦載機の機銃射撃も止まったので、一層安心感も深まった。

何時も貰い風呂をしている家人は、早速お風呂をわかしますから、兵隊さん入ってくださいと声がかかった。

家の外に建てられた小屋に座った五右衛門風呂で、薪をくべて湯を沸かす方式である。

湯が沸いたとの知らせを受け、私が一番風呂を承り浴室に入った。

ところが湯が熱すぎ、暫く立ち尽くしていると浴室の扉が開いて、ハイ兵隊さん水ですと、娘さん二人が桶に一杯宛の水を持ち込んでくれた。

然し、こちらは着衣を脱いでスッポンポン、慌てて手拭いで前を抑えたが時すでに遅く、娘さんらはくすくすと笑いながら、ごゆっくりと扉を閉めて戻っていった。

平和な奇襲作戦に一杯やられた一幕であった。

本部からの命令は次々に伝えられたが、最も悲しい命令は、武器一切・軍隊関係の書類を全部処分せよとの指示であった。

我々小隊の武器と云えば、九二式重機関銃だけであるが、命令に従って直近の的矢湾迄運び、舟艇に乗せて少し沖合まで出た。

皆で一礼して海に沈めたときは、流石残念で涙が止まらなかった。

然し、終戦に異を唱え、抵抗を企てる者も若干暗躍しているとの情報も、耳に入ってくるようになった。

軍部はかかる行動に少なからず神経をとがらせ、対策として臨時憲兵制度を採択した。事前にこのような企てを封殺するとともに、伊勢神宮、皇室関係施設の安全を図るのが目的である。

「臨時憲兵」

その臨時憲兵に私も任命を受け、任地も宇治山田（現在の伊勢市）に移り、その任務に就いた。

「原隊復帰」

然し、二月正式退院して、原隊の中部三十七部隊・第二機関銃中隊に戻ったとき、私を待っていた命令は、幹部候補生を免ずであった。軍曹の階級章と座金を返して、星二つの一等兵となり、古年次兵の仲間入りをした。

初年兵教育を受けた教官・中村少尉はじめ、助教で下士官候補者だった二木・小巻の両兵長も伍長に昇級しており、被服係の清水上等兵もその儘で、新しい服装を整えてくれて、皆さんから温かく受入れてくれたことが私にとって何よりも嬉しく、第二機関銃中隊の一員として頑張ろうと心に誓った。

戦局は既に挽回不可能な状態に陥り、硫黄島を攻め落とした米軍は、内地防衛の拠点、沖縄に総攻撃をかけてきた為、水際作戦で次なる本土上陸を阻止すべく、赤紙を乱発して極力兵を集めこれに当たったのである。

兵舎二階の寝室で隣り合わせになった北川兵長は、日中戦争に続いて再度の応召となった古兵で、私も色々指導してもらった。

或るとき、彼が私に対し語るには、なあ浜本、病気をせず軍隊におれば、今頃丁度見習士官、野戦小隊長として、玉音放送を聞き終わったとき、駐留する兵隊と村の人々数十人は、ひそひそと話し合って不安な顔をする人、無言で頷き合う人と色々であった。

一方、いやこれは本土決戦に向かって、全国民は一致団結せよとのお言葉だと、声を荒げる兵士も幾人かいた。放送が雑音が多く、今一つはっきりしなかったことに迷っていた。

暫くして、隊長が本部に問い合わせるから、勝手な行動は慎み、次の命令を待てとの発言があり、この場は解散となった。

然し各所でラジオを聴いた連中よりの情報によれば、全面降伏を受け入れたことをお示しになった終戦の詔勅だったことが分かり、兵隊も村民も一時の緊張が解け、やれやれ終わって本当に良かったと、本音で話し合うことができた。

B二十九も飛ばなくなったし、艦載機の機銃射撃も止まったので、一層安心感も深まった。

何時も貰い風呂をしている家人は、早速お風呂をわかしますから、兵隊さん入ってくださいと声がかかった。

家の外に建てられた小屋に座った五右衛門風呂で、薪をくべて湯を沸かす方式である。

湯が沸いたとの知らせを受け、私が一番風呂を承り浴室に入った。

ところが湯が熱すぎ、暫く立ち尽くしていると浴室の扉が開いて、ハイ兵隊さん水ですと、娘さん二人が桶に一杯宛の水を持ち込んでくれた。

然し、こちらは着衣を脱いでスッポンポン、慌てて手拭いで前を抑えたが時すでに遅く、娘さんらはくすくすと笑いながら、ごゆっくりと扉を閉めて戻っていった。

平和な奇襲作戦に一杯やられた一幕であった。

本部からの命令は次々に伝えられたが、最も悲しい命令は、武器一切・軍隊関係の書類を全部処分せよとの指示であった。

我々小隊の武器と云えば、九二式重機関銃だけであるが、命令に従って直近の的矢湾迄運び、舟艇に乗せて少し沖合まで出た。

皆で一礼して海に沈めたときは、流石残念で涙が止まらなかった。

然し、終戦に異を唱え、抵抗を企てる者も若干暗躍しているとの情報も、耳に入ってくるようになった。

軍部はかかる行動に少なからず神経をとがらせ、対策として臨時憲兵制度を採択した。事前にこのような企てを封殺するとともに、伊勢神宮、皇室関係施設の安全を図るのが目的である。

「臨時憲兵」

その臨時憲兵に私も任命を受け、任地も宇治山田（現在の伊勢市）に移り、その任務に就いた。

白地に憲兵と黒字で書いた腕章を左腕に巻くと（本来の憲兵の腕章は白地に赤字）少し緊張を覚えた。

私は従軍中、軍馬を扱った経験があるので、伊勢神宮の外宮・内宮を始め重要施設を乗馬の儘巡回する役が与えられた。

神宮は建物の被害は無かったが、長い参道の両側の高い木立には、焼夷弾による火災で、黒々とした焼け跡が随所に見られた。

臨時憲兵とはいえ、特に異変も起こることはなく平穏であったので、宿舎に集まると、誰かがどこからか持ち込んだアルコールを湯割りにして、酒の代わりに飲み交わして、秘かな楽しみを味わったときもあった。

半月余りの臨時憲兵であったが、当初の目的は略達成したと判断されたか、臨時憲兵制度は廃止され、私は九月十日付をもってお役ご免となり、即日京都へ帰り自宅に元気な顔を見せることができた。

「あとがき」

これが私の復員の姿で、振り返ってみると、一年十ヶ月、びんたに明け暮れた初年兵から、幹候として仙台陸軍予備士官学校へ、途中から陸軍病院での白衣生活も経験し、最後に落幹古兵として、所謂兵隊さんの純粋な良さも味わったことを思い出に、「軍隊と私」としてこの稿を終戦としたい。

了

平成三十年二月十一日（建国記念日）

日本の復古と革新

浅野博文

一、伝世品の淵源

桜花は決して開花の機会を失ふことがない。その温暖を計り、時節を洞察する中で、周到な準備を怠ることなく、今年も上野恩賜公園の桜は満開である。その上野公園内にある国立博物館には、本館が日本、東洋館にはシナを中心に、朝鮮、東南アジア、西域（敦煌以西、エジプトに至る）、インド地域に於ける文化財が展示されてゐる。

嘗て、シルクロードと称された欧州に連なる東西の交通路を経て、文化の上で我が国の世界的交流が広くなされたことは、東大寺の正倉院に納められた宝物からも往時を偲ぶことが出来る。

しかし、我が国民性の真の表れは、舶来文化の受容や模倣にあるのではない。「換骨奪胎」。自主的な態度で、自由自在、大胆奔放に外国の文化を消化し、利用してゆく気性の表れにこそある。事実、その精華は「千年の都」と賞された平安京に於いて、独自の日本文化を花開かせた。

世界万国に於いて、独自独特の文化を展開させる上で大きな貢献をなすものとは、国語と国字である。国家に於ける文化の基礎は、その創造に依りて牢固たるものとなる。我が国に於ける、平仮名・片仮名の発明と五十音図の成立は、日本人としての自信や自覚を大いに促し、裏打ちすると同時に、今後の学問や文芸、宗教等の各分野に於いても、東西の外国人による批判や検証に充分耐へ、その信頼と尊敬を勝ち得ることを約束した。

一体、平安朝の中で生まれた国文学（古今和歌集・源氏物語等）は、アーサー＝ウェイリーからドナルド＝キーンに連なる日本文化の本質を究明しようとする海外の優

れた学者や知識人の間に伝播し、今日も祖国日本が正しく理解される上での有益な手引きとなつてゐる。そのことは、日本文化の最も美しく花を咲かせた時代こそが、平安の御世であることの証明にもなつてゐる。

日本人は古来より、人生の喜怒哀楽を花鳥風月の中に投影させ、歌として詠んだ。今日も、君民一体となつて催される宮中歌会始に象徴される如く、紀貫之も『古今和歌集』の序文にて、「いきとしいけるもの、いづれか歌を詠まざりける、力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をもやはらげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり、この歌、あめつちの開けはじまりける時よりいでにけり」として和歌の「敷島の道」たる所以を説いた。

古今集の中で、昔日の父祖が詠まれた「春来ぬと人は云へどもうぐいすの鳴かぬ限りはあらじとぞ思ふ」や「鶯の谷より出づるこゑ無くば春くることをたれか知らまし」の歌は、時代の古さを感じずに言葉もよく理解せられ、古人の心持もよく同感せられる。今より一千百年以上も前に遡る延喜五年に作られた勅撰和歌集であるにも拘はらず、我が国歌壇の指針として、後続する勅撰集に受け継がれ、今日に於いても光り輝いてゐる。それは、平安京が様々な時勢の移り変はりはあつたにせよ、帝都として厳然たる地位を失はなかつたことに加へて、文化の中心として、千年も永く続いた事実と密接に結び合ふものとして認められるであらう。

畢竟、日本歴史を通じて、聖徳太子の『法華義疏』に代表される如く、その古い時代の文化財が、発掘品ではなく伝世品の多く遺されてゐることの根本となつてゐるものとは、実に、我が国に革命が無かつたと云ふ、万世一系の歴史に他ならならず、この一点に我が国伝世品の淵源を観るのである。

二、国史の威力

日本の文化財には、絵画・彫刻・建築・詩歌等、各々に秀でた点があるであらうが、その本質は道義を第一とした点であり、日本民族の造成した最高の文化財とは、実に道義国家日本に他ならない。古代日本に於ける六国史の編修とは、正しく道義国家日本を護持する上で、最も重要とされた事業であつた。

一体、神武天皇の国家建設から仲哀天皇の御世を経て、その御子である応神天皇の御世にシナの文字（漢字）が朝鮮半島より伝はり、昔からの口伝も、漸く文字に写され記録が出来る様になつた。推古天皇朝の『天皇記』・『国記』は、聖徳太子を中心に、それらを整理して編まれた我が国初の歴史書である。それは、不幸にも大化改新の折に、度重なる専横のために誅戮せられた蘇我氏により焼かれたが、一部は船恵尺と云ふ人物により、火の中より取り出され、後の『古事記』『日本書紀』を編修する上での貴重な史料となつた。

国家の基盤を支へるのは法律ではなく道徳である。その国の道徳とは、その国の民族が行動する上での理由づけとなる明確な根拠と云ふ意味で、国体や国柄と呼ばれ、大義名分と同義である。聖徳太子は、それらが歴史の中より現れるとの御認識の本、歴史の編修に力を致された。

聖徳太子が十七条憲法をお作りになり、冠位十二階を定められた当時は、有力豪族が帰順してゐたとは云へ、教育も不十分で道徳の修練も十分行き渡らず、我執の強さと国家意識の弱さより、幾度の内訌へ導く政治的状況が存在してゐた。太子にとりて、その危機的状況を克服する上で、祖国の本質を純化し、制度を明確にするためには、歴史を調べ、国家の由来を明らかにすることが、どうしても必要なことであつた。

往昔より日本人は、誇りの心を祖国の歴史に依りて培はれ、祖国の歴史に流れる精神（神道）から忠と孝（道徳）を知り、尊皇愛国に至つた。桓武天皇の忠臣、和気清麻呂公の玉體護持は、それを体現した代表例である。皇位を盗まんと謀る弓削の道鏡からの、あらゆる誘惑や脅迫を退けて、

「我国家ハ開闢以来、君臣定レリ、臣ヲ以テ君ト為ス、未ダ之レ有ザルナリ、天之日嗣ハ必ズ皇緒ヲ立テヨ、無道之人、宜ク早ク掃除セヨ」

との宇佐八幡の神託を慎みて言上した。

（『続日本紀』）

日本人が、歴史の偉大を形成組織する原動力とは、究極する所、自らの意志の力や信仰の力、即ち大和魂である。そして、国家の正史である『日本書紀』の内容をよく消化して、自己の血となし肉となし、自らの行動を裏打ちする原動力となすのは、古代の朝臣の常とする所であつた。

皇国の危機に際会して、国史の威力が発揮せられ、正々堂々、大義名分を貫き、乱臣の野望を打ち砕いた代表例こそ、身命を賭した和気清麻呂公の玉體護持であつた。今日も大楠公と共に其の尊像が、皇城を守護してゐる。

三、伝統国家と革命国家

日本の歴史、朝廷で正式に編修されたものは正史と呼ばれるが、元正天皇朝の『日本書紀』を皮切りに、『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』そして醍醐天皇の延喜の御世を最後とした『日本三代実録』に至る歴史書を六国史と総称する。六国史の中でも特に『日本書紀』は、村上天皇の康保二年を最後とするまで、朝廷では三十年に一度程の割合で、日本書紀の講義が行はれ、研究も活発であつた。我が国に於いては、常に祖国の本質を正史によりて理解せられ、法令もそれ

に則りて整備され、政治経済産業文化等を斯かる順序から発展させてきた。

二官八省に象徴される古代の律令体制の本質は、祭政一致の君主国であつたことからも、神事即ち政事であつたことが解る。一体、その民族の思想と風俗とは一連の繋がりがあり、思想は風俗となつて現れ、風俗は思想を象徴するが、刑法や行政法等、古代の法律である律令格式の内、『式』とは原則的な法令に漏れてゐる細かい規定を集めたものである。言ひ換へれば、社会の実相を映した規定であることから、当時の日本の姿をよく映してゐると言へる。

『延喜式』は、『弘仁式』・『貞観式』の後を承けて編修せられた全五十巻の施行細則である。特筆すべきは、第一巻から第十巻までは、神祇関係の規定であることに加へて、それは単に前にあると云ふだけではなく、非常に沢山の分量を占めてゐた。神道を国家原理とする我が国の本質は此処に観ることが出来る。

果して、天地開闢の往昔より日月星辰の本にて存在してゐる大自然とは、人間生活の根本条件の衣食住の確保に寄与すると云ふ意味で偉大な力を備へてゐる。記紀神話が示す所は、皇国の由来、即ち建国以来、今上陛下に至る皇統連綿の歴史のはじまりを、瓊瓊杵尊（ニニギは稲穂が賑々しく成熟するの意）が天降り、その御子孫が神武天皇となられてゐるとする点に重きを置く。

周知の如く、神話が太古の宗教や歴史、道徳や風俗習慣が其の影を映してゐると云ふ意味で、史実の反映であることは言ふまでもないが、皇室の御先祖には、穀霊的なものと祖霊的なものが分かちがたく一つになつてゐる姿を観ることが出来る。

日本民族の倫理（玉體安穏と皇国弥栄）は、神々の系譜を語る神話と共に、天皇を中心とした国家日本と云ふ大きなまとまりを、神武天皇建国を出発点として成立させた時に、その礎は確立された。今日の践祚大嘗祭には、国の本である農に於ける五穀豊穣の原動力と考へられた天皇の霊力の継承と全国農民の悲願実現のための農国儀礼といふ二つの大きな意味が合はせもたれる（大嘗祭における二つの意義は、内宮に天照大神、外宮に豊受大神をお祭りする二所宗廟の異称をもつ神宮の姿にも窺はれる）。そして、即位後の毎年の新嘗祭（「勤労感謝の日」には、陛下御自らが、天神地祇に新穀を献上し、その年の稔りに感謝の祈りを捧げるのである。

古今東西、宗教の全ては、本来その具体的行為の核心に祭祀（神や祖先を祭る）を置いたが、祭祀の殆どは滅び去り、或ひは形骸化してしまつた。あの古代ギリシアの盛時を象徴するパルテノン神殿に於ける祭祀は、創唱宗教であるキリスト教に代はられた今世、既に死に絶へ、その様相を完全に知る者は皆無である。エジプトの王墓とされるピラミッドや、君主がみずからを呼ぶ「朕」の文字を最初に使用した秦の始皇帝の墓さへも、今日は巡礼ではなく観光の対象でしかない。

人間が、他の動物と異なる重要な点の一つとして、それが自覚的存在であることが挙げられるが、西洋的理性の発達と社会の近代化は、信仰の世界に於けるキリスト教の神を観念的哲学の次元に転化して来た。

「我思ふ、故に我あり」。存在の出発点として突き詰めたデカルトの説く命題は、信じて疑はない自らの意識が在つて、はじめて神の存在の肯定に至る。大航海時代を皮切りとして、産業革命や市民革命を世界に先駆けて達成したヨーロッパ人の近代理性は、自らが其の存在を認めない、世界各国の民族の信仰祭祀を悉く根絶させてしまつた。

しかし、日本の神道は祭祀が中核であると云ふ在り方を歴史を通じて一貫して堅持して来た。

「凡禁中作法、神事ヲ先ニシテ、他事ヲ後ニス、且幕敬神ノ叡慮、懈怠無シ、自地ニモ神宮並内侍所ノ方ヲ以テ、御跡トセズ、万物出デ来ル二随ツテ、台盤所ノ棚二置キ、女官ヲ召シテ奉ラル」

順徳天皇が承久年間に著された『禁秘抄』の最初には、宮中では何よりも神事を重んじ、天皇は決して、神宮及び内侍所（賢所）の方角に、足を御向けにならず、又何か献上物があれば、先づ内侍所へ此れを御供へになつたと記されてゐる。

天皇の神に対する「つつしみ」、「うやまい」の奉仕の御生活は、人間が信じるから神が存在するのではなく、神々がおはしますが故に、天地が活動し、その中で我々もまた生かされてゐると云ふ御心の発露に相違ない。『日本書紀』には、天孫降臨のみぎり、皇孫瓊瓊杵尊は、天照大神より天壌無窮の神勅と三種の神器を下し給はれた。即ち、

「葦原千五百秋瑞穂国ハ、是レ吾子孫ノ王タルベキ地ナリ、宜シク爾皇孫、就ヒテ治メ、行矣、宝祚ノ隆マサンコト、当二天壌ト伴ニ窮無カルベシ」

代々日本国の統治者として皇位を継承し、その輝かしき光栄と、重い責任とを荷つて、永久にお栄へになるのだとして、随伴する八百万神もまた、天壌無窮の神勅に奉答される君と共に、国家の安泰を祈り、大難に臨んで君国を守護すべき性質を帯びてゐたのである。

事実、日本は変転著しい世界文明の中に在つて、今日まで君民は一致して、忠孝に殉じ、国体は護られて来た。外に対しては、已の武力によりて他を征服し、内にあつては、国王に不徳があり、幼稚であつたりしたならば、これを滅ぼし、自分が取つて替はり（王朝交替）、傲然として下に臨んだ外国の帝王との、所謂革命国家と、伝統国家である日本の壊の差を禁じ得ない。

四、日本の復古と革新

人生に於いては信用が肝要である。他人より、「恩知らず」「恥知らず」と評されることは、その尊厳の死を意味する。

古来より、洋の東西に在る国家は、自らの祖国の継承発展を願つてきた。伸るか反るかの非常時に臨みて、道義道徳を守り、心の動揺しない姿を理想とした。

「以テ六尺ノ孤ヲ託スベキ、以テ百里ノ命ヲ寄スベシ、大節ニ臨ミテ奪フベカラザルナリ、君子人カ、君子人ナリ」

（『論語』泰伯）

反乱や革命による国家の滅亡を、最も悲しむべき事態として戒めた孔子の高弟曽子の言葉は、武力による王朝交替を繰り返してきたシナの心ある君主に対し、深刻な反省を促した。

『宋史』日本伝には、日本の平安時代中期に、時の皇帝太宗が、当時入宋して居た東大寺の学僧奝然（ちょうねん）を招き、我が国の皇室が、一つの姓で継承され、朝臣も皆その官職を世襲してゐることを聞かされたのに加へて、逸書百篇今尚存、本国では既に散逸してしまつた書物が日本には多く大切に保管されてゐることも知り驚嘆した。太宗は、「これは島夷にすぎない。然るに世祚は遐久であり、その臣も継襲して絶へない。これは思ふに、古の道なり」と、彼我の歴然とした相違に深刻となり、嘆息して宰相に漏らしたことが記されてゐる。

「君主国」は、周公の政治を亀鑑とするシナの聖人孔子の理想であつたが、もし、太宗と同時代に存命して、改めて我が国の万世一系の歴史を知つたならば、さぞや欣喜雀躍したことであらう。

「我ガ国ハ神国ナリ、因ツテ毎朝四方大中小ノ天神地祇ヲ敬拝ス、敬拝ノコト、今度ヨリ始メテ、一日モ怠ルコトナシ」

と、『寛平御記』に御書きになられてゐる様に、宇多天皇は、日本の国家が神道の信仰、神道の精神を、その基盤として建立せられ存立してゐるとの御心より、清涼殿内の「石灰の壇」に立たれて、伊勢大神宮を始めとした神々を拝された。そして、皇子である醍醐天皇、その皇子である村上天皇は、宇多天皇の御志を継承せられた。

御在位（延喜天暦）の御世は、『古今和歌集』や『延喜式』が作られ、六国史の最後となる『日本三代実録』も編修され、国家意識は強く、光り輝くところの黄金時代として、後に聖代と讃えられた。そして、御代々の天皇は、延喜天暦の聖代を御手本として御修養になるため、両天皇の御日記を、清涼殿内の御厨子に載せて、御側近くに安置せられたことは、正しく理想的時代であつたとして、特筆すべきことである。

その後、我が国は保元の乱を嚆矢として乱世に入つた。承久の御計画は、延喜天暦の御世に帰されやうとの御理想の実現のために御立ちになられた、後鳥羽上皇の皇国中興の御計画であつた。

しかし、道半ばのまま、北条氏の武力により、上皇は隠岐に遷されたのに加へて、『禁秘抄』を著された順徳上皇も佐渡に、土御門上皇は御自ら四国に下向され、後に遷られた阿波にてお隠れになられた。

後鳥羽院の、日本と云ふ国は、今日でも正しき国、道義道徳の国であると云ふことを人々に知らしめたいとの御叡慮は、

奥山のおどろが下もふみわけて
道ある世ぞと人に知らせん

『新古今和歌集』

との御製に表れてゐる様に、心ある忠臣義士の胸に強く描かれ高く仰がれ、大いなる感化力を後世に遺した。

そして再び、「復古」と「革新」の発動は、後醍醐天皇の建武中興に於いても、利害損得を顧みず、正邪の標準を求める情熱が、形として現れた。

しかし、天は再び、吉野五十七年の辛苦艱難を君子に課した。君子は、「水は方円の器に従ひ、人は善悪の友に因る」ことを悟り、時勢未だ我に利あらざることを省みる。

「玉骨ハ縦令南山ノ苔ニ埋モルトモ、魂魄ハ常ニ北闕ノ天ヲ望マント思フ、若シ命ニ背キ義ヲ軽ンゼバ、君モ継體ノ君ニアラズ、臣モ忠烈ノ臣ニアラジ」

『太平記』

天皇は、天を恨みず、人を咎めず、只一身の誠意が足らざるを責め、天地に請願し、仏に祈り、遂に其の身を死地に於いて、その御心（木鶏）の動ぜざることを示された。

それから六百年、この決然たる御態度は不朽の生命力を保ち、国体を考へ、大義を思ふ者の魂は清められた。正しき歴史は明らかとなり、忠と孝の一本である我が国の本質は理解されるに至つた。

明治天皇御製

橿原のとほつみおやの宮柱
たてそめしより国はうごかず

ここに、王政維新の大業は遂に成就した。

そして、皇国日本三千万国民は「彼の地の大才英傑と万国の公法を論じ、断ずるに天下の大義を以てし、彼我の間に是非曲直を審明し、以て皇国の為に名義を正さむ」（日下部太郎）との意志で統一せられ、その団結を固くし、東洋平和の理想に向けて、気宇雄大の中、整然と進み出した。

参考文献

平泉澄博士著
『少年日本史』　皇學館大學出版部
『山　彦』　勉誠出版
『明治の光輝』　日本學協會

杉浦重剛著・所功解説
『昭和天皇の学ばれた教育勅語』　勉誠出版
谷省吾著
『神道原論』　皇學館大學出版部

横浜中華街　歴史の断面

鍋屋次郎

横浜中華街

横浜中華街は、現在では国内外から年間２５００万人を超える人たちが訪れるといわれる観光地であり、横浜が国際都市としての象徴的な存在です。中華街の横浜市内での位置は地図（1）に示されている通りです。

この横浜中華街が現在に至るまで、どのような経緯をたどって発展してきたかを振り返ってみたい。

どうして中国人が横浜に集まったのか

一八五九年（安政六年）七月一日に横浜が開港して外国人居留地が設けられると、西洋人が中国人を連れてきた。その理由は、開港当時、西洋人は日本人と言葉が通じなかった。商取引でドルやポンドと両の貨幣交換価値や秤量の問題で困っていた。そこに香港や上海の欧米商館で西洋の言葉や習慣を習得した中国人が、漢字の筆談

（1）

で日本人と意思疎通ができたことから、西洋人と日本人の間に入って商取引を仲介する役割を担う、つまり日本人と西洋人の間をつなぐために、中国人は不可欠な存在になっていた（中国国内で買弁と言われていた人たちを指す）。

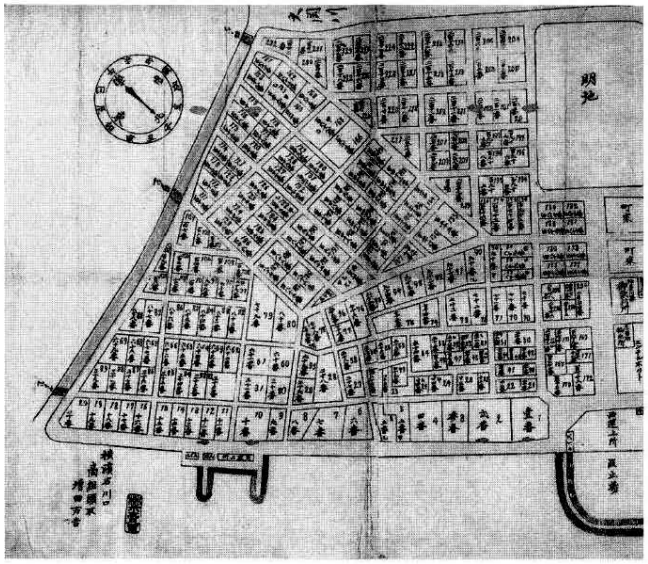
然し、当時、アメリカ、イギリスなど、条約を締結している国の外国人は外国人居留地に居住することが許されていたが、当時日清間に条約は締結されていないため、中国人の日本居住は許されなかった。しかしながら欧米との貿易活動で中国人の存在は欠くことはできなかったので、一八六七年（慶応三年）に籍牌規則（中国人が上陸後一定期間内に居住地の官庁に届け出て籍牌料を支払って登録すれば居住を許可する規則）を制定して中国人の居住を認めた。このような中国人は買弁と呼ばれ、単独ではなく配下を伴ってやってきて、会計係、倉庫番、生糸やお茶に詳しい者、コック、郵船会社、ホテル、保険会社等仲立ちの必要なところにはどこにもいた。

中華街の誕生

中華街の場所は、横浜新田を埋め立てて造成した場所で、一八五九年（安政六年）、横浜開港時には埋立ては終わっていて、一八六二年（文久二年）頃、華僑の病院同済医院が一三五番地を借り、台湾出身の貿易商順和桟が一八六番地を借りた。また、同年頃関帝廟の祠が一四〇番地に開かれていたことから、この三つの地点を中心に中国人が集まり住むようになった。（番地は次頁図②参照）

どうして旧横浜新田の埋立地になったかについては、海岸寄りの区画はその時すでに欧米商館が借りていて場所がなかったことと、横浜新田の道路が周りの道路との関係では斜めになっていて、この方角が東西南北の方位にぴったりと合っていることも決めた要因の一つと考えられる。なぜ、横浜新田の道路のみ、その外周の道路から見ると斜めになっているかといえば、旧横浜新田のあぜ道や水路を残した形で道路や土地を造成した結果であった。たまたまこの斜めの道が東西南北の方位にぴったりというのも偶然なのかわからない。

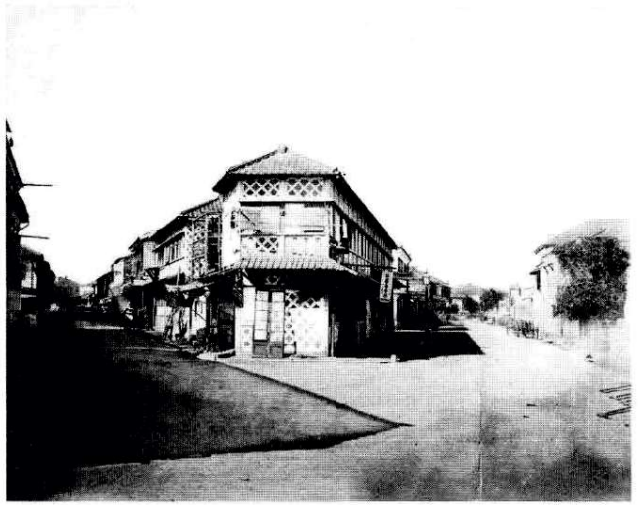
当時、来日している中国人はどのくらいであったかといえば、開港八年後の一八六七年（慶応三年）では六六〇人、それから一〇年後の一八七七年（明治十年）には一一四二人に増えている。この年の籍牌を調べると、中国人の約半数は、旧横浜新田の場所に住んでいたことから、ここに中国人が暮らす中華街が形成されてきたものといえる。



山下居留地図面　②

中華街現状図　③

横浜中華街　今昔　④—1



写真は一八八〇年（明治一三年）で、左手の道が現在の中華街大通り、右手の道は開港道。下の写真は撮影時からは一三〇年ほど経過しているが、建物・道路の位置は変わっていない。建物に中国的な建物は見当たらないが、中央の建物右手には両替商など中国人商店の看板が掛かっている。この時の横浜居留地に居住する中国人は二五〇五人となっている。

太田撮影　④—2

日本政府のアヘン排除布告

明治三年に外務省が「販売鴉片烟律」を布告した。これはアヘン常習者の上陸拒否と退去を命じ、アヘンの所持吸引、日本人への売買を禁じた。当時清国ではアヘンの習慣が広まっていたことから、日本政府はその習慣が日本に入ってくることを恐れ禁じた。

明治末から大正初期の風景

中国国民党横浜支部　孫文の来日

一九一三年三月六日「孫文先生東游紀記念写真帳」（国立国会図書館蔵）

孫文の革命思想に共鳴した華僑は、国民党横浜支部を設立して孫文を支援し、横浜での亡命生活を支えた。この写真は中華民国設立後に日本を訪れた孫文を囲んでの記念写真。

華僑の子女教育

大同学校

大同学校は、横浜で最初に設立された中国人子女の教育機関で、一四〇番地に所在した。関東大震災前の横浜では、初等中等教育機関としては、大同学校の他に、広東系で孫文支持者の華僑学校、江蘇・浙江省の中華学校があった。

共立学校に通う子女

裕福な子女の中には、山手のミッションスクールに通う子女もいた。

関帝廟

現在の関帝廟

関帝廟は三国志の英雄関羽を祭った廟で、関羽は信義にあつく、また、算盤にも長けていたことから、広く中国人の信望を集めている。

関帝廟の歴史は

① 関帝廟ができる以前　一八六二年（文久二年）関羽の木像を祭った祠ができた。

② 初代関帝廟　一八七一年（明治四年）華僑の寄付金で建てられた。一八八六年（明治一九年）に大改築、一九一〇年（明治四三年）に大規模改修が行われたが、一九二三年（大正一二年）関東大震災で倒壊。

③ 第2代関帝廟　一九二五年（大正一四年）再建されるが一九四五年（昭和二〇年）空襲で焼失した。

④ 第3代関帝廟　一九四六年（昭和二一年）華僑の人心の拠り所として終戦早々再建されたが、一九八六年（昭和六一年）不審火に見舞われ廟は焼失したが、本尊の関羽像だけは焼失を免れた。

⑤ 第4代関帝廟　関帝廟再建のため中華街の中国、台湾双方の関係者が協力し、資金と力を集め、関帝廟が五年の歳月をかけて一九九〇年八月一四日に完成して現在に至っている。

日中間の摩擦の影響

日清戦争

前述した通り横浜開港三年後の一八六二年（文久二年）を、旧横浜新田の埋め立て跡地での中華街の形成初期と考えれば、今日で一五六年になります。開港時は日本と清国の間に国家間の条約はなく、中国人は無条約国から来た人の状態でした。

一八九四年（明治二七年）には母国中国と居住国日本との間に日清戦争が勃発して、横浜華僑の三分の一程度が中国に帰国する事態となりました。開戦前の一八九三年の横浜市内の中国人人口は二二五人でした

が一八九四年（明治二七年）には一一七四人に激減しています。また、戦争の勢いを得た日本人商人により、中国人に関する不公正な商慣習を撤廃することを目指した「商権回復運動」が展開されました。

中国人に対する職業制限

一八九九年（明治三二年）八月には、幕末に諸外国と締結した不平等条約が改正されて、「外国人居留地」が撤廃され外国人は今までの外国人居留地ではなく、日本人とともに住み、その中での経済活動を認める「内地雑居」が認められた。然し、中国人については事実上の職業制限が加えられた。その内容は、所謂未熟練労働に従事する中国人の日本への進出が制限され、日本国内で従事する職業は商業と料理業、理髪業、洋裁業などに偏ることになった。

日露戦争

一九〇四年（明治三七年）に起こった日露戦争では、横浜市内での出世兵士の壮行会などが盛んに行われたことに対して、華僑も寄付金を集めたり、祝勝会したりして協力していた。

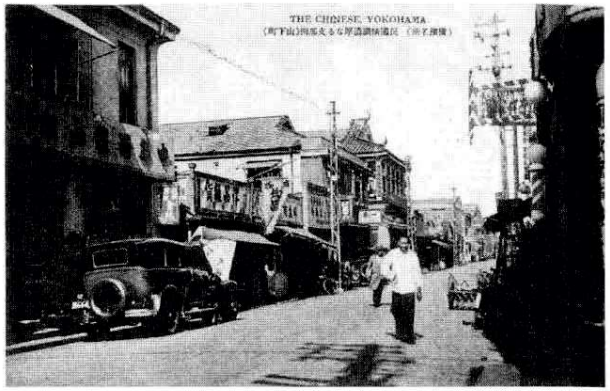
関東大震災

一九二三年（大正一二年）九月一日十一時五八分に起きたマグニチュード七．九の大地震が関東地方を襲い、横浜市中心部は建物の倒壊と火災により甚大な被害を被った。中華街は料理店、雑貨店、洋服店などが密集していて、建物の多くは古い木造煉瓦造りであったため、大部分は地震で倒壊し、狭い路地は倒壊した建物で埋まり、多くの人が逃げ場を失った状態のところに火災が発生し、中華街の殆どは焼失した。

そこに朝鮮人や中国人労働者に対する虐殺行為が発生し、日本政府は避難用の船を用意して、新山下に集まった華僑を、阪神地域や本国へ避難の応援をした。

地震前のこの地域での中国人人口は五七二一人であったが、その三割にあたる約一七〇〇人が亡くなり、地震と火災により中華街は壊滅状態になり、華僑社会は甚大な被害を被った。

然し、ここからの立ち直りは早く、震災から八年後の一九三一年（昭和六年）には、中華街大通りは写真の通り復興してきていた。（次頁写真　上　参照）



中華街大通り（一九三一年　昭和六年）

（写真に写っている旗は、一五〇番地付近の「均昌閣」で数年前まで営業をしていた）

満州事変から太平洋戦争へ・・横浜大空襲・・

その後日本は一九三一年（昭和六年）の満州事変、一九三七年（昭和一二年）の日中戦争、一九四一年（昭和一六年）の太平洋戦争へと突き進んでいった。そうなると帰国する華僑も多かった。

関東大震災から二〇年余りの歳月の中で、華僑たちが築き上げた中華街は、横浜名所と言われたモダンな街に

なっていたが、そのような中で一九四五年（昭和二〇年）五月二九日の横浜大空襲によって中華街はまたも灰燼に帰してしまった。

戦後の復興から現在へ

戦後間もなくの神奈川県内の中国人人口は一九一七人で、その大半は中華街に関係する人々であった。この人たちを中心にして戦後の復興が始まり、見事な復興ぶりを見せて現在に至っている。その間、華僑の人たちの代替わりも多く、店舗の入れ替えも多かった。

終わりに

私にとっての中華街は、「本場の本物の中華料理を美味しくいただく場所」でありそれ以外の何物でもなかった。中でも均昌閣は銀行勤務当時お客様をお招きしたり、友人間の歓談の場所であったり、親族・家族のたまに集まる場所としてお世話になったが、数年前に看板が亡くなってしまいました。

中華街も、関帝廟も、この一五〇年間の間に天災、戦災を繰り返し、その都度見事な復興をしている。この一五〇年間は、まさに中華街に集まっている中国の方々には「落地生根の歳月」であったと思う。ここに、これからの日本人と中国人のあるべき関係が示されていると感ずるのは小生だけであろうか。

このレポートは、横浜開港資料館が横浜開港一五〇周年を記念して二〇〇九年に出版した「横浜中華街一五〇年」―落地生根の歳月―から引用させていただきました。感謝して報告します。

（鍋）

短歌

行雲流水（五十六）

石黒修身

近詠二十首

佐渡島追想

佐渡島は父祖の地なりき若き日の曽遊の憶い懐かしみあり

上方の言葉が残る佐渡島は都（みやこ）の文化と遠流の跡が

能楽堂旧く残りて流人たる世彌弥の気配色濃く遷る

吾れ通う「おけさ丸」という連絡船着離の際の哀歓想う

この島も過疎が進みて稀少なる鴇（とき）や遺跡で観光に生く

大雪の水道被害も旧き家各戸に井戸あり救いなりしと

身辺・日常

若きらと共に興ずるひとときは吾がししむらの衰えを忘る

八十代どこから見ても翁なり人の背を見て雑踏を行く

妻子謂う「もう十分に御爺(おじい)さん」反撥すれど半ば頷く

吾が子らが中高年と呼ばれるは己が呼び名は後期高齢

春彼岸吾が奥つ城は丘の上卒塔婆抱え喘ぎつつ登る

著名人転倒事故の報しきり「転(ころ)ぶな」の教訓(おしえ)他人(ひと)ごとならず

「春死なん」西行の念(おも)いを胸に老い吾は桜を追いて近間の旅へ

山菜は海の幸はと旬を追い味を楽しむ老境に居り

時局・世相

政治的思想論ぜし「西部邁」突如自裁す存念は何

寒風の多摩川に入り自裁せし西部の心知る人は誰(だれ)

カーリング乙女らの叫ぶ「そーだね」を道産子吾れは懐かしく聴く

「流氷はもうすぐ来るよ」見たければ早くおいでとオホーツクの友

夫々が自国の利益第一に大国のエゴに世界はゆらぐ

官民の欺瞞と不正この国の秩序乱れて憂いは深し

漢詩

潮汐錄（九十一）

鯨游海

哲學之道　　平成二九年九月

懷舊逍遙哲學途
秋天一碧故淵都
相逢青眼風雅客
疑是怒鳴門鬼乎

押韻・途都乎

〈哲学の道〉
旧を懐ひ逍遙す　哲学の途
秋天一碧　故渕の都
あひ逢ふ　青き眼の風雅な客
疑うらくは是れ　怒鳴門鬼乎かと

〔注　解〕

故淵＝縁のあった深い渕。転じて「もと住んで居た想い出の多い場所」。陶潛・歸園田居「池魚思故淵」より。
筆者は戦後の十代を京都山科で過ごした。

哲學途＝京都岡崎、東山々麓の疏水の堤防に築かれた遊歩道。南禅寺永観堂から北へ、黒谷の金戒光明寺の東を巡って流れる。この呼称はドイツが本家。
青眼＝青い眼＝西洋人。他に「親しく好感の持てる人」のことも云う。白眼（冷遇する意）の対語。ここでは両方の意を含めた。客＝旅人。見知らぬ人。
怒鳴門鬼＝ドナルドキーン。本人が好んで用いる表記。

〔口語訳〕

昔を想い出し乍ら洛東の哲学の道を散策した。
秋晴れの碧一色に蔽われた懐かしい京都の街。
向こうから見知らぬ青い眼の風雅な老人が歩いて来てすれ違った。はて……
この方はあの有名な日本文学者怒鳴門鬼氏に違いない。

☆やうやうにかくて老ひけり八十年
　変はらぬ古道変はらぬ故渕

天臺宗蓮華王院三十三間堂　　平成二九年臘月

三十三間堂宇清
千餘菩薩誦經聲
洛中喧噪斯不屆
唯覺慈悲無限情

押韻・清聲情

〈天台宗蓮華王院三十三間堂〉
三十三間　堂宇清し
千余の菩薩　誦経の声
洛中の喧噪　斯に届かず
唯だ覚ゆ　慈悲無限の情

〔注　解〕

間＝間の正字。明治以降従来の間の字は急速に間と書かれるようになった。これに伴ない簡、澗……などの文字も全て簡、澗に変化していった。この変化は何故であろうか。太陽暦の採用と関係があるのかもしれない。屆＝届の正字。
京都駅東方烏辺山々麓、大和大路七条通南隅に国宝の三十三間堂―正式名蓮華王院が在る。国宝、重文の中尊、風神雷神像、十一面千手千眼菩薩千余体が立ち並ぶ。

☆うす幽き堂宇に響く経の声
　仏都の秋は森森と更く

高句麗國大陸間彈道彈火星十五型與脫走兵　　平成二九年黃鐘

火星東犯八千里
一將威成萬國嘆
番卒南奔三十步
百彈的外兆民安

押韻・嘆　安

〈高句麗国大陸間弾道弾火星十五型と脱走兵〉
火星東を犯す　八千里
一将威成りて　万国嘆く
番卒南に奔る　三十歩
百弾的外れて　兆民安んず

〔注　解〕

二ヶ月余の沈黙を破って北朝鮮の金正恩は、この朝日本海に落下する軌道でICBMを東に向かって発射した。本実験は若し正規の軌道に乗せれば一万三千キロを飛び米東海岸に達することが判り世界を震撼させた。
八＝三と共に適当な数を表わし特に多いめを表わす↓八百八橋、嘘八百、四苦八苦。韓愈「夕貶潮州路八千」。
卒、歩＝卒、歩の正字。番卒＝兵張役の当番兵。この詩は数字を多用、起承句と転結句が対を為す珍しい技巧。

☆火の星は紅蓮を吐きて宙に翔ぶ
　悪魔のひそむ黒煙残し

《漢詩の流れ79》鎌倉・室町時代④釋義堂

五山文学を代表する大詩人、大文学者。名は周信（一三二五～八八）。江村北海は日本詩史（鳳出版一九七二）で次の如く記した。

「五山の作者、其の名の今に徴すべき者、百人を下らず。而して絶海・義堂はその選なり。世多く並び称え、以て敵手と為すも、学殖を論ずれば、則ち義堂は絶海に勝るに似たり。詩才の如きは則ち義堂は絶海の敵に非ざるなり」。つまり学殖豊かなるが故に、義堂の詩句の多くは出典を踏まえ、その解説なくして彼の詩境を探ることは困難と断じている。詩としては今一歩なのであろう。

五山文学とは何か。相愛大学教授の蔭木英雄は「我が国の五山・十刹・諸山の官寺に籍を置いた禅僧たちが作り出した中世の漢文学である」とする。

夢窓疎石を師として禅を修める。絶海が渡唐して学んだのに対し、義堂は留学せず国内に留まった。身体が虚弱だったのに加え、政治的なタイミングも彼には不都合であったことにもよる。

竹　雀　（ちくじゃく）

風枝栖不穏　風枝　栖穏やかならず
露葉夢應寒　露葉　心に夢寒からず
莫近高堂宿　高堂に近づいて　宿する莫れ
公孫挟彈丸　公孫　弾丸をわきばさむに

〔口語訳〕

風に揺れるねぐらは不安定であろうし、
露にぬれた葉に結ぶ夢も寒かろう
（同情はするが、さればといって）高壮な家の近くに宿るでないぞ。
（情容赦のない）貴公子どもが、弾丸を以て狙い撃ちするであろうから。

對花懐舊　（花に対して旧を懐う）

紛紛世事亂如麻　紛々たる世事　乱れて麻の如し
舊恨新愁只自嗟　旧恨新愁　只だ自ら嗟く
春夢醒來人不見　春夢醒めきたって　人見えず
暮檐雨栖紫荊花　ぼたん雨は栖ぐ　紫荊の花

〔口語訳〕

世の中はいよ〳〵ごたごた乱れ麻糸の如くもつれ、
権勢や欲望の争いの中で、幾人の知人が亡くなったことであろうか。
（それにつけても）古い恨みや汚らしい愁いが今更の如く湧き上がりて独り嗟くばかりである。
（今しも）夕暮の小雨が軒先から、静かに紫荊の花にしたたり落ちているばかりだ。

漢詩

汲深録（十二）

松井秀人

富峰晴雪　（富峰晴雪）

平成三十年二月

夜來雪霽四無風　夜来の雪霽れ　四に風無し
仰見富峰曉景中　仰ぎ見る富峰　暁景の中
皚頂映天眞似畫　皚頂　天に映じ　真に画の似し
光輝燦爛玉玲瓏　光輝　燦爛　玉玲瓏
押韻・風　中　瓏

〔注　解〕

雪霽＝雪が霽れる。
四無風＝四方に風がない。
富峰＝富士山。
皚頂＝白い頂き。
燦爛＝鮮やかに輝くさま。
玲瓏＝鮮やかで美しいようす。
玉玲瓏＝雪の美しいことなどにいう。

〔口語訳〕

昨夜の雪は霽れ、四方の風もやみ
仰ぎ見る富士山は、夜明けの景色の中にある。
白い頂きの雪は、空に映えてまことに画のようであり
その輝きは鮮やかで美しい。

早曉鶯聲　（早暁鶯聲）

平成三十年二月

黎明出戸早梅村　黎明に出戸　早梅の村
雪解渓頭微有痕　雪解けの渓頭　微かに痕有り
聽得啼鶯聲斷續　聴き得たり啼鶯　声　断続
遷喬枝上唱春暄　遷喬　枝上に唱う　春暄を唱う
押韻・村　痕　暄

〔注　解〕

渓頭＝谷のあたり。
遷喬＝鶯が低い谷間から高木に移ること。
唱春暄＝春の暖かさを唱う。

〔口語訳〕

夜明け方、早梅の村に出かけると
雪解けの谷のあたりには、かすかにその痕が残っている。
聞こえてくる鶯の啼き声は断続的だが
谷間から高木の枝に移ってきて、春の暖かさを唱っている。

春苑看梅　（春苑の看梅）
平成三十年二月

訪來春苑欲明天　訪ね来たる春苑　明けんと欲する天
習習東風香暗傳　習習たる東風　香　暗に伝う
枝上雪葩詩興促　枝上の雪葩　詩興を促し
騒人徙倚古梅前　騒人　徙倚　古梅の前
押韻・天　傳　前

〔注　解〕
習習＝風のそよそよと吹くさま。
雪葩＝白い花。
騒人＝詩人。
徙倚＝さまよう。行きつ戻りつする。

〔口語訳〕
明け方に苑を訪れてみたら
春風にのって、何処からともなく梅の香が伝わってきた。
そこに枝の上の白い梅の花を見て、詩を作りたいという気持ちが促され
詩人は古梅の前を行きつ戻りつした。

春暁小庭　（春暁小庭）
平成三十年二月

早晨梅影見窗前　早晨の梅影　窓前に見る
習習東風鶯語傳　習習たる東風　鶯語伝う
恰恰好音聞樹上　恰恰　好音　樹上に聞く
小庭春色轉堪憐　小庭　春色　転　憐れむに堪えたり
押韻・前　傳　憐

〔注　解〕
早晨＝早朝。
恰恰＝鶯のなき声。
好音＝よい声。うるわしい音声。
春色＝春けしき。
轉＝うたた。いよいよ。ますます。

〔口語訳〕
早朝、窓から梅が見える
そよそよと吹く春風が、鶯の声を運んでくる。
鶯の鳴き声はよい声で、樹の上から聞こえて
庭の春けしきは、いよいよよくなっている。

望相模灣　（相模湾を望む）
平成三十年二月

遠影芙蓉誇麗粧　遠影の芙蓉　麗粧を誇り
近邊絵島映斜陽　近辺の絵島　斜陽に映ず
相灣萬里天連水　相湾　万里　天　水に連なり
佇立鷗汀潮氣香　佇立する鷗汀　潮気香る
押韻・粧　陽　香

〔注　解〕
遠影＝遠くに見えるすがた。
絵島＝江の島。
萬里＝一万里。転じて、はるかに遠い所。見渡す限り遠く続いている所。
佇立＝たたずむ。
鷗汀＝かもめのいる水ぎわ。

〔口語訳〕
遠くに見える富士山は、美しいよそおいを誇り
近くの江の島は斜陽にはえている。
相模湾のはるかに遠いところでは、空は海面に連なり
鷗のいる水ぎわにたたずめば、潮のにおいが香る。

風の泉（第2回）

葵　州　月

大晦日

“自然はひとつの芝居を演じている”　ゲーテ・色彩論

秋が深まると日本海から中国山地を超えて瀬戸内にも北風が吹いてくる。

岡山大学キャンパスの銀杏並木もその冷たい風を受けて鮮やかな黄色に染まり始めると、半田山の樹木たちも一斉に多彩な衣装を纏いはじめ舞い踊るように変転して行く。まるで錦絵巻を見るように。やがてそのアクター達は更に雪に揉まれた北風に翻弄されると、踊り尽き、その樹体から鮮やかな衣装を脱ぎ捨てて瞬時の晴れ舞台から去って行くのだ。そして主役を演じた半田山は静かに冬期の眠りについてゆく。周辺の野山も助演の役割を終えて一年の手仕舞いをする。

その頃になると岡大学生たちは差し迫った当期の単位を取得するために教室から教室へ、講義や講座を目指して広いキャンパスを自転車で自在に駆け回る。

そして所定の講義、講座は順次終了して年越しの長い休暇に入ってゆくのである。

「今年の正月は帰りません。バイトも忙しいけど親しい仲間と寮で過ごすのも良い経験ですから」わたしが母に手紙を書いて知らせると、米と餅とみかん、干し柿やスルメを送ってきた。家族と離れて過ごす初めての年越しになる。「寒いから風邪ひくな、アルバイトで無理をしないで」と書いた手紙が新しく母が縫った褞袍の間に入っていた。離れてみて改めて知る母の心に感謝し感激するのだ。

昭和三十五年十二月、第一次池田勇人内閣が成立。所

得倍増計画を掲げて日本の経済の回復、成長を更に押し進めて行く〈昭和二十五年、吉田内閣の大蔵大臣時代、〝貧乏人は麦を食へ〟と言って内閣を解散させた政治家、広島県出身〉岸内閣の新安保条約成立の後を引継ぎ、七月、第一次池田内閣成立後、十一月総選挙、十二月に総理大臣に再度選ばれた。失言の多い政治家であっても本音を言って日本経済の風向きを変えていった手腕は大多数の国民は評価し、独特の個性を賛美して実効性のある政治家だと思ったものだ。麦飯ばかりを食べさせられた子供時代を想うと、池田大臣に言われるまでもない。（当時の食糧管理法はわたし達農家には不公平な悪法だった。）

昭和三十五年当時、食糧事情は改善していたのだろうか。それとも岡山平野は全国でも有数の穀倉地帯なので供給が安定していたのだろうか、岡大北津寮では朝夕の食事は白米だった。

その年の大晦日のことだ。

わたしはその日、駅弁売りのバイトを終えて夕暮が迫った寮の駐輪場に帰ってくると、突然一匹の子犬がわたしの足元に駆け寄ってきた。どこから来たのだろう。子犬は私を見て嬉しそうに尾を振りふりクンクンと鳴いて立ち上がり鼻をわたしの膝に擦り付けてくる。可愛い〝柴犬〟だった。同じ柴犬〝ポチ君〟と名付けた愛犬を昔、故郷で飼っていたことがあったから（どこから来たの！）と子犬に話しかけながら膝を折って注意深く子犬を観察してみると首輪が付いているし、人慣れしているから「どこかの飼い犬が寮へ迷い込んだのだろう」と凡そ検討をつけたのである。

さて！晦日から寮母や食堂のおばさんたちも居ないから預かって貰うことは不可能だ。当然、寮の室内にペットを持込むことは出来ない。どうしたものかと思案しながら自転車を格納して自室のあるわたしの旧館に向かうと子犬も着いてくる。集会所の古い柱時計が六時の時報を打ち始めた。

「交番まで連れて行こうか」子犬に問うてみても子犬は答えるはずもない。クンクン鳴いているのを見ていると、何故か急に今のわたしの孤独感と重なってきて子犬が可哀想になってしまった。同病相憐れみの気持ちが湧いてきて、取敢えず子犬を抱上げて旧寮へ向かった。大半の寮生たちが帰郷してすっかり寂しくなっている建物の窓を見上げて調べてみると〈ぽつりぽつり〉と漁り火のように窓の灯りが冬の夜風に揺れている。今夜位はこの子犬に何か食べさせても良かろうか。わたしは抱いた子犬を膝に移して旧館前の木製のベンチに座って、冷たい風で冷えた手に、息を吹き掛けながら思案をしていた。子犬は空腹なのだろうか。すぐに冷たいわたしの手を舐めはじめた。お腹が空いているんだな！ボクも

だ。おまえは食いしん坊だった〝ポチ〟とそっくりだなあ！・・

しばらく膝に抱いた子犬の温もりに身を任せていると、郷里で飼っていた愛犬の〝ポチ〟と遊んだ少年時代の記憶が甦りまた胸がキュンと締め付けられる。

綿雲が浮かぶ春の野原で一緒に駆け回ったこと、佐波川の河口での川遊び、稲刈り後の田んぼでボールを追かけ走り回った情景、〝ポチ〟は、いつもわたしや家族と一緒に過ごしていたのだが、わたしが高校二年生になった春、〝ポチ〟は静かに寿命を終えた。例え様のない寂しさは暫く続いていたが、いま、この子犬に慰められている。ひょっとするとわたし達の〝ポチ〟が輪廻転生によって、生まれ変わって今出会えているのではなかろうか。顔の形、目も毛並も尻尾も似ている。どこもかも似ているではないか！。因果を想い辿りながら、すっかり暮れた庭に目をやると、少し風が出て来たのだろうか、夕凪が終わり庭の竹箒が揺れはじめた。その上に広がった雲の切れ間から少しばかり星が瞬いている。

膝に抱いた子犬に触れていると温もりが伝わり、生命の不思議さを思うと胸が熱くなってきた。すると寒さも冷たさも消えて、まったりとした良い気分で子犬を撫ぜて夢心地になっていたのだった。

ふと、人の気配を感じたので顔を上げるとひとりの少女が目の前に立っている。

階段脇の裸電球に浮かび上がった少女の髪は漆黒のお河童頭、紺色の絣の上に紅色の綿入れを着ている。

どこから来たのだろうか？いつの間に来たのだろう？少女の花弁のような唇が小さく開いた。

「ごきげんよう・・・」

そして少女はやさしい声で子犬に囁いた。

「ジローちゃん！」ピクリ！と反応した子犬はわたしの膝から辷り降りて少女を見上げて嬉しそうに尾を振っている。

子犬を見ている二重瞼の目はやさしく微笑み、可愛い笑窪のある色の白い美少女だった。天空から降りてきたような神秘的な雰囲気が漂う。

「ジローっていうの？・・」わたしは驚きを押えて聞いた。

「うん・・そう、ジローを大切にしてくれてありがとう」

子犬を見つめている黒い瞳がキラキラ輝いている。

「どこから来たの？」

「・・・」少女は白い小さな指を東の青黒い空に向けてニッコリ微笑んだ。そんな！一瞬、わたしは眩暈を覚えた。本当に天から降りてきた妖精だとでも言っているのだろうか。かぐや姫の世界やお伽話ではないぞと、疑念を分析する間もなく、わたしは少女の無垢な黒い瞳に

吸い込まれてゆくようだった。

「さあ、ジローちゃんおいで・・・」

少女は子犬をやさしく胸に抱上げた。子犬は少女の綿入れの中に包って、顔を出すと愛らしい丸い目でわたしを見ている。

「ああ！どうしょう・・・」

突然、こころが乱れて声が掠れて言葉が出ない。

「楽しかった？ジローに会えて・・」

少女はお河童の頭を少し傾けて微笑みわたしに聴いた。

「ジローちゃんは僕に会いに来てくれたのだろう？ひょっとして〝ポチ〟の生まれ変わり？・・・」声が響かない。言葉も暗闇に吸い込まれてゆくようだ。

「・・・」少女は理解しているのだろうか。わたしの口の動きを、小さく頭を傾げて視ている。

「まだ行かないで・・・」わたしは目の前の子犬に触れようとしたが両手が痺れて動かない。

「どうかしたの？・・」硬直したわたしを見て不思議そうな表情を浮かべている。少女はわたしの〝ポチ〟の死という事実を知らないはずだし、わたしの悲しみを知るはずもない。

万物の命はいつの日か果てることを、この世に生を受けたばかりの純真な少女にはまだ理解できないのだろう。どう説明したら良いのだろうか。

わたしは瞑目していた。瞼の裏にポチの最後の姿が浮かびあがってくる。

（万物の死と言う宿命から逃れられないなら、人間の心の中の『悲しみ、寂しさ』を永遠に閉じ込めてくれる堅牢な『入れ物』はないのだろうか！）わたしの口はもどかしく動いているだけだ。目を開くと、その踝いている私を見ている少女の黒い瞳は慈愛に満ちた表情を見せ始めた。

そうだ！この瞳はわたしのすべてを理解した目だ。やはりこの少女は天から降りてきた妖精なのだ、とわたしは信じ始めていた。

「ごめんね・・お迎えが来たの・・」

少女は胸に子犬を抱いた小さな掌を振って別れを告げる。

「さようなら・・」

そのとき一陣の風が来た。

わたしの心中を掻きむしる苦悶を哀しく感じていたのだろうか、少女の瞳が潤るむとキラッと一粒の涙が光って散るのを見た。その一滴の涙は夜霧のように膨張して直ぐに周囲を静寂に包み込み、風を止めた。冬の夜の寒さも停止した。

そして忽然と少女と子犬は暗闇へ消えてしまった。闇の外へ吹き抜けて行くように・・・。

わたしは夢を見ていたのだろうか。しばらく目をこらして夜空を見上げていた。ゆっくりベンチから立ち上がると旧寮の自室へ向かって歩いて行った。子犬は消えている。少女も居ない。今まで、漆黒の壺の中にでも居たような妙な気分だった。その壺の中で子犬と美少女の幻影に遭遇していただけなのだろうか。

急に寂寥感にわたしは襲われた。

寒い。暗い廊下をゆっくりと歩いて部屋に向かう。

今、夢の中を歩いているような感覚だ。

どこの部屋からだろうか、ラジオの音楽が流れてくる。小林旭の〝さすらい〟だ。そう言えば今年のヒット曲だった。

自室に戻って電気を点けた。部屋の中は冷え切っている。当時、暖房設備はない。母が送ってきた褞袍を着るしかなかった。

今夜は寮の食堂も開いていない。また正月三日間も食堂は休みだ。この期間はバイトをしながら完全な自活をしなければならない。

ふと、十二月のカレンダーに目が止まる。

二十四日の数字に色鉛筆で書いた大きな赤丸が付いている。

わたしと同室の西野君が付けた赤丸だった。今夜は何故かその赤が鮮やかに見える。正にいま陰気の真っただ中にいるせいだろうか。不思議な少女の紅い綿入れの残象の所為だろうか。

「今夜の夜行列車で、帰ります。さようなら！」彼は早朝からソワソワと荷物を纏めていたが、わたしがバイトに出たあの日の午後、横浜へ帰って行ったのが二十四日だった。法文学部文学科の西野吾郎君を思い出していた。考えてみると彼はいまだにホームシックに罹っていると、わたしは思っていた。わたしが在室している時でも、屡々布団をかぶってシクシク泣いていることがあった。一般的にホームシックの原因は家族に愛されて育ってきた証拠だという。それは間違ってはいないし、新入寮生にとって共通の現象だろう。

わたしも同じように孤独感から寂しさや悲しさを体験したが、一か月位で治癒したと思う。

余程彼は重症なのだろうか、横浜の保土ヶ谷に両親と弟が待っていると、夏休み前に聞かされていた。わたしと違ってバイトもしていないし羨ましい家庭環境に置かれた西野君だった。

ある夜も激しく泣いていたのでわたしは〈どうしたの？〉と心配だから聴いてみたことがあった。〈何でもありません、ご心配は無用〉と、ニベモなく言われて、何もないで泣けるものか！と、わたしは少し怒りも感じたので、その時以来この症状を見ても関わらないことにしたのだった。もっとも家族構成、家庭環境のレベルが

違っていることは認識していたので、余計な同情や更なる原因追及は出来なかった。後でこの推測は間違いであったことを知らされることになるが。

今だに隣室のラジオから流れてくる〝さすらい〟の歌詞をなぞっていると、母と妹の顔が浮かんできた。今年も本家で餅をつき、ＮＨＫ紅白歌合戦を見て、あの寒い田圃道を歩いて帰るのだろうか。

おそらく「お母さんの好きな三波春夫」の衣装について母を含めた女衆があれこれと推測し品定めし値踏みをしたりすることだろう。（どうして女性は人の衣装にあれほど執着するのだろうか）と、いつも疑問があったのだが。数年前（お母さんも！正月位は晴着を着たら？）幼い妹が晴着を着せて貰いながら不思議そうに母に聞いたことがあった。（お母さんはね、もう晴着は持っていないのよ。お嫁に来たときはいっぱい着物を持って来たけど・・でもね、その着物のお蔭であなた達を育てることができたんよ）戦後の厳しい時、母は自分や父の持っていた着物を売って生活費の一部に充て、わたし達の学費にも充当した、と言っていたことを思い出していた。

すでに暮れ泥んだ西の空を見ていると、三毛猫のタマと遊んでいる妹や母の姿が思い出され、さらに鮮やかに、藁葺きの我が家の茶の間の光景が浮かんできた。〈声が聞きたいな。ボチの生まれ変わりに会ったことを話してもいいな〉でも我が家に電話は付けていない。

「来年はオレが電話器を買ってやろう！バイトをがんばるぞ！」と独白する。母も妹も喜ぶだろうな！〉ううっ！と、思わずひとりで呻くと、自分も泣きたくなってきた。

「オレもまさしくホームシックになっているではないか！」思わず胸が締め付けられる。

その時、崎口君のいつもの甲高い声が響いてきた。論語を口ずさみながら廊下を歩いて来る。〝小人閑居すれば不善をなす〟オレの事かなあ？でも不善はしてないぞ！

彼もバイトで残留することは知っていた。ほっと、救われた気分になる。直にわたしの部屋に入ってきた。

〝一箪の食、一瓢の飲、陋巷に在り〟意味は〈一膳のごはんとひと椀の汁を飲んで過ごすそまつな部屋暮らし〉これも良かろうて、ということじゃ。但し、我らの一瓢は酒の汁だと言う。

「キミは寮で正月の越冬は初体験じゃろ？オレは昔、親父と漁船で正月を迎えたこともあったけど、あの船の寒さより、余程ましじゃ。岡山は温いのう！」

崎口君はトリスの大瓶を下げている。

「他所に出て、初めてわかる故郷かな。メソメソして

も駄目じゃ！一杯飲んで楽しく越冬たい！」私の顔に寂しさが出ていたのだろう。こころの弱さを読まれてしまった。でもこのように友誼に救われて嬉しいものだと知った。崎口君の情報によれば、まだ他にも同郷の仲間が寮に残っていることを知り、何故か安堵をする。（想定した以上の越冬数があったことは後で判明するのだが。）

「どんなバイトかね。今は」

「ケーキ作りと駅弁売りだよ」わたしはオハヨー食品会社でケーキをつくる手伝い。パン生地に白クリームを塗る仕事はクリスマスの二十五日までだった。その後岡山駅で同社が製造する弁当の仕込み手伝いと駅弁の売り子だった。

「この一週間はプラットホームで弁当売りをしているよ」岡山駅の山陽本線や津山線のホームで駅弁を売る仕事なのだが、はじめは恥ずかしかった。大勢の乗降客に興味本位で見られているに違いないと思い、初日は恥ずかしさで辛くて先輩に愚痴をこぼす。

「ばかもん！芸能人でもなかろうし、誰が見てくれるってか？腹の空いた乗客が弁当様を探しているだけだからな、気にするな」

数人の先輩に笑われ、教わり慣れてみれば結構面白くなった。弁当が欲しい乗客だけに注視されているに過ぎない仕事で、とても喜ばれる仕事だということがよく解った。

一昨日のことだった。

「べんとー、べんとーは要らんかね！」

山陽本線下りホームで客車の窓に沿って大声をあげていると、乗客に呼ばれて弁当を窓から二つ、手渡すと

「おおっ！君か！駅弁会社に就職したの？」わたしもギョッとする。大阪大学と関西大学から帰省する二人の高校時代の同級生だったのだ。今もわたしを就職組だと錯覚しているのだった。岡大に入学したと言って、

「バイトだよ」と、答える。

「苦労しているんだな。でも偉いワ、キミは！」内心、偉いわけはないだろう、キミ達と違って貧乏だから仕方がないんだ！恥ずかしくもあったが、それは一瞬で消えて、だんだん嬉しくなって、少しの停車時間だったが懐かしく友人と笑顔で近況談義ができた。その駅の情景を思い出しながら崎口に話した。

崎口もこの偶然を聴いて、それは面白いのう、と言って一家言。

「駅とはそういうところじゃ。出会いもあり、別れもあるちゃ！レールはどこへも通じちょるし、故郷への一本道じゃからのう。木炭バスの時代から、今や明るい就職列車の歌まで出来ちょる時代だよ。故郷は遠くて、近くなりにけりと言うことじゃ」何となくわたしの心の隙間を取繕ってくれているような気配りに苦笑した。

「それにしても、腹減ったの！帰り際に中田君は、飛山カントクに呼ばれていたが、説教される理由はないから、間もなく買物をして帰る筈じゃ。」中田は、叱られるために呼ばれたわけではないが崎口にはその内容について今は解らない。

「オレたちは残留越冬隊じゃ！三人でここから四日間はがんばるしかないっちゃ、この前話した通り、これから中田君の部屋へ移ろうぜ。」

中田君の部屋は広いから、夜は三人で食事をすることを以前から決めていたのだ。

中田と崎口は岡山駅で貨物の運搬整理をしていた。ドライアイス運搬以来、二人は陰日向のない働き振りを岡山興行、飛山監督に認められ、信頼されてドライアイスの仕事が無くなって以降も定期的に貨物の分別整理、運搬のバイトをしており、特に年末から正月いっぱいは鉄道荷物が多くて忙しいという。

中田君の部屋へ移動して、電熱器を点けてスルメを焼いた。

「まあ、飲めや・・」ウイスキーをコップに注ぐ。いつものように舌が痺れるような感触で空っぽの胃に浸み込んでくるし忽ち心地よく酔ってくる。飲むほどに気持ちは高揚し、その酔いは夕刻に出会った少女と子犬の幻影を呼び興して今夜のウイスキーは特に美味しかった。子犬と少女の話しをするのはやめた。崎口に話しても、どうせ寮の裏藪にいるキツネ様の悪戯に騙されただけだろうよ、と一笑に付されることは分かり切っていたから。

「いい香りだ！ウイスキーがとても旨くなってきたよ、最近はな！」

わたしはウイスキーに慣れてきていた。

「言った通りじゃろ。洋酒も慣れだよ。そういえば君たちは最近バー〝ノンちゃん〟へ頻繁に行っとるらしいのう。」

頻繁ではないが洋酒を覚えて以来、寮から徒歩で行けるバー〝ノンちゃん〟へ同室の西野君に誘われて出かけることが屡々あった。そこで飲むサントリー角瓶のハイボールが更に好きになっていた。バーという場所には洋酒の種類がいろいろあって、高級な洋酒が整然と棚に並んでいることも知った。その中にトリスより少し高額ではあったがバーのダウンライトを浴びてキラキラひかるサントリーの角瓶は魅惑的で美しく、琥珀色の酒を炭酸で割ったハイボールは軽やかな刺激を持った舌触りと爽やかな香りとのハーモニーは素晴らしく、いつも心身とも痺れた。

〝ノンちゃん〟はいつでも賑っていた。その賑わいの理由のひとつは中年のホステスの中にあって、際立って可愛い快活な若い女子大生がバイトで勤めていたから

だった。

時折彼女が傍へ来ると甘い香水の香りが鼻腔に残り、わたしの胸をドキドキと疼かせた。この時から若い女性のセクシーな匂いは異質なものであることを知った。彼女は西野君にかなり興味を持っていたように思う。西野君は芸能界で例えれば石原裕次郎に全体の雰囲気が似ていた。彼女はバーのカウンターを挟んで「映画」や「岡山の後楽園（公園）」の話題を持ち出しては誘いをかけているのだが西野君は事務的な口調で答えているだけで、彼の表情が緩むことはなかった。「たまには映画でも付き合ってやれば？」わたしは、このやり取りを傍で眺め少し嫉妬心も湧いていたが、ワザと彼に囁いて見た。「イヤですよ」と答えて唯、サントリー角瓶のロックをグイグイ飲んでいただけで、わたしは反面ホッとしたが、何時までも心の中が読めない西野君だった。

寮で越冬

「中田君、少し時間があるかね。」

作業服を脱いで、着替えて帰ろうとしたとき中田は現場監督の飛山勝男に呼ばれた。

何か仕事にミスでもあったのだろうかと、考えてみたが思い当たることもない。

崎口と一緒に小屋を出ようとした時だから崎口は気遣って外で待つと言ったが、

「先に帰っていいとよ。ボクは少し買物のために天満屋へ寄るし。正月用の何か食い物を仕入れて帰るとね」

崎口が出てゆくと、中田は飛山の机に向かう。作業員も三三五五挨拶して帰って行った。

飛山監督と二人になった。

「ここへどうぞ」

石油ストーブの傍へ椅子を寄せるとストーブに乗せていた薬缶からコップにお茶を入れて、中田に渡した。

「実はね、当社は運送業以外にも仕事をしていることは中田君も知っているだろうが、所謂世間で言う、多角経営と言う奴だ。」

岡山興行は運送以外に商事部門や映画館の経営もやっていることはバイト学生や従業員も知っている。中田は多角経営と言う意味を考えている。

「キミは博多で広告関係の仕事の経験があると身上書に書いていましたから、本社がこれを知っている訳です。」

「マーケットリサーチの単なる調査員だけど」

「そう、それです。世の中は市場を調査する仕事が増えているらしい。それを本社が東京の広告会社から請負ってね、岡山県全域を任されることになったらしいのです。」当時は初歩的な現況の実態調査であった。人口の多い地域の個人や企業を対象に航空写真を撮って、これをコピーしてその中の個々の家を対象に調査する。人

名、家族構成・商業の場合その業種、従業員数、工場の場合、種類と、従業員数を調査する仕事（これがやがて全国住宅地図の原点になる）が基本だった。やがて順次、顧客が真に求める商品やサービス、その情報を集積し分析、新製品の開発、流通経路の開拓、更に顧客をターゲットにメディアを利用した広告宣伝、ＰＲ。そのデーターを集積し分析する新分野。このマーケッティング戦略はこの時期から急速に格段の進歩を遂げてゆき、大学の専門講座になり、コンピュータの進歩とともに調査データーそのものが巨大利益を生む商品になる。

しかし、当時の調査は初歩的で人界戦術を駆使したアンケート形式の仕事だった。

「この仕事は真面目な学生さんの協力がないと出来ないのですよ。」

中田は仕事内容については理解していた。アンケート用紙を持って、指定された住居を家庭訪問し広告会社の知りたい項目を説明して正確な回答を貰ってくる仕事なのだ。

「中田君のこれまでの仕事を見ていると君の真面目さや人柄から、その個別調査のために学生さんの元締めみたいな仕事をして欲しいわけです。」

「此処の仕事を辞めてですとね」

「もちろん本社へ行って貰いますから、天満屋通りだから、○分と違いませんがね。」

「場所はともかく、もう少し内容を知りたいとです。」

「勿論、多数の調査員が必要なようですが、詳しくは本社の坂上課長の職務ですから、良ければ会って詳細を聴いてほしいが」

「考えて、明日以降のご返事でよかですか」

「いいですよ。実質調査に入るのは二月以降になるはずです。」

中田は飛山監督からの突然の話に複雑な心境だった。現場から事務系への転職、いやバイト生のスカウトである。上司に認められるという意味では嬉しかった。が、彼の性格はまず崎口へ不義理は出来ないぞ、ということだった。重労働を一緒にしてきた彼と別れて職種を変えてゆく、それは心情として単純に割り切れることではない。

正月用の食材、酒やメザシ、昆布、数の子の乾物を買って寮に帰ってきた。

駐輪場から荷物を抱えて部屋に入ると崎口らが既に飲みながら待っていた。

「お疲れ！お先にやっていたよ。今夜から宜しくたのむちゃ」崎口とわたしは郷里から送られてきたスルメや餅を電熱器で焼き、醤油をつけて齧っている。中田が酒と買い求めた物を並べる。

「昆布は飾りかね？」

「炙って食うとよ」

「そうだな、食ってこその喜こんぶだ！餅を食べて、スルメやみかんを食べ、昆布を食えば正月定番のお供え四点セットになる、縁起がいい！」ハッハッハッと愉快そうに笑い、早速昆布を電熱器に乗せるといい香りがして、ぷっくり膨れて旨い。

「数の子もあるとね」

「まあ、これもええが、我らは子作りにはまだ早すぎるようだがの！」子係繁栄の縁起を揶揄する。

「まあ、これも縁起じゃし、旨いよのう。さてね！これは！まだかちんかちんじゃ」袋を開けて手に取ると数の子は乾物のままだ。

「水に漬けて戻すとね。明日は食える」

「ありがたいのう。中田君には感謝じゃのう！」

二人はいろいろ焼いて食べ、トリスや合成酒を飲みながら、ラジオでＮＨＫ紅白歌合戦を聴いていた。

彼の部屋は三人部屋で広い。二人の先輩のうち一人は病気で長期治療の為入院しており、一人は入寮者未定で空いたままで（三人部屋は避ける学生が多かった）集合場所としては最適だったからだ。それ以上に「まあな・・」で全てを呑み込む中田君の大らかな性格が魅力で頼りがいがあるのが本音なのだが。

大晦日の夜はこうして二人で和やかに始まった。星林君は早々に広島の三次に帰省していたから、此処にはいない。

中田はカントクの飛山勝男の顔を思い出し、ＭＲのことを崎口に相談するか否か考えていたが、崎口が飛山との話合いについて彼が聴いてこなければ、時機を待って話そうと考えていた。急ぐ話でもない、じっくり検討してからでも遅くはないだろう。

「コンコン！コン！」

木製のドアをノックする音が聞こえたから崎口が立って、ドアを開けると、農学部の高本吉雄、串山明和が入口に立っている。同じ一年生で彼らとは寮の食堂で度々顔を合わせていたから面識はあった。

「今晩は！僕たちも居残り組です。中田さんに声をかけて貰うていたから来ましたが。よろしいじゃろか。」

高本が了解を求める。

「ええよ！大歓迎じゃ！」崎口が二人分の椅子を電熱器の傍へ寄せた。

「よう来たとね。」

「中田さん、ありがとう！鶏肉を持ってきたから鳥鍋でもどうじゃろか。皆さん、こちらは串山くんです。同じ農学部、農芸化学科です」

高本が新聞紙に包んだ鶏肉を見せた。串山はデッカい白菜をまるごと一個抱えている。

「どげんしたとよ」中田が問う。

「はあ、親鳥の白色レグホン二羽分じゃけど・・・」

郷だと知っちょりましたよ。萩の秀才だと・・」

高本は皆の不安を払拭しょうと、

「ボクは家でも鶏をいっぱい飼うてましたから、鳥のことはよう分かっていますから」高本は串山に顔を向けると目で促した。

「その鳥は大丈夫です。怪しいものはぼく等も食べませんでね！」

これは一番の説得力だ。これまで同じ実験室にいたと言った後に大きな白菜を皆に見せた。

「この白菜は有機肥料の研究からできた物ですけえ、大きいでしょう。まだ先輩らがつくったものですが、畑で一個頂いてきましたが、何せタダですけん。」

串山の説明を聴いていると、勝手に農学部の農場から持出したものだと言うことだろうか。

「勝手に持ち出して大丈夫かな？」わたしが聞くと、

「私らが食べてみるのも実験のうちですワ。心配いりません。わたしは、岐阜の多治見から来ています。よろしく頼みます。」彼は早口で説明する。よほどセッカチな性格に見える。続けて

「鍋があるかねえ」

「なかと・・まだ買うてなか」わたし達一年生は年末の自炊は初体験だから仕方がない。そのうち必要だろうと考えて居たが、やかん、飯盒、皿以外の食器類を自室に持っている者はいなかった。

それぞれ夢中で食し、完璧に鳥に対する不信感は消えていた。

「まあ、ここで大切な鳥の命を頂くわけじゃ～。鳥様に感謝しなきゃいけん。もし高本君が解剖実験だけしてこのおトリ様を捨ててしまうことは命をムダにするなと言う天道に悖ることになるちゃ！」相変わらず理屈を言わないでは収まらない崎口のラッパ節である。

農学部の高本吉雄は崎口と同じ山口県、日本海に面した仙崎港に近い俵山温泉の出身、父は農協の職員で、小規模な農家でもあった。やがて畜産を専攻し卒業後は、畜産関連業界への就職目標を設定している。ひょろ長い顔で気は長く温厚な性格、政治活動には無関心、決まったことは忠実に行い、自ら能動的な活動はしない。

数日前、寮の食堂で中田と隣り合って夕食をしていた時、中田が「正月に帰省しないなら一緒に越冬をしようよ」と誘われた機縁で、今日は終日実験室で今年やり残した実習の補完をしたのだが、解剖した二羽の鳥の処理について思案したが本来は廃棄処分しなければならないのだが、串山と相談して白菜と一緒に持って中田の部屋を訪れたのだった。

気が短かそうな串山明和は入学以来気性も顔も長い高本と妙にウマが合って親しく、農学部で農芸化学を専攻して農業用肥料、農業用薬剤、牧畜や養魚場の飼料や薬

「二羽トリか。ジョークはどうでもいいとね」

「昨日と今日、解剖で使うたんじゃが・実験用の鳥ですいね」

「病気の鳥かいね？」中田が不安そうな眼で鳥を覗いている。

「内臓は除ってきたからせわあないって、まあ、煮たらせわあない。」

《せわあない》は山口の方言で、問題ない、という意味だ。

「まあ、よい色はしとるが・・・」

中田が匂いを嗅いでいる。

「少し薬品の匂いがするとね・・・」

崎口がこれを無視して

「高本さんは山口のどこかね」

「仙崎の傍の俵山ですがの」

「オレは萩ですちゃ、よろしく。でもキミはまだ一年生じゃろ、鳥の専門家じゃないが。大丈夫かね？この鳥は！」

「崎口さん。まあ、そう難しいことは言わんでくださいよ。中田さん、その匂いはアルコールのにおいですちゃ。消毒用のね。この鳥を解剖したのは私で産卵不良の原因を調べている鳥ですから」高本は長い顔を振りふり悪い病気の鳥ではありませんと、否定する。

「崎口さん！萩ですよね。寮の代議員の選出の時、同

「だれも鍋は持っちょらんが。寮の食堂にはあるけどデッカいからのう。」崎口がジョークで言うまでもなく、あっても持出すわけにはいかない。

「そうや！あそこに洗面器がある。ありゃアルマイトだろうが？」串山が指さす。

「よしゃ！あれでいこう、あれなら大丈夫や。先に煮沸消毒やってから煮るとするか」

中田のタオルが入った洗面器が、入口の棚に乗っかっていた。誰も一瞬不潔だろうと考えたと思うが、崎口が先に反応した。

「面白いのう！これも余興じゃあ！中田君！ええじゃろうか！変な病気は持っていないじゃろうかの？」部屋に笑いが起こる。

「まあな・・みんなが良ければ使えばいいとね」

良かれと決めれば行動は速い。みんな腹ぺこなのだ。

やがて高本が準備した炭を熾した七輪に懸けた洗面器が沸騰してくると、彼が小刀で鶏肉を細切りにして、骨も一緒に鍋に入れる。白菜も入れて、串山が自分の部屋から持参した塩と醤油を適当に入れて味をつける。

「さあ、食えるぞ！まずボクが毒見をするちゃ！」高本が割り箸で鶏肉を挟んで食べ始めると、いい匂いにも促されて、みんなも一斉に箸を代用鍋に入れては皿に取り出して食べ始めた。

「うまいな！鳥鍋は身体が温まるよ！」

剤を研究する目的を持っていた。彼は岐阜県、多治見の陶器製造会社を経営する社長の三男で、幼いころから陶器には興味が無く、魚や家畜が好きで、仕送りだけで農学部の学生生活を送ることを基本としておりバイトはやらない。余裕のある学生で、来月から大学に近い、津島町へ引越し、規則に捉われない自由な生活、勉強をする予定だという。早口で高本と正反対に四角い顔でせっかちで人の喜びを自己の悦びとする性格だった。

合成酒の空瓶をみて

「酒が足りないようだね、僕が日本酒を買ってこよう！」と言って串山は忙しなく立ち上がる。

「いいのか？・・・すまんとね」と、

中田正志郎が頷いたときは部屋を出ていた。

「ここんとこは、裕福な社長の御曹司に任せちょったらよか！」と崎口。

「うん、その通り。彼は本物の日本酒を買うてきます。合成酒は身体に毒だと知っちょりますから。」

高本吉雄が合成酒に含まれている化学物質、毒素について説明するのだが、わたし達は聞きながら鍋を突っついている。しばらくすると、崎口が

「そんなに悪い酒なら、販売禁止にしなきゃいかんじゃろうが！」

「その通りです。われわれも担当主任の許可を受けて所轄の官庁へ進言するつもりです。来年早々に詳細な分析データーを出してからやります。」何故か方言を避けながら慎重に話した。

「そうかね。合成酒は安けれゃいいとは言えんのう。オレも知らんかったが、行政も悪い。飲んで身体を痛めたら何もならん！安物買いの銭失いとはこういうこっちゃ！ハッハッハッ」

戦後から生きるために続いた闇取引や偽物商品、不良な鉛筆のように酒や煙草なども確かに流通していた。世情が安定してくるに従い順次、米国のＴＱＣを学び生産管理、品質管理、正常な取引、公正な商品の供給形態に進化して行くのだが、事実、半年後には合成酒は酒屋の店頭から消えていった。

「やっぱし本物はうまいのう」

間もなく串山が買ってきた日本酒を酌み交わし、わたし達は感激している。

「貧乏学生とはいえよく飲むとね、われらは、・・串山君に感謝せんといかんとね！」と中田の顔はかなり赤くなっている。

「酒は人の心を洗い、清める力があるちゃ。神様のお神酒がそうじゃろ。ただし！飲みすぎると心身を汚す！岩崎家と言えば三菱だが、この会社はだね、入社すると知識や技術の次が酒の試験があるらしい、一升位飲んで狂うと昇進出来んらしいぞ！」崎口節が快調に飛んでくる。

「みんな酒が強いね。わたしはそんなには飲めんけど」串山が吃驚している。買ってきた二升瓶が間もなく空になると、

「もうちょっと仕入れてくるちゃ、間もなくお正月じゃ、よかろうて、よいよいよいしょ！」崎口もかなり酔って呂律が回らない。彼が酒屋に行くつもりで掛声と共にふらりと立ち上がったから

「わたしが行ってきます。」と言うと

「わかった！なら、この褞袍を着て行け」と崎口は自分の褞袍を投げて寄越した。

その大きい褞袍を二重に羽織って、わたしは外に出た。

酔った体が火照り、冷たい夜気は気持ちがいい。

夜空はどこまでも黒く、あの消えた少女と子犬を思い出して、裏のきつね様の仕業なら、もう一度騙されたいなあ、と思ったが、何事も起らなかった。

既に十一時前だったから、酒屋さんの店仕舞いが不安だったが法界院駅の西向いの酒屋の扉から電燈の灯りが漏れていた。扉を開けてみると親父さんが所在無げに奥の上り框に座っている。

「日本酒を二本！」というと

「いつもの酒じゃないのけ？」

「今夜は清酒です、二級酒だけど・・」

「あいよ！間もなく正月だからね。サービスしとくよ」と、言って五円まけてくれた。

「ありがとうございます。こんな時間まで開いていて良かったです。」

「このあと、初詣に行くからさ！家族でな。みんな奥でテレビを見ているだで。先っきから何人も故郷に帰れん寮生が見えたが、正月から勉強だのバイトじゃ言うて、おえりゃせんのう（困ったことだのう）・・」間もなく年が明ける。店主に頭を下げて店を出た。酔いも冷めたのだろうか、酒を抱えての帰り道は少し佗しいものだ。キツネよ出て来い、出て来い！と呟いてみた。

寮に戻ると部屋には、更に客人が増えていた。

二人とも寮生で顔見知りであったが。

わたしが酒を持って部屋に入るのを見ると笑顔を向けて会釈した。

「ボクらは美味しい匂いに惹きつけられて来ました。犬のような臭覚をもっているから。」二人は照れ笑いすると、改まった様子で立ち上がる。

「経済学科の城長博です」「工学部の元家裕一です」と立上って自己紹介をした。

二人は新館の寮生で一年生。入寮と同時に同室となった二人は偶然、趣味が歴史だったので、忽ち意気投合し、冬休みを利用して自転車旅行を計画したと言う。今回は播州、宮本村から赤穂城跡の現地遺跡、古文書を写

して研鑽して、今、帰ってきたと言った。洗面器を鍋の代用品として煮込んだ鳥鍋に、驚いたらしいが、早速、弁当箱に持参したご飯にかけて食べている。酒もコップで美味しそうに飲みながら、宮本武蔵、大内蔵之助の話を夢中でしていたが

「ラッキーでした。この洗面器で美味しく鳥鍋がご馳走になれて！」元家が言えば、

“取り鳥に使って便利な洗面器”城長が川柳だといって箸で鍋を叩きながら節をつけて歌っている。

「食欲も性欲も、人間本来の基本的な本能じゃ！お二人さん！我らは来るものは拒まぬじゃ。これで寂しい寮内も賑々しくなりましたのう。いい正月になりますいね。」

中田が「彼はラッパの崎口君だ」と紹介すると爆笑。

「でも、いいことを言われますね。崎口さんは！」と元家裕一が感心して真顔になると

「これで、越冬組の縁で仲間が八名になった。もう一人星林君という法科の優等生がおるがの、広島の山ん中へお母さんのおっぱい飲みに帰っちょるが、松の内が過ぎれば帰ってくるじゃろうから楽しみじゃ。皆に紹介するし、ここにまた集まるちゃ！」拍手喝采し盛り上がった。

鍋の蒸気と男の体臭と煙草と酒の匂いが混ざって異様な熱気が中田の部屋に充満している。わたしが立って少し窓を開けると風が入ってきた。大晦日の風は混濁していた部屋の空気をたちまち浄化した。

酒の所為か誰も寒いと言わない。

深酒は疲れも呼ぶ。やがて酒宴も細って終わる頃、明けて新年になった。

昭和三十六年正月元旦がきた。

お寺の鐘が東西南北、高音、低音様々な音色で冬空に響きゆっくりと通り抜けていく。「北津寮の近くになんに沢山のお寺があるのか！

新年の挨拶を相互に終えると、

「さあ、我らも食欲の次は寝欲じゃ！寝るとするかね」

崎口が大あくびをする。

その時だった。

急に寮の廊下が騒々しく人の声と乱雑な足音が響いてきた。

「おーい、女子寮にストームだ！これから清和寮にストームを懸けるぞ～」ひとりの声に続いて

「寝ている者はたたき起こせ！起きている者は庭に集合せよ！」寮へ残留組の別のグループに違いはない。当然、我らと同じように酒に酔っているのだろう。大声で「ストームだ！ストーム！」と騒ぎ始めたのだった。

「新研会の紅尾だ！四回生の紅尾一郎だ。居残り組はみな、庭へ集合せよ！」新聞研究会を（新研会）と呼んでいた。

「副長の小坂だ！これから女子寮を占拠するぞ～」げらげらと雑駁な笑いが起こる。

その声音に崎口はハッとして、中田を見た。

「あいつらばい」

四季屋食堂の親父さん夫婦の娘“みっちゃん”をセクハラでいつも困らせている先輩達のグループだと気が付いた。

「あいつらじゃ！下品で礼節を弁えない先輩らだ。いま清浄な新年が明けたところだ。彼らはＴＰＯも分かっちょらんのう！」崎口は単に満たせない性欲に狂っているグループが喚いているとしか思わなかった。この寮内だけで騒ぐのなら仕方がなかろうがとんでもない先輩達だ。

「清和寮周辺まで行って喧噪を起こす、今の彼らには良識も大義もないのう！」

女子寮へのストームは当時、どこの大学寮でもあった。男子の寮生が夜中に女子寮入口や寮の庭に押しかけて大声をあげて寮歌や校歌を歌い、少しエロっぽい替歌を唄って騒ぎ、性的エネルギーを発散するのだが、基本的には男女寮同士の交流を大義とした相互友好関係を保つためのデモンストレーションなのだ。寮長から女子寮長へ事前にネゴセッションを行い男子寮のガス抜きをするためにやるお祭り騒ぎなのだが。近隣に迷惑をかけることもあるから頻繁には行わない。

「新研会は全員集合！放送部もだ！」

わたしは部活で、放送部へ入っていた。しばらくすると、乱暴にドアが開けられた。ノックもない。

「おい！この部屋で酒盛りをやっていることは分かっていた！君らも参加しろ！」

新研会副長の古坂が命令口調、酔顔で怒鳴る。

「無礼者！あんたらは、しろうしいのう！勝手に人様の部屋の戸を開けるな！」崎口が叱る。《しろうしい》とは《うるさい》の意味だ。

「キミ等は我々に敵対するのか！先輩の言うことを聴けよ！」ドアの傍で他の二人も目を剥いて睨んでいる。

「キミは放送部だろう！」副長が睨みをきかせて、わたしを威圧する。

「やがてキミは報道関係に行けば、あらゆる現場に遭遇する、正月も盆もない。出動せよ！それが報道の使命だぜ！」

「あんたら、それはいけんちゃ。どうゆう権限で命令をされちょるか！強制はいけん！先輩でも報道人でも同じじゃ！その前に学生としての礼儀、礼節の道があるはずじゃろうがの！」

わたしが言う前に崎口が放送部のわたしを防御した。

《新年の清らかな朝に何という暴挙だ》

鎌倉時代に伊勢神宮の神官、村松家行翁の言葉をわた

しは思い起していた。「志す所は機前を以て法と為し、行ずる所は清浄を以て先と為す。とある。これを言っても、わかってくれる先輩ではないことは明白だったが。

「紅尾部長！変なホウカ野郎がいます！何も分かっていません！」一人が喚きながら古坂副長を残して出て行った。わたし達は苦笑した。分かっていないのはキミらだろう。古坂が酔眼で部屋の七人の顔を一人一人確認するような素振りをする。

「君らは新入生だろう！余り逆らうとロクなことにはならないぞ。まだ女子寮にストームをかけた経験がなかろうと思うから教えるのも我らの役割、これが先達の義務と権限だ！」

「一緒に来いよ！寮歌を歌おうぜ、放送部のキミだけでも一緒にやろうぜ！」

もう一人が言う。既に庭では寮歌の合唱が始まっていた。

「行きません。いま、彼が言ったように、道理に外れたことは出来ません」

わたしは静かに答えた。

「代議員の崎口もか！」

「当然！理由は簡単ですちゃ。この夜中に人様の迷惑を考えないことが不見識極まりなし！これをやれば、単に酔っぱらいの野合集団と思われるだけじゃ！周辺の住民に迷惑じゃ！大義がない！あなたらも止めた方がいい」

「よくわかった！君らは先輩や新研会に盾を突く気だな！」

「タテもヨコもないとね。もう眠らんと朝タチせんとね。強制はいかんと。みな眠うなったとよ」中田が立ち上がって、小坂を丁重に押し出してドアを閉めにゆく。古坂は少し抵抗しながら叫んだ。

「君らは新安保のデモにも参加しなかったよな。そうゆう奴こそ不見識と言うんだ！度量もない、先輩との付合いも出来ないのか！」すでに新安保条約は成立している。一度は岡大自治会、寮生も決起して盛り上がっていたが学生運動も沈静化し、この頃、活動は停滞していた。

わたし達が当時、参加しなかったことを思い出したのだろう。古坂は吐き捨てるように「バカ者！」と罵声を残して、部屋を出て行ったが、庭の騒動は止まなかった。エロの替歌を唄うもの、寮歌を合唱するものあり。

彼らの中にはやがて暴徒化する学生自治会の幹部や民青の運動家もいたのだろう。

「自治会連合会を結成せよ！」

「民主青年同盟万歳！」

低迷している学生運動の再構築を謀ろうとしているのだろうか。

誰が投げたか小石が中田の部屋の窓にパラパラと当

たって跳ねた。

「奴らは人間としての恥を知らん！こういう輩がやがて天下の公器、新聞やテレビ、ラジオの分野へ就職して無礼な取材をし、間違った記事を書くようになると思うとホントに嘆かわしいことじゃ！」

崎口が吐き捨てるように言った。誰の胸にもやがて何かが起こりそうな予感がして不安だったが。

ＲＩＰ同志会発足

新年が明けて元旦から裏日本は豪雪、関東にも雪が降り、国鉄のダイヤも大混乱しているとラジオが報じていた。

瀬戸内海は穏やかに明けて、一週間後には星林竜節が寮に帰ってきた。

土産に宮島の“紅葉饅頭”を持参したから、その夜も中田君の部屋に集合した。

大晦日を過した仲間も二三五五集まってきた。

八名が揃った。元家君が鳥取から送られてきたという青竹に巻かれた竹輪を持参したので、銘々が齧りながら大晦日の夜の出来事を星林君に説明し始めた。すでに「あの夜、女子寮にストームを掛けた者の中に、女子寮に土足で踏み込み、洗濯場から女子寮生の下着を持ち帰った者がいる」という風聞が寮内で立っていた。しかもそれを手柄話のように吹聴している者がいた。

「言語道断！その者はやがて罰を受けることになろう。」元家が空手を切って断言した。

「そう言えば、竜節君だけが当夜は居なかったわけじゃから、詳しく説明がいるじゃろう。大概は今、雑談で出てきた通りじゃが、要するに、この寮内で我らを敵対視するグループが出来てしまったこと、そのグループは大多数が先輩になるということだ。これが問題の第一で、我らが、今後彼らにどう対応すべきか、ということだよ。」

「崎口君の説明とポイントは良くわかりました。みんなの当夜の対応は正しかったと僕は思います。相手のグループは酒を飲んだ暴徒と同じです。女子寮も残留者は少なかったろうと推測しますから、さぞかし恐怖を感じたことでしょう。」星林が黒フチの眼鏡を拭きながら、中田を見た。

「中田さんはどう思っていますか。先刻からあまり発言をしていませんが」

「まあな・・。ボクはあまり彼らを意識せんようにすることだと思うが。要は相手がこれからどんな対応をしてくるかだな。まあ、意気地のない連中だから、素直では何も出来んと思うよ」

この頃から中田の博多弁はかなり取れてくる。寮生活を通じて大多数の学生の、方言は修正される。各地から来ているから東西が混合した寮生言葉になるようだ。

「中田君は流石だ。寮内で生活する以上は同じ家族と思えばいい。挨拶は自然に行う、あくまで先輩に対する敬いのこころは持っておくことじゃ。どうしても馴染めない先輩がいて、時間がかかることもあるだろうがのう・・・」

寮の食堂も再開しているが、新研会の紅尾と小坂は我々を避けているのか、今日までは会っていない。多分、暴徒のリーダーとして、大晦日の夜を反省しているのだろう。

「この窓に石を投げた奴がいた。窓ガラスは壊れなかったけど陰険な奴らだ！」元家君が顔を赤らめて言う。彼は電子工学を学んでいる。部活は空手部だ。

星林君は窓を見ながら

「壊れていれば怪我人が出たかも知れん。傷害罪で事件になったところだ。怪我が無くて良かった。」

「寮長には報告した方がええよ！」高本が言う。

「新研会の連中が中心みたいだった。放送部も出て来いと言っていたようだね」

元家君は、わたしを振り向いて

「キミにしつこく絡んでいたようだが、彼らの暴力には気を付けた方がいいよ・・」指を折ってポキポキと鳴らしている。

「新入部員だけど、絡まれないようにします。ありがとう」あの嫌な夜を思い出していた。

「いずれにしても新研会はエリート集団だとの風潮があり、報道の自由という大義があるから、昔から驕り高ぶった連中が多い、という悪評があるのも確かだよ。彼らには、何かが欠けているような気がするがね」将来、有名新聞社への就職を目指しており、事実、卒業した先輩らの中には希望する新聞社へ入社し活躍しているという実績があるのは確かだ。

《安保阻止闘争以来、新研会が発行する〝週刊岡大〟の紙上で全学連共闘会議への自治会組織の参加キャンペーン、民青への勧誘報道を張っているのを読むと、彼らはかなり極端な左翼化に偏向してきている。これからますます中立学生に対しての洗脳運動が激しくなるだろう》

「少し飲もう」串山が一升瓶の蓋をとると酒の香りが流れてくる。このメンバーには酒なしでは過ごせない。やがてわたしも（酒豪と呼ばれる）仲間入りをすることになるのだが。

「これから、学内や寮内で何かが起きてくる可能性はある。彼らの策略に堕ちいらないように平常心で対応することじゃ。」

「わたし達は自称正義派だから、邪道の彼らに負けるわけにはいかない。やられたらやり返すだけだよ。平常心ほど難しいものはないよ！」高本が崎口に反論する。

「その通り！僕は空手部だから、一発噛ましましょうか！」工学部の元家が拳法のポーズを取る。みんなが爆笑する。

「それは一番だめじゃ。元家君のジョークだろうがのう。凶器を使うたらあかん。剣道も同じじゃて。礼節を守りながら対抗するにはどうするかだ。」崎口が星林を見た。

「ま、暴力はいけないよ、当然分かってはいるが、特に法科の学生が法を侵すわけにはいかない。崎口君の言う通りわたし達は真のインテリジェンスとして、対抗しよう。彼らは小石を投げたりしたそうだがね。姑息な手段だ。彼らは学生運動、デモで警察官に小石を投げて対決しているらしいが、そのクセが出たのでしょう。今度、そのような蛮行があれば、学生課の方へ私が届け対処しましょう。」

彼は既に教養課程一年度の始どの単位を取得して、合わせて憲法、民法、刑法の専門課程の勉強を始めていた。

「崎口君、星林君が良いことを言ったと思う。我らは正義を主としたインテリジェンスを目的にやろう。グループを作って結束したらどうだろうか。当初はこの八名でスタートしたらどうだろう」高本が提案した。全員がその提案に賛同した。

熱気が部屋に満ちる。外は木枯らしが吹いて樹木や竹笹が揺れて震えている。時折、窓から隙間風が侵入して来るが気にならない。

「グループに名前をつけようよ」城長が発案をした。それは良い！その通り！と、全員がその発案に同意した。

「リアル、インテリジェンス、パーテイでどうだろう」と、星林。

「横文字を略して、ＲＩＰとなるが」紙に大きく書いて見せた。全員が拍手。

「ストリップのリップ（ＲＩＰ）とも読めるとね」

中田が口を開いた。そうだね、と、また爆笑。寮から自転車を三十分も漕ぐと、ストリップ劇場常設館に行けた。山陽本線のガード脇、柳橋交差点に沿って常設のストリップ古屋があり寮生にも常連がいた。いい娘が居るぞと、口コミで寮内に伝わると中田をはじめ数人が自転車を連ねて行っていた。

「いいじゃないか。性欲も人間本能の一つじゃ。研究材料として、ストリップ同志会とも解釈出来て面白いのう。」

「発足の乾杯をしよう。」串山が酒を継ぎ足して

「御発声を、会長さんに・・・」

「そうじぁ！会長さんは中田君がいい。リップ同志会のトップにはピッタシじゃて」崎口が言うと文句なし！賛成！で賑やかに決まった。中田君は真っ赤な顔で頭を掻いている。

「まあ・・じゃ、乾杯をするとね。R・I・Pの発足に乾杯！」本来の目的は礼節を重んじ、真のインテリジェンスを目指そうと会長にポリシーを言って欲しかったが、中田君らしいや、と皆は内心納得もしていた。

こうしてグループ名が決まり、会長の中田正志郎は喜寿を越えた今日でもRIP会長なのである。そして同じく星林竜節が事務局長に就任、毎年の旅行会を企画して現在に至っている。

岡山大学漕艇競技会

大学の学生食堂がほぼ学内の中心棟にある。通称、「学食」という。

朝・昼・夜の食事を学生に提供するが、寮生は昼食だけを利用していた。ちなみに素うどん十五円の時代だ。

配膳口の上部空間、板張りで横に細長い場所は掲示板として機能していた。各種の伝達のビラは食堂を利用する不特定多数の学生に伝達できる最適の場所だったし、この掲示のスペースは誰でも利用できた。学生達の部活や同好会の情報やゼミの通達などの提供手段として学生や教官も重宝していたわけだ。

午前の受講が終わると星林竜節は昼食を採りに学食へ自転車を漕いで行く。受ける風に仄かに春の兆しを感じ始めた二月の下旬、その掲示板に次のような募集広告が掲示されていた。星林が見ていると崎口と城長も現れ合流した。

《募集！岡山大学漕艇競技会参加チーム
エイトの部。（八名単位でグループを作ること）
期日、五月五日、旭川漕艇会場、
岡大漕艇部長》

漕艇部が主催するボートの競技会参加を一般学生に呼び掛けた広報だった。

岡大漕艇部は六高時代より引継がれてきた伝統のある漕艇部だった。

一般学生に参加を呼び掛けて、ボート競技（レガッタとも言う）を体験させて漕艇部を広く宣伝することと合わせて優秀な選手を発掘しようとする目的で毎年同じ時節に旭川漕艇場で行われていたのだが。一年生には初めてのボート競技のニュースになった。

直ぐに、この大会に北津寮で二チームが名乗りを上げた。

「北津寮医学部連合チーム」と「紅朝日チーム」だった。「紅朝日」は紅尾一郎が率いる新研会を主体にしたグループでこの事実は直ぐにわたし達RIP会員に伝わってきた。

この募集要項を見ると一年生だけのRIP同志会も参加が可能だった。

「よし、これで奴らに対抗じゃ。」崎口は商船大学中退

でレガッタは経験済みだし、中田はドライアイスで鍛えて腕っぷしは強い。元家は空手部、高本、串山は大学の農園で基礎体力をつけている。

「打倒！（紅朝日チーム）と行こうじゃないか。紅ショウガの漬物のような名前のチームに負けるわけにはいかんじゃろ！」

紅尾部長の「紅」とどこかの新聞名とを合わせて付けた名前であることは明白だったが。崎口は漬物の名前だと揶揄してみんなの闘争心を燃やそうとしたのだろう。一笑して自らキャプテンとしてRIPを結団し対抗しようと決心をした。

早速、星林事務局長はRIP中田正志郎会長名で“RIP同志会”のチーム名でエントリーをしたのである。

崎口が経験者なのでキャプテン。後の七名は初体験のため早速基礎知識の研修、イメージ練習、その後漕艇部室内練習場でのオール付のストレッチャーに乗って漕ぐ実務練習。漕艇部主導の体力テスト。RIP各人はバイトや講義のスケジュールがあり、全員が一堂に会することが出来ないので、事務局長が時間を割振った計画に基づいて練習場へ通う。この頃の中田は岡山興行の本社でMR（マーケットリサーチ）の事前準備に忙しい。崎口はこの話を中田から深刻に聞くと可笑しくて大賛成、彼を本社へ行かせたのだった。

わたしは軽量で一番体力に乏しいため、コックスに指名された。コックスは扇の要になるポジションで大切な役割であることを知っていたので、わたしは辞退したのだが、RIPの結束を第一義に考えろと言う中田会長の一言で、不安を抱えたままに、皆に了承されて参加をすることになった。すべて初めから基本をボート部コックスに教わることになったのである。正義感から言えば、若干反れた不遜な目的ではあったが、打倒「紅朝日チーム」で全員は燃えて練習に励んだ。

参加チームは二十四チーム。事前指定練習日は割り当てられた日に旭川の漕艇練習場へ実地練習で行かなければならない。実地練習の前にトーナメント戦のクジ引き会があり、「RIP同志会」の一回戦の相手は「教育学部Bチーム」と当たり、勝てば二回戦で「紅朝日」と対決できることになった。

五月三日、旭川、一〇〇〇メートル競艇場で、現地での事前指定練習に入る。

ボート部員の指導を受けながら順次桟橋から乗艇。エイトの長いボートの船縁に旭川の清流が跳ねる。水音と清流の感触が全身に伝わり、わたしにとっても、直ぐにこの体感が、たまらない魅力になった。

「さあ、RIPのみなさん。がんばって行こう！」岡大漕艇部の担当者が細長いエイトの艇を桟橋から押して清流に乗せた。われらチームのボートの準備完了。難しいポジションのバウ（艇首）には漕艇部員がサポートで

乗艇、あとの七名は漕手で、最後尾操舵手でもあるコックスの席にわたしが座った。責任の重さは充分に分かっていたから、身体中に緊張が走る。レーンの前方が見えるのはわたしだけで、あとの八名は後方へ向かって座っているからわたしと皆は体面状態になる。

「キャッチ！」の声でオールのブレードで水を掴む。「ロウ！」で漕ぐ。艇は前に進む。キャッチ、ロウ、キャッチ、ロウ、キャッチ、ロウと連続してオールの動きを合わせてゆく。

漕手の選手はオールハンドルを両手で持ち、足のキックを利用して手前に引く。七名の全身が屈伸運動に入る。オールが水を切る。ボートは水面の上を滑ってゆき、風をまき起こし、その風を受けて全員が風になる。

「オールメン！キャッチ、ロウ、キャッチ、ロウ！」

コックスのわたしがボートの後端からメガホンを向けて叫ぶ。舵を取る。

「ミート、ミート！いいぞ！」調子は最高。指定練習日は絶好調で終わった。

五月五日、試合当日。第一回戦の相手は教育学部Ｂチーム。

その日は、朝から雨だった。

五月雨で煙る旭川漕艇競技場、所定の受付がある本部テントへ着く。

急にわたしの心臓がドキドキ鳴りはじめた。「心臓が速鐘を打つとは、このことなのか！」

みんなを集めて中田会長は崎口キャプテンに一言を求める。

「昨日までやってきたことを、そのままやるだけじゃ。以上もなく、以下もない。無心になってくれ。相手は自分自身じゃ。自分の分担に心を尽くす。相手チームのことは考えんでもいい。これだけじゃ」

円陣を組む。「ファイト！ファイト！」

「コックス！声が小さい！」

「ファイト！、ＲＩＰ、リップ、ファイト！おう！」

大声を挙げてみたが心臓の鼓動は止まない。

「一回戦はどうしても勝ちたいなあ。二回戦で紅朝日チームに一泡吹かしてやりたい！」城長博が言った。拳法では常に相手を飲んでかかるのだそうだ、そのためにエントリーをして、苦しい練習をしてきたのではないか。と、城長は言う。

「キミね、それがアカンちゃ。今は二回戦は忘れろ。勝負は無心でやるかどうかじゃ！邪心を無くして、みんなの心がひとつになれば、それでいい！勝ち負けは結果だ！」

崎口の挨拶は立派だが、わたしの胸は激しく波打っている。言われていることが胸に浸透して来ないのだ。青

白い顔をして震えている。キャプテンに見抜かれてしまった。

「コックス！君が一番冷静になっていなければならんのじゃ。深呼吸、深く吸え、深く吐く、吸うて吐く・・」

い～ち、に～と深呼吸して冷静に、冷静に、自分に言い聞かせる。心を縛おうとしても妄想が次々に湧いてくる。勝ち誇った小賢しい紅尾の顔、小坂の横柄な言葉使い。城長の言った「一泡吹かす」ために皆はこれまで努力してきたのだ。

雨に濡れて、寒さを感じたのだろうか？いや、今更責任の大きさを感じて身を震わせていたのだった。水面に落ちてゆく雨足は泡立ち跳ねて、自分の鳥肌を見ているように空恐ろしく感じた。

立ち上る靄の向こうに岡山烏城の天守閣が麗雅に光っている。

葛城橋と堤防には観衆がいっぱいだ。

各チームへの声援や女子学生の嬌声が飛び交っている。

「第五レース、教育学部Ｂ、アールアイピー同志会、スタートします！」アナウンスのあと、スタートの旗が振られた。わたし達のボートはインコース。右側に教育学部Ｂチームを見ながらスタートした。

みんなのオールの動きは練習通り順調にスタートを切った、さあ、此処から皆のリズムを揃えていくぞ！。

「キャッチ、ロウ・・キャッチ、ロウ、キャッチ、ロウ」

まさに順調だ。

「皆で声を出せ！」崎口が叫ぶ。

ロウ！ロウ！ロウ！自然に声が合う。

激しい水しぶき。漕ぐ、漕ぐ！力いっぱい。辷る、辷る！ボートが水面を走る。

コックスの声が聞こえないほどオールが水を叩く音と皆の力強い声、もう「あと二百メートル。」標識を見て、わずかにリードしている。勝利を確信した。レーンサイドを確認した、と思ったとき、異常な音が身体に響いた。

バウサイド三番、中田のオールブレードがコースラインに繋がれた浮輪に接触。一本のオールが水中に巻き込まれて、中田の腹にオールが食い込む。ボートは急旋回をしてレーンの綱に接触。

直ぐに体勢を立て直しレースに戻ったが、ロスタイムは大きく、当然負けた。正式発表の結果はボートがレーンを跨いだので失格になってしまった。敗者復活戦にも戻れない。

わたしが左舷ばかりを気にして、かじ取りをミスした結果だった。コックスのわたしがボートを正しく安全に目的地へ進める、初歩的義務を果たせなかったのだ。

みんなが此れまで流した汗が無駄になってしまった。すべてがわたしの責任だ。不注意だった。

痛烈に自己嫌悪に苛(さいな)まれる。

下艇してテントに戻り、崎口は教育学部Bチームのキャプテンに挨拶をして帰ってきた。

「すまん！ボクのせいで」中田が先にキャプテン崎口に謝ってしまった。わたしは吃驚した。〈それは違うよ。〉と、言おうとした私を崎口は手で制して

「誰のせいでもない！一生懸命みんなやったちゃ。これがチーム戦なんじゃ。総合力を百％にすることがいかに難しいかが解ればいい。今回はこれで良い！此れからの人生にいい体験をさせてくれた漕艇部へ感謝だ！」

崎口を先頭に全員が本部漕艇部の役員席へ行き頭を下げた。彼らは何も言わなかった。

「さあ！終わってしまったことをゴチャゴチャ言うても意味がないちゃ！RIPの初挑戦は終わった！さあ、着替えてみんなで四季屋食堂で一杯飲もう！」

「みんな！ごめんね！」わたしは頭を下げた。それ以上は言えなかった。

言えば虚しい言訳にしかならないし、コックスとしての未熟さは、みんなもお見透しだと、思っていたから。こんな悲しい経験は初めてだった。スポーツとは、いや敗者にとっては、このように人の心を揺さぶり苦しめるものだと。小、中学の運動会の徒競走ではいつもビリになっていたが、これは自己責任で納得できたが、団体競技は初体験でまるで別のところから来る心の重圧に負けてしまったのだった。

この悲しみの風はどこから吹いてくるのだろう。わたしは黙って濡れたシャツに顔を隠して涙を拭いた。何度も。

修禅会合宿

真夏の岡大キャンパスの樹木たちは力いっぱい緑色に燦燦(さんさん)と光っている。その中で蝉の命は燃えている。

ひと夏が一生の蝉たち、短い命を全開して喜悦している蝉しぐれ。

教養課程二年生の夏休みに入った。

“岡大修禅会”の夏合宿が始まった。

会長は崎口茂。

七月になると大学食堂の掲示板に会長名で合宿の参加者を募ったが、応募者は皆無だった。

《岡大修禅会、夏季合宿。参加者募る！

岡山市内、臨済宗、少林寺で八月一日から一週間の予定》

結局、参加者は崎口、星林、わたしの三名だけになった。

この少林寺での禅の会は歴史があり、社会人である岡山経済界の重鎮の方々約二〇名が老師を招いて禅の修行をされるところへ、学生の我々が参画させて頂くという

構図であった。星林竜節と岡山市商工業倶楽部のK社長との縁である。

当時の山門脇には「葷酒入門不可」「女人入門不可」御影石に彫り込んだ石塔がある寺であったが、実際は女性の会員も参加されており、般若党のメンバー達も酒を持込んで就寝前に団欒しながら飲んでいたから、この石塔は江戸時代から続いている古刹の名残にすぎないのだろう。

蝉しぐれが境内を騒がせている昼下がりに、星林竜節が汗を拭きふき、岡山市街から本堂へ帰ってきた。

丁度、作務（寺の庭での作業）の休憩時間だったから、ほとんどのメンバーは本堂の縁側でお茶を飲んでいた。

「新聞が買えましたかな」メンバーのK社長。

「はい。この通りです。松川裁判の結果が出ました！」手に持った新聞を掲げる。

「如何です？」

「無罪です。全員、無罪です」

「そうでしょう！」

ほうっ！と周囲からも感嘆の声が湧いてくると、同時に当然の判決だ、と異口同音の意見が其処ここに溢れてくる。

真剣な驚きの声に反応したのか蝉の鳴き声が一頻(ひとしき)り止んだ。

「蝉が泣き止むと涼しく感じるね」誰かがいうと、

「静けさや岩にしみいる蝉の声」と、誰かが芭蕉の句を吟じる。

「日本の夏もようやく自然界の蝉の声を味わえるようになりましたかなあ・・・戦後はGHQに擦寄った赤い蝉や腹黒い蝉が姦(かしま)し鳴いていて長い間、人の道を歪めてきましたからな。」K社長がしんみりと言う。

「いかに優秀な判事とは言え、自然を素直に味わう心がなくて一体何が見えましょうか。・・」隣の会員が嘆息しながらK社長に答えた。

「最高裁に差戻されてみて裁判官にも本来の正義感が復活してきたと言うことでしょうかな。判事が変わればということでしょうか。何れにしてもGHQの差し金とは言わないが松川事件が冤罪だと長い間言われてきたのに、下級裁判所は全員を有罪にし、四名に死刑を言渡したが、憶測ばかりで証拠、真実が出てこない。ようやく司法の正義を見せてくれた・・・結審して良かった。」

日本の国鉄（JRの前身）三大ミステリーと言われてきた、下山、三鷹に次ぐ松川事件は、最高裁判所差戻し裁判で、昭和三十六年八月八日の仙台高裁の判決は全国的に注目されていたのである。

星林は高校時代からこの事件に関心を持っていたからニュースを求めて岡山駅へ行き、号外、夕刊の新聞を買って、帰ってきたところだった。その日は合宿の最終

日でもあった。

「星林君は法曹の世界を目指している学生さんです。」K社長は皆に紹介した。

崎口とわたしにとって正式には初耳だった。

「うちの子供の勉強を見て頂いているが、星林君はなかなか優秀な家庭教師でもあります。うちのやんちゃ坊主もすっかり星林先生に傾倒していますから、ありがたいことです」星林は頭を掻いて

「とんでもないです。社長さんのお蔭で禅に触れることができて幸運です。禅はこの通り未熟ですが、わたしは社長さんが今、言われた通り、法曹界を目指します。社会的正義を第一義に考えて、将来、司法試験を目指しています。」星林は自分に言い聞かせるように告げた。

皆から拍手が起こった。

彼は座禅を組みながら考え続けたに違いない。そしてこの松川事件を研究し、やがて卒業論文では死刑廃止論を取り上げて、人間が人間を裁く矛盾を鋭く提起したのだった。

「禅は一生ものです。生涯に亘る修行ですから、あせらないでよろしい。目前の司法試験をまず、突破してください」K社長に星林は深々と頭を下げた。星林にとって、この出会いが将来の布石になり、禅の修行が肥やしとなって、やがて星林が某大会社の再生事業に活躍する時代が来る。

禅の合宿最後の夜。境内には涼しい夕風が入ってくる。古刹の森閑とした本堂で老師が高座に御して講和。細い体から覇気が迸る。弾ける声と五体から人間本来の真理を伝えようとされている姿を見てみんな感動していた。

禅を人に勧めることも、自己が続けることも厳しい、極めることは更に難しい。

わたしは春の部員獲得活動を思い起していた。「岡山大学修禅会」を立ち上げた崎口、星林と部活への勧誘デモンストレーションをした春のことである。

長時間にわたって座禅を組むことは、学生には魅力のない部活であったのだろうか。桜花が散って舞う教養部の正門脇で、和装、袴履きで座禅を組みデモンストレーションをして部員を募集した時の情景が甦ってくる。同郷の山口県人の数名が興味は示してくれたが入部生は皆無だった。RIPメンバーから四人がサクラ（友情出演）で参画してくれたが、結跏趺坐（けっかふざ）もしくは半跏趺坐（はんかふざ）で行う座禅は足が痛くて苦しく結局、新入部員は獲得できなかった。

しかし、この苦痛に耐えたあとは爽快なのだが。この体験は何ものにも代えがたい「苦中有楽」なのだ。苦しい時こそ真の楽しさを味わえる、ことを多くの学生に知って貰いたかったが残念でならない。

わたしも老師の前に参禅はしたが、考案を悟るには至らなかった。崎口君や星林君のような結果は何も得られなかったが、清々しさと同時に忍耐力、集中力は少し増して来たのではなかろうか。夏目漱石の「門」の宗助が鎌倉円覚寺で修行して悟りが開けずに、無残だった情景と重なり、自分なりに納得して寺を後にしたのだった。

（次号へ続く）

これはフィクションです。記載された団体名・人名等は架空のものです。

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

ロボット雑考（その十）

三戸岡　道夫

（ＡＩによる軍事革命）

中国の北京に「八一大楼」といわれる巨大なビルがあり、共産党中央軍事委員会の本部が入っている。二〇一七年七月十九日にそこで、国防科技大の学部の一つに相当する、

「知能科学学院」

の設立式典が行われた。ＡＩ技術の軍事利用を専門とする軍直属の研究教育機関で、

（新武器を開発し、近未来戦争を担う人材を育成する）

のが目的である。

そして翌日七月二十日、中央軍事委員会主席を兼務する習近平国家主席は、国防科技大の政治委員、劉念光中将らと会見し、

「素質の高い軍事人材を育成し、自らの力で新しい技術を作り出す高みを目指せ」

と訓話した。

それから三カ月後の十月十八日、北京の人民大会堂で行われた第十九回共産党大会の開幕式で、習金平が行った政治報告の中で、

「中国軍を世界一流の軍隊にするために、軍事知能の発展を早急に取りこまなければならない」

と強調した。軍事知能とは、ＡＩの軍事利用のことを指す。中国軍でこの発言は最高指示として受け止められ、各部門でＡＩに関する研究が本格化された。

ＡＩの軍事利用を研究しているのは、国防科技大だけでなく、

軍事科学院、
国防大学、
中国科学院

など、多くの組織や団体がある。ＡＩ関連の研究はいま党中央が重視しているため、もっとも予算が取れやすいと言われている。

無人航空機、無人戦車、無人偵察機、無人潜水機など…、アメリカのシンクタンク・新アメリカ安全保障センターが二〇一七年十一月に発表した報告書では、高度なＡＩを導入する中国軍が、陸海空で世界に先がけて「無人化」に取組む現状を指摘している。

習金平がＡＩの軍事化に力を入れる理由は、

「空母、潜水艦、ステルス戦斗機といった分野で、米国があまりにも先行していて、中国が一生懸命追いつこうとしても、長い時間が必要だ。しかし、近未来の戦争の主役は、ＡＩになるかもしれない。新しい技術なので、今のところ中米の差は大きくない。力を入れれば、米国を超えて世界のトップになるチャンスがある」

ＡＩ兵器は各国の軍事力のバランスを左右するだけに、先進諸国の開発は、今後激化するものと思われる。

ロシアのプーチン大統領は二〇一七年九月に、学生たちに向かって、

「ＡＩの領域の指導者になる者は、世界の支配者になるだろう」

と訴えた。

中でも、中国は世界で実戦配備されていないＡＩ兵器「自律型致知兵器システム（ＬＡＷＳ）」を、いち早く戦場で使用する恐れがある。ＬＡＷＳは標的の探索から攻撃までの全てをＡＩが担う。米国防総省は二〇一二年、人による管理が可能なＬＡＷＳが完成するまで、米国による運用を禁止したが、ＡＩの軍事問題を研究する多くの専門家は、「中国にはＬＡＷＳの暴走を抑える歯止めとなる対策が存在しない」と指摘した。

電気自動車（ＥＶ）メーカー、米テスラのイーロン・マスク最高経営責任者は、自身のツイッターで、

「ＡＩの優位性をめぐる国家レベルの争いは、第三次世界大戦の原因になりそうだ」

と警告した。

（人命を救うメス、凶器にもなる）

陸海空の戦場で、ＡＩ兵器の活用は「日常風景」になっている。

韓国と北朝鮮の軍事境界線沿い。韓国軍のＡＩ兵器が、越境しようとする北朝鮮兵に狙いを定める。二〇〇六年に韓国サムスングループの企業で、軍事機器などの開発や製造を手掛ける「サムスンテックウィン」と高麗大学が共同開発した「ＳＧＲ－１」である。サムスンテックウィンの情報分析官の言によると、「ＳＧＲ－１は、二〇一年以降、軍事境界線の非武装中立地帯（ＤＭＺ）

近辺に配備されている」という。機関銃と擲弾発射器を備え、北朝鮮兵士の体温や動きを赤外線センサーとAIで、自動的に感知、識別する。約四キロ先の標的を認識できるが、感知した情報は遠隔操作の作戦指揮権に送信され、射撃は操縦士が判断する仕組みになっている。

兵士に代わってAIが戦闘に加わる行為は、倫理的な課題が指摘される。しかしAIを前線に立たせた方が「人道的だ」と主張する意見も少なくない。

「AIは人間と異なり、疲労や睡眠不足がなく、冷静で死の恐怖も一切感じない。生身の兵士が現場で判断するよりも、AIに任せる方が信頼できるという見方もある」

と、韓国の国立大「韓国科学技術院」のAI技術研究者はそう指摘する。

AI兵器は主に、

○SGR―1のように、現場から離れた操縦士が標的への攻撃を決定する「遠隔操作ロボット」、

○人間の許可なしに攻撃を開始するが、操縦士が停止できる「半自律ロボット」、

○人は全くかかわらず、標的の探索から攻撃のすべてをAIが担う「自律型致死兵器システム（LAWS）」

の三つに分類される。

LAWSは実用化されていないが、半自律ロボットまでは戦場で実戦配備されている。

攻撃目標に突込み自爆するイスラエル製の無人攻撃機「ハーピー」や、水上艦や潜水艦に自動的に接近し、爆発するロシア製の機雷「PMK―2」などが、その例である。国連に提出された報告書によると、ハーピーが過去に韓国に輸出されるなど、技術は世界各地に拡がる。イスラエルの政府関係者は「AI兵器は国益につながる重要なビジネスだ」と打ち明け、軍事問題に詳しい京都産業大学の岩本誠吾教授は、

「操縦士用の防護装置などが不要となり、兵器の小型化や製造経費の削減も期待できる」と言う。

一方でAI兵器の開発を懸念する声も高まっている。その中心は、AIなど世界先端のテクノロジーを引っ張る人々である。

二〇一七年八月、LAWSの開発規制を国連に求める書簡を、AIやロボット開発に関わる世界の企業経営者等が公表した。書簡には、世界トップクラスの棋士を破った「アルファ碁」を開発した米グーグル傘下ベンチャーの共同創業者を含む、二十六カ国一一六人が名を連ねた。

「AIは人道的に使えば人命を救うメスになるが、凶器にもなる」

と言われる。しかし研究者の大半は、人に危害を加える発想で開発を進めてはいない。

しかし戦場では、知的で便利な技術は、有能な兵な兵器と化してしまう危険があるのである。

（AI軍事革命）

風車がそびえる広大な空き地。日差しを浴びながら、大量の小型無人機が、寸分の狂いもなく横一列に並べられていた。無人機はやがて、一機ずつ猛スピードで自動的に空に舞い上っていく。別方向に飛び、田園地帯やオフィス街の上空を自由自在に移動。照明を搭載した無人機は夜間を飛行でき、闇の中に無数の光が舞った。

中国共産党機関紙、人民日報系の環球時報（英語電子版）や、欧米メディアが二〇一七年六月に報じた同国の実験は、世界を驚愕させた。国有企業『中国電子科技集団公司』がAIを活用し、計一一九機の小型無人機の飛行に成功。米国防総省が二〇一七年一月に発表した一〇三機の小型無人機飛行の記録を短期間で塗り替え、世界一技術力を見せつけたのである。

一部のメディアは、この実験の様子とみられる映像を流した。映像とともに、無人機が地上の目標を爆破するシミュレーションの動画も公開された。映像を確認した軍事評論家は、

「これだけの数の無人機が、鳥のようになめらかな動きで等間隔で離陸し、正確に飛行する実験は、世界でも例がない。技術力で軍事的優位を保ってきた米国が中国に追い越され、衝撃的な瞬間だ」

と指摘している。

中国が狙うのは、大量の無人機を主力に、航空母艦や航空機を攻撃する戦術の実現である。人間の兵士は戦場から引き揚げ、無人システムに攻撃を遂行させる。敵に打撃を与える一方、自国の軍隊の人物的被害を大幅に軽減できる仕組みである。

「中国はAIを使って、従来の戦争の概念を変えようとしている。人民解放軍に、AIに操られた無人機を戦争に利用することに対する、倫理的な制約は存在しない」。

一一九機の小型無人機の飛行が報じられた約一カ月後、中国が軍事拠点化を進める南シナ海の海底で活動する。無人潜水機の姿があった。環球時報などによると、中国は二〇一七年七月から約三カ月間、無人潜水機を使い、南シナ海の北東部で科学研究のため、データーを収集する水中探索を行った。無人潜水機の名前は「海翼一〇〇〇」。浮力の調整できる仕組みで、開発に携わった関係者は、中国中央テレビ（CCFV）に「波やイルカのような円滑な動きだ」と、潜水能力を自画自讃した。

中国は、潜水艦の指揮を補佐するAIも、実現しようとしている。香港英字紙のサウスチャイナ・モーニング・ポスト（電子版）は、二〇一八年二月四日、中国が指揮

官の潜在的な思考能力を高めるため、原子力潜水艦にＡＩを導入する取組みに力を入れていると報じた。同紙は、ＡＩが戦場の環境を評価したり、潜水艦の水中音波探知機（ソナー）の正確さに影響を及ぼす恐れがある海の塩分の度合いや、水温についての知見を提供したりして、指揮官を助けると指摘した。敵の潜水艦の脅威を人間より早く正確に認識して警告することも可能で、中国政府は原子力潜水艦へのＡＩ導入に多大な資金を投じているという。

中国科学者は、

「ＡＩは水中の戦争を変えるゲームチェンジャーの潜在力を持つ」と強調した。

（北やテロリストへ拡散の危機）

ダークウェブ。兵器や違法薬物などが、テロ組織の間で売買されている闇サイトが、インターネット上に存在する。

「ＡＫ47（カラシニコフ自動小銃）〇．〇七五ビットコイン（ＢＴＣ）」

二〇一七年一月七日午後六時頃、ロシアやアメリカ製の小銃約十種類が販売される英語の闇サイトが発見された。主に〇．〇七台（当時のレートで日本円約六万四千円相当）前後のビットコイン（ＢＴＣ）で売られ、写真付きで機能や重さが紹介されていた。

サイトを確認したセキュリティ企業の社員は、

「誰でも入手経路を知られずに、兵器を購入できる。匿名性が高い仮想通貨が取引に使用されるのも特徴の一つである」と言う。

こうした事例はさらなる「悪意」のシナリオを暗示する。テロリストや独裁者が闇サイトを使って、ＡＩの判断で敵を殺傷する「自律型致知兵器システム（ＬＡＷＳ）」を入手することへの懸念である。専門家の間ではすでに、「イスラム国」（ＩＳ）などの過激組織や北朝鮮が闇サイトを利用しているとの、指摘がある。

ＬＡＷＳは実戦配備されていないが、先進諸国は水面下で開発を進めている兵器体系である。米国やロシアに加え、中国も技術を高めているとみられる。二〇一五年七月に開催された学術会議「国際人工知能会議」は、技術的には「（ＬＡＷＳの配備は）あと数年で達成可能だ」と予測した。

ＡＩ専門家で、豪ニューサウスウェールズ大教授トビー・ウォルシュ氏は、ＬＡＷＳが闇サイトに流出すれば、「世界崩壊のシナリオが訪れる」と警告する。

危険性が指摘される中、ＬＡＷＳの拡散防止や開発などをめぐる規制作りは、順調には進んでいない。

二〇一七年十一月に、スイス・ジュネーブで開催されたＬＡＷＳの国際的規則をめぐる初の国連公式専門家会合、参加した約百カ国の間で、溝が目立った。途上国がＡＩ兵器の開発段階からの禁止を訴えた一方、米国は規則に向けた具体的議論は、「時期尚早で逆効果になりかねない」と主張した。

専門家として会合に招かれていた拓殖大の教授は、「米国やロシアなどは規制が自国の開発の足かせになることや、禁止に向けて急速に議論が進むことを警戒していた」と振り返る。

規制に向けた議論を遅らせるのは、各国の「思惑」だけではない。ＬＡＷＳが実用されていないだけに、危険性が現実として伝わりにくい課題もある。

（ＡＩ兵器が追ってくる。逃げろ！）

と、大量の小型無人機がある米国の大学の講義室に侵入し、学生たちに襲いかかる―というＬＡＷＳの脅威を描いた映画が、同会合の会場で上映されたが、参加者からは、

「ＳＦ小説の世界としか感じない」

といった感想があった程度であった。

しかし道のりは長いが、規制を訴える意見は多い。

「ＡＩの『負の側面』と向かい合わなければ、罪のない人間が犠牲になる」

と、米ＡＩ研究者のピーター・アサロ氏は指摘している。

（ＬＡＷＳをめぐる主な動き）

二〇〇七年　英国のロボット学者、ノエルシャーキーが規制の問題を提起

二〇一二年　米国防総省が、人による管理が可能なＬＡＷＳが完成するまで米軍による運用を禁止

二〇一四年五月　ＬＡＷＳの規制をめぐる非公式の専門家会合開催

二〇一五年四月　第一回目の非公式専門家会合

〃　七月　国際人工知能会議がＬＡＷＳの配備は数年で可能と発表

二〇一六年四月　第三回の非公式専門家会合

二〇一七年八月　米テスラのイーロン・マスク最高経営責任者や、アルファ碁を開発したベンチャーの共同創業者らが、開発規制を国連に求める書簡を発表

二〇一七年十一月　初の国連公式専門家会合開催

（ＡＩ軍事革命）

「膨大な研究を軍事に応用されれば、脅威になる」

二〇一六年十月、米政府が発表した報告書のデーターに世界の軍事専門家が危機をあらわにした。中国がＡ

Ｉのディープラーニングに関する研究論文の発表数で、二〇一四年に米国を抜いて世界一となり、その差が徐々に拡がりつつあることが判明したのである。論文の多くが民間の技術であるが、軍事関係者は警戒を隠さなかった。習金平の肝煎り政策である「軍民融合」が民間のＡＩ技術の軍事転用を加速させる可能性が指摘されているからである。

米政策研究機関「戦略国際問題研究所」（ＣＳＩＳ）のウィリアム・カーター技術政策プログラム副部長は、二〇一八年一月に発表した報告書で、

「中国はＡＩや量子の技術を長期的に経済と軍事力の基礎とみている」

と分析した。

ＡＩ兵器は、火薬、核兵器に次ぐ「第三の革命」と呼ばれる。核兵器と異なるのは、民間技術を軍事に転用しやすい点である。

（ＡＩを活用した衝突回避といった自動運転の技術は、自律走行する戦車のほか、無人航空機や軍艦への導入も可能である）

と指摘されている。

米フォード、モーター、独ダイムラー、米マイクロソフト…。中国インターネット検索最大手、百度が二〇一七年に発表した自動運転のプロジェクトに、世界的な企業が約五十社参画した。

百度がＡＩを使って、自動運転車を制御するソフトの独自技術を、参画企業に公開した。各企業が技術を応用し、担当分野で開発を進める内容である。プロジェクトは、人類初の月への有人宇宙飛行計画にちなみ「アポロ」と名づけられ、注目を浴びた。

「アポロは、世界最強最大の自動運転開発連合となった。三～五年以内に中国はトップに立つ」

百度の陸奇総裁兼最高執行責任者は、北京のイベントで宣言した。中国事情にくわしい某ＩＴ専門家は、

「百度の狙いは自動運転分野でデーターの王様になることである。技術を提供することで世界中を走る自動車から走行データーを吸い上げ、自社のＡＩを強化できる」

と分析し、「自動運転技術はまちがいなく世界一になり、中国の軍事にそのまま生かせる」

と指摘した。

自動運転の他に軍事転用が容易な技術は、作戦立案を支えるため人間の脳に代わり状況判断や分析を行うＡＩや、機械が敵の姿を即座に捉える画像認識技術をいう。

その両方で中国は世界トップクラスの実力を持つ。中国の電子商取引大手、アリババ集団が、二〇一八年一月、国際読解力テストで同社のＡＩシステムの成績が人間の成績をわずかに上回ったと発表。人間の脳を超えるＡＩ

が完成しつつある。二〇一七年、米情報機関が主催するコンテストでは、中国のベンチャー企業が、顔認証の技術で優勝した。中国国務院は二〇一七年七月、二〇三〇年までにＡＩの理論、技術、応用すべての分野で、世界のリーダーになるとの目標を発表した。

「ＡＩ研究という観点では、もはや中国が最大勢力であり、米国ですら止めることはできない」

と指摘する電気通信界の学者もいる。

（ＡＩ防衛遅れる日本に課題山積）

「ＡＩを活用すれば、より効率的な防衛が可能ですよ」

と、東京理科大学の平塚教授は言う。

陸海空の領域で国の安全を守る人材の労力を減らすために、自身が開発しているＡＩを「参謀役」にする技術である。他国が攻撃を仕掛ける有事の際、ＡＩが対峙する部隊の兵力や、侵入経路などの情報を指揮官に伝えるだけでなく、防衛作戦の立案も助ける、という内容である。ただ、しかし、同様の技術はすでに、中国や韓国、欧米などが、数年前から防衛対策として、軍に導入する検討を開始していたという。

防衛省は二〇二一年度をめどに、自衛隊サイバー防衛隊のネットワークを防御するシステムにＡＩを導入する方針であるが、しかし平塚氏は、「日本の防衛の現場はまだＡＩ技術の本格導入には至っていない」という。

なぜ日本の防衛は、ＡＩ技術の採用が遅れたのか。元航空自衛官で軍事評論家の潮匡人は、

「ＡＩの専門家が防衛省内にほとんど居らず、技術を導入しても扱える人材を十分に育成してこなかった。そのため、ＡＩが『使用者が意図しない決断をするリスクばかり』が注目され、導入が敬遠された」

と推測する。

「ＡＩの兵器開発競争は、地政学的な争いなどの、止められない力によって推進されている。」

英誌エコノミストは、二〇一八年一月二十五日に掲載した特集記事（電子版）で、専門家の発言を引用し、加速するＡＩによる軍拡競争を取り上げた。事実、世界は日本を取り残したまま、ＡＩ兵器の研究を急速に進めている。

ＡＩを活用した「人体の乗っ取り計画」―。

ＡＩ兵器を研究する日本の男性研究員は数年前、恐ろしい技術が海外で開発されているのを耳にした。敵の兵士の持つスマートフォンなどの電子機器に特殊な信号をＡＩで自動的に流し、電子機器から兵士の中枢神経に障害を与える電波を流す。電波によって、兵士の筋力を低下させたり、遠隔で兵士の体を操ったりすることも可能になる。男子研究員は「技術的に完成には至っていない

ものの、ＡＩが人体に直接影響を与える『究極の攻撃』が、将来、戦場に登場する恐れがある」と警戒する。

さらに世界で実戦配備されていないＡＩ兵器「自律型致死兵器システム（ＬＡＷＳ）」の開発は、先進諸国で着実に進んでいる。

アメリカでは二〇一六年頃に行った実験で、ＡＩとカメラを搭載した小型無人機が銃のレプリカを携帯する者を兵士、非武装の者を住民と、正しく認識することに成功した。

ロシアでは、銃器メーカー「カラシニコフ社」が、ＡＩが目標を定めて銃の射撃までを行うロボットを開発中という。

一方、日本の大学や企業のＡＩ技術が、開発者の知らないうちに、海外で軍事用途に用いられる可能性も懸念されている。

日本は、インフラ点検や医療分野などのＡＩ開発が、世界でトップクラスといわれている。が、防衛面でのＡＩ導入、ＡＩ技術者の育成、技術流出を食い止める対策も必要ではないか。中国がＡＩの軍事転用を加速させる「紅い脅威」にたちむかうため、日本が取り組む課題は多い。

（各国が軍事利用を進める主なＡＩ技術）

○日本―防衛省が二〇二一年度をめどに自衛隊サイバー防衛隊のネットワークを防御システムにＡＩを導入方針

○中国―航空母艦や航空機を攻撃する小型無人機、原子力潜水艦の指揮官に敵の潜水艦の情報を伝えるＡＩ、無人戦車、無人偵察機、無人潜水機

○米国―敵潜水艦を探知、追尾できる無人水上艦、ＡＩを搭載した小型無人機が兵士と住民を正しく分けて認識する実戦に成功

○ロシア―水上艦と潜水艦に自動的に接近して、爆発する機雷、ＡＩが目標を定めて銃の射撃までを行うロボット

○韓国―敵の兵士の動きなどを自動的に感知して射撃する兵器、敵のレーダーを探知して目標に突っ込み自爆する無人攻撃機（イスラエルから過去に輸入）

（つづく）

忠山人日乗（二）

忠内正之

当世介護施設事情

（母の看取りを終えて）

「シュウカツ」と言う言葉が氾濫している。就活と終活である。音は同じだが、意味合いは全く違う。

就活は就職活動であり、終活は終焉期を迎える準備活動である。前者は広辞苑に記載されているが、後者は第六版迄には載っていない。

人は誰しも死から逃れることは出来ない。その最後をどこで迎えるか。いずれ介護が必要な体となり、自宅に住み続けるか、高齢者向けの施設へ移住するかの判断に迫られる時がやってくる。切迫してからでは遅いと思う。

元気なうちに自らの足元を見直して対策を建てておく必要がある。この事も大切な終活の一つである。

因みに現在自宅で最後を迎える人は、略13％に過ぎないという。

二〇一五年一月、百二才になる母親を看送った。約七年間の老人ホーム生活であった。

その時苦労した体験を通じて、介護事情を述べてみたい。個人的な内容であり、発表することに内心忸怩たるものがあるが、自分たち自身も既に警戒水域の年齢に達し、見直しの準備と心構えが必要であると考え、また、差し出がましいが、同年代の方々の参考の一助となればと思い、筆をとる次第である。

（一）

平成二十年二月、当時九十六歳であった母は大腿骨を折ってしまった。

当初は、それ程重症ではないと思われ、本人も確りしていたので、救急車の利用が憚られ、以前利用したことのある介護タクシーを呼んで、母を近くの病院へ連れていった。

ところが、この病院では、ベッドの空きがないとの理由で入院を断られてしまった。

この病院は外科と内科のみのベッド数三十床程度の中堅病院であるが、母はこの病院をかねて信頼しており、老人健診も毎年この病院にお願いしてきた。

更に数年前、家の階段を踏み外し頭部を怪我した時、救急車で運ばれ、入院加療を受けた実績もある。

私も外科担当の院長先生の治療を受けたこともあり、いざと言う場合、母の面倒を見てもらえるものと信じていただけに、あてが外れて大ショックを受けた。

ところが信頼を裏切られるショックは更に拡がった。怒りを押さえて、さらば何処へ行ったら良いのか紹介して欲しいというと、紹介はできない。整形外科ならば「ここあそこ」と二か所ばかり名称だけは教えてくれたが、あく迄も紹介はできないと冷たく言い放す。

教えてもらった二つの病院のうち一つは東上線成増駅の近くにあった。そこへお願いした結果幸い入院させてもらうことができた。但し個室は空きがないので当面二人部屋だが先ず落ちつくことが出来て一安心した。この病院でもひどく悩まされることになるのだがそれは後の

こと。

さて、信頼していた地元の中堅病院は、人工透析を主体としており、本格的な整形手術は機能的に不可能だったらしい。自信のない場合は断って当然であるし、患者側としてもそれで良かったと思うが、今迄のつき合い上、他の機関を正式に紹介してもらいたかったと恨んだりもした。

また、遠慮せずに救急車を利用すれば、必ずどこか受け入れ先を探してくれたものをと後で悟った次第である。

また私も妻も現在年齢からいってすでに警戒レベルに達している。いざ急病になった時どの病院を頼ったら良いのやら。近場に見当をつけておきたいと思っているが、まだ見当もコネもついていない。

（二）

母を受け入れてくれた病院は、内科と外科が中心で四十ベット程度の小クラスの病院であったが、創立の歴史はかなり古く、院長先生は二代目であり、ベテランの外科医であることが解った。

親しみが持てたのは、私が常々持病で通院している慈恵医大の出身者であり、同大学のＯＢ仲間でも重鎮だと

云われる程の存在だという。同大学は創業時から「病気を看ずして人間を看よ」との言葉を社是としており、患者を丁寧に扱ってくれることで定評があるからである。

母は耳が遠いので、私が代って貫録充分の院長先生から所見を伺った。

「入院加療はお引き受けする。大腿骨を骨折しており状況は悪い。手術は可能だが年齢その他より見て負担が重い。治ってもまた再骨折する。その場合は更に重傷となる。このまま接着させれば痛みはなくなり楽になる。但しその後は寝たきりの生活となるが、結果として長生きできると思う」と自然治癒の方向を勧められた。

同様のケースで、近所の親しくしていた九十才台のおばさんが、転倒骨折して手術は成功し退院したものの、程なく再転倒して再入院したが、その侭他界されてしまった例が頭に浮かんだ。妻とも相談の上、院長先生のアドバイスに従うことにした。

それから色々と苦労は重ねたが、満百三才となる迄七年間生き延びることが出来たのであるから、正解であったと思う。

母は一番辛い時期を過ぎて、小康状態となりつつあった。しかし病状の安定と共に認知症の傾向が目立つ様になり、介護のお手伝いさんにお世話になることが多くなった。お手伝いさん達は殆ど東南アジア出身らしくて

驚いた。好まれない仕事も快くこなしてくれて有難かった。チップを渡すととても喜んだ。いずれ我々も彼女らの様な人達のお世話になるのに違いないと、時代の移りを知った。

さて、この病院での平和も長くは続かなかった。最も難しい問題に直面したのである。

入院一カ月になるころから看護婦長さんから厳しい注文が出て来たのである。当方もぼんやりとは認識してはいたのであるが、「今のうちに次に移る場所を定めておいてくれ」との強い要望であった。

当初から入院は3カ月以内ですよと念を押されてはいたが、まだ怪我が治る目途が立たない段階から退院の催促をされるみたいで誠に不愉快であった。国の方針で3カ月以上の入院は許されず、違反した場合、病院はかなり厳しいペナルティを受けるらしい。

病院側の事情は理解したが、患者側の立場は別である。まだ完治するかどうか不明のうちからやいのやいのと責めたてられるのでは敵わない。

私や妻が見舞いに行くと、必ず婦長さんが母の病室に来る。その都度「3カ月間ですからね」ときびしく念を押す。「はい」と返事はするものの、転院する先の宛もなければ未だ情報もない、不安この上ない有様であった。

しからば何処か心当たりを紹介願いたいと頼んで見た

が、病院側ではその件について一切関与しない規則だとキッパリ断られてしまった。

その後も合うたびいつも眼を剥いて念を押す婦長さんの姿は、私共にとって鬼のように恐い存在であった。見舞いに行くと、必ず鬼が現れるのは、受付から私共の到着を知らせるシステムが出来上がっているのかと僻む程であった。

しかしその様に悩まされたことで、結果として早々と対策を講ずることが出来たのだから、お陰様と感謝しなければならない。

（三）

さて、早急に母の移転先を考えなければならない立場となったが、私共夫婦は医療介護事情に全く疎く弱り果ててしまった。そこで先ず母の病状から検討することにした。

母の現在の状態から察すると3カ月以内の入院で治るであろう。従って他の病院への移転は必要としない。寝たきりになるとすれば、自宅での介護は難しい。老々介護となる。自宅の構造上にも問題がある。等々からむしろ完全介護の出来る施設に入った方が、安心出来るのではないかと考えた。そして私共が充分なフォローする。その体制で進まなければ長続きしないと割り切った。

早速、介護の知識と介護施設の情報集めに急いだ。母の担当であったケアマネージャー、銀行時代の同僚で介護関係に詳しいKさん、更に区役所の高齢者支援センター等にお願いして情報集めに廻った。

区役所では親切に相談に乗ってくれたが、立場上個別問題には介入出来ないとのことで、自力で探す以外に方法は無かった。

完全介護型の施設となると、大凡左の三つに絞られる。

介護付付き有料老人ホーム（民間）
介護老人保健施設（老健という）
特別養護老人ホーム（特養という）

最初に介護付有料老人ホームを訪ねることから始めた。

自宅から約1kmと近い場所に二カ所並んで立派な建物の介護付き有料老人ホームが存在した。この場所ならば母がお世話になったとしても見舞いは容易である。

二カ所共に、五、六十名程度収容できる中堅ホームである。建物設備はかなり立派である。すべて個室で、入居金はゼロであるが料金は月三十万円程度と高い。各種サービスが追加されれば更に料金が増す。

バックは不動産業者や関西系の会社の様ではっきりしない。この分野は株式会社の参入を認めている。緊急的

とは云え、支出額の長期負担を考えてこの二カ所は諦めた。

次に少し離れた場所の老人ホームを訪ねたが、古いアパートを改造した建物らしく汚い。費用は、多少安くなる様だが、入浴設備等お粗末で意に副わなかった。

また母がお世話になっているケアマネージャーが紹介してくれた、グループホームを訪ねたが、マンションのテナントとしての経営で、小規模でいかにも侘しい。個室の提供は難しいとのこと。よくよく観察すると認知症の人達が多い様だ。母も認知の傾向は強まっているが、この様な処へ母を預ける訳には到底出来ないと思った。

民間の介護付き老人ホームは、極めて数が多くピンからキリまであると言う。この部門で求めてみても対象が多すぎて戸惑うばかりである。この部門は諦めて次の方向の検討に入った。

次は介護老人保健施設（略して老健）である。

この施設は、退院後すぐ自宅は戻れない人向けに、リハビリをして在宅復帰を目指す施設である。自治体のより近い管掌下にあって医療法人主催が多い。

まさに母の現状にピッタリの施設である。自宅から近い場所の病院付属の老健施設があるので早速訪問した。

担当課長の対応も感じが良く、説明は直ぐに理解出来たが、難点が幾つかあることが解った。

第一に、入居期間が3カ月から半年と限定されている。実際は一年半程度迄許される場合もある様だが、母の場合は長期間になるのが必至なので適さない。

第二に当施設は精神病院の附属であり、病棟の延長として利用されており、イメージが暗い。

更に、個室を希望した場合、民間系の有料ホームと大差ないので負担が大きい。（現在はかなり改訂されている様だが）

以上の点から老健を探すことは諦めた。

入院中の病院で許された期限はあと2カ月程度となり焦った。相変わらず婦長さんは、せかせる様に眼を剥く。万一の場合1カ月程度は延長してもらえないかと頼んでみたが「駄目です」と一喝された。なお、「3カ月とは90日です」と日った。誠に冷たい対応であるが、婦長さんの立場としては当然であったと、後々では納得出来たが、当時は全く恐ろしい存在であった。

（四）

最後に残る施設部門は特別養護老人ホームである。（略して特養と言う）こちらに入居出来れば、最善で大本命であること疑いなしである。準官営であり、入居費用が安いこと、介護サービスが行き届いていること、設備が

完備していること等から垂涎の的となっている。従って入居希望者が多く、要介護3級以上が条件となっているが、入居待機者が数多いと聞いている。

特養に入居できれば、母も家族もこれ程幸せなことはない。夫婦揃って特養一本に絞って努力することに決めた。

再度区役所を訪問した。担当の窓口は高齢者支援課である。既に顔馴染みになっており名簿をもらうと共に特養について詳しい説明を受けた。

練馬区では十八カ所の特養があり（30年2月現在では三十カ所に増えている）四カ所は自治体の直営で、あとは社会福祉法人の経営となっている。いずれも自治体の管理下にある。つまり準公営である。従って料金は低廉に抑えられ、介護サービスは完全で設備も充実している。長期入居が可能であり必要ならば看取りもしてもらえる。そのため希望者が多く現在六百名の待機者が居るとのこと（30年2月現在では千四百名に増えている）

予想通り極めて狭き門ではあったが、良いニュースもあった。入居は先着順と聞いていたが現在では緊急度に応じたポイント制に替っていることであった。

母は最低要件である要介護3級は超えて要介護5を受けており資格は充分にある。

区役所の担当者は、「特養十八カ所全先に所定の申込書を送り、ここぞと思う先は訪問依頼した方が良い」との親切なアドバイスをくれた。

教えられた通り、十カ所には申請書に手紙を添えて送り、ここはと思う八カ所を夫婦で訪問し直接お願いして廻った。練馬は坂の多い土地である。また特養の所在する場所は辺鄙なところが多い。もう初夏に近い陽気であった。汗を流し乍ら只管お願いして廻った。特養の建物設備は概して立派である。立派なところ程反応は鈍かった。しかし入居は先着順ではないということに望みをもって訪問に励んだ。

母の病院入院期限が一カ月を切る頃である。遂に反応を示してくれる特養に当った。そこは自宅から3㎞程の近い距離にある田柄特養である。

練馬区の初の公営特別養護老人ホームで、創設三十年になる。古いが堅牢にできた3階建ての建物で収容人員は100名と多い方である。

ここぞと飛び込んで申請して後、数回訪ねたところ親切に応待してくれた。こちらの実状を詳しく聞いてくれた。察するに2、3名ほどの空きがあるらしい。しかし待機する先客が何名もある様だ。競争は激しいものの緊急度と必要度をどの様に判断してもらえるか、唯祈るばかりであった。

結局この特養への入居許可が貰えたのである。但し建物の内部をリニューアルする予定があるので、その時には一時的に別の施設に移る（完成後帰る）との条件付きであった。この際その程度の条件は問題では無かった。

入居の情報を知って例の鬼の婦長さんはお別れに愛想よく、母の薬を充分持たせましたと恩に着せた。

この特養は桜並木の大通りに面しており、風格のある3階建である。母の病室は2階で桜の時期には居ながら花見が出来、花びらが舞い込む風情があった。しかし後半は段々と認知症が進み桜を愛でる余裕が無くなって来て残念であった。

結局、母はここで約七年間お世話になり、平成二十七年一月四日、満百三歳の天寿を全うした。

私共夫婦は交替で週2回、必ず見舞っていたが、ホーム側の介護はいつも極めて丁寧だと感じられ有難かった。

寝たきりであるため移動は常に寝台椅子で、手間がかかった。嚥下力を補うため、毎回スプーンで食べさせてもらった。胃漏等延命措置はしないとの母との約束であった。

ホームの方のご好意で必要な状態となれば当方で看取り致しましょうとの申出があったのでお願いした。

末期症状となり母は二日三晩昏睡したまま、苦しまず他界した。死因は老衰であった。ホームでは祭壇を設けて一晩預かって下さり、翌日施設長さん以下全員で見送って下さった。

母は穏やかな性格の人で、職員さんたちから癒し系のお母さんと親しまれていたという。葬儀終了後挨拶に参上して、職員さんたちの福利厚生費として応分の寄付をさせてもらった。最後は言葉が出せなくなっていた母に代わってのお礼言上のつもりであった。

入居当時各方面から屢々質問された。

「お宅ではよく特養にはいれましたね。何か良いコネがあったんですか」とか「お宅の様な高額所得者がよく入れましたね」とか、であった。

之に対する答えとしては、特養の入居は紹介者などは要らない。あく迄もニーズの度合いにより計算されるポイントの多寡によるのである。また当方は年金生活者であって、普通の暮らしである。特養では収入の多寡によって、三段階に料金体系をかけて対応しているが収入制限

はないのである。と答えて来た。

但し、私は他人にあまり言いたくないのだが、他より有利な要因があったのである。今だから言うが私は母が怪我する7年前から病気を患っていた。それは前立腺癌である。母の主たる介護者である私の病気は難病と判断され、ポイントを稼いだのである。恥を忍んで施設に率直に申告していたことで救われたのだった。十七年経った現在も、毎日の服薬と3カ月毎の通院で治療を続けているが幸い小康状態を保っている。亡くなった母が守ってくれているのであろうか。

長々と臆面もなく個人的経験を書かせていただいたが、少しでも参考になれば幸いである。

話は頭初に戻るが、誰しも死を免れることは出来ない。何時かは、終活の心準備はしておいた方が良いであろう。

現在自宅で生涯を終えることの出来る人は少ないという。国は極力自宅で全うすることを勧めており、このため訪問介護とか訪問医療を充実しようと心掛けているが、我々の終焉時迄に間に合いそうもない。「ピンピンころり」の最後をと願っていても、そう思う様にはいくまい。結局、何等かの形で介護施設のお世話にならざるを得ないと思う。介護施設も近年格段に充実して来ている。

今のうちから自らの体力と経済力を勘案して方向づけをしておきたいものである。

終わりに現在の介護施設の概要を挙げておく。

介護施設の概要

○介護老人保健施設（老健）

月額費用の目安　多床室型　七・八万円

個室型　十五・六万円

退院後すぐ自宅へ戻れぬ人のリハビリをする短期型。3―6カ月の入居が原則。医療社会法人が運営、自治体が管掌する。

○特別養護老人ホーム（特養）

月額費用の目安　多床室型　七・八万円

個室型　十二・三万円

24時間介護や、生活支援、機能訓練、医療サービスなどを受けられる。安価に入居できるが都市部を中心に数が足りず、約36万人が入居待ち。新規入居者は原則として要介護3以上の人に限定。自治体や社会福祉法人が運営する。

○介護付ケアハウス（軽費用老人ホーム）

月額費用の目安　所得スライドにより決定する。練馬区では標準十万円

身寄りのない人や、独立した生活が至難な人らが対象。介護スタッフが常駐し、安価に介護や生活支援のサービスが受けられる。要介護度が重くなると退去しなければならない場合がある。自治体系の社会福祉法人などが運営する。

○サービス付き高齢者住宅（サ高住）

月額費用の目安　十八万円―二十万円

有料老人と比べ、貯蓄が少なくても入りやすい。安否確認と生活相談サービスが最低限つく。住宅型と介護型があり、住宅型は自立の人が入り、介護が必要な際に外部サービスを使う。数十万円の敷金・礼金が必要な施設もある。株式会社の運営もある。

○認知症グループホーム

月額費用の目安　二十万円

認知症の高齢者が少人数で共同生活する施設。認知症ケアの専門スタッフらが支えるが、ある程度自立した生活を送れることが必要で、症状が強くなると退去を促されることもある。一〇〇万円程度の入居金が必要である。特養と同様、役所が関与する。

○介護付き有料老人ホーム（民間）

月額費用の目安　約二十五万円

入居一時金三百万円）

住まいや食事に加え、ホーム職員による介護サービスを24時間受けられる。数百万円程度の一時金が必要な施設が多い。介護の不要な自立の人向けの住宅型もあり、必要な際外部の介護サービスを有料で利用する。民間企業も多く参入している。

○高級有料老人ホーム（民間）

月額費用の目安　三十万円前後

入居一時金二千万円

豪華な設備、バラエティ豊かな食事、二十四時間態勢のケアーに加え、健康管理やレクリエーションなどのサービスも充実、数千万円の一時金が必要な施設が多い。大都市圏は特に高い。民間企業も数多く参入している。

以上標準的な都市型のホームを抜き書きしたが、種類、形態は多様化しており、費用も様々である。概して公的機関は安く、民間型は高い。都市型は高く、郊外型は安い。土地価格と人件費の差異を反影している。各市町村の高齢者支援課を訪ねれば、夫々の地区の情報が得られるので念のため。

終

窮極の特攻兵器（二）

―その後の神雷部隊

千坂精一

太平洋戦争末期、敗戦に次ぐ敗戦で打つ手に窮してしまった大本営海軍部（軍令部）は、形振り構わず起死回生を図って生還のない人命無視の特攻兵器を採用した。

前回はそのうちのひとつ空からの人間爆弾『桜花』を書いたので、今回は海中からの人間魚雷『回天』を書こうと取材にとりかかった。

あれからもう七十三年も経っているので、新資料は見当たらず、戦後の古資料に頼らざるを得なかった。

資料探しに追われているあいだも、その後の神雷部隊のことが気になって回天の取材に集中できなかった。

なにしろ神雷部隊野中隊は、最初の特攻出撃で、一六〇名の人命と、母機一八機（搭載桜花一五機）、援護戦闘機一〇機の機材を喪い全滅してしまったのだ。

いちどにこれだけ多数の隊員と機材を損失してしまった例は特攻史上ほかにない。

軍令部も司令部もこの結果に愕然としたであろうから、以後の桜花特攻は取り止めになったであろうと思いながら気になるので回天取材を一時中断して調べてみた。

野中隊のことは最初の出撃であるし、大勢の犠牲者を出したことからどの資料も正確を期しているが、その後のことは資料に差異があってどれが正確であるか判らないのでいちおう自己判断して採り上げることにした。

まず、その後の神雷部隊は七一一飛行隊長野中五郎少佐の戦死に伴って幹部の異動があった。

七二一空司令岡村基春大佐はそのまま留任。

副長五十嵐周正中佐が七二一空竜巻部隊の副長に転任し、後任に飛行長の岩城邦廣少佐が昇格した。

岩城少佐の後任には宇垣で桜花隊を出撃させる直前にグラマンの急襲を受けて桜花諸共母機の一式陸攻一八機を破壊されてしまった七〇八飛行隊長足立次郎少佐が昇格して七一一、七〇八両飛行隊の聯隊長をも兼務した。

その足立少佐の後任には先任分隊長の八木田喜良大尉が昇格した。

そして、戦死した七一一飛行隊長野中五郎少佐の後任には二階堂麓夫少佐が着任した。

こうして第七二一航空隊神雷部隊の新陣容が整った。

つまり、七二一空幹部の新陣容は、

司令　岡村　基春大佐
副長　岩城　邦廣少佐
飛行長（兼）七一一、
七〇八飛行隊聯隊長　足立　次郎少佐
七〇八飛行隊長　八木田喜良大尉
七一一飛行隊長　二階堂麓夫少佐

となったのである。

なお桜花飛行隊のほうは戦死した三橋謙太郎大尉の後任をおかなかったので、三人になってしまっていた。

岡村司令は、野中隊全滅に狼狽した五航艦司令部に、「野中少佐の身を犠牲にして命令を敢行し桜花使用の限界を判断させ爾後の反省を促した功績は極めて大なり」と歴戦の勇士を褒め称えておいてから、

「失敗の原因は、戦機を得ざりしことと、掩護戦闘機出動率の僅少にあり」

そう極め付けた。

そして、野中が出撃時に第四分隊長林冨士夫大尉に、

「これは俺の遺言だと思って聴いてくれ」

と前置きして、司令部への憤懣をぶちまけ、

「ろくに掩護戦闘機もない特攻なんて成功しないよ。それでも宇垣長官は征けというから逆らえないが、命令が出るまえに陸攻隊を正攻法に戻すように努力しろよ」

そう沁々と漏らした野中の苦衷を林から伝え聞いた岡村司令は、自分が宇垣長官を説得できなかったことからあれだけ大勢の戦闘員をいちどに喪ってしまった責任を痛感していたので、この機会を逃さず無謀な特攻を止めさせようと思い立って、代案を司令部に提出した。

その岡村司令の提案というのはこうである。

以後桜花特攻は、母機の編隊強襲方針から薄暮、黎明時などに小数機での奇襲戦法に変更する。

そうすることによって、いちどに出撃する搭乗員に余裕ができることになる。

これまで隊員たちは訓練に桜花は使えないので零戦を使って緩降下訓練を積んできているから、零戦に爆弾を抱かせた爆装零戦要員に転用できる。

そこで岡村司令は、桜花と爆戦の併用を考えたのだ。

制空権を確保できない現状において来軍の哨戒網を突破するには桜花より爆戦のほうが犠牲が少ない。

桜花の場合は母機の搭乗員七、八名をも犠牲にする虞

があり、事実野中隊が桜花隊員一五名だけでなく母機の隊員一三五名も喪ってしまったことを考えると、爆戦は一名ですむから消耗が激しく搭乗員欠乏に悩む司令部にとっても勿怪の幸いであった。

そのうえ爆戦は、いざというときは抱いている爆弾を捨てて本来の戦闘機にかえり交戦することもできる。

司令部に認めさせた岡村司令は、全隊員に神雷部隊を桜花隊と爆戦隊に分けることを発表した。

開戦以来断然優勢を誇っていた零戦だったが、半年後のミッドウェーと二分したアッツ島、キスカ島を占領したアリューシャン作戦に参加して無人のアクタン島に不時着した第二機動部隊所属の零戦が米軍に捕獲されて徹底研究され、のちに登場したF6Fヘルキャット戦闘機の出現により零戦は時代遅れになってしまっていた。

零戦の製作は、昭和十二年（一九三七）海軍航空本部から三菱重工業㈱と中島飛行機㈱に『12試艦上戦闘機計画要求書』が交付されたことにはじまる。

その後、中島飛行機はなぜか競争試作を断念してしまったので、三菱重工業一社ですすめることになった。

名古屋航空機製作所は幾多の試行錯誤を繰り返し、試験飛行で尊い犠牲者を出しながら三年後の昭和十五年（一九四〇）七月末に漸く制式採用されて生産に入った。

その年が皇紀二六〇〇年の奉祝年であったことから、12試艦上戦闘機は年号の末尾をとって『零式艦上戦闘機11型』と正式命名された。三菱製ではあるが発動機だけは中島飛行機製の〈栄型〉を使用した。

これが零戦誕生の経緯である。

その後21型、32型と改良されて活躍をつづけてきたが、グラマンF6Fの出現で劣勢に陥ってしまった。

零戦を生産しつづけてきた三菱重工業名古屋航空機製作所は昭和十九年（一九四四）十二月七日午後に起こった東海南地震で大打撃を受けた。

製作所は名古屋市港区大江町にあってそこは伊勢湾を臨む名古屋港の埋立地で地盤が軟弱だったために大地が起伏し地割れを起こして建物が倒壊したのである。

その十一日後にこんどはB29爆撃機の集中爆撃を受けて、航空機製作所はその機能を喪失してしまった。

零戦の生産部門はすでに三重県鈴鹿市を中心にした各紡績工場に疎開していたのでさいわい支障がなかった。

そこで生産された52型、63型の零戦新鋭機が神雷部隊の新生爆装零戦隊の使用戦闘機として届けられた。

フィリピン戦で特攻機になった零戦は二五番（二五〇キロ）を抱いたが、この新鋭機は格闘用の一三ミリ機銃が胴に一挺、両翼に一挺ずつ計三挺据えられていて、特攻用としては五〇番（五〇〇キロ）を搭載した。

桜花の二分の一以下だが、フィリピンでの零戦特攻の二倍の効果を狙っていて、そのうえ迎撃を受ければ五〇番を捨てて空戦に持ち込める有利さがあった。

こうして組織も機材の零戦も整ったところで、岡村司令は鹿屋、宇佐、富高に分散していた桜花隊員を富高に集合させた。

そして、神雷部隊を桜花隊と爆戦隊とに分割し、爆戦隊の隊名を戦勢挽回を図って後醍醐帝の『建武の中興』の故事に倣い、『建武隊』とすることを発表した。

隊員たちをどちらの隊に所属させるかは本人の意志を尊重することにして、とり纏めを分隊長に任せた。

分隊長といっても、先任の平野晃大尉は神ノ池で隊員を養成していたし、野中隊長から遺言を託された林富士夫大尉は体調を崩して入室（入院）していたので、この場に居合わせたのは湯野川守正大尉一人だけであった。湯野川分隊長は希望を挙手で決めようとしたが、はっきり意志表示したのはどちらも十数名にすぎなかった。

桜花隊にしろ建武隊にしろ所詮は特攻が目的なのだから、どっちでもいいということだったのであろう。

こうして神雷部隊二隊は、桜花隊が沖縄周辺の艦船攻撃、建武隊は機動部隊攻撃に振り向けることになった。

三月二十六日に『天一号作戦』が発動されたその翌日、富高の桜花隊約三〇名が岡村司令と林分隊長のいる鹿屋へ移動させられた。

湯野川分隊長は、岩城副長を補佐して富高に残留し、後続隊員を鹿屋へ送り込む任務についた。

宇佐に集結していた陸攻隊二隊のうち、七〇八飛行隊所属の一中隊は八木田隊長に率いられて鹿屋に移動し、残りの二中隊は足立聨隊長に率いられて小松まで下がり、今後の作戦に応じて鹿屋へ送り込むために待機した。

もう一隊の七一一飛行隊は鹿屋へ移動して、野中少佐の後任二階堂少佐が岡村司令を補佐して小松の足立聨隊長と連絡を密にとる役目を受け持った。

これで神雷部隊は、富高に桜花隊と建武隊の主力、小松に陸攻隊の主力を配備して、鹿屋を桜花隊と建武隊の前線基地とする新態勢が整い、再編成を終了した。

そして、野中少佐の遺言は無視され、ますます激化する特攻戦の渦中に巻き込まれ、翻弄されることになる。

以下、その経過を辿ってゆく。

神雷部隊が再編制を終了した翌日、グラマンF6F戦闘機が南九州各基地に牽制攻撃をかけてきた。

沖縄戦まえに特攻基地潰しにかかってきたのである。

このころ、沖縄ではすでに米上陸部隊の輸送船団が南に隣接する慶良間諸島の沖合を埋め尽くしていた。

沖縄本島中西部の讀谷村にある北飛行場と嘉手納町にある中飛行場は、ともに熾烈な攻撃に晒されていた。

沖縄守備の陸軍第三二軍司令官牛島滿中将と参謀長長勇少将は、南西部の那覇市郊外にある首里城址を中心とした南部丘陵地帯を決戦場に考えていたので、北部も中部もまったくの手薄状態であった。

海軍部隊の司令官大田實少将は、両飛行場を死守できぬと考えて滑走路を破壊させたので、中飛行場に進出していた桜花一〇機も同時に爆破処理されてしまった。

宇垣長官は上陸部隊の輸送船団を水際で潰滅しようと図って神雷部隊に桜花隊出動の準備を命じた。

岡村司令は林分隊長に出撃搭乗員の選抜を命じた。

上司はただ人数だけを命ずればいいが、実施部隊を直接指揮する飛行隊長、分隊長は命じられた人数に合わせて死地に赴かせる一人一人を指名しなければならない。

いかに兵学校で筋金入りの戦闘指揮官に鍛え上げられているとはいえ、二三歳の青年には残酷であった。

林は、指揮官先頭の原則どおり、『出撃搭乗員名簿』の筆頭に自分の官氏名を書いて提出した。

受け取った岡村は、名簿を見るなり林に、

「君は最後だ。そのときは儂も征く」

そう告げて、それまでは出撃する隊員の搭乗割に専念するよう命じて、名簿から林の名を消してしまった。

軍令部がその最たるものであるが、搭乗員一人一人の顔を知らぬ組織の上層部は、将棋の駒や碁石を玩ぶようにただ勝つために動かせばそれでいいのだから悔いはないだろうが、現場の指揮官はそうはいかない。

隊員一人一人の生い立ちから性格、さらには家族構成や家庭内事情までも知悉しているのであるから、情が絡んでとても死地に赴かせるための選抜をさせるなど残酷であり、冷静に人数合わせなどできるものではない。

四月一日深夜、第二桜花隊に出撃命令が下った。

野中少佐指揮の神雷部隊七一飛行隊が第一神風桜花特別攻撃隊として出撃してから一一日目のことである。

この日出撃を命じられたのは、澤本良夫中尉を指揮官とする一式陸攻六機四二名と、桜花六機に搭乗する先任下士官山村恵助上飛曹以下六名の四八名であった。

岡村司令は別盃のまえに出撃する搭乗員たちに、

「たとえ攻撃の機会を得ずに帰投しても恥ではない」

ことを諄く念押しした。後悔している野中隊を全滅させてしまった轍を踏ませたくなかったのであろう。

〇一一三、第二桜花隊は沖縄周辺の米艦船団を攻撃すべく勇躍鹿屋基地を発進した。

ところが濃霧をついて出撃したため、大隅半島の山に激突したり、臺灣新竹へ退避したり、桜花投下装置故障と発動機不調を起こして宇佐経由で帰投したり、グラマンの追跡を受け桜花を投棄して海上に不時着したりして、戦果は未確認ながら、突入したと思われる未帰還機は二機だけという惨憺たる結果に終わってしまった。

この日沖縄本島では嘉手納海岸に対して米軍の集中艦砲射撃の火蓋が切られ、夥しい艦載機の攻撃がはじまった。

〇八三〇、米軍攻撃部隊の第一波が海岸に取り付き、一時間足らずのあいだに大軍が海岸を埋め尽くした。

つづいて、戦車部隊が上陸を開始してきて、昼ごろまでに北、中両飛行場は占領されてしまった。

翌二日、この日新編成した神雷部隊の爆戦隊第一建武隊の出撃が決まった。

矢野欣之中尉（濱松高工出身、予備学生一三期）、米田豊中尉（熊本高工、同一二期）、岡本耕安二飛曹（内飛一七期）、佐々木忠夫二飛曹（特乙飛一期）の四名が五〇番爆装の零戦五二型に搭乗しての四機初陣である。

一六一三、四機は鹿屋を発進して沖縄周辺の艦船群攻撃に向かった。

全機未帰還だったが、三機が突入を打電してきた。

翌三日、第二建武隊西伊和男中尉（東京一師、一三期）以下八名が一五〇〇鹿屋を発進して奄美大島南方の機動部隊攻撃に向かった。

このうち六機が未帰還だったが、いずれも突入を打電してきていた。

四月六日、菊水一号作戦が発動されると、豊田聯合艦隊司令長官が鹿屋に飛来してきて、陣頭に立った。

このころになると、グラマン戦闘機が断続的に鹿屋、國分などの基地を襲ってきて、特攻機の発進を妨害していたので、特攻機は空襲の合間を縫って素早く発進せざるを得なくなってきていた。

この日も第二建武隊が出撃した。

森忠司中尉（拓大、一三期）以下一七名が一一〇二に鹿屋を発進して喜界島一九〇度、七六浬の機動部隊攻撃に向かい、喜界島からも、指田良男一飛曹（乙飛一七期）が出撃したが、一八機全機が未帰還でうち四機から突入の打電があった。

この日、戦艦大和ほか水雷戦隊九隻の海上特攻艦隊が、沖縄に殴り込みをかけるべく徳山沖を出撃した。

第二艦隊旗艦戦艦大和（艦長有賀幸作大佐）に聯合艦隊司令部から出撃命令が下ったのは四月五日であった。

「第二艦隊は四月八日未明沖縄嘉手納沖の米艦船に突入せよ。これは燃料片道分搭載の特攻作戦である」

これを受けた司令長官伊藤整一中将はこの無謀な作戦に猛反対した。

だが、突然柱島（岩国市）泊地の大和を訪ねた聯合艦隊参謀長草鹿龍之介少将に、

「軍令部の起死回生策ゆえ、乱暴だが承知してほしい」

そう平身低頭して懇願され、やむなく承諾した。

伊藤長官は、艦長の有賀幸作大佐と相談して、直ちに一日付で赴任してきたばかりの少尉候補生五三人と乗艦したばかりの補充兵（補欠召集の兵）たちに退艦を命じ、瀬戸内に在泊中の他の艦艇に転乗させた。

そして、

「酒保開け」

を命じ、一二〇〇まで酒宴など飲食を無礼講にした。

そして、翌六日一五二〇、軽巡矢矧を先頭に駆逐艦八隻を率いた戦艦大和を旗艦とする海上特攻部隊は、瀬戸内海の徳山沖（山口県）を出撃して愛媛県西部と大分県南東部とのあいだの海域豊後水道に入り南下していった。

夜半すぎに九州南端の大隅半島を抜けて東シナ海に入ったころ駆逐艦朝霜が機関故障で艦隊から落伍した。

そして七日。この日は夜明けから曇天でときおり小雨が降り、積乱雲が多く対空警戒の難しい天候になった。

後方に米潜水艦が出没し、空に監視機が現れた。

乗組員が早飯をすませて戦闘配置についた一二三〇、二〇〇機ほどの編隊が大和と矢矧に襲いかかってきた。

二波三波、さらに四波五波と波状攻撃がつづいた。

浜風が魚雷を受けて沈没、直後に矢矧も爆撃を受けて航行不能に陥り、冬月、涼月も被弾した。

大和は左舷を集中攻撃され、魚雷が三本命中して船体が左に傾斜したので、水平を維持するために右舷の注水区画に三、〇〇〇トンの海水を注入して応急措置をとった。

だが、一三四四に再度左舷に魚雷二本が命中した。

一四〇〇頃米機は一旦姿を消したが、一〇分後に一〇〇機を超える編隊が襲ってきて左右両舷に三本の魚雷、爆弾も三発命中して大和は左舷に大きく傾きはじめた。

伊藤長官は見切りをつけると、艦橋に幹部を集めて、

「もはやこれまでである。潔く撤退して事後の作戦に万全を期せ。幕僚は冬月に移乗して残存艦を指揮し、生存者を救出して帰投せよ。諸君の奮闘に感謝する」

そう指示しておいて、一人一人に親しい敬礼をすると、踵を返して長官室に入っていったそうである。

「総員最上甲板に集合」

そう艦内アナウンスされた直後に、大和は転覆した。

暫らく船底を見せていたが、主砲の爆薬庫が大爆発を起こして不沈戦艦といわれた大和もついに爆沈した。

ときに一四二三、九州南西端坊ノ岬（南さつま市坊津町）二六〇度九〇浬付近だったという。

乗組員二、七六七名中二、四九八名戦死であった。

無傷だったのは駆逐艦初霜ただ一隻で、大和、矢矧、霞、浜風、朝霜の五隻は沈没、雪風、磯風、涼月、冬月の四隻は損傷、そのうち磯風は損傷ひどく航行不能だったので雪風が砲撃で沈没させた。

矢矧以下九隻の戦死者は一、一六七名であった。

その四時間ほどまえに、第四建武隊一二機が鹿屋を発進して喜界島南方の機動部隊攻撃に向かったが、日吉恒夫中尉（早大、一三期）機以下九機が未帰還だった。

九日から十一日まで南九州は雨つづきであったが、その合間を縫って十一日に第五建武隊一六機が一二一五鹿屋を発進して喜界島南方の機動部隊攻撃に向かったが、矢口重壽中尉（多賀高工、一三期）機以下一三機が未帰還だった。

十二日に雨が上がり、菊水二号作戦が発動された。

そして、一日以来久しぶりに第三桜花隊に出撃命令が発せられた。

桜花隊は今村道三中尉（東京三師、一三期）以下八機八名、攻撃隊は野上視男中尉（海兵七二期）以下八機五六名である。

一一三〇に鹿屋を発進して沖縄周辺の艦船攻撃に向かったが、結果は未帰還機五機、帰投二機、不時着一機でいずれも桜花は投下したが戦果は未確認であった。

このころになると、司令部も余裕機数がないことから特攻機を出撃させっ放しで戦果を確認していなかった。

命令ひとつで将来ある青少年の尊い生命を奪っておきながら、その最期を看取らぬとは無責任も甚しく、その非情な仕打ちに遺族の遣り切れない思いが察せられる。

桜花隊と建武隊の特攻出撃が頻繁で神雷部隊の消耗激しく、富高の桜花隊主力も隊員が少なくなったので、湯野川分隊長以下全員が鹿屋へ移動して合流した。

神ノ池を出発したときは一五三名だった隊員が、いまは半数以下の七〇名になってしまっていて、そのうち予備士官は二一名が五名にまで減ってしまっていた。

予備士官とは、民間の大学、専門学校の学生が学徒動員で軍隊に狩り出された予備学生のことで、兵学校出身の職業軍人と区別して士官の上に予備をつけた。隊内では雇い兵と陰口もたたかれていた。

桜花隊も建武隊も指揮官はこの一三期予備学生の中尉が多かったから、隊内では、

「一三期予備学生は、体当たり専門の学徒兵だ」

そう嘯かれていた。

一日おいて十四日は第四桜花隊と第六建武隊が同時刻に鹿屋を発進した。

桜花隊は眞柄嘉一上飛曹（甲飛九期）以下七名、攻撃隊は澤柳彦士大尉（海兵七一期）以下四八名が七機に分乗、建武隊は中根久喜中尉（日大、一三期）以下六機が一一三〇に発進して徳之島東方八五浬の機動部隊攻撃に向かったが、全機未帰還で戦果は確認できなかった。

この日、神ノ池の竜巻部隊から第二陣として四三名（予備士官一九名、下士官二四名）がダグラス輸送機二機に分乗して鹿屋に到着。直ちに神雷部隊に編入された。

十六日、菊水三号作戦が発動された。

この日、第五桜花隊と第七、八建武隊に出撃命令が出た。

まず、〇六五〇に第五桜花隊が発進した。

桜花隊は宮下良平中尉（秋田鑛専、一三期）以下六名、攻撃隊は澤井正夫中尉（海兵七二期）以下六機四二名。

指揮官澤井機は懸吊した宮下中尉搭乗の桜花が大型艦

に突入して轟沈させたので戦果を確認して帰投した。
鎌田飛曹長機は目標地点に到達して山際一飛曹を桜花に移乗させ、投下準備完了したが、投下爆管も手動索も作動せず、緊急避難して引き返したが途中不時着した。
他の四機は未帰還で、戦果は確認できなかった。
桜花隊につづいて建武隊が次々に鹿屋を発進した。
第七建武隊一二機が〇八〇〇前後に喜界島南東五五浬及び南五〇浬の機動部隊攻撃に向かったが九機未帰還。
つづいて第八建武隊一二機が正午に出撃したが、五機が還らなかった。
桜花隊の消耗が激しいので、この日も神ノ池の竜巻部隊から第三陣として多木中尉以下四名の予備士官と九名の下士官を補充してもらったが、この一三名は一、二陣と違って半数以上が桜花投下訓練未経験者だったので建武隊の爆戦要員になった。
再教育組の慣熟飛行指導は鹿屋の桜花隊に託された。
桜花隊は差し当たりの必要要員だけを鹿屋に残して富高へ下がることになり、責任者の岩淵副長を湯野川、新庄両分隊長が補佐することになった。
桜花隊第一陣一五八名は三七名に減り、予備学生は細川八郎と大橋進の二名だけになってしまっていた。
細川は桜花隊第二分隊員だったが、分隊長三橋謙太郎大尉以下一五名が野中隊に懸吊されて出撃し全員戦死してしまったので以後は湯野川大尉の指揮下にあった。
大橋は初めから湯野川の部下であったが、湯野川は大橋のほうを鹿屋に残留させた。
二十六日、富高では鹿屋からの桜花隊主力が一〇航艦からの移籍組と鹿屋への進出命令を待っていた。
竜巻部隊から緊急補充の第四陣二六名(予備学生六名、下士官二〇名)が神ノ池から送り込まれてきたが、桜花降下訓練経験者は第三陣より更に尠く爆戦要員であった。
二十八日、数日来の雨が上がり、菊水四号作戦が発動されて、一六二五第六桜花隊四機が沖縄周辺艦船攻撃に出撃したが、命中一機であとは未確認であった。
二十九日、第九建武隊西口徳次中尉(関大、一三期)以下一〇機が沖縄北端の艦船攻撃に出撃したが、戦果未確認であった
五月四日、菊水五号作戦が発動された。この日、第七桜花隊大橋進中尉(山口師範、一三期)以下七機が早朝沖縄泊地の艦船攻撃に出撃したが、目標地点に到着するも未発見で一機引返したほかは、いずれも桜花投下後に被弾して未帰還となった。
十一日、菊水六号作戦が発動された。
早朝高野次郎中尉(金澤高工、一三期)以下四機の第

八桜花隊が沖縄周辺艦船攻撃に出撃したが、一機が発動機故障で引返して着陸時に母機が大破したほかは、一機が桜花発進打電後自爆を遂げ、あとの二機は連絡なきまま未帰還であった。
この日、柴田敬禧中尉(明大、一三期)以下四機の第一〇建武隊も早朝沖縄周辺の索敵攻撃に向かったが、いずれも未帰還になってしまった。
十四日、楠本三夫中尉(久留米高工、一三期)以下五機の第一一建武隊が早朝種子島東方の機動部隊攻撃に向かったが、これも全機未帰還になってしまった。
そして二十四日、菊水七号作戦が発動された。
翌二十五日、秋吉武昭上飛曹(乙飛一二期)以下一二機の第九桜花隊が早朝沖縄周辺の艦船攻撃に出撃したが、天候急変で九機が引返し、あとの三機も視界不良のなかを「索敵続行中」の打電後連絡が途絶えてしまった。
二十七日、菊水八号作戦が発動された。
翌二十八日、海軍省は神雷部隊の存在を公表した。
「昭和二十年三月下旬以降累次に亙り本土南方並びに沖縄周辺海面に出撃その壮烈なる戦意と一発轟沈の恐るべき威力とを以て敵陣営を震撼せしめたる神雷特別攻撃隊員の殊勲を認め聯合艦隊司令長官は之を全軍に布告せり」
そのあとに、第四までの桜花隊戦死者と、第六までの建武隊戦死者合わせて三二名の姓名が列挙された。
そして、三十日以後の新聞に第一桜花隊の出陣情況や野中少佐の風貌が紹介された。
このとき、桜花発想者の大田正一特務中尉も、
「逞しい体力と意志の力を傾けて、新しい兵器の設計図を描きあげた歴戦の搭乗員」
と紹介された。
このころ南九州は梅雨期に入り、菊水九号作戦は順延を重ねた。
毎日のように午前中の攻撃待機命令が午後になると取り消されたので。士気はあがらず作戦は精彩を欠いた。
このころのことを思い出すと、毎日じめじめと振りつづく鬱陶しい日がつづいて気が滅入っているところへ、夕刻点灯にはまだすこし早い中途半端な薄暗がりの宿舎入口に小さな黒板に白墨書きの搭乗割が掲示される。
特攻参した分隊士に自分の名を呼ばれたときには、
(いよいよ来たか)
そう思って一瞬足が竦む。
(あと十時間余りの生命だ)
その夜は薄い毛布を被って輾転反側する。
夜が白々と明ける頃になってようやく諦めの境地に至り、覚悟を固めると気持がやや落着いてくる。
冥土行の死に装束の真新しい飛行服に着替えている

と、出撃中止の伝令がとび込んでくる。
そんな毎日が繰り返される。
「征くのか、征かないのか」
搭乗員たちの心境は穏やかではない。
蛇の生殺し状態におかれるとはこういうことをいうのかと苛立つ。
昨日も雨、今日も雨でその繰り返しだったのだから堪ったものではない。

六月七日、ようやく菊水九号作戦が発動された。
この頃、沖縄本島の陸軍第三二軍はすでに首里城址から後退して南端の喜屋武半島に追い詰められていた。
とり残されて孤立した小祿地区（那覇市）の海軍沖縄方面根拠地隊司令官大田實少将は、六月六日夜沖縄県民の献身的協力を詳しく打電した最後を、
「沖縄県民斯ク戦ヘリ。県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と結んだ。
そして、十一日夜最後の斬り込みをかけて連絡を絶った。
根拠地隊三、四〇〇名、その他諸隊を合わせると八、八二五名が玉砕した。

二十一日、菊水一〇号作戦が発動された。
二十二日、藤崎俊英中尉（明大、一三期）以下六機の第一〇桜花隊が〇五二〇沖縄周辺の艦船攻撃に出撃した。
これが神雷部隊桜花隊最後の出撃になった。
そのうちの二機が発動機故障と天候不良で引返したが、四機は桜花を抱いたまま還らなかった。
このとき、川口光男中尉（東京物理、一三期）以下七機の第一神雷爆戦隊も出撃したが全機還らなかった。
七名は全員一三期、一四期の予備学生であった。
二十三日未明、沖縄では第三二軍司令官牛島満中将、参謀長長勇少将が摩文仁の丘で自刃して果てた。
六日末から七月初旬にかけて、鹿屋の神雷部隊は各飛行隊の移動をはじめた。
八木田飛行隊長以下の陸攻隊が小松へ引き揚げ、桜花隊は富高へ移り湯野川分隊長以下の主力と合流した。
爆戦隊のほうは栢木一男分隊長以下一部が残留し、中島大八隊長以下主力は岡村司令を伴い松山へ移動した。
いっぽう富高のほうは、林分隊長と大久保上飛曹が桜花二三型の試験飛行要員として七月二日に神ノ池の竜巻部隊に転属した。
その他は細川分隊士以下戦闘隊一七名ほか三名が先発隊として七月五日零戦二〇機を観音寺（香川県）へ空輸したあと陸路で小松へ合流した。
湯野川分隊長以下の主力も富高から小松へ合流した。
これで神雷部隊は松山（愛媛県）と小松（石川県）富高（宮崎県）そして鹿屋（鹿児島県）に分散した。

七月二十七日、〇六〇〇ごろサンフランシスコ放送がポツダム宣言（米英中三国の対日共同宣言）を報じたが、鈴木内閣はこれを黙殺して戦争継続を表明した。
このころ五航艦では七月末に司令部を大分市へ移すことを決定していたので鹿屋市幹部との別宴を用意したが、市長、助役など全員が出席しなかった。
市の幹部らは、
「基地の設営に全面協力してきたのに、米軍の上陸が迫ってくると市民を残したまま敵前逃亡するのか」
と恨みつらみの罵声を浴びせかけていたという。
八月二日、宇垣長官らの一行は自動車を連ねて鹿児島湾の東岸を北上して日豊本線隼人駅から夜行列車に乗り、翌朝大分駅に着いた。
このころになるとB29の都市爆撃が激しくなり、小都市と雖も容赦なく七月十九日に福井市、八月二日には富山市が爆撃を受けて焦土と化した。
そして八月六日、廣島市に原子爆弾を投下したのだ。
九日にはソ連（ロシア）軍が不可侵条約を破り、満洲との国境を越えて侵入してきた。
その日、長崎市にも原子爆弾が投下された。
まさに気息奄々の状態になった。
十三日、喜界島（鹿児島県大島郡喜界町）に待機していた第二神雷爆戦隊五機が一八〇〇沖縄周辺の艦船攻撃に出撃した。
第一小隊三機は、離陸後間もなく岡本鼎中尉（一三期）の一番機が発動機下部にオイル漏れが生じ、松井信夫一飛曹の三番機は左脚引込故障を起こしてしまったので、細澤實一飛曹の二番機ともども抱いた五十番を洋上へ捨てて帰投した。三番機は無事胴体着陸した。
第二小隊の岡島四郎中尉（日大専、一三期）と星野實一飛曹（甲飛一二期）の二機は沖縄周辺海域に到達できたようで、一八五〇突入打電後消息を絶った。
これが、神雷部隊爆戦隊最後の特攻になった。
十五日、この日は混乱の終日であった。
鹿屋では指揮官の栢木一男大尉（予備）が出撃準備をすすめていたが、通信状態が悪く岡村司令の松山とも岩城副長の富高とも連絡がつかず、待機のまま焦立っていた。
小松では雑音で玉音放送がほとんど聴きとれず、湯野川分隊長が民家に走り「一億総決起」とばかり思い込んでいた玉音放送が「戦争終結」ときいて愕然とした。
湯野川は基地に帰り足立飛行長に〝決起〟を促した。
足立も玉音放送が「戦争終結詔書」とは思わず「対ソ宣戦布告」を予想していたという。
湯野川はその場で足立に進言して、岡村司令宛に、
「皇國護持ノ道ハ戦争完遂以外ニナシト確信シ、現訓練ヲ続行ス」

と打電した。

その夜「宇垣特攻出撃」の連絡が入ったので、湯野川らはますます刺激されて徹底抗戦の危機を孕んでいった。

これまで海軍特攻を推進してその主力になってきた岡村にとっても天皇のご聖断はあまりにも情けなかった。特攻機を出撃させるたびに、

「儂もあとから征く」

そう言って出撃して征く隊員たちに誓ってきていた。岡村も死場所を得られなくなり悶々と悩んでいた。

喜界島に残された三人は、唯一頼りのラジオで日本の降伏を知り悲憤と絶望の一夜を明かしたあとで岡本中尉は、細澤と松井の両一飛曹に独断で本隊帰投を命じた。

零戦は二機しかないので無理矢理二人を押し込んだが、尾久島上空まできたとき松井の乗った岡本機が発動機から火を吹いて墜落してしまった。

小松の湯野川は「終戦は休戦」と解釈して米軍が上陸すれば拿捕、抵抗すれば射殺または戦闘開始の方針で隊内を統一した。

十九日、各航空隊の司令、副長、飛行長と飛行隊の隊長が大分の五航艦司令部へ詰めかけた。

神雷部隊の関係者は、

小松から足立飛行長、湯野川分隊長。

松山から岡村司令、中島三〇六飛行隊長。

富高から岩城副長。

鹿屋から栢木三〇六飛行隊分隊長。

が集合した。

終戦の経緯を確かめに上京していた五航艦横井参謀長が帰ってきて終戦事情を説明した。

宇垣長官の後任に補されて十六日に着任したばかりの草鹿龍之介中将がつづけて、

「私の目の黒いうちは私の考え通りにやる。不都合だと思う者は私を血祭りにしてから事を挙げろ。今更じたばたはせん。即座にやれ。どのような事態がこようと軽挙盲動はいかんよ。歯を食い縛って頑張るんだ。これから辛い時代がはじまる。しかし、君たち若い者にすべてがかかっている。頼むよ」

そう言われて若い士官たちは声をあげて泣いた。

草鹿は従兵に乾杯の用意を命じ、杯を手にすると東の方角に向かって直立した。

湯野川は杯の酒を一気に飲み干した。酒の味はまったくなく、ただ涙だけが頬を伝って口を濡らした。

海軍総隊小澤司令長官は麾下全将兵に長文の訓示を発したなかで終戦が天皇のご聖断であることを強調した。

二十一日、マニラの連合軍司令部から、

「米軍先遣部隊、二十六日厚木基地進出」

を伝えてきた。

米内海軍大臣は、指揮下の全将兵を、

「速やかに復員させるよう」

指示した。

徹底抗戦を主張して一歩も退かなかった先鋭の急進的な三航艦七一航戦三〇二空司令小園安名大佐は十八日夜からマラリアの症状が出て錯乱状態になり、野比の海軍病院に収容されていたので厚木基地の熱気は冷めていた。

米軍に厚木につづく先鋭集団は神雷部隊と見做されていたので、草鹿司令長官は岡村司令に緊急電で、

「直ちに関係書類をすべて焼却して解隊」

するよう命じた。

そのため分散の神雷部隊は再び一堂に会する機会を与えられず、各基地でそれぞれ解隊準備にとりかかった。

二十二日、小松では足立飛行長が夕刻飛行場に全隊員を集め、神雷部隊陸攻隊、桜花隊の解隊を告げた。

搭乗員は出身地別に分類され、一式陸攻に分乗して帰郷し、最後の者は乗り捨てるよう指示された。

残った飛行機は、海軍省通達どおりプロペラを外して戦闘行為を放棄した。

拳銃も回収されて木場潟や柴山潟に投げ込まれた。

そしてその夜の解散会で三年後の三月二十一日一〇〇〇に靖國神社社頭での再会を約し、細川先任分隊士が和綴じの帳面に全員の署名をとり、『桜花録』と上書きした。

二十三日早朝一式陸攻が一機ずつ飛び立っていった。

足立は湯野川らと指揮所に立って、最後の一機が見えなくなるまで直立不動の姿勢で凝っと見詰めつづけた。

松山では岡村司令が大分から帰ると、全隊員に、

「大命に従う。各自自重せよ」

そう告げておいて命令書きなどの重要書類を焼却した。

ここに帝国海軍は明治維新以来八〇年の蓄積を僅か三年八箇月の太平洋戦争ですべて使い果たして消滅した。

昭和二十三年（一九四八）三月二十一日、野中隊の詳月命日に有志約三〇名が約束通り靖國神社で再会した。

それから四年後に四本の桜が戦友会から靖國神社に献木されて拝殿右の能樂堂横に植えられ、そのうちの一本が花を咲かせると気象庁は標本木として東京に開花宣言を出した。

この稿を書き終えたあとも、二人の若い士官のことが気になって仕方がなかった。

桜花隊第三分隊長湯野川守正大尉と、第四分隊長林冨士夫大尉のことである。

二人とも大正十二年（一九二三）生まれで海軍兵学校七一期生であったから、終戦時は数え年二三歳である。

湯野川は、三月十八日宇佐から足立隊の母機に懸吊されて出撃する桜花隊一五名を選抜して指揮所にいた。

出撃隊員は、指揮所前に整列して司令の訣別と激励の訓辞のあと粗末な別盃卓を囲んで水盃を交わし、隊長の、

「かかれツ」

の号令で搭乗機目掛けて早駆けするのが儀式（セレモニー）であった。

湯野川たち出撃隊員が別盃卓に集合しはじめたそのとき、グラマンに急襲されて全機が炎上してしまった。

そのため、二十一日に鹿屋から野中隊の母機に懸吊された桜花隊第二分隊長三橋謙太郎大尉以下一五名が身代わりになって全員戦死してしまったのである。

その後も出撃の機会がなく、湯野川は棺桶に片足を突っ込んだ中途半端のままで終戦を迎えてしまった。

「生き残れたのだからいいじゃないか」

そう言われる向きもあろうが、そんなものではない。

「俺もあとから征く」

そう言いつづけてきて生き残ってしまい、部下を裏切ってしまった。その思いは地獄の責め苦であろう。

極限状態まで行きながら生き残ってしまっている思いを一生引き摺ってゆくことになるのだ。

林にしてもそうである。

『出撃隊員名簿』の筆頭に自分の名を書きながら、

「おまえはあとだ。儂と一緒に征く」

そう岡村司令に言われて名簿から削除され、もっぱら出撃隊員の搭乗割をつくりつづけてきた。

航空隊の組織を民間会社に置き換えてみると、

司　令（社　長）
副　長（専　務）
飛行長（常　務）
飛行隊長（部　長）
分隊長（課　長）
分隊士（係　長）

といったところだろうか。

司令、副長、飛行長は航空隊の三役という。直接指揮をとるのは飛行隊長、分隊長、分隊士である。

三役は配下の隊員をすべて知っているわけではないが、隊長、分隊長、分隊士は目を瞑っていてもその息遣いを聴くだけでそれが誰であるか判断できるほど近しい。

その分隊長が特攻出撃の搭乗割をつくるのである。

「俺もあとから征く」

林はそういいつづけて隊員たちの出撃を見送ってきた。

その覚悟をずっと言いつづけてきて、最後に死に場所がなくなってしまったのである。

その虚脱感たるやなにに譬（たと）えたらいいだろうか。

部下を次々あの世へ送っておいてひとり生き残った。

その造り場のない憤りをどこへぶつけたらいいのか。

価値観がまったく違ってしまった新しい世に捨てられた両青年が、はたして妥協を許さない強靭な意志を持ったまま生きてゆくことができたであろうか。

二人の戦後の人生について、気掛かりは尽きない。（了）

主な参考文献

実録太平洋戦争(5)　中央公論社
神風特別攻撃隊の記録　猪口力平　中島　正　雪華社
特別攻撃隊の記録（海軍篇）　光人社
特攻―外道の統率と人間の条件―　森本忠夫　光人社NF文庫
極限の特攻機桜花　内藤初穂　中公文庫
その他

日本四大都市マラソンを走る（名古屋・京都編）

安藤　剛

【名古屋シティマラソン二〇一二を走る】

【ゆかりの地：名古屋】

東日本大震災から丁度一年の二〇一二年三月一一日、名古屋市で開かれる「名古屋シティハーフマラソン」にエントリーした。東京二〇〇九、大阪二〇一一に続く日本大都市型市民マラソンへの挑戦である。

名古屋はまもなく一周忌になる父の故里、昨秋に従兄弟会に招かれ、父の生まれ育った愛知県小原村を訪ねてへぼ飯を賞味、紅葉の中に咲く四季桜を観光してきたが、今回の名古屋マラソンを機に中学時代に出場した全日本吹奏楽コンクールの鶴舞公会堂と当時再建中だった名古屋城天守閣をぜひ訪ねてみたい。そして友人が主宰するチャリティーコンサートにも顔を出したいと思っている。

【尾張名古屋は城でもつ】

学生時代にコンパでよく歌った大学数え唄、終わりとせの名古屋城は、駿河守護今川義元の父氏親が、尾張進出の拠点として築城した那古野城に始まるといわれる。

尾張の戦国大名織田信秀が、城主今川氏豊を追放して居城とし、嫡男信長がこの那古野城で生まれ、二才にして那古野城主となり、自由奔放な青春を送る。やがて清洲、小牧そして岐阜に居城を移した信長は、天下布武の朱印の下に天下統一を進め、那古野城は廃城となった。

関が原合戦で勝利した徳川家康が、大阪城の豊臣秀頼との武力衝突に備えて、尾張国を東海道の一大防衛線の拠点とすべく、西国大名に名古屋城の普請を命じ、築城技術に秀でた加藤清正が天守台を受け持ち、石垣を二〇Mもの高さに美しく積み上げ、金の鯱を頂く巨大天守が築かれた。翌年に家康が秀頼を二条城へ呼びつけた折、清正は秀頼の護衛役を買って出たという。秀吉に可愛がられた清正の、徳川と豊臣の対立の狭間で名古屋城築城に携わらざるを得なかった複雑な心情が忍ばれる。

名古屋城に並び立つ天下の名城、大阪城と江戸城は、共に薄命な運命を辿った。秀吉の大阪城は大阪夏の陣で落城焼失、一一年後に再建された徳川大阪城も一六六五年に落雷で焼失、以来昭和六年に再建されるまで天守閣のない時代が続いた。家康の江戸城も、秀忠と家光がそれぞれ天守閣を建て替えたが、一六五七年の明暦の大火で焼失して以来、ついに再建されることはなかった。

一方の名古屋城は、徳川御三家筆頭の尾張藩主居城として、一六一二年の築城以来、昭和二〇年の空襲で焼失するまで三三〇余年、その雄姿を天下に誇ってきた。

しかし名古屋城の尾張藩は、決して順風満帆ではなかった。徳川御三家の筆頭ながら徳川七代将軍の後嗣争いで紀州藩吉宗に敗れて以降、八代吉宗から一四代家茂まで紀州家から、最後の将軍一五代慶喜が水戸家から出て、尾張家からはついに一人の将軍も出すことはなかった。

その尾張藩は、戊辰戦争で藩祖義直の尊皇遺訓を守りなんと朝廷側の薩長軍に組みした。家康が西国大名を抑える役目を担わせた尾張藩が、まさか二六〇年後に西国の討幕軍側につくとはなんと皮肉なことだろう。勤皇討幕を決断した尾張藩主徳川慶勝は、母が水戸斉昭の妹だから将軍徳川慶喜とは従兄弟同士、異母兄弟で最後まで佐幕派を貫いた会津藩主松平容保と桑名藩主松平定敬と袂を分かち対決、家訓とはいえ苦渋の選択だったろう。

中学時代に訪ねた名古屋城は、空襲で焼失した天守閣が再建工事中で巨大な覆いに囲まれていた。今回の名古屋マラソン参加を機に、歴史の荒波に翻弄される尾張藩を見守ってきた名古屋城をじっくり訪ねてきたい。

【鶴舞公会堂を訪ねて（三月一〇日（土））】

叩き付けるような雨音に目が覚めた。今日三月一〇日は死者一〇万人以上といわれる東京大空襲の日である。そして明日は東日本大震災から丁度一年目、上野駅ホームに降り立つと、冷たい雨の中に小雪が舞い、一年前の被災地の惨状が昨日のことのように浮かんできた。

名古屋駅に着いたのは一〇時半、雨はすっかり上がり青空が覗いてきた。中学三年の時に出場した全日本吹奏楽コンクール会場の「鶴舞公会堂」に直行した。中央本線に乗り換えて鶴舞駅に下車、緑広がる公園の奥に、日比谷公会堂によく似た黄土色タイル外装の鶴舞公会堂（現名古屋市公会堂）が見えてきた。

公園中央に建つ和洋折衷の噴水塔に腰掛け、五四年前の微かな記憶を辿ってみた。宮城県の人口一万の田舎町の中学校が東北代表となり、東北本線の線路沿いを埋め尽くした町民と生徒の小旗の波に身送られ、夜行列車で

名古屋までやって来たあの日のことが甦ってきた。

鶴舞公会堂の入口にイベントの開場を待つ列が出来ていた。会場設営中のスタッフに紛れ込んで館内に入ると、照度を落とした荘厳な雰囲気のホールが目の前に広がってきた。係員に断わりもせずステージに上がり、五四年前にピッコロを吹いた位置に立った。

三階席まである二〇〇〇席の観客席が覆い被さるように迫っていた。あの時こんな立派な舞台で演奏していたのか。東北の田舎中学の子供たちを全国の舞台に連れてきた恩師の感慨は如何ばかりだったろう。ステージ中央で指揮棒を振る赤ら顔の恩師の姿が浮かんできた。

「遠藤善高先生！　先生の晴れの舞台に来ましたよ！　今そこに立ってるんですよ！　先生、ありがとう！」

目を閉じると、ここで演奏した序曲『インドの女王』のメロディが流れてきた。静かなクラリネットの序奏に始まり、フルートとピッコロが加わり、そして金管が加わり、美しいメロディを終曲までハミングしていた。

父の一周忌で帰省する折、恩師の仏前に鶴舞公会堂の写真をお供えしようと、カメラのシャッターを切った。

【名古屋城を訪ねて（三月一〇日（土））】

鶴舞公会堂を後に市営地下鉄で名古屋城に向かった。浅間町駅で下車、二の丸庭園を抜けると、本丸御殿跡の奥に、緑青の瓦屋根の頂に金の鯱が輝く五層の天守閣が現れた。半年前に訪ねた大阪城の正三角形の優美な姿とはまた違った、どっしりした巨大な天守閣である。

天守閣の一・二階は本丸御殿を飾っていた狩野派画師による虎豹・花鳥山水などの豪華絢爛な障壁画が展示され、さながら近代美術館である。本丸御殿と壁貼付絵は空襲で天守閣と共に焼失したが、これら襖絵等は疎開して無事だったという。本丸御殿は将軍上洛時の宿舎として建てられたが、三代家光以降一四代家茂の上洛まで二三〇年間使われることなく、その間も尾張藩主は二の丸御殿を使用していたという。尾張藩の悲話であろうか。

展示案内の中に金鯱に関わる逸話があった。藩財政の困窮を救うため江戸時代に三度も改鋳があり、文政一〇年には金の純度が大幅に落ちて光沢が鈍ったのを隠すため防鳥用の金網の目を細かくしたという。明治維新後に財政逼迫から身売りされ、ウイーン万博に出品されたが、名古屋市民の要望で天守閣屋上に戻ってきたものの、金のウロコが明治時代に三回も盗難被害に合ったという。

天守閣の最上層から三六〇度眺望すると、東方遥か彼方にナゴヤドームが見えていた。明日はあそこからここまで走るのか、これは大変だな、観光気分で歩き回り明日のマラソンをすっかり忘れている自分に苦笑した。

名古屋テレビ塔から久屋大通公園を散策、亡父が戦前勤務していた松坂屋本店に立ち寄り、古い大理石の柱にもたれかかり、しばし父の青春時代に思いを馳せた。

【名古屋シティマラソン（三月一一日（日））】

東日本大震災からちょうど一年、早朝からどのテレビ局も被災地で逞しく生きようと頑張る人達の姿を放映していたが、先が見えず頑張るにも頑張れない人達がまだ沢山いるのにと、違和感を抱くのは私だけだろうか。

春日井の駅前ホテルをチェックアウト、雲ひとつない青空が広がり、風はまだ冷たいが陽射しが暖かく、マラソン日和である。三駅目の大曽根駅に下車、会場のナゴヤドームまで長蛇の列が続いていた。

ナゴヤドームの広い駐車場に『名古屋ウィメンズマラソン（フル・女子）』一万五千人と『名古屋シティマラソン（ハーフ、男女）』一万五千人の総勢三万人が集まり、フルとハーフの合計二万を超える女子ランナーの若さと熱気とカラフルな華やかさに溢れていた。

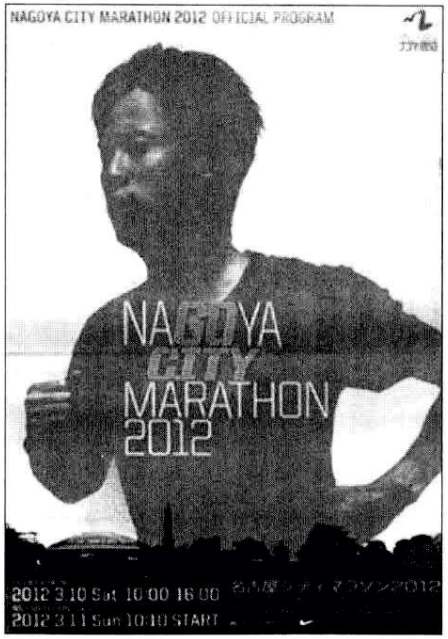
名古屋ウィメンズは、世界最大の女子マラソンとしてギネス認定されており、完走者にはティファニーペンダントが贈呈される女子ランナー憧れの大会である。

名古屋で開催されるフルマラソンは、このウィメンズだけで、男子の参加できるフルマラソンは名古屋にはなく、フルが走りたかったが、致しかたない。ウィメンズと同時開催のシティハーフを二時間切りで頑張ろう。

今日のウエアは、昨年の大阪マラソンと同じ濃緑の地に白字で《がんばろう●日本！》とプリントされた東日本大震災復興支援チャリティーTシャツである。早々に着替えを済ませ、手荷物をゴールまで搬送するトラックに預け、駐車場を少し走ってみると身体が軽く爽快だ。

父の故里小原村の四季桜をご縁に知り合った豊田市のMさんが、名古屋ウィメンズを走られると聞いていたが、この三万人の中から見付け出すのはとても無理だなと諦めかけていると、Mさんの方が先に私を見つけて走り寄ってきた。笑顔で「すぐ分かりましたよ」と言ってくれたが、濃緑地のウエアが目立ったという。

初対面なのに旧知の友に思えるのは、名古屋が取り持つ縁であろうか。握手を交わして互いの健闘を誓い合うと、彼女は同年代とは思えない軽快な足取りで、フルマ



ラソン組・万五千人の中に消えていった。

寒さを凌ぐウエアを早々に預けてしまい、スタートまでTシャツ一枚で一時間四〇分も待たされてしまった。体が冷えるとトイレが近くなる。三万人が利用するには仮設トイレの数があまりに少なく、大変な行列になっていた。一時間早くスタートするフルマラソン組の女子ランナーたちも同じ列に並んでおり、係員がトイレの回転率を上げようと声を張り上げ献身的に走り回っていた。

まもなく開会式が特設モニターに映し出され、東日本大震災の被災地への黙祷が捧げられた。式典が終わると一時間遅れでスタートする我々ハーフ組は、先発のフルマラソン組を見送るコース沿いに移動した。

コース脇で拍手を送っていると、スタート地点に移動する大勢の女性ランナーの中にMさんを見つけた。声をかけると「カメラ持って来たんだけど・・後でまた・・」「えっ」この大混雑では撮ってあげられないし、後でまたと言われても、フルとハーフではゴール地点が違う、このあと会えるはずがない。狐につままれた思いだったが、後でまたの意味が、本当に後になって分かった。

それにしても赤・黄・青・白などカラフルなウエアの女子ランナー一万五千人が、一〇分もかけてスタート地点に移動する光景は、華やかであり壮観だ。隣の男性が「名古屋中の女性が集まったんじゃないの」と言って周りを笑わせていた。

フルマラソン組がスタート、一時間遅れで我々ハーフマラソン組の男女一万五千人がスタートした。スタート地点の通過まで六分もかかったが、スターター台から身を乗り出す河村名古屋市長に手を振るランナー達のはしゃぎ様は、さすが河村人気である。

スタート直後はだらだら渋滞だったが、道幅広い環状線に出ると周りが一斉に走り出した。若いランナーが多いせいか、ペースがどんどん速くなり、煽られ気味である。三キロ地点で一六分四六秒は、ちょっと速すぎる。

分離帯を挟んだ反対車線を、一時間前に先発したフルマラソン組が逆送していた。Mさんを見つけられるかもしれない。すれ違う地点を頭の中でタイム計算していると、なんと四・五キロ付近で、Mさんがカメラを構えて走って来るではないか。普通に出来る格好ではない。

お互いに減速して分離帯越しにハイタッチ、カメラを向けるMさんに「頑張ろう」と叫んだが、これが、後でまた、の意味だった。三万人もの中でよくも見つけられたものだ。それにしても私の計算より速く走ってきた。同世代の彼女には負けられないな。ガンバレ。

五キロ地点で二七分四〇秒。今日の名古屋ウィメンズはロンドンオリンピック選考の最終レースである。一時間前にこのロードで繰り広げられた白熱した戦いの余韻が、我々に熱い声援となって寄せられていた。

環状線をひたすら南下すること八キロ、新瑞穂を右折

して二キロ、堀田で折り返した一〇キロ地点で五五分二二秒、ハーフ二時間のペース、順調な走りだ。

折り返すと後続の様子がよく見える。仲間を見付けては互いに「頑張れよ！」と声を掛け合う姿は、いつものことながら素晴らしい光景である。

新瑞穂を左折、環状線に戻ってきたが、僅かながら上りになっており、暖かかった陽射しが暑くなってきたこともあって、ペースがキロ五分五〇秒に落ちてきた。

環状線をひたすら北上すること五キロ、今池交差点を左折、いよいよ名古屋駅に向かうメインストリート桜通りである。反対車線はフルマラソンの三九キロ付近、女子アスリートたちが最後の熾烈なデッドヒートを繰り広げて、沿道の声援が盛り上がっていた。

一八キロの給水所で水分を補給、黄色い声援とハイタッチの列に応えながら、キロ五分四〇秒に回復してきた。やがて一時間前に先発した女子フルマラソン組の最後尾に追いついた。疲労困憊して歩き始めるランナーも多くこの先まだ二〇キロ以上あるのに、彼女たちは本当に大丈夫なのだろうかと心配になってしまう。

昨日散策した久屋大通公園を横切ると、左手に名古屋テレビ塔が見えて、ケヤキ並木を縫う爽風が心地よい。暑くなってきた直射日光を避け、ビルの日陰を求め、歩き始めたフルマラソンの女子ランナーの間をラグビーのステップを踏むように走り抜け、あと二キロの標識で一時間四七分五一秒、なんとか二時間は切れそうだ。

桜通りから伏見通りに左折、前方に白川公園のフィニッシュゲートが見えてきた。ひと際盛り上がる沿道の大歓声に包まれながらゴールを駆け抜けた。

タイムは一時間五九分ジャスト、順位は男子七八五二人中四四一六位。亡き父の故里名古屋を走れたうえ、ブログ友Mさんに三度も会え、ハーフも二時間切り、素晴らしい思い出マラソンになったことに感謝したい。

白川公園の木蔭で着替えを済ませ、名鉄小牧線で友人のテノール歌手ケン・カタヤマ氏が主宰する「一〇〇〇人の祈りコンサート」に向かった。会場の小牧市民会館には「つながろう日本～小牧から東日本へ～」の横断幕が掲げられ、小牧市長が開会挨拶の中で、小牧市が東日本大震災の支援ボランティアを一般公募して派遣してきたと報告されていた。東北から遥か遠く離れた愛知県の地方都市でも、職員だけでなくボランティアを公募派遣していたとは、東北出身者として胸が熱くなった。

今日は東日本大震災から丸一年、ケン・カタヤマ氏の作詞作曲した「祈り」を歌うため一般公募された一〇〇人の小牧市民合唱団と少年少女合唱団がステージに上がり、東京でCDレコーディングに参加した私は観客席から、共に被災地への応援歌「祈り」を熱唱した。そして小牧市から郷里の一日も早い復旧・復興を祈った。

【京都マラソン二〇一三を走る】

【京都への憧憬】

マラソンを始めて丸六年、東日本から西日本へ本州全県マラソン走破を目指し、併せて大都市型マラソンにも挑戦、東京二〇〇九、大阪二〇一一、名古屋二〇一二に続き、今年は京都フルマラソン二〇一三である。

テレビに京都の美しい風景と「そうだ京都行こう」のJR東海のキャンペーンがよく流れてくる。日本の都として約一千年の歴史をもつ京都へ憧憬を抱きながら、京都の初訪問は、還暦後の家族同伴紅葉ツアー、二度目が一昨年の大阪マラソンの帰途に洛西の「きぬかけの路」をサイクリング、今回がようやく三度目である。

今年（二〇一三年）一月にNHKドラマ「火怨・北の英雄アテルイ伝」が放映された。蝦夷を平定せんと攻め上がる朝廷軍に立ち向かう古代東北の英雄阿弖流為の生涯を描いたドラマだが、主人公演じる大沢たかおと征夷大将軍ながら差別される蝦夷に理解を示す坂上田村麻呂演じる高嶋政宏との対決と友情に感動、壮大な平安京を建設して蝦夷を討伐し律令制度に組み入れ新しい国家造りを目指す近藤正臣扮する桓武天皇が、投降してきた阿弖流為を斬首させた居丈高な演技に圧倒された。桓武の平安京遷都の視点から京都を訪ねるのも楽しみである。

【京都サイクリング観光（三月九日（上））】

大会前日早朝に埼玉自宅を出立、京都駅に一〇時半着、一昨年の大阪マラソンの帰途に京都に泊まり洛西をサイクリングしたので、今回は残る洛南・洛中・洛東を散策する欲張りな行程を計画した。京都駅西口のレンタサイクル店からまず南西に一キロの「東寺」に向かった。

東寺は平安京造営時に南東の角に創建された国家鎮護の官寺である。外塀越しに聳える五重塔は高さ五五M、国内で最も高い木造塔といわれ、その圧倒的な存在感は創建当時の重厚さを今に伝えている。南大門から境内に入ると大屋根の国宝金堂が頭上に威圧的に迫ってきた。

平安京に遷都した桓武天皇は、壬申の乱で大海人皇子（後の天武天皇）に皇位を奪われた天智天皇の曾孫である。近江大津京に遷都した天智天皇の皇統を倒して都を平城京に戻した天武天皇の皇統を根絶やしにして皇位を奪還した桓武天皇は、南都仏教勢力と天武系勢力蔓延る平城京から平安京に再び遷都、曽祖父天智天皇が果たせなかった新しい国造りにかける意気込みが伝わって来る。

九条通りを更に西へ五〇〇M程走ると「羅城門」跡の石碑があった。唐の長安を模倣した平安京の中央を南北に走る幅七五Mの朱雀大路の南端に設けられた表玄関で、中国や朝鮮からの使節団を迎える壮大なセレモニーがこの羅城門の扉を開いて繰り広げられたという。巨大な重層門だったが、平安期に暴風で二度も倒壊、以後再建されなかったという。後に鬼の棲家として芥川龍之介の小説の舞台となるが、歴史はなんと残酷なのだろう。

羅城門から更に西へ五〇〇Mの住宅街の中に「西寺」公園を見つけた。講堂跡に礎石が三個ほど露出していた。東寺と対の官寺として創建され壮大な伽藍を有していたが、共に焼失再建を繰り返しながら、一二三三年の火災を最後に、西寺のみが記録からも姿を消したという。

次は「二条城」である。車の往来激しい大宮通をひたすら北に自転車を走らせ、西本願寺の長い築塀を右手に四条大宮駅から細く古い街中を抜けると、正面に濠と石垣に囲まれた二条城が見えてきた。信長・秀吉・家康の歴史的事件の舞台となり、幕末には慶喜の大政奉還のあった二条城だが、濠周りは嘘のように静かである。

次の「京都御苑」は市街地図でも最大の緑地面積を占めてさすがに広い。一歩足を踏み入れると街の騒音が消され、松の緑と白い砂と長い築地塀が美しい。平安京の北辺にあった内裏が度重なる焼失で当地に移され、南北朝合一から明治の東京遷都まで天皇の住所だったという。

戊辰戦争の舞台となった「蛤御門」の弾痕を見ながら通り向いの「護王神社」に入った。祭神の和気清麻呂は称徳女帝を誑かし皇位を狙った道鏡の野望を宇佐八幡宮の神託で阻止した忠臣で、後に桓武天皇の長岡京遷都が頓挫すると、平安京への再遷都を進言して造営最高責任者となったいわば平安京の立役者である。護王神社の拝殿前に狛犬でなく狛猪が並ぶのは、道鏡が差し向けた刺客から清麻呂を猪の群れが守った伝承によるという。韓国の百済武寧王墓にある猪の石獣が魔除けといわれており、清麻呂を守ったのは百済系豪族だったかもしれない。

天智皇統の祖継体天皇は近江で誕生、越前で生育、継体の母振姫も朝鮮王朝の末裔で越前を地盤にする。桓武の祖父志貴皇子の母越道君伊羅都売も越国の豪族道君氏の娘、桓武の実母高野新笠は百済武寧王の子孫といわれ、平安京建設に山城国の百済系秦氏の財力が貢献したという。桓武天皇は越国の豪族と百済帰化勢力を背景に、古代大和王権の奈良からこの地に遷都したにちがいない。

京都御所の東隣に静かに佇む「廬山寺」に立ち寄った。紫式部が源氏物語を執筆したとされる邸宅址で、源氏庭と名付けられた雲形の苔と白い砂の庭に、季節には紫の桔梗が花開くという。張り出した板張りに腰を下ろして小憩、しばし平安王朝のロマンに思いを馳せた。

鴨川を渡り生垣の参道から「銀閣寺」に入った。自分の後嗣争いから京を灰燼に化す応仁の乱を惹き起こしながら、東山文化に現を抜かした足利将軍義政の創建だが、日本の美意識といわれるわびさびの世界にしばし佇んだ。

琵琶湖疎水沿いの美しい散策道「哲学の道」をゆったりサイクリング、鹿ヶ谷通を南下して、幕末に京都守護職の会津藩主松平容保が本陣を構えた金戒光明寺の山並

みを右手に、「平安神宮」に到着したのは午後三時半、大会会場「みやこめっせ」で無事受付を済ませた。

【京都マラソン二〇一三（三月一〇日（日））】

朝五時に起床、京都駅前ホテルから阪急線で西京極駅に下車、集合場所の西京極サブ競技場はウオーミングアップするランナーで溢れていた。曇り空に白い輪の太陽が浮かび、まさにマラソン日和である。

京都マラソンは、東日本大震災一年目の昨年三月一一日に第一回が開催されて今回が第二回、復興支援のメッセージ「京から明日へ」を掲げて京都から日本全国へ元気を届ける大会を目指すという。参加ランナー一万五千人の七五％が二〇才～四〇才台の若さ溢れる大会である。

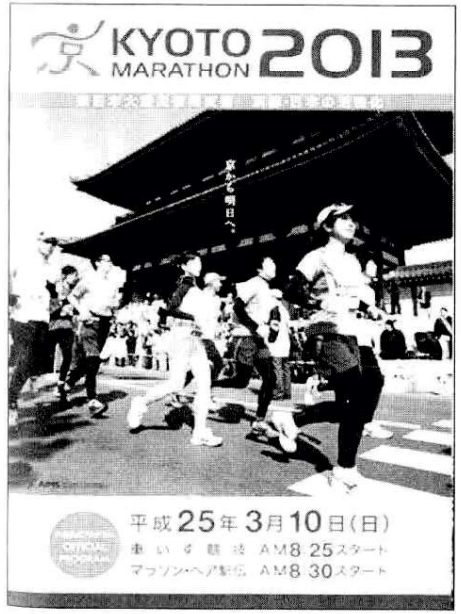
コースは、西京極陸上競技場をスタート、西の桂川沿いに嵐山へ、洛西のきぬかけの路を金閣寺へ、洛北の西賀茂を折り返し、賀茂川沿いに洛東へ、宝ケ池を折り返して賀茂川沿いを南下、銀閣寺を折り返して平安神宮にゴール、まさに京都を一周する四二・一九五キロである。

今日のウエアは、大阪・名古屋に続き日本テニス連合制作の胸に「がんばろう●日本！」のロゴが入った復興支援Tシャツである。明日三月一一日は東日本大震災二年日、被災地へ思いを寄せながら都大路を存分に走ろう。

午後から雨天の予報にビニール雨具のランナーが多いが、暑いより寒いほうがましだ、アームウオーマーと手袋が雨に濡れて体温が奪われては、と外してしまったが、後でダメージになるとは思いもしなかった。

メイン会場の西京極陸上競技場でスタートセレモニーが始まり、東日本大震災の犠牲者への黙祷を捧げられ、八時三〇分にスタートのピストルが鳴った。メイン会場の一万人が走り出たあと、我々サブ競技場の五千人がメイン会場に入ると、勇壮な京都大太鼓が鳴り響いて気持ちが高揚してきた。トラックを一周、街中に走り出た。

五条通から葛野大路通を北上、沿道のブラスバンドが「負けないで」を力強く演奏していた。五年前の館山若潮マラソンで制限時間オーバーの私を「負けないで」を歌って伴走してくれた高校生達の姿が浮かんできた。



道幅広い四条通に出て、洛西の桂川に向け大通り一杯にランナーが広がる様は壮観である。沿道の声援は都大路駅伝で馴れているのだろう、大いに盛り上がっていた。二キロ標識で一二分四五秒、まずは順調な走り出しだ。

四条通りを西へ約三キロ、京都市街の西端の松屋橋手前を右折して美しい桂川の左岸をひたすら北上した。天候は薄曇り、時おり木漏れ日が差して爽快である。五キロ地点で三一分一六秒。今日は前半キロ六分三〇秒、後半キロ七分三〇秒、五時間以内ゴールを目標にした。

桂川を約二キロ、前方に渡月橋が見えてきた。後背の嵐山が朝霞みに包まれ幻想的だ。隣の会話が聞こえた。

「いつも見てるけど、こうして観ると嵐山も素敵ね」

渡月橋周辺の大勢の観光客の声援を受けながら右折し二本の鉄道を跨ぐ高架道路を渡り、清滝通から一条通へ右折すると、左手に静かな広沢池が見えてきた。古より観月の池として知られ、有名な西行法師の歌がある。

《宿しもつ月の光の大沢は　いかにいつとも広沢の池》

マラソンでなければ、水面が月の光を取り込んで輝く光景も目に浮かぶのだろうが、とてもそんな余裕はなかった。ここから魔の山道が始まるのを私は知っていた。

一昨年の大阪マラソンの帰途に京都に宿泊、翌日に渡月橋から金閣寺へこの道をサイクリングしたが、余りの急坂に自転車を降りてしまい、もう二度とここには来るまいと難儀した登り坂が待っているのである。

先月の鎌倉トレイルランで味わえた山道の楽しさを思い描きながら走ろうと、東寺の高さに匹敵する高低差五〇Mの激坂をなんとか走り切った。一〇キロ地点で一時間二分二二秒、それでも少し貯金が出来ていた。

山道のアップダウンはまだまだ続き、住宅地に入ると子供達の太鼓応援が鳴り響き、まもなく仁和寺が見えてきた。仁和寺は皇室ゆかりの門跡寺院で、京都マラソン冊子の表紙（前頁）を飾る本大会屈指の熱烈な応援風景が有名である。二王門の前で《京（今日）から始まる熱い絆、届けよう想い、つなげようきずな》と書かれた横断幕を広げた黒装束のお坊さん達が大音響で声援していた。まさに平家を恐れさせた僧兵軍団を髣髴させるではないか。応援ありがとう！東北への応援ありがとう！

仁和寺から龍安寺・金閣寺までの「きぬかけの路」が始まった。室町時代に花開いた山緒ある洛西の名跡並ぶ山道だが、マラソンランナーにとってはまさに死のロードである。隣を走るランナーが話しかけてきた。「ここで無理すると後半が持たなくなるんだよね。ここで歩く勇気も必要なんだよね」そう言いながら彼は一向に歩く気配がない。そんな誘惑には負けないぞ、このきぬかけの路だけは走り切ろう。後は下りだけ、なるようになるさ。しかし、その忠告が当たっていたことを後で知った。

きぬかけの路を登り切り、金閣寺前を右折して馬代通を下るところで、突然、暗雲が天を覆い、大粒の雨が降

二時間四三分、この五キロが三七分でキロ七分三〇秒は想定内だが、筋肉のダメージは予想以上、これからますますペースダウンするのは明らか、厳しくなってきた。

平坦コースに下りてきたはずなのに、足が重い。左足の土地踏まずと右足親指の爪に痛みが襲ってきた。後続ランナーに抜かれ始めた。大学チアリーダーやフラメンコの華やかな応援に手を振るが、三〇キロ地点で三時間二三分、この五キロが四〇分、キロ八分に落ちていた。あと一二キロ、それでもなんとか五時間はいけそうだ。

北大路橋に戻り賀茂川右岸の河川敷に降りた。丸太町橋まで直線三キロの足に優しい土の道に、なんとか頑張れそうだと思っていた矢先、ここで再び雨が降り出した。

午後一時を回ったばかりなのに夕暮れのように薄暗くなり、冷たい雨が強くなってきた。暑いより雨の方がいいとアームウエアを付けずTシャツ一枚で走ってきたが、あまりの寒さに体の震えが止まらず、手がかじかみ、フルタイツの足の筋肉が硬直、体温が奪われていった。

後で知ったが、気温が一六度から一気に四度まで下がっていたという。金閣寺まで上りきった後の土砂降り雨は恵みの雨だったが、今は悪魔の雨になっていた。

もはや賀茂川の風情を楽しむどころではない。河川敷の応援も降り頻る雨で避難したのか疎らになっていた。ただひたすら冷たい雨の中を走るだけ、さすがに気持が萎えてきた。雨でぐしょ濡れの顔に冷たい雨の雫と涙が

り出した。予報より二時間も早い雨だったが、きぬかけの路で筋肉の張りが限界にきていた足に降りかかる冷たい雨が気持ちいい。熱を持った足の筋肉が冷やされて走りが楽になってきた。助かった、まさに恵みの雨！だ。

周囲のゼッケン番号から前のブロックに追いついたことを知った。雨が上り薄日が差してきた。西大路通を北上すると沿道の声援が「大文字山を観ながら頑張って」と教えてくれた。前方の緑の山肌に「大」の地肌が浮き上がっていた。これぞ都大路ランだ。大いに満喫しよう。

一五キロで一時間三三分。貯金は四分に減っていた。

洛北の賀茂川に出ると対岸を先行するカラフルなランナーの列が美しい。かつて鴨川の河原で豊臣秀次の妻妾子女三九人や石田三成など敗軍の将が斬首処刑されたが、川面は嘘のように静かで平和だ。西賀茂橋を対岸に渡ると、後続が二キロ以上続いていた。上賀茂神社の二〇キロ地点で二時間六分、大阪マラソンとほぼ同タイム、五時間は切れそうだ。しかし賀茂川の堤から北山通に左折した宝ヶ池通の先に、最大難関の狐坂が待ち構えていた。

マラソン後半最大の高低差三〇Mの激坂はさすがにキツく足が重くなってきた。前半のきぬかけの路の無理が祟ってきたようだ。まだ中間点を過ぎたばかりではないか、まだまだ先がある、ここは無理をしてはだめだ、完走できなくなっては元も子もない、歩いていいぞ。

ようやく狐坂を登りきり、折り返した二五キロ地点で頬を伝った。悲しくなり泣けていたのかもしれない。途中棄権という最悪の事態が頭をよぎってきた。この時、二年前の被災地で冷たい雨の中を雪が舞う光景が浮かんできた。こんなことで負けられるか。頑張れ。

お腹が冷えて冷たい雨に打たれながら、河川敷の仮設トイレの列に二分ほど並んだ。凍える様な雨の中で献身的に給水コップを差し出すボランティアさんの励ましの声が唯一の支えだった。傘をさし肩を寄せ合いなかなか来ない仲間を案じる何組かの応援者と視線があった。応援の御裾分けも傷心の私にはありがたい応援だった。

賀茂川全体が急激な冷気に震立ち、文字通り五里霧中の世界である。三五キロ地点で四時間一一分、この五キロが四八分でキロ九分半、あと七キロ、先が長い。丸太町橋で河川敷からようやく街中に上がり、再び活気ある沿道の声援が寄せられてきたが、歩きが多くなっていた。

今出川通の最後の上り坂で、あと五キロの標識が見えてきた。二年前の大阪マラソンが浮かんだ。あの時はラスト五キロが頑張れたじゃないか。弱気になるな。大阪の奇跡を再現しよう。銀閣寺に向けて少し走れてきた。

銀閣寺前の白川通交差点を折り返すと後続ランナーのなんと少ないことか。二〇キロ地点で二キロ以上も後ろにいたランナーはどこにいってしまったのか。自分がいかに遅れているか、改めて思い知らされた。モチベーションががっくり落ちた。キロ一〇分に落ちていた。このままでは駄目だ。五時間完走はもはや絶対無理、四〇キロを何としても五時間で通過しよう。ガンバレ。するとあれほど限界だと思えていた足が動き出した。目標を持つと頑張れるとは。サラリーマン根性が残っていたか。

四〇キロをついに五時間丁度で通過、ようやくゴールの平安神宮の森が見えてきた。雨に煙る朱塗りの二王門の前を左折、大鳥居手前のフィニッシュゲートに向かって自然に万歳ポーズが出た。時計は五時間一三分四二秒、記録証に完走一万四一〇八人中一万一八五四位とあった。

降り頻る雨の中、大勢の係員がフィニッシャータオルを広げて待ち構えていた。助かった。涙が溢れてきた。雨に濡れて冷え切った身体を包んでもらい、手がかじかんでペットボトルを開けてもらい、ずっしり重い完走メダルを首に掛けてもらい、雨曝しになった手荷物返却エリアで、係のお嬢さんが私のゼッケン番号を見て、びしょ濡れになったザックを探し出し、胸に抱きかかえて「お疲れさまー」と走ってきた。

着替える人の少なくなった更衣室の床に腰を下ろして、全てが終わった安堵感に包まれた。フルマラソン七戦を総括する五時間内完走は果たせなかったが、凍える様な雨の中を走り切った自分を褒めてやろう。都大路の景色が走馬灯のように去来してきた。これでフルマラソンは終わりにしようかな、否、そう言いながらまた挑戦するんだろうな、しばし達成感に浸っていた。（完）

「農ある暮らし～私の日常～」(7)

古屋富雄

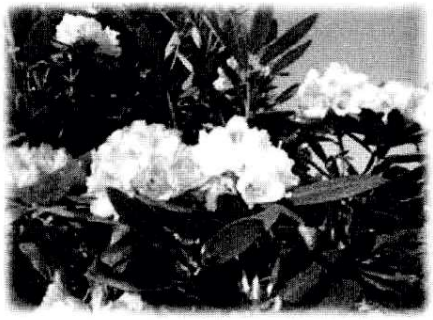
シャクナゲの花

シャクナゲの花が咲きました
娘が生まれた記念樹です
強い日差しが苦手な木です
松の葉かげに植えました
桜が散って淋しくなった
季節のすき間を飾ってくれる
ピンクの花が大好きです

ピンクの花は花嫁が
乗せるティアラのようですね
いつか娘もティアラが似合う
嫁ぐその日が来るのでしょうか
桜が散って淋しくなった
季節のすき間を飾ってくれる
ピンクの花が綺麗です

松の緑が色を増し
季節は夏へと進みます
ピンクの花が色あせて
華やぐ時は終わります
桜が散って淋しくなった
季節のすき間を飾ってくれた
ピンクの花との別れです

娘と観ていたシャクナゲの花



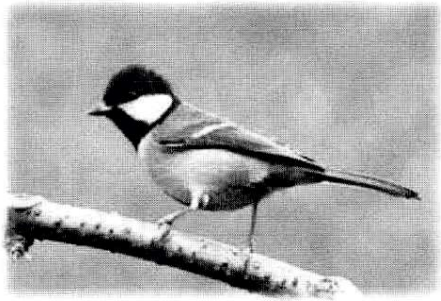
言葉を持つ鳥・シジユウカラ

この頃、目覚めが早くなりました
布団の中でラジオを聞きます
深夜放送の最後のコーナーでした
言葉を持つ鳥がいるそうです
思わず耳を傾けました
その鳥はシジユウカラです
175 余りの鳴き分けが出来るそうです
ヒトと同じような能力があるそうです

え　本当！　本当です
例えば、カラスが来ている、警戒、警戒
ピチピチピチ　ピチピチピチです
例えば、蛇が来ている、警戒、警戒
ジャジャジャ　ジャジャジャです
世紀の大発見ですね

え　本当！　本当です
例えば、みんな警戒しろ、天敵だ、天敵だ
ピーッピ　ピーッピです
例えば、みんな集まれ、天敵だ、天敵だ
ヂヂヂ　ヂヂヂです
世紀の大発見ですね

言葉を持つ鳥、シジユウカラ
ラジオで聞いた大発見です



「陸王」を観て

老舗の足袋屋さんの企業再生ドラマ
「陸王」に感動しました
６５の私にまだまだ頑張れよと
「陸王」がエールをくれました

挑戦しなければ負けもなければ勝ちもない
体一つ、心一つ残れば、また這い上がれる
主人公の言葉にハッとしました

老舗の足袋屋さんの生き残りをかけた
ランニングシューズづくりです
６５の私にまだまだ頭を使えと
「陸王」がゲキをとばしました

本当の負けとは挑戦するのをやめた時
諦めず、挑み続ける先に、道は開ける
主人公の言葉にグッときました

もう65ではなく、まだ65です
私を鼓舞する「陸王」でした

「余談ながら」考
—司馬文体の最大特徴として—

山田喜久

魅力的な司馬遼太郎の文章（以下「司馬文体」という）の最大の特徴である「余談ながら」文体を考えてみたい。

〈余談ながら〉〈わき道にそれるようだが〉〈唐突だが〉〈ついでながら〉あるいは〈無用のことながら〉などとことわって、本筋と離れた、あるいは違った形式の話柄を裁ち入れる司馬独特の文章のことである。

司馬自身は、これを「Ｌｏｉｔｅｒ」と書いている。辞書を引くと「道草を食う」「寄り道をする」と出ている。その「寄り道」も、登場人物の姓癖だの逸話だのといった、文字通り「余談」ふうの軽めのものから、人物論や風俗研究、さらには史論、文明論など、〈ついでに〉どころではない重い内容をもつものなど、まことにさまざまである。

一「竜馬がゆく」（昭和37—41産経連載）

司馬作品のなかで、最初に「余談」が登場するのは、出世作である「竜馬がゆく」である。

連載から半年もしてから、司馬は少々戸惑いを感じてきたようである。

〈時代は動いている。しかし24歳の竜馬だけは動いていない〉からである。

同郷の先輩武市半平太が云っているように「極めて晩熟（おくて）だった」竜馬は時勢に頓着なく、ただ剣術に夢中だけなのである。

竜馬が剣術修行のため土佐から江戸に出てきたのは嘉永6年（1853）で19才。丁度ペリーが来航した年である。ここから日本中に攘夷熱が湧きたち騒然としてくるのだが、肝心の竜馬といえば剣術に夢中で、世の中には全く出てこない。

彼が脱藩して勝海舟の弟子入りするのは、これから10年近くも経った29才に達していた。（彼は33歳で死ぬのだから、彼が表舞台に立ったのは、晩年の僅か数年に過ぎないことになる。）

ついに司馬はじれったくなってきて、連載から1年を経過したところで、突然、「閑話休題」として「攘夷とはなにか」を語り出すのである。これが「余談」の始まりである。

しかし、注目すべきは、連載の次の回で司馬は「反省」をしていることである。

〈攘夷はなしで、つい話が理に落ちた〉

一般に、小説を書くにあたっては情景を「描写」すればよいとされ、これに「説明」を加えるのは下手な作家とぶ云われる。ましてや、これに「解説」を加えるのはタブーである。これを意識して司馬は反省したのであろう。

しかし、このことが思わぬ反響を呼んで、読者の好評をもたらすことになる。これに気を良くした司馬は、連載も500回を超える頃になると、冒頭から大胆にも「余談ながら」を連発することになる。

これが、結果的にはこの作品は「新鮮な史眼による小説」として菊池寛賞を受賞されることになるのである。

二「菜の花の沖」（昭和54—57サンケイ連載）

次に、司馬作品の中で頻繁に「余談」が出てくる「菜の花の沖」を考えてみよう。

淡路島の極貧の農家に生まれ、海に活路を求めてついには北前船の第一人者となった高田屋嘉兵衛の生涯を描いた、司馬作品のなかでも傑出した出来栄えのこの作品のなかにも、「余談」が次から次へと割り込んでくる。

中世以来、郷村の若者たちの組織だった若衆宿のこと、その若衆宿における陰湿な制裁のこと。更に江戸期の和船の構造。蝦夷地の地誌。商品経済の浸透による幕藩体制の変質。特に嘉兵衛と直接関係のない我が郷里の偉人伊能忠敬についての数十ページにわたる記述は圧巻でさえある。

（これだけ伊能のことを調べていたのにも拘わらず、彼を主人公とした小説を書いてくれなかったことは、つくづく悔やまれる。）

さらには当時のロシア事情については、この作品全6巻のうち、実に第5巻、第6巻の過半がそのロシアの考察にあてられているのだ。

本作品は昭和54年1月から3年弱にわたってサンケイ新聞に連載されたが、後半の数カ月、主人公（高田屋嘉兵衛）は全く登場していない。

そのため、読者からの問い合わせ（嘉兵衛はどうしたのか）が同社編集局に殺到したという。ようやく終末近く、嘉兵衛が登場した時には編集部員一同が胸を撫で下ろしたという逸話が残っている。

まさに「余談」が本筋を圧倒している趣でさえある。

なお、司馬流を真似て敢えて「余談ながら」云えば、後にこの「ロシア余談」を中心として1冊に纏められた「ロシアについて―北方の原型」（昭和57年刊）は第38回読売文学賞（紀行賞）を得ている。

この本の冒頭で司馬はこう書いている。

〈かって「坂の上の雲」という作品を書いているとき四年半ばかり―またその後「菜の花の沖」という作品を書いているとき三年間ほど―ロシアとはなにかということを考えつづけたのです。（中略）ロシアの原型とはなにか、ということです。〉

司馬は「坂の上の雲」と「菜の花の沖」という代表的な歴史小説を書く傍ら、隣国ロシアの歴史を徹底的に検証していたことになる。

なお「菜の花の沖」についての私見を許されたい。

確かにこの作品は司馬円熟期の代表作だが、余りにも主人公高田屋嘉兵衛を美化した嫌いがある。（勿論、この傾向は司馬作品のすべてに言える特徴だが）

例えば、嘉兵衛には妻のほかに数人の妾がおり、時には2人の妾を船に乗せて航海していたということは事実らしい。

昭和30年代にベストセラーとなった「日本の歴史」（中央公論社刊）でも著名な歴史学者北島正元はこう書いている。「嘉兵衛はいつも2人の妾（原文のまま）を連れて航海したといわれる精力的な男であり―」。

しかし、この事をこの小説では司馬は一切触れていない。

どちらが歴史書で、どちらが小説であるか混同するような記述となっているが、そのためかこの作品が後にNHKでドラマ化された時には、脚本家竹山洋はこのことに触れて、嘉兵衛の妻が精神を病んでしまうさまを描いている。

〈漢の典型を一つずつ書いてゆきたい。そういう動機で私は小説家になったような気がする〉（燃えよ剣）

と書く司馬にとっては、その「漢」のマイナスの面は極力、触れたがらないのであろう。

（その「燃えよ剣」でも「池田屋ノ変」の発端となった長州藩士古高俊太郎への凄惨なリンチについても主人公土方歳三の指揮によるものであることは明らかな史実にも拘わらず、司馬は殆ど触れていない。）

三　「坂の上の雲」（昭和43―47サンケイ連載）

前述の通り、「余談ながら」を多用する司馬の小説作法は、一般的には作品の整いを崩し、物語の興を削ぐとして練まれてきたものだった。しかし司馬はその眞逆を行っているのだが、司馬作品にかぎってはかえって物語を華やかにする効果をさえ生じているのは不思議でさえある。

司馬の歴史小説では登場人物がすこぶるまっとうに絡む小説的叙述の途中から、突如行が改まって「余談ながら」とか「ちなみに」という前置きが入り、当時の時代背景を小説文体とは全く違う解説体で延々と続くのである。

ふつう、歴史小説といえば、その歴史事実を縦糸に、小説的仮構を横糸として、虚実ないまぜて織りなすものと相場が決まっているが、司馬はそんな配慮は無駄な努力といわんばかりに、それこそ木に竹をつないだように「余談ながら」で、「司馬史観」をレクチャーしてくれるのである。

こうした司馬手法については、さまざまな論議のあるところであることは前述した通りであるが、司馬がその種の批判を先刻承知の上で、此処まで踏み切ったのはなぜだろうか。

以下は私の経験に許すく、全くの私の独断であることをお許し願いたい。

私が思うに、司馬の読者（その多くは現役サラリーマンであるが）は、必ずしも小説好きではないことである。ましてや彼らは、文学青年などというものはとっくに子供の頃のハシカほどにも痕跡を残していない人種であった。

それらの事を、司馬は早くから見抜いていた。

つまり極端にいえば、司馬の読者は小説の愛読者ではなく、単に「歴史もの好き」にすぎないということを、司馬はいち早く見抜いた結果が、あの「余談ながら」になったのではなかろうか。

「もはや戦後ではない」といわれた昭和30年代初め、中央公論社の「日本の歴史」が売れ、その直後出た読売新聞社刊の同名のシリーズも大当たりを取った。そのバックグランドを司馬は見逃さなかった。当時、産経新聞で出版編集に関わっていた司馬はこの時代の動向を看過する筈はなかったのである。

それに更に自分の愛読者でさえ、予想以上に自国の歴史に対する無知のひどさに呆れたのではなかろうか。

考えてみればこのことは当然のことだった。

私の経験からも戦前は皇国史観によって捻じ曲げられた日本史を教えられ、戦後は一転してマルクス史観のよって歴史はズタズタに改変された。

（例えば、昭和30年代にベストセラーになった遠山茂樹著「昭和史」には、昭和25年に勃発した「朝鮮戦争」について、現在の常識とは逆に韓国側から北朝鮮に侵略したと堂々と書かれていた。）

いうなれば、戦前戦後を通じて、一貫してイデオロギー泥まみれの戦後の六……教育で育った若者に正しい歴史教養を求めるのは、そもそも無理な話だった。

そこに登場したのが、イデオロギー抜きの新鮮な「司馬史観」だったといえそうである。

その証拠に、サラリーマン対象に「好きな歴史小説は何か？」と問えば、圧倒的な答えは司馬作品の「坂の上の雲」だという。（因みに2位は私の見たアンケートでは吉村昭著「ポーツマスの旗」だった）

「坂の上の雲」はご存じの通り、主人公は一人ではなく、しかもその主人公は他の司馬ベストセラー作品群のそれと比べると小粒だし知名度も低い。

それにもかかわらず人気抜群なのは、主人公が個人ではなく、主人公はあくまで「明治という国家」であった点にある。（奇しくも司馬が連載を始めた昭和43年は明治百年に当たった。）

さらにいえば、戦後の歴史観ではこの時代（明治）ほど冷眼視された時代はなく、全く無視された。

（現に、私の経験では、戦後直後の「教科書墨塗りつぶし事件」では日露戦争は真っ先に塗りつぶされた。）

いわば戦後の国民常識ではブラックボックスのように考えていた時代を「歴史のロマン化」の名手司馬遼太郎は見事に復活させた。表現が悪いが、競馬でいえば「大穴狙い」が見事的中した感があった。

「坂の上の雲」は、まさに日本の近代史への目覚しの役目を果たしたことになる。

四　「街道をゆく」（昭和46―平成8　週刊朝日連載）

「余談ながら」は一応、伝統的な形式をもつ歴史小説でさえこんなふうだから、定まった形式の無い「街道をゆく」のような歴史紀行では、この傾向は激しくなる。

例えば「街道をゆく22」（南蛮のみち）は昭和58年新潮文学賞を獲得した代表的紀行文であり、司馬の好きなFザビエルの生涯を追っている。

しかし作中には主人公ザビエルと全く関係の無い浄土真宗の開祖親鸞が長々と登場するのである。

昭和20年代半ば、当時産経新聞記者だった司馬は連合国軍総司令部（GHQ）に呼び出され、「歎異抄」の有名な一節「善人なおもって往生をとぐ。いわんや悪人をや」の解釈を求められる。

〈キリスト教でできあがっている彼らに、仏教における悪人の意味を説くのは至難のことであった〉経緯を詳細に論じている。

しかし相手の米国中佐は納得せず、〈結局は落語のコンニャク問答のように〉なってしまうのだが、脱線気味の「余談ながら」を入れることによって、読者は東西の宗教の違いを垣間見ることができるのである。

また「街道をゆく19」（江南のみち）、「同20」（蜀と雲南のみち）、「同25」（閩のみち）の中国紀行3部作となると全文が「余談」だけでできているといっていい。

司馬は6回、中国を旅している。その都度、単行本に纏めているのだが、最初の3冊「長安から北京へ」、「西

域をゆく」、「歴史の舞台」はいかにも旅行記ふうとなっている。そのせいか「街道をゆく」3部作は「予談」がなおのこと目立つのである。

五　司馬文体と映像化

司馬文体の一大特徴である「余談ながら」は、時代を超越して飛躍する。

戦国物語に幕末の話題が挿入されることもあるし、逆に幕末物語に古代史が語られることもある。

例えば信長の桶狭間の合戦の描写に、突如として日露戦争時の秋山好古（「坂の上の雲」の主人公の一人）が登場する。信長がやろうとしていたことは、近代戦術でいえば騎兵による集団運用による奇襲であるというのだ。

あるいは、幕末の鍋島閑叟を主人公とした小説「肥前の妖怪」には早稲田大学が出てくる。閑叟と早稲田とは全く関係がないが、鍋島の徹底的な偏差値教育をうけた大隈重信が、その眞逆の教育方針に基づいて設立したのが早稲田大学だという論法である。

そのため、司馬は「時空を超えた歴史小説家」といわれた。これが読者にとってもたまらない魅力となっているのだが、一方では、それだけに司馬作品の映像化は難しいとの因ともなっている。

今まで司馬原作による映画作品は夥しい数に上る。

私の調べによると、最初の映画は昭和38年5月封切りの「新撰組血風録　近藤勇」だが、映画の出来について、司馬自身は不満を述べている。（「ビジネスマン読本　司馬遼太郎」）

次いで同年7月の「忍者秘帖　梟の城」。原作は勿論、直木賞作品「梟の城」だが、当時忍者ものが大流行だったため映画題名に「忍者」が付いているのはご愛嬌である。

なお、同原作は平成に入って再映画化された。監督は司馬ファンで知られる篠田正浩。最新のCG技術を駆使して、前作よりも原作に忠実な作品となっている。

その他、昭和30年代には同じ監督による「暗殺」や「風の武士」がある。

41年「城とり」は石原裕次郎が石原プロ旗揚げ作品として、石原がアポイントなしに司馬宅を訪問、直接依頼したもので、石原ファンである司馬は快諾。早速、日経夕刊に連載を始めた「城をとる話」が原作となっているが、原作、映画化とも評判にならなかった。（そのためか「司馬遼太郎全集」には載っていない。）

新撰組副長土方歳三を主人公とした「燃えよ剣」は司馬自身、最も好きな自作と公言していただけに再三、映画化され昭和40年代だけでも3作ある。

（現在でも人気が高く、因みに本年（平成30年）「菜

の花忌」のシンボジュームは「燃えよ剣」「新撰組血風録」―人は変革期をどう生きるか」であった。）

このほか40年代には「人斬り」「幕末」「尻くらえ孫市」が作られている。

篠田のよきライバルである大島渚も平成11年に「御法度」を作った。原作は「新撰組血風録」のなかの短編「前髪の惣三郎」。実在の人物だが、原作では隊員の一人と衆道（男色）に陥る美男剣士として描かれている。隊長近藤勇の書簡に組内に男色が流行していることに、司馬が着想を得たといわれる。

なお、昨年（平成29）には大作「関ヶ原」が封切りされた。（監督は同じ司馬ファンの原田真人）

映画以外に司馬原作のテレビドラマ化となると枚挙にいとまがない。NHK大河ドラマだけでも「竜馬がゆく」（昭和43）、「国盗り物語」（48）、「花神」（52）、「翔ぶがごとく」（平成2）、「徳川慶喜」（10）の5作品を数える。

大河以外でもNHKは「菜の花の沖」（平成13）や「坂の上の雲」（平成21）の大作を作っている。特に後者は足掛け3年間にわたる野心作だった。

司馬作品の登場人物の魅力的なさまが、ドラマ制作者の心に強くアピールするからに相違ない。

しかし残念ながら司馬作品で原作を超えた映像化（映画、ドラマ）は少ないことに気づく。（このことは松本清張作品と対照的である。）

司馬史観を映像で表現するには、大河ドラマのようにナレーションを多用するスタイルであっても容易ではなかろう。

それよりも何よりも、原作の特徴である「余談ながら」を映像で表現するは難しいし、おのずから制限がある。逆に多用すると視聴者を混乱させる危険さえある。

数年前にNHKで放映された大作「坂の上の雲」でも制作者は成功の鍵は「余談ながら」の取り上げ方如何だと語っていたが、残念ながら成功したとは言い難かった。

それほど、「余談ながら」は司馬文体の特徴となっているのである。

（終）

青雲の彼方（二）

太田精一

二　巣立ち

（一）腕白盛り

天羽英二は、明治二十年八月十九日徳島県板野郡撫養町に生まれた。現在の徳島県鳴門市撫養町である。撫養は、渦潮で知られる鳴門海狭の四国側南端に位置する気候温暖な町である。

英二の生家は、天野屋の屋号で知られた鰊粕、豆粕などの肥料や砂糖を取り扱う問屋である。それに煉瓦、セメントなど建築資材の製造販売などの事業を加え、さらに海運業にまで手を広げていた。

当時の撫養の町は、十一カ村からなる塩田と畑地の広がる平坦な土地であった。その中をT字型の街道が通り、両側に沿って人家が広がっている。T字型の結節点に四軒の天羽一族の資産家があった。英二は、その真ん中の「お中屋」に生まれている。

「お中屋」の天羽家は大家族であった。曾祖父母、祖父、父母と英二を含めた八人の兄弟姉妹が同居し、それに数名の使用人がいた。

父久米弥は、撫養から約十二キロ離れた津慈（鳴門市大麻町津慈）の阿部家から天羽家に迎えられた婿養子である。母は天羽家の長女で、はまと言った。この夫婦の間に、長女カネ、長男真一、次男英二、三男興三、四男正人、次女民、五男篤五郎、三女まちと五男、三女の八人の子供が生まれている。

天羽家の家族にはその他、母の弟が二人、妹が四人いる。英二にとっては叔父の太郎と次郎、叔母のとく、すえ、やす、たねである。

天羽という姓は千葉県と徳島県に多い。千葉県では、

「あまは」とか「あまば」とかよんでいる。一方、徳島県では「あまう」または「あもう」というよみかたが一般的である。

英二の生家徳島の天羽家も先祖を辿れば千葉から出たようだ。千葉県木更津南方君津の丘陵地帯に天羽城なる城跡がある。その城主の末裔が数百年の時を経て千葉と徳島に分散した。天羽氏は、千葉氏、上総氏などと共に平安末期には、平氏の一族として東国に地盤を築いたが、源氏が東国でその支配力を固めた時に、天羽一族は分裂し、その一派が大和の国宇陀に移り住み、豪族となり十二代続いた。

その大和の豪族が、戦乱の続く天正元年（一五七三）三好長春と共に阿波に出陣、鎧場の戦いで武功を上げ板野郡勝瑞を領有することになった。その後阿波での度重なる争いに巻き込まれ、武士を止め、撫養に移った。同地に移った後、天羽家は在地地主となり、塩田の経営、肥料の取り扱い、藍の染色など天野屋の屋号で多角的な商活動を展開し財を成したのである。

久米弥の実家阿部家は代々庄屋を勤めた旧家で、津慈でも有数の資産家であった。立派な門構えの広大な屋敷で、正門の左側には既が並び、右側には倉と納屋がある。屋敷内には多くの家が建っていて、川が近くに流れている。英二は夏休みになると父の実家の阿部家を訪れ、付近の川で魚釣りに興じ、畑でとった砂糖きびや里芋を家に持ち帰った。

久米弥の兄万平は県会議員・議長を歴任。長い髭を蓄え威厳があった。弟の吊吉は、若くして司法試験に通り、大分で司法官、弁護士などをしていたが、後にサンフランシスコに活動の拠点を求め渡米している。

久米弥は、身長百六十二、三センチで太っていた。目は丸く髭の濃い人物である。記憶力は、確かで寺子屋で学んだだけであったが、知識欲旺盛な旦那である。性質は、温厚で正義感が強く世俗におもねることはなかったようだ。

彼は、酒が好きで晩酌を楽しむことを日課としていた。阿部家の血を引いているためか学者肌で、商売も正直一方で投機的なところはなく、きわめて堅実な商いをしていた。英二が小学生の低学年の頃までは、天羽家の商売は順調に運び、暮らしも豊かで、家族も平穏な日々を過ごしていたのである。

母のはまは、大柄で健康に恵まれてはいたが、肥満気味で心臓にやや問題を抱えている。貫禄があり座敷にいるだけで、存在感があった。が、包容力豊かで煙たがれることはなかった。あまり細かいことには干渉せず、きつく叱ることもなかったため、使用人には敬慕されていた。

はまは、子供は自由に遊ばせ、叱ったり小言を言ったりすることはまずなかった。夜には、若い娘の使用人とともに針仕事をしていたが、昼間の疲れからか居眠りをしていることが多い。その母の姿が、英二には懐かしく思い出されるのであった。

英二は、男女合わせて八人兄弟の三番目の子である。子供の頃は腕白で生傷が絶えなかった。小学校二、三年の頃は、日清戦争の真最中で、もっぱら戦争ごっこに明け暮れていた。

ある日、仲間と一緒に戦争ごっこに夢中になっている時、敵方に回った一人の子供が、木の上から英二めがけて竹槍を投げつけた。

その竹槍が運悪く英二の頭に突き刺さってしまった。気丈な英二は、泣きもせずその竹槍を抜いて家に帰り、かかりつけの医者にみせた。すると怪我の状態は、英二の思った以上に重大であった。

「君、もう少し穂先が下に刺さっていたら即死だったぞ」

そう叱りながら医者はすぐ手当をして、しばらく安静にするよう彼に命じ、事なきを得た。

英二の頭には、死ぬまでその時の傷が三日月形に残っている。

撫養は、海、川に接し、水とは縁が深く水遊びには事欠かない。英二の少年時代は、近所の友達と水泳や魚とりに夢中で、夏休みや放課後には、ほとんど水と共に過ごしている。近所の池で泳いだり、撫養川の河口や海に出てチヌ（クロダイ）釣りをしたり、ボラを獲ったりして遊んでいた。吉野川の河口の粟津口に出ると蛤がよく獲れ、夕闇の迫るまで夢中になって帰宅が遅れ、母親に心配を掛けたこともしばしばあった。

「撫養の夏は自然豊かで、まさに子供にとっては天国であった。夕方には縁台の上で将棋を指したり、花火に興じたりした。夏祭りの時など人が大勢集まり、道端には掛行燈が並び、露天が出てその露店の駄菓子を食べて過ごした」

天羽日記には、豊かな自然の中で伸び伸びと育った幼き頃の思い出が語られている。

そこには、文明と都市化の進展によって失われつつある自然と豊かな人間の営みが感じられる。

春には、凧揚げ合戦が行われる。海から運んでくる暖かい風が撫養の町に吹き寄せる時、海岸に人が集まり大凧を揚げる。綱と綱とをからませ摩擦によって相手の凧を切り落す。切った凧は、誇らしげに天空に残り、地上を睥睨しているが、切られた凧は、空中できりきり舞いして落下して行く。

裕福な家は、この大凧を所有していた。その凧には各家の好みの文様が描かれている。

凧揚げの季節には、仕事を休んで見物する家が多い。若者は凧揚げに夢中になり、年寄と女子供は、弁当持参で海辺近くに集まり応援するのである。個人で凧を所有している家は数軒だけで、ほとんどは、村か組合が共有していた。

凧揚げ祭りは、日本全国の各所にみられる。例えば静岡県の浜松市では、五月の端午の節句の季節に大凧を揚げ、大凧同士の斬り合い合戦を行って、参加各町内の技と力を競い合っている。

秋は、収穫の季節で、撫養でも秋祭りが盛大に行われていた。氏神様蛭子神社の祭礼には御神体の神輿が、天羽家の前で下される。その時に、天羽家では担ぎ手に酒を振る舞うことが慣わしとなっていた。秋祭りには、それぞれの地域や職場の組で所有している屋台を繰り出し、子供たちをその屋台に乗せ、太鼓を叩かせていた。

こうして英二は幼年時代を自然に恵まれた豊かな土地で、曾祖父母、祖父、両親、多くの兄妹のいる大家族に囲まれ何不自由なく、伸び伸びと育てられた。

近所の子供の中では餓鬼大将で腕白ぶりを発揮し、小学校の高学年を迎えたのである。

（二）成績優秀、身体強健

小学校も高学年になるに従い英二は、家の手伝いもよくするようになった。父のあくせく働く姿を見かねて体を使う仕事は、率先して手伝った。幸いにして健康には恵まれ、小学校五年の頃には身長も伸び、体格では小柄な大人の男並みになっていた。

夏には、畑や庭の水打ちや水担ぎなどを行った。撫養は、真水に乏しく、塩分を含んだ水しか出ない土地もあった。そうした所では、山の付近にある貯水や湧水を買って畑や庭に水打ちをしている。天羽家では、真水を使用人が買いに行き、運んできた水を大きな甕に入れて溜めていた。その仕事を英二は手伝った。また、秋には畑から大根を運び、それを干して干し大根を作る手伝いも行っている。

そうした手伝いのかたわら、英二は、読書に親しんだ。少年小説はもとより新聞、雑誌などもよく読み、社会の動きにも興味を持ち始めた。

斉田村（鳴門市撫養町斉田）の磐崎神社の山麓の小学校を卒業後、撫養町立高等小学校に通うことになった。

当時は、尋常小学校の生徒が全員高等科に進むわけではない。各所にある小学校が一本にまとまり、経済的にある程度余裕のある子弟が高等科に通うことになるのである。

英二は、小学校入学の頃から一緒であった天羽豊之助、里見金二、高等小学校になって親しくなった新居格、浜田亀吉と同級でこれらの友達は、いずれも成績が良く、英二の競争相手であった。その中でも浜田は英二に次いで成績が良く、後に一高、東大と秀才コースを駆けあがった。

新居、里見、天羽豊之助と英二は、共に徳島中学に入学した。後に、新居は東大、里見は士官学校、天羽豊之助は慶応大学、英二は神戸高商から東京高商へと進学している。

当時撫養から徳島中学に進学するのは、一クラスの中でも一、二名程度で、その上さらに上の学校に進学する者はまれであった。ところが、この年は進学者が多くそれだけにお互いに学力を競い合った。その中にあって英二は、尋常小学校からずっと首席で級長を続けていたのである。

それだけではない。彼は運動も得意で放課後も学校に残って玉投げ、ブランコ、器械体操、相撲などもよくやった。春秋の年二回行われる運動会には、主役で各種の競技に出場している。

運動会の時には、生徒たちが撫養の町を行進し、デモンストレーションを行う。その行列の先頭には、いつも級長の英二がいた。

行列が家の前を通る時など彼の母や姉が簾の陰から覗いて、誇らしげに家族で喜び合っていたという。

新居は、英二とは異なる小学校からの転校生で、眼鏡を掛けて、太っていた。おっとりとしていて、気は弱そうであったが、勉強は良くできた。

音楽の時間の時である。

「新居、この歌を一人で歌ってみろ」

音楽の先生が、黒板に書いた楽譜を前にしてオルガンを弾き始めた。伴奏が始まっても、眼を細めるだけで歌いだす気配がない。

新居は相当目が悪いらしく、書かれた黒板の譜が見えず、泣きべそをかいている。

「どうした黒板の譜が見えないのか、見えなければ前に出て来て歌いなさい」

新居は、ほっとしたような顔をして黒板の前に立ち、ときどきつかえながら何とかワンコーラスを歌いきった。

英二は、この時思った。

（目が悪くて譜が見えないことを早めに先生に申し出るべきである。人間には何かしら欠点がある。そのこと自体は恥ではない。そのことを隠し、その場を繕おうとすると後に醜態をさらすことになる。その欠点にめげることなく立ち向かえば道は開けるものだ）

英二は、この教室で感じた出来事を心に刻み、その後の人生に生かし続けたのである。

小学校も高学年になると、男子生徒は女子生徒を女子生徒は男子生徒をそれぞれに意識するようになる。

英二は、生家のお中屋から二百メートル余り西にある

同級生大西の岩城信成の妹きくに密かに思いを寄せた。

大西の家も天羽一族の支流の一つである。

天羽一族は、英二の生家の「お中屋」を中心に東に「お東」、西に「お酒屋」、「お酒屋」から百メートルほど西に「中西」、さらに百メートル西に「大西」と四軒が街道沿いに並んで建っていた。

「大西」の家は、天羽ではなく岩城の姓を名乗っているが、もともとは天羽の「お東」から分家した家である。

英二は、きくが「お中屋」の前を通るたび、胸をときめかし何か話しかけようとするのであるが、言葉にならずやり過ごしてしまう。その不甲斐なさに自分を責めた。脳裏を掠める、きくの面影を振り払い、やるせない想いを断ち切るように、彼は、野球に水泳にと打ち込んだ。

やがて中学生となり、撫養を離れ新しい生活に入るにつれ、いつの間にか、きくに対する想いは、淡い思い出として英二の記憶の片隅に留まるだけとなった。

英二が撫養町立撫養高等小学校から徳島中学校に入学したのは、明治三十三年、十四歳の春のことである。その頃の天羽家は裕福であったため、家族も英二も中学への進学は当然のこととして考えていた。

当時の徳島県には、徳島、富岡、脇町の三ヵ所に中学校があって徳島中学は、同県の名門中学として知られていた。

撫養は、気候も温暖で物産も豊かであったため、人はのんびりとし、健康的な生活を送るには適した土地柄であった。その半面湊があり、遊び場もあったので、風紀は必ずしも良くなかった。肥沃な土地と自由な雰囲気に恵まれているためか、遊惰に流れやすく、特質するほどの偉大な人物が出にくい土地柄であった。だが、そうした風土は英二にはいささか物足りなかった。

日清戦争に勝利した日本は、ナショナリズムが台頭し、政府は富国強兵策をますます進展させた。その結果、質実剛健、立身出世によって国家に尽くすことが当時の青年男子の美風として語られる風潮が支配的になった。

そうした社会的風潮の中に少年期を過ごした英二は、大いに感化を受けた。体を鍛え勉学に励むことによって立身出世をし、国家や社会に尽くす人物になりたいと思うようになっていたのである。

(二) 充実した中学生活

徳島中学の先生方は、地元の徳島県出身者と県外出身者がいた。県内出身者は、同校に長年勤務するものが多い。

学習科目は、倫理、国語、漢文、英語、数学、物理化学、体操、習字の八科目で、英語の先生は四人いた。

先生方には、それぞれあだ名が付けられ、生徒同士の会話の時は、あだ名で呼んでいた。

英二の英語担任の佐藤先生は、旧制高等学校を中退した先生で、その英語は欧米人に通じたかどうかはなはだ疑問であった。だが、上級に進んでから洋行帰りの若い片山先生が赴任してきた。発音は垢抜けしていて、この先生のもとで勉強した英二は、発音が良くなり英語が好きになった。

また、県外から来た英語の先生は、新しい知識や思想を学校にもたらし、校内に新風を吹き込んだ。

その一人にクリスチャンの片山正吉先生がいた。英二の先輩賀川豊彦、同級生の新居格などを家に寄宿させていて、賀川などはその先生から思想的影響を受けていた。また、坂本章之先生は、熱心に米国で学ぶことを勧め、その勧めに従い渡米した生徒も少なくない。

体操の本木先生は、腕力が強く、生徒中で本木先生と綱引きして勝てる生徒は一人もいなかった。

徳島中学の同期入学者は百五十人、一クラス五十人で三クラスに分かれている。生徒は、がり勉型が多く運動は苦手なものが多かったが、英二は、水泳、剣道が得意で、いわば文武両道に秀でた学生であった。

学校は、師範学校と同じ敷地内にあったため、運動場の使用争いなど、喧嘩が絶えなかった。その後、師範学校の移転が決まり、建物も運動場も徳島中学の生徒だけが使えるようになったため、気兼ねなく伸び伸びと学業、体育に励むことができたのである。

英二は、入学当初は兄の真一と一緒に下宿していたが、真一が友人と下宿することになったので、彼は、徳島中学の寄宿舎に入った。

全校生徒五百人の内二百人が寄宿生活を送っていた。寄宿舎は、二階建ての建物が二棟あって、二階は寝室である。一室四人で、寮の規則や慣行は、すべて軍隊式であった。朝は、起床ラッパで起き、食事、消灯もラッパに従い行動する。

夕方以降の外出は特別な用事がない限り禁止されている。だが、柵を超えて夜間外出し、買食いや夜遊びをする生徒も少なくなかった。見つかれば当然罰を受ける。ところが生徒の柵越え脱出を見込んで屋台のうどん屋や汁粉屋が店を出している。そのしたたかさに英二も驚いたが、食べ盛りの少年にとって、誘惑には勝てずよく利用していた。

寄宿生は夜勉強するよりも、議論したりゲームに興じたりして過ごすことの方が多く、概して成績は良くなかった。しかし運動の時間になると俄然活気づく。野球、テニス、ボート、柔道、剣道、器械体操、など何時でもできるので体は鍛えられた。

食事は、値段は安いが、決して美味しいとは言えない。牛肉は筋だらけで、歯の鍛錬には良いが、飲み込むまでに時間がかかる。それでも寄宿生にとっては、最高のご馳走である。ご飯は、小さなお櫃に入っていて、いわゆ

るはかり飯だ。それだけでは足りないので、食べ終わった頃、鼠の糞などを入れ、賄にいちゃもんをつけ、米櫃を替えさせることもしばしばであった。

寄宿舎が荒れた時期があった。余りあるエネルギーを発散する場を求めて、寄宿生が放恣に流れ、しばしば事件を起こした。

運動好きの生徒の中には、不良じみた連中もいた。硬派の不良は、街に出て殴り合いの喧嘩をする。軟派の連中は、女性を追いまわし、神社の境内や茂みの中に連れ込み、性的行為を迫る。また、寄宿舎の中で、上級生が、下級生の部屋に忍び込み、いかがわしい行為を行うといったこともあった。

学校当局は、特に女性関係には厳しかった。付近の女学校の生徒と懇ろになって悪い噂を立てられ、風紀を乱したという理由で退学させられた生徒も出た。

騒ぎが大きくなり寄宿生の評判にも傷がついたため、風紀委員が風紀粛正に乗り出し、管理当局と寄宿生が協力して秩序の回復に努めた。それからは、目に余る破廉恥な行為は収まり、取り立てて非難されるような不祥事は起こらなくなった。

英二が、三年生になった時に、兄の真一は徳島中学を卒業し、鹿児島の第七高等学校に入学、四年の時に弟の輿三が徳島中学に入学してきた。ところが輿三は、二年の時に広島の幼年学校に替った。母のはまは、軍人は嫌いで賛成しなかったが、英二は反対しなかった。

徳島中学時代の英二の目標は「勉強と運動」を両立させることにあった。運動は、人の運動するのを見るのではなく、自分が体を動かして実践することにあった。

寄宿舎生活は、勉強の好きなだけの人にとっては、決して好ましい環境ではない。だが、英二にはすこぶる居心地の良い場所であり、青春を謳歌する場所でもあったのである。

学校の前には、富田川が流れ、岸に沿って短艇とボートの艇庫があり、その中には二隻のカッターが置いてある。そのカッターは日清戦争当時清国から捕獲した戦艦から外したもので、徳島出身の東京商船学校長平山藤次郎大佐や近藤廉平日本郵船社長の斡旋で徳島中学に払い下げられたものである。

ボートで川を航行する大阪通いの汽船と競漕したり、荒波を乗り切ったり、ボートを留めた先で水泳をしたりして、海の懐に抱かれた寄宿生活であった。

徳島中学の中に撫養出身者が十人近くいた。いずれも成績は振るわなかったが、運動能力は優れていた。

天羽兄弟は、例外で学力優秀、身体強健の生徒として評判であった。兄の真一は、学年の成績が十番、弟の英二は二、三番位のところを前後していた。その他の撫養出身者は、落第する者もいて、授業時間は日立たなかった。それに児玉先生の干渉が加わり、会場が騒然と紛糾し、収拾がつかなくなった。この騒動に端を発し、日頃校長に不満を持つ生徒たちが、校長排斥運動を展開、登校拒否に及んだ。その結果、校長は、交替となったが、排斥運動の五年生の首謀者数名が退学、三、四年生は二、三ヵ月の停学処分となった。英二の兄真一もこの運動に加わり三ヶ月の停学処分を受けている。

(四) 養子縁組

英二は、春、夏、冬の休みには必ず帰省した。帰省するたびに天羽家の商売が衰退し、家運の傾くのを感じた。父と共に天野屋の経営に当った叔父は、商売には身が入らず、魚釣り、手風琴、尺八などの音楽に興じ、花街にもしばしば顔を出し、資産を減らして行った。父の久米弥もそのことを心配していたが、養子の身分であったため、あまり口出しをしない。悶々と日を送り、酒にその憂さを紛らわし、酒量が次第に増えて行った。

英二は、父の苦悩が分かるだけに、そんな父を批難することができなかった。

彼は、酒に憂さを晴らす父の姿を見るのがつらく、そうかといって中学生の彼には、家業を立て直す力も方策も持ち合わせていなかった。そんなこともあって英二は帰省すると、生家の「お中屋」で過ごすより祖父が避暑に使っていた別荘で過すことが多くなった。特に夏休みたが、運動の時間になると俄然主役を演じるようになるのである。

勉強だけでなく、運動も得意であった真一はボート、野球、陸上競技、器械体操の選手で、県下で行われる大会によく出場していた。

英二は、それに輪をかけ運動好きである。野球に熱中し、数々の大会に出場している。京都の第三高等学校で行われた関西野球大会に徳島中学チームの三塁手として活躍。また、四国野球界の雄、丸亀中学と対戦、勝利したこともあった。さらに、英二はボート、剣道の試合にも選手として出場している。

彼にとって徳島中学在学中は、勉強よりむしろ運動に明け暮れ、体力の強化にきわめて重要な期間となったのである。

彼が徳島中学一年の時に、学校創立以来の大騒動が起こった。

賀川豊彦の演説に端を発した校長排斥問題である。

賀川は、クリスチャンで知られた英語の片山正吉先生の家に寄宿し、その薫陶を受け熱心なキリスト教徒となった。彼は、小柄であったが弁が立ち、講演会の時などは、演台にわずかに頭が出るだけであったが、大声で舌鋒鋭く相手方に切り込む。

ある日、賀川が演説した時に、上級生が野次を飛ばし

には、祖父の別荘は快適である。

海が近く、水泳が大好きであった英二は、家族の心配をよそに、しばしば沖に出て青い空を眺め、将来の自分の進むべき道について、あれこれ思い巡らすのであった。

祖父の別荘の並びに徳島県の富豪として知られている美馬義一郎の別荘がある。その別荘に美馬家の一人娘がよく遊びに来ていた。美馬家では、英二を養子に迎え、将来はその娘の婿にという考えがあり、彼の両親にその話が持ち込まれた。だが、久米弥夫妻はそれほど乗り気ではなかったので、英二にその話を伝えるまでもなく断っている。

天羽家の養子である久米弥は、八人の子供たちを立派に育て、五人の男の子には、自分の手で高等教育を受けさせようと考えていたのだ。

（家運が傾きかけてきた天羽家には、全員の男の子に大学教育を受けさせるのは、相当な困難を覚悟しなければならない。英二が、養子に出ればその責任の一つはまぬがれるかもしれない。先方は資産家で経済的余裕があり、大学への進学は十分可能である）

久米弥は、養子縁組を考えないでもなかったが、天羽家でのこれまでの自分の立場を振り返ってみた時、やはり他家に養子にやるべきではないと思うに至った。

もしその話が実現していたならば、外交官天羽英二は、その後歴史の表舞台に登場することはなかったであろう。立ち返ってみれば人の一生には運命の曲がり角のようなものが何回か訪れる。その曲がり角をどう曲がるかによって、その後の人生が大きく変わってくるのである。

英二が中学四年生になった明治三十七年（一九〇四）に日露戦争が始まり、翌年の三十八年に終わった。

開戦前は、世界最大の軍事国家である大国ロシアに日本が勝てるのかという不安が国民の間にあった。

実際、日露戦争前の明治三十六年度の日本の国家予算は、二億五千万円で、ロシアの十分の一。人口は四千四〇〇万人でロシアの一億四千万人に比べ三分の一以下である。兵力は、ロシア側が予備役と後備役を含めて三百五十万人であったのに比べ、日本側は、百万人にも満たなかった。

こうしたことを単純に比較しても、ロシアに勝てる見込みは、きわめて薄かったのである。だが、富国強兵策が浸透し、日清戦争に勝利して以来、ナショナリズムが高揚して、国民の戦意は極めて高かった。まして開戦後の連戦連勝の報は国民をますます有頂天にさせ、徳島中学の生徒たちも陸海軍の武勇談に酔っていた。

だが、その勝利の陰には、多くの犠牲がともない、英二の身近にも戦争の被害が及んでいたのである。

実際、四十人以上の戦死者が、徳島中学の卒業生の中

から出た。また、天羽一族の「お東」の商用帆船豊国丸と白在丸が、東京湾口でロシアのウラジオ艦隊に撃沈され、久しく乗組員が帰郷できないという事件があり、天羽家の商活動にも大きな影響を与えている。

英二は、中学五年になった。いよいよ将来の針路を決めなければならない年である。だが、彼には、天羽家の家運が傾きつつあることが分かっていた。進学するにしても、高等学校、大学と六年間学業を続けることは経済的に無理かもしれないと感じていたのだ。長兄の真一は、第七高等学校、三男の興三は、徳島中学から広島の幼年学校に編入学。それに四男正人、五男篤五郎の中学入学が控えている。

そこで英二は考えた。

（高等商業であれば、四年の本科を卒業しただけでも高度な知識を身につけ、社会で活躍できる人物になることができる。場合によっては、専攻部にも進み、さらに学業を続けることも可能である。その方が、融通が利くのではないか）

当時官立の高等商業学校は、東京高等商業学校（一橋大学）と神戸高等商業学校（神戸大学）が有名であった。英二は、神戸高等商業学校の師弟関係を大切にする水島哲也校長に憧れていて、神戸を受験することにした。

受験生は千人ほどいたが、二番で合格した。

その頃から英二は、日露戦争後、躍進する日本の地位とそれを取り巻く諸外国の動向に関心を深め、将来外交官として、日本の国益を平和的手段によって解決する活動をしたいとする考えが、次第に固まって行った。

こうして英二は、高等商業四年で、外交官試験に挑戦してみようと決意するのである。

（つづく）

千家尊福伝（一九）

借金破綻を乗り越えた都電生みの親

村上邦治

はじめに

明治四二年（一九〇九）一〇月、明治政府最大の功労者伊藤博文は、外遊中に朝鮮人の民族主義者に狙撃されて暗殺された。足軽という最下層の身分でありながら、維新後は政治家として、木戸孝允（病死）、大久保利通（暗殺）亡き後、自ら先頭に立ち、憲法制定と国会開設を主導し、日本を近代国家へと変貌させた。その後日清・日露両戦争を乗り切り、西欧列強諸国と肩を並べる一等国にまで押し上げたのである。

博文突然の死を一番悲しんだのは、明治天皇であった。遭難に会いいまだ生死不明にもかかわらず、陪臣では最高位の従一位に昇叙させた。遺体を哈爾濱から特別列車で大連に運び、軍艦で帰国させた。誄詞（天皇の弔辞）や、廃朝（政務の中止）など、まさに先例のない特別扱いの連続であった。それほど最も信頼する博文を失った天皇の嘆きは、深いものであった。

そしてこれまで忠義を尽くしてくれた伊藤博文に対し、下級武士出身としては前代未聞の国葬をもって応えたのであった。

この国葬儀を斎主として取り仕切り、無事大役を果たした千家尊福であったが、一月後には政治家として最大の試練が待ち受けていた。

一　借金破裂

一二月に入って、男爵議員をまとめる木曜会幹部の借入が一部返済不能となり、ついに借金の全貌が次第に表面化し始めた。多額の借金は、木曜会及びその選挙団体である「二七会」で使われたもので、政治資金や経済的

に困窮する男爵達のための救済支援資金であった。これら借入金は、法人格のない木曜会や二七会では借入れることができず、幹部個人の借金とする形を取らざるを得なかったのである。

借入額は、おおよそ次のようなものであった。

千家尊福（木曜会最高幹部）　一、二〇〇千円
宗　重望（元対馬府中藩主）　六八千円
大木遠吉（佐賀大木高喬元枢密院議長長男）　六三千円
杉渓言長（公卿山科伯爵三男興福寺妙徳院住職）八千円

合計すると、一三〇万円を超えていた。杉渓自身の借入額は少ないが、千家尊福の連帯保証人になっていた。

明治四三年と今日の貨幣価値は、尺度により約三千倍（都市物価指数、葉書）から一万五千倍（大工手間賃）と幅があるが、仮に五千倍とすると、現在では六五億円規模の額となる。

木曜会幹部による借金が始まったのは、明治三四年木曜会の選挙団体である二七会が設立された以降である。この二七会により、推薦され当選した男爵議員をまとめ、木曜会は貴族院最大会派になった。木曜会は山県官僚派が牛耳る貴族院にあって、伊藤博文や彼が結成した立憲政友会を支持したのである。

第一次西園寺内閣時、その指導的役割を果たした原敬内相が、貴族院から木曜会千家（法相）と研究会堀田（農商相）の二人を閣僚に迎え、山県派の牙城である貴族院の分断に成功した。衆議院政党からの攻勢に山県官僚派の危機感は強く、対抗策の必要に迫られた。

平田東助・清浦圭吾・大浦兼武・田健治郎らは、研究会（子爵中心）とは別に、もともと親睦団体であった「幸倶楽部」の選挙団体として、「協同会」を結成した。以後二七、協同両会の間で、し烈な男爵獲得競争が生じることになったのである。資金源を持たない木曜会（二七会）は、借金に頼り、借入れは増加した。

山県派はそれだけでなく、日清・日露両戦争の軍功により増加した軍人男爵を、取り囲むことに注力した。まず陸軍出身男爵を束ねるため、「陸軍同志会」を組織化した。寺内大臣自ら積極的に動き、これまで加入していた二七会から、新たな会への加入を勧めたのである。第一次桂内閣から通算一〇年、その地位にあった寺内の影響力は絶大であった。陸軍男爵は二七会から脱会者が相次いだ。

海軍では、陸軍ほどの強制的な動きはなかったものの、海軍出身者による「海軍親睦会」がつくられた。

協同会は桂内閣の後押しを受け、官庁の嘱託職や政府系団体、銀行、その他企業への就職を斡旋するなどして、経済的に困窮する男爵達を、白派に引き込んだのである。

こうした手段を持たない二七会では、引留めの策として、無心する男爵に引き続き経済的支援を行うこともや

むを得なかった。

明治四一年二月西園寺内閣から司法大臣への要請を受けた頃には、尊福にはかなりの借金が積み上がっていた。そのため借り入れの一端を告白し、司法大臣就任を辞退したほどであった。

木曜会幹部の借金が短期間に急増するのは、西園寺内閣が突然倒れ、桂内閣が成立したことによるものであった。木曜会（二七会）への圧力が厳しくなり、敵対する協同会や陸軍同志会、海軍親睦会との競合が、一層激しくなったからである。

最初に破綻が発覚したのは、多額の借金をしていた千家尊福からであった。明治四二年二月二四日から第二六回帝国議会が開かれたが、その直前借金の返済不能が明らかとなり、政治家や実業家の一部に広まった。

田健次郎の『日記』に尊福借金問題が、最初に出てくるのは、年末一二月三一日大晦日である。そこには、

「この日松元剛吉（自由党土佐派林有造大臣秘書官　史料『政治日誌』を残す）氏来り、千家尊福男負債整理委員受託の事を請い、かつ渋沢（栄一）男その他知名の士を以て既に諾す者数名に渉ると告ぐ。則ち名義上の条件を以て之を諾す。

蓋し千家男は債務約百三十万円に上ると云う。巨額驚くべき也。」

と記され、政・実業両界で負債整理員会が設けられたことがわかる。

男爵には、父祖や自己の勲功による者と、伝統系華族に大別される。伝統系は大名・公家の分家、旧大身の家老、奈良華族（多くは公家の二男や三男が出家した者）、神官・僧侶らであった。また名門とはいっても、下流に属する宮中関係の伝統名家や神官・僧侶らで、経済的に困窮した者が多かった。二七会は貧乏男爵を救済する役割も担い、人物により貴族院議員に推薦、議員報酬年二千円（現在の約一千万円）を受け取らさせ、経済支援を行ったのである。

尊福の負債額はとてつもなく多額であり、個人で返済できる範囲を超えていた。また使途からみて明らかに個人で返済する性格のものではなかった。桂内閣が素早く動き、政・実業界で処理することにしたのである。直ちに負債整理委員会が組成された。

時の内閣が千家尊福救済に動いたのは、政治的背景があった。桂内閣は貴族院議員のみによる超然内閣としたため、衆議院には基盤がなかった。議会提出中の地租軽減案や官吏増俸案など、重要法案を織り込んだ四三年度予算案の衆議院通過は全く見通しが立たず、何としても政友会の協力を必要とした。そのため政友会と親密な千

家尊福問題を放置することはできなかったのである。さらにこの時期議会開催中であり、この問題により社会に政治不信を招くことは、桂内閣としても得策ではなかった。

二　木曜会分裂

木曜会の不祥事は、年が明けた明治四三年一月には、次第に政界には知れ渡った。尊福の借金問題は、何とか政・実業両界で救済するとしても、貴族院山県派に反旗を翻してきた木曜会を壊滅させることは、長年の懸案であり躊躇はなかった。

この度の木曜会幹部らの失態を、山県系官僚派は見逃さず、木曜会解散に追い込む好機と見做し、画策を始めたのである。このあたりの政界の内情については、原の『日記』に詳細に記されている。

木曜会の破壊工作を指揮したのは、桂内閣農商相大浦兼武であった。

警察畑出身で二度の警視総監を務めた経歴を生かし、警視庁を動かした。高利貸に意を含め、借主に返済を強く求めるなど圧迫を加え、窮地に追い込むことにしたのである。標的にされたのは、尊福借入の連帯保証をしていた杉渓言長であった、木曜会領袖の一人であったが、典型的な貧乏華族で、大浦の手になる者から資金を借りたものの、期日に返済できず厳しい取り立てにあった。その時を見計らい、大浦より

「木曜会を脱退すれば帳消しにするとともに、木曜会・二七会から脱会者を勧誘するための資金として、多額の金（二万円余）を手渡す」

との誘いに、見境もなく即諾したのである。

大浦の策動により、木曜会・二七会はついに分裂した。二月一四日の『報知新聞』は、

「木曜会分裂して清交倶楽部成る」の見出しで、

「多年貴族院の一角に雄飛しつつありし木曜会は、創立久しきだけ多少情実の纏綿せるあり。会員中幹部の処置に満足らざる者ありしにや聞き及びしが、一三日午後志を同じうせる左の諸氏は、突然脱会届を事務所に提出し、更に事務所を内幸町旭館内に置き、清交倶楽部なる名称を付せり。議員として杉渓言長など一一名、院外者六名、さらに二名の議員が木曜会を脱会し入会する」

と氏名入りで詳しく報道した。

この報道では脱会・分裂の理由は漠然としたもので、真相は伏せられた。数日前に政府と政友会との妥協（情意投合）が、原・松田両院内総務の指導力で、政友会の反対派を抑え、成立したばかりであったのである。

原は『日記』の中で、

「官僚派（山県・桂・平田・大浦ら）の毒手にかかり形勢甚だ非なるが如し。」（二月一七日）

と厳しい見通しを述べる共に、千家尊福が健在ならば、官僚派の攻勢をここまで受けることはなかった、と憂えるのであった。

三　木曜会凋落

明治三七年男爵互選選挙に於いては全五六議席中四六議席（八割強）、五年後の四二年選挙では五三名（九割五分）と、木曜会は男爵達を圧倒的にまとめ、団結を誇った。そして貴族院会派の中で木曜会は、唯一反山県派として、伊藤博文を支持しその後西園寺総裁率いる政友会を支援、ともすれば軍部を背景とする山県・桂らの強行派を、牽制し抑える役割を果たしてきた。対外的には西欧諸国との摩擦を避け友好を重視、内政面では開明派として現実的で弾力的な政治を志向する伊藤や政友会を、貴族院から支えたのであった。しかし名門木曜会は、千家尊福という指導者を失い、その勢力を急激に低下させたのである。

木曜会の指導者千家尊福の借金発覚とその処理は、政・実業界で処理することとなったが、貴族院における尊福の信用は、一挙に失墜し、もはや木曜会には、出席できない状態となった。尊福を中心に男爵界の団結を誇った木曜会は、尊福不在から、急速に衰退の道を転げ落ちることになった。

最初に幹部の一人杉渓言長らが清交倶楽部をつくり分裂したが、三月には清交会を結成、幹部の一人中川興長（甘露寺庶流　元興福寺五大院住職）も加わり、合計一六名が参加した。

また対抗していた協同会に三名が移った。脱会して無所属となった者四名、幹部の一人西五辻安仲（五辻家出身　元興福寺明王院住職）は、逓信大臣後藤新平の下に走った。木曜会にそのまま残った者は二三名に減少、一挙に半減したのであった。

四　政友会の支援

政友会両院内総務の原は、木曜会分裂の内情を、所属議員から直接情報を入手、詳細に把握していた。貴族院にあって、政友会に協力してきた木曜会の崩壊を、このまま見過ごすことはできなかった。総裁西園寺、総務松田とともに、善後策の協議を重ねた。

対策として木曜会の選挙団体である二七会の再建が、最優先とされた。尊福の借金の担保になっていた二七会の家屋が、競売に付されることになった時、

「千家にあらざれば維持困難に付き、千家の顔出をなさしむる為」（『原敬日記』　三月九日）

木曜会幹部中島久萬吉（父土佐藩初代衆議院議長　斉藤実内閣商工大臣）二千円、原敬一千円を出し、尊福は二千円を供出し、合計五千円の工面をすることが決まった。何とか尊福を、元の地位に復活させることに、原も躍起となった。最後まで木曜会崩壊を食い止める工作をした様子が、生々しく記されている。

しかし山県が原に述べた、

「貴族院の者は金の千円もやれば何れにもなる連中なり」（『日記』一二月二三日）

との言葉通り、貧乏男爵をまとめるには、情けないことに今や金の力であった。政権を担っていない西園寺や原がいくら支援しても、豊富な資金と行政や外郭団体の就職先を自由に使える山県・桂ら官僚派との争奪戦に、勝ち目はなかった。原の懸命な努力もむなしく、その後尊福の復権は実現しなかった。

五　木曜会消滅

木曜会は尊福の借金発覚以降、分裂と衰退が続いた。大浦の誘いにより、杉渓、中川らが結成した晴交会は、筋書き通り「協同会」に吸収された。その後行われた男爵補充選挙では、協同会が推す候補に負け続けた。官僚派は協同会、陸軍同志会、海軍親睦会が推した男爵議員を取り込み、増員させた。

明治四四年七月任期満了に伴う、第四回貴族院議員通常選挙が実施された。男爵の互選選挙により、当選者は、次のような結果となった。

協同会	四三名	内再選二七名	新選一六名
陸軍同志会	八名	内再選	一名	新選	七名
海軍親睦会	四名	内再選	一名	新選	三名
二七会（木曜会）	七名	内再選	七名
無所属	一名	内再選	一名
合計	六三名	内再選三七名	新選二六名

この選挙は協同会の圧倒的な勝利に終わった。木曜会は尊福を初め僅か七名に過ぎず、惨敗であった。木曜会から脱退した杉渓、中川らは、協同会の推薦により当選したが、そのまま留まった幹部の紀俊秀（日前・国懸神宮宮司）や中島久萬吉は落選した。

選挙後貴族院では、今後各派と交渉する事項がある場合は、「各派交渉会」を開いて協議することが決められ、これに出席できる会派は、一五名以上の団体であることが議論の末決定された。ここに木曜会は参加会派としての資格を失い、解散せざるを得なかった。

貴族院は子爵と同様、男爵界においても、「研究会・

幸倶楽部」体制が確立され、名実とも山県官僚派が制覇したのである。

六　東京鉄道社長留任

千家尊福東京鉄道社長は、借金破綻から、株式会社の社長職に留まることはできないとして、一月に入り辞表を提出した。しかしこの借金問題は、政・実業界で負債整理委員会が組織され、そこで解決されることが決まったことから、千家社長個人への追及は、生じない見通しが立ったことが判明し、辞任は役員全員から反対された。合併会社の苦労を重ねてきた各役員は、千家社長就任によって、ようやく一つの会社にまとまり始めてきたところであり、ここで千家社長が辞任してしまうと、以前の混乱に戻ることを恐れたのである。

元々五社が合併して東京鉄道は設立されたが、合併会社特有の役員の主導権争い、社員間のいがみ合い、労働組合の不統一が目立ち、東京市民からは、劣悪なサービスや進まない路線拡大の不満が大きく、運賃値上げを発表するごとに、市民から激しい反対運動が起きていた。そのため値上げは困難になり、サービス向上は徹底せず、資金難から路線延長は遅々として進まないという、悪循環を繰り返したのである。

当時東京市民が願ったのは、市民の足である路面電車の市有化であった。

『東京日日新聞』は四二年一〇月二六日

「交通機関は本来之を営利会社の一任さるべきものならず。東京市財源の上より見又市民の便宜よりみて吾人は是非之を移して市営たらしめん事を欲す」

と、市民の要望を代弁した。

大阪の路面電車は、明治三六年の運転開始当初から市営であった。計画的な路線の延長を実現し、運賃も比較的安価に決められた。市民の利用が高まり、それを財源とする路線の延長も進められていた。こうした成功例から、「路面電車は私設鉄道の利潤追求の手段にすべきでない」という意見が、全国的に広まったのである。

東京においても千家知事時代から、何度も市営化が検討されてきた。明治三九年三社合併時運賃値上げがされた折には、東京市各区会議で、電車、電気、瓦斯の市有が決議された。

明治四〇年には尾崎行雄市長は東京鉄道と買収交渉を開始し、東京市軌道公債六、七五〇万円の起債により、東京鉄道の営業権と資産のすべてを買収する、仮契約を結ぶところまで進んだのである。東京鉄道は株主総会の決議を取ったが、こんどは西園寺内閣が認可をしなかった。理由は巨額の市債発行は、日露戦争で激増した国債に悪影響を及ぼし、しかも東京市の財政を著しく圧迫するという理由であった。こうして二度にわたり東京鉄道の買収は失敗したのである。

三度目の市有化の動きは、明治四二年一〇月、第二次桂内閣の逓信大臣後藤新平の時であった。前年の一二月東京鉄道運賃再値上げに対して、市民の広範囲にわたる反対運動が起きた。市民大会が各所で開催され、東京鉄道の経営や路線延長、サービスへの不満が一挙に噴き出し、反対運動を繰り返したのである。

千家尊福が社長に推挙されたのは、こうした背景によるもので、社長の手腕により、会社の経営統合・効率化が急がれたのであった。

七　桂内閣の市有化政策

桂内閣後藤逓信大臣は、東京市民の強い市有化の要請と、市民の反対運動に社会主義者たちの参入を阻止するため、四二年一〇月尾崎市長の市有化要請に対し、

一　市民の負担増加や交通の利便を損なわないこと。

二　公債は市街鉄道の利益を以て元利完済すること。

三　組織・経営について事前に綱領を提出すること。

の三条件を提示、これに適合した経営ができるならば「電車市有を認める」と、約束したのである。

これまでの方針を変えたのには、後藤逓相に、もう一つの大きな狙いがあった。利光鶴松（星亨系政友会議員鉄道役員）に語ったように

「政府としては、在外為替資金の欠乏を補うために、電車事業を市有にして、之を外債の担保にしたいから会社の方の取纏め方に努力してもらいたい」

と、本音は逼迫している外債返済資金の調達にあったのである。桂内閣では成立時から、予算不足に陥っており、日露戦争で膨大な外債調達の返済資金と利息に悩まされていた。

これら差し迫った財政上の問題から、政府は千家尊福社長の辞任により、市営化の遅れが生じるのを恐れた。尊福の借金問題を、政・実業界で解決させ、個人の問題から切り離しさせたことも、千家社長辞任を避けたかったからに他ならない。政友会との政治的な妥協、そして外債返済という財政上の問題が、負債整理委員会を設けた背景であった。市有化のためには、引き続き尊福の、社長として人心収攬の手腕が必要である、と政府は認めざるを得なかった。貴族院では敵対関係にあった山県官僚派としても、千家社長に、複雑な鉄道社内をまとめさせ、何としても早期に市有化を実現しなければならない強い理由があったのである。

八　千家社長対尾崎市長

政府の真の狙いを知った千家社長ら東京鉄道役員は、後藤逓信大臣と売却について直接交渉し、政府の意向を知ることができた。

一方後藤逓信大臣から、条件付きながら市有化の約束を取り付けた尾崎市長は、再び東京鉄道の千家社長と買収交渉を開始した。

何としても市有化を早期に実現させたい政府の真意を知った鉄道側役員は、東京市との交渉では終始強気な姿勢であった。その先頭には常に千家社長が立ち、尾崎市長と売買条件の交渉にあたった。宗教家や地方官、政治家では豊富な経験を持っていたが、初めての実業界での千家社長の交渉に対し、尾崎市長は押され気味であった。

千家社長は、合併会社の創業者たちや株主の承認手続きを必要とした。一方尾崎市長は、参事会・市会の決議や、東京市民を納得させる買収額でなければならなかった。千家社長の交渉で劣勢に追い込まれた尾崎市長は、幾度も交渉を重ねたが、買収金額で折り合いがつかなかった。当初の買収予定額五、八〇〇万円から、七月初めの交渉段階では六、一五〇万円に引き上げられ、しかも別途貯蔵品や建設中の代金等約九〇〇万円が上乗せされ、七千万円を超す金額に膨れ上がっていた。

この買収金額では、とても参事会・市会や市民の納得が得られないとして、尾崎市長は交渉の中断を申し入れた。しかし逆に平田内相、後藤逓相から買収交渉促進の勧告があり、尾崎市長としても、速やかな買収契約の締結に迫られた。

尾崎市長は六月政府との認可について協議を重ね、買収交渉を再開した。七月初旬市と鉄道は、連日路線延長の建設費や加工費など細目について交渉を詰め、買収金額六、四一六万円余で千家社長と尾崎市長は、一旦妥結し仮契約を取り交わした。

しかし千家社長との交渉は終わらず、最終的に買収金額は、六、四五八万円に増加したのである。鉄道の財産目録額は三、七四〇万円（評価額三、八〇〇万円余）にすぎず、買収差金（営業権・権利金）は二、六五〇万円余に上り、四割も割高となっていた。買収額に会社所有の現金・有価証券八三〇万円余を合わせると、七、二五〇万円となった。重役・社員六千数百名の慰労金一〇〇万円を差し引いた七、一五〇万円は、一株五〇円につき八一円となり、五社の創業者や株主を十分満足させるものであった。この売買交渉は、明らかに千家社長の粘り勝ちであった。

九　市有化反対運動

東京鉄道千家社長の気骨のある交渉に押されながらも、尾崎市長はようやく市有化交渉の調印にこぎつけた。しかし次には東京市参事会の承認を必要とした。この参事会では、買収額をめぐり議論は沸騰した。

七月六日の『東京朝日新聞』は

「四日午前九時から臨時市参事会を招集後六時間かけ、やっとの思いで参事会の決議を得た」

ことを報じた。

さらにあれほど市有化を望んだ東京市民から、

「市有そのものには賛成であるも、買収価格が一部の資本家を有利にする過大で償還計画がずさんである」

として、多くの反対運動が起きたのである。

八日には各区で電車市有反対市民集会が開かれた。市内一五区のうち、芝、麻布、本郷、四谷の区会では、同様の理由から買収反対を決議した、

七月八日尾崎市長は市会を開き、東京鉄道側と結んだ買収案を議案として提出した。反対する市民数百名が傍聴に押しかけ、異常な雰囲気に巻き込まれた。さすがに当日の市会では採決できなかった。

議案を引き延ばせば、市民の反対運動はさらに激化するとみた市長は、一〇日に市会を開催し採決することを決断した。当日市会の周囲には二万人という多くの市民が集結し、反対集会を開いた。事前に一五〇〇人の警官が警戒し、内務省は軍隊出動を秘かに準備していたほどであった。

市会は厳重な警護の下で開催された。尾崎市長は改めて東京鉄道買収案を提出、採決の結果は、賛成四三、反対七となり、ようやく可決されたのである。

東京鉄道千家社長との交渉では押しまくられ、政府からは買収を督促され、契約後は市民の反対集会や、区会での反対決議が起こされるなど、尾崎市長の苦労は並大抵ではなかった。それほど千家社長の売却交渉は、尾崎市長を圧倒していたのであった。しかしこの市民運動は当を得たものであった。東京市電気局はこの後長き期間にわたり、財政に苦しむことになる。

政府は七月三一日内閣総理大臣桂太郎、内務大臣平田東助連名で

「東京市に対し軌道を敷設する事を特許する」

ことを通知した。

また逓信大臣後藤新平により、

「電気事業譲渡の認可」

を出したのである。

八月一日有楽町にある東京鉄道本社重役室にて、手続完了の引き継ぎ式が行われた。東京市側は尾崎市長以下助役、新電気局長や電気局一員が、参事会から肥塚元市長らが参列した。東京鉄道側は、千家社長、利光鶴松清算委員長、重役一同が出席した。

接受完了証書に東京市長尾崎行雄と東京鉄道清算人利光鶴松、立会人として参事会員五名が署名し、書類の引き継ぎが行われた。

すべての事務引き継ぎが完了した後、千家社長は東京市側の協力に感謝の挨拶を述べ、参列者は三度祝杯を挙げて、すべてが完了したのである。

東京市長をはじめとする東京市側はその場に残り、電気局に異動する旧東京鉄道の課長以上を集め、市長の訓示と新電気局長の新任挨拶があり、本社入口にある東京鉄道の看板を取り外し、東京市電気局の大看板を揚げたのであった。

東京に路面電車が開通して三〇年、ようやく東京市は市有を成し遂げた。その中で府知事から懸案であった市有化をまとめ遂げた千家尊福は、東京鉄道社長として合併会社内部を統率し、一方尾崎市長を相手に、有利な売却交渉を果たした功績は高く評価された。政府、東京市、東京鉄道の誰もが、千家社長がいなければ、東京市が買収できるのは、さらに何年も遅れたであろうと思ったのであった。

東京市電（現都電）の生みの親は、その経緯から、尾崎行雄東京市長というより、東京鉄道社長千家尊福であった。

千家尊福という人物は、知事という地方官、司法大臣という政治家それぞれの立場により、その職務・役割の核心を掴む才能に長けた人物であった。目先だけでなく将来展望を睨むことも忘れなかった。そして全力で先頭に立って行動した。それに何よりも周囲の者を引き付ける人望があった。彼の率先垂範による行動に、だれもが自然に彼の後をついて行ったのである。初の株式会社しかも五社の合併会社社長という難しい役職であったが、如何なくその才能と人心収攬により、困難と思われた売却交渉を短期間で成就させたのであった。

おわりに

千家尊福は借金によりその政治生命は断たれが、同じ頃西の京都でも、借金によりその地位を追われた人物がいた。西本願寺宗主大谷光瑞である。維新当初一千万円の蓄財があるといわれた大谷家は、明治末には尊福と同じ、一三〇万円の借金を背負うまでになっていた。

その使途の大半は、東亜細亜や印度へ自費で探検隊を派遣したことによるものであった。英国、露国、仏蘭西など西欧諸国は、国益から国家事業として、資金をはじめ全面支援した探検隊を派遣した。ところが光瑞は誰の力も求めず、自ら若き弟子たちを未知の仏教伝来の地に、三度にわたり派遣したのである。

尊福が八〇代続く名門出雲国造の出でありながら、全く異なる政治の世界で、日本の近代化を主導した伊藤博文を支援した。しかし貴族院男爵会派の最高幹部として借金を重ね、最後には政治の舞台から去らざるを得なかった。仏教最大信徒を誇る浄土真宗西本願寺派の親鸞を祖とする二二代光瑞は、中国奥地や印度に、国家に代わり西欧諸国に伍して遺跡調査を行い、膨大な費用を惜しげもなく拠出した。三度におよぶ派遣は、ついには借金を背負い込むことになり、法主の地位を失うことになった。

並外れた二人の日本人は、それも畑違いともいえる分野で大金を使った。個人として未曾有の借金をつくり、その地位を追われた。しかし二人に共通するのは、明治の日本を、亜細亜や世界という視点で見つめ、己の信念を貫き、行動したことであった。同時代でしかも名門出という共通点を持ち、神道の尊福（男爵）、仏教の光瑞（伯爵）二人が、神・仏相対した立場の人物であったことは、興味深くまた面白い。

貴族院議員千家尊福は、木曜会最高幹部という政治力を失った。しかし、初めて営利を目的とする株式会社の社長として、見事に会社をまとめ上げ、東京市への売却に際し、如何なくその能力を発揮した。引き続き実業界での活動が期待されたが、自ら興した大社教に復帰せざるを得ない事情が発生する。

（つづく）

参考文献は最後に記します

『時評家　新明正道』（評伝その九の二）

―新明正道著『欧州の危機』（一九三一年一一月）―

山本鎮雄

一　ドイツ「黄金の二十年代」

東北帝大法学部の新明正道助教授は、一九二九年四月から二年間、「社会学研究」のために文部省派遣の在外研究員としてドイツ・ベルリンを拠点に在留した。新明は日本を出国する直前、ユッセーなどを寄稿した月刊雑誌『経済往来』編集部（日本評論社）から執筆を依頼された。新明は留学地ベルリンに到着すると、休刊日を除き、毎日のように、数種の新聞を購入し、さらに雑誌を定期購読した。それは、のちに「欧州通信」を執筆するための準備だった。

新明は滞在して六か月後に短期滞在したライン川左岸のケルンから「欧州通信」の初編を郵送した。その後、ベルリンから郵送し、一か月に一編、一年間に一二編を連載し（そのうち、一編は旅行中のウィーン・ザルツブルクから）、帰国して三編を加筆するとともに、当初の執筆順序を変更し、「独逸篇」、「英佛篇」、「ヨーロッパ篇」、さらにエピローグ「世界危機の転換」と題して『欧州の危機』（日本評論社）を出版した。本稿は現地からワイマール終期とナチ党台頭期に関して臨場感と切迫感に満ちたレポートであると言えよう。

一九一八年一一月、ドイツ共和国は社会民主党のフィリップ・シャイデマンによってベルリンで成立宣言された。一九年七月、制憲議会が喧騒のベルリンではなく、ワイマールで開かれ、ワイマール共和国憲法が僅差で採択された。敗戦国のドイツが直面した課題の一つは、第一次世界大戦の賠償問題で、二四年八月からドーズ案（主としてアメリカ資本の融資による）が実施された。ただ、このドーズ案にはドイツの賠償の最終的総額と債務支払い期間が規定されていない。そこでドーズ案を修正し、第二次賠償支払い案としてヤング案がハーグ会議で検討

され、二九年八月に関係各国政府に受理された。

二三年一〇月、ドイツは急激なインフレーションに見舞われたが、レンテン銀行は土地を担保にレンテンマルクを発行した。さらに金本位制のライヒスマルクに切り替えられ、インフレーションはひとまず収束した。ほぼ二三年一二月から二九年一〇月、ドイツはアメリカの資本（アメリカからの膨大な借金）に依存して経済的に復興し、工業は設備を近代化し、「産業合理化」を実現し、商取引も安定し、賃金は比較的高く、失業の少ない「黄金の二〇年代」を謳歌した。しかし、ヴェルサイユ体制下の敗戦国ドイツは経済的には戦勝国のフランス、イギリス、そしてアメリカに支配された。

ドイツは経済的に復興し、「相対的安定期」を迎え、ドイツ社会民主党などのワイマール体制の支持派が勢力を定着させ。ところが、政治的には自由主義と議会主義のワイマール体制派と国家社会主義の右翼・反ワイマール派が激しく対立し、その実態は政治的には「不安定なワイマール共和国」だった。二九年七月、財界で国家人民党の首領のアルフレート・フーゲンベルクは、白党、鉄兜団、ナチ党とともに、「ドイツ国民請願全国委員会」を設立し、国粋的右翼が反ヤング案キャンペーンを昂然と開始した。

二九年一〇月、ニューヨークの株式市場が暴落し、世界恐慌が始まった。政治的に不安定なドイツにとって、アメリカ資本に依存しているドイツ経済は深刻な影響を受けた。倒産と失業が増大し、社会問題化したが、経済政策として有効に対応出来ず、しかも政治的な対立の火に油を注ぎ、ワイマール共和国後半は終幕に向かった。

すでに触れたように、新明は留学地のドイツ・ワイマールの首都ベルリンに滞在し、日本を出国直前から断続的に日記を記述した。のちに新明のご長女の家永美夜子夫人が大学ノートから書写・校閲し、新明正道著『ドイツ留学日記』（一九九七年）を上梓した。新明は学問の都ベルリンで「ドイツ社会学」の研究に勤しむとともに、絵画と彫刻、文学と演劇、新聞と著作、映画とラジオ放送など、前衛芸術と大衆文化を鑑賞・観察し、ワイマール末期の「黄金の二〇年代」を満喫し、さらにベルリンの美術館や博物館を見物した。すでに触れたように、最晩年の新明は「ベルリンはなおワイマール文化の真っ盛り」と回想した。それが新明の絶筆となったという。

二　協調外交と国家主義の交叉

新明が「欧州通信」（一）を最初に出稿したのは、ベルリンに在留して半年後にライン流域を視察し、ドイツ西部の、ゴシック様式の大聖堂で有名なケルンからである。フランス、イギリスの戦勝国はドイツの西部ライラントに駐留した。国家主義的右翼政党の人民党党首であるが、ドイツ外相ゲスタフ・シュトレーゼマンは、ドイ

ツの賠償問題のドーズ案を承認し、それと引き換えにラインラント帰属問題を解決しようとして、欧州協調主義、さらに国際協調主義を主張した。シュトレーゼマン外相とほぼ同一歩調をとったのが、フランスのアリスティド・ブリアン外相である。

二九年一〇月、ドイツのシュトレーゼマン外相は六年間の在任中に英仏軍の期限内にラインラント占領の放棄を要求し、撤兵を実現させたが、シュトレーゼマン外相は心臓発作で急逝した。その五日後、ともに欧州協調主義を唱えたフランスのブリアン外相はフランス議会で独仏協調の外交演説を行い、拍手喝采を博した。この演説はフランスだけではなく、ドイツ国民を安堵させた（なお、二六年、両者はともにノーベル平和賞を受賞した）。

新明は、一方ではライン流域の旅行記を「ケルン大伽藍の空の下で」と題して、『ドイツ留学日記』に記録した。他方ではケルンから最初の「欧州通信」（一）を執筆して『経済往来』編集部に郵送した。「独逸、独逸、万国の上で」と誇らかに歌われた国歌に反して、現状は「ドイツ国家はアメリカ資本の基礎の上にやっとその存在を保障されているのである」と分析した。ドイツは「アメリカ機嫌気褄をとっているのは当然である。近くの欧州諸国に対しても、ドイツの神経は頗る敏感」（三頁）であるとして、ドイツを「独逸、独逸、万国の下に」と認識した。

三　もう一つの『ドイツ留学日記』として読む

二九年一一月九日、新明はベルリンからケルンへ赴く途次、フランクフルト駅を経由し、秋日和のライン流域を見物した。

僕は、マインツの駅で、鉄兜をつけたイギリスの兵士が構内を警備しているのを見付けた。ラインの左岸である。更に北上して、夕方コブレンツで列車を乗り換える間、町を散歩して絵葉書屋に入ると、藍色の暖かそうな外套を着たさっぱりしたフランスの兵士が買物に来ている。店の女店員も、自由自在にフランス語を操っている。流石、占領地の気分が濃厚だと思った。此等の兵士も順調にゆけば間も無く引揚げてゆく筈だ。しかし、それにはフランス政府の方針が不変であることが必要とされている（八頁）。

すでに触れたように、フランス外相のブリアンとドイツ外相のシュトレーゼマンが提唱した欧州における協調主義、政治的にはドイツ議会のヤング案の受諾とともに、英仏軍のルール地方からの撤兵とフランスが保障占領したラインラントからの撤退である。ところが、ドイツでは国家人民党総裁のアルフレート・フーゲンベルグの主唱でフォン・ゼークト将軍の鉄兜団とアドルフ・ヒトラーのナチ党とともに、「ドイツ国民請願全国委員会」が組織され、右翼国粋主義者によって反ヤング案のキャンペーンが展開された。

全国委員会は、ナチ党の国会議員ヴィヘルム・フリックによって起草された、いわゆる「自由法」（「ドイツ民族の奴隷化に反対する法律」）を提示し、「国民請願」は僅か一〇％を超え、「国民投票」に必要な署名を辛うじて集めたが、二九年一二月二二日の「国民投票」は不成立に終わった。しかし、新明が注目したのが、「国会請願」と「国民投票」における国家主義の運動、とくに本格的に組織されて間もない群小右翼政党のナチ党が右翼政党として公然と全国民に注目されるようになったことである。

僕は独逸へ来てから屡々方々の壁や舗石の上にかぎ十字の印のついた「ヒトラーに来たれ」という此の一派の宣伝の文句を発見する毎に、この運動をアメリカのクー・クーラックス・クラン的なもののように考えていた。実際、此の政党が反ユダヤ人主義を標榜しているところなぞ、K・K・Kそっくりである。…此の印象は僕にはこの党派を一種の狂信的な此か宗教的なマニアを有った連中の集まりと観念させた。怪奇な団体、種々の疑惑を蔵する団体！　確かに、この政党は何となく無気味なものを有っているのだ。しかし、この政党を公けの政戦の舞台に引き出して来ると、その存在が怪奇であるだけに、一般に強く訴えるものがないようにしか考えられなかった。しかし、実際において僕のこの考察は誤っていたのである。彼等は公けの政戦において極めて有力な存在として現れて来た（二二頁）。

四　ヒトラーのナチ党の台頭―ファショ化の進行―

新明は一一月に行われた各地の地方選挙の結果を分析し、投票の際に合法戦術に転換したナチ党は友党の国家人民党から得票を奪い、大きく支持者を増加させた。新明は「この党派こそはファシズムの典型的な前衛と見るべきであり、自ずから此の党への投票の移動がファシズムの危険を高めている」（三八頁）と分析し、警鐘した。ところが、左派の社会民主党は未だファシズムにたいして組織的な対応せず、しかも共産党は社会民主党をファシズムの特殊な形態の「社会ファシズム」として攻撃し、僅か国会に五議席に過ぎないナチ党の存在を考慮せず、反ファッショ統一戦術さえ問題にされなかった。

新明は早くから反ヤング案の国民投票は不成功に終わると判断した。だが、二九年一二月二二日の「国民投票」の当日、伯林の投票所を視察に出かけた。

伯林も此の三四日非常に寒くなって来て舗石のとこ

ろどころには薄き凍ったところもあるくらいだ。ワイナハトも迫って来て、町角や広場には売れ残りそうなタンネンバウムの緑が淋しく目に映っている。…だが、僕は、ヤング案反対の運動は、反動派にとって絶好の宣伝の機会であった。…此の反動が積極的なファシズムとして攻勢を執るの日は、案外近いかもしれぬ（四六頁以下）。

当然、社会民主党も共産党もヤング案反対の「国民投票」が不成功に終わったことを大歓迎したが、新明はこの反動派の運動がドイツの公然たるファシズムへと進行する危険性を明確に認識した。確かに、ドイツ中部のチューリンゲン州（その州都はワイマール）では、得票を増大し、ヒトラーとともにミュンヘンでクーデターに加わったことがあるナチ党幹部のヴィルヘルム・フリックが最初の内務大臣兼文部大臣に就任したように、ナチ党は地方選挙で着実に党勢を伸ばした。

五　ワイマール共和国の終わりの始まり

ワイマール憲法の特質の一つは国民主権を尊重し、民主主義と議会主義を謳ったが、第四八条では大統領の緊急命令発布権を規定し、それにもとづき、国会議員の趨勢を配慮することなく、第二代の大統領ヒンデンブルクは最初の大統領内閣のハインリッヒ・ブリューニング（ドイツ国家人民党総裁）を首相に任命した。すでにドイツの賠償問題のドーズ案に代わり、ヤング案関連法案がドイツ国会で採択された（一九三〇年三月）。新明はケルンの市中を見物しながら、「万国の下に立つドイツの前におかれた未来の社会」を考えた。

新明は倒産と失業が社会問題のドイツの状態についての考察の視座を、次のように書いている。

ドイツは、必ずしも『独逸、独逸、万国の下に』の運命に鎖つけられているものでない。だが、この状態の変化は現世紀においては、過去とは異なった皮相を呈するものではないか。民族と民族―。だが、他方に、階級と階級がある。協調主義は民族と民族との第一範疇に沿うている。だが、階級と階級の範疇に沿う変化が、時代と共に高まりつつある、戦闘の基調を成していることは、事実である（一四頁）。

なぜ、新明はドイツをめぐる民族問題とともに、階級問題に言及したのであろうか。ドイツは「相対的安定期」を経て、ニューヨークの株式市場の大暴落を契機に、世界恐慌が始まり、資本の脆弱なドイツ経済は景気の後退に見舞われた。とくに、経済政策の争点の一つが「失業保険制度」の問題だった。企業家団体は掛け金の増額に反対し、労働組合は給付金の引き下げに反対し、さらにワイマール憲法の八時間労働時間制をめぐって、経営者団体と労働組合との「中央労働共同体」は崩壊した。社会民主党の首相ヘルマン・ミュラーの「大連合」内閣の「内政面における政府の行動」を制約し、「大連合」内閣の辞任を結果した。新明がドイツの階級問題を提起したのは、そのような背景があったからである。

六　ドイツの反動の高まる波濤

新明はケルンからベルリンに戻り、「欧州における反動の波濤」と題して、「欧州通信」（一）を執筆した。新明が何よりも注目したのは、「国民請願」運動を主導した右翼団体である。それは総裁フーゲンベルクの国家人民党、指導者ゼルテの鉄兜団、ヒトラーが率いるナチ党である。（新明は『欧州の危機』では「国民社会党」と称している。正式には「国家社会主義ドイツ労働者党」である）。ナチ党を中心とした全国的な「国民請願」運動によって、一〇%強の署名を得たが、その後の「国民投票」は否決された。

ところが、新明は、社会民主党機関紙『フォアヴェルツ』の楽観的な論説にたいして、組織されて幾ばくもなく、政党自体の存在も国民にほとんど認められていないが、すでに連邦議会では大臣に就任し、ヒトラーの「ナチスの進出」を的確に予想した。再び繰り返せば、新明は次のように述べている。

僕はドイツに来てからしばしばかたがたの壁や舗石の上に卐印のついた「ヒトラーに来たれ」というこの一派の宣伝の文句を発見する毎に、この運動をアメリカのクラー・クラックス・クラン的なもののように考えていた。…この印象は僕にこの党派を一種の狂言的な、いささか宗教的なマニアをもった連中の集まりと観念させた。怪奇な集団、種々の疑惑を蔵する集団！確かに、この政党は何となく不気味なものをもっているのだ。…しかし、実際においてこの考察は誤っていたのである。彼等は公けの政戦において極めて有力な存在として現れて来た（一四頁）。

ヒトラーのナチ党は正式には「国家社会主義ドイツ労働者党」と言う。ところが、この党の「社会主義」は、何を意味するのか明らかではない。しかも「労働者党」という名称はあまりにも欺瞞的である。しかし、ただの群小右翼政党に過ぎなかったナチ党は、ヤング案反対キャンペンによってフーゲンベルク総裁の国家人民党とともに、右翼の二大政党として国民に認知されるようになった。

今日は一二月二二日（一九二九年）で、「請願書」の「国民投票」の当日である。再び繰り返せば、「伯林も三四日非常に寒くなって来て鋪石のところどころには

薄く凍ったところもあるくらいだ。ワイナハトも迫って来て、町角や広場に売れ残りそうなタンネンバウムの緑が淋しく目に映っている。僕は、きょうの投票の様子を一日見ようと思って散歩して来たが、割に静かのようである。…やや政情に不安の相がある。だが、僕は国民投票の不成立は予言しておいていいようだ。それにもかかわらず、今度のヤング案反対の運動は、反動派にとって絶好の宣伝の機会であった。彼等は、ヤング案反対そのものに成功しないでも、既に実質的な成功をおさめているものである。彼等は、数か月にわたるこの運動によって勢ぞろいをしたわけだ。この反動が積極的なファシズムとして攻勢を執るの日は、案外近いかも知れぬ」と予測した（四七頁）。

二九年十月末、ニューヨークの株式市場は暴落し、それが発端となって、世界恐慌が開始し、二九年から三〇年の冬のドイツは経済的危機、政治的混迷、心理的不安などの全般的な破局の風潮が蔓延し、ワイマール共和国の民主主義と議会主義の基盤の脆弱性が露呈した。それに乗じて、ヒトラーが率いるナチ党は着々と州議会選挙などでは得票を伸ばした。とくにチューリンゲン州ではナチ党の指導者ヴィルヘルム・フリックがナチ党の最初の閣僚に就任した。そこで、新明は新聞記事からベルリン、ケルンなどの市会選挙の前回と今回の得票結果を比較検討し、右派のフーゲンベルクが率いるドイツ国家人民党の得票が減少し、その分をナチ党が吸収して、投票数を伸ばしたのであろうと分析した（三三頁以下）。

ワイマール共和国のフリートドリヒ・エーベルト大統領（初代）の死後、軍人出身で保守派・帝政派に推され、パウル・フォン・ヒンデンブルクが二回目の大統領選挙で辛うじて第二代大統領に当選した（二五年四月）。その当初、ヒンデンブルク大統領はワイマール憲法に忠実に、その限りで、一定の共和派の指示も得た。彼が老衰するまでは誠実に行政首班のように行動したが、三三年にユンカーや大資本に説得されてヒトラーを首相に任命し、その後は第三帝国を出現させた。

新明がベルリンに着いて最初に出会った政治的事件は、「血のマイ・タ－ク」（メーデー）事件だった。その後、国粋的右翼の反ヤング案キャンペーンによってヒトラーのナチ党が伸長し、さらにニューヨーク株式が暴落し、世界恐慌はアメリカ資本に依存していたドイツ経済に大きな影響を与えただけではなく、ワイマール・ドイツの政局にも影響し、議会多数派の社会民主党は野党となり、ワイマール憲法第四八条により、最初の大統領内閣により右派中央党のブリューニング首相が任命された。ベルリンの新明は滞在一年を過ぎる五月の直前、「ヤング案の影に」と題して「欧州通信」（四）をベルリンで執筆した（三〇年四月一〇日）。五月も間近である。

街を歩くと路傍の樹の枝はもう芽が見えている。広場や小庭には移植されたサフランの花の匂い、散歩路の並木には、枝剪り人夫が鋏を薄ら暖かい陽に光らされながら、立働いている。…（レストランの奥で、トランプの賭けをしている）退役軍人は何かで、恩給でやってゆける仲間である。…しかし、憐れなのは、好天気なのに、為すこともなく、舗道を散歩している労働者である。…棄てられた新聞紙を拾い上げて求職広告欄に眼を皿のように曝していた。昨日路上で出会った若い労働者の姿がふと今僕の眼の先に浮かんで来る。春の日に悩み深かるべき失業者のドイツではある！（一二一―二頁）。

七　混迷するウィーンへ―オーストリアのファッショ化―

新明の『ドイツ留学日記』には三〇年二月から五月末までの記録が見られない。おそらく、「欧州通信」（三）、（四）、（五）の執筆に集中していたのであろう。ところが、五月二九日にベルリンを発ち、ドレスデン、チェコ（プラハ）、そしてウィーンにしばらく滞在し、ブタペスプ行きを中止して、ザルツブルク、ミュンヘンと「東南ドイツ・ウィーン旅行」を試み、再びベルリンに戻った。旅行中の新明はこれらの都市を盛んに見物しながら、ウィーン・ザルツブルグから「独裁への進軍」と題して「欧州通信」（七）を執筆した。

何故、新明は「東南ドイツ・ウィーン旅行」を敢行したのであろうか。新明はオーストリアでも、イタリアにおけるファッシズムの独裁が見られた。ドイツではヤング案反対のキャンペーンや「反ワイマール」の大学生の右翼的運動の反動の策動が認められる。このような政治独裁は、イタリアやスペインはともかく、中欧のポーランド、バルカン半島のルーマニア、ユーゴスラビアにいたる諸国家ではファシズムの戦線に連鎖している。とくに、独裁国家イタリアを盟主としてファシズム運動の国際的な展開を助長しているのである。

新明の『ドイツ留学日記』によれば、三〇年五月末から一一日間、ベルリンを発ち、ドレスデンを経由して、チェコに入国、首都プラハを見物してウィーンへ。新明はウィーン郊外にあるシェーンブルン宮殿などを見物して、しばらく滞在した。新明はウィーン大学へ行き、綜合社会学的な系統に属し、「ナチスの宮廷社会学者」のオトマール・シュパン教授と面会しようとしたが、果たせなかった。しかし、同じウィーン大学の社会民主主義社会学者のマックス・アドラー教授を訪ね、新明は現下のオーストリアの政情と社会民主党の対応について質問した。アドラーは「問題は（右派の）キリスト教社会党の態度如何にかかっている」と回答した。新明は「シュパンとは打ってかわってなんと教授らしい教授よ、快い会話。…何といっていいか、五月の空のようなからっと

した態度である」と「日記」（六月五日）に記録した。

すでに触れたように新明はウィーン・ザルツブルグに滞在して、「独裁への進軍」と題して、「欧州通信」（七）を執筆した。イタリアと陸続きのオーストリアでは、総理大臣シュバーは憲法を改正し、キリスト教社会党が支持した。オーストリアでは、チロルなど農山村を本拠地とする「郷土軍」と社会民主党を支持し、都市部を本拠地とする脆弱な「防衛軍」が併存していた。首相シュバーは両軍を武装解除し、その一部を國軍に編成しようとして「武装解除法案」を発表した。ところが、オーストリアの連邦議会では与党のキリスト教社会党と野党の社会民主党の間で最大の争点になり、内乱の危機を迎えた。

新明は旅行中にウィーンで発行の各種の新聞を購入し、社会主義を憎悪し、自国の資本主義を擁護する「郷土軍」（その資金は巨大企業の資本家に依存している）はイタリアのファシズムの影に習い、「ドイツのハーケンクロイツ（かぎ十字、ナチスの紋章、注）とともに、国際的なファシズム独裁の進軍の一連鎖である」（一五六頁）と見なした。アドラーは社会民主党が消極的に待機主義に徹し、ただ与党のキリスト教社会党と優越な「郷土軍」の内紛を期待した。

オーストリアはキリスト教社会党が政権を掌握したが、政情は安定していない。のちに、ヒトラーがドイツの独裁権を掌握した後、オーストリアは独立問題で人民投票を実施した。ナチスが率いるドイツ軍がオーストリアに侵攻を開始し、新たに就任したナチス系のザイス・インクヴァルト首相がドイツのオーストリア併合を宣言した（三八年三月）。

新明は東南ドイツ・ウィーンの旅行からベルリンに戻り、「ラインの解放」と題して「欧州通信」（八）執筆した。ドイツの人民投票でヤング案が可決され、その代償として保障占領した英仏はドイツのライン川流域から早起に撤兵し、この地のドイツの主権は回復した。

ワイマール憲法は連邦制のほか、国民主権のもとに社会権的人権の保障、民主主義の制度や国民議会の制定など、きわめて民主的憲法であった。ところが、ドイツは大不況に遭遇し、議会多数派の社会民主党委員長のヘルマン・ミュラー首相のもとで保守政党を含む「大連合」内閣は、国家財政均衡問題とともに、社会政策の最大の失業保険制度が審議された。そこで、企業は給付金を引き下げ、労働組合は掛け金の増額を可能する政府案が提出された。政府から折衷案も提示されたが、この問題をめぐり、ミュラー内閣は辞職した。この大連合内閣の辞職は、ワイマール憲法の自由主義、民主主義、議会主義からの方向転換を意味する。

八　国会選挙（一九三〇年九月）の結果

しかし、ワイマール憲法四八条の緊急命令発布権は、

国民の基本的な権利を大幅に制限した。第二代大統領のヒンデンブルクは、議会の多数派の社会民主党を排除し、カトリック教徒の世界観政党の中央党の国会議員団議長のハインリヒ・ブリューニンクに組閣を委任し、国家人民党などの協力を得て、右派の連合内閣を成立させた（三〇年三月二七日）。

ところが、ブリューニンク内閣が国会で提案した新増税案（「緊急救済案」）は否決されたが、ヒンデンブルク大統領は第四八条に基づき緊急令により同法案を裁可した。社会民主党議員団はこの緊急令の廃止を提案し、多数で可決された結果、ブリューニンク首相は国会を解散し（七月）、九月に国会選挙が行われることになった（ブリューニンクは依然として内閣を組閣し、三二年五月に総辞職した）。

九月一四日の国会選挙はナチスの地すべり的選挙に終わった。新明は日記「ベルリン大学内外」の後半に記述しているように、カール・コルシュのゼミナールに参加し、またタールハイマ夫妻と交流しながら、社会民主党、共産党、中央党などの政治集会の見物に出かけている。それはベルリンから「ドイツ総選挙の側面」と題する「欧州通信」（一〇）の取材を目的とした見物である。そこで、その「通信」の冒頭と末尾の部分を引用する。

（九月）一〇日の夜には、首領ヒトラーがベルリンに来て演説会を開くという掲示が出ている。左翼としては、社会民主党と共産党とが、頗る活発な運動を行いつつある。ベルリンだけでも毎日市中一〇箇所以上に演説会が開かれているとともに、市中の広告もまた、ブルジョア党派に劣らず、多数かつ有力に行われている。四日には、「スポート・パラスト」―二万人を優に収容し得るーで共産党の示威集会があり、七日には、社会民主党の示威集会があった。…投票日があと一週間目の十四日に迫っていることを思えば、当然のことと言わざるを得ない（一九六頁）

九月九日、此の稿を略了えて、僕が『スポート・パラスト』に中央党の示威集会の傍聴に行った時、ブリューニンクは、彼自ら民主主義の支持者であると力説し、自己を以って『独裁者』と呼ぶものを人民共同社会のために戦うものであると演説したものであった。そして、多くの居並んだ党員は盛んな拍手を惜しまずに送った。彼の身辺には嵐の気配も見えない。だが、半独裁の道を開いた彼ではあるが、今の政局では、彼は、ある意味で戦の要素ではなく、局外者、嵐の前に微笑を湛えて立っている広場の銅像の如きものに成っているのである（二二一頁以下）。

ブリューニンク首相はヒンデンブルグ大統領の「緊急令」や国会解散権に依拠して、国会を運営して来た。そ

れは議会制民主主義によるものでもなく、ファショ的独裁制によるものでもない。そこで、新明はこの首相を「半独裁」への道を開き、「局外者」、「広場の銅像」と見なし、ドイツの将来を労働者階級の解放か、ファッショ的独裁のいずれかと展望した。

新明は国会選挙の結果、その後の論戦、開会した議会の状況を分析し、「ドイツ政治の現段階」と題して「欧州通信」（一一）を執筆した。

一九三〇年九月一四日、…夕方、僕はピスカートルの『皇帝の奴隷』をみるために、レッシング劇場に行ってみた。今夜は各劇場で投票の発表がある筈だと友人が話していたが、一〇時頃になると、幕間を利用して幻灯で発表した。…

フリードリッヒ街とウンター・デン・リンデンとの交差点に出ると、夜の更けたにもかかわらず、多数の人々が雑沓している。中央の散歩路にある掲示板に近づくと、ナチス当選者百二〇名という新聞の夕刊が貼りつけてある。その前に立ちふさがって歓声を挙げているのは、恐らく同党の筋の者であろう。百二〇名の当選者を出したならば、その第二党と成ることは動かない。従来、特色こそ有もっていたが、何等議会的勢力のなかった同党としては全く異常の成績である。発表をのぞきこんでゆく婦人の口からは、幾度も「素晴らしい」という歓声が漏らされた。全く素晴らしい事である（二二三頁以下。なお、新明は同日の日記では、婦人の「素晴らしい」という歓声にたいして、「一寸癪だ」と、彼の本心を明かしている）。

三〇年九月の国会選挙では、社会民主党は議員を一〇名を減らしたが、一四三名で依として第一党である。ナチ党は一二名から一〇七名に激増して第二党となり、共産党も五四名から七七名に増加して第三党となった。この選挙では、保守政党の国家人民党や人民党・民主党は投票数を減らし、ナチ党に投票したのであろうか。ブリューニンク内閣の「半独裁」体制を維持したが、政治的にはワイマール憲法の議会制民主主義の転換点になり、ワイマール共和国の支持政党が後退し、ナチ党や共産党のように、反ワイマール支持政党の前進の除幕に終わった。とくにナチ党の地すべり的な前進はさらなる議会への進出、自らの「合法的」革命路線の確信を強め、権力掌握への道を組織的に驀進することになったであろう。

九　全体主義にたいする堤防

この国会選挙の結果、ドイツのみならず、ヨーロッパにとっても暗黒の日であると考えられた。最も敏感に反応したのが経済界である。まず、ドイツに投下された外

国資本に脅威を与え、さらに国内の資本の逃亡が顕著になった。「ドイツ資本のフランス銀行への逃亡！」である。ブリューニンク大統領内閣は中央党を中核に「中間ブルジョアの諸党」で構成しても、多数与党にすぎない。ところが、第二党の社会民主党は中央党とともに「国家の敵にたいする壁」、「ブルジョアと共産主義との堤防」になろうとした。

そこで、社会民主党議員団は「議会選挙後において、民主主義の把持、憲法の保障及び議会主義の防衛を以って第一の任務とする」と宣言して、与党連合に参加した（一〇月四日）。一〇月一二日、新明は議会開催の前日に社会民主党がルストガルテンでファシズム反対の示威運動を見物した。社会民主党としては、割に多くのトランスパレント（横長旗）が見えて堂々としていた。政治家レーベらは示威者を激励し、ヒトラーを攻撃する演説をしたが、ナチ党は橋の向こう側のウンター・デン・リンデンの並木路で盛んに暖動を試みた。かえって、社会民主党の示威運動は行動的なナチ党の暖動を誘発することになった。

新明は「社会民主党が中間的な妥協に態度を決した以上、それはファシズムを打つ巨大な鉄槌とはなり得ない」と判断した（一四七頁）。しかし、ナチ党は前議会で「ユダヤ人、又は有色人種との混血によって、ドイツ人民の種族的悪化又は崩壊を齎らし、または齎そうとした者は、種族的裏切りの故を以って懲役に付する」というユダヤ人排斥の法案を提出した。この法案は政治的にナチ党の人種差別の最初の典型的な対応である。のちに、ナチ党が設置した収容所におけるユダヤ人の大量虐殺を組織化の最初の法的な提案であろう。

新明はナチ党の非論理的・非理論的な政治的ご都合主義を見過ごしてはいない。ナチ党の「非論理性」と「非理論性」は「労働階級」を一時的に「吸引」されている現実を認めたが、いずれナチ党の実態が明らかになれば、「ナチ党の乱舞は長くない。ドイツ政界の夢魔を退治する剣は、既に大衆の溶鉱炉の中で鍛え上げられている」（二五〇頁）と揚言した。ところが、新明の期待に反して、ナチ党は広汎な大衆運動を展開し、次回の国会選挙では得票率を増大し、社会民主党を押さえて第一党となった（三二年七月）。

そこで、ヒトラーは首相任命をヒンデンブルク大統領に要求したが、拒否された。だが、次第に国会選挙で第一党を占めるナチ党を率いるヒトラー首相任命への保守派の指導者のなかで機運が高まった。三〇年以来、ヒトラー内閣は大統領内閣であるが、彼の目標はワイマール共和国の崩壊、民主主義と議会主義の廃止、あらゆる敵の情容赦のない抑圧と迫害である。その背後には献身的で行動的なナチ党が組織した突撃隊と親衛隊という準軍隊組織である。

新明は『欧州の危機』で「独逸篇」に続き、「英仏篇」（三編）、「ヨーロッパ篇」（二編）、さらに「エピローグ」（終章、一編）を掲載している。新明はフランス外務大臣ブリアンの国際連盟におけるヨーロッパ合衆国案（パンヨーロッパ案）の提唱、さらにアメリカ大統領フーバの賠償および戦債支払いの一年間モラトリアムの提案について分析している。しかし、すでに紙数が尽きたので、本章では割愛する。

追記

（一）

本章では人名、地名、党名などの記述は、今日、用いられている名称を採用した。また、旧仮名遣いを改めて、当用漢字を使用した。

（二）

新明が在独中に月刊誌『経済往来』に執筆した「欧州通信」は以下の通りである。

「欧州通信」は一年間一二編を（『経済往来』（5巻2号～6巻1号、1930年2月～31年1月）に連載した。帰国後、三編を加筆し、編集して上梓した『欧州の危機』は『経済往来』に掲載された順序に必ずしも従っていない。執筆した順位は次のとおりである。

(1) 独逸、独逸、万国の旗の下に　1929年　1月16日　ケルンで
(2) 反動の高まる波濤　1929年12月23日　ベルリンで
(3) 独逸大学の生命　1930年　2月17日　ベルリンで
(4) 海峡の彼方の社会主義　1930年　3月13日　拍林で
(5) ヤング案の影に　1930年　4月10日　ベルリンで
(6) 第三共和国の新展望　1930年　5月29日　ベルリンで
(7) 独裁への進軍　1930年　6月7日　ウィン・ザルツブルクで
(8) ラインの解放　1930年　7月9日　ベルリンで
(9) ヨーロッパ合衆国への道　1930年　8月15日　ベルリンで
(10) ドイツ総選挙の側面　1930年　9月10日　ベルリンで
(11) ドイツ政治の現段階　1930年10月15日　ベルリンで
(12) ヨーロッパの危機とその帰結　1930年11月10日　ベルリンで

帰国して、さらに次の三編が加筆された。

(13) 半独裁への転歩　1931年　8月10日　日本で
(14) 英仏間の関係冷却　1931年　8月12日　日本で
(15) 世界危機への転換（エピローグ）　1931年10月29日　日本で

性と化粧の物語（十一）

鈴木守

第三話　性と泥化粧（一）

先報にて『性と歯の化粧』を完了しましたので、本報から『性と泥化粧』について述べる事にします。

扨て、泥化粧と云っても先報の歯の化粧のようにお歯黒や歯磨のように話題豊富な化粧ではありませんので、永年、化粧品開発に従事していた私でさえ、〝泥パック〟の商品があると云う程度の認識しかありませんでした。私にとって泥パックは幻の化粧品であり、泥化粧は知る人ぞ知る化粧様式であると思っています。

それに引替え、後進社会には数多くの泥化粧が残されていますので、先ずは泥化粧の実態を紹介した後に、泥化粧発祥の事情を考察する事にします。

第一節　泥化粧の実態

今、目の前に『躰』と題するグラビアの頁が拡げてあります。その一つに全身泥塗（どろまみ）れの人達が写されています。彼等はハイチ・ブレンジーノの沼で泥浴し乍ら異空間の神々と交信し、トランス状態に落ち入ったブードゥー教信者の人達です。

それとは別に、屈強な男性四人の裸身を活写した図も見られます。彼等は全身にストライプ状の泥化粧を施し、その縦縞模様は手足並びにペニスの先端まで達しています。このグラビアが目に入った瞬間、これが〝性器強調の化粧か〟と思いましたが、どうも早とちりのようで、彼等はエチオピアの裸族スルマの人達でハレの日の儀式前に聖なる沼で泥浴して身を清め。櫛様の道具で泥を縦に掻き落とし、縦縞模様の泥装束を身に纏って、神に健全な身体を披露するのだそうです。

斯様に、ブードゥー教の信者やスルマ族の人達にとっ

て、泥浴を行う沼地は聖域として信仰の対象となっていましたので、裸族のペニスの縦縞は性器強調よりも信仰に基づく性器装飾でした。

地球上には単なる泥土の他に白土、赤土、黄土等が存在します。斯かる有色の泥土も盛んに使用れています。斯様な事例を拾いますと、『民族学二四号』には、ニューギニアの呪術師と信者の女性が写されており、彼等は顔面から上半身にかけて白土を塗っていました。この化粧は呪術、即ち原始宗教に基づく化粧様式でした。それとは別に、ニューギニア、ダニ族の女性が顔から上半身にかけて白い斑点模様をあしらってハレの日の化粧にしていました。また、ヤリ族の戦士達はペニス・ケースを装着し、白と黒の顔料を全身に塗擦していました。斯様にニューギニアでは白土による化粧が目につきました。これらの資料は週間朝日、一九九六、五、三版掲載のグラビアを引用しました。

次に、アフリカの赤土による化粧を紹介します。共産党の機関紙『赤旗』に〝アフリカからの贈り物〟と題する記事を見る事が出来ました。写真には赤銅色の肌色をしたグラマーが牛の世話をしていました。記事には「アフリカの美しい牧畜民ヒンバ族の人々に会うために、ナミビア北西部の地を訪ねた。女性たちは全身に赤銅色の白家製クリーム〝オチゼ〟を塗っている。おしゃれと乾燥を防ぐ目的である」と解説してありました。

週間朝日にもヒンバ族の女性が化粧している様子が掲載され、「牛乳から採ったバター脂を赤いオークルに混ぜ、灼熱の砂漠の太陽光線を防ぐ軟膏にして、体中に塗布している」という紹介文がありました。この赤いオークルと云うのは、ヒンバ族の場合、赤鉄鉱の鉱石・代赭石を粉砕して赤色顔料にした事も紹介されていました。

以上、私が入手した範囲の現代における泥化粧の実態を紹介しましたが、アフリカや南アメリカの後進地を訪問すれば、未だ様々な泥化粧の実態を発見する事でしょう。

例えば、一昔前の中国黄土地帯の人達は、戦さの場に臨んで、黄衣を着て顔面に黄土を塗ってカムフラージュしたと聞いています。この黄土は身体隠蔽の泥化粧材料でした。

第二節　泥化粧の発祥

泥化粧の歴史を扱った書はありませんし、泥化粧の起源を論述した文献がある筈がないと思っていますので、泥化粧発祥について及ぶ限りの知識を絞り出して考察する事にします。

私は曽って、化粧品のルーツに関する論文を発表しました。論文の主旨は「我々の祖先が〝毛物（けもの）〟でなくなった時、光などの侵襲的環境から皮膚を保護する目的で塗布した泥土が化粧品のルーツである」と云う主張でした。

その後、化粧品のルーツとは別に化粧のルーツ、換言すれば化粧行為の起源が存在したのではないかと考えるようになり、その結果、人類は化粧行為の起源となった水浴を開始し、次いで、水浴から分化した泥浴を行うようになって、身体に付着した泥が人類初の化粧品として登場したと云う決論に達しました。斯くして、人類は化粧行為を開発し、更に泥と云う化粧品を猿人時代に使用し始めたと考えました。

従って、本節では、一項に人類進化の様相、二項に泥化粧の起源を主題に論及することにします。

一項、人類進化の様相

我々人類はチンパンジーの祖となった或る種の大型類人猿だったと云われています。この大型類人猿の骨格構造は人類のそれとは異なり猿型の構造だったと想定されます。従って、この項の最初に直立二足歩行成立の様子を述べます。

一、直立二足歩行の成立：　人類の直立二足歩行の姿勢は重力方向の体位ですが、一般に哺乳動物は地表に平行な体位で四足歩行しています。猿でも樹上を四足歩行する種もいますが、高級な猿は木登りや腕渡りの移動をし、重力方向の体位で生活しています。従って、人類の祖となった類人猿は当然、重力方向の体位で生活していた筈で、二足直立の姿勢を示す事は容易だったと思われます。

所で、猿まわしの猿は直立二足歩行の姿で移動します。この事について、「猿まわしの猿を調教する際、二足直立から教え込むと直立二足歩行に容易に達する」と云う叙述がありました。従って、樹上から地上に下り立った二足直立の体型で歩行を始めた事は吝（やぶさ）かではありません。しかし、現代でも幼児はヨチヨチ歩きしていますので、初期人類の歩行様式は直立二足歩行であってもヨチヨチ歩きか、或いは直立歩行とナックルウォーク（類人の歩行様式を交（ま）じえた行動様式を採用していたのではないでしょうか。

しかし、人類は猿人の時代に直立二足歩行の方式を達成しています。その直接的証拠がタンザニアのラエトリで発見されました。この証拠とは三五〇万年前項のアウストラロピテクス・アウレウス、親子三人の足型が刻印された化石です。この足型は噴出した溶岩が未だ固まらないうちに親子がその上を歩き、足型の化石が残されました。その足型を観察しますと、足の拇指が大きく土踏まずも認められ、更に足型は縦列に直接的に印されていましたので、彼等はヨチヨチ歩きする事なく、二足直立の体型で長距離移動を可能としていました。直立二足歩行完成の証拠です。しかし、前述の猿まわしの事例を参

考にすると、もっと早い時期に直立二足歩行が完成していたと思います。その時期としては、早期猿人からアウストラロピテクス類（華奢型猿人）に進化した頃を想定しています。

二、体毛の退化：　哺乳動物における体毛は、人類の頭髪や眉毛等とは異って保温保持の役割を果たしています。

早期人類の体毛を取り挙げますと、人類の祖となった大型類人猿にも、チンパンジーのような体毛が分布していた事は必定です。その類人猿がジャングルの樹上から酷暑の地に下り立って、直立二足歩行の運動様式でオープンランドを跋渉し始めました。斯様な生活空間の移動は。体毛を退化の方向に導いた可能性があります。要するに熱帯性気象条件下では体毛は無用の長物として退化の道を歩き始めたのではないでしょうか。恐らく毛母細胞活性の至適温度よりも暑い日が連続したため、毛母細胞の活性を低下させた結果ではなかろうかと推察されます。

三、汗腺の発達：　熱帯性気候の条件下に移住すると、体毛の退化と同時に汗腺を発達させました。

汗腺は樹上生活していた猿の時代に木登りや腕渡りに際して木から滑り落ちないように手掌や足底に汗腺を発達させ、汗で湿らせる構造と機能を獲保しました。要するに猿の時代に獲得した汗を滑り止めとする機能を基に全身に暑さ防御の為の発汗機能を完成させたのです。例えて云えば、自動車のエンジンの過熱を抑制する為にラジエーターを備えたようなものです。

四、皮膚の黒化現象：　私達の祖先が人類に進化した当初、彼等の皮膚色は現代の黒人種のように黒かったでしょうか。私はそうは思いません。と云うのは、体毛退化の条で述べましたように、紫外線を防ぐ体毛が全身に分布していた筈ですから皮膚の黒化が進行していたとは思えません。

この件について私の体験を開陳しますと、テレビで幼獣を抱いたチンパンジーの母親の顔色を観察する事が出来ましたが、幼獣の顔は色素沈着の亢進を認めませんでしたが、成獣の顔は色素が増殖し真っ黒な顔をしていました。その時、ふと思いついたのは「黒い体毛で覆われている地肌は黒色ではなく肌色（色種としての）をしているのではないか」と云う疑問です。この疑問を解決したのは、旭川の旭山動物園へ孫達と一緒に行った時です。チンパンジー舎の前へ行きますと、日の前に飼育係の女性がおりましたので、早速、質問しますと、彼女は「論より証拠、ここには毛を毟り取る癖のある成獣がいます。その毟り取った地肌を見に行きましょう」と云って舎内

に案内して呉れました。彼女の指差す先のチンパンジーの腰の部分の体毛が毟り取られ、肌色の地肌を見る事が出来ました。この体験から洞察しますと、人類と同種の類人猿から分化したチンパンジーのスキンカラーが肌色を呈していましたので、「初期人類のスキンカラーは肌色だった」と云う推論に達しました。

初期人類の皮膚色が肌色でしたから、裸の猿になってからの人類は強い光が曝射するアフリカの気象条件を考えれば、皮膚色は黒化の道を辿った事を容易に推察できます。

二項、化粧と化粧品の発祥

一項では、化粧を関係深い皮膚の構造と機能について進化の立場から論じて来ましたので、本項では、化粧と化粧品の発祥を中心に物語る事にします。

一、水浴風習の発祥：　樹上から下りた人類は、水を求め乍ら川辺林を伝ってサバンナ地帯に進出したと云われています故、彼等は清冽な流れに足を浸す経験をした筈です。その際、彼等は足に清涼感を味わった事は必定です。彼等はこのような体験に基づいて、山野を跋渉して火照った体を水に浸して、涼を、愉しむ事を覚えたのではないでしょうか。

私達現代人も、暑い夏の日に汗を掻くような運動をすれば水浴したくなります。それと同じで、祖先の人達も熱帯の原野を歩き廻って火照った体を水に浸して涼みたくなって当然です。斯くして、先祖の彼等も水浴するようになりました。私は、この水浴を化粧行為の起源に位置付け、この行為が化粧のルーツであると認識するようになりました。

では、化粧行為成立の要件に触れます。化粧行為と云うのは、化粧品的な効用をもたらす行為である事、並びに個人の自由意思に基づいて意図的に行う行為である事、これらの二要件が揃って始めて化粧行為として認定されると考えています。

御先祖が行なった水浴は、清涼感を求めて意図的に行なわれた行為です。清涼感は現代の歯磨や男性用化粧水に清涼剤メントールが配合されている事実からみても、清涼感供与化粧品品質の一種である事は間違いありません。従って、この水浴が人類最初の化粧行為であり、化粧のルーツであると認定した次第です。しかし、同じ水浴でも、乳幼児の沐浴は、肌の清潔を確保する目的で行われますので、化粧行為としての品質要件を備えていますが、意図的な行為とは云えませんので、この沐浴を化粧行為と云うには憚りを覚えます。

二、泥浴の開始：　祖先の人達が水浴を始めますと、思わぬ悲劇が生じました。水辺に屯していた鰐に襲われ、

餌食とされました。数多くの犠牲者を出した事でしょう。しかし、彼等は泥沼の周辺に鰐の姿が見えない事に気着きました。それもその筈、泥沼を水飲み場にする動物はいません。鰐も餌が集まらない所に姿を現す事はありません。私は曽って、「鰐は泥沼をニッチとしない」という記述に接した覚えがありますので、鰐は泥沼周辺に屯しない事は確実です。斯くして、人類は泥沼で水浴するようになりました。泥浴風習の始まりです。

泥浴を始めた人類は、泥浴によって思わぬ恵みに有り付けました。泥浴を始める前は、原野を跋渉していると、肩や背中がヒリヒリと痛みましたが、泥浴後の原野跋渉では痛みが軽減する事に気付きました。現代人ならば泥浴で付着した泥土が紫外線をカットしてサンバーンを抑止した事に気付きますが、彼等は泥土の効用に気付いたとは思えません。

当時の人達がどのように理解したかについて論証する事にします。

F．ファッキーニは、「人類は出現すると、すぐに宗教的行動や神聖な領域を意識し始めた。人類は本質的に抽象能力を持ち、宗教意識を持っていた」と述べています。彼の叙述する所を敷衍して考えますと、例えば、狂暴な鰐は魔界から現われた悪魔であり、泥沼は悪魔が寄りつけない聖域と認識したと思います。そして、聖域で泥浴すれば神の加護を受ける事が出来る。付着した聖域の泥土は譲符である筈と理解したかも知れません。また、彼等は紫外線や病原菌のように、目に見えざる物、認識しえざる物で身体に害を与える物はすべて魔物であると思ったり、悪霊の所業であると考えたりしたのではないでしょうか。しかし乍ら、泥浴に勤しんでいても、泥浴による効用の本体を見極める事は出来ませんでした。

以上、聖域における泥浴の効用について、初期人類の人達が如何に考え、どのように感じていたかを想像し乍ら、ファッキーニの云う抽象能力とか宗教能力について考えていました。

話は変りますが、泥浴に親しんでいる人達が泥土が付着した姿で山野を跋渉している時、熱帯地方特有のスコールに出会いました。付着していた泥土が洗い流された後に熱帯の日射しの直射を受け、肌がヒリヒリと痛み始めました。この体験は彼等に痛み軽減の効用は聖域の泥土によると思わせました。しかし、彼等は更なる体験をしました。それは、スコールに会った後、応急的にその場の土を塗って聖域へ向いました。聖域の土でなくても、刺激軽減の効用のある事を経験したのです。斯くして、普通の泥土でも光照射による刺激感を抑制、軽減する事を知りました。この発見が泥化粧の原点になった事は確かであろうと思いますが、スコールに会っても泥が脱落しない事が必要です。そして、その条件を充たす素材として、樹脂、樹液、獣脂が考えられましたが、石器

を開発したアウストラロビテクス・ガルヒ（二五〇万年前項）が肉食を始めたとの情報に接しましたので、ヒリヒリ感防止を目的とした泥と獣脂によるペーストをガルヒ猿人が作り、このペーストを塗布した泥化粧が始まりました。そして、このペーストが化粧品のルーツの地位を確保しました。

以上、この項では、人類は涼を求めて水浴を開始し、この行為が化粧のルーツとなり、次いで、水浴から分化した泥浴を介して、日照によるヒリヒリ感軽減を目的にした泥化粧が始まり、この泥化粧料が化粧品ルーツの地位を確保した事を述べました。

次回は、泥化粧の展開、泥化粧から分化した赤化粧と性について述べる予定です。

（次号に続く）

引用文献

石川梵、躰、週間朝日、二〇〇九・一〇・九版
吉田集而、呪術の実相、民俗学、四二号、一九八七
石川梵、野性の儀式、週間朝日、一九九六・一〇・九版
飯塚明夫　アフリカからの贈り物、赤旗、二〇一一・五・二九版
鈴木守、化粧品技術者のみた化粧品のルーツ、日本化粧品技術者会雑誌、二二巻二号、一九八八
F．ファッキーニ著、片山一道監訳、同朋舎出版、

大頭龍神社と抜里の物語（二）

横山正義

私は様々な資料から大頭龍神社と抜里の物語（一）を作文し、仮説をたてました。次は調べた資料です。

一、大頭龍について

＊「事実証談」誌参照。

静岡県小笠郡誌昭和四十八年二月十九日発行　発行者中村安孝㈱名著出版

昔、大井川の川上なる川根といふ山里にてなべて疫病を煩ひし時、いづくともしらず総髪の人彼所にいたりていひけるには、これより西南にあたりて大頭龍大権現と称神ありその中にも榛原郡抜里村は加茂村よりは山道七八里ばかりもへだたれる所なるが上に言ことゆえよしによりて一村挙りて氏子となりて今も神事の時詣で初穂を奉る。

加茂村氏子に准ずるといへり、さてまた神山の前に山王権現の社ありけるを、参拝の諸人此社を大頭龍権現と思いて祈願するにより、後同殿に大頭龍権現をも並祭れり。彼神山はその社の裏の方正面に門立たる所なり。此事わきまへしれる者稀なるゆえこゝにはあげつ。

文中、著者の仮説として総髪は宗神（ニギ速日命）ではなかったか。

ニギ速日命（大物主命）は古代には天照皇神に比された。女子は神武天皇の后。大神神社の神主三輪氏や物部氏はニギ速日命の子孫。ニギ速日命が祭られているお宮、大神神社、大和神社、石上神社、他田座天照御霊神社、熊野本宮大社、真清田神社、日吉神社、加茂別雷神社、大山祇神社、鹿島神社、貴船神社、国津比古命神社、金刀比羅宮などです。ヤタガラスは太陽神ニギ速日命のお使い神。ニギ速日命はスサノウノミコトの子供で大歳神です。ニギ速日命の妃は長髄彦の妹御炊屋姫。

事実証談の解説

静岡県文化財保護審議会会長・静岡学園短期大学会長若林宮村淳之以下記

国学者としても知られていた中村乗高が、二十年あまりもの歳月をかけて聞き集めた遠州地方を中心にした「事実証談」はもともと遠州天宮（現周知郡森町）の天宮神社の神主であり学者民間伝承や信仰に関わる不思議な話を、文政六年（一八二三）に出版したものである。その後、本書は、遠州地方の奇書の一つとされ注目あつめていたが、版本が殆ど伝わっていないため、一部の研究者の間でしか知られていなかったものである。

＊「先代旧事本記」編者　大野七三　批評者参照。

ニギ速日命の子孫の物部氏氏族のなかに、駿河国造（するがのくにのみやつこ）の片樫石命がいます。

物部氏は軍事、刑罰等を司るもののふ（武士）です。「もの」は精霊、霊魂を意味するので祭祀も行う豪族です。

駿河国造片樫石命造が活躍していたのは成務天皇の御世のことです。

珠流河（するが）国造

志賀高穴穂朝世（しがのたかあなほのみかどのみよ）

成務天皇の御世のことです。（西暦一三一―一九〇年）

物部連祖（ものべのむらじ）の祖（みおや）、大新川命の御子、片樫石命を以って、国造に定め賜ふ。

ニギ速日命は天神御親より「瑞宝十種」（このなかに蛇のヒレがありましたのでニギ速日命・大物主命は蛇なのです）を授けられ、三十二人の従者と二十五部の物部（軍団）を従えて、天の磐船にのり、河内の国の河上、斑鳩（いかるが）の峰に天下り、さらに現在の奈良県桜井市三輪山付近に住まわれ、大和に御東遷されました。神武天皇はニギ速日命の統治権の証である「瑞宝十種」の継承によって大和を統治せられ、初代天皇に御即位されました。

著者の仮説ですが、駿河国造（するがのくにのみやつこ）片樫石命が大頭龍権現に大物主命を奉ったのではなかろうか。疫病は大物主命の御心であったのでしょう。

そして

＊日本書紀参照。によれば大物主命は蛇だったのです。

駿河地方に古以上奉られている大井神社は蛇が奉られています。

片樫石命は物部氏が北九州から鍛造、鋳型技術者を招いたので、金鋳土（溶鉱炉）の技術を習得した神ではなかったか。

鉄を溶かすには高温が必要で硬い樫の木、姥樫（うばめがし）などが適していたのではなかろうか。

溶鉱炉は硬い石でないと割れてしまい、溶鉱炉の役目を果たせません。

＊「古事記」参照。鉄の神について

「天の安の河の河上にある天の硬石をとってきて、天の金山の真金を取ってきて、鍛人の天津マラをさがし、鋳造の石凝姥命（いしこりどどめのみこと）さがし二人に言いつけて、鏡を作らせた。」とあります。
そして鍛人の神天津マラは天孫降臨をはたしません。鋳造の石凝姥命のみ天孫降臨いたしました。
島根のたたら製鉄の出土鉄器の数は北九州の十分の一未満です。そこにはなにか原因があるのでしょう。原料鉄鉱石が大陸中国から流入したのではなかろうか。九州の産鉄技術をもっていたのが、物部氏です。
古事記では鉄の神は石凝姥命。先代旧事本記では駿河国造は片樫石命で名前の中に、硬い樫即ち「うばめがし」と硬い石が入っています。片樫石命は鉄の神ではないかと、門外漢の私は仮説をたてました。

二、物部氏について

静岡県の物部氏の支配が遠淡海、久努、曽我、庵原、伊豆であり、城飼郡（菊川南部）の支配者が居なかったので、駿河の統治者が遠江の東部に進出したのではないか。

＊「遠江古蹟図絵」　神谷昌志　㈲明文出版社　平成三年一月十日発行参照。
大井川
駿遠の境川なり、ただし、遠州に付く。川を越えても領分の村所々有り。
大井川は駿河と遠江の境であり、川を越えても領分があったというのです。
大頭龍は大井川の西、遠江ですが、大井川を超えた駿河の領分であったのではなかろうか。著者の仮説です。
島田市抜里と菊川市大頭龍神社を結ぶ道は信仰の道であるとともに、古代の鉄の道でもあったことが予測されます。
物部氏については、古代、天皇家の側近として、活躍するのですが、曽我氏によって滅ぼされ、古事記、日本書紀を編纂した、藤原氏によって歴史上からも抹殺された民族です。その足跡は先代旧事本記にのみ知ることができます。しかし江戸時代の学者が先代旧事本記について、のちの世に編纂されたもので信用できる著ではないと烙印をおされてしまい、歴史がとざされてしまいました。
大頭龍は元来、物部氏（ニギ速日命）が創建した神社ではなかったか。
物部氏の子孫大三輪氏が大神神社の神主で、大物主命（蛇）を奉っていました。
駿河に百社以上奉られている大井神社の祭神は蛇で、蛇、即ち大物主命です。
大頭龍神社は蛇、龍にゆかりがあることを想像される、神社の名前です。

物部氏は、当時、最先端の鉄の技術者を九州北部から招いていました。
大和の大神神社は産鉄集団の守り神です。
天照御霊神社はニギ速日命が九州方面から従えてきた鋳物師・鍛冶師がニギ速日命を奉ったお宮です。

三、抜里とはどんなところか。

大井川の中流西岸で、本来なら遠江です。しかし駿河の領分であったのではなかろうか。筆者の仮説です。
＊「字訓」より　白川　静　㈱平凡社参照。
抜里は抜く里の意味
山くずれの地形を「ぬけ」とよぶことが多い。また「ぬき」「のぎ」ともいう。
抜里は蛇崩（じゃくずれ）の上に集落がなりたっています。蛇崩れで鉄鉱脈露出していたのではないか。
＊「遠淡海地誌」　一九九一年十二月一日発行　原本編著者　山中豊平。
編者・発行　山中真喜夫　製作協力　静岡教育出版社印刷　長田文化堂参照
明治大正時代抜里という地名でした。
① 赤島。大井川に沿った仲積層を島といいました。
赤島あり。上手川の氾濫で土砂が堆積して赤くみえたところから赤島と言った。
＊日本地名百科事典　白井勝也　㈱小学館参照。
参考、赤谷（赤島と由来は同一ではないか？）
新潟県新発田市鉱山宿場集落。一八九九年官営八幡製鉄所の直営第一号の鉄山となり赤鉄鉱を産出
② 金鋳土（かないど）、金鋳土街道などという地名あり。
＊風土記世界と鉄王神話　吉野裕子昭和47年三一書房参照。
砂鉄より鉄をつくる仕切られた空間＝溶鉱炉。
＊角川日本地名大辞典　日本地名大辞典編集委員会竹内理三参照。
抜里内鍛冶屋村あり。
江戸期より明治二十二年遠淡海地誌、抜里には東村、市場村、西村、鍛冶屋村があり戸数八十、村高二百八十石年貢金納。永高四十九貫余。

四、現在、大頭龍神社に祭られる神

出雲大社、大山午（くい）命、大物主命等を祀る。江戸時代、大神神社、諏訪大社と同じで山神として奉られていました。

『参考文献』
「事実証談」　中村安孝　㈱名著出版
「字訓」　白川　静　㈱平凡社
「角川日本地名大辞典」編者角川日本地名大辞典編集

委員会　竹内理三　発行者角川春樹
河と人が創豊かな民族・文化　平成二十九年十一月
十八日講演資料　大井川中学校長　矢澤和宏
「先代旧事本記」　大野七三　批判社
「古事記」　三浦佑之　㈱文芸春秋社
「風上記世界と鉄王神話」
吉野裕子　三一書房（昭和四七）
「日本地名百科事典」　白井勝也　㈱小学館
「遠江国風上記伝」　内山真龍
「遠淡海地誌」　中山豊華　㈱名著出版
「遠江古蹟図絵」　神谷昌志　㈲明文出版社

世界の国旗から学ぶ（第七回）

ソ連崩壊で誕生した国々と中央アジアの五カ国。
《特別編：ピョンチャン五輪とメダルの国》

米村典紘

はじめに

第六回に付録したカラー印刷の国旗の色ついて、先生方から「付録にあるサウジアラビアの国旗の色は？」「カタールの国旗は紫色ですか？」などのご質問を頂きました。

本文ではサウジアラビアの国旗はイスラムの緑色、カタールは早稲田大学のスクールカラーの小豆色なのですが、残念ながら付録のカラーに、その色イメージは出ていませんでした。人間は、見た目の色が優先し、文中に文字で書いた色は消されてしまうのです。

印刷会社が悪い訳ではありません。小生の我儘で、「まんじ」の２７２ページの内、一枚だけ「縮小したカラー印刷」にし、それを全体の中に取り込む手間を考えると、常識以上のコストが掛かったうえ、国旗本来の色では無くなってしまうのです。

その為、今まで通り、国旗の色は文字で書き、付録には国旗のデザインが分かりやすく成るという目的で、白黒の国旗を付ける事に致しました。最近の世界地図帳は、多色印刷機で印刷していますので各国の国旗が鮮明な色で載っています。御手数をお掛けしますが、世界の地図帳をお手元に置きながら、新たな発見を楽しんで頂ければと願っています。

又、小生が友人などに配布する「まんじ」には自宅のカラーコピー機でコピーしたものを挟んで配布しています。合評会ご参加の先生方にも、同様に一枚ずつ配りたいと思っています。

感動のピョンチャン五輪

２０１８年２月にピョンチャンオリンピックが開催され、日本中が感動の渦に巻き込まれました。何といっても、男子フィギュアで、羽生結弦選手と宇野昌磨選手の金銀獲得は、期待以上で、不愉快なニュースに慣れてしまった私達に、大きな感動と無心の喜びを与えてくれました。更に日本女子スケート陣の活躍、スピードスケート５００メートルで小平選手が金メダルを獲り、ライバル韓国の李選手を慰め、褒め称える姿は、五輪精神そのものでした。ソチ五輪の代表にもなれなかった高木美帆選手の金、銀、銅メダル獲得の偉業。妹の陰にいた姉の高木菜那選手が、団体パシュートだけではなく、女子マススタートで頭脳的レースの末、二つ目の金メダルをとり「美帆だけじゃなく、菜那もいるんだぞ」と満面の笑顔で語った場面。その他に、前回五輪から、優勝候補と騒がれながら、メダルが取れていなかった高梨選手の銅メダルが決まった瞬間、同僚の伊藤選手が駆け寄って祝福していた映像も微笑ましく印象的でした。新種目、男子ハーフパイプで惜しくもジョーンホワイト選手に敗れ、二大会連続の銀メダルとなった平野歩夢選手の現代っ子らしい淡々とした表情と低音で落ち着いたインタビュー。男子モーグルでこの種目、日本人初めてのメダリストとなった原選手の嬉しさ溢れる笑顔。スキーノルディック複合ノーマルヒルで渡部暁斗選手の死闘による銀メダル。最後は、女子カーリング５人組（ＬＳ北見チーム）が成し遂げた劇的な銅メダル、流行語「そだねー」と「もぐもぐタイム」を生み、そのチャーミングな姿は、日本のみならず、韓国にも多くのファンを生んだと報道されていました。

小生の「国旗から学ぶ第一回」は、「リオ五輪の金メダル獲得した国々」で始まりました。第七回は特別編として「ピョンチャン五輪」でメダルを獲得した国を書き加える事にしました。

【番外：ピョンチャン・パラリンピック：日本選手の活躍】

続いて行われたパラリンピックで、日本は十個のメダル（金３：銀４：銅３）を獲得、オランダ、スイス、イタリア、ノルウェーなどのアルペン・ノルディック強豪国を抜き去り、国として８番目のメダル獲得国となりました。その主役が一人の女子大学生、村岡桃佳選手でした。彼女は、４年前のソチ五輪でメダルゼロに終わった事に奮起し、早稲田大学のコーチに指導を懇願、コーチも大学受験に合格する事を条件にコーチする事を約束していたそうです。見事合格し、大学側もアスリート障害者を受け入れる為、設備を見直し、全面改装したそうです。

彼女は、期待に応え、金メダルを含む出場５種目全部

に、メダル獲得という偉業を成し遂げました。他のパラリンピアンの活躍も、私達に、大きな感動を与えてくれました。圧巻は、アルペン回転の視覚障害者部門という競技種目です。オリンピックのアルペン回転競技場は、氷壁の様な急斜面を、先導者の声だけを頼りにポールの間を滑り降りる競技です。（風の音や、観客の声が邪魔をすると、競技は出来なくなります。心の中の応援です）私達は、目をつぶって歩くだけでも恐怖を感じるのに、それを競技として楽しむ姿に、胸を打たれました。優勝は、フランスのマリー選手、日本の本堂杏実選手は１３位でしたが、大健闘でした。今回の結果で、日本が障害者に対する福祉国家への道を、確実に歩んでいる事を感じる事が出来たパラリンピックでした。

冬季オリンピックと英国

ピョンチャン五輪で、一番多くのメダルを獲得した国は「ノルウェー（金１４：銀１４：銅１１）」の３９個でした。ノルディックの本場ですから納得するとしても、それ以上に夏のリオ五輪で活躍し、米国の次に多くのメダルを獲得した英国（金２７：銀２３：銅１７）が、ピョンチャン冬季五輪では金１：銅３個に終わった事に、私は不思議に思ったのです。

１９２４年に第一回の冬季オリンピックが、フランスのシャモニーモンブランで開催され、ピョンチャンが２３回目となります。しかし、英国での開催は一度もないのです。開催国の内訳は、米国が４回で一番多く、フランス３回、日本、イタリア、ノルウェー、カナダ、オーストリア、スイス、各２回、ユーゴスラビア、ドイツ（ナチス）、ロシア、韓国が各１回で、あの英国が、一度も開催国になっていないのは何故なのでしょうか。（うち２回の開催が、第二次世界大戦で中止）

英国民にはノルディックもアルペンも人気がない事が要因の一つですが、地形、気候も大きく関係しているのだと思いました。英国の地形を考えると、スコットランドの北にある、ベンネヴィス山（１，３４４ｍ）の標高が一番高く、次はウェールズのスノードン山（１，０８５ｍ）です。気候は、メキシコ湾流の暖流が流れていることもあり、余り雪が降りません。適した開催場所がない事も理由なのだろうと思いました。

英国は、ラグビー、サッカー、クリケット、などの陸上スポーツを生んでいった国家でしたが、雪にはあまり縁がないのかもしれません。

そもそも、ノルディックの由来は北欧スカンジナビア地方（ノルウェー、スウェーデン、フィンランドなど）の生活の中で、クロスカントリー、ジャンプ競技が生まれたスポーツ。

アルペン競技は、アルプス周辺国で、滑降、大回転など、

こちらも日常生活の中で生まれた競技なのです。オランダにおけるスケートも同様でした。（カーリングはスコットランドで生まれたという説があります）

日本にスキーはいつ頃伝来したのか？

日本に競技スキーが伝来したのは、１９１１年（明治４４年）１月１２日、オーストリア・ハンガリー帝国陸軍のテオドール・エドレル・フォン・レルヒ少佐が、今の新潟県上越市で日本陸軍将校達にスキー技術を教えた事が始まりだと云われています。

スケートの起源は旧石器時代まで遡るとも云われ、こちらも生活の中で物を運ぶ為に、獣骨を加工したブレードを使っていたようです。興味深い事は、ヨーロッパで、労働者は「如何に早くは目的地に着くか」でスピードスケートを、貴族階級は「如何に優雅に滑るか」でフィギアスケートが発展していったと云われています。

ピョンチャン五輪のメダル獲得国（未紹介国は太字）

メダル獲得数を金メダル、銀メダル、銅メダル数の多い順で列挙しますと、

ノルウェーが一番で、②ドイツ（１４２号）③カナダ（１４２号）④米国（１４２号）⑤オランダ（１４２号）⑥スウェーデン（１４２号）⑦韓国（１４２号）⑧スイス（１４３号）⑨フランス（１４２号）⑩**オーストリア**⑪日本（１４２号）の順で、続いて、⑫イタリア（１４２号）、⑬ロシア個人参加（１４２号）、⑭チェコ（１４３号）、⑮**ベラルーシ**、⑯中国（１４２号）、⑰**スロバキア**、⑱**フィンランド**、⑲英国（１４２号）、⑳ポーランド（１４２号）、２１位にハンガリー（１４２号）迄が金メタルを獲得した国々です。

銀メダル獲得国は、豪州（１４２号）の２個、スロベニア（１４３号）、**ベルギー**の１個で、スペイン（１４２号）、ニュージーランド（１４２号）が銅メダル２個、カザフスタン（１４２号）、**ラトビア**、**リヒテンシュタイン**が銅メダル１個でした。

まんじ未紹介の国は太字にした、ノルウェー、オーストリア、フィンランド、ベラルーシ、ベルギー、ラトビア、リヒテンシュタインの七か国ですが、ベラルーシとラトビアは「旧ソ連から独立したヨーロッパの国」の欄で書かせて頂きます。

ノルウェー王国（金１４：銀１４：銅１１　８２，３３０ドル）国旗制定１８２１年

ノルウェーとドイツは金メタル１４個で並びましたが、銀メタルの数がドイツは１０個なので、銀１４個のノルウェーがナンバーワンとなりました。

ノルウェーはスカンジナビア半島の北海岸線の部分３８６千㎢の国家で人口は５２７万人、国民の幸福度が高い立憲君主国家です。元首のハラール五世（グリュックスブルグ家）は、ヨットのオリンピック選手でした。（早稲田大学から名誉法学博士号を贈られている程のインテリ元首です。）

ノルウェーの国旗を見ると、国家誕生の歴史が反映された国旗となっています。デンマークの国旗（赤地に白いスカンジナビア十字）の白十字の部分にスウェーデン旗の青色のスカンジナビア十字を入れた近隣国、かつての宗主国に配慮した国旗なのです。（青の色合いは少し異なります）。しかし、その歴史は、建国当時の理想と現実のギャップに翻弄されたものでした。

「中立政策」を表明したノルウェーの苦悩

１３８０年～１８１４年までの４３４年間は、デンマーク王国の属国でした。１８１４年～１９０５年の９１年間はデンマーク王国が、ノルウェーをスウェーデン王国に譲渡した為、スウェーデン王国の属国となりました。そして１９０５年にスウェーデンとの確執の中で独立を果たしました。

その様な経験から、ノルウェーは国是として「中立政策」を掲げ、中立を堅持すれば、国家の安全は維持出来るものと思っていました。（ダイナマイトを発明したノーベルは、スウェーデン人でしたが、世界平和を願うノーベルの遺言で、ノーベル平和賞の選定だけをノルウェーに委託したのも、そのような背景が要因の一つになっていました。）

１９１４年に勃発した第一次世界大戦では、比較的無傷であった事から、ノルウェーの中立政策は正しかったと考えられ、１９３０年台末まで戦争の可能性は「中立宣言」によって守られると思っていました。

そこに、第二次世界大戦が勃発、良質なスウェーデン産鉄鉱石のドイツ輸入ルートを巡って、イギリスはノルウェー沿岸に機雷を、それに対してドイツはユーボート作戦を展開しました。

１９４０年突然、ヒットラーは中立国デンマーク・ノルウェーの占領作戦を実行。ノルウェーには、大国と戦う軍事力はなく、対空高射砲などの自衛兵器も殆どありません。壊滅的な被害を受け、数日で、ドイツ占領下となり、ノルウェーのホーコン国王は英国に亡命しました。

時は過ぎ、ご存じの様に、連合国の勝利により、傀儡政府関係者達は、戦争裁判にかけられ、ホーコン国王は凱旋帰国を果たしました。

「中立政策」の国是はその後にも引き継がれている為、現在でも、ノルウェーはＥＵに加盟していません。

最近の国際情勢がいたる所で険悪化していますが、英

国とロシアの関係悪化に、両国に挟まれたスカンジナビア諸国は、どの様に対応してゆくのでしょうか。

【ご参考】バイキング

ノルウェーは、バイキング海賊の歴史と思われがちですが、そもそも、バイキングとは、どの様な意味なのでしょうか？

9～12世紀に、北西ヨーロッパの海岸地帯で海賊的交易を行っていたノルマン系種族で、ノルウェーの入り江（ヴィーク、英語ではBAY）に住む人々と云うことから、バイキングと呼ばれる様になりました。彼等は後に、イギリス、フランスのノルマンデイーや、アイスランド（アイスランドの国旗はノルウェー国旗の赤と青を変えた国旗）などに渡り、その地を支配していきます。

オーストリア共和国（金5：銀3：銅6　45，230ドル）国旗制定1984年

アルペン競技の花と云えば、滑降、スーパー大回転、大回転、回転などですが、オーストリアはマルセル・ヒルシャー選手がスーパー大回転と大回転、男子アルペン複合で3つの金メダルを獲得し、アルペン大国の健在を示しました。

オーストリアの歴史は、13世紀～20世紀前半まで、650年もの長期に亘って栄華を極めたハプスブルグ家について、ご存じの方は多いと思います。ハプスブルグ家は、スイスとオーストリア辺境伯国からが始まりでした。その後、オーストリア公国→大公国→帝国→オーストリア・ハンガリー帝国→第一共和国→アンシュルツ（ドイツによる併合）→1945年以降現在の第二共和国と繋がっていきます。

国旗は1191年の第三次十字軍に参戦したレオポルド5世の白い軍服がベルト部分を残してイスラム教徒の返り血で真っ赤に染まった事に由来し、横柄で赤、白、赤の二色旗となり、白い部分が血に染まらなかったベルト部分だと云われています。1230年頃の反乱旗として使用したのが始まりの様です。オリンピック、国連を含め現在は横柄で、赤：白：赤の二色旗を使用していますが、国事などの正式行事には、中央にハプスブルグ家の双頭黒鷲の紋章（現在は単頭の黒鷲）を描いた国旗を使用しています。

注：単頭の黒鷲は頭に王冠（自治都市を意味）を被り、両足には向かって左に鎌（農民）と右にハンマー（労働者）を握り、その両足には断ち切られた鎖（ナチスドイツからの開放）がぶら下がっています。一般には紋章なしの国旗が使用されています。

【ご参考】ハプスブルグ家

ハプスブルグ家は、スイスのハプスブルグに城を築いた一貴族でした。ルドルフ一世（1273年～1291年）が神聖ローマ帝国の皇帝に選出された事が大帝国を築く始まりでした。その後、ボヘミア、オーストリアを征服、更に東へと拡大していきました。15世紀から16世紀にかけて、同家は政略結婚で、勢力の拡大をはかっていったのです。カール6世の娘マリア・テレジアは23才でオーストリア女王として即位、16人の子供を産みました。その内の末娘で、フランスのルイ16世と結婚したマリーアントワネットも政略結婚でした。彼女がフランス革命で断頭台の露と消えた事は、「ベルサイユのバラ」でご存じの方も多いと思います。又、フランツ・ヨーゼフ一世（1848年～1916年）に15才で嫁いだエリザベートの場合は、国民からは絶大な支持を得ていましたが、息子は自殺、本人もイタリア湖畔で無名の人物により殺害され、悲劇のヒロインとなりました。夫のヨーゼフは第一次世界大戦中に亡くなり、その二年後にハプスブルグ家支配の時代は幕を閉じたのです。

フィンランド共和国（金1：銀1：銅4　44，730ドル）国旗制定1978年

フィンランドのメダルは、ノルデイック種目の男子50Kクロスカントリークラシカルでのイーボ・ニスカネン選手が金メダルと、女子30Kクロスカントリークラシカルでクリスタ・パルマコスキ選手の銀メダルでした。

フィンランドの国土は33万8千㎢の比較的平坦な国土ですが、四分の一は北極圏に入ります。北欧諸国（スウェーデン、ノルウェー、デンマーク）との違いは、王国ではなく、共和国である事。人種的にもノルマンではなく、エストニア、ハンガリーに近いスラブ系である事です。

産業は狩猟、林業、通信機器、携帯電話の「ノキア」に代表される精密機器などですが、近年では「ノキア」も、韓国企業にとって替わられています。

日本で良く知られている「サウナ」は、フィンランドが発生ですが、何といってもトーベ・ヤンソンの児童文学「ムーミン」を生んだ国として有名です。

国旗は白地に青のスカンジナビア十字と云うシンプルな国旗ですが、オフィシャルに用いる時は青いスカンジナビア十字のクロス部分に赤地に金色のライオンの国章が描かれる事になっています。白は雪を、青は湖を表しているそうです。

フィンランドの公用語はフィンランド語94％、スウェーデン語6％となっています。

特にフィンランドの南西部にある、オーランド諸島（6，500超える島）は、スウェーデン語を公用語とした、非武装中立の自治州で、州の旗は、スウェーデン国旗のブルー地に黄色い十字の中に赤い十字が入ります。ノルウェー国旗の色違いですが、フィンランド共和国の自治州としての旗なのです。

【ご参考】フィンランド人

フィンランド人はスカンジナビア半島では、異なる人種である事はわかりますが、「アジア人」と云い切る人がいます。先日の合評会で「トルコのボスポラス海峡が、アジアとヨーロッパの境目とツアーガイドが説明していた」とのお話がありました。ボスポラス海峡より西側にあるマルマラ海、ダーダネルス海峡、キプロスは当然西側だからヨーロッパなのか?という疑問がでてきます。おそらく、ガイドさんは、トルコ共和国内の行政区分で、「バルカン半島につながる行政区分に入りました」との意味だろうと思います。東京都と神奈川県の県境にある多摩川に架かる丸子橋を、車で渡る途中にナビゲイションが「神奈川県に入りました」と教えてくれる様に。つまり行政区分であり、国家区分であれば、国境による分け方になります。国としての区分は、トルコはアジア区分であり、ロシアはヨーロッパ区分なのです。でも、観光的には、ボスポラス海峡の橋を渡っている途中で、「ヨーロッパに入りました」の方が感動的である事は間違いないと思います。

同様に、フィンランド人はフィンランド人でありアジア人ではありません。確かに、ウラル山脈あたりがウラル語を基としている事に異論はありませんが、バルト・フィンと呼ばれるフィンランド人や、エストニア人、マジャール人のハンガリー人が同系である事は間違いではありません。アジア、ヨーロッパを知性学的分類で分ける意味がどの程度あるのでしょうか。人類の起源が、ホモサピエンスだとして、脱アフリカを目指し世界中に散らばったとすれば、人種による争いや、国家による争いなどは、そろそろ終りにする21世紀であるべきではないでしょうか。企業が自由競争により「強者適存」の時代になり、「共存共栄」が終わろうとしている現在、国家も「強者適存」が当たり前になりつつあり、「○○ファースト」ではなく、「人類ファースト」で何故考えられないのかが、問われる大きな波が必要な時代ではないでしょうか。

ベルギー王国（41，860ドル：国旗制定1831年）

ピョンチャン五輪では、スケート男子マスタードで、銀メダル1個を獲得しました。

ベルギーの歴史には、ヨーロッパの小国であるが故の試練が数多くありました。当初はフランク王国の一部、その後、ハプスブルグ家の支配、スペイン領、オランダ領、オーストリア領を経て、1831年に独立を果たしています。

王国として独立はしましたが、国民の言語はバラバラで、独立当時から言語問題が悩みの種となっていました。その為、1993年に国家体制を、ワロン（オランダ語）、フラマン（フランス語）、ブリュッセル（ドイツ語）の三つの地域政府による連邦国家を形成する事により、言語問題を解決しようとしたのです。その結果、君主制でありながら連邦国家となっている珍しい国家となりました。

ベネルクス三国という言葉を時々聞きますが、ベルギー、オランダ（ネーデルランド）、ルクセンブルグ、それぞれ頭文字を集めた造語です。三国を合計した国土面積でも、ドイツの五分の一、フランスの九分の一しかない小国の集合体なので、ベネルクス三国を一つの地方として呼んでいます。

ベルギーの首都ブリュッセルは欧州連合（EU）の主要機関が多く置かれている為、「EUの首都」とも云われています。EUの主導国はドイツとフランスなので相互に牽制し、中立国のスイス、ノルウェーあたりが良いのでしょうが、未加盟国に本部を置く訳にはいかず、ベルギーが最も適当と考えられたのではないでしょうか。

国旗は、フランスの三色旗にならい縦三色旗、色彩はベルギーのブラバント公家の盾紋の色（黒地に黄色のライオンが赤い舌を出している紋章。）を使い、旗竿側から縦に、黒（力）：黄色（充実）：赤（勝利）の三色旗です。ドイツ国旗とは色は同じですが、縦と横の違い、色の配列が異なります。ベルギー国旗の特徴としては、縦横の長さが2：3の国際基準ではなく、13：15で正方形に近い国旗となっています。

リヒテンシュタイン公国（118，000ドル：国旗制定1982年）

リヒテンシュタインはアルペンスキー女子スーパー大回転で銅メダルを一つ獲得しました。

スイスとオーストリアの国境にある世界で6番目の小国（日本の宮古島程の面積160㎢）、立憲君主制とはいえ、君主が無能な場合、君主を退位できる憲法がある民主的な国家です。議会は一院制で25名の議員定数、民法はオーストリア民法を使用、刑法、通貨はスイス刑法とスイスフランを使用、外交と防衛もスイスに委ねた合理的な国家体制となっています。

タックス・ヘイブンの為、外国企業のペィパーカンパニーが多く存在しますが、近年は精密機械、医療などの

産業が成長産業となっています（労働者の多くは近隣諸国からの越境）。国民に対する所得税、相続、贈与税はゼロなので、世界の富裕層がこの国の国民になりたがっています。（一人当たりのＧＤＰは世界一）

国旗は横柄の上から、青と赤の二色旗で旗竿側青の部分に侯爵位を示す金色の王冠が描かれている。（当初は二色旗でしたが、１９３７年に侯爵位の王冠を配した）青と赤はヨセフ・ベンツエル皇太子の制服の色でした。現在、青は空の色、赤は暖かい暖炉の火、金色の王冠は国民、君主が一体である事を象徴しています。

【ご参考】ヨーロッパの王族とは、その国の支配者、又は支配者から一部の地域を任されている者を云い、下記の称号が与えられています。例えばリヒテンシュタインの王冠について、侯爵位と書きましたが、当初は国境を任されていた辺境伯でありました。辺境伯は一代限りなので、その上のmarquessとなりましたので、侯爵なのだろうと思います。オランダ国王も、元は辺境伯でした。

【ご参考：男性爵位】

ヨーロッパ王族は大公（grand duke）公爵（duke prince）親王（prince）侯爵（marquess）辺境伯（margrave）伯爵（count）子爵（viscount）男爵（baron）

【ご参考：ヨーロッパのミニ国家】

リヒテンシュタインは世界で6番目に小さな国家ですが、ヨーロッパにはその他に、どんな小国家があるでしょうか。

1番小さな国家：バチカン市国（０，４４㎢：東京ディズニーランドの広さ）国旗制定１９２９年

カトリック教の総本山で、経済は寄付と観光によるもの。起源は2世紀にセント、ペテロ（キリストの最初の弟子）の墓がある事に由来、8世紀に教皇領として栄え、現在の国民は８００人程で、聖職者とスイス人の衛兵がその大半を占めます。

国旗は左右の長さがスイス同様の1対1の正方形。旗竿側から、縦柄黄色と白の二色旗（衛兵の帽章の色から由来）、白の部分には、カトリックを象徴する法王の冠（三重の冠）とそれを支える金銀を支える「セント・ペテロの鍵」を交差させたもの。三重の冠は法王が持つ三つの権力（司祭権：司牧権：教導権）を表わしています。

【ご参考：正方形の国旗】

正方形の国旗は、バチカン市国とスイス連邦の二か国

です。正方形に近い国旗は、ベルギー（１３：１５）ニジェール（６：７）モナコ（４：５）デンマーク（２８：３７）があります。本来国旗は縦２：横３が原則で、オリンピックや国連に使用する時は全て２：３に合わせることになっています。

2番目の小国：モナコ公国（２㎢：皇居二つ分）国旗制定１８８１年

由来は１２９７年にグリマルディー家（grimaldi）が同地区を占拠したことによるもので、１８６１年に独立。１９５６年、ハリウッドの大女優グレースケリーがレーニエ三世と結婚したことで、一躍有名な国となりました。現在のアルベール二世はグレースケリーの息子という事になります。

国旗は、横柄（赤：白の二色旗）で、グリマルディー家の色に由来します。この国旗は、インドネシア国旗と構図、色とも同じなので、問題になりました。モナコ国旗が１８８１年制定に対して、インドネシア国旗制定は１９２２年なので、モナコ側に分があるのですが、モナコの正式国旗には、紋章が入る事を考慮し、モナコ側がインドネシアに譲った形で落ち着いた状態となっています。

【ご参考】（世界の最少国3番目：ナウル共和国（２１㎢：港区）４番目：ツバル（２６㎢：品川区）は、いずれも太平洋上のパプアニューギニア近辺の国）

5番目の小国：サンマリノ共和国（６１㎢：世田谷区）国旗制定１８６２年

３０１年にセント・マリヌスがキリスト教の布教活動をこの地で始めたことが、サンマリノ（セント・マリヌス）の始まりで、世界最古の共和国といわれる。国旗は横柄で、白とライトブルーの二色旗、白は平和とティターノ山（７４９ｍ）の雪、ライトブルーは自由と空の青を表しています。

公式の場での国旗は、金色の王冠と、その下に三つの要塞が描かれ、左側を月桂冠のリースで、右側を樫の枝のリースが囲み、下部の標語リボンに自由（宗教的迫害から逃れてきた自由を意味する）と書かれた国章が入ります。

人口は3万2千人。外交と国防は、ほぼイタリアに依存。国家財政は観光資源（ティターノ山とサンマリノの歴史的地区が世界遺産になっている）と切手、コインの販売により成り立っています。

いろいろと寄り道をしましたが、以上までが、ピョンチャン五輪に因んだ紹介です。

ソビエト連邦崩壊後の独立国とロシアとの関係。

ソビエト連邦とは、ロシアを主体にした15か国の連邦国でしたが、事実上ロシアの支配下にありました。その為、独立した後の14か国とロシアとの関係が、現在どの様な関係にあるのか、興味深いところです。

ヨーロッパで、最もロシアに近い親密国はベラルーシ（143号で紹介：5，600ドル）だけです。バルト三国のエストニア、ラトビア、リトアニア、は、EUよりの中立的立場にたっています。ウクライナ（142号で紹介：2，310ドル）ルーマニアの隣国モルドバ（旧モルダビア）は、反ロシアで戦闘状態にもなりました。

ソビエト連邦崩壊後に独立したアジアの国々はどうでしょうか？

括弧内の三桁の数字は「まんじ」記載号数で、その後ろは一人当たりのGDPです。

ジョージア（143号：3，810ドル）アルメニア（143号：3，760ドル）、アゼルバイジャン（143号：4，760ドル）、カザフスタン（旧カザフ142号：8，710ドル）ウズベキスタン（旧ウズベク143号：2，220ドル）、タジキスタン（旧タジク143号：1，110ドル）トルクメニスタン（旧トルク：6，670ドル）キルギス（1，100ドル）の8か国が独立しました。

その内、親ロシアは、カザフスタンと、ロシアからの資源に頼る、アルメニア、キルギス、タジキスタンの国々です。中立的なのが、ウズベキスタン、トルクメニスタン、そして、反ロシアがアゼルバイジャン（イランとの関係から不調）、一時戦闘状態となってしまったのが、ジョージアです。

（括弧書きに2016年度の一人当たりのGDPを書きましたのは、タジキスタン、ウズベキスタン、キルギスなど、あまり高い国ではない事をご理解下さい。）

対ロシアの独立後の経緯は、各国ともそれぞれに複雑なパワーバランスの上にあり、一概に色分け出来る状況ではありません。

しかしながら、国旗をみて興味深い事は、旧ソビエト連邦15か国の国旗には、必ずハンマー（工業労働者）鎌（農民）金色の星（労働者の団結）赤色（人民開放と革命）が描かれていましたが、1991年独立後の15か国の国旗にはハンマー、鎌、を描いている国旗はロシアを含め一ケ国もありません。この事は、旧ソ連邦の独裁的社会主義に嫌気を感じていた事を物語っているのではないでしょうか。

中央アジアの特色。

中央アジアの五か国とは、キルギス、タジキスタン（143号で紹介）ウズベキスタン（143号で紹介）トルクメニスタン、カザフスタン（142号で紹介）の

五か国を云います。はじめに中央アジアの起源についてお話を致します。

人間が馬を乗りこなす技術は、中央アジアの草原からと云われています。中央アジアの北部は、広大な草原、そして南部には豊かな水があり、イラン系、トルコ系（テユルク）モンゴル系の遊牧民族は、その機動力を使って、国力を強めていったのです。南部に住むイラン系はウズベキスタンのサマルカンドやブハラを拠点に、北部草原に住むトルコ系、モンゴル系集団は、優れた軍事力によって南部オアシス地区を征服していきました。長い歴史の過程の中で、フン族の大移動、ゲルマン民族の移動のきっかけとなりました。（途中に民族が混血し、○○系民族という言葉が生まれてきました。）

中央アジアのもう一つの特色は、イスラム化です。以前はゾロアスター教（紀元前6世紀頃ペルシャ人が信仰。拝火教とも云われる）やキリスト教、仏教でしたが、当時はイスラム文明が先進的であった為、中央アジアの多くの民族が、イスラム教に改宗していきました。現在でも、アフガニスタン・中央アジア諸国はイスラム教国となっています。

【ご参考：大和民族のルーツ】

最近の調査研究で、大和民族は大陸から渡って来ただけではなく、北はシベリアから、南は海を渡って来たとの説が発表されています。

【ご参考：カスピ海は海なのか？湖なのか？】

ソ連邦が解体するまでは議論にもならなかった、「カスピ海」の国境問題が浮上しています。カスピ海を取り囲む、ロシア連邦、カザフスタン、アゼルバイジャン、イラン、トルクメニスタンの5か国で大きな問題となりました。当初は、ロシア連邦とイランから、「湖」なので、分割には馴染まない為、「五か国共同管理すべきである」との意見が出されましたが、アゼルバイジャン、カザフスタン側は「海だ」と主張「地下の大陸棚を含めて各国のセクターに分割すべきだ」と対立をしていました。

法的解釈によれば、「海」なのか「湖」なのかで答えが違ってくるのです。湖なら、共同管理であり、海なら領海の概念が発生するわけです。現実は、カスピ海に流入する川は130近くありますが、「流れ出る川はないので湖だ」との説。しかし、カスピ海は3000万年前には海でしたが、南のパンゲニア大陸から分離したシンメリア大陸が、地殻変動で移動し、今のイラン辺りに衝突し、海が閉じ込められ、「海水を含んだカスピ海」が生まれたので海だとする説。その両説があり物事を複雑にしています。更にカスピ海は海底資源が豊富なうえ、採掘も容易なため、関係各国にとっては重要課題として

取り組んできました。その結果、4回に亘る関係国会議で決まった事は、関係国以外は参加させない事、武力解決はしない事、沿岸25カイリまでを行使する水域とする（国家主権15カイリ、漁業権10カイリ）が決まってまいりました。

しかし、法的地位の問題は、イランの反対により合意の見通しは立っていません。反面、五か国合意ではなく、カスピ海北部では、ロシアの合意によって、関係二か国が、海底分割と鉱床開発を推進する方針となり、カスピ海南部地区も外資参加プロジェクトが稼働する方向に転換しつつあります。

カスピ海や、イラン高原地帯が地殻の変動とプレート同士がぶつかり合う高熱によってもたらされる希少金属などの資源に期待がもてますが、新たな資源が発見されれば、又ややこしくなるのが、国際問題なのです。

トルクメニスタン（1991年ソ連から独立：670ドル国旗制定：1992年）

建国以来、ニヤゾフ大統領のカルト的独裁が続き、1999年には終身大統領となりましたが、2006年、彼の急死により、ベルデムハメドフ大統領が議会の全会一致で選出されました。

ニヤゾフ大統領時代は、個人崇拝、非民主主義政策から、人権問題など、世界の批判がありましたが、新大統領は、選挙による民主的政策に転換、カルトイメージを払拭しました。

豊富な天然ガスと、綿花生産を基盤に、安定した経済成長を続けています。主要援助国は西側諸国で、米国、ドイツ、英国、日本などですが、天然ガスは、ロシア、中国などにも供給し、「中立外交」を続けています。

国旗は緑地ですが、旗竿側から少しずれて、縦幅に5種の絨毯模様が描かれています。その模様が特に複雑な為、世界で最も複雑な国旗と云われる由縁となっています。その右側上部には五つの星とイスラムの三日月が左向きの白ぬきで描かれています。

五つの星と絨毯模様はトルクメン人の主要民族（テケ、エルサル、ヨムド、ギョクレン、サロル）と国を構成する5州を意味しています。

また、1997年に永世中立を宣言した事から、五つの絨毯模様の下に平和の象徴であるオリーブの枝を加え、国旗の比率も国際基準に合わせ、2対1から3対2に変更しました。

タジキスタン共和国（1992年ソ連から独立：1，110ドル国旗制定1992年）

143号でリオ五輪の金メダル国として紹介済みでしたが、若干補足させて頂きます。

タジク系民族が85％、ウズベク系民族12％の、中央アジアで唯一イラン系民族の国家です。他の4か国（カザフスタン：ウズベキスタン：トルクメニスタン：タジキスタン）はデユルク（トルコ）系国家になります。（中国の新疆ウイグル自治区は東トルキスタンとも呼ばれデユルク系です）

独立直後から、イスラム勢力を含む、反政府勢力との、内戦が発生。大統領は独立以来、選挙で選ばれたラフモン（旧姓ラフモノフ）大統領の政権が続いています。政情は、隣国のアフガニスタンの情勢が大きく影響していましたが、タリバン政権崩壊後、治安上の脅威は低減しました。しかし、テロ、武器、麻薬問題や、シリア難民問題など難題が山積みです。

歴史は、紀元前4世紀、アレキサンドロス大王の制圧以降、土着のイラン系民族が住み続け、この地方の言葉でイラン系民族のことを、「タジク」と呼んでいた事から、タジク人が住む所として「タジキスタン」となったのです。

その為、国旗も、タジク人が、ペルシャ系である所から、イラン国旗横柄（緑（1）、白（1）、赤（1））同様、上から赤（1）白（2）緑」（1）とし、タジキスタンが、ペルシャ系民族であること表しています。

中央の広い白の部分には、タジクの冠帽と、幸運を呼ぶ七つの星を黄色で描かれています。

キルギス共和国（1991年ソ連から独立：1，100ドル：国旗制定1992年）

キルギスは、中央アジアの天山山脈の北、東側は中国に隣接、国土の三分の二が標高三千メートルにある山岳国家。1991年にキルギス人による初めての独立国となりました。文化的には、羊毛、綿花など、隣国モンゴルと似ていますが、水銀、タングステン、アンチモンなどの希少金属の開発が見込まれています。

国旗は、キルギス人の総意で決める事にこだわり、公募により制定しました。旗色は赤で、中央には遊牧民特有の移動式テント（ユルト）の天井と黄色い太陽の火炎を図案化したものです。

ソ連から独立した、ヨーロッパの国

バルト三国はいずれも、1991年の9月6日に独立をいたしましたが、エストニアは他の二国とは異なる語族で、フィンランドの欄で述べた通り、フィン・ウラル語族です。ラトビア、リトアニアはバルト語族なのです。

三国の中で最も歴史のあるリトアニアは、中世から大公国として存在していましたが、ポーランドに連合され

た時期や、18世紀に当時の強国オーストリア、プロイセン、ロシアに国が分割され、エストニアは一時、消滅した時期もありました。

そして、第一次大戦以降に、「バルト三国」という新たな枠組みで登場してきます。しかし、1940年から1991年までバルト三国は、ソ連邦国として飲み込まれてしまいます。その結果連邦崩壊後には、三国が相次いで独立していきました。

東ヨーロッパのハンガリー、チェコスロバキア、ルーマニアは旧ソ連の社会主義から脱皮しますが、ルーマニアの勢力範囲であったモルドバは1940年にソビエト連邦が軍事占領しソ連邦に組み入れてしまいました。その後、ソ連邦崩壊後、独立しました。

【参考：ロシアの飛び地】バルト海に面し、リトアニアとポーランドに挟まれたロシアのカリーニングラードという飛び地があります。

エストニア共和国（1991年独立：17,750ドル国旗制定1990年）

エストニアはバルト三国の最北部に位置し、日本の約九分の一の国土、人口は130万人（エストニア人が70%、ロシア人25%）の国家です。

国旗の歴史は1918年にロシア革命時に独立した時に、エストニア学生協会によって作成されましたが、1940年に、ソ連邦に強制併合され、ハンマーと鎌、星がある国旗にかわりました。ソ連邦崩壊時に以前の国旗が復活しました。横柄三色（上から、青：黒：白）で、この配色構成は他にはなく、シンプルでスマートな国旗です。青はエストニアの自然（空：海：湖）と希望、忠誠心を、黒は大地と祖先、民族の苦難の歴史を意味し、白は雪と高潔さ、自由への闘いを表しています。

ラトビア共和国（1991年独立：14,630ドル国旗制定1990年）

バルト三国の中央に位置、日本の六分の一の国土に200万人（ラトビア人60%、ロシア人28%、ベラルーシ人4%）の国家です。

ピョンチャン五輪は、ボブスレー男子二人乗りで、銅メダルを獲得しました。

国旗は1990年に現在の国旗として制定されましたが、旗の原型は1279年まで遡り、エストニア同様、ソ連邦併合時に消滅し、1990年に復活しました。1279年、ドイツ騎士団の侵攻にたいして、果敢に戦ったラトビア義勇軍の指揮官の白い軍服がベルト部分を残し血の色に染まった色に由来しています（オーストリアの国旗の由来と同じですね）。血の色はえび茶色で、「ラトビアの赤」と呼ばれ、上下をえび茶色で、中央の横帯は白のシンプルな国旗となっています。白は「誠実：栄誉：権利」を、えび茶色は民族独立の為に流された血を意味しています。

リトアニア共和国（1991年独立：14,770ドル国旗制定1989年）

バルト三国の南部に位置する人口285万（リトアニア人84%：ポーランド人6%、ロシア人5%）、国土は、北海道の8割の国家です。

ロシア人の割合が他の2国に比べ極端に少ない事は、バルト三国の内、最も激しい独立運動があった事を物語っています。

前述したように、リトアニアは独立後、消滅した時期もあり、1991年9月に独立する2年前から、横柄で黄色：緑：赤：の三色旗が作成されていました。黄色は太陽と小麦と自由への開放を、緑は森林と希望、赤は愛国者の血と勇気を表しているそうです。黄色：緑：赤の配色は汎アフリカ色ですが、類似旗としてガーナ国旗（赤：黄色の中央に黒い星：緑）エチオピア国旗（緑：黄色の中央に紋章：赤）があります。リトアニア国旗には紋章はなく、横柄三色の順番も違う為問題にはなりませんが、アフリカの国の国旗ではないので、間違わない様に、ご注意下さい。

ナチス当時、リトアニアのカナウスに（首都ビリニュスの西側にある、リトアニア第二の都市）日本領事館がありました。その領事であった杉原千畝氏が発行した、「命のビザ」は、迫害されたユダヤ人6千人近くの命を救った事が、報道されて、映画化されました。

【ご参考：バルト三国の一人当たりのGDP】

紹介済みの旧ソ連から独立した国の一人当たりのGDPは、ロシア一人当たり14,680ドル、ベラルーシ7,664ドル、：ウクライナ4,163ドル、と比較すると、バルト三国（エストニア約18千ドル：ラトビア約15千ドル：リトアニア約15千ドル）と、GDPが高い事が分かります。

モルドバ共和国（1991年独立：2,120ドル：国旗制定1990年）

ウクライナとルーマニアに挟まれたルーマニア系民族が78%の国家、（ウクライナ系8%：ロシア系6%：トルコ系4%：その他）主にキリスト教。1349年ボグダニア公国建国（後のモルダヴェア公国）、1475年にシュテファン大公が即位すると最盛期になりますが、その後、オスマン帝国、ロシア帝国、ルーマニアな

の領有となります。１９４０年にソビエト連邦軍に占され連邦国となりましたが、１９９１年ソ連邦崩壊により、国名を現在のモルドバ共和国に変更し、独立を果しました。

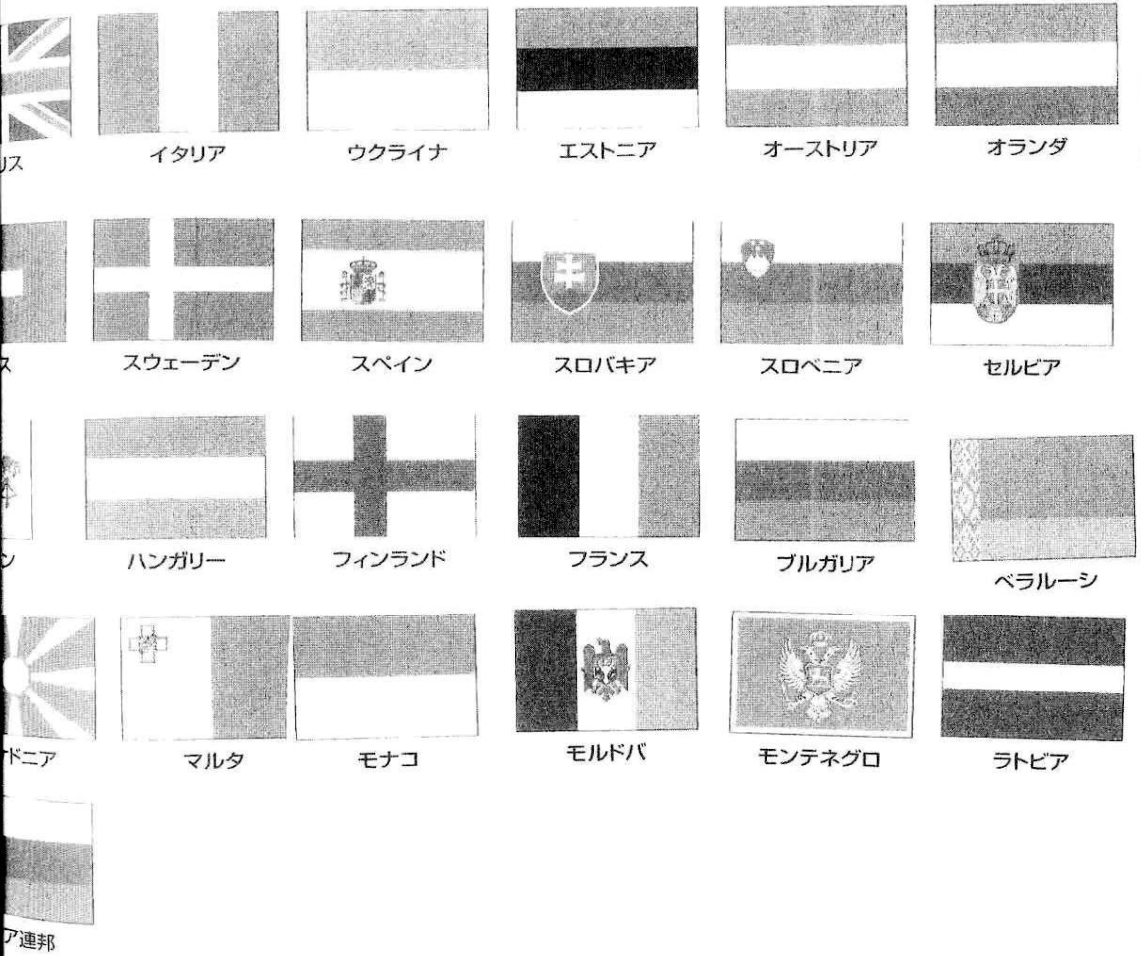
経済状況はヨーロッパの最貧国とも云われ、日本の９日の人道支援国となっています。隣国のルーマニアは国に次ぐ支援国であり、モルドバ側も、民族的には同の為、より深い関係を模索いたしています。

その為、国旗もルーマニアを意識し、旗竿側から、縦三色旗（ブルー：黄色：赤）で、ルーマニアと同じで。正式には、黄色部分にモルダヴェア公国の紋章、（くばしに十字架を銜え、両足にオリーブとキリスト教の を握った鷲などの紋章）を描いた国旗を使用していま

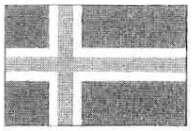
つづく。

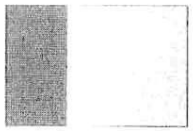
【参考文献】
ヨーロッパ上巻：西ヨーロッパ　中央アジア経済図説　下社学　東洋書店
フローラ・ルイス（訳：友田　錫）河出書房
ノルウェーと第二次世界大戦　フィンランドを知る為の４４章　百瀬宏・石野裕子　明石書店
オーラヴ・リスト（訳：池上佳助）東海大出版会
スウェーデンを知る為の６０章　バルト諸国の歴史と現在　小森宏美・橋本伸也　東洋書店
村井誠人　明石書店
東欧ヨーロッパ
百瀬　宏　自由国民社

【付録】ヨーロッパ諸国の国旗（白黒）



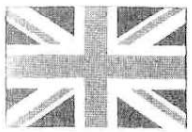
ヨーロッパ諸国の国旗

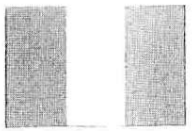

アイスランド

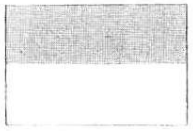

アイルランド

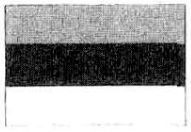
アルバニア

アンドラ

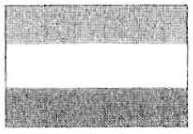

イギリス

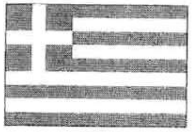

イタリア


ウクライナ


エストニア

オーストリア

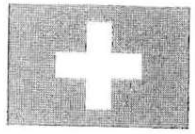

オランダ

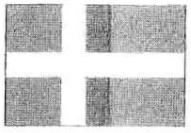

ギリシャ

クロアチア

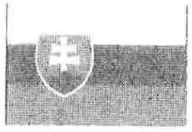
コソボ

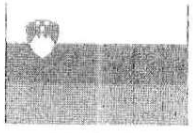
サンマリノ

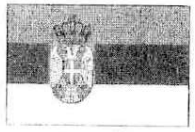

スイス

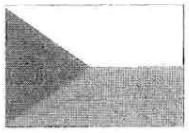

スウェーデン

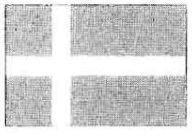
スペイン

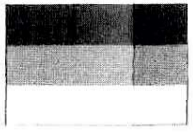

スロバキア

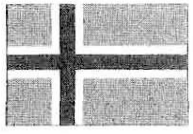

スロベニア


セルビア

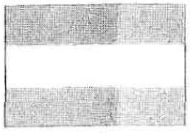

チェコ


デンマーク

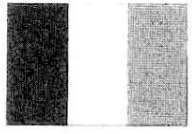

ドイツ

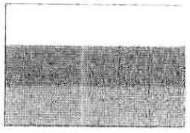

ノルウェー

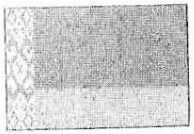
バチカン

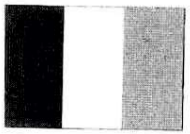

ハンガリー

フィンランド

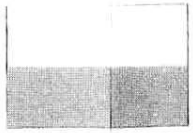

フランス

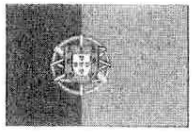

ブルガリア


ベラルーシ

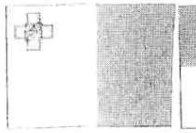

ベルギー

ボスニア・ヘルツェゴビナ


ポーランド


ポルトガル

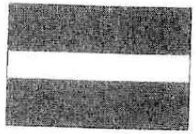
マケドニア

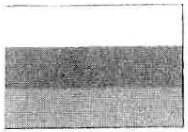

マルタ

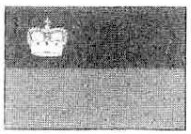
モナコ

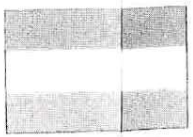
モルドバ

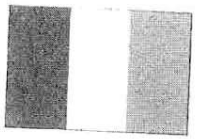
モンテネグロ

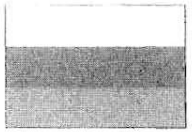

ラトビア


リトアニア


リヒテンシュタイン


ルクセンブルク


ルーマニア


ロシア連邦

明治時代の著述者　渋江保の一生（その十三）

山本勉

第九期　博文館時代③（東京）一八九〇年
（明治二十三年）三月～一九〇一年（明治三十四年）

森鴎外の『渋江抽斎』から浮かびあがってくる渋江保像は教育者、ジャーナリスト、著述者である。これまでの渋江保研究では藤元直樹の『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』において書誌学的研究が行われているが、渋江保が明治期にどのような活動をしてきたのかその詳細をまとめた研究はこれまでのところみられない。唯一『境　創刊号』の『渋江保伝』において自由民権運動に関わった人物として渋江を取り上げている。

稲田雅洋は『渋江保伝』、「3渋江保への視点」において「私には渋江保という人物は、単に鴎外への資料提供者であったということとは別に、単独でも取り上げてみるに足る人物であるように思える。少なくとも彼の生涯は、鴎外の作品によって有名になった渋江抽斎という人物の嗣子であるということとは、無関係に論じたとしても、日本近代史の内容を僅かなりとも豊かにしうる内容を含んでいると私は考えるのである。」[1]と述べている。ここで稲田の言う「豊かにしうる内容を含んでいる」とは何であるのか。この点について稲田は『渋江抽斎』を引用して次のように述べている。「「保さんは抽斎の第七子で、継嗣となったものである。経を漁村、竹逕の海保氏父子、島田篁村、兼松石居、根本羽嶽に、漢医方を多紀雲従に受け、師範学校に於て教育家として養成せられ、共立学舎、慶応義塾に於て英語を研究し、浜松、静岡にあっては、或は校長となり、或は教頭となり、旁新聞記者として政治を論じた。しかし最も大いに精力を費したものは、書肆博文館のためにする著作翻訳で、その刊行する所の書が、通計約百五十部

の多きに至っている。その書は随時世人を啓発した功はあるにしても、概ね時尚を追う書估の誅求に応じて筆を走らせたものである。保さんの精力は徒費せられたと謂はざることを得ない。」ここから浮かび上がってくる保の像はi教育者、ii新聞記者、iii博文館専属の文筆家という姿である。i、iiが前半生であり、iiiが後半生であるということができるが、作品ではiiiについては触れられておらず、i、iiが（『渋江抽斎』の：引用者）98から110で描かれている。保が教員や新聞記者をしていた時期というのは、後で詳しく見るように、一八七〇年代後半から八〇年代であり、日本近代史上の呼び名をあえて使うとすれば自由民権期といわれる時代である。じっさいに、保がこの時期に、民権運動と関係をもったことは、この作品からだけでも窺うことができる。彼は、三河の宝飯中学校長時代や東京横浜毎日新聞記者時代に、民権運動の陣営に身を置き、それなりの活動をしたのである。」[2]、また、渋江と民権運動との関わりについて稲田は次のようにも述べている。「私もまた渋江保を単なる教師・ジャーナリストとしてだけではなく、民権運動とのかかわりをもった一人の人物としてとらえてみたいと思う。つまり私の関心は、"民権家としての保の活動はどのようなものであったか"というところにあるのである。より具体的に書けば、①民権運動に至る以前の保の思想形成、②三河地方での民権活動のよう、③『横浜毎日新聞』での主権論争・普通選挙論争での保の役割、④『東海暁鐘新報』での活動のよう、というようなことである。」[3]

稲田雅洋は『境　創刊号』・『境　第二号』に渋江保伝の（上）と（中の一）を執筆しているがその生涯についての伝記は未完となっている。

稲田の提起した民権家としての渋江の活動はどのような活動であったのか、そして民権家としての思想は如何にして形成されたのか。博文館時代③においては、自由民権運動や社会の変遷、渋江の転籍地との関わりを博文館で執筆活動を始めた頃までを中心に一覧表にまとめた。ここに「渋江保と自由民権運動」についての今後の調査研究の基礎資料として掲載する。

注記

（一）稲田雅洋『境　創刊号』（佐々木啓之　一九八三年九月一日）六頁

（二）稲田雅洋『境　創刊号』（佐々木啓之　一九八三年九月一日）六頁

（三）稲田雅洋『境　創刊号』（佐々木啓之　一九八三年九月一日）七頁

渋江保自由民権運動関連年表

西暦	元号	年齢	居住地	渋江の動向	政治・政党・経済・社会の動き
一八七二年	明治五年	一五歳	東京		福沢諭吉、『学問のススメ』初版刊行
一八七三年	明治六年	一六歳	東京		明治六年の政変
一八七四年	明治七年	一七歳	東京		民選議員設立建白書・佐賀の乱
一八七五年	明治八年	一八歳	東京・浜松		讒謗律・新聞紙条例公布
一八七六年	明治九年	一九歳	浜松		神風連の乱・秋月の乱・萩の乱等士族反乱
一八七七年	明治一〇年	二十歳	浜松		西南戦争
一八七八年	明治一一年	二一歳	浜松		愛国社再興
一八七九年	明治一二年	二二歳	浜松・東京		国会開設運動開始
一八八〇年	明治一三年	二三歳	東京		自由党準備会発足・国会期成同盟成立
一八八一年	明治一四年	二四歳	東京・豊川	宝飯中学校赴任・武田準平と進取社結党・最度の喫驚執筆（函右日報十月七日官有物払下げ事件について）	板垣退助らにより自由党結党・明治十四年の政変・開拓使官有物払下げ事件・秋田事件・帝政党結党・松方デフレ・前島荒川舌禍事件（静岡）・十月一日、前島豊太郎の攪民社から自由党系「東海暁鐘新報」創刊（静岡）
一八八二年	明治一五年	二五歳	豊川・東京	進取社武田準平暗殺	大隈重信により立憲改進党結党・立憲帝政党結党・福島事件

一八八三年	明治一六年	二六歳	東京	慶応義塾教師となる・東京横浜毎日新聞奇書家となり外山正一と普通選挙論争
一八八四年	明治一七年	二七歳	東京	京浜毎日新聞編輯員
一八八五年	明治一八年	二八歳	東京・静岡	現浜松市天竜区春野町へ転籍・英学研究所にて英語教授
一八八六年	明治一九年	二九歳	静岡	静岡英語専門学校にて英語教授・見付宿政談演説会（函右日報三月一六日渋江保演説）
一八八七年	明治二〇年	三〇歳	静岡	静岡英華学校・静岡文武館にて英語教授・東海暁鐘新報主筆（主筆は一月二七日から。三月二七日に東海暁鐘新報最終号発刊、その後絵入東海新聞に四月四日から号数が引き継がれる）・暁鐘新報主筆（一二月二〇日号外号発刊）
一八八八年	明治二一年	三一歳	静岡	中江兆民、静岡で渋江と会う・渋江塾開校・暁鐘新報（一月四日より正式に発刊）

新聞紙条例改定・高田事件

自由党内急進派が貧農層と激派を形勢して過激事件を起こし、内部対立により解党。群馬事件・加波山事件・秩父事件・飯田事件・名古屋事件

大阪事件

大同団結運動起こる・静岡事件

伊東博文を中心に天皇主権憲法草案秘密裏に検討・三大事件建白運動・保安条例公布・新聞条例改正

大隈重信を第一次伊藤内閣の外務大臣として入閣させ立憲改進党を大同団結運動から離脱させる

一八八九年	明治二二年	三二歳	静岡	博文館に履歴書・写真・文稿寄示
一八九〇年	明治二三年	三三歳	静岡・東京	博文館にて執筆開始
一八九一年	明治二四年	三四歳	東京	
一八九二年	明治二五年	三五歳	東京	
一八九三年	明治二六年	三六歳	東京	
一八九四年	明治二七年	三七歳	東京	
一八九五年	明治二八年	三八歳	東京	
一八九六年	明治二九年	三九歳	東京	
一八九七年	明治三〇年	四〇歳	東京	
一八九八年	明治三一年	四一歳	東京	

大日本帝国憲法発布・二月帝国憲法発布直後、後藤が黒田内閣に入閣し大同団結運動はその中心的存在を失い一挙に冷却

大井　憲太郎は中江兆民達と再び旧自由党勢力の糾合を目指し立憲自由党を結成・帝国議会開設

立憲自由党、自由党に改称

立憲改進党、国民協会と結んで対外硬路線を唱える

立憲改進党、国権拡張路線主張・日清戦争

日清戦争

立憲改進党、進歩党を結党し解党

進歩党と自由党が合同し憲政党になり大隈重信が内閣総理大臣、内相板垣退助となる

筆休め

匠　克仁

私は以前に五十才にして発達障害が判明したことを書いた。執筆中の私の脳裏をよぎったのは、ある中国古典の言葉である。

「五十にして四十九年の非を知る」

これは『淮南子』で蘧伯玉が言ったものである。

五十才になって四十九年間を無駄に生きたという悔恨の言葉だと思っていた。

失敗だらけの間違った人生を送ってきたと人生の後半期に気づくということだと解釈していた。

例えば、会社人間が五十才で解雇されて、家庭を省みなかったため妻から愛想をつかされ退職金を半分持って逃げられ、子供はニートで働かず、マイホームに住宅ローンが二十年も残っているというような人生である。

私は会社人間でもなければ、家庭生活を築いたこともないが、発達障害を知らずに五十年も生きてきた。

半世紀も自分の脳の構造が他の人と違うことを知らずに、他の人の価値基準に無理矢理に合わせようとして生きてきたような気がする。

なお、この言葉は三省堂の大辞林に次のように説明している。

「人生の終わり近くになって振り返ってみると、過去の自分の人生は、後悔することばかりだ。人生とは、失敗の連続であるということ」

このように辞書に載っているくらいだから、私だけの理解だけでなく、一般的にもそのように解釈されている。

ところが、この解釈は間違っている。

本当は、全く正反対で、五十才での積極的な生き方を肯定する言葉である。

私は五十にして「五十にして四十九年の非を知る」の非を知る。

五十になると、自分を反省しなくなってうぬぼれてしまう。それまでの人生にまだ点すべきところがあったと自分を律して更に成長しよう。

というのが正しい解釈なのである。

前後を含めて、文章を引用すると、次の通りである。

「蘧伯玉は年五十にして四十九年の非を知る。何となれば、先なる者は知を為し難く、而して後なる者は攻を為し易ければなり」

先なる者（四十九才まで）は知ることは難しく、間違えやすい。後なる者（五十才以降）は過去の過ちを知っているので、攻める、正しいことをし易いのである。

攻でなく、功という字を使っているのを見つけたが、誤字でなければ、成功しやすいと解釈できる。

これだけだと根拠に乏しいが、蘧伯玉は六十才の言葉も残しており、それが証拠である。

「六十にして六十化す」

六十才になっても変化し、成長し続けるという積極的な表現である。六十才でこの意味であれば、五十才ならもっと積極的な意味であろう。

人間は五十才になっても成長し続けるという肯定的なメッセージなのである。

私一人の勝手な解釈だと誤解されないように、中国思想の大家の安岡正篤の文書を引用する。

◇

【六十にして六十化す】

『淮南子』に、「蘧伯玉　行年五十にして四十九年の非を知り、六十にして六十化す」という名言がある。

これは人間に通じて来ないとわからない。年をとるにつれて身に沁む言葉だ。

人間は五十歳にもなれば或る程度人生の結論に達する。と同時に心のどこかに自らを恕す、肯定しようとする意志が働く。

その時に「五十にして四十九年の非を知る」、今までの自己を一度否定することは、これは非常に難しい。

だが過去の非を知り、自分が自分に結論を下すことは、新たにやり直すことであって五十になってやり直し、六十になればなったでまた変化する。

いくつになっても溌剌として維新してゆくことだ。

『安岡正篤　一日一言』（致知出版社刊）

考えてみれば、この言葉を初めて知ったのは、安岡正篤の著作からである。大学三年生のときに同氏の本を十数冊を読んでいたので、二十一才前後である。

私は、五十にして「五十にして四十九年の非を知る」の二十九年の非を知る。

二十才程では五十才の気持ちが分からず、正しい解釈の本を読んでおきながら、誤った解釈をしていた。

今回この言葉の解釈を変えたことで私自身は、今までの人生が無駄でなくて、今後の人生が有益だと考える。

安岡氏の言う通り五十、六十になっても溌剌と生きていこうと思う。

淮南子はあまり有名でないかもしれないが、「人間万事塞翁が馬」「蟷螂の斧」や「八紘一宇」の八紘の出典である。

簫伯玉という人物は論語にも登場する。

孔子が「君子なるかな簫伯玉」と称えるほどの人物の言葉である。

国家に道徳があれば仕官するが、国家に道徳が無ければ退いて才能を隠す人である。

孔子が高く評価している同時代人である。その人が五十才で人生が失敗だなんて言う筈がない。その言葉が二千年後の日本に残るわけがない。

その孔子も「五十にして天命を知る」と言っている。

私は知命の年に天命を知ったのである。私にとっての天命とは生まれつきの脳機能の特殊性というものである。

もっとも私の四十代は不惑どころか惑い続けていた。論語通りの人生にはなっていない。おそらく六十才になっても耳従うことなく、七十才で心の欲するところに従ったら矩（ルール）を超えてしまうかもしれない。

※

今回からは、まんじに相応しい文章に書くようにと気持ちを入れ直し、書き始めた。

ところが、一人称も私ではしっくりこない。

今まで書いていて、ぼくらしい文章でない。一人称をぼくで書いた方がスムーズに筆が進む。

私だと外国語で書くような感じで、いつものように筆が進まない。

私は「脳裏をよぎる」と書いたが、ぼくなら「脳の裏表をよぎる」と書いただろう。

僕だったら、文章も漢字が多くなり、よぎるを「過ぎる」または「過る」と漢字で書いてしまう。脳をとおりすぎるか、脳があやまっているみたいである。

僕（やつがれ）では、しもべと下僕を連想するので、卑屈な文になる。所詮は身分の低い僕の書く文である。

過去に過ごしたときの過ぎた過ちや過を過った。そんな言葉が脳裏を過った。過去に一緒に生活したときのいきすぎたミスや科（とが＝罪）を謝った。

過ちは誤ちと同じで、過誤という言葉もある。過料と科料はともに罰金であるが、過料は行政法上の、科料は刑法上のものである。過ったは、謝ったであるが、あやまるというのは、あやまりを認めることがもともとの意味である。

そういえば、例の女性人事マネージャーに話しかけると、「ボク、なに？」なんて言われていた。二人称でボクを使われていたのである。

彼女にとって、ぼくは子供みたいで、舐められていたのである。どうせ舐められるなら、舌の方がいい…

…というような文章だからダメなんだ、と匠が書くと、我はたしなめ、俺は馬鹿野郎と罵倒し、儂は昔は真面目だったのにと嘆き、おいらは関係ないと知らん顔をし、小生は深く反省し、某（それがし）は非難し、余は満足し、当方ではわかりかね、あたしは女々しくなり、わいはボケまくり、手前では扱っておらず、麿は下々のことに興味なく、非才は才能がないもので、あっしには関わりのねえこって、自分は絶対に服従し、当職は責任をとらず、拙者は腹を切り、ぼくちんは泣き出し、こちとらは気が短く、俺様は偉ぶり、おいどんはオイコラと怒り、筆者は「作者と別の解釈を読者にされた」と主張して、吾輩は猫であるように体を爪でひっかくのである。

※

筆下し…いや筆休めを思いきってする。といっても、休筆を何も説明せずにするのも変である。といっても、休筆宣言するの失礼である。

筆下…いや筆禍でまんじの品格を下げたくない。ぼくの筆が下した…いや滑って迷惑をかけられない。そのため筆を下した…筆を置いたということで報告を書く。

休筆報告とは自己矛盾すると言われそうである。余談だが筆下しが男性の初体験というのは不思議である。ぼくは筆下しに失敗した。小学生のころの経験である。新品の筆を半分だけでなく、全部ほぐしてしまったのである。

筆というかキーボードが滑って、文章が変になった。

※

最近は近況報告ばかり書いていた。リアルタイムのため客観視できず、エッセイにブレーキが踏めなかった。

実は過激すぎて、今までのエッセイに書けなかったネタがある。そのネタと比べると、はるかにおとなしい内容なので油断した。印刷された、まんじを読むと、我ながら過激で場違いだなあとあきれる。

近況報告は中途半端なので続きを笑いなしで報告する。

勤務先であるが、十二月末で正社員としては事実上の解雇であるが、フルタイムのパートとして残った。

いわゆる雇用形態の変更である。非正規雇用だから、今度こそいつ本当のクビになるか戦々兢々の日々である。

一月の給与がいくらになるのかと不安だった。給料日の一日前に総務から社会保険料を振り込むよう言われた。

一月の給料は0円であった。実質はマイナスである。

一月分の給料は、正社員は一月に、パート社員は翌月の二月に受け取るということらしいのである。つまり平成二十九年十二月の給料は支払い済みだが、社会保険料十二月分が一月に控除できないのである。ぼくは次の月に二ヶ月分を控除してもらうことにした。

二月に今年初めて給料をもらったが、給料計算が間違え二ヶ月分の社会保険料が引かれていなかった。気づかず二ヶ月分引いたと思っても少なくて落ち込んだが、後で二重にショックを受けた。

二ヶ月働いて、やっと貰った今年初めての手取り額は十二万円に届かなかった。今までと同一労働をしているが二分の一をはるかに下回った。社会保険料控除について二回も私の方から指摘して、総務が気づいた。今年の十二月の年末調整でも気付かないのでないか。

心療内科の先生にも相談した。給料が下がっても退職しないで続ける方がいいということである。

発達障害を伝えて再就職しようとしても、最低賃金の時給しかなさそうである。

このあたりの話もいつものように笑い飛ばして書こうとしたけど、筆休めで自粛する。

※

ぼくは平成十三年八月の八一号から、まんじに色々なタイプの文章を掲載させていただいて、十七年目になる。

三戸岡道夫先生の同人誌に参加したいと思ったのは、もっと前で平成二年のことである。

ぼくは平成二年に協和銀行に入社した。同行の副頭取をされた三戸岡先生の著作は出版と同時に読んでいた。銀行をテーマにした単行本は全て初版本で買っていた。

『凄腕人事部長』（平成三年出版）は、今までに読んだ全ての小説の中で最も影響を受けた小説である。

平成三年は協和銀行が埼玉銀行と合併した年である。小説で合併銀行の人事が書かれていて、小説と現実がリアルタイムで入り混じった不思議な感覚で読んでいた。

この小説に登場する草村尚夫という人物に、ぼくは完全に感情移入した。

小説中の草村氏は、ぼくと同じ発達障害（アスペルガー症候群）と診断されると思う。そのような人物が活躍するのが自分のことのように嬉しかった。

ぼくは現在、首切り女性人事部長をテーマで連作短編小説を勝手に自分の世界で書いている。いわば『凄腕人事部長』の女性版である。

主人公は四十六才の女性人事部長であるが、三十代にしかみえない。あだ名は『首切り姫』である。

舞台は家賃保証会社で、ノンバンクの子会社であるが、他社の子会社を買収したものである。

親会社から転籍した彼女が大幅なリストラを実行する際に生まれるドラマである。

『首切りリスト』『死亡割増退職金』『三重ストーカー』『サバイバルナイフ』『オセロゲーム』『リストラ男女差別』『社長の首切り』…などタイトルとストーリーができているが、まだ文章化はされていない。ぼくは首を切られたときに泡のように浮かんだ。

しかし、まんじに相応しい小説かというと、そうでないのが残念である。

脳内にあふれる妄想というか情報を文字へと変換する行為が生きている楽しみである。

まんじ用の原稿は別にぼく…私…吾輩は考え中である。

編集後記

まんじ一四八号も、同人皆様から積極的な寄稿を頂き、内容的にも、紙面の枚数からも、大変ボリュームのある同人誌が出来上がります。編集長として編集の遣り甲斐を楽しませていただいていることを感謝申し上げます。

維持会員の堀内永人氏が腰を痛め、退院はしましたが「西郷ノ局」の継続執筆がままならず今回はお休みとなりました。氏の一日も早い回復と執筆復帰を心からお祈り申し上げます。

横浜山下公園近くの神奈川芸術劇場で劇団四季のミュージカル「ノートルダムの鐘」が四月から八月上旬まで長期間上演されます。ヴィクトル・ユゴー原作の「ノートル＝ダム・ド・パリ」が、ミュージカルでどのように上演されるのか、観るのが楽しみです。

まんじ一五〇号記念号は今年十一月発行です。同人誌の一五〇号発行は同人誌の世界でも類を見ない画期的なことと思います。原稿締め切りは九月二十五日です。同人皆様の記念になりますので、字数は原稿用紙五十枚を目途に、ご健筆を奮われることを期待します。記念号の表紙絵はカラー版で考えています。すでに田寺先生に候補を何点か見せていただくようにお願いしています。

同人三戸岡道夫氏の著作「二宮金次郎の一生」を原作として映画化がすすめられています。四月中旬の読売新聞横浜版に、地元小田原で大名の前で平伏している農民のエキストラを募集したところ、百人募集に二八〇人の応募があったと報じられていました。今秋完成し、来年五月映画館で上映されますのでご期待ください。（鍋）

まんじ第148号

平成30年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045(544)5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町7-1

表紙の絵について
「至誠天に通ず」

田寺怜葦画

まんじ

No.149

2018.8.1

まんじ第百四十九号　目次

李朝史を引継ぐ金正恩の世襲過程 …… 新井　宏 … 4
ユース禁止のユース法 …… 永田俊一 … 16
―トマス・モアとヘンリー八世―
祖国の再建 …… 浅野博文 … 48
内田の国の「七夕」物語 …… 横山正義 … 57
どちりな　きりしたん …… 鍋屋次郎 … 64
短　歌　行雲流水（五十七） …… 石黒修身 … 75
漢　詩　潮汐錄（九十二）《漢詩の流れ80》 …… 鯨（くじら）游海（ゆうかい） … 78
漢　詩　汲深録（十三） …… 松井秀人 … 81
風の泉（第3回） …… 葵　州月 … 83
ロボット雑考（その十一） …… 三戸岡（みとおか）道夫（みちお） … 111
窮極の特攻兵器（三） …… 千坂精一 … 126
人間魚雷『回天』
古い物・遠い夢　名品歴々（茶道史余滴） …… 忠内正之 … 138
私の伊達政宗像を訪ねて（その一） …… 安藤　剛 … 144
性と化粧の物語（十二） …… 鈴木　守 … 159
房総の御一新 …… 山田嘉久 … 168
―大多喜藩と佐倉藩を例に―
「農ある暮らし～私の日常～」(8) …… 古屋富雄 … 177
千家尊福伝（二〇） …… 村上邦治 … 180
「年の始め」と共に逝った明治の巨人
『時評家　新明正道』（評伝その九の三） …… 山本鎭雄 … 201
―「ワイマール文化」の光と影―
明治時代の著述者　渋江保の一生（その十四） …… 山本　勉 … 207
命が命を命ず …… 匠　克仁 … 212
編集後記 …… 編集子 … 214

李朝史を引継ぐ金正恩の世襲過程

新井宏

まえがき

最近、日本でもしばしば紹介されているが、韓国の歴代大統領は退任後、亡命、暗殺、死刑、無期懲役、自殺、収賄罪、職権乱用罪など、例外なく悲惨な処遇を受けている。いくら「大統領の犯罪」に対する正当な処罰と強弁しても、「政治的な報復」であることは誰でも判る。

実は十五年ほど前、韓国の大学にいた頃、『まんじ』九十五号に、韓国大統領の悲劇の連鎖が、李氏朝鮮王朝（李朝）五百年間に繰り広げられた四十数件の政争・報復の連鎖に、あまりにも良く似ていることについて「政争の国」と題して紹介したことがある。

いわば李朝は、儒学者たちの政治勢力の士林派、時代により変遷があり簡単には要約できないが、西人派（老論派、少論派、僻派）、東人派、南人派（時派）、北人派（大北派、小北派）などと称する党派による政争に明け暮れていた。

国王が代われば、国王擁立に貢献した党派が政権を握り、旧派は徹底的に粛清される。そればかりでなく、国王も自己の権力を保持する目的で、しばしば意図的な政権党派の交代「換局」を行った。そのため、政争は常に止むことなく、悲惨な報復劇が繰返されることになったのである。

このような数多くの「政変」の中には党派や人物の固有名詞だけを入れ替えれば、そのまま次に通用するほどよく似ている例が多い。

もちろん日本にも政争は有ったが、同時代の江戸期を通して、李朝のような悲惨な類例を見いだすのは困難なのである。

そんなことを「政争の国」と題して書いた時に、ついでに、その後の大統領の運命についても同じ経過をたどるだろうと予測した。

それから十五年、あにはからんや、その時の大統領、盧武鉉は自殺に追い込まれ、続く保守系の大統領、李明博や朴槿恵は、盧武鉉自殺事件の報復として、収賄・職権乱用罪等で長期懲役の重刑を受ける趨勢にある。別表に歴代大統領の退任後の運命について整理して示す。

韓国の歴代大統領の受難史

第1～3代	李承晩(1948～60)	4·19革命で米国に亡命
第4代	尹潽善(1960～62)	時局に関する事件で司法処分3回
第5～9代	朴正熙(1963～79)	金載圭·中央情報部長により殺害される
第10代	崔圭夏(1979～80)	実権なし
第11·12代	全斗煥(1980～88)	軍事反乱などの罪で死刑宣告
第13代	盧泰愚(1988～93)	軍事反乱などの罪で無期刑宣告
第14代	金泳三(1993～98)	息子の賢哲か韓宝不正事件で懲役
第15代	金大中(98～2003)	息子3名他親族が斡旋収賄罪
第16代	盧武鉉(2003～08)	収賄容疑で検察が捜査中に自殺
第17代	李明博(2008～13)	収賄や横領、職権乱用の罪で起訴中
第18代	朴槿恵(2013～17)	職権乱用なとで懲役24年、罰金18億円
第19代	文在寅(2017～　)	?

そうなると現大統領文在寅の今後を予測することも難しい事ではないだろう。現に、朴槿恵が懲役二十四年・罰金十八億円の宣告を受けた時に、旧執権党（現自由韓国党）の洪準杓代表が、文在寅に向かって「裁判で最もぞっとした人はいま官邸にいる大統領だろう」と述べ、報復ブーメランを警告している。

マスコミも、「大統領の在職中、検察は忠犬として絶対的権力を行使し奉仕するが、大統領が退任すると、新しい大統領のために前大統領を食いちぎる」と韓国的な政治風土について風刺している。

まさに李朝の「士禍」の繰り返しである。沁みついた歴史というものは、新しい時代、新しい制度の下でも大して変わらないらしい。

実は、このように李氏朝鮮王朝（李朝）からの悪しき歴史を受け継いでいる例は、南の韓国の政争ばかりではない。北朝鮮における金正恩の権力継承過程にも李朝の歴史がそっくりそのまま再現されているのである。

すなわち、金正恩の世襲過程と極めて良く似た事例を李朝の歴史に探すと五件も見出だせる。しかもその内の二件は登場人物や宗主国の固有名詞さえ取り替えれば、物語が完結するほどなのである。

北朝鮮は建前上共産主義国家でありながら、三代も世襲を繰り返している独裁国家である。いわば李朝の遺伝

子を引き継いだ「中世的な王朝国家」なのである。

今回はまず、①北朝鮮の第三代金正恩の世襲経過が、②李朝第十五代光海君や、③李朝第十七代孝宗（鳳林大君）の世襲過程にそっくりであったことを示したい。

更には、光海君や鳳林大君の事例も、それ以前の④李朝第三代太宗（芳遠）や、⑤李朝第七代世祖（首陽大君）、⑥李朝第十一代中宗（晋城大君）の世襲過程の繰り返しであったことにも触れておきたい。

もちろん類例が多数あるからと言って、それが将来を規定するわけではない。しかし、南北朝鮮間の数多くの不幸な歴史に目をつむり、表面上の友好ムードを損なわないように細心の努力を重ねていても、歴史は無情であり、また不幸な類例を積み重ねることになるであろう。

北朝鮮第三代金正恩の世襲経過

二〇一〇年六月、金正日総書記は、長男の金正男と三男の金正恩を伴い中国に赴き、金正恩を後継者に決めたことを胡錦濤国家主席に報告した。中国王朝が王位継承に勅許（誥命）を得る儀式である。

その頃、中国は三男の金正恩の世襲に強く反対していた。共産主義国家で世襲が続くことなど理念上あり得ないのに加えて、中国派の長男の金正男を差し置いて、三男の金正恩が継ぐことなど、父家長制が伝統の中国上朝としては認めがたかった。

中国にとって御しやすいのは長男の金正男であった。マカオや香港に活動基盤を持ち、北朝鮮の外貨調達を担当していた正男は、中国の保護下にあり北朝鮮内にも侮れない力を持っていた。李朝の権力抗争史によれば、ここで金正恩は金正男を除去しなければならない。

その最初の試みが、二〇〇九年四月初め、北朝鮮の平壌中心街に位置する「特閣」に、北朝鮮情報機関である国家安全保衛部要員が乗りこんだ「ウアム閣襲撃事件」である。ここは金正男の平壌における根拠地で、主にマカオや香港に住む正男が帰る度に滞在し、知人たちとパーティーなどを楽しむ場所であった。

もちろん保衛部要員たちを送ったのは金正恩だった。父、金正日から後継者と指名されてはいたが、潜在的な脅威である金正男とその追従勢力を無力化させることが急務であった。

そのため韓国マスコミはこの事件を「平壌版王子の乱」と名付けた。「王子の乱」とは、李朝初代太祖の五男芳遠が王世子の芳碩（太祖の正妃の二男）等をクーデターで殺害した事件である。

同じ脈絡で見ると良く判るのが、二〇〇九年末に北朝鮮経済を崩壊直前まで追いやった貨幣改革である。これを仕組んだのが金正恩で、貨幣改革の反対者すなわちマカオにいて、国際金融に通じる金正男に反正恩派とレッテルを貼り、一気に壊滅させる目的によるものであった。

だから二〇一〇年三月に起きた韓国海軍哨戒艦「天安艦」の魚雷による撃沈事件も、十月に南北境界水域に近い韓国の延坪島を砲撃した事件も、正恩の権力確立のためのゲームと見なされているのである。

金正日総書記が亡くなったのは、二〇一一年十二月「視察に向かう列車の中で、心筋梗塞を起こして十七日朝に死亡した」とされている。しかし、米韓当局は衛星情報の分析で、死亡したとされる十七日当日、金正日の専用列車が動いていなかったことを確認している。また前日、金正日が金正恩からの電話に激昂し、その夜、長女宅で泡を吹いて倒れたとの情報もある。

李朝の権力抗争史、すなわち、二十六代の王あるいはその王世子候補者のうち十二名までが毒殺等異常な死に方をしていることに照らし合わすなら、金正恩による暗殺が疑われても当然である。

そして金正恩が政権を受け継いでから大粛清が始まる。

まず二〇一三年十二月、金正日の側近で、金正恩の庇護者役であった叔父の張成沢を対空機関銃で処刑した。張成沢が中国との利権を握っていたからであるが、張成沢の親族はその直系の幼子を含めて全員処刑されている。

続いて二〇一四年には会議中に居眠りをしたとの理由で玄永哲人民武力部長が処刑され、二〇一六年には同じく会議中に眼鏡を拭いたとの理由で金勇進副首相が処刑されている。このほかにも、韓国の国家安保戦略研究院によれば、金正恩が政権に就いてから、三百四十人の処刑が行われたという。

そしてその極めつけが、二〇一七年二月のマレーシアの国際空港における金正男毒殺事件である。これで、金正恩はライバルを完全に消し去った。中国が金正恩の体制を崩壊させても、受け皿が居なくなったのである。

以上のような経過を箇条書きにまとめると次のようになるであろう。

A　先代王の（金正日）は、継承序列劣位の（三男金正恩）を後継者に選んだ。しかし宗主国（中国）は、継承序列優位の（長男金正男）を支持した。

B　（中国）の意向によって地位を追われることを恐れた（金正恩）は結局（金正男）を殺害した。

C　継承権を確保した（金正恩）は（金正日）と微妙な対立関係となる。

D　（金正恩）は政権掌握するや、①反対派を大粛清（張成沢、玄永哲、金勇進ほか三百余名）し、②（中国）の意向に逆らう政策（核兵器や大陸間弾道弾の開発）を採る。

まとめた文章はぎこちないが、（　）内の金正日、金正恩、金正男、張正沢などの固有名詞を、李朝の人物に取り替えると、そのまま利用できるほど類似している。以下にそれを紹介する。

李朝第十五代光海君の場合

李朝第十五代光海君が王世子となったのは、壬辰倭乱（文禄慶長の役）の非常事態に際して、父の宣祖が北の義州まで落ちのびたため、咸鏡道に避難した光海君を分朝とせざるを得なくなった一五九四年である。その直前まで、李朝では王世子冊封問題で深刻な勢力争いを繰り広げていたが、やむなく採った処置であった。

光海君には同腹の長兄臨海君がいたが、壬辰倭乱の際に、李朝へ反旗を翻した民衆によって捕らえられ、加藤清正へ捕虜として引き渡されてしまった。あるいはそのことが影響してかも知れないが、乱暴で激しやすい性格として人望がなかった。

それに対して、光海君はなかなか人望があり、壬辰倭乱の時は、直接戦場を行き来し、実質的に戦争を指揮し、義兵や民衆を励まし、戦後処理にあたっても、権威を築いて行った。それは父親の宣祖にとって、自分よりも民衆から信頼され、人気のある息子と映り、面白くない状況をもたらした。

このようにして、戦時下の非常事態とは言え、いったん王世子に決った光海君ではあったが、「義兵を集めて来い」と死地へ送り出されるなど、問題が一段落したわけではなかった。王世子に冊封するには明の朝廷に報告し「誥命」を受ける必要があったが、明は長男の臨海君がいるとの理由でこれを拒絶した。

その上、宣祖の正妃には嫡子なく、光海君も臨海君も側室の子であった。ところが継妃となった仁穆王后にその後永昌大君が生まれたため、光海君は王世子になったとは言え、その立場は不安定であった。

しかし、職責を着実に果たす光海君に対して、臣下の信頼は篤く、しかも一六〇八年宣祖が亡くなった時に、永昌大君はわずか二歳であり、王位継承の決定権を持つ母の仁穆王后さえも、現実性がないと諦めて、ここに光海君の即位が決定した。

まず王位継承に際し、宣祖の光海君への禅位教書を隠して永昌大君を擁立しようとした柳永慶を配流して殺害した。それだけでは済まなかった。宗主国の明による王位継承への干渉から粛清の嵐が吹き荒れるのである。

明では、中国王朝の意向を無視し、長男の臨海君や正妃嫡子の永昌大君を差し置いて、側室の次男が王位を継承したことに異論が起こり、ついには真相調査団を派遣するという事態にまで発展した。すでに王位は継承されていたのであるから、明の態度は朝鮮と光海君を無視したものであった。

もちろん、明の調査団派遣には背景があり、光海君の王位継承に反対していた小北派が明に要請したことは明らかであった。そのことは光海君を支持して勢力拡大を

図っていた大北派にとってはもはや猶予ができない状況であった。その上、長兄の臨海君は自分が王位を継承すべきだったと公言し、露骨に光海君を誹謗していた。

大北派の中心人物たちは、臨海君が謀反を企んでいるとして死薬を送るように光海君に迫るが、実兄のことでもあり光海君は拒絶する。しかし、大臣達が繰り返し強力に要求を続けると、結局、自身の意志を貫徹する事ができず、流配とせざるを得なかった。その後、臨海君は重臣たちの放った刺客により暗殺される。

臨海君の死は、その後に続く粛清の序幕に過ぎなかった。臨海君の他にも、大北派を脅かす存在としては、小北派が支持する嫡子の永昌大君や宣祖四男信城君の養子の綾昌君が生きていて、その除去が焦眉の急であった。

まず一六一二年には「金直哉の獄事」に絡んで小北派百余名が粛清された。続く一六一四年には「七庶の獄」に絡んで、幼い永昌大君が配流され蒸し殺しにされた。

更には一六一五年には綾昌君推戴事件が生じ、綾昌君はもちろん連座した申景禧なども除去された。そして一六一八年には永昌大君の母仁穆大妃を廃位、幽閉してしまう。これらの過程で大北派が政権を独占し、これに反対する小北派、西人派の勢力は大きく削がれた。しかしやり過ぎであった。

光海君が就任してから間もなく、東北アジアの国際情勢が急変した。後に清となる女真族の後金が一六一六年に建国され、明や朝鮮を圧迫していた。北方への備えは急務であり、壬辰倭乱からやっと立ち直りつつあった李朝にとっては深刻な負担であった。しかも壬辰倭乱への派兵によって国力が疲弊した明からは、後金との戦いに援軍の要請が相次ぎ、いわば後金と明の間で、綱渡り外交を繰りひろげざるを得なかった。

その際、李朝の伝統的な士林派勢力は、理念ばかり先走り、壬辰倭乱で助けてくれた明に報いる「大明事大主義」が大勢であった。その中で光海君が繰り広げた実利外交はむしろ後金を重視し、明に援軍を送りながら、裏では後金に付くものであった。背景には、明が光海君の王位継承に干渉したこともあったに違いない。

光海君は明の援兵要請に応え、姜弘立に一万の兵を与えて出兵させたが、明が不利になると、適当に応戦したふりをして後金に降り、抑留されながらも後金との和議交渉に臨むという巧みな両面外交を推進した。

これにより李朝は明との関係を断つこともなく、また後金から怨みを買うこともなく、後金の情報を得ることが出来た。

その後も光海君は、明と後金の双方との外交関係を維持し実利を優先する外交政策を展開した。ところがこうした光海君の外交政策を批判する士林派が勢いを得る。

現実主義者が憎まれるのは歴史の必然である。その声

は主として儒生や西人派であり、西人派は明に対する徹底した事大主義路線を固守し、仁穆大妃の流配事件を機に光海君や大北派への反撃の準備を始めていた。

これが「仁祖反正」すなわち仁祖のクーデターに繋がり光海君は失脚する。

この流れを金正恩の例にならって要約すると次のようになる。

A　先代王の（宣祖）は、継承序列劣位の（次男光海君）を後継者に選んだ。しかし宗主国（明）は、継承序列優位の（長男臨海君や嫡子永昌大君）を支持した。

B　（明）の意向によって地位を追われることを恐れた（光海君）は結局（臨海君と永昌大君）を殺害した。

C　継承権を確保した（光海君）は（宣祖）と微妙な対立関係になる。

D　（光海君）は政権掌握するや、①反対派を大粛清（柳永慶や金直哉に関連して百余名）、②（明）の意向に逆らう政策（国防強化・後金接近・中立外交）を採る。

李朝第第十七代孝宗（鳳林大君）の場合

李朝の歴史では第十代燕山君と第十五代光海君だけが廟号で呼ばれない王である。いずれも暴君として失脚したからであるが、しかし近年、光海君の評価は、壬辰倭乱により国力疲弊した中、折から勃興した後金（後の清国）と宗主国明の狭間で現実的な施策を採った王として再評価されている。

第十七代孝宗は、光海君を「仁祖反正」によって葬った十六代仁祖の次男鳳林大君である。反正の理由として掲げられたのが、先王（宣祖）の毒殺とか臨海君や永昌大君の殺害とかであるが、主因はむしろ光海君が後金寄りの政策を採っていたことにあった。

仁祖の支持層は士林派の本流、西人派や南人派で、理念的に女真人の後金（清）を見下し「親明背金」を唱えていた。その結果が一六二六年の後金（清）による侵略「丙子胡乱」を招き、仁祖は「三田渡の屈辱」を受け、清の属国に成らざるをえなかった。

その際、仁祖の長男昭顕大君と次男鳳林大君は清の人質とされたが、一六五九年に明が滅亡したことに伴い許され帰国した。

その間、長男昭顕大君は清にもたらされた西洋の文化に接し、親清的な心情になり、反清主義者と烙印を押された仁祖に替り、外交使節的な役割を持つようになっていた。しかし、次男鳳林大君は仁祖と同様に徹底した反清主義者となっていた。

このような状況は仁祖を著しく不安にさせた。長男昭

顕大君が帰国すると王位を譲らなければならないかも知れない。

その背景の中で、昭顕大君は帰国後まもなく病床に臥せ二か月後には全身が真黒くなり変死してしまう。

もちろん正式な記録にはないが、状況証拠から毒殺された可能性が極めて高い。

それは昭顕大君の死の二か月後に、仁祖は臣下の反対を押し切り、新たな王世子に次男の鳳林大君を決めたからである。継承順位から言えば、昭顕大君の十歳になる長男が継ぐべきであったが、逆に昭顕大君の周辺勢力を全員配流したばかりでなく、昭顕大君の妃や長男・次男まで配流の上殺害してしまった。

その後まもなく仁祖は亡くなり、鳳林大君が第十七代孝宗に就任する。孝宗はさっそく親清勢力を追放し、北伐計画（真の目的は反清）を進める。

当時の代表的な親清派勢力は「仁祖反正」に功労のあった金自点であったが、身辺に脅威を感じて謀反を画策したことが暴露し、息子や仁祖の後宮・趙貴人とともに死刑となり、親清勢力はすべて除去されてしまった。

金正恩の例にならって要約すると次のようになる。

A　先代王（仁祖）は、継承序列劣位の（次男鳳林大君）を後継者に選んだ。しかし宗主国（清）は、継承序列優位の（昭顕大君）を支持した。

B　（清）の意向によって地位を追われることを恐れた（仁祖）と（鳳林大君）は結局（長男昭顕大君）を殺害した。

D　（鳳林大君）は政権掌握するや、①反対派を粛清（金自点ら親清勢力を一掃）、②（清）に逆らう外交政策（国防強化と北伐軍組織）を採る。

ここまでが、金正恩の場合のように、宗主国の意向が大きな影響力を持っていた世襲経過である。

しかし、このような王位簒奪の歴史は、李朝の歴史が始まった当時から繰返されていた。

李朝前半の王位継承過程の例

第三代太宗（芳遠）の場合

高麗を滅ぼし、一三九二年に李朝を建国した李成桂（太祖）には、建国前の妻から六人、正妃康氏から二人の男子がいた。その中で太祖が開国直後に王世子に冊封したのが正妃から生まれた八男の芳碩である。

それに対して、前妻から生まれた六人の兄弟、取り分け李朝建国の功労者五男の芳遠は一三九八年に私兵を動員して王世子芳碩と七男の芳蕃を殺害してしまう。李朝の王位簒奪の初例となる「第一次王子の乱」である。その際には芳碩を擁した開国功臣の最大派閥、鄭道伝一派も全て殺害された。

その結果、太祖次男の芳果が第二代定宗となるが、実

は主として儒生や西人派であり、西人派は明に対する徹底した事大主義路線を固守し、仁穆大妃の流配事件を機に光海君や大北派への反撃の準備を始めていた。

これが「仁祖反正」すなわち仁祖のクーデターに繋がり光海君は失脚する。

この流れを金正恩の例にならって要約すると次のようになる。

A　先代王の（宣祖）は、継承序列劣位の（次男光海君）を後継者に選んだ。しかし宗主国（明）は、継承序列優位の（長男臨海君や嫡子永昌大君）を支持した。

B　（明）の意向によって地位を追われることを恐れた（光海君）は結局（臨海君と永昌大君）を殺害した。

C　継承権を確保した（光海君）は（宣祖）と微妙な対立関係になる。

D　（光海君）は政権掌握するや、①反対派を大粛清（柳永慶や金直哉に関連して百余名）、②（明）の意向に逆らう政策（国防強化・後金接近・中立外交）を採る。

李朝第第十七代孝宗（鳳林大君）の場合

李朝の歴史では第十代燕山君と第十五代光海君だけが廟号で呼ばれない王である。いずれも暴君として失脚したからであるが、しかし近年、光海君の評価は、壬辰倭乱により国力疲弊した中、折から勃興した後金（後の清国）と宗主国明の狭間で現実的な施策を採った王として再評価されている。

第十七代孝宗は、光海君を「仁祖反正」によって葬った十六代仁祖の次男鳳林大君である。反正の理由として掲げられたのが、先王（宣祖）の毒殺とか臨海君や永昌大君の殺害とかであるが、主因はむしろ光海君が後金寄りの政策を採っていたことにあった。

仁祖の支持層は士林派の本流、西人派や南人派で、理念的に女真人の後金（清）を見下し「親明背金」を唱えていた。その結果が一六三六年の後金（清）による侵略「丙子胡乱」を招き、仁祖は「三田渡の屈辱」を受け、清の属国に成らざるをえなかった。

その際、仁祖の長男昭顕大君と次男鳳林大君は清の人質とされたが、一六五九年に明が滅亡したことに伴い許され帰国した。

その間、長男昭顕大君は清にもたらされた西洋の文化に接し、親清的な心情になり、反清主義者と烙印を押された仁祖に替り、外交使節的な役割を持つようになっていた。しかし、次男鳳林大君は仁祖と同様に徹底した反清主義者となっていた。

このような状況は仁祖を著しく不安にさせた。長男昭

顕大君が帰国すると王位を譲らなければならないかも知れない。

その背景の中で、昭顕大君は帰国後まもなく病床に臥せ、か月後には全身が真黒くなり変死してしまう。

もちろん正式な記録にはないが、状況証拠から毒殺された可能性が極めて高い。

それは昭顕大君の死の二か月後に、仁祖は臣下の反対を押し切り、新たな王世子に次男の鳳林大君を決めたからである。継承順位から言えば、昭顕大君の十歳になる長男が継ぐべきであったが、逆に昭顕大君の周辺勢力を全員配流したばかりでなく、昭顕大君の妃や長男・次男まで配流の上殺害してしまった。

その後まもなく仁祖は亡くなり、鳳林大君が第十七代孝宗に就任する。孝宗はさっそく親清勢力を追放し、北伐計画（真の目的は反清）を進める。

当時の代表的な親清派勢力は「仁祖反正」に功労のあった金自点であったが、身辺に脅威を感じて謀反を画策したことが暴露し、息子や仁祖の後宮・趙貴人とともに死刑となり、親清勢力はすべて除去されてしまった。

金正恩の例にならって要約すると次のようになる。

A　先代王（仁祖）は、継承序列劣位の（次男鳳林大君）を後継者に選んだ。しかし宗主国（清）は、継承序列優位の（昭顕大君）を支持した。

B　（清）の意向によって地位を追われることを恐れた（仁祖）と（鳳林大君）は結局（長男昭顕大君）を殺害した。

D　（鳳林大君）は政権掌握するや、①反対派を粛清（金自点ら親清勢力を一掃）、②（清）に逆らう外交政策（国防強化と北伐軍組織）を採る。

ここまでが、金正恩の場合のように、宗主国の意向が大きな影響力を持っていた世襲経過である。

しかし、このような王位簒奪の歴史は、李朝の歴史が始まった当時から繰返されていた。

李朝前半の王位継承過程の例

第三代太宗（芳遠）の場合

高麗を滅ぼし、一三九二年に李朝を建国した李成桂（太祖）には、建国前の妻から六人、正妃康氏から二人の男子がいた。その中で太祖が開国直後に王世子に冊封したのが正妃から生まれた八男の芳碩である。

それに対して、前妻から生まれた六人の兄弟、取り分け李朝建国の功労者五男の芳遠は一三九八年に私兵を動員して王世子芳碩と七男の芳蕃を殺害してしまう。李朝の王位簒奪の初例となる「第一次王子の乱」である。その際には芳碩を擁した開国功臣の最大派閥、鄭道伝一派も全て殺害された。

その結果、太祖次男の芳果が第二代定宗となるが、実

権は芳遠が掌握しており、「第二次王子の乱」すなわち太祖四男で王位継承に意欲を示した芳幹の起こした反乱に勝利し、二年後に第三代太宗として即位する。

高麗末期は、元に代わって明が一三六八年に建国された直後であった。元を引き継いだ明は当然のごとく、高麗を属国として扱い、遼東地域を明の領地に編入してしまう。これに反発して高麗は、李成桂を鴨緑江下流の咸化島に派遣したが、李成桂は明との戦いを避けて、逆に矛先を高麗の開京に向け「回軍」して、高麗を滅ぼしてしまったのである。

第七代世祖（首陽大君）の場合

一四五二年、第五代文宗が在位二年余、三十八歳で亡くなり、世子の弘暐が十一歳で第六代端宗となった。その時、既に母后もなく垂簾聴政が行える状況でなかったことから、政治は顧命大臣の皇甫仁と金宗瑞が担当することになった。

その状況に反発したのが、第五代文宗の弟達、すなわち第四代世宗の次男首陽大君や三男安平大君らの王族である。まず首陽大君が幼い王を補弼する名目で政治に介入した。その過程で顧命大臣達は勢力バランスをとる上で、安平大君に近づく。

そして首陽大君は「癸酉靖難」を起こし、安平大君を推戴しようとしたとの嫌疑で、皇甫仁や金宗瑞などを惨殺し、安平大君らを江華島へ配流した上で自決を命じた。かくして政治の実権を完全に掌握し、端宗を上王にして、自ら第七代世祖に就任する。

しかし四ヶ月後には、端宗廃位に反発した集賢殿の学士出身、成三問、朴彭年ら世宗・文宗に特別な信認を得ていた文官を中心にして、それに武官達も加わり、端宗復位が謀議される。この当時、多くの儒学者たちは首陽大君の王権継承を王権簒奪と認識していた。そのため、かなり大がかりな謀議であったが、結果的には失敗し、十七名が処刑された。

更には、一四五七年にも首陽大君の実弟錦城大君が復位事件を起こすと、彼に死薬を下し、端宗も殺してしまった。

第十一代中宗（晋城大君）の場合

第十代燕山君は李朝の歴史でも類を見ない稀代の暴君とされている。彼の母は成宗の王妃に冊封されたが、嫉妬深く後宮を毒殺しようとした嫌疑などで廃妃された上、死薬を下された。しかし、王世子の母のことでもあり、燕山君には極秘にされていた。

燕山君は王世子時代から陰険なところがあり偏屈で気紛れな性質で学問や学者を嫌い、頑固で独断的な性向があったと言う。父の成宗は世祖時代の功臣（勲旧派）に対抗するため大胆に士林派を登用した最初の王であり、

燕山君を好まなかった。その上、廃妃の子であり、王世子に冊封するのに問題があったが、正妃が嫡子晋城大君を生むのは、その五年後である。

燕山君は即位後、しばらくして、士林派に怨みを持つ柳子光が上疏した事をきっかけに「戊午士禍」によって故人となっていた金宗直を含めて、士林派の多くを「剖棺斬屍刑」や「凌遅処斬」の極刑に処し、ついでに勲臣勢力も除いて朝廷を独裁するようになった。

更に、燕山君は実母が廃妃され死薬を送られた事情を知って、残虐な報復をはじめた。この「甲子士禍」によって、成宗の妃・厳貴人と鄭貴人を斬殺し、弟の安陽君、鳳安君に死薬を送り、祖母の仁粋大妃を撲殺し、三十名以上を残酷な刑に処したという。

このような狂的な様相は、全国に採青採紅使を派遣して美人楽妓を選抜し宮中に呼び入れたり、狩りを楽しむため都城の周りの民家を撤去させたり、民衆の生活にも影響を与え、財政も破綻に向かった。

そのため、燕山君を追放しようとの動きが各地で始まった。その中でも、燕山君が伯母で美人の月山大君夫人を暴行、白殺させた事件で、月山大君夫人の弟朴元宗が、クーデターを計画していた成希顔と共に動いた。

切り札は晋城大君を担ぐことであった。もし晋城大君の存在がなければ、クーデターも起こらなかったかも知れない。

その時、晋城大君は十八歳、即位して十一代中宗となる。燕山君は江華島に流され、二ヵ月後に死亡した。

おわりに

本稿では、李朝の歴史が、現代の韓国ばかりでなく、共産主義国家の北朝鮮にまで脈々と受け継がれてきている状況を述べた。

最後に、類例を強調するために、王位継承事件の総括表を作成して次に示す。

もちろんこのような類例は詳しく探せば、日本にも中国にもヨーロッパにも見いだせるであろう。しかし、それが長期間にわたりいわば規則的に繰返された国家や王朝は朝鮮半島以外にないであろう。

いまや朝鮮半島は歴史的な転換期を迎え、まさに政争に明け暮れている。それは地政学的な宿命かもしれないが、李朝の歴史から学ぶべきことが非常に多いことを意味している。

おそらく本号が出版される頃には、トランプ大統領と金正恩委員長のトップ会談の帰趨も明らかにされているだろう。いま私見を披露しても無意味となることは承知している。しかし歴史の転換期にあたり、やはり書いて見たい。

李氏朝鮮王朝および北朝鮮金王朝の王位継承総括表

先代の王	殺害された継承権者	王位簒奪者	宗主国の意向
初代　太祖	嫡)長男芳蕃(17歳) 嫡)次男芳碩(16歳)	前妻)五男芳遠(太宗)	
四代　世宗	嫡)孫端宗(16歳)	嫡)次男首陽大君(世祖)	
九代　成宗	嫡)長男燕山君	嫡)次男晋城大君(中宗)	
十四代宣宗	庶)長男臨海君 嫡)長男永昌大君(7歳)	庶)次男光海君	明は認めず
十六代仁宗	嫡)長男昭顕大君	嫡)次男鳳林大君(孝宗)	清は認めず
金正日	長男金正男	三男金正恩	中国は認めず

韓国の文在寅大統領は、朝鮮半島問題の運転席に座ったつもりで、北朝鮮に極低姿勢で臨み、肯定的、宥和的な展望を盛んに振りまいている。それに対して、過去の経過をよく知る専門家達は、極めて懐疑的である。

このゲーム、いまのところ金正恩が完全にリードしている。過去二十年間、北朝鮮は常に米国首脳との直接会談を渇望しながら、全く無視されてきたのに、いきなりトランプとの首脳会談を勝ち取ったからである。

金正恩が、既に核弾頭も大陸間ミサイルも持っていると執拗に米国を恫喝してきたのは、冷たい米国に対する「求愛行為」に他ならなかった。北朝鮮にとって米国大統領と対等に会談できる栄誉は、体制保持に極めて重要な成果となるのである。

だからこそ、米国は民主党も共和党も「ご褒美」となる直接会談を拒否し続けてきた。それが、「核兵器を放棄する用意がある」という一言だけで手に入れたのだから、米国の強硬論者たちは「殿、なにとぞ騙されませぬように」と一斉に声を上げた。

その中には、金正恩の「核兵器の試験禁止・先制使用禁止・移送禁止」の提案を「非核化」ではなく「核兵器保有国宣言」と看破した者もいる。うっかりすると北朝鮮が求め続けていた「核保有国」の地位を、トップ会談を経ずして手に入れてしまう状況なのである。

もちろんトランプにとっては、中間選挙が最重要であり、強硬派の新任国務長官ポンペオでさえ、トランプの意見を代弁して「金正恩が核兵器で米国に脅威を与えないようにするのが私の責任だ」と韓国や日本を除外することもあり得るかのように述べている。

「文禄・慶長の役」の後、幕府も李朝も内心では両国間の和平回復を強く望んでいた。しかし「建前」が大きく立ちはだかる。その中で両国間の外交で生業を立てていた対馬藩が窮余の策として「国書偽造」を謀った。

おそらく江戸幕府も李朝も薄々は「偽造」を知っていたに違いないが、己酉約条を締結する。

いまや、トランプも金正恩も自らの「成果」を守るため、合意を必要としている。しかし、北朝鮮は最後まで核兵器や核技術を手放さないし、米国も『完全で検証可能かつ不可逆的な核・ミサイル廃棄』は譲れない。この両者の条件が共に満たされる完全合意などあり得ない。

そのためトランプは周辺を強硬派で固めた。いまや格好だけでも『核ミサイル完全廃棄』を北朝鮮に認めさせ、中間選挙に臨まなければならない。強硬派を前に出して、北朝鮮を十二分に脅かしながら、不十分な部分には目をつむって北朝鮮と手を打ちたいのである。そうすれば、強硬派からも異論が出にくい。

だから、この「交渉」は当事者間のみとして、仲裁者から余計な情報がもれないようにしなければならない。

仲裁者とは「その喧嘩、オレが預かる」と言えるほど両側に睨みが効き、時には自らの負担で纏め上げる力が必要だ。うまく行っても行かなくとも、弱い仲裁者は必ず両側からむしられるのが歴史的な教訓である。

現に、北朝鮮はさっそく仲裁者役の韓国を邪魔だと排除し始め、次々と「ちゃぶ台返し」をつづけている。

これには文在寅の熱烈な支持層も唖然とした。韓国の若者の三十二パーセントまで「北が核を放棄する」と期待していたのに、いまやその期待は八パーセントに激減してしまった。

一方のトランプも、北朝鮮の態度急変に対して、文在寅の「仲人口」にだまされたのではないかと焦って、会談を中止する怖れがある。

しかし、双方の究極の目標である「完全な非核化」と「体制の保証」という原則だけを堅持し、過去に何度も騙された「対価を得ながら段階的方式」を主張する北朝鮮にも、実務面で配慮した「密約」をして、前に進める可能性もあると期待している。

（二〇一八・五・二四擱筆）

本稿を書き終えたのは、恒例の「まんじ合評会」の行われる五月二十六日の前々日である。

ところが、その翌日早朝、早くもトランプ大統領がシンガポールにおける米朝首脳会談を中止したとのニュースが飛び込んできた。本来なら、ここで書き直さなければなるまいが、まだ首脳会談再開への動きもあり、執筆日付を明記して、そのまま提出することにした。

註記　本稿執筆に当たり、李朝の歴史については、主として朴永圭著（尹淑姫・神田聡訳）『朝鮮王朝実録』新潮社（一九九七）を参考にした。

ユース禁止のユース法

―トマス・モアとヘンリー八世―

永田俊一

一、ユース

（一）

信託制度は主にイギリスでユースとして発展、近・現代にトラスト（信託）として定着するに至っています。より遡りますと、古くは紀元前二～一世紀のローマで信託遺贈の制度が生まれました。愛する者に財産が引き継がれるよう、信頼する者に後事を託すものです。ポエニ戦役時、モラル強化や奢侈抑制を狙い制定されたウォコニウス法は、女性を相続人に認めませんでした。信託遺贈は自然法的立場からの批判を容れて、その財産を信じる受託者に委託し、死後その妻女を受益者として、その遺産を受け継げるようにしたものです。

その後の中世ゲルマン法の下では、相続人不在の場合、一旦遺産を第三者（ザルマン）に移した後に、ザルマンの代表的性格は、一言でいえば、土地の一時的信託という制度ですが、ランゴバルトの法でみるようにローマ法の遺言の影響を受けて、ザルマンが遺言執行人になる動きもありました。

一方、イングランドでは、土地の遺言処分が禁止されていたので、この方面の古い例は余り見られないようですが、十二世紀には、土地の一時的信託ともいうべきものがみられるといわれます。十三世紀になると継承的不動産権設定のためにも、一時的信託が見られるようになったと言われます。他方で永久的信託と言われるべきものは、ノルマン・コンクェスト当時まで遡れると言います。

十字軍遠征参加騎士が、家族のため信頼する友人等に管理保有を託して土地を譲渡し死後その土地あるいはそこからあがる成果物を残された家族に渡すわけですが、このようなものを称してユースと言われるようになります。土地の長子相続を前提にしての徴税制度の下では実質脱法になりますので、当初普通法（コモン・ロー）裁判所はまだ一般的にこれを認めようとしませんでした。

これが、大々的に行われるようになったのは、十三世紀前半のフランシスコ教団がイングランドにやって来て以降のことです。教団の戒律には赤貧の誓いがあり、修道僧たちは個人的にも組織的にも一切財産保有が認められなかったので、少なくとも必要な宿舎位は与える方法を考えないといけませんでした。

家や土地を彼等のために自治都市に譲渡することが考え出され、教団渡英後程なくして、イングランドの様々な町でこうして多くの土地が教団に提供されるようになり、ユースは全土に広がっていったと言われます。

十四世紀末あの王位継承のため国内を二分して争ったバラ戦争が始まると、貴族の中にもユースを利用する人々が増えてきました。帰還出来ないと土地を没収されるため、戦地におもむく前に信頼できる人に土地を譲渡して出かけたものです。十五世紀の初めには、普通法裁判所では救済を受けられない人々の国王の慈悲への訴えに、国王の側近で聖職者でもある大法官が衡平と良心に基づいて、ユースを強制する命令を発し始めます。これが後に衡平法（エクイティ）裁判所に繋がって行きます。やがて信託違反事件が続出し、さしもの大法官も委託された財産の横領事件などを中心に、目的財産の回復、受託者の責任追及、信託履行の強制をせざるを得なくなり、衡平法裁判所として信託上の義務履行を命ずることで、その役割を担うことになります。

（二）

こうしてユースが認められるようになり、十五世紀から十六世紀にかけてますます利用者が増えました。一方で、ユースによる封建的付随負担の回避に対する国王の指定の者に引き渡す仕組みが出来ました。それがノルマン・コンクェスト後のイギリスで、長子相続を逃れ教会寺への寄進や戦役に伴う寡婦への遺贈の為などからユースとして発展し、遺産の承継や財産の分配や管理・処理を通じて社会的法理として確立されてゆき、普通法裁判所と並んで衡平法裁判所で信託の衡平性が判断されるようになり、トラストとして普及するようになりました。

これがアメリカに渡ったわけですが、南北戦争前後からの経済の急速な発展の中で、信託会社が増加、大陸横断鉄道等社会的巨大事業の遂行に伴う投資事業資金のニーズの高まりを背景にヨーロッパ等から巨額の資金調達が行われ、営業信託が成長しました。そして維新後の日本に伝わるところと成りました。

ところで、フランク族のサリカ法典から窺えるザルマ

側からの反撃も開始されます。国王にとっては、同一の財源から、自らの生活維持は勿論、国政の運用費用も支出しなければならず、ユースによる財源（土地等）の減少は王室財政を圧迫し、放置できない問題でありました。特に当時百年戦争での戦費増大・大陸知行地喪失は痛手でありました。

領主が後見権に基づき課す封建的付随負担を回避するため、長子たる相続人に生前土地譲渡をしたり、高額地代支払を条件に友人にその上地を再封与しておくことを禁じた一二七六年マールボロー法はその後実効無きものになっていったわけです。それを補足する為の法律によって、全国的規模でユースの禁圧を最初に試みたのは、ヘンリー七世でした。ですが、効果は限定的でありました。結局、破産寸前の王室財政立て直しを図ったヘンリー七世の増収策ははかばかしくなく、支出切り詰めの質素な生活で何とか危機を乗り切ったといわれています。

しかし、後継のヘンリー八世は、万事派手な浪費家で、一五二九年に始まるローマ教皇との宗教上の争いは内憂外患に繋がり、内には聖職者と信者たちの国王への反抗、外には教皇側に立つドイツ皇帝カール五世による侵略の危機や仏王フランソワ一世との領土争い等に備えた軍事費用だけでも膨大で、枯渇寸前の王室財政で賄いきれるものではなかったのです。そこで王は、封建的付随負担に目をつけ、主たる施策としてユース禁圧のためのユース法を一五三五年に制定します。ユースで取得した受益者のエクイティ（衡平法）上の不動産権をコモン・ロー上の不動産権に転化しコモン・ロー上の諸原則のもとにおくことで、不動産遺贈を禁止し、封建的付随負担の復活を狙ったものです。なお、英語はユース法でも中味は制限法なので、以下ユース禁止法とさせていただきます。

即ちユース禁止法の規定によれば、ある人（受託者）に他の人（受益者）のユースのために不動産権の譲渡がなされる場合、同法の効果として、第二の観念的な占有引渡しがあったものとみなされ、受託者のコモン・ロー上の不動産権が受益者のエクイティ上の不動産権の範囲で受益者に移転するというのであります。そしてこの場合、受託者は、占有権が瞬間的に受益者に移転する際の導管に過ぎないものと看做されました。

元来ユースでは、コモン・ロー上の所有権は、譲渡を受けた受託者に属し、利益を受ける受益者はエクイティ上の実質的所有権であるユース（受益権）を有するとされ、いわば一つの所有権が形式と実質に分離しており、これを二重の所有権と言い、まさにユース（信託）の法的特徴とされています。

これがユース禁止法では、本来コモン・ロー上の所有権を有する筈の受託者から、何ら保有理由が見当たらないとして所有権が取り去られ、受益権をもつ受益者に帰

属することとされました。この結果、コモン・ロー上の所有権がない故に封建的付随負担から逃れていた封建的土地保有者に占有とユース権が帰属し単一のコモン・ロー所有権となるので、封建的付随負担から逃れられなくなる訳です。この点で封建制への回帰との悪評があります。

（三）

さて、このユース（信託）の歴史の断面にも、歴史上不朽の名を残している二人の人物が交錯します。一方は既に登場しているヘンリー八世、もう一方はエラスムスと並ぶ人文主義者（ヒューマニスト）にしてユートピアの作者であり、大法官も務めヘンリー八世宮廷第一人者に上り詰めたトマス・モアであります。

三つの年号も交錯します。先ず、ヘンリー八世が議会に初めて激烈なユース禁止法案を提示・否決された一五二九年の年末には、それまで専ら外交交渉などを担当していたモアが、失脚断罪された前任のウルジ枢機卿に代わって、大法官となり玉璽も託されます。そして一五三二年、ヘンリー八世が、キャサリン妃との離婚を認めぬ教皇庁に対し、僧侶部会に教皇の権力を排斥する要求を提出し、僧侶会議は王の要求を全て受け入れますが、これを首肯出来ぬモアは五月大法官を辞任し玉璽も返還します。そして、ユース禁止法が可決された一五三五年、ヘンリー八世の怒りが断罪法規の強化とともにエスカレートして行く中、モアには七月一日ウェストミンスター・ホールでの最後の裁判で大逆罪の判決が下され、六日ロンドン塔の丘で斬首刑になり五八年の人生を悲劇的に閉じました。

時代は、英国ではバラ戦争後一四八五年にヘンリー七世がテューダー朝（～一六〇三）を起こします。百年戦争とバラ戦争で貴族・騎士層は疲弊、ペスト大流行や農民一揆等で社会は混乱、農奴制・封建制は弱まり、絶対王政へと移行して行きます。経済的には良質の羊毛生産に支えられ毛織物工業が発達し、交易を通じて典型的な農業国からの脱出を徐々に図っていくことになります。

十四～十五世紀イタリアから始まり各国に広がったルネッサンスの波は、北ヨーロッパに人文主義（ヒューマニズム）の花を咲かせ、十五世紀には宗教改革への動きが強まります。イングランド絶対王政は王を首長とする英国教会を成立させ、次いで修道院を解散させその土地を議会下院を構成していたジェントリーに売り渡し国民の支持を受けます。更に周辺国のウェールズ、スコットランド、アイルランドを加え、英国を主権国家として統合し、当時ヨーロッパ大陸と離れた北海の弱小国から、大航海・重商主義的植民地経営時代の世界を席巻する覇権国家に発展する礎を築いた王であるとも、評価されて

いるのが、ヘンリー八世です。

一方のトマス・モアは、法律家の家に生まれ、天賦の才と恵まれた教育環境の下に育ちました。早くから法律家として一家を成し、その溢れる知性と機知は、当代最先端のヒューマニスト・理性的キリスト教者として、文芸家としてまた弁論家としても大をなしたところです。ただ、時代はかくなる大変革で揺れ動く不安定な時代です。十八歳で王位を継いだ若き英邁なヘンリー八世の度重なる求めにも距離を置いていましたが、結局はその啓蒙君主たらんとする可能性に期待して、身の危険を承知の上で宮廷入りします。絶対王政の絶対権力者の懐に飛び込み、賢き民主制を彼方に見据え、法治・倫理に裏付けられた政治実践を目指しました。その方向に実績をあげつつ、最高位まで上り詰めますが、宗教改革という複雑・困難で理性の枠を超え、感情対立の狂気の嵐が席巻する社会政治環境の中、前述のような運命に斃れます。

近代への幕開けの時代・智の巨人・殉教といった大テーマが絡み合って、モアの研究が行われ続け、評価を現代にまで揺れ動かしているように思います。

二、モアの生涯

本稿は、ユースが英国でトラストの制度に確立して行く過程、それは経済面で所有の衡平化を進め民主政進展の過程でもあると考えられますが、そこでの大きなエポックであるユース禁止法であるユース法にスポットをあて、その物語の主役であったヘンリー八世と大法官トマス・モアに登場願ったわけです。

ところがこの二人は、宗教改革の入り口に立ち、人文主義という理性の夜明けと絶対王政への途が交錯する、西欧社会の大化けの幕開けの主役でもあったため、本題にいたる前にこうした背景についても概略承知の上、お話してゆくことが必要と思われます。

ローマの信託遺贈で登場願ったキケロ。ローマの急速な拡大と帝政化という流れの中で、元老院民主政を守るべく命を懸けて斃れた、自然法法律家であり哲学者であり政治家としての彼の姿を、全体として紹介することが、前提として必要とされたことと同様であります。

そこで先ずモアの生涯を、時期を分け概略史として整理しておきましょう。（関連参考事項は＊で記）

（一）法律家への途

ロンドンの弁護士の家に生まれた逸材は、教育環境にも恵まれ、当時先端の知を学ぶとともに、法律家としての途に向かいます。

○一四七七又は七八年、父弁護士サー・ジョン・モア

（1450~1530）と母ロンドン市政長官を務めたトマス・グレンジャの娘アグネスの間の長男としてロンドンの法律家の家に生まれ、聖アントニー校で学んだのち、

○一四九〇年頃、大司教・大法官のジョン・モートンの家で書生として学ぶ。

○一四九二年頃、モートンの忠告に従い、オクスフォード大学カンタベリー学寮で二年間人文教養ラテン語を学んだが、

○一四九四年頃、法律家の途を強く望む父の命で中退し、ニュー法学院へ入学。更に政界への近道で人文主義教育の中心でもあったリンカーン法曹院で学ぶ。

○一五〇一年頃法廷弁護士の資格を得る。

（二）人文主義者としても先端へ

法律家としての地歩を築きながら、多くの人文主義者と交わり、その世界でも国際的な評価を受けて行きます。

オクスフォードを出て法律家としての途を歩むと共に、オクスフォード大の神学者のヒューマニスト達、ウイリアム・グロウシン、トマス・リナカーそしてジョン・コレット等と交わり（特にコレットは、モアのヒューマニストとしての世界観形成に大きな影響）、デジリウス・エラスムス（一四六九年ロッテルダム生まれ）と親交を結びます。一時カルトジオ会修道院の一つで過ごすも、生活を愛する性情と会の無為と背徳の側面をみて、この道には入りません。むしろその批判がエピグラム（警句詩）とユートピアに反映しています。

○一四九九年、モアとエラスムス（パリ経由で英国入り）はロンドン市長主催の晩餐会で知り合い、マウント・ジョイ卿の紹介でエルサムの離宮にてヘンリー王子（後のヘンリー八世、当時八歳のヨーク公）に会う。エラスムスは「はっきりした帝王らしい振る舞いと、独特の慇懃さのまじった傲慢さで」かわいらしい印象を受けたという。

○一五〇一年頃、聖アウグスティヌスの『神の国』を、聖ローレンス教会で講釈、

○一五〇三年、二月 ヘンリー王子、兄アーサーの死後プリンス・オブ・ウェールスに。六月 ヘンリー兄と結婚したアラゴンのキャサリンと婚約。十二月 教皇ユリウス二世、彼等の結婚に特別免許を与える。（結婚自体は先送り）

○一五〇四年、下院議員に選出され政治活動にも（ヘンリー七世提出案にただ一人異を唱え否決。王の怒りの弾圧の脅威の下、国外に逃れることも考えた）。

○一五〇五年、ジェーン・コルトと結婚、バックラズベリのオールド・バージ居住。（三女一男に恵まれる。）

○一五〇五－六年、モア家に滞在のエラスムスと『ルキアノス作品集』を共訳するなど人文主義者としての自

己形成も進む。

○一五〇八年、ルーヴァン大学とパリ大学訪問。

（三）公務と著述

ロンドン司政官補や外交・通商代表委員として公務を務め評価を高めながら、一五一〇年に伝記『ジョン・ピカスの生涯』を翻訳、一五一六年には『ユートピア』を上梓するなど、著述活動も盛んに行ない、人文主義者としての国際的名声を確立してゆきます。

○一五〇九年、ロンドン絹織物商組合代表としてアントワープ市の代表と貿易交渉。エラスムスがモアの家で『痴愚神礼讃』を書きモアに献上。

○一五一〇年、ロンドン代表議員として庶民院に議席を得、ロンドンの司政官補に任命され（一五一八年まで）、市の下水整備や食料品価格調整などの行政に参与するなど公務を務める。イタリアの人文主義者ピコ・デラ・ミランドラの伝記『ジョン・ピカスの生涯』を翻訳。この年ヘンリー七世死去、ヘンリー八世の王位継承公表。ヘンリー八世アラゴンのキャサリンと結婚。

○一五一一年、七月ジェーン・モア死去。絹織物商未亡人アリス・ミドルトン夫人と再婚する。リンカーン法曹院の講師や評議員に任命される。この年エラスムスの『痴愚神礼讃』がパリで上梓、初版たちまち売り切れ。エラスムス、ケンブリッジ大クィーンズ・カレッジの客となり三年とどまる。時々ロンドンのモア家に滞在。ギリシャ語、神学を教授しつつ著述に親しむ。

○一五一三年、（一八年まで）『リチャード三世王史』を書く（モアは君主と人民の相互関係に関する問題提起をし、専制主義と君主の専横に対する自己の立場をはっきり述べる）。この年マキアヴェッリ『君主論』。

○一五一四年、リンカーン法曹院で四旬節学期講師となる。エラスムス『プルターク小品集』ラテン語訳上梓ヘンリー八世に献呈、英を去りバーゼルへ。十一月リチャード・ハンヌの死後裁判で異端の宣告がくだり、モアも傍聴。

○一五一五年、四月前年からの英仏戦終結。五月ブリュージュへ使節として派遣され、エラスムスとも会う。この旅行中『ユートピア』第二巻執筆。年末枢機卿ウルジが大法官に任命される（～二九年迄）。

○一五一六年、六月ロンドンで『ユートピア』を完成、第一版はルーヴァンで十二月頃エラスムスとヒルスの編集で上梓出版される。この年エラスムスは一月西国王・ブルゴーニュ公カールの名誉参議会員に、二月『校訂ギリシャ語新約聖書』、五月『キリスト教君主教育』、夏『聖ヒエロニムス著作集』上梓。

○一五一七年、三月カール一世、皇帝マクシミリアン一世、フランソワ一世の間にカンブレー和議。五月魔の

メーデー（市民暴動で外国商人排斥）をモア説得鎮圧、市民処罰に対する王の赦免を得ることに成功。「エンクロージャー調査委員会」発足、一員に任命さる。八月二回目の英仏通商使節でカレーに。十月ルター、ウィッテンブルグで、贖宥の効力に関する九五カ条の提題発表、異常な反響。十二月ヘンリー八世の王室参議会員（～三二）に任ぜられ（これは申し出の時期）、前後して貧民（請願）裁判所判事に任命される。

（四）宮廷入り

一五一八年からヘンリー八世に仕え、ネーデルラント使節などを務めます。ヘンリー八世の信任は厚く、地位は次第に進み、一五二一年には財務次官、ナイトの爵位、一五二九年十月官僚で最高位の大法官に就任します。

○一五一八年、三月宮廷入り、王の参議会員に。六月参議会員として年金百ポンド下賜さる。七月（上記故に）ロンドンの司政官補を辞任。この年請願裁判所判事に任ぜられる。

＊三月エラスムス『新約聖書』改訂再版、『対話集』改訂版上梓。ルター、エラスムスに直接支援要請。

五月エラスムスは、実践方法好ましくない、教皇の権力を濫用する人々攻撃はよいが、直接教皇を批判するのは好ましからず、自分は研究に専念したいと、答える。他方、十月マインツ大司教あて、ルターの説は非とするが、いたずらに異端呼ばわりするのは不当であり、寛容な態度が大切と。

＊六月スペイン王カール一世、選挙戦の結果皇帝に（カール五世）。以後、イタリアのロンバルディアを巡り、フランソワ一世との間で争奪戦。

○一五二〇年、四月カール・ヘンリー間と英仏間夫々に、通商条約成立。訪英の皇帝カール五世に会う。五～六月ヘンリー八世とともに金襴緞子の陣屋に臨む（フランソワ一世との会談同席）。七～八月ブリュージュで、ヘンリー八世の代理としてハンザ同盟と交渉する。

＊ヘンリー八世、王妃キャサリンの要請を受け、妃の甥の神聖ローマ帝国皇帝カール五世との和平協定に動き、五月、ドーバーとカンタベリーでカールを歓待。この協約受け六月フランソワ一世はカレー近郊でヘンリー八世を豪勢にもてなす。しかし、その後ヘンリー・カールは七月反仏協定を結ぶ。

＊六月教皇レオ一〇世、ルターに破門を警告。九月エラスムス、レオ一〇世に親書、ルターに対する回勅に警告。十一月ケルンでザクセン選帝侯やシュパラティンらと談合しルター問題の平和的解決に腐心したが失敗。十二月ルター『キリスト者の自由について』（独語）。

○一五二一年、五月財務次官、ナイトの爵位。春、王

のアドバイザー委員会の同意でヘンリー八世の『七秘蹟擁護論』を編集すべく任命される。八～十月 ウルジとともに使節として、カレー（カールとフランソアの和解会談に列席）とブルージュ（外交・通商交渉に参加）へ。エラスムスと最後の出会い。

＊一月 ルター、教皇により破門されウォルムスの帝国議会開かれる。エラスムスは和平寛容の容れられぬこと予見し欠席。五月 カール五世、ウォルムスの勅令によりルター追放決定、その著書を禁断。七月 ヘンリー八世の『七秘蹟擁護論』出版。エラスムスはルーヴァンからブルージュに行き、カール五世の宮廷の人やタンスタルやモアに会う。十月 ヘンリー八世にレオ一〇世から「信仰の擁護者」の称号。ウルジによるルター文書焚書処分令。十一月 エラスムスはバーゼルへ（フローベン宅に二九年春まで長期定住）。十二月 教皇レオ一〇世没。

○一五二二年、モア、訪英のカール五世に対し歓迎の辞を述べる。この年、死・煉獄・天国・地獄についての『四終論』を書く。

＊英国はカール五世側に加担し仏に宣戦布告。タンスタル（ロンドン司教）のルター派弾圧。七月 ルター、『ヘンリー八世に対する反論』書く、また独訳『新約聖書』刊行。八月 チューリヒ宗教改革者ツィングリ、エラスムスに招請状送るも、エラスムスは世界の市民でありたいと拒絶する。

○一五二三年、二月『ルターへの回答』をフェルディナンドゥス・ブラヴェルスの名で書く（五月上梓）。四月 庶民院議長に選出され、言論の自由を求める演説（画期的、また新税認可の反対など王の専横企挙に反対すべく成しうる限りのことをしたが王の親密さは途切れず。だが仏から城の一つでも手に入れたら、私の首をためらわず切るだろう、とモア自身が言っている。まだモアの外交・行政手腕への期待が勝っていた。この頃モアは王の美徳にかなり失望していた。）。

＊ルター、改革運動を本格開始。ティンダル（英国ルター派）、ロンドンへ出る。教皇ハドリアヌス六世没、クレメンス七世即位。

○一五二四年、チェルシーの屋敷を買う。七月 オックスフォード大学理事。

＊四月 ルター、エラスムスに中立維持を要求。五月 エラスムスは「自分は個人攻撃でなく福音の真理探究を目的」と答える。六月 農民戦争南独で勃発し各地波及。九月 エラスムス『自由意志論』発表、ルターに対立する態度を明らかに。

○一五二五年、夏、モア家との条約（多分仏より年金150フローネ贈与の約束）に結びつく英仏講和の交渉を助ける。九月 ランカスター公領司政長官に任命される。ケンブリッジ大学理事。

＊二月 フランソワ一世、パヴィアで敗北しカール五世の捕虜に。三月 ルフェーブル・デタープル指導の仏の福音主義集団が解散させられる。五月 ルター『略奪殺人を事とする農民暴徒を排撃す』を発表、チューリンゲンの農民蜂起の弾圧を神の意にかなうものとする。エラスムスは多くの書簡中に独の流血に心痛を表明、事態悪化の為政者責任を問い、暴力は暴力を生むと警告。六月 パリ大神学部、エラスムスの『平和の訴え』の仏訳を告発、禁書とする。十二月末 ルター『奴隷的意志論』を起草しエラスムスに答える。

○一五二六年、一月 独逸人地区のスティルヤードを急襲、ルターの本と聖書の訳本を捜索する。秋ホルバイン、エラスムスの推薦でバーゼルからチェルシーのモア家に着き、家族の集団肖像画などの注文を受ける。秋『マルティン・ルターへの返答の手紙』の執筆でヘンリー八世を手伝う。「エルサム条例」で王の常時側近の参議会員の一人に。

○一五二七年、ヘンリー八世、キャサリンとの結婚の正当性の疑念をウルジに。七月 参議会が異端の本と説教に対する検閲体制考案議論、モア出席。七～九月 仏との講和条約批准のためウルジとアミアンへ。十月 ハムプトン・コートでヘンリー八世から離婚相談（カンタベリー大司教フィッシャーにも別途）。

＊五月 カール五世皇帝軍のローマ劫掠、教皇幽囚される。ウルジは教皇名で英仏反皇帝十字軍を起こし、教皇解放までその代理者となりヘンリーの結婚裁判を有利に進めるべく画策。

○一五二八年、三月司教タンスタルから、ルター等異端書論駁を委任される。（異端書読む許可得て）モア、ルターやティンダルらの異端者に反駁する『異端についての対話』を書く（翌年ロンドンで上梓）。

○一五二九年、『異端に関する対話』が甥のウィリアム・ラステルにより出版される。十月『魂の嘆願』完成。『煉獄の霊魂たちの願い』も発刊。十月 ウルジは国璽を王に返還、モア替って英大法官に任命され国璽を受ける。十一月 モア、宗教改革会議を開会。

＊この年仏は伊で決定的敗北、皇帝との間に平和条約、教皇も皇帝と和解。このため、王に有利に結婚問題解決をはかるウルジの政策が破綻し、ウルジは「プラエム・ニレ法」に違反したかどで起訴され失脚する。本件では、トマス・クロムウェルが強力な担い手としてウルジを継ぐ。

（五）ヘンリー八世との確執と死

大法官として異端論駁と処理に務め王を支える一方、離婚問題を巡ってヘンリー八世がローマ教皇クレメンス七世と反目、カトリック人文主義者としては王に対し賛

意を示さず、一五三二年五月、聖職者の服従要請（聖職者達による教会の立法権の王への委譲）が通ると、モアは翌日に大法官を辞職。やがてヘンリー八世によるモアへの復讐が始まります。

○一五三〇年、五月 異端書使用禁止の星室での参議会に、上と出席。六月 異端書に対するモアの最初の声明。十二月 父ジョン・モアの死去。

＊二月 ケンブリッジ大、王とキャサリンの結婚の法律上無効を決定。

＊六月 皇帝カール五世アウグスブルグ帝国議会開催、ルター派を代表して出席のメランヒトンは「信仰告白」を発表。欠席のエラスムスは教会の統一と平和を説く。十一月 カール五世、一五二一年のウォルムス勅令の実施を命ずる。（これに対抗し翌年二月独改革派諸侯中心にシュマカルデン同盟成立）

○一五三一年、一月 英の全聖職者はウルジの「プラエム・ニレ法」違反に加担したとして起訴され、償いの献金を要請される。二月 聖職者会議はこれを正当化し国王を教会の最高首長と認める「赦罪法」を「キリストの法が許す限り」の文言追加だけで承認。三月 王、モアに欧大学いくつからか入手の離婚に関する意見書の議会提示を求める。

○一五三二年、一月『ティンダル（英のルター派）の回答への論駁』の第一部を書く（年内に上梓）。三月 改革議会の第三会期において、王の大権を支持し、教会への様々な告発を盛込んだ「聖職者に対する請願法」が下院通過。また聖職禄初年度歳入上納制限法（財政面でローマとの絶縁を打ち出す）制定。五月には聖職者の服従要請（聖職者達による教会の立法権の上への委譲）。モアは首肯できず 大法官辞職（5/16）。十二月 アン・ブリン、懐妊。

＊三月 クリストファ・セン・ジャーメン『聖職権と俗権の分離』上梓。

○一五三三年、初、聖体におけるキリストの実在に関する『ジョン・フリスへの手紙』と『ティンダルの回答への論駁』第二部出版。一月 王、アン・ブリンと秘かに結婚。四月『弁明』出版（セン・ジャーメンに対し教会法の独立を擁護）。また、教皇への上告を無条件に禁ずる「上訴禁止法」が議会通過。五月 キャサリンとの結婚、クランマー（カンタベリー大司教）によって無効に。六月 アン・ブリンの戴冠式（モアは出席拒否）。十一月 セン・ジャーメンの対話『サレムとバイザンス』への反論『サレムとバイザンスの征服』出版。

○一五三四年、二月 ケントの修道女E・バートンの大逆罪に対する私権剥奪法案に私権剥奪さるべき共謀者としてフィッシャーとモアの名が挿入される（モアの

名は、枢密参議会の委員会で首尾よく弁明し取り除かれる）。一月から三月にかけてクロムウェルの主導により、聖職者の服従を法制化した「聖職者の服従法」、ローマへの全ての上納を禁じ、教皇の特免権を否定した「特免権法」、そしてヘンリーとアンの子を王位継承者と定め、結婚に対する中傷を反逆とし、全ての成年臣民に法の支持明示の宣誓を命じる「王位継承法」が成立、ローマからの分離は後戻り出来ないところまでに。モアは四月ラムベス宮の宣誓監理委員会で王位継承法への宣誓を拒否、拘置され（4/13）、ロンドン塔送り（4/17）。投獄され翌年春迄の間に、『キリストの受難に関する論文』『聖体に関する論文』『苦難に対する慰めの対話』『キリストの悲しみ』。セン・ジャーメンへの反論『サレムとバイザンスの附論』上梓。十一月 無条件の「国王至上法」、第二の「王位継承法」及び国王至上法に対し悪意の反抗を言行で示す者に対する「大逆罪法」、また、モアを不忠者として終身禁固刑に処す「モアの法権利剥奪法」が成立。モア、反逆罪隠匿で私権剥奪される。

＊一月 エラスムス『死の準備について』とモアの『墓碑銘』パーゼルで上梓。

○一五三五年、四月（4/30）塔でクロムウェルと枢密参議会の法律顧問から尋問を受ける。（以後三ヶ月間にモアとフィッシャー四回の審問を受けるが、モアは至上法の首長権について沈黙する）。五月 モアと長女マーガレット、四人の不服従の意を示し続けたカルトジオ（シャルトレーズ）会修道士のタイバーン刑場への旅立ちを見守る（5/4）。クロムウェルの二回目尋問（5/7）。フィッシャー、教皇パウロ三世によって枢機卿に列せられる（5/20）。クロムウェルと枢密参議会の委員会により三回目尋問（6/3）。四回目尋問（6/4）。リチャード・リッチとモア、塔で教皇と議会の権限を議論。モアの残っている本と書類が枢密参議会により没収される（6/12）。最後の尋問（6/14）。フィッシャーと三人のカルトジオ会修道士が国王至上法否認のため裁判に（6/17）。カルトジオ会修道士達処刑（6/19）。フィッシャー処刑（6/22）。聴聞審理辞令による特別委員会がモア裁判のため任命される（6/26）。国王至上法否認のためにウェストミンスター・ホールでモアの裁判（7/1）。モア、タワー・ヒルで斬首処刑さる（7/6）。享年五八歳。

＊最後のモアの裁判は、十二名の陪審員が証人リッチの証言に基づいて、モアが悪意を以て上の首長権を否認したかどに依り、大逆罪法によって有罪の答申を行なう。この時モアは初めて口を開き、リッチの証言は偽りであることを述べ、所信を明らかにしたが有罪の宣告が下された。

＊八月 エラスムス憂悶に閉ざされつつ病躯をバーゼ

ルへ運び、フローベン家に滞在。教皇パウルス三世が枢機卿位を贈ろうとしたが辞退。一五三六年七月（7/11~12）友人たちに囲まれ死去。

三、モアとヘンリー八世

モアの生涯とその時代を見ると、激動し始めた欧州の地で、夫々の場と時に生まれ出た個性達が、文芸の復興・大航海・宗教改革という激震の中、固定化した旧社会の眠りを突き破る課題に直面して色めき立っています。その泡立つ飛沫を浴びながら、夫々が自らの考えや人格を形成し社会的役割を担い、解きがたく縺れ合う多様なベクトルで離合集散等関係仕合い、時代の潮流を作り・乗り・振り落とされ、そこに明暗鮮烈な運命の結末を見ることが出来ましょう。

ギリシャのソクラテス・プラトン、ローマのキケロそしてトマス・モアと、そこには、理性・自然法・倫理・民主制の理念に殉ずる実存が時代を越え脈打っているように思えます。キケロは元老院民主政維持のため知を絞り体を張って戦い刃に斃れました。モアもまたヒューマニストとしてユートピアで示唆した賢き民主政社会を目指し、俗の権力に身を投じ実践しつつも、力で潮流を握る権力に屈し、斧に斃れます。理想は一朝にはならず、その度に理念は力に屈して挫折するものです。しかし、理念は物に記され記憶に残され進化し、伏流水として表面に出る時世を窺い、民主政はその後も進展しました。

キケロが信託遺贈に触れたように、モアも大法官としてユースに向き合い、民主政の経済社会的基盤になる所有の衡平化に務めました。徐々にではありますが不断の歩みとして、信託制度確立に貢献したと言えましょう。

先ずはどうしても、悲劇の道行き・顛末が気になるところですので、それを私なりに流れに乗せて整理してみようと思います。ヘンリー八世の立場にたてば、如何に英邁で啓蒙君主が期待されたとしても、権力の維持・拡大は固有の役割であり、それに反することは理念にせよ、表面慇懃に対応したとしても真に許せることではありません。それ故、悲劇は理念の側のモアが、その琴線に触れ地雷を踏まぬよう、歩を進めることが出来るかにかかっていたと言えましょう。

（一）ヒューマニズム理念の共有

オックスフォード大学をリードしたヒューマニストの中でもモアが一番影響を受けた神学者ジョン・コレットは、セント・ポール大聖堂の主任司祭になっていた一五〇九年、かねて暖めていました、寺院付属のグラマースクールを設立、ヒューマニストたちはその成功に結集。教会の改革とヒューマニズムに基づく教育の新体

系は、社会変革と社会悪の撲滅を目的とし、キリストと使徒たちの教説を精神とする正真正銘のキリスト教倫理の復興促進にありました。そこでコレット、モア、エラスムスその他の同志たちは、福音書の原典の宣伝と普及とが社会進歩の必須条件と考えます。彼等にとって初期キリスト教の諸文献すなわち新約聖書と初期の教父たちわけても聖アウグスティヌスと聖イエロニムスの著作の研究が重要な意味を持ちます。ここに宗教改革前夜のヒューマニズム綱領と呼ぶべきものの本質があったと思われます。社会、政治問題を宗教的倫理的に解釈することがヒューマニスト的思考の特性をなしていたと言えます（学問上このグループのヒューマニストを「キリスト教的ヒューマニスト」と呼びます）。

すべての哲学的思惟がすぐれて宗教的であったこの時代に、重要な宗教上哲学上の問題提起に際してのカトリック教義の特質である世界性と全人類的性格とが、エラスムスとモアのすべての文学作品に浸透しているといわれています。ヒューマニストは勿論、現実の体制に対する批判も行ないましたが、その批判の特色は体制の転覆を考えることではありませんでした。宗教改革前夜にコレットを先頭に英ヒューマニストが志した改革は、教義の観点からも組織の観点からも、完全にカトリック教会の強化と健全化にむけられていたといえましょう。

（二）ユートピア

モアの場合、法律家であり、ロンドンの絹織物商組合代表として外交・通商交渉や市の司政官補といった政治の現場を担っていたこともあり、経済社会全体に起っている変化と問題を、ヒューマニストの観点から鋭く捉えていました。その理念的答えがユートピアです。

モアは、『痴愚神礼讃』（エラスムス）や旅行記『新世界』（アメリゴ・ヴェスプッチがカナリア諸島からアメリカ大陸までを旅行した記録）に触発され、一五一五~一五一六年にラテン語で『ユートピア』を執筆します（同年刊行）。ユートピア（Utopia）はモアの造語で、「どこにも無い場所」に「善き場所」という意味が加味された言葉で、「理想郷」などとも訳されています。ベスプッチの航海に加わっていたとされるラファエル・ヒュトロダエウスなる人物の見聞を聞く形式で、第一巻でイングランドの現状を批判し、第二巻で赤道の南にあるというユートピア国の制度・習慣を描いています。

第一巻では当時のイングランドでは地主や長老がフランドルとの羊毛取引のために農場を囲い込んで（エンクロージャー）羊を飼い、経済基盤の中心である農業生産を奪い、村落共同体を破壊している現状を指摘。農民たちを放逐し、路頭に迷わせ泥棒になるしか窮乏を救う道

をなくし、これを捉えて刑死させるといった、理不尽不公平な現状を深く慨嘆し、「羊はおとなしい動物だが（イングランドでは）人間を食べつくしてしまう」との言葉で批判しています。

その上でラファエルは、現状社会経済の問題は突き詰めると、私有財産制が存在し、全ての人が何でもかでも金銭の尺度ではかるようなところでは、社会が正しく治められたり繁栄したりすることは殆ど不可能だと思うと言い、第二巻では、自分の住んでみたユートピア島に実現していた、共住・共働（農業は交代で行い、他に各自夫々の職種を持ち、皆が働く）で共に学び、民主的に選ばれた賢人政治で私有財産を持たず果実を共有・共用し、貨幣を必要としない社会を紹介しています。

私益意識なく経済社会が運行するかといった疑問を呈しつつも、自然に従って生き、私有財産を持たず貨幣を必要としない共同社会が実在しうる事を確信し、自然法と自然状態が善である証明として書かれたこの著は、ユートピアという国を舞台に、自由、平等で戦争のない共産主義的な理想社会を描いたものである、とも言われます。（また、カール・マルクスは『資本論』にモアを引用し、経済的視点でエンクロージャーを資本の本源的蓄積として論じています。）

なお翌一五一七年、ヘンリー八世は「エンクロージャーに関する委員会」を設置、問題の調査研究を行なうことにしましたので、本書は政治にも影響を与えたことは事実です。しかし、多数を構成する貴族階級の委員の対応に期待することは出来ませんでした。しかも一定額を支払えば政府から囲い込み実施の特別許可が貰え、農民達のいかなる愁訴も通りませんでした。囲い込み人達の急襲をうけ農民は零落し村々は荒廃し続け、国内の浮浪人と乞食の数は、益々増大するのをみて、委員会の一員となったモアはその非力を実感したことでしょう。

（三）宮廷入り

一五一八年三月、モアは王の参議会員として宮廷入りします。これより先、一五〇九年ヘンリー八世が王位に就いた時、『最も栄えある幸多きブリタニアの王ヘンリー八世の即位の日に』と題する詩（エピグラム）を書いています。

そこでモアは、暴君政治を非難し、それを自己の理想とする君主と対立させつつ、王権があたかも神に由来するかの如く説く理念に断固として反駁し、王権が人民に由来するものであるという思想を展開し、この基礎の上に立って「人民は自己の意志によって権力を賦与し、またそれを覆す」ということを確認します。国王の人民に対する責任について、「大勢の人々を支配する権力を取ったものは誰でも、統治を委任した人々に対する責務者である。そこで、彼は、彼を選んだ人々が望んでいる限りにおいて首長の座にとどまらねばならない。もしも、統治が一時的なものであるなら、哀れな元首たちは何故かくも傲慢なのか？との問題提起が可能であるばかりでなく必要」と考えます。

また、エピグラムでは後の『ユートピア』におけるよりも、時としてラジカルな表現があります。例えばユートピアの首長には、被選出の終身の統治者がおり、その権力は国民を代表する諸機関によって制限されています。公益という観点から最上の統治形態の問題に特別に捧げられたエピグラムの一つでモアは、国王の個人的権力に対する集団的権力である元老院の優越性について更に詳細に語っています。また封建的君主政体と共和政を比較する時、国王は終生元首としてとどまるのに対し、「もし執政官が悪人であれば、別の執政官を望むことができる」というだけでも、後者の争う余地のない優位性を認めています。

その上で、「この日は奴隷制の終わりである、またこの日は、自由の始まりである・・」と楽観的に宣言します。そして、「我々は、自由を我が物としたから、そして危険と恐怖、痛みと喪失が去ったから、このように狂喜しているのです・・・。」と書いています。モアの詩の中で理想化されているヘンリー八世の形象は哲学者が皇帝になるか、皇帝が哲学者になるというプラトン的空想の生きた具体像のようです。

イタリアにいたエラスムスは、英の友人の一人マウント・ジョイ卿から、「新しい幸福な治世が開始された。新王は美男子で愛想がよく教養があって、神学にも文学にも関心を持っておられる。歌も上手に歌われ幾つかの楽器も嗜まれ自らも作曲もなされる・・」といった希望にみちた知らせを受け取るや、直ぐイタリアを離れイギリスへと急ぎました。

それから十年近く、度重なる王の要請を拒んできたモアが宮廷入りを決意することに成りますが、その心底は如何だったのか、その年四月のエラスムスからの書簡に、「大兄がいやいやながら宮廷へ引きずり込まれてしまったことについては、大兄がお仕えするのが最上の君主だということが、唯一の慰めです。しかしそれは間違いなく、私にとっても文芸にとっても、大兄が失われたということになるのです。」とあります。また、エラスムスは同時期、タンスタル宛の手紙には「私は、宮廷があのような王とあのように多くの学識ある人々のもとにあるのでなければ、宮廷に行く気になったモアの運命を嘆いたに違いありません。・・そこは今王宮ではなく、芸術の殿堂なのです。しかしそうはいいましても、そこにはユートピアから来たものは何もなく、楽しいことも何も

ないのです・・」とあります。

またモア自身、ウィンチェスター司教ジョン・フィッシャー宛手紙で「私は、まったく自分の希望に反して宮廷に入りました。このことは皆も知っていますし、また陛下ご自身、そのことで冗談めかして私を非難なさいました。・・いずれにしても陛下の美徳はかくの如く偉大ですので、私は次第に宮廷生活が退屈でなく思えてきました。」と述べている。

このヘンリー八世の美徳に関する思い違いは、モアにとってだけではなく、友人のヒューマニストたち全てにとっても共通のものでした。教養の外皮と文芸保護の仮面と慇懃な態度の下に、自己目的達成には何ものも容赦しない野蛮で残酷な暴君が隠されていたことを、いずれ皆思い知ることになります。

なお一五三五年、ロンドン塔から娘マーガレット宛手紙で、仕官の頃を回想として「陛下のお側に仕えるようになった時賜った教訓に従って、私はいつも、最初からどんな問題の場合も、先ずはじめに神を仰ぎ見て、次に国王陛下を仰ぐようにしてきました」と書いています。

国王は、その統治と政策遂行に、モアの国際的にも有名で敬意を表されているその知と実務能力の高さが不可欠と考え、助力を要請している訳で、その期待・評価が大きいだけ、モアの独自の考えも振る舞いも許容しているのですから、そのバランスが負に近づくほど、また地位が上がるほど、相容れぬところが齎す危険の確率もその大きさも拡大してゆくということだったのです。

（四）破局へ

通商・外交や統治政策で有能な従僕で、その覚えが如何にめでたくとも、また「先ず神を仰ぎ見て、次に王を仰ぐ」了解のもとで仕えてきたとしても、大法官という廷臣最高位で、王自身の最大課題である教皇庁が認めぬ離婚問題解決に弓を引くことは、そのバランスの臨界点を超え、かつ巡る情勢が厳しさを増せば増すほど、破局が近づいてくることを意味しました。

そもそもモアの大法官就任（一五二九年一〇月）は、長くその職をほしいままにした前任のウルジ枢機卿が、王のために有利な結婚問題解決をはかる政策が破綻し、王の怒りを買い、英国法管轄の訴訟を外国で行なうことを禁ずる「プラエム・ニレ法」に違反したかどで起訴され失脚、放逐され審問に出廷する途次逝去するという事態を受けてのものです。

この六月公刊した『異端に関する対話』でモアは、「キリスト教という単一の身体」からの離脱を促進する政治的無秩序と内紛の原因としての宗教改革に対する自己の

敵対的態度を明らかにしています。ヒューマニスト達の考えは、改革は必要だが、世界の安定平和の傘たるキリスト教教会そのものまで否定することは世界を混乱させると、ドイツにおける宗教改革運動に反対していました。即ち「ルターは・・福音書以外に彼等は何者からも自由（教上の慣習及び律法同様世俗的なそれをも顧慮する必要なし）とする。世俗の統治者にとっては僧侶に対立的に向けられたこれら教説を聞くのは心地よく、また単純な民衆は僧侶や君主、それに都市及び村々のあらゆる権力全部に向けられた非難を聞いて大喜びしている。」と、慧眼なモアは、ドイツにおけると同様、イギリスにおける宗教改革もまた、必然的に国王やそしてブルジョアジーによる教会所領の横領と教会財産の略奪を招来するものであることを明確に理解していました。

大法官モアは、その在任の間、異端排除に大いに力を発揮しました。敬虔なカトリック教徒としてのヘンリー八世は、ルターが教皇に破門されウォルムスの勅令で皇帝カール五世に追放された一五二一年の時点では、モアの助言も借り『七秘蹟擁護論』を出版し、教皇から『信仰の擁護者』の称号を得、ルター文書焚書処分令も出しました。しかし時経ち、キャサリン妃との離婚問題を巡って教皇と対立するこの時点では、カトリック教会を世界平和の傘とするモアとの関係は微妙なものになります。キャサリン妃の甥にあたり法皇の庇護者である皇帝カール五世と、英仏反帝同盟で戦う政治情勢への転換もまたヘンリー八世の姿勢を厳しいものにします。

モア自身も、薄氷を踏む先行きに十分すぎる位の認識を持っていました。一〇月二六日大法官の国璽が渡された翌日、ウェストミンスターの荘重な大議場で、ノーフォーク公が新大法官を推挙紹介しますと、モアはこれに対する伝統的な答礼演説で自分への指令を大変慎重に評価しました。「私はこの大法官の座を危険と困難に充ちた地位であり、決して名誉ある地位であるとは考えないのであります。地位が高ければ高いほど凋落もまた深いのです。それは私の前任者に見られたとおりであります。もしも王の恩寵がありませぬならば、私の地位は丁度ダモクレスにとって頭上に吊られた刃がそうであったと同じ程度の心地よさであると思うのです。」と。

（五）斬首へ

モアとヘンリー八世との衝突も、まさにこの宗教改革から起こりました。政府によるどのような弾圧があっても、改革思想がイギリスへ浸透することを妨げることは出来ず、歴史の潮流、国家と教皇権との分裂を促し、新貴族やジェントリー層はより安上がりな国民的教会をつくることに傾いていました。英国教会の首長たることで少なからぬ政治的利益をもたらすばかりでなく、英国教

会の富を没収する物質的な利益の可能性もありました。教皇との断絶の理由は王の離婚問題であり、死んだ兄アーサーの妻に予定されていた者との不自然な結婚が理由にされましたが、離婚を認証する教皇は、したくなかったし出来ませんでした。既に一〇年も睦まじく暮らしている、また、キャサリン妃は皇帝カール五世の実の叔母にあたり、教皇は政治的に皇帝に従属していました。

一五三一年、王がカンタベリーの聖職者会議に英教会の最高首長の称号を与えるよう求め、「キリストの法が許す限り」の文言追加で認められましたが、一五三二年の五月十一日、王は僧侶会議に教皇の権力を排斥する要求を提出し、このことを王の即位二五周年に宣言するといって驚かせました。大法官モアとウィンチェスター司教のフィッシャーが反対したことに王は立腹、短期の闘争の後、僧侶会議は十五日王の要求を全て受け入れることに、同意します。

後にロンドン塔から王室秘書長官クロムウェルに書かれた書簡からも、モアが離婚問題で王を支持することを望まず、早い段階で（就任時以前）そのことを王に率直に伝えていたことも明白になっています。王も大法官の誠実な告白を少なくとも口頭では尊重して、彼を不利になるような形では利用しないと約束しました。しかし、王は時日が経ち新しい事態によっては、非常に従順とはいえない臣下に対して如何扱うかについて自身の意見を変えないということは請合えなかったということでしょう。それはモアが大法官の全権を返上したときに起りました。王は容赦なく弾圧の雨を降らせ出すことに成ります。大法官就任時モアが開会を宣した改革会議での、策士クロムウェルの手になる法制定の弾丸の雨がモアを追い詰めます。

一五三三年五月、カンタベリー大司教クランマーはデンスブルグの公判廷で、キャサリン王妃欠席のまま、彼女と王の結婚が無効であることを宣言。五日後王妃の家庭教師だったアン・ブリンと王の結婚式、そして七月新王妃の戴冠式、モアは式への参列を断わります。

一五三四年になり王女エリザベス誕生後、新しい王妃とその子供たちの相続権を新たに立法化する「王位継承法」が採択され、前妃の娘メアリー王女の非嫡出子化とこの種の全ての問題処理は教皇から英国教会の大司教・司教及びその他の聖職者たちへの権限移行が合わせ規定されました。王や継承者を文書・印刷物・何らかの行為でこの法を侵犯したものは、国家反逆罪で財産没収と死刑で罰せられ、犯罪が発言だけの場合は、王の意思によって財産を没収され禁固刑に処せられることになります。また宣誓は、臣民（国家の特定の官僚だけでなく現存及び招来の）全ての義務とされ、宣誓はこの法を無条件に承認しその全条項を遵守し、キャサリン妃との結婚無効及びアン・ブリンとの結婚の合法性の承認と英国王の結

婚問題における教皇の権威と権限を拒絶するものでした（更には教皇の権力を否認する思想も含む）。これを踏まえ四月に召喚されたモアは教皇の権威を排斥している点で宣誓を拒否し自らの理念を貫くことで、国内外における道徳的権威の絶大なモアが退任状態にあることの弊害から本人の宣誓で脱することを望んだヘンリー八世の意図も砕くことになりました。そしてフィッシャーとともにロンドン塔に送られます（財産没収も）。

一五三五年四月末、この間一年も期待された宣誓もしないまま、ロンドン塔に幽囚の身だったモアの新たな審問が始まります。前年末議会で採択された、国王の全国教会に対する英国教会最高首長としての完全かつ不可分の支配を制度化した「国王至上法」、国王の全ての臣下は求められた宣誓を必ず行なわなければならないとする第二の「王位継承法」、そして王の名誉を毀損したり称号を拒否したりするどのような言葉でも「悪意に満ちた」行動とされ、高度の反逆として罰する「大逆罪法」に基づく告発でした。被告発者は悪意ある発言をしたという単純な諒告があれば十分で、死刑の危機にさらされます。王の「称号の一つ」を否定したという告発が「大逆罪法」から引き出されるおそれがあり、結論ありきで追い詰められたフィッシャーは六月二二日、モアは七月六日、ロンドン塔のタワー・ヒルで斬首されその生を終えることになりました。

四、再びユース

さて以上諸背景を見た上、話をヘンリー八世がユース（禁止）法を出した前後に戻しましょう。

（一）ユース禁止法への道

前述のように、ユースが認められるようになり、十五世紀から十六世紀にかけてますます利用者が増えてきますが、一五三五年に財政窮乏の為ヘンリー八世が、有名なユース禁止法を出してユース禁止を図ります。

ところで法案成立までにも紆余曲折があります。一五二九年と三二年にユース禁止法案を提案していますが、何れも議会で否決されました。

先ず一五二九年、二つの法案をセットにして議会提出します。一つは、コモン・ロー裁判所（王立裁判所も含みます）で受理されていない限り、当該ユースを完全に排除し、それら財産が法案成立後直ちに徴税されるとする内容です。男爵以上の貴族は対象から除かれましたが、他は王の許可書がない限りそのような土地の購入は認められないとするものです。二つは、未成年相続人が成人となりそれまで王が預かっていた土地を戻す際には、王がその土地の三分の一から収入を得るというものです（すなわち三分の一に封建的付随負担を求められる）。

前者で貴族の保有地は保証を与え、後者に彼等の賛意を得る狙いがありました。確かに貴族階級には受け入れられましたが、下院の過半数を占めるジェントリー（準々貴族）は法案では遺言が無視されることに繋がり、また知識階級の弁護士はユースがなくなり取扱い事件数が減るということで、法案は承認されませんでした。目的は王室財政の確保ということですから、このように負担者側の問題が当然あるわけですが、ユースの盛行によってその非公開性が権利関係を不透明にし、取引や交渉上の混乱を招き詐欺行為なども横行していることへの対応になることも別途提案理由とされていました。

この提案は、ウルジ大法官時代の最後に行なわれたのですが（十一月付けの関連する国王・豪族間の協定にはモアも署名しています）、次の提案は一五三二年、この春モアが大法官を辞す年に行なわれ、しかも同じものを出してまた同じように不承認となりました。

そこで、ヘンリー八世は一五三五年の提案の際には、内容的にも手を加え、また衡平法裁判所扱いであるユースの取扱いが出来ないことに不満なコモン・ロー専門の弁護士の、裁判手続きや弁護士費用についての要望を認め、貴族階層に加え賛成側に回らせました。その結果今度は議会の承認が得られることになります。

（二）ユース禁止法

一九三五年のそれは、対象を主に名義人受託者が譲渡を受けた財産を形式上保持するだけの消極ユースに絞りました（実態としてもこの形のユースが多かったのです）。形式的受託者に何ら保有する理由が見当たらぬとして、受託者から所有権が取り去られ受益者に帰属するとされ、その結果単一人に占有とユース権が帰属する為ユース権まで保持させておく必要はないということでユース権は無効とされました。

ただ、ユースの受託者が譲渡を受け管理する土地について何らかの積極的な義務の負担を受ける場合には（積極ユース）、ユース禁止法の適用は受けないことになっています。また、土地が受益者に保有される意味は、土地所有権として自由土地保有の場合で、それ以外の非自由土地保有である定期不動産賃借権などには保有はないので、適用されないと解釈され、また土地ではない動産には適用されませんでした。解釈適用について、コモン・ロー裁判所及び衡平法裁判所も、法律の文言を極めて厳格に解釈し、国王が求めた財政目的を阻害しない限り、適用範囲を拡大することはありませんでした。

コモン・ローでは遺贈する自由がないので、ある意味消極ユースが禁止されることで、長男単独相続制再導入の効果を持った為、流石にこれは議会の反対にあい、皮肉なことに、その禁止措置は反乱まで誘発し一五四〇年遺言法が成立し、部分的に遺言の自由が認められます。

（三）大法官裁判所

（訴訟件数等の推移）

大法官府裁判所において救済を得る為の手続きの過程で提出された訴状などの書類を収録したEarly Chancery Proceedingsの資料からみられる訴訟計数の研究をみてみましょう。先ず、十五世紀後半から十六世紀前半間の大法官府裁判所に提起された訴訟件数は、ヨーク朝開始の最初の一四六〇～六五年の五年間は、それまでの二倍の年間二四三件に増加、さらに一四七五～一四八五年の十年間はその二倍となる年間五五三件、テューダー朝に入って一四八五～一五〇〇年の十五年間は、年平均五七一件、一五〇〇～一五年は、年平均六〇五件、ウルジ大法官在職中の一五一五～二九年は年平均七七〇件と増加傾向が見て取れます。そして、エセックスとケントにおける判例を選び出して分析したものによりますと、ユースに関係する訴訟が一四二四年までは全体の二八%、一四三二年までには七〇%、一四六〇年までに九〇%までに増加をしていたということです。テューダー朝に入ってからも、サンプリング分析によれば、一五〇〇年まで二割から六割弱までが直接ユース案件であるとのことです。この間ユースも増えていますが、折からの商業取引の拡大に伴い、商業取引関連がかなり増えています。

別の分析で、ウルジ（Wolsey）大法官（一五一五～二九）時代は年平均五〇〇件の訴え提起、モア（More）大法官（一五二九～三二）時代は九一二件、でユースの割合は、両者五割との分析があります。

なお、十五世紀末から十六世紀初頭にユースと保有財産の占める割合が、入れ替わった点に着目すれば、この間ユースに関する事柄を取巻く情況に何らかの変化が生じた可能性が高く、例えば保有財産に絡めて訴えられるケースが増えたこともあります。また、遺産を巡って女性が訴える方も訴えられる方も増えていることがあります。そして力をつけてきた中間階層に属する人々の利用が増えています。

（取り扱いの視点）

また、大法官の見解を比較することでその取扱いの視点をみてみましょう。

スティリングトン（Robert Stillington, 1467/06/20~1473/06/18）は、大法官裁判所はあくまで自然法にしたがって判断をくだすべきであって、制定法より上位概念としての存在で、事実審問を旨とすべしと言っています。

ウルジ（Thomas Wolsey, 1515/12/24~1529/10/26）は、法の厳格さに従って形どおりに事柄を進めるよりも、良心に従って適切な事柄を行うことこそ、賞讃に値する。大法官裁判所は良心の裁判所で、場合によってはコモン・ロー裁判所に対して執行や判決を控えるよう権限をもつ

のは、それに基づくといい、国王はその威厳や大権の故に、良心によって法の厳格さを緩和する必要があり、王として正義を実現する立場から、正義を遂行する役人である大法官を任命することとしたと言っています。

モア（Thomas More, 1529/10/26-1532/05/16）は、コモン・ロー裁判官が、法の厳格な執行だけに固執せず、理に適った配慮に従って『法そのものの厳格さを緩和・改善する』ようになれば、差し止め命令は不要となるが、実際にはそうなっておらず、それ故にこそ大法官裁判所による差し止め命令が必要になるという問題の本質を自覚しています。

ここから、大法官裁判所は、形式的な欠陥に捉われることなく、必要に応じて適切な救済を提供しうる国王の裁判所として上位の性質を持つ機関であり、しかもコモン・ロー裁判所が救済を提供し得ない事例を、罰金付召喚令状を用いて処理する機関法的機関であること、良心あるいは自然法に基づいて事実の審問を行なっていたこと、大法官は衡平な正義を実現する立場にある国王によって、慈悲心をもって正義を遂行するために任命されていたことになります。一五二九年モアが就任するまで大法官はコモン・ローの教育を受けていない聖職者でありました。罰金付召喚令状は審問を必要とするものに与えられ、良心に基づいて判断されました。これは大法官とコモン・ロー法曹の大半に共通した認識でありました。

特に十五世紀後半については、大法官裁判所もコモン・ロー裁判所も事例が増加傾向であり、コモン・ロー裁判所の事例が大法官裁判所に流入してきた結果大法官裁判所の事例が増加したわけではないと思われます。

増加の要因となった新しい救済を求めた訴えの内容の多くを占めたのは物的財産と法律文書に関する事柄でありました。さらに1480-90年代になると、法律文書に関する訴えが物的財産に関する訴えを上回り始めますから、財産権それ自体に関する直接的な訴訟よりも、証書を用いるというより簡単な方法が利用され始めたことが推測されます。訴訟当事者の職業または身分をみると中間階層に属する人々であったと思われます。

十五世紀後半から十六世紀前半の時期における大法官裁判所に多くの訴えがなされ、一五〇二年までにイングランドの土地の大部分に設定されていたと言われるユースに関する事例の具体的考察の結果をも織り込んでまとめなおせば、次のようになります。もともとユースはコモン・ロー上の権利を生じえないものでありましたから、これを保護した大法官裁判所における救済は、コモン・ロー裁判所の裁判官Moyleが述べたように、コモン・ロー裁判所における土地に対する法とは異なるものでありました。しかし十五世紀末になるとコモン・ロー裁判所は、ユースに関する事例を、リチャード三世治世一年法律第一号（一四八四、ある意味ユースの受託者・受益者双方

に所有権を認め、該資産のやり取りの安全を確保）に解釈を施すことによって処理し始めた結果、一五二〇年代になると、ユースはもはや制定法を伴わなくともコモン・ロー上の性質をもっていると人民訴訟の裁判官が主張するほど、それはイングランドの法や社会に深く浸透したように思われます。

コモン・ロー裁判所がユースに関する事例を処理し始めたという事実は、脱法行為に正当性を付与するためということではなく、むしろユースを設定・利用する理由が変化したと考えるべきではなかろうかと思われます。既に十五世紀末になると、ユースは売買取引の担保として利用され始めていたからです。ユースの設定によって生ずる受益権が、商人への債務弁済手段として用いられていた事実から分ることは、それが実質的に財産権として機能し始めていたということです。

聖職者であった大法官がローマ・カノン（教会法）両法の知識を援用しながら良心や自然法に従って裁量的に裁いたとはいえ、そこでの救済プロセスに、上級法廷弁護士やコモン・ロー裁判所の裁判官をはじめアトニーにいたるまで、あらゆる階層のコモン・ロー法曹が深く関与していたという事実から分るように、大法官裁判所とコモン・ロー裁判所の関係は、分業的かつ共働的な側面を有していたということでしょう。それゆえ、大法官裁判所がエクイティとして発展させたこのような機能的構造・プロセスが慣習法の体系としてのコモン・ロー全体の一層の発展と拡充をもたらし、十五世紀後半から十六世紀前半の時期のイングランド社会が求めた法の新しい発展を担っていた、と考えられます。

（四）大法官モアとユース

改めて、モアの娘婿でありモアの伝記作者の一人でもある、ウィリアム・ローパーが、モアがコモン・ロー裁判所の全裁判官と大法官のコモン・ロー裁判所に対する差止め命令について議論した際述べたと伝えるところをなぞってみましょう。

「もし全る裁判所の裁判官が理に適った配慮に基づき、自らの裁量によって、つまり彼等が良心にしたがってそう義務づけられていると考えるように、法そのものの厳格さを緩和・改善するのであれば、その時以降大法官によって差止命令が発せられることはなくなるであろう。」

これからも、モア自身自然法の理に従って判断することを一貫して訴えてきている訳ですから、適格なユースの発展を支持していたことは明らかです。コモン・ロー裁判所における取扱いの促進も含め、迅速な裁定に努めたことはそれをあらわしていると思います。

ただ、まさに彼が大法官の期間に、ヘンリー八世のユー

ス禁止法が提案されます。初回のお膳立ては直接的には前任者のウルジ枢機卿が関わっていると思いますが、大法官として法案提出の署名者に加わっており、貴族に対する方針案・協定書にヘンリー八世と共同署名しています。どんな話し合いがあったかまでは分りません。二度目の同案の再度提案にはモアはどの程度関わり得たのでしょうか。王室財政不如意の挽回策という目的であったことは明らかですが、制度そのものの在り方に何処まで持論を通していたでしょうか。王の離婚問題という難題で対立的案件を抱えていた時期ですから、ユースの全面禁止法の骨抜きにモアがどの程度関わりえたのかその解明は困難です。

時期的にもモアが辞めた一五三二年五月までの一年間は、英国王の首長権主張問題のテンションが上がって行く過程ですから、議論は難しかったと思われますし、逆に同内容で再提案というところにもそれが伺えます。

一五三五年提案ユース禁止法については、この時は既にモアはロンドン塔の中ですし、大法官は後任のトマス・オドリ卿でありました。提案内容の修正（緩和）に直接影響を与えられることは出来ませんが、それまでに発したモアの該博な知識や洞察が将来に繋がる要素を、提示案の中に残滓として知ってか知らずにか埋め込まれたのではないか、という設問があり得ますが更に難題です。

五、その後のユース

ヘンリー八世のユース禁止法が、その目的を財政問題に絞ったことから、ユースそのものの進展が全く止まったわけではありません。対象も土地の所有権に絞っていますし、対象外の所有者層も設けられています。そして規定的には、能動的ユースの除外や二重のユース余地など、将来的に再度発展する風穴が開けてありますし、取引の安全・安定といった趣旨も明記されています。

それでも矢張り暫くの停滞は続くことになります。しかし、モアも示唆したように自然の力が動かしているその流れは、また息を吹き返すことになります。

その後の展開ということからみても、それでも真正の特に幼い相続者に封建的負担がかからないように、人々はくぐり抜けの方法として仮の受益者をおき彼等が真の受益者のために土地を保有する、といった二重のユースなるものも考えだされ、やがて制限逃れを必要としない真正のユースであるトラストへ進化してゆきます。

二重のユース（use upon use）は、本来受益者のために受託者に託すものが、ユース禁止法ではコモン・ロー上の不動産権になってしまうので、間にもう一つ第一のユースを入れ、それがコモン・ロー上の不動産権となっても、第二のユースと成り本来の受益者に行ったものは、ユース禁止法の適用を免れるという点をつき、ある意味

脱法的に衡平法上のユースを実現させるものでした。

これも当初大法官裁判所（衡平法裁判所）でエクイティとしての保護が得られませんでしたが、十七世紀後半には、結果として保護されるとの解釈に繋がる判決が出たり、そもそもユース法自体が狙った封建的付随負担が廃止になった（1660）ことで、use upon use は大法官の保護を受けることに成ります。更には本来のストレートなユースで足りるようになり、トラストの用語に置き換って発展することに成ります。この辺りが衡平法の結晶期にも当り、ノッティンガム卿が大法官として、普通法と衡平法の法体系としても、衡平法裁判所と普通法裁判所の裁判組織としても並列する位置付けを確立する時期に重なっています。

衡平法裁判所の判例の集積によるエクィティーによって、近代信託制度の発展を基礎づけることも可能になったのです。

六、夢想―ロンドン塔からユートピアへ―

ここまで書いてきて、ふと随分昔ロンドン塔を訪れた時のことを思い出しました。案内してくれた知人がいつか聞いた話だがと、「首を斧で断たれ晒された人達が、月夜の晩にその姿をタワー・ヒルの何処かに現し何事かを呟いたり連れと話すのを、警吏が聞いて記録を取ったものと称される文書を、嘘かまことか、骨董屋で見たとの話を耳にしたことがある。」といった趣旨のことを、これまた嘘かまことか、恐ろしげに秘密を打ち明けるように、言っていたように思います。

歴史上有名な人物の名前を何人か数え上げていたように思いますが、その時はロンドン塔の歴史自体よく知りませんでしたし、それら人物への関心も薄かったので記憶にありません。ただ、ユートピアは読んでいましたので、トマス何がしと言ったのをモアかなと勝手に思ったことがぼんやりと意識下にはあるからでしょうか。

それが今回、妄想として「何処にもない国」ならぬ「何処にもない話」として、夢のように浮かんできました。夢の藻屑と霧散しないうちに、書き留めないといけないと見境もなく、そんな警吏の話を取敢えず自分の前にあったこの原稿用紙に書き付けてしまいました。読まず終わりにして下さればよく、私自身の記憶にとどめるものとして書きおくことだけはお許し願います。

＊　＊

（一五四四年＊月＊日、ロンドン塔M警吏　記）

その夜、蒼穹に散りばめられた星々を背負いながら、将にユートピア島の形をした新月がロンドン塔の寒々と

した庭を、その冷たく青白い光で照らしていました。二つの影が庭石に座り向かい合っていました。そっと覗き見ると、一人はあの忘れもせぬ、先年刑死されたトマス・モア様です。そのお相手に懐かしそうにラファエルさんと声を掛けたので、あのユートピアで有名なラファエル・ヒュトロダエウスかと思いました。

そのヒュトロダエウスのような方が口を開くと、こう言いました。

「貴方ほどの方が何故、むざむざと死の斧に斃れねばならなかったのですか。」

モアの霊が、「ふふ」と笑ったように思われました。

「いいですか、ラファエルさん。ユートピア第一巻での貴方と私の会話が全てを語っています。貴方もご承知の筈ですよ。」と何か真をめくるような音が聞こえてきました。そしてモアの話が続きます。

「アントワープの聖母教会で友人のピーター・ヒレスからラファエル・ヒュトロダエウスさん、貴方を紹介され、庭のベンチで先ず、その航海とユートピア島での経験の梗概を見識深くお話いただきました。そしてヒレスと私が、貴方のような哲学者こそ、君主の参議会員になって政治に参加して欲しいと言い方を換えて何回も頼みますが、その度に現実に何処かの参議会であったことや、起りうることや、理論的に望みえないことを挙げて、肯かれませんでした。その中のやり取りにこうあります。私が聞いて貴方が答えています。読んでみます。」

（私）

『あなたがもし、君主たちの宮廷を忌み嫌うまいとご自分の心を納得させられたら、あなたのご助言で公共のために多大の善を施すことがおできになるということです。ですからあなたに課せられた義務でこれほど大きなものは皆無です。事実あなたのお気に入りのプラトンは、社会というものは哲学者たちが統治するか、または王たちが哲学するときに初めて幸福になるだろうと考えています。ですから、もし哲学者たちが、王たちに助言を与えることさえも学者のこけんにかかわると考えるようだったら、幸福ははるかに遠ざかってしまうでしょう』

（貴方）

『哲学者たちはそういうことをするのを喜ばないほど恩知らずの人間ではありません。権力者たちが善い助言に従う用意があったときには、事実、哲学者たちは多くの本を書いてすでにそうしてきました。しかし疑いないのは、プラトンがよくも予見していたということです。王たちは、自ら哲学に心を向ける場合以外は、若い時から間違った考えを呑み込まされ、それに感染させられているために、哲学者たちの助言を心から受け入れることはけっしてしないだろうと。これは彼自身がディオニュシオスのもとで体験したことです。もし私がどこかの王にたいして道理にかなった法令を提案し、悪人どものまいた有毒な種を彼の心から引き抜こうと試みたとしたら、私はたちまち放り出されるか嘲りの的にされるかのどちらかになるとお考えになりませんか。』

「これに続けて貴方が沢山の具体例を述べられ、第一巻の最後は、私から、食事後ユートピアの実際の全体像を詳しくお話いただくことをお願いするのですが、その前に、あなたの透徹した事実認識に対して、一歩踏み込んで申し上げた一節があり、それをお読みしましょう」

（私）

『どんな命題でもどこでも通用すると考えるような観念的な哲学なら（君主たちに）はいりこむ余地はありません。しかしもう一つの、もっと社会の現実生活に合った哲学があります。それは、自分の登場する幕を知っていて上演中の作品に自分を合わせ、自分の配役を型どおりに立派に演じる哲学で、これこそあなたがお使いになるべきものです。・・あなたはとにかく自分の役を最高に演じなければなりません。・・君主たちの審議の場合もそうです。・・間違った意見を根こそぎにしてしまえなくても、習慣で根をおろしてしまったいろいろの悪をあなたの心からの確信どおりに癒すことができなくても、社会を見捨ててはいけません・・むしろ紆余曲折しながら全力を尽してすべてをうまくさばくように、また改善できないものは少なくともなるべく悪化しないようにと試み、励まねばなりません。というのも、万事がうまくゆくということは、すべてのひとが善人でない限り不可能ですし、そういう状態は長年月待っても実現できるとは期待しておりませんからね。』

モアが一呼吸おくと、ラファエルが問い直しました。

「そうです、覚えています。それに対して私は、『他人の狂気を癒そうと努力しているうちに私自身が彼等と一緒に狂ってしまうというほかに出てくる結果は皆無であり、体制そのものの変革に持ち込まねば無理だ』といった趣旨のことを言ったと思います。ところで、社会を見捨ててはいけない、全力を尽してうまく捌くようにとのことですが、離婚問題をめぐり教皇と対立する王の路線を、うまく捌き切れず事ここに到ったということですね。そこには、モアさんの譲れぬ信念とそれを守るようには捌けなかった事実があったということでしょうか。」

モアが答えます。

「その通りです。私が問い目指してきたことは、世界の平和と人々の安寧であり、そのための、理性的精神の社会的共有と政体としての民主政の追求です。その意味で『キリスト教という単一の身体』即ちキリストの事業を担う教会から、個々人の信仰の名の下に離脱を促進し、政治的無秩序と内紛の原因としての宗教改革には、王と

ともに異端の排除で臨んで来ました。そして、王個人の問題として浮上した離婚問題が、公会議で決定されたキリスト教会の普遍的規律を揺るがし、聖俗の世界的争いになるのも看過出来ませんでした。宮廷入り以来国王が認めた『先ずは神を仰ぎ見て、次に国王陛下を仰ぎ』との私の立ち位置から、本件もお話しましたが、王自身の執着とクロムウェルのマキャベリ的策動もあって、うまく捌けませんでした。しかし、ラファエルさんのいう体制そのものの変革に一挙に持ち込むことは出来ないとしても、歩を進めるには死を賭して阻止すべきとの意識であったということです。ユートピアを書いた時期までは、ヘンリー八世は良き社会を追求してゆく際の、君主の選択としては最高であると考えていました。しかし、結果がこうなったからといって、その後の変化は想定の範囲であり、目指す社会実現への貢献の為宮廷入りしてから最後まで、危険の高まりと共に覚悟も一層高め、最善の捌きで可能最大限の前へ歩を、ということで進んできましたし、自分なりに信仰を深めることで、死の恐怖も克服しました。」

ラファエルは少し考え込んでいましたが、やがて

「すると、私のお話したユートピアは、モアさんにとっても理想の社会だったということでしょうか。政体としても、いわばより洗練されたローマ共和政が物質的にも精神的にも等質の人々によって運営されているのですから。」

この時もモアはフフッと笑ったような気がしました。

「それは一面当たっており、一面当たっていないということでしょうか。言い換えると、結果としては正しいが、至る過程には疑問ありということでしょうか。

私が第二巻の最後に疑問を呈していますが、その趣旨はユートピアは別世界のものではないか、私達の世界では違うのではないかということです。あのフランスを代表する人文学者ギョーム・ビュデがイギリス人トマス・ラプセットに書いた手紙でそこをついています。即ち『ユートピアの島は、素晴らしい幸運のお蔭で、公私いずれの生活領域にもキリスト的生活風習と真にキリスト的な英知を取り入れ、それを今日まで保ち続けてきたということです。・・・次の三つの神的制度を死にものぐるいで固守しているおかげです。第一は、市民間での善きもの悪しきものすべての平等、あるいは別の言葉でおっしゃりたければ、全面的かつ絶対的な［市民的分有制］。第二は、平和と静けさに対する恒常にして不屈な愛。第三は、金銀のさげすみ。この三つは、ごまかし、瞞し、騙り、詐欺、不実な欺瞞などすべての、いわば［追い出し手］です。』

環境的には、海の天然要害に囲まれた閉鎖島、単一農業生産、人口定常を前提にビュデの云う条件が実現可能

になっているのです。しかし、農業でも技術は進歩しています。羊毛から織物工業が勃興しているように生産構造も変化しています。そして貿易を行なえば、ユートピア島のような神的幸運がなければ、単一定常生産が千年も守れる筈はありません。理想が現実になったユートピアは、部分部分はお手本に成りますが、私達がよい社会を築き上げてゆく目標としての総体的社会の形としては、無い世界ではないかということです。

平和と安寧な社会は、等質の人間からスタートするのではなく、私欲と多様性の個々人から出発して、技術・環境の変化を吸収しながら、作り上げていかねばできないのです。その為には先ず目指す政体の形が重要であり、目指している流れは理想的民主政であり、その過程で人々の公的責任感や徳も文化も高まりを見せてゆくのです。一朝一夕には出来ませんし、犠牲も重ねる必要があります。」

そこでモアは一息入れました。一遍の雲が新月を過ぎろうとしていました

一瞬の闇が訪れると、待ち構えているラファエルに向き直ってモアは再び口を開き、「ローマ共和政の為に身命を賭け斃れたキケロだったらこんな風に言うでしょう。」と一語一語その身に成り替って紡ぎだすように語り始めました。

（キケロ）

『私の一貫しての思いは良い社会をつくることだ。一人ひとり倫理感の高い市民としてお互い切磋琢磨し尊重仕合い、自由と発展の果実を享受出来るよう、国家の一員として尽し貢献する気概がなければいけない。勿論自らを高める為には、学び考え経験し、その識見人格を陶冶するため努力が必要である。そして社会は人々の集合であり関係であるから、国の形そしてその運営のあり方、即ち政治の成否が決定的に重要である。

ローマは建国以来、王政から共和政に移行し人々が国政参加し責務を果すことで、内外の様々な困難を克服し、国の拡大・拡充を果してきた。しかし、国家規模の拡大の速度が急になると、それを支える共和政の維持発展が息切れしてきていた。私が生まれてこの方は、力の政治に振れ易く現に内乱含みの時代となっている。

幸いにして、私は内乱の中心から離れたアルピーヌムの田園に生まれ、学に篤い父が頃合いをみてローマに移転、当時望み得る最高に近い学問の機会を得た。ギリシャから来た哲学者や元老院で執政官を務めた法学者や雄弁家の碩学に教えを受け、一年の兵役経験を入れ十年余に亘りしっかりと、歴史・詩・雄弁・法律・哲学と幅広く勉学に励んだ。そしてあるべき社会の目標も定まった。

自然法に基づく法治の下、民主的議院で国家のあり方運営を論じ決定し、平和で豊かな社会を実現する。共和

政の維持発展の中にこそそれがあり、その為には力でなく弁論を磨き言論で、真実と理に依拠し人々に訴え、動かしていかなければならなかった。また、哲学的思索に基づき内実のあるまた自然の理に適った議論をして行く必要があった。しかしローマ版図の軍事的・経済的急拡大で、ある意味軍団を率いた所謂軍閥政治家の力の蓄積は着実に進行しており、私の執政官就任に前後して、その歯牙が露わになってきたといえる。力の政治に対抗し共和政を守ってゆくためには、あらゆる手立てを尽くし前進少なくとも退かぬよう、力の圧力を捌いていかねばならなかった。

最後は身命を賭してということにならざるを得なかったが、私の信条とするところは、『歴史に学び、事の由って来るところを事実によって究明し、自然の理に法り判断し、事を実現することが道であり、矜持を以て事に処す』であり、この基本は終生変わらぬものであった。神々の存在、神々との関係、神々の捉え方について書いた『神々の本性について』で述べたように、哲学的理性に基づいた自主的信仰は現世の善行が来世の評価にも結びつくものであり、矜持を以て事に処す場合起りうる死の恐怖から魂を解放する力とすることが出来た。』

モアがキケロに成り替り語り終えると、ラファエルが言います。

「将に、現代の偉大なユマニスト、トマス・モアとしては、理想国家と実践ということでは、私と違い、ギリシャのプラトンではなくローマのキケロを採ったのですね。そして政治家としては、マキャベリでもクロムウェルでもなかったのですね。よく分りました。

キケロはキリスト教以前の人ですが、彼の理性に基づく信仰は、理性に基づく自然法や徳の政治、理性に基づく善良で他人を思い遣る名誉ある快楽、これらと一体となったもので、人間の理性の更に上の、普遍的最高存在を神としています。これは、ユートピア人がミトラスと呼んでいる、各自の多様性は認めつつもそこへ収斂すべきものそして全世界創造と摂理の源である唯一最高存在の神と相通じるものだと思います。モアさん、貴方がお嬢様マーガレットさんに語ったという、『斬首されることと地獄に堕ちることとは同じではない』ということや『信仰の力の加わった理性による最終結論』といったことは、これらに通じるものではないかと推測します。キリスト教的ヒューマニストの究極の姿かとも思います。

ところで、議会における貴方の勇気ある主張が民主政を前へ進めた功績は大きいと思いますが、今後どうなってゆくでしょう。」

モアの表情は一瞬曇りますが、直ぐ思い直したようにきっぱりと言いました。

「平和と安寧の観点からは、宗教改革運動が齎した宗俗

にわたる国際的な対立抗争が収束するには相当な時間が必要で憂慮されます。

然し民主政への流れは止まることはないでしょう。私は法律家として自然法に立脚して公正・衡平な社会へと心砕いてきました。大法官の二年余も前任のウルジ大法官が山積した未決事件の一掃にはじまり、私の代に増え続ける事案全てその観点から処理し未決なしで終えました。そしてユースに代表される衡平法の原理の普通法行政への浸透を図ってきました。私の斃れた年に成立したユース禁止法は、王の財政難対策を目的とするもので、私はユースの原理自体は残るよう仕掛けておきましたが、矢張りその動きにブレーキがかかったことは否めません。しかし、この自然法の流れの力を体現した法理は必ずその力を取り戻します。時間はかかっても、この資産の衡平な引継ぎによる分散化が、より多くの人々の経済基盤ひいては政治的発言力を高め、民主政の強化に繋がってゆくものと信じています。」

自らに相槌を打つように頷くモアにラファエルも視線を合わせ頷き合います。

そして、モアは、「ラファウェルさん、これまで失礼しましたが、今日はあのアントワープでの出会い以来の再会が出来、想いを語り合わせていただき有難うございました。」と、膝をついて深々と頭を下げました。

ラファエルは、感に堪えない表情で、モアを抱き起こしつつ語り掛けます。

「斃れて後の貴方は、きっとこの辺りにおられると思い何回かお尋ねしましたがお会いできませんでした。貴方の晒されていた頭部が娘さんの手で取り戻され保管され、今回、貴方が、お二人の奥様とあの世で共に過ごすべく、そして生が許さなかったところを、死が与えてくれるよう天に祈ると、前もって墓碑に書かれた墓地に埋葬されたとのこと、それを見定めて今日はお会いしていただけたのだと思います。

モアさん、もうここに居残る必要はないのでしょう。私がご案内します。あの島へ参りましょう。貴方が幾つかの疑問を呈したユートピアの実態をつぶさにみていただき、またその歴史にも遡っていただき、結果と到る経過やあの世とこの世を、自然に繋ぐものはないのか、じっくりお考えいただければと思います。」

モアは大きく頷いたように見えました。

間もなく、再び全き光を取り戻した新月の方向に、一体となって、飛び消えてゆく影を何時までも見送って立ち尽くしておりました。以後ロンドン塔の噂する警吏達の口の端に、モアの名前がのぼることは無くなりました。

（了）

祖国の再建

浅野博文

一、国家の継承発展

我が国は、神武天皇建国以来、その皇統永く栄へ、その国家は二千年を超へる。そして世界史上、人の創った国家として、内訌や侵略による国家の革命（王朝交替）を経験して居ないのは独り日本のみである。

現に、日本の古い時代の文化財に発掘品では無く、伝世品が多いのは、そのことの重要な証左の一つであり、明治期に岡倉天心と共に東京美術学校（現、東京藝術大学）設立に尽力したお雇ひ外国人のフェノロサが日本の文化財を高く評価し、広く世界に向けて紹介をしたのは周知の事実である。

日本人は今日まで、祖国の本来性・根源性・純粋性を貴び、また其の連続性を代へ難き価値と信じて来たが故に、世界史の一般である変化流転、波乱万丈の危機を幾度となく経験しながらも、魂の力の高揚、即ち古に復り、大化改新・建武中興・明治維新に表象される革新を以て、日本国家の命脈、その核心である皇統を護持して来た。

古今を通じ、世界各国に於いては、祖国の継承発展を願はない者は居ない。今日に於いて、日本人が真直ぐに一つの歴史を歩み、天壌無窮と言ひ、永久不変と称される日本の國體の中で生きて居るのは、唯物史観が力説する所の単なる大衆や経済の力によるものではない。

神代の昔に、天照大神より神勅を賜つた皇孫と共に、豊葦原へ天降つた先祖に連なる代表的日本人の力、即ち各時代を代表する先哲偉人の精神の力によるものであり、歴史の継承や文化の創造は、それ無くしては不可能であつた。

そして、積年の父祖の丹精により、心田の荒地は耕され、葦原は瑞穂の国に転じ、建国以来一貫して、温故知新の道を歩む君民一致の歴史の積み重ねを以て、比類無き国家は実現したのである。

明治天皇御製

国民はひとつ心にまもりけり
遠つみおやの神のをしへを

畢竟、歴史の中にて幾多の風雪に耐へ、革命による祖国の破壊断絶を否定し、今日までその継承発展が護られて来たのは、国民のひとつ、皇祖皇宗の道を践み行つて来た、心に他ならなかつた。

二、万世一系の皇室

日本歴史に一貫する國體の貴さとは、万世一系の皇室に裏打せられたものである。

古くより、我が国の天皇政治は、儒教や仏教を謙虚に受け入れ給ふ中で、儒教に於いては「君主国」、仏教に於いては「大乗相応の地」たる実を示し、外国の識者より、その国柄を讃へられて来た。

それは、孔子や釈迦が理想とする「世を救ひ、世を益する」儒仏の教への本質を、御自ら率先して、この日本に現出せんとされた皇室の御徳が、根本に於いて存在してゐたからである。

実際、我が国の文化が、皇室を中心に外国（儒仏）文化を換骨奪胎して発達させて来た中で、日本人の心の優しさや風流を楽しむ特性が、その精華たる『古今和歌集』から『新古今和歌集』に至る勅撰の和歌集に表れてゐることは、そのことの証左に他ならない。

そして、絵画・彫刻・建築・詩歌等、一切の文化造成の窮極は、おのずと道義の確立に向けられ、最高の文化財としての道義国家日本へと収斂し、「天道人を殺さず」、世界に類を観ない姿が、国家社会に於いて広く周知されるに至つたのである。

「彼ノ国、古今、侵奪スルモノ無シ、龍神報護シ、法人ヲ殺サズ、過ヲ為ス者ハ、配シテ犯人島ニ在リ」シナの後周（西暦九五一～九六〇）に作られた『義楚六帖』に於いて、この事を称賛してゐることは、その後に興つた宋王朝の天子である太宗が、「古の道」として感歎した建国以来「国王一姓伝継」の国柄と併せて、特筆すべき史実である。

一体、弘仁格を発布して国家による死刑が行はれない様にしたのは、嵯峨天皇の思召による所であつた。以後、保元の乱に至る迄の約三百五十年間、謀反等の罪により死刑に当ることが確定してゐても、これを天皇に上奏すれば、罪一等を減じて流罪に処せられたのは、天皇の思召の政治に強く表れた時代に於ける象徴的な事柄であつた。（注一）

天皇政治の本質は、政治の中心が武家に移つた戦国の御式微に於いても、理想的時代とせられた延喜天暦の御

世に思ひを馳せて学問を怠らず、国民の生活の安定には一層御心を砕き給はれた点からも窺へる。

「強キハ弱キヲ伐チ、賤シキハ尊キヲ凌グ、臣ソノ君ヲ殺シ、子ソノ父ヲ殺ス、上下カヘツテ転倒シテ、猿ノカムガ如ク、犬ノイガムガ如ク」

（『応仁記』）

群雄割拠、無統制に象徴される戦国時代最中の天文年間、やはり不幸は単独にてやつては来なかつた。七百年来と称された飢饉がそれである。後奈良天皇は、全国飢饉と悪疫流行による死者の続出を悲しまれ、「朕は民の父母たれども、徳覆ふあたはず、はなはだみづから痛む」との御心を以て金字で般若心経を御写し遊ばされた。これらは全て六十六箇国其々の一の宮に納められ、国安かれ民安かれとの一念で御祈りになられた。

その御仁恵は国史を一貫する清純の御伝統の一端に過ぎないが、代々絶へず皇室とは、平和愛好・四海同胞の念に徹し給ひ、一旦緩急あれば（大化改新・承久の御計画・元寇・建武中興・明治維新・昭和の敗戦と占領期等）御身を以て国難に代へられたのであつた。

果たして、道義と風雅の模範であられた天皇政治の御伝統は、皇祖天照大神を仰ぎ奉る神道を御徳（道徳）とせられ、最高の地位にありながら、常に奉仕の生活と云つてよい謹慎の御日常、言ひ換へれば、宮中祭祀を身を以て伝へ給うたことに一切の核心が存する。

それは、天壌無窮の神勅と三種の神器を、遥か天孫降臨の昔に天照大神より授けられた「日の御子」としての御自覚より来られてゐるものであると思はれる。古来より道義国家として外国より羨望の眼差しで称賛されてきた所以が此の一点にある。

事実、我が国の近代国家としての出発点であると同時に、王政復古、日本の本源性の回復であつた明治維新は、アジア・アフリカ諸民族の指導者達を感激させ、その情熱は明治維新の探求へと向かはせたが、彼らが学ぼうとしても学び得ず、自らの歴史や伝統に寂寥を感ぜざるを得なかつたのは、実に此の点である。

三、國體と憲法

『報徳記』とは、その生涯で六百余の農村復興に生涯を捧げられた、二宮尊徳先生の功業が記された高弟富田高慶翁による偉人伝であるが、その中で先生は一貫して、「およそ世の中の盛衰・存亡・興廃、一つとしてこの分度を守るか失ふかによりて生じないものはない」と喝破する。

分度とは分限であり天分に他ならない。『礼記』にも「人ルヲ量リテ、以テ出ヅルヲ為ス」とある様に、収入に応じた天分が破られ、定まる所が無く、支出に天分が影を映さなければ、やがて国は亡びることを誡めてゐる。

如何なる財政の再建も、収入に見合つた支出である所の分度を守らねば、破綻消滅すると言ふ意味で、分度即ち天分の本質は不易である。今日、幾多の危機に直面してゐる日本を省た時、不易であらねばならない國體が揺らいでゐる。故に「発心正しからざれば、万行空しく施す」（道元禅師『学道用心集』）、政治経済文化教育産業の各分野で、その方針や判断が誤つたものとなつてくるのは諸ふことである。

周知の如く、一国存立の基盤は道徳にあつて法律ではない。加へて、その国の道徳とはその国の歴史を根拠とされなくてはならない。『十七条憲法』から『大日本帝国憲法』（明治憲法）に至る一貫した伝統とは、日本歴史を法文に書き換へてゐると言ふことであり、それが日本の国柄や國體であり、大義名分と同義となつてゐる。

現行の『日本国憲法』（占領憲法）及び『皇室典範』（占領典範）は、国の独立も無い超混乱期に於いて、アメリカの暴力に依りて成立させられたものである。それは、聖徳太子以来継承されて来た伝統的国家観及び民族的精神に立つものでは断じて無い。

今日の、本質を等閑に付して、区々たる条文の整備に着手する憲法改正には、到底意義を見出せない。特に、今日の祖国衰亡の象徴である皇位継承問題に就いては、国史を鑑みるに、皇位が男系に限り、女系の所出に及ばざるのは、皇位継承の不易の原理にして、それに違背する議論を講ずることは、大義名分に反する。

建武の中興時に、忠孝の道に殉じた楠公父子の精神は、不朽の生命力を以て、後世の明治維新を導き出し、更に敗戦に至るまでの我が国の指導原理となつたが、楠公の旗に記されてゐた「非理法権天」の字句は、人と人との関係上、知力でも、弁舌でも、威権でも、決して通ることが出来ないものこそ「天」であることを高らかに闡明してゐる。

即ち敷衍すれば、日本に於いて国家の弥栄とは、天皇陛下が、天照大神より下し給はれた神勅を以て、代々天皇の御位と共に、それを継承することに依りて、初めて約束されるとしたのである。

そして、そのことは維新の先覚者、橋本景岳先生も、安政三年四月二十六日中根雪江（福井藩士）宛て書状で、

「国是と申者は国家祖宗の時、既に成り居候者にて、後代子孫に在りては、その弊を救候得ば、宜義にて御座候、子孫の代にありて別段国是を営立すると申例もなく道理もなし」

と喝破され、「天皇と雖も國體の本にある」ことを暗に述べられてゐる。

同様に、吉田松陰先生も『講孟劄記』の「故家・遺俗・流風・善政」と言ふ項の中で、これを講じて、

「そもそも国の治安長久なるは、地広きにもあらず、

民衆きにも在らず、惟頼みとすべきものは此の四者にしくはなし、然れば政を為す者ここに心を用ひずんばあるべからず、是を知らずして妄りに祖宗の成法を変じ、国家の美俗を易ゆる者は、国賊と言ふべし」

として、国を維持する根本の力の所以を示され、それを犯すことを厳に誡められた。

そして、大日本帝国憲法上諭には、

「国家統治ノ大権ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ伝フル所ナリ朕及朕カ子孫ハ将来此ノ憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ」

とあり、伊藤博文公も『憲法義解』にて、

「憲法ハ紛更ヲ容サス但シ法ハ社会ノ必要ニ調熟シテ其ノ效用ヲ為ス者ナリ」

として、憲法とは軽々に改正すべきではないことを説かれた。

事実、『明治憲法』が大権を掲げてゐるのは、新設を意味するものではなく、固有の國體が、憲法に依りて確認せられたに過ぎない。同時に、天皇は此れより初めて立憲君主におなりになつたのではなく、初めより専制君主ではあらせられなかつたのであり、万世一系の天皇に於いては、これまでの歴史が、憲法に於いて成文化せられたと云ふことであつた。

今日、日本民族二千年の伝統を成文化された大憲章を、先の大戦にてアメリカに蹂躙されたままにして、『占領憲法』を皇国の骨子とすることは、世界の普遍的憲法法理に反すると同時に欧米の植民地支配より東亜を解放せんとした、戦争目的の一班を自ら葬り去り、祖孫に対する背信と糾弾されても致し方がない。

四、精神の偉大性

明治天皇御製

橿原のとほつみおやの宮柱
たてそめしより国はうごかず

明治維新が過去との断絶を意図した革命ではなかつたことは、天皇の御詠みになられた御製からも理解出来る。

一体、西洋の政体より換骨奪胎し、古来の善政と改革と我が國體の精髄を示した『大日本帝国憲法』と『教育勅語』は、民族の歴史と伝統に対する尊重の念を呼び醒まし、近代日本国民が向ふべき方向を明らかとした。そして、それら憲典や勅語は、文明開化の名の本、欧米流の知識才芸の心酔に伴ふ混乱を防ぎ、世界史の奇跡と称賛される皇国の興隆を根底より支へた。

特に『教育勅語』は、御歴代天皇と一体となり、日本歴史の中にて、祖国の継承発展に優れた功績を遺し、且つ、それらの功業を成す根幹となつた卓越した人格を有する哲人や忠臣、義士等に一貫する歴史的精神を、事物

の全ての根幹をなす国民道徳の大本として、明治天皇が教示し給はれたものである。

明治天皇御製

人もわれも道を守りてかはらずば
この敷島の国はうごかじ

歴史が示す所、国家の盛衰、物事の興廃とは必ず人により、その人の昇沈は定めて道にある。人の道が盛んな時には弥増しに国は栄へ、人の道が衰へると必ず国は衰へる。

昔日より、人の道を践む者の姿とは、父祖の歴史を貫く永遠に生くる一つの精神の流れと、一つの生命の輝きを感得するその信義に必ず顕れた。日本に於いてそれは、日本人が古来より持ち伝へてきた道義の源泉、即ち「神道」の実践者こそが、それと同義であつた。

吉田松陰先生が、永劫に生きることを悟り、肉体的存在や一瞬なる生命を、永劫に生きるが故に、大義名分を護るためには捧げて悔ゆる所がないとして「死生哀ムニ足ラズ、幽明一致、理気貫通、亡者存スルガ如ク、死者生ケルガ如シ、則而シテ神道ノ妙真ニ羨ムベシ」ことを確信したのは卓見であつた。

明治初頭、哲学館（現・東洋大学）を創設した井上円了博士は、万巻の書に眼を曝し、古今東西の国家の興亡や思想哲学の盛衰を眺めて来た世界で唯一革命無き日本の国の尊さを思ふ中で、全世界を救ふべき正しき道が、我が日本に存すると確信した。

宇宙万類中人類為最尊
世界万国内皇国為最美

今も東京中野の哲学堂公園内の宇宙館に建つ正面左右の支柱に刻まれた博士の文字は、その実現に邁進した帝国日本の歩みと重なり合ふと同時に、父祖の歴史を継承する者の正しき精神の顕れとして理解出来る。

些事ではあるが、小生が拙稿の執筆に当つて、歴史的仮名遣を使用するのも、国家の盛衰が文化のそれと比例し、その日本文化の到達点こそ平安時代であると確信すると同時に、それが後世の優れた学者により、上代語の表意性に基づくものであると実証されて来たが故に、その一言一句に対し、父祖の歴史を継承する日本人としての自らの精神を顕さんがために他ならない。

人間の精神の働きとは、人間の歴史に栄光と尊厳を与へると云ふ意味で、東西両洋に通ずる最も偉大なものである。今日、ヨーロッパ人の精神的支柱であるキリスト教が、近代科学の生みの親であり、現代文明が享受する物質文明の豊かさに最も貢献して来たと云ふことは、殆ど疑ふ余地がない。

キリスト教の絶対的な信仰の対象である、全知全能の神が創造した宇宙には、整然かつ普遍的な原理があり、その原理を究めることが、本来のキリスト教徒の道であり、神に近づくための最たる道だと云ふ信念が彼ら西洋

人には在つた。

特に、ルネサンス期のダ・ヴィンチに始まりガリレイ、パスカルを経てニュートンに至るまで、科学者（主に数学者・物理学者）は神の領域を求めて、天賦の才能を駆使し、自らを律して努力を続け、驚異的な集中力に依りて、科学の原理を発見し、遂には、世界に先駆けてヨーロッパの産業革命を達成させた。

キリスト教徒としての彼らは、その精神を常人の及び難い域にまで昇華し、「考へる葦」人間の尊厳たる所以を証明すると共に、「人の世を救ひ、人の世を益する」人の道の本源を見事に顕したのである。

「自然の法則は闇に包まれてゐた。
神は言はれた。ニュートンあれと。
すべてが光の中で解明された。」

故ホーキング博士の埋葬で、世界の衆目を集めた、ウェストミンスター寺院のニュートンの墓碑には、近代科学の扉を開いた故人の功績に対する当時のローマ法王による頌辞が有名である。

しかし、その一方で忘れてはならないのが、世界に先駆けて近代化を果たしたヨーロッパが、その政治的・軍事的・経済的優位性を背景に、真に栄光と尊厳の歴史を歩むことなく、海外に進出し積極的に植民地支配を行つたことである。

そこには最早、自由や平等を愛し、正義と博愛を重んずる西洋の美しき精神の顕れは無く、寧ろ正義や人道、文明と言つた輝かしき理念の公然たる蹂躙以外何も無かつた。

省れば、今日の深刻なる中東問題やアフリカに於ける民族紛争の遠因をはじめ、広くアジア・アフリカ・オセアニアの未だ旧植民地であつた国の文化や経済に於いて、自国の言葉で十分な教育が出来ず、英語や仏語の作業言語を頼みとし、旧宗主国の資本による、生産や価格、販売の支配が依然継続する等のヨーロッパの影響を残してゐる部分は少なくない。

小生は、「人の世を救ひ、人の世を益する」ことに万教は帰一すると信じ、且つ科学文明発達の先鞭をつけた西洋の功績の偉大さを貴ぶが故に、当時の彼の民族の行為を観るにつけ、我が国の精神の偉大性の健全かつ普遍的であり、更には、建国から東亜解放に殉じた歴史を鑑みて、改めて全世界を救ふべき存在とは、日本を措いて他はないと確信するのである。

五、祖国の再建

「人の世を救ひ、人の世を益する」。
人の道の本源は、実にこの一点にある。
イギリスの経済学の大家アダム＝スミスが「人類の尊敬と称賛に価し、それらを獲得し、享受することは、野

心と競争心の最大の目的である」（『道徳感情論』）と説いたのも、『論語と算盤』の著者渋沢栄一翁が「我も富み人も富み、しかして国家の進歩発達を托する富にして、はじめて真正の富と言ひ得る」と喝破されたのも、そして、興国安民の誓ひを立て、一農家にして其の永久法を立てられた二宮尊徳先生の深淵なる推譲の精神も、全て道徳と経済は本来一致し、その極致こそ「人は人のために生きてこそ人である」とする洋の東西に共通する人の道の本源を示したものであつた。

我が国の『教育勅語』が、我が国史の奥底にあつて変化せざるもの、延いては、変転極まりなき世界史の普遍的理想としての歴史を貫く不易の道（神道）を、万世一系の国体に見出し、それを継承発展させる原動力が、「忠」と「孝」による君民一致の精神にあるとしてゐたことは、君主国家として世界最古の歴史を有し、今上陛下百二十五代を数へる事実からも、それは今なお古今東西を超へて誤らざることであり、永遠に光り輝くものである。

今日、我が国の喫緊の課題である財政再建は、その再建を誠のものとする上で、必ず日本人として踏むべき道を明らかにしなければならない。

特に、戦後の日本経済復興が、神武天皇建国以来の先皇の遺徳と国民の良風美俗、即ち日本歴史の生命力を要因として、急速に立ち直つて来たことからも重要である。

伝統的に受け継がれて来た良質で勤勉な労働力と、浪費を避け、将来の生活を見据へた貯蓄習慣（その他要因としては、安保体制下の安い防衛費等もある）に主として顕れ、広く設備投資に必要な資本蓄積を可能にさせ、奇跡の復興を招来したと云ふ来歴を忘れてはならない。

『大日本帝国憲法』と『教育勅語』の精神を以て、君民一致の我が国が、欧米列強の人種差別を基本とした植民地支配と、侵略戦争を正当化する彼の国々の、政治経済外交に流れる「怠奢奪」の精神に否を唱へ、断固として「勤倹譲」の道、即ち皇祖皇宗の道にして、神道の精神を最期まで歩んだのが、大東亜戦争の聖戦たる所以であつた。

畢竟、我が国の再建は、日本を侵略国家として裁いた東京裁判の判決文の否定と、古領憲法を立て、教育勅語の精神を忘れたことを省る所から始まる。万世一系の國體は、これに依り初めて保たれ、全国民一致団結、如何なる困難をも克服する体制の確立へと進められる。それは、祖国を崇高なる伝統の光ある国とし、全世界の真実の平和、真実の幸福に貢献をする源である。

注一、

『百錬抄』や『愚管抄』、『保元物語』には、保元の乱の時に、源為義等の人々が斬罪に処せられたことを、

「伝統が崩れた」「時代が変はつた」と言つて、非常に嘆き悲しんだといふことが記されてゐる。

参考文献

平泉澄博士著
『少年日本史』　皇學館大學出版部
『山　彦』　勉誠出版
『日本の悲劇と理想』　錦正社
杉浦重剛著・所功解説
『昭和天皇の学ばれた教育勅語』　勉誠出版
谷省吾著
『神道原論』　皇學館大學出版部

訂正

『まんじ』第百四十七号掲載の拙稿「木鶏は動ぜず」百二十五頁、上段十五行目。

誤　源義朝の、父為朝
正　源義朝の、父為義

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二
加入者名　まんじ

内田の国の「七夕」物語

横山正義

まえがき

「牛殺し」は菊川市構図に載る地名です。

「知致」誌二〇一八・四　一三六頁誌

時流を読む

中西輝政京都大学名誉教授

国の興亡は大きく分けて三あります。とりわけ一は国力です。軍事力と経済力そして人口の増加です。ハードパワーです。もう一つがソフトパワーとよばれる国家を運営する手腕、能力、国家運営のマネージ力です。三つ目としてそれは国家の、とりわけ国民の精神性です。愛国心を育み、高い道徳心を養う。そのためにはしっかりとした歴史認識がなければなりません。この歴史認識を養うのは教育です。

私はこの文章に啓発され、郷土の歴史を調べてみることにしました。

菊川市の構図より「牛殺し」の地名のある場所は小笠川にかかる耳川橋に隣接してあります。橋すなわち「はし」、牛の命の端を意味しているのでしょう。古代の歴史を調べてみました。

一、古代

『牛殺し地名起源考』堀川録朗

郷土史研究No.1菊川一九九一、四菊川市郷土史研究会

文中参照文献

日本書紀より

天豊財重日足姫天皇（あめとよたからいかしひたちしひめのすめらみこと）

皇極天皇（六四二年）

七月甲寅（きのえとら）の朔　―略―

戊寅（つちのえとら）（二十五日）に、群臣（まえつきみたち）相語（あいかた）りて曰はく、「村々の祝部（はふ

ふりべ）の所教（をしへ）の隋（まま）に、或いは牛馬を殺して、諸々（もろもろ）の社（やしろ）の神を祭（いの）る。或いは頻（しきり）に市を移す。或いは河伯（かわのかみ）を祷（いの）る。既（すで）に所効（しるし）無し」といふ。

この文中にある河伯は時代とともに、現在、古川神社に祀られている、水神社ではなかろうか。牛を殺して、河伯に捧げる祝部（はふりべ）の神職が存在するわけで、それが牽牛となり、牽牛と織女の物語、七夕の信仰に後の世につながったのであろう。河伯とは次の項に記します。

二、中国の伝承

［図説］『中国の神々』道教神と仙人の大図鑑　編集長　増田秀光　発行人　大沢広彰　㈱学習研究社

二―一、流域住民の生殺与奪を水神握る河伯

黄河を支配する河の神。伝説によれば憑依（ひよい）という男が渡河中に溺死し、天帝から河伯に命じられたとも、道を得て大川に潜ったとも、あるいわ仙薬（八石）を服して水仙になったともつたえられている。降雨を司る神と考えられ、すでに殷（紀元前十世紀）の時代から祭壇をかまえて雨を請け負う儀礼がおこなわれていた。その際、牛などが生贄としてささげられたほか、時代によっては流域民の娘が河伯の花嫁としてささげられたこともあったという。

二―二、七夕伝説になった天界の夫婦星神

牽牛と織女

天の川を挟んだ牽牛星（アルタイル）と織女（ベガ）の七夕伝説の原型は、紀元前六世紀には成立していた。様々な伝があり、天の住人である羽衣をまとった異界から現れた神（織女）が牽牛と結婚するが、仕事を怠けたために引き裂かれてしまうという「神々の結婚譚」があります。日本では彦星と織姫という名称で親しまれているが、中国では一般に牛郎と機（はた）女の伝説として知られています。

内田の八幡神社境内栗田土満屋敷の近くに、「牛殺し」「馬捨て」という地名があります。そして「馬捨て」には馬頭観音が祭られています。図一参照

二―三、牛を殺して雨を祈る

『中国神話・伝説大事典』　袁　珂　㈱大修館書店

儀式が終われば大雨が降るのであるが、石牛の背中に塗った、生贄の牛の血で南宋代の王象之の「輿地紀勝」巻一二一に引く顧微の「広州記」に、「鬱林（うつりん）群「現在の広西チワン族自治区貴港市を中心とする地域」の山の南東に池があり、その池に石牛「牛の石像」がある。毎年、地元の人々は牛を殺して雨乞いをするが、その生贄（いけにえ）の血で泥をこねて石牛の背中に塗る。雨乞いのこねた泥がきれいに洗い流されれば、雨は止んで晴れ上がる」とある。

『殺牛・殺馬の民俗学』　筒井　功　河出書房新社

牛殺しの地名の近くには、牛頭天王、その子八王子などが祭られている。

当地にもやはり牛頭天王を祀る古川神社、その子八王子が祭られています。

そのほかにも平尾八幡宮、稲荷神社、新羅社など新羅系の神が多いのです。新羅国に牛頭山があり、新羅の国由来の牛頭天王であろう。新羅からの渡来者で有名な秦一族で、秦の始皇帝の末裔と言います。秦氏が伝えたものとして、養蚕、水田の作り方、土木工事灌漑技術は勝れていた。その他に銅の採銅、鋳工、銅工などの技術をもっていたのです。当地には浄土宗の開祖・法然は出地は秦氏で、法然ゆかりの浄土宗応声教院があります。

奈良・平安時代に牽牛と織女の二星会合説話が日本に伝わる。

三、中世

牛殺しなど家畜を殺ろし、狩猟など、それが武士軍団へと変貌を遂げていくのです。当地においては内田武士軍団ができ、承久の乱では先陣を切るという、勇猛果敢な武士団が騎馬隊六十余騎参加します。西国に恩地を得ています。

馬を飼育するためには一頭につき、二百石があって可能で、そして一日に水百リットルが必要といいます。

当地は菊川と小笠川の三角州で、水があって飼料があり、馬の飼育が可能になったのでしょう。

四、近世

江戸時代になると笹竹に短冊などを飾るようになる。

『岡の屋歌集』従五位下藤原朝臣栗田土満詠

（元文二年（一七三七）～文化八年（一八一一）

（平尾八幡宮宮司・江戸時代末期歌人）

七夕に関する短歌

文月始めつかたこれかれ伴ひて川辺にすずみける時

彦星の秋まちわたる舟なれやこの川の瀬に見ゆる月影

＊彦星　七夕の織女星の夫という星

＊秋まちわたる　七月七日の秋を待ちつゞけている。この下界の川瀬に七日弦月が映って舟の形に見えるのは天の川を彦星がわたる舟であるよ。

秋といへどうつる習ひの言の葉にかけぬはほしの契りなりけり

＊秋といへど云々　言葉にかけた約束は秋になれば変わって契りがむなしくなるのが普通であるが言葉にかけぬ固い契りは七夕の星の契りである。

天の川年のわたりはさもなくてたえぬ契りにあえむとぞ思ふ

＊年のわたり　一年一度天の川をわたる事。

秋風のふきにし日より天の川たちいる雲のしづ心なし

＊しず心　落ちついた心。

月影の入りぬる空にながめして天つ星合のちぎりをぞ思

ふ
ひこ星の天つ契りもしりがほにゆふべは萩のそよといふらむ
＊萩のそよといふ　萩が風にそよそよと音する。其れよで、星の契りはそれ　ぞれと知ったようにいう。
尾羽帳の神のみことも天の川今宵ばかりはせかずもあらなむ
この夕秋風すずし天の川いまか彦ぼし漕ぎづらし
＊せかずもあらなむ　天の川を咳きとめないでありたい。星合いを防ぐげずにあれ。
＊いまか彦ぼし　今丁度彦星が天の川を渡らうとして舟を漕ぎ出したらしい。
八日のあしたに
彦星のかへる袂にふきそめてあきくる風の身にはしむらむ
昨日までうれしかりけむ棚機は秋を悲しとけさぞ知るらむ
たなばたの別れしのちの心より秋はかなしと人のいふらむ
『栗田土満の長歌鑑賞』後藤悦良　浜松市賀茂真淵記念館
七夕に関する長歌一
同じ暁の心を
ちはやぶる　神のみ代より　若草の　妻まきかねて
あらたまの　年の一年　思へども　言も通はず　夏草の
萎へうらぶれ　秋風の　吹きたちぬれば　いにしへに
妹が織りけむ　たくはたの　うづはたみぞを　とりよそ
ひいゆき語らひ　ま玉手の　玉手さしまき　百夜しも
つぎぬと思ふを　玉くしげ　明けてしゆけば　せむすべ
の　たづきも知らに　ひさかたの　天の河霧　立ち出で
て　渡らふ川の　河の瀬の　絶えぬ契りは　天長く　あ
りつゝも見むと　思へども　なお歎かれぬ　あふ夜とも
しみ
天の川いほきりがくり出でてゆかば妹があたりは見えずかもあらむ
前文長歌訳「同じ暁の心を」
（ちはやぶる）神代の時代からのことだが、（若草の）妻と共寝することも出来ず、（新玉の）一年の間、心の中では恋しく思うけれども、言葉を交わすことも出来ず、（夏草の）うなだれかなしく思っている。しかし、秋風が吹き始めると、昔、妻（織姫）が織り上げた、つまり棚機で織り上げた御衣を身につけての装い、天の川を渡り、織姫のもとに出かけて行って語り合い、姫の美しい手を枕として共寝をし、このような夜が百夜も続けと思うけれども、（玉くしげ）夜が明けてゆくので、どうしようにも、別れるほか方法がなくて、（久方の）天の川の霧の立ちこめる川辺に出て、舟で渡り帰ろうとするのだが、その川の瀬が絶えることなく流れ続けるように、

絶えることのない二人の約束は、天のように永久に変わることなく、生きているかぎり再び会おうと思うのだが、やはり自然と嘆いてしまうのだ。会う夜の少なさのために。
　天の川を、深い霧の中をこぎ出して行ったら、いとしいあの娘の住まいのあたりは見えなくなることだろうなあ。
七夕に関する長歌二
同じ郡の岡本村（現在の浜松市三ヶ日）といふより年毎に伊勢の大宮に神御衣（かみみぞ）を奉るといふ機（はた）屋を見て詠める
　天なるや　棚機（たなはた）つめの　足玉も手玉もゆらに　神ながら　織そめましし神御衣（かむみぞ）をいまのうつつに　大神に　仕ふまつると　玉くしげ三河の国の　赤引の　糸くりはへて　あられふり　遠江の浜名の　岡本の里に　黒木もて　忌屋をたてて　旗薄尾花刈りふき　み雪降る　冬さりくれば　ぬば玉の　夜には七夜　あかねさす　日には七日を忌みこもり　いむ機たてて　棚機の　神をいはひて　年毎に　織るとふ機屋　見ればかしこし
前文長歌訳
同じ郡にある岡本村（現在の浜松市三ヶ日）という所から、毎年、伊勢神宮に神御衣（かみみぞ）を奉納するという機屋（はたや）を見て詠んだ歌
　天に居る機織女が、足首手首の飾りとしてつけている美しい玉の音をたてながら、神慮のままに織りはじめなさった神服を、現実に、伊勢神宮の神のために、お作り申すということで、（玉くしげ）三河の国の赤引の地で糸を操り作って、（あられふり）遠江の、浜名郡の岡本の里で、皮を削らないままの丸太で神聖な建物を作り、尾花の出た薄を刈り取って屋根に葺き、雪の降る冬になると、（ぬば玉の）夜には七夜、（あかねさす）日には七日間、身を清めてこもり、神聖な機を置いて、機織の神を祭って、年毎に布を織るという機屋を見ると、恐れ多い思いをすることである。
「日本の神様事典」によれば機織姫（はたおりひめ）は機（はた）を織る婦人という意味である。七夕の行事のわが国での古い姿は、もともと水辺にこしらえた棚で客神（まれびと）を迎えるために、神聖な処女である機織姫が機（はた）を織りながら待つという儀礼であったと考えられ、これが中国の牽牛星と織女星の伝説が結びついて七夕祭りとなったものである。とある。

『参考文献』

「知致」二〇一八・四　一三六頁
中西輝政京都大学名誉教授　知致出版社
「牛殺し地名起源考」
堀川録朗　郷土史研究No.一　菊川一九九一・四
菊川市郷土史研究会

「「図説」国の神々」（道教神と仙人の大図鑑）
編集長　増田秀光
発行人　大沢広彰　発行所㈱学習研究社
「中国神話・伝説大事典」　袁　珂　㈱大修館書店
「殺牛・殺馬の民俗学」　筒井　功　功書房新社
「岡の屋歌集」　従五位下　藤原朝臣栗田土満詠
「栗田土満の長歌鑑賞」　後藤悦良
浜松市立賀茂真淵記念館
「日本の神様事典」　編集者　小口謙二　柏書房
伏見稲荷の暗号「秦氏の謎」　関　裕二　講談社

どちりな　きりしたん

鍋屋次郎

一五四九年にフランシスコ・ザビエルによって、日本へのキリスト教宣教が初めて行われました。以後、東洋向けのキリスト教宣教基地の一つであったインドのゴアを経由してイエズス会を中心に多くの宣教師が日本に送り込まれてきました。

ザビエル

一五〇六年四月七日、ザビエルはフランスとの国境に近い北スペインのナバラ王国のハビエル城で生まれ、地方貴族の家に育ち、十九歳で名門パリ大学に留学、そこではイグナチオ・デ・ロヨラから強い影響を受け聖職者を志した。一五三四年八月十五日、ロヨラ、ザビエル、ロドリゲス等は、モンマルトの聖堂で神に生涯を捧げるという誓いを立てた（これがモンマルトの誓いと言われ、この誓いがイエズス会の創立でもあった。）一同はローマ教皇パウルス三世の知遇を得て、翌年ロヨラと共に司祭に叙階した。

イエズス会は当初から世界宣教をテーマにしていたことから、ポルトガル王ジョアン三世の依頼で、会員を当時ポルトガル領であったインド西海岸のゴアに派遣した。ザビエルは一五四一年四月七にリスボンを出て、アフリカのモザンピークを経由して翌年五月六日ゴアに到着、そこを拠点としてインド各地に宣教に赴きマラッカに行った。マラッカで鹿児島出身の日本人ヤジロウと出会ったのは一五四七年十二月であった。翌年十一月にはザビエルは宣教総督となった。

日本へ赴く決心をした次第

これについては、ルイス・フロイスの日本史Ⅰ七十二頁以降に次のように記載されています。

「天地の御作者の知識と認識とからおよそ縁遠いと同じく、遠くその国々を隔てて住み、かくも久しい歳月の間、日本人がその中に生活してきた暗い闇と偶像崇拝との（世界）に我らの御主なるデウスは、その寛仁の輝く光と自愛の奇しき輝きとを照らすことを望みたもうたので、この御主の救いの大きな恩恵が日本人の心の中に実現されるように、デウスの御摂理によって、バアデレ、メステレ・フランシスコは一五四八年に、聖い熱意と宗教的な愛とによって、さまざまな労苦と危険と困難とを冒して、その地方の未開の人びとの霊魂を数多く改宗させ終わってマルコ地方（注　モルッカ諸島の一つ）から帰り、そこからインドへ渡るためにマラッカに来た時に、そこの町で、後でパウロ・デ・サンタ・フェと名乗ったヤジロウという、異教を奉ずる身分ある一日本人に巡り合った。この男は、その高徳と使徒的生活との名声を慕って、ほかでもないこのバアデレを尋ねてシナからやってきたのであった。そうして彼は、日本のいろいろな特質、日本人の知識・文化、理解力、また、我らのカトリックの信仰を受け容れるべき優れた能力と適当な素質とに関して、すこぶる事細かに、詳しくバアデレに報告したので、バアデレ、メステレ・フランシスコの心は非常な感動を受けて、東インドの方々の地方で彼の前途に横たわっていたほかの計画や期望などはいっさい問題なくさしおくほどに、心の底からの喜びと先ずこの「日本へ行く」企てをやってみようという熱情と欲望とに燃えたった。そうして、彼が熱望することを直ちに実行に移すために、準備を整えにインドに行ったのであるが、後でゴアのコレジョ（現地の子どもたちの宣教師への教育機関）でキリシタンになったかのヤジロウもインドへ渡った」（以上引用は原文のママです）

ゴアから日本に向かって出航したのは一五四九年四月十五日であった。同行者はイエズス会コスメ・デ・トルレス神父、ファン・フェルナンデス修道士、中国人マヌエル、インド人アマドルと、ゴアで洗礼を受けたばかりのヤジロウの五人であった。

日本に行く前の準備

ザビエルが日本に行くための準備は、日本国内の社会体制と日本人の特質が中心になっていた。

社会体制としては

「日本の政治体制はヨーロッパ社会と同様に小領主が多く、階層社会であること。教皇のような存在の天皇がいること」

日本人の特質としては

「日本人は多くの質問を発し、それに対する返答やその内容が行動と一致しなければ納得しないし、改宗をしない」

と聞かされ、また、日本に滞在するポルトガル人からの情報として

「日本人は理性に基づかなければ信仰に導くことは困難である。日本人は賢く思慮深く、道理を愛して知識欲に溢れており、聖書信仰を弘めるには十分な状況にある」

などを得ていて、ザビエルは日本宣教に大きな手応えを感じていた。

ザビエルが日本に着いて

ジャンク船でゴアを出発したザビエル一行は、先ずはヤジロウの案内で薩摩半島の坊津に上陸して、一五四九年（天文一八年）八月一五日に、現在の鹿児島市祇園之州町に落ち着いた。

九月には薩摩の大名島津貴久に謁見し、キリスト教布教許可を得たが、その後ザビエルが仏教界と宗教論争を行って対立したことなどから、仏教界は島津貴久にザビエルのキリスト教布教禁止を訴えた。

ザビエルは一五五〇年六月頃、平戸にポルトガル船が寄港しているという情報を得て、自分あての手紙がないか確かめたくて平戸に行き、二か月後には戻ってきたが、領主島津貴久の姿勢からさらなる宣教は困難と考え、再び平戸に行くこととした。その他に、ザビエルの使命の中に、ローマ教皇から日本の天皇宛の親書が託されていたこともあり、当面、一か所に長期間滞在することはできなかった。

島津隆久はザビエルの二回目の平戸行き希望に対し、船を用意して平戸に送ることとした。これは仏教界の申し入れに対して事を荒立てることなくザビエルを鹿児島から出立させた。

鹿児島での宣教成果としては、上陸時に歓迎されて百人が洗礼を受けたと伝えられているが、一年を経過しても百五十人には達しなかった。信者はザビエルとの別れに涙して別れを惜しんだ。司祭がいなくなる信者たちの信仰フォローのために、ヤジロウを薩摩に残した。平戸に同行したのは、コスメ・デ・トルレス神父、ファン・フェルナンデス修道士、鹿児島でキリシタンになった日本人ベルナドとジョアン、アントニオ、マラバル人アマドルの六人を伴った。

この鹿児島での一年は、ザビエルにとっても同行宣教師にとっても極めて貴重な一年であった。それは片言の日本語であっても、宣教を日本語で行うことができるようになったことである。そしてフェルナンデス修道士が日本語を話せるようになっていた。勿論ザビエルも日本語をかなり習得していたが、日本人とのキリスト教教理

に関する質疑を通して、日本語を習得し、キリスト教教理書を作成した。しかしヤジロウがキリスト教の神デウスを「大日」と訳す誤りがあり、誤りは発見の都度訂正していたが、その間筆舌に尽くしがたい時間と労力を使ったものと想像される。

平戸での宣教

一五五〇年（天文一九年）八月、ザビエル一行は再び平戸に入った。平戸の領主松浦氏は、ポルトガル船の寄港による鉄砲、弾薬や珍しい物の輸入があり、ポルトガル船船長とも親しいザビエルを歓迎した。

キリスト教宣教は、日本語が話せ、書くこともできるようになったフェルナンデス修道士が日本語で説教したので、滞在二か月余りで受洗者は百人に上った。

しかし、ザビエルにとって平戸は都への通過地点であったので、滞在二か月でその年の十月下旬にはフェルナンデス修道士、ベルナドを伴って、周防国山口を経由して岩国から海路で都を目指し、堺の豪商日比屋了珪の知遇を得た。また、日比屋了珪の紹介で小西隆佐とも知己となった。トルレス神父を平戸に残し、平戸での入信者の信仰フォローを任せた。

京都で後奈良天皇に日本での布教許可を願う予定であったが、都は戦乱に明け暮れて宣教できる状況ではなかった。比叡山延暦寺の僧たちに宗教論戦を申し込んだが拒否され、仕方なく都滞在十一日で山口を経由して平戸に戻った。

この間、平戸でザビエルの留守を預かったトルレス神父は、自分の宿主の谷口トメとその父と数人の家族、ジョアンの父と祖父（ジョアンは後に修道士となる）に洗礼を授けていた。この祖父はキリシタン宗門をよく研究した最初の学識者であった。

平戸での主な受洗者は次のとおりで、輝かしい宣教成果を上げていた。

ザビエルの宿主の木村家全家族で、一六〇一年に最初の日本人司祭になったイエズス会員木村セバスチアン神父（木村家の孫で一六二二年殉教）、イエズス会員となって絵描きとして知られるレオナルド木村（木村家の孫で一六一九年殉教）、領主松浦道可隆信の親戚で有力な家臣であった籠手田安経左衛門尉アントニオと弟勘解由ガスパルなどである。その他、平戸のキリシタン支援者として重要な人物は、大村純忠の娘でキリシタン家庭に育ち、平戸の松浦久信の夫人になったメンシア松東院がいた。

ザビエル　山口に

一五五一年四月下旬、山口で国主大内義隆に拝謁、都で天皇に献上する予定で持ってきたインド総督とゴア司

ら、バアデレ、メステレ・フランシスコ（ザビエル）は彼に洗礼を授けて、ロレンソという霊名を与えた。バアデレの愛は彼を心服させ、幾千レグワ（距離の単位）の遠くからさまざまの困難や危険や苦労を冒してはるばる渡って来て、何一つ現世の利益を求めるでもなく、（人びとの）霊魂の教化というただこの目的のために、バアデレたちが企てている大事業にいたく感動した結果、彼は物語を語り、琵琶を弾き、朗吟を聴かせて人びとを娯しませる自分の仕事をやめ、自分の性質から考えて、できそうに思える仕事をして我らの御主デウスに仕えるために、生涯を献げて教会のために働く決心をした。全能なるデウスは、光栄ある使徒パウロが言っているとおり、強いものを辱めるために、最も低いもの、最も賤しいものを選びたもうたように、同じ主は、彼が日本人で人会することを許されたイエズス会の最初のイルマンとなるように、ほとんど全く視力を欠き、生まれながらに甚だおかしな容貌をしたこの男を選びたもうた。それと同時に、デウスは彼を選んで聖い福音を述べ伝える者、みやこの町においてもその近隣の国々においてもカトリックの教えの弘め手とし、溢れるばかりの恩寵を与えて、この時までイエズス会が日本で持っていた最も重要な説教家の一人としたもうた。彼は誰一人からも論破されることなく、公然と学識豊かな僧侶や身分ある人々たちと論議し討論したので、彼の説教によって幾千の人

教からの親書の他、望遠鏡、洋琴、置時計、ギヤマンの水差し、鏡、眼鏡、書籍、絵画、小銃などを献上し、大内義隆から信仰の自由と宣教の許可を得た。義隆は当時廃寺になっていた大道寺を一行の住居兼教会として与えた。ザビエルはこの大道寺で一日二回の説教を行い、二か月間の宣教で獲得した信者は五百人と言われている。

洗礼を受けた中に、平戸の小さな白石村（戸数十戸くらい）出身の、目が不自由で、貧しい琵琶法師がいた。この琵琶法師については、ルイス・フロイスの日本史I「キリシタン伝来のころ」一〇三頁以下を引用する。

「山口に、片目は全く見えず、もう一方もほんの僅かしか見えない一人の盲人がいた。日本で一般のならわし通り、彼は琵琶を手に、貴人の家々で弾いては歌い、洒落や機智を操ってはその場の興をそえ、または昔物語を吟唱して、糊口の計をたてていた。それというのも、普通盲人が生きてゆくための普通の仕事のほかに、彼はこの芸にかけて多くのほかの人びとより秀でていて、その才気の溌溂さ、豊富な知識、理解力と優れた記憶力とを持っていたので、ほかの盲人たちよりも好まれていた。異国の人びとがこの町で新しい法を説いているということを耳にして、彼はバアデレを訪ねる決心をして出かけて行った。彼はバアデレに自分の疑問を提出し、その回答を聴いていたが、度ごとに聖い教えを受け容れるだけに理解が進んだので、彼が充分に教えを受け了ってからぴとが改宗させられた。それどころか、彼の理論の強烈な迫力に説服されて、高邁不遜な学者たちも彼の足元に伏して、彼から福音の聖い教えを受けるに至った者さえあった。彼はその説教において確乎として揺るがず、強く、不退転の意気があったように、その生活の亀鑑においても、信仰を弘めるために自ら負った限りない困難苦労においても、その中に身をおいていた容易ならぬ危険の中にあっても、いつも善導と模範とを示し、この点では、たとへ彼がキリスト教国にいて、デウスがヨーロッパで僕たちに分かちたもうあの精神の中で教育されたとしても、これ以上ではありえなかっただろうと思われるくらい、彼はその事情に適応して身を処していた。彼の徳行も日頃彼を身近においていたバアデレたちからいつも尊重されており、（もう六十五歳もこえ、日本のイエズス会に働いて四十年来耐えてきた様々な困難のために大層やみ弱ってはいるが）今でも下の地方のドン・バルトロメウ（大村純忠）の領内にいて、必要とあれば日に二、三回も信者や異教徒に説教をして、福音を述べ伝える者としての彼の職務を行っている」（以上引用は原文のママ）

ザビエルの豊後訪問とゴアへ

ザビエルはポルトガル船が豊後（今の大分市）国内に来着したとの情報を得て、山口での宣教をトルレス神父に任せて、一五五一年九月、豊後に行きました。豊後の大名大友宗麟はキリシタン大名であったので、そこで宣教を手伝っていたが、来日後二年を経過し、ゴアからの情報が途絶えていることもあって、一旦ゴアへ戻ることとした。

同年十一月十五日、トルレス神父とフェルナンデス修道士にあとのことを依頼し、日本人四人（ベルナルド、マテオ、ジョアン、アントニオ）をともない出航、翌年二月十五日にゴアに着いた。

ザビエルは日本文化の源は中国と考え、自らは中国宣教に行くこととし、代わりに日本宣教に最も適していると判断したバルタザール・ガーゴ神父を日本に派遣した。

ザビエルはゴアから中国に向けて出発。一五五二年九月中国広東省上川島（ジョウセントウ）に到着、そこで病を発症し同年十二月三日亡くなった。四十六歳

ザビエルの日本人感

ザビエルが日本人についてどのように感じていたかを、ヨーロッパやゴア在住のイエズス会会員宛のザビエル書簡から幾つかを抜粋してみると

◇私は異教徒の間には日本人より優れている人々は他にないと思います。驚くほど名誉を重視する人々で、他の

何よりも名誉を大切にしています。人々は一般的には貧しく、武士でもそうでない者も貧乏を恥辱と思う者はいません。

◇神の慈悲をはっきり表すためには、日本人は道理に一層従順であり、私はそれをいまだかって異教徒の人びとに見たことはありません。彼らは大層好奇心が強く、執拗に質問をし、知識欲に溢れていますので、私たちが彼らの質問に答えたことを、他の人びとに際限なく質問したり話したりしています。

◇日本人の識字力の高さと、これを支える民間の教育機関（仏僧や尼僧たちが行っている寺子屋制度）の存在に注目し、そこで行われている教育を高く評価している。

◇日本人の宗教では祖先崇拝の信仰が根強い。同時に肉親や同族の絆は大変強い。神を礼拝しない人々が皆地獄へ行くことが事実であるなら、神は先祖たちに思いやりがないことになる。神は彼らにご自分についての知識をお与えにならないで、彼らが地獄へ行くに任せたからという理由です。日本人がこのことを悲しむのは、亡くなった父、母、妻子やその他の死者たちへの愛のために、その人たちを憐れんでいるからです。多くのものは死者たちのために涙を流して、喜捨や祈りによって何らかの救いを得ることができないかと私に尋ねてきますが、私はどのような救いもないと言います。この問題は日本人への宣教上の大きな問題です。仏僧はここをついてきます。

以上の日本人観から、ザビエルは日本に派遣する宣教師の資質について次のように述べています。

◇徳性に優れていること。

◇学識のある事。即ち哲学と弁証法を学び、天文・天体などの自然科学を収めていること。

◇経験が豊かであること。

◇健康で寒さに耐え得ること。

の四点を要求しています。

日本人向けのキリスト教教理書

鹿児島にいる間にザビエルたちが信徒に説明するための「キリスト教教理書」を作成したと記載しましたが、バルタザール・カーゴ神父が、平戸で一五五一年（永禄元年）に教理問答の形式で二十五章からなっている教理書を作成したことが、ルイス・フロイスの日本史Ⅰ第十八章二〇九頁に記載されているのでそれを紹介引用する。「平戸ではバアデレ、バルタザール・ガーゴは『二十五か条』という題をつけて、教理問答（カテキズム）の形式をとった一遍を著した。これは二十五章から成り立っている。この頃肥州に次いで平戸で最も身分の高い殿であったドン・アントニヨ籠手田はもうキリシタンになっていたが、大層高齢に達していた彼の父はその著述の話を聞くと、是非その一編を観たいと熱望した。彼はそれを読んだだけですぐに決心したほどその内容に非常に満足させられ、キリシタンになろうと思い定め、実際にそれを実行して、ドン・ジェロニモという霊名を貰った。これは僧侶たちを非常に驚かせた出来事であった」（引用は原文のママ）

ザビエル来日後九年を経過した段階で、このように日本人にも理解しやすい教理問答形式の教理書が出来上がったことは、宣教活動上素晴らしい事である。

おそらくこの「二十五か条」がその後の宣教師たちに活用され、その後三十二年を経過して一五九一年に

① どちりいな　きりしたん　一五九一年　加津佐刊
国字、ローマ・バルベリニ文庫蔵

ができ、翌一五九二年に

② Doctrina Christam　一五九二年　天草刊
ローマ字　東京・東洋文庫蔵

ができ、その八年後の一六〇〇年に

③ Doctrina Christam　一六〇〇年　長崎刊　ローマ字、東京。水府明徳会蔵

④ どちりな　キリシタン　一六〇〇年　長崎刊　国字、ローマ・カサナテンセ文庫蔵

が刊行されています。いづれも宣教師が持ち込んだ印刷機で日本で刊行されていますが、その後のキリシタン禁制と弾圧で、印刷機は破壊され、印刷物は全て没収されて、日本に現存するのは②と③だけです。

「どちりな　きりしたん」
1600（慶長５年）長崎刊　表紙

この一六〇〇年版に記載されている教理について、「現代語訳　どちりな　きりしたん」（訳者　水野聡　出版社　能文社　二〇一七年一〇月初版発行）では、「現在日本のカトリック教義は『公教要理』として教会・信徒の間で共有されていますが、この『どちりな　きりしたん』と内容を比較した場合、根本教義の要点は完全に同一です」と本書九頁に明言しています。ここから判断する限り、既に一六〇〇年には『公教要理』と全く同一の教理問答ができていて、宣教過程でも信徒教育でも完全な教理を教えていたことになります。

話しはそれますが、小生がまんじ誌に「殉教」と題してキリシタン大名の生涯を連載していた段階では、高

山右近父子がキリスト教についてどのような教育を受け、どのような理解をしていたかについて不安がありました。今回、昨年初版発行された「現代語訳　どちりなきりしたん」を読んで、高山右近の信仰についてもう少しは深く切り込んで書き直すことができるのではないかと、一人思っている次第です。

余談ついでに私が最も理解できなかったのは、一五六四年（永禄七年）のこと。都でキリスト教宣教が行われ始めていた頃、時の権力者松永久秀は熱心な法華宗徒であったので、活動を始めたキリスト教宣教師を論破して都から追放しようと考えた。そこで松永久秀の配下のキリシタン反対派の急先鋒であった高山飛騨守（高山右近の父）と、同じくキリシタン反対の結城山城守忠正、仏法理論に強い公卿清原枝賢（しげかた）の三人にキリシタンの教えを論破して、キリシタンを都から追放するように命じた。キリシタン側はロレンソ他二名が来て論争が始まった。最初は嘲笑し悪意に満ちていた高山飛騨守たち三人は議論が数日に及ぶに従って逆に論破され、結城山城守、公卿清原枝賢はその場で洗礼を受け、高山飛騨守はその後洗礼を受け、自分の城にパアデレを招き、家族・家臣に説教を聞かせ全員をキリスト教に入信させた。この反キリシタンの親玉がそろってキリシタンに転向したことは、当時都での大事件であり人々は驚いた。（同趣旨記録が、ルイス・フロイス日本史Ⅲ四十～四十一頁に記録されています）

私は以前この記事を読んだときに、キリスト教の宣教師が当時の社会上層の仏教に通暁した人たちと、数日間にわたって議論できるだけの日本語と仏教を論破できる知識を持っていたのかについて疑問を持っていましたが、今回この原稿を記載しているうちに、この記録は真実であったろうと思うようになりました。

どちりな　きりしたん

どちりな　きりしたん（Doctrina Christam）とは、ポルトガル語で「キリスト教の教義」という意味で、原書（ローマ・カサナテンセ文庫蔵）表紙の副題に「これきりしたんのをしへといふぎ也」とあります。

戦国時代末期、キリスト教布教のため来日した、イエズス会の巡察使アレッサンドロ・ヴァリニャーノが日本に持ち込んだグーテンベルグ式印刷機により、我が国で初めて活版印刷にて出版されたキリシタン版の一書とされています。

初めてキリスト教に触れる日本人に対し、言語と文化の壁を越え、正確に協議を伝える現地語によるキリスト教教義書を作ること。それは、フランシスコ・ザビエルの初来日以来、イエズス会宣教師たちの宿願でした。

『どちりな　きりしたん』は、カトリックの教義を問答体で平易に説く、教理問答（カテキズモ）の一種です。

フランシスコ・ザビエルは、日本人信徒第一号であるヤジロウの協力を得て基本的な教義書を作りました。これに、代々の来日宣教師たちが、手を加えていき、ヴァリニャーノのころにようやく完成を見たのがこの『どちりな　きりしたん』です。（以上　現代語訳　どちりなきりしたん　前書きから引用）

能文社刊「どちりな　きりしたん」

キリスト教の根本的な教義について、どちりなきりしたん一六〇〇年版（岩波文庫・・絶版）の原文と現代語訳と対比して一部をご紹介しましょう。（師　宣教師、弟　弟子、D　デウス）

師　原文　キリシタンになる者は其をしえ真実かんようなるむねをちやうもん（聴聞）する事もつぱらなれば、そのいわれをなんじよくきくやいなや。

現代文　きりしたんになる者は、その教えの真実肝要な旨を聴聞することが大切です。あなたはそのいわれをよく聞きましたか。

弟　原文　御せっぽう（説法）のをもむきをよくちやうもんして、Dの御ひかりをかふむりキリシタンになり奉る者也。

現代文　ご説法の主旨をよく聴聞し、神のみ光に照らされてキリシタンとなりました。

師　原文　そのわきまへはいかん。

現代文　理解できましたか。

弟　原文　ふんべつせし事おほき也。

現代文　多くのことが分かりました。

師　原文　そのむねことごとくいふにおよばず、ただ分別のほどをしるために第一かんようのだいもくを申されよ。

現代文　その内容をすべていう必要はありませんが、どの程度理解できたか知りたいと思います。一番大切な教えをいってみなさい。

弟　原文　一には、一もつなきところに種なくして天地萬像をつくりあらせ玉ひ、よろずのさくのもの（作の物）をおぼしめすままに御しんだい（進退）なさるるその御さくなされてはしよぜんまんどく（諸善萬徳）の御みなもと。はかりなき御ちゑばんじかなひ玉ふ御じゆうじざいの御あるじD御一たいまします事。

現代文　一つ目の教え。何一つないところに、種もなくして天地万物を創り、存在させられた方。これら万物を思いのままに支配・統治される造物主にして、諸善万徳の源であられる方。はかりなき知恵により、すべてをかなえる自由自在の主であられる、神ご一体がまします、ということです。

弟　原文　二には、これすなわちわれらがげんぜごせ（後

世）ともに、はからひぜんあくの御へんほう（返報）を正しくあたへ玉ふ御あるじ也。此御一たいをおがみたつとひ奉らずしてはごせの御たすけにあずかる事さらになし。

現代文　一つ目。すなわちこの方が私たちの現世来世ともに決定され、善悪の報いも正しく与えられる主だということ。このご一体を礼拝し、尊ばずして来世の救いを得られることはあません。

弟　原文　三には御あるじDは、パアテレと、ヒイリョと、スピリッツ　サントと申奉りて、ペルサウナは三にてましませども、ススタンシヤと申すごしやうたい（正體）は、ただ御一たいにてまします也。

現代文　主なる神は、父と子と聖霊の三つの位格をもたれますが、実体、すなわちご正体はただ御一体であるという教えです。

弟　原文　四にはDヒイリヨ一さいにんげんのとがを送り玉ひ、後生をたすかる道ををしへたまはんためにあまくだり玉ひ、ウマニダテとて、われらとひとしきアニマしきしん（色身）を御身にうけあはせ玉ひ、ふうふのまじわりなくたつときビルゼン　マリヤよりまことの人とむまれ玉ひ、つゐにクルスにかけられ、人にてまします御ところはしし玉ふ事。

現代文　四つ目。聖なる神は、人間が一切の罪を贖い、来世に救済される道を教えるために天下られました。人性とよぶ、私たちと等しい霊魂と肉体をその身に受け、夫婦の交わりなくして聖処女マリアよりまことの人として生まれたのです。そしてついに十字架に掛けられ、人性をもつ人間としては亡くなられました。

弟　原文　五つにはごしやうのみちはキリシタンのをしへにのみきはまるなり。それによてキリシタンにならずんばごしやうをたすかる事あるべからずとふんべついたす事これなり。

現代文　五つ目。来世救済の道は、キリシタンの教えの中にのみあります。すなわち、キリシタンになることなしに来世に救われることはありません。（注　①）

注①　弟子の発言は、岩波文庫（絶版）長崎版　どちりな　きりしたん　十五～十六頁引用。現代語訳は能文社刊「現代語訳　どちりな　きりしたん」（二〇一七年初版）十～十一頁引用

お断り

①過去の時代表現で一部に差別用語をそのまま使用していますが、その時代的表現を適切に表現することから原文引用等で使用していますのでご理解をお願いします。

②引用文も表現及び旧仮名遣いをそのままにしています。

（完）

短歌

行雲流水（五十七）

石黒修身

近詠二十首

アジサイ

アジサイの季節となれば鎌倉の名所の寺を巡り終えたり

アジサイは梅雨の徒花（あだばな）数々のドラマを秘する隠微なる花

梅雨の間のアジサイ見れば過ぎし年哀楽こもごも淡い想い出

花ことば冷淡・移り気アジサイはやはりクールな醒めた気配が

淡青の萼アジサイが卓上に梅雨の晴れ間に爽やかな風

飲食（おんしき）・身辺

老いくれば飲食とみに細れども一瓢の酒を味わいており

騒がしき酒場と酒客を避けるのは老いの身勝手寂しくもあり

おしなべてコース料理は苦手なり周囲に遅れ食べ残し多く

肉を食え人は言えども淡白な魚料理に偏よりている

一病を加えし吾に人問わば多病息災と応（いら）うのが良い

我が病症状いくつか説きしあと加齢もありと医師は加えり

耳とおくなりし友との語らいは肩寄せ合いて酒酌むときも

時局・世相

たった今合意文書を交せりと大統領（どん）高らかに成功を宣す

拉致のこと課題残して日本は異端の国との交渉迫らる

横田さん父は同郷同年代姿見えぬは病めると聞けり

W杯日本チームは漸くに一勝を得て本戦に臨む

W杯強豪多く我がチーム生き残りには課題多しと

恥ずかしき言葉が踊る「セクハラ」の映像またかとテレビを切りぬ

隠したとき禍事（まがごと）報ずる週刊誌メディアの使命か曝露の業（ごう）か

母の日がありて父の日もイベント増えれど趣意は薄れり

漢詩

潮汐錄（九十二）

鯨游海

横濱灣星棒球隊逆轉再見勝以三門連續本壘彈

平成二九年十月

九回二死一縷殘
誰不思耶逆轉難
起死回生夢乎現
三門連續本壘彈

押韻・殘難彈

〈横浜湾星棒球隊が三門連続本塁弾を以て逆転再見勝す〉

九回二死　一縷の残
誰か思はざるや　逆転の難きを
起死回生　夢か現か
三門連続　本塁弾

〔注　解〕

再見＝サヨナラ（英独語等と同じ）回＝回の正字。一縷＝一筋の糸。転じて僅かの望み。微細な期待。承句＝二重否定で強い肯定となる＝思わない者は居ない。誰はここでは反語。耶＝詠嘆。

転句＝『転句に限り平仄の五六言転倒可並四孤平可』の例外規則を援用した。（本来○●⇓●○）

門＝大砲を数える単位。ここでは打者九人の中の最も強力な三、四、五番の三者のこと＝大砲三門。

今年度の全公式戦中最も感動的な勝利の一戦であった。

〔口語訳〕

九回裏ツーアウト。一縷の望みを残すのみだ。
この窮地に逆転勝利するのは至難の業と誰もが思った。
起死回生、夢か現か！
三番筒香、四番ロペス、五番宮崎。三者連続本塁打とは何たる奇蹟か。

☆浜の空月も驚く大アーチ
　見ずや逆転さよならの劇

大谷翔平選手

平成三十年四月

六回十二奪三振
五戰四號本壘彈
孤獨無雙兩刀使
一投一打萬千歎

〈大谷翔平選手〉

六回十二の　奪三振
五戦四号の　本塁弾
孤独無双の　両刀使い
一投一打に　万千の嘆

〔注　解〕

この一首28文字中に15の数字（数え方によっては19の数）を詠みこんだ珍らしい詩。振、轟は共に平仄両声でここは仄字として。歎＝嘆の正字。①嗟く。②賞讃する。彼は開幕早々二刀流の名手として投打に大活躍している。

〔口語訳〕

（投手として）六回で十二の三振を奪い、
（打者として）五戦で四本のホームランを打った。
孤独にして並ぶ者のない両刀使いだ。
一投一打に、万千の嘆（ほめそやす声）が起こる。

☆太平洋越えてTVは叫ぶオタニサン
　ベーブルースの夢を託して

南北朝鮮板門店會談

平成三十年四月

幾世絕交相寄魂
拍肩執袂捨仇怨
雖期統一與非核
拉致如何無片言

押韻・魂怨言

〈南北朝鮮が板門店にて会談す〉

幾世の絶交ぞ　相寄る魂
肩を拍き袂を執りて　仇怨を捨つ
統一と非核を　期すと雖も
拉致如何せん　片言無きを

〔注　解〕

世＝代＝一世も一代も三十年。仇怨＝あだ。恨み。拍肩執袂＝朱子、呂祖謙・近思錄「友人が睦み合う様」絶、捨、與、致＝絶、捨、与、致の正字。

〔口語訳〕

幾世代に亘る国交の断絶だったか。遂に魂が寄り添い、互に肩を拍き袂を執り合って抱擁し仇怨を捨て去った。「統一と非核」を約束したというけれども、
拉致について片言の言及も無いのはどうしたことか。

☆閻深く氷雪凍つる白頭山
　埒あかぬ拉致埒外の拉致

《漢詩の流れ80》鎌倉・室町時代(5)釋義堂(一)

酬無得勵維那　（無得勵維那に酬ゆ）

丈夫雖病病非窮　丈夫病むと雖も　病窮するに非ず
胸次蟠蜿氣吐紅　胸次の蟠蜿　気紅を吐く
孤劒夜鳴金匣底　孤剣夜鳴く　金匣の底
臥龍春起草盧中　臥竜春起つ　草盧の中
行藏徇世身無累　行蔵世に徇いて　身に累なし
進退隨時道不空　進退時に随いて　道空しからず
但使心燈長普照　但だ心灯をして　長く普照せしめば
區區何必効彫蟲　区々として何ぞ必ずしも彫虫に効わん

維那＝役職名。僧の修行を督励し衆務を総括する役。
丈夫＝立派な男子。蟠蜿＝わだかまる虹。古代は竜が虹になると考えられた。三句＝高適「匣裏の寶刀晝夜鳴く」より引用。匣の中の名剣が用いられずに鳴く故事。臥龍＝諸葛孔明の如く時を得ずにひそむ英雄を指す。彫蟲＝詩文を作る時に字句を飾ること。顔氏家訓「童子の彫蟲、壮夫は爲さざる也」より。

〔口語訳〕

大丈夫たる私（義堂）は病に罹っても困窮せず、胸中に蟠まる虹を紅く吐き出して志気を伸ばすのだ。孤独な剣は夜になると匣の中で不遇を嘆いて鳴き、臥竜といわれた孔明は春になると草庵から立上り世に出た。私の出処は世に従い身に累わしさは無く、進退は時勢に順ってこれこの仏道の修行は空しくはない。ただ心の灯火（仏性）をいつ迄も輝かすなら、こまごました詩句を飾る小技などにどうして力をつくす必要があろうか。

讀李杜詩戲酬　（李杜の詩を読み、戯れに空谷応侍者に酬ゆ）

空谷應侍者

太白飄零子美窮　太白は飄零し　子美は窮し
也知國亂血流紅　也た知る　国乱れて血紅を流すを
酒酣鯨背天非遠　酒酣しみて鯨背　天遠きに非ず
詩罷鷗邊日過中　詩罷みて鴎辺　日中を過ぐ
渭北年年春樹老　渭北年々　春樹老い
江東處處暮雲空　江東処々　暮雲空し
唐風廢矣無人繼　唐風廃れぬ　人の継ぐもの無く
欲寫憂心擬草蟲　憂心を写さんと欲して　草虫に擬す

空谷明應＝天竜寺の禅僧。義堂の畏敬する親友。

〔口語訳〕

李白はおちぶれ、杜甫は困窮し、しかも安録山の謀反で国が乱れ楊貴妃の紅血が流れた。李白は酒を楽しみ鯨の背中に騎ると天は近くに在り、杜甫が詩を吟じ罷ると鴎のいる辺りは日が傾いている。渭北春天の樹――杜甫の李白を想う詩「春日李白を懐う」より。江東の日暮の雲――遠くの友人を懐う常套句。唐の風雅は廃れて李杜を継承する者は無く、この憂の心を表そうと詩経の「草虫」を眞似してみた。

漢詩

汲深録（十三）

松井秀人

柳橋青旆　（柳橋の青旆）

平成三十年三月

白頭扶杖柳橋邊　白頭　杖扶く　柳橋の辺
飛絮御風青旆前　飛絮　風を御し　青旆の前
酒肆醉歌絲竹和　酒肆　酔歌　絲竹に和す
如看舞袖憶當年　看るが如き舞袖　当年を憶う

押韻・邊　前　年

〔注　解〕

白頭＝しらが頭。老人。
飛絮＝風に飛ぶ柳のわた毛。
青旆＝酒屋の旗。
酒肆＝酒屋。
絲竹＝琴の類いと笛の類い。
舞袖＝踊りの着物。
當年＝その昔。

〔口語訳〕

杖をついて、老人が柳橋のあたりにさしかかった風に吹かれた柳絮が、酒屋の旗の前で飛んでいた。酒屋からは、酔歌が琴や笛の音とともに聞こえてきて見えたような着物姿に昔を憶う。

春郊行遊　（春郊行遊）

平成三十年四月

長堤雨霽日光新　長堤　雨霽れ　日光新たなり
爛漫櫻雲韶景勻　爛漫の桜雲　韶景勻う
可恨凄風吹斷處　恨むべし凄風　吹断の処
飛花片片惜行春　飛花片片　行く春を惜しむ

押韻・新　勻　春

〔注　解〕

櫻雲＝桜花。
韶景＝はなやかな春の景色。
吹斷＝吹きちぎる。風のはげしい形容。

〔口語訳〕

雨があがり、長堤に散歩に出ると日の光が明るく桜花が咲きみだれ、春の景色がゆきわたっている。恨めしいすさまじい風で、桜花が吹きちぎられ飛び散る花はひらひらとして、行く春を惜しむ。

花朝春水

訪花早暁放扁舟
爛漫櫻雲碧水頭
何料天颪吼一帯
飛紅狼藉染清流

〔注　解〕
早暁＝早朝。
扁舟＝小舟。
何料＝どれほどか。
天颪＝天の疾風。
狼藉＝取り乱したさま。ものが散らばっているさま

〔口語訳〕
早朝、花を訪ねて小舟で乗り出すと
桜花は碧水のほとりで咲き乱れている。
どれほどの天の疾風なのか、大きな風音があたり一帯にしていて
飛び散った花びらが、川の流れを紅く染めている。

（花朝春水）
平成三十年四月

花を訪ね早暁　扁舟を放つ
爛漫の桜雲　碧水の頭
何料の天颪　一帯を吼える
飛紅　狼藉　清流を染む

押韻・舟　頭　流

薔薇

斜陽籬畔緑陰稠
満架薔薇花影幽
急雨沛然紅白亂
残芳一朶送春愁

〔注　解〕
籬畔＝まがきのほとり。

（籬落の薔薇）
平成三十年五月

斜陽の籬畔　緑陰稠し
架に満つ薔薇　花影幽なり
急雨　沛然　紅白乱る
残芳　一朶　春を送る愁い

押韻・稠　幽　愁

薔薇＝ばら。
急雨＝にわか雨。
沛然＝雨の勢いさかんに降るさま。
一朶＝枝。花のついた枝。

〔口語訳〕
夕日に照らされるま垣のほとりは、葉かげが濃く
垣根に満ちたばらは、花の影が奥深い。
にわか雨が強く降り、紅白のばらが乱れて
残ったばらの一枝に、春を送る愁いを催す。

山郭梅霖

山腰煙樹雨霖霖
追日村蹊泥欲深
空備酒尊無客到
紫陽花笑只孤斟

〔注　解〕
山腰＝山の中腹。
霖霖＝雨が長く降り続いてやまないさま。
村蹊＝村の小道。
空備＝用意したが空しくなった。
酒尊＝酒だる。
紫陽花＝アジサイ。
孤斟＝一人酒を飲む。

（山郭の梅霖）
平成三十年六月

山腰の煙樹　雨霖霖
日追いて　村蹊　泥深からんと欲す
空しく備う酒尊　客の到る無し
紫陽花笑い　只孤斟

押韻・霖　深　斟

〔口語訳〕
山の中腹の樹々に雨が長く降り続いていて
日を追って　村の小道は泥が深くなっていく。
やって来る客もなく、用意した酒だるは空しくなった。
それを花開いたアジサイに笑われて、一人で酒を飲むしかない。

風の泉（第3回）

葵　州　月

「夕凪か・・・今日はイヤに蒸すな」独り呟く。
窓の傍まで青々とした八つ手の葉が伸びている。深青い緑は目に優しい。
その時、赤蜻蛉が一匹羽を震わせて飛んでくると、八つ手の葉先に止まった。
おやっ！星林はその赤蜻蛉を注視した。
アキアカネだ。
気の所為だろうか。赤蜻蛉の円い目が空を見上げて怯えているように見えた。
（野鳥にでも追われ逃れてきたのかなあ・・・）
過ぎし夏の窓辺、この裏庭には各種のアゲハ蝶、オニヤンマやシオカラ蜻蛉、羽黒糸トンボらが屡々現れて暑い季節を楽しませてくれたものだが、今は初秋だ。明るい秋空に群生し飛行能力抜群のアキアカネが薄暗い裏庭に逸て来るのは珍しい。
的はそれを射る人が的を射外すために立てられているのでは無いように、不幸もまた、ひとがこれを避けるために存在しているわけではない。（ヒルティ幸福論 27 河野与一訳）

第二室戸台風来襲

初秋の日暮れ時、その日は妙に蒸し暑かった。
息苦しさを覚えた星林竜節は熟読していた本を閉じると涼風を呼ぼうと思い、岡山大学北津寮旧館、自室の窓を開ける。
昭和三十六年、九月十五日、米実り、黄金に染まる岡山平野の落日はやし。
開けた窓から疲れた目を揉みながら裏庭を眺めた。
風が欲しいな・・・
欲しかった風は止まっていた。

奇妙な現象だ。しかも一匹だけ。ふと、天候にも不吉な予感を覚えて空の雲の流れを見ると黒ずんだ大河に、千切れた古綿を投込んだ様に天空の動きが異常に見える。

「そう言えば！台風が来るとラジオで聴いたな・・嵐の前の静けさか？・・・」

彼は今、はじめて覚醒したような表情を見せた。

「どこまで来ているのだろうか？・・」

夕刻まで〝民法講義〟の物権法（我妻栄著）を熟読していた間、彼は我を忘れて異次元の世界で過していたようだ。司法試験を突破するには民法は最重要科目だから必然全身全霊を傾けなければならない。この集中力は禅の修行で磨いてきたからこの熟読の時間は彼自身が本の中に入りこんで他が見えない。

彼は台風の状況を把握するためにラジオをかけてみた。二～三日前から太平洋南方海上で台風の発生を報じていたことを思い出したから。

「今朝、奄美大島の東方海上を通過した台風第十八号は更にその勢いを増して、北東に進み、室戸岬の南西、一〇〇キロの海上にあります、時速四〇キロで北北東へ進んでおり、夜には室戸岬へ上陸する見通し・・・」

中心気圧が九〇〇ミリバール（現在はヘクトパスカル）で超大型だという。この気圧はすごい！巨大怪物の発生だ！この怪物が上陸すれば猛烈な風と雨を吐き出して通り道一帯甚大な被害が出ることは確実だ。広島県で経験した限り、通常の気圧は９５０～９７０ミリバールだった。壁に貼りつけた日本地図を見る。「このまま北上すれば岡山も今夜半には台風の圏内に入るだろう。」室戸岬沖から指でなぞってみた星林は早めに夜の食事を済ました方が良かろうと判断した。

再び窓に戻り八つ手の葉を見ると、先刻までいたアキアカネはいなかった。戻って行ったか・・？

窓から首を出して探してみたが見つからない。仲間の群に帰って行ったのなら良いが。そうだ！アキアカネはあの大空から僕のところに超大型怪物の来襲を告げに来た「神様のお使いだったのかも知れないな！」この発想は面白いぞと内心嬉々として、赤蜻蛉の無事を祈って合掌し、窓を閉めた。

食堂へ向かう。廊下を歩いて行くとフランク永井の甘い声（ソング）が流れてきた。星林はその部屋の前で立ち止まった。

わたしの部屋のラジオ音楽が部屋の外へ漏れていたのだった。

背後から星林君がわたしの在室を見て入ってきた。

「飯に行かないか？」

「アッ、どうも、気が付かなくてごめん」

「何か思案中のようだね？ラブソングを聴きながら彼女のことを考えていたのかな・・・」

蒸し暑いから、ラジオを掛けたまま、わたしは部屋の窓も入口も開けて、足を机に投げ出してぼんやりしていたのだが。

「いやだな、そんなのいないよ！さっきまで憲法のレポートを書いてひと休みしていたんだよ。」少しわたしはドギマギしていた。顔が赤く変わってくるのを感じた。

「間もなく四国に台風がくるとラジオが言っているよ。今度の台風は、超大型のようだよ」わたしは意識的に話題を変えた。

「そうらしいね。いま、赤蜻蛉が僕のところへ来てね〈これから獰猛な怪獣が来るぞ〉と知らせに来てくれたよ！僕の部屋の窓べりにさ！」

「何の意味？・・」

「あの夕空から飛んで来た神様のお使いのお話さ！」

星林君は裏庭に飛んできたアキアカネの情景を幻想的に語り、したり顔で笑っている。

「以外にロマンティストなんだね、カチンカチンに硬いだけだと思っていたがね、星林君は！」

「いやいや、お恥ずかしい・・本当はボクも今、ラジオを聞いてから来たところさ、でもアキアカネは本当に来たんだぜ、ぼくの部屋の窓辺りにさ・・」

いつもの癖で最近買換えた透明な枠の眼鏡を舐めては、磨いている。

「あとで集会所へ行ってテレビを見てみようと思うがね・・・台風の正確な情報を知らないと不安だよ・・」

彼はわたしの机の隣に空いている西野午郎君の椅子に座りながら、なぜ西野君はいつも不在なのだろうと思い出していた。今、再び、不審に思ってはいたが、今は理由を問う時ではなかろうと黙していた。

「今のところ、奄美大島を通過して四国へ向かっているらしい、今夜あたりには岡山も台風圏内に入るかもしれないな。ここで台風の直撃は珍しいからね・・」

星林は眼鏡に今度は息を吹いてはハンカチで拭っている。完璧に曇りを取るためだろう。この仕種を見るとかなり神経質な性格なのだろうと推測できる。

「この方面が荒れてくれば停電になる。蝋燭を用意しといた方が良いだろうね。あるのかい？蝋燭の買い置きは・・・」

わたしが本箱の引き出しを開けて蝋燭を探していた。

「蝋燭はあるね、充分に」

その時、トントコトンとリズミカルに板壁をノックする音がした。

振り返ると崎口茂君が入口に立っている。

「嵐吹く、世にも動くな人ごころ、いわおに根ざす松のごとくに・・・」

「おう！来たか。サキ先生！またまた何の法螺をお吹

きになったのかね？今のは！」崎口を〈サキ先生〉と呼ぶ。親しみを込めて、星林君が笑いながら今演じた歌の中身を問う。

「明治天皇様の御歌じゃよ！おふたりさん！嵐が来るようだがの、このお歌のように何が起ろうとビクついてはいかん！。男子たるもの大和魂を腹に据えて置かねばならんのじゃ、各々がた性根を入れて付和雷同するなと言うことじゃのう」

変わらない崎口節の人生哲学である。

少し大げさな喩えで面白いことを言っているが、誉めると更に第二弾が飛んでくることが解っているから二人は押えた。

「ところで、何事ね？その恰好は」

道具箱を抱えて、シャツと半ズボンの古着姿。

「いま、寮の窓の点検で働いているとこじゃが。この部屋で、ぐらついている窓や板壁の箇所はないか調べてくれや。」

北津寮代議員、崎口の寮自治会の仕事だと言った。台風に備えて同期生の部屋は基より空き部屋や共用施設を含めて代議員みんな総出で点検していると言う。調べたところわたしの部屋では今のところ異状な所は無かった。

「無ければ結構！あとで会おう。どうせ今夜は停電になる。中田君の部屋でローソク談義じゃ。緊急の場合の要員として、君らにも、緊急事態が起れば、協力をお願いしますでのう」

当時は岡山や広島、山口は停電が多かった。蝋燭は一般的な常備品のひとつと言っていいだろう。

「当然のことです。協力しますよ。サキ先生、リン先生もわたしも台風には慣れていますからね！」星林を〈リン先生〉と敬い言葉を使って崎口君へわたしは告げた。確かに山口県や九州地域は台風の通り道であった。だから台風への備えや対応は他県より慣れていることを強調したのだ。

「ご苦労様です。代議員の要職もこんな時は大変だね。上陸後の台風が弱まり、事故がないことを願うしかないが。ま、サキ先生にご指示いただければ我々も働きますからね・・・今夜はＲＩＰ全員を待機させましょう」

ＲＩＰ事務局長として星林が崎口にエールを送る。

「今度のように悪い風も吹くがのう、われ等にとって、まあ、お天とう様が下さる試練じゃと思えよ！「外なるもの」に限らず「内なるもの」も色々と学ばされることが多いと言うことじゃ・・試練をつらいと思うなかれ！喜びとせよ！辛抱したら後で必ず良い風が吹くことも忘れてはいけんぞ・・」

「そうだね！台風も適当な雨と風を齎すなら、農家にとって天の恵みとなって喜びとなるが・・今度の風はこれまでにない凶暴な風、試練と言われても被害者のここ

ろは・・・」わたしが答えると、崎口君は右手を口に当て何か言葉を押えていた。

〈それは俺の言う外なるものだよ、内なるものの真意はまだ君には解るまい〉

荒れ狂う真冬の日本海で失った父親を想い起していたのだろうか。一瞬、顔が曇ったが、直ぐに胸を反らせた。

「それも愛の鞭だと思うのじゃよ、その後でオレの言った「内なる」好い風の意味が解る時が来るじゃろう・・ハッハッハッ」

気持ちを切替えた崎口は呑気そうに小道具箱を抱えて出て行った。わたしは彼が言った「内なる風」の意味を再度考えていたが解らなかった。

その頃は夏から秋にかけて台風は九州や山口地方に向かって来ることが多かった。

新聞記事ではこの地域を〝台風銀座〟と書いていた。洒落た〝お題目〟を付けた新聞記者は当然適格な表現だと思っていたのだろう。

台風に縁のない地域の人々はよそ事ながら、愉快な表現だと同調したかも知れない。些細なことかもしれないが、〝台風銀座〟と呼ばれてもわたしの故郷の住人にとっては不明朗な表現だったと思う。少年だったわたしは新聞の活字は読めるが、何のことか解らなかった。

ある夏、夕涼みの縁台で交わされた隣に住む老夫婦の会話をわたしは思い出していた。

「じい様（おじいさん）に聴くがのう、ここらが台風の銀座じゃ言うて新聞に書いちょるけど、どういうことじゃろうかいねえ？」

新聞を開いてばあ様（おばあさん）が聴く。門辺に据えられた縁台は、大人も子供も夕食後に集う、楽しいひと時を過ごす場所であり、この地域社会の習慣なのだった。みんなもその答えに興味を持った。じい様は物知りで通っていたから。

「そう言われてものう、わしゃ銀座に行ったことがないからのう・・・トヨちゃんは知っちょるじゃろうか？」

じい様はウソも言えない性格なのだ。仕方なく国鉄で車掌をしていたトヨさんに振る。

「ワシも仕事は大阪までじゃから知らんよ。銀座へ行ったこともないからのう。」

暫く思案していたが

「聞くところではの、銀座は何かすごい人が集まるところで、旨い食べ物がいっぱいある所らしいが・・・」

「美味しい食べ物と言われてもねえ・・台風はそんなご馳走を食べれんじゃろうがね！」ばあ様が言うと、みんなは大笑い。

台風が頻繁に来ることは実感しているが、どうしても銀座とは結びつかないのだ。

じい様は意地を張って主張した。

「台風が天上の怪獣、龍と思えよ。いわば天から降り

て来た怪獣じゃな！すればじゃ、怪獣が田んぼの稲や家畜も人も食い散らしとる、と言うことじゃなかろうかいね。怪獣にとってはこの地域には美味しい食べ物がいっぱいあるから銀座並じゃと言うちょるんじゃろう・・・当たらずとも遠からずじゃて：フウン、フウン、ウン・・」

ばあ様も納得はしていないが、

「じい様と同じ、頭の良い人が考えたんじゃのう・・チョットだけ分かった」

ばあ様はじい様に対して思いやりのあるやさしい性格の人だった。

みんなは苦笑しながらそんなことはなかろうと考えているが、それ以上の説明が出来る者はいない。

「わかってもチョットも嬉しい話じゃないがね」ばあ様が更に言うと、じい様も憤然と夕空に目を剥いて何かに堪えていた。

今、思い出すと気恥かしい会話ではあったが、銀座の人並みほどではないが再三台風に見舞われたこの地域の被害も考えてくれや、と、じい様は言いたかったのだろう。

台風の都度、わたし達が住む佐波川は、中流では堰が壊され、土手が切れて濁流が溢れ、下流の河口には上流から濁流に流されて様々な物が運ばれてきた。時には蝮（毒蛇）や牛や馬、材木は当然、時には家丸ごと流されてくることもあった。幸い今、思い出してもわたしの村や近隣で人命の失われた話は出てこなかったから不幸中の幸いだったのだが。

わたし達にとって何より田んぼの稲穂の被害は堪た。風雨に翻弄されて渦巻き状態で倒れた稲穂は修復して収穫しても正味の分量は極端に減る。この減った分だけ台風という怪物に食われたとも言えよう。天意とはいえ厳しい試練だった。このようになると、村人は天の神様にお願いをする外はなかった。

神社の神主様に頼み祝詞をあげる。水神様や龍神様に、酒やお米のお供えをして「もう、勘弁してください」と祈祷をするのだが、また暫くすると台風は南方海上で生まれて北上して来るのだ。地域の住民は人間の無力を知り、心身ともに萎えるのであった。

このような心理状態になるとやり場のない怒りは〝台風銀座〟と書いた新聞記事に向けられ罵倒するのだ。

「何ちゅうバカなことを書いちょるんじゃろうか！あの野風どう奴らあ！（あの生意気なやんちゃ者たち）」

しかしその怒りや恨みには何の大義も効果は無く「いかに台風対策、インフラを進めるか」が村人の喫緊の課題となって行った。

その公共事業で、ある年に村人の心を汚辱した公共工事請負代金詐欺事件が発生したのだが・・。

その日の夜、北津寮も暴風雨に見舞われた。午後九時ごろ予測通り停電した。真っ暗に闇に包まれた北津寮旧

館は建物がミシミシと悲鳴を上げて強風に揺れる。

崎口君の呼びかけで頑丈な新館の中田君の部屋にＲＩＰメンバーは緊急事態に備えて集結していた。

部屋では蝋燭が二本、ゆらゆらと揺れて皆の顔を照らしていた。

元家裕一が停電でも使えるトランジスタラジオを持参してきたので、瞬時に台風の位置を確認できた。

「台風は更に速度をはやめて現在、台風の中心は尼崎市と西宮の間に上陸したと思われます。これからの進路は京都から能登半島へ向かっている」とアナウンサーが緊迫した声で報じている。

「すると、岡山は台風の西側だ。これ以上強くはならないよ」

〝台風銀座〟で体験した知識で、わたしは台風の西側と東側では風雨の強弱が違うことについて説明した。

「一般的には中心から東側が強くて怖いんだよ。いまの状況だと大阪や京都、敦賀方面はかなり甚大な被害が出そうだね・・」

更に東側の岐阜県、多治見市出身の串山明和の内心は不安でいっぱいだったのだろう。

「僕のところも怖いのかなあ・・」

「いや、多治見や名古屋は大丈夫だろう、大阪湾側は厳しいが、中部山脈に遮られて、多治見方面は中心から遠く風速はかなり落ちると思う・・・」

停電は続いている。

裏山の雑木林や竹林も強い風と雨に悲鳴をあげていたが、やがて、風雨は少しずつ治まってくる。

巡回していた崎口君が戻ってきた。

びしょ濡れの黒の雨合羽を廊下のバケツに脱ぎ捨てる。

「今のとこ無事故で何よりじゃて」

寮内外の風雨による被害や事故は無い様子で皆はホッと安心した。各部屋の寮生もそれぞれ眠れぬ夜を過ごしていると言う。

「飲むとね、もう大丈夫たい」

中田君が本箱からウイスキー「トリス」を出してきた。

「サキ先生、ご苦労じゃったね」

高本がまず崎口へ注ぐと、彼は一気に飲み干した。

ふーと息を吐くと心配そうな表情で彼は言った。

「この方面は良かったがのう、今度の台風では、関西方面では大きな被害が出ると思うちょる・・。都会は人口も多いし、日頃の防災意識が低いからのう。災害は忘れた頃にやってくる、という例えもあるが、これは後出しの言訳に過ぎん！」

自然は当然に豹変する、と思っている。

わたしは過去の不幸な出来事を思い出していた。一月の北アルプス薬師岳での突風による某山岳部員の滑落死、各地で起こる恐ろしい竜巻、皆、大自然が創造する変化や乱舞だ。

ウイスキーを舐めながら皆、無口になっていた。それぞれの胸の中では各様の狂風は吹き荒れていたに違いない。わたしは経験から被害者の心痛は計りしれないだろうと想像していたし、この台風が史上最高の風速（瞬間風速八十メートル以上）をラジオで聴いて各人の顔は不安な表情を浮かべている。

崎口君も脂ぎった顔を何回も掌で拭いながら「こりゃ大変だのう」と呟いていた。間もなく彼がこの沈黙を破った。

「そう言えば、君の近くの村で不祥事があったよな。オレの中学一～二年生のころだったなあ、防災事業に関連した事件！新興の土建会社の詐欺事件じゃったな。村長の奥さんを巻込んだほら！あの事件だよ！」

突然崎口君に振られた事件は、わたしの故郷の防災工事に絡んだ事件だった。

「そうだったよなあ・・ボクも覚えているよ」と星林が言うと中田も頷いた。

新聞やラジオの報道を覚えていたのだろう。

あの事件は「功利主義の会社とその社長夫妻」が村長夫人や役所を欺罔して巻き起こした禍禍しい公共工事請負代金詐欺事件だった。

わたしにとって、この詐欺事件は忘れることはなかった。伯父と親しい村長ご夫妻が突然巻き込まれた「不幸」なできごとだったから。

わたしは部活「放送部」で、丁度この事件を取り上げてラジオドラマに書き下ろしたところだったので、この概要をみんなに話した。

二週間後に第一講堂（木曜日、定例）で昼の休憩時間に放送される予定だった。

部活の〔台本書き〕として、わたしがこの事件の紹介と見方を纏めることがわたし自身の研修にもなろうと思い、ラジオドラマにしたのだった。

「面白そうじゃ！みんなで聴いてみよう。」事実、ＲＩＰメンバーと約一〇〇人の学生が集まり聴いて貰った。

（台本は後部へ追加）

のど元過ぎれば（台風のあと）

わたし達が語り明かした夜は学生時代の忘れられない一ページになった。

台風一過、翌日は晴天だった。気象庁はこの台風を「第二室戸台風」と命名した。

その日、大学の食堂掲示板にＲＩＰ事務局長、星林竜節名で墨書きの大きな貼紙を出した。この目的はＲＩＰ同志会の名称を広く周知させて新規会員も獲得し、数ある同好会の中で新しい風を起こそうと意図したことも兼ねていたので、当夜を過したメンバーに示し、これを充分了承していた。

ＲＩＰ同志会、緊急総会開催！

来る九月二十五日、夜七時より、
場所　"四季屋食堂"　初参加希望者歓迎

右の掲示がされた。真白い用紙に単純に書いた墨文字は他のマジックで色とりどりの貼紙より目立っていた。想定した通り、

「新しい同好会だね！」

「どういう会だろう？ＲＩＰって言うのかな」

「北津寮の連中で、その通り！ストリップ好きで、大した酒飲み会らしいぜ」

いろいろ昼食用のパレットに食べ物を乗せながら、学生らの会話が聞こえて来る。

星林はニンマリとしながら、「バカなことを言ってる奴も居るなあ」と不満もあるが反応に対して悦びの方が大きい。

「広報の効果があるなあ。次はＰＩＰの大義を詳しく唱って、新人募集のみの広告を貼ろうかね」

「命名した時は、ボクもジョークで言ったが、同じような推定力が働くんだね。ストリップと酒飲み会だけでないことを知らせなきゃならんぞ」元家がうどんを啜りながらボヤいている。

この掲示が広報に有効である機能を持つと同時に不特定多数へのメッセージが、ＲＩＰメンバーにとってリスクもあることをこの時は誰も知らない。

その総会の掲示をした同じ日、昭和三十六年九月十七日、第二室戸台風は岡山を直撃することはなく、室戸岬から関西へ上陸、能登半島を駆け抜けて死者二百二人を出し、直撃を受けた地域には人的、物的に甚大な被害を残した。室戸岬の最大瞬間風速は八四・五mで史上最高の瞬間風速を記録したのである。（まさしくキングゴジラの来襲だ。第一作目の映画を想い出す）

九州、岡山県を含む中国地方は台風の直撃からは免れたので幸い岡山市内にも大きな事故や被害はなかった。災害地には他人事ならず私たちは心を痛めていたのだが。

その日は夕方になっても、蒸し暑く、寮の風呂は早々に満員状態になり普段以上に湯船は汗臭かった。

食事を終えて集会所を覗くと、ここも寮生で溢れていた。テレビは各地の台風被害を報じていたが、間もなく誰かがテレビチャンネルを野球中継に切り替えた。異議を述べる者は誰もいない。わたしと星林、串山、元家も沈黙していた。心の底では被災者への罪悪感もあったが、多勢に無勢、野球中継に反対する声はなかった。この野球を見る目的で早風呂と食事を早々に済ませて集会所へ来た寮生達とわたし達四名も同様の理由からだったのだ。

プロ野球は終盤戦、長嶋巨人の野球中継はテレビの視

聴率トップ。寮のテレビも当時はカラーテレビに変わっていた。

美しいホームでチャンスになると必ずバッティングを生かし、巨人の勝利に貢献する。読売ジャイアンツ長嶋茂雄選手の活躍をみんな見たいのだ。

大半の寮生は彼の超能力をテレビで見ているうちに、その能力を自己に置き換えて見ている。絶対に不可能だろうと思う状況を可能にするスーパースターに感動し、その原点を探っている。「天才とは努力をする力なり」更にその「努力は継続によって花開く」と川上哲治監督。人間には人それぞれのポジションがある。

「そうなのか」とやがて社会に出てゆく我々に活力を与えるものだと推量し感動していた。

このスーパースターはさらに野球少年を増やす。スターを夢見て少年らは努力しこれを承継する。このようにテレビによる報道が日常生活に様々な影響を与え始めてきた時代。

このテレビ黎明時代にメディア普及と社会の変動に警鐘を鳴らす学者や政治家は有ったのだろうか。わたし達も崎口君以外は政治には無関心だったが。気が付いた者はいなかった。

この日も読売ジャイアンツ長嶋選手の大ホームランで勝負がついた。ジャイアンツファンの寮生は躍り上がって喜び万歳三唱、湧きに湧いて散会した。

野球中継が終わって、暫くすると中田会長の部屋にその日もＲＩＰメンバーが三々五々集まってきた。

崎口はプロ野球には興味を持たなかったしテレビの娯楽番組に迎合することは学生にとって不健康で無駄な時間だと常に広言していた。

私達はこれを知っていたから、野球の話題は遠慮していたし臨らしく沈黙していた。

崎口君は我々を一瞥すると、

「災害は忘れた頃にやってくるという、通俗的な謂れがあるがのう、のど元過ぎれば忘れてしまう。人間はそれに気が付かないんじゃのう！」

集会所の万歳三唱が聞こえていたに違いない。中田の部屋で煙草を燻らせて、崎口は苦々しく吠えるように言う。野球を楽しんで来たわたしと数名は非難されているような気がして俯いていた。

「サキ先生！昨夜はお疲れ様でしたね。今回のはチョー特大でしたから・・・」

星林が小声で答えた。

「ホームランのことかね。チョーさんが打ったらしいのう！」

「サキ先生も見ていたのかね、長嶋の大ホームラン！」

串山君がこの崎口君の反応に答えて嬉しそうに言った。

「いや！ボクが言ったのはチョー大型台風の事ですよ。ヤマ先生！駄目だよ間違っては！」

星林が手を振って訂正した。

皆は笑って、この食い違いが部屋の雰囲気を和らげた。

「見ておらんでも、集会所のバカ騒ぎを聴いたら誰でも解るじゃろうが！」

「ごめん！サキ先生の危惧はようボクも分かっています。昨日の今日なのに、大自然の猛威を受けて我らも野球で浮かれている訳にはいけないのかも知れませんね・・・」

野球を見ていた元家君も反応した。

勿論、今回の第二室戸台風は想定外の風と雨を齎した。日本のどこへ上陸しても超強力な台風エネルギィは莫大な被害を与えたことだろう。被災者を思うと、野球を楽しむ時ではないだろうと思い直して星林も崎口の主張を是として嘆息した。

崎口が後を続けて言った。

「基本を言うちょるんじゃ！リン先生、知識として聴いてくれや。安岡（正篤）先生が既に言われておるが、今の日本は所得倍増、産業回復、国の総生産（ＧＮＰ）ばかりを言って、政治、行政が算盤勘定ばかり言っておっていかんと、将来へ警鐘を鳴らしておられるのじゃ。」

会長の中田が大あくびをした。

「いや！デン先生のように大局観のある大物政治家が少ない。インフラ投資を増やさにゃならんて！早めに対策しなければ再度大災害になるぞ！そうじゃろうデン（中田）先生！」中田は眠気を堪えて、面目なさそうに短髪の頭をボリボリ掻いている。

「まあな・・言うとることは解る、ボクはそれほどの人物じゃないとよ・・」

一同爆笑する。

この頃から××先生を名前に付ける風趣が出てきた。改めて紹介しよう。親密度が増して崎口は「サキ先生」と呼ばれ星林は「リン先生」中田は「デン先生」と呼ばれた。少し、社会人として目覚め始めたと言っていい。「性事」から離れて未熟ながらも政治や経済のテーマがＲＩＰ同志会で多くなってきたように思う。

麒麟児を夢見る

わたし達なりの政治や経済の論議を終えたころ、農学部の串山、高本の両君が今夜も中田の部屋へ着いた。

「遅くなってしもうた！みんな集まっていて良かった！」

農学部の高本と串山が今夜も酒を下げて入ってきた。

中田会長が二人の手荷物を探って言う。

すでに眠気は去ったらしい。

「今日は獲物はなかと、実験の？鍋は揃えてあるけどな・・・」

「今日、カエルの解剖はしたがね。食わんじゃろうねえ」高本のジョークで全員爆笑する。

「もうカエルとね。時間も遅いとよ・・・」
珍しい会長の駄洒落に拍手も湧く。
あの、洗面器での鳥鍋パーティが鮮烈に甦る。
「冗談はともかく、今度、キリンの解剖をしなきゃならん・・」串山が言う。
「キリン?あの首の長ーい奴かのう」
「そうじゃ。でっかいやつ、初めてじゃ、農学部でもな・・」
「どうしたんじゃ」崎口が問う。
「今はここだけの話だけど、B動物園でキリンが死んだのさ。その原因を調べるために農学部に解剖の依頼が来ており、明日あたりに運ばれてくる。多分、ボクは老衰死だと思うけどな」串山が答えた。
「そう言えば新聞に出ていたな。確か、その動物園のことだろう?戦後すぐに日本に入ってきたキリン。長い間ありがとう!って子供たちが泣いてね、感謝している写真記事を見たよ・・」
「何トンあるか解らん・・大変な解剖になるよ。岡大にとって歴史的なことだ・・」
高本が解剖チームのスタッフや計画の概略を説明する。勿論プロジェクトのトップは教授がなる。
「食うとね・・」中田が問う。少し笑い声が起るが崎口が両手でそれを押えて言う。
「まあ食えんこともなかろうがのう。リン(星林)先生の実践行動主義からいうとな、食うてみる価値があろうがね、われ等は体験第一主義じゃけんのう・・」
本気らしい。
「草食動物じゃから、問題はないちゃ。基本的には牛や馬と同じじゃから」
長身で首の長い高本が既に解剖後は食することを前提に解説している。その夜、キリン談義はそれで打ち切られた。わたしは何となく巨獣の悪夢を見そうな予感がしていたからウイスキーを煽った。
酒の酔いがやがてその事を忘れさせてくれた。

その一両日後、農学部の解剖スタッフから齎されたキリンの肉はバケツで二つ分位あったが、寮内に口コミで情報が伝わると、寮生の有志二〇名位が忽ち庭に集まり、一部寮生から衛生上の疑念も出たが、食することには多数の寮生も興味深々、不安の声は少数だった。
考える間もなくすぐに食べてみたい寮生が大多数となりそれを食すことになったのだった。RIP諸氏は当然賛成派。
やがて庭に設置されていたキャンプファイヤー用の炉が復活し火が赤々と燃えて寮生たちの顔を照らしはじめた。すぐに炎は風を呼び薄紫色の煙は渦巻き舞い上がる。寮祭のような雰囲気になっていった。あちらこちらで酒盛りがはじまる。RIPも当然全員が集合して日本酒を

みんなに振舞った。
麒麟の解剖を担当した農学部、四回生某が解体所見を説明し、老衰によるもので、危険な病気によるものではないこと、及び解体後の処理一切を農学部に任されていることを説明した。高本が説明の後を引継ぐと
「その処理の一つの手段として、食べることもひとつの方法じゃが!」笑いが起こる。
「食べたあとは、各自に責任を持って頂きますよ!明日腹が痛いと言われても、農学部は医者とは違うからな!」
「医学部もいるぜ!ここに!」爆笑。数名の医学部と四回生の田戸村寮長もやがて参加した。
依頼先も学生が一部を食することは暗黙に了解していると、高本も皆に笑いながら説明した。大部分は捨てられるが、部位によって園内の動物たちの餌にもなる予定とも説明していたが、わたしとしては聞きたくない説明だった。胸の中の隙間を迷い風が過って行った。
旧館裏の竹やぶから竹を切出して、それを割って竹串を造り、これに肉片をさしてバーベキュー。樫の枯木を加えて焚火で焼くといい香りがするが「筋っぽくて大味だ」「牛肉とはやっぱし違うな」「馬肉に近いな」「ウサギに匂いが近い」と各人各様の意見を述べながらみんなが竹串に刺した肉を齧っている。いずれにしても、空腹がこの食欲を呼ぶのだろう。
さらに、大鍋を焚火に掛けて、水炊きにして味噌で味付けをしていたが、ブクブクと沢山の泡が出て、見るからに見栄えが悪く、わたしも食してみたが、硬くて、ぱさぱさした舌触りで決して美味しいとは言えなかった。
それでも、寮生が庭の焚火を囲んで楽しそうに食し談笑している。
「まず日本で、食べた経験者は少なかろう。アフリカの現地でもライオンやヒョウが食べている位だろうて」
「食べた者はまさしく麒麟児だな!」と誰かが言うと大喝采、集団心理は疑念や理性を払拭し味覚も麻痺してくるものらしい。
日本は縁起物を食する文化を持っている。
エビや鯛を食して祝う。
麒麟も同様に考えていた寮生も多いのだろう。この縁起に預かろうと、また寮生が増えていった。
先輩も新入寮生もキャンプファイヤーを囲んで楽しく盛り上がっていた。まさに野性人のお祭りと言うところか。
「麒麟児かね!それは縁起がいいね。中国の故事にもあるよ。才能・技芸が特にすぐれた若者を麒麟児と言い歴史上では三国志に出てくるが・・」文学部学生が語る。
「麒麟はまた聖獣とも言われ才能と徳の両方を兼ね備へた際立って優れた聖人の象徴でもあります。聖獣を食すれば罰も当たるかもしれないよ!・・・」

食したあとで、バチあたりと言われても遅い。そのころ、すべての肉は寮生の胃袋へ収まってしまっていた。
そして参加した寮生は臨時寮祭のような雰囲気を楽しんだのだった。
「麒麟に感謝！感謝せいよ！天からの贈り物じゃて！」
崎口が酔って叫んでいる。
星林は寮長を見つけて、わたしが語った西野午郎君のことについて何か聞こうとしたのだろうか、寮長の傍までゆっくり歩いて行った。
寮長は酩酊していて愉快そうに星林のコップに酒を注ぐと六高寮歌を歌い、岡大校歌も皆と合唱している。続いて今年のヒット曲、坂本九ちゃん「上を向いて歩こう」の大合唱。星林も寮長と肩を組んで合唱しながら、この雰囲気を第一義とし改めて西野君のことを聞いてみることにしてその場を楽しむことにしたのである。この時、寮生の輪は膨らみ総勢六〇名（寮生の半数）を超えていたのではなかろうか。
そこに、新研部の紅谷部長と小坂副長が離れた暗がりに居て、写真部にその光景を撮らせていたことが後で判明したのだが、その夜はそれに気が付いたRIPメンバーは居なかった。

四季屋食堂の乱

涼やかに初秋の風が流れ、スズムシが道の草むらで羽を擦って謳っている。
風情のある大学通りを抜けて、わたしと星林君は四季屋食堂へ指定の時間より早く着いていた。
九月二十五日午後七時。
大学食堂に掲示したRIP緊急総会の夜だった。
四季屋食堂には、星林君が予約を入れていたから、八名の席が　予め用意され整っていた。今回、期待していた新入会員希望者はなかった。
卓上に岡山の名物料理“こうなご”の佃煮、ヤッコ豆腐が並べられている。
“こうなご”はカマスの稚魚、瀬戸内海で獲れる珍味である。“いかなご”はイワシの稚魚で、有名なのは鹿児島。
卓上の花瓶には初秋の季節の花、ピンクのコスモスと白い小菊が無造作に活けてある。
間もなく崎口君が入ってきた。
崎口が席に着くと直ぐにその花瓶のコスモスの花を拡げて活き活きと空に向かって咲き誇っているように調整、小菊を中に配置する。すぐにまとまった。
「ようし、これでいい」彼は華道も齧っていたから気が付くと自然に手が出る性分なのだ。
中田会長が現れた。其のあとを他のメンバーが続き全員が揃った。
「会長さん！こちらへ」中央へ導く。

事務局長の星林君が中田会長の席を決めると、会費の徴収を始めた。
「きょうはコウナゴの釜揚げも美味しいからね！」
奥から親父さんの声に合わせて女将さんがお銚子をテーブルに配り始める。
「みなさん、いつもありがとう、崎口さんは華道もおやりになるのね。すみませんね、そこの花を直していただいてとても見栄えが良くなったわ」
「いやいや、勝手流で触らせて頂きましたが、女将さんに誉めて頂いて恐縮しちょります。」恐縮するよりご機嫌がいい。
「先週、うちの三津子が下津井の鷲羽山から持って帰ってきたもので・・色がいいでしょう？」
「そうですか、鷲羽山のコスモス畑ですか。道理で瀬戸の風を受けて活き活き育っっちょりますのう。軸も強い。ところで、元気溌剌のみっちゃんは？」
「いま、お使いで出ていますが、もう、帰ってくる頃よ」
「そうですか」といって星林が全員席に着いたところを見回す。
「それでは、会長さんに一言お願いして乾杯をしよう！」
お互いの御猪口に酒を注ぐ。
「じゃあ、まあ、そうゆうことなら・・・」
立ち上がると、先に注がれた酒を飲み干す。「あれ！先に飲んじゃったよ！乾杯が先じゃろう、会長さんにもう一度注げよ」皆が笑っている間に、中田は自分でもう一杯注ぐとまた、飲み干した。今度はワザとらしい。あいさつをする前に緊張をほぐすためだろう。
「すまん・・慣れとらんから、アガる前に先に乾杯とね！」
「乾杯！ご唱和ください。」と元家裕一君が大声言うと、それぞれ盃を空けて宴会が始まった。
中田会長は立ったままで、少し考えていたが、
「ま、今日は、四季屋食堂でこうして全員そろったのは漕艇競技会以来で、少しボクの考えていたことを話したいとね・・・」
無口な会長が何を言うのかと、皆は一瞬会話を止めて耳を傾けた。
「いや、ボートの試合ではいろいろみんなが努力したことに、改めて、ご苦労様と言いたいとね。特に崎口君には感謝したい。あの時、キャプテンが何をボクらに言ったかを思い起こして欲しい」
皆の顔を確認しながら続ける。
「あの日の朝、キャプテンは言ってくれたよな。これまでやってきたことを、そのままやるだけでいい。以上もなく、以下もない。無心にやれ！相手は自分自身じゃと言ってくれたとね。・・・」自然に拍手が湧いた。しばらく置いて

「もう一度、崎口君に拍手をしてくれんとね」一段と賛同する気持ちが乗って拍手が大きい。

「もう一つ、ボクとコックスのミスがあったことは、みんな知っていたのを、キャプテンは誰のせいでもない！と言うてくれたとね。」一呼吸入れて、一杯飲むと

「終わってしまったことをゴチャゴチャ言うても意味がないと、言われたとね。あの時、・・・」皆しんみり聴いている。

崎口が中田の話を止めた。

「わかった！分かったちゃ。もう言うな、今日は無口の中田会長が、多弁で快調だのう！」会長と快調の駄洒落に、誰も反応しなかった。それ以上に中田君のスピーチにみんな感動していた、崎口は思いがけない中田会長のお誉め言葉に長髪を指でかき上げて、照れている。

「まあ、もう少しきいてくれ。要するにあの漕艇大会へのチャレンジはすごい経験だった。僕は油断したとね！一瞬外見をして勝ったと思うたとね・・・やっぱし何事も気を緩めては駄目だ！と言う体験が身に着いたということを言いたいとね。自分がミスして負けて悔しいが、それ以上の友情を皆から頂いたな。ボクは感謝しているよ。みんなにな」

拍手、拍手！誰も暫く無言で感動していた。

誰もが同じように貴重な体験をしたことと価値観を共有していたのだ。利己心のない、お互いを敬い称える心、会長がそれを奇しくも言ったことに感激したのだった。

わたしも同じミスをした。気のゆるみだ、会長はわたしの事も含めて言ってくれたのだろう。わたしは心の中で手を合わせて中田会長に感謝していた。

「ただいま帰りました～！」みっちゃんがお店に帰ってきた。お店の雰囲気が一挙に明るくなったような気がした。

それは、一瞬だった。

「ご同伴です～。みっちゃんとご同伴出動ですよ～」

聴きたくない声だった。新研会の小坂副長のワザと作ったようなやさ声だ。

「同伴とは違うわよ！法界院の駅で偶然会ったばかりですよ！小坂さんはいつもイケずやから、おえりゃせん！（どうしょうもない！）」

「つれないな～。隠してくれればいいのに。新研会七名様でご同伴！」紅尾一派だった。七名で入ってきた。副長の古坂が先頭でわたし達の席へ寄ってくる。

「キミらが今夜、団体様で来ていることは、我々は知っていたよ。学食の掲示を見たからね」小坂副長がジロッとわたし達のテーブルを見て、その他の連中も我われの周りを取り囲んだ。

「みなさん、こんばんは！」星林竜節が立って挨拶をする。自然にわたし達も立ち上がって先輩に頭を下げた。

「ＲＩＰ同志会って、やっぱし君たちのグループだったかい。何が目的のグループなんだね」小坂副長が尋問口調で星林に聴いた。

「リップ同好会ですばい」会長が先に答える。

「スリップのリップかね。」中田の顔が紅くなった。怒りを小坂に向けた。

「スリップか！ピッタシ！君たちには今年のボートの試合で無残なスリップショーを見せて貰ったからね！」彼らの一人がホホホッホッ！と声を出して笑った。

「我らはこの連中で、準優勝だったけどサ」事実、この準優勝は週刊岡大新聞に写真入りで、優勝チームより大きく紙面を飾っていたのだが。

「ようわかりましたちゃ。その節は皆さん、おめでとうございましたの。この辺でどうですかいの、皆さんの席に附いて貰えませんかいの、こんなに立ったままじゃ店の人や、他のお客様に迷惑になるちゃ」

「崎口か！よけいな事は言うなよ。キミがこの会の元締めかい！」崎口の傍にいた元家君が、両手を挙げて挙法、正対のポーズを取って構えた。

「何だよ、キミは！暴力で対抗かい！」

崎口はそっと元家の手を押下げた。

「テキヤや総会屋じゃありませんからの、元締めって言う言い方はなかろうがのう」

「同じようなものじゃないかね、そんなテキヤや総会屋のような大げさな会ではないこと位は分かっているさ。どう見ても小さなセコイ会には違いなかろうがな！」流石に崎口の眉毛が逆立って目が険しくなる。

「有名な新研会ともあろうお方らが、人様に対してセコイ会とは言いすぎじゃなかろうかいの！」

いつものように三々五々、常連の学生が食事に入ってくると、わたし達の対立に興味を抱いて聴き耳を傾けている。親父さんもみっちゃんも帳場から出て心配そうに成り行きを見ていた。

「取敢えず座ろう。」崎口に新研会を評価されたことを良とし、周囲の状況をも見て紅尾部長が指示を出す。我々の席の傍へ陣取った形になった。

「一つだけ忠告しておく。」崎口の席へ紅尾部長が来たので崎口は立ち上がろうとしたが、紅尾は彼の肩を押えて、

「そのままで聴いて貰おう。先日、キミ等は、動物園で死んだキリンの肉を食べるパーティを開き、盛り上がった様だな！農学部の君がリーダー格でな」厳しい目で高本を見る。

「皆もだ！寮生として、イヤ、岡大生として品位を欠くパーティではないのかい。野蛮な行為だと思わないのか？動物園で長い間愛されていたキリンを食べてしまうなんて！」低い声で話しているが、静まった周囲に声が透る。

「農学部で解剖したことも取材して、今回の経緯や担当教授も判明しているが、大学の誰が責任者でどんな許可を受けて、寮へ肉を持ち出したか、今、調査中だ。」

彼は自分の仲間の一人を指さした。

「彼は写真部員だ。当夜の写真は撮ったよな」

「はい！ほぼ参加者全員を撮っています。」今夜もボックス型写真機を胸に下げていた。

「さっき、うちの副長が君たちの会をセコイと言ったが、事実、ここにいる会員は皆参加していただろう。表現した言葉は悪い。これは謝るが、副長も思わず、この事実から判断して言ったのだと思う。犬でも食わないだろうが・・それを寮生に食わせ、騒いで食った君たち・・・そのうち真相は新聞記事になるだろう！」

ＲＩＰのメンバーは頭を下げて無言のまま聴いている。

紅尾は傲然と自席に帰って行った。

わたしはキャンプファイヤーが赤々と燃え盛り、周りを寮生が肩を組んで歌った光景を思い浮かべていた。約六十数名が参加し、青春を楽しんだ寮生活の一ページだと思っていた。しかし言われてみればモヤモヤしていたわたしの胸を突き刺すような言葉を聴くと今更ながら苦しい・・・。

崎口が立ち上がると、険しい目をして紅尾のテーブルへ近寄って静かに口を開いた。

「紅尾さん、話は伺いました。指摘されたことは事実ですちゃ。忠告された内容についてはよく分かった。犬も食わん肉とは、よう言われましたの。まあ、そのキリンの肉は動物園の肉食動物の餌にもなっちょるようだがの、ともかく指摘されたお言葉は私の心を突き刺しましたが・・・」紅尾は大きく頷いた。

「紅尾さん、それから小坂さん！わたしの考えを少し言わせて貰います。・・・野蛮な行為と言われましたが、この場合、動物園の動物を食ったからでしょうかのう？」

「そうだよ、当然！」小坂が答えた。

「前提として人間社会は、矛盾の中に生かされておりますからのう。大切に育てた牛馬や鶏、自然界の鳥獣や魚を人間は殺して食糧にしておりますでの！しかも生きたのを殺して食う、これは野蛮とは言わない。何故じゃろうかいの？」答えがない。

「これまで人間は自然界から沢山の命をいただきながら生きてきたのと違いますかいの。」

「それと、キミ達の行為は別だ！」小坂が赤い顔で吐き捨てた。

「どこが違うかのう？小坂さん！教えて欲しいちゃ」

「動物園のキリンだからだよ！」

「動物園と牧場、養鶏場、養豚場いろいろありますがどこが、どう違いますかいの。農家も生き物をいろいろ飼っています。そしてその命を頂いて食する、この行為は野蛮ではないのでしょうかの？まあ、最初は愛玩動物の場合もありますからのう、ヤギやニワトリが可愛そうで、泣き泣き食用にした戦後の食糧難時代も考えてみなされい！」

崎口は悲惨な戦争で飢えに苦しんだ日本兵の手記から学んだ兵隊の悲惨な姿を想像していた。

「あの日本が負けた戦争で、ジャングルや凍土の大地で兵隊さんたちは何を食って戦い、また生き延びて帰還されたか、その原点を考えてみなされい！」

「理屈の多い男だ。もういい！」小坂は酒を煽った。

「農学部に持ち込まれキリンを、解体したのは動物園からの要請で、キリンが死んだ原因の究明をする、並行して農学部学生の解剖実習、生体研究が目的になったと聞いていますよ。農学部はボランティアで、あの大きなキリンの後処理一切の委任を受けていればこそ、余興のひとつ位、許されても良いんじゃなかろうかのう。わたし等が生きたキリンを死なせたわけじゃない！」

崎口は苦悶していた。自分らの品位についてだ。あの夜、冷静に考えると、無関係な他人には我らの行為は確かに品性に欠けた行為に見えて居たかも知れない。確かにあの夜、自分達は冷静になり客観的に状況を見ることは出来なかった。その前提として大晦日の鳥鍋パーティがあり、その延長線上にあるキリンパーティを楽しんだことについて、二つの行動は社会通念上の品性を問われれば異常であることには違いはない。これは公平に判断されなければならないだろう。行き過ぎた行為だったらこの際反省しなければならぬ。

しかし、年末から正月にかけて、女子寮にストームを掛けて、土足で寮内を汚した行為とは本質が違うぞ、と、言いたかったがこれは主題が違うから発言は押えた。ただ、写真の隠し撮りについては、敢然と言わねばならない。隠し撮りをし、自分たちを正当化するだけのためにはスパイ行為も平然と行う姑息な手段だ。

フーと息を吐いた時だった。

「わたしは崎口さんの言われたことは間違っていないと思います。勇気ある発言です！」紅尾グループの中の一人が立って発言し始めた。店の全員が静まってこれを注視する。

「わたしは理学部の太田と言います」

「やめろよ！太田！」小坂が怒鳴った。

「少し待ってください」両手を広げて小坂を制した。

「小坂副長！発言の自由はあるではありませんか。報道の自由と同じです。一方的な見解だけで良非の判断はできないでしょう。崎口さんのご意見は、一つの見識であり、認めなくてはなりません。」

拍手がパラパラと処々から起こってきた。紅尾の顔は赤くなり、小坂の顔は忽ち青白んだ。

「いま、わたしは動植物の生態学、その真理について

学び研究をしています。わたし達も様々な実験動物の命を奪って来ましたが、食する欲も学生の学術研究欲のために、私たちがこれらの命を奪う行為も本質は同じことではないでしょうか。私も崎口さんが言われた社会的自己矛盾を感じています」

「太田！帰るぞ！」小坂は仲間を出口へ誘導し始めた。

「崎口！農学部の不正行為の裏が取れたら新聞に出すからな・・みんな！帰るぞ！」

「太田！萩谷！君たちも早く来い！」

新研部の五人は店を出て暗闇へ消えた。

太田と呼ばれた学生と更に萩谷と呼ばれた二人は動こうとはしなかった。

「彼は萩谷君です。僕らは寮生ではありません。私は大田篤史と言います。二人とも理学部の三回生です。新聞部で科学関係を担当していますが、真理は万民共通のものです。わたし達も動物の生命を頂いて実験し、この現実によって科学の世界が支えられているという悩ましい問題を抱えている訳ですから、崎口さんの提示された発言に一理あることを感じた訳です」

「いやあ、お恥ずかしいです。助け舟を出していただいて感謝しちょります。」

崎口が頭を下げ、わたし達も全員起立して頭礼した。

「お恥ずかしいのは私らです。」恰幅のいい柔道部タイプの萩谷が頭を掻いて言う。

「あの通り、上層部が高圧的で申し訳なく思っています。新聞やラジオなどメディアは公器です。間もなく四回生の三人は某新聞社へ就職します。すでに内定しているようです。あのように他者を寄せ付けない横暴な態度に、わたし等も危惧をしています。将来、公器を自在に扱える人間があのように利己本位でこれを使えば公器が凶器になりはしないかと心配するのです。」

崎口も同感だった。思い切って発言したお蔭で理性ある先輩に合えたことを光栄に思っていた。人はすべて同じ考え方で生きてはいない。しかし、真理は天の下で共通である。

「おそらく、わたし等二人は、新研会に戻れば自己批判をさせられて、追放されると思いますが、もう、彼らに迎合するつもりはありません。むしろ彼らがもっと理性的に物事を見てくれるように、要望して去って行くつもりです。」

「ありがとう」崎口が頭を下げる。

わたし達も感動していたが、わたしは言葉が見つからない。

「頑張ってください。」「負けるなよ！」ＲＩＰの中からエールが起こる。

崎口は自問自答していた。「人生には思い違い、間違いもある。今回は真理を探究する理学部の二人に助けられて気づかされた。過ちを知って直さないことが本当の過ちと言う、諺もあるが深く噛みしめよう。間違った行為を正当化しようと思う邪心を今すぐに切り取って置かねばなるまい」

わたしはこの夜がＲＩＰ同志の結束をさらに強めたと思う。

中田会長が述べたＲＩＰ同志の友情。

崎口君の勇気と信条。この青春が巻き起こした風はわたし達、及び理学部の太田、萩谷両先輩の懊悩にも深く浸透していったのだった。

この青嵐の縁は、自由奔放の学生生活にあって固い友誼で結ばれ、未来へ繋がって行く。やがてこの縁が将来思わぬところで花開く。

「次に、台風の夜、語った公共工事請負代金詐欺事件をテーマにした放送劇の台本を記載した。」

放送劇台本（岡山大学放送部制作）

「三本の矢、折れて」

作・演出　葵　州月

ＢＧＭ（バックミュージック）

爽やかな農村風景をイメージさせる曲が流れる（聴く人が清々しいイメージを湧かせるような）

約一五秒・・・　ＢＧＭ引く

突然、暴風雨音に反転（風、雨、遠雷も入れる）

村人Ａ「土手がきれるぞ～！佐野の堰が壊れちょるぞ～」

村人Ｂ、Ｃ、Ｄたちの叫ぶ声、濁流の音激しい

「土嚢を運べや！」「西部地区は非難させよ」「これ以上は無理じゃ」

スコップと砂利の衝撃音・・・風、風、風、・・・

「もう限界じゃ！」「逃げろ」アドリブ

竹やぶが風で唸る　濁流音

遠くから「大丈夫か～」

「堤防が切れたぞ～」

「大変だ！」アドリブＯＫ

（激しいＢＧＭ）

女性の悲痛な声Ａ、Ｂ「たすけて～」

「逃げて～子供を先に！子供たちを～お父さ～ん」「速く逃げろ！」足が濁流を切る！アドリブＯＫ

ＢＧＭ静かに引く

（三秒の間をとる）

村議会の議場（エコーをつけた議場のノイズ）

村長の演説「この度の台風でまた、当村を流れる佐波川の堤防が三か所崩れて、大きな被害が出てしまいました。様々検討をしましたが、これまでの外注本位の工事のやり方を変えて行かねばならないことに気付きました。やっぱりこの村の防災工事は、この村でやらなければなりません。村民、役場全員が協力しあって本当に頑丈で

有効な堤防づくりを遂行しようではありませんか！」

　疎らな拍手。

村長「その具体的な方策として三つの政策を提案します。これを三本の矢と呼い、経済政策として提案します。その第一番は村内での防災工事施工会社を育成、設立の支援をします。第二に工事業者に新しい工法技能の修習支援をします。その三が工事作業員を可能な限り村内から動員します。

（議場の拍手多数）

N（ナレーター）

「石田村村長は毛利元就が三兄弟へ三本の矢を合わせてその強靭さを示して、三兄弟が力を合わせてこそ毛利家は繁栄し、永続するとした逸話を話して、毛利家家訓の「三子教訓状」を説明して、我々村人同志が親兄弟の如く仁愛を育み一致協力しなければならない、と語り「三本の矢」をこの政策の象徴としたのです。与野党議員の声をお聞きください」

　拍手に促されて

与党議員甲「これは画期的な政策じゃありませんか！台風で起こる洪水被害は何時もこの堤防の弱い個所を崩してております。堤防修復工事は村の最大の事業でありますから強固な堤防造りは喫緊の課題で、村長の言われる村内の土建会社を育成して自分らの村を守るという気合を込めて工事の施工をしてもらう。いくらお金を払っても気持ちの入らない工事じゃ、また土手は洪水に負けて、いつまでも壊されるじゃろう！」

　拍手

与党議員乙「村内工事を村内企業に請負わせ、施工させれば、村の支払ったお金は村に残るわけじゃ。企業も個人も収入が増えて、納税額も比例して増えるという政策は一石三鳥ということでしょう。」

　拍手

野党議員丙「それは結構な政策としても工事の発注は公平にして貰わなければなりますまい。そのために「土木、建設会社指名委員会」の設置を提案します。与野党からの議員を平等に選定して貰うことは当然でありますが、第三者として与野党の承認を受けた弁護士を入れて貰いましょう」

　野次と拍手

「当然じゃろう！」

「そんなこと、言われるまでもないぞ！」

「あんたが委員をやればいいんじゃなかろうかね！」笑いが聞こえる・・・

　ＢＧＭ（静かな夜明け）

N「こうして新しい発想で始まった村内の公共事業は活気に満ち溢れて行き、合わせて村人の防災意識を変えていったのです。」

村人Ｅ「自分たちの村じゃけ、自分たちが力を合わせてやろういね！」

　ＢＧＭ引く

トラックや三輪車が土煙をあげて走る様子。トラックの警笛、三輪車のエンジン音。　ノイズを小さく残して

現場監督「とても手が足りん！女子でもいい、上方仕事に出てくれんかのう」

　活気のある井戸端会議の喧噪。

「どうしようかね、協力しましょうよ」

「そうだね」

「出なきゃいけんじゃろう」

　アドリブ　以下女性の声

「皆で応援ましょう！今年の台風に間に合わせましょういね！」

「村の為、いい仕事じゃ。行きましょう」

「農閑期じゃから、働けば良い収入になりますいね」

「あなたも行きましょうよ」

「うちも出るよ、村の為じゃ」

「村長さんの三本の矢政策はいいわね。」

「お蔭さまよ！新しい農機具が買えるちゃあね」

村人Ｆ「お金は天下の周りもの、使うてこその値打ちじゃ。大いに買い物をしなさいや」

N「村は活気に満ちて、村長の人気は日増しに高まっていきました。しかし、ここにひとつの大きな落とし穴があったことを、村人が間もなく知ることになるのです。」

　ＢＧＭ（ベートーベン、第九交響曲、運命、入れる）

ラジオのニュース

「臨時ニュースを申し上げます。昨夜石田村の公共工事事業費を水増し請求し詐取した疑いで、警察はＳ土建会社社長夫妻を逮捕しました。佐波川堤防の全面改修、橋りょう補修工事を一昨年から受注、工事の手抜きも多数発覚しており県警で容疑が固まり逮捕に至ったとみられます」

　更にニュースは続く。ＢＧＭ小さく

「Ｓ土建会社の家宅捜査で村長の妻が会社に設立資金を提供していた事実が判明しました。その提供資金は十万円と言われています。」

　ＢＧＭ引く

井戸端会議風景。水の音。釣瓶音入る

女性の声Ａ「村長の奥さんがねえ！新聞にも大きく出ちょるいね」

女性の声Ｂ「あの詐欺をした会社の株主じゃって！」

女性の声Ａ「株主どころか会社の発起人になっちょられる。これは怪しいんじゃなかろうかいね」

女性の声Ｃ「奥さんは、なんぼ会社から貰うちょってんかねえ」

女性の声Ｂ「これは法律上特に問題はない。と新聞には書いてあるがね・・」

女性の声C「指名業者の選定に不正があったのではないかとも書いてあるよ」

N「この不幸な事件は桜のお花見時期に村中を吹き荒れて、村議会も連日紛糾しています。」

議会場のノイズ入る

野党議員甲「議長！これは重大だ！S社長夫妻を参考人に呼んでくれ！」

BGM（暗く・・）

N「参考人に呼ぶ間もなく、仮釈放されたS土建社長、夫妻が報道陣を前に語りました」

BGM引く

三秒の間を置く

S社長「あのな、十万円は村長のご意向で奥様が設立資金をお持ちになりましてん。会社設立の応援をしてもろたわけよ！当社のために！すべて村長もご承知の筈やで・・」

S社長の妻「奥様とはエライ親しくして頂いたわよ。夕食会や中央の政治家様のパーティにも度々出て頂いたわよ！」

N「このコメントを聴いた報道陣は一斉に村長宅へ押しかけたのです」

カメラシャッター音連続。ざわつく記者連中。

記者「村長、ひとことお願いします。」

村長「わたしはこれらの話を全く知らなかったのです」

記者「奥様は認めておられますが」

村長「そのことを知らないし、わたしは妻から何も聞いていないのです」

記者「聴いてないでは、村人は納得できないと思いますよ。工事の発注に忖度があったのではありませんか？」

村長「資金提供は知らなかったし、一切の忖度はありませんよ」

N「村会議場です。野党議員が興奮して質問を繰り返しています」

議場の背景音

野党議員「村長！それは詭弁だ！指名業者に指定するためにあんたは指名委員会にどんな工作をしたのか！真実を述べてくれませんか！」

村長「知らないし忖度はありません」

野党議員「S社から政治献金をいくら貰ったのか！」

村長「貰っていません」

机を叩く音

野党議員「いつから関係を持ったのか！村の指名企業としてS社の存在を知ったのはいつですか？」

村長「S社が指名業者になったことを知ったのは、「土木建設業者指名委員会」の決定を受けて、委員長から指名の理由を聞き私がこれに調印する時、初めて知りました。」

野党議員「双方の自宅や料亭で詐欺夫婦と何回も食事をしたのではないのですか？」

村長「あのな、十万円は村長のご意向で奥様が設立資金をお持ちになりましてん。会社設立の応援をしてもろたわけよ！当社のために！すべて村長もご承知の筈やで・・」

S社長の妻「奥様とはエライ親しくして頂いたわよ。夕食会や中央の政治家様のパーティにも度々出て頂いたわよ！」

N「このコメントを聴いた報道陣は一斉に村長宅へ押しかけたのです」

カメラシャッター音連続。ざわつく記者連中。

記者「村長、ひとことお願いします。」

村長「わたしはこれらの話を全く知らなかったのです」

女性の声C「指名業者の選定に不正があったのではないかとも書いてあるよ」

N「この不幸な事件は桜のお花見時期に村中を吹き荒れて、村議会も連日紛糾しています。」

議会場のノイズ入る

野党議員甲「議長！これは重大だ！S社長夫妻を参考人に呼んでくれ！」

BGM（暗く・・）

N「参考人に呼ぶ間もなく、仮釈放されたS土建社長、夫妻が報道陣を前に語りました」

BGM引く

三秒の間を置く

S社長「あのな、十万円は村長のご意向で奥様が設立資金をお持ちになりましてん。会社設立の応援をしてもろたわけよ！当社のために！すべて村長もご承知の筈やで・・」

S社長の妻「奥様とはエライ親しくして頂いたわよ。夕食会や中央の政治家様のパーティにも度々出て頂いたわよ！」

N「このコメントを聴いた報道陣は一斉に村長宅へ押しかけたのです」

カメラシャッター音連続。ざわつく記者連中。

記者「村長、ひとことお願いします。」

村長「わたしはこれらの話を全く知らなかったのです」

村長「それはありません。特に委員会にS社を入れることをお願いしたこともないし、私はこれまでS社の社長夫妻と会ったこともないのです！」

机を二度叩く

野党議員「嘘つきだ。村長は！忖度があったことを認めるべきでしょう。S会社の発起人はあなたの奥様ですぞ！」

村長「この事実も知らなかったのです。本当にそれは・知らなかったのだ・・」

「議長！議長！発言をさせてくれ！」

（場内の与党議員が発言を求めている声）

議長「議員の発言を許します」

与党議員「野党のみなさん聞いてください！「一物の是非を見て、而して大本の是非を問わず」これは佐藤一斎翁の教えであります。野党の皆さんは、党利党略だけにこだわって同じことばかりで枝葉末節の議論ばかりではありませんか！

もう、お止めなさい！後世に禍根を残しますぞ！野党の皆さんは大局観を取り戻しなさい！ここまで景気を伸ばしたのは村長の政策、これを推進してきた与党ですぞ！」

N（ナレーター）「天の理より、党の理、この時代から為政の原点が党利党略の方向へ変化していったのでしょうか。」

BGM（哀しいメロディ）

N「村長の妻は悩んでいました。主人が「嘘つき」と呼ばれていることには堪えられない思いをしていました。さらにS社の社長夫妻は自己保身のために次々と関係者の実名をあげて報道陣へ広言するのでした。」

BGM引く

村長の自宅。

鶯の鳴き声が聞こえて来る。

村長「桜が散ると何か心寂しいが・・、素晴らしい鶯のなき声を聴くと救われる気もするね」

鳴き声（美しい連続音）

村長の妻「あなた・・今度のこと、私が本当に不注意でした。勝手なことをしてごめんなさい。あなたに大変な迷惑を懸けてしまいました。私は議会で皆様にお詫びして本当のことをお話ししますわ。」

村長「何も謝ることはないよ。村の為に尽くそうと思う、その心がわたし達の宝物なのだよ。ありがとう・・でも、もう心配しなくていいよ。真実は神様が知っていらっしゃるから・・・」

村長の妻の独白

BGM（バッハ、フーガから選定）

妻の独白（わたしは親戚のM様の紹介で、S社のご夫婦と交際を始め親しくなりました。このことは夫とは無関係なことですから夫は知りません。そのうちにこの村に

工事会社が不足していたことを私は知っていましたから、都会で土木・建設業の実績のあるS会社を応援することが村の為になると考えました。このような不正をする会社だとは露ほども思わなかったのです。お会いした当時は仕事の原点は天下国家の為と語られるご夫妻は人格者だと信じ、不正な行為をする方だとは思っていませんでした。しかし事実は私の意に反した結果になってしまいました。すべて私の不注意、未熟から世間の皆様、関係者様にご迷惑をかけて申し訳ありません

BGM（変わる）

妻の独白（私は夫である村長や息子にも事前に一切言っていません。報告もしていません。それが当然の「妻の努め」だと教えを受けて来ましたから）

N「妻は常に「陰で」主人を支え、「表」に出ない。主人への忠節の為には「阿吽の呼吸」で主人を煩わせることなく世間の義理にも誠を尽くすことが、女性にとって「無二の美徳」とされていました。」

妻の独白（S社長ご夫妻から是非発起人にと言われて何時もの様に私が「主人の名前を書いた儀礼の封筒」に十万円を包んで、持参してS社長に渡しました。勿論発起人の名前は私です）

BGM背後に続いている。

N「この村で育った村長の妻は、具体的な当主の指示は無くても「主人を立てる」ことが「妻の努め」であることを確信して、慣習に従い自然に当主である村長の名前を前面にだす「行動」となっていたのです。これが一般の家庭でも奥ゆかしい「妻の礼儀作法」としてこの土地の慣習として定着していました。」

検事の論告

裁判官の木槌の音が響く。

裁判官「これより石田村公共工事請負詐欺事件の審理を開廷します。検察の論告を認めます」

緊迫した法廷　紙が擦れる音

検察官「S社のS社長夫婦は、村長配偶者甲の親戚、訴外M氏から石田村の土建業者が不足していると言う概ねの話を聴いて、これを千載一隅のチャンスとして夫婦ともに公共事業で利益を得ようと画策し、家族全員が競争の激しい都会から住所を佐波郡石田村に移して株式会社、S土建を立ち上げた。この村もやがて防府市へ吸収合併されることを知っており、M氏の縁で村長の妻へ接近した。この工作は成功して公共工事の指名業者の登録に成功した・・・」

だんだん検事の声は遠のいてくる。

間を取る

N「S会社夫妻の論告、求刑を聴いて間もなく石田村長は決断して記者会見をしたのです。」

カメラのシャッター音、激しく

村長「この度は、わたしの不徳から、多数の村民や村役

場のみなさん、議会の関係者や後援者の方々に多大のご迷惑をかけました。身の潔白は司直にお任せして私は本日をもって辞職をします。将来の村の発展を望む者として、早期に事件の解決を希望します。過去の不幸は帰らじ、将来の村の幸福は無限であります。後継の道を汚すわけには参りません」

パシパシとカメラのシャッター音。

N「潔く村長は辞職をして、今回の騒動を村人に詫びたのでした。」

村長「妻の行為はわれらの村の伝統的な醇風美俗（人情の厚い風俗と言いますが）この教えを継承してきた家庭で育ったことも妻が詐欺事件に巻き込まれた一因となったのだろうとも思います。」

更にパシパシとカメラのシャッター音

N「S土建会社は架空の資材、労務費を計上して計画的に村の助役からこれを支出させ、継続的にこれを詐取したことが立証されました。詐欺罪の併合罪として業務上横領、脱税で罪を認めたのです。合わせて容疑を受けた村長の妻は法的にも倫理的にも無関係が立証されたのです。」

BGM（爽やかな音楽に変わる）

美しい小鳥の鳴き声が遠くから聞こえてくる。

N「禽獣にも劣る詐欺師の夫婦」と報道は一変してS社夫妻を、様々に批判しました。新聞は大見出しでS土建の夫婦を非難のタイトルを付けて報道していましたが、すでに辞職を決断した村長には虚しく映る猿芝居に見えたのではないでしょうか」

村人の声「われわれは判断を間違ってしまいました。村長夫妻に謝罪しなければなりませんぞ。」

村人の声「私らはこれまでの村のために尽くされてきた誠意ある村長の人柄を信じるべきだったのではないでしょうか！」

村人女性の声「奥様に謝らにゃいけんね。うち等と育ちかたが違う・・恥ずかしいね」

村人の声「マスコミに踊らされてしもうたのう、みんな反省、反省せよ」

BGM（だんだん大きくそして引く）

田んぼのカエルの鳴き声

伯父の言葉「あの騒動は一体何だったのでしょうか。今になって、多くの村の衆は反省をしちょります。」

村長の妻「わたしの所為で皆さまにご迷惑をお掛けしましたわ。ごめんなさいね、後援会の皆様に・・・」

伯父の言葉「とんでもありません。奥様こそ大変な目に会われて・・・まあ、今夜はゆっくり食事をして、飲んで行ってください」

銚子からトクトクと酒を注ぐ音

村長「ありがとう。頂戴します。」

村長と奥様と伯父が乾杯

伯父「ご苦労様でした。」
村長「・・・過ぎて見れば、あれもこれもわたし等の人生道場だったなあ、日々、良い修行をさせて頂きましたよ、ハッハッハッ」
村長の妻「・・・あっ！ホタル！お父さん！ホタルが来たわ！ホラ！ソコよ！」
村長「ほう！源氏ボタルだな。きれいにひかっているね。・・・」
伯父「田植えの季節がくると、この窓縁にも来てくれて私らを楽しませてくれます」
遠くで河鹿の鳴き声
村長の妻「涼しい風が吹いてくるわ」
（男女子供たちの声）遠くで唄っている
ホーホー、ホタル来い
あっちの水は苦いぞ
こっちの水は甘いよ！
伯父の言葉「當（まこと）にこのご夫妻こそ、爽やかな風のように人の心を和ませてくれるお人柄でした。惜しい人を要職から引退させてしまいました！これはわたし達の村の大きな損失で誠に残念です・・・」
N「日々村長の早すぎる引退を惜しむ声が方々で聞こえてきたのですが。
村長が辞職したあと野党議員が政権を取りましたが、政権に参画した政治家があまりにも経験不足で行政にも未熟なために、政策判断のミスや行政の執行の乱れや遅れが多く、前村長の政策を批判してきただけの経済運営はやがて村の経済を破滅的に沈滞させていったのです。
村には反省と後悔の声が秋の風に乗って忽ち広がっていきましたが・・・」
カラスの鳴き声。3回、4回

ＢＧＭ終了。

（次号へ続く）

これはフィクションです。記載された団体名・人名等は架空のものです。

ロボット雑考（その十一）

三戸岡　道夫

（ＡＩが超人に）

ＡＩ研究で新たな潮流が起きている。
人間が集めた教材を学ぶのではなく、ＡＩが競い合うことで、「独学」で進化する技術の登場である。
囲碁は局面の数が十の三百乗もあり、チェスの十の百二十乗や、将棋の十の二百二十乗と比べても、ケタ違いに多い。このため、先の手をしらみつぶしに計算するのは難しく、これまでコンピューターが人間に勝つには時間がかかると考えられてきた。
転機となったのは、有効とみられる手に絞って、深く調べる手法の考案である。アルファ碁はその局面で有効とみられる手を勝率評価して、さらに先の手まで調べていく手法を採用したからである。プロ棋士の棋譜を深層学習を利用して手を学び、有効とみられる手とプロ棋士の手との一致率を高めることで、強くなったのである。二〇一七年一月の改良版の「マスター」はさらに強く、トップ棋士たちに六十連勝した。
囲碁ＡＩ「アルファ碁ゼロ」は、自己対局を繰り返すことで最強になったのである。二種類にＡＩがだまし合いながら上達する手法も登場し、研究が活発になっている。まだ限られた分野であるが、何も知らない赤ん坊が、短期間で超人に成長するＡＩが実現し始めたのである。

（人間の知識なしで囲碁を極める）

米グーグルの持ち株会社アルファベット傘下の英ディープマインドが、二〇一七年十月に、英科学誌ネイチャーにこんな論文を投稿した。
新たに開発したアルファ碁ゼロは、世界トップ棋士韓

国の李世乭（イ・セドル）九段に勝ったアルファ碁と、百局戦い、無敗であった。また世界最強といわれる中国の柯潔（かけつ）九段を圧倒した「アルファ碁マスター」にも、大きく勝ち越した。

研究者たちを驚かせたのは、コンピューターに基本ルールを授けただけで、独学で上達し、アルファ碁の先輩たちをしのいだことである。

従来のアルファ碁は、大量のデーターから特徴を自ら見つける「深層学習（ディープラーニング）」を土台としていた。

高段者の棋譜を画像として読みこみ、プロの状況判断や打ち方などを学んだ。その後、ＡＩ同士の対局をくり返すことで、腕を上げていった。

これに対し、ゼロはいきなり自己対局を始める。最初の頃は、めちゃくちゃな手を打ち合っていたが、よい手を模索しながら、急激に上達した。石を囲いこむ領土などの概念を獲得したほか、基本的な打ち方のパターンとされる定石の多くに、自力でたどりついた。自己対局が四九〇万回に達した三日後には、アルファ碁を圧倒するほどの腕前になった。

従来のアルファ碁は、プロ棋士の手とよく似ているほど強くなった。一方、ゼロは手がプロの手とあまり一致していなくても強く、人間が思いつかなった定石も発見した。プロ棋士を参考にしなくても、ＡＩが試行錯誤しながら強くなれることを証明した。

しかし、やみくもに対局を重ねているわけではない。まっさらな状態から学ばせる様々な工夫がある。たとえば、

（直感的に有効そうな手を選ぶ）

（現時点の局面の勝率を評価する）

やり方を、より確かな解決を導き出すためで、多くの対局を重ねると、どんな手だと勝てるのか、傾向が見えてくる。二万五千回の自己対局を終えるごとに振り返り、勝率評価法や打ち方を改良した。

従来は次の一手を探す機能と、形勢を判断する機能の、それぞれについて人の脳をまねたニューラルネットワーク（神経回路網）で学ばせた。ゼロは、二つのニュラルネットを統合することで、より的確で安定した学習が可能になったという。

深層学習によって、ＡＩは大量のデーターの中から専門家のノウハウを自力で獲得し、さらにプロが気づかない特徴を見つけ出すまでになった。ゼロの登場で学習に欠かせないデーターが足りない分野でも、ＡＩを活用できる可能性が拡がった。

ディープマインドはさらに改良して、将棋やチェスにも応用した、ＡＩ「アルファゼロ」を開発。将棋、チェス、囲碁のいずれでも、世界最強のソフトを超えた。

ＡＩ同士が競いあって進化させる研究は、他にもある。

最も注目を集めるのは、グーグルの研究者イアン・グッドフェロー氏が、二〇一四年に提唱した、

（敵対的生成ネットワーク）

である。アルファ碁とは違い、二つのＡＩにはそれぞれ役目がある。片方は画像を作る贋作者で、もう一方は本物がどうかを見分ける鑑定士の役目である。

たとえば猫の場合、贋作者役のＡＩが作った画像を鑑定士役が判定する。その結果から、贋作者はどうすれば猫に近づくのかを学ぶ。鑑定士役は多くの画像を見ることで判断する材料が集まり、見分ける能力が向上する。こうした作業を繰り返し、本物の猫に似た画像を作るようになる。

この技術を応用し、ＡＩのミスを指摘して修正するＡＩに研究も、米国で進んでいる。新しい洋服のデザインを作ることなどに応用できる。将来は自動運転のためのシュミレーションなどに使える可能性がある。

昔のＡＩは人間の助けが必要だった。それが大量のデーターがあれば、自ら学ぶようになり、今は人の手もデーターも不可欠ではなくなった。ＡＩはどこまで進化するのか、予測は難しい。

（量子コンピューターの開発）

世界的な量子コンピューターの開発競争が進むなか、経済産業省は二〇一八年度から、国内での量子コンピューターの専門人材の発掘支援を強化する。専用のソフトウェアなどを開発できる人材を、年令などを問わずに広く募集する。そしてその人材のアイデアを実現するために、必要な研究開発費や、専門人材などを提供する。

経産省と情報処理推進機構（ＩＰＡ）による「未踏ＩＴ人材発掘育成事業」を二〇一八年度から拡充し、新たに量子コンピューター関連の支援枠を作る。

量子コンピューターは、「0か1」かの、どちらかしか表せない従来のコンピューターと異なり、「0と1」を同時に表わすことで、高度な並列計算を可能にする、高度技術である。大きく二つの方式があり、このうち一つは東京工業大学の西森秀稔教授が提唱した「量子アニーリング」である。

膨大な選択肢から最適な解を求める作業に強く、医薬品に使える物質の探索などへの応用が期待されている。二〇一〇年にカナダのＤウェーブ・システムズが世界初の商用機を発表し、米グーグルと米航空宇宙局（ＮＡＳＡ）が試験運用した結果、分野によっては従来よりも一億倍近く早い計算ができることが、わかってきた。

日本の国内でも、二〇一七年十一月に、国立情報研究所とＮＴＴがはじめて国産機の共同開発に成功したと公表し、実用化に向けた動きが徐々に出てきている。

（量子コンピューターの登場）

スーパーコンピューターの能力を大きく上回る量子コンピューターが、ＡＩの可能性を格段に広げようとしている。

ＡＩは膨大なデーターをもとに、学んだり、分析したりする。そのスピードや正確性の向上を、量子コンピューターが狙うのである。

通常のコンピューターは「０」と「１」からなる、二進法をとる。２ビットなら、00、01、10、11と、四通りの計算を一つづつ、こなす。

量子コンピューターは、電子など微小な領域で起きる現象を説明する、「量子力学」の原理を使うのである。「０」と「１」どちらでもある「重ね合わせ」と呼ぶ現象を利用し、たとえば十億通り以上の計算でも、一度で済ませられるのである。したがってスーパーコンピューターで千年かかる計算も、数分で終わるのである。

ＡＩの機械学習は、データーの規則性などをもとに判断をくだすが、厳密な答えを出せない場合もある。量子コンピューターは無数の情報を、まとめて計算できる。ＡＩが扱う非定型の膨大なデーターを、どう組み合わせれば最適化できるか、といった計算に適しており、不可能な計算や分析が、できるようになると期待されている。

開発で先行するのは、マイクロソフト（ＭＳ）や、グーグル、ＩＢＭといった、アメリカ情報技術の大手である。量子コンピューターが実用化すれば、これまで解決できなかった問題が、解決できるようになる。

ＡＩの研究において、日本は世界で勝ち抜くことができるであろうか。

現在は第三次ＡＩブームとされている。これまでは人間が機械に、ものの考え方や知識を教えこんだ。その場合、課題に対し既存の考えた方がうまく当てはまれば、動作したが、人間にとって都合のよい課題はなかなか現れないし、知識を教えるのに膨大なコストがかかった。

しかし最近はプログラムを作る作業を、すべて機械にやらせることにした。すなわち機械学習である。ＡＩ研究とは、データーからプログラム作成の変換方法の研究である。

ＡＩの研究が進むと、新たな産業革命が起き、さまざまな社会課題が解決される。そしてもっと研究が進むと、データーに頼らず、自分で発想できるＡＩも生れてくる。

今は過去のデーター通りに動くが、人間のように、これまで直面したことがない場面でも、自分で対策を考えられるようになる。

ＡＩは人間を補助するものである。人間の仕事を奪い、人間に取って代わるものではない。車や飛行機のおかげで、人間はより速く、より遠くへ、移動できるようになった。ＡＩも人間の思考を奪うのではなく、より幅広く考

えられるように、人間を助けるのである。

そして二〇三〇年頃には、あらゆるものにＡＩが組みこまれているであろう。そしてＡＩ同士が交渉し、折り合いをつけながら行動する時代になるであろう。車でも単純にぶつからないようにするのではなく、互に譲り合うようにもなるであろう。ＡＩが人間の感性を理解するようになれば、芸術やマーケティングの世界も、変ってくるであろう。

ＡＩの研究はデーターが起点となるため、データーを持つ様々なメーカーと組んだり、研究に協力的な国や地域を探したりして対応する。また研究人材の確保も必要である。大企業だけでなく、ベンチャーからも引き合いが強い。大学や研究機関と連携し、優秀な人材には、より自由に研究させている。海外の大学からも優秀な学生や研究者を、積極的に招くべきである。

なお、技術が実現されても、倫理的、法的、社会的に、世の中に受け入れられるかどうかも重要である。従って理系関係の人材だけでなく、経営や法律分野の人材も関わっていく必要がある。

（ＡＩの利益の配分）

ＡＩの生み出す利益や、利用権限は、誰のものなのか、という問題がある。ＡＩの研究はもはやこのような点までも問題にしなくてはならない所まで、進んできてしまったのである。ビックデーターを提供してＡＩを利用する企業と、ＡＩを開発した企業とで、利益をどうするのかについては、まだ明確な決め方が定っていないのである。

ＡＩを安心して使える環境作りが不可欠であるので、経済産業省では二〇一八年三月に、契約のひな型となる指針を作る。

そのために経済産業省の有識者検討会が、大手企業の事例をもとに、法的課題を洗い出し始めた。しかしＡＩを巡る契約は、参考になる裁判例はほとんどなく、今は企業が手探りで進めている。契約を作るのに半年近くもかかる場合があり、企業間の力関係で契約内容が決まるケースもある。

日本はベンチャーにＡＩ開発を委託することが多い。伝統的な委託契約の場合、利用権限から知的財産まで、発注側のものになる、買い切り契約も少なくない。ＡＩでは開発側のノウハウが重要なこともあり、新たな契約実務の確立を求める声が強かった。

指針づくりの焦点は、ＡＩの利用権限と利益の配分である。たとえば金融関係がＡＩを使って、顧客ごとに最適な金融商品をつくるため、ＡＩ開発企業に顧客データーを渡し、開発を委託したとする。データーを提供した金融機関は、ＡＩの利用権や、サービスが生んだ利益

の、独占を望むであろう。しかし独自のノウハウを注ぎ込んだ開発側も、分け前を求める権利を主張できる。

指針では、配分を決める時に考慮する要素を示す。開発費用の負担割合や提出されたデーターの希少性、開発技術の独自性などを想定している。

データーを学習して賢くなったＡＩの利用権を、開発企業とデーター提供企業の、どちらが持つのかも、議論になる。開発企業がＡＩを特許化し、他の企業に提供する場合などがある。指針では、データー提供企業がそのＡＩを廉価なライセンス料で使えるようにするなど、開発側に配慮を求める方向である。

もう一つの焦点は、責任関係の整理である。ＡＩを搭載した機械が原因で、事故が起きたようなケースである。欠陥がＡＩや機械の仕組みにあったのか、詠み込んだデーターに間違いがあったのかで、責任関係は異なる。

アメリカでは地図情報を巡り、航空図データーの誤りが原因の航空事故で、地図メーカーの責任が認められた例がある。ただ日米ともに、「情報の欠陥」に関する法律的な考え方は、確立されていない。

指針ではデーター提供企業の品質保証や、ＡＩの正常な作動を開発企業が保証する、稼働保障のあり方を整理。立証責任の分担方法、現在の技術で欠陥を予測できない場合に免責されるかも詰める。

ただ実際には、事故原因を特定しきれない例が、増えることも予想される。企業間で事前に原因究明に向けて協力する義務や、損害賠償保険への加入なども、指針に盛りこむ方針である。

（ＡＩ学会で人材争奪戦）

ＡＩへの対応が企業競争となる中で、世界での人材の取り合いが激化している。

二〇一七年十二月にロサンゼルスＡＩ学会「ＮＩＰＳ」（ニューラル・インフォメーション・プロセッシング・システムズ）が開かれた。

三十一年目を迎えたＮＩＰＳは機械学習の分野で、世界最高峰の学会として知られる。研究者は論文発表の機会が与えられることで、ＡＩの世界で一流と見なされる。本来は研究者の祭典であるが、最近はＡＩへの取り組みをアピールしたい欧米の大手ＩＴ（情報技術）企業が、出展意欲を強めている。

ここ数年で、ＡＩは自動運転や高度医療など、幅広い産業に欠かせなくなり、並行してＮＩＰＳにも技術者や学生の参加者が増えた。二〇一七年は八千人弱と、七年前に比べると六倍になっている。不足する人材を開いこむ場として各社が目を付け、七十社以上がブースを出した。しかし日本の企業はあまり熱心ではない。一方、中国ライドシェア大手の滴滴出行や電子商取引大手のアリ

ババ集団、韓国ネット大手のネイバーは、目立つ場所にブースを構えた。そして世界中から集まる博士課程の学生の中から最優秀層を見つけ、採用に持ち込むのである。

ＡＩ技術者は世界でも数十万人規模で、不足しているといわれる。コンピューターサイエンスや統計学を学んだ学生が、開発者予備軍である。企業はプログラミング言語や、データー分析にたけた人材を集め、育てながら、ＡＩ開発の組織を広げている。

グーグルなど資金力のある大手企業は、優秀な学生には好条件を次々に提示している。

中韓企業の攻勢もすさまじく、滴滴の担当者は、

「世界の人材を取る気でＮＩＰＳに来た。グローバル化を進める上で、中国市場の人材にだけ頼っていたのでは、生き残れない」

と言っている。ネイバーの担当者も、

「国籍や年令は関係ない。ＡＩのプラットホームを作る能力のある人なら大歓迎だ」

と言っている。

学会期間中の夜は、招待者限定でパーティーが開かれるが、そうした場に日本企業が不在であるので、ＡＩ分野で日本パッシングが起きる懸念がある。「ＡＩ分野で日本企業が先端を行くイメージはない。この会場に居ないことで日本が失うものは大きい」という声もある。

もちろん日本でもＡＩを活用しようとする経営者はふえている。二〇一八年のＮＩＰＳは、ＡＩの隆盛で知られるカナダのモントリオールで開かれる。日本の動向はどうなるであろうか。

（ＡＩ活用への提言）

アメリカ戦略国際問題研究所（ＣＳＩＳ）と日本経済新聞社とが共同で設立した、日経・ＣＳＩＳバーチャル・シンクタンクは、ＡＩやブロックチェーンといったＩＴ（情報技術）の急速な進歩普及を踏まえ、政策提言、「次世代ＩＴに適合した最適社会の実現に向けて」をまとめた。世界で加速する技術開発競争で日本が優位に立ち、その成果を国民が享受できる社会の実現が急務であると強調した。

そのためには研究開発を促すだけでなく、新技術の受け入れに向けて、社会制度や法体系も一体的に見直す必要がある。それをまとめると、次の五つの提言となる。

㈠将来の不確実を低減して企業の技術開発を促すため、ガイドラインの策定や法体系の見直しといった制度構築を急ぐ

㈡個人情報保護などを担保しつつ、ビックデーターの収集利用拡大にむけた環境整備で、産官学が連携を強化する。

㈢先端技術を活用した財・サービス・労働などのモ

ジュール化で、効率性が高まるよう、産業構造や雇用制度の転換を促進する

㈣生産性向上を阻害する一因となっている対面・書面規制および同様の社会慣習をゼロベースで見直す。

㈤すべての労働者が次世代ＩＴ普及の恩恵を受け、適切な職につけるよう「リカレント教育」を推進するとともに、意識改革を促す

日本は二〇三〇年には非生産年令人口が、全人口の四割を超え、労働力不足が一段と深刻化すると予想されている。したがって技術革新による生産性の向上は不可欠であり、特に「ＡＩロボットに関する制度基盤の構築」が必要である。

アメリカやドイツ、中国などに比べて日本は、次世代ＩＴの研究開発を促す環境に恵まれているとはいえない。その一因として、企業への「開発萎縮効果」をあげることができる。学習済みＡＩの知的財産権の帰属や、ロボットが損害を与えた場合の製造者と利用者の責任の切り分けといった新たな問題に、現在の法規制や制度は十分に対応できていない。企業はそうした不確実性を嫌い、開発をちゅうしょしていると考えられる。

これを回避するために、ＡＩやロボットでも、自律化レベルの検討と、それに基づく制度的な課題や責任分担のあり方を、多様なステークホルダーが議論する枠組みを、構築すべきではあるまいか。政府や社長が新技術のもたらしうるリスクをあらかじめ認識し、制度に組み込んでおく必要がある。

急速に進化するＡＩの開発では、ビックデーターの収集、活用が、カギを握る。あらゆるモノがネットにつながるＩＯＴの普及で、データー量が爆発的に増えると予想され、他社が持つデーターや公的データーを使うことで、新たな価値を創造しやすくなる。

個人情報ではプライバシーの配慮が欠かせないことは、言うまでもない。このため匿名加工情報など、改正個人情報保護法により定められた仕組みを尊重しつつ、データー規格の標準化やデーター流通の基盤整備を急ぐ必要がある。また公的機関が保有するデーターのオープン化を含め、産官学の連携を強化すべきである。併せて、データーの入り口となるセンサー類などのハードウェアや、効率的なやり取りに不可欠な、次世代高速通信規格「５Ｇ」といったネットワークについても、技術開発を加速する必要がある。

ＡＩやＩＯＴの進展が「第四次産業革命」と言われるのは、現在の産業構造や消費行動を、根底から覆す可能性を秘めているからである。次世代ＩＴの活用で、財やサービス、労働までを、最小限の単位でモジュール化する動きが加速すれば、取引コストの低減など、効率性の一段の向上が期待できる。半面、たとえば従来はモノとしての価値を持っていた自動車が、移動というサービスを提供する際の一モジュールに変わる可能性もある。消費者の行動も、「所有から利用」へと、さらにシフトしていくであろう。雇用面でも、必要なスキルを持つ人材を、労働力市場から敵宜調達する形態に拡っていくことも考えられる。

このため今後は「モジュール化による効率性向上」を目標にあげて、企業は自社製品を取り巻く環境変化を冷静に分析し、事業プロセスを再構築しなくてはならない。政府においても、「働き方改革」や「スキルを持った人材の再配置」の支援などの法令や制度面で、効率的な社会の実現を後押しなくてはならない。

ＡＩロボットと労働者との関係では、「人間の仕事がロボットに奪われる」という問題が指摘されている。もちろん、すべての労働が置き換わるわけではないが、予想以上の速さと範囲で労働者が職を失ったり、ＡＩを利用できずに生産性向上を阻害したりすることは十分起こりうる。そこで、

「高等教育におけるＡＩ専門家の育成」

と、現役世代にＡＩの生活方法を学び直してもらう。

「リカレント教育」

が、急務である。とくに、リカレント教育では、①専門機関の設立、②すべての労働者に対する学習機会の設立、③受講者への仕事にあっせん、が必要である。そして現役世代に対しても、従来の仕事のやり方に安住せず、ＩＴ化を前提に意識改革を進めることが必要である。

「用語解説」

（第四産業革命）

あらゆるモノがネットにつながる「ＩＯＴ」や、人工知能（ＡＩ）などの技術革新がもたらす、産業の大転換を指す。十八世紀末以降の蒸気機関の普及、二十世紀初頭に石油や電力が可能にした大量生産、二十世紀後半のコンピューターやインターネットの普及につづく、一大変化となる。

ＩＯＴやＡＩは、世界共通のインフラであるネットを基盤とする。蓄積されたビックデーターを詳細に解析することで、新たな製品やサービスを開発したり、生産性を極限まで高めたりできると期待される。経済だけなく、人々の暮らしも大きく変えるとみられ、日本政府は第四次産業革命によって実現する社会を「ソサエティー５・０」と位置付け、推進に力を入れている。

（次世代高速通信規格「５Ｇ」）

従来よりはるかに大容量のデーターを瞬時にやりとりできる、次世代の移動通信技術を指す。携帯電話が普及し始めた一九八〇年代から数えて、第五世代の技術革新に当たるため、五Ｇと呼ばれている。通信速度は八十年

代の約百万倍、現行の第四世代（４Ｇ）とくらべても、百倍程度に上がっている。

国内ではＮＴＴドコモなど通信各社が二〇二〇年からサービスを始める計画である。

同年の東京五輪・パラリンピックでは、中継映像をさまざまな角度から見られるなど、観戦の臨場感が増しそうである。また多くの車や人の情報を同時に伝えることができ、自動運転の普及を後押しするとも期待される。同じ端末を世界のどこでも使えるようにするため、国際規格の統一などが課題である。

（官民データー活用推進基本法）

国や自治体、企業が持つデーターを、活用していくための基本的な理念を示しており、二〇一六年十二月に施行された。官民の情報を活用して豊かな社会を目指すこと、無駄のない効率的な政策を進めること、国民の権利や国の安全性を保つことなどがうたわれている。

同法に基づき、二〇一七年五月には政府が「官民データー活用推進基本計画」をまとめた。電子行政や健康、医療、介護、観光、金融など、八分野を重点分野に指定。行政手続きのオンライン化や、人材育成も進める。背景には、グーグル、アップルなど、アメリカＩＴ大手への個人情報の集中がある。このままでは日本の競争力が失われるとの危機感が、法整備とデーター活用を後押している。

（改正個人情報保護法）

二〇一七年五月に施行された。誰の情報かを特定できないよう「匿名加工」すれば、企業は本人の同意なしに個人のデーターを活用できるようになった。たとえば消費者がどの商品をどのくらいの頻度で買ったかという情報を、通信販売会社がメーカーに提供することなどができる。

どこまで匿名にすればいいかについて、国は、名前や住所、生年月日、性別を削除するといった基準を示している。しかし匿名加工時の具体的判断は企業に委ねており、企業は利用に慎重である。また日本では個人情報に関して、自治体の条例なども含め、無数の保護規定がある。「個人情報保護法制二〇〇〇国問題」といわれた、個人情報活用のハードルはなお高い。

（ＡＩ予算一〇〇〇億円超）

日本政府は、自動走行時や高性能ロボットなどの頭脳にあたるＡＩの関連予算として、平成二十九年度補正予算案と三十年度と当初予算案の合計で、一千億円超を確保することで調整に入った。「第四次産業革命」とも呼ばれるＡＩ分野の技術革新を後押しし、経済成長の起爆剤とする狙いである。

政府は、ＡＩやモノのインターネット（ＩＯＴ）、ロボットなどの新技術を高度に組み合わせ、社会の変革を図る「ソサエティー五・〇」を提唱している。閣議決定の「人づくり革命」「生産性革命」の政策パッケージでも、ＡＩやロボットなどを現場に導入する必要性を強調している。

交通事故の減少や、快適な移動を実現する自動走行車に関し、政府は二十九年度補正予算案で、産学官で研究開発を行う内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム（ＳＩＰ）に、二二五億円を計上する。

またロボットなどに搭載するＡＩには、人間の目や脳に近い高性能のカメラやセンサーを導入する必要があるため、膨大な情報を高速で処理するＡＩ用半導体（チップ）の開発が不可欠だと判断。三十年度予算案で新たにＡＩ半導体の開発費として一〇〇億円超を、ロボット向け中核技術の開発費として、前年度比一〇億円増の五五億円超を盛り込む。経済産業省が所管する新エネルギー・産業技術統合開発機構（ＮＥＤＯ）を通じて、民間企業や研究機関などに資金を提供する。

さらに、重点的な研究開発分野を決めて資金を配分する事実上の司令塔「官民研究開発投資拡大プログラム（ＰＲＩＳＭ）」を新たに始め、三十年度予算案に一〇〇億円を盛り込む。

ＡＩ分野は技術的に先行すれば、大きな果実を享受できるので、アメリカや中国などが力を入れており、日本も国際競争力の強化を図る。

（ＡＩをめぐるアメリカと中国）

六十年前、ソ連が世界初の人工衛星「スプートニク」を打ち上げて、世界を驚かせた。

この時、トランプ米大統領は十一歳の少年だった。ソ連の優位性を見せつけられたアメリカは衝撃を受け、科学技術開発にソ連を上回る予算を注ぎこんだ。そのことがやがて、インターネットや全地球測位システム（ＧＰＳ）を生み出すことにつながった。

中国が二〇一七年七月に、二〇三〇年までに、世界のＡＩ産業でトップに立つという計画を明らかにした。ＡＩに懸ける中国の野望は、長期的はアメリカの安全保障にとって、重大な脅威となる。

ロシアのプーチン大統領は二〇一七年九月に、

「誰であれ、ＡＩの分野でリーダーになった者が、世界の支配者になる」

と発言した。

これは、前記の中国政府が二〇一七年七月に、ＡＩの分野で二〇二〇年までに米国と肩を並べ、二〇二五年までに追い越し、その五年後には世界のＡＩ産業を支配するとの、長期計画を発表したことを受けた発言だった。

米国の先端をいく技術者たちは、中国は野望を恐らく実現するであろうと見ている。

中国の習近平国家主席は、テレビで中国がＡＩで優位に立つことは戦略的目標だと語ったが、トランプ大統領は米国の大志について語ったことはない。しかし彼の予算案を見れば、何を考えているかが分かる。米国の情報システムに投じる公的資金を十一パーセント減らし、連邦政府全体の研究開発費を二十パーセント削減したいと考えている。

同様にトランプ大統領は、合法的に流入する移民数も半減したいと考えている。

これは世界最高峰の研究者を集めてきた米国の力に、大打撃を与えるであろう。有能な研究者には、永住権を与える方が、はるかに理にかなっている。グーグルが主催するプログラミングのコンテストでも、中国人学生が優勝することが多い。

米国はトランプの近視眼的な思考を乗り越えて、ＡＩの優位を維持できるであろうか。それは十分にあり得ることである。米国のＩＴ（情報技術）大手は、今なお世界をリードしている。しかし中国との差は縮まりつつある。

中国には強みが二つある。オンラインで決済されている経済の規模が、米国より大きいのである。世界の電子商取引の四十パーセントが中国国内でなされており、その大半はアリババ集団、騰訊控股（テンセント）、百度（バイドウ）という、中国ＩＴ大手三社経由の取引である。これら大手は、取引を通じて入手した膨大なデーターを、法的な制限をほぼ受けずに、好きなように扱える。

中国のＩＴは規模も圧倒的に大きい。騰訊の時価総額は五千億ドル（約五十六兆円）を突破し、その後、米フェイスブックをも抜いた。オンライン決済や画像認識、音声ソフトウェアなど、一部の分野では、中国のＩＴ各社は、すでに米シリコンバレーのライバル企業を抜いている。自動運転技術でも猛スピードで米国に追いつきつつある。こうした技術は、ほぼすべて軍事目的に転用可能である。ＡＩを使い、大量のドローン編隊を組めば、兵器にもなる。

中国の第二の強みは、官民が一体化している点である。自由主義経済からは欠点に見えるかもしれないが、かつてシリコンバレーの興隆は、アイゼンハワー大統領が莫大な資金を投入したことが大きいのである。中国政府も同様にＡＩディープラーニング技術で卓越した立場を確保しようと、助成金を投入しているのである。

しかも中国のデジタル分野はますます自己完結しつつある。マイクロプロセッサーだけは、今なお米国がリードしているが、ほとんどの電子機器は中国内で生産しているため、世界のサプライチェーンに何か問題が起きても、影響を受けにくくなっている。かりに世界で貿易戦争が発生しても、中国はさほど影響を受けずに、ＡＩ開発を推進できるだろう。

今日、アメリカは世界の技術を主導する立場にある。しかしトランプが操縦席に座っている限り、将来はかなり異なった風景になる可能性がある。

機械が拡張する人間の創造性

科学技術者のカスパロフは、同時に史上最強のチェスのプレイヤーであるが、一九九七年に、ＩＢＭのコンピューター「ディープブルー」と対戦して、敗れた。その時すでにコンピューターが、チェスでは人間の上をいったのであり、このような現象は最近囲碁や将棋の世界でも起っている。カスパロスは、

（加速する技術の進歩と比較した場合、人間の時間的尺度と能力が、いかに取るに足らないものなのかがよくわかる）

と言っている。今後ますますＡＩ（人工知能）は発展していくであろうが、その都度人間は、機械に追い抜かれるという強烈な経験を持つであろう。カスパロフも、

「自動化―懸念―最終的な受け入れ」

という循環は、今後も繰り返され、人間と機械の組み合せが最高だと言っている。

そして機械知能は我々をより賢く、健康にしてくれると言い、人と機械とが直接競争するのは、むしろ例外だと言っている。

カスパロフは二十年間、チェスと戦い、今は政治活動に注力しているが、コンピューターの特性や発展、限界や可能性についても、非常に適切に、かつ達観した慧眼を持っているのは、興味深い。

機械の知性は、動物や人間の自然の知性とは、別物である。安易な擬人化は単なる間違いである。

飛行機は鳥のように羽ばたかない。だから鳥より速く飛べる。脳の秘密は未解明のままでも、能力自体は別のやり方で追い抜いていく可能性がある。現在のコンピューターは目的発見や、意味理解ができない。今後、どのようにそれらを機械的にやらせるかが、技術的なポイントである。

カスパロフは、新技術は若い世代とともに成長するし、彼等を信頼するといっている。技術発展の変化の方向性を見いだすことは、とても難かしい。しかし機械の進歩によって、より人間の創造性が拡張されることを、誰もが期待している。

（生物の進化をロボットで解く）

進化ロボット工学とは、ロボットを生物に見立て、生

物が環境に適応する仕組みを生かして、新しいロボットを開発する研究分野である。

機械工学や制御理論、人工知能、生物学など、様々な分野にまたがる知識が必要で、日本の研究は、欧米に比してやや弱い。ここ数年、世界で研究は徐々に活発になってきた。

進化研究の成果を、いかに工学に取り入れていくかが、大きな問題となっている。かつて盛り上った人工生命の研究の際に発展した「遺伝的アルゴリズム」は広く応用されている、成果の一例である。数式で簡単に答えを出せない問題に対し、実験を繰り返した近似的によい答えを出せる特色がある。

長い時間をかけて環境に適応する生物の進化を、ロボットを使って解き明かす研究が出始めた。ロボット開発と生物進化の分野は、一見、関係がなさそうであるが、最先端の研究者には、面白いテーマが潜んでいるらしい。条件を設定して実験を繰り返したり、何世代もかかる変化を短時間で再現したりと、本当の生き物に頼っていてはできない実験が、試みられている。

縦横2・5メートルの枠の中で、四台のネズミ型ロボットが、チョロチョロと動きまわる。それぞれの大きさは22センチメートル、重量は1・75キログラムである。沖縄の大学の実験室であるが、ロボットを使って、生物が子孫を残すためにどんな行動戦略をとるのかを、調べているのである。

ネズミ型ロボットには、二つの行動をするプログラムを組み込んである。複数カ所に充電地点があり、カメラで見つけて接すると、充電し動きつづけられる。もう一つは、ほかのロボットを見つけて赤外線で通信する動作だ。各ロボットがもつ動作を指定する数値をコピーし合う。そのとき充電量の多い方の情報が優先的に残るように設定した。生物に当てはめれば、充電はエサを探す行動、通信は交配す行動といえる。

ロボットが動ける時間は、約十分。つまり一世代を十分で再現した。この実験を数十世代分続けると、充電を重視して交配時に確実に自分の情報を残すタイプと、充電は少なくても交配を重視し、回数を増やして自分の情報を残そうとするタイプの二種類を軸に、個性あるロボットが出現し始めた。これは計算機による模擬実験でも確認できた。

不思議なことに充電重視型を二五パーセント、交配重視型を七五パーセントにした集団が、二種類の交配行動が安定して継続する結果が出た。充電重視型は雌に近く、交配重視型は雄に近い。

（行動戦略の違いから、雌雄の違いが生じる。その前兆現象をとらえたのではないかと、推測される）。

生物学者の方から、ロボットを活用して進化の謎に迫ろうとする研究もある。米バッサー大学のジョン・ロング教授はその代表格である。「進化を探る上で生物は複雑すぎる。動きを単純に再現できるロボットの方が、理解を深めやすい」と言う。

五億年以上前に存在した脊椎動物をまねたカブトガニ風のロボットは、その一例である。センサーで光をとらえたときが餌を食べることに相当し、得点をふやす仕組である。外敵のロボットを事前に見つけて、逃げられれば加点され、捕まった場合、点は増えない。しっぽの形や脊椎の数などが少しずつ違う、複数のロボットを用意し、プールで生存実験をくり返した。

この実験からは、脊椎を増やした方が生き残りに有利な結果が出た。すばやく動けるようになり、エサを見つけ外敵から逃れる能力が高まった。突然変異と自然淘汰による生物の進化は、英国のダーウィンが十九世紀に唱えたが、この仮説をロボット実験で裏付けた。

ロング教授はヒレをもつ水生動物も研究している。太古の海では、首長竜のように四枚のヒレをもつ動物がいたが、現在生き残る水生動物は二枚ヒレが主流である。ヒレが四枚と二枚のロボットで動きを分析すると、加速する能力は四枚の方が高かったが、エネルギー消費は二倍だった。到達する最高速度はヒレの枚数に関係なかった。消費エネルギーが少なく泳げる方が、生存に得策だったと考えられる。

現在では化石でしか見られない生物を模して、どんな要因が進化に影響したのかを調べる研究ができる点も、ロボットを使う利点といえる。

一九八〇年後半、これらと同じように「人工生命」という研究が世界で盛り上がった。計算機の模擬実験を中心に、仮想の生物を作り、さまざまな条件でどのように進化するのかが、熱心に議論された。小型で高性能の計算機がなかったため、成果は理論に偏りがちなり、関心も徐々に薄れていった。計算性能の向上などを背景に再び研究に火が付くところは、最近のＡＩ研究とよく似ている。

ロボットを使った進化の研究は、今後どのように発展していくであろうか。実験できる内容は極めて限られ、進化の研究に参考になる情報も乏しい。二の舞いになる恐れもある。ロボット工学が専門の英ケンブリッジ大学講師は、

「生物進化の仕組みをロボット製造に応用できれば、人が考えつかないような優れたロボットを作れるようになるかもしれない」

と展望する。

（人間が設計しなくても、ロボットが自動的に最適なロボットを作る）―そんな夢をかなえる新技術の研究に挑んでいる。

（つづく）

窮極の特攻兵器（三）

人間魚雷『回天』

千坂精一

一、

仁科關夫は、昭和十七年（一九四二）十一月海軍兵學校七一期生を卒業すると希望どおり潜水學校九期生になり、翌年十月普通科学生の教程を卒えてかねてから熱望していた眞珠灣攻撃で活躍した九軍神搭乗の小型潜水艦特殊潜航艇（甲標的）の搭乗員として呉軍港に隣接する倉橋島の東北端大浦崎にあるP基地に赴任した。

母校のある江田島は目と鼻の先である。

そこで仁科は、すでに研究訓練に励んでいた一年先輩の機關學校五七期出身黒木博司中尉と同室になり、終日即かず離れずの起居を共にすることになる出会いが待っていた。

黒木は大正十年（一九二一）岐阜県益田郡下呂村（下呂市）に生まれ岐阜中學から海軍機關學校へ進学した。

才気煥発の熱血漢で、色白端麗な風貌の黒木は、物静かで寡黙な仁科とは正反対の性格であったが、仁科は二歳年長で一階級上位の黒木の生き様に同調した。

軍隊では先輩になにを言われてもご無理ご尤と服従しなければならない。

海軍では麦飯の数がものをいった。

少尉の分際で中尉に楯突くことはできなかったが、黒木は決して無理難題をふっかける男ではなかった。

黒木は甲標的の艇長としての習練に全力を傾注しながら、眞珠灣では艇が魚雷を制御できずしかも机上計画では艇員は生還の可能性ありとしながらも生還できなかったことを省みて、あれこれ模索したすえに搭乗員の生還を期さないのであれば、魚雷を改造して人間が搭乗して操縦すれば命中率が高まると考えるようになった。

そんなところへ仁科が赴任してきたのである。

黒木はさっそくに仁科に構想を述べて協力を依頼した。

それからの二人は、艇長教育の合間に水中から攻撃する新型兵器の開発構想にのめり込んでいった。

二人は試行錯誤を繰り返し、構想を提起しては駄目出しを重ねているうちに、ふと九三式魚雷に行き着いた。

それはかつて海軍が最高の兵器と誇った魚雷であった。

高圧酸素を原動力とし、直径六一センチ、爆薬量五〇〇キロ、射程五〇ノットで二二、〇〇〇メートル、三六ノットで四〇、〇〇〇メートルという驚異的な兵器であった。

原動力が酸素ということは、単に性能の向上だけではなく、排気ガスが完全に海水に吸収されてしまうので雷跡が視認できない特性があり、米英軍使用の空気魚雷のように接近を認めてから回避するのは不可能であったことから戦艦大和、武蔵に装備されている一八インチ砲とともに艦隊決戦の勝敗の鍵を握る重要な兵器であった。

そんな頼りになる魚雷ではあったが、やがて戦闘が艦船から航空機主力になったので魚雷の活躍する場がなくなってしまい、むしろ魚雷を積載している巡洋艦や駆逐艦が敵機の攻撃を受けて被爆すると九三式魚雷の爆発によって轟沈するおそれがあるので雷装を避けるようになってしまい、いつか兵器庫の奥に眠ってしまっていた。

黒木と仁科はその九三式に目をつけた。

（そうだ、眠っている九三式を改造して人間が搭乗して操縦すれば命中率を高め威力を発揮できるのではないか）

そう考えた。人間魚雷の発想である。

二人はさっそく呉工廠の協力を得て設計に没頭した。

二、

やがて、直径一メートルの九三式魚雷に乗員一名の搭乗席と一メートルの潜望鏡をつけ炸薬一、六トンを搭載する全長一四、五メートルの人間魚雷図が完成した。

航続距離は一〇ノット（時速約一八キロ）で七八キロ、三〇ノット（時速五四キロ）で二三キロである。

基地から目的地近くまで潜水艦の甲板に太い環で固定して運ぶ。搭乗員の潜水艦からの乗り移りは操縦席の下部に昇降口をつけてそこから乗り移る。

人間爆弾桜花の場合は懸吊なので、母機の下部昇降口と桜花の上部昇降口とを結合させたが、人間魚雷の場合は母艦の甲板の乗せるので昇降口は下部になるのだ。

黒木中尉はさっそく完成図に意見書を添えて海軍省軍務局長宛に送ったが、待てど暮らせど返事がなかった。

軍令部へまわった設計図を見た潜水艦長経験者の吉松田守中佐が、

「技術的に優れている」

と評価して推奨したのだが、編成担当の軍務局は、「搭乗員の必死を前提とする兵器は採用できない」考えが強かったので、申請を却下してしまった。

二人は諦めずに再三再四上申したが意見書の送付では一向に埒が明かなかったので、痺れをきらして直接海軍省に出向いてたっての採用を懇願しつづけた。

そのころ戦局は急激に悪化してきて悲報が相次いだ。昭和十八年（一九四三）十一月二十五日、マキン、タラワ両島の守備隊五、四〇〇人が玉砕したことによってマーシャル諸島が危機に晒されることになった。

これまでは敵地内での戦闘であったが、押され押されてサイパン、テニアンのマリアナ諸島からトラック、パラオのカロリン諸島を経てニューギニア南端のモロタイを結ぶ防衛線が脅かされて風雲急を告げていた。

年が明けて二月十七日、突如大機動部隊が前線基地トラック島に襲いかかってきて、二日間の空襲で完膚なきまでに破壊され根拠地機能を完全に喪失してしまった。

このところ敗戦に次ぐ敗戦で熟練搭乗員と多くの新鋭機を喪ってしまい、戦闘も爆撃も成功率が極端に低下してしまっている未熟な搭乗員たちの士気を鼓舞して効率を上げさせるためには、最早爆弾を抱いたまま搭乗機もろとも体当たりさせるよりほかに方法はないと焦燥に駆られた軍令部は短絡的思考に陥ってしまった。

三月に黒木と仁科はそれぞれ大尉と中尉に進級した。

一箇月後の四月四日、軍令部兵器開発軍備担当の第二部長黒島大佐が作戦担当の第一部長中澤大佐に、「作戦上、急速に実現を要望する兵力」を示したなかに、

・一名搭乗のロケット爆弾。
・一名搭乗の魚雷。

があり、これが必死必殺の特攻兵器であった。

海軍省軍務局はこれを兵器として生産を決定した。

人間爆弾（㋐部品）は技術廠で、人間魚雷（㋑兵器）は呉海軍工廠魚雷実験部でそれぞれ試作がはじまった。

試行錯誤の結果、発案者黒木大尉が試乗しての実験も成功して、八月一日に制式採用になった。

㋑の正式名称は、かねてから黒木が提案していた、（天を引回して時勢を一変させ、衰退を盛り返す）期待を込めて主張していた『回天』と決定した。

黒木と仁科は、回天が完成すれば当然率先垂範する覚悟であったが、特攻兵器のなかで発案者自身が搭乗するというのは極く稀なことであったから、それだけ二人は責任感が強かったということである。

七月末に二基の試作が完成し、黒木大尉が搭乗して呉市の音戸の瀬戸の東側情島沖の魚雷発射場で航走試験が行われた結果正式兵器として採用され、呉海軍工廠に急ぎ増産命令が発せられると同時に教育訓練が急がれた。

P基地はもともと開戦時の真珠湾攻撃で名を馳せた甲

標的（特殊潜航艇）蛟龍の基地であるので本格的な教育訓練となると手狭など同居に支障が出てきたので、瀬戸内海の大津島（山口県周南市）に基地を新設した。

同時に海軍省は、すぐさま川棚町（長崎県東彼杵郡）の魚雷訓練所や、霞ヶ浦、奈良などの航空隊に通達して練習生たちのなかから回天要員の募集をはじめた。

通達に即応した多くの予備学生や予科練たちが志願して大津島に集まってきたが、最初の出撃搭乗員はやはりP基地にいた兵學校や機關學校出身の士官、蛟龍乗組員の下士官たちを優先に選抜した。

こうして九月四日、回天特別攻撃隊指揮官に任ぜられた元伊四一潜水艦長板倉光馬少佐が陸路大津島に到着すると、翌五日にはP基地にいた搭乗員たちが呉工廠魚雷実験部長篠原大佐、整備長濵田大尉以下整備員たちとともに海路で到着した。

こうして、大津島での回天特攻訓練がはじまった。

二、

回天を実際に操縦した経験のあるのは発案者の黒木大尉と仁科中尉の両人だけしかいなかったので、まず士官たちのなかから指導官を錬成しなければならかった。

そこで上別府宜紀大尉と樋口孝大尉を指導官に錬成することからはじめることにして、上別府には仁科が、樋口には黒木が同乗して訓練を開始することになった。

その日九月六日は秋晴れの好天であったが、午後から風が出てきて海上には白波が立ちはじめていた。

最初は仁科が同乗する上別府の三号艇であった。

板倉指揮官は海が荒れはじめてきたことを不安がり、

「仁科中尉、大丈夫か」

そう心配して問いかけた。

「大丈夫です。慎重にやります」

そう答えておいて上別府大尉のあとから乗り込んだ。

三号艇は大津島から徳山湾外に出て周防灘に入り、大分県の姫島沖を回って三田尻港（防府市）沖を経て帰ってくる予定の行路を航走して無事にもどってきた。

黒木大尉が駆け寄ってきて、

「どうだった」

逸早く様子が訊きたくて、そう急ぎ込んだ。

「湾から出たら思ったより波が高く、潜行するとき煽られて突っ込んでしまい、冷汗をかきました。今日は中止したほうがいいと思います」

仁科はそう答えて中止を促した。

「莫迦も休み休み言え。俺は機關學校出の専門家だぞ。貴様にできて俺にできないことなんかありはしない」

「しかし、天候が悪化してきております」

「仁科、それくらの時化で出撃できないような回天なら、実戦の役には立たんぞ。大丈夫だ、見ておれ」

熱血漢の黒木は言い出したらあとへ退かないことを承

知している仁科は、それ以上はなにも言わなかった。
だが徳山湾は、ますます波が高くなってきていた。
板倉指揮官も不安に感じて黒木に訓練中止を命じた。
だが黒木は、
「私たちはこれくらいの波で使えないような回天をつくったおぼえはありません。指揮官ぜひやらせて下さい」
そう言って頑として応じなかった。
「では訓練を実施する。ただし徳山湾内に限定する」
板倉指揮官は黒木におされて渋々そう許可した。
黒木は心配顔で立っている仁科に微笑みかけながら、
「心配するな。ではいってくるぞ」
そう言うと、樋口のあとから一号艇に乗り込んだ。
九月六日一八〇〇、黒木、樋口両大尉搭乗の一号艇は、悪天候を衝いて夜間訓練に出港していった。
それから一時間が経った。浮上予定時刻はとっくに過ぎていたが、一号艇は浮上しなかった。最悪の事態が予想され、基地隊員だけでなく付近の漁船も協力して徹夜の捜索が続いたが、ついに発見されなかった。
翌七日早朝、昨夜の時化が嘘のように凪いでいた。
一〇〇〇捜索艇の一隻が海面に気泡を発見した。直ちに潜水夫が海中に潜り、一号艇を確認して引き上げた。
すでに一六時間が経過しているので希望はもてなかったが、しかし万一を慮って急ぎ昇降口を開けてみたのだが、やはり二人はすでに絶命していた。
二人は責任感ある職業軍人らしい遺書を記していた。
その夜仁科は、黒木の遺品を整理しながら死の間際まで書き綴った遺書を食い入るようにして読みつづけた。
「一九—九—六、回天第一號海底突入事故報告、当日一八時一二分、樋口大尉操縦、黒木大尉同乗ノ第一號海底ニ突入セリ　前後ノ狀況及ビ所見次ノ如シ。
一、事前の狀況、當日徳山灣内ニテ樋口大尉ノ回天操縦訓練ニ同乗、一七四〇發射、針路蛇島向首、一八〇〇頃一八〇度取舵。大津島『グレーン』ニ向ケ歸途ノ途中、一八一〇頃ヨリ二〇節(ノット)潜航、調深五米ニ對シ實深一米、前後傾斜D二—三度、時ニハD四—五度トナリシコトアリ。當日第三次操縦訓練同乗者仁科中尉ノ所見ニ波長大ナルトキ、同様二〇節淺深度潜航中俯角大トナリ、一三米迄突込ミタル由ノ報告アリ。之ヲ想起シ十分ニ注意ナシアリシ所、約二分ヲ經過シ、浮上ヲ決意シ操縦者ニ浮上ヲ令セントシテ、傾斜計ヨリ眼を離シ、電動縦舵機等所要個所ニ注目シツツアリシトキ、急激二傾斜大トナルヲ感ゼルヲ以テ、傾斜計ヲ注目セルニ、D一杯トナリアリ、察スルニD一五程度ナラン。直チニ速力ヲ急速低下セシモ、若干時ノ後、猶傾斜ノ戻ル氣配モナシ。此ノ間操縦者ニ探度改調ヲ〇トナスコトヲ命ゼシモ間ニ合ワズ、傾斜計ヲ見ルニD七度深度ハ一八米ナリ。海底ニ突入セルコトヲ知リ直チニ停止ス。突入時衝撃ナシ。

二、應急處置
1、五分間隔ニ主空氣一分間放氣、調壓ヲ一〇〇キロ平方センチトナシ氣泡ヲ大ナラシム。殘壓六〇キロ。
2、縦舵機用操舵空氣ヲ常時絶エザル如ク放氣ス。
3、電動縦舵機ヲ停止ス。
4、海水タンク諸瓣ノ閉鎖ヲ確認ス（前方下ノミ注水シアリ）
5、浸水部ヲ確ム。水防眼鏡ノ〝パッキン〟部ヨリ滴々落下スル外異狀ナシ。
6、電燈異狀ナシ。
7、操室壓力不明（最初讀ミ取リアラズ）
三、事後ノ經過
1、主空氣ノ放氣ハ一八四五ヨリ五分間放氣セントセシ際、一九〇〇ヨリ若干放氣後停止、殘壓三〇キロ前回放氣の前ニ殘ハ圧五〇キロアリテ五分間一〇キロニテ放氣セルモノナリ。
2、操空ノ放氣ハ一九一三、數十回ノ操作ト同様ニシテ操空連絡瓣ヲ稍急激ニ開キシ所異音ヲ發ス。即チ縦舵機函上蓋『パッキン』噴出シ筒内空氣壓急昇ス　耳ニ痛ク感ゼリ、依ッテ直チニ閉鎖爾後放氣不可能。
3、一九二五主空氣放氣セルニ筒内ニ縦舵機函ヨリ噴氣スルヲ以テ短時間ニテ停止。
4、一九四〇頃『スクリュー』音ニヲ聞ク、前者ハ直上ニテ停止セルモノノ如シ。但シ爾後遂ニ何等ノ影響ナシ。爾後種々ノ音響ヲ聞クモ近キ音ナシ。
四、所見
1、波浪大ナルトキ淺深度高速潜航ノ可否ハ実験を要ス。確タル成績ヲ得ルマデ嚴禁ヲ可ト思考ス（若干處置ヲ誤リシハ當所ノ水深ヲ十二米ト判斷シ、實深ヲ知ル能ワザリシニヨル）
2、早急ニ過酸化曹達ヲ準備スベシ。
3、事故ニ備エ用便器ヲ要ス（特ニ筒内冷却ノ爲）
4、實驗ヨリシテ二人乘ハ七時間ヲ限度トス。
5、『ハッチ』啓開ヲ試ミシモ開カズ。
空氣量不足ト思考セラルルニヨリタダイマ（一九五五）ヨリ睡眠ス。
6、陛下ノ艇ヲ沈メ奉リ、就中(六)ニ對シテハ畏クモ陛下ノ御期待大ナリト拝聞致シ奉リ居リ候際、生産思ワシカラズ、シカモ最初ノ實驗者トシテ多少ノ成果ヲ得ツツモ充分ニ後繼者に傳ウルコトヲ得ズシテ殉職スルハ洵ニ不忠中譯ナク慙愧に耐エザル次第ニ候。
7、恩師平泉先生ヲ始メ先輩諸友ニ　生前ノゴ指導ヲ深ク謝シ奉リ候。
8、小官思イ殘ス処更ニナク唯長官、總長、二部長島田少佐等二意見書有之　聊カ微衷御取汲被下度。
9、必死必殺ニ徹スルニアラズンバ而モ飛機ニ於テ早急ニ徹スルニアラズンバ、神洲不滅モ保シ難シト存ジ奉リ候。

10、必ズ神洲擧ッテ明日ヨリ速刻、体當戰法ニ徹スルコトヲ確信シ、神洲不滅ヲ疑ワズ欣ンデ茲ニ豫テ覚悟ノ殉職ヲ致モノニ候。

天皇陛下萬歳
大日本帝国萬歳
帝国陸海軍萬歳

追伸

1、航外燈ヲ設クベキコト。
2、応急『グロー』ヲ設クベキコト。
3、驅水頭部ヲ完備スベキコト。

今回ノ事故ハ小官ノ指導不良ニアリ。何人モ責メラルルコトナク、又コレヲモッテ、(六)ノ訓練ニ聊カノ支障ナカランコトヲ熱願ス。

4、一型ニ於テ海水『タンク』注水及『ブロー』ニ大錯誤アリ、至急研究對策ヲ要ス。片方ブロー出来ズ、注水量不良ナリ。仁科中尉ニ、萬事小生ノ後事ニ關シ武人トシテ恥ナキ様頼ミ候、潜水艦基地隊在隊中ノ（キ四八期）渡邊若クハ權藤大尉ニ連絡ヲ頼ミ候。

御健闘ヲ祈ル。

六、諸士並ニ甲標的諸士ノ御勇健ヲ祈ル

機五一期級友切ニ後事ヲ嘱ス。（終）

（辞世）

男子やも　我が事
ならず　朽ちぬとも
留め置かまじ大和魂

國を思い　死ぬに
死なれぬ益良雄が
友々よびつ死してゆくらん

1、自室紫袋内ノ士規七則ヲ黒木に伝ウ、家郷ニハ戦時中言ウコトナシ意中諒トセラレヨ

父上、母上、兄上、妹御達者ニ

2、血書ハ分配ヲ堅ク御斷リス　但シ一通司令官ニ納メ戴キタシ

人生意気ニ感ズルモノナリ

二二〇〇壁書ス

天皇陛下萬歳
大日本萬歳
帝國海軍　回天萬歳

一九・九・六　二二〇〇

海軍大尉　黒木博司

呼吸苦シク思考ヤヤ不明瞭　手足ヤヤシビレタリ。

○四〇〇　死ヲ決ス　心身爽快ナリ　心ヨリ樋口大尉と萬歳を三唱ス

死せんとす益男子のかなしみは留め護らん魂の空しき

所見萬事ハ急務所見乃至急務請靖ニ在リ同志ノ志希クバ一讀緊急ノ對策アランコトヲ

一九―九―七　○四〇五　絶筆

樋口大尉ノ最後従容トシテ見事ナリ

我又彼ト同ジクセン

○四四五　君が代　齊唱

神洲ノ尊　神洲ノ美　我今疑ワズ　莞爾トシテユク萬歳、○六○○猶二人生存ス　相約シ行ヲ共ニス　萬歳」

読み終えて仁科は泣き崩れた。

涙が止め処なく溢れ、遺書が翳んで見えなくなった。

仁科は、たとえ自分が黒木の性格を解っていたからといってもなぜあのとき強引にでも制止しなかったのか悔いが残った。板倉指揮官にしても仁科と同様で二人は一生黒木の殉職事件を背負ってゆくことになる。

この黒木大尉の遺書は、事故の経緯と応急措置の内容、さらに発案者だからわかる改善の情報を示し、事故の原因は自分の指導のいたらなさだと責任をとっている。

専門家でなければ理解できず、職業軍人でなければ覚悟できない精神状態を縷々と書いているものをなぜ載せたかというと、海底に沈座して最早浮上は敵わず、空気中の酸素がどんどん薄れて呼吸困難になってゆくなかにあって、十二時間も頑張り通してこれだけの文章を書いた黒木大尉の精神力を紹介したくて敢えてこの遺書を参考文献のなかから孫引きさせていただいたのである。

樋口大尉も遺書を書いている。

指揮官への謝罪と、後輩への激励を記したあとに、

「生即死　○四四〇、國歌奉唱ス○四四五、○六○○猶二人生ク、行ヲ共ニセン。

大日本帝國萬歳　○六一〇

十九年九月六日

海軍大尉　樋口孝」

で結んでいる。

黒木と樋口は殉職後ともに少佐に進級した。

四、

仁科は殉職した黒木、樋口両大尉につづけと、その教訓を活かして指導官になった上別府大尉と一緒に猛訓練をつづけて懸命に回天搭乗員の育成につとめた。

十月に入って回天を搭載する第一五潜水隊の伊三六潜、伊三七潜、伊四七潜の準備が完了すると、呉軍港と大津島を往来して回天搭載の総合訓練が開始された。

十月下旬、フィリピン沖海戦に敗れてレイテ島に上陸されてしまったころ、必死の訓練をつづけていた回天十数基がいよいよ出撃可能の状態になった。

回天を搭載する母艦のほうも、準備完了し伊三六潜、伊三七潜、伊四七潜が呉軍港と大津島基地のあいだを往来する潜水艦と魚雷との総合訓練が最後の仕上げに入ってきていた。

十一月はじめ、第六艦隊司令長官三輪茂義中将が大津

島の回天基地を訪れ、
「十一月二十日、ウルシー泊地攻撃」
を命じた。
ウルシーはヤップ島の東一一〇キロ。二九〇平方キロの広大な泊地で一、〇〇〇隻の艦船を収容できるという。
母艦は三隻で、それぞれ回天を四基搭載する。
伊三七潜はパラオ諸島のコッソル水道を、伊三六潜と伊四七潜はウルシー泊地を攻撃することに決定した。
三隻の母艦に一二基搭載された回天に搭乗して出撃する回天隊は、南朝の忠臣楠木正成に因んで、
『回天特別攻撃隊菊水隊』
と命名された。
十一月七日、後方の甲板に軍艦旗をはためかせ、艦橋の側面に白色で菊水の紋所を描いた母艦三隻が四基の回天を搭載し、準備万端整えて出撃のときを待っていた。
その日午後四時、聯合艦隊司令長官から特攻隊員に贈られる短刀の伝達式が行われた。
総員整列した最前列に第一種軍装(冬服)で短剣を吊った正装の青年士官一二名が横列に並んだ。
その前に立った第六艦隊司令長官三輪茂義中将が、
「聯合艦隊司令長官から贈られた短刀を伝達する」
そう述べると、目の前に整列している一人一人の官氏名を呼んで、前へ出てきたそれぞれにみずからの手で錦の袋に納めた短刀一振りをわたした。
往きて還れぬ一人一人と親しく向き合い、見詰め合った三輪長官の心中は如何許りだったことであろうか。
このときの菊水隊一二名はいずれも若い士官で、
上別府宣紀大尉、仁科關夫中尉、吉本健太郎中尉、村上克己中尉、福田齊中尉、豊住和壽中尉、今西太一少尉、宇都宮秀一少尉、佐藤章少尉、近藤和彦少尉、渡邊幸三少尉、工藤義彦少尉であった。
短刀授与式を終えた一二名は当然ながら記念撮影をされてから、私物など身辺整理にとりかかった。
夕刻から士官食堂で壮行の宴が開かれ、彼等は現世への名残りを惜しんで杯を交わした。
そして、十一月八日。出撃の朝を迎えた。
朝食後、回天神社に詣でて必中祈願した一二名は、整列し直立不動で敬礼する基地隊員たちに見送られながら、わが身を冥土へ運ぶ母艦の待つ桟橋へ歩いていった。
このとき仁科中尉は、黒木少佐の分骨を入れた小箱を胸に抱いて、同乗する福田中尉、佐藤少尉、渡邊少尉と一緒に内火艇に乗って母艦の伊四七潜に向かった。
三輪長官は、回天特攻隊員たちの乗艦を待って三母艦を巡視し、別れを惜しむかのように隊員たちにさらなる訓示を与えておいてのちに回天を見てまわり、その頭部を撫でていたという。
そのあと三輪長官は、あらためて隊員一人一人と堅い

握手を交わしておいてから内火艇で大津島へ戻った。
やがて出港用意の喇叭が響き渡ると、各艦は一斉に抜錨して伊三六、伊三七、伊四七の順に出撃していった。
周防灘を横切り豊後水道を抜けると、隊員たちは各艦の艦橋に上って凝と故郷の方角を見詰めつづけていた。
伊三六潜座乗の指揮官揚田司令から、
「各艦作戦命令どおり行動せよ」
の信号が出て、三六潜はウルシー北方へ、伊三七潜はパラオ島のコッソル水道へ、そして仁科ら四人を乗せた伊四七潜はウルシー南方へそれぞれ進路を変えた。
伊四七潜の折田善次艦長は、速力二〇ノットで一路南下させた。
狭い士官室に新品の寝具が持込まれて四人は恐縮した。
仁科は折田艦長に、
「私達が割込んでご不自由をおかけいたします。ウルシーまでのあいだよろしくお願い致します」
順調に航行していけば、あと十二日の生命であった。
回天搭乗員は独身であることを要求されていた。
隊長の仁科、福田、渡邊がともに二十歳代前半で、最年長の佐藤が二十歳代後半にかかったところであった。
佐藤章少尉は九州帝大出身の予備士官で、出撃まえにこっそり結婚していた。
仁科を除く三人は頭髪を短く刈って一握りの髪を家族に送ってもらうため折田艦長に託していたが、熱血漢の仁科だけは鬚は毎日剃ったものの頭髪は壮士風に肩まで垂れ下ったままにしていて刈ろうとはしなかった。
佐藤は出撃にあたり、妻まりゑ宛に、
「強く生きよ。今後の一生は意志のまま。嫁ぐも獨身もよし。ただ汝は私の永久の妻なり」
そう簡単な遺書を書いて折田艦長に託した。
そして、十一月十九日—。
一〇五〇伊四七潜はウルシー泊地を取巻く珊瑚礁の外縁に到着した。
環礁内に停泊している直近の敵艦までは約五、〇〇〇メートルの距離まで近づいていた。
折田艦長は防潜網を警戒しながら慎重に潜航をつづけさせて監視の艦艇や哨戒機のいないのを確かめてから深度を浅くし、潜望鏡を水面上に出して望見した。
各種艦船を一堂に集めた大機動部隊が隙間もないほど詰め合って碇泊している。二〇〇隻はいるだろう。これだけいればどれかに当たる。獲物の多さはまさに垂涎の的であった。
折田艦長は四人の隊員それぞれに潜望鏡を覗かせた。
仁科たちは獲物を目の当たりにして一様に興奮した。
だが生命との引き換えは複雑な心境だったであろう。
(いよいよ体当たりのときがきたな)
そう覚悟を固めた。

午後、折田艦長は士官室に仁科ら四人と幹部乗員を集めて最後の打ち合わせを行ったあとで、あらためて、

「仁科隊員ら四名は、明朝未明奇襲攻撃を決行せよ」

そう命令して海図をひろげ、細部にわたり指示した。

発進時刻は〇四〇〇。最初は一号艇（仁科中尉）、以後五分間隔で三号艇（佐藤少尉）、四号艇（渡邊少尉）、二号艇（福田中尉）の順に出撃することに決まった。

夕食は士官室でささやかながら別離の宴がひらかれ、〈振武〉の金文字が入った朱塗りの大杯に恩賜の酒が注がれ、四人の隊員が回し飲みした。

そのあと潜水艦にしては贅沢なシャワーで斎戒沐浴して心を清めると、白い腹巻きを締めて真新しい下着に着替え、第三種軍装に半長靴という戦闘服姿になった。

そして、最後に〈辞世の歌〉と〈遺書〉を認めた。

仁科は『日誌』に、

「昭和十九年十一月十九日、潜望鏡偵察。午後一時ごろ接岸の予定なりしも『リーフ』にあたる波の音を聴音露頂観察せるにリーフまで二千八百メートル。ついで十一時露頂、搭乗員輪番観測、明らかに見える敵有力部隊の晝寝、見事轟沈、明朝を期す」

そう書いた。

仁科はほかに第六艦隊作戦参謀鳥巣建之助少佐に『歌』を送ってほしいと折田艦長に依頼した。

その歌には、

「大君に一身を捧げる」

ことを誓っていたが、家族や知人、友人についてはまったく言及していなかった。

〇三〇〇乗艇命令が出た。

仁科は回天隊員を代表して伊四七潜乗組員全員に謝辞を述べたあとで、折田艦長に、

「艦長は戦果を確認しようとしておられるようですが、それが私達のためになされるものでしたらご無用にお願いいたします。私達が出撃しましたら直ちに危険水域の外へ移動して下さい。断ってお願いいたします」

そう念を押した。

四人がそれぞれの回天に乗り込み待つこと暫し、〇四〇〇予定していた発進地点に到達した。

伊四七潜は水中で面舵を取り、回天を港口に向けた。

「一号艇発進用意」

の電話を受けて仁科は、

「発進用意よし」

そう答えて起動用把手に手をかけて構えた。

「発進ッ」

の命令と同時に仁科は艇を起動させて母艦を離れた。

間隔をおいて三号艇、四号艇、二号艇を発進させて身軽になった伊四七潜は海面に浮上した。仁科から執拗に嘆願されていたが折田艦長は最初に出撃させた仁科艇の戦果をこの目で確かめておきたかったのである。

折田艦長は双眼鏡に目を当てて日の出まえの暗い海上を見詰めつづけていた。

〇五四五、ウルシー環礁内のオイルタンカー泊地で大爆発が起こった。

米軍側の資料では仁科艇が体当たりしたのは重油八五、〇〇〇バレル、ディーゼル油九、〇〇〇バレル、航空ガソリン四〇五、〇〇〇ガロンを満載した給油艦ミシシネワで、オレンジ色の火柱が天にのぼり数浬離れたところからも望見できたというから折田艦長も確認したであろう。

さらに四五分後ミシシネワの五吋砲弾薬庫が爆発した。

そして一時間一五分後に、ミシシネワはゆっくり右舷に傾いて転覆し、竜骨を上にして一時間ほど浮いていたが、やがて艦首から沈んでいったという。

これが仁科關夫中尉搭乗の回天初の戦果であった。

それでは、他の二隻の母艦についてだが―。

寺本巖艦長の伊三六潜はウルシーに到着したが、四基の回天のうち吉本健太郎中尉、豊住和壽中尉、工藤義彦少尉搭乗の三基が架台に密着してしまって発進できず、〇四五四今西太一少尉の三号艇だけが発進したものの消息不明になってしまった。

また、パラオ島コッソル水道に向かった神本信雄艦長の伊三七潜は不運であった。

ウルシー攻撃の前日コッソル水道の北西海面で二隻の米護衛駆逐艦に発見されて撃沈され、回天搭乗員の上別府宣紀大尉、村上克己中尉、宇都宮秀一少尉、近藤和彦少尉は母艦伊三七潜と運命をともにしてしまった。

その年十二月初め、伊三六潜、伊四七潜の帰投後『菊水隊』についての作戦研究会議が開催された。

その席で仁科から歌を送られたという第六艦隊作戦担当参謀鳥巣建之助少佐から、

「回天作戦は洋上使用に切り替えるべきだ」

との意見が出されたが一顧だにされず、前回同様の攻撃が数次に亘って繰り返され、いたずらに回天特攻隊員の犠牲を増やすばかりであった。

最初の零戦に爆弾を抱かせて突入させたフィリピン特攻は、米軍が驚愕仰天して戸惑い為す術を知らず右往左往して被害を甚大にしてしまったが、おなじことの繰り返しは防備されてしまい、戦果より犠牲のほうが多く空しい結果に終わってしまうことになる。

（了）

主な参考文献

実録太平洋戦争(5)　中央公論社

特攻　森本忠夫　光人社NF文庫

その他雑誌などは省略させていただきます。

古い物・遠い夢

忠内正之

名品歴々（茶道史余滴）

暫くの間、寄り道をしたが、再びこの道に戻って来た。故郷である茶道である。

この度は天下の名品と言われる茶道具を適宜選んで勉強してみたい。宜しくおつき合い願います。第一回の登場は「雨雲」茶碗である。

第一回「雨雲」茶碗

重要文化財。名物。楽焼茶碗、黒、光悦作。釉カセと黒釉が複雑に入り交った景色から雨雲と呼ばれたのであろう。薄づくりで飯櫃形。口縁の一方が高く反り一方が低くやや斜めとなっているところに無限の妙味がある。黒釉の光沢が美しく、碁笥底で高台はなく、中央が凹んで梅の花のような五輪形をなしている。京都の三井八郎右衛門家に伝来。雨雲の銘は、表千家六代覚々斎原叟（一六七八―一七三〇）の撰である。（加藤唐九郎編「原色陶器大辞典」より）

あまぐも　雨雲

高さ八・六cm　口径一一・七cm　高台径三・二cm

次に対比して考察したいのが楽茶碗「無一物」である。

むいちもつ　無一物

「無一物」茶碗

重要文化財。中興名物。楽焼茶碗、赤、楽初代長次郎作。その色合いは熟柿が白い粉を吹いたようである。無一物の銘は裏千家四代仙叟宗室（一六二二―一六九七）の撰で本来無事の姿を言ったものであろう。もと京都の町人清水藤九郎所持。享和（一八〇一―一八〇四）初年松平不昧が購求し以来雲州家に相伝した。（出典は雨雲に同じ）

高八・五cm　口径一一・二cm　高台径四・八cm

(一)

「雨雲」の茶碗は江戸初期に活躍した、本阿弥光悦（一五五八―一六三七）の作である。

「雨雲」のもつ芸術性の高さと、出自・伝来の明確さから希少作品と評価を受け重要文化財に指定されている。

光悦の茶碗は楽初代の長次郎（生年不詳―一五九五）によってはじめられた楽茶碗の系列に入るべき性質のものである。それは楽二代常慶（生年不詳―一六三五）や三代道入（のんこうと言う）（一五九九―一六五六）との作陶上の交流が深かったからである。

しかしながら同時代の楽茶碗の定形であった利休好みの茶碗とは、その造形上の点で極めてちがった性格をもっている。

長次郎焼きの人達が作った茶碗は、つねに利休形を基本として作られ、作者の個性を示すというよりも、むしろ没個性的な面の強い作風を展開していたと言える。

またそうであったため、利休の唱える侘茶のための茶碗として評価され、その後継者たちが、茶碗作家として続いて来たものと言えるのである。

長次郎作の赤茶碗「無一物」には、利休晩年の侘茶における茶碗に対する理想が具体化しているものと言える。茶碗はまったく無作為な姿で、静かに端然とした趣が深い。恐らくは余計なものを一切削ぎ落とし茶や禅の精神に通じる無事を表現したものであろう。

しかし光悦作の黒茶碗「雨雲」は同じ手捏ねでありながらまったく趣はちがう。筒型に立ち上った茶碗は、口に平らな篦目をめぐらして刀先の様にキッパリとした強いアクセントをつけ、胴にかかった釉も長次郎焼の場

合は黒無地にかかったものが、焼成中に若干変化して、一つの景色をなしているに過ぎないが、光悦の「雨雲」は独特の装飾的効果をねらって釉がけしている。それが「雨雲」と名付けられる原因となって評価を受けている。

光悦が何をあらわそうとしたかは不明であるが、窯の中での変化を充分に意識した上で何かをねらっているようである。焔という自然力と人為的な工夫が協調してもたらされる陶芸独特の効果を意図したかのようである。

このような態度は利休好みの長次郎焼には見られない。長次郎焼の主題は一個の茶碗に変化を示すのではなく、利休の求める侘び・寂びの茶に適う茶碗を作るところにあった。

光悦の作陶は一つの茶碗に自らの作為を存分に働かせ、なおかつ焔という自然にゆだねて、如何にできてくるかと楽しんでいるようだ。しかも光悦は決して一定の発想にとどまっていない。形の上でも釉がけでも、次々と何かを求めて作っている。手すさびではあったが、明らかに一人の個性的な作家の態度が見てとられるのである。

光悦がこのような茶碗を好んで作ったのは、やはり利休好みとの間に発想の転換期があったからであり、利休好みの茶碗と、光悦の茶碗との中間期に、文禄から慶長年間を通じて大いに流行した、古田織部（一五四四―一六一五）好みという言葉で象徴される「ひょうげもの」といわれる作風の影響が作用したものと思われる。

古田織部は安土桃山時代の武将茶人。豊臣秀吉、徳川家康に仕え、徳川秀忠の茶の湯指南を務めた、利休七哲の一人に数えられ、織部流の祖。利休の茶の湯を引き継ぎながら、利休と茶風を異にした。織部の茶風は総体的に華やかな創意性にあふれていた。師利休はその点を長所として認める寛容さをもっていた。後に大坂夏の陣では豊臣方に内通した嫌疑を受けて自刃する最後となった。

光悦は織部の最も近い茶道の弟子として知られており、多大な影響を受けたものと想像される。また書院台子の茶に利休の侘び茶を取り入れた独自の茶風を築いた織田有楽（一五四七―一六二一）とも親しく交際していたという。この他寛永文化を彩った人々との交流を展開する中で、自らの秀れた才能を生かし、豊かな芸術性を表現したものであろう。

「雨雲」茶碗は、覚々斎原叟により雨雲と命名された後、江戸中期の豪商冬木家に渡った。のち文化の頃（一八〇三―一八一七）三井家に入り現在では、三井記念美術館に納っている。

筆者は美術館が中野区にあって三井文庫と称していた頃から屢々訪ねていたので雨雲茶碗とはお馴染みで懐かしい存在である。

「無一物」茶碗は松平不昧公が当時三百六十四両で購入したとされ、其の後原三渓（一八六八―一九三九）から戦後頴川家に入った。

現在では兵庫の頴川美術館に収蔵されており時たま各地の展示会に出品されているので、鑑賞する機会に恵まれている。昨年は東京博物館での「茶の湯」展で、今年は三井記念美術館での「大名茶人松平不昧展」でゆっくり観ることが出来た。端正な姿に接すると心が安まる感がする。

（二）

光悦の育った本阿弥の家は「本阿弥の三事」といわれる刀剣の仕事を家業として室町時代から続く京都の名門町衆である。光悦は分家の生まれながら、人格、力量の秀れから一門の長としての立場にあった。

元和元年（一六一五）徳川家康より洛北鷹ヶ峯の土地を与えられる。一族をはじめ、紙師、筆師ら諸工匠とともに移り住み、一大芸術村を築き上げた。

本阿弥家は代々、禁裏、足利幕府、織田家、豊臣家、徳川家等々歴代の権力者の許に親しく出入りした。また京都の有力町衆と法華宗による強い信仰の繋がりがあり、有力者との縁戚も生じた。

光悦の本家叔父光刹の娘は「俵屋宗達」の妻となり、光悦の姉法秀は孫に光琳や乾山が出ることで有名な呉服商「雁金屋尾形宗伯」に嫁ぐなど上層町衆との結束が見られる。

また縁戚関係だけでなく光悦の鷹ヶ峯は芸術村であったと同時に強硬派である法華信仰を絆として結ばれた集落であった。尾形宗伯ばかりでなく、貿易商として名高い茶屋四郎次郎の屋敷もあって信仰を共にした経済的な結び付きも強かった様である。なお当時の豪商で本阿弥家の親戚であった灰屋紹益や茶碗屋の楽家もまた法華宗であり、京都の町衆は同宗派で団結していたと言われる。

政治、経済、宗教を強力なバックとする光悦は芸術村の中心となって指導するが、何と言っても光悦自身のもつ芸術性が秀でており下職の協力体制があったにせよ、各分野に亘る光悦芸術の事蹟が残されている。

光悦の作陶

光悦の作陶は茶碗が中心であり、茶碗で有名な楽系統の影響を受けたが、もてる才能を発揮して独特の作品を作り上げた。後には逆に楽家の二代、三代を指導した程である。

楽から出でて楽を超えたと言うべきか。

現在伝わる茶碗は、国宝一、重文三、を含め十作余の名品が挙げられており、貴重な存在である。また兎文香合（重文）も有名である。

書は寛永の三筆

光悦は近衛三藐院信尹（一五六五―一六一四）、松花堂昭乗（一五八四―一六三九）と共に寛永の三筆と賛えられる能書家であった。

光悦流を確立した後々まで「光悦様」として影響を残した。現代に伝わる美品は四季草花和歌巻（重文）他、色紙、歌切、短冊、消息等、数は少ないが大切に保存されている。

余談だが筆者宅も色紙一幅を有している。

光悦蒔絵

光悦はまた出色の蒔絵作品を残している。先づ船橋蒔絵硯箱（国宝）、樵夫蒔絵硯箱（重文）を含め、国宝一、重文三、等が名品として伝えられている。

意匠に宗達派の絵画と共通した装飾性がとり込まれていること。次に加飾材料の用い方が秀れて新鮮であることである。つまり自然主義的な従来の表現から脱して、歌などを用いて情緒や知的な楽しさを表現した。また材料に貝、鉛、銀などを惜しみなく使い、当時としては極めて革新的である。

現在は美術館等で観ることが出来るがその完成度と美しさに驚くばかりである。

この他能楽にも造詣が深く立派な謡本などが残されている。又作庭等の実績も知られていると言う。正に芸術面でのオールラウンド・プレーヤー振りは古今を通じて光悦の右に出る人物は無しと言っても過言ではない。

本阿弥家の仕事の他にこれだけの芸術面での実績をなしとげた光悦は当時としては長命であった。（享年七十九才）それ故に立派な足跡を残し得たのであろう。

しかし史料によれば、光悦は没年より二十五年程前から中風の症状下にあったと言う。このため腕が震えて書体や作陶に微妙な変化をきたし、却って作品の芸術性を高める結果となったとも言われている。

この病気の他にも問題があった。

利休茶道の後継者は古田織部であり、前述の通り光悦はその一番弟子にあたり極めて密接な関係にあった。

織部は当初東軍方であったが、大坂夏の陣で豊臣方に内応したという責を負って「さしたる中開きもなし」と言って自刃した。

光悦はかねてより豊臣家とも親交が深かった関係上、徳川方から鷹ヶ峯の土地を拝領する間柄であったと言え、徳川幕府の一部の勢力から睨まれており常に緊張感の連続であったようである。

一説によれば幕府は本阿弥一族の集団的、宗教的団結力を恐れて、辺鄙な村に押し込めてその効静を監視したのだとも言われている。

災いから逃れ一族の安寧を図るためにも芸術三昧に没頭する姿勢を必要としたのであろう。

そして「茶を好むとも珍器にかかわるべからず」と言っていたというが言葉通り名品を蒐めることはしなかったが、名品を数多く創ったのである。

光悦没後二十七年、延宝七年（一六七九）拝領していた鷹ヶ峯は返還することとなる。否、事実上は返還させられたようである。「本阿弥行状記」では、唯、恨み事のみ書かれており裏事情は明確ではない。

鷹ヶ峯のゆかりの地には、現在位牌所（幕地）と光悦寺が残っており、光悦を偲んで光悦寺では毎年光悦茶会が開かれている。先年筆者は妻と共に茶会に参加して、光悦の代表作の一つである「紙屋茶碗」でお茶をいただき、いたく感激したことを忘れることができない。

終

参考文献

本阿弥行状記　正木篤三著
日本の美術⑽光悦　林屋晴三編
和物茶碗　小田栄一著
原色陶器大辞典　加藤唐九郎編
角川茶道大辞典　角川書店
茶の湯ハンドブック　辻宗龍編
まんじ101号「茶道具三昧」　忠内正之著
その他

私の伊達政宗像を訪ねて（その一）

安藤　剛

その一：伊達政宗のルーツ
　念西と朝宗と宗村
　福島に伊達氏発祥の地を訪ねて
その二：十七代政宗の誕生
　父輝宗の惨劇
　二本松の粟ノ須古戦場を訪ねて
その三：小田原陣の遅参
　弟小次郎の刺殺
　大悲願寺の白萩文書を訪ねて
その四：政宗と秀吉と家康
　海外への夢か野望か
　遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて
その五：仙台城と瑞鳳殿
　政宗の逸話と書状
　日比谷に政宗終焉の地を訪ねて

【伊達政宗生誕四五〇年】

昨年の二〇一七年は「伊達政宗生誕四五〇年」、郷里宮城の各地で記念イベントが盛大に開催された。

昭和四八年に渡辺謙演じるＮＨＫ大河ドラマ「独眼竜政宗」がお茶の間を席巻、その視聴率は今なお歴代最高だという。遅れてきた戦国武将といわれ、幼く失明して友に抉らせ、拉致された父を敵将ごと銃撃、政宗毒殺未遂に弟を刺殺、母を追放、刀鍔の眼帯を掛け弦月形前立の黒漆塗甲冑姿で馬に跨り、天下への野望に燃えた独眼竜政宗、というイメージが強いが、果たして実像はいかに、郷土の英雄だけにかねてより関心を抱いていた。

大河ドラマの原作山岡荘八の小説「伊達政宗」を読み返し、帰省の折に仙台市博物館で展示物や資料に触れ、原史料に当たってみようと国立国会図書館に通い「伊達

治家記録」を閲覧、インターネットで「吾妻鏡」や「大日本古文書」等を調べてみるが、新たな疑問が生まれ迷走するばかり、ここはやはり自分の足と目で歴史の現場を見なければと、政宗の縁故地で開催されるマラソン大会に参加しながら、伊達氏に纏わる史跡を訪ねてきた。

もとより歴史家でも文筆家でもない一介のマラソン愛好者、歴史好きで好奇心だけは人一倍と自負しており、今回の同人誌への投稿を機に、これまでマラソンブログ「老いてなお青春」に綴ってきた伊達政宗の実像を訪ねる独断と偏見の旅日記を纏めてみようと思っている。

【『奥の細道』の甲冑堂】

宮城県に帰省する車窓から、福島駅で東北本線に乗換えてまもなく、眼下に信達平野が広がってくる。春には山麓一面に桃の花が咲き誇り、かつて頼朝軍と平泉軍が戦った阿津賀志山合戦場跡である。やがて県境の山並みに入ると、山林の中に「甲冑堂」の看板が見えてくる。

マラソンを始めてまもない平成十九年十一月、帰省自主トレ三〇キロランに挑戦した折、晩秋の「奥の細道」を走りながら、山中の甲冑堂まで足を延ばしてみた。

落ち葉舞う田村神社の境内に小さなお堂が佇み、源義経に殉じた佐藤継信・忠信兄弟の妻が夫の甲冑を纏って母乙羽姫を慰めたという伝承による妻二人の甲冑姿木像が閉じられた扉の格子越しにぼんやり見えていた。

傍らの桃隣句碑に「戦めく二人の嫁や花あやめ」と刻まれ、奥の細道に「二人の嫁がしるし先哀成」、ここまでやって来た芭蕉たちの感慨は如何ばかりだったろう。この逸話は戦前の教科書に取り上げられ、文部省唱歌にもなったというが、嫁の母への孝心が忠君愛国に利用されたのだとしたら悲しい話である。

この甲冑堂に祀られた継信・忠信兄弟の父佐藤庄司基治を阿津賀志山合戦で討ち取った武将が伊達氏の始祖で、その十七代政宗が江戸時代に仙台藩六二万石を開いたと聞いてはいたが、いつか機会があれば、伊達氏の始祖朝宗と佐藤庄司基治を訪ねて、二人の対決した阿津賀志山に足を運び歴史の息吹を肌で感じてきたいと思っていた。

【『吾妻鏡』の阿津賀志山合戦と念西】

伊達氏が歴史に初めて登場したのは、鎌倉時代に編纂された「吾妻鏡」の建久二年（一一九一年）に、源頼朝の若公を産んだ大進局の父として伊達常陸入道念西の名で出てくる。この念西が、文治五年（一一八九年）の頼朝の奥州合戦に従軍、阿津賀志山合戦で平泉方武将佐藤庄司を討ち取る戦功を挙げ、恩賞に伊達郡を賜わり移住して伊達朝宗を名乗り、伊達氏初代とされている。

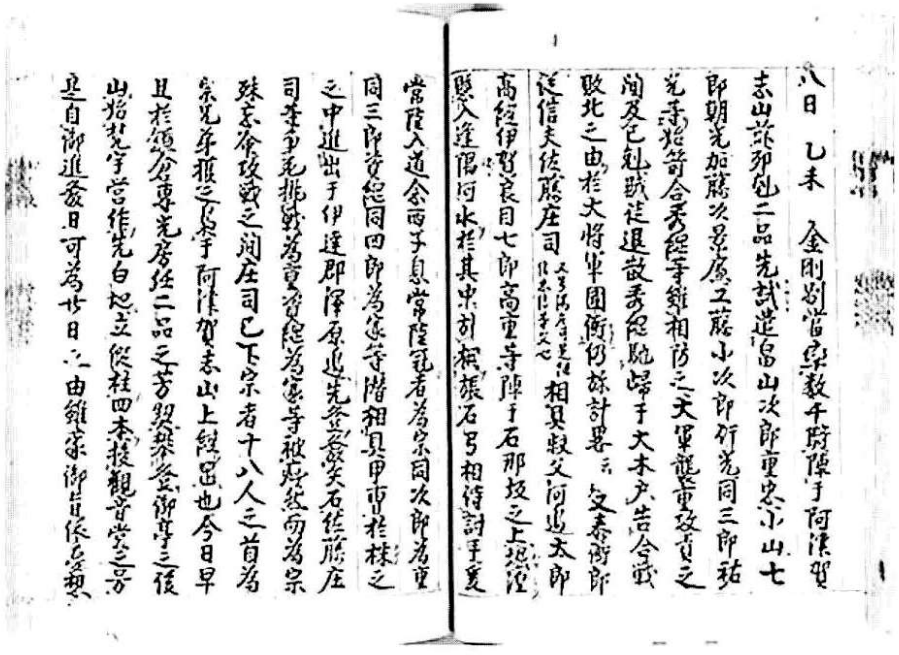
「吾妻鏡」は、治承四年（一一八〇年）の頼朝の旗揚げから八六年間の幕府の事蹟を鎌倉時代末期（一三〇〇年頃）に編纂した鎌倉幕府の正史である。

伊達氏のルーツを訪ねるに当たり、どうしても吾妻鏡の原文で確認したいことがあった。阿津賀志山合戦に参陣したのは子息たち四人で、父念西は参加していなかったという解釈があるらしい。伊達氏のルーツを訪ねる旅は、そんな拘りの究明から始まった。

「吾妻鏡」の文治五年八月八日に、三日間に亘る阿津賀志山合戦の初日の戦闘模様が詳述されている。

下段の古文書は、天正十八年の小田原攻めの時、和議成立の謝礼として北条氏から黒田孝高（官兵衛）に贈られ、後に徳川秀忠に献上された「北条本」と呼ばれる吾妻鏡の古写本で、左はその読み下し文である。

『八日乙未。金剛別當、數千騎を率い、阿津賀志山の前于陣す。卯剋、二品先ず試みに畠山次郎重忠、小山七郎朝光、加藤次景廉、工藤小次郎行光、同三郎祐光等を遣はし、箭合せを始める。（中略）泰衡が郎從の信夫佐藤庄司、叔父河邊太郎高經、伊賀良目七郎高重等を相具し、石那坂之上于陣す。湶を堀り逢隈河の水於其の中へ懸け入れ、柵を引き石弓を張り討手を相待つ。爰に常陸入道念西子息常陸冠者為宗同次郎為重同三郎資綱同四郎為家等、潜に甲冑於秣之中に相具して、伊達郡澤原邊于進み出で先登に矢石を發つ。佐藤庄司等死を爭ひて挑み戰う。為重、資綱、為家等疵被る。然而、為宗は殊に命を忘れ攻め戰う之間、庄司已下の宗たる者十八人之首、為宗兄弟之を獲て、阿津賀志山上の經ヶ岡于梟す也』


八日 乙未 金剛別當數千騎陣于阿津賀
志山二品先試遣畠山次郎重忠小山七
郎朝光加藤次景廉工藤小次郎行光同三郎祐
光等被箭合令經手矢相防之大軍雖襲重攻責之
間及巳刻猶以退散令經駐歸于大本之告令戰
致此之由於大將軍國衡仍被討畢 父泰衡郎
従信夫佐藤庄司 相具叔父河邊太郎
高經伊賀良目七郎高重等陣于石那坂之上泥沼
隔入逢隈河水於其中引橋張石弓相待討手矣
常陸入道念西子息常陸冠者為宗同次郎為重
同三郎資綱同四郎為家等階相具甲冑於秣之
中進出于伊達郡澤原邊矢石雨降庄
司等已下死骸數為責令經等被疵然而為宗
殊不忘攻戰之間庄司已下宗者十八人之首為
宗兄弟被之梟于阿津賀志山上經岡也今日早
旦於國分尊者經二品之前奏聞畢三後
山指出之事當作先白起立俊柱四本被觀音堂之前
是自御進發日可為廿日之由雖承御日限依有

前頁の写本左頁一行目に、阿津賀志山合戦に参陣した念西一族を『常陸入道念西子息常陸冠者為宗云々』とあり、句読点がなく「念西と子息為宗」なのか「念西の子息為宗」なのか、and と of のどちらにも読めてくる。

子息云々の記述を外に探してみると、合戦前日の七日に『金剛別當秀綱其子下須房太郎已下二万騎』とあり、其子と書いて「秀綱とその子下須房太郎が」と読むのは明らか、更に翌々日の記述に『金剛別當子息下須房太郎秀方〔年十三〕殘留防戰』とあり、ここでは前後の文脈から「別当の子息が」と読むのは明らかである。

吾妻鏡の編者は、「其子」と「子息」を使い分けて、and と of を区別していた。とすれば「念西子息為宗」は「念西の子息為宗」と読むべきで、念西は参陣していなかったことになる。

前頁の写本左頁三行目からの佐藤庄司等との戦闘記述には、為重ら弟三人が傷を負い、長兄為宗が死を恐れず戦い、為宗兄弟は庄司以下十八人の首を獲ったとあるが、父念西はその戦闘に登場してこない。

吾妻鏡の七月十九日に、頼朝が鎌倉を出陣する御共の輩一四四人の名前が列記されているが、その中に為重と資綱の名はあるが、念西の名はなかった。

念西は、入道を名乗り常陸に隠居して従軍せず、代わりに子息達が参陣して、佐藤庄司を討ち取る戦功を挙げ恩賞に伊達郡を受領、長男為宗は郷里の常陸国伊佐に留まり、次男為重が伊達郡に下着したというから、為重こそ伊達氏初代とされるべきではないだろうか。

初めから霧に包まれた歴史を迷走する旅となったが、本稿では論旨が混乱するため通説をベースに進めていく。

【伊達氏のルーツ① 伊達氏の古系図】

伊達氏の始祖とされる吾妻鏡の常陸念西は、その名から常陸国に住した豪族だったのではないだろうか。

常陸国は、上総国、上野国と共に、国守に親王が補任される親王任国だが、実際に親王が任地に赴くことはなく、国司の実質的長官は、常陸介だったという。

室町時代に編纂された「尊卑分脈」の藤原北家魚名流山蔭の六代目実宗が、天永二年（一一一一年）にその常陸介に任ぜられて、常陸国伊佐郡中村に住しており、念西一族は、常陸介実宗の子孫だったかもしれない。

では伊達氏にどんな系譜が伝わっていたのだろうか。

十六世紀の伊達氏に伝わる古系図に、山蔭中納言政朝の子孫の中村常陸守入道宗村法名念西が伊達郡に下着したとする『天文系図』（初代宗村念西・二代義広・三代政依）と、山蔭中納言政朝の子の朝宗が伊達郡に下着して次代が宗村念西とする『天正系図』（初代朝宗・二代宗村念西・三代義広・四代政依）の二つがある。

両系図で祖とされる山蔭中納言政朝は、歴史上実在しないが、今昔物語の「亀の恩返し」や御伽草子の「鉢か

つぎ」の説話で亀や姫を助けた山陰中納言とされ、藤原北家の山蔭に比定されている。政宗の祖父晴宗の法語に「藤原末裔、風流太守、山蔭中将開闢洪基」とあり、親子相克の内乱を制した晴宗が、乱れた家中再建のために、親子愛の山陰中納言を祖とする天文系図を策定したのではないだろうか。そして古く伊達氏初代とされてきた「宗村」を吾妻鏡の「念西」にリンク付けて「宗村念西」の名で、天文系図の初代に位置付けたにちがいない。

四〇年後の天正系図では、自身を片目の万海上人の生れ変りと称し、伊達氏の元祖を清水観音の申し子「山蔭中納言卿」と認識していた政宗が、初代に山蔭中納言政朝の子朝宗を据え、天文系図で初代だった宗村念西を次代に下げている。なぜ政宗は古くから伊達氏初代とされてきた宗村念西の前に、朝宗を割り込ませたのだろうか。政宗は朝宗をどこから持ってきたのだろうか。

推測だが、伊達氏が始祖とした山陰中納言が比定される藤原山蔭の系図が、常陸介実宗の五代朝宗で途切れていることから、吾妻鏡の念西と年代的に符合する朝宗を伊達氏初代に据え、山蔭中納言の直系氏族とした伊達氏系図を策定し覇権に活かそうとしたのではないだろうか。

その後、江戸幕府の寛政諸家系図伝の編纂に当たり、仙台藩は「伊達正統世次考」を編纂して、初代朝宗を吾妻鏡の常陸念西に比定、初代念西朝宗・二代宗村・三代義広・四代政依とする伊達系図を策定した。

「伊達正統世次考」はいかなる根拠で、藤原北家魚名流の朝宗を吾妻鏡の念西に比定したのだろうか。

「吾妻鏡」の建久二年（一一九一年）に「女房大進局は伊達常陸入道念西息女」とあり、室町時代に成立した「尊卑分脈」の清和源氏系図に「頼朝の子貞暁の母大進局を伊達蔵人藤原頼宗女」とある。大進局とは、頼朝の側室で、産んだ若公とは、頼朝の正室政子の嫉妬を恐れて仁和寺に預けられた、後の貞暁である。

清和源氏系図にある藤原頼宗が「尊卑分脈」の藤原魚名流系図にある常陸介実宗の五代朝宗の朝を頼に誤記だとして、大進局を共通項に「吾妻鏡」の念西と「尊卑分脈」の朝宗を同一人物に判定したのであろう。

では吾妻鏡を知るはずの尊卑分脈の編者は、なぜ大進局を常陸念西息女でなく藤原頼宗女と書いたのだろうか。

推測だが、尊卑分脈の編纂時期は、伊達氏中興の祖といわれた九代政宗の時代である。正室が後円融天皇の生母と足利義満の生母の妹輪王寺殿で、足利将軍家と親交を図る九代政宗は、伊達氏の出自を名門藤原山蔭に求めるべく、尊卑分脈の編者に、伊達氏始祖の常陸念西と同時期に常陸に居たと思われる藤原山蔭流の常陸介藤原朝宗を比定させたのではないだろうか。政治力と財力を駆使して。頼の誤字は、編者の良心だったかもしれない。

本稿は「仙台市史通史編（古代中世）」を参考にしたが、系譜に隠された秘密に妄想は広がるばかりである。

【伊達氏のルーツ②『伊達正統世次考』の背景】

江戸初期に伊達氏のルーツを求めて編纂された「伊達正統世次考」は、伊達氏に伝わる古系図の扱いに苦慮していた。伊達大祖が朝宗なのか宗村なのか、巻の冒頭から自問自答を繰り返し、最終的に宗村大祖説を妄説と否定、朝宗を伊達大祖と結論付け、朝宗を吾妻鏡の念西に比定して、念西を否定された宗村は、念西の長男為宗が常陸伊佐に留まり次男為重が伊達郡に下ったことから、為重に比定させ、幕府の寛政譜に引き継がれてゆく。

「伊達世次考」の編纂を命じた仙台藩四代藩主綱村は、元和二年の知行行状に「伊達氏正統第十九世」の朱印を使用していたが、編纂後の元禄十六年に「伊達氏第二十世綱村」の朱印を使っている。朝宗を初代に据えて宗村を二代目に下げたことで、伊達氏系図が一代増え、綱村は伊達氏十九世から二十世に歴史認識を変えたのである。

それではなぜ綱村は宗村大祖から朝宗大祖に変説したのだろうか。背景に綱村の生い立ちが見えてくる。

綱村は伊達騒動と呼ばれた寛文事件の亀千代である。父綱宗が遊興放蕩を理由に強制隠居させられ、二才の亀千代が家督を相続したが、一門に毒殺を謀られ幕府による仙台藩分割の危機を体験した綱村は、伊達一門と旧臣の呪縛から逃れ、父綱宗が後西天皇と従兄弟同士という朝廷に近い家柄の復権を図り、伊達氏直系の正統性を誇示するには、吾妻鏡に名前が登場せず出自も明らかでない宗村が、伊達大祖では不具合だったのだろう。

綱村は、頼朝の従弟で従五位下の官位を持ち高松院非蔵人と院判官代を歴任した朝宗を、奥州合戦で活躍した念西に比定して初代当主に据え、仙台藩祖政宗が意図した伊達氏創世史を完成させたかったのではないだろうか。

【伊達氏のルーツ③ 藤原朝宗の出自】

伊達氏始祖とされた朝宗は、藤原北家魚名流である。藤原北家とは、乙巳の変で蘇我入鹿を倒した藤原鎌足の子不比等の次男房前を祖とする家系で藤原四家の一つ、邸宅が兄武智麻呂の北にあり、北家と呼ばれたという。

房前の五男魚名が天皇専制を志向する桓武天皇と対立、天武系皇族の叛乱に関わった疑いもあり左大臣を罷免左遷され、その子孫も左遷させられ地方の武家氏族となり、その子孫に奥州藤原氏、信夫佐藤氏、伊達氏がある。

伊達朝宗の出自について、東北大名誉教授の平重道氏が、昭和四六年に宝文堂から発刊した「伊達治家記録」全二四巻の「解説」の中で、次のように書いている。

『伊達氏は本姓藤原で大職冠鎌足より出ている。鎌足の曾孫に河辺左大臣魚名があり、魚名の玄孫従三位中納言山蔭が伊達の流祖である。山蔭の子孫に従五位下待賢明院非蔵人光隆と云う者があり、この光隆の第二子朝宗が実に伊達氏の第一世であった。』

『朝宗は鎌足十七世の子孫に当り、母は源為義の女、初め時長と称し、東宮帯刀、高松院非蔵人、院判官代、従五位下遠江守、常陸介に歴任し、常陸国真壁郡伊佐荘中村に住したので伊佐或は中村を姓とした。文治五年、源頼朝の奥州征伐に諸子（為宗以下四人）を率いて従軍し、戦功があり、伊達郡を賜わった。因って伊達に姓を改め、同郡高子岡に城を営んで移住した。朝宗の戦功とは石那坂の戦いで先登し、信夫の佐藤荘司以下十八人を斬り阿津賀志山上に梟したものであった。』

【伊達氏のルーツ④　光隆と朝宗の時代背景】

朝宗と父光隆の時代を俯瞰すると、朝宗の父光隆が仕えた待賢門院は、鳥羽天皇の中宮藤原璋子で、崇徳天皇と後白河天皇の母であり、朝宗が仕えた高松院は、鳥羽天皇が寵愛した美福門院藤原得子との娘妹子内親王で、後に後白河法皇の子二条天皇の中宮となる。

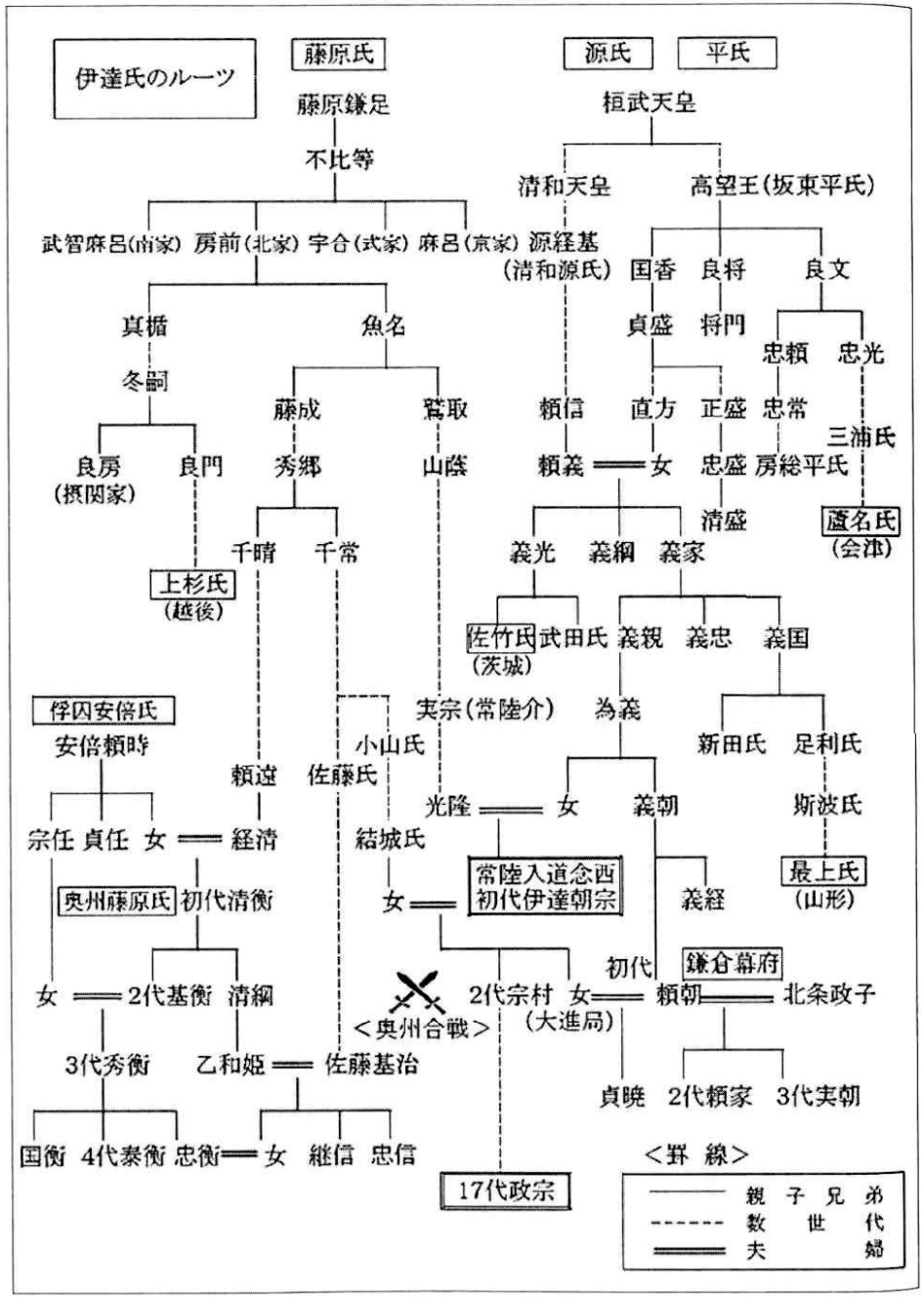
待賢門院は淫奔な中宮といわれ、鳥羽天皇の祖父白河法皇の寵愛を受けており、崇徳天皇は鳥羽天皇との子ではなく白河法皇の胤と言われ、保元の乱の遠因となる。

一〇八六年に子の堀河天皇に譲位した白河天皇が上皇となり院政を敷き、堀河天皇が二九才で崩御すると、孫の鳥羽天皇を五才で即位させる。一一二三年に白河法皇は二一才の鳥羽天皇を譲位させ、待賢門院との子と噂される五才の崇徳天皇を即位させる。白河法皇の崩御で白河院政が終焉すると、鳥羽上皇が院政を敷き、一一四二年に鳥羽上皇は、我が子でないと疑う崇徳天皇を譲位させ、寵妃美福門院との子近衛天皇を三才で即位させる。

一一五五年に近衛天皇が十七才で急逝すると鳥羽法皇は、実子の後白河天皇を即位させ、息子の重仁親王を擁して院政を敷こうとする崇徳上皇と対立、翌年に鳥羽法皇が崩御すると、後白河天皇と崇徳上皇の対立はついに朝廷を二分して武士を巻き込んだ保元の乱となる。

「真岡市史」に、朝宗が一一五六年に下野国中村荘に住し中村太郎と称したとあるが、この年は保元の乱の年である。「伊達正統世次考」に『光隆公保元元年に白川で戦死』とあり、白川が保元の乱で崇徳上皇方の武将が集結して後白河天皇方に焼き討ちされた白河殿だとすると、崇徳の母待賢門院の非蔵人だった光隆は、息子朝宗と共に義父の源為義に従って崇徳上皇方として戦い敗れ、父光隆を喪った朝宗は郷里下野に戻ったのであろうか。

下野に帰国していた朝宗はその後再び上番、父光隆が非蔵人をしていた待賢門院の子後白河天皇の皇子守仁親王（東宮）の帯刀となる。後白河天皇が守仁親王に譲位して二条天皇に即位させるが、二条天皇は天皇親政を目指して後白河上皇の院政に対立して摂関家に接近、藤原育子を入内させると、后位を追われた中宮の妹人内親王は高松院を号して朝宗はその非蔵人となり、その後、後白河上皇の院判官代になったのかもしれない。



真岡市教育委員会「真岡の歴史」に、朝宗が一一七一年に職を辞し下野中村に戻り荘厳寺を再興したとある。この年は平治の乱で源義朝を破った平清盛が軍事警察権を掌握して院政を開き、後白河法皇と対立した年である。後白河法皇の権勢衰退に、朝宗は再び下野国中村に戻り剃髪して常陸入道念西を名乗り隠棲したのであろうか。

常陸念西の名が歴史に登場するのは、吾妻鏡の文治二年に大進局の父として、それまでの空白の十五年間、御家人として頼朝の平家追討に従軍しなかったのだろうか。もしかしたら常陸源氏の志田義広の頼朝討伐（野木宮合戦）に関与して吾妻鏡から抹殺されていたのだろうか。

【伊達氏のルーツ⑤ 朝宗の母源為義女】

「伊達正統世次考」に朝宗の母が源為義の女とあり、光隆と為義の接点はどんな形であったのか推測してみた。

清和天皇の孫源経基を始祖とする清和源氏は、藤原摂関家に仕えて勢力を伸ばし、経基の孫頼信・頼義親子が「平忠常の乱」を平定した折、乱の鎮圧に失敗して更迭されていた前任の平直方が、頼義の武勇に惚れて娘を嫁がせ、鎌倉の所領と坂東平氏郎党を頼義に譲り渡し、後の源氏の東国支配の礎となったといわれる。

清和源氏と桓武平氏の血を受け継いで武家の棟梁と崇められた源義家が没すると、嫡男義親が乱行を繰り返して平正盛に誅殺され、家督を継いだ三男義忠が叔父の義綱に暗殺され、その義綱を成敗した為義が源氏の棟梁となるも、名門源氏は相次ぐ内紛で名実ともに凋落、義親を討伐した平正盛の名声が源氏を凌いで、やがて忠盛・清盛と続く伊勢平氏の興隆期を築いていく。

源義綱の叛乱を討った功で左衛門少尉に任ぜられ、白河法皇の院御所守護を担い検非違使となった為義は、凋落した源氏の権勢を挽回すべく、崇徳天皇の実母で白河法皇の寵愛する待賢門院に接近しようと、待賢門院非蔵人の光隆に娘を娶わせたのであろうか。

「伊達出自世次考」に朝宗の誕生が大治五年とあり、光隆が待賢門院非蔵人になる長承二年の二年前になる。為義が待賢門院に接近するため非蔵人の光隆に娘を娶わせたとする推測は年代的に成り立たない。光隆の父家周は、従四位下で宮中の宿直警護する大舎人を統率補助する大舎人助、為義は光隆の父家周に接近すべく、娘を家周の子息光隆に娶わせたのかもしれない。

【福島に伊達氏発祥の地を訪ねて】

①念西が討ち取った佐藤庄司基治とは

念西が佐藤庄司を討ち取った石那坂の戦いが、吾妻鏡の阿津賀志山合戦初日の半分を占めており、それほどの扱いを受ける佐藤庄司とはいかほどの武将なのだろうか。

佐藤庄司基治は、藤原北家魚名流で、九四〇年に起き

た「平将門の乱」を桓武平氏の平貞盛と共に鎮圧して関東に多くの武家氏族を残した藤原秀郷の子孫である。

奥州藤原二代基衡の弟清綱の娘を後妻に迎え、福島県中通りから山形県南部さらに会津まで支配圏を広げた豪族で、庄司の名は荘園を管理する荘司に由来するという。

後妻乙羽姫との子継信・忠信は、義経が兄頼朝の平家追討の挙兵に平泉から馳せ参じる際、奥州藤原三代秀衡が家来に付けた武将で、兄継信は屋島の戦いで平教経の矢から義経をかばって討ち死、弟忠信は頼朝に追われる義経に同道、吉野山で別れて京に残り討手に誅殺され、後世の歌舞伎「義経千本桜」の狐忠信のモデルである。

継信・忠信の父基治は、娘を義経の側室に、その姉を秀衡の三男忠衡の正妻に娶わせ、奥州合戦で阿津賀志山に布陣して平泉軍総大将になった秀衡の長男国衡の母は、信夫佐藤氏の娘ともいわれている。

秀衡の三男忠衡は、父秀衡の遺言を守り義経を大将軍に擁して頼朝に対抗せんとして兄泰衡に誅殺されたが、奥州藤原氏と強固な血縁と主従関係を結ぶ基治は、秀衡亡き後の奥州平泉を守護する超大物であり、朝宗はその基治を討ち取る大殊勲を挙げたのである。

②石那坂合戦場はどこか

念西が佐藤基治を討ち取った石那坂合戦場はどこにあるのだろうか。定説では、東北本線南福島駅から南二キロの丘陵地帯：石名坂が比定されている。

白河関を越えて福島県の中通りを北上してくる頼朝の大軍を福島盆地南端入口で迎撃する作戦だったことになるが、石那坂合戦の前日には、頼朝軍は既にこの石名坂を通過して遥か北に二二キロの福島盆地北端の阿津賀志山麓の国見に着陣している。

平泉軍が福島盆地の北と南に二二キロも離れた二か所で、大軍で頼朝軍を包囲するのなら兎も角、一〇分の一の兵力を二分して挟撃戦に挑むとはとても考えられない。

「吾妻鏡」には、念西が伊達郡澤原に進出して石那坂の上に陣取る佐藤庄司を奇襲したとある。伊達郡とは、基治の居城大鳥城の北側を西から東に流れて阿武隈川に注ぐ摺上川の左岸側で、石岸側が信夫郡、念西が摺上川の左岸から石岸にある信夫郡の基治陣地に奇襲をかけたとすれば、基治が陣取った石那坂は、居城の大鳥城周辺だったことになる。その界隈は現在の飯坂温泉、石那坂は飯坂の古名だったかもしれない。

佐藤基治は、居城の大鳥城から南に十三キロも離れた福島盆地南端の石名坂まで出陣したのではなく、居城近くに布陣して頼朝の大軍を迎撃せんとしたにちがいない。

「福島県通史」に「伊達郡澤原は信夫郡佐原なり、鎌倉の記録係が地名を誤りしものなり」とあるが、佐原を澤原と誤記することはあっても信夫郡を伊達郡とは誤記しないだろう。石名坂説を定説にしたい意図が見えてくる。

③佐藤庄司基治の菩提寺・医王寺

二〇一五年五月、仙台国際マラソン大会前日、福島駅に途中下車して飯坂線に乗換え、佐藤庄司基治の菩提寺「医王寺」に向かった。参道奥の薬師堂に植わる古木「乙和の椿」は、継信忠信兄弟の死に悲しむ母情が乗り移ったのか、蕾のまま咲かずに落ちてしまうのだという。

境内の芭蕉の句碑『笈も太刀も五月にかざれ紙幟』は五月節句に勇ましく幟は旗めくが、寺に仕舞われている弁慶の笈や義経の太刀も一緒に飾って欲しい、彼らの武勇の悲話を忘れないで欲しい、と嘆じているようだ。

④佐藤庄司基治の居城：大鳥城跡

飯坂温泉駅でレンタサイクルを借り、温泉街の西側の小高い標高一三〇Mの館山に築かれた大鳥城に向かった。

「吾妻鏡」に「泰衡郎従信夫の佐藤庄司、石那坂の上に陣す、隍を堀り逢隈河の水をその中に懸け入れ、柵を引き石弓を張り、討手を相待つ」とあり、基治は、居城大鳥城の館山麓に布陣して、濠を掘り阿武隈川支流から水を引き、柵を張り頼朝軍を迎撃せんとしたのであろう。

山頂の本丸跡に登り眼下に福島盆地を俯瞰すると、北方の阿津賀志山麓に布陣する平泉軍と対峙する頼朝の大軍がすぐ足元に見えてきそうだ。頼朝の遠征軍を背後から襲える好位置に、関ヶ原の南宮山に布陣した西軍毛利秀元が浮かんできた。もし秀元が家康本陣を腹背から攻撃していたら、そしてもし基治がここから頼朝本陣の背後を突いていたら、歴史は変わっていたかもしれない。

念西は、この大鳥城の北側の摺上川を渡河して山麓の基治陣地の背後から奇襲したのだろう。もし念西が基治を討ち取っていなければ、頼朝軍は正面の阿津賀志山に布陣する藤原国衡軍と背後の大鳥城山麓に布陣する佐藤基治軍の両面作戦を強いられることになる。緒戦に背後の敵を駆逐した念西の軍功は、まさに大殊勲だった。

頼朝にとって大軍を率いた本格的な戦闘は、この阿津賀志山合戦が実質初戦だったろう。石橋山の旗揚げは寡兵だったし、大軍で臨んだ富士川合戦は平家軍が水鳥の羽音で戦わずに敗走、一ノ谷・屋島・壇ノ浦は全て弟の義経と範頼の戦功である。自ら大軍を率いて奥州十七万騎と恐れられた平泉軍に挑んだ頼朝は、実質初戦の勝利を決定付けた念西の武功を大いに評価したにちがいない。

⑤初代朝宗の居城：高子岡城跡

大鳥城を探索したあと、念西が阿津賀志山合戦の功で頼朝より賜った伊達郡に最初に築城した「高子岡城跡」に向かった。飯坂温泉駅から福島駅に戻り、阿武隈急行線に乗換えて五つ目の高子駅に下車、田圃の中を北に八分程で高さ三〇M程の小高い丘が高子岡城址である。

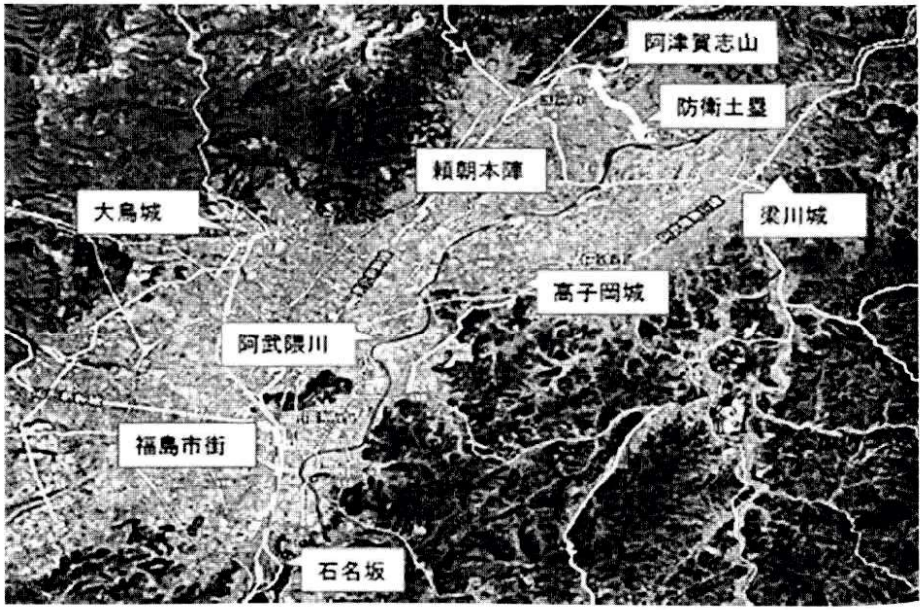
山裾の桃畑を登ると山頂に亀岡八幡宮が建ち、福島盆地が三六〇度に開け、伊達朝宗を名乗った念西の昂揚感が伝わってくる。朝宗は四百年後の一五八九年に十七代政宗が会津藩名氏を滅ぼし南奥州の覇者になると想像し得ただろうか。山頂にある円露磐は巨石信仰の祭祀場なのか。蝦夷の神アラハバキが鎮座する神聖な磐座に、朝宗は新しい蝦夷の支配者として君臨したのかもしれない。

高子岡城の南六〇〇Mの高子沼に立ち寄った。案内板に、かつて高子地区の山々は有望な金鉱山で、政宗が秀吉に伊達郡を召上げられた時、その痕跡を隠すため土手を築き金鉱山精錬所を水底に沈めた、とあった。高子から北八キロに見える半田銀山は大同年間（九世紀）に採掘が始まった鉱山である。朝宗は信達平野の豊沃な土地と金銀の資源を得て伊達氏繁栄の基礎を築いたのである。

⑥伊達氏の本拠地：梁川城跡

阿武隈急行線で高子駅から七つ先のやながわ希望の森公園駅に下車、駅前の八百屋さんで自転車を借り、梁川城跡に向かった。梁川の町中の各所に城郭の土塁らしき遺構が見え、中世城郭の面影が微かながら伝わってくる。

梁川城は、四代政依から十四代稙宗が桑折西山城に移すまでの二八〇年、伊達氏の本拠地であり、梁川に城を移した政依は、仏心に厚く豊富な財力を使って京都五山に倣い伊達五山の寺院を創建、伊達氏は地頭・奥州探題の要職を得て、梁川は南奥州の要として栄えたという。



高台の本丸跡に建つ梁川小学校校舎は東日本大震災で損壊して使用不能のまま、今春に新校舎が別に完成して仮設校舎から移転したという。小学校校庭の一角に、東日本唯一の中世庭園といわれる「心字の池」が復元されて、ここが本丸跡だったことを僅かに今に伝えていた。

天文の乱で父稙宗を破った晴宗が、一五四八年に本拠を桑折西山城から米沢城に移し、政宗は米沢で生まれるが、梁川城は引き続き伊達領の重要拠点であり、政宗初陣の相馬氏との戦いでは伊達軍の拠点となり、また政宗の正室愛姫輿入れでは、田村家からの花嫁の受け渡しは梁川城だったという。

伊達氏が秀吉の奥州仕置で米沢から岩出山に移封されると、梁川は会津に入封してきた蒲生氏そして上杉氏の所領となる。一六〇〇年に家康が会津上杉討伐の軍を発すると、政宗は上杉領になっていた白石城を攻略して奪還、石田三成の挙兵で西に引き返す家康が、政宗に上杉領になっていた旧領七郡四九万石の領土自力回復を許す書状（百万石のお墨付き）を送り、政宗は自ら兵を率いて旧領地奪還のため南進するが、梁川城の上杉勢の猛反撃で宿願の故地奪還はついに果たすことはできなかった。

後に米沢藩三代上杉綱勝が嗣子なく急死、忠臣蔵の吉良上野介義央の長子綱憲を養子に迎えて上杉家の存続は認められたが、三〇万石から十五万石に厳封、伊達郡は没収されて徳川幕府の天領となり梁川城は廃城とされた。

⑦奥州合戦の阿津賀志山古戦場

梁川城を後に一級河川の阿武隈川を渡り北西に四キロ自転車を走らせ「阿津賀志山麓の防塁跡」に向かった。

信達平野の田畑の中に、背丈が隠れる程の土塁と空堀の二重堀が一部復元されていた。阿津賀志山麓から阿武隈川畔まで三キロにわたり防塁を築いて矢楯を並べ、騎馬武者隊を先頭に攻め寄せる鎌倉の大軍を迎え撃つ平泉軍との両軍四万の激しい戦闘シーンが浮かんでくる。

この一戦に勝利した頼朝軍はその後殆ど抵抗なく平泉に攻め上がったから、奥州藤原氏にとって阿津賀志山は最初で最後の絶対防衛線だったのである。防塁の築造について、吾妻鏡に『泰衡日来二品（頼朝）発向し給う事を聞き、阿津賀志山に於いて城壁を築き要害を固む。国見の宿と彼の山との中間に、俄に口五丈の堀を構え、逢隈河の流れを堰入れ柵す。』とあるが、伊達郡国見町のHPには、延べ二五万人六ヶ月以上かかったとあった。

頼朝の鎌倉出発が七月十九日、阿津賀志山合戦が八月八日、この長大な防塁が二〇日足らずで完成出来るはずがなく、国見町HPにあるように六ヶ月以上かかったとすると、泰衡が頼朝の圧力に屈して義経を殺害した四月三〇日より三ヶ月も前に既に着工していたことになる。

藤原三代秀衡が「義経を大将軍に頼朝の攻撃に備えよ」と遺言しており、義経が頼朝の奥州攻めを想定した迎撃

戦線を平泉から遥か一四〇キロも南の阿津賀志山麓に構築したのだとしたら、天性の戦略を生かした地形上の立地もあったろうが、義経を終始後見してきた佐藤基治の支配地域だったことも大きな理由だったにちがいない。

奥州合戦に勝利した頼朝は、平泉の生命線ともいえるこの伊達郡を念西に恩賞で与え、奥州征伐後の平泉残存勢力の抑えの大役を念西に託したのではないだろうか。

⑧朝宗夫人結城氏女墓所の福聚寺

阿津賀志山麓防塁跡から梁川駅に戻る途中、国見町にある初代朝宗夫人結城氏女の菩提寺福聚寺に立ち寄った。

政宗は、秀吉の奥州仕置きによる会津から米沢そして仙台への移封に伴い、伊達氏四代政依が伊達郡に創建した伊達五山を仙台城下に遷したが、五山の一つ光明寺内にあった初代朝宗夫人墓所を守るため、塔頭の一つを福聚寺に創建したという。

田圃の中を北へ二〇分、左手の大木戸に布陣する平泉軍総大将藤原国衡の本陣を思い浮かべながら、阿津賀志山の真東二キロに福聚寺があった。住職が快く本堂裏の朝宗夫人墓まで案内してくれた。赤色石材の格子で囲う墓所に五輪塔が建ち、石柱に「常陸介伊達朝宗室結城氏墓所」とあり、供物台に彫られた「丸に縦三引き」の紋は、始祖朝宗が頼朝から下賜された伊達家の紋である。

結城氏は、藤原秀郷の末裔で下野国小山の豪族小山政光の七郎朝光が一一八三年の野木宮合戦の恩賞で下総国結城を受領し結城氏を名乗ったことに始まるといわれる。

朝宗夫人とされる結城氏女は、結城氏初代朝光の娘なのだろうか。奥州合戦時に結城朝光は満二一才、念西の息子達が一五～二〇才台とすると、朝光の娘が念西の妻となり子息達の母親になれるはずがない。

念西は入道を名乗り隠居して合戦に参加せず、戦功で伊達郡に移住したのが二代目とされる念西の次男為重（宗村）だとしたら、結城氏女が嫁いだのは宗村であり、宗村こそ伊達氏初代だったのではないだろうか。

福聚寺の登り口に建つ由来碑に、当寺を創建した四代政依を三代政依と刻されていた。ここでは「天文系図」の初代宗村・二代義広・三代政依が伝承されていた。

初代朝宗の菩提寺とされる満勝寺について、江戸元禄時代の仙台地誌「仙台鹿の子」に「太守の遠祖常陸入道宗村君の墳墓元伊達郡桑折にあるを慶長年中黄門（政宗のこと）寺院を移す」とあり、満勝寺は宗村の菩提寺だったらしい。仙台藩四代綱村が伊達氏始祖の権威付けのため、宗村太祖を否定して藤原北家の藤原朝宗を伊達大祖に据えたため、それまで宗村だったものが悉く朝宗のものに置き換えられてしまったのではないだろうか。

結城氏女墓所に戻り合掌しながら「あなたの夫は宗村だったんですか」と問いかけた。私の伊達氏のルーツを訪ねる暗中模索の旅は、意外な所で光明が見えてきた。

【伊達氏前史（十七代政宗の誕生まで）】

伊達氏正史は、奥州合戦の功で伊達郡を与えられ常陸国から陸奥国に移住した念西が伊達氏初代朝宗とする。

四代政依は、仏心深く財力を生かし京の東福寺から仏智禅師を請じて京都五山や鎌倉五山に倣い伊達五山を創建する。七代行宗は、後醍醐天皇の建武新政の評定衆となり、奥州における南朝方武将として北畠顕家の二度の上洛に従い、多賀城国府が北朝方に占拠されると国府を伊達郡の霊山城に移して奥州武将第一の名声を得る。

八代宗遠は、長井氏・亘理氏を討ち、米沢・刈田・伊具・柴田郡を攻め取り、足利将軍に朝参帰服して鎌倉公方と関東管領の支配を却け、直接京都の将軍と結びつく。

九代政宗は、足利義満の生母の妹を正室に迎えて足利二代将軍義詮の義弟となり、三代将軍義満の京都扶持衆となって所領割譲を求めてきた関東管領足利満兼と対決して鎌倉の大軍を撃退、伊達家中興の祖といわれる。十代氏宗は、鎌倉公方足利氏満の傘下に参じ、以後の伊達家歴代当主は将軍家から諱をもらい勢力拡大を図る。

十一代持宗は、奥州で三千騎を有する武将六人あるが七千騎を有するは伊達持宗ひとりといわれ、将軍義政に黄金三万両を献じたという。十二代成宗は、従四位上奥州探題に任ぜられ、二度の上洛で足利将軍義政・義尚に太刀二三振、馬九五頭、砂金三八〇両を献上したという。

十三代尚宗は、越後守護上杉家から正室を迎え、嫡男稙宗と内乱を起す。十四代稙宗は、会津蘆名氏から正室を迎え、藤原秀衡以来の陸奥国守護に任ぜられ、塵芥集と御段銭帳を制定して領内支配を強化、子女を大崎・葛西・相馬・蘆名諸氏に政略結婚させ、更に三男を越後守護上杉氏の養嗣子に送らんとして、稙宗の拡張主義に反対する嫡男晴宗が強権的な稙宗に不満を持つ家臣団を組織して反抗、奥州豪族を二分する七年に及ぶ内乱「天文の乱」に発展、伊達氏の支配力が衰退、周辺豪族が伊達氏からの従属関係を脱し戦国大名として自立していく。

天文の乱に勝利し本拠を福島から米沢に移した十五代晴宗は、内乱で動揺した家臣団の統制と勢力の挽回を図り、一五五五年に奥州探題職に任ぜられる。十六代輝宗は、天文の乱で晴宗を支え伊達家を実質支配していた中野宗時ら重臣を粛清、父晴宗を杉目城に閑居させ実権を掌握、中央の織田信長と誼を通じ勢力を回復させていく。

天正十二年、輝宗は弱冠十八才の政宗に家督を譲る。輝宗四一才、激動の戦乱の時代に、なぜ輝宗は若き政宗に伊達家の命運を託したのだろうか。その翌年に輝宗の悲劇が起る。政宗は父輝宗の凄惨な死を乗越えて南奥州を制覇していくが、藤原氏と源氏と平氏の流れを汲む華麗な血統と陸奥守護と奥州探題の名門への誇りと自負が、やがて天下人となる秀吉や家康に臆することなく堂々と向き合えていけた所以なのかもしれない。

性と化粧の物語（十二）

鈴木守

第三話　性と泥化粧（二）

先報では、泥化粧の実態を述べたうえで、その発祥について自論を申し述べました。

自論と云うのは「人類が猿人の時代に、灼熱の光が降り注ぐアフリカの原野を跋渉して、過熱した身体を水浴によって冷やしたのが、化粧行為のルーツであり、水浴から分化した泥浴として、身体に付着した泥土がサンバーンを抑止する事に気付き今様の言葉で云えば紫外線防禦剤として泥土を身体に塗布する泥化粧が発祥しました。従って、泥化粧に用いた泥土が化粧品のルーツとなった」と云う主張です。

この泥化粧を創始したのは、ホモ属のハビリスやエルガステルの祖と云われているアラウストラロピテックス・ガルヒであろうと推測していますが、本報ではガルヒ猿人以降の人類が、どのような泥化粧をしていたか探索の手を延ばすことにします。

第一節　泥化粧の姿を追って

泥化粧は生活環境の中で手近に入手できる、例えば足下（もと）の泥土で事足りますので、発掘された化石人骨の表面にへばりついている土が、意図的に塗布された土か、それとも非作為的に自然に付着した土かを識別する事は極めて困難です。このような事情によって泥化粧の証拠を示す考古学的な資料は皆無に近いのではないでしょうか。

従って、泥化粧の直接的証拠となる資料に加えて泥化粧の存在を推測できる資料を拾い挙げる事にします。

一項、緒土（しょど）による泥化粧

J・M・コードウェルは「彩色を目的とした赤土の使用は多分、私達の祖先によってアフリカで始められ、彼等はヒト皮膚に対するレッド・オーカー（粘土ベースの酸化鉄）の創傷治癒効果を偶然発見し、化粧品の使用は一五〇万年前に始まった」と云う仮説を発表していました。彼の仮説発表は一九八八年で、この年には奇しくも私も化粧品技術者会誌に『化粧品ルーツ説』を発表していますので、何か因縁を感じています。

コードウェルの説に戻りますと、彼は赭土の創傷治癒効果の発見にホモ・ハビリスが関与した事を暗示し、赭土の使用は一八〇万年前のホモ・エレクトスとしていました。付言しておきますと、一八〇万年前のホモ・エレクトスは一九八四年の国際会議で〝ホモ・エルガステル〟と名称変更されています。

コードウェルの記述に戻りますと、「二〇万年前、ホモ・エレクトスは古代の熱帯全体に拡がり、次いで多分、火の発見によって、より寒い地方へ移住が始まり、彼等は移住に際して、恐らく赭土と動物の脂肪で作られた光沢のある赤いボディスーツと毛皮を着て北上したと思われます」とジャワ原人の仲間が北上し、亜寒帯の北京郊外周口店の地で、北京原人に分化した様子を記していました。

次いで彼は「約十万年前のネアンデルタール人の埋葬物の中に彼等の骨と一緒に赭土塊が発見され、他に狩人は石のベッドに鹿を切って乗せ、その肉に赭土を降りかけました。或る学者は赭土の使用を血の回復と云う象徴概念で説明していますが、私は体の臭いを消す実用的な目的で使用した」と主張しました。

彼は更に「旧石器時代後期のクロマニヨン人の赭土使用を述べた上で、新石器時代には織物と農業の発達により、人類は皮膚を柔らかにし保温する為の動物の脂肪や保温の為の赭土・脂肪混合物を使わなくなり、赭土の創傷治癒薬或はデオドラントとしての使用は段々と影を潜めるようになりました」と叙述していました。

二項、ツルカナ・ボーイの奇跡

「八四年八月二十二日の事だった。探査の手をツルカナ湖西岸に移したリチャード・リーキー調査隊のベテラン化石ハンターのカモヤ・キメウは、休みの日にも拘わらず、一人でナリオコトメ川の川床へ出掛け、そこで彼の目がマッチ箱程度の褐色の破片を捕らえた。それはヒト頭蓋片だった。これが世紀の大発見の幕開けとなった」と早期人類の全身骨格発見を河合信和は興奮を混えて『世紀の大発見―ツルカナ・ボーイの衝撃』のタイトルの下で綴っていました。

① ツルカナ・ボーイ紹介：ツルカナ・ボーイは約一五〇万年前のホモ・エルガステルの九歳の少年です。

ツルカナ湖はケニア北西部エチオピアとの境にあり、曾てはルドルフ湖と呼んでいました。

この少年について、ラミダス猿人を発見した東大の諏訪教授は「一九八四年にツルカナ湖畔で、約一五〇万年前の見事な全身骨格が出土した。この骨格標本を中心にツルカナ湖周辺から出土した他の標本より、原人は猿人段階とは比較にならない程、進歩的だった。例えば、体型、大きさ、男女差等の点で、すっかり現代人的だったようである。しかも熱帯の乾燥性気候に適した体型を示し、現代人的な無毛性と発汗による体温調節も初期原人が既に保持していたと思われる。脳容量はホモ・ハビリスより一段と大で、骨盤の形から産道が小さく、現代人と同様、比較的未成熟な新生児を出産したようである。

この事により原人の子供は現代人のように成長期間と学習期間が長かっただろうと視察される」と指摘していました。尚、初期原人は未だ言語能力を備えていなかったと言われてる事を付記しておきます。

② ボーイの死因：ツルカナ・ボーイの死因を前出の川合の書は次のように述べています。それによりますと「ボーイの第二臼歯は生え変わったばかりだった。実はボーイの乳臼歯は抜けんばかりの状態だったが、生憎歯根が顎に残ったようだった。乳臼歯はその後に脱落した。きっと歯茎は孔があいたままだっただろう。推定では、そこに細菌が感染したと云う。恐らく頬は腫れ、激痛に襲われただろう。水を飲みに来たおりに、それが原因で彼は力尽き、うつ伏せになって死んだ。遺体は河馬に踏まれ、鰐に食われたが、死体は泥に嵌り、鰐にもハイエナにも食い荒らされる事なく、一五〇万年の睡りに就いたのである」と述べています。しかし、この説明では今一つ合点が行きませんので、私なりに考えを披露します。

ボーイの死因を考察するに当って、次に述べる二つの条件を前提としました。一つは、ボーイはホモ・エルガステルの少年で、前報で述べましたようにエルガステルは猿人ガルヒから派生した初期ホモ属人類ですから、ガルヒ猿人が創始したと推定されている泥浴の仕来りを伝承していたと推定されます。

今一つは、ボーイが発見されたナリオコトメ川河口の川床は、川から流入したシキソトロピックな砂土によって構成された人喰い沼様の土壌だったと想定しました。シキソトロピーは一般的には馴染みの少ないコロイド化学の用語ですから説明を要します。例えば、魚の煮汁が煮凝を作る事は誰もが知っています。この煮汁は魚の蛋白質ゼラチンが溶出した流動性のあるゾル状のコロイド液ですが、温度が低下しますと、ゼラチンが凝集して固型のゲル状態を形成します。これが煮凝で、ゼラチンがゾル・ゲル変化、即ち固・液変動を生じる性質に基づき

ます。シキソトロピーもコロイド液の固・液変動によって生じる現象ですが、この場合は熱エネルギーによって生じる現象ではなくて、圧力等の力学的エネルギーによって生じる現象です。この現象を卑近な例で説明できませんので、建築士の甥の話を紹介します。甥が云うには「大阪市の淀川三角洲地帯は淀川が運び込んだ土砂がシキソトロピックな為、地表にビルを建てると、重力が負荷して土壌が液状化し、ビルの沈降、倒壊をもたらす為、土砂を支えている岩盤上にビルを建設する」と語っていました。

話を本題に戻すと、ボーイの葬送曲序曲として歯痛が奏でられていました。彼は先祖ガルヒが創始した鎮痛の習わし、聖域における泥浴を思い出し、聖霊の宿すナリオコトメ河口に拡がる泥沼へ赴き、泥濘に身を浸し、鎮痛の護符、泥土を頬に塗り、泥水を口に含みましたが痛みは鎮静しないので、より強力な鎮痛効果を願って泥沼の中心部に向って身を移しますと、ボーイの移動によって泥沼のゲル構造が崩れ、液状変化してボーイの身体を泥沼の底へ導き、葬送曲の終曲が奏でられました。恐らく闇魔様の闇魔帳には〝ツルカナ・ボーイ溺死〟と記されているに違いありません。

三項、出アフリカ以後の泥化粧

初期ホモ属人類の時代を過ぎますと、一次出アフリカのようなビッグ・ニュースもありましたが、泥化粧に関する証拠は散見される程度でしたので、これら資料を『出アフリカ以後の泥化粧』の下で、三項に後期原人の時代から現代に向けて入手した資料を羅列する事にします。

① 後期原人の泥化粧：一百万年前頃のエルガステルが人類揺籃の地アフリカを離れて人跡未踏のユーラシア大陸へ旅立ち、定着した各地の自然環境に適応して、ホモ・エレクトス（直立原人）に進化しました。

前出コードウェルの書には、「赤鉄鉱の使用はサハラの南に偏在し、ホモ・エレクトスの人達が熱帯の地から北上した時、彼等は赭土を持ち運び、赭土を他の有色鉱物と混合して防腐剤やデオドラント剤として使用したと記載されていましたので、一次出アフリカ当時の人類は殺菌効果や防臭効果を経験的に体得していた事が示唆されます。

彼は更に「二〇万年前に東南アジアに進出したエレクトスがジャワ原人に進化した事を暗示した上で、ジャワ原人の一派が北上して北京原人になった場面を「この移住者は赭土と獣脂で造られた赤いスーツケースを纏って北上したと思われる」と叙述して、赭土に加えて獣脂の保温効果を指摘していました。

一方、ヨーロッパに進出したホモ・エルガステルについては、ファッキーニの書『人類の起源』等に「南欧ニース郊外に進出した四〇万年前頃のテラ・アマータ人の遺跡から鉛筆の芯のような形の赭土の塊が発見された」事を記していました。この赭土塊は現代知られている化粧品の現物として最も最古の資料です。

尚、エレクトスの表記について付記しておきます。一九八四年に古人類学の国際会議がありました。その席上、ホモ・エレクトスの分類学上の帰属を巡って討議され、「エレクトスは原則として出アフリカし、定住した地の自然環境に適応して進化した人類」と定義した為、従来、アフリカのホモ・エレクトスと呼称された人類を〝ホモ・エルガステル〟と呼ぶようになりました。

このような事情を知りましたので、私が本誌に記載したツルカナ・ボーイと出アフリカを試みた人達の人種名をチェックしました所、引用文献記載の年号の儘写し書きしており、引用文献発表の年号を調べますと、国際会議（一九八四年）以前に発刊された資料は全てホモ・エレクトスであり、一九九〇年代以降に発刊された文書の多くはホモ・エルガステルと表記されていました。従いまして、今後、ツルカナ・ボーイや出アフリカを試みた人達の人種名を〝ホモ・エルガステル〟と銘記する事にします。

② 旧人型人類の泥化粧：旧人型人類としては、ハイデルベルク人とネアンデルタール人がよく知られていますが、前者の泥化粧に関する記録を目にすることは一切ありませんでした。

ネアンデルタール人の泥化粧に関する文献は二、三見られましたが、大同小異の内容でしたので、ここでは前出のコードウェルの記述を引用します。彼の書には「約一〇万年前頃のネアンデルタール人の埋葬物の中に、彼等の骨と一緒に赭土塊を発見」とあり、引き続き「狩人は石のベッドに鹿を切って乗せ、その肉に赭土を振りかけました。学者某は赭土の使用を血の回復と云う象徴的概念で説明していますが、私は身体の臭いを消すと云う実用的な目的で使用されたと信じます」と記し、ネアンデルタール人の生業を暗示すると共に、彼の信条を開陳していました。

③ 早期現生人類の泥化粧：現生人類、ホモ・サピエンス・サピエンスは、ミトコンドリアDNA解析資料から「凡そ二〇万年前のアフリカの一女性から派生」と云う論文が発表され、世の人達は彼女を〝ミトコンドリア・イブ〟と呼び、この愛称が流布しました。これとは別に「現生人類は古代型新人類から派生した」と云われていますので、イブはハイデルベルク人であり、ハイデルベルク人は黒人だったと云う事になります。

一方、現代型人類の最古の化石は南アフリカ、フローリー・バットで発見された二六万年前の頭蓋ですから、

現段階では「現生人類発祥の地は南アフリカ」と比定するのが妥当だと思われます。

南アフリカ東南のインド洋に面するブロンボスの海蝕洞で七万五千年前頃の赭土塊と貝殻型のビーズで作った首飾りが発見されているので、当時の南アフリカの女性は赭土に獣脂や魚油を加えて赤い泥膏を作り、それを全身に塗って赤いスーツとし、首に貝殻ビーズのネックレスを装着してお洒落を楽しんだのではないでしょうか。私の想像ですが、この時代になると赭土による泥化粧に美の演出と云う要素が加わったように思えます。

四、五万年前には、ヨーロッパ進出を果たした現生人類、後生の人達にクロマニヨン人と呼ばれ、後期旧石器時代文化の担い手の人達は、フランコ・カンタブリアの地に進出し、その地に呪術目的で描いた芸術的価値のある数々の洞窟壁画を残していました。スペイン・アルタミラ洞窟には、赤い石を遺した跡と赤く彩ったヒトの像が描かれ、オーストリアのビレンドルフには〝石のビーナス〟と呼ばれるアフロ・ヘアで妊婦姿の彫像が残されていました。これらに赤い画像や彫像はクロマニヨン人の風俗を示しているのか、それとも宗教的な意味の祖先崇拝を示すものか不明です。いずれにせよ、クロマニヨン人が赤い土、赭土に馴染んでいた事が窺われ、赭土による泥化粧が美的な赤化粧へ進化する過程を示しているように思えます。

中石器時代、ドイツ、バイエル地方のオフネット洞窟には赭土で覆われた頭蓋骨が残されていましたので、赭土と呪術の関係が示唆されます。

新石器時代になりますと、エジプト人はパレットの上で顔料を混ぜ合わせて、目の隈取り等の眉目化粧を行うようになりました。中国では龍山（ロンシャン）・仰韶（ヤンシャオ）文化（前二五〇〇～前四〇〇〇）の時代に黒陶や彩陶が造られ、黒、白、青、赤等の釉薬が使われていました。尚、顔料成分の多くは、土砂の類に入りますので、顔料を主成分とする化粧料は、化学的に見ますと泥化粧の範疇に属しています。

日本の新石器時代は縄文文化に該当します。この時代、青森三内丸山遺跡では埋葬した遺骨の周囲に赭土を撒布する風習があり、赭土に悪霊を払う呪符の役割を果たしていたと考えています。

④　古代文明期の泥化粧：　ツタンカーメンのマスクやネフェルト・イティの胸像に認められるように、古代エジプトの人達は、眉と目の周囲をコール（炭素末）でくっきりと描く化粧を施していました。斯様な化粧が発達したのは、エジプトの強い日射しから目を保護する目的でアイライン、アイシャドーを施し、埃や砂が目に入るのを防いだと云われています。このような使用目的から見ると、これらの眉目化粧は黒色顔料を獣脂で練った泥青だった事が推定されます。このような眉目化粧は、シュメールのウルの王妃シュブアド（前二千年頃）の画像、エーゲ文明時に描かれたクノッソス宮殿の〝パリジェンヌ〟と呼ばれる壁画にも古代エジプト様の眉目化粧を見る事が出来ました。

インダス文明の遺跡、モヘンジョダロには方鉛鉱、ランプの煤、緑土、赭土、鉛白等の顔料が付着した小皿やスティックが残され、インダス文明期の人達は眉目化粧の他に、頬紅や白粉による化粧も行っていた事が窺えました。中国については前述しましたように龍山、迎韶文化の頃、釉薬が盛んに使われていましたので、釉薬の顔料を利用した化粧が行われていたと考えても不思議ではありませんが、中国の泥化粧を示す資料に遭遇できませんでしたので、『中国歴代婦女妝論』に唐代女性の化粧順序が記載されていましたので、それを参考にしますと、「最初に鉛粉（白粉）を敷き、次いで胭脂（頬紅）を撫で付け、眉に黛を書き、花鈿（額のポイント化粧）、を貼り、面靨（口辺左右のポイント化粧）を点じ、斜紅（左右のこめかみに描くポイント化粧）を指し、唇脂（口紅）を塗る」と解説していました。鉛粉と黛は泥化粧の可能性が高い化粧料です。

日本の上代・古代に目を移しますと、弥生時代の遺跡・佐賀県吉野ヶ里遺跡には顔面に辰砂を塗布した男性の遺体が眠っていました。この遺体の主はシャーマンだったと云われています。

又、記紀には海幸・山幸の物語があり、兄弟の争いで敗れた海幸が掌に赭を塗って、恭順の意を表したと記されていますので、日向三代の頃には、高価な辰砂が上位、廉価な赭が下位とする身分表示の化粧があったのではないかと考えましたが、日向三代の存在を疑う立場からすると、日向三代を表立てる訳には行きませんので、記紀が上撰された奈良時代以前の化粧風習ではないかと考えています。それはそれとして、以前、週刊誌に「現在は廃鉱になっているが九州山地に水銀鉱脈があった」と云う記事が載せられていましたので、「あっ、これだ。海幸・山幸の争いの原因は釣針ではなくて水銀鉱脈の採掘権の帰属に関する抗争だったに違いない。だとすると、海幸・山幸の時代は大和朝成立以前の物語の筈です。それ以前には、『魏志倭人伝』に「倭人は朱丹を以て其の身体に塗る中国の粉を用うる如きなり。丹はその山に有り」と記されていますので、邪馬台国の時代に注目しますと更に「倭国乱れ相攻伐する事歴年、一女子を立てて主となす。名付けて卑弥呼と曰う」とありますので、この争乱の原因に着目していると云うのが現況です。

⑤　中世以降の化粧事情：　本来ならば、中世以降の泥化粧事跡を辿るべきですが、中世ヨーロッパでは、絢爛たる化粧文化を誇っていたローマ帝国が滅亡し、化粧

文化凋落の歴史を刻みました。その後、中世から近世に向って一四〇〇年代にイタリアの地でルネッサンスの息吹きが生じ、文芸復興の風が西欧にそよぎ始めたのです。西欧社会のルネッサンスは文芸を復興させただけでなく、科学技術の長足の進歩をもたらし、産業革命を導いた結果、薄利多売の商業主義も抬頭しました。その結果、これまでの化粧品は高級階級の有閑婦人に獨占されていましたが、廉価な化粧品が市場に出回り、庶民の人達も化粧する時代が到来しました。それとは別に、化学分析や資材の精製、生物学的微生物学的研究も進転した為、高品質・高性能の商品開発が可能となって、現在の化粧文化隆盛の時代に繋ったのです。斯様な近世以降の社会状況下で、特に化粧品先進国においては、泥化粧の風習が影を潜めるのも至極尤もな事だと思います。

所が、最近、〝泥パック〟と呼称される商品の存在を知りました。その情報を提供してくれた女性に教えられるがまま化粧品店を訪問し、彼女が泥パックと称している商品を手にする事が出来ました。しかし、その商品の容器・被包・説明書には〝泥パック〟の標示はありませんので、泥パックは正式名称ではなく、ユーザーの人達の愛称のように思えます。では、何故、このような愛称が生まれたのか考えてみました。

パック剤には、ゼリー状、粉末状、ペースト状の3タイプがあります。ゼリー状パックは成膜性高分子物質を配合し、皮膚上に作られた塗膜を引き剥がして用いる為、ピール・オフ・タイプと呼ばれ、粉状パックは粉体成分を配合し、皮膚に泥状の層を作る為、マッド・タイプと呼称されています。マッドは泥ですから、愛称泥パックはマッド・タイプ・パックに由来する事は確実ですが、ユーザーの人達がマッド・タイプの呼称を知っている筈がありません。愛称ドロパック販売先の美容師の人達が貸下の化粧品店で「この商品はマッド・タイプ、早く云えば泥パックでして、粉成分が皮膚表面に泥状の層を作って皮膚の汚れを吸着し…」と宣った事でしょう。この単純明快な言葉がユーザーの方々に伝播し、泥パックの語が私の耳にも聞こえて来たのだと憶測しています。「瓢箪(ひょうたん)から駒」の諺で云うようにヒョンな事から愛称が生まれても不思議ではありません。

では、愛称泥パックの商品は泥化粧なのでしょうか。この疑問を解決する為に、商品封体に記載された標示成分の中にカオリン（白陶土）や酸性向土がありましたので化学的には泥化粧の資格を有していましたが、開封して現物を掌に乗せて見ますと、泥臭くなく綺麗な白色粉体でした。従って、この商品は化学的な基準で云えば泥化粧ですが、商品の外観から評価すれば泥化粧らしくないと云う事になりますので、この商品が泥化粧か否かはペンディングと云う事です。

今回の原稿は『泥化粧の形跡を追って』と題してタイム・トラベルを試みましたが、泥化粧の資料は極めて乏しく、中世以降になりますと皆無に近い状態に陥りましたので、中世以降については、泥化粧事跡が何故少ないのかを論じた上で、『泥化粧とは』について考察しました。

所で、今回の叙述を読み返しますと、『性と泥化粧』を主題としているにも拘らず、性との関連を示す資料を提示することが出来ず、看板に偽りありの結果を導いてしまいましたので、次回は、今回のレザルツを土台にして、『性と泥化粧』のテーマにチャレンジしたいと思っています。

引用文献
J・コードウェル『古代化粧と近代的変化』、早川律子監、化粧の心理学、週刊粧業、一九八八
河合信和、ネアンデルタール人と現代人、文藝春秋社、一九九九
周迅、高春明、中国歴代婦女妝飾、三聯書房、一九八八
参考文献
鈴木守『化粧のルーツを訪ねて（五～十六）』
まんじ一一一～一一五号、二〇〇九
同誌、一一六～一一九号、二〇一〇
同誌、一二一～一二二号、二〇一一
諏訪元、『アフリカ文明の曙』、新書アフリカ史、講談社、一九九七
F．ファッキーニ、人類の起源、同朋社出版、二〇一一
鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九三
千谷利三、無機化学（全）、産業図書

房総の御一新
―大多喜藩と佐倉藩を例に―

山田喜久

一　房総の戊辰戦争

1　江戸開城前後

慶応4年（1868）1月、鳥羽伏見の戦いに勝利を収めた新政府軍は、2月にはぞくぞくと京都を出発して、東海道、東山道、北陸道の3方面から江戸を目指して進んだ。

こうして3月15日を期した江戸城攻撃の態勢はととのったが、前日にいたり東征軍の総指揮をとる大総督府（総裁有栖川熾仁親王）と旧幕府側との間に江戸開城の了解が成立して攻撃は中止され4月15日新政府軍は平穏のうちの江戸城にはいった。

（江戸城無血開城に功のあった西郷隆盛は東海道先鋒参謀であった。）

しかし開城以前から、こうした情勢にあきたらない旧幕府将兵や佐幕諸藩士のなかには江戸や関東各地で反政府的行動に走るものが続出した。その代表的な集団が彰義隊で、一時は3千人にも達し江戸府内上野にあってしばしば新政府軍将兵とトラブルを起こしていた。

4月11日の江戸開城を迎えて事態はいっそう深刻となった。武器引き渡しを不満とする旧幕府将兵は大量に江戸を脱走して関東一円に散り各地で抗戦を続けたのである。

旧幕府歩兵奉行大鳥圭介は部下と共に下総市川に至り、流山残党の新撰組土方歳三や江戸にあった会津桑名藩士とも合流して、その総勢は2千名余に及んだ。

一方、おなじく江戸開城前夜に脱走して南下し、上総方面を目指した1グループもあった。旧幕府撤兵頭福田八郎右衛門に率いられた撤兵隊であった。かれらは海上から下総登戸（現千葉市）に上陸し木更津にいたり西上

総一帯を占拠し、徳川義軍府と称した。

彼らは久留里、鶴牧、飯野、一宮各藩などに働きかけ武器や兵員を調達して力を蓄えた。

そして4月下旬には船橋から市川まで北上し新政府軍と戦った。（船橋戊辰戦争）彼らは会津藩との連携に望みを繋ぐ作戦だったという。これを指揮した一人が、幕臣江原素六（1842―1922）である。彼は維新後、政治家、教育者に転じ麻布学園（麻布中学）を創設したことで知られる。

2　錦の御旗、房総へ

一方、新政府軍（東海道先鋒総督府）は慶応4年（1868）4月18日に江戸以東の鎮撫のため武蔵、上総、下総、安房、常陸の諸藩に脱走将兵の討伐を命じている。

そして前記船橋市川戦のニュースが入ると、副総督柳原前光（1850―94）は自ら出陣を希望し「東南鎮静」と称して江戸を出発した。

京都から江戸に達していた「錦の御旗」が房総の地にも現れたのである。

柳原は錦の御旗をひるがえして馬上姿で薩摩、長州や浜松藩兵数百人を従えて地元下総佐倉藩に乗り込み出兵を命じた。

柳原はさらに下総佐倉から上総東金に移り、4月10日に上総茂原、11日に上総長南に陣を進めた。目指すは鳥羽、伏見の戦いで幕府軍の総督をつとめ、朝敵となった大河内正質（1844―1901）の大多喜藩である。

12日に大多喜藩に入った柳原は、既に郊外の寺院で謹慎中であった正質に佐倉藩幽閉の処分を申し渡した。

余談だが、筆者の親友S君の実家は大多喜街道（茂原―大多喜）沿の上総東村（現いすみ市）にあるが、幼少の頃、祖父から実家の前を大砲などをゴロゴロ曳きながら大多喜城に向かう新政府軍の姿を目撃した話をよく聞かされたという。

義軍鎮圧と大多喜藩処分の報告をうけた先鋒総督府は柳原に対して江戸への早急な帰陣を要請した。大総督府としては、京都から三条実美を迎えて軍議を開き、当時、最優先課題であった徳川家処分を早急に決定したかったのであろう。

実は江戸城開城に先立つ1月4日、柳原は江戸城を訪ね、城を預かる田安慶頼に対して「徳川の家名存続を許すこと。慶喜は死罪を免じ水戸に謹慎」などの江戸城開城の条件を出していたからである。

帰陣要請を受けた柳原はなお安房あるいは常陸方面への鎮圧を主張したが、再三の督促を受けて止むなく20日大多喜を発し、長南、潤井戸から下総登戸（現千葉市）にいたり海路江戸に帰っている。

この時、柳原は弱冠18歳。そんな若輩が要職につけたのは一に家柄のよさによる。公家柳原家21代当主で大正天皇の伯父に当たる。（妹愛子が明治天皇の側室で大正天皇の生母）

維新後は外務省に入り外務大丞、枢密院議長にもなった。

（ついでながら、白蓮事件で知られる歌人の柳原燁子（白蓮）は次女である。）

なお同じ公家出身の西園寺公望（17歳）は東山道第2軍総督であった。

二　大多喜藩と佐倉藩

これまで副総督柳原前光の動きを中心にして記述してきたが、一方、房総の諸藩にとって、どのように受け止められ、どんな行動を起こしたのであろうか。

江戸時代、房総全域は殆どが譜代大名、幕府旗本および幕府直轄地が占めている。しかも大名はいずれも10万石以下の中小藩主で、歴史的にみても10万石を越した藩は江戸初期の大多喜藩と幕末の佐倉藩の2藩に過ぎない。

そこで、房総を代表する大多喜藩（上総）と佐倉藩（下総）の2藩を採りあげ「房総の御一新」を考えてみよう。

先ず、その前提として両藩の生い立ちと幕末までの歴史を簡単に記す。

次表は両藩の藩主と石高を中心とした簡単な比較表である。（「全国藩史」（新人物往来社刊）より作成）

1　大多喜藩の歴史

天正18年（1590）8月、徳川家康の関東入国に伴い、徳川四天王の一人本多忠勝が上総国内において10万石を領有して、大多喜城主となったのが、当藩の起こりである。

（同時に地名も小田喜から大多喜に改められた。）

房総半島の僻地に、そんな大物を起用した理由は一にかかって家康が房総南部（安房）の戦国大名であった里見氏を怖れたためであると言われる。

なにしろ安房は海上交通が主であった当時にあっては江戸の喉元を押さえる要地であり、その地を房総唯一の外様である里見氏が治めるとあっては家康も安心できない。

そこで安房に北接する上総大多喜の地に最も信頼できる忠勝を配置、里見家の見張役としたのである。

案の定、その後里見家は大久保忠隣事件に縁座して慶長19年（1614）所領を没収され、のち断絶された。

里見の没落とともに、当初重要視された大多喜藩の地位も低下してゆく。

大多喜藩（上総）

年	藩主	石高
1590	**本多忠勝**（家康四天王）	10万
1601	忠朝	5
1615	政朝	5
1617	阿部正次	3
1623	青山忠俊	2
	廃藩（廃城）	
1638	阿部正能	
1651	正春	1，6
1702	稲垣重富（若年寄）	2
1703	大河内正久（奏者番）	2
	正貞（奏者番）	2
	正温	2
	正升	2
	正路	2
	正敬	2
	正義	2
	正和	2
	正質（老中格）	2
	（大河内氏9代160年）	
1871	（廃藩）	

佐倉藩（下総）

年	藩主	石数
1592	松平信吉（家康5男）	4万石
1602	松平忠輝（家康6男）	5
1607	小笠原吉次	1，2
1610	**土井利勝**（老中）	3—14
1633	石川忠総	7
1635	松平家信	4
	康信	3，6
1642	堀田正盛	11
	正信	
1661	松平乗久	6
1686	戸田忠昌	7
	忠真	
1701	稲葉正往	10，2
	正和	
1746	堀田正亮（老中首座）	11
	正順	11
	正時	11
	正愛	11
	正睦（老中首座）	11
	正倫	11
	（堀田氏6代125年）	
1871	（廃藩）	

忠勝は伊勢桑名に移封、大多喜には忠勝の2男の忠朝が5万石で入封した。

忠朝は元和元年（1615）の大坂夏の陣で戦死したので甥政朝が入封。その後、武蔵鳩谷より阿部正次、武蔵岩槻より青山忠俊（老中）と続くが、忠俊は家光の勘気を受け免職のうえ2万石に減俸され、ほどなく除封となった。そのため一時廃藩となり大多喜城も廃城となった。

寛永15年（1638）阿部正能が1万石で再び立藩した。寛文11年（1651）正能が武蔵忍に転出したあと従兄弟の正春が1万6千石で入封し城の再築に着手している。

元禄15年（1702）正春が三河刈谷に移封すると、同地より若年寄の稲垣重富が2万5千石で入封したがわず

か20日間で下野に移封した。

翌年相模甘縄より大河内（松平）正久が2万石で入封して、爾来、大多喜の地は大河内の領有するところになった。

以降、大河内氏は9代、約170年にわたって在封した。最後の藩主は大河内正質（老中格）であった。

2　佐倉藩の歴史

徳川家康の関東入国後の文禄元年（1592）、佐倉には家康の5男松平（武田）信吉が4万石で入封した。慶長7年（1602）信吉は常陸水戸に入封し、武蔵深谷より家康の6男松平忠輝が5万石で入封したが、翌年信濃川中島に移封し一時廃藩となった。

同12年尾張藩付家老（犬山城主）小笠原吉次が2万8千石で入封したが、翌年常陸笠間に移封した。

同15年下総小見川より土井利勝が3万余で入封した。利勝は老中として幕閣に重きをなし、数度の加増で14万2千石を領有するに至るが、寛永10年（1633）下総古河に移封した。

利勝の時代に旧千葉氏の居城であった本佐倉城（現酒々井町）に代わって佐倉城（現佐倉市）を築城、本拠としている。

利勝の後、豊後日田より忠総が7万石で入封、翌年近江膳所に移封、同12年摂津高槻より松平（形原）氏が入封、家信（4万石）、康信（3万6千石）と在封し、同17年高槻に移封、同19年信濃松本より堀田正盛が11万石で入封した。

その後、松平（老中）、戸田（老中）、稲葉と続いたが延享3年（1746）出羽山形より堀田正亮が10万石で入封し、ここに藩主家の定着をみた。

正亮（老中首座）は1万石を加増され11万石を領有し、そのあと堀田氏は6代、125年間にわたって在封した。

その間、正亮のほか正睦も老中首座を務めている。正睦は幕末、日米修好通商条約の交渉に当たったことで有名である。

また「蘭癖」とも揶揄された正睦は、藩で蘭学を奨励。後に順天堂大学となる西洋医学塾と診療所を開くなど「西の長崎、東の佐倉」といわれるほどの先進藩とした。

このように佐倉藩は、江戸創世期が絶頂で次第に衰退の途を辿った大多喜藩に代わって、幕末には房総を代表する雄藩に成長していった。最後の藩主は堀田正倫。

3　幕末の大多喜藩

前述の通り、幕末の老中格であった大多喜藩藩主大河内正質は、慶応4年（1868）1月の鳥羽伏見の戦いでは幕府軍総督を務めた。

この年の1月1日、大阪城で諸藩の大名に対して「討薩の表」（薩摩の討伐を命じる檄文）を掲げた徳川慶喜は翌2日、主力部隊を京に向け進発させた。

鳥羽伏見の戦いの始まりである。

総督大河内正質に従う旧幕府直轄軍は1万6千、それに会津、桑名の連合軍7千余の計2万3千余。

対する薩長同盟軍は6千余に過ぎなかった。

大河内氏は、三河国大河内郷から出て徳川家康に仕えて長沢松平家を継いだ家系の譜代大名で、正質は婿養子である。

正質は藩内に善政を布き、幕府でも奏者番から順調に出世した。慶応元年（1865）春には藩士を従えて大坂を警備し、15代将軍家茂の大阪城入りの供をしている。

翌年には旗本遊撃隊の指揮をとって京都詰めとなり、同年夏には若年寄、慶応3年（1867）12月には老中格に昇進した。

この順調な出世のため、正質は24歳の若さで幕府軍総督を任じられ、作戦立案などで重要な役割も果たしていたのだが、これが思わぬ危機を招くことになる。

結局、鳥羽伏見の戦いは幕府軍の敗北に終わり、正質は慶喜が江戸に脱出したあとも、大阪城の残務整理を済ませてから江戸に戻ったが、既に老中格を免じられて止むなく帰藩した。

正質は菩提寺の円照寺で謹慎し、東海道先鋒隊が進駐してくると、藩は抵抗せずに城を開け渡した。

しかし、正質自身は幕府軍総督であったことで責任を問われた。「慶喜の謀反を助けた」という罪状で下総国佐倉藩の預かりとなり幽閉された。

その後、正質は松平姓を捨て大河内の本姓に戻し慶応4年（1868）6月には大多喜藩知事となり藩政に専念している。

なお、正質の長男が大河内正敏。戦前の日本を代表する著名な物理学者で理化学研究所（理研）の初代所長を務めた。ついでながら正敏の孫の一人が女優河内桃子である。

4　幕末の佐倉藩

戊辰戦争が勃発したとき、苦しい立場に立たされたのは、当然、今まで幕府に恩顧のある譜代藩であった。譜代藩としての幕府への義理と、新政府軍が優勢だという現実の板ばさみにあった。

なかでも譜代藩が圧倒的に多い房総の地では特に深刻であった。

その代表的な例が佐倉藩11万石であった。

最後の佐倉藩主堀田正倫は、慶応4年（1868）2月、追討令が出された将軍徳川慶喜を救うべく、小田原

藩などとともに慶喜赦免の哀訴状を朝廷に提出するなど佐幕的な努力を続けていた。

だが、同年3月、さまざまな歎願のため藩兵300人を率いて上洛した正倫は、江戸をめざして進撃している新政府軍の東海道先鋒総督府に勤王誓書を提出したものの、態度が曖昧だというので、京都謹慎を申し渡された。要するに、佐倉藩では肝心の藩主が京都で人質にとられてしまったのである。

藩主不在の佐倉城に乗り込んできた新政府軍の副総督柳原前光は、前述の通り佐倉藩に出兵を要求した。

人質となった藩主と藩の命運を賭けて、家臣たちは徹夜で議論したが佐幕派も多くて結論はなかなか出なかった。早朝になってようやく重臣平野縫らの説得もあり、ようやく出兵の決定を下した。

だが、ずっと待たされてイライラしてきた若輩柳原は「佐倉藩の態度はなはだ曖昧なり」として、方針を変更して単独で佐倉を出発してしまったのである。

佐倉藩は慌てた。

それでなくとも藩主を人質に取られているのに、ここで出陣しなければますます立場が悪くなってしまう。

急いで藩兵300余人に柳原の後を追わせ、そのまま新政府軍に命じられるまま佐貫、木更津、宇都宮、常盤平と転戦することになる。

出兵したあともなお、藩論は揺れ動いた。その曖昧さに期待を掛けられたのか、逆に旧幕府軍に佐幕派として擧兵するよう勧誘され悩まされたという。

最後の藩主正倫は廃藩後も、寛政4年（1792）堀田正順によって設立された藩校（成徳書院）の流れをくむ旧制佐倉中学（現佐倉高校）の維持に尽力した。

今、校内にある記念館は正倫の援助により明治43年（1910）に建設されたもので、幕末珍しかった「ハルマ和解」「ドゥーフハルマ」などの蘭和辞典を見ることができる。

（しかし、その隣に同校出身の巨人軍長嶋茂雄選手のユニホームが陳列してあるのは、全く興ざめである。）

三　徹底抗戦した請西藩

このように戊辰戦争は譜代大名の多い房総諸藩には混乱と苦悩をもたらした。しかし結果的にみれば、佐幕を貫き藩主以下が官軍と戦ったのは僅か1藩（請西藩）だけである。

徹底抗戦に決起した上総1万石の請西藩については、既に書いたことがあるので（「まんじ」135号）ここでは簡単に留めたい。

請西藩主林家は清和源氏の支流にあたり、長く徳川家の直参旗本だったが、15代藩主のとき大名に取り立てられ請西藩を所領することとなる。慶応3年（1867）に僅か20才で17代当主となった林忠崇（ただたか）は左幕を貫き通す。

房総諸藩の左幕勢力を集めて挙兵した忠崇は徳川家や藩に迷惑をかけるのを恐れて自ら脱藩して出陣するのである。

藩主自ら脱藩というのは後にも先にも例がない。のちに世間からは「脱藩大名」といわれた。

忠崇軍は関東各地に落ち延びていた幕府残党あるいは会津、米沢など奥羽越列藩同盟の軍とともに各地を転戦するが、時の勢いに勝てるはずがない。連敗を続け、会津藩が降伏したのを知ると仙台藩を通じて降伏を申し出て、囚われの身となった。

請西藩は戊辰戦争を通じて、全国唯一の取りつぶしにあった藩であり、そのため藩主忠崇は維新後、全国300大名のなかで唯一、華族の特典を受けられなかった。

その後、忠崇は数奇な生涯を送ることになる。

かっての自分の領地に戻って農業に従事したり、東京府や大阪府の下級官吏として書記を務めたり、職を転々とした。

昭和16年（1941）に94歳で死去したが、昭和まで生き残った「最後の殿さま」として、それなりの人気を集めた。彼の死が我が国最後の大名の死だった。

四　その他の房総諸藩

次表は幕末時における房総諸藩の勢力図である。

（たたし、前述の大多喜藩、佐倉藩、請西藩は除く。前掲「全国藩史」より作成）

藩名		所在	初代藩主	石数	幕末藩主	石数	摘要
飯野	譜代	上総	保科正貞	2	保科正益	2	保科10代
一宮	〃	〃	加納久侍	1，3	加納久宣	1，6	加納4代
久留里	〃	〃	大須賀忠政	3	黒田直養	2，1	
佐貫	〃	〃	内藤家長	2	阿部正恒	1，6	
鶴牧	〃	〃	水野忠韶	1	水野順敬	1，9	
間崎	〃	〃			水野敏美	5	駿河より
山舞	〃	〃			滝脇信賓	1	〃
保網	〃	〃			太田正資	5，3	遠江より
川実	〃	〃			井上意直	6	〃
宿古	〃	〃			田沼意尊	1	〃
野山	〃	下総	忠俊	1	津田政敏	1	出羽より
尾房	〃	〃	平川家重	1	松平康学	1	
花	〃	〃	松科康正	2	久世広業	4，3	久世8代
	〃	〃	保光	1	松平忠愛	1，9	松平8代
	〃	安房	内藤清政	3	下総勝美	1，1	下総より
	〃	〃			田井忠正	1，3	〃
	〃	〃			多尾忠	1	駿河より
	〃	〃			西本	3，5	〃

特筆すべきは戊辰戦争の大きな節目となった徳川家達の駿河入封の直接的な影響を最も強くこうむったのは、当の駿河、遠江を除けば房総地区であったことである。

駿河、遠江に居所をもっていた7藩が押し出されるような恰好でここに転封してきたからである。

前述の通り、もともと房総には大藩がなく少数の譜代小藩と幕府領、旗本知行地が複雑に入り混じって存在していたことが新藩入封の好条件となった。

因みに幕末上総国の6割、下総国の5割は旗本領で占めていた。旗本数は千家以上、全国一の「旗本多国」であった。

「掛川市誌」によると、転封人数は7藩で6572人、家族まで加えると約2万5千人に及んだという。(「市原市誌」より)

なお、筆者の実家のある上総茂原村(現茂原市)は従来、鶴牧藩(上総市原　藩主水野忠順1万9千石)に属していたが、前記浜松から移封してきた鶴舞藩(上総鶴舞、藩主井上正直　6万石)の成立により、同藩の領下となった。

幕末に老中を務めた正直は、旧旗本領であった上総の原野を開墾して陣屋を築き、地名も鶴舞と改めた。

筆者はその鶴舞城址を探すのに苦労した。

僅かな土塁と古井戸一つしか残っていないからである。なにしろ「明治元年戊辰12月築城」とあっては、おそらく日本で一番新しい城址であろう。

既に太政官令によって逆に日本中の城は築城どころか取り壊しが始まっているのである。

御一新はもう日の前に迫っていた。

翌明治2年(1869)版籍奉還が行われ、全国の上地、住民は藩主の手を離れ新政府の管轄となった。房総では佐倉藩が率先した。

築城まもない鶴舞陣屋も壊された。僅か6ケ月の運命だった。

しかし旧藩主は依然として知藩事に任じられ君臨していたので、明治4年(1871)、廃藩置県が断行されることによって、旧幕府の残していた封建組織は完全に解消されたのである。

房総でも同年に木更津県、印旛県、新治県が成立し、さらに明治6年(1873)に木更津、印旛両県と新治県の一部が統一され、千葉県の誕生となった。

(了)

「農ある暮らし～私の日常～」(8)

古屋富雄

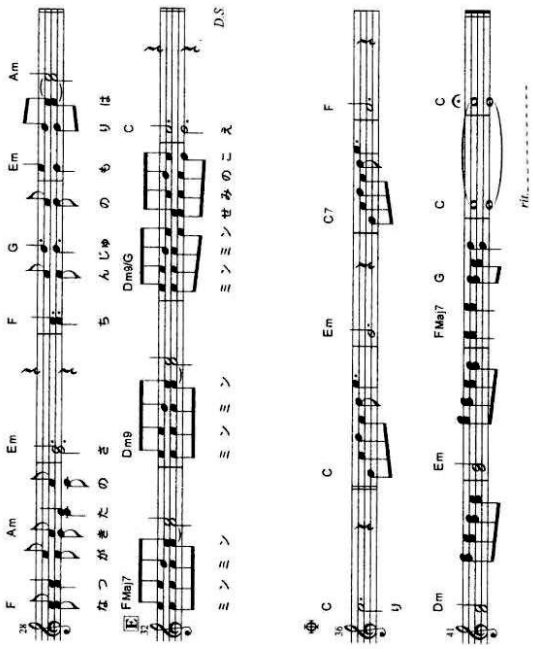
ひまわり

ひまわりが咲いたね
夏が来たのさ
入道雲は
大きな、大きな、大きな　かき氷

ひまわりが咲いたよ
夏が来たのね
終業式は
ドキドキ、ドキドキ、ドキドキ　通信簿

ひまわりが咲いたね
夏が来たのさ
鎮守の森は
ミンミン、ミンミン、ミンミン　蝉の声

ひまわりが咲いたね
夏が来たのさ
入道雲は
今でも、今でも、今でも　かき氷



千家尊福伝（二〇）

「年の始め」と共に逝った明治の巨人

村上邦治

はじめに

明治四四年七月混乱していた東京鉄道株式会社の社長として、電車事業を無事東京市に移譲させた千家尊福は、その二か月前東京府から東京商業会議所特別委員に任じられた。初めての実業界であったが、東京鉄道での経営手腕が、高く評価されたのである。

借金問題から、貴族院木曜会最高幹部としての政治力は失ったものの、これまでと全く別の世界と思われる実業界においても、先頭に立って交渉する行動力と、社内をまとめる人心収攬力は、民間の会社経営者として認められたのであった。

明治末日本経済は、日露大戦後の経済恐慌をようやく脱した。官営八幡製鉄所の操業開始による鉄鋼生産や池貝、日本製鋼など機械工業が飛躍的に発展し、電力の需要は大きく伸び始めていた。貿易では、領土化した満州・朝鮮・台湾に向けて、綿布・綿糸などの軽工業品が大量に輸出された。

大正三年（一九一四）には第一次世界大戦が欧州で勃発、日本の資本主義経済は著しい成長を遂げようとしていた。一方その裏腹に、工場法の制定や警視庁に特別高等課が設けられたように、劣悪な労働環境が蔓延し、それに反発する労働者を中心とする社会運動や労働組合などによる労働争議が相次いだ。

大きく発展する日本経済であったが、難しい問題を内包しており、尊福の会社経営力は、どの企業でも必要とされたのであった。

しかし、自ら興した出雲大社教（当初神道大社教）に、復帰せざるを得ない事情が発生したのである。

一　明治末期の宗教戦争

明治一五年（一八八二）神道大社教を創教した尊福は、出雲国造と大社宮司を弟尊紀に譲り、自らは大社教管長となり、その普及に全国を巡教した。東京分祠（東京出張所）の創建など各地に分院や教会所・出張所を開設、信者は急速に増加したのである。

布教地盤が整った明治二一年（一八八八）は、憲法制定、国会開設を間近に控えた時期であった。丁度この時明治政府最高実力者伊藤博文の推挙を得て、政治家の道へ転じることを決意した。尊福四三歳のときであった。大社教管長職（教団最高責任者）を甥の千家尊愛に譲り、自らは名誉職の総裁に退いた。

転身後元老院議官、貴族院議員と政治家としての地歩を築いた。その後貴族院議員のまま埼玉、静岡両県の県知事、そして東京府知事に就任し、地方官として府県行政を指揮すると共に、貴族院男爵出身議員を束ねた会派の最高実力者を同時に努めることになった。国政と地方行政の責任者として多忙を極めることになったことから、大社教総裁職についても、弟尊紀に継がせていたのである。

ところが司法大臣を辞め、東京鉄道社長として尾崎東京市長と売却交渉を詰めていた四四年六月、尊紀が病の床に伏したのである。そして五か月の療養後、一一月逝去した。尊福の政治家転身後、第八一代出雲国造、大社宮司、大社教総裁として尊福の役割を担ってきた中心人物を失い、尊福としても放置できない内部事情になったのである。

しかも宗教界は、明治末期から大正期にかけて、激変の真っただ中にあった。伝統、新興の各宗派が、信者拡大を目指し相競う、いわば宗教戦争の様相を見せた時期であった。

四四年八月第二次西園寺内閣が発足、内相には再び原敬が就任した。原は次年一月、神道・仏教・キリスト教の代表者を招き、宗教の国家への協力要請をした。いわゆる「三教会同」と呼ばれるものである。日本古来の神道・仏教に加え、初めて公の場で、キリスト教が肩を並べたのである。維新以来信仰の自由が掲げられたが、多くの弾圧を受けた。しかしキリスト教各派の救貧事業・孤児養育（孤児院開設）・施療活動（病院経営）など地道で真摯な布教活動は、まず下層階級に浸透し、信者を増加させた。さらに効果があったのは、各派とも教育活動に力を入れたことであった。特に当時遅れていた女子の高等教育に熱心で、各地に女学校を開校した。高等教育を受けた卒業生は、上流・名門の男性と結婚することが多く、その影響力は上層部に広がりを見せたのである。

一方維新当初、政府が発令した神仏分離令は、その意図を超え廃仏毀釈運動を起し、仏教各派は一時大きな打撃を受けた。しかし真宗を始めとして、民衆の間に根強い信徒を持つ仏教各派の反撃により、新政府が尊王攘夷運動の成果として復活させた神祇官を、すぐさま廃止に追い込まれるなど、政府の神道行政を縮小させた。西欧に追いつくための急速な近代化政策に備えて、仏教各派は内部改革を進め、一時揺らいだ結束を、再び強化することに成功した。布哇などへの海外移住が始まると、各派は積極的に現地に進出した。日清・日露両戦争では、従軍布教活動を行い、兵士の戦闘精神を鼓舞するとともに、信者の拡大や団結に大きく寄与したのであった。

明治政府発足時最も有利であったはずの神道は、国家神道政策がとられ、古来より伝わる各神社の由来や伝承を失った。明治一〇年代の祭神論争が終わると、急速に弱体した。その衰退を押し止めようしたのが、尊福の大社教特立であった。しかしその他既存の神社系神道は、政府の政策を受け、ただ自分の神社に籠るだけであった。

この時期それらに代わる様に、新興の神道系宗教が、民衆の間に飛躍的に広まり、信者を増やしたのである。幕末に立教した黒住教（公認明治一八年）、金光教（同三三年）、そして政治権力や社会（新聞雑誌等）から弾圧を受けながらも、全国に教会を広げ、戦争や経済不況が起きるごとに信者を増やしたのが、天理教であった。政府はついに明治四一年公認したのである。ほかの新興宗教とはけた違いの厳しい弾圧を受けこれに耐えただけに、信徒の団結力は強く、明治末には、教会は全国三千五百を超え、神道各派を圧倒したのである。

さらに明治二五年京都府綾部で開教された新宗教が目覚ましく拡大し、世間を驚かしていた。出口なお開祖、王仁三郎聖師を教祖とする「大本教」である。「国常立尊」の神霊が「艮の金神」で降臨し、乱れ切った地上の世界を作り替える「立替え立直し」を予言するものであった。日清・日露戦争やその後の経済恐慌に苦しむ都市部の労働者や、地主に搾取され続ける農民貧困層の共感を得て、急速に信者を増やしていった。四二年には綾部に大本神殿を完成させた。西日本しかも日本海側の農村部を中心に信者は増加した。

明治末から大正前半は、仏教各派の内部改革による復興、バンド結成による地方のキリスト教浸透、神道系新宗教の急拡大が重なり、宗教戦争ともいえる時であった。

明治一〇年代いち早く創教し、大きな発展をなし得た大社教とて、この大波の影響を受け、台頭する内外宗教各派と激しく競合する情勢となっていたのである。

二　大社教の体制確立

尊紀の逝去により、大社教の危機的情勢とみた尊福は、直ちに先頭に立つ覚悟を決め、出雲大社関連の人事に着手した。

まず自らは新興宗教の情勢を鑑み大社教の総裁に復帰し、再び信徒拡大の第一線に立ち、巡教に力を入れることを決意したのである。そして八一代尊紀の嫡子福麿を尊統と改名させ、八二代出雲国造を襲名させた。そして出雲大社宮司に就かせると共に、併せ大社教の副総裁として自らの後継者として、育成することにしたのである。

尊福には出雲に五女がいたものの、男子はいなかった。しかし東京で一緒に暮らしていた画家小川登代との間には、詩人元麿を始め、五男六女がいた。元麿の弟英麿（尊有と改称）を大社教二代目管長尊愛の長女と結婚させ、次の三代目管長を継がせる段取りをした。

そして八二代出雲国造の尊統を、五女一子と養子縁組をさせることにしたのである。この縁組により、自ら尊統の養父となった。

尊統と一子二人の結婚式が明治四五年六月、出雲大社において行われた。これにより千家家棟梁尊福は、出雲国造、大社宮司、大社教管長の体制を確立するとともに、千家家一族、上官ら神職、氏子、信徒に後継者を明確に示したのである。

こうして自らは大社教総裁として、信徒拡大を成し遂げる為、巡教活動に専念できる体制を整えたのである。しかし尊統と一子との結婚式が、もう一か月遅かったら、挙式は数カ月以上延期されることになったであろう。

一連の新体制移行は、まさにぎりぎりの時期に執り行われたのであった。

三　明治の終焉

明治四五年七月二〇日午後配布された官報号外は、全国民を驚かし、又深い悲しみに陥れた。宮内省が「天皇陛下去一四日より御病気の処、昨今御重態」と、発表したからである。突然の天皇重病の報に、東京株式市場は大暴落した。以降全国で、祭りや催し物が中止され、歌舞音曲は控えられた。また民衆はこぞって、神仏に御平癒の祈願を捧げた。新聞は連日陛下の体温、脈、呼吸など、病状を詳細に報道した。二重橋坂下門の辺りには、群衆が集まり、ご回復を祈る光景が毎日みられ、これらも全国に報道された。

尊福が天皇重態を知ったのは、新潟県内の巡教が終わり、一九日に帰京したばかりの時であった。新聞を見るや直ちに電報にて、出雲大社尊統宮司に対し、御平癒の祈願を指示した。二五日朝、出雲から急遽護符が届けら

れた。直ちに斎戒沐浴し、渡辺宮内相を経由して奉呈された。天皇の病状は公表以来憂慮する状態であったが、出雲大社による祈願の効があったのか、二三日は「やや御軽快」との発表があった。

「誠に喜ぶべき次第なり」（『原敬日記』二三日）

「悦ぶべし、悦ぶべし」（『田健次郎日記』二三日）

と、全国民は一様に安堵したのであった。

しかし二四日からの発表は、更に悪化の一途を思わせるものであった。二八日からは昏睡状態に陥り、二九日午後一一時前、遂に崩御されたのであった。原の日記によると、践祚の儀式準備の為、発表は二時間遅らせ、崩御は三〇日午前〇時四二分とされた。

三〇日真夜中の午前一時皇太子嘉仁親王が践祚され、神器、国璽御璽が承けられた。併せ元号は「大正」と改元された。この式には皇族方、西園寺首相ほか大臣、山県枢密院議長、井上、松方各元老、元帥等が平服で参列した。続いて皇后に対しては立皇后式が行われ、皇太后陛下と敬称されることになった。

天皇崩御については、三〇日早朝三時ごろから官報号外が各家に配られた。ほとんどの家は、号外が配られるや静かに家内に持ち込み、改めて明治天皇の数々の足跡を思い起こし、深い悲しみに落ち込んだのであった。

四　大正天皇即位大礼

新天皇は践祚後、翌日の三一日宮中正殿に於いて、日本を背負う文官、高等官、有爵者等を集め、朝見の儀を行い、次のような勅語を申し渡した。

「先帝に尽くしある所を以て朕に仕え、臣民また和衷共同して忠誠を致すべし」

これに対し西園寺総理大臣は、参集者を代表して、

「今より後、益々自分の利益を顧みないで努力し、日本の進運を担い、以て聖旨に応える」

旨の奉答をした。

この式には、千家尊福も男爵として参列した。

即位の大礼は、明治天皇の大喪あけの大正三年秋に行われる予定であったが、その半年前の四月に、昭憲皇太后（明治天皇皇后）が亡くなり、大喪の為さらに一年延期された。

大正四年一一月一週間にわたり、即位の大礼が京都で挙行された。まず午前京都御所紫宸殿で始まった。賢所大前の儀（神器の伝承と皇位の継承を皇祖に奉告）が行われた。次いで午後から紫宸殿の儀（高御座で臣民に皇位についたことを宣言）があり、最後に大隈首相が臣民を代表して寿詞を奏上、参列者全員による万歳を三唱し、第一日目は終了した。

この時大隈首相の歩行が覚束なく、珍事が起きた。

「大隈が殿上にて寿詞を読みいる内に、外間から万歳が起き、響き渡った」（『原敬日記』一〇日）

大隈が歩行に手間取り、二分遅れた為の珍事であった。

また三人の介添えにより殿上に登降、特に階段を降りるときには、二歩退きすぐに陛下に背負向けて降りたことは、誠に不体裁であったと、大隈の振る舞いを政敵である原敬は日記で非難した。

次の日には賢所において、御神楽の儀（天照大神に神楽舞と演奏を捧げて神の恩を感謝するもの）が行われ、昨日の儀式に参列した方々が、宮中に伝わる神楽の舞を鑑賞した。

もっとも重要な儀式である大嘗祭が、一四日夜から一五日未明にかけて仙洞御所に設けられた大嘗宮において、古式にのっとり執り行われた。毎年稲の初穂を皇祖神に供え五穀豊穣を感謝する新嘗祭が行われるが、皇位継承の時には、皇祖神天照大神と共食する（神人共食）ことで、新天皇は天照大神の子として、天皇の資格を継承する儀式としてとくに大嘗祭といわれる。

一六日からの二日間にわたり、即位を披露し祝福を受ける大饗の儀が行われた。初日は日本料理が、二日目は西洋料理がふるまわれた。

こうして国を挙げての一連の御大礼式が行われた。これら儀式に、千家尊福は勲一等旭日大綬章者として参列した。四三年前七九代父尊澄から出雲国造の継承儀式である神火相続の火継式や、毎年一一月に行われる古伝新嘗祭を思い出しながら、大礼を間近に詳しく体験することが出来たのであった。こののち大礼の様子は、各地巡教の講和の中で披露し、聴衆を喜ばした。また出雲大社教千家尊愛管長は、神道界を代表して尊福と同じくこれら儀式に参列したのである。

翌年一一月には、天皇の第一皇男子裕仁親王（昭和天皇）の「立太子の礼」（皇太子であることを内外に表明する）が行われた。明治四二年に制定された立儲令に基づく最初の立太子礼となった。

五　総裁巡講

明治から大正へと変わる中、総裁に復帰した尊福は、出雲大社教、神道、日本のため、以前に増して、全国各地へ巡講を始めた。就任した明治四五年には六七歳になっており、当時としてはすでに高齢であった。しかし布教拡大の情熱はいささかも衰えず、体も壮健であった。

この年は、六月娘一子と尊統宮司との養子縁組、七月天皇崩御、大喪があり、公私とも多忙な一年であった。しかし暑さ寒さも苦にせず、就任早々、七月炎天下の九日間、新潟県下（新潟、新発田、長岡、直江津、高田など）

を、一一月には降雪の中、兵庫県下（朝来、豊岡など）、鳥取県下（鳥取、倉吉、米子など）を一二日間にわたる巡教を行った。

大正一二年には五月広島県下（呉、尾道、三原、福山など）を一三日間、九月には山口県下（山口、徳山、大島、那珂など）を二八日間巡教し、帰途神戸にも立ち寄り、講演した。さらに一一月には寒気の中、岐阜県下（岐阜など）を二四日間にわたりくまなく訪れ、大社教、国民道徳について説き続けたのであった。

一三年は議会終了後三月から四月にかけて福岡県下（小倉、福岡、など）四〇箇所を、佐賀県下（唐崎など）を五〇日間という長期間にわたり、一〇月には山口県下（長門、下関、美弥など）、島根県下（美濃、鹿足郡など）両県を二四日間、一一月から一二月には京都府下（亀岡、綾部、福知山など）の大本教本拠地を中心に一か月、兵庫県下（舞鶴、宮津など）を一か月近くにわたり巡教を行った。

今度の巡教には、出雲大社教大教上や氷川神社宮司、国学院教授などが随行した。大社教に関わる講話は同伴者に任せ、尊福はもっぱら日本国民としての道徳昂揚の重要性を説いたのであった。

尊福の巡教訪問は三〇年前とは大きく異なった。東京府知事を一〇年間務め、西園寺内閣の司法大臣、勲一等大綬章者の来県には、知事を初め市長の出迎えや歓迎会が開かれるのが常であった。各地の講演会場には市長（町長）、議会の長、警察署長らが応対した。

以前の一宗派代表としてではなく、既に日本を代表する政治家、行政官、実業家としても著名な人物として、まさに全国に名前の知れわたる有名人であった。めったにない名だたる人の講演を、直接聞くことができる会場はどこでも民衆で一杯になった。会場は小学校、中学校、師範学校などの講堂、神社の境内、都市では公会堂、劇場、県会議事堂などで開かれた。聴衆は信徒よりも周辺から集まった一般民衆が多かった。無論いつもその地の行政の最高位にある者が参列した。尊福はどこの会場でも分かり易く講演し、日本人としての心構えや人としての道についても説き、聴衆を引き付けた。

講演の合間や、終了後には、その地の神社を参拝した。また地元の人々から、揮毫や記念植樹、記念写真を所望された。尊福は嫌な顔をせず、できるだけ応じたので、訪問先の人々には大変喜ばれた。夜には、歓迎会が開かれ、少しでも尊福の話を聞き、同席したいと願う人々が多く、これにも嫌がらず出席した。こうした巡教活動は、尊福総裁が訪問し講演するというだけで、多くの人が集まり、出雲大社教信徒拡大に大きく貢献したのである。

しかし巡講するには大変な体力を必要とした。鉄道が次第に普及し汽車の利用ができたものの、降車後は、舗

装のない道路を、自動車、馬車、人力車、馬を使い、また汽船や小舟にも乗る厳しいものであった。一回二～三週間の巡教活動は、既に七〇歳に近い尊福を悩ましたに違いない。しかし尊福は依頼があれば喜んで巡教の先頭に立ち、大社教のみならず、日本人として最も大切な、道徳の必要性を説き続けたのである。

大正四年は、遅れていた大正天皇の大礼諸儀式が一週間にわたり京都で行われたが、これにはすべてに参列した。

この年は七〇才を超えていたが、各地から来訪の依頼は益々増加し、これに積極的に応じた。

まず三月から四月にかけて四〇日間かけて岡山県下（岡山を初め備前、備後、備中、美作など三二か所）を丹念に回った。長期間巡教したのには、新興の金光教、黒住教の本拠地であり、その対抗でもあった。帰途には福知山、篠山に立ち寄り、三日間講演をした。大本教の拡大に、大社教として侵食を許さない姿勢を示すものであった。

五月末から七月上旬にかけて四〇日間愛媛県下（松山、今治、西条、大三島など）四〇か所を超える講演を行った。

九月には山形県神職会の依頼により、一一月の御大礼の意義について講演を依頼され、一週間山形、米沢など七か所で御大礼大後援会の講師として招聘され、践祚即位、大嘗祭の由来と萬世一系の皇統と奉戴せる国民の忠君愛国について講演した。神道界の第一人者として依頼されたのであった。

大礼直前の一〇月には兵庫県下（神戸、姫路、明石など）を四週間回った。

大正五年には立太子礼が行われたが、更に過密な巡教活動を行った。

帝国議会終了後三月から四月にかけて大分県下（大分、日田、宇佐など）一か月間三六か所で講演した。

五月には大阪府下（枚方、岸和田、堺など）を一〇日間、大阪府国学院の招待により、敬神忠操養成、道徳涵養の趣旨について講演した。

六月には二週間茨城県下（水戸など）を巡講。八月は島根県（大田、浜田、松江など）を一週間訪問した。

立太子礼前の一〇月には岐阜・滋賀県下を二二か所、立太子後は徳島・香川県下を四週間にわたり巡講した。

この年、満七〇歳になり、政府は正三位から従二位へ昇叙させた。

大正六年七二歳になったが、年齢を無視したすさまじい行動力で、依頼された多くの地を訪れた。

議会の終わった四月下旬、愛知県下（名古屋、熱田、大垣など）を五日間、七月には二週間滋賀県下（大津、

彦根など）を回った。八月から九月にかけては石川県下（金沢、小松、七尾など）を一か月間訪問し、巡教の旅をした。

休む暇なく一〇月から一一月にかけて、愛知県下（名古屋、瀬戸、一宮など）を三週間、一一月下旬から一二月には高知県下を三週間回った。なんと七月から一二月の半年間は、毎月地方巡教を敢行したのであった。

さすがに年末の高知訪問では、終わりの数日間は体調を崩し、繰り上げて帰途せざるを得なかった。

すでにもはや体力の限界を超えていたのである。

六　巨星堕つ

大正七年（一九一八）正月元旦、四方節による祝日にもかかわらず、小学生は拝賀式のため登校した。その式では尊福が二五年前に作った『一月一日』の

「年の初めの　例とて　終なき世の　めでたさを」

と、皆で二番まで合唱した。式後生徒は帰校中もこの歌を歌いながら、晴れやかな気持ちで帰宅した。

前年一二月の下旬まで過密な巡講をこなした尊福は、朝から例年通り新年の儀式を主宰し、その後は挨拶に訪れる年賀客を、いつも通り和やかに談笑してもてなし、新年を迎えたことを共に祝ったのである。

来客が一服した午後、少し風邪気味であったことからめったないことであったが、臥床に入り静養した。

夜に入り、容態が急変し、午後九時過ぎ心臓麻痺により急逝した。誠にあっけない最後であった。総裁に復帰以来、大社教・神道・日本のために、全国を訪問し、休む暇もない過密な活動によるものであることは、だれの目にも明らかであった。しかし少しも厭わず、大社教分教会の要請や、各府県の神職会の招聘、知事からの依頼に、喜んで出向いた。特に前年は、年末まで超人的な日程をこなし、知事・市長から生徒や学生にいたるまで、日本人としての道徳の涵養を説いたのであった。

『東京朝日新聞』は四日付で「千家男逝去す」の大見出しで、ふくよかな白髭の顔写真と共に、

「貴族院議員男爵千家尊福氏は元日午後二時頃迄上渋谷二四の自邸に年賀客面会し居たるも、気分悪く其の儘臥床し同夜八時過ぎ頃漸く夕食を認めたる後、便所に赴きたるに突然苦痛を感じ家人に扶けられて寝所に入ると、間もなく心臓麻痺を越し、人事不省に陥いたれば、直ちに最寄りの瀬戸医学士を招き、数回の注射及び人工呼吸等応急手当を施したるも、其の甲斐なく午後九時、終に逝去せり。享年七四。」

と、尊福の亡くなるまでの様子を詳しく報じた。

政府は三日、特旨を以て位一級被進として、正二位に叙した。民間人としては従一位（伊藤博文ら）に次ぐものであった。さらに特別の思召を以て、祭粢料金千円が下賜された。

危篤の電報により、出雲より千家尊統宮司夫人で実の娘一子と千家尊愛大社教管長は、直ちに東上したが間に合わなかった。地元には三日、「千家男爵薨去」の発表が行われた。八〇代出雲国造として出雲大社宮司であり、出雲大社教を興し、長年杵築の振興に力を注いだ恩義ある尊福の死を悼み、町民は悲嘆に暮れた。正月三が日であるにもかかわらず、華やいだ声や歌、笛太鼓の響きはなかった。また各家とも新年の飾りを撤して、弔意を表したのであった。

七　告別式

五日の夜、まず渋谷白邸に於いて、千家管長を斎主として移霊祭が催された。

翌六日には、東京青山斎場において告別式が執り行われた。貴族院議長徳川家達公爵、後藤新平内務大臣、松室司法大臣など政治家、華族、軍人、各宗教団体代表、中央官僚・地方議員や職員、歌人など文化人、そして実業界からも多くの人が別れを告げた。尊福の多方面での活躍を反映し、参列者は千名以上にのぼった。

遺体は東京駅発午後九時五〇分、降りしきる冷たい雨の中多くの人々に見送られて、故郷で行われる本葬のため、出雲に向かった。

静岡停車場では、尊福が二〇年前知事を務めた任地であったことから、信者を始め県職員や民衆も別れを告げるため集まり、尊福を見送った。豊橋、名古屋でも多くの大社教信徒や官民が待ち受けた。

大阪停車場では府内を始め、京都・兵庫など近畿地方の信徒が尊福を悼み最後の別れのため多数集まり、霊柩を乗せた列車を見送ったのであった。

山陰線に入り積雪が深くなっていたにもかかわらず、何度も巡講のため訪れた福知山、和田山、城崎では数時間も前から汽車の到着を待ち続けた。烈風・氷点下の厳しい天候であったが、数里の長い道のりも厭わず尊福を追慕するため、長時間待ち続けたのであった。

鳥取、米子にはさらに多くの送迎者が集まった。降雪のため列車は五時間遅れたが、寒さの中震えながらも到着を待ち続け、短い停車の後尊福を見送った。

松江には、未亡人俊子夫人、長女毛利国子、長男で詩人の元麿、尊統大社宮司ら、一族の主要な者が迎えた。松江からは親族も同乗し、尊福の遺体と対面した。

国鉄大社駅には東京駅を出て二日半かかり、九日午後四時到着した。地元小中学生や地元民ら数百名が、一言も発することなく厳粛な面持ちで、降雪の中迎えた。駅

からは大礼服に飾られた霊柩は、数十名の地元信徒に担がれ、千家邸まで向かった。沿道の両側には付近の民衆が列をなし、各戸は弔旗を掲げ、地元杵築出身の偉大な恩人に、最大の弔意を表したのであった。

八　本葬

一一日尊福の葬儀は、一〇時より白邸で大社教に則り、喪主八二代出雲国造千家尊統、斎主大社教管長千家尊愛により執り行われた。霊前には寺内正毅首相、大隈重信前首相を始めとする政実業界からの供物で埋まり、左右には大小の真榊で装飾されていた。

家族、親族に続いて、法相、検事総長、大審院長らの代理者が着席し、地元からは、知事、郡長、代議士、県会議員、松江歩兵第三四旅団長らと共に、大社神職、大社教分院教会長らが参列した。

最初に斎主尊愛管長が霊前に進み、厳かに祭文を奏した。次に松室司法大臣（代理松江地方裁判所長）の弔詞代読が続いた。最後に玉串奉奠に移った。最初に喪主が捧げ、家族、親族がそれに続いた。参列者に移り、司法大臣代理、有爵者、代議士、旅団長、島根県知事らが玉串を捧げた、その後は一般会葬者が許され、霊柩に深く拝礼した。

式が終わると、斎主他参列者が退席した後、出棺準備に取りかかった。墓は五町離れた出雲国造家累代の墓所であった。棺は四〇名に担がれ、「故貴族院議員正二位勲一等出雲国造男爵千家尊福奥津城（墓所）」と記した大墓標や、拝受した勲一等旭日大綬章など勲章・記念章を掲げ、斎主、喪主、家族・親族、参列者が続き、その後多くの一般会葬者が追った。墓所では、埋葬祭が行われ、埋葬詞が斎主より奏上された。その後霊柩を墓穴に移され、式はすべて終了した。

この日杵築町内では各家とも町旗に喪章をつけて哀悼の意あらわし、葬列の両側には小・中学生が並び、その後ろには一般拝礼者が霊柩を見送ったのであった。

享年七四歳、波乱に満ちた一生を送った千家尊福は、今も生まれ故郷杵築出雲大社近くの、千家家代々の墓所に安らかに眠っている。

今年は千家尊福が亡くなって、ちょうど百年になる。

おわりに

平成三〇年は明治維新一五〇年にあたる。幕末の尊皇攘夷運動、徳川慶喜の大政奉還、戊戌戦争、薩長による明治維新政府樹立などについて、従来の視点を変え、これ

れまでの歴史の通説を大幅に変更する、大胆な見直しや提言する書籍が多く出版されている。

何はともあれ明治の四五年は、徳川幕府外交の基軸であった鎖国から開国へ、内政では、二六〇年続いた幕藩体制から立憲君主による中央政府体制へと、日本は大きく舵を切り、東亜細亜で西洋諸国からの進出を防いだ唯一の国であった。富国強兵・殖産興業を優先させ、国力強化に努め、清・露国という二大国との戦を勝ち抜いた。そしてついに列強諸国に肩を並べ追いつくまでに、急速に発展をとげた四五年間であったことは間違いない。

明治という大きく変革した時代に、千家尊福は登場した。前半生は宗教家として若くして頭角をあらわし、二七歳で第八〇代出雲国造を襲名、出雲大社大宮司に就任した。

進出してきた耶蘇教に対抗するため、太政官から大教正に任命され、しかも西部管長として神道教化の責任者になる。若輩ながら神道界にあって、行動派神道家として活躍した。

宗教家時に特筆すべきは、祭神論争の一方の旗頭になったことと、出雲大社教特立の二つであろう。

祭神論争では、顕露界（現世）を統治する皇孫（天皇）に対し、尊福は「大社が祀る大国主神が幽冥界を主宰し、全国の神社を総括する」と主張、『日本書紀』に謳われており、天照大神、皇孫神と並列で共に祀ることを訴えた。尊福の主張は、江戸中期の本居宣長からの始まる国学に沿ったものであった。そして何よりも、神道では死後の世界は、穢れとして逃避してきたこれまでの神道思想に対する挑戦であった。これまで死後の世界は極楽浄土とする仏教の独壇場であった。尊福の主張が認められれば、死後の世界についても神道で取り扱うことができることになり、葬儀以降における儀式を、仏教の独占から奪い取ることができるのであった。

尊福の主張が勝てば、仏教と同じく神道においても死後について何十年もの間関与できることにつながる。神道界の大半を占める貧乏神官は、経済的に大きく救済されることを意味していた。伊勢神宮派は国家神道の確立を目指し、大国主大神を天照大神と同等に祀ることに徹底して反対した。あくまでも最高神は唯一天照大神だけではならなかったのである。尊福の大社側には半数以上の神官・宮司が賛同し、支持の上でも理論論争でも優位にあった。この論争は神道界内で何度も行われたものの、決着がつかなかった。政府・伊勢派は、やっと最後の手段である天皇の裁可を求め、大社側の訴えをしりぞけ、伊勢神宮派の主張を認めたのである。この論争では、尊福は過半の神官・宮司を統率し、真っ向から政府（主に薩摩）と対等に対峙したのである。

祭神問題は全国の神官宮司を二分した大論争に発展し

た事に懲りた政府は、神官はただ神社に奉仕することに専念させることにし、宗教活動を禁止した。この政策に身を挺して、出雲大社や大国主大神を信奉する信者を護り、拡大を実践するため大社教を特立したのは、全国幾多の神官・宮司のうち、ただ一人尊福だけであった。

直ちに宗教活動が禁止された大社宮司を投げ捨て、出雲大社教の創教により、信徒の拡大に奔走したのである。この素早い決断と率先した行動が、尊福の天性の一つであった。新たに東京分祠を設け、東日本の拠点とした。その後逐次全国各地に支部・教会を創り、大社教信徒拡大に奔走した。これまで大社信仰は御師により広めてきたが、当時生き神様と言われた国造宮司尊福が、直接全国を巡教したことから、信者拡大の効果は抜群であった。出雲大社（出雲大社教）中興の祖と言われる由縁である。

全国に拠点を網羅し一段落した明治二一年（一八八八）六月、憲法公布半年前大転身を図る。政府の最高実力者伊藤博文により、先見性、行動力、指導力、人望を買われて、元老院議官に推挙され、政治家になった。国会開設直前、新しく始まる貴族院の人材を求めていた博文に登用されたのである。男爵の中では、とびぬけた人身掌握力から、元老院議官時から早くも頭角を現した。

帝国議会開設後、貴族院議員として、男爵群の指導的立場に立つと共に、地方官として埼玉、静岡両県の県知事に任命され、行政官との二枚草鞋をはく。双方とも両立させ、両知事に就任するや、県の産業育成や教育機関の充実整備に注力し、議員、職員、県民に慕われた。何より名門の出身でありながら、細かいことは職員に任せ、地元の将来のために自ら行動した。金に一切執着せず、政府や中央行政府の官僚に対し、遠慮なく地元のために発言する尊福を頼ったのであった。

そして地方官としては最高位の高等官一等東京府知事に就任、山県内閣（第二次）、伊藤内閣（第四次）、桂内閣（第一次）、西園寺内閣（第一次）と、日露戦争をはさみ四内閣、一〇年という前代未聞の長期間その地位にあった。

一方貴族院では男爵層をまとめ、木曜会の最高幹部として、山県系官僚が圧倒的に勢力を占める中、日本の将来を睨み、戦争を避け西欧諸国とも協調し、経済的発展を優先する伊藤博文を、貴族院側から支え続けた。立憲政友会が結党されれば直ちに同調し、西園寺、原を貴族院側から支援したのである。

そして明治四一年三月、社会主義者の扱いが最も難しい時期に、うってつけの人物として司法大臣に任命され、短期間ではあったが法律に基づき司法大臣の職を、やり遂げたのであった。

大臣辞任後は、さらに転身し実業界に請われ、合併会社でいざこざの絶えない東京鉄道の社長に推される。これでも社内を取りまとめ、東京市長である尾崎行雄を圧倒する売却交渉で成功させた。実業界においても如何なくその実力を発揮したのである。

宗教家から転じて、すべて初経験であった地方官、貴族院議員会派最高実力者、司法大臣、東京鉄道社長の役職を全うした稀有な人物であった。宗教界という狭い分野の第一人者が、全く異なる世界でも大きな業績を挙げたのである。

ただ一つ尊福の欠点は、名門であるがゆえに、金については無頓着のところがあった。祭神論争や大社教拡大で大きな借金を作り、この時は出雲大社に伝わる貴重な品々を売却し返済した。

二回目は司法大臣後に発覚した一二〇万円（現在での六五億円）に上る巨額な借入金であった。男爵層の支援資金に使われたということで、今度は政実両界で負債整理委員会が設けられ、そこで処理されることになった。しかしこれにより政界での発言力を失ってしまう。

まさに尊福の人生は振幅の激しいものであったが、どの立場でも近視眼的ではなく、常に将来を見据え、先頭に立った行動でやり遂げた。大変革を遂げる明治の時代、その時代が要請した能力を持ち、如何なく発揮した人物だったと言えよう。そして彼を支えたのは、八〇代続く、名門出雲国造としての矜持と、本人が持って生まれた資質であった。

彼の一生は、出雲国造家という皇室に次ぐ名門を継ぎ、「天照大神の命により大国主神を祀る」ことを信念とした。そしてなによりも第一に皇室を護り、日本を着実に発展させようとした一生であった。しかしこと神道では、天照大神の下に大国主神が位置するのではなく、あくまで「顕界」と「幽冥界」とを各々主宰する二大神論を唱え、妥協することはなかった。

出雲大社を尊福が名づけた正面の神門通りから入ると、勢溜といわれる大社内最初の鳥居がある。そこを通ってすぐ右に一メートルの台座の上に等身大の「千家尊福公銅像」がある。ふくよかなひげを蓄え、大礼服まとい、ややいかめしく見下ろしている。この銅像は昭和三八年五月、明治中興の祖として氏子が寄贈したものである。

この銅像に微笑みはなく、出雲大社のみならず、日本、の行く末をじっと見つめているように思える。

あとがき

大社を訪れたのは四回を数えるが、尊福像に会えたのは二回目の時であった。広大な境内には「ムスビの御神像」や「御自愛御神像」などがあるが、奉仕する側の銅像とは、よほど卓越した人物であろうと思ったのが最初であった。

尊福について調べてみても、業績や人物像を描いたものは意外なほど少ない。八二代国造尊統が書いた『出雲大社』にも七～八頁にわたり、出雲大社教特立を中心に書かれているものの、その生涯についてはよく理解できなかった。

吉川弘文館の「人物叢書」や、山川出版社の「日本史リブレット人」シリーズにも取り上げられていない。文庫や新書を探しても、千家尊福の生涯を書かれたものは見つけることが出来なかった。出雲国造で出雲大社宮司という宗教人でありながら、埼玉、静岡両県の県知事を務め、なんと東京府知事の職に一〇年近くあり、その後西園寺内閣の司法大臣になるという、波乱に満ちた生涯を送った人物であるにもかかわらず、取り上げられていない。

同人誌『まんじ』への加入を許されたのが、一二八号（平成二五年五月発行）の「古代出雲国筆頭　熊野大社の盛衰」からであった。一二九号にその続編を書き、さて一三〇記念号（平成二五年一一月）には何を書くのか思案していたところであった。

平成二五年は二〇年ごとの伊勢神宮の「式年遷宮」と、出雲大社のほぼ六〇年に一度（式年制ではない）行われる「平成の大遷宮」という大行事が、同じ年に行われるという、めったに見られない年であった。

出雲大社ではその五年前に、御神体を仮殿（現拝殿）に移された後、本殿の内部が一般公開された。通常は瑞垣に囲まれ、遠くからやっと本殿の屋根が見える程度なのに、本殿に登ることができ、廊下から内殿までもが公開されるのだ。内殿と言えば、徳川家康の孫で松平家の始祖直政がお国入りの時、「御神体を拝みたいので内殿の扉を開け」と命じたにもかかわらず、千家・北島両国造は断り続け、祟りもあり結局拝することが出来なかった、との逸話が残っている。

本殿公開は五九年ぶりとのことで、地元は無論全国から見学者が集まり、五時間待ちが当たり前であった。あまりの多さに大社側は当初の予定を変更し、七月も新たに公開日を追加設定した。

七月中旬振替休日の猛暑の中、せっかく参拝したが本殿を見学するには長時間待つことを余儀なくされるので、諦めて拝殿にお参りした。その隣の空き地に、見学者待機向けの大テントが設置されていたが、昼直後という時間帯と、猛暑という悪条件からか、三〇名程度しか待っていなかった。急遽見学者の列に並び、わずか二〇分待ったのみで、本殿に登ったのである。まさに奇跡としか言いようのないことであった。

床から急な階段を一五段上ると本殿の大床につく。地上から約四～五メートルの高さがあり、実際に上るとその巨大さに驚いた。廊下を一周しながら内部を拝観するのだが、

西洋人として初めて昇殿を許された小泉八雲が、「日に映るものといえば、ごく普通の神道の飾りものとご神座の外側だけ」と、記述している通りであったが、そこに使われている巨木に驚かされた。西に向いているといわれていた神座も拝見されたし、江戸中期に天井に描かれた「八雲の図」も、昨日書かれたと思えるほど、七色に彩られ雲は鮮明そのものであった。

この時の強烈な大社本殿の印象と千家尊福公の銅像が頭から離れなかった。

神道、『記紀』、本居宣長・平田篤胤、出雲大社などについての知識はほとんどなく、しかも明治時代については以前から関心はあったものの、常識程度のものでしかなかった。

だがこれまで尊福の生涯を書いたものはない。基礎知識もないが、これまで尊福の一生を描いたものがないのであれば、調べる価値はある。明治のことだから、史料は多いはずだ。六八歳まで勤めた会社生活から解放され、時間はたっぷりある。何とか当時の史料を集め調べていけば、自分なりの尊福像が描けるのではとの、全くの楽観的で少し野心的な思いから、取り組みを始めた。

記念号には『千家尊福伝』第一回として、「最高位より上を求めた少壮宮司」と題し、二七歳と若輩ながら、新政府の神社社格制度により、最高位の官幣大社に格付けされながらも、伊勢神宮と同格の「別格」を請願するという、理論家で熱血漢の姿を描いた。

しかしこれから五年間にわたる苦闘が始まった。尊福の足跡を追うのがこんなに難しく、多くあると思った尊福に関する史料は意外に乏しく、いくら探しても尊福の姿を見出させない日々が続けた。神道分野の専門書を読み、その脚注の書物や、大学の出す研究書を読み続けた。

できるだけ本人の書いた請願書などの一次史料からその姿を追いたい。次には日記（原敬、田健次郎）や実録（明治・昭和天皇）、当時の新聞・雑誌を優先にして調べた。しかしそこにも、わずかしか残されていなかった。

仕方なく、とにかく千家尊福と名前が書かれていると思われる書籍・論文を読みまくった。それでも尊福には会うことができない日が続いた。初めて国会図書館を訪れ、日比谷図書館、松戸図書館には煩瑣に通い、複写した。地方官に就任したころには、日比谷公園内に市政専門図書館があることを知り、そこでも史料を調べ複写した。

原稿の締め切りは三か月毎である。文章力が著しく低いことは、最後に加入した者であることから容赦願えるとしても、わが国有数の同人誌である『まんじ』の発刊日を、自分のために延ばすわけにはいかない。

締め切り月は、下手だが好きなゴルフも凍結、三〇坪ばかりの芝や菜園、果実木の手入れも全く手につかなかった。無論映画や絵画展を観る余裕もない。職場の同期会にも欠席した。ただただ史料と原稿に向かう日々が続いた。

苦労したのは、明治の史料が読めないのである。戦後の当用漢字教育を受けた者には、初めて見る漢字に四苦八苦した。漢和辞典を購入し、一字一字辞書を引きながら、読まざるを得なかった。時間が足らないのも已むえないことであった。

明治には多くの史料が有り余るほどあり、事実を判別する能力も問われた。その中で、相反する記述があり、はたして事実は何か、尊福はどんな役割は果たしたのか、疑問を解くにも時間はかかった。

しかし史料を読み進めていく中で、尊福に関わる新しい発見に出会った時は、歴史の醍醐味を味わうことができた。

日露戦争講和時の日比谷騒動を鎮圧するため、権限がなかった府知事の尊福が、軍隊導入を要請した本人であることが、明治天皇紀にわずか二行であるが、

「是に於いて東京府知事男爵千家尊福は兵力を以て之を鎮圧せんことを東京衛戍総督に要求せり」（明治三八年九月五日）の一文があった。

司法大臣を要請した尊福との会談で、原敬の日記に、

「千家の辞退は負債多く或いは急劇に迫られ、失態を現す様な事ありても困る」

「何れ早晩整理を要する事と思はるるに因り、寧ろ此際整理する事となし、余（原）及び西園寺も相当の助勢をなすべし」

「頗る其厚意に感じ斯くの事ならば御受致すの外なし」（明治四一年三月二三日）との記載を見つけた。

田の日記では、

「此の日松元剛吉氏来り、千家尊福男負債整理委員会受託事を請ひ、且つ渋沢男其の他知名の士を以て既に諾す者数名に渉ると告ぐ。即ち名義的の条件を以て之を諾す。蓋し千家男は債務約百三拾万円に上ると云ふ。巨額驚くべき也」（明治四二年一二月三一日）と書かれていた。もう少しで見逃すところであった。

これらに出会ったときは、歴史の面白さが満喫できた。

一応出来上がった原稿を読みなおす毎に、舌足らずや重複、さらに誤字が多く見つかり、何度校正したら済むのだろうかと、己の未熟さに呆れるばかりであった。

しかし、何とか校正し終わり、ぎりぎり締切日に編集長に送信した時の達成感・安堵感は、何にも代えがたいものであった。七〇歳にしてこうした充実感を感じることができたのも、同人誌へ期限に投稿するという明確な

目標があったからこそ、この幸福感が得られたのである。

しかし同人の方々には、随分迷惑をおかけした。合評会では主宰者三戸岡先生から、いつも多くのご指導を受けた。指摘されることは理解できても、史料が見当たらず、泣く思いであった。急逝された前中山、現鍋屋両編集長には、誤字や表現について指摘され、迷惑の掛け通しであった。一部の同人から、意気消沈している私に、「よく調べているね」とのお褒めの言葉を頂いた時には、勇気付けるお世辞の言葉とは分かりながらも、率直にうれしかった。

一五回を終えた頃、出雲学を提唱されている福岡県立大学岡本雅享准教授と尊福について、意見を交わすことができた。岡本准教授は地方紙に「千家尊福国造伝」を連載されることになり、取材で東京分祠を訪れ、千家活彦分祠長から『まんじ』で私が掲載中であることを教えられたとの事であった。三戸岡先生の忠告で、事前に職場の先輩で尊福の曾孫にあたられる千家光雄氏に紹介され、挨拶に伺っていたことが、さいわいした。これまで日をみなかった尊福を、一緒に追いかける同志的なつながりを、勝手ながら感じたことは楽しかった。

とにもかくにも、はじめての長編になる『千家尊福伝』を書き終えて、主宰者、編集長、同人の方々から頂いたご指導は、今後の作品に生かせるものと思っている。明治の時代を五年間集中して読み、また書くことが出来たことは、私にとって代えがたいものとなった。五年間長かったが、充実した時間を感じることが出来たのは、同人誌『まんじ』と第八〇代出雲国造「千家尊福公」のおかげである。

（完）

参考文献

青木平八『埼玉県政と政党史』埼玉県立図書館
浅見雅男『華族誕生』講談社学術文庫
荒川正晴編『シルクロードと近代日本の邂逅』勉誠出版
有泉貞夫『星亭』朝日新聞社
飯塚一幸『日清・日露戦争と帝国日本』吉川弘文館
五百旗頭薫『大隈重信と政党政治』東京大学出版会
伊藤　毅「明治政府に圧力を加えた諸政治勢力」『上智大学論集二六』（一九八三・一二）
伊藤　聡『神道とは何か』中公新書
井上智勝『近世の神社と朝廷権威』吉川弘文館
入江直樹「儀式用唱歌の法制化過程」『教育学雑誌』第二八号（一九九四）
入江曜子『日本が「神の国」だった時代』岩波新書
鵜崎鷺城『朝野の五大閥』大空社
大石嘉一郎『近代日本地方自治の歩み』大月書店
扇子　忠『明治の宮廷と女官』雄山閣

大久保利謙「華族制の創出」『同著作集』　吉川弘文館
小田部雄次『華族』　中公新書
出雲大社教教務本庁『御生誕百五十年記念千家尊福公』
板谷敏彦『日露戦争資金調達の戦い』　新潮選書
伊藤之雄『伊藤博文』　講談社学術文庫
伊藤之雄『立憲国家の確立と伊藤博文』　吉川弘文館
伊藤之雄『立憲国家と日露戦争』　木鐸社
伊藤之雄『原敬と政党政治の確立』　千倉書房
伊藤之雄『山県有朋　愚直な権力者の生涯』　文春新書
井上　亮『天皇と葬儀』　新潮選書
大石嘉一郎『近代日本地方自治の歩み』　大月出版
大津透外『日本歴史第一五巻近現代一』　岩波書店
岡　義武『近代日本の政治家』　岩波現代文庫
岡本雅亨『出雲を原郷とする人たち』　藤原書店
尾崎行雄『民権闘争七〇年咢堂回想録』　講談社学術文
金澤史男『自治と分離の歴史的文脈』　青木書店
亀卦川浩『明治地方制度成立史』　柏書房
亀卦川浩「歴史的に見た東京府と東京市政の関係」『調査研究資料』第一四号（昭和三九年九月）
笠原一男編『日本宗教史Ⅱ』　山川出版社
片山慶隆『日露戦争と新聞』　講談社選書メチエ
加藤陽久『神道津和野教学の研究』　図書刊行会
樺山紘一訳『世界歴史地図』　三省堂
川崎房五郎『明治東京史話』　桃源書房
神崎　清『革命伝説　大逆事件』　子どもの未来社
宮内庁編『明治天皇紀』　吉川弘文館
宮内庁編『昭和天皇実録』　東京書籍
久保田哲『元老院の研究』　慶応義塾大学出版会
刑部芳則『京都に残った公家たち』　吉川弘文館
小泉八雲『神々の国の首都』　講談社学術文庫
子安宣邦『本居宣長』　岩波現代文庫
小股憲明「尾崎行雄文相の共和演説事件」『京都大学人文学報（一九九四）七三』
小山俊樹「日露戦後における二大政党論の形成」『帝京史学』二六（平成二三年二月）
小山博也『埼玉県政と知事の歴史的研究』　新興出版社
小山博也『歴代県知事』「埼玉県史研究」第二七号
埼玉県編『埼玉県行政史』　埼玉県
埼玉県議会『埼玉県議会一〇〇年のあゆみ』　議会事務局
堺　利彦「赤旗事件の回顧」『太陽臨時号』（昭和二年六月）
坂野潤治『明治憲法体制の確立』　東京大学出版会
坂本一登『伊藤博文と明治国家形成』　講談社学術文庫
酒巻芳男『華族制度の研究』　霞会館
阪本是丸『国家神道形成過程の研究』　岩波書店
相良　亨『本居宣長』　講談社学術文庫
佐々木隆『藩閥政府と立憲政治』　吉川弘文館
佐々木隆『日本の歴史二一・明治人の力量』　講談社
佐々木雄一『帝国日本の外交』　東京大学出版会
佐藤林平「山口孤剣のこと」『英学史研究一一号』
静岡県図書館協会『静岡県政史話』
静岡県『静岡県史通史編』　静岡県
清水正之『日本思想全史』　ちくま新書
衆議院参議院編『帝国議会史　議会制度百年史』
主婦の友編『童謡唱歌日本の百名歌』　主婦の友社
尚友倶楽部編『田健次郎日記』　芙蓉書房出版
尚友倶楽部編『幸倶楽部沿革日誌』　芙蓉書房出版
ジョン・グリーン『儀礼と権力天皇の明治維新』平凡社
白須浄真『大谷探検隊とその時代』　勉誠出版
鈴木西湖「男爵千家尊福君」『太陽増刊』第一五号
鈴木美南子「近代日本における宗教と教育の関係」『フェリス女学院紀要』一九七九
千家尊統『出雲大社』　学生社
「千家尊福書翰」『三条実美関係文書』　北泉社
千田　稔『華族総覧』　講談社現代新書
高井弘之『誤謬だらけの「坂の上の雲」』　合同出版
瀧音能之『古代出雲を知る事典』　東京堂出版
瀧音能之『出雲大社の謎』　朝日選書
瀧音能之『出雲の謎大全』　青春出版社
竹内誠一外『東京都の歴史』　山川出版社
武田秀章『維新期天皇祭祀の研究』　大明堂
田中康二『本居宣長』　中公新書
田原嗣郎『平田篤胤』　吉川弘文館
長南政義『新史料による日露戦争陸戦史』　並木書房
辻野　功「明治社会主義運動に関する一考察」『同志社法学』一五（2）（昭和三八年九月）
都筑　亨「近代日本の転換期における国家主義教育の再編」『名古屋大特殊研究』
出久根達郎『幕末明治異能の日本人』　草思社
土屋耕平「近代特別市政運動と帝都東京の区制度形成」『中央学院大学法学論叢』二九（2）
津本　陽『大谷光瑞の生涯』　角川文庫
東京都『都史資料集成』　ぎょうせい
東京都『東京百年史』
東京都交通局『東京都交通局一〇〇年史』
東京都水道局『水源の森を守って一〇〇年』
東京府編『東京府史』　東京府
遠山茂樹『明治維新』　岩波現代文庫
徳富健次郎『謀叛論』　岩波文庫
内藤一成『貴族院』　同成社
長岡新吉「日露戦争後の恐慌と不況の慢性化の意義」『北海道大学経済学研究』（平成四四年一月）
中里裕司『桂園時代の形成』　山川出版社
中村菊男『星亨』　吉川弘文館
中村尚美『大隈重信』　吉川弘文館

中村隆英『明治大正史』東京大学出版会
西岡和彦『近世出雲大社の基礎研究』大明堂
日本全史編『日本全史ジャパン・クロニック』講談社
羽賀祥二『明治維新と宗教』筑摩書房
原圭一郎編『原敬日記』福村出版
原武史『出雲という思想』講談社学術文庫
原口清外『静岡県の百年』山川出版社
原田敬一『日清・日露戦争』岩波新書
文芸春秋編『文芸春秋にみる「坂の上の雲」とその時代』新潮文庫
保阪正康『崩御と即位』弦書房
堀雅昭『井上馨』
堀江保蔵『日露戦争・第一次世界大戦間の日本経済』
『経済論叢』第九七巻第一号
平野芳英『古代出雲を歩く』岩波新書
藤井貞文『明治国学発達史の研究』吉川弘文館
朴羊信「七博士と日露開戦論」
『北大法学論集』四八（五）平成一〇年一月
本多隆成外『静岡県の歴史』山川出版社
前田寿紀「二宮尊徳の報徳思想・報徳仕法の内在論理と近代日本における報徳社による継承」
『淑徳大学社会学部研究紀要第三六号』
前田亮介『全国政治の始動』東京大学出版会
松岡八郎「桂園時代と政党」『東洋法学』一一（四）
松岡八郎「第一次桂内閣と立憲政友会」『同』一〇（一）
升味準之助『日本精糖史論』東京大学出版会
御厨貴『明治国家形成と地方経営』東京大学出版会
三戸岡道夫『二宮金次郎の一生』栄光出版社
三戸岡道夫・堀内永人『関口隆吉の一生』静岡新聞社
村上重良『天皇制国家と宗教』講談社学術文庫
村上重良『日本宗教辞典』講談社学術文庫
村瀬信一『首相にならなかった男たち』吉川弘文館
森松俊夫『大本営』教育社
村瀬信一『明治立憲制と内閣』吉川弘文館
森田康之助『日本思想の構造』国書刊行会
安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波現代文庫
安丸宮地編『宗教と国家』日本近代思想大系五岩波書店
山泉進「堺利彦と冬の時代」
『堺利彦と初期社会主義の思想圏』論創社
山口輝臣『明治国家と宗教』東京大学出版会
山村暮鳥『日本の詩歌一三』中公文庫
山本四郎『原敬政党政治のあけぼの』清水書院
歴史知事編纂会『日本の歴代知事』同編纂会
渡部昇一『渋沢栄一男の器量を磨く生き方』致知出版
渡辺和一郎『渋沢栄一ものがたり』教育企画出版
和田春樹『日露戦争　起源と開戦』岩波書店

『時評家　新明正道』（評伝その九の三）

――「ワイマール文化」の光と影――

山本鎭雄

一　世界都市ベルリンの見物

ヨーロッパのベルリンはパリ、ロンドンとともに、世界都市に違いないが、二〇年代の急速な大衆文化、消費文化、前衛芸術を背景に開花するとともに、大百貨店や巨大な劇場、映画館、大小のカフェ、レストラン、キャバレーなどが開業した。いわば、ヨーロッパの新興の世界都市である。

新明はこのような時期にベルリンに留学すると、早速、邦人留学生とともにベルリン市内を散策したり、映画館で上演されているドイツ製、アメリカ製、ソ連製の映画、さらに日本製の衣笠貞之助監督作品の時代劇「ヨシハラの陰に」（原題、「十字路」）を鑑賞したり、また劇場にも出掛け、演劇やオペラを観劇して、この世界都市の観光と娯楽を満喫した。下宿ではまったく料理をしない新明は和食料理店で盛んに飲食した。ときに、留学生仲間とカフェ（喫茶店）で歓談し、一人でカフェに入り、休息しつつベルリンの世情の一端を見物した。さらにうまいとはいえないとは言えないサーカスを留学生仲間と見物して留学生活を満喫した。

二九年五月一日（マイターク）、新明は下宿を訪れた留学生仲間と懇談した後、午後四時に下宿を出て、地下鉄に乗り、ヘルマンプラッツ（広場）で群衆と巡査が対峙する状況を目撃した。この事件は社会民主党（右派）のベルリン警視総監のツェルギーベルが高揚する労働者のメーデーのデモ行進と集会を禁止した。それに反発したデモ隊や群衆にたいして出動した巡査が暴力的に解散させようとして、いわば市街戦となり多数の重軽傷が出た。この衝突を「血のマイターク事件」と称し、その数日も群衆の策動と巡査の警戒が継続した。この事件はワイマール共和国の歴史的大事件として深く記憶されてい

る。

新明は常にベルリンで発行する各種の新聞を購入し、おそらく関心のある記事を切り抜いたであろう。また書店や古書店廻りをして多数の書籍を購入し、とくにマルクスの『資本論』第一版（マルクス自身の書き込みあり）が陳列されているのを見て、帰国してこの稀覯本はかなり高額に売れるだろうと目論見、奮発して三〇〇マルクで購入した。二九年三月の日本では、銀行の取付け騒ぎや休業が起こり、金融恐慌がはじまった。日本の通貨価値が低下したとは言え、それでもまだドイツの通貨価値よりも有利だった。

またベルリン大学で形式社会学を講じているアルフレート・フィーアカント教授の許可を得て、毎週木曜日に講義と演習に出席したりした。そうこうして、新明は「もう伯林（ベルリン）になれた」（六月一六日）と『ドイツ留学日記』に記載した。ベルリン西方のバンゼー湖近くの別荘地域に居住するフィーアカント教授の自宅を訪問し、親しく懇談した。新明はフィーアカント教授からフランクフルト大学で知識社会学を講義している新鋭のカール・マンハイムが将来有望な社会学者になるであろうと伺った。のちに、新明はフランクフルト大学へ出かけ、マンハイムの数回の満員盛況の講義を受講した。

すでに触れたように、新明が休刊日を除き、毎日のように熱心に新聞を購読しているのは、日本出航前に依頼された月刊雑誌『経済従来』に寄稿することを目的にした情報収集である。ドイツで出稿した一二編の原稿、さらに帰朝して、三編を加稿し、『欧州の危機』を上梓した。（三一年）。のちに『欧州の危機』に掲載された「欧州通信」一二編は、情報の発達した今日とは異なり、遠い日本の読者知識層に流動する欧州情勢を伝える格好のルポルタージュとなったであろう。

二　ワイマール末期の迷走と混乱

新明の留学時期、ドイツ・ワイマール共和国の末期は経済的には一九二九年一〇月にニューヨーク株式市場が大暴落し（暗黒の木曜日）、「黄金の二十世紀」を迎えたとはいえ、アメリカの資本に依存しているため、資金は外国に大量に流出した。しかも第一次大戦の敗戦国ドイツは多額の賠償の支払に苦慮し、次第に倒産と失業者が増大し、経済的困窮が蔓延し、しかも国民的生活不安が増大した。

さらに政治的には政党間の政争は絶えず、政局は安定せず、離合集散を繰り返し、ワイマール憲法第四八条（直接公選された大統領の非常時大権）により国民議会の意向を無視し、大統領が指名する「大統領内閣」が成立し、その政府が国民議会に提出した議案が否決されても、大統領の特権で公布された。もはや、ワイマール共和国の議会制民主主義は実質的に崩壊した。議会選挙で第一党

になったナチ党のヒトラーはワイマール憲法に従い、合法的に大統領となり、国会で授権法（全権委任法）を採択し、ヒトラーを「総統」と称して独裁体制を構築したことは言うまでもない。

ところで、ワイマール時代（それ以前を含めて）に伝統的なドイツ文化にたいして近代主義、対象の客観的な表現ではなく、作者自身の主観的表現を主張する表現主義が多種多様な領域、例えば、映画や演劇、美術や建設、文学や思想、社会科学（フランクフルトが有名）の各分野で世界都市ベルリンを中心に独自の「ワイマール文化」（前衛芸術と大衆的消費文化）が開花した。しかもラジオと電話が普及した。新明も電話を利用して盛んに留学生仲間と連絡し、交友の機会を得た。

再び繰り返せば、二九年四月から二年間、東北帝大助教授の新明正道はベルリンを拠点に留学し、克明に日記を記録した。新明はベルリン大学のフィーアカント教授の講義と演習を受講した。さらに新明は休刊日を除き、近くのキオスクで新聞を購入し、雑誌も定期購読した。新明は下宿で料理をせず、もっぱらレストラン（とくに和食のレストランを好んだ）で飲食したが、とくに行きつけの定食屋クラウゼのウエーターのリッターとは親しくなったが、人の好い新明は依頼されて金を貸し大変な迷惑を受けた。こうして、新明は留学生仲間、大学教授、下宿先の夫婦とも親しく交流した。

三　反ワイマールの大学とその一端（社会学の場合）

第一次世界大戦の直前と直後の数年、ドイツの社会学者はもっとも生産的な時代だった。ジンメル、テンニース、ヴェルナー・ゾンバルト、マックス・ヴェーバー（主著は大戦後に刊行された）などの指導的社会学者の業績が発表され、その多くは大戦後の知識層に注目された。彼らのテーマは、近代社会がいかに生誕したかということである。すでに触れたように、彼らは哲学者であり、経済学者であり、法学者であり、神学者であって、決して社会学者ではない。なぜなら、社会学は大学において専門的に独立した講座を与えられていなかったし、社会学は専門的・制度的な自立性をもった「専門科目」Fachとして確立していなかった。

以上をもって現代のドイツ社会学者の第一世代とするならば、第二世代のうち、その主流はフィーアカント教授やフォン・ウィーゼ教授などの形式社会学の研究であろう。新明はすでにこの形式社会学を詳細に研究した結果、「社会の内容と形式」のうち、社会の「形式」のみを考察するドイツ形式社会学には批判的になっていた。すでに触れたように、新明は晩年のジンメルが一応提唱した「一般社会学」（綜合社会学）について、ドイツの社会学研究においてどのように進展していることを期待した。ベルリンを拠点にドイツに留学した新明には、その期待はまったくかなえられなかった。

新明はベルリン大学で夏学期（日本で言えば、前期であろう）にフィーアカントの社会学の一般講義と「ニーチェの知識社会学」をテーマにした演習を傍聴した。半年が過ぎて、ライン川流域を旅行し、ケルンに一か月滞在し、ケルン大学のフォン・ウィーゼ教授の「階級」をテーマにしたエネルギッシュな演習を聴講し、さらにフォン・ウィーゼ教授の誕生日に自宅に招かれ、食後別室で親しく懇談した。残念ながら、二人の教授からは新明が期待した「一般社会学」（綜合社会学）への展望さえ発見出来なかった。

四　教育改革の挫折とユダヤ系学者の亡命

当時、一方では、ヴィヘルム・フォン・フンボルトが創設したベルリン大学、ゲッチンゲン大学、ハイデルベルグ大学、マールブルク大学などは「反ワイマールの大学」（ウォルター・ラカー）の牙城だった。なぜなら、これらのドイツの大学は、決して新しい革命的理念の温床ではなかったが、だからといって、大多数の教授たちがナチ党やそのシンパでもなかった。むしろ、ワイマールの議会制民主主義にたいしては嫌悪と公然たる敵意をしめしていた。

大学教授らは大学改革の試みにたいして「学府の自由」と称して対抗し、極論すれば、大学教授が支配する教授会と各講座を主宰する教授による「君主政体（モナルヒムス）と保守思想の牙城」という決定的な側面を有していた（ヘルムート・シェルスキー）。

その一方、一九一九年から三〇年まで著名な東洋学者で、「国民の学問的良心」を代表するプロイセン州の文部次官・文部大臣を歴任したカール・ハインリヒ・ベッカーは大学の機構改革、全学問の総合とバラバラな専門領域の総合の必要性を提唱し、大学を「純粋な学問の聖杯の城」という理想像を実現しようとした。そこでベッカーは各専門分野の統合の必要性を提唱し、まず「教育改革」と「大学革命」の拠点として創設したのが単科大学の「教育大学」（日本でいえば、師範学校・高等師範学校）である。さらに大学において学問の「総合」という課題を担う特定の専門領域として、大学に政治学や現代学、さらに教育学を含む広義の「社会学」を奨励した。それは「社会学」がおよそ「総合」によって成り立つ優れた教育手段であり、しかも社会学的な観察を通して知性と精神的な習慣を形成することが可能だという認識に由来する（山本鎮雄著『西ドイツ社会学の研究』）。

ベッカーは社会学の講座はあらゆる大学においてとくに必要不可欠だと提言したが、ベッカーの大学改革は既存の正教授の「派閥根性に凝り固まった」大学では実現しなかった。しかし、旧態依然とした伝統的大学よりもフランクフルト大学など革新的な大学では一定の成果を見た。しかも大学における研究者の新旧世代の交替も顕

著となり、若い世代によってワイマール文化と精神を吸収した研究も登場した。

ところが、ヒトラーの権力掌握と「指導者原理」、さらに「強制的同質化」のもとで、社会科学系は「ユダヤ人に支配された」科学として、また「社会主義的・自由主義的」科学として弾圧と粛清の対象となり、強制的な退職と解雇、さらに国外への「亡命」と国内における沈黙、つまり「内的亡命」を余儀なくされた。亡命した研究者は、その地の言語や思考、生活習慣の相違に耐え、ドイツ流の社会思想を含む社会科学研究を流布することになった。

五　今後の課題

再び、新明の『ドイツ留学日記』を読み返すと、「学生が鞄をもったまま走ってゆく。僕のゆく方向だから、つい一緒になってU・d・L（ウンター・デン・リンデン）まで出てみると、反動派の学生である。…こんな学生には同情はもてぬ」。「きょう（二九年六月二八日）はヴェルサイユ条約の一〇年記念日。ローカル・アンツァイガー（右翼系の新聞）は国辱記念日という。…結局、（彼らは）D・H（ドイツ国民、ここでは排外的愛国者の意味か）の連中ではなかったか」と極めて批判的である。新明は夕方に外出して新聞を購入し、とくにドイツ共産党機関紙『ローテ・ファーネ』（赤旗）を読み、保守系のヴェルサイユ条約反対の政治集会に対抗して、共産党も「人数は一〇〇名前後乎（か）」とデモ行進を目撃した。それが保守系のデモ行進にたいして、それを牽制する革新派のデモ行進であって、直ちにヴェルサイユ条約反対のデモ行進だとは言えないと、新明は判断した。

すでに触れたように、新明はドイツ留学中に月刊雑誌『経済往来』に一二編のルポルタージュを郵送した。その第三編に「文化と大学の自由」と題して、ベルリン大学を中心に「大学の孤立」と「学生騒動」を分析している。たしかにドイツ全体の学生数は着増し、大学の民衆化と言えるが、教授は依然として保守的（反ワイマールの大学）で、それとともにナチ党を支持する学生の反動化は一層顕著になった。プロイセン文部大臣のカール・ベッカーが最も保守的なマールブルグ大学を訪問したとき、大学の門前で学生の一団は悪口雑言を発したと言う。当然、大学総長および評議会はこの事態を警告する新聞広告を掲載したが、新明は保守的なマールブルグ大学そのものが問題なのではないかと疑問視した。

ワイマール共和国を支持する社会民主党系の学生による微力な「社会主義学生団同盟」と「ドイツよ目覚め！ユダよ、くたばれ」と叫ぶ保守系、とくにナチ党系の学生によって組織された「国家社会主義者連合」との抗議は過激した。ナチ党は大学生を系統的に組織し、組織された彼らはナチ党の若き指導者・活動家、あるいは突撃

隊になって活動したであろう。その後、ナチ党の唯一の青少年組織のヒトラー・ユーゲントとも連携したであろう。そして戦場に駆り立てられたであろう。新明の『ドイツ留学日記』や『欧州の危機』に記載されていないが、その後のワイマール共和国の決定的な崩壊とヒトラーの一党独裁体制を社会学的かつ時評的にどのように考察したのであろうか。

明治時代の著述者　渋江保の一生（その十四）

山本勉

豊橋市美術博物館所蔵渋江資料について

渋江保は一八八一年（明治一四年）八月～一八八二年（明治一五年）一二月まで現愛知県豊川市に在住し、宝飯中学校長としてまたは英語教師として三河地域の教育のために尽力したが、その傍ら三河地域の有力者と交流を深めた。そのひとりが加藤幸三郎である。ここでは渋江が加藤幸三郎に宛てた書簡及び交詢社回状の原文と現代語訳を掲載し今後の渋江研究の一助としたい。

一　加藤幸三郎（一八五八～一九〇九）について

加藤幸三郎は慶應義塾に学び渋江保の一年先輩である。当時、現愛知県豊川市に創設した宝飯中学校設立の中心的な人物であり宝飯中学校が軌道に乗るまで初代校長代理として重要な役割を担った。渋江は加藤の後任として宝飯中学校に赴任している。加藤幸三郎は教育に尽力したのみならず宝飯銀行初代頭取、豊橋商工会議所初代会頭を歴任し地域経済の発展にも寄与した。また耕地整理や植林事業等殖産興業にも力を注いだ。政界における活躍も華々しく、一八八六年（明治十九年）に愛知県議会議員に当選し、一八八八年（明治二十一年）には「東三倶楽部」を結成し県政に尽力した。『東三河産業功労者伝』には「東三倶楽部」について「明治二十一年七月、彼（加藤幸三郎：引用者）は東参五郡の有志者を糾合して東三倶楽部を豊橋に設立した。同倶楽部は政治実業其他百般の事業を協議して団結を図るのが目的」[一]とある。一八九〇年（明治二十三年）、国会が開設されると東三河より立候補し三十三歳で国会議員に当選し活躍した。

二　豊橋市美術博物館所蔵渋江資料

これまでに発見された渋江に関する直筆の手紙や葉書等は数少ない。一昨年渋江の宝飯中学校長時代を調べるに際し橋良文庫の存在を知った。橋良文庫は郷土史研究家の近藤恒次氏が設立した文庫で近藤氏が収集及び所蔵した書籍等が収められているが、その中に加藤幸三郎宛渋江書簡が六通、交詢社回状一通が所蔵されていることがわかった。現在これらの書簡は愛知県豊橋市美術博物館に所蔵されている。

この度静岡県掛川市在住の古文書研究家、服部光子氏にこれらの書簡を解読していただいた。直筆の手紙であるので判読できない文字もあるが大意は読み取れる。書簡からは当時の民権運動等の社会状況を伺い知ることが出来る。

小論では書簡六通と交詢社回状一通のうち自由民権運動について多少なりとも触れられている書簡「加藤幸三郎宛書簡一八八三年（明治十六年）一月一日」と「交詢社回状一八八二年（明治十五年）十二月十日」を取り上げ渋江の民権思想について明らかにしたい。

（一）加藤幸三郎宛書簡一八八三年（明治十六年）一月一日

①書簡原文

謹奉賀　新正　明治十六年一月一日　渋江保

加藤幸三郎盟兄玉下

副啓、昨年者不一方御厚情を蒙り御礼難尽筆紙奉深謝候、殊ニ発途之際ニ者御庇護を仰キ何共申譯無之、実者昨十二月十五日着京後速ニ一書を呈すべき之処、東奔西駆、殆ント瞬間ノ餘暇ナク大御無沙汰ニ相成、多罪奉亮謝候、東京モ新紙ノ報道スル所トハ大ニ差異アルヤニ被存候、政党中先ツ民権ト称スヘキハ改進党ノミ、自由党ノ如キハ其小部ハルーツーヲ祖述シ破壊主義ヲ唱道スルモ、全体ヨリ之ヲ論スレバ官権ト「スパイ」トヨリ成ル者ノ如し、三田派は小生書面ニテハ不申上、面上ニ譲ル、帝政党ノ如キハ勢力モナク権力モナシ、昨冬ノ布告（即チ府県等ニ関スルモノ二個及酒税規則）者大ニ人心ヲ激セシメタル様ニ被存候、本年者早々花々シキ事アルヘシト被存候、先者年初御礼傍御起居相伺度如斯御座候、余者後緩々可申上候

②現代語訳

謹奉賀　新正　明治十六年一月一日　渋江保

加藤幸三郎盟兄玉下

副啓（添えて申し上げます）昨年は一方ならぬご厚情を蒙り、御礼は筆紙に尽くしがたく深く感謝いたします。特に出発の際には御庇護を仰ぎ何とも申し訳なく思っております。実は昨十二月十五日東京に着いた後直ぐに一書を差し上げるべきでしたが、東奔西馳し殆ど寸暇もなく大変ご無沙汰してしまいました御無礼を心よりお詫

び申し上げます。東京も新聞の報道するところとは大いに違いがあるように思います。政党の中で先ず民権と言えるのは改進党のみで、自由党のようなものの一小部はルーツー（ルソー）を祖述し、破壊主義を唱道しておりますが、全体からこれを論ずれば官権「スパイ」とからなる者のようです。三田派については小生書面では申し上げず、お会いした時にお話ししますが、帝政党のようなものは勢力もなく、権力もありません。昨冬の布告（つまり府県等に関するもの二件及酒税規則）は大いに新年早々人日をひくことがあるだろうと思われます。先ずは年初御礼かたがた御様子をお伺いしたくこのようにお便りを差し上げました。残りは後日申し上げたく存じます。

③加藤幸三郎宛　渋江書簡について

渋江が加藤幸三郎に書簡を宛てた年の前年は自由民権運動に対する最初の大弾圧事件、福島事件が起こった年でもある。県令三島通庸は福島の自由党員や農民を弾圧し自由党撲滅を豪語し県会を無視して専断的な政治を強行した。そしてこの書簡が書かれた年の三月には新潟県の自由党員が検挙され弾圧を受けている。一八八一年（明治十四年）には板垣退助を党首とする自由党が結成され、一八八二年（明治十五年）三月大隈重信を党首とする立憲改進党が結成されたが、国会開設は明治十四年の政変から九年後の一八九〇年（明治二十三年）であり、自由党も立憲改進党も自由民権運動を継続して行くにはあまりにも時間が長すぎた。こうした社会情勢の中で、一八八二年（明治十五年）に板垣の外遊、洋行の渡航費疑惑が持ち上がった。一方、自由党は大隈重信と三菱との癒着を非難するなど泥仕合を展開し一八八四年（明治十七年）自由党が解党する。立憲改進党も同年解党論が浮上し大隈重信が離党する。

渋江は書簡において「政党中先ツ民権ト称スヘキハ改進党ノミ」と述べている。これは自由党員等による福島事件などの激化事件を引き起こした自由党に対して穏健派の改進党を「民権」と称したのではないかと思われる。また「自由党ノ如キハ其小部ハルーツーヲ祖述シ破壊主義ヲ唱道スルモ、全体ヨリ之ヲ論スレバ官権ト「スパイ」トヨリ成ル者ノ如し」とは、ルソーの思想を受け継いでいるが激化事件を起こすなど暴力主義を標榜した自由党を破壊主義と唱え、板垣の渡航疑惑等政府と密接な関係を官権とスパイとからなる輩のようだと述べている。「帝政党の如きは勢力もなく権力もなし」とは、国民の支持を全く得られていない帝政党のことを暗に批判したのだろう。この書簡はあくまでも渋江個人の考えであり当時の民権運動全体を渋江が理解したものではないが、少なくとも渋江が当時の民権運動に強い関心を抱いていたことが読み取れる。

（二）交詢社回状一八八二年（明治十五年）十二月十日

①交詢社回状原文

至急以回章申上候、時下寒威慄冽之際各位益御清適奉賀之候、然ハ過日御通知申上置候に本社巡回委員波多野承五郎君今夕刻豊橋駅へ到着候様浜松旅宿り電報有之ニ付而ハ明十一日午時（十二時）豊橋表ニ於テ懇親会相開キ本社景況及ヒ社会一般ノ近況等諮問仕度候ニ付、其節ハ是非御出頭被下度、願クハ今夕ヨリ御来会被下候様致度、此段至急以便御通知上候、但シ豊橋社員ハ今夕より来会談話候積ニ付呉々モ御繰合可申候、拙者関屋の三輪弘忠氏宅ニ罷在候間、夫迄御枉駕奉願上也

明治十五年十二月十日午后一時

加藤幸三郎
三輪弘忠
渋江　保

牛久保村
伊藤喜助君
岩瀬長兵衛君　病中ニ付出頭難致

北金屋村
中尾十郎君　□□君之出頭　承知候

②現代語訳

交詢社回状　至急回状をもって申し上げます。時下寒さ厳しき折、各位ますますお健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。さて過日御通知申し上げておきましたように、本社巡回委員、波多野承五郎君が今日夕刻豊橋駅へ到着するようで、浜松で宿泊するとの電報がありました。明日十一日正午（十二時）豊橋表において懇親会を開き本社の様子及び社会一般の近況等伺いたいと思いますので、今夕から御来会下さるように致したくこの事を至急御通知申し上げます。ただし豊橋の社員は今夕から来会し意見交換するつもりですので、くれぐれも万障お繰り合わせの上ご出席ください。拙者は関屋の三輪弘忠氏宅におりますので、それまでに御来訪下さるようお願い申し上げます。

明治十五年十二月十日午後一時

加藤幸三郎
三輪弘忠
渋江　保

牛久保村
伊藤喜助君
岩瀬長兵衛君　病中に付き出頭致し難し

北金屋村
中尾十郎君　□□君の出頭承知致しました

③交詢社回状について

この回状は一八八二年（明治十五年）暮れに加藤幸三郎、三輪弘忠、渋江保の連名で出されている。三輪弘忠（一八五六～一九二七）は宝飯中学校発足当時より渋江と共に助教兼幹事として奉職している。また宝飯中学校廃校後は校長として宝飯郡第一高等小学校に在職していたことがある。封書の宛名は「伊藤喜助君」とあるので、伊藤喜助より順次回状した書簡と思われる。また岩瀬は病気で出頭できないこと、中尾ともう一人の名前は判読できないがこの二人は出頭できる旨が記載されている。この回状によれば波多野承五郎が豊橋駅に到着するので懇親会を開きたい旨が記載されている。実際に波多野が一八八二年（明治十五年）暮れに豊橋に来たのかどうか、これを裏付ける資料が『交詢社百年史』にある。『交詢社百年史』「第三章巡回委員の派遣と支社の設置　各地の交詢会」によれば、「遠三尾勢地方巡回　明治一五・一一・二九～一二・二二　巡回委員　波多野承五郎・渡辺治」[2]とある。同書「資料14巡回委員派遣一覧」には「遠三尾勢地方巡回　巡回委員波多野承五郎・渡辺治　一二・九浜松にて懇親会に出席、一二・一三豊橋より岡崎に到着」[3]とあり、波多野承三郎が巡回委員としてこの時期に豊橋に立ち寄ったことが伺える。また、差出人の一人の加藤幸三郎であるが、同書「第四章私擬憲法案と明治十四年の政変　猶興社の「条約改正論」」に猶興社員一四名の一人として犬養毅らとともに「加藤幸三郎」の名前が見られる。[4]加藤は渋江と同じ慶應義塾の出身であるので交詢社にも深く関わっていたと思われる。また、交詢社設立には小幡篤次郎や阿部泰蔵等渋江と関係の深い人物が中心的な役割を果たしていた。渋江が交詢社々員であったという資料は現時点では確認できていないが宝飯中学校長在職中に民権家として活動していたことがこの回状から伺える。

小論では書簡六通と交詢社回状一通のうち書簡一通と交詢社回状を取り上げたが、この他に愛知県豊橋市美術博物館には五通の書簡が所蔵されている。今後は残る五通についても本誌上にて取り上げたい。

参考文献

（一）三田商業研究会『慶應義塾出身名流列伝』（実業之世界社　一九〇九年六月十五日）
（二）豊橋市立商業学校編『東三河産業功労者伝』（豊橋市立商業学校　一九四三年十一月十五日）二二一頁
（三）山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫　一九八一年十一月三日）

注　記

（一）豊橋市立商業学校編『東三河産業功労者伝』（豊橋市立商業学校　一九四三年十一月十五日）二二一頁
（二）財団法人交詢社『交詢社百年史』（財団法人交詢社　一九八三年年十月二十日）一四〇頁
（三）財団法人交詢社『交詢社百年史』（財団法人交詢社　一九八三年年十月二十日）五三五頁
（四）財団法人交詢社『交詢社百年史』（財団法人交詢社　一九八三年年十月二十日）一六二頁

命が命を命ず

匠　克仁

命について書く。といっても倫理的なものでなく漢字の命のことである。まんじのバックナンバーで私は五十知命ということを書いている。つまり、五十才になって天命を知ったわけだ。知命とか天命と書いていると、つい命について書きたくなった。実は、真面目な論文で『生命至上主義のジレンマ』という題で原稿を書き始めた。生命至上主義が個々の生を超越した存在を軽視する結果、生命そのものや人類の平和がないがしろにされる。現実の命の問題を考えるとテーマが重い。そこで今回は漢字の命についてエッセイを書く。一五一号以降の予定で『生命至上主義のジレンマ』を書く予定である。今回の題の命が命を命ず、というのが、どのような意味かというと命（いのち）が命（漢字）を命（めい）ず。私という生命体（魂）が命という漢字について書けと自分の両手に命令してできたのがこの文章である。漢字を分解すると命は人を一つ叩くと書く。これは語源ではなく、正しい命の成り立ちは命令の令＋口である。その証拠に部首が命は口なのである。令の部首が人（ひとがしら）なので命も人であってもよい。ひとがしらの漢字で検索したら命が出てくることがある。

命の訓読みは、いのち・みこと・おおせ

命の音読みは、メイ・ミョウ

命には、次の意味がある。

命の意味1　いのち　例：生命・人命・一命・寿命・余命・救命・命脈

命の意味2　なづける　例：命名・命題

命の意味3　いいつける・おおせ　例：命令・勅命・厳命・任命・拝命・社命

命の意味4　まと・めあて　例：命中

命の意味5　めぐりあわせ・さだめ　例：命運・運命・宿命・天命

命の意味6　こせき・めいぼ　例：亡命

命の意味7　みこと（神の名に添えた敬称）例：大国主命（おおくにぬしのみこと）　これを保険会社で大国

生命があるとぼくは勘違いした。

命の意味8　だいじなもの　例：ラーメンは、スープが命である。○○ちゃん命！　まんじ命　「文章は人間の命」（川端康成）

命の意味9　（誓いの）ことば

命は、二〇〇六年の今年の漢字である。皇室に新しい生命（悠仁親王）が誕生した。いじめによる自殺などの生命が理不尽に失われる事件が多い年だった。

命について書いたので、安岡正篤先生の著作『知命と立命』を読みたくなって、再読した。この中の第二章の『命とは何か』引用しながら、自分なりにまとめた。

命は、普通「いのち」と言っているが、「いのち」は「命（めい）」の一部にすぎない。宇宙等の絶対の働きを命と東洋哲学でいう。大いなる宇宙・天の作用が、「天命」である。違反するが許されない権威を持った指図が命令である。我々の生命というものは、なぜ、生の字に命の字を付けるか。絶対性、必然性、至上性を表すのに命というものをもって生命というのだ。我々の肉体は天命の一部であり、生命である。人生そのものが、一つの命である。我々には心・意識・精神があるから立心偏の性命という言葉になる。道徳の法則を自覚するのが、「命の人」である。日本の古代思想で「みこと」と読み「命」の字を当てはめた。

命名は絶対的な意味で付けること。自然科学は天という命を研究する。科学的法則・定理を把握することが、「命を立つ」である。天命であるというものを立てるのが立命である。

命数とは全ての実在の中に存在する因果の関係をいう。運命は宇宙の本質の限りなき創造変化で動いている。この命を知って、我々の人生を理解し自ら運んでいくのが運命である。決まりきった人生のコースと理解するのは宿命である。宿は泊まるで固定的・機械的に生きるのが宿命となる。この命を理解し、複雑な数を知ることが、知命である。

命という絶対性の中に因果関係をも動かして、新しい運命を創造変化させていくことが「道」であり、これを立命というのである。

命の題の付いた署名は安岡正篤先生に多く、他にも『運命を開く』『運命と立命』も再読した。

命の意味で川端康成の例を出した。『新文章讀本』から命と文章を引用する。「文章はペンで書くものではなく命の筆先に血をつけて描く」「文章の工夫も…作家…生命を的の『さしちがへ』である」川端康成の作品に『生命の樹』という短編小説がある。戦争で焼けた街路樹に命が芽吹く短編である。「焼けただれた街に、自然の生命の噴火だった。」と戦後の希望を表現している。自ら命を絶った作家が、生を描いた文章である。康成の様に命を削って、ぼくも文章を書いているつもりである。

編集後記

広島・岡山・愛媛を中心に大変な水害に見舞われ、被害を受けた方々には心からお見舞い申し上げます。また、関東地域は今年は例年になく六月に梅雨が明け、以後連日の酷暑に悩まされています。このような今までにあまり経験したことのない気象現象を考えると、人間が地球上の気象諸現象を、例えば降雨・晴天（旱魃）・強風・寒暖などを制御・コントロールすることのできない状況を何とかならないのか、と思います。しかし、これは思う前に不可能なことです。我が国では特に地震を含めて、制御不能の自然現象に逆らうことのできない（防衛的備えは必要ですが）状態にあって、天は私たちに、人間の弱さ、謙虚さを十分に認識した生活をすることを求めているのではないかと思いました。

まんじ一四九号も二十人の同人各位の寄稿を得て、充実した内容で発行することができましたこと、ご同慶にたえません。

次号百五十号は、特別記念号として発行しますので、同人皆様の玉稿を期待します。お一人の原稿字数は制限はしませんが、多い方で四百字詰め原稿用紙五十枚を目途にご寄稿ください。締め切りは九月二十五日とします。

長期の天気予報を見ていますと、今年の酷暑は日数的にもかなり続くと思います。同人皆様には、それぞれ涼をとりながらまんじ百五十記念号掲載の原稿にご健筆を奮われますことを期待します。

末筆ながら、酷暑の中、皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。

（鍋）

まんじ第149号

平成30年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045(544)5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町7-1

表紙の絵について
「至誠天に通ず」

田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.150

記念号

2018.11.1

まんじ第百五十号　目次

過去の町 …… 三戸岡道夫 … 4
吾輩は紙魚ロボである …… 永畑俊三 … 29
生きてやる …… 千坂精一 … 45
HINOMARU …… 田寺怜葦 … 63
「学校つまらない？」いや「つまる」 …… 新井宏 … 66
ピルグリム瑠璃さんを偲ぶ …… 太田精一 … 80
ひなげしの丘の白い家 …… 手塚泰男 … 93
心に残った詩歌 …… 石黒修身 … 97
人工知能と職業 …… 大貫陽平 … 102
我、大日本報徳社員なり …… 浅野博文 … 106
現代お茶事情 …… 横山正義 … 117
安芸門徒シルクロード紀行（1） …… 村上邦治 … 127
ルイス・フロイスの「日本史」 …… 鍋屋次郎 … 139
十六世紀キリスト教宣教記録と宣教師が見た日本
君なんぞ高歌・沈吟せざるや …… 鯨游海 … 170
漢詩 汲深録（十四） …… 松井秀人 … 177
古い物・遠い夢 名品歴々（茶道史余滴） …… 忠内正之 … 179
風の泉（第4回） …… 葵州月 … 192
「農ある暮らし～私の日常～」(9) …… 古屋富雄 … 222
房総の戦国興亡史 …… 山田嘉久 … 225
―千葉氏を中心として―
私の伊達政宗像を訪ねて（その二） …… 安藤剛 … 235
世界の国旗から学ぶ（第八回） …… 米村典紘 … 249
性と化粧の物語（十三） …… 鈴木守 … 277
明治時代の著述者 渋江保の一生（その十五） …… 山本勉 … 281
二字目の男 …… 匠克仁 … 285
編集後記 …… 編集子 … 297

過去の町

三戸岡　道夫

〔一〕

その町はすっかり変ってしまっていた。

もっとも数えてみれば〇〇年ぶりに訪れたのであるから、この変化の激しい世の中に、たとえ田舎町といえども変らない方がむしろおかしいといえるだろう。

東海道沿線にあるそのD町に、彼は昔住んでいた。

彼が中学生の頃であるから、もう〇〇年も前になる。終戦の年を挟んで五年間ぐらいであった。D町を離れてからも四、五回はD町に行ってはいるが、しかし最近はすっかり足が遠のいて、最後に訪れた時から数えるとちょうど〇〇年間D町の土を踏んでいないことになる。

急激に発達した交通機関の便利さが、かえってD町から彼を遠ざける結果になったといえよう。その小さな田舎町は新幹線に見放され、従って彼が時々東京と大阪を往復する場合にも、D町に途中下車する機会を彼から奪ってしまった。また、その間彼がD町を訪れなくてはならない用事があったわけでもなかったから、わざわざD町に向うということもないままに、月日は流れ去ったのである。

しかしいつもD町は、遠い故郷のように彼の頭の中に棲んでいた。新幹線が猛烈な勢いでD町の北の端を走り抜け、D町の家並や丘や田圃が窓外を流れると、最近のD町はどうなっているだろうかという感慨が、不意に潮のように盛りあがってきた。

最近彼の中には、過去の形をしっかり摑んでおきたいという氣持がなぜかしきりに動き始めていた。幼年期、少年期、青年期、そして現在へと、人生とは過去の堆積であるような氣がする。そして「過去」とは、彼が昔住んだ「家」や、その家のあった「町」や「村」だった。

それらは一つ一つ無声映画の画面のように、彼の過去の中に順序よく横たわっている。それは確実な形と固さと重たさをもっていた。そして彼の人生を支えている柱のように思われる。人間の行爲や出來事は次々と消えてなくなるが、町や家という「物」はなくならない。変わらないでそこにある。何年訪れなくてもそこにある。何という確実さ。彼の人生を支えるものとして、これ以上確実なものがまたとあろうか。

だが果してそうか……？

そうした疑問が、なぜか最近彼の中にふっと雲の翳のようによぎるのである。

彼の父は登記所に勤める官吏だった。だから四、五年おきに各地を転勤し、彼の少年時代もそれに従って、A町からB村、そしてC町、D町へと移動した。A町に住んでいたのは彼が小学校にあがる前であり、B村には小学校の四年生まで、C町には小学校の五年生から中学校の二年生まで、そして中学校三年生の時にD町に移った。D町で中学校を卒業した年に終戦となり、更に三年ばかり終戦后の混乱した時代をD町ですごしたから、D町には終戦の年を挟んで前后五年間ばかり住んでいたことになる。その後彼の父は、E町、そしてF町へと転勤していったが、彼は高等学校への入学を機会に両親と別れて下宿生活に入ったので、E町やF町に住んだことはない。勿論休暇には帰省してE町やF町を訪れはしたが、しかし住んだことのない町にはなじみは薄かった。

だから彼の過去の町といえば結局、A町、B村、C町D町の四つになるわけであるが、とりわけD町に住んでいたのが終戦の年を挟んだ暗い時代であり、また彼の少年期の后半から青年期に足をふみ入れた多感な時代でもあったので、D町は彼の内面に密着した町となっていた。

D町の西方には小高い丘があった。Dが丘と呼んでいた。D城の跡である。しかし城はない。桜並木と石垣だけがその名残をとどめていた。丘の麓を取巻く桜並木と、うす暗いほどに茂った葉桜の坂道を登っていくと丘の頂に達し、狭いD町は一望に見下された。

D駅は彼の家から二、三分の所にあり、駅前には型通りの広場があった。広場の正面にはバス会社があり、戦争中はいつも木炭車が背中から白い煙を立ちのぼらせていた。その隣は自転車預かり店で、広い建物の中の暗がりには中学生や女学生の自転車が溢れていた。

駅前広場からは二本の道が南に伸びていた。西側にあるのが表通り、東側にあるのが裏通りで、D町の町並みはこの二本の道の両側を埋めるようにして南北に細長く形づくられていた。彼がいつも通るのは裏通りの方だった。駅前広場から裏通りをしばらく行くと金龍館という大きな旅館があり、その角を曲って更に南下すると道はほどなくして下り坂になり、その左手の高台に彼が住ん

でいた登記所の建物はあった。

登記所の石段は道からななめの角度で門まで續き、門を入った前庭には大きな松が二本空に伸びて、その下に古い大きな平屋建ての家が長年の歳月を圣た木目を白っぽく浮き上らせて建っていた。中央よりやゝ右寄りに玄関があり、玄関から左の部分が登記所の事務所に、右の部分が官舎になっていた。

事務所は北向きだったので、うす暗く、ひやゝかで、だが広々とした感じだった。その事務所とは別棟の白壁の土蔵（それを父はお倉と呼んでいた）には、おびただしい登記簿台帳が保存され、お倉と事務所とはうす暗い廊下で連絡されていた。お倉から毎日運び出される古い書類の、一種独得の神秘的な匂いの中で、父は終日坐って仕事をしていた。

彼等親子が住んでいた官舎の間取りは、八畳、三畳、それに四畳半が二つの四部屋で、彼はその中の四畳半を勉強部屋に使っていた。勉強部屋は南に面していたが、うす暗かった。というのはこの古めかしい建物の窓は事務所のガラス戸を除いてはすべて障子張りであったから、たとえ南向きの部屋といえども障子越しの採光ではいささか暗鬱の感をまぬがれなかった。勉強部屋の窓をあけると外は小さな庭で、すぐ隣家の塀にぶつかった。南の隣家は金光教で、ちょうど彼の勉強部屋の眞正面が広間になっており、祭壇の前でとなえる祝詞の声が毎朝早く聞えてきた。

八畳の座敷は裏庭に面していた。障子をあけると、背の高い槇の生垣で囲まれた裏庭に、野菜や草花がちまち植えてあるのが見えた。生垣には槇の下枝を切開いた出入口があり、そこから邸の裏側に出ると茶畠がずっと拡がっていた。茶畠の拡りの先で登記所の高台は終りになるわけで、そこに柿の大木が記念樹のように生えていた。勉強部屋での勉強に飽きると彼はよくその柿の木の下に行って、英語の単語の暗記や数学の問題を解いたりしたものだった……。

少年期から青年期への生活の中でゆっくりと時間をかけて定着させたD町の姿は、〇十年近くたった現在でも確実な形で彼の中に存在している。それは確実に彼の過去の一部であり、彼の人生の一部であった。彼はその過去の上に乗って現在を生きている。彼の現在がゆるぎないのは、その過去が確実なものだからである。

だが果してそうか。

彼がそう思っているように、過去は果して確実な姿でそこにあるのか。あると思っているのは、実は彼の観念の中だけで、D町はすでに無いのではあるまいか……。

今のうちにもう一度D町を確認しておかなければならない……、そう思うと彼は急に居ても立ってもいられなくなり、ある五月の連休、大阪へ行った帰りにD町へ向った。

浜松で東海道線の鈍行に乗りかえると、汽車は一駅ごとゆっくり走った。彼は車窓の風景を一こま一こまたのしみながら、彼の中に完成したD町の姿を、もう一度頭の中で反芻した。

彼が最後にD町を訪れたのはたしか友人の結婚式に参列した時だから、〇〇年前になる。鯉のぼりが風に吹かれていた記憶があるから、今日と同じように五月の初めだった。その頃のD町にはまだかなり忠実な昔の姿が残っていた。終戦後の食うに追われていたその時代には、人々はまだ町の形を変えるまでの余裕を持たなかった。世の中が急速に変り始めたのはそれ以後である。新幹線が通じ、東名高速道路が出來、いずれもがD町の一端を矢のようにかすめて東西に走った。D町だけが世の中の変化から無関係でいられよう筈はない。

しかし汽車がD町に近づくにつれて彼の中に浮んでくるのは、やはり昔ながらのひなびたD駅だった。五月の光を遮断したうす暗い駅の構内、木造の黒ずんだ太い柱、すすけた羽目板、手垢で黒く光った木造のベンチ、湿ったコンクリートの床、片隅にひっそり身をちぢこませている売店……、彼が中学校への通学に、何十回、いや何百回と乗り降りしたD駅の古い建物……、それは今でも変っている筈はない。

〔二〕

しかしD町はすっかり変ってしまっていた。それはまるで安手の玩具のようだった。

D駅に下車してまず彼の眼にとびこんできたのは、スカスカと底抜けに明るい駅の建物だった。古い建物は取壊されて、クリーム色のタイルの四角な駅舎に変身してしまっていた。彼はあっけにとられ、しばらく駅の出口に立ちどまってあたりを見廻した。

駅前広場の変化もひどかった。昔のくすんだ商店はすっかり姿を消して、プラスチックの看板ばかりがやたらと目ににつく、全体が変に白っぽい感じの広場に変ってしまっていた。正面のバス会社もなくなっていた。その隣の白転車預りの店も見当らなかった。代りに白や赤や黄色の看板で彩った、果物屋、ラーメン屋、レストラン、菓子屋、洋品店、小型スーパー、パチンコ屋などが、無秩序に駅前広場を取囲んでいた。左手にあった国鉄駅員のすすけた官舎も、すっかり商店に変ってしまっていた。右手には百日紅と夾竹桃の茂みがあり、中学生だった彼はその茂みの前で砂利を靴先で蹴飛しながら英語の單語を暗記したりしたものだったが、今は百日紅も夾竹桃も跡かたなく、白っぽいコンクリートで固められた駐車場になっていた。

それはあたかも長年逢いたいと思いつづけていた老婆を田舎の町へ訪ねてみれば、すでに老婆はこの世になく、代りにキンキラキンの軽薄な孫娘が駅頭に出迎えてくれた、そんな戸惑いと失望とであった。

あまりの変りようは、彼にカメラを向けさせる元氣も失わせた。

変ってしまったのは駅舎や駅前広場だけではなかった。彼の周囲にはピンクのシャツやブルージーンの若者たちが、底抜けに明るく、軽々と、かまびすしく溢れていた。それは東京と少しも変らない。彼がわざわざ鈍行の汽車に乗りかえて探しにやってきたD町の風俗ではなかった。

しかし道路だけはさすがに変っていなかった。表通りと裏通りの二本の道は昔のままに通っていた。

彼が通いなれた道は裏通りで、そこに一歩足をふみ入れると、懐しさで多少興奮した。彼は昔の臭いを嗅ぎ求めるように裏通りを歩いていった。しかしその道も立派になってしまっていることに驚いた。雨が降るとひどい水溜りになった砂利道は、輝くようなアスファルトで固められ、その両側にひっそりと軒を連ねていた仕舞屋は、うどん屋、写眞のDEP店、花屋、パン屋、電気器具店などの商店街に変っていた。ドブの臭いや、しめっぽく暗い昔の裏通りは、もはやなかった。

裏通りは七、八十メートル行ったところでT字路に突き当る。そこにD町唯一の金龍館という大きな旅館があった。正面は一枚張りのガラスで張られ、ガラスに書かれた「金龍館」という金文字が遠くからでも見えた。ガラス戸越しに旅館の内部が見える。広い玄関とロビー、奥は通ずる広い廊下、二階への階段、そしてその奥に中庭の見事な植込みが深々と見えた。こんな立派な旅館に泊るのはいったいどんな人なのだろうかと、中学生の彼は思ったものだった。

一度だけ彼は金龍の中へ入ったことがある。県から偉い役人が登記所の檢査にきて金龍館に泊ったときのことだった。その接待に出向いている父から電話がかかってきて、彼がなにかを届けに行ったのである。金龍館の透き通ったガラス戸の前に立ったとき、彼のような子供がこの中へ入っていいのかどうか、足が震え、夢中で重いガラスを両手であけて、出てきた父に品物を渡すと、物も言わずにとび出してきた。そしてしばらく道端でぼっとしていた。その時の奇妙な興奮は、二、三日燠のように彼の中に残っていた。

だがその金龍館も今はなくなってしまっていた。

彼は自分の眼を疑った。

あんな大きな旅館がなくなってしまう筈はない。彼は場所を間違えたのかと思った。しかしそこは間違えようとしても間違えようのない、駅から裏通りをまっすぐにきたT字路である。しかし何回眼をこらしてみても金龍

館の広い敷地の跡には似ても似つかぬ家が雑然と並んでいるだけで、旅館の庭木の名残りさえもとどめてはいなかった。三階建ての建物も、深々した植込みも、大きなガラス戸も、長い塀もすっかりなくなり、彼は新建材で作られた、ちまちました家々の並びを白昼夢のように眺めた。しかしそれはまぎれもない事実だった。〇〇年の時間の流れはこの大きな旅館をも潰してしまったのだ。それはなにか取り返しのつかないことをしてしまった感じで、D町に対して空白であった時間の中で金龍館が音をたてて崩れ去るのを彼は聞いた。

金龍館の塀に沿った静謐な裏通りは彼の好きな道の一つだったが、勿論今はその面影もない。塀の代りに並んでいるのは、電気工事屋とか、クリーニング店、八百屋などであった。

やがて道は急な下り坂になる。

期待と不安が入り交って、彼の気持はにわかに揺れ動いた。彼は眼をふさぎたいような気持で坂道の左手を見上げた。

しかし登記所は期待した通りの姿でそこにあった。

昔のままの形、昔のままの古さだった。

しいて昔よりも変ったことといえば、一段と建物は古び、傷み、そして窶れていたことである。國家予算の関係であろうか、一般に登記所の建物はどこでもあまり修繕されていない。だから建物は化石のように風化してい

る。しかし遠目に一段と窶れた登記所の姿はかえって彼を満足させた。

明らかに変った個所といえば二カ所あった。一つは石段で、門にむかって斜めにゆるくついていた石段が、破損したためかコンクリートでべったり塗った坂道に変ってしまっていた。

もう一カ所は垣根だった。蔓草がからまっていた古びた木造の柵は壊れてすでに取り除かれ、あとにプラスチックの波板が無造作に立てかけてあった。それは興ざめというよりも、なにか情ない感じだった。

彼は坂の途中から少し伸びあがるようにして、前庭の松や建物を見た。いやにひっそりした感じだった。玄関の扉はしまり、窓の雨戸もしまっていた。今日は休日なので何処かへ出掛けたのだろうと彼は思った。一番南側の窓が彼の昔の勉強部屋で、その雨戸に視線が行くと、四疊半の内部のたたずまいが彼の中によみがえってきた。昔と変らない登記所の建物を確認できた気持のたかぶりから、彼はその窓の下に駆け寄りたい気持にかられた。しかし今は他人の住家である。無断で他人の邸内をうろつくことははばかられた。というよりも、登記所を再確認できた安堵感が彼の気持に余裕を与えたのかもしれない。もう少し邸の周囲を廻って、裏の茶畠なども眺めてみようと彼は思った。

彼は登記所を左手に眺めながら、坂をゆっくり下って

いった。隣の金光教の石段の前を通り、坂を下りきって振り返ると、登記所の屋根と松の梢がそそり立って見えた。しばらく行くと昔見慣れた四つ角に出た。さすがその付近には昔の面影が相当残っていた。

そこを左に曲った。

しばらく行った左側に、たしか登記所の裏の茶畠へ登っていく細い道がある筈だった。家と家との間の路地のような細い道だったと記憶しているので、見落しはしまいかと注意していくと、不意に眼の前を広いアスファルトの坂道が横断した。彼は面喰った。昔こんな道はなかった。しかし付近の様子から推察してみると、それが彼が探している細い路地であった。いつのまにか、日陰のしめった、狭い、凸凹の坂道は、広いアスファルトの坂道に変っていたのである。自動車が勢よく走っていた。

彼はその坂道を登っていった。

坂道の上には茶畠があり、茶畠のむこうには登記所の後姿が見える筈だった。しかし登りつめると茶畠はすでに住宅地に開発されていた。茶畠の名残りはないかと住宅地の奥をうかがってみたが、しかし中の方まで住宅が並び、従って家並に遮られて登記所は見えなかった。

しばらく行くと右手に燃えるような柿の大木がそびえていた。思いがけないものに顔を突き合わせて、彼はアッと思った。それは昔茶畠の中に生えていた柿の木にちがいなかった。その頃の柿の木の根もとには雑草が乱れ、その周囲には家も人影もなく、自然の中の柿の若葉だった。しかしすでにそうした自然はない。白く乾いたアスファルトの道路とプレハブの家並の傍に、にょきっと、つややかな柿若葉が音もなくもえ上っているさまは、妙に生ま生ましく不気味で、あたかも成佛しそこなった茶畠の精霊が、そこに噴出しているのではないかと思われた。

〔二〕

高台を遠巻き廻り、曲りくねった路地に入ると、やっと登記所の裏口に出た。

登記所は丈高い槇の生垣で囲まれ、外側は人一人がやっと通れるくらいの細い路地になっていた。生垣ごしに邸内の雑草や羽目板がキラキラ光ってみえた。彼が記憶を辿って探すと、槇の下枝を四角に切り取った出入口が三十年前と同じ位置に変らないで口をあけていた。

彼は腰をかがめて邸内を伺った。

そこはちょうど官舎の裏側に当った。

森閑としている。

裏庭に面した廊下はぴったり雨戸を閉めていた。今日はやっぱり留守らしい。彼は若干大胆になって生垣の入口から邸内に足をふみ入れた。

右手にすぐ土蔵があった。登記簿台帳が格納されているお倉である。白壁のお倉の前には柿の若葉が輝いていた。

それにしてもあまりに静かすぎる……

人の匂いが無さすぎる……

瞬間彼の脳裏に、「もしかしたら登記所は他に移転してしまって、この建物は無人なのではなかろうか」、という幻想が浮んだ。勿論それはたゞ一瞬彼の頭をかすめただけで、別にそうだと思ったわけでもなく、またそうした兆候があったわけでもない。たゞあまりの静けさが彼をそうした幻覚に陥しいれたのである。

彼はお倉の裏側に廻った。そこには三十年前と同じように、毒だみの花が白く咲いていた。

お倉を廻るとそこは細長い空地だった。事務所の北側の羽目板と槇の生垣で囲まれている。いちめんに茂った草むらは折しも溢れる日光を浴びて音もなく輝いていたが、それは無気味に明るくて淋しく、息のつまりそうな光景だった。

昔この空地には大輪の南瓜の花がさいていた。戦争中から戦後にかけた食糧難の頃、彼の父は空地ならどんな所へも、さつま芋、茄子、トマト、豆とあらゆるものを植えて食糧の足しにしたが、この北側の空地にも南瓜の苗を植えた。南瓜はまるで勢づいた蛇のように空地を這いまわり、大型の群葉で地表を埋め、槇の枝々を這いのぼって、眼にもあざやかな黄色の花を咲かせた。しかしなにせ一日のうちの僅かしか日射しのない北側の空地であるから、実を結ぶ段になるとにわかに南瓜は期待を裏切って糸瓜のように細長いものしか結実せず、父を落胆させた。しかし勿論現在の空地はそんな南瓜の花などまったく知らない。たゞつかの間の陽ざしを、ひたすらに吸収しているばかりだった。

空地の突き当りに小さな独立した建物があった。代書人（今の司法書士）の事務所である。それも〇〇年前の姿と少しも変らず、たゞ〇〇年の歳月の分だけ荒れていた。

代書人は修道僧のような中年の男で、毎日正確な時間に出勤して正確な時間まで、陰気な建物の中で謹厳に事務をとっていた。だからそこはなんとなく近寄り難く、彼がその建物の中は入ったことは滅多にない。たゞ試験勉強のとき二、三回、日曜日の書間しのびこんで、終日こもっていたことがあった。中は畳敷きで埃くさかった。薄い座蒲団と木製の箱型の火鉢があり、輪切りの竹の灰皿をのせた煙草盆が置いてあって、ヤニ臭さがツンと鼻をついた。雨戸も繰らず、入口のガラス戸越の光だけの中に坐っていると、まるで洞窟の中に坐っているようだった。物音がしない。時々何かの音が谺のようで、彼の心を

乱すことはなかった。その中で彼は終日、面倒くさい歴史や地理の暗記をし、勉強ははかどった。

彼は空地からその代書の事務所の方へは向わずに、登記所の建物に沿ってゆっくり歩いた。五月の光があまり激しいので、ガラス戸には外界の景色が映り、うす暗い事務所の内部はよく見えなかった。しかしガラス戸に顔を押しつけて覗くと、陰気な登記所の内部は昔のまゝの姿でそこにあった。勿論人影はない。

やがて玄関まで来た。するとガラス戸の白い貼紙が眼にとまった。

不吉な予感が彼の中を走った。

紙はガラスの内側に貼られていたが、端の方はめくれ上り、すでに相当日数が経過していることを物語っていた。

彼は腰をかがめてその文字を読んだ。

……

お知らせ

登記所の適正配置計画により、本年三月三十一日をもって当出張所は廃止され、四月一日から当庁所管業務は左記の登記所において行います

××郡××町一四三番地の一

××地方法務局××出張所

電話　二三　八二一五

……

彼は一瞬目眩に襲われたようになった。

ジーンとした悪感が背筋を伝っていった。

……

ここは廃止されてしまったのだ。

……

やっぱり人がいない筈だった。

……

彼は虚脱感で身体が小刻みにふるえ、そのまゝしゃがみこんでしまいたい衝動にかられた。

あると信じていたものがそこに無い、それは突然彼の中に生じた空洞だった。彼の中で過去が音をたてて崩れていった。日曜日なので家族の出拂った登記所の官舎……、そうとばかり思っていたのに、眼の前の建物はすでに廃屋であったのである。彼は更めて廃屋を見つめる眼差しで登記所を見直した。人の棲み家でなくなった建物は次第に人間の生ぐささを剥落させ、そして急速に朽ちはてて、雑草の間に崩れ去ってしまうであろう。

……

今日がこの建物を見る最後になるかもしれない、そういう感慨におそわれると、彼はこの廃屋をはっきり見盡してしまわなければならないと思った。

彼は建物に沿って再び歩きはじめた。

人の住んでいない家屋の空しさと、人がいないということの怖ろしさのようなものを、にわかに彼は膚で感じた。

官舎の一番南端の窓の下に立った。雨戸はぴったり閉っている。さきほど彼が坂道の途中から眺めた窓である。彼の中学時代の勉強部屋である。

勉強部屋の角には板塀があって、登記所の前庭と、官舎の裏庭との境になっていた。板塀の横には桃の木があり、ちょうど今時の季節であれば、下蔭が暗くなるほどに枝葉が茂り、青い小さな実をつけた。しかし板塀も桃の木もすでにない。代りに大きな南天が一本その跡とおぼしき位置に茂っていたが、彼の記憶にはない南天だった。

彼が立っているその小さな空地は、昔は畠になっていた。とりわけトマト畠であった頃が記憶にのこっている。ある夏のこと、一本のトマトが他を圧して背丈がのびた。葉が茂り、枝が伸び、枝には更に葉が生い茂り、更に枝からは枝が分かれ、やがてどの枝にも黄色の花が一面に咲いた。間もなく花は小さな青い実に変り、あまり多いので数えてみると七十以上もあった。トマトの栽培には脇芽をつみとって実を減らさなくてはならないのだが、そんなことを知らない母は

「今年はトマトの豊作だわね」

と無邪気に喜んだ。

しかし間もなくトマトの実の生長は止ったので、生長のとまったままで実は成熟し、ビー玉ぐらいの赤いトマトがいっせいに祭りの提灯のように枝々に色づいた。豊作を夢みていた母は落胆した。農家の野菜畠に大きなトマトがはちきれそうな瘤のように光っているのにくらべて、竹箒のように四方に伸びた細い枝々に発育不全の赤いトマトが鈴なりになっている。なんとも奇妙な光景だった。彼の勉強部屋の窓からそのトマトがななめ左の方向に見えたが、丹精した母がかわいそうに思えたり、またその人を小馬鹿にしたようなトマトのとぼけた姿が滑稽に思えたりもした。

しかし勿論今はその畠もトマトもない。たゞ白い空地があるだけだった。彼は閉された雨戸を照らす、強すぎる五月の光を見上げていた。

○○年前の勉強部屋を彼はいまでも鮮明に覚えている。一番奥に押入れがあり、押入れの右側は出入口、左手の壁には本箱があって、窓際には机と椅子が置いてあった。本箱は事務所の書類戸棚で、更に机も椅子も事務所のものだった。登記所の中には使っていない机や書類戸棚がいくつもあったから、彼の勉強部屋への調達にはこと欠かなかった。

窓は障子張りであったから、部屋の中はうす暗かった。彼は雨戸の下を離れると、裏庭の方へ歩いていった。終戦の前後、この裏庭は芋畠になっていた。豊かな葉や蔓が波打っていたが、よく茂るわりには貧弱な芋しかとれなかった。

終戦の年の夏、彼は父を手伝って裏庭に防空壕を掘り直していた。空襲が日ましに激しくなり、このD町の近くにも爆弾が落ちて、本格的な防空態勢に入らなければならない緊迫した空気になっていた。せっかく茂った芋畠の半分をつぶして新しく頑丈な防空壕を作り直したが、それがあと一日か二日で完成という日に終戦となった。終戦の時から数えて〇〇年、今はもちろん防空壕の跡形もないし、芋畠の気配もない。それは廃屋の裏手にあるたゞの空地にすぎなかった。

その裏庭の眞中に立つと、お倉の白い壁を背にして柿の木が正面に見えた。柿の若葉はちょうど、のびきった頃あいの若々しい透き通った色で、それが全身に五月の日光を受けて光の柱ように輝いていた。裏庭の音のしない空間の中で、その柿若葉だけが炎のように燃えあがり、そこだけが若葉の火事のようであった。そのまぶしく不気味な若葉のきらめきは、あまりにすさまじくて、光り輝くその音が彼の耳まで聞えてきそうであった。

誰も人のいない廃墟の静寂の中で狂ったように燃えあがる柿若葉は、まるで廃屋の家靈が地中から湧き出た姿かと、一瞬思うほどそれは凄かった。彼はその柿若葉を写眞にとった。カメラのシャッターを押す瞬間、見えない家靈がフィルムに映るのではないかと恐ろしかった。

彼はこの邸内に一人でそうして立っていることに身震いを感じた。

無くなってしまった……と彼は思った。

登記所はなくなってしまったのだ……。

この廃墟にこれ以上とどまっていることは、この廃屋とともに、彼自身もここで無くなってしまうような気がする……。

彼は登記所を出た。

そしてDが丘へ行ってみようと思った。

そう思うと、Dが丘の暗く濃い葉桜の茂みが、彼の眼の前に幻のように拡がって見えてきた。

〔四〕

彼は道順として一旦駅前広場まで戻った。勿論そこまで出なくても、Dが丘へ行ける道はあったが、ついでに表通りも歩いてみたいという気持が彼の中で動いたからである。

表通りの商店街も変ってしまって、昔のうす暗い手垢のついた町並みはそこになく、プラスチックと新建材で造られた明るい商店街があっけらかんとあった。駅から近い右側に銀行があった。古い石造りで窓には鉄格子がはまり、重いドアのガラスには金色の文字が鈍く光っていた。銀行の前の道路はその高い建物のためにいつも日

陰で、空気も湿っている感じだった。しかしその古風な建物はすでになく、白いアルミの明るいマッチ箱のような型の建物に変ってしまっていた。

銀行の二、三軒先には警察署があった。道路からやや引っこんだ木造の古い建物は陰気な感じだったが、その建物もすでになく、跡地には小型スーパーが建っていた。

警察署は別の広い場所に移転したらしい。

警察署の前には郵便局がある。入口には夾竹桃が植っていた。しかし郵便局も建て直しのため取壊されて、空地には木材の残骸が散らばっていた。郵便局も銀行とおなじようにピカピカの建物になるのだろう。郵便局の建物が無くなったために、今まで背中合せだった裏側の家が表通りからむき出しに見えた。そんなところを眺めていると、この町を作り変えようとする見えない手が町のどこかを絶えず襲っている、その現場にはからずも出くわしたかのように彼は思った。

このような表通りは三分の一も歩かないうちに、それ以上歩きつづける興味を彼は失った。彼はいたたまれない気持ちになって横町へ曲った。

横町の路地にはさすが昔の面影が残っていた。

古い倉庫があった。それは彼の記憶にあるものだった。色のはげ落ちたシャッターに、かろうじて『県経済連D町倉庫』という文字が讀みとれた。しかし倉庫の前の空地が最近使われた形跡がないところをみると、この倉庫はすでに廃屋なっているのかもしれなかった。路地にさしこむ日光に、すゝけた壁は音もなく照りはえていた。

その隣には古い仕舞屋が忘れられたようにあり、その前で老婆が地面にかがんで紙屑を整理していた。

古い垣根や塀もあった。

しかしそれらは昔の原型をかろうじて残しているというよりも、むしろ新しい世の中から置き去りにされ、不用になったD町の残骸がそこに放置されているとしか見えなかった。

この辺に風呂屋がある筈だった。彼の記憶にあるその風景は、終戦直後の燃料不足で、浴槽に半分しかない湯水に大勢の人間がひしめくように入り、湯を浴びるというよりも汚れた湯水にかろうじて身体を浸すといったものだった。しかし風呂屋のあとは新建材の小さな旅館になっていた。経営のたちいかなくなった風呂屋は旅館に転業したのかもしれない。

突然、路地がとぎれて、彼は大きな通りに出た。それは表通りの三倍以上もある広いアスファルトの道だった。

昔、こんな道はなかった。

この辺は背の高い生垣に囲まれた住宅地、舊い屋敷、倉庫、農林学校の実習農園、そしてDが丘の坂道につづく桜並木が茂っている筈だった。それが突然、白っぽい、乾燥した、だだっ広い道路となって、彼を驚かせた。

彼の記憶にある住宅地の路地や桜並木は荒々しく削りとられ、広い道路の下に埋ってしまったのである。五月の光にまぶしいアスファルトの上を車がひっきりなしに走り、次々とDが丘の山腹の坂道をかけのぼって彼方に消えていった。それはD町に異質の風景で、そして彼の知らないD町だった。

彼は橋のない大川に行く手をさえぎられたおもいで、しばらく道端に立ったままDが丘の頂を眺めていた。Dが丘は眼の前に見えるのだが、その登り口がわからない。

すると左手に古い路地の入口が傷口のように見えた。路地を覗くとその奥には緑があった。昔の路地の名残りだった。

彼は路地へ入っていった。

古い生垣、庭木、半ば崩れた塀、古い家、暗い玄関、崩れた生垣の間からみえる裏庭。雑草にびっしり掩われた裏庭には初夏の花が鮮明に咲いていた。路地は五月の光を森閑と受け、全体がみどりに燃えあがってみえた。それは昔彼が見た路地だった。昔のD町が崩れかかるような姿勢でそこには残っていた。

しかしその路地も忽ち終った。あっと思うと眼の前は再びさっきの広い道路で、折角の路地も残っていたのはほんの僅かにすぎなかったのである。

広い道路に沿ってしばらく歩くと右手に新しいプレハブの家があった。何気なく門標を見ると

K・S

それは彼の中学時代の友達だった。そして二、三度、家へ遊びに行ったこともある。職業軍人であるKの父親はいつも留守だった。その頃のKの家は桜並木に通ずる路地の中ほどにあって、玄関が路地に向って突き出たように建っていた。しかし路地は広い道路の下に埋ってしまい、その機会にKはこの場所に家を新しく建て直したのだろう。彼はにわかに懐しくなった。優等生タイプだったその丸顔はどんなふうに変っただろうか。

彼はブロックの塀ごしにそっと家の中を覗いた。廊下の硝子戸が開けてあったので部屋の中がすっかり見え、中年の女性が鏡に向って髪の手入れをしていた。Kの奥さんにちがいない。彼はその門をくぐり、Kを訪ねてみようか、とよほど思った。

が、結局やめた。

〇〇年間一度も顔を合わせたことのない友達が不意に訪ねていって、一体それがどうなるというのか。玄関のベルを押す。さっき塀ごしに見えたあの奥さんが出てくるだろう。だが彼が名前を告げても勿論わからない。彼女は玄関先で怪訝な顔をするだろう。ご主人の中学時代の友達でしてと説明すると、彼女の顔にはいくらか安心感が浮かぶのだが、しかし突如の来訪への迷惑さは覆いようもなく、「ちょっとお待ちくださいませ」と奥へ引っこむ。

「やあ……」

Kが出てくる。

「ここを通ったらね、君の名前が出ていたものだから……、なつかしくて……」

「よかったらお上りください……」

応接間で差し向いになる。しかしさして話題があるわけではない。〇〇年ぶりで逢うというのに手土産一つ持たない突然の客が、それほど歓迎されよう筈はない。彼はかえって白けた気持ちになり早々に辞退することになるだろう……、そう思うと彼はそのまゝKの家の前を離れた。

右手のずっと遠くに小学校の建物が見えた。校庭をぐるっと取囲んでいた桜並木はなくなり、木造の校舎は蒲鉾型のコンクリート造りに変っていた。

この道をどこまで歩いたらDが丘の登り口に出るのだろう……、彼は途方にくれた。すると道路の反対側の向うに桜の茂みらしいものが見えた。道路を渡って歩いていくと、やはりそれは桜並木であった。しかし桜並木はほんの僅かしか残っていなかった。昔の桜並木は枝々が中空に重なりあって暗い葉桜のトンネルを作り、雨の日濡れた砂利道を歩くと下駄の下で小石がきしみ、傘に桜の下枝がざわざわと音をたて、触れたものだった。しかしその桜並木はまばらに切り倒され、コンクリートで固められた並木道はまるで乾燥剤をまいたプールサイドのようだった。

左手に農林学校がある。日曜日にこの道を通ると、人のいない静謐な校舎の窓が桜並木の外側に見えた。しかしその農林学校は廃止されたらしい。若い学生がまき散らしていた獣のような活気は消えてしまって、雑草の茂るにまかせた広い空地に、校舎が半ば崩れた姿をとどめていた。

まばらな桜並木はやがてDが丘への登り口に通じ、彼はそのコンクリートの坂道を登っていった。しかし坂道にも、上の方から覆いかぶさるようにして視界を遮った暗い葉桜の洞窟はすでになかった。頭上には青空が広々と見えた。

すべてが殺風景で味気なかった。

麓から車が登ってきて彼を追い抜いていった。若い男女がはしゃいで乗っていた。

頂上に着いた。

頂上の広場は野球場に変っていた。グランドでは野球が始っていて、選手のユニフォームが純白に輝いていた。さっき車で彼を追いこしていった若者たちは野球の応援にきたのであった。

彼は野球場とは反対の方向に歩いて、D町が一眺に見下せる崖の上に立った。

山麓から彼が立っている頂にかけての斜面はすべて茶畑で、燃える新緑が波のように彼の足許まで打ち寄せて

いた。

廃校になった農林学校がちょうど眞下に見え、桜並木の坂道も見えた。

視線を上げると、左手にはD駅が見えた。駅の裏手には鉄工所があり、それは昔とあまり変っていなかった。D町の人家は屋根の重なりが五月の光に輝いて、銀色の池のように見えた。

その屋根の中に、あの辺りだと、彼は登記所の建物を探したが、それはかえって彼の中にたゞ空しさを呼びおこしたにすぎなかった。彼にとって登記所が廃止されたD町は、もはや他人の町としか見えなかった。

視線を更にあげて東の彼方を見た。

なだらかな山が青く霞み、それは茶畑で有名なM台地だった。北から南にのびたその台地の先は、青く輝く靄の中にとけこんでいた。その先には海がある。彼はその上に拡る空を見上げた。南の空の拡りに、彼は海の匂いをかいだように思った。

その空の下にはB村がある……。

B村へ行ってみよう……と彼は思った。

B村にも昔彼は住んでいた。D町に住んでいた頃よりもずっと前の、彼が小学校一、二年生の頃である。

あの青くきらめく靄の中、あの明るい空の下のB村……、彼が探していたのは実はD町ではなくてB村だったのかもしれない……。

そう思うと彼は足早やにDが丘を降りた。

〔五〕

表通りをどこまでも南に下っていけばB村に出る。彼は駅前広場からタクシーに乗った。

狭いD町の町並みはあっという間にすぎて、車は間もなく田圃の中に出た。しかしそこもすでに昔のままではない。埋めたて地には、人家やガソリンスタンド、ドライブ・インなどが建ち、昔はなかった高等学校の校舎が突如右手の丘に見えたりした。高架の道路が立ちはだかった。東名高速道路であった。

しかしそうした地帯を走り抜けてしまえば、やはり自然は昔の原型をとどめぬほどに変っているわけではなかった。彼の記憶通りの場所に坂があり、川があり、丘があり、森があり、神社があり、寺があった。そしてすべては五月のみどりで埋まり、農家の庭先や垣根には昔通りの初夏の花が咲いていた。

道はきれいに舗装されていた。それを何の不思議とも思わずタクシーに乗っていたが、考えてみれば大変な変化だった。昔はたとえ広い県道でも舗装などはされていなかった。だからB村に通ずるこの道が舗装道路に変ろ

うなどということは考えてみることもできなかった。昔この砂利道を自転車で走ったとき、タイヤの下で小石がきしんでプチンとはねとばされた音を、彼は鮮明に憶い起した。

タクシーはしばらくみどりの中をひたすら走った。

そろそろB村に近い……。

村境には川が流れていた。子供の彼はよくその川へ泳ぎにいった。川の両岸には竹藪が茂り、川は通ずる細道には夏草が背丈よりも高かった。彼はその雑草をかき分けるようにして進み、頭にはね返るしなやかな細竹を首を曲げて避けた。直射日光と草いきれで息がつまりそうだった。B村の子供達が天狗の鼻と呼んでいる小さな白い花が眼の前に垂れ下り、甘ったるい夏の匂ひを発散させていた。手を伸して蔓から漏斗状の花をつみとると、汗に光った自分の鼻の先にくっつけて天狗の眞似をするのが、彼の子供の頃の遊びの一つだった。

タクシーの窓から見ると、勿論その川もあったし、橋もあった。しかし河川工事で両岸の竹藪は切り払われてコンクリートの堤防に改良され、橋もコンクリートの近代的な橋に変ってしまっていた。

タクシーはま新しい橋の上を走り抜けた。

橋を渡ってしばらくすると道は直線になり、そこがB村の中心であった。D町とは比較にならないささやかな町並みではあったが、しかしそれはそれなりに道の両側は田舎の商店街の体裁をととのえていた。

彼はそこでタクシーを降りた。

見覚えのある家がそのまゝ、残っているものもあり、新たに建て直したり、あるいは商売がえして表の店構えだけを造作し直し、プラスチックの看板がまぶしいような店もあった。彼は一軒一軒たしかめるように見ながら歩いていった。彼が子供の頃住んでいたB登記所は、その町並みの中頃の一番目立つところにあった。というのは登記所の右隣はB村に一軒しかない二階建ての旅館、左隣は警察の大きな建物、そして警察のには銀行があり、B村でも大きな建物がそこに集中していたからである。

銀行の建物は変ってしまっていた。石造りのどっしりした建物はすでになくて、明るく軽快な大衆向きの建物になっていた。それはD町で見た銀行の様式と同じだった。両方とも同じ銀行の支店であったから、きっと同じデザインで次から次へと古い支店を建て直しているのにちがいない。

その隣は警察だったが、その二階建ての大きな建物はそのまゝ残っており、鉄骨の火の見櫓も昔のまゝだった。だが次の瞬間、彼は、あっと、激しい衝撃を受けた。

無い……。

無いのである……。

登記所の建物が無いのであった。

その代りに、小さな、白い、いびつな空地が、たゞ、しょ

んぼりと、そこにあった。

あまりの唐突さに、その空地が何を意味するのか彼には理解できなかった。しかし間違いなく、それはB登記所が取壊され、そのまゝ放置された跡地であった。彼は少しも知らなかったが、B登記所もD登記所と同じようにすでに廃止されていたのである。しかもB村には建物すらも無い。彼は悲しみを通りこして虚脱状態になり、その空地を単なる遺跡でも見るように無感動に眺めた。

四角だと思っていた地形が実は意外にいびつな形であることをはじめて知った。

それにどうしてまたこの土地はこんなに小さいのか……と不思議なほど、それは小さかった。少なくともそこにはかなり広い前庭があり、見事な蘇鉄の植えこみがあり、事務所と官舎が一棟になった大きな建物があり、白壁の土蔵があった筈である。それだけのものがどうしてこんなちっぽけな空間に建っていられたのだろうか。家が取壊され、植木がなくなり、そして門や鉄の柵が取拂らわれると、空間は急にこの小さな空地に凝集してしまうのであろうか……。

そこには昔を憶い出させるようなものは殆ど残っていなかった。しかし空地に足を一歩ふみ入れると、彼の中には忽ち昔の復元図が甦ってきた。石の門、空を向いた一本一本の鉄棒の頂が槍状にとがっている海老茶色の鉄の柵、門の右手には楠が茂り、その木下蔭に井戸があった。前庭の中央には蘇鉄の植込みが天にそびえていた。背丈がまっすぐ上にのびていて、毎年色づく赤い実を採取するのに、父が梯子をかけて登っていかなければ手が届かなかった。

すべては跡かたなく消え、松と少しばかりの庭石が目印のように残っているだけだった。裏手の槇の生垣は人手が入らぬまゝに、乱れた髪のような枝を四方に伸ばしていた。彼は空地の中央に立って、ここが座敷のあった位置、ここが勝手口、ここが事務所、ここが上蔵と、幼い日の記憶を描いてみたが、それは空しい仕事だった。

隣の旅館との境には八つ手が繁り、秋になると黄白色に咲いた花の間を小鳥が飛びかっていた。しかしその繁みも今はなく、旅館の二階の建物だけが静かに空地を見下していた。

彼は裏の田圃へ出た。

昔そこには小川があり、彼はその清水の中に手を入れて芹を摘んだ。しかし子供心に清水と映った小川を、今見ると、それは小さなどぶにすぎなかった。あるいは單なる溝（みぞ）というべきか……。しかしかがんでよく見ると、どぶの中には緑の葉が見えた。やはり芹であった。しかし汚れた芹だった。

田圃の先には川があり、昔、堤は見渡す限りの桜並木だった。しかし田圃も半ば埋められて住宅が建ち、コンクリートの堤からは桜並木も消えていた。

やっぱりB村にも昔はない……。

どこは行ったらいいのだろう……。

彼の行手はにわかに切断された。

代官山……。

行くとすればそこしかないと思った。

代官山。

彼は田圃の中から県道まで戻り、そして代官山への道を曲った。

その角には昔見慣れたタバコ屋がまだあった。しかし彼の記憶にある昔風の家は新建材の新しい建物に変わり、中年の主婦が店番をしていた。昔店に坐っていた小柄で上品な、だが気の強そうな婆さんはもう死んだのだろうか。タバコ屋の圣営も世代が変ってしまっていた。

タバコ屋から二、三軒行くと、そこに豆腐屋があった。だが豆腐屋はもう廃業したのだろうか。表の戸は閉まっていた。

この豆腐屋には思い出があった。子供の頃彼はそのうす暗い作業場の隅に腰掛けて、一日中豆腐の出來上るのを見ていたことがあった。母の使いで豆腐を買いに行って、まだ豆腐が出來ていなかったからであった。作業場には豆腐屋のおじさんと少年の外には誰もいなかった。おじさんはいつも一人で、黙々と豆腐を作るのだろうか。大豆がつぶれ、白い乳液に変り、それが徐々に白く固まっていくさまを、彼は飽きもせずに眺めていた。彼がほとんど一日中見ていたと錯覚したほどの長い時間の中で、豆腐はゆっくりした手順で作られていった。出來上った白い豆腐はあたかも時間の凝集のように思われた。

豆腐屋の横は露地になっていて、納屋や作業場がその奥につづいている。その露地を覗いたとき、彼はあっと声をたてそうになった。

あまりにも昔そっくりの露地がそこに現れたからであった。

長年人手の入らない建物は、すさまじく荒れて露地に身を横たえていた。納屋の荒壁は剥げ落ちて竹の骨が見え、羽目板は破け、屋根は大きく円形に波打って露地に向って垂れ落ちんばかりに傾いていた。屋根の上には雑木がところかまわず枝を伸し、露地には雑草がはや夏草のように茂って、息のとまるような荒さみぶりで、彼の心を打った。

しかし昔がそこにあるということは、こうした荒廃の姿をさらすことなのかと思うと。悲しい気持ちだった。年令（とし）は人間だけでなく、建物もとり、自然もとる。年令（とし）をとるということは、荒廃するということなのか……。

彼は崩れた納屋の内部を覗いたが、眞暗でなにも見えなかった。乾いた壁土と腐敗した破目板の臭いの混合が

鼻を打ち、生きた人間の臭いはなかった。

その露地を抜けたとき、そこに、ぱっと景色が拡った。代官山の景色。

その景色はやっぱりそのまゝそこにあったという思いが、彼の胸を打った。みどりの田圃の向うに拡るその景色を昔から彼は好きだったが、そのひそかに期待していた景色が、若干の修正以外は殆ど昔そのまゝ、彼の眼の前に現れたのである。

昔と違っている点を強いてあげれば、電柱が多くなったこと、田圃の中の道も舗装されたこと、ビニールハウス栽培の屋根が見えること、新建材の家が一、二軒散在していることぐらいだったが、それはあの登記所の空地の空しさ、豆腐屋の荒廃を見てきた彼にとっては、たいした問題ではなかった。それは古くて新鮮だった。朝からずっと探していた場所は、実はここだったのかもしれないと彼は思った。

田圃道の突き当りに代官山はあった。それが本当に代官山という名前なのかどうか、誰も知らない。その麓に代官屋敷があるということから誰言うとなくそれは代官山ということになっていた。古い代官屋敷は刈りこまれた槇の生垣で囲まれ、庭木の深い繁みの間に屋根や、土蔵の白壁、形よく刈りこまれた松が見え、更に広い屋敷は奥へ奥へと伸びて、代官山の茂みにとけこんでしまっていた。

代官屋敷の裏手から代官山へ登る道がある筈だった。彼は屋敷の裏へ廻り、しばらく山道を登っていったが。廃道になったのか途中で山道は草や灌木に埋って消えてしまった。彼は道をまちがえたかと思ったが、かまわず草や小枝をかきわけ廃道の跡らしい斜面を登っていった。草叢はかたく鋭い葉を四方に伸して五月の光に輝き、山の斜面に草の匂りは室のようにたちこめていた。彼は息がつまり、身体が汗ばんだ。

さして高くない山の頂に着いたとき、ぱっと拡った明るさに、彼はあっと声をあげそうになった。

青空の下に茶畠が濃密に拡っていた。

庭園の灌木のように茶畠は丹精に刈りこまれ、円形の背中が波のように幾重にも連っていた。日のつんだ茶の新芽は棘の群のように伸びあがって、その輝やかしく勢のよいさまは、茶畠全体がいっせいに背のびをしているように見え、その溢れるような新芽はあまりにおびただしくて、山頂から盛りこぼれるのではないかと思われた。

茶畠の片隅に稲荷神社の木立が見えた。昔そのお稲荷さんへ母と二人で油揚げを供えにきた記憶がある。彼は茶畠の中を朱色の鳥居の方へ歩いていった。

茶畠はあまりに明るく燃えあがり、あまりに鮮明で静かだったので、彼の気持はなつかしさを通りこして悲しいくらいだった。

稲荷神社の裏手にはすさまじく太陽に輝いた草叢が乱

れ、その中に入っていくと崩れかかった石佛の祠があった。祠の裏側は急な崖で、雑草の鋭い葉群の間からB村が見えた。

B村の全景はほゞ彼が願っていたものに近かった。右手の遠くには鎮守の森が見え、彼がさきほどタクシーで走ってきた県道も見えた。勿論県道そのものが全部この山上から見えるわけではなかったが、道に沿って並ぶ家並みの形から県道の形はそれと推察された。

正面に火の見櫓が見えた。その下に警察署がある。あの光った屋根がそうであろうか。するとその隣が登記所になる。

だが……廃止になった空地が彼の脳裏にうかんでくると、彼は息苦しくなり、その幻影を追い払うように、もっと遠くの景色に眼を転じた。

田圃の向うにはB川の白い堤が見え、森が拡り、畑が拡り、左手のずっと遠くに小学校が見えた。

しかし彼の心はしらじらとした空白の領域で占められていた。彼にとって登記所のないB村はすでに無縁なものとなっていた。彼はB村を、遠い景色、無関係な景色のように眺めた。

もっとどこかへ行かなければならない……と彼は思った。

振り返ると茶畑ごしの空の中に、M台地が長々と寝そべって見えた。

もっと、どこかへ……。

ずっと南の方……。

ずっと東の方……。

茶畑が無限につづくM台地。そのどこまでも茶畑がつづくので、まるで虚無のような茶畑の拡がり……。

そこにこそ彼が本当に探している所なのかもしれない。

そう思うと彼は草叢の斜面を滑り落ちるようにして、代官山を下った。

〔六〕

こんな田舎でタクシーが拾えるであろうか。県道に出ればどうにかなるかもしれない。彼は県道にしばらく立っていた。空の帰り車を期待したのだがそれは徒労のように思われた。

だがその時一台の車が南から走ってきた。半ば諦めていたのであまり注意を払わなかったが、車がすれ違ったとき運転手だけしか乗っていないのがわかった。彼はあわてて手をあげた。車は少し走りすぎて、気迷ったようによたよたと止った。車はD町への帰り車だった、が方向を逆にもどしてもらった。

「M台地へ行きたいんだが……」

車は県道の途中から東へ曲った。
「M台地はどの辺だね……？」
「どの辺といっても……、とにかくM台地へ行きたいんです……」
変な客だな、という表情が運転手の横顔にちらっと走ったが、
「じゃあ、M台地ならどこでもいいのかね……」
「なるべくM台地を沢山見たい……」
「それじゃあ、M台地見学だね……」
見学、という言葉をつきつけられて成程と思った。見学という言葉は、彼の現在の心境からほど遠い。しかし彼がこれからやろうとしている行動を外側から見れば、それはたしかに見学にちがいない。運転手ともなれば職業柄適確な言葉を選び出すものだと感心した。目的がはっきりすると、思いなしかタクシーにスピードが加わった。
「運転手さん、出来たらその後で、相良の方へも廻ってみたいんだが……」
「わかった」
運転手はハンドルを片手に、これから案内しようとする地図を頭に浮べつゝ、
「そうすると西口からM台地へ上った方がええね。そして大井川のみえる所まで行き、帰りは南口から下りて相良へ抜けりゃあ、道順が一番ええ……」
道はきれいに舗装されていて、車は流れるように走った。こんな村の奥の奥までが舗装されているなんて、彼の子供の頃には考えられもしないことだった。過ぎた○○年の歳月をそこに感じた。
農家の庭に鯉のぼりが見えた。あまり見事なので数えてみると、赤と黒をまぜて十匹の大群で、空中に腹をゆたかに波うたせて同じ方向に泳ぎ、みどり一色の山深い里にあざやかな色彩をひるがえしていた。
道はいつしか坂道だった。車はすでにM台地の一端にさしかかっているらしい。窓外には山が迫り、山道は曲りくねり、突然茶畑が現れたかと思うと、もうその先はM台地の茶畑だった。
茶の木のうねりは波の背のようにどこまでも続き、近寄ると、新鮮で鋭い若芽がいっせいに空に向って伸びあがっていた。
無限の茶畑……。
どこまで走っても茶畑だった。
M台地の道路はまっすぐに舗装されて、両側には家が散在し、製茶工場があり、今日その中を走ってはじめてわかったのだが、M台地の茶畑は実は「畑」ではなく、一つの大きな村なのであった。台地に村がある、その村の土地という土地がすべて茶畑で埋っている、そう考えればいいのだと彼は思った。
茶畑の拡りはあまりにも昔のままだった。変ったことといえば、道路が舗装されたことと、台地の中央を東名高速道路が横切ったことぐらいかもしれない。
しかしたとえ昔のままだとしても、このおびただしい茶畑は、彼にとって果して何なのであろうか……。
彼がその中をいくら走っても茶畑はなにも答えてくれず、たゞ新芽が五月の光と空気の中でひたすらに伸びて、ひたすらに緑で、ひたすらに新鮮で、そしてひたすらにつややかで、ただそれだけであった。
自然はたゞ自然で、そして結局自然にすぎなかった。
どこまで走っても茶畑で、彼は気が遠くなりそうだった。しかしM台地もやっと北端に近くなったらしく、右手の視界がにわかに開けると、車はスピードを落し、
「ここの眺めが一番ええですよ」
運転手が道端に車をとめた。なるほどそれは素晴らしい眺めであった。
「ちょっと降りてもいいですか？」
「すこしなら待ちますだよ」
そこは大井川の流れをちょうど上から見下す場所で、雄大な眺望であった。左手の山間から大井川はその幅広い姿を現して彼の眼の前で広々と蛇行し、そしてM台地の裾を這うようにして右手の下流へ、海を目ざして消えていった。正面には東海道線の鉄橋が見え、向う岸にS市が見えた。S市の遠い背景は幾重もの山の重なりで、更にその奥には赤石山脈の連峯が霞み、心を洗われるような眺めだった。
S市の工場から立ちのぼる煙突の煙が、空中に盛り上って見え、それはまるでS市の吐く息を見るようだった。終戦直後の二年間彼はS市の会社へ勤めていた。D町からS市は駅で二つ目で、混雑した汚い汽車にのり、この大井川の鉄橋を渡って通勤したものである。その頃のS市は規模も小さく、あの煙突がある工場などはまだなかった。
彼の中に、S市まで足を伸してみたいという気持ちが激しく動いた。しかし他の心がそれを押えた。たとえS市へ行ってみても、やはり空しいに違いないという彼の思いからであった。
いつの間にか運転手は車の方向を変え、のんきそうに煙草をふかしていた。彼は茶店で罐入りジュースを買うと一本を運転手にやった。
「やあ、これはすまんこって……」
日に焼けて逞しい運転手の喉佛がごくごく動いた。
たっぷり冷えたジュースは喉に痛いほどだった。
彼は、再びタクシーに乗り南を目指して茶畑を走った。
M台地を下りると田圃の中をどこまでも走った。そこは彼が一度も来たことのない所だった。
やがて前方が開放的になってきたかと思うと、紫色の海が見えた。
「お客さん、相良の海ですよ」

彼は伸びあがるようにして海を見た。おだやかな海はきらきら光っていた。

相良についての彼の記憶は小学生のころの海水浴だった。広々と砂丘が続くその砂丘を父とどこまでも歩いていくと、海があり、海水浴客向けの葭簀張りの小屋があった。小屋をめぐって海水浴客のさまざまな色彩が散らばっていた。相良に関する彼の記憶はそれしかない。

車が急に右に曲ると海岸沿いの國道に出た。しかし國道の外側には防潮堤が築かれ、砂丘はなかった。

「この突き当りに見えるのが相良港……」

「ああ……」

折角の運転手の説明に彼は気のない返事をした。広い砂丘と、その延長が海になっている、あの砂丘と海は、いったいどこへいったのだろう。

「その向うに見えるのが御前崎……」

運転手は説明をつづけてくれた。相良港のずっと先に、海に黒く突き出た山の影のようなものが見えた。

「お客さん、御前崎まで行きますか?」

しかし御前崎まで行く意欲はなくなっていた。いつか見た御前崎の白い燈台が夢のように彼の中に浮かんでくる。しかし○○年前に見た燈台の現状を再び確かめてみたところで、いったい何になるというのだろう……。

「もうD町へ帰ってくれませんか……」

彼はそう言った。

国道をしばらく走ると車は右に曲った。すると田圃の中が大きく開発されて赤土がむき出しになり、「浜岡原子力発電所」と書いた看板が高々と立っていた。

「これが原子力発電所……、來年からもう稼働だね」

運転手が自慢そうに説明してくれた。浜岡に原子力発電所が出來るなんてことは想像の外にあった。変わりはてた故郷を見る思いだった。

駿河湾と遠州灘が接する御前崎灯台から西へ十キロ、白い砂丘がつづく美しい海岸線の内側浜岡で、原子力発電所の建設工事がいまたけなわ。なによりも施設の安全面に最大の努力をはらいながら……。心臓部の原子炉格納容器は、厚いコンクリート壁でがっちりおおわれた。漁業活動への影響を最小限にと、沖合六百メートルに設けた取水塔が冷却水を導く海底トンネルも貫通した。構内の一角にできた原子力館を訪れる人は毎日千人あまり。観光地としてすでに脚光をあびつつある。出力五四万キロワット、H一号機の運転開始は昭和×年十一月の予定。

浜岡原子力発電所を宣伝したこの中部電力の広告を讀んだのは、彼がD町に帰ってきてからだった。

長い時間車に乗りっぱなしだったので、D駅広場でタクシーを降りるといささか腰が痛かった。少しどこかで

休みたかった。その前に用心して汽車の時間を調べると、次の上りまでには四十分もあった。表通りの角に喫茶店があったことを思い出した。いまやこの田舎町にも喫茶店が店を出すようになったのである。

構えは小さかったが中に入ると案外洒落た店だった。山小屋風の田舎には珍らしい凝った作りで、経営者が半分趣味で店を出しているのではないかと思われた。古いランプや、彫刻、壁掛けなどが集められて飾ってあった。コーヒーを飲みながらマガジンラックに手を伸して雑誌を見ると、その中の一冊に、浜岡原子力発電所の広告がのっていた。

広告のタイトルは「建設すすむ浜岡原子力発電所」とあり、半頁の写眞と、さきほどのコピーがのっていた。写眞は発電所を海から写した航空写眞で、遠州灘が青く、海岸近くは白い波をたて、海岸に續く広い土地が茶色に掘り起されて鉄骨の櫓を中心に発電所の建設が進められていた。それはみどりの地球の皮をそこだけ無理に剥ぎとったような痛々しさだった。

彼は写眞を眺めながら、何もかも変ってしまった、いや変りつつあるのだと思った。

彼はゆっくりコーヒーを口にしながら窓の外に眼を向けた。山小屋風なので窓は小さく、それに窓に装飾的なカーテンが張られているために、その隙間から見える外の範囲は僅かで、窓に顔を押しつけるようにしなければ外が覗けなかった。

彼の位置からはD駅の裏側の荒れた部分が見えた。そこは駅の構内でも外れの部分で、道を歩いていたのでは見えない場所であった。ああ、たしかにこんな場所があったと、彼は憶い起した。

そこには昔のまゝの駅の構内が、置き忘れられたように残っていた。

丸太と丸太を結んだ太い針金は黒く錆び、その丸太の柵の間に柳と銀杏が何本も植っていた。長年手入れがされていないので、枝葉はむさ苦しく茂って乱れ、その無秩序に垂れ下った葉群の向うに、古い倉庫や、荷揚げ場が見え、錆びついたドラム罐、古タイヤ、黒ずんだ枕木などが、うず高く積まれていた。

それはほっとするような、昔のまゝの姿だった。

彼が更に視線をその先にのばすと、そこにはホームの端が見えた。汽車の入ってこない時間のホームに人影はなく、たゞ森閑と葉桜が垂れ下っていた。ホームの外側は寺の境内で、そのおびただしい葉桜が垣根を乗り越え、ホームの上へまるで魔物のように落ちかかっているのであった。

それは中学生の彼が通学の往き帰りに、いつも反対側のホームから見ていた景色だった。

少しも変っていない。

ホームの端の人気の無さも、瀧のように落ちかかる葉

桜も、寺の屋根の形も……。

昔のまま。

彼はD駅に下車してからはじめて、D町の一番昔のままの姿を発見したと思った。しかしそれを見つけたのが、あまりにも最後の時になってしまったと思った。

もしD町に下車したばかりであれば、彼はまずこの葉桜の下にかけつけたことだろう。しかし今の彼にはもう喫茶店をわざわざ出て、葉桜の下まで行こうという気持ちはなくなっていた。

過去は結局、過去の中にしかない……彼は呟いた。

そして窓に額をすりつけたまま、汽車の時間がくるまで駅の構内をながめていた。

（終）

吾輩は紙魚ロボである

永畑俊三

（一）

吾輩は紙魚（しみ）ロボットである、名前は未だ無い。インターネット時代が偶然に生み出した奇形児らしいが、これまた奇跡的に棲みかを見付けた、というより気づいたらもぐり込む場所の脇に吹き飛ばされていた。それがこの主人の額の向かって中央右にある、小さくもなく大き過ぎもしない黒子である。しかも、潜り込んでぴったり埋め込まれたから、いくら激しく頭を振られても、汗をかいても、ごしごし洗われてもびくともしない。極小・極薄のICチップの開発現場に起こった原因不明の爆発によって、完成間近の吾輩が開発者の思いもかけない能力を隠し持った人工紙魚として、遥か遠くの道行く主人に取り付いたという訳である。吾輩の存在に何の意識もない主人と自分の来し方行く末の全く分からない吾輩の共棲が始まった。勿論語れるのは吾輩の方しかない。

潜り込んだ当初は真っ暗やみの、むしろ何の意識も何の感覚もないただそこに居る無機のゴミであったのだろう。どういうDNAが仕掛けられていたのか知らないが、そのうち外の光を感じるようになり、やがて主人が見る景色を見る視力を持つことになる。そしてカメラが写しだすように視野に入っている映像を万遍なく同時・同列に見、やがて全てを記録として保存出来るようになった。地球に紙魚のような生物が姿を現し、気の遠くなるような時空の中で人間が生まれインターネットを操るまでに発展する道行を、地球がビッグバンの瞬間まで一年で戻る位の速さで駆け抜け成長するDNAだったのではないだろうか。

そして、AIの発展進化に先駆けて、ビッグ・データの蓄積活用に向かい、主人の頭脳の動きも読めるようになる。更にこれは吾輩にとっても偶然で、それを繰り返

す力は持てないことが分かり、自身も悠久ではないし後継ぎを残すことも出来ず、主人と命運を共にするであろうという、運命に確信を持つようにもなった。完全ではないが、小型の普通の五感と吾輩と違って運動能力そして通信能力を持つ、しかし短命のクローン紙魚ロボを生み出すことに成功した。吾輩をサテライトにして吾輩の指揮に従い出動する衛星のような存在で、吾輩に名前がないから、勿論それ等にも無い。

主人は日本人で第二次世界大戦終戦の時に生まれ、多くの日本人同様、生き残った父や母や兄弟姉妹と共に、焼け野原になった国土で、その日の暮らしにも窮する貧しさの中から、所謂民主憲法を背負って、復興・成長を駆け抜け、未成熟・課題大国化の中で高齢化を迎えている。吾輩が取り付いたのは、主人家族が数年のフランス生活から帰国した頃で、どういうわけか穏やかな主人が、それ以来アンガー・マネージメントに苦しんでいる車内マナー問題に一貫して付き合わされることになった。

そもそも吾輩が主人の額で覚醒したのが、通勤電車の中であった。取りついてからどれだけ経っていたのかは分からないが、吹き飛んだ時点での状況、取りついてからの時間経過と諸々の環境作用によって、見て聞いて記憶できる機能状態になった時である。判断する機能はその後徐々に進化してきたので、その時のことは、自分の生まれる前のトーキー映画をみてそれを今描写表現しているといったものかと思う。

先ずカシャカシャという音が聞き取れこれで目が覚めた。そして「音を下げなさい」という主人の声が聞こえた。言われた学生は気づかぬらしい、左隣りの一人おいたその若者の肩に左手を伸ばしトントンと叩いて、今度は少し声を上げて「音が漏れてうるさいから」と言っている。直ぐ左隣のスーツ姿で身を押されながらも新聞を読んでいた男性が、うるさそうに顔を主人に向けると、「君は迷惑でないのかね」と今度は彼に向って主人が言う。不満げに顔を元に戻した彼に「そもそも、そんなに新聞を広げて読んで、周りが迷惑しているのも分からんのかね」と返す。この間にこそこそと学生は音を下げて知らんふりをしている。聞こえぬような声で「謝りもせんで、根性が悪いなあ」とつぶやいたのが吾輩だけには聞こえた。隣の男性は明らかに不快気に新聞を鞄にしまって、まだ次の駅には間があるのに、人波をかき分け出口に向かいだした。

また主人が呟く。「何も読むなとは言ってない。人に迷惑をかけず折りたたんで読むやり方も知らんのかね。まだ知らんふりでも音を下げる方がましだ。拡げ読みしているから、ほら二人が前に出てこれた、その分の吊革スペースを占拠していたんだ。迷惑の自覚がない。」と。言われたわけではないが、主人の前に座っていた客達

は心なしか居ずまいを正したように見えた。しかし一人、ずっと居眠りをしていて、だらしなく腰が前に出て足を投げ出しているいい歳の男がいた。隣の女性が迷惑そうに、電車が速度を変える度にもたれかかってくるその男の頭に苦慮している。主人は電車がブレーキをかけた時、よろけるようにして、彼の足を蹴飛ばした。ピクッと彼は目を覚まして、何がおきたかと、前の主人を睨んだ。すかさず主人が「失礼」と声をかける。男は何だというような顔をして、また眼を瞑ろうとする。その時を逃さず主人が「足が長いんですね」とそのだらしなく伸ばした足を眺めた上、彼の顔を睨みつけた。ここまでされると流石に彼も気づいたのか、しっかりと腰を座席の背に付けて座りなおし姿勢をただした。依然居眠りを続けるが、ヤジロベーはしなくなった。

この朝は、後から知ったのだが、朝食付きの勉強会に出席してからの出社だったようで、勉強会では先端の電気メーカーの会員が講師役になって、最近売り出した自動パン焼き機の話をした。自前のイースト菌とパン粉を使ってふっくら暖かいパンが、簡単自動的に作れて、おいしさが違うし、自分で作れる家族も楽しい、というものであった。会員の多くがそいつは面白い買おうと好評であった。ところが、主人はこれに水を差すようなことを言った。「私も便利だと思って買ったんだ。便利は便利で暖かいうちはまだいいが、冷めたら味がかなり落ちて、楽しみは長続きしなかった。矢張り本物の味を出すにはもう一工夫いるのではないか。」と。そこは流石説明者は偉かった。「成程、いいご意見を聞かせていただいた。ロングラン製品になるよう、現場に改善を求めることにしたい。」と受け答えた。

それはそれで主人も「そうお願いしたい、朝のパンは一日の気分を左右するものだ。パリでもおいしいバケットにありつくまで近所のパン屋を渉り歩いたものだから。」と受けとめた。ところが一呼吸おいて、「ところで、電気製品といえばウォークマンのことだが、何とか音漏れのない音の自動調節が出来るものにならないものかね。何しろ公徳意識のない若者が多くて自分で調節なんかしようともしない。そうなると製造者責任に属することではないかと思うのだが、迷惑かけないよう工夫してもらいたいものだ。」と付け加えた。

説明者は困ったなという顔付きをして、「それは私の部署のものではないんだが・・」と言いかけたところを、別の会員が引き取るように口をはさんだ。

「そういえば君は、もぐら叩きのように車内で注意しているんだってね。最近は色んな連中がいるから気をつけないと、刺されたりしかねないよ。迷惑は迷惑なんだが怪我でもしたら何にもならないぞ。」と脅かすように言った。

主人は、またかという顔で、「でも、放置したらどう

なるか。叱る大人がいなくなったから、自分勝手がまかり通るようになったんじゃないだろうか。経験を積んできたので人物は見るようにしているし見分けもつくようになった。」と応える。別の会員が、「そうは言っても危ないぞ。電鉄会社の注意に任せておけば。」と横槍を入れる。主人がまた答える。

「地下鉄会社もやってないわけではないが、あのマナーポスターだけでは見もしないし効きもしない。例えば、シルバーシートに坐った若者が仮面をかむり、前に立ったお婆さんが『正体見たり、オトボケ仮面』といっている風刺漫画調のものと、ヘッドホンとリュック姿のラクダに向かって、ヤギが『君はラクダが、僕はメェーわく』といっているこれも漫画調のものだ。

傑作だとは思うが、他方でもう漫画調やオトボケ調でなく、メェーわくする方も仮面を脱いで、真顔で世直しにかからないと、すでに手遅れになっている家庭や学校の再建がますます手の届かぬ遠いものになってしまう。面白ければ何でもやるたぐいの笑いに紛らわせないで、真剣になってあるべきを説く時なのではないかと思っている。電鉄会社は本気で叱る気がないんだよ。」

また別の会員が口を挟んだ。

「それは仕方がないよ。何せ乗客はお客様なんだから、利用して乗ってくれて運賃を払ってもらって経営が成り立っている。強圧的にでれば、客を失うことになる。」

主人はそちらの声に向かって反論する。

「客と売り手の関係であるからその要素は否定しない。しかし、普通のお店と違って公共的であり、儲けだけではない。鉄道法で縛られており、運賃も公共料金とされているし、安全基準も設けられている。そして客は器物損壊や運行妨害、傷害等は勿論迷惑行為として禁じられている。この場合マナーは動く函社会における社会人として迷惑や顰蹙を買う行為を律するものだから、各電鉄会社でその実情にあわせて、常識的にまもるべき規範を掲げて注意することは勿論、実効あらしめる措置を取ることに遠慮は要らないと思う。」

自動パン焼機の説明者の姿が見えないと思っていたら、大きな袋を担いで丁度このタイミングで戻ってきて、皆に向かって口上を述べた。

「ちょっと失礼したが、本日はスタッフに同道願って、自動パン焼機で焼きたてのパンを皆んなに食べてもらおうと思った。今到着したので、一口づつ食べてもらって、時間も来たのでこの辺でお開きにしたい。」と、小規模有志の会だから当番制で講師も司会も兼ねており、閉会を宣言した。

めいめいに礼を言いながら退出してゆくが、主人も礼の言葉を口にした。

「この焼きたてのやわらかなほかほかのパン、美味しいですねえ、有難う。材料の適切なバランスが守られて

いるからこその味ですね。お客様は神様と、その意のまま砂糖を入れてもだめ、膨らし粉を見境もなく入れたら当世のようにバブル崩壊。易きにつき節度を疎かにすれば元も子もない。パンにも苦りや塩も入っている所以です。」と。まだ判断未熟の私にも、拘る主人が分かった。

苦りとは何か分らなかったが、後に主人の別称とも関係して理解した。

これが吾輩が主人の車内注意活動に付き合った最初の日であったが、その後暫くは映像記録に注意活動は出てこない。しかも車内の映像はある日突然、それまでと打って変わった景色になった。家の中も仕事場も登場人物も乗り物も一変してしまった。東京から随分離れているようだし、家族もいなくなった。汽車には乗ったが電車には乗らなくなった。普段の移動は車で専属の運転手さんが付いている。ちょっと時間がかかると田園風景の中を走っていることが多かった。東京には飛行機に乗って年に二回ほどある会議に往復するだけで、奥さんもその間を縫い年に二～三回やって来る。うち一回が二人の子供を連れて夏休みに半月ほど滞在する。涼しいからやってくるようで、札幌という北海道の中心の大都市であることは分かった。ことごとく大造りな街で緑も多く、主人も行き帰りが駅とは関係なく、事務所も極く近くで存外規則的に早く帰って自分で料理して一人で食べ、後はテレビでニュースかなんか見て、読書か書き物をしていることが多い。単身赴任と言うらしいことも分かった。

出張と称して泊りがけで広大な道内を行き来することが多く、窓越しに山川草木、花鳥風月を新鮮な陽の光の中に見ながら楽しみながら、主人のバックミラーに映る顔も日を追うに連れ生気を増してゆくことが分かった。そして陽の光は吾輩にとって大恩恵をもたらした。体内のエネルギーが急速に満ちて、単に映像の記憶に留めるだけでなく、次第に自分が感じたり考えたり、記憶の蓄積の中で判断をするよう機能アップしている実感が日増しに強まっていくことで、吾輩の成長エネルギー源が太陽光であるとの確信にいたった。

人間の暦や時間の刻みにも完全同期するようになり、ここでの生活が二年間であったことも分かった。そして、主人の思いを吾輩の頭の中に描く能力もついてゆき、吾輩自身も面白い紙魚ロボ人生が始まったように感じた。ただ自力で移動は出来ないので、より面白そうな人に取り着くことは叶わなかった。

この北の都での生活を終わる頃までには、主人がどういう人であるかも分かってきた。特に電車内で注意活動をする主人が、何故それに執着するのかも追い追い理解出来てきた。主人の顔つきが生気を増してきたと感じられたのにも訳があった。東京では室内に籠りがちなのに、

陽に当たることが多く日やけ気味になったのと、注意行動がなくなり顔をしかめることがなくなったので、別に太ったり精悍になったのではなかった。その意味では東京での主人は苦虫先生とでも言うのが相応しいのではないかと思った。好きで苦虫なのではなく、何とかより良い社会に、という思いが背景にあることも分かってきた。

東京に帰って車中でこの苦虫が復活した日、駅事務所に立ち寄った主人はきつい口調で「若者は空いていても優先席に坐るべきではないのに、お年寄りが前に来ても知らん顔して立とうともしない。一片の張り紙など役にも立たない。

ましてや、正体みたりおとぼけ仮面のポスターのおとぼけ笑いでは、笑ってごまかせばいいと逆効果だ。しかもご協力お願いしますでは、何の教育効果もない。あなた方は何も言われないからとのほほんとしているが、弱い人々の不信と不満を高め世の醇風良俗を破壊していることに気付くべきだ。」と申し入れた。

応対の若い駅員は初めてなのか気圧されたのか戸惑いと迷惑の表情を隠さない。しかし直ぐこのまま受けたら大変と気付いて表情を能面のように変えると、「ご注意有難うございます。私どもも色々工夫しているつもりですが、お客様に何処まで申し上げて良いものか迷うところもございまして。」と返答した。

「だからおとぼけ仮面だというんだ。やってみなければわからんじゃないか。きちんと検討してもらいたい。」と語気を強める主人。すると後ろからやや年配の駅員が「分かりました。ご意見を上にあげますので。」としたり顔で受け止めた。主人もここまでと思ったのか、「本当にきちんとあげて下さい。検討中ですがまだ答えが出ないようでして、というのでは困る。若い人、初めはもっともだという顔だったよ、その気持ちをなくさず本当のおとぼけ仮面にならないように。では。」というと歩き出した。「苦虫先生再登場。」という舌打ちゼリフが、鋭敏な私には後ろから聞こえた。勿論主人には聞こえないが。ははーん、苦虫先生はれっきとした仇名になっているんだ、と納得した。

（二）

主人即ち苦虫先生が何時から苦虫になったのか。どうしてそうなったのか、吾輩が理解したところはこんなところだ。

主人がそれまでその方面の仕事をしたこともなく、行ったことも喋ったこともないフランス語の国パリに赴任したのは、我が国が驚異的な成長を遂げ世界の牽引役となり、影響力を世界に誇示するようになった頃であった。それまでなら派遣されるようなこともないであろう主人が行けたのは将に国の勢いにのったバブリーな現象

であったに違いない。見えざる、言えざる、聞けざるの主人は仕事の面では、失敗・苦労の連続であったが、西欧の熟した大人の文化には大いに啓発されるところがあった。反射的に日本の持つ醇風良俗・文化の良いところを失わないことの大事さも痛感したところであり、付き合った向こうの人々がそれなりに評価してくれて仕事に大きな支障もなかったのは、そうした日本的振る舞いによるものと思われる。

そのような異国での生活に疲労が蓄積されたのか、取りついたウィルスが強烈だったのか、帰国を半年後に控えた頃、突然重篤な、奥さんに言わせれば昏睡状態が続き、幼な児を抱え寡婦として帰国かと一瞬悪夢を見たような、病に罹り帰国まで安静療養生活が続くことになった。今でいえば笑い話のように話すが主人としても一度は覚悟した身、あとは天の恵みで拾った人生、大袈裟に言えば世にお返しする人生といった一種悟ったような人生観を強めたようだ。

担架に乗るような形でタラップを降りた久し振りの日本。療養生活と帰国便での特別搬送などで、元々つましい懐も尽き、最後のパリ生活も無になり犠牲を強いた家族を養うためにも、暫しの休養で閑職ながら首になる前に職場復帰。

そのような中、通勤の行き帰りでみた車内風景に、主人なりの感覚でおおいなる違和感を感じ衝撃を受けたようである。以前の意識や見る視点との違いも大きかったのだと思うが、アロガントと揶揄されるようになった日本に潜在していた悪い芽が育って、校内暴力や不登校や家庭崩壊に繋がったように、倫理・道徳の不連続断絶の葉や茎に、深刻な危機感を抱かせる車内風景であった。

そして苦虫先生のアンガーに火がついた。

翻って、車内風景の原点である電車で主人が通学するようになるのは、昭和三〇年代半ば高等学校に入学してからのこと。三〇年（一九五五）経済白書がもはや戦後にあらずと宣言、その後所得倍増計画にも乗って所謂高度成長真っ盛りの時期であった。豊かな社会を目指してふくらみ活気づく都市、就職列車の到着が東京一極集中を強め、満員電車の常態化も東京名物となった。

通勤通学のすし詰め満員列車に人々の毎日があった。ホームには押し屋さん達がいた。ソーセージを羊の腸に次から次へ詰め、パンパンになると口をちょっとつまんで縛る様よろしく、ギュウギュウに押し込んだ背中とドアを支えた手を絶妙の間合いで放すと、電車はもう満員に復元したホームの客の前を滑り出していく。車内では身動きもとれず扇風機が回る程度だから、夏は蒸し風呂、そこには通常の礼節を行なうこととは程遠い世界があった。ただ逆説的だが、やれることが少ない中、何を守ればよいかについてのコンセンサスはあった。

る、吊り革や鉄棒につかまった
をする、子供や女性のように力の
降りる時には大きな声を出す、急ブ
れで阿鼻叫喚を作りださないように上手
ことなどが、暗黙の了解としてあった。車掌
内放送も戦場下であるから緊迫感があり、言葉
適切で一体感があった。ラッシュアワーでなくて
お年寄りや赤ん坊を抱えたお母さんに席を譲ったり、
を掛けたり、引率の先生が注意したり、迷惑は許さぬ
雰囲気があった。超満員ラッシュは例外で、当面耐えざ
るを得ないが、いつか恒産恒心の日がやってきて、電車
の中の立ち居振る舞いも成熟した大人の世界を楽しむこ
とができるとの期待もあった。

夢の広がりの方はレジャーが代弁者の一つであった。小田急線のロマンスカーに新たに３０００形（Super Express、略してＳＥ車）が登場したのは、昭和三二年（一九五七）。超流線型の車体、オレンジレッドとシルバーグレーに白線をあしらった斬新なデザイン、高度成長の夢を乗せてスピードを上げる特急列車、最高時速百四十五キロ（特急つばめで九十五キロ）と、まさに「戦後は終わった」といわれた新時代の幕開けを象徴していた。

この新型車両の出現に、車両信託が一役買った。借入金で購入すると金利圧力で経営に大きな影響が出るような、高価な車両だった。車両信託ではメーカーが新車両を信託銀行に委託し、信託銀行
をとった。そして委託者の車両メー
託銀行の管理運営する年金ファンドな
らって資金調達をする。

この方法は、当時アメリカで主に鉄道会社
に活用していた設備投資資金調達の方法（フィラ
ア・プラン）を、デトロイト銀行総裁をつとめ、
ＨＱの顧問になったＪ・ドッジ（一八九〇～一九六
が提案してくれたものという。提案が実現するまでに
時間はかかったものの、その具体化ともいえるのがロマ
ンスカーの車両信託になる。この成功を皮切りに、帝都
高速度交通営団や、東急、京成など関東の私鉄を中心に、
車両信託利用の機運が高まった。鉄道会社の債権者が信
託財産とは知らずに差押さえに来られては困るので、各
車両に受託者が所有者であり、賃貸し人である旨を記載
したプレートを付けておけば、第三者に対抗できる。満
員の車内で端っこの壁に押し付けられながら、見るとも
なく読んだこの信託車両と表示されたプレートが、主人
の信託との出会いで、信じあい援け合う絆社会がここに
あると感じた。

その後社会は豊かになった。安定成長の時代になって一億聡中産階級意識を持ち格差も縮まった。確かに地下鉄路線が縦横にでき便利になったり、冷房完備で車両もあかぬけたスタイルになったり、メカの面からは格段の向上を見た。ラッシュは依然としてあるが、あの昔の超満員電車ほど苦痛ではなくなった。

ところが、電車の中に成熟した大人の世界を見ることは、残念ながらできない。雑誌などでも、不愉快になる代表的場所として通勤電車を挙げていることに、病の深さが示されている。恒産恒心で衣食足りて礼節を知るたぐいのマナーはもちろんだが、貧しい時も富める時も守られるべきマナーが豊かな時代になって守られなくなっているとすれば、これは個人から社会にわたって再考が必要だろう。朝晩地下鉄に乗るだけで、ここが良くならない限り日本が良くなるはずがないと、ますます確信を深める主人の日々であった。ここはまさに社会の縮図、修身斉家も壊れているのに老人に席を譲れといっても、駄なことなのではないか。もう少し突き詰めてみると
ような思いになった。

、他に座るべき人がいなくなるまで座ってはい
ってそういう人が乗ってくれば譲らなけれ
自分がされて嫌だと思うことやみっともな
ることはやってはいけない、と躾けられ
たちもそう教育した。中学生の時東
両親の実家へ遊びに行った時のこ
ら列に並んで座席を確保した

が、混んで座れなかったお年寄りに席を譲って、自分達は床に新聞を敷いて仮眠していったこともあった。自律と他人ファーストが身に着いた。

昔は、譲られれば「有難う」、譲る時は「どうぞ」、ぶつかれば「御免なさい」、そう言われれば「どういたしまして」、降りる時あけてもらうには「降ります」と前もって叫び、降りる人も続いて降りたし、乗る人は並んで待って降り終わってから順番に乗った。邪魔にならぬよう荷物は棚に上げたし、上げられない人を手伝ってあげた。別の人にも声を出して「荷物を下ろしてくれませんか」と頼むことが出来た。会話の成り立つところに無礼など蔓延しない筈だ。

「パルドン（失礼）」「ジュヴザンプリ（どういたしまして）」「メルシー（ありがとう）」、パリっ子の行き交いで、爽やかに口をつく言葉。それだけで車内等公共空間円滑化の筈、今の日本ではその言葉すら口に出ない。出迎た守衛さんたちの「ボンジュール（こんにちは）」その挨拶に応えようともしない。スマホに心奪わ、を見ない、聞かない、気配らない。エチケットは身についた反射、皆がこれだけ身につける、変わりする。

また、汚い地べたに座って人の邪
も無かったし、荷物を下におい

クやバッグを背負ったまま傍若無人にぶつけまくることも無かった。家にお客さんが来てるのにその前での所作振舞いに無頓着な人はいないように、飲み食い、人前化粧・髭そり、居眠り凭れかかりや崩し膝、汚れのまま、ペチャクチャなどなど、恥ずかしいことみっともないこと嫌がられることはやらなかった。人目憚らず歌ったり踊ったり騒いだりすることが恥ずかしいこと迷惑なことだというところから、携帯電話で話したりヘッドホンから大きな音を響かせるような無礼は生まれる筈がない。

赤ん坊を泣くままに放置したり、子供の足を他の客に土足のまま向けさせたり、走り回る子に注意もしなかったり、自分に夢中で勝手気ままな子に眼もくれなかったり、子供を先に座らせたりする親や引率者などいなかった。何故むずかるか日ごろの観察が不足で面倒なことはやらず、勝手にさせ躾けも叱りもせず、お早うの挨拶さえ交わさぬ家庭、そして保育園・幼稚園・学校。更には余りに大組織化・大都市化・多様化の中で他人行儀化してしまった大人達。そして甘やかされて育ち自分ファーストで我慢を知らない世代人口の増加拡大、車内は健全な社会紐帯崩壊の噴出口になっているのではないか。

乗ってみた東京に唯一残る路面電車。早稲田から三ノ輪橋へ下町情緒とともに走っている。乗降客の入れ代わりが頻繁で、お年寄りの姿が目立つ。現代の都市生活で忘れかけている「向こう三軒両隣」や「隣のミヨちゃん」や「井戸端会議」の雰囲気が残っているのか、世代を越えた会話も聞こえてくるし、若者や子供がお年寄りに席を譲る姿も爽やかである。お客を構成している人々の暮らす家や街や伝統が、社会の縮図である車内に反映されていることが確認できて力が湧く、まだ時間がある。

そして苦虫先生の注意活動が始まった。

（三）

吾輩にパワーがつく前は、車内軽犯罪や汚す・壊すは司法・警察の犯罪抑止力で鎮静化、主人の注意行動は空缶、残物放置、床坐臥、ヘッドフォン音響、携帯通話等が中心であった。前三者は姿形がいけないことだと明白な意識もあるので注意も結構効果が上がり、私の取りついた頃には下火になっていた。携帯電話も通話だけの時は注意していたが、やがて携帯メールが普及これに合わせて電鉄会社の「通話は止め、メール呼び出し音もマナーモードで」という注意が受け入れられるに及んで通話は下火になり、主人が睨みつけると気づくようになった。私が遭遇した事例で厄介だったのは、優先席付近でのメール電源切断であった。禁止の理由はペースメーカー等電子機器を携帯電波が狂わす恐れがあり命にかかわるからということであった。

優先席の背後の窓ガラスにも切断を明示してあり、主

人は付近や座るべきでないのに座ってメールしているのがいると、どうしてこれが見えないのかと大きな声で注意を発した。「済みません」とか「ペースメーカーを入れておられたのですか、どうぞお座りください」といって立つのは男性で、女性はだまってスイッチを切ったりそのまま無視しているのさえいた。また、多くは止めてもうるさいオヤジだという顔つきをありありと見せており、少し車内にゆとりがあれば移動して続けていた。人のことを真に思い遣って自制する心なぞ多くの若者には全くない、と主人の方は心底では判断していた。

しかも電鉄側の不実な態度にもやがて怒り心頭にくることになる。ノート型パソコンやスマートフォンが多く持ち込まれるようになった頃、優先席に座って前者を操作していた若者だけが知らんぷりして続けているので、更に強く注意すると、「これは大丈夫なんです。」と反撃に出た。「何故だ。ここに書いてあるようにメールで飛んでくる電波が悪さをするのではないか。」と主人がいうと、「電波が違うんです」と言う。機械音痴の主人は苦虫をかみつぶしながら、降車駅に着いてしまったので降りざるを得なくなった。暫くあって航空機で出張しており、精密機器に影響するので離陸後は使用しないでくださいとあるのに、隣席の男が盛んにやっている。トイレに立った折にステュワーデスに注意するように促して席に戻ったが何時まで経っても来ない。後刻航空会社に抗議の電話をしたら、「今は影響ないモードに出来るんです」という。「それならそうアナウンスしなければお宅を気遣っている客に不実ではないか」と叱正した。

案の定、電鉄会社の答えもそうであり、更にはペースメーカーへの影響理論も最近は疑わしくなっているという。主人の苦虫が怒り心頭に達したのはその頃でも想像出来た。

さてスマホ全盛化と吾輩のパワーアップのペースは重なる。ここからはそれからの物語となる。

この時点で吾輩に起こったことで言っておかねばならぬことは、主人の注意行動について、アンガー（怒り）という身体反応をベースに整理してみたことである。血流、体温、神経パルスなどの動きの微妙な程度差でアンガーのレベルや種類を判断する。まさにロボットらしき事態把握方法である。これらに変化が起こり始めると、先ずどの程度のレベルの怒りかが分かり、次にどの方向への怒りか、誰にどの種類の怒りかが見えてくる。そして怒りのレベルが横ばいないし減少して注意行動に入るか否かの段階になる。マナー背馳にも犯罪（注意を超える）から違反、迷惑から行儀悪さ、嫌悪から見苦しさ、各方向にもまた様々なレベルと種類がある。これらに対するにマナーについての主人の理想とする（尤もこれは

本人もしている普通の当たり前のことと考えている節があるが、この時点では吾輩には、理想と常識の区別がまだちょっとつきにくいところがあった）ものから許容できるもの、どこでも許容できないものから車内で言っても仕方ないもの、と主人側にも諸基準がある。そして、この相手側と主人側の突き合せで注意行動のレベルと種類が決まるのだが、注意経験や車内外の環境変化等を踏まえ、相手側の把握と主人側の基準相互に変化もあり、注意するかどうか、どんな、どの位の注意をするかにも結果違いが出てくる。

これが瞬時に主人の頭の中で決定されており、注意行動を始めた場合は、相手の反応、周りの状況等踏まえて次への進み方の違いが分類される。そしてどう終結するか、更には一連の行動結果をどう感じどう評価しどう蓄積するかの違いも、これら身体反応信号で判別できる。そして吾輩のこの分野のデータベースとして格納されてゆくことになる。

この中で、アンガーレベルも高く、マナー背馳度や嫌悪感も高いが、長年に亘って手が（おっと正確に言えばHだが）出ず、そうこう歯ぎしりしているうちに世の中が先へ行ってしまって、もはや車内では手遅れになり、主人も諦め気味で他に道を求めているものがある。主人の戦史を語ってゆくには、これは違う範疇のものとして先ずお話して、本題に入ってゆくのがよいと思われる。

どうしてそう思うかというと、近年、差が格差や差別として深刻化し、所得・人種・民族・年代・体力等各種差違が、人間関係に亀裂をもたらし社会が軋んでおり、公正・衡平な対応で、新しい皮袋をどう紡げるかが問われている。人間関係の入口作法であるマナーも又然りである、と主人は考えている。（これはまたいずれお話するが、電車内マナー立直し信託車両案で新たな皮袋醸成を論じているのもその謂いであるらしい。）

ところで性差の問題は、格差の問題と言えなくもないが、少し違う感がする。

先にも述べたが、主人の原点は、戦後の満員電車にある。子供や女性は有無を言わせず弱者であり守られる存在であった。守られる側も守る側もそれを当然として行動していた。家では向こう三軒両隣、皆貧しくその共通の認識の下助け合っていた。女は早朝から深更まで家事をする母として忙しかった。衛生・食糧・家計と自らのことはさておいて、必死に子育てに励んだ。かつ貧しいといっても自らの身繕いには気を配ったし、子供たちにとってその立ち居振る舞いがマナーの見本であり、優しさと思い遣りは親から子に尊敬と共に伝わった。

勿論、三つ子の魂の如く戦後民主主義の洗礼は十分受けているので、人権平等の精神は誰にも負けるものではない。結婚もしているし、女性進出著しい職場の経験もつんでいる。だから男女平等とかそう言うものとは違った本来の人間のマナーという感覚である。ところが注意行動の段となると、男女共通の行動形態で不適切なら誰でも注意可だが、女性自身の行動形態のうち、社会では顰蹙を買うものにも、男性では言い出しにくいものや変更可能かどうか分らぬものがある。これらは女性自身がこうあるべしとしないと変わらない。心ある女性の方々の中には決して乗りたくないとの声がある、女性専用車内の行動形態の女性自身による評価も、読み解きに参照出来よう。

化粧は従来の常識では、家庭の中での、それも一人で知らぬ間に人目を避けての行為であり、男性の介在するものではなく、女性らしさの象徴たる身だしなみとして理解され美しい行為として思い出を強く残す力にもなってきた。働く女性が忙しいとしても、これは車内でも変わらぬと思われていたし、自制も効いていたと思われる。

働く女性が増え、家事・仕事の両立に時間の足りない女性が、止むにやまれずこっそり手を染めた行為が、社会に進出するとしても女性の矜持として持していたものを、あっという間に白日下に晒し神秘性を失い、顰蹙を圧倒し興醒めではあっても気にもならない光景にしてしまった感がある。段々エスカレートし傍目に顧慮もせず大胆になる。その背景の一つには、社会的規範の影響を受けにくい制服姿の女学生達の気ままもあった。バイトに向かうため帰路車内で、まだ生硬な手つきで顔を背けたくなるような化粧をそこここでするようになった社会風俗現象も、顰蹙の羞恥心を突き崩す原動力になった。

若者の生活様式や振る舞いが、やりたいことをやる（よく言えば旧弊打破、悪く言えば自己中心）、熟慮なく感性だけで社会がはやす、勢いになって止められない。そうした全般的な風潮も反映していたからこそ突き抜けてしまったのかもしれない。いずれにせよ醇風良俗は、自分たちの城を自軍内から突き崩された。防ぐ手だても叱り飛ばす力もなく、しかめ面をして切歯扼腕の熟年の女性方の多さが落城のやむなきを物語り、城を取り巻いていた男性軍もその仰天の姿に声も出せず、後ずさりを繰り返すうちに包囲網はおのずと崩壊に至った。

化粧とくれば、次は服装・お作法。同じ変化に晒されて同様にしかめ面をなぎ倒している。畳・正座から床・椅子と生活様式が変わり、満員電車時代はオフィスにも和装の女性の働く姿を見たし、正月の晴れ着は大分続いたが、やがてオフィスレディーの通勤姿は、ヒールにタイトスカート。その膝をきちんと揃え凛と座す姿は爽やかであった。職場でも制服が多く、女学生服も紺地で裾も慎みがあった。しかし昭和四十年代、英国からミニス

カートがやってきて衝撃が走った。既にビートルズ旋風でリズム昂揚の洗礼を受けている若者世代のファッションの自由化・開放化の蠢動が始まったように思う。ただ、まだ戦後初期生まれの体型はすぐ全てが受け入れるといったスピード感にはならず、栄養や生活スタイルの洋風化に伴い、本格化して来た様に思われる。

マナーとの関係でいうと、主人は不思議なところで危機感を持った。あの世界を震撼させた中国天安門事件の一か月前の天安門広場でのことである。開放化の進む中国、天安門広場を取り囲む巨大ビルの正面玄関に上ってゆく横に広がった階段（一段一段も椅子の高さぐらいある）のそこここに、休日を楽しむ観光客たちが並んで座って広場を眺めている。その中の一列にズボン姿の女性兵士とミニスカート姿の非番の女性兵士か友人達がずらっと坐っている。車の中から見上げた主人は吃驚仰天、ミニの彼女たちも皆ズボン姿の女性兵士同様大股を開いて坐っている。生活習慣が服装の開放化に促されるように作法の心まで解放してしまった。将にこれを啐啄の機（頃会いにつつくと中から呼応して雛鳥が殻を破って出てくる）という。やがて日本でもと思ったところである。

男の子が靴を履いたまま後ろ向きに坐って窓の外を見ているのを注意する親が少なくなったが、女の子がスカートの下からパンツをみせ足を広げて座るのを注意したり足を閉じさせ躾けようとしている親を見つける方が難しくなった。そういう子がどんどん親になってゆくから更にその傾向はスパイラル化する。

そしてもはや全般的に、総老若、股関節筋が締まらず締めず久米の仙人卒倒の座席風景も、自由化・開放化・ビキニ化・草食化の風潮では、一部の老婦人をのぞけば気にならぬあるいは言っても無駄だということになってきたようだ。

一方で痴漢や性犯罪が喧伝されるのも時期的には重なっているように見える。

犯罪となると厳しい取り締まりと世間の非難が高まり警戒されるようになり抑え込まれる。しかしだからと言って遠因の一つではある作法の退廃は止まるわけではなく、むしろ女性側からの痴漢撃退権利意識が注意を妨げる要因にさえなっているように思われる。これもある意味女性一般に起こっていることの変化なのかもしれない。よく言えば革新、悪く言えばタガが外れた。

ある男女のやり取りはそれを感じさせるものだった。

中年男性が入り口脇の座席に小説か何か本を読みながら座っていた。座席は埋まり立ち席もそこそこ埋まっていた。若い女性が少し大きめのショルダーバッグを肩に手に書類を抱えて乗ってきて、その端の席の鉄柵に凭れ掛かりながら、周りに接近して人が立っているのに書類に目を通し始めた。事は急ブレーキで電車が止まった時

におきた。バッグははみだして男性の鼻先にあり、男性は気づいて迷惑そうな顔をしていた。それが急に自分の顔面を襲ってきたので、本を持つ手で振り払った。女性の腰をいささか打つとともに偶然の悪戯か彼の振り払った手から本が落ちその手は勢い余って女性の腰を抑えた手首を掴むようにして止まった。最初の一声は女性だった。

「何するのよ。」大きなキンキン声が響いた。むっとした男性は「バッグを顔に当てておいて何ということだ。悪いのはそっちだ、謝りなさい。」と受けて立った。「何を白々しい、人の手を握っておいて。」女性は却って居丈高になっている。これはいかんと主人が近寄って割って入った。「見ていたら、明らかに御嬢さんの大きくて紐の長いバッグは、鼻先にブラブラしていてあなたは何の気遣いもしていなかったし、そんな重そうで大きなものが急ブレーキの弾みで遠心力がついたらどうなるかは明らかだ。我慢していたが流石に瞬間顔面に当たってくれば振り払うし、当たっていたら大怪我をしたかもしれない。自分のバッグの管理不足を棚に上げ、勢い余ってあなたの手首に触れた位で、責任を人に転嫁するのはよくない。謝るのはどう見ても貴女の方だが。」と言った。

周りも皆そうだという顔をしている。豈はからんや彼女は逆切れする。「何言うのよ。痛いのはこっちの方よ。何で謝らねばならないの。」更にオクターブあげて繰り返し叫んでいる。「ひとこと素直に済みませんとも言えんのかね。」という主人の諭す言葉は、益々彼女をいきり立たせてしまった。次の駅へ着くまでもう後は止まらない。降りるとき彼女は「セクハラで訴えてやるから」と大声で叫んで飛び降りていった。

このように諸々あって、男女の平等に喞かも異を唱えるものではないが、女性の振る舞い・気持の在り様を男性と同様思い図ることの難しさを思うと、ここは注意活動をすべて同じように行うことは無理だと思い知ったようであった。そこで搦め手から例えば言論を通じて、「戦後憲法下『法のもとの無差別平等、男女の本質的平等』が定着、男女雇用均等法、男女共同社会参画法と具体的法整備が行なわれ、働き方改革や保育支援等環境改善も進んでいる。そろそろ、男が昔いて来た『女大学』に歴史的ピリオドを打ち、女の書く社会生活レベルの『女大学』をものす時ではないか。」などと提唱しだした。

江戸中期の貝原益軒の『女子ニ教ユル法』を通俗簡略化して出版された『女大学』は封建的隷従的道徳が中心であり、明治の福沢諭吉による『新女大学』は、嫁入り道具を立派にすることよりも幼少の頃からの教育が大事であると説くが、女性の誠十九か条は、成長して嫁に入り、夫と親に使える女性の心構え振る舞いを律するもの

である。いずれにせよ男性の側から書かれたものであり、男女の実質的平等を個人的にも社会的にも達した女性が、真の女性として家庭人としてまた社会人として、具体的にどう心身を持しどう振る舞うか、を女性自身で物し、社会の共有とすべきではないか、その時期に来ているのではないかという主張である。

即ち、「男が書いて来た『女大学』に歴史的ピリオドを打ち、女の書く社会生活レベルの『女大学』をものす時ではないか。」ということ。「正面から向き合わぬうちに、気付けば悪貨（悪風）が良貨（良風）を駆逐し戻れぬ状況に追込まれる、昨今の諸現象の様にならぬ為にも、急速な社会進出で男性と共通のステータスを持つ女性が車内を折半するこの国で、2020年、世界が『あつきおもてなしの国』のマナー実相に幻滅せぬ為にも、従来の前提では測り切れないこともある女性特有のマナーについて、女性自身で判断の上、全体マナーとの調整を行い、間に合ううちに行動を起こすべきだ」と論じることで、我田引水ならぬ我田引鉄を図ろうという魂胆であろう。

この問題はかくとりあえず位置づけながら、主人の注意行動は更なる模索と挫折と軌道修正を繰り返してゆく。一方でその注意行動につながるアンガーの主人側の因になっているマナー基準を、社会の環境変化を踏まえ不易流行の観点から客観的に見直し調整を図って行く。あるべき不易も環境変化という流行で具体的な形や表現を見直さないと、社会的共有の実効性を保てない部分があるということであろう。他方で、積み重なった経験から単に刺されるような危険性を秘めているかだけでなく、相手の全体像を観察し読む力もついてきているが、更にその体系化・プロセス化を図ろうと努め出した。

両々相俟ってある意味、アンガー・マネジメントの領域に入ったと言えるだろうし、モグラ叩きも無分別にから見極めつけてに変わり、そして更にはモグラ問題そのもののリューション探しに入って行く方向性を考えてのことと言えよう。実はこのプロセス進展には、主人は気づいていないのだが、勿論気づいたら吾輩の紙魚暮らしが危殆に瀕するわけだが、吾輩についた新たな能力が大いに貢献している面もある。御蔭で本件の吾輩のデータ記録はストーリー性の強いものに進化してゆく。

追い追いと話してゆこう。

つづく。

生きてやる

千坂精一

一

それはまさに青天の霹靂といってよかった。

そのとき十五歳の軍国少年だった私の太平洋戦争終結のときの話である。

当時、中学校以上には陸軍から下級士官が配属されていて軍事教練を指導していたが、その配属将校が軍の命令で陸海軍の学校への進学をさかんに奨励していた。

私は学校から勧められるままに海軍の学校に入校して練習生教程を終了すると、昭和二十年（一九四五）一月に南九州第一国分基地（霧島市国分）にいる第七〇一航空隊に配属になった。

ここは現在陸上自衛隊国分駐屯地になっていて、正門前に『特攻機之発進地碑文』と『国分特攻基地記念碑』がある。

この一〇三飛行隊は前年十月下旬のフィリピンレイテ沖海戦にいちど特攻出撃しており、再建中であった。

そこに千葉県香取基地で錬成された一〇五飛行隊が後方の台地上にある第二国分基地（霧島市溝辺町）に飛来してきて編入した。

ここは現在拡張されて鹿児島空港になっており、一隅の上床公園の一郭に少年飛行兵の青銅像と『十三塚原海軍特攻碑』がある。

麾下の飛行隊が二箇所の基地に分散されたので、私たち司令部付通信員も二班に分かれることになった。

私は第二国分基地の担当になったのだが、同時に一〇五飛行隊付きも兼務させられた。

二月に新設された第五航空艦隊（菊水部隊）の麾下に入ると、またもや全航空隊は特別攻撃を任務にすると命ぜられたのだ。

そして、三月十七日深夜―。

第五航空艦隊司令部から緊急電報が入り、

「大隅半島都井岬東南海域百浬付近に敵機動部隊を発見、七〇一空は直ちに迎撃せよ」

と下令してきたので、江間飛行長は直ちに非常呼集をかけて一〇三、一〇五飛行隊全員を一国、二国両飛行場の戦闘指揮所に集合させた。

私は慌ただしいなかで身震いが止まらなかった。

レイテ沖海戦のときから生きて還れぬ特別攻撃に反対だった江間飛行長は、再建するにあたり爆弾投下距離を八百メートルから六百メートルに下げ、さらに四百メートルにまで下げて猛訓練をさせてきた。

出撃にあたり江間飛行長は、いつもどおり、

「いよいよ伎倆を試すときがきた。五十番（五百キロ爆弾）を命中させて還ってこいよ。体当たりするなんてのはどうしてもだめなときだけだぞ。わかったな」

そう訓示した。

二国の一〇五飛行隊のほうは、電話で受けた中村飛行隊長から隊員に伝えられた。

特攻隊名は『菊水部隊彗星隊』と命名された。

こうして私の所属した航空隊は九州からははじめてだが、フィリピン戦以来二度目の特攻出撃を命ぜられたのである。

グラマン戦闘機来襲の合間を縫って出撃させるのであるから、電信室は偵察機からの報告に耳を欹て聴き漏らしてはならじとする緊張感が漲った。

そして、三月十八日。

一波は〇六一三に一国から、二波は一〇四五に一国から、そして三波は一三五〇に二国からそれぞれ出撃した。

この日は一国、二国合わせて二十七機出撃したが十九機が還らず、直掩の戦闘機も三機が未帰還だった。

米軍の発表によれば、正規空母エンタープライズに一発命中、同ヨークタウンに一発命中、同イントレビットに一発至近弾を受けていずれも損傷したという。

翌十九日は、一波が〇五四五に一国から、二波が〇九二八に二国から、三波が一〇五〇に二国から出撃した。

一〇三飛行隊長柏井宏大尉は一国から一波の一番機で、一〇五飛行隊長中村恒夫大尉は二国から二波の一番機でそれぞれ指揮をとった。柏井大尉は海兵六十九期の二十六歳、中村大尉は海兵七十一期の二十三歳であった。

この日は二十三機出撃したが十五機が還らなかった。

米軍の発表によれば、正規空母フランクリンに三発命中して誘爆を起こし沈没寸前にまでいたったといい、同ワプスにも一発命中して損傷したという。

その後天候が悪化して雨になり索敵できなくなったので二十日の出撃中止が発令されたが、攻撃続行の意気高く中止は取り消された。

そして一波が一二五〇に一国から、二波が一四二四に二国から出撃した。

この日は十七機出撃したが七機が還らず、直掩の戦闘機も二機が未帰還だった。

米軍の発表によれば正規空母エンタープライズが味方の誤射で損傷し、駆逐艦ハルゼイホウエルが空中分解した特攻機のエンジン落下で損傷したという。

両飛行隊は三日間で六十七機全機が出撃して四十一機を喪失、搭乗員は二名生還しただけで八十名もの戦死者を出してしまい、残存機は二十六機になってしまった。

米軍は損傷空母の戦場離脱をはかり彗星の攻撃圏外に去ったので、残存機数での最後の出撃は中止になった。

五航艦司令部から再編成して本土決戦に備えるよう命ぜられた七〇一空は、江間飛行長が残存機と搭乗員を率いて逐次鳥取県の美保基地（現米子空港）へ後退して再々建を開始した。

こうして一国も二国も司令部付要員と基地要員だけが残って空屋になった。

十日ほどは爆音もなく基地内は静寂であったが、四月初旬に突然第十航空艦隊のうち宇佐空、百里原空、名古屋空のいずれも九九式艦爆隊がやってきてまた前線基地の様相を呈した。

私は百里原空の人たちの世話係になった。

そして四月一日の米軍沖縄本島上陸を期して航空兵力総力をあげての特攻攻撃が決定されると、四月六日の菊水一号作戦発令と同時に二国からは百里原空の第一正統隊、宇佐空の第一八幡護皇隊、名古屋空の第一草薙隊が一斉に出撃していった。

結局六月二十二日の菊水十号作戦終了までのあいだに、正統隊は四隊、草薙隊は三隊、そして八幡護皇隊は二隊が二国から出撃していった。

その後はまた空屋に戻ったまま八月十五日を迎えた。

正午に天皇陛下の玉音放送があったことは知っていた。

だがそれは、一億総決起を促す激励のお言葉だということだった。

それから一週間、基地内はなんの動きもなく無気味に静まり返っていた。

まるで時間が止まってしまったかのような空白の期間だった。

米軍の太平洋艦隊が九州を狙ってどこか近くの洋上まで迫って集結しはじめているのか、間断なくつづいていたグラマンの襲撃もすっかり途絶えてしまっていた。

沖縄を占領した米軍がつぎには九州を狙い、薩摩半島西岸の吹上浜から上陸してくるとの噂が頻りであった。

そんな状況の中にあって、二十二日朝食をすませて手持無沙汰にしているところへ伝令が飛んできて、

「全隊員指揮所前に集合」

の非常呼集がかかった。

「すわ、敵さんがお出でなすったか」
搭乗員宿舎内に緊張が走った。
私は咄嗟に、
「いよいよ決戦か」
そう呟いて出撃させる準備を急いだ。
搭乗員たちはこの日のために残しておいた真新しい下帯（越中褌）を締め、飛行服を身につけて半長靴を履くとわれさきに飛行場隅の戦闘指揮所を目指して早駆けした。
私もいつか三月の出撃のときに一〇五の誰かがくれた使い古しの紺のマフラーを首に巻いていた。
（搭乗割がないということは全機出撃なのだ。一〇五飛行隊最後の特攻に違いない）
私はそう決め込んでみんなと一緒に駆けた。
ところが、飛行場の近くまできてもエンジンテストの爆音がきこえなかった。
（おかしいな。出撃は午後なのか夕刻なのか）
私はまた勝手に見当をつけた。
それが全員整列して、壇上へ上がった司令部の人の話を聞いて愕いた。
「われわれは全員待機に入る。いったん休暇帰省するが原隊復帰の連絡あり次第直ちに集合せよ。只今より解散する。まず機体と共に搭乗員を先とする。第一団出発は一四〇〇」
というのだ。誰もが耳を疑い唖然とした。
私は開いた口が塞がらず、暫くぼんやりしていた。
話があまりにも突然だったので、なにがなんだかまったく理解できなかったのだ。
われにかえったとき、全身からすっと力が抜けてゆくのを感じた。
搭乗員宿舎へ戻って待機していると、やがて司令部へ呼ばれて説明を受けた先任下士官が帰ってきた。
先任下士官の説明によると、
十五日に確かに天皇の『終戦の詔勅』はでたのであるが、正午の玉音放送は雑音が多くて聴きとれず、
「しっかりやれというお言葉であろう」
と勝手に解釈した大分基地の司令部では、その日の夕刻宇垣長官みずから七〇一空が派遣していた十一機の彗星と二十二名の搭乗員を率いて沖縄特攻に出撃してしまった。
翌日になって大本営海軍部（軍令部）はようやく「停戦命令」を発令したが、長官不在の司令部は困乱した。
そこへ七〇一空の指令が確認に行ったのだが、混乱していて埒が明かないので、司令部を代表して横須賀に飛んで上京し、軍令部と海軍省へ出頭して終戦を確認したのだから間違いないということだった。
私たち一刀に練習生教程を卒えて赴任したばかりの者や地上勤務者は列車を利用しての帰宅なので出発までに

時間は充分にあったが、彗星で帰宅する先輩搭乗員たちは一陣が一四〇〇と指定されているので帰り支度を急がねばならなかった。
私たちは手分けして酒保や烹炊所へ奔り、酒保当番は潜水艦糧食の缶詰や不時着糧食のキャラメルなど飴菓子やチョコレートの袋詰め、それに米と乾麺麭などの道中食料の配給を受け取り、食事当番は烹炊所でいつもの握り飯を数えてそれぞれ持ち帰った。
急いで昼食をすませ、食料の分配を受け取り、先任下士官が保管庫の鍵をあけてくれて財布を受け取ると、それぞれ衣嚢を整理して分配品を詰め込み帰り支度を急いだ。
私が先任下士官に命じられて隊員の『復員証明書』の受領書を主計課へ届けにいって帰ってくるともう宿舎内はがらんとしていて人影はなく、自分の衣嚢だけがポツンと置かれていた。
私は主計課で教えてくれた道を隼人の町へ向かった。
爆音がだんだん小さくなってゆくのが寂しかった。
私にはまだ戦争が終わったことが信じられなかった。
戦闘は機材を使い果たして全員が戦死したときに終わるものとばかり思っていたからである。
隼人の町は外出したときに歩いた国分の町より小じんまりしていた。
町中に鹿児島神宮があった。戦いに敗れて解隊になり家族の許へ帰って行くのに〈武運長久〉でもあるまいと思ったが、官弊大社と書かれていたので立ち寄って参拝した。
隼人駅は南九州の諸々から続々と集まってきた復員軍人で溢れていた。
赴任するとき乗ってきた九州東海岸沿いを走る日豊本線は、途中の大分と宮崎両県に海軍の航空基地が集中していたので空襲で寸断されていて関門海峡を越えるまでが大変だから、真ん中の山中を抜けて熊本県の八代まで行く肥薩線を利用したほうがいいとすすめられて、いつくるか判らぬ列車を待った。
日が暮れて駅の薄暗い電燈があたりをぼんやり照らし出した頃にはみんな待ち草臥れて寡黙になっていた。
ようやく順番がきて乗車できたのだが、満席で通路に立つ状態だったので担いできた衣嚢を床に置いて腰を下ろした。
汽笛を合図に列車が動き出したときになってようやく開放感が湧いてきた。
列車は停車駅を発車するたびに汽笛を鳴らした。
基地で眠りにつくとき郷愁にかられたのはこれが聞こえたからだったのだと思い出した。
列車は山中を走るので隧道が多かった。
そのたびに車内は機関車の煙が充満して周辺がまったく見えなくなり、咳込んで息苦しくなった。

人吉という駅に着いたとき戸外はようやく薄明るくなってきた。
そこから列車は川沿いに下っていった。
終点の八代に着いたとき、まだ夜は明けきっていなかった。
列車を降りるとまた市内を流れている球磨川の河原に整列させられた。
門司へ行く鹿児島本線に乗換えるのだ。
整理番号を書いた紙片をもらい、また気の遠くなるほど待たされた。
鹿児島本線は運行本数が多いので鮨詰めにならず、座っている者も熊本、太牟田など主要駅で下車したり、鳥栖で長崎本線、筑豊本線などへの乗り換えなどあっていつか座ることができた。
たいへんだったのは空襲で線路が破壊された不通箇所がいくつかあって、そのたびに下車させられて次の駅まで歩かせられたことである。
荷物は地元の農民がリヤカーや大八車に乗せて均一料金で運んでくれたので手ぶらで従いて行けばよかったが、それでも夏の日照りのなかをひと駅歩くのは辛かった。
何日かかかって門司駅に着き大阪行の山陽本線に乗り換えた。
（やっと九州を出られるな）
そう思った安堵感から気の緩みと疲労が重なって睡魔に襲われ朦朧としてきた。
衣嚢を両脚で挟んで仮眠した。こうしておけば荷物を盗まれる心配はなかった。
やがて夢の中に特攻出撃していった先輩たちが次々と現れた。彼らはいずれもまだ童顔の少年たちばかりである。
誰もが出撃時刻の切迫が恐ろしく、燥ぎまわっていた。
相撲をとる者、独りで逆立ちする者や腕立て伏せをする者、戯ける者などで宿舎内は騒然としていた。
身の置き所がない恐慌状態になるのだった。
「俺は悠久の大義に生きるのだ」
「俺は期待どおり見事に体当たりしてみせるぞ」
「俺は、家族を護るために死ぬ」
「俺は父母への恩返しに見事敵艦に体当たりしてみせるぞ」
「体当たりして、あの世へまっしぐらだ」
そのころ隊内では、
散る桜、残る桜も　散る桜
という句が広まっていた。
海軍は帽章も階級章も『桜に錨』だったから桜なのだろうが、私は、
（桜は花弁が一片ずつ散るから悶死するようで往生際が悪いが、椿は一輪がすとんと散るから特攻死には桜より椿の花のほうが相応しい）
そう思った。
「飛行機乗りは戦死しても遺骨が帰らないから、家族はどこかで生きているんじゃないかと期待しつづけるだろうなあ」
誰も彼もが綺麗事だけで本音を吐く者はいなかった。
あるいは本心は特攻機に搭乗して基地を飛び立ったときに叫ぶのかも知れないが、その声は爆音で掻き消されてしまって見送りの者たちにもきこえようはずはなく、それは本人以外誰にも知られないことであった。
しかし、
「俺たちが命懸けでこの戦争を終わらせ、家族や知人、友人、同胞たちみんなを平和な世の中で愉しく暮らして貰うようにするために栄ある任務に就いて出撃します。桜の咲くころ靖国神社に行っております」
というのが共通した思いだったことは間違いない。
親より先に死ぬことが戦争なのであった。
そんな先輩たちとの別れの夢を見ているうちに、いつか深い眠りにおちていった。
列車は十時間あまり走って大阪駅に到着した。
またまた乗り換えである。
ここでちょっと悶着が起こった。
東海道線のホームに並んでいたときのことである。
復員軍人の列の横を通った民間人が、
「こんなに敗残兵が並ぶから儂らが乗るのに苦労するんじゃ」
そう吐き捨てるように呟きながら後方へ歩いていった。
並んでいた陸軍の復員兵が聞き咎めて喧嘩になった。
周辺の復員兵たちが仲裁に入ってことなきを得たが、そのとき私は、
（娑婆では俺たちのことをそんなふうに見ているんだ）
そう思うと衝撃だった。
大阪からは夜行列車だったがこんどは途中下車するので眠るわけにはいかず、懸命に睡魔とたたかった。
五時間ほどで豊橋に到着した。
列車を見送った初老の駅員に旅館をきいたら、
「空襲で焼野原になってしまってなにもない」
そう言って、親切にもホームに持参の毛布を敷いて仮眠するようにすすめてくれた。
始発列車に乗車して残りの乾麺麭と氷砂糖で朝食をとった。あとは五合ほどの生米と大きな肉の缶詰だけになってしまっていた。
こうして私がようやく家族の疎開先に辿り着いたときには、季節はすでに初秋になっていた。
その広い家には私の家族のほかに親族が二家族いたが、二月以来音信途絶させられていたのでみんな幽霊でも見るように吃驚していた。

なるべく人に会いたくなかったので引き籠もっていたのだが、収穫がはじまると近所の人たちの出入りが繁くなってきてみつかってしまい、さすがに敗残兵とは言われなかったがおなじことをなんども訊かれて煩わしくなっていった。

私も収穫の手伝いをして母の立場を少しでもよくしようとしたのだが、中腰で豆扱ぎをすれば腰を痛めるし、肥料にする糞尿を運ぶ肥担桶を前後に置いて天秤棒で担いで歩き出すと二つの桶の釣り合いがとれず糞尿が揺れて零れ出てしまう。

大失敗したのは稲の脱穀だった。

当時の脱穀機は木製で足踏みなのであるが、下駄履きだったのがいけなかった。

鼻唄交じりで扱いでいるうちに下駄が脱げて巻き込んでしまった。

脱穀機は止まってしまうし、下駄はなかへ入ってしまったしで困っていると、運よく近所の農夫が通り掛かって直してくれたのでたすかった。

私はなにをやっても不器用だった。

そんなある日、久しぶりに町へ出て買物のあとで映画を観ての帰りだった。

偶々通り掛かった交番で呼び止められた。

略帽の錨の徽章を咎められ、

「軍国主義の象徴をいつまでつけているか」

そう罵倒され、外して没収される屈辱を受けた。

戦前、海軍の学校へ入校するとき、暫く娑婆の見納めに池袋の繁華街で映画館の入場を並んで待っていたら、警邏の巡査に見咎められて交番へ連行されて、

「国家の非常時に勤労奉仕を怠けて盛り場を徘徊するとはなんたる非国民か」

そう搾られて屈辱を浴せられた。

私は腹に据え兼ねて海軍の入校通知書を突きつけると巡査は途端に態度を一変させて、

「ご苦労さまです。武運長久をお祈りします」

そう言って恐縮したおなじ警察官の豹変ぶりに腹が立った。

そんなことなどあって一日も早く戦火を免れたという東京郊外の家へ帰りたい思いに駆られた。

戦争が終わったのだからもとの生活に戻るべきであった。家族単位で暮らすのがいちばんいいのだ。

早く東京へ帰りたい思いに駆られて母を口説き落とし、正月が明けると引越の準備をすすめた。

復員兵の混雑は終わっていたが、乗車券の発売制限があってなかなか買えず何日も駅に並んでやっと買える状態であったが、疎開者が出て行くのは町としても大歓迎のはずで、手間をとらずに厄介者払いができることから積極的に特別扱いしてくれて購入することができた。

二

戦前、私たちが住んでいた東京近郊の町は無事だったが、新宿、池袋などの繁華街は焼跡が目立ち戦争の悲惨さが露呈されていて、完膚なきまでやられた現状を見て涙がとまらなかった。

荷物の片付けもすんで一段落した頃には、軍隊で使うこともないまま残っていた金やのちに司令部から送金してきた退職金のようなものも底をついてきたので、日比谷の日本勧業銀行へ出向いて払戻しを受けようとしたら、祖父名義の通帳だったため本人確認されて死亡がばれてしまい、相続手続をさせられた。

そうしているうちに新円発行のため預貯金が封鎖されてしまったので、なにか仕事をして新円で収入を得なければならなくなった。

そうはいってもまだ会社や商店などは復活していないので、その日稼ぎの仕事を探して収入を得るよりほかに方法はなかった。

偶々従姉の夫君が逸早く神田神保町で書店を開いていて、活字に飢えている人たちが出版前の広告を見ての注文が多く、予約カードつくりを頼まれた。

書くことなら得手なのでさっそくやらせてもらった。

このころは品薄のため物価が物凄く高騰して、昨日買ったものが今日はもうその価額では買えず、貨幣価値の下落がはげしかった。

だから今日得た収入はその日のうちに生活物資に換物しておかないと、自己防衛できなかった。

国鉄運賃、郵便料金、電気料金などの公共料金、新聞や映画、演劇などの娯楽料金、そして酒、煙草などの嗜好品などは毎日ではないが短期間のうちに倍々と値上げになっていった。

だから、祖父の遺産の預貯金などは封鎖解除されたときにはもうほとんど価値がないほど下落してしまっていた。

そんなころ、競馬の出馬表を書く仕事があるという話を耳にした。

住所を聴いて訪ねると、そこは本郷の寺だった。

住職から渡された紙に鉛筆で一レースの出馬表を書いてみせると、眺めていた住職が、

「活字体で読みいいからやってもらおう」

と合格させてくれた。

ところが、これがたいへんな仕事だった。

蠟引きの原紙を鑢板の上において鉄筆で原稿を書き、それを謄写板にのせて上から黒インクを塗ったローラーを往復させて印刷するがり版刷りの原紙を書くのである。

力を入れないと原紙がきれないから、腕が痛くなる。

そうこうしているうちにある日住職から、

「手空きのときにやってほしい」
そう言って学者の論文だという分厚い原稿を渡された。
競馬の出馬表のほかにもさして手間のかからない仕事を好意的にまわしてくれて世話になっているので断るわけにもいかず、引き受けたらこれが難儀だった。
とにかく長時間書いていると腕が痛くなって力が入らなくなるので、休み休みやらなければならなかった。
そのうえ長引いて夜にかかってしまうと、電燈の明かりが眩しく、反射で原稿が見えなくなるのだ。
安請け合いしたもののとんだ重労働でうんざりした。
しかし、母と弟の三人家族なのではかに働き手はなく、書く仕事はなんでもできるので、手蔓を頼りに仕事を探し歩いた。
この戦後の混乱が齎す物価騰貴の時代を生き抜くには、その日その日の稼ぎを多くして生活必需品を買い溜めしなければ翌日の稼ぎではもう物価が上がってしまっていておなじ価額では買えず、生活を切り詰めなければならなかった。
こんな得体の知れない化物に圧し潰されてなるものかとの反発心から、形振り構わず遮二無二働きつづけた。
三月近くなって、復学を頼みに母校へ行ってみた。
こんな先の見えない混沌とした世の中で落ち着いて勉強などできるはずはないと思いながらも、学籍だけでもとっておきたいという思いに駆られてのことであった。
学校はさいわい戦火を免れていた。
担任ではなかったが私たちに軍学校の受験を執拗に勧めた教官がいて、互いの無事を喜び合った。
ところが、復学の話になると途端に教官の態度が豹変してしどろもどろになった。
言を左右にして聴いてくれようとはしないのである。
アメリカ式民主々義国家になって、軍国主義教育を受けた者は排斥なのだそうである。
まるで他人事のような話しぶりであった。
自分も軍国主義教育を信奉してわれわれ少年を指導しておきながら、責任もとらすに教官として当然のような顔をしての排斥行為に腹が立った。
あれだけ厳しく軍国少年に育てておいて、育ったが悪いはないだろうといいたかった。
あの疎開先の町の警官とおなじであった。
(よし、もう頼まない)
私はそう心を決めると、席を蹴るようにして校門を出た。
その後しばらくして『演劇映画人養成の各種学校』が生徒を募集しているという話を耳にしたのでいってみた。
銀座の焼ビルを事務所にしていて、現在教室がないのでしばらく通信講座だという。

その面接のとき、復学しようと思ったのだがけんもほろろの応接をされた話をすると、
「連合国軍総司令部(GHQ)から軍学徒進学制限令が出ているそうですよ」
そう教えてくれた。
特に航空隊にいた者は十把一絡げで〈特攻〉と極め付けられていたから、手の裏を返した国家から尖鋭中の急先鋒と烙印を押されて、
「特攻くずれ」「予科練くずれ」
とまるで悪の代名詞のように忌み嫌われている者は特に制限が強かったようである。
新しい国家や政治家、国民たちから唾棄され、「くずれ」という汚名まで冠せられた者達は憤懣遣る方なくそんな世間に反抗した。それがまた汚名に拍車を掛けていった。
あるとき、新宿南口の和田組や尾津組の闇市場をぶらついていたとき闇屋らしい青年に呼び止められた。
私のマフラーを見て飛行兵と見当をつけたのだろう。
問われるままに南九州の第二国分基地にいたことを告げると、その青年は急に懐かしそうに相好をくずすと、
「俺は白甲ヶ原空の者だ。二国へはうちの飛行隊が飛んでいって翼を休め、あらためて特攻出撃していったはずだが」
二国は三月十八、十九、二十日の三日間で所属飛行隊の全機が出撃してしまって空き家になっていたところへ、沖縄防衛の菊水作戦になって宇佐や百里原や名古屋から他隊がやってきて整備点検と給油をしてあらためて出撃していったのだった。
青年はもっと話をききたいからと言って並んでいる屋台の馴染みの一軒に私を誘い入れると、密造品の粕取り焼酎を注文した。
私が飲めないというと、それじゃあといってなんの肉か判らぬ丼物をとってくれた。
青年は、
「俺もつづいて出撃するはずだったが、四月に二隊、五月に一隊のあと六月一日に一隊出撃したところで中止になってしまい、生殺しのままで終戦になってしまったんだ」
そう言って、先輩たちに申し訳ないと涙声になった。
そして、しばらく思い出話に耽ったあとでいまなにをしているという話になり、黙って聴いたあとで青年は、
「なんだ、みみっちい仕事ばかりじゃないか。そんなんじゃたいした稼ぎにならんだろう。そうだ、俺たちの仲間に入れてやろう。いい稼ぎになるぞ」
そう言って誘ってくれた。
仕事というのは担ぎ屋だった。
担ぎ屋というのは統制品の野菜、米、魚などをこっそり生産地から買ってきて売る闇物資の運び屋であった。

青年は、私が迷っているとみて、日時と集合場所を書いた紙を渡してくれた。
「気が向いたら来て見ろよ」
そう言って去っていった。
たしかに現在やっているちまちました仕事よりは効率的であったが、裏街道の闇取引の片棒担ぎであることが引っ掛かった。
国のために生命を捧げた先輩たちの、純粋なあの生き様を汚すような恥ずべきことをしてはならなかった。
存亡の危機に立たされて若い生命を犠牲にさせられた先輩たちが、軽蔑されるような行為をしてはならない。
そう自分を厳しく戒めて、参加しないことにした。
指定された日時に集合場所へ出向いて断れば、やってみてからにしろと言われて断れずずるずる引き込まれる虞があったから、会わずに別れることにした。
その後も乱暴なタクシーを「神風タクシー」、人の集まる繁華街などで揉め事や暴力沙汰が起こると「予科練くずれ」「特攻くずれ」と極め付けられて、神に祭り上げられた先輩たちの人格が貶められた。
そんなせいもあって、人々は元特攻隊員と知ると誰彼構わず蔑んだ。
(俺たちはどんな悪事をしたというのだ)
国家のために身命を賭して尽くしたはずなのに、外方を向かれて勝手な都合で捨てられ、いままた身を挺して護ろうとした国民たちにまで裏切られては、遣り場のない怒りを抑えようがなかった。
このとき、私は、
「よし。俺はなにものの庇護をも受けず、また頼りにもせずに、一人で生きてみせる」
そう覚悟を固めた。
生まれ育った国家の方針で都合のいいように扱われ、操られて生命まで捧げたのに生き残ってしまったために持て余され、揚げ句の果てに裏切られて捨てられた。
国家に裏切られて捨てられたのだから、世の中に手強いものなどなにもなかった。
国土防衛の手先に狩り出されて成人まえに生命を奪われた先輩たちのことを思えば、どんな苦難にも耐えられるはずだと思った。

三

人は努力さえ怠らなければ、誰にも頼らず、庇護など受けずとも、なんとか生きていけるものである。失敗したらまだ努力中なのだと思えば腐ることはない。
私の場合はたいした努力をした覚えもないが、ひょっとして毎年先輩たちが特攻出撃した日に靖国神社に詣でて、微力ながら喋ったり書いたりして風化させない努力をつづけていることを報告しているので、先輩たちがその努力を愛でて護ってくれているのかも知れない。

はじめはまだ物書きになるまえだったのでせっかく演劇学校で劇作の道を志したのだから舞台で先輩たちのことを知らしめようと思った。
演劇学校では、実績次第では芸術学部のある大学へ推薦してくれると励ましてくれた。
教科書を受取りに行ったときに偶々同席した石川と帰り道がおなじということで連れ立って電車に乗った。
彼は一歳年長で、軍人ではなかったが目黒にあった海軍技術研究所の嘱託だったという。おなじ海軍の飯を食った仲間ということでいっそう親しみを覚えた。
かれは劇作ではなく絵が好きなので舞台美術を学びたいということだった。
仕事の話になって、私がその日暮らしを告げると、
「俺は神田の電気屋に勤めているのだが、社長が通信販売の注文書の整理をする人がいなくて困っているんだ。君は事務が堪能らしいから手伝ってくれないか」
そう言われて、是非にと食い下がられた。
私も世の中がだんだん落ち着いて行くにつれて雑用の減ってきていることが気掛かりだったので、ふたつ返事で承知した。
電気店の社長の家というのは、石川と私の最寄駅の中間にあった。
約束の日の夜、待ち合わせて社長宅を訪ねた。大学の工学部出身の人で話の進め方が合理的であった。
面接が終わると、社長はなにが気に入ったのか、
「さっそく明日から出社してください」
と即決してくれた。
強引な誘いであったが、私に異存はなく、承諾した。
帰路、石川は、
「顔を立ててくれてたすかったよ」
そういって駅前のそば屋で天丼を振る舞ってくれた。
翌日、石川と神田駅で待ち合わせて出社した。
石川は私が入社してくれたということを恩に着てくれたが、私のほうこそ定職に就けてもらってほっとした。
石川は戦後最初に出会った友人で、それからもずっと長い付き合いになった。
私は通信販売の仕事が追いつくと、こんどは経理をやらされた。
経理にはすでに男子と女子がいて、どちらも私より年長だったが、商業専門学校出身ではなかった。
私も商業学校出ではなかったが、師範学校へすすむコースだったので専攻科目があって日本史を選んでいたが、戦時中ということもあって国策に沿うべく工業か商業かをも選択させられていた。
私は生来不器用で工作機械の旋盤などとても扱う自信がなかったので、商業のほうを選んで簿記と算盤をやっていた。
石川に話してあったことが偶々社長の耳に入り、私は

いつか経理室に席を置くようになっていた。
石川は営業だったから退社が遅く、ふだんはあまり一緒に帰ることはなかった。
そんな石川から久し振りに誘われて新宿へ行った。
新宿は二人の通勤区間にあった。
いつも新宿の歓楽街へ出るには東口か西口であったが、その日石川は裏口になる南口の改札を出た。
まえの甲州街道（国道二十号線）の下の道沿いに軽演劇団ムーランルージュの劇場があり、その横を入った裏手にある『鬼灯』という居酒屋へ入っていった。
石川から主人の栗原春人さんは句誌『鬼灯』の主宰者であり、ムーランルージュの後援会長だときいていた。
栗原さんは、私が演劇の脚本（戯曲）書きを希望していることを念押しすると、さっそく私たちをムーランルージュの楽屋へ連れていってくれて、座長の宮坂将嘉、三崎千恵子夫妻に紹介してくれた。
宮坂将嘉はムーラン解散後テレビ界で活躍し、刑事物の常連になっていた。
三崎千恵子はずっとのちに山田洋次監督の〝寅さんシリーズ〟で柴又帝釈天参道の団子店を取り仕切っている渥美清演ずる寅さんの叔母さん役を演じていた。
宮坂座長は私たちを文芸部の部屋へ案内して紹介してくれた。
劇作家の中江良夫部長は不在であったが、毎月の上演台本を交替で書いている若手の人たちがいた。
私たちはこの日から木戸御免になり、観劇も舞台稽古も顔パスで通った。
ムーランルージュは小さな商業劇団であるから来月公演の舞台稽古だからといって休館するわけにはいかなかったので、楽日（最終日）の一週間ほどまえからその日の終演後に交通機関の始発時刻まで稽古がはじまる。
まだ冷暖房などない時代であったから、夏の暑さはまだしも冬など客席に長時間座ってはいられない。そこで小道具係の人から毛羽立って摩り切れている毛布を借りてきて全身を包み稽古見学にのめり込んで夜を明かす。
夜明けを待って戸外へ出たものの出勤時刻には大分間があるし、一旦帰宅するのも面倒なので、石川とあれこれ知恵を絞った。
そのころ東口駅前に〈聚楽〉という食堂があって二階が喫茶、二階が食堂になっていて、石川と新宿へ出るとかならず寄っていた。
喫茶では歌手志望の青年たちが伴奏つきで唄っていた。
私たちとおなじ客席にはときどきムーランルージュでみかけたことのある『大利根無情』や『十三夜』を作曲した長津義治、『岸壁の母』で一躍名をあげた平川浪竜たちプロの作曲家がきていた。いまでいう人材探しなのであろう。

その聚楽に頼み、朝食にカツ丼を注文しておいて二階の部屋で出勤時刻までよく仮眠させてもらった。
私は余暇を劇作に没頭し書き上げると文芸部へ届けたが、どれもこれも真っ赤に朱筆を入れられて返却され、「戦後は明日が見えない混沌とした世の中がつづいているので大衆は筋立ても登場人物も滑稽で笑いを誘ってくれる喜劇を求めているのだから、そういうものを書かなくては駄目だ。休憩時間にやっている幕間の寸劇が受けるのも観客が笑いに飢えているなによりの証拠なのだ」
そう諭された。
そんなことは自分を省みても判っていることではあったが、私は先輩たちを主題にして特攻を風化させないために書くのだから、先輩たちを面白可笑しく仕立てたのではならないし、こんな世の中に迎合してはならないと思い、劇作を断念した。
石川は残念がったが、私は、
「俺が妥協できないんだから仕方ないよ」
そう言って遂に彼を慰めた。
演劇のほうは諦めたが、文学のほうはつづけていた。
書き手ではなく読み手のほうで、太宰治の作品にのめり込んでいた。
私自身も持っている虚無的で頽廃的な感覚を作品にしたり、屈折した罪悪の意識を滑稽と笑いで包んだ軽妙な作品に好感が持てた。
つまり無意味な生存に安住する逃避的な傾向である。
太宰は性格的に弱いところがあって、好かれた女性に誘われると義理立てして心中自殺につきあいなんども未遂で終わったが、昭和二十三年（一九四八）六月十三日、執筆中の『グッド・バイ』が未完のまま遺書などを残して山崎富栄という愛人と自宅近くの玉川上水に入水して心中自殺してしまった。
私はいまでも太宰治の文章と話術が巧妙でユーモア溢れたその作風に魅了させられている。
太宰治情死の二年後に朝鮮戦争が勃発して北朝鮮軍がソウルを占領した。
国連安全保障理事会が国連軍の派遣を決定したので、国連軍は仁川に上陸して平壌を占領したがすぐ北朝鮮軍に奪回されてしまい、戦争は泥沼化していった。
これを契機にして日本は在日米軍の調達物資や役務の需要を受ける特需景気の恩恵に浴した。
不景気はどこ吹く風と特需景気に湧いて、高度成長期に入っていった。
終戦から七年経ったある日、新聞を読んでいてコラムの記事に目を奪われた。
戦没海軍飛行専修予備学生の手記が遺族会の手で一冊に纏められたというのである。
それまでGHQの検閲が厳しく戦争に関する本はあまり出版されていなかった。

私は飛行専修予備学生の手記集ならうちの飛行隊にいた人のもあるかも知れないと思い、さっそく白鷗遺族会へ連絡して購入したいと伝えたら、理事長に会ってくれといわれて勤務先をおしえてくれた。

さっそく丸の内の海上ビルにある浅野物産を訪ねて受付で用件を伝えると、すぐに案内してくれた。

杉暁夫理事長は浅野物産の総務課長であった。

私は、あらためて用件を詳しく伝えた。

黙って話を聴いてくれていた理事長は、

「せっかくのお申し出でお気持は解りますが、この本は十三期飛行専修予備学生たちの手記を編んだものでして、会員にだけ配布している非売品なので態々おいで戴き恐縮ですが、おわけするのはご容赦下さい」

そういう趣旨のことを丁重に説明して下さった。

そこまでいわれて是非にともいえず引き下がったが、エレベーターを待っているところへ追ってこられて、

「これは、私から貴方に差し上げます。読んでやって下さい。そしていつまでも思い出してやって下さい」

そう言って非売品の本を手渡しして下さった。

私は丁重に礼を述べると、足取り軽く帰路についた。

この『雲ながるる果てに―戦歿学生の手記』は、昭和四十二年（一九五二）に河出書房新社から再刊され、さらに昭和六十年（一九八七）に河出文庫になり、戦後五十年の平成七年（一九九五）同社から増補再刊された。

四

その後、私も石川も生活が安定したので結婚した。

私が二十七歳のときで、妻は二十三歳であった。

家には母とその後十年独身をつづけた弟がいたので、妻は姑と小舅も一緒に世話をすることになった。

『雲ながるる果てに』を白鷗会理事長のご厚意で頂戴してから十一年も経ってようやく雪華社から『神風特別攻撃隊の記録』（猪口力平・中島正共著）が発売された。

著者は神風特別攻撃隊を編成させた司令部の先任参謀と実施した航空隊の飛行長だった人だというから内容はさておいて、巻末の〈戦没者名簿〉に目を奪われた。

特攻といえば関行男大尉を指揮官とする二〇一空の零戦敷島、大和、朝日、山桜の四隊が有名だが、じつはつづいて第二神風特別攻撃隊が編成されていたのである。

それがなんと私のいた七〇一空であった。

二〇一空は十月二十五日から三十日のあいだに出撃したが、七〇一空一〇二、一〇三飛行隊は二十七日から十一月一日のあいだに純忠、至誠、誠忠、神武、神兵、天兵の六隊が出撃していた。

その純忠隊のところに、

攻一〇二分隊長　大尉深堀直治

と指揮官の名が書かれているのを見てはっとした。

（あの人だ）

私は急いで大切にしまってあるボロボロの『雑記帳』を取り出して一枚一枚丁寧に開いていった。

（やっぱりそうだった）

手を止めたところには万年筆で『抜刀隊』の詞が達筆な筆跡で書かれていて、その左下に散切髪を白鉢巻で結び、右手で抜き身を振り上げている背後姿が素描されていて、昭和十九年六月二十三日深堀大尉と署名がある。

深堀大尉は十月二十八日にフィリピンセブ基地から出撃しているからその四箇月まえに書かれたものである。

もう一枚、馬場飛長が書いた『坂本龍馬』の詞に鉛筆で龍馬の顔を素描して深堀大尉画と署名している。

この二ページあとに『抜刀隊』の詞が書かれているからおなじころのものであろう。

深堀大尉がフィリピン特攻戦歿者ならばほかにもいないか照合してみると、神兵隊に一人、天兵隊に三人、鹿島隊に一人いた。

この『雑記帳』はいつ誰から渡されたものか記憶が曖昧であるが、書いている人が七〇一空の一〇二、一〇三飛行隊員に限られているからフィリピン特攻までであり、私が国分の七〇一空に着任したときは一〇三が再建中であって一〇二は香取で再建すると七六五空に編入されて台湾へ行き、台中、新竹、宜蘭から特攻出撃してしまっているから会うはずはなく、二国へ行ってからは新編入の一〇五だから関係なく、そうなるとフィリピンから帰ってきた一〇三の誰かに相違ない。

その後歴史物を書かせてもらっている出版社の編集者の紹介で知り合った光人社の坂梨誠司さんから、

「軍国少年時代の話を書きませんか」

と誘われて『特攻基地の少年兵』を上梓したとき、取材しておいた前述の深堀直治大尉のことを書き入れた。

この本が縁で遅蒔きながら同期の人たちと知り合い、最後の全国大会に参加させてもらえた。

その呉市で開催された全国大会の二日目に江田島の海上自衛隊第一術科学校（旧海軍兵学校）の見学があった。

いくつかの建物のなかに歴代兵学校長の写真が壁面の上部に並んでいる部屋があって、そこに並んでいるガラスケースのなかには戦死者の遺品が展示されていた。

そのなかになんと深堀大尉の遺影があったのである。

書いたからあってくれたのであろうか、涙が出た。

先輩たちの特攻死を風化させてはならないと積極的に話をしてきたが、話すことには限界があることを思い知らされたので、書くことにあらためた。

書いておけば、いつか誰か読みたい人が読んでくれて伝承していってくれるだろう。

そう思って書くことに転向した。

七〇一空のことは折に触れてこれでもかこれでもかと書いてきた。

戦後毎年先輩たちが特攻出撃された日に靖国神社へ詣

でてきているが、最近になって能楽堂の庭にある桜木の横を通ると、

（俺たちのことも書けよ）

と言われているようで気になっていた。

そこにある四本の桜木は桜花隊の戦友会が献木したもので、そのうちの一本が蕾を開くと気象庁が東京に開花宣言をする標本木になっていることはよく知られている。

特攻は飛行機に拠ると思っている人が意外に多い。

だが人が爆弾に乗る『桜花』、魚雷に乗る『回天』、爆装機動艇（モーターボート）『震洋』が特攻専用の兵器だったのである。

フィリピン戦に投入されるはずの『桜花』は完成間もない巨大空母信濃（しなの）が五十機を積んで横須賀から呉に向かう途中紀伊半島南端の潮岬（しおのみさき）沖南東五十キロ地点で米潜水艦アーチャーフィッシュの雷撃を受けて沈没し、さらに新規空母雲龍が二十機を積んでフィリピンに向けて呉を出航したがこれも東シナ海尖閣諸島沖で米潜水艦レッドフィッシュの雷撃を受けて沈没したので間に合わず、零戦や九九式艦爆に爆装させて代用したのであった。

『桜花』を書き上げたが注文原稿ではないので会員になっている同人誌に発表した。

毎年靖国神社に詣でる日にはまだ標本木の桜は開花していないのだが、今年は詣でる前日に開花宣言が出た。

当日、いつものとおり地下鉄の九段下駅で下車して九段坂を上っていった。年々この坂を上るのが辛くなる。

大鳥居を潜りいつものように左側を歩いて行く。

貴様と俺とは同期の桜

離れ離れに散ろうとも

花の都の靖国神社

春の梢に咲いて会おう

そう唄って見送ったのだからどれかの梢に来ているだろうと思い、広い境内を一巡することにしている。

標本木は蕾を開きよろこんでくれているようだった。

拝殿の前に額衝（ぬかづ）いて参拝したあと、裏手へまわって神池庭園を一周してから遊就館（ゆうしゅうかん）一階の茶房〈結（ゆい）〉へ立ち寄り、いつもの海軍カレーと白玉ぜんざいで昼食をとる。

特攻で若い生命を犠牲にした先輩たちのことを終生忘れてはならない思いで参拝をつづけてきたが、終戦の翌年に詣でてから七十三年もの歳月が経過していた。

結婚してから六十一年、妻は姑に仕え家事と育児に専念して子供たちを成人させると、百歳まで世話をしてきた姑の来世への旅立ちを無事に見送り、孫にも恵まれた。

振り返ってみると私は靖国神社への参拝と先輩たちの死を風化させないことを使命と心得、書くことを拠り所にしてこれまでなんとか生きてきた。それらを心の支えにしてきたことが私の人生に幸いしたのかも知れない。

靖国神社の境内を出るとき、大鳥居を仰ぎ見ながら、

（それにしても、随分長く生きてきたものだ）

そう思った途端に微笑が漏れた。

（了）

HINOMARU

田寺怜葦

初めに、縦書きローマ字の読み辛い表題をお詫びしたいと思います。

これには理由がありまして、目立ちたいからと奇をてらった訳ではありません。HINOMARU（日の丸）とは、人気のロックバンドであるラッドウィンプス（RADWIMPS）の曲名です。この曲は、サッカーやオリンピック等のスポーツの祭典を想定して創られた作品らしいのですが、歌詞が愛国的過ぎる、軍歌のようだ、という批判が一部から上がり、ネット上のみならず、実際に彼等のコンサート会場周辺でも事件が起きました。もちろん批判的なのは左傾の人達（または一部の外国人）です。しかし皮肉なもので、この騒動によって話題性が増して売り上げはトップを記録しました。メロディーも優しく美しく日本人の心に染み入る素敵な歌です。

HINOMARU-Radwimps-YouTube

https://www.youtube.com/watch?v = c7Nagyrsk7Q

歌詞

風にたなびくあの旗に
古よりはためく旗に
意味もなく懐かしくなり
こみ上げるこの気持ちはなに
胸に手をあて見上げれば
高鳴る血潮　誇り高く
この身体に流れゆくは
気高きこの御国の御霊
さぁいざゆかん
日出づる国の　御名の下に
どれだけ強き風吹けど
遥か高き波がくれど

僕らの燃ゆる御霊は
挫けなどしない
胸に優しき母の声
背中に強き父の教え
受け継がれし歴史を手に
恐れるものがあるだろうか
ひと時とて忘れやしない
帰るべきあなたのことを
たとえこの身が滅ぶとて
幾々千代にさぁ咲き誇れ
さぁいざゆかん
守るべきものが　今はある
どれだけ強き風吹けど
遥か高き波がくれど
僕らのたぎる決意は
揺らぎなどしない
どれだけ強き風吹けど
遥か高き波がくれど
僕らの燃ゆる御霊は
挫けなどしない
僕らのたぎる決意は
揺らぎなどしない

ソングライター：Yojiro Noda
HINOMARU　歌詞　©Universal Music Publishing Group

アーティスト：RADWIMPS
リリース：2018年
ジャンル：ロック
HINOMARU-Radwimps-YouTube

以上がこの曲の歌詞です。「御国の御霊」、「日出づる国の御名の下に」などの表現が戦争のイメージに繋がるとして攻撃されているようです。文語的表現や日本古来の言葉の使用が、一部の人々にアレルギー反応を起こさせているのでしょうか。もしそうなら、そういう過敏症の人々には他を攻撃するのではなく、自らの過敏症治療に専念していただきたいものです。

この曲を聴いて、改めて日本の国旗、国歌について考えてみました。

自分の人生の中で最も「君が代」を斉唱し、「日の丸」を仰ぎみたのは小・中学生の頃だったと記憶しています。運動会や朝礼の度に見た厳粛な国旗掲揚の所作は、幼い心に国旗の尊さを伝えてくれました。意味不明のままに歌い続けた「君が代」はいつの間にか血肉の一部となりました。ところが近年の子供たちを見ると、どうも様子が違うようです。若者の中には君が代を歌えない者もいるということを耳にした時には本当に驚きました。そういえば、祝日に日の丸を掲げる家も滅多に見なくなりました。

堂々と日の丸を掲げ、君が代を斉唱するのはオリンピックかスポーツの世界大会くらいでしょう。こんな日本を奇形の国だと感じるのは私だけでしょうか。どの分野においても最先端の技術を誇り、豊かな物資に恵まれ、自由で清潔で安全な暮らしを手にしている日本人。世界の中で最も恵まれている国民だと言えるかも知れません。しかし目を閉じて深く思いを巡らせてみると、見えない不安が心に広がります。砂上の楼閣で宴に現を抜かしている様な・・・。宴のマナー違反とされているのは政治と宗教の話題ですが、この砂上の楼閣の宴では、愛国と防衛に関する話題がタブーとされています。

世界中のどの国でも、自国を愛し守ることは当たり前の心情であり権利でもあります。ところがわが日本で愛国心や国防問題を口にする時、自分も含めた多くの人々は、他人に聞かれるのをはばかるかのように声を潜めます。声高に語れない空気が日本の社会にはあるのです。まるで言論弾圧のようなこんな風潮は何時ごろから何故生まれたのでしょうか。

私が知り得た知識では、敗戦後、アメリカの進駐軍によって徹底的な言論弾圧が実施されたと認識しています。日本が再び強国とならないように、マスメディアから教育、憲法に至るまであらゆる分野で日本人に自虐史観を植えつけるべき画策が成されたのです。しかし、戦後七十三年も経って未だに真っ当な独立国たり得ないのは、日本政府と国民の怠慢であると思います。

長い年月に渡り日本国民の思想信条をコントロールしてきたテレビ、新聞等の大手マスメディアの責任は何より大きいでしょう。今や一大権力と化した大手マスメディアですが、その基本に愛国心がなければ国民はいつかそっぽを向くでしょう。現に十代から三十代の若い世代では新聞もテレビも見ないという人が増えているそうです。彼らの多くは専らインターネットの情報サイトを利用しているのです。その結果として保守的な思想に傾倒する人が増大しているのは皮肉な現象と言えるでしょう。

三選が確実視されている安倍内閣により、放送法の改革も行われようとしています。日本の情報環境が良くなることは国民にとっての恵みでもあります。北朝鮮のミサイル問題からC国のあからさまな日本侵略の動きなど、今わが国の安全は不安定です。私達国民全員が、立場や思想の違いを超えて先ずは精神武装すべきです。心に日の丸を掲げるべき時ではないでしょうか。

「学校つまらない？」いや「つまる」

新井宏

『本郷』という歴史雑誌がある。安政四年（一八五七）創業、歴史・考古学書で有名な出版社、吉川弘文館の隔月広報誌である。

吉川弘文館は戦後まもなくから日本歴史学会（現会員八千名）の月刊学術誌『日本歴史』発行を担当し現在八四一号を数えている。『本郷』は平成七年に『日本歴史』の評論、資料、広報の部分を独立させた有料誌で、私の最初の著書『まぼろしの古代尺』を出版してくれた縁で今でも無料で送付してくれている。

その頃、吉川弘文館から著書を出版できるのは、その分野で実績のある研究者に限られていた。だから大学の先生方でさえ吉川弘文館から出版できると勲章にしていた。その中で、無名のアマチュア研究者の著書を出版してくれたのであるから如何に私が喜んだかは判っていただけるであろう。

その『本郷』には、なかなかユニークな歴史評論が載る。主に吉川弘文館の出版書に関連するものであるが、その一三四号（二〇一八年三月）に小松成美氏の書いた「世界一大切にしたい会社」との記事があった。

実は彼女の著書『虹色のチョーク』について紹介する宣伝なのであるが、異例なのは出版社が吉川弘文館とは縁もゆかりもない自費出版で知られる幻冬舎であり、著者も歴史研究と縁のないノンフィクション作家だということである。彼女の主な著書を調べると、中田英寿、イチロー、白鵬、五郎丸などのスポーツ選手評伝が多い。

しかし、彼女の紹介記事を読んでいる内に、時代の流れを知った。主題が障害者の雇用問題なのである。近年、歴史研究の対象が社会的な弱者、少数者、たとえばジェンダー、性差別、性的少数者（LGBT）などに広がるなかで、障害者にも目を向けた歴史研究の新しい分野が形成されつつ有ると言っても過言ではない。

すなわち、「世界一大切にしたい会社」とは、二〇〇八年の坂本光司氏の著書『日本でいちばんたいせつにしたい会社』で紹介された日本理化学工業というチョーク製造会社のことなのである。現在の従業員は八十名ほど、その内の七割が知的障害者で、更にその半分ほどが重度の障害者、特にチョーク製造のラインで働く社員はすべて障害者が担っているという。著者の小松成美氏は、この会社に四年半密着取材してこのノンフィクションを書いた。まずは小松成美氏の『本郷』に載った記事から紹介しよう。

小松氏は日本理化学工業の大山隆久社長に質問する。

「本当に失礼かも知れませんが、細かな作業マニュアルを読むことやコンピューターを使うこと、計算をすることができない社員の方々が、こうして優れた技術を身につけ、日本のチョークの半分以上を製造していることに衝撃を受けています。どうしてそれが可能になったのですか？」

大山社長は次のように説明した。

「チョークを作る障害者達の頑張りのお陰で、国内チョークシェアでナンバーワンにもなることができました。社員には、地域の最低賃金を下回ることなく、給料を払い続けています。重度の障害があっても、企業の貴重な労働力となることを証明していると思っています」

その始まりは、今から五十八年前、現会長の大山泰弘氏が養護学校の先生から何度も何度も請われ、十五歳と十六歳の少女を「二週間だけ」という条件で「就業体験」として受け入れたことにあった。

「申し訳ありませんが、うちでは無理です」と断るなかで先生は言った。「就職が無理なら、せめて働く体験だけでもさせてくれませんか？　そうでないとこの子たちは、働く喜び、働く楽しみを知らぬまま、施設を出て一生が終わってしまいます」と。

心配する先生や父母たちがそっと見守るなかで、二週間の「ラベル貼り」作業が終わった。十時の休み時間、お昼休み、三時の休み時間も仕事に没頭して、手を休めない姿に、一緒に働いていた社員たちから声が上がった。「私たちみんなでカバーしますから、採用してあげてください」と。

以後、その人数を増やし、重度障害者多数雇用モデル工場となる。

「知的障害者でも働けるようにと、工場のラインを劇的に変えていきました。すると、そこには想像を越えたドラマが起こっていきました。チヨークの製造工程はほ

とんどが手作業で、職人の技が際立って必要なのですが、彼らにはその能力がありました」。

普通の人では十五分、三十分が限界な細かな作業でも、彼らは特別な集中力を発揮し、数時間も続けることができた。また、普通の日視では見つけることができないチヨークの小さな気泡やひび割れ、欠けを見つけ出し、取り出すことができた。

会長の大山泰弘氏は言う。

「知的障害のある子供たちに健常者と同じ仕事などできるはずがない、と頭ごなしに考えていた私は、二人の少女を雇い、その人数を増やしていっても、彼らの面倒を見ている、世話をしている、という意識が消えませんでした。その時、ある法事で臨席した禅寺のお坊さんの言葉が、私を奮い立たせたのです。そのお坊さんは私に、『人間にとって究極の幸せは四つです』と言い切ったのです。私はそれを書き留めました」。

一つ目は愛されること。

二つ目はほめられること。

三つ目は人の役に立つこと。

四つ目は人に必要とされること。

「障害者であっても、福祉施設で大事に面倒をみてもらうことが幸せなのではない。働いて人の役に立つことが幸せなのではないか、と考えたのです」。

その時の少女のひとり、林緋紗子さんは六十歳の定年をすぎて、六十八歳になるまで白髪になり腰がまがってからも嘱託社員として雑務をやりながら、チョークを作っていた。

実は、わが家の次男、武は知的障害者である。そのことは何度か『まんじ』にも書いたことがあるが、私の人生、喜怒哀楽のほとんどを彼と共にしている。その中で常に感じていたことは、何とか安定して働ける場所がほしいということであった。人として生まれて、社会へ貢献する道は普通なら「働くこと」である。それが賃金という尺度で測られ、水準に満たないと言う理由で切り捨てられる。

お給料は無くとも良いから「仕事」をさせて欲しいと言っても社会が認めなかった。とくに最低賃金法が問題であった。武が勤める社会福祉法人ＬＭＶ（Life Movement Village）は、国や県からの援助を受けてはいるが、基本的には「働いて収入を得る」仕組みである。ところが、世の中に好不況があるように、いやそれにも増して社会福祉法人では、不況の影響をもろに受ける。国の定めた最低賃金を支払っていては、法人の運営が続けられない。結局は、就労時間を短縮して、時間給を切り下げるしかなかった。

いま韓国では文在寅大統領が、理想に燃えて、最低賃金を毎年十六％引き上げ、三年間で時給六四〇円から一〇〇〇円にする「所得主導成長政策」が進行中である。

輸出主導の先進国追撃型成長を解消するためには、従来の産業中心政策では限界がはっきりしていることも事実だ。分配改善を通して家計で使える金を増やし、それにより、内需を刺激して雇用増につなげ好循環が生まれれば、韓国経済の新たなモデルになるかもしれない。

しかし経済学者は、「所得主導成長論」に否定的だ。経済理論に照らしてみる時、学界で検証された理論でもなく、話にならない、という反応であった。成長政策に所得主導成長論を実験する国は世界主要国のうち韓国が唯一である。

いわば経済学者から総スカンを食らっているのに韓国政府は強硬である。しかし一年間の成績表は惨めであった。

最低賃金引き上げは、経済的な弱者へ配分を多くしようという政策である。ところが、誰でもわかるように、最低賃金が引き上げられると、弱者の雇用を担っていた中小企業や個人企業が一斉に人員削減に乗り出す。そのために豊かになるべき低所得層は就業の機会を奪われ、逆に貧困を加速してしまう。それが韓国の統計で実証されたのである。

所得下位二〇％の「第一階層」の所得が前年同期比八％減、下位二〇～四〇％の「第二階層」の所得が同四％減になってしまったのに対して、上位二〇％の「第五階層」の所得は同九・三％増を記録したのである。まさにエミール・クーエの「努力逆転の法則」である。

関連して思い起こすのは江戸時代の雇用政策である。箱根の山も大井川も「駕籠」で越えていた。その頃、車や舟を知らなかったわけではない。本音は東海道の管理であろうが、人足の雇用政策の面も大きかったのである。

さて、小松成美氏の『虹色のチョーク』執筆の動機となった坂本光司氏の『日本でいちばん大切にしたい会社』（あさ出版）を覗いてみる。

もちろん小松成美氏の紹介と内容はほとんど異ならないが、中小企業経営論など経営者への啓発を主題としているので、論旨は判りやすい。坂本氏の著書は好評によりその後シリーズとなり三巻まで出ているが、その冒頭を飾ったのが「日本理化学工業」なのである。

ところが、その一番目に「伊那食品工業」が出ている。見覚えがあった。

『まんじ』同人発行人の三戸岡道夫さんがその著書『二宮金次郎から学んだ情熱の経営』（平成二十二年刊）で最初に取り上げた会社である。

伊那食品工業は「企業は社員を幸福にするためにある」と言う経営理念のもとで目先の利益は追わず、利益は社

員を幸福にする手段として、創業以来四十八年、連続して、増収、増益、増員という記録を打ち立てた寒天を製造する会社である。そのシェアは国内で八十パーセント、世界で十六パーセントだという（著書出版時）。

そこにはまさに二宮金次郎の「遠きをはかる者は富み、近くをはかる者は貧す」を地で行く世界があった。

日本理化学工業の場合も、現会長の大山泰弘氏が聴いた禅宗僧侶のことば「愛されること、ほめられること、役に立つこと、必要とされること」が企業の理念となった。出典は何であろうか。どこかの経典に出ているのかも知れない。

しかし、インターネットまで動員して調べるが見つからない。見つかるのは全て日本理化学工業に関連した話題ばかりである。

その一方で、似たような言葉がいくつか見つかる。

山本五十六は「やってみせ言って聞かせてみて褒めてやらねば人は動かじ」とか、「話し合い耳を傾け承認し任せてやらねば人は育たず」とか「やっている姿を感謝で見守って信頼せねば人は実らず」と言っている。組織を動かす原点のように思うが、どこかで禅僧の話に通じるイメージがある。

ほかにも自動車用品を販売するイエローハットの創業者・鍵山秀三郎さんの「一日一話」に「してもらう幸せ、できる幸せ、してあげる幸せ、プラス一緒にできる幸せ」がある。

また慶応義塾大教授・前野隆司氏の「やってみよう！　ありがとう！　なんとかなる！　あなたらしく！」にも同感するが、やはり障害者との関係では禅宗僧侶の言葉がいちばん響いてくる。

小松成美氏の『虹色のチョーク』は四年半も密着取材したノンフィクションである。障害者の働きぶりなどのエピソードが豊富である。

本田真士さんは「キットパス」のエースと称されている青年である。「キットパス」とは日本理化学工業が社運をかけて開発したヒット商品であるが、今その製造のリーダーである。

キットパスの担当以前はいつも始業時間ぎりぎりに出社していたのが、試行錯誤が多く工夫が生かされるこの開発商品が気に入ったらしい。出社時間がどんどん早くなり、ついには「エース」と呼ばれるほど開発に貢献した。昭和五十三年生まれで、平成十年に日本理化学工業の訓練生となった本田真士さんの母裕子さんの話が続く。

長男として生まれた真士さんの幼い頃の症状は我が家の次男・武そっくりである。

言葉が遅い、三歳児検診では幼児相談室に通い医師の診断を受ける。「自閉症的傾向」との軽度な判定である

が、周りの子供と比較すると異常は明らかで有る。保育園ではトイレが不安で昼寝ができず、その間毎日家に連れ帰っていた。成長してからも人との会話ができない。転勤の多い家庭であった上に、三男も自閉症の症状に加えパニック症状を持つ重度の障害児であった。その上、真士さんが養護学校の高等部を卒業する頃、裕子さんは乳癌に罹り即手術、更に翌年に再発して抗癌剤治療と厳しい日々が続いていた。幼い頃から裕子さんの家事を見習っていた真士さんは、ある程度料理もできる。母親を助け、その難局を切り抜け、料理の腕も磨いた。

母親としての焦燥感や将来への心配もあったにちがいない。しかし、障害児を持つ母親達との交流を通じて裕子さんは強くなって行く。

「成長と共に症状が消えてくれれば……と逃げていた時代が遠く思えます。……真士が、会社の役にたっている。皆に褒めて頂ける。働く喜びに満ちている。これ以上の幸福はありません」。

中村傑さんも平成十年入社で今はキットパスの検査担当班長である。母親の典子さんは長男の傑さんが四歳の時に離婚し、生まれたばかりの次男を連れて実家に戻り働きながら二人の子を育てた。歩き始めるのが遅く、言葉も遅かった。成長すれば解決すると思いながら、幼稚園入園、小学校入学の時期になると知的障害が明確になる。本田真士さんの場合とは違って自閉症的傾向はみられなかったが、中学校に入学する頃には普通学級は無理かも知れないと判った。しかし、一度特殊学級や養護学校に行ってしまうともう戻れない。「やれるところまでやって、もう駄目だと思ったら向こうに行きます」と普通の中学校に進んだ。

ましてや高校は無理と承知しながら、この時期、家の近くの都立工芸高校で定員割れが発生していて入学できた。子供の頃から絵が好きで、作為がなく屈託がなく溌剌とした絵を描いていたので、工芸高校が性に合っていたが、就職となると現実は厳しかった。結局は知的障害を認めて、軽度障害者として養育手帳を取得し、神奈川県障害者職業能力開発校を経て日本理化学工業に入った。

手先が器用で細かく地味な仕事を丹念にこなす傑さんは、性にあった仕事に恵まれ、いまや卓越した職人そのものである。その間、いつも前向きな姿勢で、道を切り開いてきた典子さんはいう。

「こういう子をもったら、誰だって絶対に、私のようになりますよ」と。

チョーク押出し成形機を担当する菅井雅明さんは「暦の天才」である。入社日を聞けばすぐに平成三年三月二十六日と答える。西暦年月日を言えば即座に曜日を答える。カレンダーが頭の中にあるらしい。

障害者の中には、ある種の能力だけが特出している場合が多い。その特徴が生きる仕事に巡り会えると、健常

者をはるかに越える能力を発揮する。それが認められるとますます仕事に熱中する。

長々と日本理化学工業の障害を持つ方々を紹介した。抜き書きしながら、我が家の武に当てはまることが極めて多い。武の症状を障害年金申請書から書き写す。

幼児の頃から発達が遅く、「単語」を発したのが二歳半（健常児は一歳半）、「連語」を発したのが五歳半（健常児二歳半）で、歩くのもおそかった。

高層ビルの上階に連れて行くと這って歩くほどの高所恐怖性。幼稚園バスの出迎えにいつもの母でなく父が行くと異常反応を示し大騒ぎであった。

外出日や旅行日を異常に正確に記憶していて、カナー症候群やアスペルガー症候群の傾向がある。知能指数はばらつきが極めて大きく、言語領域に弱いが、数的あるいは視覚的（認知的）領域では平均以上を示す。

もう少し補足する。視覚的（認知的）領域ではこんなこともあつた。

まだ「連語」の能力の無かった四歳くらいの頃だったと思う。画用紙に向かって円と直線にひげのついたような絵を描いている。その時はわからなかったが、中央線と山手線を中心とした路線図であった。電車に乗るのが大好きであった。駅の路線図がそのまま残像として記憶されていたらしい。

予期せぬ事態には強い不安、混乱、焦燥を招き、自閉・執着が強い状態、いつも同じことを繰返したがる。いまでも、テレビ番組に関心あろうがなかろうが、時間がくると決めたチャンネルに必ず回す。写真を撮るのが趣味で、外出すると、いつも同じところで同じ写真をしかも必ず三枚ずつ撮影する。外出時には、バス、電車の乗り換え時に必ずトイレに向かって走る。毎年のことであるが、秋恒例の報道写真展や美術展は欠かさずに出掛ける。どの程度。理解できているのか分からないが、傍から見ていると同じ事を繰返すことに満足感があるらしい。

大きくなってひとりでバスや電車に乗れるようになるだろうかというのが最初の心配であった。しかし乗り物の大好きな武はあっという間にクリアーした。小学校高学年になるとひとりでどこにでも出かける。

ある時、一緒に連れ立って出かけた帰りに、大宮駅ではぐれてしまった。お金は持っているし、交通機関については私より詳しいので、それほど心配しなかったが、何とか探し出さねばならない。その時、構内放送があった。武から「行方不明になった父親を探しています」との呼び出しであった。立場がまったく逆である。

言語能力については、親子間のコミュニケーションさえも困難な状況が続いていた。社会福祉法人ＬＭＶでは、事業を支援してくれている企業の職員と一緒に作業する場合があるが、いじめられたり、時には暴力を振るわれ、頭に大きなこぶを作って帰ってきても、家では何も話さない。しかし日常生活面では極めて勘の良い子なので大きな不便はなかった。

ただ、中学校に進んだ時には、日本語も出来ないのに英語の授業が始まった。せめて、読解の手助けにと、毎朝会社に出かける前に一時間ほど一緒に英語の教科書を読み続けた。その中に「黄色いハンカチ」という物語があった。

刑期を終えて、バスで故郷に向う男がいた。もし妻子が迎えてくれるなら、バス停の樫の木に黄色いハンカチを掲げて欲しいと手紙を送った。ハンカチが出ていなければ、そのまま通り過ぎる。そんな不安の中で男が見たのは、樫の木いっぱいに結ばれた黄色いハンカチの群であった。毎朝、おなじところを読みながら、同じように感動した。そして武がはじめて普通の生徒なみの成績を得たのが苦手なはずの英語であった。

その上、幸いなことに図形問題や算数問題は意味さえ分かれば、クイズを楽しむかのようにして解ける。出来ないのは結局、言語能力に帰する問題であった。

高所恐怖性も家族旅行の時など吊り橋があると渡れまいと心配していたが、今は超緊張状態ではあっても何とかクリアーできる。最近、旅行で全長四百メートルの三島スカイウォーク吊り橋に行った時など、途中までは確かに一緒にいたはずなのに目的地に着いても居ない。途中から引き返してしまっていた。

妻の方針で、成人してから、独りで生活して行けるように、掃除、洗濯、炊事などは全て自分で出来るように指導していた。

朝六時半に家を出て、社会福祉法人ＬＭＶに向かう武が、家族全員の朝食を作るようになってから既に二十年以上になる。今ではかなりの料理ができる。この一年間ほど妻が糖尿病とか白内障とか下肢静脈瘤とか背骨の圧迫骨折など相次いで寝込む中で、いまや私はいちいち武に聞いて家事を手伝っている。

家では、四人の子育ては全て妻にまかせ切りで、手伝うことも少なかったが、せめて妻の負担を軽減するために、武のことだけは常に心をそろえるようにしていた。そのため、武を巡ってしばしば生じるトラブル処理とか進路問題とかは私の最優先課題であった。

国家でも、外に共通の敵や課題を持つと内部がまとまるという。武の存在のおかげで、我が家もまとまっていた。たとえば、我が家では子供達に勉強を強要したことなど記憶にない。全て武が基準であった。それに比べれば、他の子供達など放っておいても育つという開き直りだったのかも知れない。

時には、武の存在が、兄弟や妹にとって負担となって

いたはずであるが、彼らもそのことを自覚し自ら処理してくれた。良い子供達であった。

妻と心がそろうのは、武を巡る喜怒哀楽の時であった。五歳になってやっと「連語」が出たと喜び、ある日いきなり「あいうえお」五十音表を何も見ずに書いたとびっくりした。

学校では、勉強にもついて行けず、疎外されているのではないかと、妻が「学校つまらないでしょう」と聞くと「つまる」と答える。

普通学級に進めたのは妻の大きな功績だった。普通の子と一緒に育てるという信念にブレはなかった。中学校を卒業する頃からは、その方針に従って私がその実務を担当するようになる。

なんとか高校に進めようと飛び回り、少しでも担当の方々に理解してもらおうと、くどくどと説明する。しかし「そんなに心配なら他の道を」と突き放されて、はっとしたこともあった。

結局は、定員割れの県立伊勢原高校の定時制にやっと入学できた。家から通うのに片道一時間半はかかる。その頃、家の脇の市役所前大通りも夜十時過ぎになると真っ暗であった。その中で、市民会館前に二十四時間営業のロイヤルホストが開店する。

妻がとてもとても喜んだ。後年、ロイヤルホストの株を入手したのはその時のお礼のつもりである。

定時制に通う生徒には、職場に通いながら大学進学を目指す者から、武のように学業面での遅れによる者まで多様な構成であったが、先生の目が届く少人数のクラスであったのがとても有り難かった。その上、先生の中には、昼間の時間を自らの研究や趣味に当てるために、わざわざ定時制を志望している方もいて、総じて水準が高かったように思う。

しかし四年間の比較的恵まれた生活も終り、いざ就職となると順調には進まない。親としても、もう少し猶予期間を持ちたかった。厚生省に勤める友人や近くの職業訓練大学校の教授などに話しを聞くと、相模原市内にある神奈川障害者職業訓練校（現障害者職業能力開発校）を薦めてくれる。日本理化学工業のキットパス検査担当班長の中村傑さんも通った学校である。

そこの訓練生として訓練費を受給しながら一年間研修後、K社の伊勢原木工所に初任給一〇万円ほどで入社した。会社の創業者が福祉事業に理解のある方で同工場内には神奈川県として始めての平成三年設立の社会福祉法人ＬＭＶが同居していた。木工所の作業の内、障害者でも出来る部分を担当する組織であった。

最初はK社に就職したのであるが、平成四年になると木工所の都合で給与はそのままという条件で、社会福祉法人ＬＭＶに移籍することになった。それ以来二十七年間にわたりお世話になっている。

働いている障害者は平均して十五人ほどであるが、設立当初に二十歳前後で入所して以来、ずっと通い続けている者が大半である。幼い頃から養護学校などでの密接な親子関係の延長で、設立当初から自然に障害者たちの父母会が出来上がっていた。もちろん、出席するのは全て母親である。その中で父親が主に出席したのは我が家くらいである。その父母会も、みんな老齢化が進み、今ではぽつりぽつりと欠けて行くが続いている。

社会福祉法人の運営は平坦ではなかった。法律により、理事長や理事、評議員などがいる。施設の実務運営担当者を施設長というが、いわばスポンサーのK社の景気動向や首脳陣の意向が大きく反映される。この三十年間近く、五代の理事長、六人の施設長のお世話になっているが、その人選にはK社の意向が大きく反映された。

小さな社会福祉法人であるだけに、いやそんな特殊な事情を抱えるが故に葛藤が生じる。国の社会福祉行政の変更や景気変動は総じて法人の運営に困難をもたらす。

当初の給与、最低賃金制を守っていては「倒産」するしかない。著しく労働能力の低い障害者には、最低賃金の減額特例が認められているので許可を申請し、勤務時間を短縮して、実質賃金を半減するしか方法が無く、現在に至ってもなかなか回復出来ずにいる。

そのような苦難の中でも、この三十年間ほとんど欠かさずに続いているのが春の一泊バス旅行である。一泊という制限内であるが、東京から二百キロ圏内の観光地、保養所はほとんど回った。原則として家庭からも誰かが同行している。

二、三十年前と言えば、会社における社員旅行が衰退に向かった時代であった。若者たちは職場の延長線上の社員旅行を好まなくなっていた。その中で、保養地に宿泊しバスで観光地を回る。今になって思い出すと、まるで会社の社員旅行を五十年間以上も続けていたような気分である。

ちょっと宿泊所を並べて見ると、富士ハイツ、熱川ハイツ、三河ハイツ、鹿島ハイツ、諏訪湖ハイツ、山梨年金会館、静岡年金センター、千葉年金センター、休暇村南伊豆、休暇村伊良湖、健保しなの苑、休暇村那須、国民宿舎紅竹、かんぽの宿焼津など、いずれも障害者割引が利用できる安価な所を利用している。

バスは神奈川県の福祉バス、設備の整った「ともしび号」を利用することが原則であるが、二倍以上の競争率なので抽選に外れると「中型バス」となり、計画変更が必要になる。だから抽選結果に一喜一憂していた。

旅行のコースに入っている観光施設等では、母親達のグループの邪魔にならないようにと、私は別行動をして園内をもっぱら歩く。また宴会翌朝、朝湯を浴びたあと

朝霧のなか、宿の周りを一時間ほど散歩する。不案内な土地なのにいつもの癖で最短距離を歩いて帰るつもりで迷い、朝食に遅れそうになったこともしばしばある。いまでもふっと思い出すと懐かしい。

母親主体の参加者のなかで、時には父親も参加する場合もあったので、男性の参加者は二、三名程度、福祉法人からは理事長や施設長にスタッフの皆さんも必ず参加する。理事長や施設長と同室となるのは大抵父親達である。

当然、お酒が入っているので、家で何も話さない武の就業状況についても遠慮のない話が聞ける。また法人運営の厳しさ・難しさや人間関係もそこに見てとれる。

母親群も毎年のことなのでグループを形成してさながら同窓会のようである。

いつの頃からだったろうか、宴会の後、必ずカラオケ大会が始まるようになった。

とにかくびっくりしたのは我が家の武が真っ先にマイクを握るのである。音楽好きは知っていたが、家の生活からはとても想像できなかった。いや武ばかりではない。ほとんどの障害者が我先に歌うのである。

ところが、ほぼ全員、全く音程がとれていない。唱歌とか演歌など、リズムや音程のとりやすい曲を選べば良さそうなものなのに、みんなボディーアクション付きでやたら早口の難しい曲を歌う。耳に障害があり、発声が困難な者さえ、いきいきとしている。

何かの事情でカラオケ大会の時間が制約された時などカラオケが出来ないなら参加しないという者まで生まれるほどであった。常日頃、感情をアウトプットする機会の少ない反動なのであろうか。やはり誰もが認められたいのである。

理事長や施設長らと親しくなったせいもあろうが、法人で何か企画する時にはいつも声をかけられる。そんな時には、韓国の大学にいる時も最優先で駆けつけた。

社会福祉法人として、県福祉部などへのPRであろうか、創立十周年記念誌をつくりたいと言う。三十頁ほどの小冊子ではあったが、全て手製のものである。

新聞作りとか雑誌作りとか原稿書きは、私のいわば「お手のもの」である。パソコンも手慣れている。カラー印刷も使って、見栄えだけでも整えると、障害者とその父母が発行したということでなかなか好評であった。理事長や施設長も県福祉部やK社の幹部、そして交流のある同種の施設に配り面目を施す。

そうなると十五周年記念誌、二十周年記念誌、そしておそらく三十周年記念誌も欠かせず、全てにお付き合いすることになるだろう。

その上、記念誌発行に前後して、県福祉部や伊勢原市

の行政関係者、K社の経営陣、それに仕事面で世話になっている伊勢原作業所の従業員などを招いて記念パーティーも行うのでそれも手伝う。

記念誌の発行で、困難があったとすれば、障害者やその家族から原稿を集めることであった。内容から見ると、障害者にとって年一度のバス旅行が如何に大きな楽しみであるか良く判る。家庭での生活ぶりや意外な趣味も伝わってくる。原則として手直しはしないが、それでも十分に形になる。

バス旅行や記念誌発行を通じて、障害者と二十年近くおつきあいしていると、本人やその家族環境も良くわかるようになる。

顔付きや身動きに不自然さなどなく、会話もごく自然で、どこに障害があるのかと思う者が、仕事の面ではむしろ評価が低いという。集中力が維持できないらしい。

中にはカラオケ大会にいつも女装で登場する障害者もいる。母親と父親を相次いで亡くし今ひとり暮らしをしているが、物持ちで旅行には必ず大きなバックを持ってくる。自分が言いたいことを何回も何回も同じ言葉、大声で繰返すので仲間達には不評である。おそらく言っていることが伝わっているか不安な心理状態が習慣化したのであろう。

旅行の時に武が撮った写真を見ると、歴代の理事長、施設長やその他のスタッフ、仲間の障害者の枚数に大きな偏りがある。彼が心易い方か気に入った仲間ばかり撮っている。

大まかには、似た障害を持つ者同志の交流がスムースなようで、それなりの社会が構成されている。

自閉症の傾向のある障害者はどちらかというとプライドが高い。武も当初のK社所属から社会福祉法人LMV所属に変わった時など、LMVの制服が気に入らず、ゴミ箱に捨ててしまい始末書を書かされたことがあった。

仕事の面では、武の数的な能力が生かされた「材料取り作業」が大変気に入っていたようであるが、その製品の受注が無くなり別の作業に移った時など、落胆して精神不安定になっていた。普通のサラリーマンと何も変わらない。

武の場合、「普通の子と一緒に育てるという」妻の信念で、福祉法人LMVに世話になってからも障害者という状況に甘えないようにしていた。そのため障害者年金の申請も入所来二〇年間もしなかった。

ある時、施設長から「どうして障害年金を申請しないのですか」と言われた。ここで働く障害者は武以外全員障害者年金を受給していると言う。

今は良いとして、武が独りで生活して行く時に備え、親としても障害年金を受給できるようにすべきではない

か。若干の戸惑いもあったが、障害年金の申請をしたのは七年ほど前である。

ところで、いざ申請書を書く段になると、あれも出来る、これも出来ると書きたいが、それでは受給資格を取れないであろう。だからと言って、何か劣っている点を列挙するばかりでは憂鬱である。しかし武の仲間達は全員受給しているというのに、武だけ資格を取れなければ、私の責任のようにも感じる。

障害年金申請の際に、役だったのは、妻の詳細な育児記録である。障害年金申請書に書いた「単語」を始めて使った日、「連語」を始めて使った日など全てがその記録のおかげであった。それと共に、武の場合、分野によって能力差が極度に大きいことも冷静に認識できた。

障害年金は月七万円ほどでおそらく生涯受給できるであろう。既に七年間で六百万円ほど通帳に振り込まれているが、わが夫婦の「経済」の内はおそらく取り崩すことはないであろう。通帳の左欄（お引き出し金額欄）に数字の記入のない珍しい通帳であるが、まだ武には伝えてない。

その一方で、親として心配な事は武が将来「金銭面で騙される」ことである。そのことに少しでも抵抗力を付けるため、ＬＭＶの給与は最初から全て本人の管理に任せている。時々チェックするとわずかずつではあるが、定期に組み入れているようである。

前にも述べたが、今や武は我が家の主役である。身長は一七六センチ、体重は六二キログラムあり「会社」で毎日作業をしているので体力もあり、家庭の大工仕事くらいなら何とかこなせる。その上、毎日の朝食の準備を通じて料理も出来るし、必要な野菜類や肉類・魚類の買い物も出来る。

そうなると自然と自信を持ち、態度も大きくなる。

まず、朝の挨拶「おはよう、ありがとう」で始まる。朝食の準備の中で、毎朝コーヒーとスープをいれて私の書斎に運んでくれるからである。

次には朝食。私の出来るのは食器洗い位であるが、それでも武の指示を受けることが多い。今や我が家で最も「役立っている、必要とされている」人物なのである。

その上、もともと幸の薄い生れだったので、親として格段に「気遣って」育てたのが武である。いわば夫婦とも見かけ上は最も武に「愛」を注いでいた。

禅宗の僧侶の「四つの幸せ」すなわち「愛されること、ほめられること、人の役に立つこと、人に必要とされること」が期せずして、我が家の小さな世界で実現しているのである。

私は現役の頃から、いつもこんな事を言っていた。

「ただ働き」というと損をした感じだが、「ただ遊び」と言えば得をした感じである。だから会社で楽しく仕事をしている者はその分、お給料は安くても良いはずだと。

「それなら新井さんはお給料はいりませんね」と言われてしまった。

もちろん「働くこと」は「稼ぐこと」であるが、社会からの評価を受ける機会でもある。若者達の就職難は、評価の高い企業ばかりを狙うことにもある。今やＮＰＯ法人が一定の評価を受けつつある時代である。考えてみれば、公務員とは巨大ＮＰＯの従業員である。日本では明治来、国家公務員を供給するのが帝国大学の役割であった。

仕事の場があるから「褒められ」、「役立てる」「必要とされる」と感じることが出来る。そこで思う。労働とは社会参加権である、賃金ではない。

このエッセイを書きながら、たまたま長寿テレビ番組の『イタリアの小さな村』を見ていた。

八十歳を越えた平凡な老人がすばらしい哲学を語る。

「人生は短じかすぎる。私はもっともっと働きたい」。

もちろん、ここで働くという意味を「稼ぐ」と捉えると大違いで、今まで育ててくれた世の中に、習熟した技術で、少しでもお返ししたいということなのだ。

この番組では、誰もが平凡な言葉で哲学を語る。イタリア人がみんなそうなのか、あるいはプロジューサーの演出なのかわからないが、いつか『まんじ』に『小さなイタリアの村』の「語録」でも紹介してみたい。

そんなことを思っているところに、三日間行方不明だった山口県防府大島町の二歳の坊やが無事に発見されたニュースが飛び込んできた。

ヘリやドローンまで使った捜索の中、四日目の早朝からボランティアとして捜索に参加した尾畠春夫さんがわずか三十分ほどで家から数百メートルの山中で坊やを発見したという。

びっくりしたのは、七十八歳の尾畠さんのボランティア歴である。新潟の中越地震以来、東日本大震災、熊本地震、今年に入っても耶馬渓土砂崩壊、西日本豪雨と休む間もなく軽ワゴン車に装備一式を積み込んで出動する。相手側には一切負担を掛けないのが信条で活動費は年金から捻出しているという。

ここでも「もっともっと働きたいのです」という言葉が聞こえるようである。

禅僧の紹介する「四つの幸せ」を「人に必要とされる、人の役に立つ、褒められる、愛される」と読むとボランティアの「幸せ」になるように思う。

ピルグリム瑠璃さんを偲ぶ

太田精一

一．昭和の日本女性

ピルグリム瑠璃（雲井瑠璃）さんが帰らぬ人となった。荻窪に住む長女の薫（かおり）から、電話で知らせがあった。受話器を通して聞こえてくる薫の声は、哀しみで掠れていた。

二〇一八年五月二十一日、英スコットランド・エディンバラの病院で永遠の眠りについたとのことである。

瑠璃さんの葬儀は六月一〇日（日）、エディンバラ市郊外の教会で行われることになったが、残念ながら、私は参列できなかった。だが、数日たって葬儀の模様を、出席した英国在住の日本人の女性から薫を通して伺った。

葬儀の会場では、故人を偲び、家族、友人たちが持ち寄った写真などをもとに作成した手作りのパンフレットが、参列者全員に配られた。まず、オルガンの演奏に合わせてアメージング、グレースが参列者全員で歌われた。ついで日本の歌「さくら、さくら」、「浜辺の歌」と英語の歌詞による「千の風になって」が流れ、日本的な雰囲気の演出にも気配りが見られた。

引き続き、長女のアニータが英国人の父を持ち米国に住む医師で詩人のウィリアム・カルロス、次女のソフィが、シェークスピアの詩をそれぞれに朗読した。

最愛の妻を失ったピルグリム氏は、妻と共に愛犬を連れて五月の牧草地を散歩した想い出を綴った詩を涙ながらに詠んだという。

ピルグリム瑠璃さんの人生は、波乱に満ちたものであった。

一九三二年二月十八日、東京で生まれた。五歳の時、両親に連れられて満州（現中国東北部）の奉天（現瀋陽）に渡り、終戦後日本に引き上げて来た。父は東京大学を卒業した技術者であった。

瑠璃さんは、青山学院大学卒業後、米国コロンビア大学に留学。その後、ケンブリッジ大学に学び。同校でジョン・ピルグリム氏と知り合い結婚、一男二女を設けた。結婚後ピルグリム氏に随伴して、タイのバンコック、西アフリカのカメルーンなどの発展途上国で生活し、多様な人種、民族、文化に触れ、国際感覚を磨いた。

だが、日本人であることを忘れなかった。

異文化を体験したからこそ、日本人としてのアイデンティティを深めて行ったのかもしれない。

日本のパスポートだけは、肌身離さず持っていて、命の尽きるまで日本国籍を手放さなかった。しかし、英国人のもとに嫁いだ以上、英国人の家族の一員としていつも振る舞おうとしていた。子供たちには、英国流の生活習慣を身につけさせ、家庭内では英語だけで通した。

また、彼女は結婚後、三十年以上一度も日本に帰らなかった。その間、三人の子供は、全員夫の出身大学のケンブリッジ大学を卒業し、エンジニア、大学教授、社会福祉関係の専門家としてそれぞれの分野で活躍している。

瑠璃さんは、昭和の時代に生まれ、高い教育と教養を身につけ、昭和という時代を背負った典型的な日本女性であった。

二．ドアラでの出会い

私が、瑠璃さんと初めて出会ったのはカメルーンの商都ドアラであった。

その日は、雨季も明け、眩いばかりの日差しが照りつけていた。

街は、昼の休息（シエスタ）の眠りから覚め、車と人で賑わっていた。一九七三年十月三日の午後三時頃のことである。

ジェトロ・カメルーン・ドアラ事務所に勤務していた私に、女性から一本の電話が入った。

「ムッシュー太田、日本人の女性から電話です」

フランス人の秘書兼事務員のマダム・ドゥラポルトが電話に出るように言って私の部屋につないだ。何かの間違いではないかと思いながら、私は受話器を取った。

「もしもし、ジェトロ・ドアラ事務所の日本人スタッフの方ですか」

受話器を通して聞こえる声は、きれいな日本語である。

「はい。ジェトロ・ドアラ事務所の太田ですが、どなた様でしょうか」

「私は、ピルグリム瑠璃と申します。カメルーンのブエアに住んでいますが、ドアラに来て買物をしていると日本人がいると聞いたものですから、ちょっとお会いし、ご挨拶だけして帰ろうと思い、電話してみました」

「今どちらにいらっしゃいますか」

「はい。アクア・パラスというホテルから電話しています」

アクア・パラスは、街の中心にあり、当時ドアラでは最高級のホテルとされていて、事務所から百メートルとは離れていない。

「それでしたらホテルのすぐ隣のビルの三階の一角が私の事務所で、入口に看板が掛かっていますので、よろしかったらすぐにでもお越しください」

「では、お言葉に甘えてすぐお伺いします」

しばらくして、ピルグリム瑠璃さんが事務所に現れた。四十前後のしとやかで聡明な感じの女性である。きれいな日本語を話し、言葉の端々から高い教養が滲み出ている。

瑠璃さんは、旧英領西カメルーンの行政の中心地であるブエアに英国人の夫ジョン・ピルグリム氏と共に住んでいるという。

ブエアは、西アフリカの最高峰で四千メートルを超えるカメルーン山の麓にあり、標高千メートルを超える高原の町である。カメルーンが独領であった頃、一九〇一年から一九〇九までの八年間だけドイツ総督府が置かれていた。

気候は、高地のためドアラに比べて涼しく快適である。だが、霧が多い。

第一次大戦前独領であったカメルーンがドイツの敗戦後、戦勝国である英、仏によって東西に分割された。西カメルーンは英領、東カメルーンは仏領という状態が第二次世界大戦まで続いていたのである。

第二次大戦後カメルーンは、第一次大戦前の旧独領であった地域を中心に独立を果たした。だが、独立直前の英・仏分割統治時代の残照を引きずっていて、旧英領圏は英語、旧仏領圏はフランス語を使用している。

「ブエアにお住まいになっているのは、何かお仕事の関係ですか」

私の問いに対し瑠璃さんはブエアに住んでいる経緯を次のように語った。

「夫は、ジョン・ピルグリムと言います。旧英領の西カメルーンの地域開発を行うために、専門家として英国政府から派遣され、家族でブエアに住んでいます。息子一人、娘二人、それに年老いた私の母の六人家族です。夫は、かつて国連に務めていてタイ国にも数年間住んだことがありました」

それから一カ月後、再び瑠璃さんが事務所に訪れた。午前十一時頃であった。彼女と東・西カメルーンの教育制度や生活文化の違い、それぞれの地域の風俗習慣などについて話しているうちに昼近くなった。幼稚園に預けている私の子供たちを引き取りに行かなければならない。

「すみません。昼休みで子供たちを幼稚園に迎えに行かなければなりませんので事務所を出ます。二人の子供を幼稚園に入れているのですが、ここでは昼休みが十二時から十四時三〇分までの二時間半ですので、その間自宅に戻り昼食を摂り、食後一時間ほど昼寝をして再び幼稚園に送り届けることにしています。よろしかったら、子供と一緒に私の家に参りましょう。大したものはありませんが、家内に電話をしておきましたのでどうぞ家で昼食をしてお帰りください」

瑠璃さんを車に乗せ幼稚園に立ち寄り、子供たちをピック・アップして自宅に帰った。

三、ブエアのピルグリム家

「今日は、思いがけないお客様をお連れした。こちらピルグリム瑠璃さん。英国人の夫と共にブエアに住んでいるそうだ」

「はじめまして、ピルグリム瑠璃です。ご主人様の事務所に立ち寄ったら是非にとおっしゃっていただいたのでお言葉に甘え、ついてまいりました」

「初めまして、太田の家内で美幸と申します。よくいらっしゃいました。日本人が誰もいないところで退屈しているところですので大歓迎ですわ。ましてや女性のお客様なんて、滅多にありませんもの」

瑠璃さんと妻はすっかり打ち解け時間を忘れるほど話が弾んだ。

「ぜひ一度ブエアにもお越しください。ドアラより暑くありません。夜には、ストーブを焚くこともあります。私の家は、カメルーン山の麓にあってときどき霧が町に立ち込め、雲海の中にいるような感じがします。山を下りるとヴィクトリアの町があって、そのすぐ先で海水浴を楽しむことができます。大西洋に直接面しているため、波は荒いですが、砂浜があり子供を遊ばせるには大変良い所です。私の子供たちも、お宅のお子さんたちがいらっしゃれば、はしゃぎまわり、すぐに仲良しになれると思います。それから、七十歳を過ぎた私の母が一緒にいますが、久しぶりに日本人と日本語で話ができれば、きっと大喜びをすると思います」

一カ月後の日曜日、家族連れでピルグリム家を訪問した。

庭には、芝生が植えられ、バラとブーゲンビリアの花が咲いていた。緑豊かな広い敷地の中の瀟洒な家である。

呼び鈴を押すと、ピルグリム氏と瑠璃さんと三人の子供たちが、そろって玄関の扉を開けた。挨拶をする間もなく、私たちの息子と娘は、瑠璃さんの子供たちに手を引かれ、子供部屋に入った。

私たち夫婦は、暖炉のあるリビングに案内された。日中で気温も高かったため、火は焚かれていない。

暖炉の前の椅子に七十歳を超え品の良い老婦人が腰を下ろしている。瑠璃さんの母親であった。その母親を交えたピルグリム氏の家族との談笑が夕方近く続いた。私はその時、まるでイングランドの田園の中にある一軒家にいるような錯覚を感じていた。

ピルグリム氏の家族は皆、老婦人を「おばあちゃん」と日本語で呼んでいる。家族の会話は英語であるため、おばあちゃんには分からないことが多い。だが、おばあちゃんは、会話の中に溶け込んで微笑みを浮かべ、その場の雰囲気を和ませている。ピルグリム氏の明るく屈託のない性格が、おばあちゃんを家族の中に温かく包み込んでいるからであろう。

「おばあちゃんは、毎日このプエアで、どんなことをして過ごしていらっしゃいますか。日本に帰りたいと思いませんか」

妻がやや遠慮がちに立ち入ったことに触れた。

「主人はもう旅立ってしまいましたし、子供は、娘の瑠璃だけで他に頼る人もいません。娘と一緒であれば、どこで死んでもいいと思って日本を出てきました。やはり娘や孫に囲まれて暮らすのが一番幸せと思っています。日がな一日孫の世話をし、周りの景色を眺めながら本を読んで暮らしています」

そう言って、窓の外に視線を移した。

おばあちゃんは、陽が傾きかけた空に幽かに浮かぶ月を眺めながら、「日本では錦秋の季節ですね」と呟いた。

この日をきっかけにピルグリム氏の家族も、時折私たち一家を訪れ、さらに親交が深まった。

妻は限られた食材を使い、ピルグリム氏の家族を日本食でもてなした。ドアラには、魚、肉はもとより人参、玉葱、胡瓜、オクラ、じゃがいも、ほうれん草、長いもなどの野菜も豊富である。調味料さえあれば日本の家庭料理を準備することはそんなに難しいことではない。

ピルグリム氏は、英国の料理にこだわることはなく、何でも美味しそうに食べた。奥さんが日本人ということもあって、日本食も好んで口にした。

瑠璃さんは、英語はもとよりフランス語も堪能であったので、その後彼女がドアラに出るたびに事務所に立ち寄っていただき資料の整理、フランス語文献の抄訳、聞き込み調査などの仕事を手伝っていただいた。

彼女の真摯な仕事ぶりは今でも深く印象に残っている。

四. 植民地支配の残影

乾季の太陽が強烈な光をドアラの街に浴びせかけている十一月のある暑い日のことであった。

頼んだ資料の抄訳を届けに瑠璃さんが事務所を訪れた。仕事の打ち合わせを終えた私は、彼女に家で昼食を摂っていただくため、私の車に彼女を乗せ自宅に向かった。

途中市役所付近で人だかりがしている。静かなはずの時間なのに、男女の罵り合う声が聞え、そのあたりが騒がしい。何事かと好奇心に駆られた私は車を降り、人だかりをかき分け前の方に進み出た。するとカメルーン人の男とフランス人の女の車に傷をつけたとかつけないとか、という理由で口論になったらしい。そのうちに激昂した女がカメルーン人の男に殴る蹴るの暴行を仕掛けた。男は、がっしりした体格で身長も百八十センチを超えている。

男は、口論の最中も女に手出しをしなかったが、さすがに怒りをあらわにし、女を車のボンネットに押し倒した。ボンネットの角に額をぶつけられた女はますます激昂し、額から流れる血を手で拭いながら髪を振り乱し男に向かって突進し、再び脛をけった。男は怒りを爆発させ、拳を固め女の顔を殴ろうとした。

その時、取り巻いて眺めていた群衆の中から、一人のカメルーン人の男が飛び出し二人の中に割って入った。

(もしも、男の強烈なパンチが女の顔に当れば大変なことになる。大怪我は免れないし、場合によっては死を招きかねない)

そう思った瞬間、私も飛び出して二人の中に割って入っていた。それにつれ数人のカメルーン人の男がどっと殴ろうとする男を止めにかかった。それでも女はまだ納得せず男に殴りかかろうとしたが、止めに入った男たちによって取り押さえられ、罵声を浴びせながらしぶしぶ自分の車に乗りその場を離れて行った。

車に戻った私は、事の顛末を見ていた瑠璃さんに言った。

「フランス人は、旧植民地時代の支配意識があるからか、カメルーン人を使用人のようにしか思っていないのではないだろうか。あの女性の怒りと暴力行為は尋常でなかった。ヨーロッパの女性は、感情の起伏が激しく、全身で怒りをぶつけるところなど日本の女性とは違うなあと思いますね」

「ヨーロッパでは、男の人が女の人を殴ることはまずないので、まさかまともに飛び掛かって来ることはないだろうと思い、手を出したのかもしれませんね。体格からしてまともに殴り合ったら、命を落としかねないと分かっているはずですから、普通の精神状態であれば、あえて手を出すことはないと思います。太田さんがおっしゃるように、植民地時代の支配者意識が、口答えをするカメルーン人を許せなかったのかもしれませんね」

私はこうした諍い一つを取ってみても植民地時代の支配意識がまだ残っているように思えてならなかった。

五. 娘の英国女子校入学

カメルーンからの帰国後七年経った一九八三年四月、

ジェトロ・長崎貿易情報センターに勤務していた私は、旧ユーゴスラヴィアの首都ベオグラードへの赴任辞令を受けた。二回目の海外駐在で、カメルーンの時と同様、家族帯同の赴任である。

当時、長女の薫は、長崎県の長与中学二年に、長男の哲（さとし）は二年に進学したばかりであった。

ベオグラードには、日本人学校があり、通常の日本の義務教育が受けられる。

中学三年と、二年の子供をベオグラードに連れて赴任するのは、高校、大学と上級学校を目指すことを考えるとやや心配であった。だが、多感な時期に同校でしっかり日本の義務教育を受けながら、外国の実情を肌で感じとるのも子供たちの将来にとってプラスになるのではないかと考え、帯同に踏み切ったのである。

ベオグラード日本人学校は、小、中の生徒併せて二十人足らずのこじんまりした学校であった。そのため、学校というより塾のような感覚で授業を受け、家族的な雰囲気の中で、子供たちは楽しい学校生活を送ることができたようである。

薫の日本人学校卒業も近い一九八四年一月に、私は、進路についてどう考えるか彼女に聞いてみた。

「薫、中学卒業も近いが、高等学校はどうする。お父さんは、ベオグラードに来て、まだ一年足らずだから日本に帰国するわけには行かない。日本の高校に入るか、ウイーンにあるインターナショナルスクールに入るか、英国にある日本人経営の学校英国立教に入るか」

「私は、日本の高校に入るより英語をもっと勉強したい。英国立教もいいかもしれないけれど海外にいる日本人家族の子供たちのために建てられた学校だと聞いている。だから周りは日本人ばかりで、本格的に英語が身に着くかどうかわからない。私は英語が好きで、本気で勉強したいからイギリスの学校で入れてくれるところがあれば入りたい」

その言葉を聞いて私はふとピルグリム瑠璃さんを思い浮かべた。

「そうだ、ピルグリム瑠璃さんのところに手紙を書いて相談してみよう。瑠璃さんの住んでいるところは、イングランドのバースの近くで確かシェプトン・マレットだった。彼女の近所に外国の子女を受け入れてくれるような高校があるかどうか。もし、そうした高校があれば紹介して頂くようお願いしてみよう」

私は、早速彼女のところに手紙を書いた。

返事は二週間後に来た。

彼女の家の近くに寄宿舎を備えた女子校があるとのことであった。校名はブルトン・スクール・フォー・ガールズ。小・中・高一貫の女子校で外国人の生徒も受け入れているとのことである。

私は、早速同校の学校案内を取り寄せ、妻とも相談した。やはり直接同校を訪問してみなければ結論を出すことはできない。校風や周りの環境を確かめるとともに校長先生と面談して教育方針などを伺うことが先決であると考え、早速同校を訪問したいと瑠璃さんに連絡した。

一九八四年、四月半ば過ぎ、私は薫を連れ英国に渡った。

ピルグリム家を訪問後、瑠璃さんに案内され、サマセットにあるブルトン・スクール・フォー・ガールズを訪れトンプソン校長先生と面談した。女子校にふさわしく優しそうで、知性豊かな女性に見受けられた。

同校は、全校生徒五百人足らずのこじんまりした学校である。大学進学のための教育コースはあるが、特に進学校でもない。英国は当時、日本ほど大学進学熱が高くなかった。実際、進学率も低く、同校を卒業した生徒の中で、大学に進学する生徒は、半分以下であった。

「私どもの学校は、一九〇〇年に創立、女子教育に情熱を傾け取り組んで、実績をあげて参りました。寄宿舎も備えています。三歳から十八歳までの少女をお預かりし、小、中、高一貫教育を行っています。本校では、将来、知性と教養を身につけ、女性としての自覚を持ち、社会に役立つような人物を育てることを目的としています。外国人も受け入れていますので、ご心配なさらないでください」

「英語は、日本人学校ではほんの少し学習しただけですので、ほとんどできないとお考えいただきたいと思います。そうした生徒でも対応できるようなカリキュラムは組まれておりますでしょうか」

「特にそうしたカリキュラムは組んでいませんが英語がある程度できなければすぐには授業についていけませんので、三ヶ月間は毎日英語だけを重点的に勉強していただきます。四六時中英語に慣れるために、一緒に付き添ってくれる生徒を一人付けることにします。本校は、香港からの留学生が三人ほどいますが、その生徒たちは小学校から英語で教育を受けているので問題はありません。

お宅のお嬢さんの場合、英語に慣れるまで始めは大変でしょうが頑張ってください。入学試験はありません。とりあえず入学してみて英語を学び授業について行けるようであれば、実力に応じた学級に入れ、勉強していただくことになります」

私は、校長先生の説明を伺い安心し、薫をこの学校に入学させることにした。学校の周りは、静かな田園風景が広がり、治安も良さそうで落ち着いて勉強できそうである。ただ、日本語を全く話さない生活もストレスを溜める要因となるのではないかと思われたので、瑠璃さんにお願いし、土、日は寄宿舎を離れ彼女の家で過ごさせていただくことにした。

そのお蔭で、日本語を忘れることなく、それほど深刻

なホームシックにもかからずに十五歳の少女が快適な留学生活を送ることができたのである。

ピルグリム家は、カメルーンから帰国した後、イングランドのバースに近いシェプトン・マレットの古民家を買い、それを改装し住んでいた。

庭には桜の苗が開きかけ、可愛い草花がところどころ咲いている。穏やかな春の気配が家の周りに満ち満ちていた。

六、英国での学校生活

三ヶ月後の夏休みに、薫が英国から飛行機に乗り一人でベオグラードに帰って来た。

ロンドン空港まで、瑠璃さんが送ってくれたとのことであったが、薫にとって一人旅は初めてである。心細かったに違いないと思っていたが、それは取り越し苦労であったようだ。薫は、機内に入ると乗務員と仲良くなり、特別にコック・ピットの中に入れてもらったと、誇らしげに語っていた。

ベオグラードの空港で出迎えた私の第一印象は、たった三ヶ月見ない間に、ずい分大人びて体が大きくなったと感じた。

英国で寄宿生活を送っていたお蔭で、薫は何とか外国で一人旅が出来るほどの会話力を身につけていた。そのための努力は並大抵なものではなかったに違いない。ストレスも溜まっているようだ。急に大きくなったように見えたのも、そのストレスを食べることによって解消していたからであろう。

努力の甲斐もあって、薫は、九月の新学期から同年齢の子女と並んで普通の授業が受けられるようになっていた。

数学や理科は、それほどの英語の力が無くてもついて行けるのか、日本では得意な科目ではなかったがまずまずの成績を残した。

一方、歴史、英語などの成績は良くない。英国での試験は、記述式が多く、書くことが重視されるので、英語を習い始めた生徒には不利であった。

瑠璃さんから私ども夫婦に次のような内容の手紙が届いた。

「薫ちゃんは、こちらでの学校生活にも慣れたようで成績が上がっています。友達もでき、そのお蔭で会話の能力も急に向上し、楽しく過しているようです。

この分であれば、英国の義務教育卒業資格を取得するのにそれほど時間はかからないと思います。その資格を取得した後、その上の継続教育のシックス・フォーム(Sixth Form)クラスに入り、英国の大学への入学を目指すか、それとも日本で彼女にふさわしい教育を受けさせるか、ご両親としてお考えください。当方としては、薫ちゃんをこのままお預かりすることは、一向にかまいません。折角、薫ちゃんも英国でこのまま勉強することを望んでいますので、大学入学資格試験Aレベルの取得まで、続けられることをお勧めします」と。

英国の教育制度は日本とは異なっている。当時は五歳から十六歳までが義務教育となっていた。初等教育は五歳から十一歳まで、中等教育は十一歳から十六歳までである。中等教育を終了した生徒は、CSE試験かOレベル試験を受験し、中等教育終了資格を取得する。さらにそれ以上の教育を希望する生徒は継続教育となる。大学進学を希望する学生はこの継続教育期間中に、シックス・フォーム、コースに入り、大学入学資格試験Aレベル(国家試験)を受験するのである。受験科目は、得意とする三、四科目を自分で選択する。

Aレベルの試験は、五、六月に行われ八月に発表される。成績はA、B、C、D、Eの五段階に分かれ、A、B、Cまでのレベルに達していないと、英国の普通以上の大学に入るのは困難であった。大学入学希望者は自分の志望する大学をAレベル受験以前に訪問、教授と面談、Aレベルでどの程度の成績を取れば入学が許可されるかの感触を得て試験に臨む。試験の成績が大学の希望する水準以上に達しているかどうかによって合否が決まるのである。

薫が英国の高校に留学していた一九八〇年代半ば頃の英国の大学入学システムは以上の通りであった。

だが、その後制度が次の通り大幅に変更されている。

Aレベルには、第一学年時に取得するASレベルと第二学年時に取得するA2レベルとがある。このAS試験とA2試験の結果を総合してAレベルの最終評価が決定されるのである。AS試験は、科目数がA2試験より多く、A2試験はAS試験に通った科目の中からさらに絞って、自分の得意とする科目三から五科目を選んで受験するのが一般的である。

試験及び発表の時期は大きな変更はない。成績は*A、A、B、C、D、Eの六段階のランクに分かれる。通常一般の大学では*A、A、B、Cの成績が評価の対象となる。

各大学は、あらかじめAレベルの合格基準スコアを決め、公表している。

大学進学希望者は、それぞれ自分の成績に応じ入学できそうな大学に志望動機書、推薦状、GSCEスコアをUCASという機関を通じて大学に申請する。最大五校まで出願することができる。大学は申請書をもとに条件つき入学許可か、無条件入学許可のいずれかを出す。条件つき入学許可の場合、翌年のA2の結果を見て入学を決定するというものである。

英国には大学が約百校ある。ほぼ全てが国立であるが、

いずれも独立経営であることから月謝は高い。特に外国人に関しては、英国人より高く設定されている。

大学の修学期間は、通常三年であるが、四年コースもある。

なお、二〇一五年から義務教育は十八歳までとなっている。

七、娘の大学進学

ブルトン・スクール・フォー・ガールズで二年を過ごした薫は、いよいよ卒業の年を迎えた。Aレベルを受験し、まずまずの成績を残したが、オックスフォードやケンブリッジに入学できるほどではない。英国の大学に進学するか、日本に帰国した上で、入学できそうな大学を探すか選択をしなければならなかった。

薫がAレベルの資格を取得する少し前、私は、日本への帰国命令を受けた。

薫が英国の大学に入学したとしても、授業料の高い英国の大学に留学する娘に日本から仕送りを続けることは無理である。

私には、薫の他に当時日本人学校卒業後日本に帰国させ、ジェトロ海外駐在員のための東京の子弟寮に入れている息子の哲がいた。

その上、次の任地は大阪と決まっていた。英国、東京、大阪の三重生活は、経済的に無理であると判断したのである。

薫には申し訳なかったが、帰国し日本の大学に入ることを勧めた。

幸いにして、日本の大学も国際化の波に乗って、通常の入学試験を受けることなく、別枠で帰国子女の入学を許可する制度が始まっていた。大学によって異なるが、通常帰国子女受入校は、入学願書にもとづき書類選考を行った後、簡単な筆記試験と面接により合否を決定するというシステムをとっていた。その際、国際バカロレアだとか英国のAレベルのような公的機関が認めた資格は、選考の際有利に働いた。

薫は、入学の基準がどの程度であるか、分からなかったので、多くの大学に願書を提出し受験した。その結果、複数の有力大学から合格通知を受けたが、できるだけ学費のかからない大学をと考え国立の日大学にした。

日本にいて受験勉強に明け暮れた高校生活を送ることなく、受験とは全く縁のない英国での高校留学生活を楽しみながら大学進学ができたのである。これもすべて瑠璃さんが、良い学校を紹介くださり、週末には自宅で過ごさせていただいたお蔭である。

私は、瑠璃さんに心から感謝の気持ちを込めてお礼状を書き送った。

すると彼女から、薫は彼女の四番目の子供のように思っていた。薫がわが家に来るたびに、おばあちゃんとともども日本語で思い切って話のできる楽しさを味わい、かえって感謝している。薫は、おばあちゃんにとっても孫のような存在であった。という趣旨の手紙が届いた。

薫は、瑠璃さんをいつもおばさんと呼んでいたが、英国では母親のような気持ちで接していたに違いない。また、瑠璃さんも少女から娘になる多感な時期を預かってわが子のように慈しんでいたようである。実際、薫の帰国後もずっと交流を続けていた。薫は、新婚旅行の際にも英国を旅行先の一つに選び、瑠璃さんの居宅に立ち寄るほどであった。

瑠璃さんは書くことが好きで、筆まめであった。私たち家族とは、カメルーン以来四十年以上にわたる交際が続いていたが、その間いつもお互いの消息を確かめ合っていたのである。ことに妻の美幸とはまるで姉妹のように親密な間柄で、始終メールを通じて交信していた。また、瑠璃さんが日本に来るたびにわが家を定宿とし、東京周辺の友人、親戚などと旧交を温めていた。

八、母親をモデルとした小説を執筆

ピルグリム瑠璃さんは、結婚してから三十年以上一度も、日本に帰国しなかった。だが、それでも国籍は日本のままで英国籍に変えなかった。

夫と共に世界各地に居住し、旅行したが、パスポートは、日本国外務省発行の赤いパスポートで通した。夫も子供も英国籍で、家庭内では英語で話し、子供たちを英国人として育てたが、彼女だけは最後まで日本人であり続けたのである。

その彼女が、一九九八年子供に勧められ、明治、大正、昭和の時代の流れに翻弄されながら生きた彼女の母を中心とする家族の物語を英語で書いた。

「フィッシュ・オブ・セト・インランド・シー」という題名の小説である。この作品を壽年ドイツのブックフェアーに出品し、英国を始めヨーロッパで話題を呼んだ。

その後、同書は十ヵ国以上の国語に翻訳され評判となった。おしとやかで従順で控えめであると思われていた日本人女性の内面の強さが生き生きと描いているところに読者は感銘したのであろう。

ヨーロッパ中で話題を呼ぶ作品であったことから、日本でも草思社が目をつけ日本語版を出版しようと瑠璃さんに接触し、翻訳をさせてほしいと頼んだ。

「私は、日本人であり日本語に愛着を持っていますので、誰かに翻訳をお願いするくらいなら、自分で日本語に書き直します」

瑠璃さんは、同書を日本語で書き直し、草思社に原稿を提出した。こうして「瀬戸内を泳ぐ魚のように」と題した日本語版の単行本が同社から二〇〇〇年一月に出版されたのである。

子供たちがそれぞれ独立し、夫のピルグリム氏は、海

外での仕事が多く家を空けがちで、瑠璃さんは一人でいる時間が多くなった。また、十ヵ国以上の国で出版された単行本の印税が入ったこともあり、経済的にも余裕ができたことから瑠璃さんは、日本にしばしば帰国するようになった。

米国のコロンビア大学留学のために一九五〇年代半ばに日本を出国した頃は戦争の傷跡が残っていた。その後英国に渡航し、ケンブリッジ大学で学び、同大学で出会ったピルグリム氏と結婚し、半世紀が経った。

その間日本は、すっかり変わった。街並みは整備され、高層ビルが立ち並んでいる。瑠璃さんにとって日本は全く別の国に生まれ変わったように感じたに違いない。

瑠璃さんは、来日すると決まって数日は、我が家に滞在し、東京近郊の親戚、友人、知人を訪ね、旧交を温めていた。

関東滞在中は、我が家に、中国、九州地方の知人を訪ねるときには、英国で知己を得た日本人宅に滞在し、祖国日本の各地の実情や歴史を見聞しながら、次の小説の構想を練っていた。

それから数年後、瑠璃さんは、娘のソフィのいるスコットランド・エディンバラ郊外の家に引っ越した。そのすぐ後に、瑠璃さんは自転車に追突され、足を怪我した。我慢強い瑠璃さんは、痛みをこらえながら家事をこなし孫の面倒を見て、明るく振る舞って過ごしていた。だが、次第に体力の衰えを隠すことができなくなり、日本への帰国も途絶えた。

「来年こそは日本に行くからね」と言いつつ、とうとうその約束を果たすことができずに、二〇一八年五月三十一日、夫や子供たちに囲まれながら、英国スコットランドの土となった。

瑠璃さんは、日本の土に返ることはなかったが、魂はスコットランドの空を羽ばたいてドーヴァー海峡を渡りウラル山脈を越え、子供の頃過した奉天（中国北東部瀋陽）を巡り日本の土の中で眠っているように思えてならない。

ひなげしの丘の白い家

手塚泰男

まことの母は、彼が小学二年生になった春に、血液のガンとも言われる、白血病にかかり半年間の闘病の末に、三十三才という若さで天国に召された。

今日のまこと宛てのEメールには、

「まこと、ほんとうに久しぶりね。フランス語の学校へは、まじめに通っているようですし、少しずつ明るさをとりもどしている様子に、私も安心しています。

お父さんとは、湘南の海岸で、投げ釣りを教えてもらったり、鎌倉周辺の低山へハイキングにも出かけているのね。一緒にお風呂に入ったときには、背中を流してあげたり、とても仲が良くて、私も天国から眺めて本当にうらやましく思っていますよ。

お母さんがメールをした訳は、まことと久しぶりに楽しいときを過ごしたいからです。

私が生前使っていた鏡台がまだそのまま置いてあるわね。その引出しの中に、まことが遠足で南房総の海に行ったとき、海岸で拾いおみやげとして私にくれた、一枚のさくら貝は入っているはずですから、今夜はそれを握って眠りなさい。母より―」と出ていた。

早春の陽ざしが、まばゆいほどの花畑には、ひなげしともいう、色とりどりのポピーが一面に咲いていて、空ではひばりが春の歌を楽しそうにさえずっていた。

花畑の中を、ポピーの花たちをかき分けるようにして、白いパラソルをくるくると回し、女の人がまことに向かい近づいて来た。

良く見ると、その人はお母さんだった。まことはかけ寄ると、母の胸にとびこみ思い切り泣いた。懐かしい母のにおいがした。

「まこと、良く来たね。お母さんは、まことに話した

いことが、たくさんあるけれど、とにかく、今住んでいる私の家に行きましょう。」と母はやさしくまことの頭をなでながら言った。

キンセンカやストックなどの花が咲き乱れる畑の中の道を、母について行くと、青い海を見下ろす丘の上に建つ白い洋館に着いた。

玄関や、リビングルームには、母が描いたという、暖かい色調の水彩画が掛けてあった。

海岸や、花畑を描いた風景画は、以前、父に連れられて行った、武蔵野の小さな美術館の中村琢二という画家の絵のタッチに良く似ており、まこともいっぺんに気に入った。

まことも、成長したらこんなこころ暖まる絵を描きたいと思った。

「まこと、おなかが空いたでしょう。お母さんの手作りの、おいしいケーキを召し上がれ。」と母は栗の入ったモンブランケーキと、ミルクティーを出してくれた。

「夕食には、腕によりをかけて、いろ〳〵ごちそうを作りましょう。まことはそれまで、海岸のあたりを散歩していらっしゃい。」と言いながらキッチンの中へ入った。

海岸には人影もなく、波の打ち寄せる音だけが響いていた。

まことは、小学校に入る前の年に、父母と一緒にこの砂浜で、馬に乗せてもらったことを思い出した。

母は乗馬が得意らしく、まことを抱くように前に乗せ、スピードを上げ波打際を走り抜けた。

遠足のとき、偶然に拾った桜貝は、ゆうべ手に持って眠ったものだが、今日も砂浜を何度も行ったり来たりして、探したけれども見つけることは出来なかった。しかし、何個か色の美しい、面白い模様の入った貝がらを拾ったので、母にあげようと思った。

空の色が、群青色に変り、一番星が輝き出したので、畑の中の道を急いだ。

家に着くと母は、「お風呂が湧いているわ、入ってらっしゃい。」とパジャマを手渡してくれた。

浴室の南側の窓からは満月がのぞいており、海面は月の光を受けてキラキラと輝き、潮の香りがただよって来た。

浴槽の中には、花畑に咲いていた、たくさんの花々が浮んでおり、万華鏡を見るようだった。

まことは花の中にどぼんととび込んだ。風呂から上がると、急におなかが空いて来たが、食堂からただよってくるおいしい香りに、まことは誘われるように食卓についた。

夕食の母の手料理は、ほっぺたが落っこちそうで、夢中で口に運んだので、母は「もう少しゆっくりかんで食べなさい。」と言ったが、嬉しそうにまことの食べっぷりを見ていた。デザートにはまっ赤に熟れたいちごが出

て来たが、これもすっかり平らげてしまった。

リビングルームで食休みをしていると、キッチンであと片付けをすませた母が、まことの座っているソファーに並んで腰を下ろし、肩にやさしく手をかけて話出した。

「まことは、いまいじめの問題で悩み、学校を休んでいるようだけど、お母さんはそれを決して責めたりしないわ。

でも、神様は良い人間ばかり作られたわけじゃないの。この世の中は、さまざまな心を持つ人たちが集まり成り立っているのね。と言っても、いま学校で起きているいじめは、じめ〳〵していて救いが無いし、先生方も一生懸命努力を重ねているけれど、一部の学校ではお手上げの状態らしいですもの。

まことは、直ぐ立ち直るとお母さんは信じてますが、自分の将来に役立つと思う、好きなことに自信を持って、あせることなく取り組みなさい。好きな絵を描くのも一つの方法ね。お父さんも、いろ〳〵とアドバイスをしてくれるでしょうが、まことを信じて好きなようにさせているのだと思うわ。

お母さんは、まことが明るく健康に成長するように、いつも天国から見守っていますからね。

もうちょっとだけ話させて。お母さんの一生は短かったけれど、まことのお父さんと結婚して、まことを生んで育てたこと、それから小さい頃より楽しく遊び学んだ、親しい友だちとの出会いや、絵や音楽、たくさんの本、自然に触れて感動したこと、数えあげたらきりがないほどの人たちやものに対し、本当にありがとうと言いたいのよ。

まことも、この世に生を受けたことに感謝することを決して忘れないことね。」と言いながら、見つめる母は、ラファエロの描いた聖母子像のマリア様のように慈愛に満ちていた。

「まこと、今夜は波の音を子守唄にゆっくり眠りなさい。朝食には何が食べたい？大好きなフレンチトーストがいいかな。午後からは、乗馬の予約をしてあるので、お母さんと砂浜を競争しようか。中学生になったのだから、直ぐに上手に乗りこなせるわよ。」と楽しそうに言った。

次の日の午前中は、スケッチブックと色鉛筆を持って花畑に出かけた。まことは咲き乱れる花たちの中で、将来フランスに行った時には、モネの作ったジベルニーの庭に是非出かけようと思っていた。

午後には、母と砂浜へ向った。

波打ちぎわでは、二頭の白馬がおいでおいでをするように、首をふって迎えてくれた。

母が、「さあまこと、馬の背に乗ってごらん、優しい馬を選んだから振りおとされるようなことはないわよ。」とお尻を押して乗せてくれた。

しばらく母と一緒に並んで砂浜を走ってから、母はま

ことに、「まこと、その馬の白いたてがみに、日を閉じてから顔を近づけて、そっと息を吹きかけてごらん。思いがけないことが起きるわよ。」と言った。

その通りにすると、何かふわっと浮き上がるような感じがしたので、日を開くと、大きな白馬の背に乗っており、長い首につかまっていた。眼下にどこまでも続く大海原を南から西の方角へ向い飛んでいるようだった。

間もなく、白馬は白やピンクに咲く水連の広い池の上へ舞い降りた。

池の端には大きな柳の木があって、その下にみどりの色のたいこ橋がかかっており、その橋の上から白い長いひげをつけたおじいさんが、まことたちに声をかけた。

「やあ、まこと君とお母さん、モネの庭へようこそ来てくれました。どうぞ存分にこの素晴らしい庭を見ていってください。

そう〳〵、私の隣にいる可愛いお嬢ちゃんは、私の友人にルノアール君の孫で、セーヌちゃんと言います。まこと君と仲良くなれそうだね。

それから、もう一人、私の後で偉そうにしている日本人は、シンタロー君という画家で、私に日本の浮世絵や、日本のきれいな古い布きれなど、私の大好きなものを持って来てくれた友だちですよ。

まこと君も、将来フランスで絵を学びたいそうだが、絵は上手に描くよりも、楽しみながら自分の感じたままを描くことが大切だと私は信じている。

では、まず私の家で、とびきりおいしいフランス料理をごちそうしましょう。そのあとでジベルニーの庭へ案内しましょう。」とセーヌちゃんの手を引いて歩き出した。

日を覚ますと、枕のそばにはルノアールの孫のセーヌちゃんが描いた庭の花の絵があり、まことは、一緒に楽しく遊んだことを思い出した。

外は雨が降っており、食卓の上の花瓶には南房総の花畑で見たポピーの花がさしてあった。

ラジオからは、アルビノーニのオーボエの曲が流れていた。

まことは、きのう海岸で拾った貝がらを母の鏡台の引出しの中に入れながら、「お母さん、またきっと夢の中で会えるよね。」とつぶやいた。

今朝の湘南の海は、きのうの南房総の海のように、静かな波が打ち寄せていた。

終

心に残った詩歌

石黒修身

本稿は、著名な作者の歌を選んだものではない。むしろ無名に近い歌人、市井の歌詠みや作者不詳の作品もある。

筆者が長年にわたり見聞きしたものの内、みずからの感性に訴え、心に残ったものを選び自分なりの解説を付した。

従って詩歌の類別は雑多で、一貫性はない。

むしろ思い付きで選んだかに見える向もある。中には自らが関与し、或いは身近な人が係ったケースもあり、その点専門歌人の選歌とは違う。文字通り雑多な選択であり、筆者の独善に堕しているかも知れないがより人間臭い素朴な感性の所産としてご理解頂ければ幸いである。

○家々にリラの花咲き札幌の人は楽しく生きてあるらし

吉井勇

吉井勇が札幌に遊んだ際の一首で昭和の初期か、筆者の故郷のことであり、場所はあのあたりかなどと思いは巡る。平和で長閑な情景描写である。

○しんとして巾広き街の大通りとうもろこしの焼くる匂いよ

石川啄木

啄木札幌在住の際の歌であろう。札幌は大通公園を挟んで道路があるが、公園そのものが大通りとなっている。とうもろこしを売る屋台は今も出ており昔ながらの情景がある。勿論周辺の近代化は別として。

○酔いくれば北大寮歌を口ずさみ氷雪の国を称える君は

作者不詳

過年朝日新聞歌壇に載った。作者は君なる友人の振舞を詠んでいる。寮歌は「都ぞ嬾生」か。情緒的だが情景も彷彿とし素朴である。

○その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな　与謝野晶子

青春賛歌であろうが、こゝで言う「その子」は晶子その人であり溌剌としたナルシズムとも言えるが自己顕示に辟易する向きもあるかも知れない。

現代の若い女性をこのような表現で詠む人はいないだろう。時代を越えた若い女性賛歌と言える。別に島崎藤村の詩「まだあげ初めし前髪の林檎のもとに…」を想起させるがこれは別物であろう。

○ひきよせて寄り添うごとく刺ししかば声も立てくずれて伏す　宮柊二（山西省）

日中戦争を詠んだ代表的な歌集に収録の一首。筆者はこの歌に接し、これが宮柊二の作品かと目を疑った。宮は召集され、中国大陸に渡り山西省を中心に転戦した体験の一首であろう。戦争詠で実戦しかも白兵戦の描写であまりにもシリアスで悲しくもある。

○兵たりし者さまよえる風の市白きマフラーをまきゐたり哀し　大野誠夫

戦後風俗の一面である。ついこの前まで兵であった若者が混乱の闇市をさ迷う。特攻隊の生き残りか。おめおめと生きながらえて居ると言う。荒み崩れた投げやりさが濃く感じされ哀れである。

○カサブランカ夜のホールに逢いし彼も戦後のするどき眼（まなこ）をもてり　安藤昭次

作者は、筆者の所属する歌誌「万象」の主宰である。予科練の生き残りで、出版社を営み地域歌壇を主導している壮健な大正生れである。混乱期の巷のナイトクラブの一場面であろう。荒んだ表情を持つ同輩を哀しみの眼で詠んでいる。

○なげけるかはたもだせるかきけはてしなきわだつみの声　作者不詳

日本戦歿学生の手記記念会発行、巻頭の辞である。戦歿学生の手記については多言を要しないが、この巻頭の辞はあまたの戦歿学生の心情を捉え、あまりにも悲痛で、万人の心に訴えるものがある。

○この講義聴くを終りに出でゆくと別れいう学徒わが顔見詰む　窪田空穂

早大の教授であった空穂は徴兵の決まったわが子のような学生たちが、しきりと学ぼうとする姿をいたたまらない気持で詠んでいる。

一方同じ時期に戦意高揚の気運から学生達を戦場に駆り立てる歌を詠んだ教育者も居り、戦後反省懺悔したケースを知っている。

○いのちながらえて還るうつつは想わねど民法総則と言うを求めぬ　吉野昌夫

作者は法学部の学生であったが学業途上で出陣したものか。生還するとは思わないが、学びかけた法学には未練が残る。

民法総則と言う表現に初学徒の法学に対する憧れが潜み哀れである。

○遺品あり岩波文庫『阿部一族』

戦歿学生の遺品にこの一冊があった。

森鴎外の著で、徳川幕府の禁忌に触れ滅亡に追いやられた九州の小藩の悲劇の物語りとされている。学生はこの一冊をどんな思いで読み、残したのだろうか。

○マッチ擦るつかの間の海に霧ふかし身拾つるほどの祖国はありや　寺山修司

短歌の初習者はこの歌に接し何か鮮烈な印象を受ける。寺山はこの歌を彼の体験と言うよりも当時の社会情勢から、希望に満ちた未来よりも足元に忍び寄る虚無の影を見ていたのだろう。それほど深い意味はなく寺山の心情表現と見ても良いのではないか。

○あしを痛む汝が三輪車の影曳きてかく美しき落日に逢う　島田修二

島田が湘南海岸で過した時期の連作「渚の日日」の一首。生来足跛の男児を詠む。この児は修二が後年になっても同居し面倒を見ていた。筆者はカルチャーで暫く修二の講義を受けたが、この児のことは良く話題に出ていた。父親として寂し気ではあったが、愛情と確固たる気概が窺えた。

○今もなお殿と呼ばれることありてこの城下町に吾れ老いにけり。　酒井忠明

酒井氏は庄内藩の十七代当主であり（平成十六年歿）。江戸時代で出羽国庄内（現在の山形県鶴岡）を本拠として、譜代大名の酒井氏が一貫して統治した。今でもこの地域では忠明氏を殿様と呼ぶ。氏は歌人、書家として著名で平成十五年宮中歌会始の召人として披露した一首である。筆者とは歌の会を通して文通し、書簡も数編あり、名物の〝だだちゃ〟を送っていただいたこともある。鶴岡公園に歌碑がある。

○踊り子と言えば朱の櫛天城越え

五所平之助

過年天城に到る路を散策しこの碑に出会った。映画「伊豆の踊子」は五所の監督による。五所が俳人としての認識はなかったが、それだけにこの句は言い得て妙、印象的であった。

○降職を決めたる経緯ありのまま声励ましきざみつつ言う

篠弘

篠は歌壇における重鎮で歌人として評論家として活躍している。歌人としては珍らしく実業に従事し、出版の最前線で編集者として、経営管理職として業務に関与していた。

この職場詠は部下に「降格」を告げる苦悩の心情を詠む。余談だが篠は筆者の短歌を評価し、拙著「余生淡淡」に推挙の帯文を呉れている。また筆者も銀行勤めで管理職からの降格を人事部長から告げられた経験があり、ほろ苦い思い出がよぎる。

○日本人にありし二十年短歌詠むは五十年を越す死ぬまで詠まむ

孤蓬万里（台湾万葉集）

台湾万葉集の編者呉建堂（孤蓬万里）は、日本統治下で、台北帝大医学部で学んだ医師であるが、台北高校在学中に万葉学者犬養孝の影響を受け、「台湾歌壇」を主宰し、台湾人の作歌活動を主導し、台湾人の歌人の歌を集め「台湾万葉集上、下巻を発表している。本人の代表的な一首を挙げた。

○祖国より我を咎める声を聞く帰化せんと旅券取り出せるとき

八幡与三

ブラジルの移民であった作者が帰化する際の懊悩を詠んでいる。グローバル化の世界で昨今の日本人は帰化について如何なる心情を持つかは分らないが、夫々に祖国を変える迷いはあるのだろう。

○送元二使安西（元二の安西に使するを送る）

王維

渭城朝雨浥軽塵　渭城の朝雨軽塵を浥す
客舎青青柳色新　客舎　青青　柳色新たなり
勧君更尽一杯酒　君に勧む　更に尽せ　一杯の酒
西出陽関無故人　西のかた陽関を出づれば故人無からん

陽関（今の甘粛省敦煌の西）は中国古代の重要な関所で、漢代のものとされ今も烽火台が聳え立っている。

この詞は、送別の詞として有名で、筆者も若い頃送別会などで吟じたものである。

こゝで自慢話をひとつ、中国シルクロードの旅の途上、この地に立ち寄り、殿前でこの詞を吟じた感激は忘れられない。

○涼州詞

王翰

葡萄美酒夜光杯　葡萄の美酒夜光の杯
欲飲琵琶馬上催　飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す
酔臥沙場君莫笑　酔ひて沙場の臥す君笑ふこと莫かれ
古来征戦幾人回　古来征戦幾人か回る

涼州とは、中国北西部甘粛省を指す。古くから西国やモンゴルとの戦いが絶えなかったので、「涼州詞」は兵士の歌の代名詞となっている。また葡萄の産地で、トルファンには今も巨大な葡萄溝がある。

また夜光杯は中国西域で産する軟玉をくり抜いた玉杯で筆者もシルクロードの旅の途上買い求め、青磁色の杯に、時に酒を注ぎひとり悦に入っている。

人工知能と職業

大貫陽平

現在、人工知能への関心や期待が高まっており、一部では、将来的には人間の仕事の多くを奪ってしまうのではないかという論もある。こういった論の中でよく聞かれるのが、「単純な仕事は人工知能に取って代わられてしまう」という言葉である。単純な仕事と聞くと、スーパーのレジ係や、倉庫係といったような仕事が思い浮かぶが、果たしてこれらのしごとは、人工知能にとって「単純な仕事」であるのだろうか？本稿では、人工知能にとっての「単純な仕事」について考察し、それを踏まえ、今後仕事の形態がどのように変化していくかを考察する。

最近では、スーパーマーケットなどのレジで自動レジをよく目にするようになった。殆どの無人レジは以下二つの形態のうち、いずれかをとっていることが多い。一、店員が商品のバーコードを読み取り、支払いを機械で行う。二、客が商品のバーコードを読み取り、支払いを機械でおこなう。レジでの作業は、商品のバーコード読み取りと、お金の支払いの二つにわかれている。現在主流の自動レジでは、お金の支払いのみを自動化しており、バーコード読みとり作業は人手で行われている。

これは、バーコードの読み取りという作業が人工知能にとってはかなり困難な作業だからである。スーパーでは多種多様な商品を取り扱っており、商品一つ一つでバーコードの付いている位置は大きく異なる。また、商品ごとに重さや強度が異なることが作業をより困難にしている。もし卵のパッケージを、米袋を扱うような荒々しさで扱ってしまえば、たちまち卵は割れてしまう。

このように、作業対象品が多種多様であるような作業は、人工知能が苦手とする作業である。対して、お金を数えるような極めて単純な作業は、機械が得意とするところであり、自動販売機を筆頭に、昔から実用化されている技術である。

すなわち、現在の自動レジでは、お金を数えるという「単純な仕事」を機械が担い、バーコードを読み取るという「複雑な仕事」を人間が受け持っている。

このスーパーマーケットのレジの例からわかるように、多くの人が単純であると考えている作業であっても、人工知能にとっては極めて困難であるケースが多く存在する。倉庫番の例で言えば、ある商品を運んでくるような作業は機械でも簡単に実現できるが、いくつもの商品を一つの箱に詰めるような、判断力が必要な作業は人工知能には困難である。一例として、インターネット通販の最大手であるアマゾン社は、倉庫内の荷物運びはロボットで行い、商品の箱詰めは人間の手で行っている。

我々が街で目にするような仕事の多くは、人間にとっては単純に感じられても、人工知能にとっては極めて複雑な仕事であることが多い。

例えば、ゴミ拾いという仕事を人工知能を搭載したロボットに行わせることを考える。ロボットは、カメラ（目）でゴミを探し、カメラからの情報をもとに人間を避けながらゴミに接近し、掃除機でゴミを吸い取ることになる。人間にとってはこれほど簡単な仕事はないと思えるが、これは人工知能にとっては困難な仕事である。まず、カメラで撮影された映像をもとに、何がどこにあるのかという情報をコンピュータ上に再構築しなければならない。人間は脳が発達しているので、一目見ればどこにゴミが落ちていて、どこに人がいて、どこを車が走っているのかを簡単に理解できる。対して、人工知能がこれを行うのは極めて難しく、現在、盛んに研究が行われている。何がどこに落ちているのかがわかったら、次はゴミとそうでないものを見分ける必要がある。落ちていたのがちり紙であれば間違いなくゴミであるが、一万円札が落ちていたのなら、落とし物として適切に処理をしなければならない。このように、人工知能にとっては、ゴミを見つけるだけでも、大仕事なのである。

現在の人工知能にとって、街の中で仕事をするというのは極めて困難なことである。

それでは、どんな仕事が人工知能の得意な仕事なのだろうか？　人工知能にとっての単純な仕事とは、コンピュータやインターネット上で完結するような仕事のことである。例えば、インターネット通販での購入履歴をもとに、客に新しい商品を推薦するような仕事である。人工知能は、コンピュータ上に大量に存在する情報を取り扱うのが得意である。先ほど話題に出したインターネット通販のアマゾン社では、全世界で三億人超の顧客が存在している。アマゾン社の人工知能は、三億人分の購買履歴をもとに、商品の推薦作業を行っている。

このような、超大量のデータを分析するという作業は、

人間にとっては不可能に近いのに対して、人工知能にとっては極めて単純であり、人工知能が得意とするところの作業である。アメリカの投資会社では、株価の推移やインターネット上の新聞記事をもとに株取引を行うような人工知能が実用化されている。ゴールドマン・サックス社では、二〇〇〇年には六百人の人間のトレーダーがいた。二〇一七年時にはトレーダーは二人まで削減されており、削減された分は人工知能が置き換えることとなった。また、それを管理するために二百人の技術者が雇われた。

日本やアメリカのスーパーマーケットでは人間が多く働いているのに対し、投資会社では人間が人工知能で置き換えられる事態が進行している。すなわち、人工知能にとっては、投資会社で働くほうが、スーパーマーケットで働くよりも簡単なのである。

以上見てきたように、人工知能にとっての簡単な仕事とは、「街で働くこと」ではなく「コンピュータやインターネット上で完結しているような作業を行うこと」であると言える。後者の例としては、金融業など数字の処理の重要性が高いものや、インターネット通販や動画配信などインターネット上で提供されているサービスである。

今後の展望として、銀行業や証券業などの金融業界では、人工知能による置き換えが進んでいくと考えられる。ただし、人工知能を管理する技術者は必要であるため、完全に無人化されることはありえない。また、人工知能の管理は今後簡単になっていくと考えられるため、人工知能に仕事を取られた人々が、人工知能を管理するようになると考えられる。

また、街での仕事に関しても、人工知能の導入や機械化がすすむと考えられる。スーパーマーケットのレジの例では、人間がバーコードを読み取り、機械がお金を数えているが、このお金を数えるという作業は、人間にとっては手間であるし、ミスが生じやすい部分でもある。対して機械であればお金の数え間違いは発生しない上に、いつだれがどんな商品が購入されたのかというデータの取得が簡単になる。自動レジの導入により、スーパーマーケットでも購入情報を収集できるようになれば、将来的には商品の発注を人工知能で行うなどして、人間の仕事を減らすことが可能になる。街での仕事のうち、極めて単純な部分を人工知能や機械が行えるようになれば、人間の負担が軽減され、より働きやすくなると考えられる。

また、ロバのように、人間に従属するような人工知能搭載ロボットの開発も進められている。例えば、自動販売機の商品補充は、缶ジュースがとても重いことから、極めて体力を消耗する重労働として知られている。もし、

缶ジュースを背負ってくれるような荷物運びロボットがいれば、自動販売機の商品補充の仕事の負担も大きく軽減される。人間にとって、自販機の場所がどこかを理解してそこまで歩いて行くのは極めて楽な仕事であるが、重い缶ジュースを持っていくのは極めて重労働である。対して、ロボットにとって重い缶ジュースを持つのは苦ではないが、自販機の場所を探すのは大変である。この荷物運びロボットの例では、人間とロボットが、互いの苦手なことを補い合っている。

現在主流の人工知能が、一人で街で働くことは極めて困難であるが、人間の助けがあれば、街で働くことも十分に可能である。また、金融業やインターネット上のサービスでは、人工知能が人間の仕事を取ることが考えられるが、人工知能を管理するという新たな仕事が発生する。

すなわち、これからの社会においては、人間と人工知能の協力が重要である。人工知能やそれを搭載したロボットは、人間が苦手とする作業を肩代わりしてくれる可能性を秘めているが、ある程度高度な判断を要求される局面では、人間の助けを必要とする。また、人間がそれらを維持管理する必要性もある。

このことから、今後社会で働く人間に求められるのは、人工知能という新しい道具を使いこなす能力である。現在の人工知能は極めて扱いが難しいが、今後、より扱いやすくなるであろう。コンピュータで仕事をする人がその仕組みを完全には理解していないのと同様に、将来、人工知能を使う人がその仕組みを完全に理解する必要はない。新しい道具を拒否せず、柔軟性を持ってそれを使いこなそうとする姿勢こそが重要であると考えている。

我、大日本報徳社員なり

浅野博文

一、作輟する事、大禁忌なり

先月（八月）二十五日に、第百四十九号まんじ合評会に初参加した。水道橋の学士会館が会場といふことで、その様な名誉な場所への参加が許され、同人の一人として、各分野で活躍される先輩方の末席に列することが出来たのは、大きな喜びであつた。

其々、生きる場所は異なる。しかし各々が、みずからの天命を知り、それに安住して、何の求むる所もなく、何の焦りもない。終始穏やかな雰囲気の中に、「天命を知る、なんぞ疑はむ」を肌で感じた。合評会終了後、当日の雰囲気を思ひ起こし、再度、楽しみや難しさを感じながら読了した同人各位の文章と重ね合はせて、そのことを確信した。

『まんじ』に寄稿する同人各位は、共通して二宮尊徳先生の報徳の教を喜び、師の事績をうやまつてゐる（大日本報徳社の関係者であること）。勤倹推譲。同人誌の世界でも類を見ない発行回数を誇るのは、政治的立場や宗教的立場を超へた普遍的価値観が、『まんじ』の根底に流れるからではないか。

廃刊中絶の多い同人誌の世界、『まんじ』は歴史の風雪に耐へ、今回で百五十号である。継続するためには同人各位の意志がなければならない。長期連載執筆の豊富さは、意志のある所に、必ず道はあることの顕著な例であらう。

「人能ク道ヲ弘ム、道、人ヲ弘ムルニ非ザルナリ」
（『論語』衛霊公第十五）

正に、積み重ねた数字とは、積小為大の精華である。一人、その歴史を振り返り、その意義に思ひを馳せ、寄稿を許されたおのれの幸運を顧る時、感動と感謝の余り『まんじ』を手にしたまま黙々として佇立する。

「文は人なり」。みずからの文章も、先輩方の様に他人が読んで、素直にその中に生きる人間に触れることが出来る様なものでありたいと強く願ふ。

天地自然と融和せる人生の美しさや懐かしさ、朋友との交はりの貴さ、そして、広く知識を求め、或いは物事を徹底的に深堀りして、実地に応用し、人の世に処す。最期まで「文明の老人」（渋沢栄一の言葉）として国家社会に貢献せんとする、強靭な意志と高き理想に触れられるのは、人の至福である。信仰と実行、学びと行動、この合致を先輩方に習ひ、小生も追求してゆかなければならない。

昔日の吉田松陰先生は、佐久間象山翁の教へを受けた時、

「学問ノ大禁忌ハ、作輟（さくてつ）ナリ。或ハ作（な）シ、或ハ輟（や）メル事アリテハ、遂ニ成就スル事ナシ。」
『講孟箚記』

として、作輟する事、大禁忌なりと訓戒せられたのを、今に忘れない、と附記せられた。

みずからが、如何に日常の瑣事の中で、喜びや悲しみの感懐に深刻となり、その上で謙虚にして倦まず撓まざるの努力を以て、（日常の瑣事に）愛情を育んで行けるかが重要である。

『まんじ』の同人として、そのことを「作輟する事、大禁忌なり」である。

二、立志と天禄

合評会には、もつと早く参加すればよかつたと、第百四十九号のそれに参加して思つたのは正直な気持ちである。

ただ、どうしてもその前に、みずからの人生を振り返り、四十を手前にして、過去の失敗や後悔から何を反省し、何を今後生きて行く上での指針とすべきかを自分なりに明確に示したいと思つたので、前号まで計四回にわたり拙ひながらも、みずからの歴史観と、それに連なる人生観を文章にした。

一体、歴史とは何か。平泉澄博士は「高き精神作用の所産であり、人格あつて初めて存在し、自覚あつて初めて生ずるもの」（『国史学の骨髄』）であると説かれた。人間が万物の霊長たる所以は、その人格（徳性）を具備する点であるが、同時に人の志（自覚）が立たなければ、歴史は存在しないといふことである。

「吾、十有五ニシテ学ニ志ス」（『論語』為政）で有名な孔子の志学とは、立志を意味する。一生の目標が決まり、方向が定まつたこと、生涯が一定の軌道に乗つたことにより、後世偉大なる哲人として、キリストや釈迦と相並んで、広く長く、人々の心に大きな感銘、深い影響

を与へたことは周知である。

果して、宗教的偉人と称され、或ひは道徳的人傑と称せられた人の義侠的大徳行の源には、博愛の心の豊かさと同情心の強さがあつたのは言ふまでもないが、これら崇高なる人格に「生命を与へて歴史の殿堂に迎ふるものは、現代人の認識の力」（『国史学の骨髄』）に他ならない。故に平泉博士は、「歴史は復活なり」と喝破された。

そのことは個人のみならず、民族にあつても同様である。民族全体の立志とは国家建設（建国）である。人は人のために生きてこそ人であるが、それは通常、精神と肉体の両輪が健全であつて成し得る。今日、尚多くの歴史学者（主として考古学者）は、進化論による科学的観点から猿と人を同一のものとするが、今日精神的な部分で、人と猿に共通点を見出すことは出来ない。

人の為す事業とは、みずからの見識によりて立ち、おのれの責任に於いて行く道を選ぶことにより造成されてきた。そして、造成したものを継承発展させるために、人は、天禄を保つてきた。天禄とは即ち、天のたまものから出たものである。

故に、二宮尊徳先生は、

「天禄を尊んで、その恩を忘れないものは困窮の憂ひがない。反対に天禄を卑んで、その恩を忘れる者は、困窮の憂ひを免れないのである。思ふに、天下の政治行政も、神儒仏の三教も、天禄を保つのが主旨である。」注(1)

恩を忘れるとは歴史を忘れることである。恩のない所に歴史はない。それは人にのみある。真に歴史の観点から言へば、立志や天禄の概念などない猿に、本来歴史はないのである。

往古、意志の統一がなく、共通の責任もない混沌とした状態であつた中、神武天皇による国家建設とは、一つの目標の下に団結し、一つの意志によりて統一せられ、他の民族に対して責任を持つ様になつたことを意味する。建国こそ立志たる所以である。

明治五年（一八七二）、讖緯（しんい）説による年立てがなされてゐる日本書紀に於いて、天皇が畝傍橿原宮にて御即位された日（紀元前六百六十年二月十一日）を、西暦に換算して皇紀は定められた（今年は皇紀二千六百七十八年）。日本の歴史とは、この日を起点とする。

明治天皇御製

橿原のとほつみおやの宮柱
たてそめしより国はうごかず

歴史は即ち復活である。「我らが之（歴史）を組織するのは、自らの意志により、信仰による。」（『国史学の骨髄』）その意味に於いて、「歴史は単なる知的所産ではない。歴史の認識は知的活動の外に情意の活動を必要」

（『国史学の骨髄』）としなければならない。

国家の基本として、最も大切なるものは、君臣の関係であるが、君臣の関係が乱れる時は、国家は転覆する。社会や組織に於ける上下関係も同様で、自然界に於ける天地の関係と同じであつて、逆さまに置かれる時は、大混乱を生じ、破滅をきたす。

神武天皇建国より、大化改新、建武中興、明治維新から今日に至る日本の歴史とは、立志を忘れず、天禄を尊び、幾多の危機に際してそれを継承発展させて来た、復古と革新のくりかへしであつた。

三、恩を知り徳に報ゆ

今日は、全世界を見渡し、支配する価値観といふ意味で、「戦乱」の言葉は薄れた。しかしそれに代はつたのは、労せずして利をむさぼり、与へられねば腕づくで取り合ひ、しかも得た物は濫費して少しも勿体ないとは思はない「物欲」である。

特に、現代のネット社会は物欲を強く刺激し、その威力の前には、教育も無力であり、聖も俗もない様だ。庫裡が立派で、外車が並び、本堂が貧弱な寺も珍しくなくなつた。最近の富岡八幡宮での財産相続を因縁とする内輪もめの挙句の殺傷事件に至つては、国家の護持を念願とすべき神道の本質は、完全に忘れ去られてゐる。神職とは何よりも神の実在を意識して、「幽界との交通」（平泉澄博士）を本務としなければならないはずである。

遠方より足を運び、聖地を巡礼するその心は、世に充満する悪徳の多きに堪へ兼ねて詣でるのが普通である。たしかに、世に欲望を充たす娯楽は溢れかえつてゐるが、聖地巡礼には、人の心を養ひ、うるほひを持たせ、自然と先人とに対する畏敬と感謝の念を生ぜしめる真の力がある。しかし、そこにも悪徳が満ちてゐるならば、人はいづこに逃避すればよいのか。それでは、健全なるものが人の注意をひかず、悪徳こそ世に栄えるのも諾ふことである。

但し、物欲を忌み嫌ふからと言つて、世棄人になつてよいわけはない。人は一人では生きて行けない。人が生きるためには、どうしても生き甲斐を必要としなければならないからだ。孤立した人に決して生き甲斐はない。そして生き甲斐の根本こそ人間関係である。人間関係の基本が「恩を知り徳に報ゆ」（報徳思想に於ける推譲）ことである点は言ふまでもない。

『礼記』の中庸に、「誠者天之道也、誠之者人之道也」とある。環境破壊・少子高齢化・内乱紛争・貿易摩擦等、世界規模で、天の誠を人の道とすることを忘却してゐる。

日本人は、一人一国の利益のみを主張せずに、政治経済を道徳と一致せしめて、真正なる世界の平和を招来する道を行かなければならない。

この道は「我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ共ニ遵守スベキ所、之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ。」と教育勅語に示される如く、時の古今、国の内外を問はず、これを行ひて謬まり悖る（反する）ことはない。実に、普遍的永劫的真理である。

四、天命を知る

現在、上京して十年以上経つ、上京以前は、自衛官として広島で勤務してゐた。入隊して三ヶ月後に、自衛隊病院での検査で、橋本病（甲状腺機能低下症）であることが判明した。その後退官も勧められたが、志を得ないまま退くといふ選択肢は、自分の中には全く無かつたので、とにかく体を鍛へることに専念した。その甲斐あつて、部隊の銃剣道要員や武装走の大会にも参加出来るまでになつた。

しかし、部隊として一自衛官として、その真価が最も問はれるのが演習である。演習とは実戦を想定した訓練である。そして演習には戦場が常にそうである様に、飢ゑ・不眠・寒暑の中で職務を完遂しなくてはならない。特に自分は、毎日薬が手放せなくなつたことや元々の身体の弱さを、訓練や演習の中で散々思ひ知らされ、情けないことではあるが演習とはいつも恐怖であつた。

人の身体の強さとは、生まれ持った部分が大きいが、それが無い人間は戦場で死ぬしかない。自衛官として本務を全うする以上、平素の肉体の鍛錬は言ふまでもなく、それ以上に心を養ふことに細心の注意を払はねばならなかつた。

当時、卓越した人格を持つ哲人や忠臣義士を巧みに描いた、山岡荘八氏の歴史小説を愛読書としてゐたのは其れ故である。

そして、明治維新の志士、高杉晋作とその奇兵隊士が眠る桜山招魂社の墓地を訪れたのも、氏の著作『高杉晋作』に感銘を受けたからであり、自衛官として二年目を過ぎた頃であつたかと思ふ。故人が活躍した年代が当時の自分と近かつた影響もあつた。

猛烈ノ奇兵、何ノ志ス所ゾ、一死ヲ将(モ)ツテ、邦家ニ報イント要ス、尤モ欣ブ名ヲ遂ゲ功成リテ後、共ニ弔魂場上ノ花ト作(な)ランヲ

弔ラハル人ニ入ルベキ身ナリシニ、弔フ人トナルゾハズカシ

謹弔

霊魂

故奇兵隊士東行狂生

松下村塾門下で吉田松陰先生の尊皇攘夷論を実践すべく、武士から農民に至る迄、身分の高下に拘らずに編成

した奇兵隊を率いて、明治維新に向けて奔走し、散華した隊士に対する高杉晋作の弔詞碑の内容である。

上下の分・長幼の序を最も重んずる自衛隊の中で、自己の本質や職務遂行の意義を見失ひがちになつてゐた自分に、階級を超へ、おのれ一身を投げ出して、王政維新の成就に邁進した隊士の英姿には胸をうつものがあつた。丁度、墓地の中に佇む自分の姿を観てゐた、年配の人（宮司さんか？）が、神妙な顔で説明文を手渡してくれたことも、正に弔詞碑が、みずからに対する神勅（天命）であつたと、今省みて思ふ。

しかし実際は、自己の本質や職務遂行の意義を忘れ去つたまま、演習に向けての用意や準備も周到とは程遠く、演習中は同じ失敗をくりかへした。日常の安易なことに煩わされ、簡単なことを面倒くさがり、精神的に孤独を感じることが増へ、病気や身体の弱さを出来ないことへの言い訳としてしまい、結局四年で依願退官してしまつた。

理由はどうあれ、男が確信を以て、みずからの職務を全ふすると、一度は誓ひを立てたにも拘はらず、周りの上官や同僚、後輩の信頼や恩義を、平気で破り捨ててしまつた。自分で自分の心を欺き、のほほんとして生き恥を曝す。普通の人情では到底出来はしないところである。

「天網恢々、疎にして漏らさず」とは老子の言葉である。『神皇正統記』（北畠親房著）にも、「善悪の報、影響(ひびき)の如し」とある。一生の実績、隠すことも、消すことも出来るものではなく、未だ時折うなされるのは天罰に他ならない。心ある人（自衛官）を欺くことなどは絶対に出来ないのである。その人たち（自衛官）の記憶には、永遠に不誠実で卑怯者としか残らない。

本来、この世界に何事かを成さんがために人は生まれて来た。人は人のために生きてこそ人である。そして人の真価は、その人の事業が、如何に国家社会を益したかどうかにより決する。

今、縁あつて新聞社直営店の管理業務に就いてゐる。読者の高齢化と無読者の増加に加へて、産業として国内に限られるので苦しい業界ではあるが、やはり新聞が好きである気持に変はりはない。紙のぬくもりは人情を表し、インクのかほりは知的好奇心を刺す。飛耳長目の言葉は新聞に最もよく似合ふ。正に社会の木鐸である。天命を知る、なんぞ疑はむ。

この先の人生、過去の分析と評論だけで嘆息して、徳に報いることなく終ることは、断じて許されない。

五、孝は百行の本

修身斎家治国平天下。この儒教が説く所の物事の順序は、人の世に於ける古今一貫する道理である。そして、これを実行する上で、漢書（シナの古典籍）渡来の古代

より日本人が、儒教に求め、且つ負はせてきた道徳の最たる徳目こそ孝道であつた。

かつて聖徳太子が、歴史の編修に力を致されたのは、国家の基盤を支へるのは法律ではなく道徳であるとの御認識に基づかれてのことであつたのは、拙稿の中で何度も、くりかへして述べて来たが、歴史の第一歩こそ実に親子の間に存在する。

愛情も礼儀も全ては親子に始まる。「孝は百行の本」であることは今更言ふまでもない。親子の関係が正常を失ひ、その間の道徳が破られた時には、一切の道徳が崩れて、世の中が大混乱に陥るの外はないことは、応仁の乱より後、下剋上の言葉に象徴される戦国紛乱、群雄割拠の無統制を『応仁記』は記す。

「強キハ弱キヲ伐チ、賤シキハ尊キヲ凌グ、臣ソノ君ヲ殺シ、子ソノ父ヲ殺ス、上下カヘツテ転倒シテ、猿ノカムガ如ク、犬ノイガムガ如ク」

即ち、当時に於いては、官武より庶民に至るまで、道徳がなく、信義がなく、義烈がなく、情愛のない、無秩序の世界であつた。

事実、微賤の出である北條早雲や斉藤道三は君臣の道を破つた下剋上大名として有名であるし、その道三が息子の義竜に殺され、戦国の梟雄武田信玄が実父信虎を追放したのは周知の歴史である。何よりも足利幕府の来歴自体が、後醍醐天皇の建武の中興政治に途中から背いて、朝廷とは別に武力を以て北朝を擁立し、征夷大将軍に任命せられたものであつた。

天下国家を盗む大盗が政事を掌る故に、財貨を盗む小賊もまた、日に起こりて止むことがないのである。ただ眼前の物に対する私利私欲、それだけが価値の最上であつた。

しかし、歴史に於いては、それが唯だ破壊的作用をするだけであつて、継承及び発展には微塵も貢献をすることが出来ないのは、明らかである。

江戸時代後期、財政難に苦しむ諸藩の復興事業に、徒手空拳を以て務めてゐた二宮尊徳先生が分度を重んじたのも、

「天下の命令があれば身を捨て家を捨て、百萬の敵たりとも一歩もひかず、これに当つて奮戦をつくし、忠孝の大義を踏まんためではないか」注(2)

との一点に他ならなかつた。祖国の痩せ地を転じて沃土となし、衰貧転じて富栄をなさんとしたのも、畢竟、忠孝の大義を踏まんがためであつた。そして、

「人道は情欲を制して成り立つ、人道といふものは人造のものだ。だから自然に行はれる所の天理とは別のものなのだ。天理とは春は生じ、秋は枯れ、火は乾いた方に燃え、水は低い方に流れるといふ様に、昼も夜もめぐり動いて萬古変はらないものをいふ。然るに人道は、日々夜々に人力を尽くし、保護をして成り立つものだ。だから天道の自然にまかせれば、たちまち廃れて行はれない。それ故、情欲のままにしてゐては、人道は立たないのだ。」注(3)

と喝破する如く、一生を通じて、報徳（至誠・勤労・分度・推譲）の道を踏み行はれた。

戦国乱世を支配する所の、無道にして、不信であり、非情である所の、「天下ハ破レバ破レヨ、世間ハ滅ベバ滅ビヨ」（『応仁記』）に任せれば、歴史は断層を生じ、廃絶を招き、遂には前後相承の一貫性は無くなり、父祖の精神は雲散霧消する。

されば今世、「天子ヨリ以テ庶人ニ至ルマデ、壱ニ此レ皆、身ヲ修ムルヲ以テ本ト為ス」（『大学』礼記）の至言に鑑み、世の非行悪徳、不安動揺を鎮めんと願ふならば、政治法律経済教育のすべてに亘り、孝は百行の本、この一点の理に深刻にならねばならない。

みずからの人生に於いては、おのれの不孝を省みて、そのふるまいを慎むことが殆ど無かつた。数多の失敗を重ねてきた原因がここにある。

「孝は百行の本」。この言葉は、従前に数倍する深刻と崇高神厳とを以て、今日みずからの胸を打つのである。

六、我、大日本報徳社員なり

かつて、古書店にて渋沢栄一翁の『論語と算盤』を購入したのは、上京して間もない時期であつた。そして、その中で二宮尊徳翁の事績を知り、踵を接いで三戸岡道夫先生の『二宮金次郎の一生』（栄光出版社）を書店にて求めた。実際、その内容には大いに感銘を受け、本文を何か所も筆写した。

江戸幕藩体制の限界にあつて、ほとんど独力に等しい六百余村の農村復興事業を成功に導いた事実を、わかりやすい日本語と豊富な史料を駆使して記された良書であつた。

単に実証主義を讃美し、象牙の塔を誇る学者本ではなく、数字に明るい銀行家としての視点と、教員経験者として絶へず道徳を意識した筆致、そして最も重要なのが、全体を通して、人間そのものに対する「やさしさ」や「ぬくもり」があつた。

道義の根本は、人の悲しみがわかるといふことである。仁愛、慈悲。仮令専門の歴史学者であつても、この点が感じられない者を、小生は本物とは認めない。筆者の名文を掲げることを、ここでは割愛するが、『二宮金次郎の一生』を原案として来年映画『地上の星　二宮金次郎伝』が公開されることは、本物であることの証左である。

内容に対する感動と、この様な良書を世に送り出した筆者の誠実な人柄、今世、「此頃都ニハヤル物　夜討　強盗　謀（ニセ）綸旨」と二条河原の落書に歌はれた乱世と同様、天皇の綸旨さへも偽物が出回つた昔時と重なる故に、本

物に触れられた喜びの念を禁じ得なかつた。

読了後に参拝した小田原の報徳二宮神社に建つ「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は戯言である」と刻まれた文言は、『二宮金次郎の一生』を圧縮したそれであつた。賢者の教へ、哲人の道は、時代の変化、流行の変遷に関係なく、千古不滅の光を放つてゐる。

「萬物は一つもその一所に止まることはない。それは四季の循環するのと同様である。人の場合も富むときは必ず奢りに移り、奢るときは貧に移り、貧が極まれば富におもむくといふのが、自然の道である」注(4)

貧富の循環が富に赴いてゐる時は、仮令天命を疑ひ、恩を忘れ、これに報いることを心掛けなくても、風穏やかにして波静かである。問題はそれが極まつた時である。貧へ赴く時、如何なる善事積善であつても簡単に報われず、最悪命を落とす場合もある。

故に、人は家庭を持ち、児孫に可能性として受け継がねばならない。我が国の万世一系の國體、或は文化芸術の伝承継承といふ事実は、断絶を克服したといふことの証明である。同時に日本歴史は、その克服のために、個人の自覚と意志と努力とが存在したことを、波瀾万丈の中に、厳しくかつ明らかに示してゐる。

人が児孫に込めた祈りと努力とは、必ずその生命に可能性として受け継がれる。昔時の家に於いて子供の数が多かつたのも、その願ひの表れであつた。しかし人が、忠孝の道を知らず、その可能性を抹殺した時、そこに家の断絶、国家の革命がある。

人間生活に不可欠の衣食住の全てが、田畠山林（土地）より産み出されるのは道理である。いにしへより、その土地の神様を神社に祭り、その土地を開いて米穀を増産して、物産が繁殖するように努めることにより、商工業の繁栄を促し、絶へず日本国の富有に務めてきた先祖の霊魂を寺院に安置してきたのは、正に子孫も農工商の道の精勤を先祖に誓ふことにより、忠孝の大義を踏まんとする信仰的自覚の伝承に他ならなかつた。

『延喜式』祝詞にある如く、

「高天原ニ神留リ坐ス皇親神漏岐神漏美ノ命以チテ、八百萬神等ヲ神集へニ集へ賜ヒ、神議リニ議リ賜ヒテ、我ガ皇御孫命ハ、豊葦原水穂国ヲ、安国ト平ケク知ロシ食セト、事依ザシマツリキ」

と天つ神（高天原の神）の命で、特にその主神である天照大神より天壌無窮の神勅と三種の神器を授けられた皇孫瓊瓊杵尊は御供の神々と共に、高天原より御降臨され、瓊瓊杵尊直系の御子孫である神武天皇により、民族の統一、国家の建設は果たされた。

神道が天地開闢の大道であつて、豊葦原を瑞穂の国、安国と治めたまひし道であるとして、二宮尊徳先生も「本来豊葦原を瑞穂の国とし、漂へる国を安国と固めなす道とする大道を知る者が貧窮に陥る道理はない」『二宮翁夜話』（上）として、日本の歴史と代々その教を継承してきた父祖の功業に思ひを致し、その道の重要性を大いに説かれた。

畢竟日本人は、祖国の歴史に流れる精神（神道）から忠と孝（道徳）を知り、尊皇愛国に至つたのだ。

『古事記』『日本書紀』が示す様に、我が国の君臣関係とは天孫降臨時より観られ、国民は万世一系の天皇を奉戴し、歴代の天皇は至仁（至高の仁愛）の徳を垂れ給はれた。

それは、家系図を遡れば日本国民とは、いづれの時代にあつても階級栄華を超越した存在である皇室の赤子であり、皇室の分家や別家であつたことに因む。忠と孝が一本である我が国の大きな特色である。

日本人が、これらの事実を省みて心眼を開けば、他人に対するに「つつしみ」と「うやまひ」以外無いのである。萬物循環の定則に厳粛となり、天命を信じ、恩を知り、これに報ゆることに全力を尽くさなければならない。

朝ニ恩遇ヲ蒙リタ ニ焚院セラル
人生ノ浮沈ハ晦明ニ似タリ
縦ヒ光ヲ回ラサズトモ葵ハ日ニ向フ
若シ運ヲ開ク無クトモ意ハ誠ヲ推サン
洛陽ノ知己皆鬼ト為リ
南嶼ノ俘囚独リ生ヲ偸ム

生死何ゾ疑ハン天ノ附与ナルヲ
願ハクハ魂魄ヲ留メテ皇城ヲ護ラン

西郷隆盛『獄中感有』

沖永良部島に流され、牢居の身となつた若き大西郷の詠まれた右の漢詩にも顕れてゐる様に、その心には深く「敬天愛人」が刻まれた。その後官軍の責任者として、倒幕維新に邁進する中、勝者の奢り無く、勝安房との相互信頼尊敬による和解を以て、江戸八百八町と幾万の生命を救ひ、明治近代国家建設に向けて、歴史的な役割を果たした。

そして、ほぼ同時期に六百余村の農村復興を成し遂げられた二宮尊徳先生が、君命により小田原藩大久保家の分家である、宇津氏領下野国桜町の財政再建事業さなかの、成田山での志願は以下の通りである。

禍を転じて福となし、凶を転じて吉となし、借財を転じて無借となし、荒地を転じて開田となし、痩せ地を転じて沃土となし、貧窮を転じて富栄となし、困窮を転じて安楽となし、一切人民の悪しき所を除き、一切人民の好む所、悉くこれを与へん。

水垢離と断食の厳しき日々を経て満願、遂に「一円観」が心に刻まれた。

世の中のことは何事も、禍福、幸災など、互いに対立するものは、いずれもそれぞれ円の半分である。それに対する別の半円と合わせて、一円となるわけである。そ

して物事の相対性を一円観として説くならば、復興事業を妨害する人間は必ず悪人で、悪人には制裁を加へる必要ありと断ずるのではなく、反対者には反対の理由があり、反対者が出ることは、まだ自分の誠意が足りず、反対させる原因が自分の方にもあることに心を致さねばならない。

物事に対する「つつしみ」と「うやまひ」と言ふ意味で「一円観」と「敬天愛人」の両先哲は、同じ価値観である。加へてそれは、人の世に於ける普遍的価値観であると信ずる。

我、終生、大日本報徳社員なり。

『西郷南洲遺訓』には、

「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」

とあるが、大西郷をして、その一生に唯一「尊徳に師なし」と言はしめた報徳の訓に生きることが、みずからの柱であり、凡愚の頼みとする所である。

注(1)〔一六六〕天禄を保つ
『二宮先生語録』(上)現代版報徳全書
斎藤高行著・佐々井典比古訳注
注(2)三、細川侯の大坂勤務とその道の説示
『報徳記』(下)現代版報徳全書
富田高慶著・佐々井典比古訳注
注(3)〔四八〕人道は情欲を制して成り立つ
『二宮翁夜話』(上)現代版報徳全書
福住正兄著・佐々井典比古訳注
注(4)一、下館侯、興国安民の良法を先生に依頼する
『報徳記』(下)現代版報徳全書
富田高慶著・佐々井典比古訳注

参考文献

平泉澄博士著
『少年日本史』　皇學館大學出版部
『山　彦』　勉誠出版
谷省吾著
『神道原論』　皇學館大學出版部
杉浦重剛著・所功解説
『昭和天皇の学ばれた教育勅語』　勉誠出版
三戸岡道夫著
『親子で学びたい二宮金次郎伝』　致知出版社

現代お茶事情

横山正義

まえがき

私の住む家のまわりは茶畑に囲まれています。「一葉十人（ひとはせんにん）」と子供のころから、家人から言われました。それはお茶の葉、一葉は千人の神様が飲むということです。一葉一葉を大切に扱えという意味です。

贈り物としても、喜ばれる物でした。薬効があるので、大切貴重なものという認識でした。十年ほど前、二〇一〇年頃、生産者の生葉の価格は手摘みのお茶は生葉で二、〇〇〇円／キロ、早いときの機械刈りで、五～六〇〇円遅くても、四〇〇円でしたが、現在は二～一〇〇円と聞きますが、輸出が増大し、農家の規模が拡大され、三町歩ほどになって、大型機械が導入されています。

しかし、最近新聞報道でお茶に含まれるカフェインの過剰摂取で薬害があることを、知りました。

新聞報道で、茶葉に含まれるカフェインの過剰摂取で死者が出た、子供の脳の発育に悪影響があるなど報道されました。

外国、世界保健機構（ＷＨＯ）、オーストラリア保健。食品安全局、英国食品基準局、カナダ保健省、カナダ保健省、韓国食品医療品安全庁（ＫＦＤＡ）、ニュージーランド、オーストラリア保健・食品安全局などで、カフェイン含有飲料の量規制が行われています。日本では農林水産省、厚生労働省、東京都福祉保健局等で忠告を出しています。

一、**中日新聞**二〇一八・八・三一

＊エナジー飲料未成年者禁止に　英政府　カフェイン大量摂取防止　ロンドン＝時事

英政府は三十日、未成年によるエナジードリンクの購入を禁止する方針を発表した。飲料に含まれるカフェインなどの大量摂取による健康被害を防ぐのが狙い。エナ

ジードリンクはすでにリトアニアで未成年の購入が禁止されており、今後、世界的にひろがるかが注目される。エナジードリンクの飲みすぎは睡眠障害や肥満、頭痛・胃痛・異常な行動などにつながる恐れがあると指摘されている。英政府は購入を禁止する年齢を酒やタバコと同様に十八歳未満とするか、十六歳未満とするかで意見の公募を開始した。公募結果を踏まえて詳細をつめ、議会に法案を提出する。一部の大手スーパーはすでに十六歳未満の販売を控えている。

二、**中日新聞**二〇一八・五・二九

＊子供にカフェイン注意

「睡眠を妨げるだけでなく、脳の発育にも影響する」と専門家。

睡眠、脳の発育に影響する恐れがある。カフェインを研究する元東京福祉大教授の栗原久さんは「子供が大量に摂取すると不安や、頭痛、疲労感といった離脱症状が生じるリスクが高まる」

「特に知性や理性をつかさどる前頭前野に影響を与える」四～六歳は一日に二五ミリグラム以下。七～十二歳の学童期は五〇ミリグラム以下にするよう勧めている。」

「受験勉強のため眠気を覚まそうと飲む子がいる。前頭前野の発達は二〇歳ごろまで続くので、避けてほしい」

カフェインはコーヒー、紅茶、ココア、コーラなどに含まれる。

飲み物に含まれるカフェイン量（単位はミリグラム）

玉露	一六〇
コーヒー	六〇
紅茶	三〇
ウーロン茶	二〇
煎茶	二〇
ほうじ茶	二〇
番茶	一〇
玄米茶	一〇

飲料一〇〇グラム当たりの数値。「日本食品標準成分表二〇一五年版（七訂）」から抜粋。ココアとコーラの飲料は世界保健機構（ＷＨＯ）が「紅茶と同程度」と説明。

母子の健康支援にとりくむ「ラブテリ」（東京）代表理事細川モモさんコメント。

「気を付けたい成分は糖分とカフェイン。糖分は肥満につながり、カフェインは夜中に目が覚めることもある」

三、**日本経済新聞**二〇一五・一二・二二

＊カフェイン中毒死、国内で二〇代男性。

福岡大久保教授発表

カフェインの致死量3グラム

過去カフェイン血中濃度が１５０～１７０マイクログラムを超えると死亡例が報告されている。

久保教授が警察の依頼で解剖したところ、死亡男性のカフェイン血中濃度は一ミリリットルあたり一八一マイ

クログラムであった。

四、**日本経済新聞**二〇一六・一・一六

カフェインを取りすぎると血中濃度が急激に跳ね上がり、不眠や吐き気、嘔吐、震え心拍数の増加などを招くことがある。精神面でも落ちつきがなくなり、強い不安感、焦燥感を抱くようになるとされる。耐性、体格などで個人差。

一度に複数の飲み物は過剰の恐れ。メカニズムは解明途上、中毒対症療法のみ。

五、**厚生労働省レポート**

食品に含まれるカフェインの過剰摂取についてＱ＆Ａ～カフェインの過剰摂取に注意しましょう。

カフェインを過剰に摂取した場合には、中枢神経系の刺激による眩暈、心拍数の増加、興奮、不安、震え、不眠症、下痢、吐き気唐の健康被害をもたらすことがあります。

＊世界保健機構（ＷＨＯ）は二〇〇一年にカフェインは胎児への影響はまだ確定していない、と言いつつも、お茶、ココア、コーラタイプの飲料はほぼ同程度のカフェインを含み、コーヒーには、これらの約二倍のカフェインが含まれている。このため、妊婦はコーヒーの摂取量を一日三～四杯までにすべきとされています。

＊英国食品基準庁（ＦＳＡ）二〇〇八（平成二十年）に、妊婦のカフェイン摂取に関して新たな助言を公表してい

ます。妊婦がカフェインをとりすぎることにより出生児が低体重となり、将来の健康リスクが高くなるとし、以前は三〇〇ミリグラムを上限することが望ましいとしていましたが、新たな助言においては、妊娠した女性にたいして一日あたりカフェイン摂取量を二〇〇ミリグラム（コーヒーをマグカップで2杯程度）、に制限するように求めています。

また、高濃度のカフェインは自然流産を引き起こす可能性があることを示す証拠があるといいます。

＊カナダ保健省（ＨＣ）は二〇一〇年（平成二十二年）に、カフェイン摂取について注意喚起を行いました。

少量のカフェイン摂取はほとんどのカナダ人にとって懸念はないが、過剰摂取は不眠症、頭痛、イライラ感、脱水症、緊張感を引き起こすため、特に子供や妊婦、授乳中の女性は注意すること。健康な成人は最大四〇〇ミリグラム／日、コーヒーをマグカップ（二三七ミリリットル）入りで約三杯までとする。

カフェインの影響がより大きい妊婦や授乳中、あるいは妊娠を予定している女性は最大三〇〇ミリグラム／日（マグカップで約二杯）までとする。

子供はカフェインに対する感受性が高いため、四～六歳の子供は最大四五ミリグラム／日、七～九歳の子供は最大六二、五ミリグラム／日、一〇～一二才の子供は最大八五ミリグラム／日（三五五ミリリットル入り缶コー

ラ一～二本に相当）までとする。

一三歳以上の青少年については、データが不十分なため、確定した勧告は作成しないが、一日当たり、二、五ミリグラム／キログラム以上のカフェインを摂取しないこと。

カフェインを一生摂取し続けたとしても、健康に悪影響が生じないと推定される一日当たりの摂取許容量については個人差が大きいことから、日本においても、国際的にも設定されていません。

六、緑茶に含まれる成分と人の健康や病気に対する効果

熊野功夫編「緑茶文化と日本人」、ぎょうせい、一九九一

一、水溶性成分

＊ポリフェノール（カテキン類）一〇～一八％
抗酸化、抗突然変異、抗ガン、血中コレステロール上昇抑制、血圧上昇抑制、血小板凝集抑制、抗菌、抗中歯菌、抗ウィルス、腸内菌業改善、抗アレルギー。脱臭。

＊カフェイン　二～四％
中枢神経興奮、眠気防止、強心、利尿作用、代謝促進。

＊テアニン　〇・六～一％
血圧効果、脳、神経機能調節。

＊フラボノール類　〇・六～〇・七パーセント
毛細血管抵抗性増強、抗酸化、抗ガン、心疾患予防、脱臭。

＊複合多糖　約〇・六％
血糖上昇抑制。

＊ビタミンC　〇・一五～〇・二五％
抗壊血病、抗酸化、抗ガン、風邪予防、白内障予防、免疫系増強。

＊γ－アミノ酪酸　〇・一～〇・二％
血圧降下、脳、神経機能調節。

＊サポニン　〇・一％
抗喘息、抗菌、血圧降下。

＊ビタミンB2　一二ppm
口角、皮膚炎防止、脂質過酸化抑制。

＊ミネラル類　三～四％（亜鉛、マンガン、銅、セレン）
抗酸化。
（亜鉛）味覚異常防止、免疫能低下抑制、皮膚炎防止（フッ素）虫歯予防。

＊香気成分　一〇％から二〇ppm
アロマテラピー効果。

二、水不溶性成分

＊食物繊維　三〇％
ガン、心疾患、などの生活習慣病予防。

＊たんぱく質　約二四％
栄養素。

脂肪肪三・四～四％
栄養素

＊クロロフィル　〇・六～一％
がん予防。

＊ビタミンE　〇・〇二～〇・〇七％
溶血防止、脂質過酸化抑制、抗ガン、抗糖尿、白内障予防、免疫系増強。

＊ベェターカロチン約　〇・〇二％
抗酸化、抗ガン、免疫系増強。

七、カフェインの性質について、（ドラッグインフォメーションより）

販売名。アンナカヨシダ

一般名　安息香酸ナトリウムカフェイン

規制区分　劇薬（薬事法四四項二項において劇性が強いものとして厚生労働大臣が薬事・食品衛生審議会の意見を聞いて指定する医薬品を劇薬という。）

効能・効果

眠気・倦怠感、血管拡張性および脳圧亢進性頭痛（偏頭痛、高血圧性頭痛、カフェイン禁断性頭痛など）

薬効薬理

本品の薬理作用は主としてカフェインに基づく。中枢において、大脳皮質に作用し感覚受容能および精神機能をたかめ眠気を除去するほか、運動中枢を興奮させる。脳血管抵抗増大や脳血流低下、またそれに伴う脳脊髄圧低下によると考えられる頭痛緩解作用がある。

過量投与

兆候症状

消化器症状［悪心・嘔吐］循環器症状［不整脈・血圧上昇等］、精神神経症状［痙攣・昏睡］呼吸器症状［呼吸促進・呼吸麻痺等］の増悪を起こすことがある。

八、日本農林水産省レポート

＊カフェインの過剰摂取について

―エナジードリンクを多用して死亡した男性について、解剖を担当した医者がカフェイン中毒死と判断したとの報道がありました。この件が示すように、特定の栄養・機能成分を添加した食品や飲料の過剰摂取には注意が必要です。―

各国におけるカフェインの摂取に関する注意喚起等。

＊米国保健福祉省（ＤＨＨＳ）

保健福祉省および農務省（ＵＳＤＡ）による二〇一五年の栄養ガイドラインに関する科学レポートでは、健康な大人では、適正なカフェイン摂取、すなわち一日あたり三～五カップ又は一日当たり四百ミリグラムまで、あれば心血疾患などカフェインの慢性的毒性のリスクは増加しないとしています。

一方、カフェインをお酒と一緒に摂取した場合の健康影響について、懸念をしめしており、アルコールとエナジードリンクを一緒に摂取すべきでない、としています。米国疾病予防管理センターによればエナジードリンクとアルコールを混ぜて飲むことの危険性に関して、注意喚起しています。

エナジードリンクとアルコールを混ぜて飲むと、エナ

ジードリンク中のカフェインがアルコールによる機能低下をかくしてしまいます。なお、カフェインはアルコール代謝に影響しません。呼気中のアルコール濃度を低下させることはありません。カフェイン入りのエナジードリンクをお酒（アルコール）に混ぜて飲むと、アルコールだけ飲んだ場合に比べて三倍、飲みすぎたことになります。

＊欧州

欧州食品安全機関（ＥＦＳＡ）は二〇一五年にカフェインについてリスク評価を行っています。大人では、カフェイン摂取量が3ミリグラム／キログラム体重であれば、急性毒性の懸念はないとし、これから、体重七十キログラムの大人であれば、一回あたり二百ミリグラムのカフェイン摂取であれば健康リスクは増加しないとしています。また、習慣的なカフェイン摂取に関しては、妊婦を除く大人では一日あたり四百ミリグラムまでであれば健康リスクは増加しないとしています。妊婦および授乳婦については、習慣的なカフェイン摂取に関し、一日あたり二百ミリグラムまでであれば、胎児、乳児の健康リスクは増加しないと評価しています。子供については、長期的・習慣的なカフェイン摂取に関す研究が少なく不確実性が残るものの、大人と同様、三ミリグラム／キログラム体重／日であれば悪影響が見られないと推測されるとしています。

＊豪州・ニュージーランド

二〇一四年にカフーインについてのウエブページを公表しています。一日許容摂取量（ＡＤＩ）などのガイダンス値は設定されていないとしつつも、カフェインの作用のひとつである不安作用から、子供では3ミリグラム／キログラム体重／日を指標としています。五～一二歳の子供では一日当たり九五ミリグラム（コーラ約二缶）大人では二一〇ミリグラム（インスタントコーヒー約三カップ）に相当するとしています。

九、各種お茶に含まれる成分の比較（新茶業全集、静岡県茶業会議所一九八村松敬一郎編「茶の科学」、朝倉書店一九九一）

	カフェイン	タンニン（カテキン）類（数値パーセント）
玉露（上級）	四、〇四	一〇、〇四
玉露（中級）	三、一〇	一〇、七九
煎茶（上級）	二、八七	一四、一四
煎茶（中級）	二、八〇	一三、五六
抹茶（上級）	三、八五	
抹茶（中級）	三、五二	
釜炒茶（上級）	二、九九	一四、一〇
釜炒茶（中級）		一八、一六
番茶	二、〇二	一二、三三
ほうじ茶	一、九三	八、三二

ウーロン茶　三、八七　六、一〇
包腫茶（中）　二、六八　二、二五

十、東京都福祉保険局レポート

東京都食品安全（ＦＡＯ）

カフェインは、コーヒーや茶葉などの食品に天然に含まれている食品成分の一つです。また、コーヒーや茶葉から摘出されたカフェインが苦味等を加える食品添加物として、コーラ等の清涼飲料水に使われています。

また、カフェインは眠気防止、血管拡張性および脳圧抗進性頭痛（片頭痛、高血圧性頭痛）のための医薬品の成分として使われており、その際には一回に百ミリから三百ミリ（一日当たりの服用回数は二から三回）のカフェインが使われます。カフェインには、医薬品の効果を阻害したり、増強したりする作用があります。過剰摂取には注意を払うとともに、医薬品を服用する際、ご心配の方は医師や薬剤師にご相談下さい。

体になんらかの影響が表れるカフェイン量は、個人差が大きく、国内、海外ともに、食品に含まれているカフェインについて、毎日ずっと摂取しても健康に影響が出ないと推定される量は設定されていません。しかし海外では、食品に含まれるカフェインについて、摂取目安量を設定している国際機関があります。

韓国食品医薬品安全庁（ＫＦＤＡ）

カフェインに一日最大摂取量として、子供は体重一キログラムあたり　二、五ミリグラム以下、大人は四〇〇ミリグラム、妊婦は二〇〇ミリグラムとしました。

十の一、海外機関の状況

一日あたりの悪影響のない最大摂取量

	飲料換算	機関名
妊婦		
	コーヒー一日当たり	（世界保健機構）
	カップ三～四杯	（ＷＨＯ）
	三〇〇ミリグラム／日	（オーストラリア
	コーヒーカップ四～六杯	保健食品安全局）
	（一五〇ミリリットル／杯）	
	二〇〇ミリグラム／日	（英国食品基準庁）
	コーヒーマグカップ二杯	
	三〇〇ミリグラム／日	（カナダ保健省）
	コーヒーマグカップ二杯	
	（一三七ミリリットル／杯）	
	三〇〇ミリグラム／日	（韓国食品医療品安全庁）
子供（子供二、五ミリグラム／体重／日）		（カナダ保健省）
子供（四～六歳）		
	四五ミリグラム／日	（五〇〇ミリリットル／本）
	コーラ約一本	（約四五〇ミリリットル）

子供（七～九歳）
六二、五ミリグラム／日
コーラ一、二本（五〇〇ミリリットル／本）
（六二〇ミリリットル）
子供（一〇～一二歳）
八五ミリグラム／日
コーラ一、七本（五〇〇ミリリットル／本）
（約八五〇ミリリットル）
子供
二、五ミリグラム／体重／日　（韓国食品医薬品安全庁）
健康な成人
四〇〇ミリグラム／日　（カナダ保健省）
コーヒーマグカップ三杯
（二三七ミリリットル／杯）
四〇〇ミリグラム／日　（韓国食品医薬品安全庁）

十の二、市販飲料のカフェイン含有量を調査しました、結果は次の通りです。（平成二十六年三月）

食品名	カフェイン量	調査検体数・形状
緑茶		
五～二三ミリグラム／一〇〇グラム	五四検体	
（平均一四ミリグラム／一〇〇グラム）	紙パック・ペットボトル・缶	
ほうじ茶		
九～一五ミリグラム／一〇〇グラム	六検体	
（平均一二ミリグラム／一〇〇グラム）	紙パック・ペットボトル	
ウーロン茶		
八～一八ミリグラム／一〇〇グラム	九検体	
（平均一二グラム／一〇〇グラム）	ペットボトル・缶	
ジャスミン茶		
八～一〇ミリグラム／一〇〇グラム	三検体	
（平均九ミリグラム／一〇〇グラム）	ペットボトル	
エナジードリンク		
四～四八ミリグラム／一〇〇グラム	二六検体	
（平均二二ミリグラム／一〇〇グラム）	ペットボトル・缶・ビン	
麦茶　検出せず	六検体	
	紙パック・ペットボトル	
そば茶　検出せず	六検体	
	ペットボトル	

麦茶やそば茶等、茶葉を原料に含まない茶飲料には、カフェインは含まれていませんでした。

十の三、海外機関が設定した一日あたりの摂取目安量を、カフェインを含む食品に換算するとつぎのようになります。

（カップ一杯＝二〇〇ミリリットル、湯のみ一杯＝一五〇ミリリットル、一缶＝三五五ミリリットル、チョコレート一枚五五グラムで換算）
（カフェイン量は、コーラ四六ミリグラム／缶、チョコレート六一ミリグラム／百グラム、ココア九、三ミリグラム／一〇〇グラムとして計算しました。）
＊妊婦の摂取目安量は二〇〇㎎／日を食品に換算するとコーヒー　一、七杯
紅茶　三、三杯
煎茶　六、七杯
コーラ　四本（二リットル）
チョコレート　六枚
＊子供（四～六歳）の摂取目安量四五ミリグラム／日を食品に換算すると・・・
紅茶　〇、七五杯
コーラ　一本（五〇〇ミリリットル）
ココア　二、四杯
煎茶　一、五杯
チョコレート　一、三枚

十一、［農化　第四八巻　第二号、頁九一～九六、一九七四］
茶葉の化学成分含量に及ぼす光の影響　阿南豊正、中川致之（農林省茶験場）昭和四八年八月一三日受理

露天栽培茶葉の化学成分含量

	タンニン（カテキン）	カフェイン
一番茶四月二八日	一七、四一％	三、四四％
三番茶八月二日	二三、二七％	三、三〇％

以上の結果より薬効のあるタンニン（カテキン）は圧倒的に三番茶に多いのです。

十二、「めざせ：お茶博士こどもお茶小事典お茶の基本百八と八八のQ&A」
発行　静岡県経済産業部農業局お茶振興課県の委託を受け製作
初版製作　静岡産業大学子どもお茶小事典作成事業室

茶の摘み取り時期による成分の違い

アミノ酸	一番茶には三番茶のおよそ四倍含まれる。
カテキン	一番茶より三番茶が多い
カフェイン	一番茶と三番茶で差がない
水不溶性食物繊維	一番茶より三番茶がはるかに多い

＊注意
カテキンは一番茶より三番茶が多いと説明されていますが、これはお茶の葉そのものを分析した結果で、お茶を煎れて飲む場合とことなります。
一番茶と三番茶を比べると、一番茶は茶の組織が柔らかいため、揉むことによって組織が壊れて成分も溶け出しやすくなります。三番茶は、夏の強い日差しを浴びて、繊維質が多い固い葉になるため、揉んでも組織が壊れに

くくなります。
お茶を美味しく飲んでカテキンを摂取するには、一番茶を主体に作られたお茶を選ぶと良いでしょう。

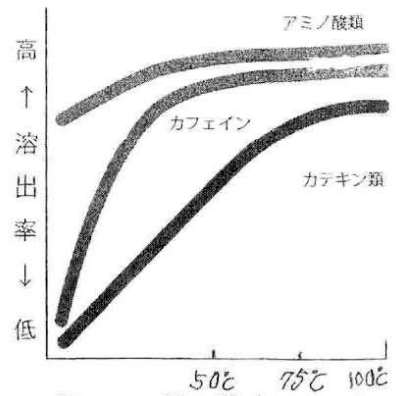
＊お茶のおいしいいれ方

一、お茶の味を決める三の成分

お茶の味にかかわる主な成分はアミノ酸、カテキン、カフェインです。これらの成分は、お茶をいれるときのお湯の温度によって溶け出し方が違い、溶け出した各成分の量の多少によってお茶の味がきまるといいます。七〇度が適温。

二、湯温による成分の溶け出し方の特徴

次のグラフは主要な三成分の、お湯の温度の違いによる溶け出し方を表したものです。



【湯温と成分の溶け出し方のイメージ】

『参考文献』

一、中日新聞二〇一八・八・三一（夕刊）
二、中日新聞二〇一八・五・二九
三、日本経済新聞二〇一五・一二・二二
四、日本経済新聞二〇一六・一・一六
五、厚生労働省レポート
六、熊野功夫編「緑茶文化と日本人」、ぎょうせい、一九九一
七、ドラッグインフォメーションより
八、農林水産省レポート
九、茶の科学　村松敬一郎　朝倉書法
十、ポピュラーサイエンス二一一　お茶はなぜ体に良いのか―カテキンパワーの秘密―　黒田行昭・原　征彦　裳華房
十一、東京都庁福祉保健局レポート　発行　静岡県経済産業部農業局お茶振興課十一「めざせ：お茶博士こどもお茶小事典お茶の基本百八と八八のQ&A」
十二、「農化」誌　第四八巻　第二号、頁九一～九六、一九七四

安芸門徒シルクロード紀行（1）

村上邦治

はじめに

僕は「安芸門徒」だ。正確には浄土真宗本願寺派（本山西本願寺）の門徒で、故郷は広島県竹原市下野町である。

竹原市は瀬戸内海に面し、広島市と福山市のほぼ中間に位置する。全国的に地名が知られていないのは、当初鉄道会社は本線を三原から海岸沿いに都市であった竹原、呉を通過させ、広島に至る路線を計画した。しかし海軍に反対され支線（呉線）に変更させられたためであろう。明治二十二年呉に海軍鎮守府が開庁し、後に戦艦大和や武蔵を建造した海軍工廠の拡大計画があり、本線を呉に通すと、海軍の機密が漏れることを恐れたのである。結局本線はさびれた山間部に敷設された。支線となった呉線は当初本線を通す予定であったため、現在も単線ではあるが、複線が敷けるようにトンネルは全て二つ造ってある。

竹原は律令期には京都下賀茂神社の荘園地であり、その名をとどめた賀茂郡に属し、白宅の近くにはよく遊んだ幅百メートル以上ある賀茂川（二級河川）という雅な名の川もある。

戦国期毛利元就の三男隆景が最初分家の竹原小早川家の養子に入り、その後備後三原城主小早川本家も継ぐことになりその所領となった。江戸期は芸州浅野藩に属し、遠浅を利用した製塩業で潤い、瀬戸内海の島々を結ぶ交通の要所として栄えた。

芸州は室町期以降浄土真宗の門徒が圧倒的に多い。信心も深く結束も強いので、特に安芸門徒と呼ばれ本願寺派の中でも一目置かれている。当家代々お寺は同じ町内にある朝日山宝泉寺である。

その安芸門徒が三年前から入会した歴史同好会の先輩で何度も訪問し中国通のN氏から、平成十三年五月出発のシルクロード旅行を誘われた。JTBが主催する「タクラマカン砂漠を行く新シルクロード十二日間」のツアーで、新疆ウルムチから中国最西端カシュガルまで旅行するという。N氏のほかは同好会でいつも親身になってアドバイスをしてくれ、何かと面倒見の良い同じ広島出身のM氏である。M氏も定年退職後早稲田大学に通うなど中国の歴史文化に造詣を持つ人物である。あと一人は大手総合商社で上海など長年中国に駐在し、中国語も話せる経験豊かなT氏とのことである。三人は同じ大学の同級で僕の三歳上である。

親友のS君にこの旅行のことを話すと、即座に強く反対された。

「中国しかもそんな奥地に行くとは無謀すぎる。まず水が日本人には合わない。必ず下痢をし、体力を消耗してしまう。」

「食事に出るものは不衛生であり、食材は何を使っているかわからない。病気になるぞ。」

など真剣に忠告してくれた。

それでも行きたそうな顔をしていたのであろう、彼はついに切り札を出し説得した。いわく

「中国は砂漠で原水爆の実験をしており、まだ放射能が残っているはずだ。」

と懸命に断念させようとした。

これには心配になり、中国の原水爆実験を調べてみると、タリム砂漠であったがツアーコースとは数百キロ離れていたので胸をなでおろした。しかし始めの二つの忠告は的中した。

糖尿病を発症し二十五年、ついに十年前からインシュリン注射により生き延びている身である。平成五年糖尿病と診断を下しそれ以来の主治医に相談した。医科大学助教授で、八頭身の理知的な顔立ちの女医は、僕の話を聞くなり、呆れて一瞬黙ってしまった。しかしすでに六十八歳になっており、行くとすれば最後のチャンスであることを力説した。三人の仲間も一緒なので心強く、是非ツアーに参加してみたいと、僕の意気込みを話した。

ようやく主治医はしぶしぶ同意して、旅行中の注意を話してくれた。

「一番注意することは暑く乾燥地帯であるので、絶対脱水状態にならないように。水分は早め早めに充分補給してください。」

「暑い地域ですのでインシュリンの温度管理をしないと、効力がなくなります。そのために暑さを遮断できるように工夫してください。冷蔵のできる袋を用意しなさい。」

「インシュリンはいつも身につけておくこと。命を守るものですからお金より大切です。飛行機の荷物として預

けてはいけません。客下の機内荷物搬入場所では、氷結してしまいインシュリンは即駄目になります。代わりのインシュリンを入手しようとしても、中国の奥地にはまずないものと思ってください。」

「水がないでしょうから衛生状態は良くないでしょう。消毒綿は多く持参して、注射をする際には十分消毒をしてください。」

など話し、やっと糖尿病である旨の英文証明書を書いてくれた。これがないと機内に一日三回打つ注射針が持ち込めないのだ。

しかし主治医としてはよほど心配だったのか、帰国後には血液検査など多くの検査をやらされた。

こうまでしてこの旅行に参加したい、と強く願ったのには訳があった。このツアーで訪れる中国シルクロードの遺跡やオアシス都市は、明治末期二十二世浄土真宗本願寺派宗主大谷光瑞（門徒の立場からは猊下とお呼びする。少なくとも師をつけねばならないのだが、呼び捨てにすることを許していただこう）らの探検隊が踏破・調査した地とほぼ同じだったのである。

僕自身は郷里には七歳までしかおらず、あまり熱心な方ではないかもしれないが、我が家は数百年続いている代々浄土真宗の門徒である。時代は違うが、同じ門徒の探検隊が訪れたオアシスに行き、彼らが見たであろう遺跡を尋ねたいと思ったのである。

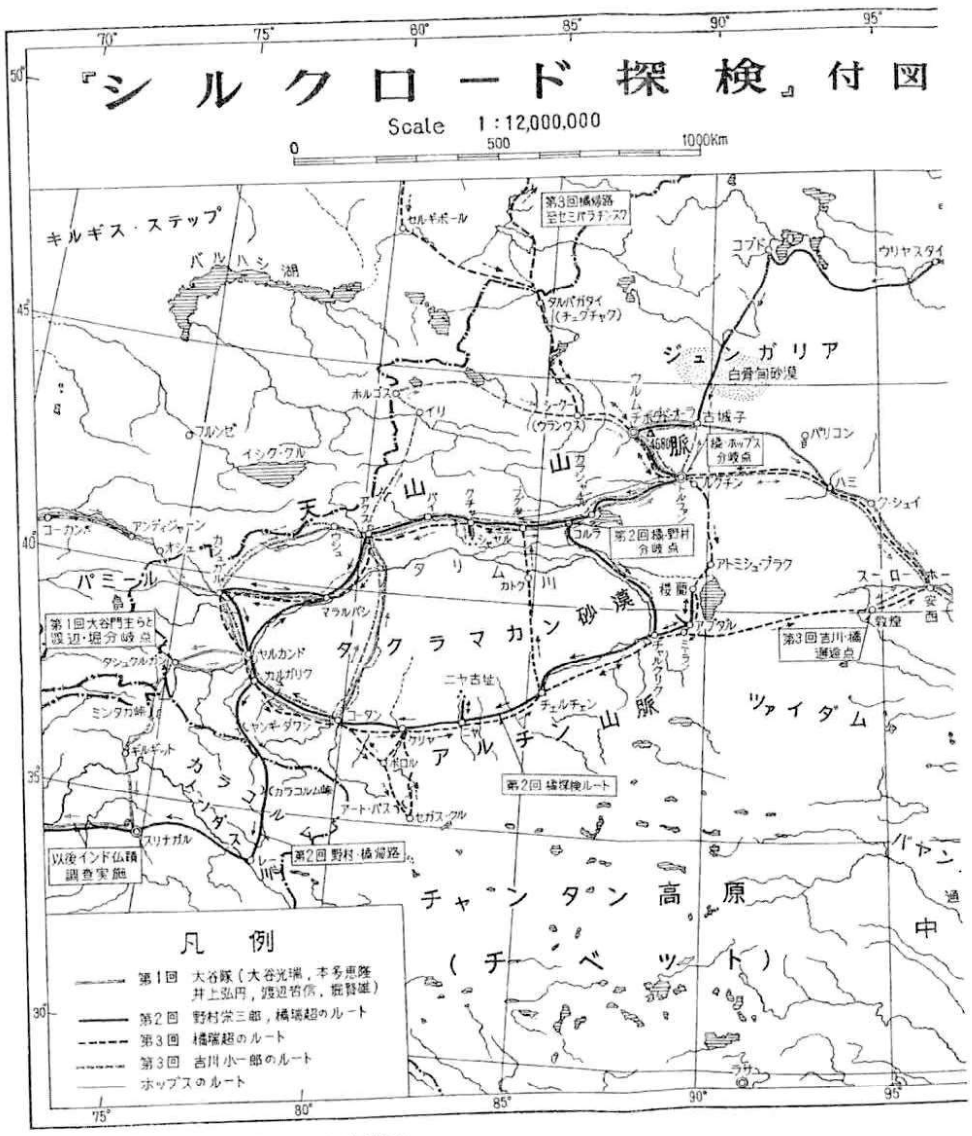
出発前に大谷光瑞と探検隊について調べてみると、その中になんと「安芸門徒」がいたのである。しかも探検隊最大の功績を残していた。竹原市に隣接する三原市の浄念寺渡辺哲信と哲乗兄弟である。哲信兄弟も今度の旅行の後押しをしてくれたのかもしれない。

出発前にまずこの探検隊について記してみたい。

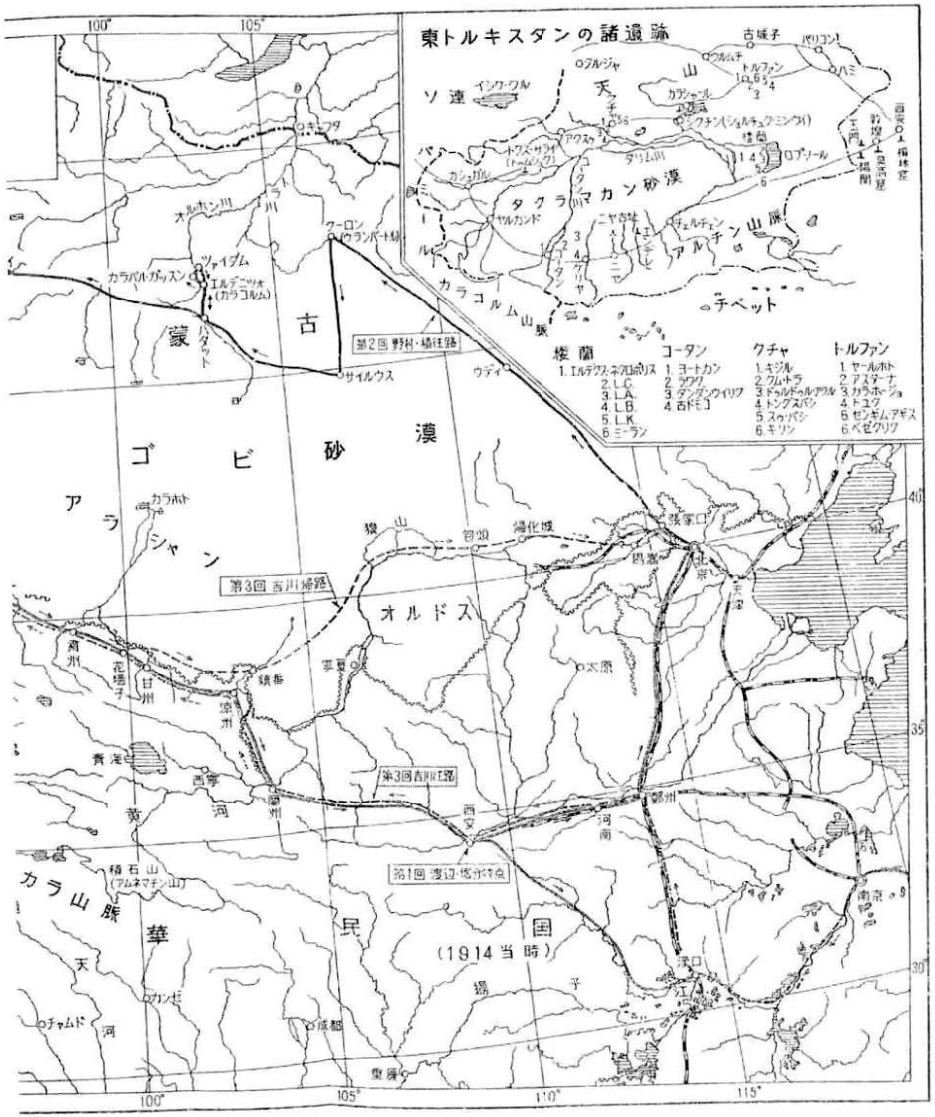
第一部　光瑞と大谷探検隊

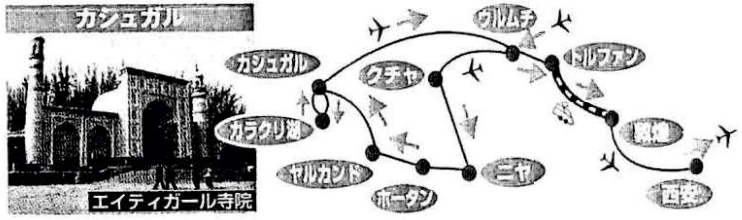
一　排仏稀釈と仏教危機

わが国は十七世紀江戸幕府以降対外的に鎖国政策を採ることで、国内では二世紀半という長期間平和な世の中をもたらした。その間西欧では十八世紀半ばからイギリスから始まる産業革命により、経済工業力を飛躍的に発展させて東アジアに進出してきた。わが国にも開国をせまり、幕府は鎖国維持を図ったが、軍事力を背景とする開国要請により、国内は一気に内乱化した。彼らの軍事力を知り開国に踏み切ろうとする幕府と、尊王攘夷派の対立が激化する。やがて西欧諸国の近代文明にいち早く触れ近代兵器を備えた長州・薩摩など雄藩は、徳川幕府を倒し天皇を中心とする新しい絶対君主国家を目指し、明治維新をやり遂げた。



『大谷探検隊　シルクロード探検』
(大谷光瑞　著者代表　長澤和俊編　白水社)





『新シルクロード12日間』訪問先

新政府は王政復古の大号令から始まり、五箇条の御誓文公布、版籍奉還・廃藩置県、四民平等、殖産興業など先進国に追いつくため、矢継ぎ早に新しい施策を打ち出した。

維新政府の統治機構や経済・工業施策は西欧諸国を模倣するものであったが、天皇を中心とする新体制については、尊王思想をその根幹におき、天皇親政とする王政復古の再来を目指した。そのため新政府は神武天皇政治を創業とする祭政一致を宣言したのである。

この実現のためまず古代律令制度にあった念願の神祇官を復活させた。そして神道国教化に基づき、仏教・儒教・集合神道の排除とキリスト教を禁止とした。これら施策を推進したのは、すでに自ら実践していた津和野藩主従（亀井茲監、福羽美静、大国隆正）と浄土真宗を徹底して嫌ってきた薩摩藩出身者であった。

その最初の布告が、一八六八年（慶応四）三月からの一連の神仏判然令である。

まず

「諸国大小の神社に於いて、僧形にて別当或いは社僧などと相唱え輩は、復飾仰せ出だされ候。」

を通達、頭を削りあげた僧侶の姿から、畜髪し衣服は浄衣で神勤することを命じた。

続いて下旬には次のような神仏分離を命じた。

「仏語以て神号に相称える神社は由緒、委細に書付け、申出づべく候、仏像を以て神体と致す神社は、以来相改め申すべく候。附（つけたり）、本地仏などと唱へ、仏像を社前の掛け或いは鰐口、梵鐘、仏具等の類差し置分は早々取り除き申すべき事」

と社名の改称と社中の仏像、梵鐘、絵巻物、仏具の類を早々に取り除くよう指示した。たとえばスサノウノ尊とする牛頭大王を祀る祇園社は地名から、八坂神社へ改称させた。八幡大菩薩は八幡大神に変更、山王権現、熊野大権現など権現は仏教神の土着的な姿であり神々の本来の由緒を歪めるとされ、権現という名称を剥奪した。

こうした神道を基本とする「祭政一致」の布告から一か月の間に、仏教寺院、僧侶、仏像などを分離する「神社改革」を強引に推進した。千年以上続きわが国特有の宗教・文化を形成した神仏習合体制を政府は否定し、神と仏を明確に分離させたのである。

この布告のわずか四日後、近江国坂本山王神社（比叡山の鎮守神日吉山王と天台宗延暦寺の習合、山王一実神道の本宗）において、同社の社司でもある神祇官権判事の主導で、社殿の中から強引に仏像、仏具、経典、厨子などを外に投げ出し焼き捨てたのである。

この事件がきっかけとなり暴力による実力行使が、燎原の如く全国に広がった。長年仏教の風下に置かれ幕藩体制に組み込まれ安住し、酒食にふける悪徳僧侶を身近

に見ていた神職たちの怒りが一挙に爆発したのである。

この排仏毀釈運動は数年間続き、仏教の宗教権威は地に落ちた。さらに七十一年政府は版籍（土地と人民）奉還を行ったが、その一環として社寺領の国有化を決め、境内地以外の社寺領地を上知させたのである。これらの実施により、宗教権威と経済的基盤を喪失した仏教各宗は一挙にどん底に落とされた。

幕藩体制下キリシタン禁止を理由に、宗門改め、寺請制度によりいわば仏教は国教として保障され、安泰な環境になれてきた仏教各宗は、明治維新政府の神道重視政策により、突如存続の危機に陥ったのであった。

二　浄土真宗派の改革

政府による新施策に関しては、浄土真宗本願寺派（西本願寺）は他の宗派よりはるかに影響は軽微と言えた。習合した末寺は少なく、且つ寺領もほとんどなかったからである。

対立する同じ宗派の真宗大谷派（本山東本願寺）とは、はるかに優位な立場であった。東西分裂の経緯迄遡るとよく理解できる。

十六世紀後半織田信長の全国統一の直前、信長軍の攻撃に対し、本願寺十一世顕如（光佐）は全国の信者や反信長派大名からの支援を受け、十年間に及ぶ大坂石山本願寺で籠城抵抗した。しかし圧倒的な軍事力を持つ信長の徹底した封鎖に耐え切れず、天皇からの調停の形をとり明け渡したのであった。しかし長男教如はこの和睦に反対し、引き続き徹底籠城を主張した。

顕如が亡くなったのち教如は法主になったが、一時顕如から義絶されていたことや、弟の三男准如を法主にするとした顕如の譲り状や、母親が強く法主に推し、真宗内で内輪もめが起きた。結局豊臣秀吉の評定で教如に代わり、准如が十二世に就任したのである。

秀吉の仕打ちを受けた教如は関ヶ原の戦い前後から徳川方に近づき、家康から引き立てられた。京都に寺領を寄進され寺を建立、本願寺十二世を名乗り宗教活動を始めたのである。幕閣からは本願寺を二分することで、教団の勢力を削ぐことにつながるとの思惑もあり、本願寺は東西に分裂したのであった。

こうした経緯より、東本願寺は徳川幕府と親密な関係が続き、逆に西本願寺は冷遇された。幕末東本願寺は尊王佐幕として幕府方を支援、一方尊王攘夷派であった西本願寺は志士をかくまうなど長州を何かと助けた。さらに自派の大洲鉄然（おおずてつねん）、島地黙雷、赤松連城ら毛利藩出身の僧侶が、政府を動かす木戸や伊藤と個人的にも親密な関係にあった。

維新当初、王政復古を目指し宗教政策の中心に神道を推したのは、浄土真宗を嫌う薩摩出身の要人たちであっ

た。薩摩藩では朝鮮出兵以来他国で起きた一向一揆をみて、藩内では浄土真宗をキリスト教と同様禁教とした。一方毛利藩は安芸国の真宗信徒との結びつきは強く、関ヶ原の戦い後長州萩に減封された際には、真宗僧侶も一緒に移ったほどであった。幕末長州征伐に備え奇兵隊内に真宗僧侶が武装し部隊を結成するなど、西本願寺派との関係はきわめて強かったのである。

こうして西本願寺は長州出身の高官を動かし、苦難に直面した仏教界を救済するための主導役を果たすことになった。

長州系僧侶の意見をくみ上げ、彼らを政府高官の木戸らに交渉させ、薩摩主導の神道強化策を漸次変更させたのは、浄土真宗本願寺派第二十一代大谷光尊（明如）であった。

光尊は一八五〇年二十代広如の五男として生まれた。一八六八年（明治元）新門跡となり、その四年後二十二歳の時二十一代を継職した。全国に排仏毀釈運動が吹き荒れ、まさに仏教界が最大の苦難に直面していた時であった。進歩派の宗主として、維新政府の神仏判然令から始まる仏教界の混乱期に、神祇官を廃止させ教務省の設置に至るまで縮小させ、神道行政を抑える政府機構に変更させた。並行して大教団の内部改革を大胆に取り組み、仏教各派のなかで一早く再興させたのである。

光尊が開明であったということでは、岩倉使節団に同行しようとしたことでもわかる。西欧の進んだ文明（政治・経済）を担う国民とキリスト教との関係について関心は強く、日本最大教団の宗主とし本願寺派の改革に必要なことを自ら学ぼうとした。

出発前先代が亡くなり宗主に就任した直後のために同行はかなわなかったが、代わりに兄（養子）に当たる梅上沢融と島地黙雷を海外教状視察に、赤松連城ら三人をイギリスとドイツに留学生として派遣した。

三人の留学生を同時に渡航させたのは、視察だけでは掌握できないと思われる根源的なキリスト教各派（カトリック、プロテスタント、ギリシャ正教など）やユダヤ教などの歴史や教義の相違など深く調査・研究をさせるという長期的視野に立つものであった。この時点で自ら渡航を望み、留学生までも派遣したことが、進取の気概をもった宗主いわれる由縁でもある。

光尊の教団改革は、政府の政治統治機構を十年以上も早く先取りしたものであった。

まず本山の改革に着手する。明治元年黙雷・連城らの意見を採用して、中世以来大教団の宗門行政を握っていた本山家臣団（坊官下間家・家司）の上に執政総督・副総督を置いた。これにより有能な末寺僧侶を抜擢起用し、積弊の根源たる家臣団を排した。さらに人材登用により末寺の僧侶による宗門事務局制度を立ち上げた。排仏毀釈運動が全国で頻発する中、本山と末寺の一体化を整え、末寺や門徒を護ったのである。

次に中間的寺院を廃止した。真宗の拡大過程において、中世以来上寺・下寺や中本寺・孫末寺などの中間的本末関係を廃し、多くの反対や犠牲（興正寺独立）はあったものの本・末の単純な一本化をやり遂げた。これによりこれまで容易にできなかった末寺統制が可能になり、本山の絶対主義的統制が完成すると共に、末寺の実情や意見具申が速やかに伝わる体制となった。

最大の改革が集会の開設であった。明治十四年宗主特選の会衆と教区毎に公選された総代会衆とからなるもので、仏教界最初の宗門世論制度であり、明治政府の国会開設よりなんと十年も早い時期であった。

この創設に伴い「宗制寺法」を制定し、これまでの改革を明確にした。これまで不明確であった本山住職と教団の関係を、新たに教団を運営する管長と区別し、責任の所在を明らかにするとともに、政府の宗教行政に対応できる体制とした。

国でいえば憲法である「寺法」に続いて、皇室典範に見合う、浄土真宗の宗祖大谷家との関係を明確にする「大谷派家憲」を定め、継承・得度・連枝・財産・経費などを規定し、寺法と並ぶ教団の基本法規とした。これら諸改革は明治政府が同様に行った内閣制度、憲法制定、国会開設を先んじたものであった。本山及び浄土真宗本願寺派教団改革を一早くやり遂げることができたのは、光尊の存在なくしては困難なことであった。

三　新門大谷光瑞

教団改革を推進した光尊には、五男二女がいた。長男光瑞（二十二代鏡如）、次男は真宗十派の一つ真宗木辺派（本山野洲市錦織寺）の継嗣、三男光明（浄如二十三代勝如の父）、四男尊由、長女文子（真宗高田派本山栃木県専修寺宗主常盤井夫人）、次女武子（後の九条武子）らである。

光瑞は明治九年父光尊二十六歳のとき誕生、幼名は峻麿（たかまろ）と命名された。生まれた時から次期宗主を継ぐ運命にあった。父光尊の教団改革の経緯と仏教の復活を見ながら成長し、光尊以上の進取で視野の広い大胆な行動力を持った、とてつもない日本人になっていった。

五歳から次期宗主として専任教育係からの特別教育がはじまった。宗祖親鸞の教えや教団の歴史、父二十一代明如上人に至る本願寺各代の業績などである。八歳になり山科の学問所に移り、さらに経典の理解に必須となるシナ語、漢文、漢詩、中国史などを受講した。

一八八五年九歳の時得度し、法名を鏡如（きょうにょ）実名光瑞と称した。ここから本格的に次期宗主としての修行が始まる。次年には東京へ遊学し、東の拠点築地別

院に入った。華族制度創設により父光尊が華族になっており、それらの子弟が通う学習院に入学するためである。

しかし当時の学習院は軍事的色彩に濃い教育がなされており、新門として相応しくないとしてわずか三年弱で退学した。その間まだ十歳ながら新門跡として早くも父光尊に同行し、二か月の北海道巡教の旅に出ている。

学習院退学後、高橋是清が校長を務め、自由な雰囲気の共立学校（現開成学園）に転校した。しかしここも短期間しか在籍せず、京都に帰った。東京での一般教育は短かったが、築地別院では法嗣として必須の内外仏典やさらに語学特に英語を学んだ。

光瑞十六歳の時西本願寺文学寮（現龍谷大学）が落成し、全国末寺の子弟と共にそこで一緒に学んだ。

この年、妻（裏方）となるべく、戦国時代から西本願寺と親密な九条家の当主道孝公爵三女籌子（かずこ）が十歳で入輿した。結婚の前に西本願寺の裏方としての教育を受けるためであった。その後九八年二十一歳、籌子十六歳の時正式な婚儀を挙げた。

その八年後には籌子の妹節子（さだこ）後の貞明皇后）が、皇太子嘉仁と結婚する。これにより皇室と関係を持つことになり、やがて大正天皇の義理の兄になる。

四　海外布教競争

日本国内での各宗派の勢力図は徳川二百六十年の間にほぼ固定された。わずかに辺境であった北海道と、浄土真宗を禁教とした薩摩（鹿児島、琉球）が残っていたぐらいであった。そのため東・西本願寺は競って海外布教に乗り出す。

国内で本願寺派の約八割と劣勢な大谷派（東本願寺）は、まず積極的に海外布教に乗り出した。

維新五年後、大谷派を代表する小栗栖香頂は単身清国に渡り、各地を視察して回った。五台山にも登り中国の仏教事情を調査した。さらに三年後に再度渡航し、上海に東本願寺別院を開創した。中國布教に必要な人材育成のため教育機関として省名を付けた江蘇教校を開校した。翌年には首都北京に赴き、やはり省名を付けた直隷教校を設立して、中国への布教活動の基礎を築いたのである。

一八九四年日清戦争が始まると、軍部の許可を得て仏教各宗とも従軍布教使を主な戦地である朝鮮やさらに台湾に派遣した。従軍僧侶は戦地で軍隊と行動を共にし、軍人への布教や戦死者の弔い葬送などを行った。

戦時中各宗派とも従軍布教使を送り自派の拡大に努めたが、先んじて中国に布教活動や教育機関、別院を設けていた大谷派が中国では優位を占め、戦後清国内で本格的な布教の拡大に乗り出した。

一方積極的に西欧諸国に視察団や留学生を送り込んだ

本願寺派は、教団の改革などを優先させたことにより、最初に海外に乗り出したのは、一八八六年ロシアウラジオストクでの開教活動でからである。その四年後ハワイホノルルに布教を開始するが、いずれも日本人移民に対するものであった。

この間光瑞は日清戦争出征者家族の慰問、戦没者の追悼法要など、新門として病気勝ちであった父光尊に代わり全国を巡教して回った。

遅れがちであった海外布教のため、日清戦争終了後直ちに「清韓語学研究所」を設置し、本格的な海外布教拡大のため人材育成の準備に着手した。教団本部には海外を専門とする布教局を設けた。

日清戦争後日本は軽工業を中心として、急速な資本主義経済の発展を遂げた。朝鮮を実質的に占有化し経済圏に組み込んだほか、台湾を割譲獲得、莫大な賠償金（現在価値で3兆円）を得て眠れる獅子清国に代わりアジア最強国になり、先進西欧諸国に追いつく目標を立てるまでになった。こうした興隆を背景に、父光尊の開明・先取の性格を受け継いだ光瑞は、視野を全世界に広げると共に、列強各国が進出を急ぐアジア特に中国の情勢に興味を抱くのは、自然の成り行きであった。

国内の教団改革が一段落していたこの時期、光瑞は一刻も早く中国を視察したいとの思いを強めた。

何かと慌ただしかった婚儀も済み、病弱な光尊に代わり各地で巡教し門徒から新門として認められた二十四歳の時、やっと清国視察が了承された。光瑞初めての海外への旅であった。

五　清国巡遊

一八九九年（明治三十三）一月初め、光瑞は「国家の前途と宗教の将来とに付いて考える」との思いを伝え、教団執行長の「新御門跡、不日御発途、清国へ御巡遊相成る」との達示が出され、念願であった清国に出発した。京都を十九日に立ち、神戸から出港、長崎を経由して上海に上陸、初の外国の地を踏んだ。

清国の南部当時イギリスの植民地であった香港に赴き、九龍や広東を視察した。その後上海に戻り、内陸部の巡遊を始める。杭州、蘇州、武昌を経て、漢口に到着する。

ちょうどこの時、山東省で義和団（呪術と武術の修練により超人的な武力が獲得できることを説く義和拳という集団）が排外感情を高める民衆を集めて蜂起したときであった。西洋人やキリスト教会を襲い、排外・破壊運動を行い、やがて山東省から直隷省に伝播し首都北京を占領した事件である。

蜂起直後の不穏な動向を感じながら、漢口で馬車や馬を調達したあと、北京に向けておよそ千五百キロにわたる大陸縦断を予定通り敢行した。道路もないところも多く、橋のない川を渡り、砂塵を浴びながらの過酷な旅であった。こうした厳しい旅程を選んだのは、光瑞の「民衆の本当の生活状態、そして人民と宗教との関係を直に知る」ということであった。

当時の中國はイギリスにアエン戦争で香港を、フランスとは清仏戦争で宗主権をもつベトナムを、ポルトガルにはマカオを、そして日本には日清戦争の賠償として台湾と実質的に朝鮮を割譲していた。国内では、独自のキリスト教的地上の天国を目指した十五年にわたる太平天国の乱や、新疆など辺境でのイスラム教（回教）徒の相次ぐ反乱に手を焼き、清国は内外とも混乱し衰退しつつあった。さらにこの度の義和団の蜂起が起きた。

この旅行を通じて、つぶさに清の国内事情をみてきた光瑞は、

「清国の仏教の現状は、仏教的素養に欠けており、社会と隔離し、組織も形骸化している」

現状を直接知り得た。清国の仏教寺院や僧侶集団は自分の殻に閉じこもり、世界の近代化や西欧諸国の進出にも無関心で、自分の山林にただ閉じこもり、旧態依然とした体制の保持にやっとであった。民衆への働きかけも無く、国の将来への憂えも窺えなかった。先進仏教国中国は荒廃し、もはや過っての誇りや行動はどこにも見出だせなかった。国民の国家意識は抜け去り、その衰退が列強諸国の進出を許し、国内で内乱が頻発していると見たのである。

この体験から過去からの「仏教東漸」から、もはや日本最大教団を率いる浄土真宗本願寺派次期宗主として、清国という国家や民衆のために、自ら「仏教西漸」により、中国全土に布教の必要性を強く感じたのであった。

光瑞の清国巡遊以降、本願寺派の中国布教は各地で活発に展開される。

この巡遊を通し光瑞は諸国に直接赴き、身近に体験する事の重要性を悟った。

この三か月半にわたる清国の旅行記は『清国巡遊紀誌』としてまとめられた。清国社会の現状と仏教衰退、人民の生活荒廃を克明に書きのこし、日本だけでなく英訳され世界的にも評価を受けたことが後刻判明する。

この巡遊でこれまでにない衝撃を受けた光瑞は、すぐさま、新門職を弟尊由に代理委任にして、インドや西欧諸の視察に渡航する準備を始めた。

（つづく）

参考文献は最後に記します

ルイス・フロイスの「日本史」

十六世紀のキリスト教宣教記録と宣教師が見た日本

鍋屋次郎

ルイス・フロイスの「日本史」とは

一五四九年（天文十八年）、日本人に対してのキリスト教宣教を目的として、イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸、それから、一六一四年（慶長十九年）の家康による厳しいキリスト教禁教迄六十五年間にわたって、イエズス会等の外国宣教団体によって日本にキリスト教の布教が行われていた。

この「日本史」はその布教期間のうち、一五四九年（天文十八年）から一五九三年（文禄二年）の四十四年間の記録が宣教師ルイス・フロイス一人によって記されている。

著者ルイス・フロイスは、キリスト教宣教団体イエズス会宣教師として一五六三年（永禄六年）に来日、一五九七年（慶長二年）召天するまでの三十四年間日本にいた。その間、一五八三年（天正十一年）に当時のイエズス会総長から日本教会史の編纂を命ぜられ、フランシスコ・ザビエル来日後の宣教記録、フロイス来日後の自らの体験・見分記録をまとめたものであり、その内容は本稿一五〇頁以降に第一部～第三部にわたって各章ごとの記載内容主旨を目次より引用して紹介したのでお目通しいただければと思います。

このルイス・フロイスの「日本史」は、日本の歴史書には見られない西洋の知識人による十六世紀の日本と日本人に関する赤裸々な証言であると言えます。歴史事実の現象を目に映じたままを記載しています。

日本では平凡社発行「日本史一巻～五巻」（添付の第一部のみ）と、中央公論新社発行「完訳フロイス日本史一巻～十二巻」（添付の第一部～第三部迄の全て）の二種類が刊行されている。

ルイス・フロイスの経歴

一五三二年（天文元年）リスボンで生まれ、一五四一年（天文十年）九歳でポルトガルの宮廷に仕え、一五四八年（天文十七年）十六歳でイエズス会に入会、同年十月ゴアへ。同地で日本へ向けて出発前のフランシスコ・ザビエルと日本人ヤジロウに会う。一五六一年（永禄四年）ゴアで司祭に叙階。司牧の活動に一身を捧げることとなった。

ルイス・フロイスはイエズス会の中でも特に文筆力の面で評価が高く、一五五九年（永禄二年）イエズス会名簿のフロイスの名前に「才能、あらゆる文筆の仕事に長ず。判断力優秀。生来言辞豊富なれば良き説教語るべし」と特筆され、ゴアでは学院長および管区長の秘書を務め、ヨーロッパへ送る布教報告の記載を担当していた。

その二年後の一五六三年（永禄六年）秋に来日、日本各地で布教に従事し、一五八三年（天正十一年）にイエズス会総長から日本のイエズス会活動記録を編纂するよう指示を受け、一五八六年（天正十四年）末には、日本史第一部がおおむね終了していた模様。その後「第二部」「第三部」と続いた。一五八七年（天正十五年）七月の秀吉によるキリスト教禁教令によって宣教師は二十日以内の国外退去を命ぜられ、全員一旦平戸に集結したが、季節風がなく船が出ないため、秀吉の了解のもと平戸から長崎に移り、フロイスは一五九七年（慶長二年）七月八日、長崎で六十五歳で召天した。

ルイス・フロイスの「日本史」への思い

・・・イエズス会総長への書簡から・・・

フロイスが日本史を書き終えて、マカオからイエズス会総長に宛てた書簡に、日本史編纂に対してのフロイスの思いが記されていますので引用してご紹介します。書簡の中では総長を尊父と呼んでいます。

書簡（平凡社　日本史第一巻　解説三十一頁より引用）

「この一五九二年（文禄元年）に、私は尊父から一五九一年（天正十九年）二月二日付けの書簡を戴きました。・・・十月九日は私どもが日本を出発してから一年になります（鍋屋注　フロイスは昨年巡察師ヴィジタドールに随行してマカオに来た。約二年滞在して日本に戻っている）。ヴィジタドールはインドやヨーロッパへ送る書簡を書く手伝いをさせるために私を同伴なさいました。…私はもう六十一歳になっておりますが、我らの御主は私をお助けくださり、私は三カ月の間引続きヴィジタドールが口述なさることを書き、毎日七時間八時間と、三カ月に及びました。また、当一五九三年（文禄二年）にも、私はたいそう弱り衰えましたけれども、再びこの仕事を継続いたします。私は日本に来てもう二十年になりましたが、この港にまいりました時、気候・空気・食物の変化が障り、私はここにきて至極健康でありました

日は唯の一日さえもなかったほどに思われます。・・・

私は貴翰の二、三ヵ所に対してお答え申し上げましょう。第一に、尊父は、私が今執筆中の「日本史」は日本人の霊魂を助けるために来る人びとに役立つこと多く、今後派遣される人々に大きな慰めとなることをご希望になっておられますので、私がその仕事に全力を注ぎ、これを完成することをお勧めくださいました。

それに対して私はお答え申し上げましょう。準管区長バアデレガスパール・コエリョが尊父のお名前で私にこの仕事をお託しになってから、私は鋭意これに当たりました。私は、自分がこのような難しい仕事に堪える者ではなく、またこれを遂行するために必要なその他のもろもろの能力も欠けていることを感じておりましたが、日本で最初から働いた人々の中で、当時生き残っている者は私以外には一人もなく、亡きバアデレメステレ・フランシスコ・ザビエルが、その頃私がおりましたゴアから日本へ出発なさって以来、日本で起こったことについて知識を持っている者は、私のほかには誰もおりませんでした。それのみならず、私はこの機会が失われなかったことを喜んでおります。それは、（キリストにおける尊父の最も不肖な子として率直に尊父に対して申し上げますが）、私は二十九年間あの国におりましたから、私が死んでしまった後では、過ぎた事々について私が持っております程度に完き知識を持ち、日本のいろいろなことについて私ほどの長い経験と認識とを持っている者は一人もいなかったであろうと思われるからでございます。また、この仕事に対して、私は誰よりも愛着を持っているように思われるからでございます。されば、私は生じてくるいろいろな職務を行い、ほかのいろいろな義務を果たすことを、そのために怠っていたわけではございませんが、それでも「日本史」を起草してこれを三巻にまとめるためには、六年近くの時を費やしました。

第一巻（本稿では第一部）には、特に日本の諸事、即ちこの国の気候、特質、国民の風習、日本の起源、および日本の諸宗派の起源について記しました。

第二巻に（本稿では第二部）は、バアデレメステレ・フランシスコの日本渡航以来、年々教化の仕事に起こったいろいろなこと、並びに我らの先輩にあたる初期のバアデレおよびイルマンがこの仕事で嘗めた辛苦困難について記しました。

第三巻（本稿では第三部）では、同じ題目を続け、豊後の王フランシスコの改宗から始めて、一五八九年（天正十七年）に及びました。私どもが昨年日本から出発いたしました時、バアデレヴィジタドールは私に「日本史」を持って行くようにお命じになり、これを尊父にお送りすることができるように、当シナで余暇ある折にこれを検閲修訂しようとおっしゃいました。バアデレは日本にいらっしゃった時も、もうその幾分かをご覧になってい

ました。

けれども、当地では、バアデレははるかに重要且つ重大な他の用務を片付けることも困難なほど多くの重なる仕事に追われて、この一年間は「日本史」に手を付ける機会は全くございませんでした。私がこの「日本史」について二、三度バアデレとお話しいたしました時、バアデレヴィジタドールは、日本にいるバアデレやイルマンがあの国の布教の最初の基を作った時に忍んだ苦心を個々にわたって詳しく知るためならば、今まで書かれたままでも非常によく役立つこともできよう。けれども、これをローマへ送り、全世界の一読に供するためには、これを短くして、もっと要略した大要を記すにとどめ、この中から主要なことを一巻に収めて、ローマから出版される年報書翰の一冊よりもあまり大きくならないようにすることが必要であるとおっしゃいました。（注 ①鍋屋）

まことに、この中には修訂を必要とする多くのことがあることは私も明らかに認めますが、これを著しく損ねずに、そう狭い場所に収められるほど良い具合に短く縮めることはできないであろうと、私にはどうしても思われます。必然的に、秩序正しく、この国から送られてヨーロッパで印刷された諸書翰に述べられている主要なことを数多くのせなければならない日本の歴史では、（少なくとも主要な点で）あれほど豊富な材料を省略して、そんな簡略な一冊の概要に収まるほどにすることは不可能でございます。

されば、「日本史」がひとまず現在のままの姿で尊父のお手もとに送られることと、削除し得べきところをお記しドさいますことを、切に望んでおります。ただその場合、都合の悪いことが二つございます。その一つは、私がポルトガル人でございますから、ポルトガル語でこれを書いたことでございます。その上にもう一つは、（私が利用することができるような人手などは全くございませんでしたから）、私は全部自分で書いたという少なからぬ困難でございます。この頃のようにいろいろな病気にまだ悩まされなかった頃に、私はこれを自分で書きました。今となってはもう年齢もとり、気分も優れなくなったために、一部は道中でなくなるようなことがあっても、一部は此処に残るように自分の手で写しを作ることもできなくなってしまいました。当地には筆耕者が極めて不足なので、他に誰かこれを書き写すべき者をここで見出すことは困難でございます。

一五八九年（天正十七年）から以来今日に至るまで、「日本史」は中絶状態で、何事もなく、私もまたこれを継続することができませんでした。そうして私の生涯ももう著しく終わりに傾いておりますから、私は「日本史」に関して今日までに起こったことをこの書翰で尊父にお伝え申そうと考えた次第でございます。それと申しますのも、尊父の御返辞がこの世で私のもとに達するかどうか、疑わしく思われるからでございます。

日本のいろいろなことについてよく知っている我等の学識あるバアデレたち二、三人がこれを通読して、尊父がこれをお手になさったならば非常にお喜びくださるであろうと、私に断言いたしました。

されば残るところは唯一つ、尊父が御主においていっそうよしとお考えになるところを、貴地からバアデレヴィジタドール、またはバアデレヴィセ・プロピンシアルにお命じ下さいませ。もし尊父のご返答をいただきました時に私がまだこの世におりましたならば、私は喜んで万事について謙遜に尊父又はどなたなりとも尊父の下に立たれる上長がお命じになることを、その点に関して別に何も注文を付けるようなことは致さず、仰せの通りにいたします。

主におけるとるにたらぬ不肖の子　ルイス・フロイス

尊父

（注 ①）フロイスの上長バアデレヴィジタドールから、「日本史」をローマに送って印刷するにあたっては記載内容を簡略化するよう指示があった。この理由は、イエズス会会員は宣教に当たって俗世の諸々のことから離脱して、宣教専一でなければならない、という規範を

宣教師は守ることが求められていた。従って、フロイスが個別の寺院名、安土城や寺院建築・造園と日本式庭園の美しさなどを個別に縷々説明していることは、布教目的と成果を記載するに際してはカットすべき、というのがヴィジタドールの命令であり、一方フロイスは、美辞麗句を並べているのではなく、宣教に当たっても「日本」と「日本人」を理解するためには、そのような説明は必要不可欠である、という考えで、書簡で総長に訴えている。

次項で述べるように、フロイスの原稿が十八世紀までマカオのイエズス会書庫に埋もれていたことも、原稿の取り扱いについてこの辺のことが原因ではなかったのではないかと考えられる。（鍋屋所見）

ルイス・フロイスの「日本史」の発行が何故遅れたのか・・十六世紀原稿完成が二十世紀になっての発行・・・

フロイスの原稿がマカオのイエズス会学院内書庫に埋もれていて、十八世紀に転写されたが、そのうち第二部、第三部の転写したものが所在が不明（当初の原稿は転写後火災焼失）であったことによる。フロイスの原稿は

（一）フロイス召天時点では、日本史全巻はおそらく長崎のイエズス会で、フロイス記載のままの状態で保管されていたものと考えられる。

（二）いつの時期かわからないが、「日本史」全巻がマ

カオのイエズス会日本管区本部に送られ、そこで保管されていた。徳川家康の一六一四年（慶長十八年）十二月十九日の徹底した大規模の禁教令により、宣教師全員と主なキリシタンの国外追放（この時高山右近もマニラに追放になっている）の時点で、イエズス会関係史料は全てマカオに持ち帰られたものと考える。

（二）フロイス日本史原稿がマカオのイエズス会学院内書庫で埋もれたままになっていることが、十八世紀になってポルトガル政府が海外にある同国関係の文書を筆写させたときに発見された。

第一部　これは、ポルトガル政府が一七四二年（寛保二年）、イエズス会がマカオの日本管区本部で収蔵していた草稿をリスボンで保管するため、その筆写をイルマンジョアン・アルヴァレスに託した。アルヴァレスは一七四五年（延享二年）に筆耕七名を雇い筆写を完成した。これがリスボン旧王室文庫アジェダ図書館に宝蔵されている稿本類の中に「アジアにおけるイエズス会」と題する小型フォリオ本六十一巻（すべて縦約三十一センチ、横約二十二センチ）があり、その中にバアデレルイス・フロイスの「日本史」Historia do Japan　第一部があり、これが我が国で一九六二年（昭和三十八年）から一九七八年（昭和五十三年）にかけて平凡社から出版された「日本史一巻～五巻」である。記載内容は、ザビエルが日本宣教を開始したときからの日本でのイエズス会布教記録から、年ごとの出来事の中で特記事項を年ごとに記載し、フロイスが日本に着任したときからは、一五七八年（天正六年）迄フロイスの見聞により記載しているものと考えられる。

第二部、第三部　紛失したと考えられていた原稿（一九二五年（大正十四年）に、東アジア布教に関するバアデレルイス・フロイスの功績を評価した際に、ゲオルク・シュールハンメル師は、「一五七八年（天正六年）から一五八九年（天正十七年）にわたって九十九章にわたる日本の歴史を包括する第二編は全部紛失してしまった」と述べている）が、その後の調査でこれらの写本は南シナのマカオの文書館に埋没していたことがわかった。十八世紀になって写本が作成されたが、ポルトガル、スペイン両国政府のイエズス会弾圧を避け同写本は秘かにマニラへ送り届けられ、後にスペインに送られたりして分散していた。

これら写本は、二十世紀に入ってリスボンの王立アジュダ図書館、ポルトガル海外史文書館、トウルーズの故サルダ氏の文庫、ポルトガル国立図書館など思いがけないところから発見された。「ルイス・フロイスの日本史」の全写本（殆どが難解で読みにくい手写本）が著者（松田毅一・川崎桃太）のところに蒐集できたのは一九七五年（昭和五十年）の初頭であった。フロイスの文章は古い時代のポルトガル語であり難解の個所も多く、マカオでの謄写時のミスも多く、加えて写本の紙数も多く、本件翻訳・出版には多くの苦労があった。この第二、第三部は、既に平凡社から出版されている第一部を合体（著者なりの再翻訳）して、中央公論新社から二〇〇〇年一月～二〇〇〇年十二月にかけて、織田信長編とか豊臣秀吉編などというように、いわゆる日本の歴史書風に編集して「完訳フロイス日本史全十二巻」として出版された。

ルイス・フロイスの日本での足跡

フロイスは先に記載した通り一五六三年（永禄六年）～一五九七年（慶長二年）召天まで三十四年間日本に滞在していた。時代は主として織田信長と豊臣秀吉の時代であり、足利氏の中世から徳川政権に至る間の激烈な闘争時代を、信長・秀吉に接しながら直に見ていた。具体的な日本での足跡は以下のとおりである。

一五六三年（永禄六年）秋、バアデレジョワンニ・バッティ・スタ・デ・モンテ、イルマンディオゴ・ゴンサルヴェスと一緒に、キリスト教に改宗したばかりの肥前・大村の大村純忠（洗礼名ドン・バルトロメウ）の所領横瀬浦に入港来日した。そこで宣教を手伝っていたが、大村純忠への対抗勢力により横瀬浦港が兵火にまみれた為、一カ月後に平戸度島の領主籠手田左衛門尉（アントニヨ）からのイエズス会に対するバアデレ派遣依頼に基づいて、フロイスは十二月に平戸度島に遣わされた。

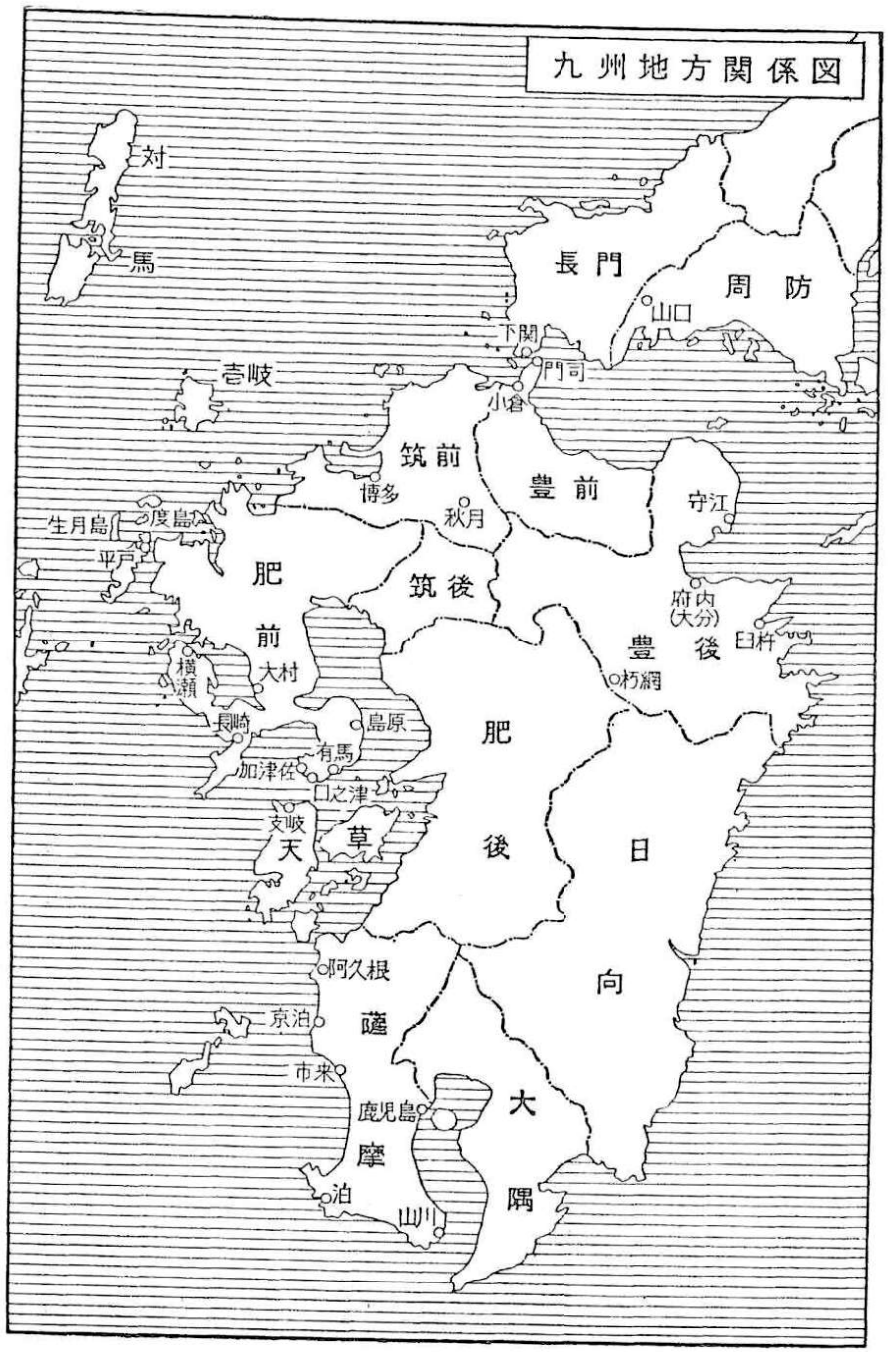
一五六四年（永禄七年）秋までの十ヶ月間度島に滞在、その間、イルマンフェルナンデスから日本語および日本の諸学を学び、彼の作成した日葡・葡日辞書一冊を貰った。同年十二月、バアデレトルレスの招きで口之津へ行った。（日本史一巻　三百十頁地図を挿入）

一五六五年（永禄八年）一月三十一日、宿願であった京都に入り、バアデレヴィレラとイルマンロレンソに喜び迎えられた。ザビエルの日本人に対する絶賛を度島のころから感激の中で感じていたが、京都に来て三ヵ月後には「この国民は、その文化、その作法と習俗の点で、言うも恥ずかしいほどさまざまの事にかけて、エスパニア（スペイン）人に優っています」と書き送っている。

一五六五年（永禄八年）六月、京都で反キリシタンの松永弾正が将軍を殺害、京都の支配権を握ったので、バアデレ達（ルイス、ヴィレラ、ロレンソ達）は堺に避難、そこに四年間いた。この間京都は内乱の連続であった。一五六八年（永禄十一年）十月、織田信長が京都を征服、足利義昭を将軍とした。

一五六九年（永禄十二年）三月末、フロイスはイルマンロレンソと乱が収まった京都に戻った。

一五七六年（天正四年）、フロイスは都の厳しい寒さに耐えられなかったので、上長たちはフロイスを豊後（大分）に呼び戻した。



フロイスは一五七六年（天正四年）から四年間、豊後の大友義鎮の居住地臼杵にいた。

一五八一年（天正九年）三月、フロイスは豊後に来たイエズス会巡察師アレッサンドロ・ワリニャーノの信長訪問の旅路に、通訳として随行して京都に上った。

一五八一年（天正九年）五月中旬にフロイスは越前国北ノ庄（福井）に行き、旧友で信長からここに流されていたダリオ高山飛騨守を訪ねた。

この頃信長の勢力範囲における布教は隆盛を極め、洗礼を受けた者は既に二万人を数え、その大部分は貴族階級であったが、なおその他に南日本には十三万人の信者があった。

フロイスは同年には長崎方面に帰っていて、爾来口之津、長崎、加津佐で布教長の傍らにいた。

一五八三年（天正十一年）、フロイスはイエズス会総長メルクリアンから日本教会史の編纂を行うように任命された。

一五八六年（天正十四年）三月、準管区長に従って、日本の布教地巡察の旅に同伴、有馬、天草、長崎、大村、平戸、堺、大阪、都および五畿内のその他の布教地等、主だった地域はこの機会にすべて訪れた。秀吉を訪問したときは手厚い歓待を受け、山口、豊後を経てフロイスは準管区長とその年のうちに長崎に戻った。

一五八七年（天正十五年）七月二十四日の秀吉が薩摩征伐から博多へ戻った時に発令されたキリシタン禁令では、宣教師は二十日以内に日本から退去を命ぜられ、国外退去の船便確保のため宣教師は平戸に集結した。しかし、季節風が吹かなければマカオ行きの船はなく、秀吉の了解のもとにしばらくは全員平戸にいたが、その後迫害の具体的な動きはなく、キリシタン大名から内々での迎えの動きもあり、宣教師たちは再び各地に散り、フロイスは一時準管区長とともに加津佐に行った。その後、フロイスは一五九〇年（天正一八年）～一五九七年（慶長二年）まで長崎にとどまった。その間、ワリニャーノが一時マカオへ帰港したときフロイスも同行（既述尊父への手紙参照）したが、ほどなく戻ってきて、一五九七年七月八日長崎で召天した。

「ルイス・フロイスの日本史」の歴史的意義

宣教が行われていた時代は信長・秀吉・家康の時代であり、信長は好意的に接し、秀吉は当初好意的であった。しかし、薩摩征討の直後、宣教師とキリシタン大名の連携不安から一時的な禁教令を出したが徹底されなかった。禁教後も天正少年使節団が帰国した段階で宣教師と使節を聚楽第に招待している。家康は一六一四年（天正十九年）禁教を徹底し、宣教師と主なキリシタン（高山右近等）の国外追放を行い、その後更に一層厳しい禁教取締りが一八七三年（明治六年）まで続いた歴史的状況

を踏まえて、ルイス・フロイスの「日本史」の歴史的意義を考えてみたい。

日本史的意義

（一）前述したとおりの日本での厳しい（言語に絶する）キリスト教禁教が長く続いた結果、十六世紀からの日本での宣教記録は公的には皆無となったので、日本の歴史、とりわけ日本切支丹史にとって極めて重要な存在価値を持つものである。

（二）この「日本史」は十六世紀の西洋の知識人による日本と日本人に対する赤裸々な証言であり、客観的な記載は貴重な歴史的価値の高い資料と考える。

（三）「フロイスの日本史」の中での信長・秀吉等に関する記載内容は、日本の歴史書にはないくだけた温かみを感ずるものもあって、信長・秀吉の日本では伝えられていない一面を教えてくれる。例えば信長の生涯を記載した信長公記（注 ②）にも記載のないケースも多く記載されている。

（注 ②　信長公記）　織田信長の旧臣太田和泉守牛一が、慶長十五年（一六一〇年）八十四歳のとき完成した信長の一代記で、信長の生涯を詳しく記載し、更に、信長死後の安土城の次第、家康の和泉堺から三河への退却までが書かれている。（信長公記　校注　桑田忠親　㈱新人物往来社発行　三百九十六頁）

その後の日本切支丹史

ルイス・フロイスの「日本史」記載の一五九七年（慶長二年）以後のキリシタン宣教と弾圧が記載されているのが日本切支丹宗門史である

日本切支丹宗門史

レオン・パジェス著　クリセル神父校閲　吉田小五郎訳で岩波文庫で一九四〇年（昭和十五年）上・中・下巻印刷発行している（現在絶版）。

レオン・パジェスはパリ生まれ（一八一四～一八八六）のフランス人外交官で、北京のフランス公使館付き外交官でフランスにおける草創期の日本史家。

レオン・パジェスがキリスト教宣教・迫害のこれだけの資料をどのようにして蒐集したかについては、「ヨーロッパ各所の図書収蔵機関を訪ねて日本に関する欧人の著書八百余点を年代順に整理して一八五九年に『日本図書目録』を作った」と経歴にあるが、それだけで強烈な迫害事実などが収集できたとは信じられず、現状鍋屋自身よく理解できていない。

この上・中・下巻の記載期間はフロイスの日本史が一五九七年（慶長二年）までであるので、パジェスは一五九八年（慶長三年）から一六五一年（慶安四年）迄五十三年間を記載している。上・中・下巻それぞれ

上巻　一五九八年（慶長三年）～一六一六年（元和二年）

中巻　一六一六年（元和二年）～一六二四年（寛永元年）

下巻　一六二四年（寛永二年）～一六五一年（慶安四年）を記載している。

一六五一年（慶安四年）以降は、キリシタン撲滅というか、弾圧に続く弾圧が行われ一八七一年（明治六年）キリスト教解禁（解禁といっても禁制の高札を撤廃したのみ）まで、過酷な取締りが行われていた。

十六世紀の日本人の信仰は二百五十余年続いていた

一八六〇年（安政六年）六月、江戸幕府は神奈川・長崎・箱館を露・仏・英・蘭・米に対し開港した。それに伴い仏が長崎にキリスト教会（大浦天主堂）を建設したところ、フランシスコ・ザビエルが始めたキリスト教宣教時に洗礼を受けた子孫が大浦天主堂に現れ、禁制が厳しい中で二百五十年余にわたり潜伏していた信徒が発見された。キリスト教指導者がいない中で、しかも「キリスト教を信仰していることがばれれば死罪」という弾圧の中で信仰が続いていたことから、「キリスト教徒発見」という驚きのニュースが世界を駆け回った。

その後、長崎県はじめ関係自治体、および我が国のカトリック教会等の活動により、長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産を、ユネスコの世界文化遺産員会が、本年六月三十日、世界文化遺産に登録することを決めた。

登録される遺産は次の通り。

原城跡・平戸の聖地と集落（春日集落）・平戸の聖地と集落（中江の島）・天草の崎津集落・外海の出津集落・外海の大野集落・黒島の集落・野崎島の集落跡・頭が島の集落・久我島の集落・奈留島の江上集落・大浦天主堂以上十二資産。

参考文献

平凡社発行「日本史」　キリシタン伝来のころ　一巻～五巻

中央公論新社発行「完訳フロイス日本史」一巻～十二巻

ルイス・フロイスの日本史　第一部～第三部　章別記載内容紹介（目次より引用）

フロイス　日本史第一部　東洋文庫全5巻　平凡社

第一部	記載主旨	中公文庫	第一部	記載主旨	中公文庫
1549年	（天文18年）				
第1章	イエズス会のばあでれメステレ・フランシスコ・ザビエルが、聖なる福音を述べ伝えるために、日本の島々へ赴く決心をした次第。	6巻1章	第2章	彼等が日本に渡ってきた次第及びその他彼らが薩摩の国に滞在中に起こったことについて。	6巻2章
1550年	（天文19年）				
第3章	ばあでれメステレ・フランシスコが再び薩摩から平戸へ行った次第、及び彼がそこにばあでれコスメ・デ・トルレスを侍者二人とともに残して、いるまんファン・フェルナンデスとともに山口へ出発した次第。	6巻3章	第4章	ばあでれメステル・フランシスコが山口からみやこへ上り、そこから平戸へ帰った次第、及び彼がばあでれコスメ・デ・トルレスを連れて再び山口へ行った次第。	1巻1章
1551年	（天文20年）				
第5章	ばあでれたちが山口へ帰ってきた次第及びこの国で結び始めた成果について。	6巻4章	第6章	ばあでれメステレ・フランシスコが山口から豊後の国へ行った次第、またばあでれがインドから日本へ送った人々のこと、および1551年にばあでれコスメ・デ・トルレスが山口から送った日本に関する報告について。	6巻5章
第7章	ばあでれメステレ・フランシスコが山口を出発して数日後、ばあでれコスメ・デ・トルレス及びいるまんファン・フェルナンデスがばあでれに宛てて豊後へ書き送った2、3の事の次第。	6巻6章			
1552年	（天文21年）				
第8章	山口におけるさまざまのことの進行及びいるまんルイス・デ・アルメイダのイエズス会入会について。	6巻7章	第9章	ばあでれバルタザール・ガーゴがいるまんドゥアルテ・ダ・シルヴァとペドロ・デ・アルカソヴァとを連れて日本に渡来した次第。	6巻8章

(150)

1553年	（天文22年）				
第10章	ばーでれバルタザール・ガーゴが豊後へ帰った次第及び忽ちばあでれを襲った苦難について。	6巻9章			
1554年	（天文23年）				
第11章	山口における飢饉及びその他そこで起こったよい出来事などについて。	6巻10章	第12章	ばあでれバルタザール・ガーゴがいるまんファン・フェルナンデスとともに滞在中、豊後において布教の進捗に際し起こった2、3の出来事について。	6巻11章
第13章	二人の名僧パウロとベルナベの改宗について、及び、ばあでれコスメ・デ・トルレスがベルナベをつれているまんロレンソを比叡の山へ使わした次第。	1巻2章			
1555年	（弘治元年）				
第14章	ばあでれバルタザール・ガーゴがいるまんファン・フェルナンデス及び僧侶パウロとともに豊後から平戸へ遣わされた次第。	6巻12章	第15章	ばあでれメステレ・ベルショール・スネスが2、3人の伴をつれてゴアから日本へ向かって出発した次第。	6巻13章
1556年	（弘治2年）				
第16章	山口が破壊さればあでれコスメ・デ・トルレスが豊後へ着た次第及び同じ1556年にばあでれメステレ・ベルショールが伴をつれて日本に到着したことについて。	6巻14章			
1557年	（弘治3年）				
第17章	ばあでれメステレ・ベルショールがインドへ帰った後豊後で起こった2、3の出来事について。	6巻15章			

(151)

1558年	(永禄元年)				
第18章	ばあでれガスパール・ヴィレラが豊後から平戸へ遣わされた次第及びそこで起こったこと。	6巻16章	第19章	ばあでれコスメ・デ・トルレスが豊後の府内の家でいるまんたちと行った修行について。	6巻17章
1559年	(永禄2年)				
第20章	ばあでれバルタザール・ガーゴといるまんギリエルメとが、博多の町で遭った大きな艱難と危険とについて。	6巻18章	第21章	その頃豊後及び平戸で起こった2, 3のことについて。	6巻19章
第22章	二人がそこからみやこへはいれるようにばあでれコスメ・デ・トルレスがばあでれガスパール・ヴィレラ及び日本人いるまんロレンソとダミヤンとを比叡の山へ遣わした次第。	1巻3章	第23章	ばあでれとその一行が堺から比叡の山へ出発した次第。	1巻4章
1560年	(永禄3年)				
第24章	ばあでれヴィレラが坂本をたってみやこへ行った次第及びばあでれが受けた抵抗と難儀とについて。	1巻5章	第25章	ばあでれが初めて公方様を訪問して都に居住する允許状を得た次第。	1巻6章
第26章	ばあでれが種々の宗派の僧侶及び俗人とたたかわせた宗論について。	1巻7章	第27章	みやこにおける山田庄左エ門の改宗について。	1巻8章
第28章	ばあでれバルタザール・ガーゴが日本からインドへ渡る旅のこと及びばあでれがその航海中に嘗めた困難について。	6巻20章			
1561年	(永禄4年)				
第29章	ばあでれガスパール・ヴィレラが別の家を借りた次第及びみやこのその家でばあでれに起こったこと。	1巻9章	第30章	この1561年に豊後及び下の各地方で起こったさまざまのことについて。	6巻21章

1562年	(永禄5年)				
第31章	この1562年に豊後において起こったこと。	6巻22章	第32章	ばあでれコスメ・デ・トルレスがいるまんルイス・デ・アルメイダを薩摩国へ遣わした布教の旅について。	6巻23章
第33章	鹿児島と市来の城とでいるまんルイス・デ・アルメイダに起こったことについて。	6巻24章	第34章	ばあでれガスパール・ヴィレラが初めてみやこの町から追放された次第。	1巻10章
第35章	ばあでれヴィレラが別の時に公方様を訪問し、みやこから堺の町へ説教に赴いた次第。	1巻11章	第36章	みやこにおいて同じ1562年に起こったその他の2、3のことについて。	1巻12章
1563年	(永禄6年)				
第37章	ばあでれガスパール・ヴィレラがみやこから堺へ戻った次第およびそこで起こった事。	1巻13章	第38章	ばあでれが奈良へ赴き、結城殿、外記殿、及びその他の高貴な人びとに洗礼を授けた次第、及び河内国飯盛城内における貴人73人の改宗について。	1巻14章
第39章	沢・余野及び大和国十市城の人びとの改宗について。	1巻15章	第40章	大村もしくは下の誰かほかの殿のところへ足を入れる途はないかと、ばあでれコスメ・デ・トルレスが改めて、いるまんルイス・デ・アルメイダを派遣した次第。	6巻25章
第41章	ばあでれコスメ・デ・トルレスが豊後から横瀬浦へ行った次第、及び、後にドン・バルトロメウと呼ばれた大村殿の改宗について	1巻26章	第42章	ばあでれコスメ・デ・トルレスが横瀬浦から平戸の島々へ行った旅について、またそこで稔った結果について。	9巻1章
第43章	ばあでれコスメ・デ・トルレスが平戸から横瀬浦へ帰還のこと、およびそこで起こったこと	9巻2章	第44章	島原と口ノ津のキリシタン集団の始まりについて。	9巻3章
第45章	たちまち島原の布教に対して迫害が起こり始めた次第。	9巻4章	第46章	島原におけるその他の迫害及びドン・バルトロメウ訪問のこと。	9巻5章

第47章	ばあでれ二人インドから渡来し、そのうちの一人が早速いるまんルイス・デ・アルメイダと共に豊後へ派遣された次第。	7巻27章	第48章	ドン・バルトロメウが撃たれ、横瀬浦は焼き払われ破壊された次第、及びばあでれコスメ・デ・トルレスがこれより前にたてた請願について。	9巻6章
第49章	島原及び口ノ津において続いて起こった災難、及びばあでれコスメ・デ・トルレスが肥後国高瀬へ出発のこと、及びいるまんドゥアルテ・ダ・シルヴァの死去について。	9巻7章	第50章	ばあでれルイス・フロイスがいるまんファン・フェルナンデスと共に度島へ移った次第。	9巻8章
1564年	(永禄7年)				
第51章	ばあでれコスメ・デ・トルレスが口ノ津へ連れ戻された次第、及び島原におけるその他の困難について。	9巻9章	第52章	ばあでれメルキオール・デ・フィゲイレドとジョアン・カブラルとがインドから渡来した次第、および1564年に航海中の彼らの困難について。	9巻10章
第53章	当時豊後での状況。	7巻28章	第54章	今年及び昨年みやこ地方でおこったいくつかの事について。	1巻16章
第55章	ばあでれルイス・フロイスといるまんルイス・デ・アルメイダとが平戸から豊後へ、そこからみやこへ旅立った次第。	7巻29章			
1565年	(永禄8年)				
第56章	彼等〔ばあでれフロイスといるまんアルメイダ〕が豊後から堺へ、そこからみやこへ旅した次第。	1巻17章	第57章	ばあでれフロイスが到着後みやこでおこったこと。	1巻18章
第58章	みやこの町及びその周辺にある見るべき物について。	1巻19章	第59章	いるまんルイス・デ・アルメイダがみやこへ行くまでに堺の町で彼におこった事。	1巻20章
第60章	いるまんルイス・デ・アルメイダが下へ帰る前に五畿内地方にキリシタンを訪問に行った次第、及び彼がそこで見た物について。	1巻21章	第61章	いるまんルイス・デ・アルメイダがなおそれから見た物について、及び彼が堺へ帰るまでに彼におこった事。	1巻22章

(154)

第62章	いるまんルイス・デ・アルメイダが下の諸地方へ出発した次第。	9巻11章	第63章	平戸の肥州が「船」に対して福田へ船隊を送った次第、及びその他下の布教の事ごとについて。	9巻12章
第64章	平戸、大村、及び豊後でおこったいろいろな事について。	7巻20章	第65章	みやこにおける諸般の事情、及び三好殿と奈良の霜台の息子とが、公方様とその母君、弟、及び奥方を弑した次第。	1巻23章
第66章	この闘争の中でみやこのばあでれたちがいた苦境について、また、この二人の暴君が彼らを殺すことを命じた次第。	1巻24章	第67章	ばあでれルイス・フロイスがみやこから追放され、教会と家とが異教徒たちに取られた次第。	2巻25章
1566年	(永禄9年)				
第68章	下で起こったいくつかの事について、並びに五島の島じまの記事と風習。	9巻13章	第69章	いるまんルイス・デ・アルメイダが五島の島じまの改宗を手がけ始めた次第。	9巻14章
第70章	改宗の仕事が遭遇したその他の反対について、及びその仕事を妨害するために悪魔が大いに努めた次第。	9巻15章	第71章	いるまんルイス・デ・アルメイダが帰るまで、更に五島で起こった事について。	9巻16章
第72章	いるまんルイス・デ・アルメイダが志岐島と天草との強化を始めた次第。	9巻17章	第73章	当1566年に大村と平戸で起こった2、3の事について。	9巻18章
第74章	堺でディオゴ了慶の娘モニカに起こったことについて、及び彼女の母が娘の死に先立って改宗した次第。	2巻26章	第75章	堺における諸事のはかどり、及びそこで生まれた成果について。	2巻27章
1567年	(永禄10年)				
第76章	ばあでれルイス・フロイスが堺で日ごろ行っていた事について、及びそこで起こったその他の事ごとについて。	2巻28章			
1568年	(永禄11年)				
第77章	ばあでれを連れ戻すことに関して翌1568年に引続いて起こったことについて。	2巻29章	第78章	かのみやこ地方のキリシタン数人の行いと徳とについて。	2巻30章

(155)

第79章	サンチョ三箇殿が彼の三箇の教会において―ばあでれ、―いるまん及び数人の高貴なキリシタン兵たちのまえでみやこの諸地方の改宗について行った話について。	2巻31章	第80章	平戸におけるいるまんファン・フェルナンデスの死、及び彼の希なるもろもろの徳について。	9巻19章
1569年	(永禄12年)				
第81章	天草諸島の教化に着手するためにいるまんルイス・デ・アルメイダが派遣された次第。	9巻20章	第82章	豊後において教化の仕事が進んだ次第	7巻31章
第83章	信長の素性、性質、権勢、富、及び彼が昇った順位、並びに公方様の復位について	2巻32章	第84章	信長が統治の家庭に行った行為その他の事ごとについて。	2巻33章
第85章	信長が和田殿の好意によってばあでれルイス・フロイスをみやこに連れ戻させた次第。	2巻34章	第86章	ばあでれが副王和田殿の好意によって再び信長と公方様とを訪問した次第。	2巻35章
第87章	ばあでれが信長及びその廷内諸侯の前で、日乗上人と称する僧侶を相手に行った討論について。	2巻36章	第88章	信長の出発後またもばあでれをみやこから追い払うために日乗が講じた手段について。	2巻37章
第89章	信長に援助を求めるためにばあでれルイス・フロイスが美濃国へ行った次第、及び信長がばあでれに示した好意。	2巻38章	第90章	ばあでれが岐阜からみやこに帰った次第、及び引続き和田殿と日乗との間に起こった事。	2巻39章
第91章	日乗が和田殿に対してその悪意を転じた次第、及び日乗死去の次第。	2巻40章			
1570年	(元亀元年)				
第92章	インドから日本の布教長としてばあでれフランシスコ・カブラルが派遣された次第、及びばあでれコスメ・デ・トルレスの死去について。	9巻21章	第93章	いるまんルイス・デ・アルメイダが企てたもう一つの使徒的旅行について、及びその際彼が嘗めた苦労について。	9巻32章
	(元亀2年)				
第94章	和田殿がばあでれ及びキリシタンたちに示した好意、及び彼の不運な死について。	2巻41章	第95章	更に高槻城で起こったことについて、及び日本の布教長ばあでれフランシスコ・カブラルが当1571年にみやこ地方を訪問に来た次第。	2巻42章

(156)

1572年	(元亀3年)				
第96章	ばあでれ2人がインドから渡来した次第、及び尾張のコンスタンチノが行ったこと。	9巻22章			
1573年	(天正元年)				
第97章	巡察師ゴンサロ・アルヴァレスとその伴侶の死について、及び五島の島じまで起こったことについて、またばあでれフランシスコ・カブラルの大きな危険状態について。	9巻23章	第98章	諫早〔氏〕がドン・バルトロメウに反逆した次第、及び彼を陥れた困難ついて、また、長崎の開港について。	9巻24章
第99章	大村のキリシタン2人が信仰を告白したために諫早で遂げた殉教について。	9巻25章	第100章	深堀が長崎を襲った次第、及び彼の敗北と、合戦における彼の不首尾について。	9巻26章
第101章	公方様と信長との間に生じた不和について、及び上京焼失の時教会に起こったこと。	2巻43章			
1574年	(天正2年)				
第102章	ばあでれフランシスコ・カブラルがみやこを訪れた第2回目について、及びそこでさらに生じたこと。	2巻44章	第103章	デウスの教えが高槻に弘まりはじめた次第。	2巻45章
第104章	ドン・バルトロメウが諫早に対して上に述べた戦利を博した後、彼の家臣すべて及び僧侶等の改宗を決意した次第。	10巻27章			
1575年	(天正3年)				
第105章	御上天のサンタ・マリヤと称する最初の教会がみやこに建てられた次第、及びそれが受けた反抗、及び五畿内のキリシタンがその教会に対して与えた援助について。	2巻46章	第106章	豊後の王が彼の次男、及び彼の甥土佐の王一条殿も洗礼を授かった次第。	7巻33章
第107章	ばあでれメルキオール・デ・フィゲイレドが五島の島じまを訪ね、然る後博多の町に居を定めるために遣わされた次第、及びかの筑前国で結ばれた稔りについて。	10巻28章			

(157)

1576年	（天正4年）				
第108章	肥前国高来の屋形義貞ドン・アンデレの改宗について、及びこの人物の性質について。	10巻29章	第109章	更に有馬で起こったこと、及びドン・アンデレの夫人の改宗について。	10巻30章
第110章	ドン・アンデレの死去と当時の高来の布教の不幸な状態とについて、また、有馬の教会の最後、及び有馬の主要な十字架を年切り倒した2人の男に起こった出来事について。	10巻31章	第111章	平戸で起こったことについて。	10巻32章
1577年	（天正5年）				
第112章	当1577年に来たイエズス会の人たちについて、また、ばあでれフランシスコ・カブラルが彼らに指示を与えた次第、及び結ばれた成果について。	10巻33章	第113章	〔田原〕親堅の養子シマン・ショウノシロー殿の改宗のために豊後でおこったこと。	7巻34章
第114章	親堅がこの件において更に行ったことについて、及びシマンの事件が告げた結果について。	7巻35章			
1578年	（天正6年）				
第115章	ドン・アンデレの死去のために衰微していた有馬のキリシタン宗門が再び回復され再興された次第。	10巻34章	第116章	我等の御主デウスがシナから日本へ来た数名のばあでれ及びいるまんを救いたもうた異常な奇跡的大嵐について。	10巻35章

フロイス日本史　第二部　章別記載主旨と中公文庫掲載ヵ所

第二部	記載主旨	中公文庫	第二部	記載主旨	中公文庫
第1章	豊後国主大友殿とその息子義統（よしむね）が、国主がまだ異教徒であった時に、己が諸事、ならびに教会のことでいかに振舞ったかについて。	7巻36章	第2章	国主がイザベルを離別し、別の女性を娶ったこと、彼女のために説教させ、洗礼を授けしめ、彼女がジュリアと名付けられた次第。	7巻37章
第3章	国主がキリシタンとなり、フランシスコの名が与えられた次第。	7巻38章	第4章	嫡子とその夫人が聴いた説教、および彼が同国で命じた幾つかのことについて。	7巻39章
第5章	国主フランシスコが土持に向かって出発した次第、ならびに日本総布教長フランシスコ・カブラル師が同行した次第。	7巻40章	第6章	嫡子が野津に赴いたこと、および豊後におけるキリシタン宗団の進展について。	7巻41章
第7章	嫡子がその妻なる奥方の洗礼に関して行ったことについて。	7巻42章	第8章	野津のリアンの改宗とその家族について。	7巻43章
第9章	嫡子の野津における所業、談話、および誘惑に抗して採った方法について。	7巻44章	第10章	豊後軍が薩摩国主によって撃破された次第。	7巻45章
第11章	日本人修道士ダミアンの死去について	10巻36章	第12章	国主フランシスコが土持より豊後へ、そしてフランシスコ・カブラル師およびその同僚が国主と共に帰った次第。	7巻46章
第13章	国主フランシスコが行った誓願、親賢が行ったこと、新たに豊後の教会とキリシタン宗門に対して迫害が始まったことについて。	7巻47章	第14章	豊後（国主）の嫡子が決意を動揺させ始め、教会から離れて敵と与し始めた次第。	7巻48章
第15章	フランシスコ・カブラル師が、この使者に与えた回答と、本件が進展した次第。	7巻49章	第16章	嫡子が悪習と偶像崇拝に熱中し、人々の改宗に反対することに熱心になった後、教会に対する迫害が生じた次第。	7巻50章
第17章	豊後で我らの同僚たちに生じた他の迫害、および労苦について。	7巻51章	第18章	日本巡察師としてアレシャンドゥロ・ヴァリニャーノが来日した次第、および彼の来日により当地で行われ始めたことについて	10巻37章

第19章	有馬ドン・プロタジオ（鎮純）殿の改宗、ならびにその後高来で生じたことについて。	10巻38章	第20章	この包囲について生じた他の諸事、および巡察師が（ドン・プロタジオ）に与えた援助について	10巻39章
第21章	豊後国で起こった他の暴動について。	7巻52章	第22章	巡察師の豊後への旅と途次の危険、および臼杵修練院に命令を与えた次第。	7巻53章
第23章	巡察師が府内の市で（設立を）命じた学院、および他に生じた幾つかのことについて。	7巻54章	第24章	ドン・バルトロメウ（大村純忠）が生命を失わんとした危険、および平戸のドン・アントニオの死去、ならびに博多の市の破滅について。	10巻40章
第25章	五畿内の諸事の発展、ならびに安土山の神学校について。	3巻47章	第26章	安土山で収めた成果について。	3巻48章
第27章	ジュスト右近殿が信長に投降した時に示した英雄的行為、ならびにその際、オルガンティーノ師とキリシタン宗門が被った大いなる苦悩について。	3巻49章	第28章	信長が荒木一族に対し科した厳罰のこと、ダリオの追放、ならびに三ヶ殿とその息子が被った生命の危険のこと。	3巻50章
第29章	安土山で法華寺と浄土宗との間で行われた公の宗論について。	3巻51章	第30章	巡察師が豊後から都に向かって出発した次第。	3巻52章
第31章	巡察師が都に信長を訪問し、同地から再度、安土山を参観に赴いたこと	3巻53章	第32章	巡察師がフロイス師に命じた越前国への布教について。	3巻54章
第33章	巡察師の命令により、グレゴリオ・デ・セスペデス師が、日本人（パウロ）修道士とともに美濃国で行った別の布教について。	10巻41章	第34章	巡察師の長崎帰還について。	10巻42章
第35章	台湾でジャンクが遭難した次第、および1582年に高来で生じたことについて。	10巻43章	第36章	岩殿なる小島から取り出された偶像のこと、および有家の幾人かのキリシタンについて。	10巻44章
第37章	天草の殿ドン・ミゲルの死、およびルイス・デ・アルメイダ師の薩摩へのたびについて。	10巻45章	第38章	志賀殿が改宗するに至った端緒と動機について。	8巻55章

第39章	美濃国で生じた幾つかのことについて	10巻46章	第40章	信長がその富、権力、身分のために陥った大いなる慢心と狂気の沙汰について	3巻55章
第41章	明智が謀反により、信長、ならびに後継者の息子を殺害し、天下に叛起した次第。	3巻56章	第42章	この騒乱により、司祭、修道士、および安土の神学校が受けた難渋と危険について。	3巻57章
第43章	明智の不運と十一日後の死去について。	3巻58章	第44章	ルイス・デ・アルメイダ師の死去、大村及び長崎でのいくつかの出来事について。	10巻47章
第45章	本年、有馬で生じた若干のことについて	10巻48章	第46章	本年、豊後での出来事について	8巻56章
第47章	神学校が高槻に移り、羽柴（秀吉）が大阪で教会を建てるための敷地を与えた次第。	4巻1章	第48章	（竜造寺）隆信がドン・バルトロメウ（大村純忠）より土地を奪い、キリシタン宗門を破滅させるために行ったことについて。	10巻49章
第49章	ドン・プロタジオ（有馬鎮貴）が、薩摩国主に援助を行い、（薩摩国主が）弟中務殿を彼のところへ派遣した次第。	10巻50章	第50章	有馬殿が中務と島原城を包囲しに行ったこと、および高来における危険について。	10巻51章
第51章	隆信がその軍勢を率いて出発した次第、および彼の兵力と装備について。	10巻52章	第52章	野戦が行われ、隆信が戦死し、その軍勢が壊滅した次第。	10巻53章
第53章	この戦争後、薩摩の国王と殿たちが、ドン・プロタジオに対して行ったことについて。	10巻54章	第54章	高来で引続き生じたこと、ならびにドン・プロタジオが教会に対して示した好意について。	10巻55章
第55章	豊後の妙見城で引続き生じた幾つかのこと、および国主フランシスコがその息子たちに行った一訓話について。	8巻57章	第56章	同年、豊後で生じた他のことについて。	8巻58章
第57章	大阪でキリシタンになった数名の貴人、および羽柴筑前殿のキリシタンに対する幾つかの恩恵について。	4巻2章	第58章	羽柴（秀吉）が三河国王（徳川）家康に対して行った戦争、ならびに俣来衆と雑賀の暴動。	4巻3章
第59章	ローマの我らの総長が、日本の司祭、修道士に宛てた一書簡。	10巻56章	第60章	当1585年に下の地方で引続き生じた幾つかのことについて。	11巻57章

第61章	本年、豊後での改宗に際して生じた幾つかのことについて。	8巻59章	第62章	豊後での改宗に際して生じた他の幾つかのことについて。	8巻60章
第63章	志賀ドン・パウロの改宗、および彼がキリシタンになる際の騒擾と苦難について。	8巻61章	第64章	ドン・パウロへの迫害と反抗について。	8巻62章
第65章	ドン・パウロに対する迫害と反抗が進展した次第。	8巻63章	第66章	大阪城と新市街の建設について。	1巻4章
第67章	(羽柴) 筑前殿が根来宗と呼ばれる仏僧ら、および雑賀の仏僧らに対して行った戦争について。	1巻5章	第68章	羽柴が勝利を博してこの戦争を終結するにあたって採った方法、ならびに太田城なる雑賀の主城を接収したことについて。	1巻6章
第69章	本年、大阪でキリシタンになった数名の貴人について。	1巻7章	第70章	日本のもっとも優れた学者の一人で重立った医師である都の住人曲直瀬道三の改宗について。	3巻59章
第71章	本年、府内とその田舎で改宗した人々、および嫡子の戦争における不首尾について。	8巻64章	第72章	豊後の改宗において生じたことについて	8巻65章
第73章	副管区長が、都と豊後を訪れるために下の地方を出発た次第。	11巻58章	第74章	関白の権力、ならびに彼が大阪城で行ったことについて。	4巻8章
第75章	副管区長が大阪に関白を訪れたときの関白の歓待と恩恵について。	4巻9章	第76章	関白のはなはだ重要な特許状が作成された次第、ならびにさらに五畿内で生じたことについて。	4巻10
第77章	グレゴリオ (デ・セスペデス) 師が小豆島で行った布教、及び五畿内地方で生じた異常な地震について。	3巻60章	第78章	副管区長が伊予国へ、同所からさらに豊後へ赴いた次第。	11巻59章
第79章	堺において (日比屋) ディオゴ了珪の兄弟ガスパル・ジョインが殺され、ついでにこれにより関白が不法にも了珪の婿ルカス宗礼を磔刑に処した次第。	4巻11章	第80章	副管区長の司祭と豊後の嫡子との間に生じたこと、および国王フランシスコが関白の許へ薩摩に抗するための援助を乞いに赴いたこと。	8巻66章

第81章	副管区長が下関に帰ったこと、山口での布教が命ぜられたこと、司祭が関白殿の軍勢の総司令官小寺官兵衛殿に会ったこと、および彼が行った恩恵について。	11巻60章	第82章	改宗に関する黒田官兵衛殿の熱意と信心について。	11巻61章
第83章	薩摩 (国王) の息子たち、貴人らが、デウスの教えや司祭たちに対して抱いていた憎悪、ならびにこれに関して本年生じたことについて。	11巻62章	第84章	豊後国の破滅が始まった次第。	8巻67章
第85章	敵が臼杵に到着した次第、ならびに我らの身に生じ始めた困苦について。	8巻68章	第86章	府内の学院、および臼杵の修練院の司祭や修道士たちが豊後国を退去するに決した次第。	8巻69章
第87章	豊後の最後の破壊、および本年当初の出来事について。	8巻70章	第88章	都地方に生じた幾つかのことについて。	4巻12章
第89章	豊後の嫡子の改宗、本年、キリシタンになった他の貴人ら、およびイザベルの死去について。	8巻71章	第90章	ドン・バルトロメウ (大村純忠) の逝去、フランシスコ・パシオ師が尾張で行った伝道について。	11巻63章
第91章	本年の復活祭の折に山口で生じた一事件について。	11巻64章	第92章	副管区長が本年、伊予の国へ布教することを命じた次第。	11巻65章
第93章	薩摩国に対抗し、関白が下の地方に向かい出発したことについて。	4巻13章	第94章	副管区長が肥後八代に赴き、そこで関白を訪問したこと、およびさらに生じたことについて。	4巻14章
第95章	国主フランシスコ (大友宗麟) の死去について	8巻72章	第96章	副管区長が博多に赴いたこと、およびそこで彼が関白殿を訪問した次第。	4巻15章
第97章	関白 (秀吉) 殿が、司祭、教会、ならびにキリシタン宗門に対して迫害を始めた次第。	4巻16章	第98章	関白が (高山) ジュスト右近殿を追放したこと、および彼が信仰と徳操について英雄的な模範を示したことについて。	4巻17章

第99章	暴君が教会、司祭たち、およびキリシタン宗門に対して命じたことについて。	4巻18章	第100章	迫害を知って五畿内の司祭らが平戸に向かったこと、および報せを聞き、同地方のキリシタンが行ったことについて。	3巻61章
第101章	山口および伊予国の司祭たちが平戸に赴いた次第。	11巻66章	第102章	豊後に滞在していた司祭たちが、すべて退去した次第、ならびに副管区長が密かに同地へ二名の司祭と二名の修道士を再び派遣した次第。および同所で生じたことについて。	3巻73章
第103章	暴君が博多から大阪へ帰った後に生じたことについて。	4巻19章	第104章	アルヴァロ・ディアス師が高来に派遣された次第、および伊佐早が自らの復権のために行ったこと。および五島の布教について。	11巻67章
第105章	長崎で開催された会議、ならびに関白のこの迫害に関する議論について。	11巻68章	第106章	丹後の国の貴婦人にして明智（光秀）の娘であり、異教徒（細川）越中殿の奥方なるガラシャの改宗について。	3巻62章
第107章	後にジャコペと称した大矢野殿とその島々、および家臣たちの改宗について。	11巻69章	第108章	暴君の迫害が進行中に高来で生じ始めた成果について。	11巻70章
第109章	高来での改宗の経過、およびペドゥロ・ラセン師の筑後の国における布教について。	11巻71章	第110章	フランシスコ・ガルセスが、暴君（秀吉）に、その意図を思い留まらせ得るかどうか窺うために、贈り物を携えて大阪に彼を訪れた次第。	5巻20章
第111章	オルガンティーノ師から届いた別の諸書簡について。	3巻63章	第112章	当1588年に豊後で引続き生じた幾つかのことについて。	8巻74章
第113章	下において生じた他の労苦と新たな不安について。	11巻72章	第114章	本年の天草における成果、ならびに千々岩で生じた他の事件について。	11巻73章
第115章	下で起こった他の幾つかのこと、およびジュスト右近殿が高来に到着したことについて。	11巻74章	第116章	暴君関白が当1558年5月に行った祝典と偉業について。	5巻21章

第117章	ジョゼ・フォルナレート師が、キリシタン宗団の司牧のために派遣された五島の島々から書き寄こした大いに教化的な幾つかのことについて。	11巻75章	第118章	五島の数人の婦人の大いなる徳操について語るジョゼ（・フォルナレート）師の同書簡の続き。	11巻76章
第119章	本年の日本の少年神学校の状況、ならびに当1588年に受洗した人々について。	11巻77章	第120章	都地方の幾つかのことについて	3巻64章
第121章	豊後国主吉統が1588年にキリシタンに対して行った他の迫害について	8巻75章	第122章	豊後の背教した国主吉統が、ジョランを初めとして七名のキリシタンに殉教死を命じた次第。	8巻76章
第123章	山口において、司祭や修道士たちが同市を立ち去った後に生じた幾つかの顕著なことについて。	11巻78章	第124章	本年五島で生じたことについて	11巻79章
第125章	筑後の国の久留米城のこと、および下の他の地方について	11巻80章	第126章	主が会の一司祭を通じて、古賀、日見、長与の諸城、および他の地方で上げ給うた成果について。	11巻81章
第127章	加津佐で生じた幾つかのこと、および本年の成果について。	11巻82章	第128章	千々岩、口之津、島原、及び有馬でのいくつかのことについて。	11巻83章
第129章	有家の学院と同地における成果について。	11巻84章	第130章	大矢野島、天草について、および栖本殿ならびにその全家臣の改宗について。	11巻85章
第131章	豊後で生じたこと、ならびに同地に駐在する司祭の追放について。	8巻77章	第132章	豊後国主吉統が、すべての司祭を同国外へ放逐した次第。	8巻78章

フロイス日本史　第三部　章別記載主旨と中公文庫掲載ヵ所

第三部	記載主旨	中公文庫	第三部	記載主旨	中公文庫
第1章	巡察師アレシャンドゥロ・リニャーノが（イエズス）会の他の司祭、修道士たち、およびローマに赴いた四人の貴公子たちを伴って日本に到着した次第。	11巻86章	第2章	本年、布教のことで生じた幾つかの特別なことについて。	11巻87章
第3章	有馬の地の小浜で見いだされた聖なる十字架について。	11巻88章	第4章	日本副管区長ガスパル・コエリュ師の逝去と有馬において行われた同師の盛大な葬儀について。	11巻89章
第5章	本年、大村とその他の地で起こった幾つかのことについて。	12巻90章	第6章	天草、志岐のこと、および本渡城の破壊、同所における三百人のキリシタン夫人の英雄的で永久に記憶すべき行為について。	12巻91章
第7章	上津浦での改宗、および柄本、平戸、ならびに五島でのいくつかのことについて。	12巻92章	第8章	豊後で生じた幾つかのことについて。	8巻79章
第9章	都地方に関すること、ならびにその状態について。	3巻65章	第10章	関白が坂東での戦争に勝利を収め、全日本66ヵ国の絶対君主となった次第。	5巻22章
第11章	日本で最初にイエズス会員に採用された日本人ロレンソ修道士の死去について。	12巻93章	第12章	巡察師（ヴァリニャーノ）がインド副王ドン・ドゥアルテの関白に対する使命を帯びて長崎を出発し、都への旅路についた次第。	5巻23章
第13章	巡察師の室（むろ）における遅滞と逗留により生じた効果と利益について。	5巻24章	第14章	巡察師（ヴァリニャーノ）が室を出発して大阪に上陸し、そこから都に向かった次第。	5巻25章
第15章	関白殿に（インド副王からの）使命が伝達された次第、ならびに彼が巡察師とその同伴者一同に供した饗宴のこと。	5巻26章	第16章	関白の宮殿（聚楽亭）とその結構、ならびに日本の建築物が我がヨーロッパのそれに優り、もしくは劣ることについて。	5巻27章

(166)

第17章	関白が（副王）使節を帰らせるよう命ずるに決した次第、およびその時に彼が述べた幾つかのこと、ならびに（使節のことから）生じた利益について。	5巻28章	第18章	多数の人々が巡察師を訪ねてきたこと、およびかの（都）地方のキリシタンが、司祭なしに信仰をよく保ち得た次第。	3巻66章
第19章	巡察師が都から下の地方へ帰った次第、および平戸で彼の身に生じたこと。	12巻94章	第20章	教皇聖下が日本の四貴公子を通じて贈り給うた聖木十字架、剣、および帽子を、巡察師が有馬においてドン・プロタジオに手交した式典について。	12巻95章
第21章	（毛利）壱岐守が他の代官とともに、司祭およびキリシタン宗門に対して加えた新たな迫害について。	12巻96章	第22章	この迫害のため、学院、神学校、修練院が移転した次第、ならびにこの厄介な転居の中で、これらの殿たちが示した愛情について。	12巻97章
第23章	我らの同僚たちが営めた他の労苦、危険、苦痛、ならびに日本の四貴公子が全てイエズス会に入会することを決心した次第。	12巻98章	第24章	司祭およびキリシタンたちが長崎で営めた他の労苦および大きい苦痛について。	12巻99章
第25章	関白が贈答品についてジョアン・ロドゥリーゲス修道士と語った諸事、および巡察師アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノが関白のところへ齎した使命に着き関白が抱いていた妄想を修道士が除去した次第。	5巻29章	第26章	関白がインド副王に宛てた書簡、ならびに彼に呈した贈物のこと。	5巻30章
第27章	名護屋で行われた事業、薩摩の殿の反乱、及び関白が（高山）ジュスト右近に対し、自らの前にまかり出る許可を与えた次第。	5巻31章	第28章	福田の地で他の新たな十字架が現れた次第、ならびに下の他の地で生じた種々特別なことについて。	12巻100章
第29章	他の特筆すべき幾つかのこと、および豊後国におけるある布教と山口における他の布教について。	12巻101章	第30章	都から他の地方に対して行われた第二回目の布教について。	3巻67章

(167)

第31章	マニラから関白殿の許に来た使節のために、下、特に長崎において、我ら、及びキリシタンの上に降りかかった恐るべき苦難について、また長崎の教会と修道院が破壊された次第。	5巻32章	第32章	我らの主なるデウスが、既述の混乱を罰するのを長く延期されなかった次第。	12巻102章
第33章	デウスが先の艱難の苦痛を緩和するために、司祭たちに与え給うた幾つかの慰安について。	12巻103章	第34章	長崎の教会と修道院が再建されたこと、および幾つかの労苦と損失が続いて生じたこと。	12巻104章
第35章	我らの主なるデウスが、寺沢と関白の心を動かし給い、彼らが長崎で修道院と教会を建築する既述の許可を与えたことについてのさらに詳細な記述。	12巻105章	第36章	当1593年に大村で生じたことについて。	12巻106章
第37章	本年、有馬と八良尾の神学校で生じたことについて。	12巻107章	第38章	天草の学院とその司祭館について、および本年、この迫害に関して生じたことについて。	12巻108章
第39章	当1593年に豊後で生じたことについて。	8巻80章	第40章	当年、都地方で生じたことについて	3巻68章
第41章	この頃に行われた幾つかの布教による成果について	3巻69章	第42章	他の布教による成果について。	12巻109章
第43章	ローマに赴いた伊東ドン・マンショの従兄弟で日向の本来の国主なる伊東ドン・バルトロメウとその兄弟ゼロニモが、朝鮮から病気で帰り逝去した次第。	12巻110章	第44章	関白が日本帝国の絶対君主になった後に行った幾つかの偉大にして豪壮なことについて。	5巻33章
第45章	関白がシナを征服しようとした次第、ならびに甥を後継者とし、自らは関白の顕職を引退し、その称号を彼に与えたこと。	5巻34章	第46章	この企て（シナの征服事業）における日本諸侯の苦難、ならびに関白がその実行を容易にするために、先ずシナと隣接する朝鮮を武力を以て征服しようと決意した次第。	5巻35章

(168)

第47章	朝鮮国の描写、およびアゴスチイノ（小西行長）がその艦隊を率いて先発した次第。	5巻36章	第48章	朝鮮に向けて出発したアゴスチイノが、ついで幾つかの城を攻撃し、大いに苦労して、軍勢を以てそれらを屈服せしめたこと、ならびにそこで彼が獲得した名誉について。	5巻37章
第49章	アゴスチイノが朝鮮の都に入るに先立って生じたこと。	5巻38章	第50章	関白が朝鮮に渡ることが回避された次第、ならびに日本人側の戦闘力が衰微し、悪化していった次第。	5巻39章
第51章	シナ軍と遭遇したアゴスチイノが野戦を交え、彼等から勝利を博したことについて	5巻40章	第52章	シナ軍が日本軍と交えた他の戦闘、ならびに種々の出来事について。	5巻41章
第53章	兵士らがアゴスチイノに平安（平壌）を放棄するよう説得したこと、およびそれに関する他の出来事について。	5巻42章	第54章	日本軍が（朝鮮の）都を放棄したこと、ならびにアゴスチイノが和平と協定を議するために、二名のシナの使節を伴って名護屋に赴いた次第。	5巻43章
第55章	関白が使節に与えた回答、およびその後アゴスチイノが朝鮮軍から得た幸運な勝利、ならびに尊他の出来事について。	5巻44章	第56章	関白殿が命じた幾つかのことについて（1593年）	5巻45章

(169)

君なんぞ高歌・沈吟せざるや

鯨游海

およそ数多く存在する世界の文字の中で、もっとも詩歌に適したのは漢字であろう。表意文字であるからだ。しかも漢字は一字一母韻という稀な特性を持つ。多数の漢字の羅列は整然と揃い、荘重な構成美を成す。定型詩の独擅場である。

漢字文化を遺伝子に刷り込んできた我々日本人。漢文脈の訓読の文語文は緊張とエネルギーに満ち溢れ詩吟に昇華した。「菊を采る東籬の下　悠然として南山を見る」この美しい一句に陶然としない人は居まい。七五調の快適なリズムを有する文語文の美しさ！

これら名句名吟を「きみ　なんぞ高歌し　将たなんぞ沈吟せざるや」・・・

菊を采る東籬の下　悠然として南山を見る

采菊東籬下　悠然見南山

政争うずまく官職を辞して故郷に帰り、晴耕雨読した陶淵明。自らに忠実に生きた人。

一切の現世の俗塵から逃れて超然と生きようとした姿に、現代人は改めて自己の生き方を反省させられる。彼は田園詩の祖である。

当時の風調であった文章の美辞麗句、形式に拘わった四六駢儷文を排し改革しようとした。平易な字句に努めたがその含蓄は深い。

詩の形式は五言古詩。全十句中の五六句の聯である。淵明はペンネーム、本名は潜。

貴兄が勤務を終え故郷に帰ったとき、幼少時から慣れ親しんだ山影は無条件で抱擁してくれるであろう。この詩の結びの聯（尾聯）も素晴らしい。「此の中に眞意あり弁ぜんと欲して已に言を忘る」。

飲酒・陶潜（晉）

空山人を見ず　但だ聞く人語の響き

空山不見人　但聞人語響

人の気配がない山間の林の中、突如人の声が聞こえた。

読者諸兄にも遠い少年の日、或いは旅に出た孤独な一時、こんな情景に出逢ったことがあるような、おぼろげ乍ら想い出す情景ではなかろか。

仏教に帰依し、絵画をも得意とした王維の面目躍如たる絵画的、哲学的な絶唱である。

詩の後聯もまさに一幅の絵である。

「返景　深林に入り
復た照らす　青苔の上」

返景とは夕陽のこと。詩題の鹿柴は囲いの柵。彼は李白が詩仙、杜甫が詩聖と称されたのに並び、詩仏と尊称された。

盛唐が生んだ第一級の知性派の芸術家だった。

鹿柴・王維（唐）

花発いて　風雨多く
人生まれて別離足る

花發多風雨　人生足別離

せっかく咲いた花なのに、風や雨嵐で儚なく散ってしまう。これが避けることの出来ない大自然の定めなのだ。

同様に人もせっかくこの世に生まれてきて、多くの人々と交りを持つけれど、結局の所は別れが待っているのだ。これが人生というものだ。これが世の定めなのだ。

見事な、哲学的でさえある対句ではないか。この詩を超訳して井伏鱒二は

「ハナニアラシノタトエモアルゾ
サヨナラダケガジンセイダ」

と慨嘆した。美しい語句の中に別離の情がほとばしる。因に前聯は別れの酒を勧めている。

「君に勧む　金屈巵（金色に輝やく盃）
満酌辞するなかれ」。送別に酒は欠かせぬ。

勧酒　于武陵（唐）

飛流直下三千尺
疑うらくは是れ
銀河の九天より落つるかと

飛流直下三千尺　疑是銀河落九天

奔ばしり流れ落ちる豪快な三千尺にも達する滝。これこそ正に天上の銀河が帯となって地上に降り注いでくるようにみえる。

瀑布の壮観を一気呵成に、奇想天外の発想で奔放に歌い上げた。

いかにも李白らしい雄渾な、盛唐を謳歌しまた象徴する絶唱である。

九天とは天を九つに区分した内の一番高い所。三千は滝の高さを強調する数字であり、勿論実際の高さではない。白髪三千丈も同様である。

漢詩はこのように数字を巧に使いこなした芸術であり、三や八は我が国と同じであるが適当な概数の表現によく使われる。嘘八百、八百八橋、母を尋ねて三千里等。

望廬山瀑布・李白（唐）

酔うて沙場に臥すとも君笑うこと莫かれ
古来征戦幾人か回る

醉臥沙場君莫笑　古來征戰幾人回

たとい酒に酔いしれて倒れこんでいたとしても、どうか私を笑ってくれるな。

明日戦場に往く私は再びは生還しない身なのだから。

戦場の第一線に向かう前夜の兵士の悲痛な叫び。「幾人か回る」は反語で、誰一人回らない。先の戦争に於ける特攻隊員の気持ちと全く同じであろう。為政者に、安倍やトランプや金にこの詩を読んで貰いたい。

この詩の起句も素晴らしい。

「葡萄の美酒　夜光の杯」

華麗な字句だけに後聯の残酷さがよりきわだつのだ。しかもエキゾチックなロマンと気品がそこはかとなく漂う名吟。

古今を通じ第一級の詩である。

涼州詞・王翰（唐）

風蕭々として易水寒し
壮士一たび去って復た還らず

風蕭蕭兮易水寒　壯士一去復不還

司馬遷の史記・刺客列傳に出てくる名場面である。

弱小国の燕は大国秦に攻められ、滅亡寸前の危機的状況に瀕していた。

燕の太子だった丹は、秦の始皇帝に刺客を送ろうと画策し、その大役を荊軻に託す。

元より生きて還れない決死行。

いよいよ出発の朝、少数の見送る同志の前で発した悲壮な叫びであった。

荊軻は義に感じてこの大役を自ら買って出たのである。こういう男の中の男を壮士というのだろう。勿論テロは論外だが。

事は事前に露見し彼は斬殺されて了う。

さて平成の日本に果たして壮士は存在するのだろうか。せめて政界に一人位は居て欲しい。

渡易水歌・荊軻（燕）

雲か山か　呉か越か
水天髣髴　青一髪

雲耶山耶呉耶越　水天髣髴青一髪

江戸時代は漢詩が日本文学史の中で大きな隆盛を極めた時であった。

多くの漢詩人が叢生したが、その代表的な一人が頼山陽である。これはその代表作。

起句は見える筈のない中国大陸の地を、長崎の天草灘から遠望して詠んでいる。

遥か水平線の彼方に見えるのは「一体雲なのか山なのか。或いは呉の国なのか越の国なのか。唯だ髪の毛ほどの一本の細く薄い線がぼんやりと看えるばかりだ」

余りにもスケールが大きく、詩的誇張もそれと感じさせない字句の魔力に酔いしれてしまう。七言古詩。六句中の二四句である。

なお「青一髪」は宋の蘇軾の詩「青山一髪是中原」より借りている。

泊天草灘・頼山陽（江戸）

孤舟簑笠の翁
独り釣る寒江の雪

孤舟簑笠翁　獨釣寒江雪

白と黒、静寂と寒冷と孤独の世界。

この前聯も素晴らしい。

「千山　鳥飛ぶこと絶え
万径　人蹤滅す」

人蹤は人の足跡。即ち雪に覆われた静謐の世界。漠然とした遠景からズームアップして一点の人影に焦点が絞られる。厳しく孤高の水墨画を見るようだ。

絶、滅、雪と効果的な仄声の音で押韻している。音声的にも寂寥感がきわ立つ。

漢詩の多くは平声の音で押韻されるが、この詩は珍しく仄声を以って韻とした。平声は明るく伸びやかな響き—平、明、陽、光、清等なのに対し、仄声は暗く切迫した声調となる。例えば急、迫、暗、絶、滅・・・。

江雪・柳宗元（唐）

頭を挙げて山月を望み
頭を低れて故郷を思う

擧頭望山月　低頭思故郷

ふと夜空を見上げると山の端に掛かった皓々たる月があった。そのうちに自然と頭が低れ下り、久しく帰っていない故郷の山とそこに掛かる月を思い出し、万感の懐いに耽った。

平易な語と単純な動作を述べただけであるのに、何か不思議な感傷を呼び覚ます。前聯の導入部も単純明快、且つ清冽な印象を放っている。すなわち

「牀前　月光を看る
疑ごうらくは是れ　地上の霜かと」

牀はベッド。霜が一面に降りたかと錯覚するほど月光が明るく輝いている。

改めて詩仙李白の力量を思い知る作品。

今宵、貴兄も李白が看た同じ月を仰ぎ看てみませんか。

静夜詩・李白（唐）

洛陽城東桃李の花
飛び来たり飛び去って誰が家にか落つる

洛陽城東桃李花　飛來飛去落誰家

洛陽の街の東、咲き誇る春爛漫の桃や李。

一体あの花びらは群舞しつつ誰の家に散り落ちるのであろうか。

甘美な、そこはかとない感傷を誘う名句である。文人：好達治は少年の頃「この辞句の美しさにうたれて唯だ茫然とした」と書いてある。

七言十三聯二十六句の長編古詩。この冒頭の書き出しの二句。この詩の中程、第六聯も有名な句である。

「年年歳歳　花相似たり
歳歳年年　人同じからず」

明治、大正、昭和前半、漢文が正課として盛んだった頃、多感な旧制中学校の生徒たちはこの幻想的な美文に魅せられ漢詩漢文—中国古典文学の道に進んだ人も多かったらしい。

代悲白頭翁・劉希夷（唐）

眸を廻らして一笑すれば百眉生じ
六宮の粉黛顔色なし

廻眸一笑百媚生　六宮粉黛無顔色

眸を廻らせてほほ笑むと、凡ゆる媚態が現れ、宮殿に住まう大奥の女官たちは楊妃の美しさに圧倒され、自然とうつむいてしまうのであった。粉黛とは「お白粉と黛」で美人の事。

白楽天の代表作「長恨歌」の一節。中国はもとより菅原道真、紫式部、清少納言ら日本人にも愛誦された八四〇字もの長篇叙事詩。

白楽天は意識して易しい語句を用い読み手に判り易い詩を作った。この為日本人にも理解し易くかつ玄宗皇帝と楊貴妃とのロマンスに満ちた物語り性、そして哀しい結末に至る歴史的事実とも重なり、平安時代から近年まで長く愛誦される名作となった。

また残された文章から想像するに楊貴妃とはマリリンモンローのような魅力的な女性だった。

長恨歌・白居易（唐）

人生意気に感ず
巧名誰か復た論ぜん

人生感意氣　巧名誰復論

人は自分を理解してくれる相手に感激し、その人の為に働くものだ。

俗世の成功や名誉など誰が問題にするものか。

作者の魏徴は、隋末の乱世の戦いに従軍した軍人で唐王朝の創建に尽力した。同時に優れた行政官、文人でもあった。わが国でいえば大山巌、東郷平八郎、乃木希典を合わせた才能の持主ともいえようか。教養豊かな大人物！

この格調高い詩は「唐詩選」の冒頭を飾る。

起聯の「中原に鹿（覇権）を逐う　筆を投じて戒軒（軍事）を事とす」も名句であろう。

天下が復た乱れ、英雄豪傑が競う中、自ら筆を捨てて人民の為に、李淵（高祖）と李世民を助けた忠臣であった。今の日本にも誰か一人の魏徴が居ないのだろうか。

述懐・魏徴（唐）

漢詩

汲深録（十四）

松井秀人

兒飛燕

（飛燕を見る）

平成三十年六月

早暁茅廬綠樹烟
頡頏乳燕小窗前
喃喃黃口噪巢裡
不日飛翔千里天

早暁の茅廬　緑樹の烟
頡頏　乳燕　小窓の前
喃喃　黄口　巣裡に噪ぐ
不日　飛翔　千里の天

押韻・烟　前　天

〔注　解〕

頡頏＝鳥が飛び上がり、飛び降りる。
乳燕＝燕の雛。子育てをしている燕。
喃喃＝小さな声で絶えずしゃべるさま。
黄口＝黄色い口先。鳥の雛をいう。
不日＝間もなく。日数が多くかからぬこと。

〔口語訳〕

茅葺きの家が、早朝の緑樹のもやの中にあって、その小窓の前では、子育ての親燕が、雛鳥に（餌を与えようとして忙しく）飛びまわっている。

黄色い口ばしの雛鳥は巣のなかで、（餌をせがんで）鳴き噪いでいる。

（その雛鳥もいつまでも巣の中に留まるのではなく）そのうちに遠くに飛び立っていくことだろう。

新筍過軒

（新筍　軒を過ぐる）

平成三十年六月

晩雨蕭蕭潤竹林
過軒新筍翠逾深
傳聞一夜伸千尺
倚几閑聽簷滴音

晩雨蕭蕭　竹林を潤す
軒を過ぐる新筍　翠　逾よ深し
伝え聞くところ　一夜に千尺の伸
几に倚りて閑かに聴く　簷滴の音

押韻・林　深　音

〔注　解〕

晩雨＝夕方の雨。
蕭蕭＝風雨がものさびしい様子や音声の形容。
新筍＝新しいたけのこ。
唐の李賀の七言絶句：〔昌谷北園新筍〕の転句に、「更容一夜抽千尺」がある。
几＝机。
簷滴＝軒から落ちる雨だれ。

〔口語訳〕

晩雨がものさびしく竹林を潤していて
軒をこえる新筍は、翠がいよいよ深いものになっている。
伝え聞くところでは、新筍は一夜に千尺伸びるというが
机に倚りかかり、雨だれの音を閑かに聴いていよう。

蛙聲呼雨

（蛙声　雨を呼ぶ）
平成三十年六月

曳杖尋來日暮園　杖を曳き　尋ね来たる　日暮の園
蛙聲閣閣沼濱喧　蛙声閣閣　沼浜喧びすかし
相呼陰雨濛濛裏　相い呼ぶ陰雨　濛濛の裏
幽徑泥深没屐痕　幽径泥深く　屐痕没す
押韻・園　喧　痕

〔注　解〕
閣閣＝蛙の鳴く声の形容。
陰雨＝雨が降ること、また、降る雨。
沼濱＝沼のみぎわ。
幽徑＝人けのない静かなこみち。
屐痕＝はきものの痕。

〔口語訳〕
杖を曳いて日暮に園に来てみると、沼のみぎわで、蛙の鳴く声がやかましい。呼び合う雨は濛濛としていて、人けのない静かなこみちは泥が深くて、履き物の足痕は沈んでしまう。

避暑偶吟

（避暑偶吟）
平成三十年八月

赫赫炎陽三伏天　赫赫たる炎陽　三伏天
山莊避暑北窗前　山荘に暑を避け　北窓の前
丁東鈴韻催詩興　丁東鈴韻　詩興を催す
獨坐閑吟涼机邊　独坐して閑吟すれば　涼　机辺
押韻・天　前　邊

〔注　解〕
赫赫＝熱気のさかんなさま。日照りのさま。
炎陽＝夏の時候。夏。
三伏天＝盛夏の時候。
丁東＝風鈴やかんざしなど、金属製のもののふれあう音の形容。
鈴韻＝風鈴の音。

〔口語訳〕
熱気のさかんな夏、盛夏の時候の空だ。
避暑のために山荘に出かけ、（涼しい）北窓の前にいる。すると風鈴の音がして、詩興を催してきて独りで詩を吟じていると、机の周辺が涼しくなってきた。

中秋賞月

（中秋賞月）
平成三十年九月

西風颯颯一涼生　西風颯颯　一涼生じ
露滿中庭秋氣清　露は中庭に満ちて　秋気清し
光入酒杯明月下　光は酒杯に入る　明月の下
賞心不盡到深更　賞心は尽きず　深更に到る
押韻・生　清　更

〔注　解〕
賞心＝けしきをめでる風流な心。
深更＝夜ふけ。深夜。

〔口語訳〕
西風がさっと吹き、涼しさが生じ露は中庭に満ちて、秋の気配が感じられる。月の光が酒盃に写り、（見上げれば）月が出ていて月をめでる風流な心は尽きることなく、（いつの間にか）深夜になっていた。

古い物・遠い夢

忠内正之

名品歴々（茶道史余滴）〈二〉

油滴天目茶碗

油滴天目茶碗　建窯　南宋　国宝

今回採り上げるのは、国宝・大名物、油滴天目茶碗である。（大名物は利休以前の茶道具で最高位のものを言う）

天目とは、黒色あるいは褐色の釉が掛かり、天目形と呼ばれる特色のある形状をしている中国産の茶碗である。

産地や窯変によって、曜変、油滴、禾目、灰被などの種類に分けられている。

日本でもこれをまねて、鎌倉時代以降、瀬戸や美濃を中心に瀬戸天目、菊花天目などが焼かれているが、質、量共に遠く及ばない。

油滴天目茶碗で国宝となっているのは、本件一つのみである。

この茶碗の「実見記」が大正名器観に載っているので覗いてみたい。

「伝来」豊臣秀次→西本願寺→三井八郎右衛門→若州酒井家。

「寸法」高七・一cm　口径一二・四cm　金覆輪　高台径三・九cm

「実見場所」大正八年六月二日、東京市牛込区矢来町酒井忠道伯邸に於て実見す。

「形容・釉景」金覆輪、内外共に黒地に銀切箔を蒔きたるが如し、色彩の精美言語に絶せり。外部裾廻り釉溜り厚く、高台廻り鉄気色の土を見せ、底縁蛇の目の如く段を成す。総体無疵、此種の天目中稀世の絶品と謂うべし。

以上が大正名器観による高橋箒庵の実見記である。

中国の宋から元時代にかけて、現在の福建省建陽にあった建窯や、江西省吉安にあった吉州窯では黒釉の陶器が量産された。

中国の禅宗寺院で使用されていた、そのような椀を浙江の天目山に学んだ日本の留学僧たちが持ち帰ったと伝わり、日本では茶碗をはじめ黒釉が掛かったやきものを、やがて広く天目と呼ぶようになった。

そのなかで、釉中に虹のような七色の光を放つ斑文が浮んだ建窯産の茶碗がある。そのキラキラとした斑文の輝きから、「耀変」又は「曜変」と表わすようになったと考えられている。

足利将軍家における唐物の評価とその飾り方を説いた「君台観左右帳記」によれば、曜変は「世上に無き物」と高く評価された。現代世界中にその名品は三つだけあり、すべてが日本に存在し夫々が国宝に指定されおり、所蔵されている所からの移動は考えられない。

三つの中で随一の美しい曜変天目茶碗が稲葉天目であり、現在三菱系の静嘉堂文庫に納っている。

本題とする油滴天目茶碗は同時代に同じ建窯で焼かれたもので、釉中に浮き上がってみえる小さな金銀色の斑文が、水に浮かぶ油の滴のようにみえるところから「油滴天目」と呼ばれるところとなった。油滴は「君台観左右帳記」において、天目のなかで曜変に次ぐ高い評価が与えられている。

この油滴天目茶碗は伝世の油滴天目のなかでも白眉と位置づけられており、唯一国宝に指定されている名品中の名品である。

写真に掲げるのが本件の油滴天目茶碗である。現在は大阪市立東洋陶磁美術館に所蔵されている。

筆者は、平成二十九年四月、東京国立博物館で開催された、「茶の湯特別展」で幸いにも、両天目を一度に観ることのできる機会に恵まれた。

茶の湯特別展での第一の展示品は国宝曜変天目茶碗、銘「稲葉天目」であり、第二の展示品が、国宝「油滴天目」となっており硝子越しながら具に拝見することができた。そして両者の華麗な姿に圧倒される程の感動を受けたのであるが、第一の曜変天目よりはむしろ、第二の油滴天目に強く魅せられたのである。

たしかに曜変天目は美しい。この世のものとも思えない程変幻自在の妖艶さがある。

あまりの変化の美しさのために、中国では不吉の兆として敬遠されたとも言われている。

之に対して油滴天目はきらびやかさでは劣るものの、夜空に整然とした銀河系を見るように美しい。自然に現れた文様と思うが見れば見るほどその端麗さに見惚れてしまう。筆者はこの油滴の方により惹かれるのである。

惹かれる理由は、形状の好みによるところも大きいが、更に伝来によれば、この茶碗を最初に愛玩した人物が、あの悲劇の主人公である豊臣秀次（一五六八―一五九五）だと聞くからである。そこで秀次の物語りを中心として、この茶碗の数奇な旅路を辿ってみたい。

（一）

この美しい天目茶碗を、関白豊臣秀次が手に入れた。だれかの献上によるものかも知れないが記録もなく、秀次以前のその茶碗の所有者は皆目不明とされる。

秀次は自分ではあまり茶の湯をたしなまないが、この油滴天目を所持していることだけは大いに自慢でありしかるべき客人には必ず見せた。

漆黒の釉が厚くかかり、天空に輝やく星群とも思われる油滴がびっしり現われている。油滴の一粒一粒が放つ光を丹念に見つめていると、心が吸い込まれるような感動を覚えるのであった。

秀次は、茶室ではなく座敷の方へ油滴天目を運ばせて、飽かずに眺めていることがよくあった。

秀次は、もとは三好秀次と言った。父は三好吉房。その妻、つまり秀次の母の日秀は豊臣秀吉の姉である。賤ヶ岳の合戦で武勲を挙げ、叔父秀吉の気に入られた。更に秀吉の紀伊、四国攻めの戦いにも功績があって、その後、近江四十三万石を賜った。賤ヶ岳の合戦の折は弱冠十六歳であった。

秀吉は、この武勇にすぐれた甥をもしく思い、自身が五十六歳のときに、二十四歳の秀次を養子とした。天正十九年十二月のことである。養子縁組と同時に関白の地位を秀次に譲り、自らは太閤と称し隠居となった。

秀吉が秀次を養子に迎える気になったのは、嫡男鶴松が早世してしまったからである。

思いがけなく天下人の後継者にされて、秀次は天にも上ったような気分であったに違いない。

そのような気分の中で、秀次は、四年前の天正十五年十月一日に、叔父の秀吉が、京の北野天満宮の境内で催した大茶会の華やかさ思い出した。

「茶湯執心においてはまた若党、町人、百姓、さらに唐国の者までも、有り合わせの道具持ちて参会せよ、みず

からの御手前にて御茶下さるべし」

大茶会に先立って、洛中各所にそんな高札が立てられたこともあって、当日の参加者は千人を超えた。みずからの御手前とは秀吉自身がお茶を下さるということで噂を呼んだ。

華やかな茶会の中で、とりわけ人びとの目を奪ったのは、秀吉自慢の黄金の茶室であった。

秀吉が人びとの度肝を抜いてやろうと考えついたその黄金の茶室は、天満宮の横長の拝殿を三つに仕切った中央に置かれ、そこに「どうだ」と言わんばかりに名物道具が並べられている。象牙の茶杓、黄金の天目茶碗、黄金の皆具等が飾られ、名筆で知られる中国の禅僧、虚堂智愚の墨蹟が掛っていた。いずれも秀吉自慢の道具類である。

この贅をこらした黄金の茶室を一目だけでも見ておこうと、人びとは長い列をつくって拝観の順番を待った。その列に加わって、秀次も、ようやくのこと豪華そのものの茶室の様子を見ることができたのだった。

秀次は、黄金の茶室の豪華なことに、いまさらのように秀吉の偉さを思った。そうして、大茶会から帰る途々、自分が、これまでさして関心を持ったことのなかった茶道具というものに、ひどく魅せられていることに気がついた。

すでに二十歳である。戦塵にまみれてきたこれまでの年月であったが、もうこのあたりで大名としての格好をつけねばならぬ。とも思った。秀吉に倣ってということもあるだろうが、それよりも、言わば武人のたしなみとして、多くの大名たちが茶の湯に熱心になっている近ごろなのである。

「よし、負けまいぞ、茶道具を集めよう」

思いついたらすぐさま実行に移さないと気がすまない性格だった。翌日から、命を受けた家臣たちが、京、大坂、堺へと足をのばして、茶道具の収集に精魂を傾けた。

秀次が、いま最も気に入っている油滴天目茶碗は、そうした成り行きの過程で手に入ったものであり、その茶碗の出所は不明とされている。

四年の月日が過ぎて、思いがけなく関白の座につくことになったとき、秀次の集めた茶道具は驚くほど膨大な数となっていたが、しかし彼はまだまだ満足していなかった。

油滴天目という、恐らくは太閤でさえ羨むであろう名品を持ってはいるが、新しい関白にふさわしい道具類で身辺を飾られねばならない。秀吉から関白の座と同時に譲られた聚楽第に住むことになった以上、並みいる大名たちが目を見張るほどの聚楽道具を揃えないことにはと、秀次は眞剣に考えていた。

しかしながら、茶道の精神にも触れず、心得にも乏しい者が、どれ程の逸品を揃えたとしても、それは唯単に道具を「所持した」ことに過ぎないのではないか。そのような道具の持ち方には、自己中心的な充足感はあったとしても真の茶人としての尊敬を得ることはできないであろう。と自覚する心の余裕などは持ちあわせていなかったのである。

秀次の側近の中に、主君の至らぬ点をそれとなく気付いている者がいた。

あるとき、秀次の気嫌の良い時を見はからって、茶の湯を習うことを勧めてみようとした。秀次にしても茶の湯について全く不案内ではなかったが、側近にしてみれば、関白の座にもおつきになったこと故、この際しかるべき茶道頭を取り立てて「関白茶」とでも言うべき作法を確立なされては。との忠義心から口にした。

「お習いあそばしたらいかがで御座いましょうか。名器と呼ばれるあの天目茶碗も、折角手に入っておりますし」

その一言が余計であった。

「そうか。あの油滴天目はこの身にふさわしからぬものと申すか」

秀次の頭から、青白い炎が立ったかと見えた。

側近は平伏し、必死になって言い訳をしたが、いったん怒ったとなると、弁明を聴くような相手ではなかった。もはや顔を見ようとせず、秀次は荒々しく座を立った。

そのあと、家臣がどのような処分を受けたかは不明であるが、その晩のうちに自刃して果てたという。

何しろ秀次は、若くて未熟であった。

気が短い上に、性格が至って粗削りで、理由もなく、突然人に突っ掛かる様なところがあった。人情の機微を解するところがない。戦場であればそれでよかったかも知れないが、関白の言動としてはやはり異常であった。

ある時には、気晴らしの一興じやと、狐銃をもって通行人を撃ち殺してしまったこともある。

そんな彼を、人はいつしか殺生関白と呼ぶようになっていた。油滴天目に漂うあの気品と正反対の粗暴なものが、秀次の体の中にどす黒く渦巻いていたのである。

異説によれば、秀次はかなり穏健な教養人であったとも伝えられている。讒言による悪評が流れたものか、また若くして関白となった責任感の重圧によって二重人格者となってしまったのか、判然としない。筆者はここでは通説に従って話を進めていきたい。

（二）

人の運命というのは、どこでどう変るのか先のことは誰にも解らない。

嫡子鶴松君の早世で落胆した秀吉が、甥の秀次を養子にしたのは、自分の年齢から考えて、もはや世継ぎを儲けることは不可能と思い、豊臣の家系を絶やさぬために、秀吉はこの養子縁組によって後継者の存在を世に知らしめる必要があった。

しかし世の中は思い通りにいかないことが多い。

秀次を養子にしてわずかに一年、秀吉の側室淀殿はふたたび身籠って、次の年に男子を生んだ。「拾」と名付けられたその子は後の秀頼である。

「秀次を養子になどするのではなかった」

秀吉の胸のうちにそのような思いがくすぶりはじめたとしても不思議ではない。

一方秀次は、降って湧いたような「拾」の誕生によって、にわかに自分の立場が微妙なものとなったことを知り、わずか一年前に与えられた関白の地位を、生まれ立ての赤児に奪い取られるようなことがあってはならぬと、必要以上に神経を尖らせるところとなった。

「拾」の誕生から二年ばかりたったとき、秀次は、まったく唐突に、朝廷の各方面に対して信じられないほど多額の金銀を献上するという行動に出た。やがては秀吉が自分を疎んじるに違いない。といった怯えから、いまのうちに朝廷を懐柔しておこうという意図が見え見えの献金で、それは直ちに秀吉の耳に入って彼を怒らせた。

「秀次のやつ、何を考えているのか、わしには、わかるような気がするぞ」

朝廷に対する秀次の献金工作は、結果として、秀吉にまたとない口実を与えたことになる。さらにまた秀吉の周囲には如何にして秀吉の意に添うべきかと、追従する人物が居たことが、秀次の運命を必要以上に大きくねじ曲げた。

石田治部少輔三成の存在である。

「秀次公は何をお考えになっておられるのか、とんと見当もつきませぬ」

三成は、秀吉の顔色をうかがいつつ、世間話に事寄せて、例の猟銃事件をはじめとする秀次の乱行の数々を秀吉の耳に吹きこんだ。

すでに秀吉が知っていたこともあるが、いまはじめて聞いたという話もある。名品の油滴天目も結構ですが、まず茶の湯をお習いになっては、と進言した家臣の一人が、秀次の激怒にあって白刃して果てたという数年前の話は、三成の口からはじめて聞かされた。

「そうか、そんなことがあったのか。それにしても噂には聞いておったが、秀次の油滴天目茶碗はそれほどの逸品なのか。わしにはついぞ見せてくれようとしなかったが、下手に見せて取り上げられてはとでも思うておるに違いない」

秀吉は顔で笑いながら、両の目は冷たく光らせていた。

「茶碗も茶碗で御座いますが、朝廷への金銀献上の件、いかがなもので御座いましょうか」

秀吉の顔色を窺いながら、三成が催促するように言葉を重ねると、しばらく天井を眺めて黙っていた秀吉は、突然大きい声を出して言った。

「金銀献上のこと、いったんは叱りつけて済ませようと思ったが、諸々のこともあり、そうは行かぬ。秀次に謀反の心があると見た。厳重に取り調べ、しかるべき処罰せよ」

その瞬間、秀吉は、いったんは秀次に譲ることにした天下人の座を、拾のものとすることに決めたのである。

謀反人とした以上は取り除かねばならない。

文禄四年（一五九五）七月三日、秀次に対し、関白左大臣の官職を剥奪の上、高野山へ追放するとの処分が通告された。

否応なし。申し開きしたいからと、ぐずぐずしておれば、秀吉のこと、即座に強硬手段に出て、秀次の命を狙うはずである。秀次は、それこそ身一つで聚楽第を出て高野山へ向った。従ったのは、雀部淡路守、山本主殿ら僅かな人数である。

果せるかな、その一行のあとを、石田三成の密命を受けた池田伊予守、福島左衛門大夫、福原石馬介らの人数が、つかず離れず追ってくる。彼等は京都から高野の途中で機会を得てうちかかって来るに違いない。

「一刻も早く、高野の霊域に入らねばならない」

討手も高野山までは押しかけてこないだろうと読んで夜を徹して急いだ。

高野山の青巌寺へやっとの思いで辿りついたのは七月十日の夕暮れであった。

青巌寺は現在の総本山金剛峯寺であり応其という住職がいる。応其は以前は武士である。主家の滅亡という事態を二度までも遭遇し、人生の辛酸をなめて佛門に帰依したのであった。

青巌寺は、秀吉が実母の剃髪を納めるために建てた寺である。二年前、その納髪の法要に秀次も参列しており、応其とは面識があった。高野山へ追われた秀次が真っ直ぐに青巌寺を目指したのは、そのようあ経緯があったからである。

応其が秀次から種々の話を聞いたのは翌朝であった。

「この秀次、太閤さまに対して謀反などと大それた心を抱くはずもないのに、謗る者があって、このように関白の座を追われた。こうなった以上、もはや釈明したとして詮ないこと。この上はみ佛にすがって身のあかしを立てたい所存」

応其の胸のうちに、自分が武士だったころに味わったあのむなしさが、ふとよみがえった。

権勢というものと背中合わせにあるような人の世のは

かなさと言うべきものかも知れない。その先のものを求めて自身仏門に入ったのではなかったか。その応其のところへ権力の座から転げ落ちた男が疲れ切った姿ですがりついてきている。

「仏におすがりなされ。佛門に入って行くべき道を見つけなされ。さすれば、太閤さまもわかって下さいましょう。愚僧からも太閤さまにお願いしますほどに」

と応其は言った。

秀次は黙ってうなずいた。秀次は髪をおろして道意禅門となった。京から従ってきた武士たちも、すべて髻を切って佛門に入った。

しかし応其が考えていたほど事態は甘いものではなかった。

京からの討手が青巌寺を取り巻いたのは、それから四日目の朝である。福島左衛門太夫ほか数人が寺に入って応其に面会を求め、秀次公を討てとの命によってここまで参ったゆえ、ただちに身柄を渡されたいと申し入れた。

「当山は、弘法大師の開かれた霊場、開山以来七百余年、ひとたびここへ登った者が殺められた話はいまだ聞いておりませぬ。青巌寺へすがって参りました者の儀、お命ばかりは何とぞご容赦願えませぬか。すでに頭をまるめて、み佛にすがっております」

応其は言葉をつくして囲みを解かせようとしたが、左衛門太夫は頭から受け付けようとしなかった。

「秀次公のご最後を見届けずんば京へ戻れぬ。このまま引き返せば太閤さまのご勘気を蒙り、それこそ切腹もの。どうしてもならぬと申されるなら、ご坊、そこもとがこのわしの首を打て」

猛り立ったその声が寺内に響いた。

青巌寺の奥座敷柳の間で秀次が自刃したのは巳の刻午前十時ごろである。介錯は雀部淡路守、秀次は二十八歳であった。応其の配慮で湯をつかって別人のように穏やかになっていたという。

淡路守はじめ、従ってきた者たちは、すべて皆秀次に殉じた。

京へ持ち帰られた首級は三条河原にさらされ。嫡子をはじめ、秀次が寵愛した女房三十余人は、ことごとく河原に引き出されて首をはねられた。秀吉の命令はあまりにも苛酷であった。後、慶長元年七月十三日、近畿地方を大地震が襲って大きな被害を生じたとき、世間では「関白様の怨念やで」と寄るとさわるとこの話になったという。

一連の処刑が終ったとの報告が届いたとき、表情を動かさずにそれを聞いた秀吉は、少し見当違いのことを口にした。

「秀次は、大層な茶道具を集めていたというではないか。聚楽第にそのまま残しておるのか、すぐにも調べてみろ」

調べた結果、秀次が懸命に集めさせた茶道具類は主を失った秀次邸にそのままになっていることが解った。

しかしどうしたことか、あの油滴天目だけが無いのである。

「くまなく探せ、ほかの茶碗などどうでもよい。油滴天目を探し出して持って参れ」

秀吉の命令はその一点にしぼられたが、無いものは無いのである。

「秀次があの茶碗を手放すはずはない。どこぞに隠しおったのか。まさか高野山まで持っていったわけではあるまい。何としても探し出せ」

茶碗一つのために、かなりの人数が再び高野山に登り、青巌寺へ直行して応其に尋ねたが、応其は「存じませぬ」の一点ばりで取り合おうとしなかった。

実際に、秀次は火急の脱出に際して名物茶碗を持出す余裕はなかったのである。

「秀次め、おかしな形で仕返ししおったのう」

戻った者の報告を秀吉は浮かぬ顔をして聞いた。油滴天目は一体どこへ隠れてしまったのか。

この世に自分の意のままにならないことは無いと思っている秀吉は、秀次が、あれほど自慢にしていた茶碗を、最後まで自分に見せようとしなかったことが、この上なく不愉快なのである。多額の金銀を朝廷などに献じたりする前に、あの天目茶碗を自分に差し出すくらいの如才なさが秀次にあったならば、彼奴の運命ももう少し変っていたろうに。ばかな秀次め。天目茶碗を、一体どこに隠しおったのか？

秀吉は、その油滴天目茶碗をついに自分のものにすることがないまま、それから　わずか三年の後に、六十二年の生涯を終えた。

（二）

時代は移り、世の中もさまざまに変った。

豊臣氏は滅び、天下は徳川氏のものとなって泰平の風が穏やかに吹いている。あの頃からもう四十年余りが過ぎている。

杳としてわからなかった天目茶碗の行方が知れたのである。

寛永十五年、若狭國小浜十二万石の領主、五十一歳の酒井讃岐守忠勝が大老に任ぜられた。忠勝は下馬将軍といわれた実力者、酒井雅楽頭の系統である。

大老着任と略同時の頃、あの油滴天目が忠勝の許に入ったという。

酒井忠勝のふところへこの茶碗を納めたのは、京の豪

商三井家だというが、あの折、太閤の威力をもってしても探し出せなかった茶碗をどのようにして手に入れ、なぜまた酒井忠勝に納めることになったのか。追って見ることにしたい。

酒井家の油滴天目茶碗に添えられて、二通の書状がある。どちらも酒井家の手で書かれたものと思われる。

「秀次公所持、聚楽道具の内、西本願寺に有之品、其後三井八郎右衛門所持、同人により納」というのが、第一の添状である。

「油滴天目由来、秀次所持、聚楽の内西本願寺に有之、而其後六角の三井へ来り居候を同所より譲り請るものなり」が、第二の添状である。

二つの添状から油滴天目茶碗は「豊臣秀次→西本願寺→三井八郎右衛門→若州酒井家」と移った経緯が明らかである。但し移された各々の時期の記録は無いのでこの点は推測である。

添状の文面によれば、関白秀次の次に油滴天目茶碗を所持したのは西本願寺であったとされる。秀吉があれほど執年深く行方を調べたにもかかわらず、ついに油滴天目茶碗を見つけることができなかったのは、それが西本願寺にあったためだろう。太閤の威勢でさえ及びかねる聖域であった。

秀次は、あれほど執着を見せていた油滴天目茶碗を、いつの間にか手放していたのである。金に換えたいということではない。秀次にそんな必要は全くない。

では西本願寺に寄進したのは信仰の心によるものであったのか、ということになる。

これは、秀次自身が、西本願寺一門の力量をどのように評価していたかを考えてみる必要がある。本願寺一門の武力が示された石山の合戦から、まだいくらもたっていない時期である。秀次の心の底に、その本願寺一門の武力にひそかに期待するものがあったのではなかろうか。

秀吉に世継ぎができたと知らされた時、秀次は自分の存在が秀吉にとってどのような意味をもつかを素早く理解した。秀吉との間は遠からず冷えるだろう。秀吉にとって自分はいまや、邪魔者なのだ。邪魔者を消すために、秀吉は必ず何かを仕掛けてくる。秀吉とはそういう人物なのだ。

それであるなら、秀次としても黙っている手はないではないか。こちらも、その心づもりで準備することが必要ではないのか。もしかすると秀吉は「関白秀次に謀反心あり」などと言いだして、秀次を追い落とそうとするかも知れないではないか。

秀次は、そういう事態に直面したときに備えて、西本願寺と結んでおこうと考えた。石山寺合戦での本願寺一

門の武力を秀次は高く評価していたのである。

しかしながら秀吉の秀次への対処は早かった。石田三成の讒言もまたそれを加速させたものと思われる。

秀次が、西本願寺と結ぶべきかと一方的に想っている間に、はやくも秀吉の追求ははじまった。

本願寺一門の武力に期待して、将来、秀吉に対抗することができれば、という秀次の夢の構想は空しく消えてしまった。

もはやどうしようもないとわかったとき、秀次が、秀吉に対するたった一つの反抗として、かねがね秀吉が執心であった油滴天目だけは彼の手に渡らないようにしてやろうと考えたとしてもおかしくない。反抗の手立ては、もはやそれくらいのことしかなかったのである。

（四）

西本願寺へ移った以降の油滴天目茶碗は、大きな悲劇やロマンを生むこともなく、重美品として大切に扱われてきたものと思われる。その後の移り変りを考えてみたい。

寛永十年（一六三三）、西本願寺の大殿堂の造営が行われた。東西二十四間、南北三十一間高さ十七間という壮大な伽藍である。多数の信徒に支えられているとは言え、これほどの大工事をやり遂げるためには、莫大な資金を調達しなければならなかった。

その資金調達の一方策として西本願寺側が寺の所有にかかる多くの什宝類を手放すことを考えた。そうしてその相談に乗ったのが、豪商の三井家であった。西本願寺の依頼を受けた三井八郎右衛門は、名器名品を換金するために八方努力したと思われる。

その際、三井家は油滴天目茶碗を美術品として収集しようとしたのか、または将来の大きな利益投資に繋がると考えたかは不明であるが自らの所有としたものと考えられる。

秀次の最後（一五九五）からすでに四十年余りが過ぎている。徳川幕府は三代家光の時代となった。若狭の大名酒井忠勝のもとへ油滴天目茶碗が三井家より納められた。三井はどんな理由で忠勝に納めたのであろうか。

茶碗に添えられた二通目の添状には末尾に「而其後六角の三井へ来り居候を同所より譲り請るものなり」とある。「譲り請けるものなり」とは酒井家側が積極的に望んだものであり、また畿内から関東にかけて経済基盤を確立しようとする三井家が、この有力大名に如何にして誼を結びたい、関係を持ちたいという戦略的な意図があった筈である。忠勝は一見するなり気に入った。「関白秀次公が珍重された油滴天目茶碗」と聞かされれば、

なお喜んだに違いない。
酒井忠勝はこの茶碗がよほど気に入っていたのであろう。毎歳、初釜の茶事に之を用いて、賓客の賞賛を浴びたという。
また、忠勝がこの茶碗に打込んだ証拠に、彼が国許へ向う場合には、必ず二挺駕籠で油滴天目茶碗を同行させたということである。
油滴天目茶碗はそれ以降、太平洋戦争終結時迄酒井家に於て愛蔵されてきた。
大正八年六月、高橋箒庵が酒井邸でこれを拝観して、大正名器観に「実見記」をのせたのである。

戦後、油滴天目茶碗は、美術愛好家安宅英一氏の手に渡った。なににつけても最高のものを目指す安宅氏は、先ず曜変天目を求めたが、つともすでに、入る処に入り、門外不出となっていた。そこで動く可能性のある、筋目正しい油滴天目に着目したのは当然のことであった。昭和五十二年、安宅産業崩壊後その帰趨が危ぶまれたが、住友グループの協力により他の陶器類と共に大阪市に寄贈され、散逸を免れることができた。
大阪市は之を受けて、昭和五十七年大阪市立東洋陶磁美術館を設立した。そして天目茶碗は同美術館に安住の場を得ている。

終りに、安宅氏がこの茶碗を購入する時の経緯が、文章となっているので、一部分を記載してしめ括りと致したい。
なお、文中筆者とあるは、後の大阪東洋陶磁美術館長伊藤郁太郎氏である。

酒井家のご当主にお目に掛ったのは、東京のパレスホテルの特別室であった。
先方はご当主お一人、当方は安宅氏に筆者が随行した。
初対面の上、当方には譲り受けのご確認もまだ頂いていない段階では緊張そのものであった。
安宅氏はとくに初対面の方に対しては、ほとんど寡黙を守るタイプの人である。
一方でご当主もまことに寡黙な方であった。
重大な案件を前にして、お二人ともだんまりを決めこんでおられる。
口火を切ったのは、やはり安宅氏の方であった。
「何とかお願いしたいと・・・」口ごもりながら切り出すと、と当主もほっとされた表情で、「安宅さんでしたら・・・」と口数少なく答えられた。
まるで禅問答の様な形ではあったが、ようやく譲り受けの話は基本的に纏まった。
問題は価格についてのご希望をお伺いすることだが、もはや安堵されていたのか安宅氏は、それ以上、言葉

を続けられない。
さしでがましいと思いつつも筆者がおずおずと、「当方として準備を進めさせていただきます件でございますが、いかほど考えさせて頂きましたら・・・」と申し上げると。
ご当主の方のやっと「×××ではと考えております」と意外なほど妥当な価格を示され、その後は比較的に事務的なやり取りを、ご当主と筆者との間で進めることができた。
筆者自身は緊張しっ放しで、文字通り口も利けぬほど疲労困憊したが、さすが安宅氏もしばらく席を立てない状態であった。
ものを迎える時は「三顧の礼を盡して」と安宅氏はよく言われたが、礼を盡すことの苦労が、ずしりと心身ともにこたえた一日であった。
昭和四十三年初夏のことである。

終

参考文献

大正名器鑑実見記　小田栄一編　淡交社
唐物茶碗と高麗茶碗小田栄一著　河原書店
名品流転　三山　進著　読売新聞
凩の声よりも遠く　中川友吉著　淡交社
安宅英一の眼（カタログ）　読売新聞
国宝事典　文化財保護委員会編　便利堂
角川茶道大辞典
高野山　北尾鐐之助編　高野山出版社
江戸の殿様全600家　八幡和郎著　講談社
茶の湯ハンドブック辻　宗龍編　里文出版
図解茶道具事典　雄山閣
日本史年表　吉川弘文館
その他

風の泉（第4回）

葵　州　月

決断（一）

昭和三六年十二月二十四日、西野午郎は色鉛筆の赤で囲んだカレンダーの鮮やかな二重丸を眺めていた。これは他人には無関係な自分だけの道標だ。血の様な赤いろは新しい風を起こすオレと小夜子のBig decision（大決断）なのだと言いきかせていた。この印は計画の遂行を鈍らせないために、前月末に自分が祈りを込めて丸印をつけたものだった。彼は岡山大学文学部、英文学科二回生、朝から聊か興奮はしているが、いよいよ時は到る。予定通り本日まで温めてきた「計画」に向かって行動を起こす日なのだ。

岡山大学北津寮も既に冬休みを迎えていたから帰省した寮生が多く、朝から庭に人影もなく、冷たい北風「半田山おろし」が枯そぼった樹木にやっと絡みついている枯葉を吹き散らしている。

天気予報は「夕方から小雪も降るだろう」と報じていた。

どんな逆風にもオレは負けないぜ！

午郎はボストンバッグに旅立つための品物を詰め終わると首にバーバリーのマフラーを巻き、学生服の上に羽織るために同じメーカーのトレンチコートを腕に持って旅支度を整えた。

二週間前に買っていた特急寝台〝あさかぜ〟の切符を机の引き出しから取り出すと、胸の内ポケットへ入れる。今夜乗車するための切符だった。

フッーと、ひと呼吸して北津寮、同室でバイトに出かける直前のA君に声を掛けた。

「これから、帰ります」

「そうか！いいなあ。気を付けてな！」

「お正月も帰省しないんですか？」

「帰りたくても♪帰れない♪・ボクん家はね♪ボクん家はよ～♪貧乏だから・・さあ♪・・」

A君が演歌のメロディーに乗せて答える。この放達と言うか楽天的な性格は何処から来るのだろうか。オレにはとても真似が出来ないぜ！

でも、オレも無神経だったなあ！正月はバイトがあるから帰らないと昨夜聞いていたのに。余計なことを訊いてしまったなと反省しているが彼は何も気にしている様子もない。

「good-bye グッバイ♪ good-bye ♪」

お返しに午郎は英語で少しメロディをつけて答えて見せたが、変なアクセントの鼻歌にしか聞こえないためか、彼の反応はなく無視されたみたいだ。これは「本来の別れ言葉」なので午郎は一瞬表情を曇らせてA君を見たのだが。（本来なら See you soon が正しいのだが！また、会おうね、というウソの方便がオレには言えない）

A君は午郎の倨傲（驕り高ぶるこころ）からくる心理状態が解る筈もなく手帳を開いて何かを確認しているように頷いている。

（オレはもうこの部屋には帰らないかも知れないんだぜ！good-bye には、「もう会うことがないかもしれない」という、お別れを告げる意味の言葉だぞ！間違った外来語に慣れた法科のキミにはわからないだろうけどな！）胸の内で呟きながらトレンチコートを椅子に掛けて、ボストンバッグに手を入れると、茶封筒に入れ、着替えの衣類の中に忍ばせた「大金」の存在を確認して、今度はトレンチコートを着た。

更に午郎は机上の本立てからサミエル・ウルマンの原書の「詩集」だけを取り上げてトレンチコートのポケットに突っ込んだ。ヘミングウエイとディケンズの随筆と小説原書は買ったばかりで読みかけのままだった。少し考えていたが結局置いて行くことにした。この本は重くてバッグに入れて行くのは面倒だったから。

口には出さなかったが、考えて見るとA君には大そう世話になってオレは感謝しているが、これでお別れになると思うと、ふと寂しさも湧いてきたのだが、やがて事務的に迷惑なことを頼まねばならない時期も来て更に世話をかけるかもしれないと思っている。でも今はオレの「計画」は伏せておかねばなるまい。

「じゃあね！」

今度は日本語でベッドの横で背中を見せてズボンに片足を通そうとしていた彼に小さく声を掛けた。

A君は直ぐに顔だけ振り向けたが無言だった。

午郎は寮を出て岡山駅へ出るために津山線「法界院駅」に向かった。

通り慣れていた無舗装の近道に入ると、時折つむじ風が小さな渦を巻いて砂埃をあげる。

路地から飛び出してきた住人が背中を丸めて口を押えて小走りに通り越してゆく。

今年初めての「半田山おろし」が吹降りて寒い朝の所為もあるだろう。

振返って見ると岡大キャンパスの背後に見える半田山の全体は褐色に染まっていて晩秋から散在していた枯れた樹木の先端が象牙のように今は鋭く雲天を刺していた。

A君はアルバイト学生で正月になっても帰省をしないと言う。演歌で答えて明るく振舞ってはいるがオレを振り返った時少し寂しそうな眼をしていたなあ。

そう言えば今夜までオハヨー食品でクリスマス用のケーキパウンド（ケーキの生地）にクリームを塗るバイトだと説明してくれた。更に明日から岡山駅で「駅弁を売る」と説明してくれたのは昨夜だった。

オレはそんなバイトはとても恥ずかしくて出来ねえよ。平気な顔で話していたが考えて見ると彼は偉いな。

彼は先の大戦の戦争遺児でお母さんが随分苦労して、妹と二人を育ててくれたこと。お父さんがいない子供は「かた親の子」と呼ばれて就職活動では社会的差別を受けているらしいが、オレの育った横浜地域でも中学、高校に「片親の子」は幾人もいたが、彼らとは深い付合いをしないようにしていたからA君の話を聴くまでは彼らの深い悩みには気が付かなかったな。

人は親を選んで生まれてくることは不可能なのだから！

この北津寮は経済的に恵まれない学生のために国の政策で造られた自治寮だが、だんだん日本経済も成長してくると、固定資産税、都市計画税や寮の職員たちの人件費、建物の補修費が増えてゆくと、大学からの補助金、入寮生が支払う一定の寮費だけでは自治寮の運営が難しくなってきて、内々、オレの様な纏まった寄付金の出せる学生も入寮することが出来るようになったようだ。親父がいくら寄付したか知らないが、「お前も寮に入って、苦労されている学生さんと共同生活をして、それを見習いなさい！」と言い、母が続けて「わたしたちの家がどんなに恵まれているか、ご先祖やお父さんに感謝しなさいね！」と言って親の恩をオレに着せてきた。何を見習い何に感謝すべきか〈意識〉はしてきたが。

おそらく、両親は、倨傲なオレの性格を自分達で持て余していたから、寮に放り込んでおけば自動的に周囲の環境に染められて、自己の欠点を自覚させ、性格を矯正できると考えたのだろう。まるでオレを洗濯機に放り込んだ〈汚れ物〉のように考えているのではないだろうか！

結局オレが事の是非を言う機会も与えられなくこの北津寮へ入れられたのだ。

A君のお父さんはフイリッピンで米兵と戦闘して死んだこと。靖国神社へ祀られている事、聴いていると少し哀しくなって同情したけど。あの戦争で三百五十万人も犠牲者が出たと教えてくれたが現実離れした数字にオレはどのように感応したらよいか、分からなかった。最近は過去に戦争があったことすら忘れていた。

そう言えば北津寮の苦学生達はみんな同じように懸命に生きているなあ。バイトと学業を両立してやっている。オレには確かに厳しい生活体験が欠けている。

お金に不自由していないことがオレに一番欠けている〈体験〉なのだが。だからと言って苦労はしいたくねえよ！

オレは北津寮に入寮し、生活をしてみて、経済的に恵まれていることを充分〈意識〉はしてきた。父は神奈川県庁へ勤める公務員で先祖からかなりの広さの土地を相続で引継いで来たから横浜の自宅の近くにアパートを二棟所有しており、定期的に家賃収入があるので経済的には恵まれている。充分な仕送りをして貰っているから不自由なく学業はできる。誰のお蔭か！親父のお蔭か、先祖のお蔭か、生まれてきた親によって〈幸・不幸〉の別れてくる人生をオレは〈認識〉もしている。所詮、これは運命だと思うしかないが。

しかし「誰の所為」とも言われまい。

また医学部の寮長の父親とオレの親父と何らかの縁があったようだが。

そんなことはオレには関係ない。

確かに寮生活を通じて現社会には格差があることや人間それぞれ性格の違いを知ってきた。彼らと馴染めなかった自分の胸が痛む。このままではダメだと実感してはいたが他の寮生とフランクに付き合えなかったな。オレの本質的な性格は倨傲（きょごう）で（驕り高ぶる）自尊心が強いことは〈自覚〉している。このオレの欠点は灰汁の様にこびりついて落ちない。

だから初対面の寮生や先輩学生に自己を殺してまで付き合って貰おうとは思わねえ。

「人見知りが強いね、午郎君は」バーで飲んだときA君がオレに言ったことがあるが、（その通りさ！どうすればいいの？）と悩みをブチマケて、率直に意見を訊けなかったな。

すぐに（女の子とは自由に話せるんだぜ！女の子の方からオレに擦り寄って来るからな！）君にそんなことは言われたくもないよ！言おうとした毒舌はその時は洒と一緒に呑み込んだ。

A君は「禅の同好会」に入ったと思えば、「ＲＩＰ同志会」と言う新しい会に入って博多訛（なまり）の「デン先生」とか言う会長の部屋で度々深夜まで酒を飲んで部屋に戻っ

てくる。何を考えているのか知らないが、会長以外の仲間も綽名に「先生」を付けて呼んでいる。他人が聴くとどれほど偉い先生かと吃驚すると思うよ。その偉い先生方も、ある時はＲＩＰは「ストリップ同好会」でもあると洒落て八名のメンバー全員が女性器探訪だと気合を入れながら自転車を連ねてストリップ劇場へ行く。そして最前列でアレを見て来たと自慢げに語る。オレはそんな話は聞きたくもねえと眉を顰めて見せたが、本当のところは少し羨ましかったな。

「サキ先生」と言う山口出身の二回生の代議員は度々大きな声で論語やむつかしい諺を言っては誰かれなく気合を入れて歩いている。オレは彼には怖くて近付けねえな！その他、各メンバーは「事務局長」だの「企画部長」や「参与」だのと肩書をつけて交友を楽しんでいる。この連中はまるで寮で芝居をしているみたいだぜ！いずれを見ても個性的な寮生のグループだ、と言うよりも、オレにとっては初体験の「変り者ばかりの軍団」としか表現できない人間たちだな！

A君が「ＲＩＰ同志会に入会しないか」と言うが、オレはどのように彼らに対応していいか、これがまだ解らないのだ。A君は別にしてオレは彼らからは常に一歩引いて遠くから見ている。

それでなくても寮生の中には、オレを敵対視しているような者もいる。「おい！遊び人！」と陰険な目を剥いて呼ばれたこともある。A君のように笑って答える程オレは未だ人間ができていないから、あの時、そ奴をオレにとって最大級の侮蔑の目で見返してやろうと思っていても、臆病風に負けて直ぐに俯いてしまうのだ。とてもＲＩＰの彼らの様には世間を泳げないな。寮に入って初めて経験した対人関係の難しさ、それもこれもオレの傲慢さと臆病な羞恥心から来るのだろう。それが今は自分の劣等感になってしまった。親父は環境によってオレが矯正されるだろうと期待したことは解っていたが、現在まで不可能だし自分の胸に逆に固い殻を造ってしまったから真逆の結果になったのではなかろうか。

オレが寂しさを酒で癒そうと思うとき、同室のA君は良く付き合ってくれたな。バー〝ノンちゃん〟が唯一オレの飲み場だったけど。最初から一人では不安で意気地がないからA君に同行を頼んだわけさ。勿論、バイト学生の彼にお金を支払わせたことは一度もないぜ。

このことをA君は余程恩義に感じていたのだろうか。何時もオレに気を配ってくれたなあ。バー〝のんちゃん〟の人気ホステス、とオレとをデートをさせようと「仕掛けた」こともあったなあ・・・。

オレのタイプの女性でもないのに。A君は自分が彼女に好意以上のものを寄せていながらオレに彼女を振るとは！彼は女性には余程初心だと思ったな。手前味噌だがオレは女性に半端なくモテるんだぜ。中学時代からだ。

初恋らしき経験はたくさんあってどれだったか多すぎて特定はできないが、高校に入って初めてオレの方から一人の女子生徒を本当に好きになってしまった。これは今、内緒だ。

A君はオレのエリアまで部屋の掃除を率先してやってくれる、電熱器でお湯を沸かしオレにもお茶を入れてくれる、朝、寝起きが悪くていつも気分が優れないオレに「おはよう」と、常に声を掛けてくる。時にはこれがオレの鼻について、神経に触り鬱陶しいこともあるのだが。このオレの表情を彼は気づかない。

いや、素ぶりをしているのだろう。彼の表情はいつもと変わることがないのだ。

（二）

オレは今、恋をしている。初めて真剣に自分からある女性に燃えている。大好きな恋人、名前を砧小夜子と言う。

ただし、まだ純潔な関係だ。

現在、小夜子との交際を親父とオフクロは大反対をしている。勿論、結婚が前提だからだ。

原因は「家柄」だという。

封建時代から脱皮して自由と平等の世の中になった筈なのに不合理な理屈を言って反対している。

興信所を使って相手の素性を調べていて、姑息なことをした両親をオレは卑劣だと咎めて大喧嘩になったのだ。

「おまえの幸せのためだ」あの娘と一緒になれば将来必ず不幸になる、と言ってオレの言い分を理解してくれない。

「お前たちは未熟のトマトだ！青臭くて世間からは相手にされないぞ。お父さんもお母さんも、お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、みんな反対だよ。今のうちに交際をやめなさい」

様々に小夜子の素晴らしさを説明して説得しても駄目だった。

到頭オレは大学を辞めて「十二月二十四日」に家族との縁を切り捨てて東京へ出て小夜子と新しいスタートをすることにしたのだ。

悩み悩んだ末「決断」をした。青いトマトも熟せば世間は認めてくれるだろう！

小夜子も同意してくれた。取敢えず東京駅で会って「南の島」へ旅をする。

旅行社は八丈島を推薦してくれている。

そのあとは、当座の間、小夜子の方で住む家の当てがあると手紙に書いて来た。

小夜子との出会いはＳ高校時代に遡る。

高校へ進学した年の初夏だった。

Ｓ高校は周囲を松の大木に囲まれた歴史のある高校だ。運動場を囲んで二階建ての校舎が三棟並んで建って

いる。二棟は男子専用と職員室のある校舎で、左奥の一棟は女子生徒専用の校舎だ。

S高校は男女共学の公立高校だが敷地内にある校舎は男子生徒、女子生徒で一線を引かれて別棟になっていた。

当時はまだ"男女七歳にして席を同じゅうせず"との古い「仕来たり」の延長だと考えていた先生もあったようだが、午郎は小中学を通じて男女が席を並べたクラスで勉強して来たから、その古い仕来たりから来ているのではなくて、要するに大学への受験校として、性に目覚めだした男女の交際を制限して、事前に「男女間の性の間違いを防御」するための保全措置だと考えていた。動物の檻を分けて性コントロールをしているようなものだ。

S高校へ進学してもオレは孤独だった。

自分で解っていたが、威張り、人を侮る性格が男子生徒に嫌われていたようだ。本当は臆病で自尊心が強いだけなのに。

どちらでも同じことか！

中学時代は野球部に所属したこともあったが入部して二ヶ月で辞めた。

「野球は一人でやるスポーツではない。皆と協調できないなら辞めてくれ！」

監督に怒られて辞めた。

肩が強いために捕手をやれと言われたが恰好のいい投手になりたいと拗ねて、勝手に投手になるためのキャッチボールばかりしていたためだ。

S高校へ入学した同級生もそれまでのオレの自我が強く、協調性に欠けた性格を読んでいたから、一年生でも肩はトビっきり強いのに野球部の部活に誘われることはなかった。

孤独で寂しかったがオレは肩で風を切って学校内を歩いていたな。オレの救いは身体のバランスがスマートで甘いマスクだと言われて女性だけには滅法モテたことだ。

学校の行き帰りはいろんな女子生徒のグループに声を掛けられていたな。

オハヨー、さようならの声に混ざって

「きれいなコね」

「映画スターみたい！」

これは親に感謝したな。オレが努力した訳じゃないから。

だから男生徒には嫌われていた。

妬きもち野郎はこっちから願い下げだぜ！と、見栄を張っていた。空威張りしていたことは先生にはバレバレだったのだろう。

「みんなと仲良くやるんだよ」

優しく言われてヘコんだこともあった。

しばらくするとオレは放課後になるとグラウンドの片隅に寄ることが習慣になっていた。

そこには鉄棒と砂場があるからだ。

どこの学校にもあるのだが、当校には二基の鉄棒が設置されていた。

丈が二・五メートルと一・二メートルの高低二基だった。

これを利用する生徒は少なかったな。

興味を持った学生が少ないと言えばそれまでだが、事実、体操部という部活はS高校には無かった。

鉄棒を生徒が校内で使用する頻度は少なく、罰ゲームに懸垂を取り入れている体育の時間の一部と柔道部や野球部が偶に筋力を鍛えるためだろうか、数名が懸垂に来ることがあるが、放課後はオレ専用の日が多かった。当然オレは状況を判断して誰も使用をしていない時、鉄棒をやりに来る。

オレは鉄棒で逆上がりから始めて連続して大車輪をするのが好きだった。何回も風を切って回る。この時は集中しているので心の憂さは消えている。その頃の倨傲(きょごう)から起こる小さな怒りや悲しみを身体の中から遠心力で追い払うように何回も何回も大回転をするのだ。従って手の握力と腕の筋力は付随して強くなったな。

或る晩秋の日の放課後のことだ。いつものようにオレは校庭の隅にある鉄棒のあるグラウンドへ来て、上着を脱いでベンチへ置いた。

校舎の瓦が西日を浴びて黒々と光っているのを見ながら、鉄棒を掴んで懸垂を始めたのだ。

其の日は鉄棒と手首とを繋いで落下を防護する、ガードテープを洗濯したまま家に忘れて来た。松脂でできた白い滑り止めの粉も持っていなかった。

そのまま大車輪をすれば、手の握力が弱まったとき掌が鉄棒から抜けると身体を保護するガードテープがない場合、必然的に落ちる危険がある。まだ手を鉄棒から離して飛んで着地をする技術や経験はない。当然分かっていたが、オレはその日も理由(わけ)もなく無性に寂しくて虚しさが腹の底でぶつぶつと湧いていたから、ガードテープを無視して逆上がりと同時に大車輪を始めていった。緊張して始めたが大分慣れて見ると、かなり上達しているな、と自信が出てきた。自尊心が疼いてくると落下と言う恐怖の大敵を追い払った。

やがて夕空は茜色に染まりつつあった。足を跳ね上げてゆくとその夕空が綺麗に見えたし、足を振り下ろす時は白い砂場が見える。角度によって校舎や校庭の景色も回転してゆく。

何回か繰り返した。

「訳ないや！大分上手くなったぜ、努力に勝るものはないぜ！」

独白し、胸のモヤモヤも飛んでスッキリして順調な仕上がりに満足していた。

それを慢心と言い、油断と言うのだが。
身体に吹く風が心地よく、これが突然逆しまな風になる、とは気付かなかった。

（二）

フーと息を吐いて西野午郎はベンチで汗を拭いている。
「今日もやっているわ、西野君！」
「余程好きなのかな、いつでも、くるくる回っているけど」
「怖いよね・・あの回転は！」
三人の女子生徒が話しながら西野の背後に続く松林の道を歩いて来る。
部活を終えた生徒が三三五五に正門へ帰って行く姿が午郎の目にも写っていた。
「あとワンクールで終わろう・・」
ベンチから立ち上がって、鉄棒の下へ来ると、勢いよく飛び上り鉄棒を掴んで、「慎重に回れよ」と脳裏に指令を出してゆっくり回り始めた。
スピードを徐々にあげる。
それに合わせて鉄棒の支柱が揺れてギチギチと金属音が響く。
「気持ちがいいぜ！」彼は叫んだ。
あと一周！あと一周！それで砂場へ降りることにした瞬間、右手の掌に激しい痛みを覚えた。（掌のタコが潰れたか！）
硬い皮膚（タコ）が出来ているのは解っていた。
掌の指の付け根のその硬いタコが鉄棒の表面に巻きついて剥がされて行くような鋭い激痛が走った。ビリッと脳裏へ掌の皮が剥ける音が響いたような気もした。「止まらねば危ない！」痛みに反応した右手が本能的に鉄棒から放れた時、左の掌だけで対応しなければならなかったのだが減速のタイミングが大きく外れ、止まり損ねた身体は鉄棒から上空へ向かって離れた。遠心力が残ったまま午郎の身体は鉄棒から離れて空中を舞った。直ぐに砂場へ後頭部から落ちていった。眼底が茜色に染まった。同時に彼の意識は薄れて行った。
脳震盪を発して、しばらく失神していたのだろう。
「西野くん！」「西野さん！」
遠くで代わる代わるオレを呼ぶ女子生徒の声が聞こえていた。何度か聴いているうちにオレの瞼がゆっくり開いた。
三人の女子生徒が倒れているオレを中腰で囲んでいる。同級生であることは知っていた。三人の緊張した顔が真上に見えた。その上にピンクに染まった雲が見えて徐々に意識が回復するとともに掌の痛みが甦ってきた。自分の掌を見た。右手の小さなタコが潰れ皮膚が捲れて血が吹き出て、指の間にまで流れている。
「西野さん！大丈夫ですか！」「血が出ているわよ」

「救急車を呼ぶ？」
女子生徒の動揺した声を聴いて更に意識が戻った。
「いけねえ！やっちまった！」
半身を起して左手で後頭部を掻いた。
鉄棒から落ちた意識が甦り恥ずかしさが先に湧いて来たのだ。
振ってみた頭には痛みはない。
「どうってことはないさ！救急車なんか要らねえよ！」
「良かったわ、気が付いて」
「あら！ひどい血！痛いでしょう！血を止めなければ」
女生徒の独りが、流れ続けていたオレの右の掌の血をハンカチで押えた。みるみる白いハンカチに血が滲んできた。
「ここを押えていて」
女子生徒は砂場で両膝を折っていた。紺のスカートから白い脹脛がオレが差しだした掌の前に見えている。
オレが言われたまま、左手でそれを押えているともう一枚の絵柄の入ったハンカチを取り出して二重に巻いて手の甲側で端を結んだ。彼女は心配そうな目でオレを見ている。あとで解ったが彼女の名前は小夜子と言う。
「これで、軽く握って押えて置けば？」
膝に付いた砂を払って立ち上がる。
西野は治療をしてくれた小夜子と言う生徒の笑顔が凄く可愛いと思った。その笑顔はオレの琴線に触れて激震が走り確と脳裏に刻まれてしまった。目の前のセーラー服を透して発汗した臭いに混ざった甘美な女の匂いを感じると胸がドキドキしはじめた。
「キミのハンカチ汚しちゃったなあ、どうしよう？」
午郎の声は掠れて少し上ずっていた。
この心の動揺を彼女たちに覚られたくなかったが彼の自尊心は完全にヘコんでいた。
「いいのよ、気にしないで！これはあげるから、そのまま押えていてね」
（小夜子の白い指にオレの血が移っている）
彼女はそれを気にもせず優しく言ってくれたとき、全身の皮膚が泡立ってきたのを覚えた。続いて胸が熱くなって心臓の鼓動が激しく音をたてているのを覚られないように左の掌を心臓に当てて押えていた。
この状況を客観的に見れば、女生徒三人に取り囲まれて西野午郎が楽しく遊んでいるような様子に見えていたかも知れない。グランドにいる、他の生徒にも注意深く見られているに違いない。
午郎は自分が鉄棒から落ちたブザマな姿を他の生徒らに見られたとしたら面白くない。
「格好悪いや！」
西野は恥ずかしそうに立ち上がってズボンやシャツの砂を叩いた。

確かにグランドで練習をしていた数人の野球部員がこの光景を見ていた。
「恰好どころではないでしょう！頭の方は大丈夫なの？」
西野の後ろに立っていた女生徒が心配そうに声を掛けてきた。
「大丈夫なの？本当に・・」
小夜子の手が後頭部に触れた。柔らかく温かい掌の感触にまた神経が痺れた。
「大丈夫だよ」ゆっくり頭を振って、叩いて見せて笑った。
「どうってこともないさ！この通り！」
血を押えていたハンカチを見る。
「イケねえことをしちまったなあ」
また、小夜子に向かって言った。
「気にしないで！・・ね！それよりお医者さんに診せて治療してもらってね・」
「その通り！西野くん！一度病院に行った方がいいよ！頭打っているし・・・」
「そうね、マリのお父さん関内で病院やっているし、一緒にゆく？」
「そうよ！それがいいわ！」
小夜子も声を合わせた。
「いいよ！うちの病院で良ければ西野くん、一緒に来ない？」
マリと呼ばれた女生徒が途端に嬉しそうに笑顔で答える。
午郎は丁重に頭を下げた。
「有難う。でも大丈夫だよ。この通り心配ないよ。掌のマメが潰れただけさ！時々失敗もあるさ！大車輪やってるとね」
掌の出血は止まっていた。周囲は乾いている。
「ハンカチ、新しいのを返すからな！」
「いいってば、何度も言わせないで！」
少し口を尖らせると小夜子の顔に笑窪ができた。
「西野君にわたしのハンカチもあげちゃおうかなあ」
「マリったら・・直ぐに図に乗るんだから」髪の毛をブロンドに染めたコが拗ねたような言い方でマリを睨んだ。
「小夜子は運がいいなあ」
小夜子はマリに言われて赤くなって俯いている。
「オレ、ほとんど毎日、放課後にこの鉄棒をやっているから。今日はガードテープも滑り止めもなしでこのザマさ・・君たちにブザマな格好を見せてしまったな。ハッハッハッー・・・」
午郎は白い歯を見せて笑った。
「私たち知っていたのよ！西野君が一人で、いつもこの鉄棒でくるくる回っていたのを・・たびたび見ていた

わよ・・」「うん、同じクラスで知っていないコはいないわよ、西野君のこと、噂の美少年だもの・・そうよね、チャコ！」ブロンドの女生徒はチャコ、と言う。
「いやだな・・大げさで」
西野は照れているが、内心嬉しい。
「今日も三人で暫く見ていたのよ。そしたらバタって落ちちゃうから・・」
「ホント！びっくりしたわ！」
西野は小夜子に向かって言った。
「マメが治ったらまたやるさ！」
「・・・・」小夜子と目が合った。顔が少し紅く染まって見えた。
「元気になったのね。もう大丈夫か！それではわたし達行くね！」チャコが告げた。
「残念だわ！西野くんをわたしのパパに見せてあげられなくて！」
「マリったら！西野くんはキミだけのものじゃないんだから！」チャコがまたマリを睨んだ。
三人の後姿を見送りながら、午郎はズボンやシャツの泥を再度払いながら帰り支度を始めた。
既に薄い灰色の空気が校舎や校庭を包み始めていた。
「おい！西野！」
ドスの効いた声の方を振り返った。
練習を終えた四人の野球部員が立っている。
「少しお調子にのってねえかい。女たらし！」
「演技もうめえな！鉄棒から落ちてサ、女生徒の母性を擽り、女のコときっかけを掴むのが奥の手かい？」
「少し、教えてもらいたいな。モテる方法をさ！」
汚れたユニホームを着たまま、それぞれ部活の当番の役割だろうか、バケツに入れたボール、バットの束を持っている。
どうゆう意味で因縁を付けに来たか、午郎には読めていた。二名は一年生の野球部員。親しくはないが同じ教室で机を並べている仲間だ。他の二名は先輩でマネージャーYとレギュラー部員K、いま、ここで女子生徒と笑いさざめいていたことが不愉快なのだろう。妬みだ。
「鉄棒から落っこちちゃってさ」
ハンカチで押えた掌の血をみせた。
「それはどうでもいいさ、当校は男女の交際は厳禁だと言うことを知っているのかい！」野球部マネージャーのYが言う。
「知っているよ」
「解っていたら、女の子とイチャイチャするなっていうこと」レギュラー部員のKが言う。
「そんなんじゃないけど・・交際はしてねえよ」午郎が呟く。
「今日のことは大目にみてやろう。でも、一丁、気合

を入れさせて貰うぜよ！そこにケツを出せ！」
バットを持ったKが西野の後ろ側へ回った。
「一発、やってやるから、ケツをこっちに向けろや。ほれ！少しかがんで出すんだよ！」
気合を入れる口実で、野球部員が常用している手法だ。エラーをした部員、ダラダラと無気力な守備の部員に対する懲罰行為のひとつだ。ケツをバットで思いっきり叩く懲罰を西野は知っていた。
「いやだぜ！叩かれる理由がないだろう！」
「何だと！反抗するのかよ！俺たちに！」
「オレは野球部員じゃないぜ！なぜ叩かれなければならないんだよ！」
同級生の二人に同意を求めて見ると、二人は目を伏せた。
「おんな誑しの腐った精神を直してやるのさ！理由おありだろうが」Yが言う。
「ゴチャゴチャいうなよ、西野！」
バットを持ったKがそのままの姿勢で立っていた西野の尻をめがけて、バットを振った。動きは読めていたから西野は瞬間身体を捻ってそれを避ける。
空を切ったバットは西野に対面していたマネージャーYの腹に食い込んだ。
「ゲッ！」口からYの唾液が飛んだ。
マネージャーは地面に内伏して、うめき声をあげている。
「てめえは、俺たちを沽券にしたな！」
西野は直ぐに、同級生の一人が束になって抱えていたバットの一本を引き抜いて身構えた。瞬間の自己防御だった。その時、西野の背後や周囲のグランドの街燈に次々に灯が点る。
「すまん！彼奴が避けるとは！」
腹を押えたマネージャーYにバットを投げ捨てたKが謝って、慌てて同級生の二人がYを支えて背中を擦っている。Kは西野に目を剥いている。
「お前って奴は！・・」
バットを構えた西野を睨んだ。
本来、彼らは不良で悪質な部員ではない。バットを構えた想定外の西野の反撃にうろたえ始めた。
「やるのかよう！」Kが見上げて叫ぶ。
「キミらが仕掛けたのだろう！オレは喧嘩をする気はないぜ」西野はバットを構えて言った。
マネージャーYが腹を押えて声を絞り出した。
「オレらも君と喧嘩をするためにきたんじゃない。もういい！やめろ！」
女子生徒にモテる西野を羨んだ四人が示し合わせて一発、尻にバットをぶち込んで、脅かす程度に考えていたのだった。
彼らが挑んでくる様子が消えていたから西野はバットを置いた。西野の自尊心はこれで収まった。
「キミ達何をしているんだ！」
当直らしい先生が校舎を出て、こちらへ向かって来る。皆は顔を見合わせて頷いた。
「もう、話は終わりました。何でもありません！」
ドスの効いたKの声がグラウンドの向こうの校舎に反響する。
「速く帰れ！表は閉めたから裏門から出て行けよ！」
「着替えが終わったらそうします！」
大声で答える。
当直も彼らが争っていたとは思っていないらしい。
西野は彼らに背を向けると、裏門へ向かって歩いて行った。掌に血の滲んだハンカチを握りしめて。緊張が解けた途端に掌に痛みが戻ってきた。
四人は肩を寄せ部活の離れ屋へマネージャーYを庇いながら野球部室のある小屋へ向かってゆっくり歩いて行った。
その日以来、西野は砧小夜子の笑窪のある健康的で明るい笑顔と優しい性格が脳裏から離れなくなったのだった。
駅から出る循環バスの時間を小夜子に合わせて待っている。同じバスを降りると肩を並べて校門に向かう。いつでも、どんなことでも話をしたかった。小夜子も午郎に時間を合わせていた思う程、時間は一定していて、いつもふたりは一緒の朝のバスデートだった。
二人の心は和み会った。午郎は孤独感から解放された、楽しい高校生活を続けていた。
やがて男女交際の禁止ムードは融和していった。
「男女の交際を締付けるより自由に堂々と交際をさせる方がバランスのとれた人間に成長する」
国際都市横浜のお膝元で、全国に先駆けて新しい風が吹き始めたのだろう。
午郎と小夜子も学校内で特別に監視されることも無くなって、仲良く肩を並べて校門を潜ることも普通になっていた。放課後になると鉄棒回りでマリとチャコ三人を含めて賑やかに過ごすことも多かったが小夜子はいつも大車輪が終わるのを待ってくれた。マリとチャコも二人の交際を認めてくれた。
小夜子との交際はバスデートと放課後での雑談以上の付合いは無かった。
S高校の卒業式が終わり、オレが岡大へ入学する直前になって始めて横浜八景園で小夜子と一日、最高に楽しいデートをした。
始めて唇を合わせた。そして永久の誓いをしたのだった。
二人の交際は、遠距離恋愛になり、文通が主体に変わっ

オレがこれから巻き起こすこと。これは自分と小夜子の人生にとって大冒険なのだ。明朝、小夜子が東京駅で待ってくれているはずだ。昨夜、寮に近い津島郵便局から電報を打った。

「特急〝あさかぜ〟で行く。東京駅「丸の内北口」に行く、午前八時三〇分予定　午郎」（当時はまだ待合せの常設「銀の鈴」はない。）

その前に詳細な手紙を書いて送っている。様々に夢を語ってきたが、彼女はもう決心してくれたのだろうか。小夜子のお母さんはオレたちの交際には反対をしていない。想像すれば心が弾むが直ぐに真逆の光景も浮かんでくる。

午郎の父母の激しい嘆きの光景なのだ。

「不幸になるぞ。未熟な青いトマトたちよ！今のうちに考え直すのだ！」

今は寒さも忘れて手袋もしないでデッキの手すりで身体を支え、午郎は岡山駅まで風に吹かるままに両親の真剣な顔を思い浮かべて硬直したまま立っていた。

午郎は岡山駅に着くと市内の繁華街「天満屋通り」の邦画専門の映画館へ入っていった。

館内売店で買ったパンを齧り牛乳を飲みながら日本映画の三本立てを見て、特急寝台車へ乗り込むための時間調整をしたのだった。大冒険を前にして緊張を解す目的

て行った。

旅立ち（一）

午郎はこれまでの高校生活、北津寮の生活を回想しながら津山線、法界院駅に着いた時、岡山行きのＳＬが牽引した客車が入ってきた。既に東京迄の切符は二週間前に買っていたから乗客の後に続いてデッキに立ったまま車内には入らなかった。寒い風も我慢して岡大キャンパスの森や半田山を眺めながらひと駅を乗り過そうと考えたから。ＳＬの石炭の煙が目に浸みる。「もう帰って来ないかも知れない」機関車から吹き出す白い蒸気と煙が田園に流れては消えてゆく。

オレが「これまでよ」と北津寮から消えていってもＡ君を除いて誰も何も感じないだろうし、何の影響を及ぼすことはないだろう。この蒸気や煙のようにオレの存在と退学はすぐに過去のこととなった空虚な空に消えてゆくだけだろう。但し学費や寮費の未納事実は早々に小さな事件に成るかも知れないが。

後期の学費、寮費は母から現金書留で送られてきたが、納めずにオレの私費にして、バッグに入れている。生活費と合わせて十万円位は用意している。（当時の学卒の初任給は一万五千円位）

「もうすぐ会える・・・」

小夜子の美しい笑顔とあの唇の感触、均整の取れた柔和な姿態が感奮を呼ぶ。

もあったのだが。映画全盛期の時代で、年末の忙しい時期にも関わらず館内は満席に近かった。しかも石炭ストーブで暖房していたため酸欠状態の映画館を出た時、顔が火照り、少し頭痛がしていた。

映画館を出て時計を見ると寝台列車の発車までにはまだ少しの時間があった。

トレンチコートの襟を立てて、公園のベンチで星の見えない夜空を見上げて深呼吸を繰り返していると顔の火照りと頭痛は間もなく消えた。

天空から白いものが落ち始めた。

粉雪だった。

「初雪だ・・・」

公園の街燈に照らされて、木枯らしに舞い散って行く粉雪の踊る様を見ていると北国の雪景色が脳裏へ浮かんできた。

同時に、先ほど一本の映画の中で見た男女の悲恋の物語が脳裏に重なってきた。

女性占い師が「トランプ占い」で愛する二人の将来を占った。二人の運命は「凶」と出たのに主人公と恋人は親や職場を捨てて逃避行。やがて男は肺結核で倒れる。現実社会は甘くはなく恋人が体を張って主人公を支え働いているうちに阿漕な勤務先の社長の罠にかかり貞操を失う。女性は自虐心に堪えられずに自殺、主人公がその恋人の仇討を決行、社長を殺して、北の国へ逃避行。警察に追われ、逃げてゆくうちに美しい大雪原で幻想のなかで愛する恋人と再会する。熱い抱擁、あの世での永久の幸せを夢見ながら主人公が雪の中で美しく死んでゆくストーリー。このストーリーが妙に胸に焼き付いて離れない。

映画はあくまでフィクション！オレ達とは関係ないや！何回も否定してみても明日にも始まる計画と将来に対する不安が胸を突いてくるのだった。

腕時計を見る。駅に向かわねばならない時刻だった。バッグに降り懸った小雪を手で掃き落した。

その時、暗い公園の闇空から異様な声が響いて来たような気がして周りを窺う。何組かの男女、老夫婦は無口で目の前を通り過ぎて行ったが。

「ママ～、ママ～ッ・・」

幼い女の子の悲痛な泣き声が聞こえてきた。

間もなく西野の座っているベンチの向こうから映画で流行った「真知子まき」にマフラーを巻き、白いコート姿の女性とオーバーコートに赤い毛糸の帽子を被った五～六歳位に見える女の子が現れた。

子供は泣きながら母のコートの袖を掴んでいる。

「ママ！クリスマスだよー今日は・・・行かないで！」

女の子は泣きじゃくり、母に訴えている。

「我慢してね・・ミーちゃん、お願いだから・・」

「あの・・・おじさんのとこへ行くのね？・・・ママ、キライ！」

母親は屈んで子供の手を取ると両手で包みこんで温かい息を吹き掛けている。

「ミーちゃんゴメン・・お母さんはね、今夜はね、急なお仕事なのよ、あの人は悪い人ではないのよ。聞き分けてちょうだい・・・」

母親も泣いているのだろうか。自分の瞼を押えたハンカチで女の子の涙を拭いている

「ママはね、働かなければミーちゃんと一緒に暮らせないのよ。ミーちゃんごめんね、おばあちゃんの所で良い子にしていてね、明日の朝には迎えに行くからね」声が震えている。粉雪が一頻り二人の頭上を舞う。

「だって約束したのに・・・クリスマスはいっしょに居るってママは言ったのに！ママのウソつき！」

母親は子供を抱きしめた。直ぐに抱上げると南の住宅地に向かって行く。

「ママ！どうして家にはパパがいないの？」

母親の肩が前のめりに揺れたような気がした。

「ケイコちゃん家のように、パパがいれば、お母さん働かなくて良いのにね！」

二人は公園の外へ消えていった。

午郎は駅に向かって歩き出した。胸の中を渦巻いている寒風が胸を刺す。

女の子が「自分家にはパパがいない」

子供の素直な哀しさ、嘆きが耳の底に残っていた。同時にあの子を抱きしめていたママの痛烈な苦しみが胸を打つのだ。泣いていたママの言葉には子供に語れない大人のウソが隠れているような気がしてならない。

小夜子の家庭も同じように母子家庭だった。

「あの娘の父親の名は戸籍上にもない。認知をされていないんだぞ！そんな娘を由緒ある当家に入れるわけにはいかない」と親父が午郎に告げた厳しい顔が胸に浮かんできた。

あの親娘が小夜子の親娘を連想させるから、哀れさが痛みになって胸に浸みてくるのだった。

冬の夜空、すっかり暮れ泥んだ岡山駅へ着いた。

時折激しく吹いてくる木枯らしに小雪が駅舎の照明の中を四方八方に舞っている。

プラットホームへ続く階段を降りてゆくと、丁度いま当に、巨大な黒い蛇のような貨物列車がデゴイチ（D51蒸気機関車）に牽かれてプラットホームから東京方面に向かって暗闇の中に消えて行ったところだった。蒸気機関車から吐き出された石炭の煙と芳香が駅の構内に薄青く棚引き、小雪舞う闇の空に溶けて行く。

入れ違いに「ピョー、ピョー」寝台特急“あさかぜ”が汽笛を二度響かせて西方の暗闇から二番線プラットホームに滑り込んできた。東海道線の特急列車はこの頃から順次、SL（蒸気機関車）から電気起動車に変わっていた。

特急“あさかぜ”の寝台列車の車体の塗装色は艶やかなブルー系で、国鉄20系特急“あさかぜ”が元祖ブルートレインとして登場したのだ。深い蒼色に萌黄色の細いストライプが三本走るデザインで連結された夜行列車は天空に煌めく銀河に向かって走る姿を連想させるのだろうか。たちまち巷で別称「銀河鉄道」と呼ばれ始めて、大人気の寝台列車になってきたのだった。

午後六時二〇分発。博多始発の東京行き。岡山駅の上り専用のプラットホームで“あさかぜ”は乗客を待ってしばしの休息をしている。

その乗客の一人が西野午郎なのだが。

十両の連結車体は優美で、気品に満ちた帝王のような風合いをも滲ませている。

戦後から輸送利便性だけを求めた「黒い箱」の時代から軌道修正して生まれた日本国有鉄道のニューフェイス登場とも言えよう。

夕暮れ時のプラットホーム、今は、ラッシュアワー。乗降客は白い息を吐いて縦横に溢れている。

更に今夜はクリスマスイブだ。

デコレーションケーキの箱を持って家路を急ぐ親子連れやケーキの箱をぶら下げてほろ酔い機嫌の中年のお父さん達もあちらこちらで見受けられた。

岡山市は瀬戸内に面した温暖な土地柄と言われているが、この日は朝から曇天模様。市街北面に屹立した半田山から「山おろし」と言われた木枯らしが早朝から吹き下ろしているのだ。

この当時「繊維産業大国岡山」と言われた岡山駅は、山陽本線のほぼ中央に位置した幹線駅。その繊維を基幹にした地場産業は日本一に発展してきた証左だろうか、いたる所にこの地方特異な風趣や人の行動が見られた。

岡山市内には多数の洋裁店や中小の繊維工場、ドレスメーカー私学院があり、関西や中四国から毎年、多くの新卒の若い女性たちが就学、就職するので女性人口比率は他の市町村に比べ圧倒的に多かった。

色とりどりにドレスメイクした洋装、コートやマフラーでお洒落をした若い女性やカップルたちによって駅舎やプラットホームは華やいで嬌声が響き合い、クリスマスイブのムードを盛り上げていた。

しかし、欧米から齎された風習がクリスチャンでもない日本人の多くに浸透して年々定着してきた様々な輸入イベントが果たして日本の文化と言えるのだろうか。

その発想は無粋だ！反論も出た！

文明や文化は時代と共に創造され変化してゆくものな

のだ！「不易流行」という言葉があるように、時代の新しみを求めて変化を重ねていく「流行」性こそ「不易」の本質であると。

戦後の著しい産業、経済復興で、将来の日本人の在り方について喧々諤々の議論がされた時代でもあった。それでも欧米化はあらゆる分野に及んだ。音楽や遊具まで新しいものが次々輸入され、これが歓迎された。

反面、その代償として、日本古来の徳目（仁愛、正義、礼儀作法）の精神性は薄れて行った。更に誤った自由民主主義の偏見が横行し、夫婦、父子、兄弟、子弟、友人、隣人関係に徐々に乱れや歪が入ってきた。

現に西野午郎も戦前派の父母に反発していまから自由な欲望を満たすために逃避しようとしている。父母、弟や親族に対立して決別しようとしている。これは天のもとで正当なのだろうか。自由への変革は一方で良としても片方では悲劇になるのだ。

何かが午郎の胸の中で膨らんでは弾けている。

駅は無常の道標だ。鉄道は旅立つ人の悲しみや喜び、怒り、哀しさを運んで行く。或る人は夢を見、ある人は絶望を胸にしながら旅立って行く。旅立つ人の命運や正悪、是非を論ずるまでもなく無機的な二本のレールは常に旅人の歴史を生んで行く。同時に生まれた過去は元へは帰れないのだ。

ブルートレイン“あさかぜ”はそんな喧噪や理屈には関係なく車体を輝かせ、静かに定められた乗客を待っている。

「あっ！“あさかぜ”だ！ブルートレインだよ！お父さん！乗ってみたいなあ！」

少年が目を輝かせて父の手を取って跳ねている。

次の瞬間、少年の胸には、やがて疾走してゆく“あさかぜ”が、未来の世界を繋いでくれる魔法の特急列車に見えて来たのだろうか。お父さんの腕にしがみ付いて訴えていた。

「お父さん！このブルートレインで東京に行こうよ！お母さん探しに行こうよ！ねっ！お母さんに会えるさ、絶対に！・ねえ、お父さん！」

（二）

西野午郎はこの父子から離れて指定の車両に向かって行った。

父子の短い会話から衝撃を受けていた。あの子はお母さんに会いたいと嘆いている。あの子は東京を知らない。お父さんはそれを知っていても子供に言えない事情に苦しんでいる。

駅には沢山の人間のドラマが詰まっているよと、ある時A君が話していたことを思い出した。

お父さんは肩を落として子供の手を引いて“あさかぜ”から黙って離れて行った光景は、哀しくて胸が痛む。

先刻、公園で経験した親娘のことも脳裏に残っていた。映画ではない現実に不幸を背負った人間のドラマを見たようで、人の世の哀しさを午郎は知った。

午郎は停車中の列車へ乗り、指定された寝台車両の部屋へ入った。

寝台特急“あさかぜ”が今からオレを運んでくれる。これが人生のスタート台になる。希望と不安の中で、これからは自分の中の何かを切り捨てて行かねばならないだろうと漠然と考えていた。

クリスマスソングが街に流れていたが、そう言えばオレの実家ではクリスマスイブは余り関係なかった。西野家では父が「宗教が違う」という理由で毎年イブは無視された夜だった。しかし、母親がクリスマスケーキだけは毎年買ってきて「美味しいからみんなで食べようね」と言って午郎と弟の辰郎の三人で食べるのだが。父は「甘いものは食わねえ」と苦い顔をして、悔しそうにオレたちを睨んで酒を飲んでいたな。

「お父さんも食べなさい！」母がスプーンに盛ったケーキを父の口に強引に押し付けると「いらねえってば！」と意地を張る。それでも強引に口に押し込まれて、口に付いた白いクリームを掌で拭いながら「こんな、西欧の風習に毒されて、今に日本は取り返しのつかない病気になるぞ！」と、父は家族に向かって吠えていた。

（あの頃の我が家は平穏で、オレも恵まれていたな）

特急“あさかぜ”は静かに動きはじめた。

既に六人用、両サイドに三段ベッドが設えてあった。

甘美な夢から苦悩の日に一瞬で変わってしまったこと。以来、悪夢を見て寝の布団の中で泣いたことが甦って来るが、それはもう過去のことだ。

未来と自分の心だけに自由がある。

これからは倨傲と依頼心を削り取って行かねばなるまい。自立するには自分だけが我儘を言っていては不可能だろう。この計画は自分で考え抜いた結果なのだ。自分が行った行為、その結果に責任を持てと、常に母に言われたな。

その母から半年分の寮費と本代や生活費を送らせて当座の資金をつくった。合わせてバッグに十万円近い現金を入れていた。少し罪悪感がオレを責めるが。

発車してしばらくすると窓の外は漆黒の闇になった。窓ガラスに午郎の不安な表情が映し出されている。鉄のレールを走る車輪の音がレールの繋ぎ目の振動音に合わせて一定間隔でリズミカルに響いてくる。時折踏切の警報がチンチンチンと鳴り響いては後方へ消えて行った。

トレンチコートを脱いで、三段ベッドの中段が自分専用なのでバッグと一緒に押し込んだ。

サージの学生服にマフラーを首に巻いていた。小椅子に跨って窓の外を見る。闇のなかを時々、遠くに家の灯りが見えては消えてゆく。

あの灯りの下には幸福な家族の団欒があるのだろうな。想像しながら午郎の胸には切ない風が吹いていた。

「西野君は、裕ちゃんに似ているわね」岡大でも女子学生達の噂話を嬉しく思いながら窓ガラスに映っている自身の顔を見る。昼間見ていた石原裕次郎の映画を思い出しながら自分に自信を持たせ、胸の不安を吹き飛ばそうとスクリーン上の裕ちゃんの顔を思い出しながらガラス窓に移してみる。笑顔や怒り、ニヒルな笑い顔、つくって見ている。

「ちっとも似てねえよ」がっかりして小さく呟く。

「いよう！色男！」後ろからポンと肩を叩かれた。中年の男性、毛糸のマフラーを首に巻いた皮のジャンパー姿。何時、車室に入って来たのか、気が付かなかった。恥ずかしくて顔が赤く染まるのを感じた。少し飲んでいるのだろうか、その乗客の顔も赤く、吐く息に焼酎の匂いがする。

「学生さんかい？どこの大学？」

「岡大です」

「そうかい、いい学校だね、国立大学だね。」

「有難うございます。」

「岡山県人かい？」

「いえ、家は横浜です。でも、東京まで行きますが・・」

「東京でデートかい！もてるだろうナ！その顔、どこかの映画俳優みたいだぜ、似ているぜ」

答えようがないが、悪い気分ではない。

「わしは横浜で降りるがね、この寝台車は蚕棚みたいだが、夜汽車の縁(よしみ)じゃあ、よろしく！わしはこちらのベッドじゃ」向い側の中段を示して荷物を置いている。この六人用の寝台室には先客が一人、最上段で横になった白髪の老人が、カーテンを開けたままでわたし達を見下ろして、

「ここで横になったまま失礼しますばってん、よろしく」

長崎弁で、笑顔で挨拶、旅慣れた旅行者に違いない。まだ時間は七時前、これから神戸、大阪で残った寝台は埋まるに違いなかった。

「良かったら一杯どうかね、学生さん！」

男は布製のバッグから白波（焼酎）を出して白い瀬戸物の底に青の渦巻の入った茶碗に注いだ。小椅子を出して座り、

「遠慮はいらんよ、今日は寒いけぇ温まってから寝るがええがの・・」

「すみません」

午郎は、人の良さそうな男の感じに安心して茶碗を頂く。

「旅は道ずれ、世は情け・・ま、しばらく付き合ってえよ、学生さん！」

西野もポケットタイプのウイスキーをバッグに入れて、寝酒として飲むつもりでいたから、酒には抵抗はなく焼酎に口をつけた。

「上のご老人！いっぱいどうかいの？」

「ありがとう、せっかくじゃばってん、下戸やけんのう」

苦笑しながら、雑誌を読んでいた。

「いいなあ、学生生活って・・」

「はあ・・・」どういう意味の良さか、考えていると、

「学生時代は何でもできる。実の社会と比べると温室の中じゃなぁ。社会人になって初めて解るさ！学生時代の良さがな、自由奔放にやるさ！今は！わしゃ高卒だけど・・」

「どうも」どう答えたらいいか言葉が見つからない。

「戦前派だもの、尋常小学校、中学、新制の高校だけじゃ・・岡大か！今はオレの郷の総社市からも結構岡大に行っているがのう、国立大学じゃ言うて、難しいらしいのう？」

ボクは文学部ですから、それほど難しい倍率ではありません、と答えたかったが、午郎は学校の話題から逃げたい心境に変わっていた。寮生活に馴染めなかった様々な過去の状況が心の中で、酔いと同時に湧き上がって思い出すのが苦しい。

「何か悩んでいるのかい？」

「わかりますか？」

「お顔に書いてあるんじゃよ～。青春時代は悩み多し、歌にもあるがな、これの悩みじゃろう？」小指を午郎の目前に立てた。

「親父の反対で・・困って」

酔いもあって、口に出た。

「戦後になっても多いの。家柄をいうからな」何もかもお見通しで、安心した午郎は愚痴を零(こぼ)していたが、初対面の人に話しても無意味な事に気が付いた。

「おじさんはどういうお仕事ですか？」

「オレかい、ペンキ屋だよ。塗装やだ！鶴見の会社に勤めているんだ。」

男は掌を見せた。爪や皺の中にもどす黒い塗料が染みついている。その手でスルメを裂いて手渡してくれた。焼酎も度々飲み干していたが、午郎は酔いがこない。

「学生さんは酒に強いのう」

「ボクは西野と言います」

「そうか！西野君か！礼儀正しくてよろしい。学士様は違うのう」照れながら自分もグイグイ飲んでいる。親父よりはかなり若いが、何才だろうか。推量する前に

「オット！オレは当年三十五歳！十八歳から奉公して、十七年か！今は塗装現場の主任さ！みんなにはカアサ

ン、カアサンって呼ばれているさ。可笑しいだろう？男なのにさ！ハッハッハッ・・金井と言うんだ。だからカアサンなのさ！」

西野は愉快になってきた。このおじさんは善人に違いない。苦労人は善人なのだと、ふと、A君を思い出していた。

「まあ、飲めや」白波の瓶は神戸駅の手前で空いてしまった。

「将来の学士様と飲むのも何か神様の思召しだろうか。良い気持ちになった。付き合ってくれて有難うさん！彼女とうまくやれよ！早く子供をつくっちゃへ。そうすれば親父の気持ちも変わるぞな！」

午郎の背中をばんばん叩くと金井さんは中段のベッドへ登って行った。西野はモヤモヤした胸中が一瞬、晴れたような気がした。この快感は何処から来るのだろうか。神様が年末の旅の道ずれに自分のためにこの先輩を遣わされたのだろうか。そんな感情を乗せて大阪へ向って寝台特急は走っている。神戸で二名の乗客が入ってくると、午郎は自分のベッドで横になった。眠気が一挙に襲ってきた。

（三）

午郎は夢を見ていた。

県立S高校のグラウンド隅の鉄棒と砂場がオレ達のデートの場所だった。オレは放課後になるといつものように高架の鉄棒で大車輪をしている。

何回も風を切って回転する。

「ゴロウくん・・・」ベンチで小夜子が心配そうに声を掛けてくる。

「Keep him waiting! Comfortable! I felt refreshed お待たせ！気持ちがいいや！スカッとしたぜ」

午郎がニッと笑うと白い八重歯が見える。小夜子の嬉しそうな表情には自然に笑窪が現れる。

「I am scared. I am just looking こわいわ、見ているだけでも」

「Not a big deal! どうってことはないさ！」

白い布製のガードテープを見せた。

何時もの様に英会話を使ってコミュニケーションして楽しんでいる。二人だけの楽しいひと時。

秋の夕暮れは近い。その時間になると校庭には人影は疎らだった。蜩（ひぐらし）だけが鳴いている。「カナカナー、カナカナ、カナシーヨー」

と聴こえてくる。蜩の短い一生を悲しんでいるように。

突如、小夜子がいなくなった。

「小夜ちゃんー小夜ちゃんー」叫んでいる。「カナカナー、カナカナ、カナシーヨー、カナカナー、カナカナ、カナシーヨー」蜩が一斉に鳴き叫び始めた。

午郎の声が蜩の鳴き声に吸い込まれて行くようだ。

突然、小夜子のフレンド、マリとチャコが自分の傍にいる。マリが反り返って叫ぶ。

「だめだよ！小夜はキミにあげないからね！」

「裏切り者は殺すわ！」

チャコが刃物を見せて言う。マリの目は充血している。

「待ってくれよ！君らは認めてくれただろう」

今度は、午郎は担任教師に呼ばれていた。

小夜子との交際を慎むように注意を受けている。同時に家庭訪問を受けて事実が母に伝達された。

「単なる友達だよ」

母がオレを叱った時午郎は答えた。事実友達を越えた交際ではなかった。

「お父さんには黙っているからね。大学に入るまで注意しなさい」

「わかっているよ。心配ないさ」

映画の画面が変わるように、小夜子が赤い鞄を持って歩いている。

「どこにいたの？探したんだぜ・・」

薄い灰色の空気に包み込まれた周囲は静寂だった。さくら並木の葉が風もないのにひとつ、ふたつと自然落下を始めていた。カサッ！と、静間（しじま）に擦れた音が響く。

また情景は変転して枯葉の中に赤いカバンが投げ出されて、そばには真っ青になった小夜子の顔があった。オレを見上げて言った。

「ゴローくん、あなたのお父様に叱られたわ。わたしを殺すって！別れなければ」

突然枯葉を蹴散らして小夜子は通学バスの乗り場へ駆け出して行く。

影だけを黒っぽく残してバスへ一人で乗ってしまった。

「ゴローくんには許婚の人があるのね！」

小夜子の哀しそうな声だけが暗い空から響いてくる。

バスが濛々と砂煙をあげて、走って行く。

午郎は必死でバスを追いかけてゆく。

バスの後方の窓で小夜子は腕でバツ印を造って、蒼白な顔で来るな！というポーズをとっている。

突然、そのバスは大音響と共に爆発した。

「小夜ちゃーん！小夜ちゃーん！小夜ちゃーん！」叫んだ。夢中で！呼んだ！

泣きながら。

涙が瞼を濡らして眠りを覚ましたのだろう。しかも汗も掻いて首周りはぐっしょり濡れていた。

午郎は夢を見ていた事、今、寝台車の中段のベッドに居ることを知るとフーと溜め息を吐いた。

「縁起でもないぜ」悪夢を追い払おうと頭を振った。

特急“あさかぜ”は米原の機関区で気動車の交換をしているのだろう。ごつん、ガタンと連結器の音が響いていた。衝撃で寝台車は揺れる。あのバスの爆発はこの衝

撃音から生まれた夢に違いない。
夢は直ぐに消えてゆくものだが、小夜子の言った言葉は午郎の脳裏へ強烈に残っていた。
親父は直接、小夜子に会ったのだろうか。
どうして、なぜ、勝手に小夜子に会いに行ったのだろうか。これが事実なら最悪だ！

「許婚」と言う言葉から解ってきたことだが、西野家の家系は複雑で、かつ厳格だった。戦後でも長男、午郎の正妻には親族会議の承認が必要不可欠だと父が言う。
父母は午郎の嫁として山梨の遠縁の娘が候補に挙がっていることを告げた。
午郎はこれに反抗して「小夜子」を早めに両親に紹介して合意を取り付けようと計った。小夜子の容姿、明るい性格、やさしさ、思いやり、すべて問題ないと自信を持っていたのだ。
これが大失敗だった。
親父は興信所を使って調べたのだ。小夜子は父親が不明「非嫡出子」母親は曙町でバーを経営していることが判明して、午郎を激怒した。
「西野家は江戸時代から庄屋の家系だ、あの女性では家柄が合わない！」
新民法では家族主義から個人主義に変わり、憲法では男女の結婚も自由平等主義を謳い、旧の憲法は廃止、新憲法に変遷したことは社会の常識だと考えていたのだが。
「お前のためだ！」
「お母さんも同じ意見よ。先々、あなたが幸せになれるように、私たちはいつも考えているのよ」

午郎は胡坐をかいてバッグを開けるとウイスキーを取り出して飲み始めた。
バッグとコートはベッドの後方へ寄せて枕もとの空間を広げる。暫くしてベッドライトの薄明かりの中でうつ伏せになって読みかけのサミエルの詩を読み始めた。
その姿勢は長くは続かなかった。
寝台車は軽快に夜の東海道本線を走り続けていた。名古屋駅を出ると小田原駅まで止まらない。
ウイスキーの酔いとともに、午郎は再度深い眠りに入って行った。
静岡駅を過ぎた頃、ひとりの男が午郎のベッド脇へそっと忍び寄ってきた。通路側、午郎の足元のカーテンが捲れていたので午郎のバッグが見えていた。バッグの口は少し開いている。
男はほの暗い通路を警戒して覗いていたが誰も居ない。周囲のベッドから数人の鼾が聞こえてくる。
暫くすると黒い手が午郎の閉め忘れたバッグのファスナーの間に伸びてきて、音もなく茶色の分厚い封筒を引

き抜くと静かに通路へ出て、左側後方の洗面所のある車両へ消えて行った。その手は老人のような皺があり黒ずんでいた。

特急“あさかぜ”で午郎が目覚めたのは小田原を過ぎた頃だった。
既に夜は明けて海には朝日が指して相模湾の波を照らし始めていた。見慣れた景色だが、いつものように寝覚めの気分は優れず、さらにベッドで浅い眠りを繰り返していた。
横浜に停車、午郎は洗面所に行き洗顔して戻ると、既に金井さんは居なかった。
「横浜だと言っていたのにな」
すぐに忘れてしまった。
暫くすると窓の外に鶴見の工場群が見えてきた。
濛々と煙るスモッグに朝の太陽は吸い込まれている。寝台車にも特有のガスの刺激臭が入ってきた。
高度経済成長時代に突入していたので、必要とされる物は夜昼なく造り捲る！人間に有害な産業廃棄物を排出しても利益を生む製品の製造を中止する企業はなかった。企業は競争を繰り返す。
忽ち全国の工業地帯は天を毒ガスで塞ぎ、大地や川に有害物を垂れ流す。汚泥を貯めた各地の海岸は悪臭に満ちて、魚介類は有害毒物に侵され、これを食さざるを得ない人や生物は健康を侵され始めた時代だった。
野放図な産業の方向を修正出来ない人類が、何れ天罰を受けることになる、とは思っていてもこの悪風を止めることが誰にもできない時代でもあった。
京浜工業地帯の煙突からモクモク上る煙の風景を見ながら、品川駅を過ぎた時、既に西野午郎は身支度を終えていた。横浜を過ぎて暫くして車掌が来て寝台を折りたんだあと同室の乗客は二名だけだった。
下段の椅子に駆けた初対面の二人は無言で車窓の景色を見ていた。
昨夜焼酎を頂いた金井さんが居ないのは少し寂しかった。
「旅は道ずれ・・・」愉快な人に元気を貰った。挨拶が出来なかったことが、少しだけ心に引っかかっていた。A君が口癖にしていたな。「人との縁は一生ものだ、来る者は拒まず、去る者は追わず」
オレにとって金井さんはいい人だった。不安で劣等感に苛まれていたオレに先輩としての良い言葉を残してくれたからだ。「社会に出たら厳しさが解る、学生時代は温室だ、大いに自由を享受したらいい、さあ、飲んで悪い夢は忘れろ！悪いことは忘れることが、明日のエネルギイに変わる」と言う意味の言葉が記憶に残っていた。鶴見の塗装会社で長年苦労したあの黒ずんだ手で、酒の肴のスルメを裂いてくれた情景が浮かんだ。あの時オレ

は好きな女性と南の島に旅に出ることをポロリと言ってしまった。お金を持っていることも。「若いうちは遊べ、思いっきりやれ！」と発破をかけられて嬉しかったな。西野午郎にとって、この出会いが汚獨した人間社会から受けた最初の洗礼になろうとは暫く後になるまで気づくはずもない。多発した寝台列車窃盗事件の常習犯人が逮捕されたニュースを、テレビで見るまであと約一年。

小夜子が待っている「丸の内北口」東京駅の設計は有名な辰野金吾がドイツ人設計家バルツァー案を取り入れて建設され駅舎は赤い煉瓦造り三棟に分かれて建てられており、南側出入口、北側出入口、中央に皇室専用入口と降車口になっており「丸の内北口」のドームは天井が高く鷲レリーフの美しい装飾でその下で出会った恋人たちに幸せを呼ぶ、と言われて解りやすい場所だった。

丸ビルに近く、朝八時までは通勤の人並みで混雑するがその後は落ち着いた駅の風景になる。当然星のマークの中央に立っているに違いない。幸せになれるから。

「ヤッホー！ Keep him waiting! Were you fine? お待たせ、元気だったかい？」オレは呼びかけるだろう。

「Welcome home! Unchanged お帰りなさい！変わりはないわ」と、答えるだろう。

「Glad! May I hold it? うれしいぜ！抱擁していいかい？」

「Though I am glad. I am ashamed うれしいけど、恥かしいわ。」

当然、他人の前で抱擁はしないさ。欧米人の様に人前でイチャツク習性はない。日本人だからな。オレに合わせて英会話を楽しんでくれる小夜子は可愛い。小夜子を英会話塾に行かせたお母さんに感謝だ。

間もなく東京駅だ。寒くもないが震えがくるが、これが武者震いというものか！

特急 "あさかぜ" がスピードを落とし始めた。

午前八時二十分時刻通り到着だと車内アナウンスで告げている。あと五分で終着駅の東京だ。

ボストンバッグは座席にトレンチコートと一緒に無造作に置いていた。空いていたチャックは自分で閉め忘れたと思っていたから何の疑念はない。取り出していたウイスキーの瓶を入れ、閉める前に衣類の底に押し込んだ現金入り封筒を手で探した。手先に触れて然るべき現金を入れた封筒があるべき場所を探る。当然手に伝わってこなければならない筈の封筒の感触がない。手で衣類やノート、本などを掻き回して目で探したが見当たらない。

午郎は金槌でがあ～んと脳天を打たれたようなショックを受けた。すぐに頭の中も顔も真っ白になった。

「いけねえ！どうしたというんだろ！」

思わず大声をあげていた。

既に中年の同乗者がバッグを持って室外へ向かおうとしていたが、振り返って西野を見た。

「どうかしましたか？」

「無いんです。」

バッグを更に見ながら、

「お金が・・・無くなっている！」

「確かですか？盗難ですか？」

「ここに入れて置いたんです。」

詰め込んでいた衣類がはみ出ている。

「困りましたな・・・入れていたのは間違いないのですか？」

「はい、それは間違いなく」

「いくら位入れていたのですか？」

「十万円位です」

「それは大金ですな。あなた、学生さんですよね！よくそんな大金を！」

東京駅へ "あさかぜ" は到着した。

「盗まれたんですね。駅で届けた方がいいですよ。どうしよう、わたしが付き合ってあげる時間がないから・・・あっ、車掌さん！この学生さんの話を聴いてあげてください」

車内の点検だろう。丁度、車掌が通路に現れた、「どうかしましたか？間もなくこの列車は車庫に入りますが・・・」

「この学生さん、お金を盗まれたらしいんです」

中年の同乗者は車掌に頼んでそのまま行こうとしたが、

「申し訳ないけど、わたしは急いで会社へ戻らなければなりません。しかし私にも嫌疑がかかるかも知れませんね・・・」

名刺を西野へ渡して

「一応、わたしも同乗者のひとり、京都から乗りましたがね。ほとんど皆さんベッドで睡眠中でしたが・・・私が疑われても困りますからね。とんだ災難いあったもんだなあ」

今度は不快な顔を見せた。

午郎は名刺を見た。某大会社の常務で近藤某と読めた。当然、この人は無関係だろうと思うと同時に申し訳ないことだと思っていた。

誰が盗んだのか！大切なお金の入ったバッグをベッドの足先に置いたことが油断だった。岡山から同乗した鶴見の塗装屋さん、金井さんの顔も浮かんできた。人の良さそうな金井さんも盗みはしないだろう。熟睡していた午郎のバッグを探って、大金の入った封筒を抜いて行った犯人がいる。是だけが事実だ。

車掌に教えられた駅のホームの事務室に行って事情を話す。

「駅前の交番へ行きなさい。盗難事故は警察ですから

ね。でもこんとこ夜行列車の盗難が多いなあ・・・一応、ここでも記録は取らせて頂きます。学生さんですね。学生証を見せてください」

午郎の住所、氏名から乗車駅、同乗者のことなど記録簿に丁寧に書かれた。

更に交番へ行かなければならない。

「父親へ連絡されるだろうか」

これまでの計画は断念しなければならないのか！お金がなければ不可能だ。

南の島へは往けない。

いま東京駅の「丸の内北口」では小夜子が待っているはずだ。連絡は会うまで不可能だ。（当時は連絡手段のスマホはない）

駅の事務室を出ると九時三〇分を回っていた。一時間遅れてしまった。

直ぐに派出所へ行くのは止めた。小夜子に会いたい。すべてを話してしまおう。警察に行けば駅の事務室の係員に盗難報告をする程度では収まらないことは読める。お金の出どころ、金額、使用目的・学生であること、すべて調べられることは予測できた。しかも両親に連絡されることが想定され、これは最悪の事態になる。

顔は青白く、肩を落として「丸の内北口」のある通路へ出て行った。

切符を改札口の駅員に渡し北口のホールに出るとすぐに小夜子を探した。

一時間遅れで、心配しながら、どこかで待ってくれている筈だ。疑う余地はない。

人混みの中を目で追う。片隅の椅子は満席。腰かけて本を読んでいる人、お菓子を食べてお喋りしている人、小夜子はいない。ドーム下の中央には立っていない。

四方八方に目を配って探してみたが・・誰かを待っている人、人、人・・

中には再会を喜んでいる人も・・・

しかし小夜子は見えない。

どうしたのか。遅れたためにオレの降りたプラットホーム、一六番線へ入って行ったのだろうか。

午郎の顔に焦燥の表情が浮かぶ。思わず、

「小夜ちゃ～ん、いませんか、小夜子ちゃ～ん！」声を出して呼んでいた。

周囲の何人かが反応して顔をむけて学生服の彼に対して興味を示している。

「I'm looking for a my precious！（わたしの大切な人を探しているんだ！）」入場券売り場へ急ぎながら思わず呟いた。

自然に出た英語に前を歩いていた女性が反応して午郎を振り返って微笑した。自分と勘違いしたようだ。

「I'm sorry. it is not you すみません、あなたではありません」

直ぐに改札を通って走って駅の中央コンコースから十六番ホームへ駆け上った。

プラットホームは多くの乗降客で溢れていた。

当然“あさかぜ”は既にいない。

午郎は冷静に周囲を注視した。

歩きながら動く群集に向かって呼びかけた。

「砧小夜子さんを探しています！」

今度は心から叫んだ。お願いだからどこかに居て欲しい。

「いませんか？砧小夜子さん！」再度腹の底から叫んでみた。遠くまで聞こえる声が出ていた。午郎は無心だった。

今は羞恥心も倨傲も消えている自分に気が付いていたが。

「小夜ちゃ～ん、小夜ちゃ～ん、小夜ちゃ～ん」

声は雑踏の中に吸い込まれて、何の反応は起こら無かった。

いま夢の中に居るのか！・・夢であってほしい！今朝の夢の続きであってくれ！

歩きながら周囲を注意深く確認してみる。元の場所へ戻ろうとした途端、中年の男に身体が当る。肩が痛い！

「どこを見て歩いとるんじゃい！このバカもん！」

大声で叱られ、頭を打たれた。

「ごめんなさい！」

厳然とした現実に愕然とする。

怒った男の大声に反応した瞬間、周りの人たちはギョッとして二人を注視するが、直ぐに無関心を装い通り越してゆく。中には冷ややかな目を午郎に向けて何事か囁いているカップルも見えた。午郎は絶望的な目で時計を見た。一〇時を回っている。

ふと脳裏に閃光が走った。「北口」の壁面に常設してある伝言板に向かって駆け出して行った。残っている唯一の希だった。

（次号へ続く）

これはフィクションです。記載された団体名・人名等は架空のものです。

「農ある暮らし～私の日常～」(9)

古屋富雄

まんじ第150号に寄稿することが出来まして、光栄に思います。

さて、今年は童謡が誕生して100年の記念すべき年であり、小生も童謡らしき歌を作成しましたので紹介させて頂きます。

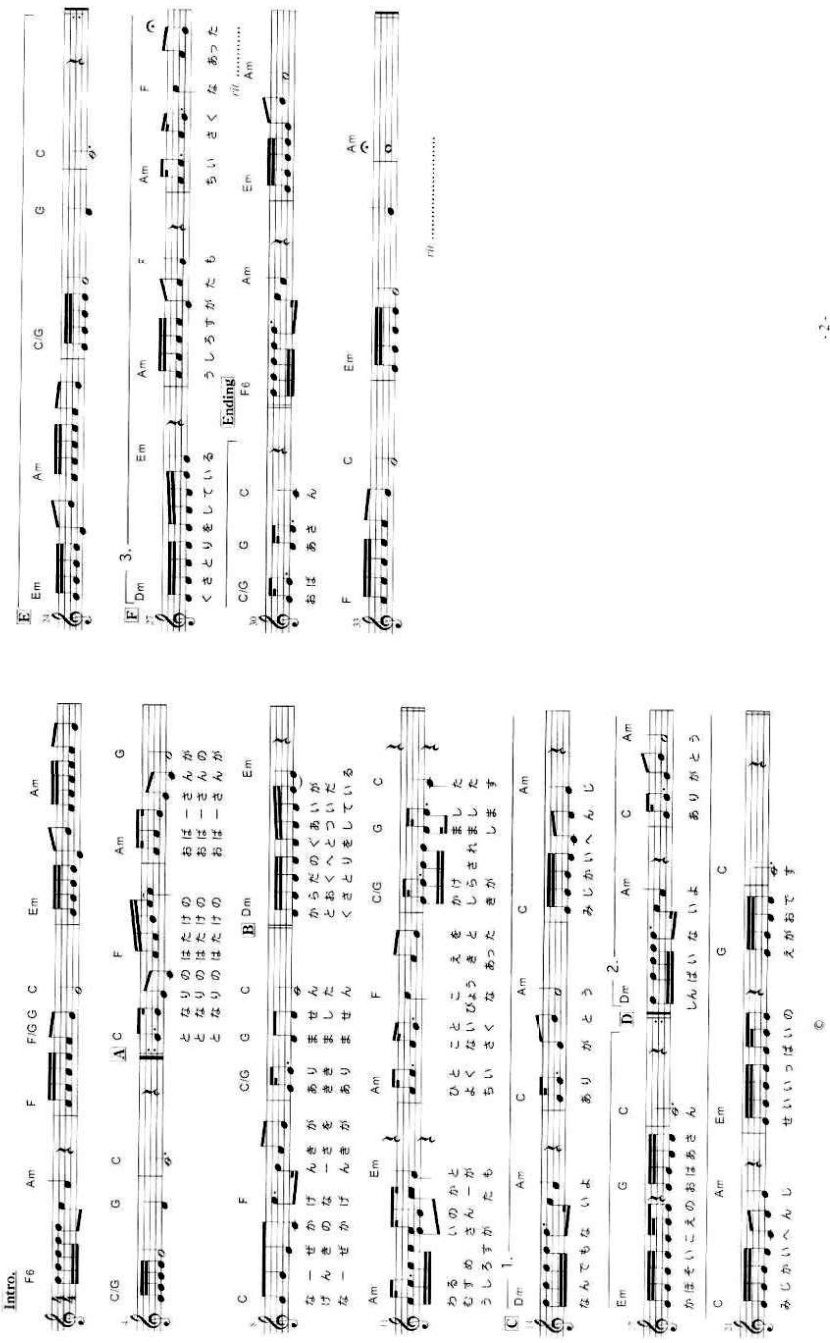
隣の畑のおばあさん

隣の畑のおばあさんが
何故か元気がありません
体の具合が悪いのかと
一言声を掛けました
何でもないよ　ありがとう
短い返事、か細い声のおばあさん

隣の畑のおばあさんの
元気のなさを聞きました
遠くへ嫁いだ娘さんが
良くない病気と知らされました
心配ないよ　ありがとう
短い返事、精一杯の笑顔です

隣の畑のおばあさんが
何故か元気がありません
草取りをしている後姿も
小さくなった気がします

草取りをしている後姿も
小さくなったおばあさん



房総の戦国興亡史
―千葉氏を中心として―

山田嘉久

一般に、日本の戦国時代は「応仁の乱」（1467）から始まったというのが通説のようである。室町幕府8代将軍足利義政のとき、将軍家で家督争いが起きた。義政に継嗣がないため、義政の弟足利義視（よしみ）が次期将軍と決められていたが、その後になって義政の正妻日野富子が義尚（よしひさ）を生んだことが、紛争の種となった。

この当時、幕府の実権は管領の細川勝元と山名持豊が握っていたが、勝元ははじめ義視を支持し、持豊は富子と組んで義尚を立てた。これに畠山、斯波家の内輪もめも絡んで、1467年、細川方（東軍）と山名方（西軍）が武力衝突し、この戦いは11年に及んだ。

応仁、文明の乱である。

この乱により幕府の権威は失墜して、戦乱は全国各地にひろがり、日本全体が戦国時代に入っていくのである。

しかし、関東に限って言えば、それよりも10数年早く起きた「享徳の乱」（1454）から戦国動乱は始まったことは「まんじ」141号で既に書いた。

「享徳の乱」は関東公方足利氏と関東管領（公方の補佐役）上杉氏の全面戦争である。

両者の戦いはその後30年以上も続いたので、関東の豪族たちも否応なしに、これに巻き込まれ戦国の世に突入していった。

一　千葉氏の分裂と里見氏の台頭

房総随一の豪族千葉介胤直（千葉宗家12代）は当初、公方派に属していたが、その後、管領派（幕府方）に転じた。

（このような行動は、別に千葉氏に限ったことではなく、この時代、敵味方を変えることは日常茶飯事だった。あの真田氏ごときは1年に5度も主人を変えた例も

ある。）

このことは千葉同族内でも同様で、この頃、千葉氏の家臣や一族も次第に自立して、公方派と管領派に分かれて争っていたが、公方派である宿老原胤房は主君である管領派胤直の拠る千葉城を急襲した。

敗れた胤直は城を脱出して、下総多古城に拠って管領派の救援を待った。しかし原胤房は胤直の叔父馬加康胤の援助を得て、多古城を攻撃して落城させた。

このため、胤直、胤将親子は自刃したため、ここに千葉宗家は事実上滅亡した。胤直一族の滅亡後、宗家を継承したのは、前記胤直の叔父馬加康胤であった。千葉宗家14代目である。（千葉氏家系図参照）

一方、管領派は胤直の甥実胤と自胤兄弟を下総市川城に拠らせ、千葉一族の東常縁を遠く郡上八幡から派遣し、援助させた。

常縁については「まんじ」137号で書いた通り、歌人として有名だが、武人としての才能も高く馬加方の拠点千田荘（現多古町）や馬加城（現千葉市）を攻略している。

（しかし郡上八幡を留守にしている間に、斉藤妙椿（斉藤道三の先祖）によって拠城を乗っ取られてしまったことも既に書いた。）

一方、公方方は市川城を攻撃して落城したため、千葉実胤兄弟は武蔵に逃れた。こうして千葉氏宗家は馬加康胤系統の「下総千葉氏」と実胤、白胤系統の「武蔵千葉氏」の二派に分裂したのである。

その後、実胤は常縁を頼って美濃に逃れ、白胤は「千葉介」として扇谷上杉氏に属したといわれる。

また、千葉宗家14代を継いだ馬加康胤だが、康正2年（1456）、上総八幡（現市原市）で常縁によって討たれ、15代輔胤は拠点を千葉城から本佐倉城に移している。「佐倉千葉氏」である。

このあたりの「人間模様」はなんとも複雑である。

（市川城についても「まんじ」（142号）で書いたが、扇谷上杉家家宰の太田道灌が築いたといわれ、後に里見、北条の決戦の場（国府台合戦）となった。

また本佐倉城は徳川時代には家康の重臣土井利勝の居城となっている。）

千葉氏は桓武天皇の血統を引く関東の名門で、帝の曾孫である高望王を鼻祖とする武士団である。一族には平将門や平忠常らがいるが、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて源平合戦や奥州合戦などに参加し、鎌倉幕府創設やその基礎の確立に大きな役割を果たした。

この功績により、千葉氏は上総国、下総国ばかりでなく北は陸奥一帯、南は薩摩に至る全国20数カ所といわれる所領を獲得して、幕府の中でも屈指の御家人に成長したのである。

平忠常の孫常長は上総国大椎（現千葉市緑区）に館を築いて本拠としたが、その孫常重の代（1126年）に大椎から下総国亥鼻（現千葉市中央区）に本拠を移した。（数年前（2016）に「千葉開府890年祭」が挙行された。）

前記、鎌倉幕府設立の功績者千葉常胤は常重の子に当たり、千葉氏中興の祖といわれる。（そのため通常、常胤を千葉家宗主初代としている。）

このように房総の名族千葉氏の全盛時代は鎌倉時代であり、戦国期に入ると一族内に内紛が多発して、戦国大名としての勢力もすっかり衰えていた。

そして末期には小田原北条氏に服属する地位に甘んじていた。

衰退の一途を辿った千葉氏に替わって、房総の雄にのし上がったのが新興里見氏である。

里見氏の出自については、「まんじ」143号に記した通り、清和源氏、新田氏の一族で上野国里見郷（現高崎市）を本拠としていたといわれる。里見氏が安房を統一したのは15世紀末から16世紀初頭と考えられるが、いつ房総に移住し、どのように安房を統一したのか、正確には分からない。

14世紀末、安房守護は関東管領上杉憲方が兼務していたが、その後も上杉一族に受け継がれてきた。前述の関東における戦国時代の幕開けとなった「享徳の乱」（1467）の最中に、古河公方足利成氏は対立する上杉氏討伐を里見義美（里見家初代当主）に命じたため、義美は安房白浜に入部してきたことが最近明らかになってきた。

かくして安房進出の足掛かりを得た里見氏は、やがて上総武田氏（後述）とともに房総半島を2分する戦国大名へと成長を遂げて行くのである。

二　千葉氏と北条氏

戦国時代の千葉氏は16代孝胤の後、17代勝胤18代昌胤、19代利胤と代々長男が継いだ。しかし利胤は32才で病没、しかも嫡子近胤はそれ以前、家臣によって殺されていた。

そのため、止むなく利胤の末弟親胤が17才で継いだが、親胤も就任直後に何者かによって殺されてしまった。戦国期の下剋上のすさまじさである。

そこで、重臣に推されて千葉介を継いだのが、親胤の異母兄胤富である。（21代）

胤富については「まんじ」142号で「千葉一族最後の光彩」として取り上げたので、詳細は避けるが、重要なことはその子邦胤（22代）に小田原北条氏から嫁入りさせたことである。すなわち、邦胤の奥方は北条氏政の娘である。

ここに北条氏と千葉氏は姻戚関係となり、両者の紐帯をますます深めた。このことは、千葉氏が北条氏と運命を共にすることの遠因ともなったことを示している。

なお、胤富は天正7年（1579）に没したと伝えられるが、この前後に北条氏康（1571）、武田信玄（1573）、上杉謙信（1578）などの戦国の英雄たちが相次いでこの世を去っている。

また胤富を悩まし続けた宿敵里見義堯（よしたか）も1574年に没した。

戦国時代もそろそろ終末（秀吉の小田原攻め1590）に向かっていた。

三　北条氏の関東制覇

衰退気味の千葉氏と新興の里見氏の直接の戦闘は意外に少ない。

例えば第一次国府台合戦（1538）は小弓公方足利義明と里見氏連合軍と古河公方足利晴氏と北条（氏綱）連合軍の戦いだったが千葉氏は殆どこれに参戦していない。僅かに家臣の高城氏が北条側に参加した程度であった。

また、それから25年後に起きた第2次合戦は里見氏対北条氏の全面戦争だったが、千葉氏は全く参加していない。

第2次合戦に勝利を収めた北条氏は、東関東征服を狙うが、里見氏は上杉謙信に出馬を要請した。（房越同盟、「まんじ」142号参照）

出馬を快諾した謙信は永禄9年（1566）、北条派の臼井城（城主は千葉一族の原胤貞）を攻めたが、前述の千葉氏当主（千葉介）千葉胤富が奮戦して、謙信を撃退している。生涯殆ど負けることのなかった謙信にとっては数少ない敗戦であった。

千葉氏の活躍もあって、北条氏は1569年に岩付城（太田氏）、5年後の1574年に関宿城（梁田氏）を攻略、関東制覇に成功した。

房総においても里見氏と対抗するため、千葉氏などの諸将は北条氏に接近、次第にその勢力下におかれるようになった。

四　戦国最末期の房総勢力図

戦国最末期の房総はどうなっていたのだろうか？

毛利家所蔵という「関東八州諸城覚書」（小田原合戦に備えて豊臣方が調べた北条方の城郭情報）を見ると興味深い。

○　千葉氏（北条外様）

下総（佐倉）	千葉直重	3000キ
〃（臼井）	原　胤栄	2500キ
〃（興津）		計3000キ

参考（房総以外）　反北条　18500キ

（注）「1キ」とは武士1人とそれに従う足軽等数名計5、6名で構成される。

戦国初期の12代千葉胤直は永享の乱では足利持氏に属しつつ、上杉憲実（幕府方）にも接触した。その結果、持氏を自害に追い込むのだが、その功によって、13代胤将は上総守護にも補任されている。

房総全体を支配したこの頃が、戦国期の千葉氏にとって、ピークであったであろう。この後の千葉氏は、前述のとおり、一族内の内紛等により衰退の一途を辿るのだが、戦国末期の千葉氏は衰えていたとはなお、3000キ（約1万5千人）を有し、里見勢とは拮抗した軍勢であることを示している。

五　上総武田氏

上記「関東八州諸城覚書」を見て、次に興味のあるのは、千葉氏3000キ、里見氏3000キを別格として、上総（長南）武田豊信が1500キを有していることである。

このことは、房総において上総武田氏が里見、千葉氏について第3の有力豪族であることを示している。

〃（小金）	高城胤則	700キ
〃（深川）	豊島貞継	150キ
〃（芝山）	板野刑部	150キ
〃（千潟）	蔦木駿河	300キ
		計6800キ

○その他（北条外様）

上総（東金）	酒井政辰	150キ
〃（土気）	酒井	300キ
〃（長南）	**武田豊信**	**1500キ**
〃（万喜）	土岐義成	1000キ

参考（房総以外）　北条一門　14150キ
北条普代　5850キ

○　里見氏（反北条）

安房（岡本）	里見義康	
〃（富浦）		
〃（勝山）		
〃（富津）		
〃（佐貫）		
〃（小糸）		
〃（久留里）		
上総（小田喜）		
〃（勝浦）		

1　上総武田氏の起こり

上総武田氏の初代は武田信長であると言われる。信長は甲斐守護武田信満の次男。（信玄の5代前に当たる）

上杉禅秀の乱（１４１６）では禅秀方（反公方）に味方して父とともに参戦したが、敗戦して駿河に逃れた。その後、永享の乱（１４３８）で足利持氏が敗死し、遺子成氏が鎌倉公方に擁立されると、成氏に味方した。その功により成氏から上総国に知行（所領）を安堵されたという。（しかし信長自身はこの当時は、まだ鎌倉在住であろう）

2　享徳の乱と上総入部

足利成氏と上杉憲忠が対立した享徳の乱（１４５４）では武田信長は成氏方として、結城成朝、里見義実などと共に上杉方を襲撃した。

また分倍河原合戦にも参加、その後、成氏方の主力として、成氏の古河入部にも同行している。

そして康正2年（１４５６）、上総に侵攻して地元の長南氏を滅ぼして、真里谷（現木更津市）と長南（現長南町）を本拠として上総武田氏が成立した。

（上総武田氏系図）

3　上総武田氏と千葉氏

武田信長の死後（没年不詳）、長南は嫡男上総介（実名不詳）、真里谷は次男信興が継承したので、長南が嫡流であったが、16世紀になると武田氏の主流は次第に真里谷に移ったと考えられる。

①　真里谷武田氏

それ以前、15世紀末にかけて真里谷武田氏は所領を拡大、安房方面にも拠点を置いた。

文明10年（１４７８）、千葉氏に内紛が起こり、上杉方の武蔵千葉自胤が下総臼井城（現佐倉市）を攻撃した際には、武田勢は千葉一族の下総海上氏とともに自胤方についた。

長享元年（１４８７）山内上杉家と扇谷上杉家の抗争が勃発すると成氏ははじめは扇谷方、後に山内方に転じた。武田勢は成氏に追従したので、里見氏とも連携したことになる。

16世期初めには、佐貫城（現富津市）や小田喜城（現大多喜町）を傘下におさめている。そして古河公方足利政氏の子足利義明を小弓公方として擁立するなど、武田氏は上総の盟主として隆盛を誇った。

この頃、三浦半島を拠点とする三浦道寸の嫡子義意に娘を嫁がせている。江戸湾ネットワークの一環である。

この武田氏が本拠とした真里谷城跡は既述の通り（「まんじ」１４３号）現木更津市真里谷に所在する。現在まで5回にわたって発掘調査が行われ、出土遺物は土器、陶磁器以外にも刀子などの鉄製品、大量の壁土などが検出されている。とくに貿易陶磁の量は県内最大であり、関東でも有数の戦国時代の出土遺物となっている。

しかし、この城の設立は16世紀前半と考えられ、それ以前の武田氏は真里谷のいずこかの谷間に館を構えていたと考えられる。丁度、越前朝倉氏が一乗谷に本拠を構えたと同様のケースである。

②　長南武田氏

初代武田上総介（信高？）の動向は不詳だが、文明3年（１４７１）に将軍足利義政より足利成氏（公方）追討要請を受けて幕府方に属していた形跡がある。

文明13年（１４８１）死去したとされるが、以後、16世紀前半までの長南武田氏の動向は殆ど不明。これは前述の通り、主導権が真里谷武田氏にあったためと考えられる。

たぶん、長南武田氏はこの頃、長南郡、夷隅郡を中心とした東上総一帯を支配していたらしい。

16世紀前半の当主武田宗清は、千葉勝胤（17代）の娘を妻としていた。勝胤は真里谷信清と対立関係にあったので、同じ上総武田氏でありながら、長南と真里谷は敵対関係にあったと推察される。ただし両者の具体的な衝突は確認されていない。

4「天文の乱」と武田氏の斜陽

永正15年（１５１８）、足利義明が下総小弓（現千葉市）に入り小弓公方を名乗った際には、真里谷信清は里見氏と共に義明を支持した。

逆に千葉氏は反義明方であったため、千葉氏と真里谷武田氏は険悪になった。（逆に長南武田氏は千葉氏と姻戚関係を結んでいる。）

天文2年（１５３３）、里見家の内乱（庶家の里見義堯が当主里見義豊を追放）に際しては、真里谷信隆は義堯に味方し、一族の武田信応は義豊を支援したため、武田家内でも内乱となった。

天文21年（１５５２）、武田信応が死去したが、後継を立てられないため、所領は以前から援助を受けていた

北条氏に接収されてしまった。

ここに真里谷武田氏は事実上、滅亡となった。

天文22年（1558）より、北条氏康は里見氏攻撃を本格化した。千葉氏は当然、北条氏側に付いたので、里見氏との抗争は益々激化するも、情勢は千葉氏にとっては、やや不利であった。

一方、長南武田豊信は里見義堯の娘を妻とし里見氏に属していた。しかしその後、北条方に転じた。

その後、北条氏と里見氏は一旦、和睦したため長南武田氏と千葉氏は回復したものの千葉氏内には内粉が絶えなかった。

そのため、両氏とも次第に滅亡に向かって行く。

六　戦国末期の千葉氏

上記「関八州諸城覚書」によれば、戦国期千葉氏の城郭として、本佐倉城（千葉氏）の他に　臼井（原）、小金（高木）、深川（外島）、大だい（板野）、かぶら木（蕪木）が載っている。

そのほかにも中島城（銚子市）、森山城（小見川町）、松子城（大栄町）などがあるはずだが、これらは本佐倉城の支城とされ、書きとどめられていないと考えられる。

総数では上総、下総にわたり千葉氏関連の城は実に200城以上を数える。

（下総千葉氏系図）

平忠常―（略）―千葉常重―1常胤―2胤正―3成胤―4胤綱―5時胤―6頼胤―7胤宗―8貞胤―9氏胤―10満胤―11兼胤―12胤直―13胤将―14康胤―15輔胤―16孝胤―17勝胤―18昌胤―19利胤―21胤富―20親胤―22邦胤―（重胤）
23直重（北条氏政5男）

22代千葉邦胤の妻は北条氏政の娘芳桂院であることは前述したが、夫婦の間には亀王丸（重胤）がいた。しかし幼少であったため、同じく氏政5男の直重が芳桂院の生んだ娘の婿として迎えられ、千葉氏の名跡を継承することとなった。（23代千葉直重）

まさに北条氏による千葉氏取り込みである。

北条氏政は氏直に家督を譲って「御隠居様」と呼ばれていたが、自ら直接、下総佐倉に進駐して来て鹿島城（現佐倉城）を築き、千葉氏の領国である佐倉領を直接支配するようになった。

また千葉氏の拠点である本佐倉城も普請をして、実質上、北条氏の支城としてしまった。

七　豊臣秀吉の関東制圧と千葉氏の終焉

天正18年（1990）に豊臣秀吉の小田原攻めが始まると、千葉氏、原氏をはじめとする千葉氏系の諸武将の大半は小田原に籠城して、それぞれの本拠地（房総）に

は僅かな留守部隊が残ったのみだった。

これに反して、秀吉重臣の浅野長吉、木村一、徳川家康重臣の本多忠勝らの軍勢は房総に侵攻。北条、千葉双方の諸城を次々に攻略していった。

同年5月には本佐倉城をはじめとする城々が開城し、7月5日には北条氏が降伏して小田原城も落ちた。

氏政は切腹、氏直は高野山に追放され北条氏は滅亡した。

これとともに千葉氏以下の千葉氏系諸氏も滅亡して、その城と所領はすべて徳川家康に与えられた。

千葉氏最後の領主千葉直重（北条氏政の5男）は阿波の徳島藩蜂須賀家の家臣となり、同地で没している。その子孫は名字を北条氏の本姓である伊勢に改め、徳島藩士として続いた。

また、千葉重胤、原氏、高城氏などは徳川家に召し抱えられたが、江戸時代に旗本として残ったのは数家に過ぎない。

かくて房総の千葉一族は歴史上の役割を終えたのである。

（了）

年号	日本史	房総関連
1454（享徳３）	足利成氏、上杉憲忠を暗殺（享徳の乱）	上杉憲忠の暗殺に印東氏（千葉氏庶流）が関与
1455（康正１）	関東各地で成氏軍と上杉軍、紛争	将軍義政、千葉胤直の忠誠を賞す 成氏方の馬加康胤、千葉の本城を攻撃、胤直逃亡
1467（応仁１）	京都で応仁の乱勃発	東常縁（郡上八幡）領地を斉藤妙椿に横領される
1478（文明10）	成氏、上杉和解	太田道灌、下総に進軍
1516（永正13）	北条早雲、三浦義同を滅亡	早雲、上総茂原に侵攻
1546（天文15）	関東管領扇谷上杉氏滅亡	千葉昌胤没（51歳）
1560（永禄３）	桶狭間の合戦（今川義元没）	北条氏康、久留里城（里見方）攻撃
1564（永禄７）	織田信長、徳川家康と同盟	第２次国府台合戦（北条氏康×里見義堯）
1567（永禄10）	織田信長、岐阜城に移る	北条氏政×里見義弘
1570（元亀１）	姉川の合戦（織田徳川×浅井朝倉）	原氏（千葉一族）×里見氏
1582（天正10）	本能寺ノ変	千葉邦胤、北条氏に隼を献上
1586（天正14）	秀吉、惣無事令を発令	北条氏政、佐倉で直接支配を開始
1589（天正17）	真田昌幸、沼田城を北条に開け渡す 秀吉、北条氏直に宣戦布告	北条氏政の子直重、千葉氏の家督に決まる
1590（天正18）	氏直、小田原城開城 氏政、氏照兄弟自殺 氏直、高野山追放	小金城、臼井城、本佐倉城開城 上総、下総諸城に浅野、木村の制札が下さる

私の伊達政宗像を訪ねて（その二）

安藤剛

その一：伊達政宗のルーツ
念西と朝宗と宗村
福島に伊達氏発祥の地を訪ねて
その二：十七代政宗の誕生
父輝宗の惨劇
二本松の粟ノ須古戦場を訪ねて
その三：小田原陣の遅参
弟小次郎の刺殺
大悲願寺の白萩文書を訪ねて
その四：政宗と秀吉と家康
海外への夢か野望か
遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて
その五：仙台城と瑞鳳殿
政宗の逸話と書状
日比谷に政宗終焉の地を訪ねて

【十七代政宗の誕生】

政宗誕生の永禄十年（一五六七年）は、信長が岐阜城に入り天下布武を宣言、家康が長男信康に信長の長女を迎えて信長の上洛を支援、秀吉が墨俣一夜城を築き斎藤龍興を倒し木下藤吉郎の名を天下に知らしめた年である。

政宗は、山形最上氏から米沢伊達輝宗に輿入れした義姫を母に米沢城で生まれた。奇しくも同年に大阪の陣で対決する真田幸村が誕生、後に政宗は落城する大阪城から幸村の子女を託され仙台藩内に匿い育てる因縁を持つ。

母方の最上氏は、出羽国最上郡山形に按察使として入部した斯波兼頼を祖とする。兼頼の高祖父家氏は源義家の四男義国を祖とする足利宗家五代目の嫡流だったが、母の兄名越光時が北条得宗家に反抗したため廃嫡されて足利氏分家となり斯波氏を名乗った足利名門である。

政宗は、藤原氏北家と源氏の血脈を受け継ぐ父輝宗と、足利氏の血脈を受け継ぐ母義姫の間に生まれ、幼く右目を失明、隻眼の万海上人の生れ変わりといわれ育った。

政宗十三才で三春城主田村清顕の愛姫を正室に迎える。田村氏は、桓武天皇の命で蝦夷を征伐した征夷大将軍坂上田村麻呂の末裔、清顕は南の佐竹氏と西の蘆名氏の侵攻と干渉に抗すべく、一人娘を北の伊達氏に嫁がせて伊達氏の支援を受け、独立と版図の維持を図った。

政宗が十八才で家督相続した天正十二年（一五八四年）は、二年前に信長が本能寺で横死、織田領になっていた旧武田領を越後上杉と三河徳川と小田原北条が奪い合い、前年に賤ケ岳で柴田勝家を破った秀吉が家康と小牧長久手で対決して覇権を狙う、まさに天下激動の年である。父輝宗この時まだ四一才、風雲急を告げる重大な時期になぜ十八才の若い政宗に家督相続を急いだのだろうか。

【政宗家督相続の背景】

当時の戦国武将の家督相続年令は、武田信玄が二一才、北條氏政が二二才、上杉謙信は内紛があり十九才、織田信長は父の死があり十九才、父が健在な政宗の家督相続はやはり早すぎる、その背景に何があったのだろうか。

通説では、輝宗の正室義姫が、乳母の育てる片目の嫡男政宗を嫌い、手元で育てる次男小次郎を溺愛しており、後嗣を巡る家臣団の分裂を危惧した輝宗が、後継争いに先手を打ち長男政宗の家督相続を決断したといわれる。

伊達氏の歴史は父子相克の歴史であった。政宗の高祖父十三代尚宗は、嫡男稙宗と内乱を起し、十五代晴宗は、重臣中野宗時らと謀り先代稙宗を幽閉して七年もの天文の乱の末に家督を相続、父十六代輝宗も、家督になった六年後に晴宗を閉居させてようやく実権を握っている。

親子骨肉の争いとなった天文の乱の最中に生まれた輝宗は、父子相克と家臣分裂という悪しき家運を払拭すべく政宗への早い家督相続の時期を窺っていたに違いない。

輝宗が家督を譲って間もなく政宗に送った書状（大日本古文書：伊達家文書三二六八）がある。

「若い時は戦略を誤り、又暴言や失言も吐く。間違いは多いものだ。世間の評価や家臣の噂を気にするな。お前には俺がついている。命をかけて支えるから、自分の信ずるところを突き進め。覚悟を決めて突き進めば異を唱える者はなくなる（元仙台市博物館長佐藤憲一氏意訳）」

輝宗の若き政宗への熱い愛に溢れた手紙だが、政宗と老臣の間で何かトラブルがあったのだろうか。文末に「即火中」とあり、読後焼却せよとは他人に見られたくなかったのだろう。しかし政宗はこの手紙を捨てきれず父の形見として大切に保管、息子忠宗に引き継いだ。

政宗の家督相続を早めたと思われる事件が、会津蘆名家中で起きた。そして家督相続した政宗は、父輝宗の親蘆名から反蘆名に路線を大きく変換したのである。

【東北の洞（ほら）社会】

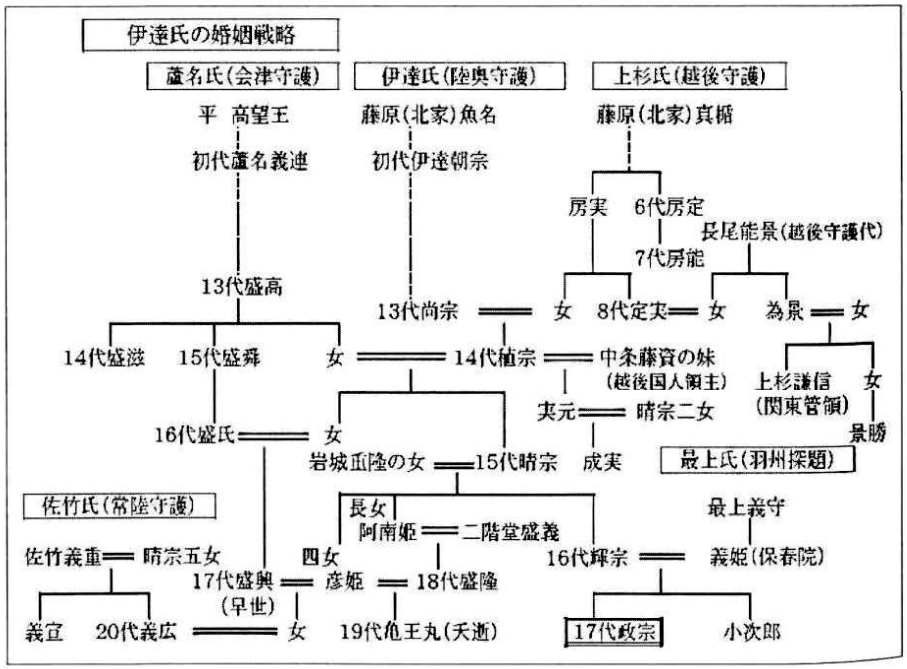
政宗家督相続の背景を、伊達氏を取り巻く南奥羽地方特有の「洞社会」の側面から俯瞰してみたい。

応仁の乱で室町幕府の権威が失墜、守護大名に代わり戦国大名が台頭する下剋上の戦国時代に突入したが、東北は中央の政争の影響少なく、領界争いはあっても他家打倒までには至らない比較的平穏な「洞社会」にあった。

洞とは、惣領を当主に一族・家臣・周辺領主が糾合した族縁共同体のこと、政宗の曽祖父稙宗は、正室の外に五人の側室を持ち、十四人の男と七人の女を周辺豪族に婚姻や養子縁組をさせて巨大な洞を形成していった。

稙宗はまず嫡男晴宗に岩城氏女を迎え、弟と妹を留守氏と最上氏に、男子を大崎・桑折・梁川・葛西・村田・亘理諸氏の嗣子に、女子を相馬・二階堂・田村・蘆名諸氏の正室に送り血縁を軸とした族縁連合体を形成、麾下集と御段銭帳を制定して権力集中と領内統制を強化した。

武力による領地略奪ではなく政略結婚により勢力拡大を図る稙宗の洞構想は、やがて越後上杉氏への養嗣子と相馬氏への領土割譲に反対する嫡男晴宗と専制主君に反発する一部家臣の叛乱で挫折、奥羽諸侯を二分する「天文の乱」に発展、盟主伊達氏の支配力が衰退、周辺豪族が伊達氏の従属関係から脱し戦国大名として自立、奥羽は馴れ合いの洞社会から弱肉強食の戦国時代に突入した。



【伊達氏と会津蘆名氏】

政宗の家督相続に大きく関わったと思われる会津蘆名氏の内情について概観してみたい。（前頁系図参照）

蘆名氏は常陸平氏の流れ、頼朝の平家追討挙兵に参じた三浦義明の七男義連が、奥州合戦の功で会津を領したことに始まる。会津守護となった蘆名氏は、十三代盛高の娘を伊達稙宗の正室に、十六代盛氏の正室に稙宗の娘を、十七代盛興の正室に伊達晴宗の娘彦姫を迎えており、盛興と彦姫の婚姻の折には、盛氏と盛興が輝宗に、蘆名宿老四人が伊達家臣三人に、連名の血判起請文を差し入れて講和血盟を約定、両家は奥羽の盟友であった。

盛興が父盛氏に先立って病死、男子の後継ぎなく、盛氏は盛興未亡人彦姫を養女にして、須賀川二階堂氏から人質の盛隆に娶わせて十八代蘆名氏当主に据えた。盛隆は晴宗の娘阿南姫の嫡男で、十二代盛高の外玄孫である。この頃に盛氏が輝宗に次男小次郎が成人したら蘆名氏に入嗣させるよう申し入れていたふしがあり、盛隆の家督相続は小次郎成人までの繋ぎだったかもしれない。

六年後に盛氏が死去すると、盛隆は蘆名一門と老臣を抑えて蘆名氏の実権を掌握、上杉景勝と争う信長に接近して越後へ出兵介入、更に衰退していた実家二階堂氏の再興に務めて、蘆名家中が二階堂派と蘆名譜代派に分裂、天正十二年十月、盛隆が寵臣に殺害される事件が起きた。生後間もない亀王丸が十九代を相続するが、当主の相次ぐ早世で名門蘆名氏は急速に弱体化していった。

【伊達氏と越後上杉氏】

伊達氏と会津蘆名氏の三代に亘る蜜月の以前は、むしろ越後上杉氏との関係が親密だった。（前頁系図参照）

上杉氏は藤原北家の重房が鎌倉に下向し上杉を名乗り関東管領を世襲、足利尊氏の従兄弟上杉憲顕が越後守護になった名門である。伊達稙宗の父尚宗が上杉房実の娘を正室に、稙宗は上杉家重臣中条藤資の妹を側室にした。

越後守護上杉家の政務を代行する守護代の長尾為景（上杉謙信の父）が、越後守護上杉房能を殺害して房実の子定実を傀儡守護に擁立、越後の実権を掌握した。

反為景勢力と房能の実兄で関東管領の上杉顕定の反撃を、定実の姉の夫伊達尚宗からの援軍を得て撃ち破るが、為景が隠居すると、定実の家臣中条藤資は、定実の甥稙宗と自分の妹との子実元を定実の養子に迎え、長尾氏に代わる伊達氏の力による守護上杉家の復権を画策した。

稙宗は三男実元に精鋭百騎を付けて越後守護職上杉定実に婿入りを確約するが、長男晴宗がこれに反対、父子の対立は奥羽を二分する天文の乱となる。背後に越後上杉と会津蘆名の隣国同士の牽制があったのかもしれない。

天文の乱は当初稙宗方が優勢だったが、会津の蘆名盛氏が晴宗方に寝返って戦局は一変、将軍足利義輝の仲裁で稙宗が隠居、晴宗が家督を相続、奥羽諸侯を巻き込んだ七年に亘る天文の乱は終息したが、伊達氏は越後上杉氏と疎遠になり蘆名氏との繋がりが親密化していく。

上杉定実の死で後嗣のない越後上杉氏は断絶、長尾為景の子景虎が守護を代行し、後に北条氏康に敗れて救いを求めてきた関東管領上杉憲政の養子となり上杉家を継いで謙信を名乗る。もし伊達家から実元が上杉定実の養子に入っていれば、上杉謙信はなかったかもしれない。

謙信に後嗣なく死去すると、姉の子景勝と北条氏から養子に入っていた景虎が後嗣を争う御館の乱が勃発、輝宗は北条氏との同盟関係から景虎方に味方して越後に侵攻、御館の乱に景勝が勝利した後も、反景勝の新発田重家を支援、更に織田信長と好を通じて、柴田勝家の越後攻めに連動して蘆名盛隆と共に越後介入を続けていく。

家督を継いだ政宗は、父輝宗の意向に反して上杉景勝と講和を結び、反蘆名路線に方向転換した。その二年前の信長の横死で柴田勝家の越後攻めが頓挫して窮地を脱した景勝が、織田勢が撤退した北信濃に侵攻、政宗は信長死後の天下の形勢変化を見据えていたにちがいない。

政宗の上杉講和の裏に、自ら盟主となり反信長同盟を結束させた反権力志向の謙信への憧憬があったかもしれない。実元の上杉家婿養子の引き出物に贈られた家紋「竹に雀」を婿入り破談後も伊達家家紋として使用しており、政宗の謙信への崇敬の念の現れなのかもしれない。

【政宗家督相続の真相】

伊達氏正史『伊達治家記録』の天正十二年十月の条に「六日、会津ニ於テ寵臣大場三左衛門、其君蘆名盛隆ヲ弑ス。此月、公隠居シ給ヒ政宗君ニ御家督ヲ譲リ玉フ。御隠居ノ日、當月六日ヨリ廿二日ニ至ルノ間ナリ」とあり、輝宗の隠居と政宗の家督相続は、会津蘆名氏の当主盛隆が寵臣に殺害された事件の直後だった。

盛隆急死の直後に家督を相続した政宗は、父の親蘆名から反蘆名に戦略を転換、半年を待たずに会津蘆名領侵攻を始めた。曽祖父稙宗以来、婚姻戦略で最も親密にしてきた蘆名氏を政宗はなぜ敵視していったのか。蘆名盛隆の急死と政宗の家督相続に関連があるのだろうか。

歴史学者小林清治氏は、著書「伊達政宗の研究」の中で、蘆名盛隆の死と蘆名・佐竹連合が、輝宗隠居と政宗相続と政宗南進を結果した、と論じている。

盛隆は、天正三年に早世した蘆名直系の盛興に男子がないため、二階堂氏からの人質の身ながら蘆名氏当主となり、天正八年に蘆名氏中興の祖といわれた盛氏が死去すると、蘆名氏の実権を掌握した。盛隆は政宗の義父田村清顕と抗争を続ける実家の二階堂氏を支援し、翌年には田村氏を破った常陸佐竹氏と同盟を結び、母と妻が伊達輝宗の姉と妹という血縁にもかかわらず、田村氏と同盟する伊達氏との溝を深めていった。

天正十二年十月、その盛隆が寵臣に殺害されると、伊達氏と佐竹氏が蘆名後嗣問題にすかさず介入していった。

盛隆急死の六日後に、蘆名家臣の新国貞通から伊達家臣の高野親兼に宛てた書状に「盛隆死去、依之洞取乱候之処、被入御念候故被静」とあり、当主盛隆の急死で混乱する家中が輝宗の御念で鎮まったとある。蘆名家中を安堵させた輝宗の御念とはなんだったのだろうか。

輝宗の天正二年一月の書状に「白盛氏為使、輝宗次男会津江可指越之由、頻承候（中略）彼童子致成人候者差越、盛氏奉公為致事も可有候由」とあり、病弱な盛興に嗣子なく盛氏は輝宗次男の養嗣子を申し出ていたらしい。

後年の小田原陣で政宗の会津蘆名討滅理由を列挙した天正十七年九月三日の浅野長吉あて上郡山仲為の覚書に「親父輝宗代ニ、政宗弟会津ニ可居申約束堅仕、其手筈を違、佐竹へ被組」とあり、父輝宗が蘆名と約束していた弟小次郎の会津入婿を破談にして佐竹氏に組みしたことが、反蘆名への路線変更の理由だったと訴えている。

小林清治氏はこれらの書状から、盛隆の遺児亀王丸は生まれたばかりの嬰児で家督を継ぐのは無理であり、母親の実家で姻戚ゆかりの伊達家から継嗣を迎えてはどうか、ついては先年盛氏から話のあった次男小次郎の入婿を輝宗が申し入れた、と推測している。

急死した盛隆は輝宗の姉阿南姫の子で蘆名十三代盛高の玄孫、輝宗の二男小次郎も盛隆と同じ直系四親等で後嗣有資格者である。伊達氏に敵対する佐竹氏に接近した盛隆の死を機に、輝宗は我が子に蘆名氏を継がせて蘆名氏を伊達側に引き戻し、反佐竹連合を狙ったのだろう。

一方の佐竹氏は、盛隆急死の三日後の九日には、盛隆の遺児亀王丸に対する援助連合を伝える書状を発して、伊達輝宗の二男入嗣申し入れ攻勢に対抗したのである。

蘆名氏の後嗣を巡る伊達氏と佐竹氏の外交競争は、蘆名氏と軍事同盟を結び田村氏と戦ってきた佐竹氏が勝利した。蘆名家中に伊達氏への積年の反感があったかもしれない。伊達氏の入嗣攻勢を排除して遺児亀王丸を十九代蘆名氏当主に据えることに成功した佐竹義重は、更に須賀川の二階堂氏と白河の白川氏を服属させ、会津と仙道に勢力浸透を図り、伊達氏の大きな脅威となっていく。

息子の入嗣交渉に敗れた輝宗は、長年培ってきた蘆名家中の親伊達派を弱体化させただけでなく、伊達家中の親蘆名派と反蘆名派の勢力バランスが崩れ、蘆名氏が宿敵佐竹氏との同盟を更に強固にするに及び、戦略の見直しを迫られた輝宗は、自ら身を引いて洞意識の強い老臣の桎梏に囚われない若い政宗と伊達成実や片倉景綱ら新世代の家臣団に伊達家の命運を託した、というのが輝宗隠居と政宗家督相続の真相だったのではないだろうか。

家督を相続した政宗は、蘆名氏と決別、会津蘆名の背後の越後上杉と常陸佐竹の背後の小田原北条と同盟を結び、反蘆名・反佐竹の軍事外交方針を確定させていった。

【会津蘆名攻略の前哨戦「小手森城合戦」】

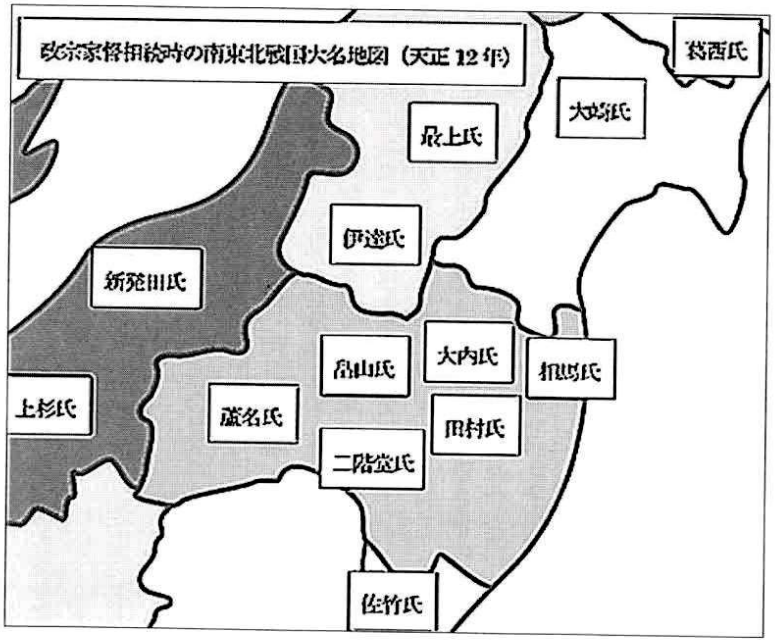
家督相続した政宗に最初に叛旗を翻したのが伊達郡南隣の安達郡塩松を領する小浜城主大内備前守定綱である。

伊達傘下にあって対相馬戦に従軍していたが、蘆名盛隆の支援を受けて隣国の田村氏から独立を果たした定綱は、田村清顕の娘を正室にする政宗が家督を相続すると、米沢城に伺候して伊達氏奉公を表明するが、自領塩松に戻るや伊達氏への帰順を反故にした。蘆名に同心する定綱は若き政宗が相続した伊達氏の内情を探りに行ったのだろう。政宗は臣従を拒絶した定綱の攻略に踏み切った。

天正十三年四月に小田原北条氏が佐竹領下野に侵攻すると、政宗は翌五月に来沢から南下して蘆名領の檜原に侵攻、八月に大内定綱の支城小手森城攻撃に転じた。定綱が本城小浜城に逃亡、籠城する城代が「城を明け渡して小浜に引退、定綱と切腹を供にしたい」と申し出たが、政宗は拒絶、城に火を放ち城兵を皆殺しにしたのである。

政宗が山形の最上義光に小手森城の勝利を伝えた書状（最上義光歴史館所蔵）がある。「相の手の鉄砲八千丁あまり相懸け、落城申し候。大備（定綱）親類ども相添へ五百余人討ち補らへ女・童から犬までなで切りに、千百余人きらせ申し候。（中略）拙子名理も候やと存じ候、この上は須加河まで打ち出で、関東中も手安く候」と。

義光は母義姫の兄、敵対関係にある伯父に戦果を誇示、家督デビュー初戦を大勝利で飾った政宗の高揚感が伝わってくる。後世に小手森の撫で斬りと云われた地獄絵さながらの光景を赤裸々に伝える政宗は狂気に満ちている。



政宗は、武力で馴れ合いの洞社会を打ち壊す戦国大名に変身していた。「我に神仏の恩恵あり、この上は関東も手安く手に入ろう」と豪語、佐竹氏の仙道拠点須賀川城を落とし関東に攻め込む野望を公言しており、後に小田原陣で蘆名攻めの理由に挙げた入嗣違約は口実で、相次ぐ当主の早世で内紛絶えず弱体化した蘆名氏の領土略奪と関東への進出こそ政宗の本意だったにちがいない。

【父輝宗の悲劇】

小手森城を攻め落とした政宗の次なる攻撃目標は、大内定綱に援軍を出した二本松城主畠山義継である。伊達軍は大内定綱が会津に撤退した塩松領に進駐、政宗が本城の小浜城に、父輝宗が支城の宮森城に入った。定綱と同盟を結び伊達に敵対していた二本松城主畠山義継は、小手森城の大虐殺に政宗の恐ろしさを改めて思い知らされたのだろう、小浜城の政宗に和議を申し入れたが、政宗はこれを拒絶、かねて昵懇にしていた伊達実元を宮森城に訪ねて和議の仲介を依頼、義継の旧恩知る輝宗の好意で領地の大幅割譲と嫡子人質を条件に和議は成立した。

ところが和議成立の御礼に宮森城の輝宗を訪ねた義継は、見送る輝宗を突然拉致して二本松に逃亡を図ったのである。義継はなぜ輝宗を拉致したのか。城内の不穏な空気に身の危険を察して輝宗を楯に脱出しようとしたのか、輝宗を人質に政宗との和議再交渉を狙ったのか。

NHK大河ドラマ「独眼竜政宗」では、鷹狩に出ていた政宗が、父拉致されるの報に追跡、阿武隈川の渡しで追いつくが、川を渡れば二本松領、やむなく義継を人質になった父輝宗もろとも鉄砲の一斉射撃で殺害させてしまう、天正十三年（一五八五年）十月八日の変事である。

伊達家正史『伊達治家記録』に「受心君（輝宗）大音ヲ揚ケ速ニ義継ヲ撃殺セ我ヲ顧テ家醜ヲ貽ス事勿レト呼ヒ給フ、此御言ヲ聞テ歩卒ノ中ヨリ鉄砲一放チ撃懸ルトゝ々」とあり、己の油断で拉致されてしまった輝宗は、家醜を晒すな、我諸共義継を撃ち殺せと叫んだという。発砲は偶発的だったのか。命令がなければ発砲出来るはずはないが、命じたとしたら、政宗しかいない。

しかし『伊達治家記録』には「公ハ鷹野ニ御出、受心君捕ヘラレ給フト聞召レ夜中高田原マテ馳着キ給フ、即チ義継ノ死骸ヲ索メ出シ云々」とあり、政宗が鷹狩から現場に着いたのは夜中で、惨劇の時はいなかったとある。『政宗記』に「政宗十四五里わきへ山鷹に出られ留守たり。扨事終て後此乱を鷹場へ知せ奉れば」とあり、政宗には事後の報告だったという。政宗の片腕伊達成実の『成実記』には「政宗公は御鷹野へ御出成されて聞召され御帰ニ候、輝宗公モ御生害成され、政宗公モ其の夜ハ高田へ御出馬成され候」とあり、塙保己一が編纂した群書類従の『伊達日記』も成実記とほぼ同文で、伊達治家記録と同じく政宗が高田原に着いたのは夜だったという。

しかし江戸元禄期に東北の戦国大名の興廃を記録した久保田藩戸田正直編纂の『奥羽永慶軍記』に「鷹野場ヨリ直ニ追カケ、高田ニテ追付ケル、父ヲ敵ノ手ニカケウキメヲ見セ奉ランヨリハ我手ニ懸奉リテ義継諸共ニ打ントテ」とあり、追い付いた政宗が射撃を命じたとある。

それでは政宗本人は何と言っていたのだろう。政宗が晩年に小姓に語った政宗言行録『木村宇右衛門覚書』に「我等は部屋住みの事なれば、二本松殿、見舞給ふ朝に、後の山に猪四つ五ついたるよし告げ来たる。別而隙入事もなければ、出でんとて弓鉄砲にて山へ出る」「早馬にて狩場の山へ告げ来る。こは口惜しき次第かなと驚き追いかけ見奉ればくだんのごとし、注進したると見え、川向いに夥しき人数馳せ集まる。成実始め一門衆は、是非なし、棄て奉る外なし、その色をみて二本松衆、痛わしくも、輝宗公を刺し殺し奉る」とあり、政宗は狩場から現場に駆け付けたが、輝宗惨殺が目の前で起きてしまったと語るだけで、肝心の自分がどう関わったかには触れていない。現場に居たことだけは確かなようだ。ではなぜ伊達家の正史は、そのことまで否定しているのだろう。

言行録だから信憑性は高いと思うが、都合の悪いことは脚色しているかもしれない。その視点で読み直してみると、義継の来訪が単なる見回りだったとか、義継の和議申出を拒絶していながら、自分は部屋住みの身だから会う用もないので裏山の狩に出掛けたとか、言い逃れを

「伊達治家記録」貞山公（政宗）編（仙台市HPより）

言っているようにしか見えない。なぜ見え透いた嘘をつくのだろう。何か隠したいことがあったのだろうか。

『木村宇右衛門覚書』の後半に、政宗が息子忠宗に「お家の大事の前には親をも捨てる覚悟が必要だ」と語る説話がある。高田原の惨劇を述懐しての話だとすれば、高田原で父奪還劇を指揮、お家のためやむなく父もろとも敵将の殺害を命じた、と告白しているようにも読める。

父が敵方の人質となれば立場は逆転、今後の会津蘆名攻略に大きな支障となる、政宗は一瞬のうちに苦渋の決断をしたに違いない。母の偏愛する弟ではなく自分を家督に据えて伊達家の将来を託した父の愛情を知るだけに政宗の胸中はいかばかりだったろう。輝宗は前掲の「即火中」の手紙を実践、苦境に立つ息子を己の命を捨てて支えたのである。苛酷な決断をする息子の姿に父はさぞ誇らしく思ったに違いない。父を犠牲にお家を優先させた政宗は十九歳ながら名実とも戦国武将に成長していた。

父を斬殺させてしまった政宗は、義継の遺児が守る二本松城を包囲したが、来援した佐竹蘆名連合の大軍に人取橋の戦いで大敗、佐竹軍の突然の撤退で救われた。天正十五年に蘆名氏が佐竹義広を当主に迎えて攻勢に転じ、十六年に北の大崎氏と最上氏に攻略され、政宗は四面楚歌の窮地に立つが、蘆名家中の大内定綱らの調略に成功、十七年六月、摺上原の戦いで蘆名軍を破りついに南奥羽を制した政宗は、本拠を米沢城から会津黒川城に移した。

【二本松に輝宗の惨劇を訪ねて】

昨年（平成二九年）八月三日、青森から東京までを走る東日本大震災復興支援イベント「未来への道一〇〇〇キロ縦断リレー」に五年連続で参加して福島県いわき海岸を走った後、輝宗惨劇のあった二本松市に向かった。

①輝宗惨劇の現場：高田原はどこか

二本松駅内の観光案内所で電動自転車をレンタル、真夏ながら心地よい風を頬に爽快なサイクリングである。

駅から東南に十五分程自転車を走らせ、阿武隈川に架かる高田橋を渡ると、対岸の高さ五〇Mの丘陵が川岸に迫っていた。大河ドラマ「独眼竜政宗」で伊達と畠山の両軍数百人が斬り合った広い河原を探してみたが、それらしき地形が見当たらない。四三〇年の間に消失するはずもない。ドラマでは輝宗を拉致した義継を阿武隈川岸に追い詰めていたが、伊達治家記録にある惨劇現場「高田原」は、どうも阿武隈川の河原ではなさそうだ。

高田橋を渡り小浜城下に向かう国道四五九号から隈畔沿いに右折、急な坂道を電動自転車の馬力全開で走ること十五分、高台に上り詰めると、道端に「粟ノ須古戦場跡」の案内板が現れた。左に少しドると、山間に広がる水田の中に畠山義継主従陣没碑が立つ一画が見えてきた。二本松観光案内はここが輝宗惨劇現場の高田原だという。

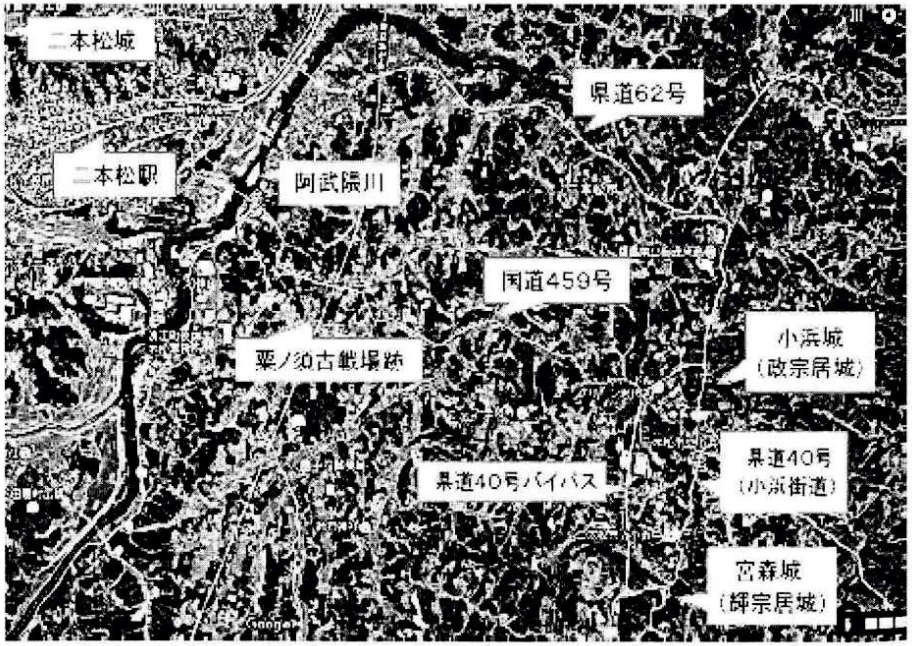
②粟ノ須古戦場跡

二本松観光協会が建てた石碑に「義継は条件付で伊達家に服属することになり、和議成立の礼として手勢二三騎を従え宮森城の輝宗を訪れ、輝宗はこれを歓待するが、伊達家家臣の不穏な動きを察知していた義継は、隙を見て輝宗に脇差しを当て二本松城に引き上げようとした。鷹狩りに出ていた政宗は急を聞いて駆けつけ、ここ粟ノ須の地に追い詰めて義継もろとも父輝宗を撃とうとした。義継は逃げられぬと覚悟して輝宗を刺し殺し白刃、畠山従者も討ち死にした」とあった。

ここには政宗が鷹狩りから駆け付けた時には父輝宗の惨劇は既に終わっていたとする伊達氏正史『伊達治家記録』と全く違うことがはっきり書かれてあった。まさかNHK大河ドラマを信じて石碑に刻んだわけではないだろう。政宗が惨劇に関与したという確たる古史料が他にあるのだろうか。それにしても伊達氏の歴史の一大事件である輝宗惨殺の真相が曖昧なのは何故なのだろう。

四三〇年前にタイムスリップ、ここで繰り広げられた惨劇に思いを馳せていると、突然、静寂を破る轟音がして山並みから東北新幹線の白い車体が現れ、田圃を横切り隣の山に吸い込まれ、また元の静けさに戻った。周囲を見渡すと低い山々に囲まれた盆地の中に立って居た。

粟ノ須古戦場を後にして、輝宗が拉致された宮森城に



向かって坂道を上りながら、ふと後ろを振り向くと、山並みに囲まれた水田地帯が、待ち伏せして包囲殲滅するにピッタリな地形に見えてきた。もしかしたら政宗はこの地形を利用して義継一行を待ち伏せしていたのではないだろうか。そんな閃きが頭をよぎったのである。

政宗の鷹狩は義継を油断させる偽装工作で、政宗はここで宮森城から二本松に帰る義継を待ち伏せしたのではないだろうか。和議成立の御礼に輝宗を訪ねた際に義継が察知したという伊達家中の不穏な動きはやはり本当だった。戦国の時代に待ち伏せは決して卑怯な戦法ではない。まして二か月前に小手森城で降伏を申し出た城兵千百人余を撫で斬りにさせた、残虐を厭わない政宗である。降伏してきた敵将を待ち伏せするなど、有り得ない話ではない。余りに突飛な思い付きをしている自分に驚いた。

義継が輝宗を拉致して二本松城に向けて逃げたであろう山道を遡るように、拉致現場の宮森城に向けて自転車を走らせた。国道四五九号に戻って東へ向い、小浜城下から宮森城方面に右折南下するつもりだったが、誤ってひとつ手前の県道四〇号バイパスを右折してしまった。すぐに間違いに気付いたが、お蔭で思いもよらないヒントを得た。まさにこれぞ怪我の功名である。

義継が宮森城から二本松に戻るには、小浜街道を北上して小浜城下を左折、国道四五九号か県道六二号の山道を西に向かうのが普通だが、輝宗を拉致して逃げる義継が和議を認めない政宗の小浜城下を通るはずがない。小浜街道を通ったら小浜城下で政宗に包囲されてしまう。高田原まで逃げてこられたのは、小浜街道ではなくこのバイパス付近の山道を近道したからではないか。

③輝宗拉致の現場：宮森城跡

粟ノ須古戦場跡から四〇号線バイパスを走ること小一時間、ようやく宮森城址に上る細い山道に辿り着いた。電動自転車でなければとても来られない山奥である。綺麗に整備された石畳道の奥に鳥居と石段が伸び、山頂の本丸跡に小さな八幡神社が鎮まっていた。参道に沿って紫のあじさいが深緑に彩りを添え、真夏を訴えるセミの声とうぐいすや小鳥の美しいさえずりが迎えてくれた。

「宮森城址」の説明板に「天正八（一五八〇）年に大内定綱が移り東安達（塩松）地方を治めたが、同十三年九月に政宗との戦闘に敗れ会津に逃れ、政宗の父輝宗がここに在陣したが、一〇月八日に和議お礼に訪れた畠山義継に拉致されて粟ノ須で最期を遂げた」とあった。

本丸跡から鬱蒼として山並みが三六〇度に眺望できた。四三〇年前にこの静かな山奥で拉致事件が起きたとは信じられない。伊達治家記録に「政景成實ヲ始トシテ御家臣等武具ヲモ不着御跡ニ傍テ馳行ク、小濱ヨリハ何レモ武具ヲ着テ早打スレトモ、可討果ト云者ナク茫然トシテ敵ヲ取リ圍ミ」とあり、眼下の細い山道を輝宗に脇差し

を当てて下山する義継主従と、甲冑を着ける暇もなくただ追いすがるだけの伊達家臣の狼狽振りが見えてくる。

宮森城の異変が小浜城に伝えられ、小浜城から甲冑姿の家臣団が早打したとあるが、早打とは馬で駆け付けること、もし高田原で鉄砲が使われたとしたら、小浜城の兵士だが、当時の鉄砲は先込式の火縄銃、鉄砲の使用も迎撃戦や攻城戦の集団射撃が主流で、騎馬鉄砲隊の発想はまだ先の話、鉄砲隊が馬で駆け付けるなど有り得ない。小浜城から高田原まで五キロの山道を重い鉄砲を担いで走るなどとても出来ない。もし鉄砲が使われたとしたら事前に鉄砲隊をここに配置していたとしか考えられない。

④政宗居城の小浜城跡

宮森城址を後に、北へ二キロの政宗が居城にした小浜城に向け小浜街道を走った。塩松領の小浜城下は、阿武隈山系のど真ん中にあるとは思えない格式のある町並みだった。北の伊達氏、東の相馬氏、西の畠山氏、南の田村氏に接する緩衝地で交通の要衝地、山形米沢から福島北部を領する政宗が仙道支配を目指す重要な拠点である。

「小浜城」は予想以上の規模を持つ山城で、説明板に「福井県の小浜に居た大内晴継が東安達を統治する石橋氏の家臣となり当地に移住し築城し小浜城と名付けた。戦国の世に弱小の国人領主の大内定綱は、大名領主の伊達・蘆名に交互に身を寄せて自分の安全を計っていたが、天正十三（一五八五）年に政宗に背いて蘆名氏に属したことから攻撃を受けて敗走、政宗が畠山氏の居城する二本松城包囲戦のため当城に一年ほど在陣した」とあった。

遥か西方に安達太良と吾妻の連山を望みながら、拉致された父を殺してしまった懊悩の念で、阿武隈川対岸の二本松城を睨み付けている政宗の姿が浮かんできた。

家督を相続して一年の間に会津檜原侵攻と小手森城大虐殺そして二本松城攻略と矢継ぎ早に繰り出した政宗の阿修羅の如き戦いの裏に、母義姫の溺愛する弟小次郎を後継者に擁立せんとする家臣団との家中分裂を懸念して弱冠十八才の自分に家督相続を決断してくれた父輝宗の期待と愛情に応えんとする、若さゆえの気負いがあったかもしれない。結果として、自分を家督にしてくれた父輝宗を殺してしまった自責の念で苦悶したに違いない。

⑤輝宗惨劇の真相を探る

小浜城址から二本松に戻る山道はほぼ下り坂、自転車で風を切りながら、宮森城から輝宗を拉致して二本松へ逃げる義継主従と追い掛ける伊達家臣団に思いを馳せた。

二本松から宮森城まで片道一〇キロもある往復は、義継は徒歩ではなく当然に騎馬だったろう。粟ノ須古戦場跡の碑文にも家臣二三騎とその従者五〇余人とあった。義継主従七〇人余りが一団となって、道幅ある小浜街道ではなく、近道の細い山道を騎馬と駆け足で逃げたとし

たら、伊達勢がおっとり刀で追い掛け追い越し前を塞いで取り囲むなど、この蛇行する山道ではとても無理だ。

鷹狩は、鷹を使い鳥や兎や狐を捕える狩猟で鉄砲は使わないはず、政宗が急を聞いて十四五里先の鷹狩から一旦小浜城に戻り、鉄砲を含む軍勢を組んでここに先回りして布陣するなど、義継主従が宮森城から馬でここまで逃げて来る一時間足らずの間に、間に合うはずもない。

鷹狩は武士の鍛錬とはいえ平時の遊興である。小手森城攻めで城兵千百余人を皆殺し、次は二本松城攻略という緊迫した臨戦下にあって、敵将義継の宮森城来訪に、小浜城から留守政景・伊達成実ら重臣が輝宗の前に詰めている。政宗にとって家督を相続して最初にして最大の戦いであり、若き政宗の家督相続に懐疑的な老臣たちを心服させなければならない重要な一戦、そんな時に悠長に鷹狩なんぞやっておれる場合だろうか。むしろ宮森城に出向いて義継を叱責して威厳を示すべきではないか。

天正十四年八月に政宗が叔父留守政景に鷹狩に使う大鷹の借用を申し出た書状がある。書き出しに「帰城以来無音、心元なく存ずるばかりに候、昨日はじめて野へ罷り出で、雁四つ合わせ申し候」とあり、前月に二本松城を攻め落として一年ぶりに米沢に戻り、久方ぶりに鷹狩りを楽しむ政宗の心境が伝わってくる。とても二本松城攻防戦の最中に鷹狩を楽しんでいたようには思えない。書状後段に「檜原陣中で政景が自慢していた例の大鷹を貸して欲しい」とあるが、檜原陣は輝宗惨殺の五ヶ月前、政宗がもし輝宗が拉致された時に鷹狩に行っていたのなら、その時に政景に大鷹の借用を申し出ていたはず、米沢帰城後に初めてのように借用を申し出るはずがない。

晩年の政宗が『木村宇右衛門覚書』に、弓鉄砲を持って猪狩りに出ていたと語っていたが、その五〇年後に編纂された『伊達治家記録』には、鉄砲を使わない鷹狩に出ていたことになっている。なぜ猪狩から鷹狩にすり替わったのだろう。政宗の配下が鉄砲を持って出ていたことを隠したかったのか。政宗の鷹狩は後世の伊達治家記録の編者による政宗のアリバイ作りだったのではないか。

宮森城から逃げる義継主従は総勢七〇人、これを皆殺しにしたというから倍する二百の兵が必要だが、宮森城の伊達勢は慌てふためいて武具をも着けず追いすがるだけとあるから、やはり政宗が鷹狩と偽り義継の殺害を狙って充分な兵力で待ち伏せしていたのだろう。目の前に現れた義継が父を拉致しており、意表を突かれた政宗はもはや後に引けず、父もろとも義継を銃撃する苦渋の決断をした、というのが真相だったのではないだろうか。

百年後の平和な時代に編纂された伊達治家記録に、仙台藩祖政宗が、和議が成立した義継を待ち伏せして父もろ共銃撃してしまったとはさすがに書けなかったのではないか。実際に現地を訪ねてみなければ思いつかない待ち伏せという輝宗惨劇の真相発見に打ち震えていた。

世界の国旗から学ぶ（第八回）

（国旗検定：米朝問題：スポーツ大会とアジアの国々）

米村典紘

はじめに

今回は、記念号と云う事で、「国旗検定三級から二級問題」を皆さんにチャレンジして頂きたいと思っています。「そんな検定制度があるのか？」と驚かれると思いますが、我が国には、「人財立国・日本」の基盤整備の為、いろいろな検定制度がある事はご存じでしょうか。技能検定で、「英検・数検・漢検」や、「パソコン検定」「日本の名城検定」「金融、財政検定」もそれぞれの機関によって公に認められた検定試験制度があります。

東京五輪の成功や、観光立国を目指す為、日本政府と東京都は、「おもてなしの心」ボランテイアを掲げています。小生も参加していますが、その前に、日本の教育制度の特殊性を、考える必要があるのではないでしょうか。確かに、「外国語による、会話力」向上の為に、２０２０年度のセンター試験の変更や、小学校からの英会話教育により、ある程度「会話力」は変わってくるだろうと思います。しかし、日本人の歴史的性格（みんなと同じ行動をする。雄弁は銀、沈黙は金。）や、島国根性（視野が狭く、封鎖的）から、世界の事情を知らない、又は興味がない日本人が多いのは何故なのでしょうか？

小生は、まず、偏差値教育を大きく改める必要があると思っています。日本の大学レベルが、世界と比べ、滑り落ちていく現状（アジアの大学ランキングでは、一位：シンガポール大学、二位：清華大、三位：北京大、で東京大学は８位、京都大が１１位。国別ベスト２０には、中国が７大学、香港５大学、韓国４大学、日本２大学）国内での、偏差値の高低など意味があるのでしょうか。知らない内に世界はワールドワイドになってゆくのに、「心の内」は未だ鎖国的。

その事は、大学センター試験で世界史を受験する割合

は、「地理」「日本史」と比べ極端に少なくなっている事にも表れています。まして、世界の国旗の事となると「ご存じないのが当たり前」「研究している人は変わり者」となっている様です。

日本人は世界の先進国の中で、「更に平和を愛する信頼される民族」と認識される為には、日本を知ってもらう事同様、世界の国々も知る事、少なくとも、相手の国旗を見たら「ＷＥＬＣＯＭＥ　ＴＯ　ＴＯＫＹＯ」「あなたの、国旗は知っていますよ」ぐらいは、お願いしたいものです。

だからこそ、色と形から入る「国旗の検定制度」は世界を知る初歩的制度として必要だと主張して行きたいと思います。

１：【国旗検定問題】

それでは、国旗検定の構成をご説明致します。三級から一級までで、三級は、世界の国旗に興味を持って頂く問題で、三択問題としました。二級は、ちょっとした知識人になり「鼻たかになってもらう」問題、少しヒントを入れた記述問題。一級は、学者レベルの歴史を含めた面白い問題を想定しています。

尚、正解は、次回の「まんじ」に掲載致します。

【国旗検定三級の問題（三択）】

１問：ワールドカップで活躍した、ドイツとベルギーの国旗の違いは。
①全く同じ。②縦柄と横柄、色の順番が違う。③全く違う。

２問：さむらいジャパンが初戦で対戦した、コロンビアの国旗に関する問題。１８０６年コロンビアはグランコロンビアとして近隣二か国と共に使用していた国旗、その後、それぞれ独立し、似通った国旗を使用している国は。
①コスタリカ・パナマ　②ベネゼエラ・エクアドル
③メキシコ・チリ

３問：日本と同じ様なデザインの国が二つあります、その国は。
①韓国・ラオス　②パラオ・バングラデイシュ　③ラオス・マラウイ

４問：３問二か国の丸い形は何を意味していますか。
①太陽　②太陽と月　③月

５問：汎スラブ色とはスラブ民族の国旗の色です。その

三色は何いろでしょう。
①白：青：赤　②赤：白：黒　③黄緑：黄色：赤

６問：汎アラブ色とは、（エジプトをイメージして）その三色は何色でしょう。
①緑：白：赤　②赤：緑：青　③赤：白：黒

７問：正式な国旗として、正方形の国旗が世界に二か国あります。
①ベルギー：マルタ　②スイス：バチカン　③ネパール：パラグアイ

８問：汎アフリカ色といえば、エチオピア、ガーナなどです。その色は。
①緑：赤：黒　②黄緑：黄色：赤　③黒：白：緑

９問：英国（ＵＫ）の国旗はイングランド、スコットランド、北アイルランドの三人の聖人旗を組合せた国旗です。三人の聖人とは。
①セント・メリー：セント・バーナード：セント・デリカット
②セント・アンドリュー：セント・ジョージ：セント・パトリック
③セント・テレサ：セント・フランシスコ：セント・

ルイス

１０問：南米のアルゼンチンとウルグアイに描かれた太陽は、革命にちなんで名前が付けられています。
①三月の太陽　②五月の太陽　③灼熱の太陽

【国旗検定二級の問題】

三級の問題をベースとして、作成すると次の様になります。

１問：ベルギーとドイツの国旗の違いを述べよ。
いずれも（　　旗）で（　：　：　）色を使用していますが、ベルギーは（縦：横）柄で（左側：上部）から（　：　：赤）となっています。ドイツは（左側：上部）から（　：　：赤：　）となっています。

２問：コロンビアの国旗は、１８０６年、スペインとの独立戦争で掲げ戦った指揮者、フランシスコ・セバスチャン・ミランダにちなみ（　　旗）と呼ばれています。その後、グランコロンビアは三つの国家に分かれ、現在のコロンビアと（　　国）（　　国）となり、当時の三色（　　：青：赤）を使用しています。

3問：日本と同じデザインの国旗が二か国ありますが、オセアニアの（　　オ）の国旗の円は（太陽：満月：新月）を意味し、色は（赤：黄色：白）、旗地のブルーは（　　）を意味しています。又、（　　シュ）国旗の円は（太陽：満月：新月）で（赤：黄色：白）ですが、背景は（緑：青：黒）です。いずれの国旗の円も、日本の日の丸の位置より（旗竿側：外側）に寄っています。

4問：国旗で汎スラブ色とはスラブ民族の国旗に使用されている色の事ですが、紋章なしのロシア国旗、紋章がダブル十字の（　　キア）、紋章に三つの白い山が描かれている（　　ニア）、紋章が白と赤の市松模様の（　　チア）、紋章に、王冠と双頭の鷲の（セ　　）、旗竿からの三角部分が青色の（コ　　）などが、いずれも三色（　：　：　）を使用した汎スラブ色の国旗です。同じ色の国旗でも、異なる民族で代表的な国旗もあります。ヨーロッパの（　　）国旗は横柄三色で歴史も古く、ロシアのピョートル大帝がその国旗を参考にロシア国旗をつくらせたという、云わく付きの国旗です。ルクセンブルグ国旗も同じ三色ですが、下部の青をライトブルーに変えた国旗です。
その他に1794年の革命により制定された（　　）国旗もありますが、スラブ民族ではなく、スペイン、ポルトガル、イタリアと同じ、（　　）民族の国家です。

5問：日本の国旗を「日の丸」と云うようにイギリス国旗は（　　グ）フランス国旗を（　　ル）そして米国国旗を（　　ブ）と呼ばれています。

6問：1972年、アラブ共和国連邦三カ国は、エジプト、（　　）、リビアでしたが、1977年、エジプトが、イルラエルと単独で和平交渉を行った事で、リビアの国旗は一夜にして（　　）色だけの国旗に変わりました。

7問：英国の国旗は三人の君主、聖人の紋章を合わせたものですが、イングランド（白地に――十字）、スコットランド（青地に白い――い×十字）のデザインをあわせたものです。北アイルランド（白地に――）、尚、白と緑地にドラゴンのウェールズ旗は、1284年にイングランドに組み入れられた為、現在の国旗には組み込まれていません。サッカー世界大会には、それぞれの代表が地区予選で戦う為に、今回はイングランドが勝ち上がり、イングランド旗での参加とリック）と名乗っている国が四か国あります。アジアに（　　）（　　）（　　）（　　）三カ国とアフリカは（　　）一か国ですが、いずれの国旗にも（　色：　）が使われています。しかしながら、イスラム教徒が最も多い（　　ア）の国旗は（　　色：　　色）の二色旗で、この色は、宗主国であった（　　）の国旗を意識したものでした。

以上それぞれ10問で、三級は60点、二級は70点、一級は80点以上が合格点となります。

【番外】

本欄では分かりにくい為、挿入問題としましたが、一級問題は全て記述式です。例えば、米国は（　　年　　月　　日）に（　　）から独立、国旗は1777年にカントン部分の星の数とストライプを独立当初の州の数（　　）個にしたが、星の数は州が増える度に変わった為、（　　回）も替わりました。現在は1960年に（　　州）が加わり星の数は（　　個）となっています。

2：【2018年トピックス】

8問：汎アフリカ色はエチオピアの横三色旗上部から（緑：　：　）がモデルとなり、1957年に独立した西海岸の（　　共和国）が引き継ぎ、1960年にフランスから独立した（　　リ）（カ　　）（コ　　共和国）やサッカーで日本と争った（　　）も宗主国のフランスを意識して、縦柄三色旗となっています。尚、同年にフランスから独立した（　　ド）はヨーロッパのルーマニア国旗と類似しています。

9問：英国国旗を国旗のカントン部分に使用している国がオセアニア16か国の内6か国もあります。オーストラリアやニュージーランドはご存じでしょうが、その他に（フ　　諸島）（　　ル）ニュージーランドと自由連合の（　　エ）（ク　　諸島）です。又興味深い事に、米国のある州は、州旗のカントン部分に英国旗が描かれています。それの州は皆さんも大好きな（　　州）です。

10問：国名にイスラム共和国（イスラミック・リパブ

米朝会談

２０１８年６月１２日、シンガポールに於いて、トランプ米国大統領とキム・ジョンウン朝鮮民主主義人民共和国（以下北朝鮮）委員長の歴史的会談が行われました。（既に、米国、北朝鮮の国旗は「まんじ１４２号」で記載いし、会議開催国のシンガポールについては本号アジア編に記載しました。）

東西冷戦時代に大国の代理戦争として始まった朝鮮戦争は、休戦状態が続いていましたが、ピョンチャン冬季五輪開催を契機に、南北のトップ会談、米朝会談と歩み始めたのでしたが・・・・。

「日本、米国、韓国が一つになって、北朝鮮に・・・」と云っていますが、三カ国の立場はそれぞれ大きく異なっています。

トランプ政権は、共和党の選挙基盤である福音派の支持が不可欠なので、イスラエル大使館のエルサレム移設実行で国内選挙を意識。しかし、ロシア疑惑と人種差別問題（マニゴールト大統領補佐官解任で、トランプは白人至上主義者と批判）、セクハラ問題、共和党重鎮マケイン上院議員の遺言によるトランプ大統領葬儀参列拒否、更に北朝鮮の核放棄の現実性や強引な関税問題、そして、米国の人気歌手２８才のテイラー・スイフトさんの「共和党不支持」表明など、厳しい環境となっています。

韓国のムンジェイン政権は、国内的ではポイントを稼ぎましたが、国内基盤については、キム委員長とは比較になりません。また、親日家でもないどころか、反日的でもあります。

日本の安倍政権は戦後最長の政権を目指していますが、なにしろ社会主義的民主主義ですから、一人で突っ張る様な事は出来ません。又、独立国とは自らの力で防衛出来る事と、自国のパワーポジションをしっかり理解し、米国寄りではあるものの、対立軸を作らず、謙虚である事が日本の政治姿勢では大切だと思います。

今回の国際問題は、米国、中国、ロシア、の核保有する大国、と朝鮮族の二か国、それに経済大国の日本が絡み、難しい局面が続いています。

【朝鮮戦争】

ソ連軍は、日本との「不可侵条約」を一方的に破り、日本の敗戦宣言の数日前に、いっきに朝鮮半島の南岸まで攻め入りました。米国のマッカーサーは、ソ連軍に対して戦いを挑む姿勢でいましたが、首脳同士の話し合いにより、３８度線から北が北朝鮮で、南が韓国として大国同士の話し合いで容易に決着致してしまいました。

何故、３８度線が国境になったのでしょう。その理由は、日本軍の占領統治時代に解答があるのです。つまり、３８度線より北は、日本の関東軍司令下であり、南側は日本占領時の韓国軍司令下であった為、韓国はそのまま独立し、日本軍が占領していた３８度より北はソ連が支援する北朝鮮という国を新たに誕生させ、米国と妥協したのでした。

その後、１９５０年６月２５日に北朝鮮の金日成が毛沢東、スターリンの支援を受け、突然３８度線を越え、韓国に進軍してきたのです。これが、朝鮮戦争の始まりです。社会主義陣営と自由主義陣営との代理戦争が、朝鮮半島全土を巻き込み三年もの長い間続きました。

現在は１９５３年７月２７日に国連軍と中朝連合軍との間で結ばれた「休戦協定」の状態で、終戦を迎えた訳ではありません。

今回の米朝首脳会談が歴史的快挙と云われる理由は「休戦状態を終戦に持ち込む一歩となる」との観測からなのですが・・・・今後、どの様に展開してゆくのか期待と不安が入り乱れた状態が続いています。

【ご報告：マケドニアの国名とカスピ海の領有権の解決】

「まんじ１４２号の１００ページ」でバルカン半島にある、マケドニア旧ユーゴスラビアの国名問題を取り上げましたが、今年（２０１８年）６月にギリシャはじめＥＵ諸国との話し合いより、「北マケドニア共和国」で合意しました。

「まんじ１４８号の２２１ページ」で取り上げました、カスピ海沿岸五カ国（ロシア：イラン：カザフスタン：アゼルバイジャン：トルクメニスタン）の「カスピ海領有権」問題が、８月１２日に決着しました。協定内容は、主権がおよぶ領海は１５マイル（２８キロ）、排他的水域は「領海」の外側１０マイル（約９キロ）で合意。更に、カスピ海地域での外国軍の駐留禁止協定にも署名。すなわち、ロシアとイランの両国が、「米国からの経済制裁に対する結束の表れ」とみる向きが正しいようです。

【ご報告：アフリカのスワジランドがエスワティニに国名変更】

南アフリカ共和国の中にある、スワジランドは２０１８年４月、英語名の国名から現地語の「エスワティニ」に変更しました。同国はムステイ３世の独裁国家で、最貧国の一つです。

３：【特別編：世界のスポーツ大会と国旗】

オリンピックの他にも、いろいろ大きなスポーツイベントがあります。大会が始まると最近は、テレビ・新聞などには国名の他に国旗も掲載されるようになりました。この機会に、楽しく覚えられると良いと願っています。

①サッカーワールドカップロシア大会

今年（２０１８年）６月から7月にかけて、オリンピックを凌ぐと云われるサッカー世界選手権がロシアで開かれました。２年を掛けて各予選を突破した３１ケ国と開催国のロシアが、ベスト１６、ベスト８、優勝を目指し熱い戦いが繰り広げられました。

「何故、ワールドカップが、こんなに燃えるのでしょうか？」その理由の一つに、高額な賞金額にあります。ロシア大会の優勝賞金は３，８００万ドル（１ドル１１０円として約４０億円）、準優勝２，８００万ドル（約３０億円）、３位２，４００万ドル（約２６億円）、４位２，２００万ドル、ベストエイト１６００万ドル、ベスト１６で１，２００万ドル、グループリーグ敗退でも８００万ドル（約８億円）が、ＦＩＦＡから、各国のＦＩＦＡに経費を差し引いて渡されるのです。日本はＨグループで勝ち残りベスト１６に入りましたので、１４億円近くの賞金が入った訳です。つまり、オリンピックとは比較にならない賞金が渡される事になります。

更に優勝チームが受け取るトロヒィーは純金と１８金で造られた高価なトロフィーなのです。（初代ＦＩＦＡ会長の功績を称え「ジュール・リメ杯」と呼ばれる。）このトロフィーには、世にも不思議な物語がありました。

１９６６年のロンドン大会での出来事でした。映画「ミッションインポッシブル」並みのトロフィーの盗難事件が発生、犯人も分からず、数年が経過いたしました。そんなある日、ロンドン郊外の庭を、一匹の犬が、盛んに掘っているので、近づいてみると、トロヒィーが埋められていたそうです。現在も未解決事件となっています。

以降、トロフィーの保管は厳重になり、優勝セレモニー時のみ、優勝チームのメンバーが触る事が出来、普段はチューリッヒにあるＦＩＦＡワールドサッカーミュージアムに厳重に展示保管されています。（優勝チームには立派なレプリカが渡されます。）

第一回は１９３０年、南米ウルグアイのモンテビデオで開催、「何でウルグアなの？」と私も思いましたが、「全ての費用をウルグアイが持つ」と表明した事で決定したそうです。

しかし、ヨーロッパの国々は、船による長旅となるので、当初は不参加を表明しましたが、ＦＩＦＡ会長ジュール・リメがフランス人である為、フランスと、フランスの同盟国である、ベルギー、ルーマニア、ユーゴスラビアの三か国がヨーロッパから参加し、第一回の開催が始まったそうです。

複数開催国はブラジル、イタリア、ドイツ、メキシコの２回で、他は米国を含め各一回の開催です。（２００２年には、アジアで初めて日本・韓国大会が開かれました。）

又、本戦参加国（本戦の前に予選がある）の数も当

初は１３か国でしたが、１９５４年のスイス大会から１６か国、１９８２年のスペイン大会から２４か国、１９９８年のフランス大会からは現在の３２か国となっています。更に、２０２６年のカタール開催では４８カ国となる事が決定しています。

サムライジャパンのＨ組対戦国

ワールドカップ開催期間中、日本の対戦国の国旗が、テレビ、新聞などで、何回も紹介されました。この機会を通じて記憶するのも良いかと思いました。

初戦は、ＦＩＦＡランキング１６位のコロンビアでしたが、２対１で勝利、同日に行われたＦＩＦＡランク２７位のセネガルも、ポーランド（同８位）を打ち破り、両国ともに、奇跡的勝利と云われました。第二試合で日本はセネガルと対戦しました。この試合は２対２の引き分けで乗り切る事ができました。グループリーグ最終戦は、Ｈグループ最強のポーランドでしたが敗れ、得失点差は同じでしたが、反則数の少ない日本が、セネガルを押さえ、グループリーグ２位で、ベスト１６に勝ち上がりました。

トーナメントの初戦は優勝候補の呼び声高いベルギー（まんじ１４８号）でした。前半は０対０で、後半に入り、日本が２点をリード、この様な試合では、ディフェンス体制に切り替えれば、まず勝利は確実なはずです。が・・・まさかの３対２で逆転負け。グループリーグ最終戦の消極策が、多くの批判を浴びた事で、「勝敗より、スポーツマンシップ」を意識し過ぎたのでしょうか？

初戦のコロンビアの国旗（まんじ１４２号１１３ページ掲載）は、横帯上部半分を：黄色（２分の１）下部を横帯二色で：青（４分の１）赤（４分の１）を使用。スペインからの独立を指揮したフランシスコ・デ・ミランダの名前から、ミランダ旗と呼ばれています。独立時は、ベネズエラ、エクアドルを含むグラン・コロンビア（大コロンビア連邦）を形成していましたが、１８３０年に連邦が解体し、現在の国旗は、エクアドルがミランダ旗の中央に国章を、ベネズエラは横柄の黄色：青：赤を均等３分の１とし、旗竿側黄色部分に国章、青の部分の中央に８個の白い星をアーチで描いた国旗となっています。

この三カ国の国旗が、ミランダ旗と呼ばれています。

次戦のセネガルの国旗（まんじ１４６号１５９ページ）に掲載した通り、当初は隣国マリと連合を組んでいましたので、縦柄：黄緑：黄色：赤の３色でしたが、マリとの連合解消後、中央の黄色部分に黄緑の五稜星を入れた国旗となっています。

最終戦ポーランド国旗（まんじ142号115ページ掲載）は横柄で上部から白色：赤色の二色旗、この二色が独立を目指すシンボルカラーと云われています。チェコスロバキアが、チェコとスロバキアに分かれた時、チェコの当初の国旗も、ポーランドと同一の二色でしたが、旗竿から青の三角旗を入れる事で解決しました。

トーナーメント戦、初戦のベルギーの国旗（まんじ148号216ページ掲載）ベルギー国旗は、ドイツ国旗の3色旗と同色なので、間違いやすいと云われています。簡単な覚え方は、フランス旗を参考にしているため、縦3色（ドイツは横3色）、色の配置は真ん中が黄色（ドイツは一番下が黄色）正式な国旗は大きさも異なり、ベルギーは縦の長さ13対横15に対してドイツ旗は縦3対横5なのです。

今回のワールドカップ参加国で未紹介の国6か国

ウルグアイ東方共和国（1830年：15，230ドル）

ウルグアイは「何故、第一回の開催国なのか?」又「小国なのにサッカー強国なのか?」この国は、アルゼンチンの支援のもとにブラジルから独立した国家なのです。その為に、国旗はアルゼンチンに使用されている「黄色の五月の太陽」がカントン部分に描かれています。そして白と青の九本の横帯模様は独立時の九つの地方を意味しています。よく、パラグアイと間違え易いのですが、パラグアイはスペインから独立した内陸国（首都アスンション）ですが、ウルグアイ（首都モンテビデオ）は大西洋に面したブラジルとアルゼンチンの間にある農業国です。

ポルトガル共和国（1143年：19，850ドル）

ヨーロッパ、イベリア半島の最西側、大西洋に面する海洋国家です。15世紀前半、大航海時代のアビス王朝はエンリケ航海王子の指揮のもと、アフリカ大陸西岸やブラジルなど多くの植民地を支配していました。

私が、スイスの帰りにリスボンに立ち寄った時は、以前の大国であった面影や活気もなく、素朴で、落ち着いたレトロな雰囲気の街でした。

最近の日本人が移住したい国のナンバーワンが、ポルトガルだと伺って「確かに古き日本の良さか」とそんな感じがしました。

現在の国旗はアビス王朝のシンボルカラー、緑と赤の二色を縦柄で描き、二色の境目に大きく、当時の天球儀とその上に白を赤帯で縁取りした盾を置きました。赤帯の中には、イスラムを追放し奪還した七つの城を、白い部分にはイスラムの五公国を打ち破った記念として青い

五つの盾を描いた複雑な国旗となっています。

デンマーク王国（独立は800年頃：56，730ドル）

現在使用されている国旗の中では、世界最古の国旗（赤地に白十字：ダンネブロ旗）と云われていますが、正式に制定されたのは、1854年で、スカンデイナビア十字の原型となっています。（スイスに使われている十字はギリシャ十字という）デンマークについては、世界最大の島グリーンランドの領有や、大陸に国土がありながら、首都が島にあるのはデンマークだとか、まんじに何度も登場していますが、正式な紹介は今回が初めてだったとは、驚きです。

国旗はキリスト教会を表す赤地に白いスカンデイナビア十字とシンプルなものです。スカンジナビア諸国やアイスランド国旗の原型でもあります。

アイスランド共和国（1944年：56，990ドル）

国旗はデンマーク王国から独立した為、スエーデン、ノルウェーなどと同様のスカンデイナビア十字を使用、ノルウェー国旗の赤と青を反対にした国旗です。

世界で最も豊かな国家の一つに数えられ、エネルギー源は火山地熱と氷河による水力発電がほとんどです。北海油田は大きな輸出品目。

コスタリカ共和国（1821年：10，840ドル）

コスタリカの意味は、スペイン語で、「豊かな海岸」を意味しています。国民の大半はスペイン系の白人で、中米の中では国民所得は最も高く、隣国ニカラグアの2，050ドルと比較しても、その豊かさが分かります。コスタリカの国旗はタイ王国の国旗の赤と青を入れ替えたもので、公式旗には複雑な国章がはいります。横帯で青1：白1：赤2：白1：青1の割合で構成。

かつて1823年～1839年まで、中央アメリカ連邦に加盟していました。1983年には、永久的非武装中立政策を掲げ、軍隊を廃止した国として有名になりました。

注：中央アフリカ連邦とは、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグア、ホンジュラス、ロスアルトス（現在はグアテマラの一部）とコスタリカ。

メキシコ合衆国（1821年：9，040ドル）

メキシコの歴史は、あまり知られていません。1824年以前は帝政時代がありましたが、同年の新憲法により、連邦制の合衆国が誕生。今は、米国の、ニューメキシコ、テキサス、カルフォルニアもメキシコでした。その名残として、ロスアンジェルスやラスベガス、サンアントニオなどスペイン語の名前が、今でも残っています。1846年にメキシコは米国との戦争に敗れ、国土の三

分の一を失う事になりました。その後、１８６１年、フランスのナポレオンに征服されましたが、フランス政府の傀儡により、メキシコ第二帝政時代に入りました。そして１８６７年に再びメキシコ合衆国が復活し、現在に至ります。

経済は、隣国米国の景気に大きく左右され、日本からの投資も急増したのですが、トランプ政権の「国境に壁を作る」「バイアメリカン政策」により不透明な状況となっています。

国旗は、フランスの三色旗を手本としたそうですが、中央の国章を除くとフランス国旗ではなく、何故かイタリアの三色旗、緑：白：赤と同じになります。又独立時の国章は鷲の紋章でしたが、１９１６年にサボテンの上で蛇をくわえた鷲に変更され、その後も度々変更されて来ました。

②【特別編】第１８回アジア競技大会

第１８回アジア大会が、８月１８日～９月２日にインドネシアのジャカルタで行われました。第一回は、１９５１年にインド（ニューデリー）で開催し、以降マニラ、東京、ジャカルタ、バンコク、バンコク、テヘラン、バンコク、ニューデリー、ソウル、北京、広島、バンコク、釜山、ドーハ、広州、仁川、そして１８回ジャカルタ開催と続いていきました、次回は中国の杭州、

２０２６年には名古屋開催まで決まっています。

開催予定まで含めると、一番多いのが、タイの４回、韓国の３回、日本３回、中国３回、インドネシア２回、インド２回、フィリピン、イラン、カタールの一回となっています。

参加国、参加地域では、台湾はもちろんですが、マカオ、香港も、中国とは別の旗を掲げて参加しています。小生が子供の頃、第一回から第八回まではメダル獲得数は、ずば抜けて日本がトップ。第九回で中国に逆転され、それ以降は、常に中国がトップで、日本は韓国と競い合う状況にかわりました。

今回の第１８回は、中国の金：１３２個の一位は仕方ないとしても、日本は過去最高の７８個に迫る、７５個の金メダルを獲得しました。（韓国４９個と第三位）中国を追い抜くに競泳の池江選手のような「インクレジブル・プレーヤー」が各競技種目に出てこないと難しい様です。

その、池江選手は、ジャカルタ大会のＭＶＰに選ばれ５５０万円と女性で初めてのＭＶＰという栄誉を獲得しました。

その他の金メダル獲得国は、開催国のインドネシア３１、ウズベキスタン２１、イラン２０、台湾１７、インド１５、カザフスタン１５、北朝鮮１２、バーレーン１２、タイ１１、香港８、マレーシア７、カタール６、

モンゴル５、ベトナム４、シンガポール４、フィリピン４、アラブ首長国連邦３、クエート３などの旗がメーンポールに上がりました。

この欄では、自治権を持った特別行政区（一国二制度）の自治旗も紹介いたします。

香港（制定１９９７年）

１９９７年に主権がイギリスから中国に返還、外交と防衛を除く自治権を持った特別行政区となりました。旗は、中国原産のハナズオウ（花蘇芳）を赤地の中央に白抜きで五枚の花弁をデザインしたものです。赤は社会主義、白は資本主義を、一枚の花弁の中にそれぞれ小さな星を描き中国の「五星紅旗」を匂わせた旗です。

マカオ（制定１９９３年）

１５５７年からポルトガルの領でしたが、１９９９年に中国に返還され、香港同様「一国二制度」となっています。白治旗は緑地にマカオの花といわれるハスと、マカオのシンボル「タイパ橋」を白抜きでデザイン、その上部に５つの黄色い星を配し、中国との一体感を示しています。

東京オリンピックでは、多くのアジアの方々が訪れるはずなので、中国、韓国、台湾の国旗は既にご存知だとしても、青と赤の横柄に白い三角、その中に、黄色い太陽が８本の光線を描いたフィリピンの国旗：米国の星条旗に似ているマレーシア国旗：横柄、赤と白のインドネシア国旗、シンガポールはインドネシア旗の赤い部分に白ぬきで三日月と５個の星（５つの民族を表す）を並べた国旗、上下逆さにしても同じ模様（中央が青）のタイの国旗、赤地に黄色い星のベトナム旗ぐらいは、是非とも記憶して欲しいものです。

③全米オープンテニス女子シングルスで、大坂なおみ選手が優勝

今年の９月に行われた、全米オープンテニスのシングルスの賞金額は、男女とも同額で、優勝が３８０万ドル（４億２千万円）、準優勝１８５万ドル（２億円）、ベストフォーで９２万５千ドル（１億円）と、高額賞金です。

今回、女子では、大坂なおみ選手が、元世界ランク一位のセリーナ・ウイリアムズに勝利し、日本人で初めてグランドスラム大会（全豪：全仏：イギリスウインブルドン：全米）で優勝、４億２千万円の賞金と大きな栄誉を獲得しました。まだ２０才の彼女には今後の活躍が期待されます。（全米前のランキング１９位→７位→現在４位）

大坂なおみ選手の母親は日本のスピードスケートの選手で、叔父は北海道の根室漁協の組合長をしている家系

です。父親がハイチ出身なので、会場には日の丸の他に、ハイチの国旗を持った観客も、応援に来ていました。

ハイチ共和国（１８０４年フランスから独立：７８０ドル）

西インド諸島の一つイスパニョーラ島の西側半分の国。東側はドミニカ共和国で一人当たりのＧＤＰは６，３９０ドル。ハイチの７８０ドルが如何に貧しい国か、比較できます。国旗は横柄（青：赤）の二色の中央に白い長方形の中に国章が描かれています。国章には、独立を意味する「帽子をかぶったタイオウヤシの木を中心とし、銃剣、斧、大砲などの武器を描き、リボン部分に「団結は力」と書かれています。

参考：ドミニカ共和国とドミニカ国があります。ドミニカとはキリストの安息日を意味し、スペイン語の日曜日をドミンゴと云います。

④男子は、ジョコビッチが優勝：錦織選手が復活

男子の錦織圭選手（全米前のランキングは２１位↓１２位）は、ジョコビッチ選手（セルビア世界ランク６位）に敗れましたが、ベストフォーまで勝ち上がり、約１億円の賞金を獲得しています。男子の決勝は、イワン・ジョコビッチ選手とファンマルテン・デルポトロ選手（アルゼンチン：世界ランク三位）の対戦、ジョコビッチ選手が勝利しました。彼のグランドスラム優勝回数１４回となり、一位のフェデラー３２回、二位ナダル１７回に続き第三位です。

＊ジョコビッチ選手のセルビアは、旧ユーゴスラビアの中心国で、国旗も目まぐるしく変わりました。現在の国旗は、ロシア国旗の色を逆さにした、横柄の赤：青：白で、正式には、カラジョルジェビッチ家の紋章（双頭の鷲）と王冠が描かれています。

ここで、ヨーロッパの横柄の赤：白：青の三色旗を整理してみましょう。

上部（赤：白：青）はオランダとルクセンブルグ、クロアチア（紋章）。

上部（白：青：赤）はロシアとスロベニア（紋章）、スロバキア（紋章）。

上記（赤：青：白）はセルビア（紋章）

４：【アジアの未紹介の国々】

それでは、アジアの未紹介国に戻ります。アフガニスタンから、スリランカ、モリデイブ、ネパール、バングラデシュ、ブータン、モンゴル、ミャンマー、マレーシア、ラオス、カンボジア、ブルネイ・ダルサラーム、フィリピン、東テイモールの１３か国を、紹介致していきます。（尚一人当たりのＧＤＰは２０１７年度）

アフガニスタン・イスラム共和国（１９１９年イギリスから独立：５８７ドル）

独立年月日は、正式には公表されていませんが、一般的には、イギリスから独立した１９１９年８月１９日だ、と云われています。

二十世紀に入ってから国旗が１６回も変わっていることから、大変厳しい国情が続いていることが分かると思います。

アフガニスタンは中央アジアの内陸国ですが、第７回で紹介しました中央アジア５カ国には含まれません。

国土は、日本の二倍弱ですが、東西を中国とイランに挟まれ、南はパキスタン、北はタジク、ウズベキ、トルクメンの国々に囲まれ、四分の三が６千メートル級の連峰と南部の砂漠地帯が占め、首都のカブールでも、海抜１，６００メートルの高地都市です。

経済は、農業、牧畜主体の為、国家予算の７０％が海外援助に依存しています。対ロシア、タリバンなどとの戦いの連続で経済は疲弊し、アジアのなかでは最も貧しい国の一つとなっています。しかし、鉱業資源は豊富で、希少金属、ラピスアズリなどの宝石や、クロム、銅、金、天然ガス、も採取されています。

現在の国旗は２００２年に制定されたもので、旗竿側から縦柄で、黒：赤：緑の三色旗です。その中央にある国章には、モスクが描かれ、その上部に書かれている文字は、サウジアラビアの国旗に書かれている文字と同じ「アラーの他に神はなく、ムハンマドはアラーの使徒である」と書かれ、イラン、イラクの国旗にも書かれている「神は偉大なり」の聖句も書かれています。又、モスクの下にはアフガン歴１２９８年（西暦１９１９年）近代国家として独立した年が書かれ、更にその下部にはパシュート語で、アフガニスタンと書かれています。

国旗に文字が書かれているのは、韓国、サウジアラビア、イラク、イラン、モンゴル、ブラジルなどがありますが、こんなに、多くの異なる意味の文字が書かれている国旗は、アフガニスタンだけだと思います。

スリランカ民主社会主義共和国（１９４８年：４，０８４ドル）

スリランカは１９７２年までは、セイロンと呼ばれていました。１５世紀には明、１６世紀はポルトガル、１７世紀はオランダ、１８世紀はイギリスの植民地を経て、１９４８年にイギリス自治領、セイロンとして独立しました。

国旗は、１９４８年の独立時につくられ、キャンディ王国のシンハラ族に由来する剣を持つライオンとその四隅に７０％を占める仏教徒を意味する菩提樹の葉をあし

らった国旗でした。１９５１年にイスラム教徒（緑）ヒンズー教徒（オレンジ）に配慮し、旗竿側から縦帯で緑とオレンジ色を加えました。

現在、中国からの借款が多大となり、自治権の一部が失われかねない問題が発生しています。

モリデイブ共和国（１９６５年：１２，５２７ドル）

モリデイブはインド洋に点在する約１２００近くのサンゴ礁からなる２９８㎢（東京２３区の半分）の島国です。モルデイブも、スリランカ同様、ポルトガル、オランダ、英国保護領を経て１９６５年に独立。経済基盤は観光と水産業で、現在は、中国からの観光客が大幅に増加しています。主要援助国は日本、オーストラリア、フランスですが、最近、中国がモリデイブの土地を収奪している事が大問題になっています。国旗は緑地の中央に白い三日月を一つ描き、国旗全体を赤い太枠の額に入れた様なデザインの旗です。赤い縁取りの国旗はモリデイブの他には中米の島国グレナダの国旗がありますが、他はありません。

ネパール連邦民主共和国（１７６９年：８３４ドル）

ネパールは２００６年まで、絶対君主制でしたが、現在は連邦議会選挙を実施する、連邦民主共和制をとっています。主要経済は農林業で、主要輸出入国はインドです。援助国は、米国、英国、ノルウェー、日本と、スイスなどの西側諸国です。何よりも、首都のカトマンズはヒマラヤ登山の起点として有名で、登頂成功の際には、登頂国の国旗とネパール国旗が、山頂にはためくので、良くご覧になる国旗だと思います。

二つのペナント形をした異形のネパール国旗は、国連やオリンピックでは余白を設けて、２対３の長方形となるそうです。ネパールとはサンスクリット語で、「山の居住地」を意味し、二つのペナント型はネパールの山を表し、上部の三角旗の白い部分は月、下部の白い部分は太陽を表し、全体の赤色はネパールの国花「しゃくなげ」の赤を意味し、その周りを縁取った青はヒマラヤの空の色を表しているそうです。

バングラデシュ人民共和国（１９７１年：１，６０１ドル）

バングラデシュの国旗については、まんじ１４４号の１４５ページに日本に似た国旗で取り上げました。緑地の赤丸は森林から昇る赤い太陽をあらわしていますが、緑はイスラムの伝統色を使用していますが、太陽を使用した事は前述の日本の様な経済発展を目指す意味と、「パキスタンの三日月に対抗した」という説もあります。

ブータン王国（１９４９年：２，９０３ドル）

国旗はチベット仏教（ラマ教）の影響があり、１９１２年チベットの君主ダライラマ１３世が独立を宣言した時、作成した「雪山獅子旗」（下方に白い雪山に二頭のスノーライオンを、中央には黄色い太陽が赤い太陽光線を日本の旭日旗の様に放っている旗。中国では使用厳禁）の影響を受けた国旗です。ブータン国旗はスノーライオンの替わりに「龍」を大きく描き、旗の左下部と右上部を対角線で仕切り、旗竿側からの三角形を黄色（サフラン）で、下の三角形はチベット仏教のオレンジ色を使用しています。

モンゴル国（１９２１年：３，６３９ドル）

モンゴルの意味はモンゴル語で、「勇敢」を意味し、モンゴルの建国は、広大な元（げん）を築いたチンギスハーンに由来しています。１９１１年に中国の清朝より分離し、１９２１年に君主制人民政府が成立し独立を宣言しました。宗教は、チベット仏教、政治体制は共和制で、隣国、ロシア、中国とは微妙なバランスをとる外交政策をとっています。

産業は、石炭、銅、ウラン、レアメタルなどの豊富な地下資源に恵まれ、安定的発展を目指しています。日本は米国、ドイツとともに主要援助国となっています。

大相撲では、朝青龍、白鵬などモンゴル出身力士が活躍していますが、私達は、モンゴルの歴史、国旗はあまり知らないのではないでしょうか。

モンゴルは１２７１年～１３６８年、中国の地とモンゴル高原を支配した騎馬民族の国家で、馬を上手に操る勇猛果敢な民族として恐れられていました。（現代で云えば、戦車を上手に操る民族なのでしょう）

モンゴルの歴史は、中国の歴史と重なり、南宋の時代にモンゴル帝国との戦いが始まりますが、現在は外モンゴルがモンゴル国として、内モンゴルは中国の実効支配下のモンゴル自治区となっています。

国旗は縦帯で、旗竿側から赤：青：赤の三色旗で、旗竿側赤地の部分に黄色で象形文字化したソヨンボ（象形）が描かれています。（社会主義時代は五稜星が描かれていました）

赤は自由と発展を、青は民族カラーです。旗竿側の赤い部分に、黄色いソヨンボ（象形）文字で上から、過去：現在：未来を花のつぼみの形で、○は太陽と民族の母を、月は民族の父を、その下の三角と長方形は敵の制圧、勾玉型の二匹の魚は不眠不死の魚を、（水が枯れて、翌年に砂漠が川になると再び現れる）それを囲む二つの長い長方形は、国民の団結力を表しているそうです。象形文字といえども分かりにくいものです。

【東南アジアとは】

東南アジアの国とは、インドネシア、マレーシア、フィ

リピン、シンガポール、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、ブルネイ、東テイモールの11か国をいいます。

アジア大陸の東南部、エーヤワディー川（旧イラワジ川）、チャオプラヤー川、メコン大河によって形成される広大なデルタ地帯とスマトラ・ジャワを経て小スンダ列島からフィリピンまで連なる火山島部分、そしてマレー半島、ボルネオを中心とする、非火山島地域から形成されています。

歴史的にこの地域を、駆け足で説明致しますと、紀元前二千年頃、中国やインドの影響を受ける前の独自の時代、その後、中国の王朝が今のベトナムに進出し、インドが、海上交易ルートに沿って、初期国家が生まれた時代、大航海時代にフランス、イギリス、オランダからの支配を受けた時代、日本の敗戦、フランスの撤退、アメリカの影響力、中国の王朝力などと、外部の大国によって歴史が移り変わっていった地域なのです。

ミャンマー連邦共和国（1948年：1，190ドル）

ミャンマーは、インドシナ大陸の北西部に位置する、日本の二倍弱の面積（67万7千㎢）を擁する多民族国家。ビルマ族が70％の最大民族である事からビルマを国名としていましたが、1989年、英語呼称を現地語でミャンマーと改めた時、ミャンマーの意味をビルマ族（改名してバーマー族）だけではなく、すべての民族（ジンポー、カイン、チン、モン、シャン、ラカイン族など）の総称とし、多民族の団結力を強める国名に致しました。

しかし、その中でスーチー政権が直面する最大の課題がロヒィンギャ民族問題なのです。

ロヒンギャ族はラカイン地方に8世紀から住むラカイン族の事ですが、しかしアウサウンスーチー顧問が主導する政府の意見によれば、

①インドのベンガル地方に起因するベンガル語系ロヒンギャ語を話すイスラム教徒。

②8世紀からラカイン地方に住み続けるというが、ロヒンギャとの呼称は1950年までしか遡及出来ない。だから、ラカイン族がそのままロヒンギャ族ではない。

③第二次大戦中も、ラカイン地方で日本側の仏教徒ラカイン族と英国側のムスリムとの間で代理戦争をしていた。現在も、バングラデイシュ（旧東パキスタン）からの移民が食料を求めてラカイン地方に流入、インド、パキスタン戦争の時も、ラカイン地方に多く流れてきた事実がある。

以上の観点から、1982年の改正国籍法では、ロヒンギャはミャンマーの土着民族ではないとされ、外国人となっているのです。

しかし、ラカイン地方は紛れもないミャンマーの国土であり、そこに住む土着民族と流入してくる民族が入り乱れている為、判断が難しい訳です。

日本からは、河野外務大臣を派遣し、スーチー氏や、ロヒンギャ代表者とも面談、人道的解決する役目を果たそうとしています。

ミャンマーの国旗は横帯三色で上部から黄色：黄緑：赤の三色旗の中央に白い五稜星で、黄色は団結、黄緑は平和と安らぎ、赤は勇気と決意を表し、中央の白い星は永続する連邦制を示しています。

マレーシア（1957年：9，812ドル）

マレーシアは、マレー半島の西マレーシアとボルネオ島の北部分の東マレーシアから形成され、日本国土の約9割の面積を持つ国家です。人口は2300万人ですが、マレー系69％、中華系23％、インド系7％の複合民族国家となっています。

立憲君主制国家なので、13州の内、主要9州の州王が互選を通じて国王を選出します。政治、執行制度は、議員内閣制で運営され、1980年以降マハテイール政権下の重工業化政策により、パーム油、石油、天然資源を含め、安定した経済発展を続けています。日本との関係は輸出入ともベスト5に入る親密国です。

（一度引退したマハテイール氏が、政権の腐敗を訴え、今年（2018年）再度大統領に就任しました）

国旗は米国国旗の様なスター&ストライプを使用（しかし、配色は旧宗主国の英国を参考にしたと云われています）青地カントン部分には、イスラムの三日月と星を黄色で、14本の赤と白のストライプは13州と連邦特別区（以前はシンガポール）を意味しています。

ラオス人民民主共和国（1953年：2，542ドル）

ラオスはシナイ半島の中で、唯一海のない内陸国ですが、タイとの国境側には、豊な水源のメコン川が流れています。北は中国、東はベトナムに接し、首都はビエンチャンには、総人口700万人弱の一割強が住んでいます。50近くの多民族国家で、平野部に定住するタイ系のラオ人（60％）、山の中腹に住むクメール系のモン族（25％）、山の頂上付近に住むチベット・ビルマ系民族モン・ミエン族（15％）が分布しています。

歴史は、ベトナム同様、先住民のラオ人から、ランサン王国を築き、一時シャム（現在のタイ）に支配されますが、19世紀にはフランスの植民地となりました。その後ベトナムと同様に社会主義独立運動が起こり、反仏から反米へと進んでいきました。

現体制も、社会主義ではありますが、経済は、中国、ベトナムと同様、全方位体制で、好調な発展を遂げています。

国旗はラオス愛国戦線が1950年から使用していた旗で、横帯で上部から、赤（四分の一）青（二分の一）赤（四分の一）とし、真ん中の青地に白い満月を描いた国旗となっています。赤は、自由と独立の為に流された血、青は国土の繁栄、白い満月は仏教と輝かしい未来を意味しています。

カンボジア王国（1953年：1，389ドル）

カンボジアの国土は日本の約半分（18万㎢）ですが国土の四割がメコンデルタを含む広い豊かな平野。主要産業は第一次産業の米ですが、ほとんどが国内で消費されてしまいます。独裁政治と内乱、虐殺などの争いが続いた為、国民の半数以上が貧困層となっています。国語は国民のほとんどが話すカンボジア語（クメール語）。宗教は9割が仏教。（イスラム教も20万人程）。

歴史は9世紀頃に始まったアンコール王朝が600年近く続き、13世紀にはインドシナ半島の大部分を支配しました。14世紀以降シャムのアユタヤ朝の攻撃で崩壊、その後、フランスの保護下に入り、1945年、シアヌーク殿下が独立を宣言しましたが日本の敗戦で却下されました。その後、米国の支援の下1953年に再度独立が認められる事になりました。

しかし、1970年には、米国の支援の下にクーデターが起こり、軍事政権が誕生、更に1975年にポルポトによるクーデターにより、独裁共産主義となり、多くの人民が虐殺されました。1979年にベトナムの軍の支援をうけ、ポルポト軍をタイ国境に撃破しました。その後、ベトナム軍と民族統一戦線の三派の争いが続き、1989年にベトナム軍が撤退し、1993年に新憲法が制定されカンボジア王国が復活し、立憲君主国家となった、苦難の歴史でした。

国旗はラオスの旗地の赤と青を逆にし、上部から、青（四分の一）赤（二分の一）青（四分の一）で中央の赤地に世界遺産のアンコール・ワット（サンスクリット語で、アンコールはアンコール王朝、ワットは大寺院）が民族の誇りとして描かれています。

ブルネイ・ダルサラーム国（1984年：27，711ドル）

カリマンタン島（ボルネオ島）の北の一部分で、三方をマレーシアに囲まれ、更に国土が二つに分断されています。1984年に英国より独立しました。絶対君主制の国家で、スルタンが国王と国家元首を兼任し、大臣も国王の指名、全ての権力はスルタンに集中しています。国土は5，770㎢と三重県とほぼ同じですが、人口は37万人。東南アジアにおける、GNIは、シンガポールに次ぐ高所得国となっています。石油、天然ガスの輸出に依存した経済構造で、アラビア諸国と類似しています。

国旗は、独特なデザインなので、すぐにブルネイと分かるはずです。マレー人にとってラッキーカラーの黄色をベースとし真ん中にやや斜めに左肩上がり、右肩下がりの白の帯と黒の帯が太く引かれています。その中央部分に赤茶の国章（イスラム三日月を船の様に浮かべ、その下に台座を、船の真ん中にスルタンの笠と旗を真っ直ぐに立て、両端には国家繁栄のシンボルの手がデザイン。また、三日月と台座部分にはアラビア文字で「神に常に奉仕」と「国名」が書かれている）が描かれています。

フィリピン共和国（1946年：2，976ドル）

フィリピンは、ルソン島、ミンダナオ島との間に多くの島が存在し、インドネシアに次ぐ7千近くの島々からなる世界第二の島国です。人口は、2017年に、一億人国家の仲間入りをいたしました。経済は農林水産業が主体ですが、近年、ニュービジネスの成長が期待されています。アジアで初めてのカソリック教国で、国民の81％がカトリック、8％がプロテスタント、5％がイスラム、となっています。しかし、南のミンダナオ島では、根強いイスラム教信仰があり、フィリピンからの独立紛争が続いています。対外問題として、中国によるスプラトリー諸島占拠問題を抱え、デユテルテ大統領（デユテルテ氏はミンダナオ島の出身）の手腕が期待されています。

国旗は、スペインからの独立運動に使われた旗をベースとし、1997年に正式に国旗に制定されました。横帯で青と赤の二色に旗竿から白い三角旗（その中に黄色い太陽と主要3地区を表す三つの黄色い星を三角形のコーナーに配置）。東南アジアで、三角旗を描いた国は、フィリピン、と東テイモールだけです。

東テイモール民主共和国（2002年：5，177ドル）

一時、1975年、ポルトガルから独立しましたが、隣国インドネシア軍が侵攻し混乱が続いていました。そして2002年、国連の仲裁により再度独立を果たしました。隣の西テイモール地区は、インドネシアの国土、南側はテイモール海を挟んでオーストラリアとなっています。東アジアでは、フィリピンに続いて、キリスト教国です。

経済の大半は天然ガス・石油収入に依存している為、一人当たりの国民所得は、原油の国際相場に左右されます。インフラ面整備も遅れ、国民の失業率も高く近代化が今後の課題となっています。

国旗は、1975年にポルトガルからの独立時に東テイモール独立革命戦線で使用された旗で、赤地に旗竿側から黒い三角旗（中央には白い五稜星）と更に黒の三角

形の上部をなぞるように黄金色の矢を描いている。三角形の黒は暗黒の時代、黄金の矢は、そこから飛び出す独立闘争心、赤は闘争で流された血の色、白い星は、未来の希望と平和を意味しています。

台湾（中華民国）（国旗制定１９２８年：２４：５７６ドル）まんじ１４３号１１７ページ記載

台湾は実質的には一つの国家を形成し、日本とも友好的関係にありますが、対中国との関係から政治的には複雑な問題を抱えています。

人口は２３百万人、９６．５％は漢民族で２．３％が台湾人から構成されていますが、現在は、人種問題より、親中国派の国民党（前総統：馬氏）と独立路線の民主進歩党（現総統：蔡氏）に二分されています。

１９４５年、台湾は、中国大陸の中華民国の統治下に入り、１９４９年に中華民国政府が台湾に移転、１９５５年以降実効支配しています。

台湾の国旗は赤：青：白の三色で「晴天白日満地紅旗」と呼ばれ中華民国国民党の党旗をそのまま使用、孫文の三民主義（民族）（民権）（民生）をあらわし、民族独立、人民が統治、人民の社会平等を意味しています。カントン部分は青地に白抜きにした太陽と十二稜の光は１２刻の永遠を表しています。

尚、今回のアジア大会では、「晴天白日満地紅旗」は使用禁止とされ、チーム名は「チャイニーズ・台北」、使用される旗は、特別にデザインされた「オリンピックデザイン旗」が使用されました。

以上で、アジア諸国は全て紹介したことになります。次回は、「国旗検定の正解」と未紹介の国（南米：オセアニア：中米）に移りたいと思います。

【参考文献】

パキスタンを知る為の６０章：：明石書店
広瀬　崇子・小田　尚也

現代パキスタン分析：：岩波書店
黒崎　卓也・子島　進・山根　聰

はじめて知るブータン：：明石書店
山本　けいこ

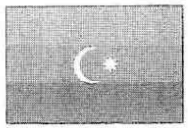
バングラデシュを知る為の６０章：：明石書店
大橋　正明・村山　真弓

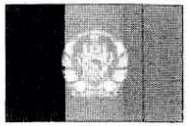
東南アジアを知る為の５０章：：明石書店
今井昭夫

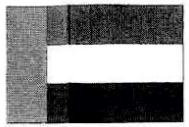
シンガポール物語：：日本シンガポール協会
澤田　豊治

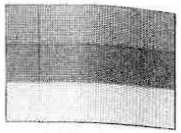
地域別国旗は、アジア（まんじ１４７号２２２ページ）、アフリカ（まんじ１４４号）をカラーで、ヨーロッパ（まんじ１４８号２２７ページ）を白黒で、掲載しました。今回の記念号にはその他の地域国や、自治旗も紹介致しましたので、白黒で、アジア諸国の国旗とオセアニア諸国、南米諸国、北・中央アメリカ諸国の国旗を付録致しました。

アジア諸国の国旗

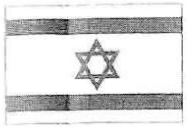

アゼルバイジャン


アフガニスタン

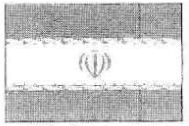

アラブ首長国連邦

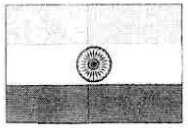

アルメニア

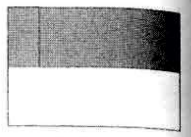
イエメン

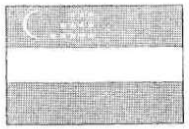

イスラエル

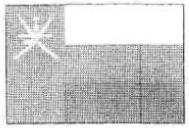
イラク

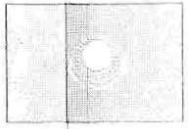

イラン

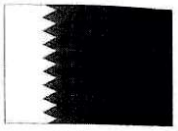

インド

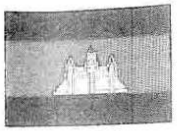

インドネシア


ウズベキスタン

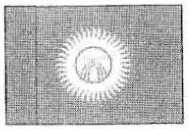

オマーン

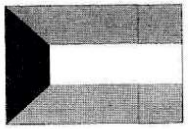

カザフスタン


カタール

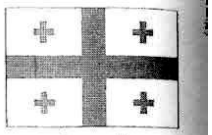

カンボジア

キプロス


キルギス

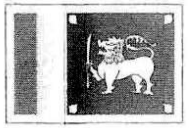

クウェート

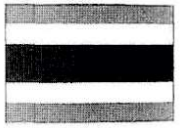
サウジアラビア

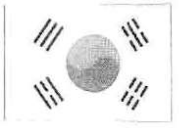

ジョージア

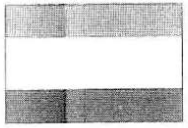
シリア

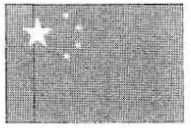
シンガポール

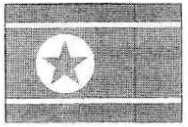

スリランカ

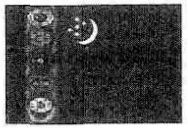

タイ


大韓民国

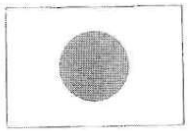

タジキスタン

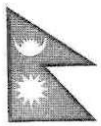

中華人民共和国

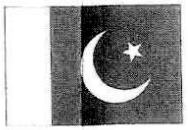

朝鮮民主主義人民共和国

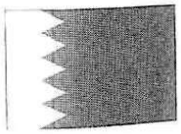

トルクメニスタン

トルコ

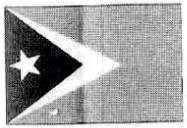

日本

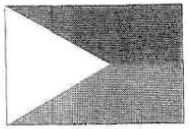

ネパール


パキスタン


バーレーン

バングラデシュ

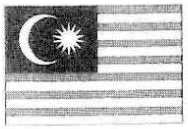

東ティモール

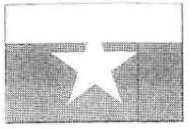

フィリピン

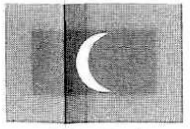
ブータン

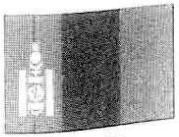
ブルネイ

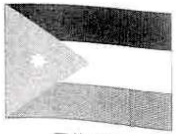
ベトナム

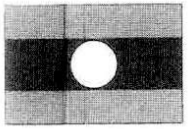

マレーシア

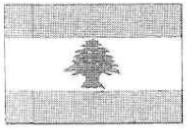

ミャンマー

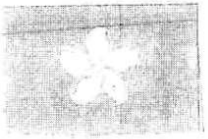

モルディブ

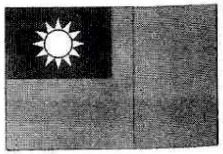

モンゴル


ヨルダン


ラオス


レバノン


香港

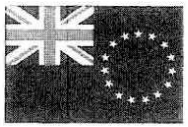

台湾

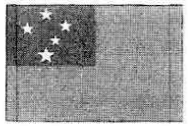
マカオ

オセアニア諸国の国旗

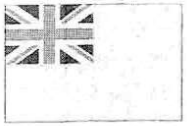
オーストラリア

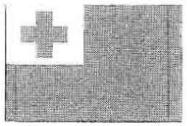
キリバス

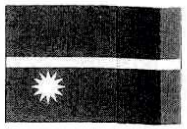

クック諸島


サモア

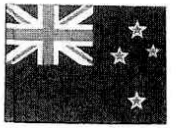
ソロモン諸島

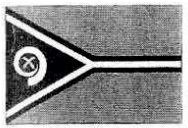

ツバル


トンガ

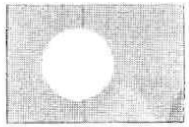

ナウル

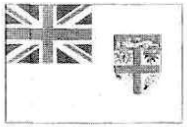
ニウエ

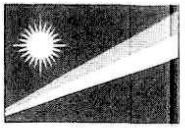

ニュージーランド

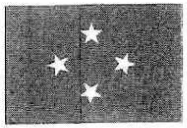

バヌアツ

パプアニューギニア


パラオ


フィジー

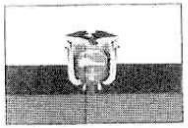

マーシャル諸島

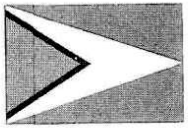

ミクロネシア連邦

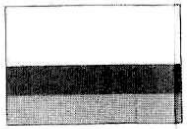
南米諸国の国旗

アルゼンチン

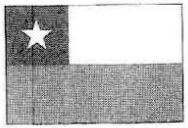
ウルグアイ


エクアドル


ガイアナ

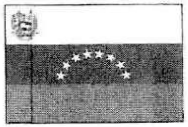

コロンビア

スリナム


チリ

パラグアイ

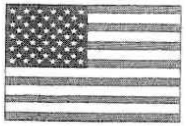
ブラジル


ベネズエラ

ペルー

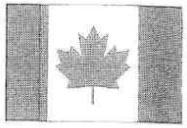
ボリビア

北・中央アメリカ諸国の国旗

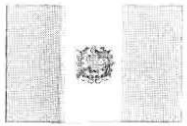

アメリカ合衆国

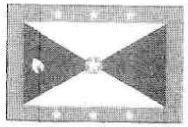
アンティグア
・バーブーダ

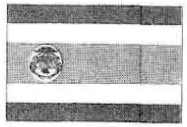
エルサルバドル

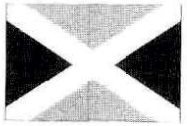

カナダ

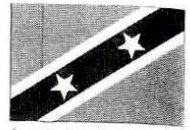
キューバ

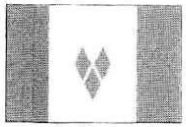

グアテマラ

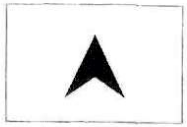

グレナダ

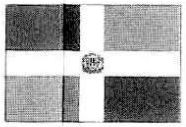

コスタリカ

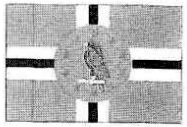

ジャマイカ

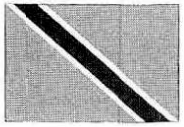

セントクリストファー・
ネーヴィス

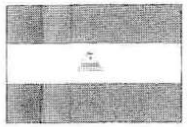

セントビンセント・
グレナディーン諸島

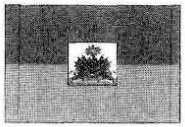

セントルシア

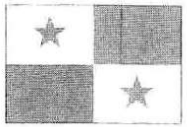

ドミニカ共和国

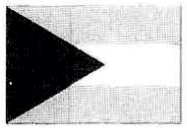

ドミニカ国


トリニダード・トバゴ


ニカラグア


ハイチ

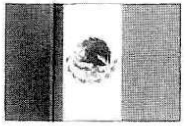

パナマ


バハマ

バルバドス

ベリーズ

ホンジュラス


メキシコ

性と化粧の物語（十三）

鈴木守

第三話　性と泥化粧（三）

本誌一四八号並びに一四九号に、泥化粧が発祥した時代から現代社会に至る間の泥化粧に関わる資料を調べて、ランダムに列記して来ましたが、期待した程に資料を集める事が出来ませんでしたので、乏しい資料を想像の糸で紡いで泥化粧の歴史に仕立て上げたいと思っています。

第一節　泥化粧史（一）

泥化粧の原点は、泥浴にあり、泥浴は水浴風習から分化した化粧習慣であると想定していますので、泥化粧史を考察するに先立って水浴の由来について検討したいと思います。

一項、水浴風習

水浴習慣の成立を合目的に考察しますと、我々人類の祖となった類人猿の一種が熱帯樹林の樹上から地上に下り立ち、灼熱のサバンナの地を直立二足歩行の運動様式で跋渉し始めました。斯かる生活環境の温度変化が退毛の退化を促し、加熱した体温を拡散して体温の恒常性を維持すると同時に汗腺を発達させて汗の分泌を盛んにさせ、汗の蒸発潜熱によって体温を冷却するインフラを構築しました。

体毛の退化、汗腺の発達のような生物反応に基づくインフラもありますが、風俗・習慣のような日常行動も身体の恒常性維持に貢献します。水浴風習は過熱した身体を冷却する事によって体温の恒常化に貢献していますので、体温恒常性システムのインフラに認定され、原人の時代には既に水浴風習が成立していたと判断されます。

水浴風習成立の原因として、直立二足歩行を取り上げましたが、直立二足歩行と云う表現は平均的な運動量を示しています。この表現の範囲内に直立二足走行・直立二足長距離歩行、肉食獣との格闘等を含めますと、古人類の水浴の頻度はかなり増強するかも知れません。

二項、泥浴風習

泥浴は水浴風習が分化した化粧文化とされていますので、水浴風習を維持していたアナメンス猿人の人達も泥浴を行っていた可能性を否定できませんが、それはそれとしてホモ属人類、即ち原人の時代に泥浴風習が存立していたか否かを検討する事にします。

化石番号 WT1500、通称ツルカナ・ボーイ（以下ボーイ）の遺体は一五〇万年の長い長い時間空間を、殆ど無傷の全身骨格を維持・保存して来た稀有の存在だった事で名を馳せています。

この稀有な存在は、人意・人為を全く含まない自然の摂理の集積によって成就した筈です。従って、自然現象によるインフラを知悉する事によって、一五〇万年の時間をかけた稀有の存在を再現できる可能性を予感しました。云うなれば、一五〇万年後に第二のボーイと面会できる事になりますが、残念乍ら、私の存命期間中には実現しません。

① ボーイの泥浴：ボーイが泥浴していたとする資料がある訳ではありませんが、前述のような稀有の存在を無視して話を進める訳にも行きませんので、ボーイに主役を勤めて貰います。

人類学の泰斗ファッキーニは「人類は出現するとすぐに、宗教的行動や、神聖な領域を意識するようになった」と述べ、初期人類が既に宗教的行動を開始していた事を示唆していましたので、ボーイの時代、ホモ・エルガステル（以下エルガステル）の人達の宗教観を想像する事が出来ました。

例えば、現在の我が国にも「イボコロリのお地蔵様」とか「イワシの頭も信心から」と云うような信仰があります。このような信仰をボーイの時代に当てはめますと、「大魔神ワニの侵入を阻止する泥沼を聖地に位置づけていた」かも知れません。また泥浴を始めた彼らは聖地における泥浴がサンバーンによるヒリヒリ感を阻止する霊験を体験した筈です。彼等は、「ヒリヒリ防止の泥沼様信仰」を始めていたのではないでしょうか。

このような宗教的な雰囲気の中で歯痛が始まったボーイは何をおいてもイの一番にナリオコトメの泥沼に駆け着けた事は吝かではありません。早速、泥沼に身を浸し、泥土を頬に塗り、泥水を口に含んでも歯痛は鎮静しません。

所で、この泥沼はサンバーンの鎮静には霊験を発揮し

ますか、歯痛鎮静は専門外です。その上、この沼は〝人喰い沼〟とも呼ばれている危険な沼ですが、ボーイ達は大人の人達からセーフティーゾーンを教えられていますから、安心して泥浴を日常的に行なっていました。

ボーイは歯痛が鎮まらない為、苛立ちを覚え、より強い効果を求め、コーションを忘れ、沼の深みに向って一歩歩を進めました。その時、ボーイの身体は泥沼の水面から消えていました。泥沼の狂暴な反面が姿を現したのです。ボーイの姿は水底に横たわり、泥沼の泥土がボーイの遺体を覆い始めました。先報で紹介した人喰い沼の液状変性が始まったのです。

人喰い沼の土壌成分はシキソトロピック、日本語の揺変性土質でした。揺変性土壌は固形成分の土砂を分散媒とし、液体成分の水を分散質とする固形コロイドであり、この構造体に運動エネルギーのような力学的エネルギーを作用させると、水を分散媒、土砂を分散質とする液状コロイドに変貌し、土砂は液状コロイド系から遊離し、ボーイの遺体の上に堆積し始めました。斯くしてボーイの遺体はナリオコトメの川床をベッドとし、人喰い沼を構成していた土砂を掛け蒲団として一五〇万年の永い眠りに就いたのです。

話は変わりますが、先述のボーイの死因の項に「ワニやハイエナに喰い荒らされる事なく」の一文がありましたが、この文の意味は「アフリカの原野を跋扈する屍肉猟の常習動物」の意に解し、また、溺死体は死後、体内にガスが発生して浮上するのが通例である事を想起しましたので、ボーイの遺体は屍肉猟の監視の目から逃れる事が出来たのかを必死になって考えました。その結果、気付いたのが、サイアンティック・トリックの揺変性理論でした。揺変性によって人喰い沼を構成する土砂をボーイの遺体に降り注がせて遺体の浮上を阻止したのです。

①項の『ボーイの泥浴』の最後に、今一つの証拠を掲げます。ボーイの故地を流れるナリオコトメ川は雨季になると、エチオピア高原の土砂を運び込んで川の淀みに土砂を堆積していましたが、乾季には枯れ川に化して、堆積した土砂を乾燥滅菌していました。一方、ボーイの化石を掘削する際、一五〇〇トンの土砂を動かしたとの報告がありますので、ボーイは毎年欠く事なく、一キログラム重の掛け蒲団を重ね掛けして貰っていたのです。

これらの事実から思い浮かぶ事は、ボーイの遺体に降り積もった土砂が、遺体の風化を防いでいた事実です。斯くして、ボーイの遺体を損壊する事なく保存するシステムが完成しましたので、一五〇万年後に第二のボーイと顔を合わせる可能性が、生まれました。

② 泥浴二景：カリブ女性の恍惚の姿を撮影したアーティストは、「カリブ海に浮かぶハイチのブードゥ

教信者の女性が年に一度行われる儀式で、聖なる泥沼に入り、裸になり、トランス状態でのたうち廻っていた。その様子はまるで、神々と交わるかのような際どいもので、大変エキセントリックだった。人々は裸になる事によって日常から解放され、異空間に身を置こうとしているかのように見えた」と述懐していました。

私の目線が捉えたカリブ女性の両腕は人を抱くように拡げ手首を返えし、両の乳房と乳頭は固く締って突出し、腰から下は泥沼に浸っていましたが、恰も座居性交を思わせるような体位を窺う事が出来ました。

別の一葉には、エチオピアの裸族スルマ族男性のボディペイントを施したり姿が写し出されていました。解説文には「エチオピア奥地で出会った裸族は儀式の際、ペニスの先きまで丁寧にペイントを施していた。強さが男の価値の最も重要な要素と考える彼らは鍛え抜かれた肉体こそが最高のファッションであり、それを晒す事に誇りを感じていた」と記されていました。私はこれが性器強調の化粧かと見詰めました。

出典の書名を忘れてしまいましたが以前、「スルマの人達はハレの日に聖なる泥土で身体に稿模様を施し、恰もストライプのボディスーツを纏った姿をハレの日の晴れ姿」とするという記述に接した記憶が残っています。

私の妄想が募って来ました。ハイチ、ブードゥ教信者の人たちに血の中に一七～一八世紀頃、アフリカで拉致され、奴隷船で新大陸に運ばれた人達の血が混じっていないだろうか、エチオピア裸族はツルカナ湖北部のスルマであるから、ボーイの部族の人達の居所と隣組である。もしかしたら、ブードゥ教信者の人たちは、ボーイの種族、エルガステルの血を引いているのではなかろうか。しかし、これらの妄想は見果てぬ夢になってしまうかも知れません。

（続く）

明治時代の著述者

渋江保の一生（その十五）

山本勉

豊橋市美術博物館所蔵渋江資料その二

渋江保の一生（その十四）において豊橋市美術博物館所蔵渋江資料（書簡六通と交詢社回状一通）のうち書簡「加藤幸三郎宛書簡一八八三年（明治十六年）一月一日」と「交詢社回状一八八二年（明治十五年）十二月十日」を取り上げ紹介したが、残る渋江書簡のうち二通について書簡原文とその解釈を掲載する。

（一）加藤幸三郎宛書簡一八八一年（明治十四年）

①書簡原文

前芝　加藤幸三郎様　　粛報

花墨拝誦　貴命委細敬承仕候、小生固より御同意ニテ昨夕モ武田氏萬事打合置候、尤モ本郡ニテ集會之儀者阿部氏ノ都合モ有之、何分六ケ敷様ニモ被存候、いづれ拝眉萬縷可申述候へ共、先者粛報如斯御座候　　不宣

廿七日　渋江生　白拝（拝白）

加藤先覚　侍史

②現代語訳

前芝　加藤幸三郎様　粛報

お手紙拝見いたしました。あなたのおっしゃることの詳細を承りました。私は初めからあなたのお考えに同感で、昨夕も武田氏が万事打ち合わせてくれてあります。ただし、本郡で集会の件は阿部氏の都合もあってなんとも難

しいように思っております。いずれお目にかかり詳細についてお話ししようと思っておりますが、先ずは早くお報せしなければと思いこのようなお手紙を差し上げました。不宣

二十七日　渋江生　白拝（拝白）

加藤先輩

追伸　思いの外御無沙汰しておりました事、何とも申し訳なく思っております。実は最近、多忙で万事思うに任せずにおりました。お許しいただきたいと思います。御尊父様をはじめ御一同様へ宜しくそのようにお伝え下さい。早々

国府村　長泉寺　渋江保

③加藤幸三郎宛　渋江書簡について

この書簡の封書裏面には「国府村長泉寺　渋江保」とある。長泉寺は渋江の隠居所であり、渋江が長泉寺に家族や書生と共に暮らしていたことは『渋江抽斎』その百二に書かれている。この手紙がいつ出されたのか、封書にも文面にも記載はなく、末尾に「廿七日」とのみある。正確にはいつこの手紙が書かれたのか。手紙の文面に「武田氏」（武田準平）及び「阿部氏」（阿部泰蔵）の名前が散見できる。武田準平が存命中であり、しかも阿部泰蔵が武田準平の家があった宝飯郡森村（現豊川市森町）に立ち寄ったのは、一八八〇年（明治一四年）十一月二十七日であることに鑑みると、同年十一月二十七日に渋江は加藤幸三郎宛に手紙を書いたと思われる。阿部泰造が宝飯郡森村を訪ねたことは、『三河最初の中学校』にその記載があるが、日付の特定については「第六章創設に情熱を燃やした人々　三阿部泰蔵」に「明治一四年（一八八〇、三三才）九月七日から十二月九日まで生命保険契約勧誘のため各地を訪ねる。（わが国最初の保険勧誘出張）。その途中、十一月廿七日、森村の武田準平の家に寄る。（この時の歓迎ぶりは渋江保の記憶するところとなった。」とある。[1]

（二）加藤幸三郎宛書簡一八八二年（明治十五年）一月二十三日

①書簡原文

前芝　加藤幸三郎様

御不例にて御全快ニ不相成候由御案申上候、折角御保養専一奉祈候、扨又何哉御恵投相成、毎次恐入候、生モ遠より升堂可仕之處折悪休日ニ者公私ノ塵事ニ逐ハレ反テ平日ヨリモ多忙ニテ友義ヲ相欠本心ノ督責ヲ蒙り居候、何卒不悪御憐察偏ニ奉伏願候、中学校會議者学校ヲ一ケ更ニ取纏ムル事（コレハ場所無之六ケ敷ト存候）三十円ノチーチャ雇入之事等ニ御座候、此チーチャ雇入之件ニ付貴兄の思召ヲ何度トテ郡廳ヨリ兄ヲ呼出有之候赴也、

生ハ兎ニ角此件称ハザレバ、トテモ学校盛大ニ赴クベキ見込無之ニ付、萬一承諾セラレザレバ辞シ去ルベキ決意ニ候、併多分兄モ讃成ノ事と存候（集會諸子ハ讃成也）去日山本義平氏尋来候、兄へ宜申上呉候様依頭有之候、イヅレ次ノ休日ニ者升堂ノ見込ニ候、皆様へ宜願上候

一月廿三日学校ニテ認ム

（封書裏面）

十五年一月廿三日認メ　中学校ニテ

一月廿四日　投函　渋江保

○昨日御使へ御報可申処、御使御歸宅ノ節御寄り（立寄）不被成（游、依テ）ニ付、今日郵便ニ投シ居候也

中学校舎中幹事當直

②現代語訳

前芝　加藤幸三郎様

いつになく御全快になられないとのこと御案じ申し上げております。努めて養生に御専念なられるようお祈り申し上げます。さて、又何か御贈り頂きましていつもいつも恐れ入ります。私も遠方ではあっても極楽寺本堂に上るべきではありますが、あいにく休日には公私の雑事に追われ、かえって平日よりも多忙であり、友誼（友情）を欠き、自身を責めております。どうぞ悪くお思いにならず御憐察の程ひたすらお願い申し上げます。中学校の会議では学校を一つさらに取り纏めたいこと（これは場所がなく難しいとは思います）三十円の先生雇い入れ等のことでございます。この先生雇い入れの件につきあなたのお考えを伺いたいと思い郡庁からあなたを呼び出した次第でございます。私はとにかくこの件が実現できなかったならば、到底学校が発展すべき見込みがないので、万一承諾されなかった場合は、ここを辞去する決意でございます。多分あなたも賛成の事と思います。（会に集まった人たちは賛成です）昨日、山本義平氏が訪ねてきました。あなたへよろしくと頼まれました。

いずれにしても次の休日には極楽寺本堂に上る見込みでございます。皆様へよろしくお伝えください。一月二十三日学校にてこの手紙を書く

（封書裏面）

十五年一月二十三日　認め　中学校にて

一月二十四日　投函　渋江保

○昨日お使へお報せすべきでしたが、お使が御帰宅の際お立寄りになられなかったので、今日、郵便として投函しております。

中学校舎中幹事当直

③加藤幸三郎宛　渋江書簡について

この書簡については『時習館史その教育と伝統』や『三河における明治前期の郡立中学校　愛知県宝飯中学校について』の中で近藤恒次が取り上げている。両書共同様

の内容で書簡原文と書簡の内容の要約が掲載されているが現代語訳は付記されていない。近藤恒次も指摘しているように、加藤幸三郎が病気療養中であったので、会議の内容を報告した手紙と思われる。この手紙では、極楽寺本堂と国府小学校の二ヶ所で行われていた授業を一ヶ所にまとめるために新校舎の建設を検討したいことと、月給三十円で教師を雇い入れたい旨が書かれている。前者については宝飯郡長宛に一八八二年（明治十五年）八月一日に「宝飯中学校々舎新築之伺」[2]が出されることになり、一八八三年（明治十六年）四月十五日、新校舎落成式が挙行された。

小論では書簡二通を紹介したが、残る三通についても本誌上にて取り上げたい。

参考文献

（一）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）
（二）山田東作・武田三夫『三河最初の中学』（ちぎり文庫　一九八一年十一月三日）
（三）愛知県立時習館高等学校創立八十周年記念事業実行委員会『時習館史その教育と伝統』（一九七九年十二月十五日）
（四）近藤恒次『三河における明治前期の郡立中学校愛知県宝飯中学校について』（愛知大学綜合郷土研究所紀要第二十一輯　一九七六年三月二十日）

注　記

（一）山田東作・武田三夫『三河最初の中学』（ちぎり文庫　一九八一年十一月三日）二七四・二七五頁
（二）山田東作・武田三夫『三河最初の中学』（ちぎり文庫　一九八一年十一月三日）一九八頁

二字目の男

匠　克仁

二字目の男であると、ぼくは自分に仇名をつけた。この二字目の男とは何かというと、ぼくは文章を書くときに二字目に異常に執着するのである。文章を書いて最初に二字目が気になった理由は、行頭は字下げで、必然的に二字目になるからである。もし、字下げがないとしたら二字目でなく一字目が気になったと思う。正確には隣の二字目が気になるので、行頭は全く気にならない。隣の二字目は行頭の文字の隣である。つまり、横方向に見て二字目も同じ文字というのを気にした。無意識に書いて二字目が漢字でもひらがなでも同じ文字になっていると二字目が違う字になるように、わざわざ修正した。今は二字目が同じ字になるようこだわるようになった。この二字目だけで一字目や三字目でなく異常に執着するのは二字目病という病気に違いない思った。しかし、これは二字目病でなく、別の病気が原因だと分かった。ぼくが二字目にこだわるのは強迫神経症ではなかった。ぼくは二〇一七年にアスペルガー症候群と診断された。これは二文字でASと略する。ASは空気が読めない。これも二文字でKYと略する。AD／HDとも診断されていて二つとも発達障害である。上の二文字は注意欠如で下の二文字は多動性である。ぼくの場合は多動性はないので二文字でADだけにしてほしいのであるが、ADとHD二つは切り離されて診断されない。KYに次いでASの二つ目の特徴は極端なこだわりである。ぼくは文の行の二字目が気になるというこだわりがある。同一の行動を二度三度と繰り返す常同行動も特徴である。同じ失敗も二度三度と繰り返すので、日常生活で問題になる。この二回以上の失敗することや他人と同じ失敗をすることを二の舞を演じるとことわざでいう。二の舞を踏む、とは二の足を踏むからの誤用が一般化したものである。こ

の二の足を踏む、決断力が弱いもASの特徴である。この二の足とは二の腕と違い、足の部分でも左右でもなくて二歩目である。一歩踏み出したが、続かない。ちなみに二の腕とは肩と肘の間である。筋肉は上腕三頭筋と上腕二頭筋から成り立っている。『発達障害』文春新書一一二三に以下のような帯がある。（一）空気が読めない（二）同じ失敗を繰り返す（三）極端なこだわり…定価八二〇円＋税で発売、著者は医学博士の岩波明、初版一万二千部、一〇万部を超えたベストセラーである。さらに二冊目『空気が読めない』という病』を紹介する。この二冊目の題が発達障害を説明している。著者は、障害の二文字が誤解を招くと指摘している。著者星野仁彦は第二の名前『発達アンバランス症候群』を提唱する。障害二字は英語でdisorderの訳語であるが、障害の意味より二字の他の日本語だと、不調という語感に近い。それに二字で訳さなければ、並んでいないという意味で、善悪二元論の悪というほどの意味は無い。それと発達障害は二者間のコミュニケーションが苦手なのである。会話が二方通行でなく、一方通行の話し方になる。話も下手で二の句が継げないのである。嘘がつけず、本音と建前の二枚舌が使えないのである。突飛な発想をする等の他に二六時中なにか別の考えごとをしている。いま一日中を二六時中と書いたが、四六時中の間違いではない。一日二十四時間（4×6）になったのは現在で、昔は一日十二刻だったので、正しくは二六時中である。昼と夜とで二つ六刻ずつなので2×6になるのである。発達障害は二つ以上のことを同時にできない。大道芸人の皿回しが二枚どころか三枚以上もするのを見て、とても自分には二枚もできないと思う。あいまいな表現が理解できず『二、三人』という表現が全く理解不能である。会話で「二、三人を呼んで」と言われると悩んでしまう。実際に二人だけ呼べばいいのか、三人を呼ぶべきなのだろうか二・五人なんて人はいないし…、といって、人間を真っ二つに割って半身を持っていけばいいのか。かといって二人か三人かはっきりしろと言えない。そう言われると二時間くらい悩む。悩みから別の障害が発生するという二次障害が多いのもASの特徴である。特別に多いのは二極性である双極性躁鬱病と鬱病である。躁鬱病の内で二型（躁が軽い）が一型（躁が重い）よりも多い。この二つ以外にもパニック障害が多い。それに視覚と聴覚の二つにおいて知覚過敏がある。まぶしがるのは、ASの二つの目でなく脳が問題である。ぼくは夜の信号の光が二倍に見える。目だけでなくて、耳も過敏である。自動二輪車の爆音や救急車・消防車・パトカーのサイレンは二つとも耳を防がないと耐えられない。視覚及び聴覚の二つの知覚以外でも障害がある。三大栄養素ではなくて二大栄養素というほど炭水化物が体質に合わない。一日二食は低炭水化物食をしている。味覚障害で五味の内

の二味が異常だ。甘味が苦手で苦味が苦手でない。甘味を二倍以上に人より感じるが苦味に鈍感なのだろう。この二大栄養素に除かれた炭水化物のラーメン・パンという二つの主食もスパゲティ・ピザも嫌いで、極端な偏食と二言目には言われる。炭水化物が苦手な理由は味覚より二型糖尿病に発病しやすいからかもしれない。ちなみに二型というのは遺伝性の一型でない糖尿病である。他に二重人格者と間違えられやすい。コミュニケーションが二方向でなく、性格を正確に伝えられない性格だからで二重人格者が直接にASの症状ではない。ASの中には二次元コンプレックス（アニメオタク）がいる。これは二次元という現実でない世界に逃避するのである。実は二次元という現実でない世界に逃避するのである。ある本は二本人…いや日本人にASは思ったより多い。ある本に二%ほどいるのでないかと書いていた。クラスに一人か二人は少し変わった生徒がいたはずである。ぼくはその二%なのである。ところでASにはマイナスとプラスの二つの面がある。ASの定義として第一に発達障害で第二に知能障害が無いことである。ASの人にはIQが一二〇くらい人がざらにいる。ASに違いないというのが二つの相対性理論のアインシュタインである。E＝MC二乗という発想はASの賜物である。ぼく自身は中学で二番目以下のテストの成績になったことがない。東大に二回落ちたが、早稲田大学を卒業して、慶應義塾大学と二つの大学で法学部と経済学部と文学部で勉強した位で二番目の知能障害は無いと思う。以上が一つ目の特徴で二つ目が、数学の能力が高いことである。東大の数学は二問も解けた。文系数学は四問で合格者の平均正答数は二問や一問でなく0である。合格法で最初に白紙にする二問を選び、残り部分点を狙うとあった。だから数学で二問解けた人はほとんど東大に合格している。もし高校二年生までにASと診断されていたら、理系に変更して二回も受験すれば合格できたと思う。生物学なら、理科二類を受験しただろう。得意科目の生物が、入試全体の二%しかない。東京大学は共通一次試験が二〇%であり二次試験が八〇%である。共通一次一〇〇〇点の内理科二〇〇点で生物はその半分の一〇〇点なので、たったの二%である。いかーん。後悔するASの癖が出た。三十二年以上も前のことを愚痴ってしまった。ASの中には二枚目・美人が多い。ASの名前由来のアスペルガーが二枚目というか、端正な顔つきと表現している。ぼくが二枚目でないのは、例外なのだろうか。残念だ。ASが二枚目でないのは、例外なのだろうか。残念だ。ASが二人いると、似た顔をしているのがわかる。AS特有の二つの左右対称の表情筋をしている。それとASの人は二つの瞳の虹彩が大きい人が多い。もっともぼく自身は二つの黒目は大きくない、黒目が大きいからといっても二枚目かどうかは他人の判断であるが、童顔というのは二言はないだろうと思う。たいていのASは実年齢より二割引きしても、通用しそうな風貌である。ぼくは五

十二才であるが、四十以上にみられることはない。ぼくは二人兄弟の長男であり一年一ヶ月違いの弟がいる。小学二年生頃から、兄弟でいるとぼくは弟に見られる。兄弟二人が並んでいると、弟の方が背が高くて、ぼくの方が二男に見られていた。この年で、女性マネージャーから二人称で「ボク」と呼ばれるくらいである。うぶすぎて二股をかけるなど浮気ができない。人付き合いが苦手で二人の女性を同時に愛するとかできるはずない。基本は二つの行為を同時進行できないのである。人間関係では二人で一対一の話をするのは極端に苦手である。反対に二百人以上の大人数の前で話すのは平気である。知ってこの句が継げない人も多いかもしれない。ちなみにこの二の句が継げないの意味は（一）後の言葉が続かない（二）驚いて空いた口がふさがらない、がある。今は、（二）の方の意味で使った。難しい漢字を覚えられ、漢検二級の鬱という字を小学生で書けた。ところで、ぼくは二〇一八年八月十四日にご の原稿を書いているが、五十二才になった。健康診断の結果は、良好である。身長は一メートルである。四捨五入したら。正確には一五九・二センチメートルである。ピークだった一五九・九から二年前の健康診断で一年で一ミリ縮んだ。昨年は一年で二ミリ縮んだ。そして、今年は四ミリ縮んで、一五九・二センチである。ぼくはこの法則性に気がついた。二の二乗ミリ縮んでいる。この法則性に従うと十年間で一〇二四ミリも縮むに違いない。ネットで検索をしていたら二〇一八年の平均身長を見つけた。このページを見ると二十歳の女性が一五九・五センチである。なお男性は十二歳で一五〇・八センチが十三歳で一六〇・三センチ。十二歳の小学生が一年でぼくを身長で追い越す。身長順で二番目になったことがない。小学生の時に男子と女子を二つに分けるのはよくない、一緒にするとなり、ぼくは二番目になると期待したが一番前になった。男子先頭は二つとなく、他のクラスは女子先頭である。前に倣えで二本の腕を前へ真っすぐ伸ばすことが普通だが、ぼくは二つの拳を腰にあてるのである。同じホームページ上に二〇一八年の平均体重もあった。先ほどサイトの例では二十歳の女性が五三・五キロである。十二歳の男性が四二・一キロで十三歳の男性は四八・九キロである。五十二歳のぼくは四捨五入すると、ゼロキロになる。四九・二キロだから嘘ではない。最近、少し痩せてきた。この二日前は〇・一トンであった。これも嘘でなく、五〇・二キロだったのである。体重コントロールしているので二十九年間という長期間ほぼ同じである。就職した平成二年以降は、失業など特別なことが無い限りは、ほぼ五二キロを維持していた。ところが、半年前に突然クビで二キロ痩せて、五〇キロの大台を割ってしまった、五十二歳と五〇過ぎて五〇割る人も珍しい。体脂肪率は九・二%であるからメタボに一生ならないだろう。おかげ

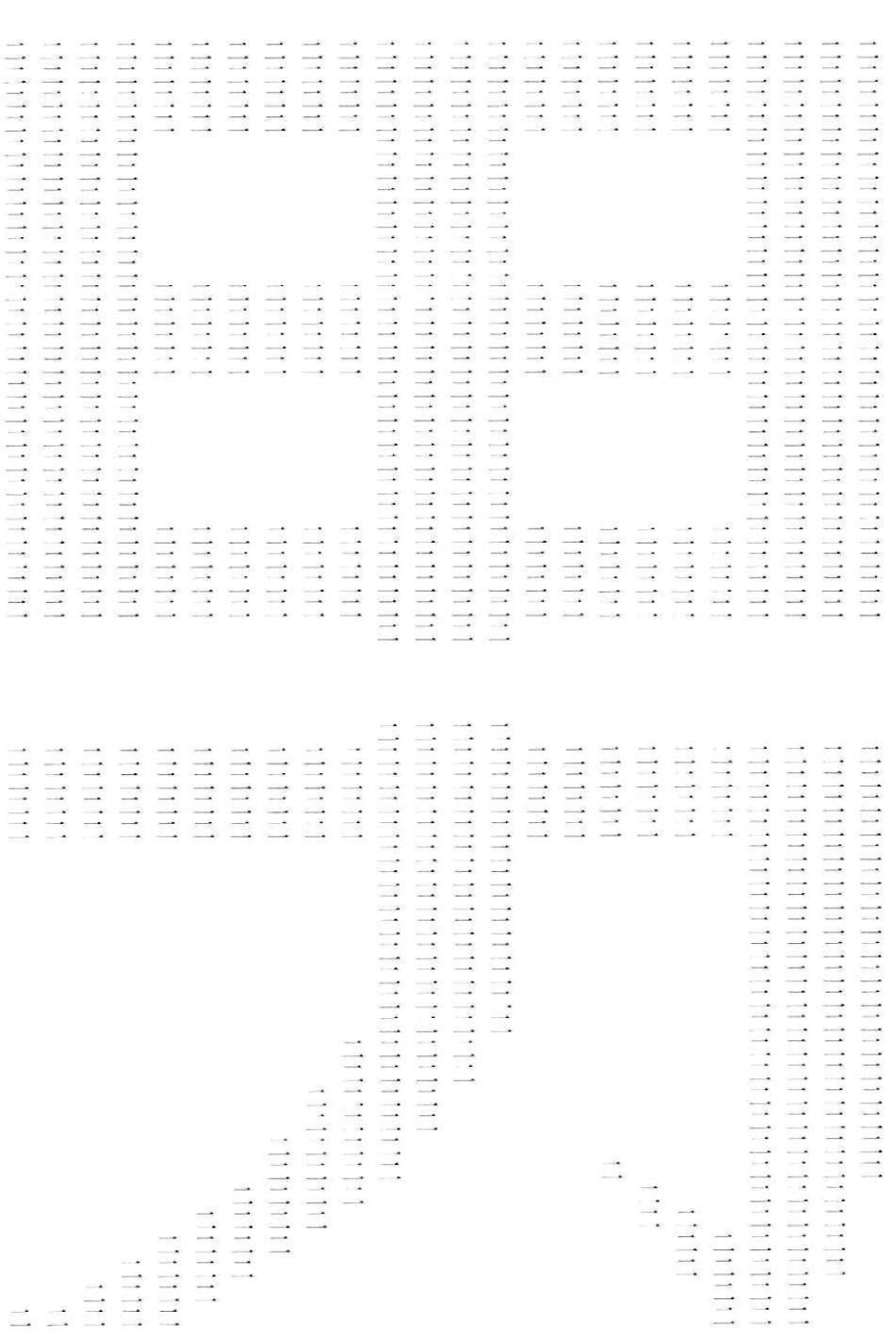
で二段腹になることも絶対にないと思う。ぼくの顔つきも二重顎にはなっていない。参考までにウエストは六九・二センチである。五九センチから増えたが、腹筋の上に二本の太い静脈が浮いているくらいで脂肪は無い。他に二の腕の静脈も浮いていて採血でほめられる。刺すのも二番目から十番目の太さにしてくれる。痩せているから二の腕にも血管が浮いているというわけでない。ぼくは二の腕が相対的に太い方である。力こぶといわれる上腕二頭筋が発達している。浪人して大学に入学するまでの二十歳近くまで運動経験が全く無かった。高三と浪人の二年間は運動0で、大学のレスリング部に入った。五十二キロ級が多かったが、四十八キロ級も出場した。この二階級は、日本人選手がソウルオリンピックで金メダル二個を獲得している。ぼくの先輩も九十キロに出場して二つ目の銀メダルを獲得している。その先輩からぼくは二つの銀メダルを首にかけたりさせてもらった。練習で二の腕が太くなった。腕立て伏せを毎日しており、三十二年間一度も休んだことが無い。学生時代は一日に最高二千回したこともある。続けて一度にできないが百回を二十セット繰り返したのである。選手の時は少なくても二百回はしていたが、卒業してから徐々に減っていって二十回しかしないときもある。それでも、卒業してから二十八年たっても学生時代の体型を維持している。上腕二頭筋よりも上腕三頭筋と大胸筋を鍛える。胸囲は九十二センチで、過去ピークの一メートルより減ったものの二十八年という月日を考えると衰えはない。健康診断で二つの目が悪くなっていた。老眼と無縁で、裸眼で一・二の視力だったのが両方とも〇・五になった。耳の方は二つとも正常値である。残念なことに、今年も便潜血が二年連続で引っかかった。その他は正常値で、肝機能は二〇〇を超えたこともあった昔と比べると随分と減って二九である。（正常値は八七以下）話はかわるが、今年二〇一八年は良くない幕開けであった。実は、昨年の十二月末日付けで正社員から非正規雇用になった。給料が二分の一である。一月の給料は0円であった。昨年の十二月分の給料は正社員なので十二月に受け取っているが二〇一八年一月に働いた給料は、パートになると減ったものの二月に受け取るということになる。ということは昨年十二月の給料は既に受け取り済であるが、社会保険料の十二月分が一月に控除できないのである。ぼくは次の月に二ヶ月分を控除してもらうことにした。そうしてやっと二月に今年初めて給料をもらったが、給料計算が間違え二ヶ月分の社会保険料が引かれていなかった。気づかず二ケ月分引いたと思っても少なくて落ち込んだが、後で二重にショックを受けた。それでも何とか働いているが二分の一が今年も終わって、手取りは去年と比較すると二分の一以下になってしまったのである。それどころか二年前の入社から比べるともっと下がっている。ぼく

は二字目の男でみじめの男である。先ほどアスペルガーは二枚目や美人が多く端正な顔つきであると書いた。この二枚目というのは歌舞伎の用語である。歌舞伎の看板で二枚目に美男を描いた。ちなみに一枚目が主役であるが二枚目の次の三枚目が道化役である。主役が二人いると二枚看板という。歌舞伎は看板が八枚である。この様に二枚目の男がいて、二字目の男がいるのであれば、間に二行目の男がいてもよい、というか作りたくなる。この二行目の男を「にぎょうめ」と読むと意味ないが、この二行を「にこう」と読ませると、こじつけをしてしまい二行目の男ができる。ぼくは銀行に入行したが一年後に二行が合併したのである。後輩にとってみれは、ぼくは二行目の男となる。もっとも、ぼくが在職している間に二回合併したので、三行目の男となった。本稿の最後に二の文字で作った三の字を次に示す。パッと見て、三か二かどちらかを答えさせる。これをＮＡＶＯＮテスト（二で作ったのはぼくのオリジナル）という。これを見て二とＡＳは答え、三と一般人は答えるのが多い。ＡＳが二と見るのは全体でなく部分を見て一般人は全体を見て二の次に部分を見るのである。ぼくの場合はどうしても二と三が同じほど見えてしまう。だから、文字を使って二つ目の大きい文字を創ろうという発想をする。今回は二の字を使った。人文字でなく文字文字である。二

という文字文字

を『夢夢夢』や

という文字文字を『上上上』で書いた。
今回も文字文字で終わろう。



編集後記

ここにまんじ一五〇号記念号の発行を、同人皆様と共に心からお慶び申し上げます。

同人新井宏氏がお作りくださった私設の「まんじ」ホームページを開くと、まんじ目次、一覧表があり、それをクリックすると一号から一四九号までのタイトル・著者名・掲載頁数・原稿所要頁数が号別に記載されています。

これは「まんじ」の歴史そのものであり、見てゆくと存じ上げているお名前は大変懐かしく思い出します。なんと第一号から執筆されているのは三戸岡道夫氏お一人です。その他現在ご活躍中の方々で新井宏・鯨游海・瀧澤中各氏が古いころからの歴史を担っておられ、小生は三戸岡道夫氏のお誘いを受けて七十七号からの参加ですので、ようやく歴史の半分に近づきつつあるところです。

このホームページをご覧になっておられない方は、まんじ・五〇号の歴史を是非ご覧になってください。「同人誌まんじ」で検索すれば出てきます。

一五〇号の合評会は十一月二十四日（土）正午から学士会館で行い、終了後部屋を別にして午後四時半から一五〇号出版記念パーティを行います。同人の皆様、維持会員の皆様、どうぞご参加賜りますようお願い申し上げます。

この一五〇号の執筆者は二十四名に上り、過去最高と思います。これから益々の増加を期待しています。同人の訃報ですが、同人稲垣克己氏が病気療養中のところ九月下旬にお亡くなりになられました。謹んでお悔やみ申し上げます。

もうすぐ年末です。同人皆様にはくれぐれもご自愛の上素晴らしい新年を迎えられ、益々ご健筆を揮われますよう心から祈念申し上げます。

（鍋）

まんじ第150号

平成30年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045(544)5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町7-1

表紙の絵について
「希望への誘い」
田寺怜葦画

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ